

IS<インフィニット・ストラトス>—Deus Ex Machina

ネコツテ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「あらすじ」私立武装組織〈デウス・エクス・マキナ〉に所属する〈アリス・リデル〉へある命令が下る。それはIS学園に編入することだった。そこで出会った一人の少年「織斑一夏」と共に、「女尊男卑」うずまく世界に立ち向かっていくSFボーイ・ミーツ・ガール。

【内容】

■ 本作は女オリ主ものです。原作主人公と協力して騒動や陰謀に立ち向かっていくお話です。

■ 原作を補てんする意味で、独自の設定と解釈、オリキャラが登場します。

■ シナリオの都合上により一部原作キャラの設定が変更されています。(一夏の誕生日が9月27日↓10月27日など)

目次

〈プロローグ〉

第0話 機械仕掛けの神 | 1

〈英雄譚のはじまり〉

第1話 アリス in ハイスクール | 24

第2話 ひとりぼっちの英雄 | 31

第3話 英雄と騎士 | 43

第4話 英雄の武器 | 59

第5話 第一の矢《ファーストアロー》 | 74

第6話 第二の矢《セカンドアロー》 | 89

第7話 第三の矢《サードアロー》 | 103

第8話 英雄と女王さま | 120

〈咆えよ、ドラゴン〉

第9話 襲来のドラゴン | 135

第10話 進撃のドラゴン | 149

第11話 逆襲のドラゴン | 161

第12話 慟哭のドラゴン | 175

第13話 ドラゴンスレイヤー | 190

第14話 ドラゴンヒーローズ | 205

第15話 Counter Attack | 219

第16話 次のステージへ | 234

〈黒うさぎエンゲージ〉

第17話 新たな任務 | 250

第18話 太陽と月 | 264

第19話 実習I | 279

第20話 実習Ⅱ | 294

第21話 Let's ランチタイム! | 308

第22話 本日は突風 時々雨なり | 321

第23話 チェシヤ猫が笑う | 336

第24話 シヤルル・デュノアのコンプレックス | 353

第25話 ラウラ・ボーデヴィツヒのレゾンデートル | 372

第26話 代表候補生VS代表候補生 | 386

第27話 ラウラ・ボーデヴィツヒは友達が少ない | 401

第28話 BlueTears | 418

第29話 集いし者と潜む闇 | 432

第30話 開始、学年別ペアトーナメント! | 450

第31話 黒い雨がふる | 472

第32話 本日ハ晴天ナリ | 491

第33話 少女が生まれた日 | 512

第34話 告白 | 531

〈星に願いを／月に祈りを〉

第35話 夏が始まる | 546

第36話 彼女たちの問題 | 564

第37話 サマーショッピング① | 578

第38話 サマーショッピング② | 594

第39話 お茶会とウサギ | 611

第40話 ビーチガールズ | 625

第41話 臨海学校、その夜—その1 | 645

第42話 臨海学校、その夜—その2 | 661

第43話 紅椿 | 677

第44話 ブリーフィング | 693

第45話 天使はラブソングを歌わない | 707

第46話 その手に勇気を | 725

第47話 赤と紅の共演 | 740

第48話 結集、結束、そして結末の果てに | 759

第49話 篠ノ之束博士の異常な愛情 | 780

第50話 受け継がれる意思 | 801

〈スタート・サマーバケーション〉

第51話 8月7日 | 816

第52話 8月8日 | 832

―メイドでアルバイト編

第53話 8月9日 午前 | 847

第54話 8月9日 午後 | 864

―ウオーターワールド編

第55話 8月11日① | 881

第56話 8月11日② | 896

―ミツシヨン編

第57話 8月13日／8月14日 | 912

第58話 財界パーティー | 924

第59話 斯あるふたりの理由 | 937

第60話 ミッドナイトラン | 953

第61話 冥府の魔女 | 962

第62話 月の落とし子 | 979

第63話 夏の最後の思い出 | 993

〈サイドオプス〉

第85話 悪意の胎動

第86話 運命の行方

第87話 Zips

第88話 16歳の君へ

〈Dシスターズ〉

第89話 完成 打鉄二式

第90話 妖精の女王 VS 精霊の姫君

第91話 すれ違わないために

第92話 会談

第93話 姉としての覚悟

第94話 バスルームパニック

第95話 開幕のタッグトーナメント

第96話 凍てつかない想い

第97話 〈ミストルテイン〉の槍

第98話 再戦

第99話 終結

第100話 楯無、代表やめるってよ

〈プリンセス・オーダー〉

第101話 師走も早くに訪れて(クリスマス・カミングストーン)

1508

第102話 賽は投げられた

第103話 オペレーション・ソードブレイカー

第104話 〈プレジデント・オーダー〉

第105話 〈プリンセス・オーダー〉

第106話 彼女の料理がまずい理由

15681558154615361524

149514781463145214351418140713921378136613491335 1319130612891277

第107話	作戦スタート	1636
第108話	陸の王者 対 海の覇者	1623
第109話	星を巡る妖精たち	1608
第110話	叛逆の剣くあなたの歌を聞かせて	1596
第111話	聖夜に悪魔が踊りて	1623
第112話	未来の舵は誰の手に	1636
へマザーズ・デイストピア		
第113話	ヘインターシップ	1647
第114話	星を導く子どもたち	1666
第115話	裏切り	1683
第116話	異種格闘戦Ⅱ	1695
第117話	彼を追う者たち	1706
第118話	希望になれなかった希望の跡	1716
第119話	接触	1728
第120話	アリス・リターン	1739
ルクーゼンブルク編		
第121話	王女来訪	1748
第122話	潜入 ルクーゼンブルク公国	1759
第123話	風雲急を告げる猫	1770
第124話	静謐の月	1784
第125話	動乱の太陽	1795
第126話	王女が望んでいたもの	1809

へプロローグ

第0話 機械仕掛けの神

愛しき子どもたちが生きていくこの世界を守らねば。

高度3万フィートの成層圏は静謐に満ちていた。だが、へバイオシヨックの影響で米軍から払い下げられた輸送機の貨物室は、お世辞でも快適とは言い難い。激しい揺れと騒音で、私——アリス・リデルの不快指数はべき乗で増していくばかりだ。

とはいえ、乗り心地を除けば、この輸送機は高等作戦機として十分な性能を有している。

バイオ燃料が普及した近年で、時代遅れな化石燃料こそ使っているが、ステルス性能は非常に優秀だ。それは肉眼ですら捉えられない。私たちはその技術をEOCsと呼んでいる。

Electromagnetic Optics Camouflage system。このEOCはレーダー波や電磁波、可視光を吸収することで完全なステルスを実現する。そのおかげで、私たちはこうやって悠々と領空侵犯を起こし、機密の作戦を実行できるわけだ。

そう、私たちは平和を脅かす「ならず者」をこらしめるべく、イラ

ンの国境を越えていた。

「まもなく作戦空域に入る。全員装備をチェックせよ」

この輸送機の機上輸送管理官ロードマスタがそう言ったので、私は赤い髪を後頭部で結び上げた。そして、いそいそと空挺装備をチェックする作戦要員の隣を抜け、ペイスペースの前部に移動する。そこに私専用の装備——ISがある。

IS。正式名称インフィニット・ストラトス。

21世紀初頭に登場した飛行パワードスーツの総称だ。私の前に鎮座するISは<赤騎士>という。赫々と燃えるような装甲と、左右の武装保持架ハードポイントにマウントしてある巨大な剣が特徴だ。腰部にはサイドアームズとして短剣を模した特殊兵装が装備されている。

私は<赤騎士>に身を預け、搭載されている人工知能A Iに命令を下した。

「ヘレッドクイーン、システムチェック」

《Yes my honey——システムチェック開始》

私の命令に従ってシステムチェックを始めると、投影型モニターA Rに無数のデータが流れ始めた。

動力システム、各駆動部、推進装置、センサー類、装備、武器。そしてISの最大の特徴ともいえるべき特殊シールド発生装置。それら全てにAIが目を通していく。

《チェック終了。全システムオールグリーン。データリンク問題なし》

「了解。起動フェイズ2。ジェネレーター点火。GPLをアイドルに設定。スタンダップ」

《Yes My honey——補助パワーユニット作動。ジェネレーター点火。パワーレベルを待機モードに設定。出力上昇中……完了。パワーアシスト電力供給開始。スタンダップレディ》

AIの復唱に合わせ、私は四肢に力を込めた。

ISには人工筋肉——高分子繊維で構成された電磁筋肉——によるパワーアシストがある。それを使い、私は機体の自重を感じることなく機械の鎧を起立させた。

「機内減圧開始」

ISの起動を終えたところで、物が外に放り出されないよう機内の気圧調整が始まった。それに合わせて機内の隊員たちも酸素ホースを機体のコネクタに接続する。しばらくして、機内の減圧完了を示すランプが点灯した。

「減圧完了。後部ハッチ解放せよ」

ロードマスターがハンドサインを出し、後部の隊員が安全を確認してレバーを上げる。

四角いハッチが開き、その隙間から冷たい風と月光りが漏れた。そう、今は夜なのだ。

「アリス・リデル、降下準備」

ロードマスターの誘導に従い、吹き込んでくる夜風に逆らいながら後部ハッチへ向かう。

ハッチの淵から先は常世の闇だった。まるで地獄の釜が開いたような、暗黒が覗いている。

「降下5秒前——5、4、3、2、1」

ゼロ。そう宣言された瞬間、私は両手を広げ、夜空へと身を投げた。



——作戦開始より数時間前。

招集を受けて私は仮設の会議室にやってきていた。今から、ここで作戦のブリーフィングが行われる。

「失礼します」

ノックして入ると、二人の人物が私を出迎えた。

一人は180cmを越える男性だ。ブロンドを後頭部に回し、精悍な面持ちで顎下に髭を蓄えている。歳は40代後半と言った具合で、軍事スリラーの俳優に抜擢されそうな偉丈夫だ。

もう一人は腰まで届くプラチナブロンドが優雅な女性だ。落ち着きと気品にあふれ、胸も大きい。歳は二四歳と若く、フェアリーテイ

ルに出てくる王女様のような美貌をしている。クラシカルな、現代には珍しいタイプの美女だ。

男性はエドガーといい、女性はロリーナといった。両名は私が所属する組織の部長たちだ。

他には作戦に参加する陸戦ユニットの隊員が十数人いる。

「かけたまえ」

作戦部長の言葉に従って、私は技術部長の隣に腰かけた。

「では、作戦会議を始める。これよりわれわれ作戦部は6時間後、イラン国内に潜入し、テヘラン南方30キロに存在する秘密研究所を襲撃する。目的はある科学者の捕獲だ」

唐突に明かされた作戦内容に耳を傾けながら、配られた資料を受け取る。

「その科学者とは篠ノ之束ですか？」

と、陸戦ユニットの隊員のひとりが訊いた。

篠ノ之束とは、ISを開発した科学者だ。その類まれなる頭脳が災いし、現在は各国に追われる身だった。そんな彼女の潜伏先が見つかったのだろうか。

「いいえ、違うわ。今回、私たちが確保するのはロマノフ博士」

「ロマノフ博士？」

知らない名だ、と思いつながら、再び資料に目を落す。

資料には60代になろうとする、初老の写真が貼ってあった。

「彼は？」

「元ソ連の兵器科学者、とりわけ核関連技術に実績があった男性よ。その人物がイランの核開発に関わっているの。他にも、パキスタン、リビア、北朝鮮の核開発にも関与していると見做されているわ。彼は自身の技術を買ってくれる国家や組織を渡り歩いているの」

説明を終えたあと、彼女の綺麗な顔が悲痛な面持ちに歪んだ。

そういえば、ロリーナは核兵器廃絶を訴えるロビー活動に参加していましたっけ。

「へ白騎士事件以降、核兵器は特別な兵器ではなくなったわ。だから、この事態は早急に対処されないといけないの」

〈白騎士事件〉。21世紀初頭に起こった歴史的事件のことだ。

2001年。一丸となって平和的な新世紀を迎えようとする世界を嘲笑うように、未曾有の危機が世界を襲った。各国の戦略兵器を司る軍事コンピュータが何者かにハッキングされ、2341基のミサイル群が日本へ発射されたのだ。

この窮地を救ったのが、稀代の天才『篠ノ之束』が予てより公表していたISだった。

これの活躍によりミサイルは全て撃墜されたのだが、〈白騎士事件〉以降、こういった大量破壊兵器に関する倫理ハードルは下がる一方だった。いまや、核兵器は終末の象徴ではない。使える兵器なのだ。「で、アメリカは？」

中東諸国の核武装化はアメリカ、如いてイスラエルなどに大きな影響を及ぼす。

危機意識が強い（ある意味過剰ともいえる）アメリカがこの人物を放っておくとは思えない。

「CIAはこの人物をマークしている。だが、複雑化された国際情勢下では、アメリカといった大国の軍事介入は政治的に難しい。安保理でも制裁決議が行われているが、国家の思惑が複雑に絡み合って、紛糾している」

「〈白騎士事件〉以降、国際情勢が国際情勢だからね」

前世紀より〈白騎士事件〉のような大量破壊兵器の使用は戦争の引き金だった。けれど、〈白騎士事件〉で2000基以上の大量破壊兵器が使われたにも関わらず、アメリカは世界に対し報復を行わなかった。

報復の連鎖による文明の消失。アインシュタインが警告した棍棒時代の到来を恐れたゆえに。

つまり、我々人類は争いをやめられない愚か者だけど、滅ばない程度には賢かったわけだ。

灼熱の戦争は回避された。

しかし、〈白騎士事件〉が生んだ国家間の軋轢は、新たな冷たい戦争の呼び水となった。

第二次冷戦の勃発。そのため、常任理事国に名を連ねる、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国の結束状態は過去最悪で、ほとんど安保理は機能不全に陥っている。

「そこで我々の登場ですか」

「そういうことだ」「そういうことね」

二人の部長が声を揃えた。

私たちの組織〈デウス・エクス・マキナ〉は、こういった事態に備えて創立された組織だ。

どこの国家にも帰属せず、世界保全のために戦う。それが私たち。

「話を戻す。仮にイランが核武装を為した場合、中東情勢は一気に緊迫するだろう。さらにこの核爆弾が長距離弾道ミサイルに装備されれば、ヨーロッパにとつても脅威となる」

「イランの長距離弾道ミサイルShahab-6は、既にヨーロッパ全域、最大はアメリカの東海岸まで射程に収めているという話よ」

アメリカの仮想敵であるロシア、その同盟国であるイランが、アメリカ東海岸——つまりはワシントン——を攻撃できる核兵器を装備する。両国間の関係は一気に緊迫するだろう。第二のキューバ危機だ。

「では、具体的な作戦内容の説明に移ろう。今回の作戦ではISを使う」

「科学者一人にISを？」

ISは一個大隊とも戦える力を有する。科学者一人誘拐するには過剰な戦力だ。

むしろ、誘拐・拉致というデリケートな作戦は、諜報を得意とする情報部の仕事だろう。

「理由はある」

ボスの目配せに、ロリーナが投影型のキーボードを叩いて一枚の衛星写真を投影した。

山岳地帯を切り崩したような場所の一角に、研究所らしき施設が映る。

これが今回の制圧目標。博士の隠れ家か。

「これは偵察衛星へハンブプティー・ダンブプティー」で撮影した写真よ」
ロリーナがさらに衛星写真を拡大する。映像が拡大されるにつれ、ISの導入に踏み切った理由が明らかになっていった。最大望遠の映像に映っていたのは、戦車に足が生えたような奇妙な機動兵器だ。

「IRVINGですか」

IRVING。月光という愛称で知られる、21世紀、爆発的に普及した無人兵器の一種だ。人は搭乗しておらず、搭載させたAIが判断し、自立行動する。歩兵と戦車を繋ぐ陸戦兵器というコンセプトで開発され、とりわけ立体地域——市街地や山岳地帯でその猛威を振るっている。それが見える限りで4機。

「でも、なぜこんなものがイランに？」

これを開発したのは、アメリカの軍事企業だ。

反米化するイランにアメリカが無人兵器を売ったとは思えないが。

「彼の私物よ。無人偵察機^{UAV}といった無人機を制限する国際法はまだないの。だから、各企業で開発や輸出が盛んに行われているわ。その実動台数の多さから、鹵獲され無人機が闇市場に流失していたりするの」

「それを買ったと」

「さらに情報部の偵察だと、彼は傭兵を雇い、私兵部隊を抱えている。その人数はざつと30人あまりだ。警備も嚴重と見える。隠密作戦による確保は難しいという判断から、われわれが請け負う事になった」

「つまり、こそこそと連れ出さず、力尽くでしよつ引こうというのですね」

と、陸戦ユニットの隊員が笑いながら言った。部長は頷く。

「そういうことだ。だが、月光は脅威だ。わらわれとはいえども無傷とはいかない。さらに、この月光には対空ミサイルが装備されている。通常の航空戦力では撃墜されかねん」

「そこで被害を最小限に抑えるべく、ISを使用することにしたわ。ISなら月光が相手でも脅威にならない。そこでアリス、貴女はく赤騎士>で施設を強襲して、無人兵器および防空システムを破壊して

ちようだい」

「その後、陸戦ユニットが降下し、ターゲットを確保する」

つまり作戦成功の要は私ということか。

「了解しました」

私は強く頷く。その後、陸戦ユニットの突入について説明が行われた。

♡

♣

♠

自由落下による落下速度は時速12003000マイルマイルに到達していた。

肌を打ちつける風はすこぶる冷たいが、スキンバリア皮膜装甲のおかげで、身体が凍える事はなかった。

《ハニー、地表まであと200メートル》

そうこうしていると、地表までの距離がなくなってきた。本来ならパラシュートを開くにしても手遅れな高度だが、ISには慣性制御システムがある。それを駆使すれば地表との距離に関係なく急停止や急制動が可能だ。

「レッドクイーン、PIC起動」

《Yes my honey—Passive Inertial
Canceller—ON》

見えないパラシュートの準備を終えたところで、高度計の数値が100メートルを切る。

この距離なら敵もこちらを捕捉できるが、このく赤騎士くにもEOCが装備されている。

逆に私は敵の無人兵器を既に捕捉していた。拡張式暗視装置Eを用いた光学モニターには、哨戒中の月光と傭兵がくつきり映し出されている。彼らとの接触は数瞬後だ。

《高度ゼロ、イナーシャルゼロ、急制動》

機体が地表に着地し、制御システムがその衝撃を吸収する。

ほとんど無衝撃に近い着地。それでも周囲に影響を齎したようで、

私を中心に衝撃の輪が広がった。

「な、なんだ……」

異変に気づいた傭兵が、私の許へ恐る恐る近づいてくる。——
さあ、戦闘開始だ。

「ヘレッドクイーン、戦闘準備！」

《Yes My honey!——EOCオフ、GPLミリタリー、コンバットオープン!》

電磁光学迷彩を解除、ヘレッドクイーンが<赤騎士>の各部出力を戦闘用に切り替える。

フルドライブした動力炉から膨大なエネルギーが出力されると、全身の電磁筋肉に力が漲った。

それによって齎された怪力で、近づいてきた傭兵の一人を薙ぎ払う。

吹き飛ぶ仲間を見て、ようやく周囲の傭兵が銃を構えた。向けられたそれは、紛争地帯ではおなじみとなったAKだ。

「撃て！ 撃て！」

<赤騎士>のソフトウェアが攻撃号令を翻訳し、私に伝える。

更に拡張現実が、私にしか見えないタグを彼らに張り付けた。

およその練度、人種、携帯火器の種類、それらから導き出した脅威度。評価はどれも警戒するに値しなかった。それも当然のことで、AK程度の火力では、ISに備わった防御機構——シールドを突破できないからだ。

「歩兵は後回しにします。——ハイパーセンサー、広域索敵モード」

《Yes my honey——索敵モード。攻撃目標、月光AからDを補足。月光A、接近中、方位12時》

まずは第一制圧目標である月光を破壊すべく、私は哨戒中だった一機に標的を定めた。

跳躍。同時に私の存在を察知した月光が無いアギトを開いた。

牛の唸り声にも似た合成音声_{が腹に響く}。これは相手を怯ませるための威嚇攻撃だ。だが、私にとっては聞き飽きた声なので、特段に怯んだりしない。

《がおー》

鳴きマネで応戦するAIの傍らで、私は肩部のハードポイントから高周波ブレードを抜いた。

高周波ブレード。高周波で刃を超振動させて、切れ味を高めるISの近接格闘用ブレードだ。

《警報、月光A、12.7mm機関銃!》

月光が砲塔を旋回させて機関銃を撃ってくるが、私は構わず距離をつめる。

私の接近に対し、月光は自慢の脚部でミドルキックを放った。それを屈んで躲し、高周波ブレードでその軸足を斬りつける。

斬撃。

軸足を失った月光は、バランスを崩して転倒し、脚部断面から血液のような液体を噴出した。

なんとも痛々しい光景だが、相手は機械だ。ダメージコントロールのため疑似的な痛覚は存在するが、痛いわけじゃない。私は容赦なく高周波ブレードを頭部のAIユニットに突き立てた。

《月光A沈黙。ハニー、3時方向から月光B》

人工知能が警報を発した次の瞬間、不意に右腕部が強く引っ張られる。

そちらに視線をやれば、絡めたワイヤーロープで私を牽引しようとする月光Bが見えた。

「ほお、私と力比べをしようというのですか?」

さすが戦車並みの馬力をもつ月光だけあって、機体がぐいぐいと引き寄せられる。だが、ISのパワーアシストがもたらす臂力は、それ以上だ。私がワイヤーロープを力いっぱい手繰ってやると、月光Bは前方に勢いよくズッコけた。

「いいこけつぷりです。コメディアンに向いているかもしれません」

《警報! 照準レーダー波を検出、方位9時!》

私が冗談をこぼした矢先、後方で月光Cがミサイルの全周式ターレットを回転させていた。

月光の前方に突き出た探索レーダーがこちらを補足する。ハッチ

が開いた。撃つ気だ。

《月光C、ミサイル発射!》

PiPiPiと電子音のアラートが接近を報せる。私はすぐさま対応した。

「《シユナイダーI》モード2でリリース!」

《Yes My honey——《シユナイダーI》、カウンターリリース!》

AIはく赤騎士>のサイドバインダーから短剣型のビット——本体から独立して稼働する特殊兵装——を囀代わりに射出する。それを私と誤認した対空ミサイルは可変翼を動かし、進路方向を変えた。

《ハニー、ミサイルは任せて!》

「了解、対空ミサイル型は私が処理します」

ミサイル処理をAIに一任し、私は右手のワイヤーに繋がった月光Bをハンマー投げの要領で振り回した。十分な遠心力を与えられたところで、ワイヤーを切断し、もう一機の対空型月光（月光C）にぶつける。

仲良く纏れる二機の月光が体勢を立て直すより早く、私はスラスターを吹かした。

接敵、制動、斬撃。まるで熱したナイフでバターを削ぐような容易さで、月光Cの前方に突き出た捜査レーダーを破壊し、切り替えしの刃で月光BのAIユニットを破壊する。

「これで残り一機!」

私は最後の二機——眼前で突進してくる月光Dを睨めつけた。

《ハニー、まかせて》

そう言つてAIは対空ミサイルの相手をしたまま、果敢に突撃してくる最後の月光にビットを突貫させた。先端に鋭い刃を持つビットは、月光の30mmにも及ぶ装甲板を易々と突き破り、内部を蹂躪する。それでも機能する月光だったが、ビットを追ってやってきた対空ミサイルが、その月光に引導を渡した。

《ばーん!》

《レットクイーン》の口真似と共に、月光が大きく爆発炎上する。

ミサイルを喰らった月光Dはフェルダンになった生体部品の膝をつき、ややして沈黙した。

《撃破。攻撃目標全て沈黙。フェイズ2に移行——》

しようとした、その直後、月光の残骸から円筒型の武器を構えた男が現れた。

AKと並んでよく見かけるその武器は、使い捨てのロケットランチャーRPG-7だ。

《ハニー、対戦車ロケット。——回避》

「かまいません」

AIとく赤騎士>が避けろと警報をがなり鳴らすが、私はあえて無視した。

そうこうしている内に、切り離された弾頭部分が白い尾を曳きながら私に命中する。

成型炸薬^{HETA}の効果で爆風がく赤騎士>に集中するが、私は涼しい顔をした。ISの六角格子状の盾が鉄の熱流を遮断したからだ。おかげで機体も含め私に損害はなかった

「ば、化け物かッ！ 対戦車用のロケット弾だぞッ！」

傭兵の悪態をく赤騎士>が律儀に拾い、翻訳して私に伝える。

私は苦笑した。

ISを装備した女性は、空を飛び、木をなぎ倒し、あまつさえロケット弾だつて跳ね返す。それらは純粋な科学技術によって齎されたものだけど、理屈の分からない者には神話の怪物に映るのだろう。

「おわりですか？」

余裕綽々の笑みを浮かべる私に、ロケット弾を放った男は投擲器^{ランチャ}を捨てて逃げ出していた。

それを皮切りに、他の傭兵たちも戦意喪失してぞろぞろと退散していく。

《避けなかった狙いはこれ？》

「ええ」

おそらく彼らの装備でもっとも強い武器は先のRPG-7だ。

それが通じないとなれば、私を打倒する術はない。それで戦意を

失ってくれば、余計な殺傷をしなくて済む。ここまでやっておいて言うことじゃないが、私は無闇な殺傷を避けているのだ。

「そして効果はありました」

モニターには重たい武器を捨て、しっぽを巻いて逃げていく兵士たちが映し出されている。

そんな彼らを、私は腰抜けだなんて思わない。命欲しさに逃げることは、人生という戦略における立派な作戦だ。なにより彼らは金で雇われた傭兵、雇い主に忠義を尽くす必要などない。

ましてや相手はISなのだ。ISはISでしか駆逐できない。

だから、世界はISの開発に鎬を削る。ISを制する者がこの冷戦を制す。とは誰の格言だったか……。

♡

✦

♠

奇襲が行われる数分前、ロマノフは食事を取っていた。

この歳になると、食事以外の楽しみもない。ならば「食事だけは豪勢に」と、彼はフランス帰りのイラン人シェフを探させて、ここに連れてこさせた。その甲斐あって、こんな辺境でも肥えた舌を満足させるダイナーが味わえた。

ただし、イラン料理に在りがちな多量の香辛料は、60歳の老体には毒だったかもしれない。

しかし、博士はかまわず料理を口に運ぶ。

彼はもう長くない命だった。なら、健康に気を使っても仕方がない。

では、命が終わるその時まで、残りの余生を面白おかしく生きようではないか。

——その為には金だ。多額の金だ。それを得るためなら、危険な技術だって売りさばく。

——あいにく、私には妻も子もない。後世がどうなろうと知った事ではない。

——ハルマゲドン？ ラグナロク？ 大いに結構。存分に殺し合ってください。

ロマノフは心中で「危険と知りながらそれを欲する愚か者」と血のワインで乾杯して、サフランの香り漂う鶏肉にフォークを入れた。それを口に運ぶ途中、ふと視線を部屋の端で、読書に耽っている女性を見やる。流水のような長髪と、ラピスラズリーを思わせる蒼い瞳。どこか冷たい印象を与えるミステリアスな美女だ。

「どうだね、ソフィア。キミも一緒に食べるかね」

ロマノフは鶏肉を掲げた。ソフィアは本から視線をロマノフに移し、

「お気遣いなく、博士。食事を楽しんでください」

と、素っ気なく断り、また視線を本に戻す。

この寡黙な美女、ソフィア・カドリユスキー・アルジャンニコフは、ロマノフをここに連れてきた張本人だった。そして、現在は彼を守る命令を負っている。誰がそう命じたかは不明だったが、「用心棒」としての腕前は確かだった。CIAから追われる身の彼がこうして食事できるのも、彼女の手腕に依る。

ロマノフは「愛想のないやつだ」と鶏肉を口に入れた。そんな時だった。

「博士、失礼します」

部屋の扉が開き、一人の軍人がやってきた。

入室してきた人物は、博士の私兵を預けられたイラン防衛軍の大佐だ。

「なんだね、大佐」

科学者らしく神経質のロマノフは、食事を中断させられたことに眉を顰めた。

「襲撃です。おそらく貴方を狙ったものかと、ご避難を」

「この守りは鉄壁ではなかったのかね」

「ともかく、こちらへ」

食事を中断しなければならぬのは残念だったが、ロマノフはフォークを置いた。

そしてナプキンを外し、ソフィアと共に大佐の後ろについていく。通路へ出たところでロマノフが言った。

「それで、私の食事を邪魔したのはどこの連中かね？」

「不明です。ただ交戦した部下が機体に Deus Ex Machine ステンシルの文字を見たそうです」

その言葉を聞いた瞬間、堀の深いロマノフの貌に冷汗が刻まれた。闇市場を暗躍してきたロマノフは、裏世界の事情にも精通している。その中でもヘデウス・エクス・マキナは今一番ホットな話題として、何度も耳にしてきた。彼らによって阻止された密輸やテロは数えきれない。

「(っ)存じで？」

大佐の質問に、ロマノフは呆れ半分の表情を作る。代わってソフィアが答えた。

「ヘデウス・エクス・マキナ」。どこの国家にも所属せず、国際情勢の裏で暗躍する武装組織です。優れたテクノロジーを有し、国連に代わって平和維持活動をしているとか」

「そうだ。正義の使者を気取る偽善者どもだよ。よもや私の前に現れるとは」

「本国から増援を呼びましょう」

「間に合うのかね」

「では、私が時間を稼ぎましょう」

自信ありげに微笑んだソフィアのピアスがきらりと光る。

それは間違うことなくIS、その待機形態だった。

ソフィアは「そのため、私がいるのです」と微笑み、来た道を引き返すように踵を返した。



私が無人機と防空システムを破壊した30秒後、味方の陸戦ユニットが降下してきた。

彼らは連携のとれた連動機動ハイモニクスですぐさま研究所及び屋敷に突入していった。

抵抗はそれほどないようだった。戦力の大半であった傭兵部隊の撤退が大きな要因とみえる。イラク兵士と簡単な撃ち合いはあったものの、施設の制圧はほどなくして完了した。

しかし、仲間の無線によれば、肝心な博士の身柄はまだ確保できていないらしい。

だが、いまの私にできることはない。私が周囲に警戒を張り巡らせながら、作戦のなりゆきを見守っていると、唐突に<赤騎士>が警報を鳴らした。

《ハニー、接近警報！》

そのアラートと共に、こちらへ鋭い剣先が迫ってくる。

あたかも、蛇のようにならねって迫ってきた斬撃を、私は高周波ブレード《ヴォーパル》で打ち払った。はじかれたブレードは伸縮して主の許へ下がっていく。そのあとを私は視線で追った。

「ほお、いまのをかわすのかい」

ひやりと冷えた声質で、蛇腹剣をふるった人物は言った。流水のような長髪。ラピスラズリーを思わせる瞳は、寡黙さと神秘さをたたえている。そして、その身には水のドレスのようなISをまとっていた。

突如あらわれた水の精霊ウンディーネのようなISに、私は警戒を強める。

（イランがISを所有しているなんて聞いていませんが……）

ISは国際条約で所有できる国家が決められている。イランはその国際条約に加盟しているが、保有はしていなかったはず。となれば、先進国家の関与。それも、イランに与している国家となれば、考えられる候補はひとつしかない。ロシアだ

それを証明するように<赤騎士>が女性に『ロシア国家代表・ソフィア・カドリユスキー・アルジャンニコフ』というARRタグを張り付けた。

「悪いが、ロマノフは渡さない。君たちには引き取ってもらう」

操縦者は跳躍し、再び蛇腹剣をふるった。私は伸長してきた切っ先を払い、刃が戻るより早く敵ISに肉薄した。

斬撃。ふりおろした《ヴォーパル》を、しかし敵ISは水のドレスで防御した。受け止めた水が波紋を打つ。それだけ。それだけで《ヴォーパル》の刃はいともたやすく弾き返された。

私は相手の装備を警戒して、後方に距離を置く。

「やっぱりただの水じゃありませんね。ヘレッドクイーン、あれ、何か推測できますか」

《Yes my honey——ロジカルシンキング開始……推論結果。ダイタランシー現象を応用したリキッドアーマーの確立70%。同時に、これを実装した試験機をロシアが開発しているという記録も発見。開発コードは〈モスクワの深い霧〉》

AIが論理回路で装備の特性を推測し、その結果をARタグで敵に張り付ける。

その情報は私にしか見えないはずだが、女性はあたかも見えているように言った。

「ほお、大したAIだ。正解き。恐ろしい技術力だな、〈テウス・エクス・マキナ〉」

そして、私に指先を向ける。

「でも、これは知らないだろう——」
《クリア・パッション》
《清き純情》

そういった直後、周囲に不自然なほど霧が立ち込めた。かと思えば、背後に大きな衝撃を受けて、押し出される形で私は前のめりになったのめる。損傷は軽微だったが、私は全く対応できなかった。

「なんです、いまの攻撃は……」

《ハニー、水の分子を相転移させて、空気膨張させているみたい!》

AIの助言を聞き、私はぞつとした。敵が水の相を操れるのだとすれば、周囲を包む深い霧はすべて“爆薬”になる。まるで気化爆弾だ。

なおも濃くなる霧から逃げるように、私は機体を上昇させた。

「厄介なISが出てきましたね……」

まさか、ロシアの最新鋭機と戦うことになるとは……。

かてて加えて、イラン政府の動向を監視していた偵察部隊から悪い一報が届いた。

『グリフォン1から各位へ。イラク軍に動きあり。M i g—29と思わしき機種がスクランブルに入った。こちらで指揮系統を混乱させてみるけど、大した時間稼ぎにはならないと思う。急いで』

無線を聞き、私は顔をしかめた。

いくら私たちの技術力が高いとはいえ、国軍の物量と戦うのは懸命な判断と言えない。さっさと博士を捕まえ、撤退しなければこちらが全滅する。

さらに、陸戦ユニットからも通信が入った。

『こちらクロバー、標的の所在が判明した。南のヘリポートだ。本隊と合流するつもりらしい。こちらは敵兵の妨害を受けていて、間に合うかわからない。アリス、君のI Sでヘリの頭を押さえられないか』

私は素早くデジタルマップを展開して、送られてきた位置情報と現在地を照合した。確かに私の位置からなら十分に間に合いそうだったが――。

(それには、まずくモスクワの深い霧をどうにかしないと……)

生き物のように蠢く霧から逃げるように、私はスラスターを吹かせて高度を上げた。

その私を、人魚の形を成した霧が追いかけてくる。このまま足止めを食らうわけにも……。

「仕方ありません。ヘッドクイーン、とっておきを使います」

《Yes my honey——シユナイダーIからVIIIをモード4で射出》

レッドクイーンは射出したソードビットを円環状に配置して、私の前方に姿見を作り出す。

そこへくモスクワの深い霧が作り出した霧が覆ってくる。

私はその姿見へ飛び込むのと、相手が起こした水蒸気爆発はほぼ同時だった。

「M i g - 29が4機、こちらに向かっているそうです」

前を歩く大佐がそういった時、ロマンフは「ふむ」と頷いた。

いくら〈デウス・エクス・マキナ〉とはいえ、イラク軍を敵に回そうとは思わないだろう。彼らが駆けつけてくる数分をしのげれば、まだ自分にも活路はある。もちろん、しのげればだが。

(すべてはソフィア次第か)

ふと、ミステリアスな美女のことを思い出す。深い関係にはならなかったが、世話にはなった相手だ。多少の信頼と感謝——そして心配する気持ちがあった。

(ふっ、破滅主義者に堕ちた私が、誰かを慮るとはな……)

そんな自分に驚きながら「これが親心というものだろうか」と独身の彼は思う。

悪くないものだ。彼がそんな感慨に耽っていると、通路が出口に差しかかった。

「どうぞこちらへ」

大佐がへりに先導した時、まるで金属が切断れるような不協和音がへりポートに響いた。

何事かと、周囲に視線を配らせると、切り落とされたへりの後部ローターが見えた。

それを赫々と燃えるようなISが見下ろしている。

操縦者は赤い髪をした少女だ。手には身の丈ほどある大剣。悠悠しく、神々しいその姿は、まさにヴァルハラの子乙女。もつとも英霊を迎えに来たようには見えなかったが。

「ロマンフ博士、あなたを捕えにきました」

凜とした宣告に、大佐は『ソフィアはどうした』と通信機に怒鳴りつけた。しかし、応答はない。大佐は苛立ちながら『撃て！』と部下に命令した。それに従って兵士がAKを構え、ISを攻撃する。さらにRPG-7を構え、発射した。

だが、7・62mmのライフル弾も、対戦車ロケット弾でさえ、ISが展開する“六角格子状の壁”に阻まれ、一発たりとも少女に命中しなかった。

「なるほど、これがISか。世界が夢中になるわけだ」

これほどまでに圧倒的な力を見せられては、ロマノフも諦めがつくのが早かった。

それでも兵士の矜持か、大佐たちはなおも攻撃しようとしたが、それをロマノフが手で制す。

「観念しよう。私をどこへでも連れて行きたまえ」

抵抗は無駄。そう悟ったロマノフは紳士的な声音で降伏の意を表した。

「その前にひとつ聞きたいことがあります」

赤い髪の少女が言った。

「なぜ、このようなことを？　なぜ核のような危険な技術を世界にばらまくのです？」

「ばら撒いているのではない。客が欲しがったから、その技術を買ってやった。それだけだ。ビジネスさ。食う為に金を稼いで何が悪いというのだね。それが世界に謳う資本主義だろ」

「でも、あなたのビジネスは多くの人を不幸にする」

「それは世界経済を支える戦争ビジネスも同じだろ。キミは売りさばかれた無人兵器や派遣されたPMCが、年間でどれだけの人間を殺しているか知っているかね。私がやっていることは世界の戦争成金もやっていることだ。なのに、なぜ私だけ批難されなくてはならん」

「屁理屈ですよ、それは。あなたのやっている事はただの大量殺人の幫助です。ビジネスですらない。兵器ビジネスとは位相が違う。あなたのそんな理屈は、世界にまかり通らない」

呆れた少女の態度に、ロマノフは苦笑した。

彼女の真っ直ぐな瞳を前に、なおも行いを正当化しようとした自分が滑稽に思えたのだ。

「あなたほどの頭脳があれば、他にやりようはあったでしょうに」

「そうだな。否定はできん」

それから顔を洗うように前髪を拭い、ロマノフは改めて少女の問いに答えた。

「私は祖国に尽くした。身も心も捧げた。だが、祖国が崩壊し、政府の体勢が代わると、われわれ科学者は『賃金が払えない』という理由で解雇された。特に東西冷戦の解体と核軍縮の流れから、私のような科学者は冷遇されたものだ。保証もなく、私は地位も名誉もすべて失った。残ったのはこの身を蝕む病だけだ。これが社会主義の現実だよ。私が破滅主義に堕ちたのは、私を見捨てた社会への復讐だったのかもしれない」

哀れな老人のやけっぱちに、少女は怒りを露わにした。

「だとしても、世界に死の灰をばら撒いていい理由にはならない。世界はあなたのものじゃないし、誰のものでもない。世界を壊していい権利なんて誰にもない」

「……………」

少女の髪のような赤い怒りが、なぜか心地よく感じられた。叱られることに充実を感じたのは、いつ以来だろうか。もしかしたら、本当はこの凶行を誰かに止めてほしかったのかもしれない。

「ああ、君の言う通りだ」

これで、ようやくやめられる。

そんなすがすがしきを感じるロマノフの背後から新たな兵隊がやってきた。大佐の兵隊ではない。もっと奇抜な格好の兵隊だ。黒ずくめのスーツに身を包んだその姿は、さながら忍者を彷彿させた。

その忍者たちは、俊敏な動きで大佐たちを包囲し、ごたごたしたM4を突き付けた。

「全員、動くな」

ISがいる手前、大佐とその部下は抵抗らしい抵抗もせず、両手を上げて両膝をついた。

その兵士たちに忍者が特殊なデバイスを突き付けると、彼らは眠るように気を失った。

「クローバーよりジョーカーへ。標的を確保した。今からランディングポイントに向かう」

『できるだけ急げ、迎撃機が接近している』

「了解」

そう答え、忍者兵は博士を拘束して連れていく。

途中、ロマノフが何かを思い出したように足を止め、振り返った。

「そうだ、ソフィアはどうなった」

すこし迷ったのち、少女は言った。

「無事です」

簡潔に答えたアリスに、ロマノフは満足して、通路の奥に消えて行つた。

その後、アリスは向かってきているMig-29から味方を守るべく迎撃に向かった。

♡

◆

♡

「くそっ……」

アリスと敵対していたソフィアは、大破した<モスクワの深い霧>を蹴った。装甲の破損、動力部の損傷、武装の大破。片手では数えきれないほどの損害報告をがなり鳴らす愛機に、ソフィアは「はあー」と重いため息をつく。

「《第二形態》^{セカンドフォーム}に、《単一仕様能力》^{ワンオフ・アビリティ}だって？ ずるいだろ、そんなの……」

ISは通常兵器にない、二つの固有能力を有している。それが《形態移行》^{フォームシフト}と《単一仕様能力》^{ワンオフ・アビリティ}だ。前者はISの性能を飛躍的に高め、後者は「魔法」と見紛う現象を起こす。<モスクワの深い霧>を大破に追い込んだのは、<赤騎士>がその圧倒的な、ある意味で卑怯^{チート}な力を使用したからだだった。

<モスクワの深い霧>の《清き情熱》は確かに<赤騎士>を捉えたが、水蒸気爆発の中から出てきた<赤騎士>はまるで————と、思い返した時、ソフィアの頭上をMig-29が墜落して行つた。撃墜したのは、件の<赤騎士>だ。

「これは連中に逃げられたな……」

〈赤騎士〉がこの空域に留まっているのは殿のためだろう。そうになると、別の部隊がすでに、ここから離脱しているはずだ。——きつとロマンノフを連れて。

「まいったな、これアルツェバルスキー大佐に怒れるぞ……」

自分に「ロマンノフを守れ」と命じた上司のかんかんな姿を想像し、憂鬱な気分になる。

任務の失敗、自機の大破。しかも後者はコアまで大破している。貴重なコアを壊した責任は必ず取らされるだろう。国家代表の座を下されてもおかしくない。

「この借りは必ず返すから、覚えていろ、〈赤騎士〉のパイロット」

ソフィアがその宣言する先で、〈赤騎士〉がまた一機、戦闘機を撃墜していた。迎撃機を打ち負かした〈赤騎士〉は、そのあと光学迷彩を展開して姿を晦ませる。

彼らが現れて、去るまでの一連のできごととは、僅か15分間の出来事だった。

〈英雄譚のはじまり〉

第1話 アリス in ハイスクール

作戦終了後、〈デウス・エクス・マキナ〉仮設基地——IS整備ドック。

イランでの作戦を終えた私は、デジタルボードを片手にフラフラと弾薬箱の上に腰かけた。

博士確保のあと、Mig-29が接近してきいたため、撤退はかなりスリリングだった。

ISや輸送機に装備されているEOCシステムは、Mig-29のレーダーやミサイルからも逃れられるけど完全ではない。それだけに殿を務めた私は気疲れしていた。

「やれやれ」

夕食のカロリーメイトを取り出し、報告書の製作に取り掛かる。

その前では、ハンガーに掛けられた〈赤騎士〉が整備のためバラバラに分解されていた。

「もうオーバーホールですか?」

《Yes my honey——いまから精密検査》

本体から外され、クレーンに吊るされた赤い単眼装置——〈レッドクイーン〉がそう言うのと、傍らの整備員が私に半眼を向けた。

「そうそう。どっかの誰かさんが、避けられたロケット弾を受け止めたせいでね」

そう言ったのはISの整備長だ。歳は三十代前半。ベリーショートがカッコいい女性だ。ただ、目は無駄な手間を増やした私を批難するように笑っていない。なんだか気まずくなつた私は視線を逸らした。

「せ、戦意を喪失させるにはいい手だったんですよ」

「だとしても、もうすこし機体を大切に扱ってほしいわ。ね、〈レッドクイーン〉」

《Yes Mechanical chief——ハニーは操縦が

荒っぽい》

「うん、うん。この際だからもつとやってやんな」

《Yes Mechanical chief——この前も、ジェネレーターを酷使してオーバーヒートさせかけた。電磁筋肉だつてハニーが操縦者だと、消耗断^E裂現象^Fが酷くてすぐダメになる。骨格も作戦が終わると矯正が必要。ハニーのせいで整備班から「おまえはへハンガークイーン」だな」って笑われてる》

「ホントによ。そもそもこのく赤騎士は実験機なんだからね、余剰パーツが少ないのよ？ それをなんとかやりくりして整備しているこつちの身にもなりなさい」

「わかっていますって」

ステレオ音源の説教に私は耳を塞ぐ。

こつちはシビアな作戦を終えたばかりで疲れているのに……

「ほんとうにわかってる？」

「ええ、ええ、ちゃんと感謝しています。私がこうして戦えるのは整備班さまのおかげです」

「うむ。よろしい」

整備班長は『以後、気をつけるように』と頷く。

ようやく整備班のお叱りから逃れられたところで、私は改めてく赤騎士についてISを見つめた。

「インフィニット・ストラトス、か」

前世紀、アメリカなど先進国でもパワードスーツの研究は行われていたけれど、ISはそのどれとも一線を画している。攻撃力、防御力、機動力のどれをとっても現行兵器のそれを上回る。いまやIS失くして先進国家の国防は成り立たない。

けれど、そんな最強の機動兵器にも欠点が存在した。

「なんで女性にしか動かせないんでしょうね」

そう、ISは女性にしか扱えないのである。

そういう理由もあって、女性が国防の一端を担うようになってからは、世界中で女性の機運が高まった。それを世論と汲み取った各国政府は、女性優遇の政策を実施。『女性の社会進出』を謳って始まったそ

それは、瞬く間に世界を母権社会へと変えていった。

「さあね」

整備長が気のない返事を返す。

あまり興味が無い——というよりは整備に集中している——様子だったが、私は続けた。

「なんでも男性が乗ると、ISの〈コア〉が反応しなくなるって話でしょ?。」

〈コア〉というのは、ISの中核を成すパーツの名称だ。このパーツなくして、ISは起動さえままならない。まさにISの核なわけである。その〈コア〉を解析できれば、女性にしか扱えない理由も判明するかもしれないらしい。——らしいと言うのも、この〈コア〉はブラックボックス化されており、解析できないようになっていたのだ。

「技術部の連中も必死で解析してるらしいわね」

「ロリーナなら説明しそうですね」

一見、機械とは無縁そうなロリーナだけど、篠ノ之束と肩を並べる才媛だ。特にロボット工学と人工知能の分野に秀でていて、この〈赤騎士〉もロリーナの手製だ。それだけではなく、この組織の兵器システムの多くは、彼女の知識によって齎されたものである。

「そうね。あの女ならやってのけそうねえ」

《でも、仮に解明できても、それは徒労に終わるかもしれない》

私たちはクレーンに釣られたままの人工知能を見た。

「なぜですか?。」

意識を向ける私たちに、ヘレッドクイーン〈がとんでもない事実を告げた。

《ISに乗れる男性が現れたらしい》

告げられた事実には、私は食べていたカロリーメイトを落としたりした。

整備長も驚きでテクニカルキーボードを落す。

「それ、本当なのヘレッドクイーン!?!」

《私はHAL9000と違って嘘がつけるけど、これはホント。いま日本の放送でやってる》

さきから大人しいと思っていたら、ずっと日本のチャンネルに接続

していたのか。

いや、それより今はISを動かせる男性だ。

「ヘレッドクイーン」、それ、映せますか？」

《Yes my honey——チーフ、私を〈赤騎士〉に接続して》
「OK、ちよつと待つてな」

整備長は目にも止まらない速さで、〈赤騎士〉にヘレッドクイーンを接続する。

互いがオンラインになり、〈赤騎士〉の投影型モニターに件のニュース映像が映し出された。

「お、イケメンじゃないの」

モニターに映っていた少年は、私とたいして年齢の変わらない男の子だった。黒髪の短髪で、顔立ちはなかなか精悍だ。番組のテロップによると、名前は織斑一夏と言うそうだ。

モニター内では、アナウンサーと思わしき人物が『彼の今後は——』や『政府の対応は——』と原稿を読み上げている。やがて一頻読み上げると、番組は別のニュースを報道し始めた。

あとはどうでもいい情報だったので、私はモニターから離れる。

「いやはや、まさか本当に男性のIS適正者がでてくとはね」

考えてみれば有り得た事態なのだろうけど、それでも私たちは驚愕を禁じ得なかった。

また織斑の姓が、一段と私たちに驚きを与えてくる。

(もしかして、あの人はこうなる事を予測していたのでしょうか)

と、そう憶測する私の許へ、一人の整備員が駆けてくる。

「いた、いた。アリス、ロリーナが部屋に来てくれって」

この呼び出しに、私はなんとなく何を告げられるのか見当がつかない。



目的地であるロリーナの部屋につき、私はノックした。

『どうぞ』と返ってきたので、『失礼します』とドアノブを回して、部屋に入る。

「いらっしやい。好きなところにかけて」

室内に入ると、ロリーナがティーセットの準備をしていた。私はテーブルをかこうソファアに腰を下ろす。その正面にティーセットを持ってきたロリーナが座った。

「貴女を呼んだのは他でもないの。実は貴女に頼みたい事があってね」

ロリーナは紅茶を準備する片手間、ガラス張りのアンティークテーブルにある資料を広げた。

その一つを手取る。いくつかの写真と文面が目に入った。何かのパンフレットのようなのだが。

「IS学園？」

表紙には、そう書かれていた。

ISの登場により、軍隊の在り方が根底から覆った。この未曾有の事態に対し、世界はISについて協議する場〈国際IS委員会〉を設け、次にISの運用や開発を規制する協定——通称〈アラスカ条約〉を制定。これにより原則ISの戦争利用が禁止され、ISはスポーツへとそのベクトルを変えていった。

はたして兵器同士の戦いがスポーツと呼べるのか。

それは別として、その操縦者を育成するために創立されたのが、このIS学園だ。

そのパンフレットを渡して、私にどうさせようというのでしょうか。まさかとは思いますが。

「実は貴女にココへ入学してもらいたいの」

優美な動きでティーカップに紅茶を注ぎながら、ロリーナはそう言った。

「知つての通り、ISに関連する人材は、この学園で育成されるわ。いわばISの登竜門。そのことからIS学園には各国の最新鋭機と、それを駆る優秀な操縦者が集うの。——お砂糖はいくつ？」

「ひとつで」

「ひとつね。で、貴女にはこのIS学園に入学して、その情報をリークして欲しいの。はい、どうぞ」

私はロリーナからティーカップを受け取り、内容を確認した。

「つまり私に密偵になれと」

「ええ、引き受けてくれるかしら？」

紅茶を一口啜り、私は『わかりました』と了解した。もともとIS学園には興味があったので快諾する。なにより「頼み事」と言っている、これは実質の命令だ。断る事はできない。

だが、一つだけ腑に落ちない点があった。

「ですが、本来こういった任務は情報部の仕事なのでは？」

本来、偵察や諜報といった情報収集は『情報部』の仕事だ。それを基に作戦を実行するのが私の所属する『作戦部』。本来こういった任務が、私に回されてくる事は珍しい。

「私たちの組織はどの部署も有能な人材で構成されているけど、そんな人材の発掘は安易じゃないの。それあって常に慢性的な人材不足に悩まされているわ。情報部も人員が足りていなくてね」

「なるほど。だから私にこのような任務が」

私は納得した顔で、もう一口紅茶を啜る。

人手不足なら仕方が無い。月並みの言葉だが、困った時は助け合いが肝心だ。

「入学手続きはコチラでしておくわ。あとく赤騎士も持って行っつかまわないから」

「いいのですか？」

「ええ。ただし、公然での使用は控えて。く赤騎士のくコアナンバーは、どこの国家にも機関にも登録されていないから。もしく国際IS委員会く目をつけられたら厄介よ」

ISは数に限りがあり、国家の軍事力を左右する性能がある。そのため、国際機関で保有数や所属について厳しい取り決めが成されている。そんな状況下で所属不明のISを露見させれば、所有者である私も当然く国際IS委員会くの拘束を受けることになるだろう。数多くある国際機関の中でも、く国際IS委員会くは強い権限を持つ。

「一応、あなたの偽装身分に合わせて〈コア〉のダミー国籍を用意するつもりだから、それまでは我慢してちょうだい」

「わかりました」

その後、一頻り説明を受け、IS学園のパンフレットを持って、ローナの部屋を出た。

そして、パンフレットに目を通しながら来た道に戻る。

「ふむふむ。学園は全寮制で、制服は改造OKなのですか」

私はどういう風にしようかな。

学園生活の妄想を膨らませながら、私は相棒の待つISの整備ドックへ向かった。

第2話 ひとりぼっちの英雄

高校入学初日。人によっては記念すべき日だ。夢と希望を抱いて、門をくぐる者も多いだろう。

だが、俺——織斑一夏はそんな記念すべき時を、嘆きで迎えようとしていた。

というのも、四方八方どころか三六〇度、見渡す限り、俺をジロジロ見る女ばかりだからだ。

(ねえ、ねえ、あの男子がISを動かしたっていう?) (そうそう。ちよつと声かけてみようかな、けつこうイケメンだし)(容姿に騙されちゃダメよ。男はみんな野蛮で品性下劣なんだから)(ほんと、男と同じ教室なんて最悪よね)(でも、やさしそうだよ、彼)(テレビで「男がやさしいのは下心を隠すため」って言ってたよ)(その通りです。男性はカツコばかりですよ。信用してはいけません)

そんな会話と共に、周囲から蔑みの視線が寄せられる。

こんな時代だから、女性ばかりのIS学園も男性に冷たい場所だろうと思っていたが、

(これは想像以上にきついな……)

そもそも、なぜこんな境遇に陥っているかというと、俺が女性しか動かせないISという機械を動かしてしまったからだ。そのあと、俺は保護の名の許、このIS学園という女の園に入学せざるを得なくなった。

(くそ、はやくホームルーム始まらねえかな……)

そうすれば、俺に集中する視線もすこしは和らぐだろう。

すると、俺の些細な祈りが通じたのか、教室の自動ドアが開いた。

(お、ようやくかHRか。——できれば、担任ぐらい男性がいいよな) というささやかな願いは、即座に打ち砕かれた。

教室に入ってきたのは、ショートカットの小柄な女性だ。顔も童顔で、掛けている眼鏡も服のサイズも合っていない。胸の大きさこそ一人前だが、どうにも頼りない雰囲気的女性だ。

軽く絶望する俺の予想を裏切ることなく、その童顔先生はわたわた

と教壇に上った。

「ええ、えっと、みなさん、初めまして。ほ、本日はお日柄もよく、晴れ晴れとした晴天で」

わけの分からないあいさつを始める童顔先生に、クラスから大量の『?』マークが浮かぶ。

先生はその反応にテンパって、

「そ、そうです！ み、みなさんご入学おめでとうございますー！」

と、頭を下げた。——眼前の教員机に向かって。勢いよく。

ゴン！ と教室に響く頭突きの音が、クラスをまた微妙な空気にする。

「う、ううツ……」チラツ

いや、そんな助けてほしそうな貌をされても……。助けてほしいのはこつちなんですから。

「えっと、先生？ とりあえず、先生の自己紹介をしてもらえると助かります」

どこか気まずい雰囲気漂う中、そう発言したのは、左後ろの女子生徒だ。

燃えるような赤い髪を持つその少女は、童顔な先生よりもしっかりした口調でそう言った。

「そ、そうですね。私だったらもう……。すみません。えっと、改めまして。この度、一年一組の副担任を務めさせていただきます、山田真耶です。新米で至らないところも多いですが、みなさん、よろしく願いますね」

今度は机に頭をぶつけない程度に腰を折る。

ん、彼女は担任じゃないのか？——そんな疑問を余所に山田先生がHRを進めていく。

「では、次はみなさんに自己紹介してもらいましょうか。順番はそうですね。右端の人から順にお願いします。ではまず篠ノ之箒さんから」

山田先生の預かりで、綺麗な黒髪をポニーテイルにした女の子が立ち上がる。

篠ノ之箒。奇遇にも俺と同じクラスになった幼馴染だ。その幼馴染は俺をチラつと盗み見てから自己紹介した。

「篠ノ之箒だ。不束者だが、よろしくたのむ」

「はい、よろしくおねがいますね。では、次の人、どうぞ——」

というわけで、クラスの自己紹介タイムが始まり、右端から順にクラスメイトが名前、出身、目標などを語っていく。生徒の中には『わたくしは、いずれ国家代表となり、ブリュンヒルデになる女ですわ』と創大な目標を語り、注目を集める者もいた。

それにしてもIS学園は国際的な学校なので、外国の生徒も多い。その所為か、覚えづらい名前も多く、結局半分ぐらい終えたところで覚えられたのは、幼馴染の篠ノ之箒と、山田先生にアドバイスをした赤髪の子アリス・リデルという子だけだった。

(俺、うまくやっていけるだろうか……)

ろくに名前も覚えられなかった自分に不安を感じていると、再び教室の扉が開いた。

入ってきたのは、黒いスーツを着込んだ黒髪の女性だ。すらつと引き締まった姿態。きりつとした凛々しい面持ち。スーツを見事に着こなすその人物に、クラスが急に活気立った。

「きやーッ！ 千冬さまだわッ！」

「え、あのへブリュンヒルデがクラス担任!? 北九州から来た甲斐があつたわッ」

「近い、近いわッ！ 私は千冬さまに会うために、カナダから来たんだからッ！」

「うそッ！ あたしたち千冬さまに躑けてもらえるのッ!?!」

思わぬ人物の登場なのか、一同は驚きを隠せない様子だ。だけど、クラスの中で一番驚いているのは俺だと思う。なんたつて目の前に現れた女性は、俺の姉だったのだから。

「ち、千冬姉、なんでここに!?!」

職業不明だった姉の出現に驚きを隠せないでいたら、千冬姉がスタスタとやってきて、持っていた出席簿を俺の頭上に落した。バシツと小粋のいい音が鳴って、俺は頭を押さえる。

「いきなり何すんだよ、千冬姉……」

「ここでは織斑先生と呼べ」

「え、でも……」

いきなり姉を先生呼ばわりすることに抵抗を感じていたら、また叩かれた。

「いいからそう呼べ。事情はあとで説明してやる。それと不用な発言は避ける」

千冬姉改め——織斑先生の忠告の意図は直ぐに理解できた。

「ええ、織斑くんって千冬さまの弟!?!」「同じ苗字だから、まさかとは思っていたけど!」「もしかして織斑くんがISに乗れるのとか何か関係がツ!?!」

再び視線の集中砲火を浴びて、ざわっと全身の毛が逆立つ。

なるほど、確かに身バレは良くなかったかもしれん。もう遅いけど。

「おい、騒ぐな」

ヒートアップする教室に、千冬姉が黙れと手を翳す。

それだけの仕草でクラスのガヤガヤがピタッと止んだ。うわ、俺の姉、すげえ……。

「まったく、毎年、千冬さま、千冬さまと鬱陶しい。私を呼ぶなら織斑先生だ。それと慕うのはいいが、崇めるのはやめろ。というか禁止だ。やったら一日廊下に立たせるからな。いいな」

千冬姉の一喝に教室が瞬く間に静まり返る。

千冬姉が「まったく……」と十代女子の姦しさに辟易していると、山田先生がそこに駆け寄った。

「織斑先生、職員会議は終わられたんですか?」

「ああ。肝心な時にいなくてすまなかつたな」

「いえいえ」

そう言つて、突き出した両手を左右に振る山田先生の頬は何だか赤い。

「おや、背後に百合の花が見えるのは俺だけか?」

「では、私が代わろう」

やれやれといった具合で千冬姉、改め1組担任の織斑先生が教壇に上がる。

及び腰にならず歩くその堂々たる態度ときたら、山田先生と雲泥の差だ。

「さて。私がこのクラスの担任を受け持つことになった織斑千冬だ。諸君、まず入学おめでとう。キミたちは過酷な試験を突破してきた有能な生徒だ。私も君たちをそう認識している。それは誇れることだ。胸を張っていい。——だが、慢心はするな。怠慢は才能を潰す。非力でいたければ、精進を怠るな。怠惰は敵だと思え」

千冬姉の訓示に、教室の雰囲気が一変して引き締まる。

「よろしい。我々教師陣も、キミらのためなら苦勞を惜しまない。できないならできるまで面倒を見てやる。おまえたちは恐れず、前に進め。いいな」

『はい…』

彼女たちの強い返事は、千冬姉の言葉に感化されたものと直ぐわかった。

こういう風に言葉で人を動かせる人種を、カリスマっていうんだらうな。

「では、山田先生」

「は、はい」

千冬姉の言葉に感動気味だった山田先生が慌てて教壇に戻る。それから千冬姉の登場で中断していた自己紹介を再開する。

こうして俺の長い一日は始まったのだった。さて、どんな受難が俺を待ち受けているのやら。



受難は思いの外、早くやってきやがった。

それは俺が一時限目の授業に備え、教科書を整理していた時のことだ。

「ちよつとよろしくて?」

そう言つて現れたのは、クリーム色の金髪をした碧眼の女子生徒だ。

どこか気が強そうで、ウエーブのロングヘアと横髪のロールは、まるで貴族のお嬢さまである。白く肌理の細かい肌から見るに、おそらくヨーロッパの人だろうか。

「えっと、君は——」

俺は先の自己紹介を思い出した。

確か『ブリュンヒルデになる女』って宣言していた女の子だよな。名前は——

「えっと、セ、セ……セシウムさん?」

「セシリアです、セシリア・オルコット! 自己紹介、聞いていませんでしたの!?!」

いうなり、俺の机にドンと両手をつく。

ああ、セシリア・オルコットさんだったか。俺は素直に謝った。

「悪い。名前を憶えるの苦手で……」

「ああ、まったくなんて方ですの……。女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコット家の跡継ぎにして、イギリスの代表候補生であるわたくしを存じないなんて。男という生き物は、これほどまでに無知なものなのかしら」

オルコットは憤慨しながら、まるでミュージカルのような挙動で頭を振う。

これが様になっていて、俺は怒られているのに感心してしまった。

「へえ、オルコットさんはイギリスの国家代表候補生なんだ。スゲーナ」

国家代表候補生。ISの世界大会へモンドグロツソの出場資格を持つ操縦者を国家代表と呼ぶのだが、彼女はその候補生だという。

なぜこんなに詳しいのかは、俺の姉が日本の国家代表だったからだ。今は現役を退いているが、一度は世界を制したこともある。クラスメイトが黄色い声を出した理由もそこにあるのだろう。今の時代、強い女性は同じ女性の憧れだから。

「ええ、わたくしは凄いですのよ。そんなわたくしに話しかけられたこと、男性なら光栄に思うべきですわ。なんなら、記念日にしてもかまわなくてよ?」

「お、おう……(なんだか、ものすごく上から目線の娘だな)」

そんな彼女に、俺は「あのクラスメイトたちと同じか」と思う。

つまりは、女を尊い、男を蔑む人間。——女尊男卑主義者。

ISが女性にしか使えないと判明すると、それを契機に女性たちの機運が高まった。やがて、社会が女性賛美を謳い、政府が優遇政策を実施するやいなや、選民意識に毒された巷の女性たちは、自らの尊さに酔い、男性を同位同列と見做さないようになっていった。

もちろん、すべての女性がそうなったわけじゃないが、会話を聞く分に、彼女はそうらしい。

正直、こういう手合いとは関わりたくない。さっさと引き取つてもらおうと、俺は言った。

「で、俺に何の用だ? 何か用があるから、俺のところに来たんだろ?」

「ええ、世界で初の男性IS操縦者、それがどんな男性かと思いましたが」

いうなり、オルコットは心底がっかりしたというような貌をした。

「まー、期待はずれもいいところでしたわ。知性も野心も感じられない。それどころか女性に囲まれてオロオロするばかり。情けない事、この上ありませんわね」

酷い言い草だが、俺は苦笑した。

「俺なんかに何かを期待されても困るんだが?」

俺は千冬姉のように偉大な経歴があるわけじゃない。力だって、知識だって、人並みだ。

そこらの高校生と変わりない俺に期待や希望を持たれてもな……。そんな俺が自らを卑下するように笑うと、オルコットは嘆くように眉間へ細い指をあてた。

「本当に残念な男……。男ってどうしてそうなのかしら」

俺に憐れむような視線をよこしたあと、オルコットは『もういいで

すわ』と踵を返す。

一体なんだったんだ。と思っていたら教室の自動ドアが開いた。入ってきたのは千冬姉だ。

「諸君、席につけ。これから一時限の授業を始めるぞ」

千冬姉は教壇に上り、俺たちに着席を促す。

それから持ってきた資料と教材を教員机の端にやり、何かを思い出したように言った。

「うむ、そういえば、まだクラス代表を決めていなかったか」

「クラス代表ってなんですか？」

「そのままの意味だ。主な仕事は、学園行事でのまとめ役、学級総会の出席、クラス対抗戦の出場。そんなところだ。誰か率先してやりたいというものはいるか？ 他薦自薦は問わないぞ」

千冬姉の言葉——特に他薦という言葉が俺に嫌な汗をかかせる。

他薦を問わないということは、無理やり相手に押し付けられるということだ。

「はい！ 私は織斑君を推薦します！」

「わたしも織斑君を推薦します」「折角の男の子なんだし推してかないとね」「倍プッシュ」

うわ、やばいな。これは押しつけられるパターンだ。

これが俺を認めての推薦なら考えなくもないけど、彼女たちが珍しさと場の流れで推薦しているのは明白だった。最悪、面倒事なことは男に押しつけよう”という魂胆の子もいるだろう。

このままだと、本当に押し付けられる。そう思っ立ち上がろうとしたときだった——。

「貴女たち、正気でして？」

そう言っ立ち上がったのはオルコットだった。

オルコットはまるで犯人を追いつめた探偵のように、その細い指を俺に突き付けた。

「クラス代表とはクラスの顔。こんな弱腰の男に務まると思いで？」

代表なら相応の統制力と実力を持った人物がなるべきですわ。珍しいというだけで代表を選ばれてはたまりませんことよ」

そう強く、俺のクラス代表を反対するオルコット。

それに我が意を得たのは、いままで俺を嫌悪の目で見ていた女子だ。

「そうよ、そうよ、男が女の上に立つなんておかしいよね」「男は女の下で働くべきだわ」「男は女の言う事を黙って聞いてればいいのです」「男は女の奴隷みたいなもんだからさ」「そうだ、そうだ、男は肉体労働でもやってろ」

水を得た魚のごとく威張る彼女たちに、俺は顔が熱くなるのを感じた。

ISが登場して以来、ISに乗れない男性の社会階層ヒエラルキーは、ISに乗れる女性より下になった。だから、社会下位者がその上位者に楯突くなんてんだらう。別に推薦してくれた娘たちを擁護するつもりじゃないが、さすがにここまで見下されて黙っていられるほど、俺は腐っちゃいない。

しかし、俺が反論するよりも早く、静かな、でもはつきりとした声が割り込んできた。

「だったら、自推すればいいでしょ」

発したのは、赤い髪生徒——アリス・リデルだった。



「だったら、自推すればいいでしょ」

最初は黙認するつもりだった。こう言うてはなんだけど、決めるのは高がクラスの代表。誰がやってもさして変わらないのだから、好きに決めればいい。そう思っで見守っていたけれど、聞くに堪えない言動の数々に、私は思わず口を挟んでしまった。

「織斑くんをクラス代表にしたくないなら、自分が立候補して蹴落とせばいいんですよ。なのに、誰も立候補しない。みんなして「あーだ、こーだ」と口先ばかり。自分たちは男性より優秀だ」というなら、行動で示すしてはどうです」

女性の素晴らしさを語るけど、行動に表れない。女尊男卑の女性にみられる傾向のひとつだ。

現代社会の女性は公共福祉、社会制度、法律、金融の場で、さまざまな権利が保障・優遇され、存在しているだけで褒め称えられる。そんな「女性万歳」の社会じゃ、自己啓発も起こらない。

過度な賛美や加護は人を腐らせるのだ。水を上げすぎた花が腐ってしまふように。

「リデル、その辺にしておけ」

「すみません。出過ぎた真似をしました」

諷められ口を噤む。だが、織斑先生は『いや、いい』と軽く手を翳した。

「リデルのいう通りだな。将来的に国家代表や候補生を目指すなら、クラス代表ぐらいやってやろう」という意気込みがなければ、務まらないぞ。——自発的な行動を心がける。何のための「自推」だと思っている」

「そうですね。先生たちもお手伝いしますから、がんばりましょう。何事も挑戦ですよ」

千冬さんと山田先生が言いたいことをきっちりまとめしてくれる。教室はすこし大人しくなった。

とはいえ、改心したという様子ではない。ひとまず銚を収めたという具合だろう。

「では、話を進める。織斑以外に立候補者はいるか？」

織斑先生がさらなる選出者を集うと、オルコットさんが名乗りを上げた。

「織斑先生、わたくしが立候補いたします。なにせ、わたくしはイギリスの代表候補生ですもの。わたくしほどクラス代表に適した人間はおりませんわ」

掲げた手を胸にあて、オルコットさんは堂々とそう言い切った。

私も彼女にはそれだけの能力が備わっていると思う。代表候補生の選出には技術だけじゃない、国家の威信を背負えるだけの人間的素質が必要だから。責任感のない人間じゃとても代表候補生は務まら

ない。

だからなのでしょう。その後も立候補者が集われたけど、名乗り出る者はいなかった。

「出そろったようだな。では、織斑とオルコットの二人で投票か多数決を——」

「まっってくださいませ、織斑先生」

そう言っただけで、またもやオルコットさんだった。

「織斑先生、来月にはクラス対抗試合がありますわよね。それに勝てばクラスの株もあがるというもの。優遇もされると伺っています。クラス全体の利益を考えれば、代表は相応なISの実力を持った人間が選出されるべきです。そこで提案したいと思います」

「ほお、なんだ？」

「ここはISの最高学府、IS学園。ならば、ISの勝負でクラス代表を決めてはどうでしょうか」

オルコットさんの提案に教室がガヤガヤと沸く。私も悪くない提案だと思った。

投票や多数決を行っても、クラスの半分は男卑主義者で、もう半分は織斑くんを推す人たちだから、票が割れるのは必須。それならIS学園らしくISの一騎打ちでクラス代表を決めるのもアリだろう。

織斑先生は織斑くんに視線をやった。

「どうする、織斑」

「別に逃げてもよろしいのですわよ？」

『あなたは男なのだから』という口調が追い風となって『やめた方がいいよ』『男が女に勝てるわけないんだし』『むしろ、負けて立場を改めてもらったら？』『女の方が偉いんだから男は弁えなよ』とクラスの所々から嘲笑が起る。

その逆風が織斑くんを駆りたてたのか、

「受けて立ちます」

彼は闘志をむき出しにして、勢いよく立ち上がった。

「威勢はよろしいですね。そういった点では、あの人よりマシかもしれませんわ」

「は？ なんだよ」

「いえ、こちらのことです。では、わたくしは貴方に決闘を申込みますわ」

「おう、いいぜ。かかってこいよ」

そんな彼を勇ましいと思う反面、無謀だとも思った。なにせ、相手はイギリスの代表候補生。実力は折り紙つきだ。男性とはいえ、IS操縦者としては素人然の彼に勝算があるとは思えない。

だが、瞳の奥は強く燃えていた。この逆行に立ち向かってやろうという意思の炎だ。

「それでは勝負は1週間後。第1アリーナで行う。ルールは公式戦の総合部門に則る事とする。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

一週間後というのは、ISの稼働時間が少ない織斑くんに対する配慮なのだろう。流石に今日の放課後では、織斑くんが不利過ぎる。まあ一週間の猶予があっても厳しいけど、一週間あればいくつか手は打てるし、基礎ぐらいなら覚えられる。

「以上だ」

織斑先生がそう締めくくり、クラスメイトたちも授業の準備に勤む。

私も参考書、ルーズリーフ、ウサギのカンペンをカバンから取り出す。決闘がある手前、織斑くんも気合いを入れて教科書を開いていた。

「では、授業を始める」

それから織斑先生による『IS基礎』の授業がはじまったのだが、開始10分ほどで、織斑くんは真っ青になっていた。どうやら織斑先生の説明が理解に及んでいない様子だ。

(織斑くん、大丈夫でしょうか)

忙しなく、参考書と黒板を見比べる織斑くんを心配そうに見守る。

その直後だ。横見していた私の額にチョークが飛んできたのは。

「よそ見をするな」

「いたッ」

第3話 英雄と騎士

昼休み。午前の授業が終わった俺は、幼馴染の篠ノ之箒と共に学食へやってきた。

そして適当に日替わり定食のチキン南蛮定食を頼み、身近な席に腰を下ろす。

「はあ〜」

腰をおろすなり、俺は不景気な溜息をついた。

溜息の理由は、初日から容赦なく始まった授業がさっぱり理解不能だったからだ。

「くそ、ISの講義ってわけわかんねえ……」

オルコットとの決闘に備え、すごんで受けてみたものの、専門用語の前に俺は早くも落第予備軍だった。ヴァシミールだの、スマートスキンのだの、リパルサーリフトだの、はつきり言ってISの専門用語は意味不明だ。なんだよ、位相力場絶対領域って。

「二夏、おまえ、事前学習してこなかったのか？」

と、俺の正面で幼馴染の箒がそばをすすする。表情は呆れ顔だ。

「一応、したけどよ……」

俺の適正が発覚してIS学園の入学が決定した日、自宅にISの参考書が送られてきた。これで勉強しておけて話だったみたいだったから、一応読みはしたんだけど、それでも午前の授業はチンプンカンプンだった。

「まあ、したっていつでもポテチ食いながら、パラパラと流し読みした程度だけだ」

ボソツとカミングアウトする俺を、箒が刺すような視線で見る。

相変わらず剣呑な雰囲気似合う女の子だ。きつと前世は日本刀だったに違いない。

「そういうおまえはどうなんだよ」

「私はおまえと違って、ちゃんとしてきたぞ」

「じゃあ、このニューラルリネージュってのについて教えてくれよ」

「うむ！ ！ここのかき揚げはうまいな！」

コイツ、誤魔化しやがった。はあ、俺たちは目クソ鼻クソなわけか……。

「というか、箒ってISに興味あったんだな。むしろ嫌っていると思ってたんだが」

実はこいつの一家、ISの所為で転居しなければいけなくなったのだ。そういう経緯があつて、箒はISを快く思っていない。そう思っていた俺は素朴な疑問を投げかけた。

「なんでIS学園に進学しようと思ったんだ？」

箒は俺と違って進学先を選べたはずだ。

興味のない場所に進学するって、どんな心境だったのだろうか。

「それは……お前がだな……」

言い難そうに視線を逸らす箒の頬が熱を持ったように赤くなる。

なんだろう。もしかして恥ずかしい理由でもあるのか。

「もしや入学願書を出し間違えたのか？」

「馬鹿、そんなはずなからう。——というか、私の入学理由なんて、どうでもいいだろ。そんなことより、あのイギリス女との決闘を考えた方がいいんじゃないのか」

「そりやそうだ」

箒の入学理由を聞いたところで、技術が向上するわけでも、勝算が上がるわけでもない。

「しかし、まいったな」

傍らに置いていた参考書をもう一度パラパラとめくる。エネルギーゲイン、ニューラルリンクージュ、マインドインターフェース。そこに並ぶ専門用語の羅列を見て、また溜息をつく。幸い、決闘までは七日間あるが、その七日間でこれを理解しきれれるのだろうか。

「なあ、箒、なんかいい手はないか？」

仕方ないなど、箒は腕を組んだ。

「では、千冬さんに指導を乞うのはどうだ？ あの人、世界大会の覇者だろ」

箒の提案に、俺は首を横に振った。

「俺もそう思って頼みに行っただけだよ、千冬姉、すげー人気者で

さ、昼休みとか空いている時間は常に誰かの質問に答えていたり、指導してたりしてるんだよ」

なにせ千冬姉は世界大会を制したIS操縦者——〈ブリコンヒルデ〉だからな。スキあらば指導やアドバイスを乞う生徒も多い。千冬姉自身も「生徒のためなら苦労は惜しまない」と公言しているから、誰も無碍にしないだろう。

「では、7日間、つきつきりで指導してもらうのは無理そうか」

「それにいくら弟とはいえ、俺だけを指導するってのは、教師の立場上よろしくないだろう」

俺の所為で「織斑先生は身内鬣貞だ」なんて言われるのは避けたい。

「では、どうする？ 独学で特訓するのか？」

「授業の手応えからして、独学だと厳しそうなんだよな……。やっぱり、教えてくれる人がいてくれたほうがいいだろう」

かといって、俺を推薦した女の子も、あのオルコットを敵に回したくないのか非協力的だ。

共に乗り込んだ船だったが、一緒に沈んでくれるつもりはないらしい。本当に場の空気で俺を推薦していたわけだ

「はあく、どっかにいいコーチ、いねえかなあ……ん？」

頬杖ついて食堂の女の子を物色していたら、赤い髪的女子生徒が目にと留まった。

男アンチのクラスメイトに堂々と反論した女子生徒——アリス・リデルだ。

「どうも。相席してもよろしいですか？」

俺たちの視線に気づいたリデルが、こちらの席にやってきた。

「ああ、いいぜ。箸もいいよな」

「ああ」

四人掛けのテーブルを独占していたので、俺たちは快く了承した。「では、失礼しますね」

そう言っただけでリデルは、持っていたかき揚げそばをテーブルに置き、箸の隣に腰かける。

「あ、篠ノ之さん、私と同じメニューですね」

「え、は、はい、そうですねッ！」

うお、さつきまで剣呑だった箒がなんだか緊張し出したぞ。

さては箒の奴、相変わらず人とのコミュニケーションが苦手なのか。よし、一肌ぬいでやるか。

「リデル、そいつ顔は怖いけど、中身はイイヤつなんだ。仲良くしてやってくれな」

「おいッ」

箒が睨んでくるが、俺は嫁入り前の父親よろしくへこへこした。

それがおかしかったのか、リデルがフツツと笑う。

「もちろんです。——篠ノ之さん、これからよろしくお願いしますね」

「あ、ああ。こちらこそ、よろしく頼む」

ややぎこちないものの、社交的なリデルのおかげで交流は良好のようだ。

それから俺たちは食事をしながら、他愛のない会話を始めた。

「どうですか、織斑くん、女の園に来た感想は」

「肩身がせまくてかなわないよ。変な女子生徒にも目をつけられるしな」

俺は脳裏にオーホホホツと高笑いするオルコットを思い浮かべた。

「そういえば、オルコットさんと決闘するんですけどね。勝てそうですか?」

「いや、はつきり言って、ほとんど勝てる気がしない」

強がっても仕方ないので、本音を吐露する。リデルは苦笑いだ。

「なら、受けなければよかったのに。勇敢と無謀は違いますよ?」

「まあな……」

リデルの云うことは正しい。負けが見えているなら、逃げた方が賢いに決まっている。負けたらきつと、ここぞとばかりに貶されるだろう。下手すりやこの学園でやっていけなくなる。

でも、あの時の俺には退けない理由があった。

「——でも、なんつうか、男だからって見下している連中を見返したかったんだ」

男性という理由だけで、人の価値を決めつけ、蔑視する彼女たちを、

俺は許せなかった。

だから、俺は見返したかったんだ。男だって、捨てたもんじやないぞって。

「なるほど。それでオルコットさんの挑戦を受けたのですか」

俺の動機を聞いても、リデルは嘲りもせず、同意するように頷いた。見下す女に一泡吹かせたい。なんて言えば、女性は怒りそうなものなのだが。

「私も自分の性別に託^{かこ}けて、幅を利かせている女性は好きじゃありません」

「そうなのか？」

「ええ。そういう女性を見ると、お尻を蹴っ飛ばしてやろうかと思えます。女性だからという理由だけで踏ん返り返っていられると、そうでない女性に対する心証まで悪くなりますから。純粋な気持ちで活躍されている方にはいい迷惑です」

うわ、わかるわ。俺も『ISに乗れる女性は偉い』って威張っている奴と、努力して優勝した千冬姉を「同じ女性」という理由で一括りにされたら、きっと黙っていられる自信がない。

「本来、尊ばれるべきはそういう人たちです。社会が吹聴した言葉に踊らされて〈裸の王様〉になっている人たちじゃありません」

「だよなッ！」

リデルの一言に胸が熱くなるのを感じた。箒も同意するようにうんうんと頷く。

同時に俺は強い確信を得た。彼女なら俺の力になってくれるかもしれない。

「なあ、リデル、よかったら俺に力を貸してくれないか？」

俺は万感の思いと期待を込め、彼女に協力を求めた。

リデルは頷く。

「ええ、私でよければ手を貸しますよ。男卑のうるさい人たちを黙らせてやりましょう」

承諾された瞬間、俺は打ち震える思いだった。

よし、なんだかも勝ったような気分だ。いや、実際には勝率が上

がった訳じゃないけど。

「ただし、代わりと言ってはなんですが」

なんだ、交換条件か？

「そのチキン南蛮を一切れ、もらってもいいですか？」

理不尽な条件を出されたらどうしようかと思っただが、全然そんなこととはなかった。

「おう、いいぜ。一切れといわず、どんどん食べ」

犬みたくジューつとチキン南蛮を眺めるリデルに、俺はチキン南蛮を大盤振る舞いした。

これで協力してもらえるなら、安いもんだ。たんと食べ。

「タルタルがとても美味しいです♡」

もぐもぐ口いっぱいにし、リデルは幸せそうにチキン南蛮を味わう。

俺は「そうかそうか」と肯きながら「こいつ餌付けできるんじゃないか」と思ったのは内緒だ。

「じゃあ、よろしく頼む。俺のことは一夏って呼んでくれ」

「わかりました、一夏。では、私はアリスと呼んでください」

こうして俺が頼もしい味方を手に入れたそのとき、校内放送が鳴った。

『二年一組、織斑一夏くん。至急、職員室まで来てください、繰り返します——』

放送者の声は山田先生だった。

放送内容は俺を呼び出すものだったが、はて、なんだろうか。



「専用機？」

昼休み、職員室。

校内放送で呼び出された一夏についていくと、織斑先生がそんな事を言った。

(アリス、専用機ってなんだ?)

(言葉の通りに解釈したらいいですよ)

一夏には端折って説明したが、専用機とは国家や機関から託された、その人物だけが使える特殊なISを指す。そんなISを一夏に提供するという話を織斑先生はしていた。

「おまえは極めて貴重な人材だ。そのデータを取るために専用機が受領されることになった」

一夏は男で初めてISを動かした人物。未知な部分も多い。そこで彼のデータを取りたいという要望はもつともな理由だ。

「それでどのような機体を受領されるので?」

自分が受け取る訳でもないのに、身を乗り出して訊く。

実は私はISオタクなのだ。専用機と聞くと、どうにもワクワクしてしまう性質タチなのである。

「予定では日本の第三世代型ということだ」

現在、ISは第二世代が実戦配備され、第三世代の研究が行われている。つまり彼には国家が威信をかけて開発した最新鋭機が受領されるというわけだ。それを聞いて、わたしのワクワクはピークに達した。

「で、武器は? 仕様は? カタログはないのですか?」

「落ち着け、毛穴が開いているぞ」

「あらやだ」

私は赤くなつた頬を覆えて下がる。あうあう、興奮し過ぎたようです。

織斑先生は『なぜおまえが、そんなに興奮しているんだ? おまえの専用機じゃないだろう』と言いたげな表情で、機体の仕様書を一夏に渡した。

「これがおまえの専用機だ」

「どれどれ」

一夏は渡された仕様書をめくって難しい顔をした。これは理解できている顔だ。

ISの勉強を始めてまだ半日。そんな彼にすれば専門用語だらけ

の仕様書の内容なんてちんぷんかんぷんなのだろう。

「いいですか、いいですか？」ワクワク

「お、おう？」

一夏から仕様書を受け取るなり、私はパラパラと捲りながら内容に目を通した。

「どれどれ。機体名は〈白式〉というのですか」

で、開発は第二国防技術研究所——通称〈倉持技研〉。製造は〈輝夜重工〉。

各部出力、センサー有効範囲、装甲強度、積載能力、どれも高水準であるけれど、取り立てて特筆する点はないかな。強いていうなら、推力が秀でていることぐらいだ。高機動モデルなのでしょうか。

（あとは武装ですが、——うん？）

武装の項目に目を通すが、その有り得ない仕様に眉をひそめる。

「あの、武装欄に何も記載されていないんですけど」

そう、武装の項目に目を通しても何も記載されていなかった。あるのは【未定】の文字だけ。

つまりこのISには武装——専門的な用語でいうとプリセット——がないということだ。

「もしかして、殴れと？」

「いや、武装はちゃんとする。ただ武装だけ外部発注していてな。本来は本機とアセンブリしてから受け取る予定だったのだが、急遽オルコットと決闘することになっただろ？」

「なるほど。決闘のために、受領の予定を前倒したから武器が未搭載だ」と

「そういうことだ」

それでも受領の前倒しは、大変ありがたかった。たとえ武器がなくても専用機があるなら、訓練機のレンタルを待つ必要もない。好きな時に好きなだけ訓練できる。稼働時間の少ない一夏にしてみれば、このメリットは大きい。

そこで私はふと思った。

「あ、もしかして織斑先生は一夏に勝って欲しくて、〈白式〉の受領を

前倒しに？」

「ばかもん、そんなわけあるか。『志ある者には、それ相応の教育環境を与えてやるべし』。それが私の教育理念だ。私はその理念に従っただけだ。そして、おまえには志すものがあるだろう？」

「はい」

一夏は強く頷く。確かに彼には「男の名誉を取り戻したい」という志がある。

だからこそ、私は彼に力を貸しているわけだ。密偵としての一環もあるけど。

「そういうことだ。身内が可愛くて、〈倉持技研〉に頭を下げたわけじゃない」

と、綺麗な足を組み替え、コーヒーカップを手に取る。そして一口。

「あの、織斑先生、そのコーヒー、私のです」

「あ、すみません」

織斑先生は二組の先生に謝りながら、コップを戻す。

らしくない失敗をする織斑先生に、私は『やっぱりそうなのか』なんて思った。

「なんだ、リデル。ニヤニヤと……」

「いえ、なんでもありませんよ？　ちなみに武装はどこに依頼を？」

『ヴァルキリー・アームズ』『デユノア』『輝夜重工』『ワルキユール・ウェポン』『ナイトソード・ブラックスミス』『ジョセスターフ』『上海飛甲装工業公司』『ヴェーラ・アスカロノフ』『エトセトラ、エトセトラ。ISの武器を製造しているメーカーはたくさんあるけど。』

「まあ、それはちよつと特殊なところに依頼していてな。ともかく、決闘までには届くよう催促しておくから心配するな。〈白式〉本体は、明日には学園に搬入されるだろう。なので、明日の放課後は空けておくように」

「はい、わかりました」

一夏は頷いた。



◆
放課後、一夏の協力を買って出た私は、夕暮れの教室で彼に基本知識を教えていた。

本来なら、早く実機に慣れさせるべき(時間もないし)なのだが、訓練機の予約がいっぱいでレンタルできなかったのだ。ISは世界に467機しか存在しないため、学園には生徒分のISが確保されていないのである。その不足分を補うため、高性能シミュレーターが100機ほど設置されているが、それも満員だった。

というわけで、今日は実機の訓練を諦め、教室でISの基礎知識を教えることにしたわけだ。

「ISは大きく分けると、動力部、駆動部、推進部、骨格、防御機構から構成されています。中でも動力部はISのエネルギーの生み出す重要な部位で、こここの出力数値がISの性能を左右すると言ってもいいです」

と、垂れていた横髪を耳掛けながら、隣の一夏にISの仕様書の読み方を解説する。

一夏は理解を示すように何度か相槌を打った。

「ふむふむ。じゃあ、この値がISの性能を比較する指標だと思えばいいんだな」

と、一夏が<白式>と訓練機のカタログを見比べる。それから『<白式>と<打鉄>では動力の出力が1.3倍ちがうから、1.3倍強いつてことか』とつぶやく。そして、ふと視線を感じて廊下側を見た。そこにはこちらをこっそり盗み見る人物がひとり——篠ノ之さんがいた。

その顔は、なんだか仲間に入れてほしそうだ。

「おい、箒。なにしてんだ?」

何気なくかけられた一言に、篠ノ之さんの肩がビクッと跳ねる。

「む? 私か? わ、私は、そのだな……——わ、忘れ物を取りにきたのだ!」

ついていた頬杖が思わずガクつとなる。

篠ノ之さんって、自分から輪に入るのが苦手なタイプのようですね……。

「実は体操着を忘れてな。持って帰って洗わなければならんだ」

「ふうん。でも、今日は体操着を使う授業なんてなかった気が……」

うん、今日は6時限目まで座学の授業だった。

「えー、使っただろうが、使わなかっただろうが、私は洗って常に清潔にしておきたいのだ！」

「お、おう、そうか」

怯む一夏を無視し、篠ノ之さんは机から体操着の袋をひったくって教室を出ていく。

その途中、何度も立ち止まり、こちらの様子を伺ってくる。それはもう声をかけろと言わんばかりに。

「箒って意外と潔癖症なんだな」

そして、一夏のこの鈍感ぶりである。

鈍感な男と不器用な女のやり取りに、やきもきさせられた私は声を張った。

「うーん、そういうえば、一夏をコーチするのにアシスタントが欲しいのですよね」

ワザとらしい私の言葉に、篠ノ之さんの足がビタッと止まる。

そして、おずおずと振り返りながら、控えめな口調で言った。

「そ、その、なんだ、こ、困っているのか？」

「ええ、私を補佐してくれる人が欲しいのですが、見つからなくて」

「そうか。なら、その、私が手を貸してやらんこともない、が？」

篠ノ之さんが上目づかいで、こちらの返答を待つ。

……簡単に釣れましたね。でも、私はさもありがたいように言った。

「あ、本当ですか。では、お願いします、篠ノ之さん。——一夏もいいですよ」

「ああ、アリスが必要だってんなら、そうしてくれ」

一夏の了承を受け、篠ノ之さんに「では、そういうことで」と視線を贈る。

彼女は嬉しそうにぎゅつと体操着の袋を抱きしめながら「うむ♡」と頷いた。それから、申し訳なそうな貌を作る。

(その、なんだ、すまないな)
(いいえ)

と、微笑半分、苦笑半分で返答したとき、再び教室のドアが開いた。現れたのは織斑先生と山田先生だ。織斑先生は手にダンボールを抱えながら教室に入ってきた。

「織斑先生に山田先生、どうしたんですか？」

「実は織斑くんは、これを渡しにきました」

山田先生が彼に手渡したのは、寮のカードキーだった。IS学園は全寮制なのである。

しかし、カードキーを受け取った一夏は不可解な顔をした。

「なんで、俺にこれを？ 俺って自宅からの通学だって聞いていましたけど」

「そうなのですか？」

「ほら、IS学園には女子寮しかないだろ。それで男の俺は自宅から通えって話だったんだけど」

一夏は事情を知っていいそうな織斑先生に視線をやった。

「そのことだが、身の安全を考慮した結果、女子寮に住んでもらうことになった」

それを聞くなり、一夏が「うげっ」という顔する。

まあ無理もない。彼にとって自宅は、この苦境を忘れられる唯一の場所だ。心のオアシスともいうべき場所さえ失なったのだから、イヤな顔のひとつもしたくなるだろう。

でも、セキュリティの観点からいえば、正しい判断だ。

彼を狙うなら、学園の影響が及ばない登下校中が最適だ。彼の入寮はそれを考慮しての判断だろう。

「じゃあ、早く家に帰って荷造りしねーと……」

がつくしと肩を落としながらも聞き分けよく——諦めよく——帰宅の準備を始める。

そんな一夏に、織斑先生が「その必要はない」と持っていたダンボール

ルを置いた。

「これは？」

「おまえの荷物だ。とりあえず、いまずぐ必要になりそうなものは詰め込んでおいた」

一夏は『準備がいいこと』とつぶやきながら、ダンボールの中身を確認した。

「えっと、着替えに生活用品、ケータイ充電器に、ケロタン——うん？
なんだこれ」

一夏はダンボールから何やら布らしき赤い物体を引きずり出だす。
出てきたそれは——女性用のパンティーだった。

それも大体部がシースルーの過激なやつ。両端は紐で、おしり部分はY字のタンガになっていた。大人向けのかなりセクシーなランジェリーだ。一夏の私物ってことはなさそうですが

「こ、これは私のだ」

あまりに過激な下着に、一同が真っ赤になる中、織斑先生がそれをひったくった。

そして真っ赤になりながら、赤いパンティーをスーツのポケットにねじ込む。

「あの、千冬さんって意外と——」

「言うな、なにも言うな」

私たちにそう釘を刺し、彼女はひたすら羞恥に頬を赤めて瞑目する。

そんな彼女をダンボールのカエルがいつまでもゲコゲコと笑っていた。



◆
千冬パンティー騒動のあと、私たちは特訓スケジュールについて話し合った。

それにあたって、篠ノ之さんが「ぜひ剣道の稽古をメニューに」と

提案してきたので、私は一日一時間だけ取り入れることにした。剣道は集中力や勝負勘を養える。取り入れておいて損はないだろうという判断だ。

大まかなスケジュールが組めたあとは、解散の流れとなった。

「ふう〜」

一夏たちと別れ、入寮を終えた私は、自室のベッドに飛び込んだ。

部屋はパンフレットで見たとおり、高級ホテルのスイートルームに勝るにも劣らない部屋模様だ。バスルームにはシャワーしかついていない——入浴は共同浴場を使うらしい——が不満はない。一夏は大変不満そうだったが。

間取りは二人部屋だが、私に同居人は居ないそうだ。

でも、今後の都合で現れるかもしれないと、入寮した時、山田先生が言っていた。

「ああくフカフカして気持ちいい〜。このまま寝たいですう〜」

でも、まだやらなければならない事が残っている。ロリーナに定時報告を入れないと。

私は睡魔を跳ね除け、持ち込んだ荷物の中からノートPCを取り出す。そして文面を作成。特に報告する事もないので、内容は簡素なものだ。作成したテキストを暗号化して送信。これで本当に今日の仕事はおしまい。おつかれさまでした、私。

その時、ノックの音が部屋に響いた。

（一体誰でしょう）

私は急いでPCの電源を落とし、『どうぞ』と応対する。入ってきた人物は、見知らぬ女性だ。

髪は艶やかなブラックのショート。ルージュの唇が色っぽく、服装は紺色のフォーマルスーツを着ていた。どうやら彼女は学園の教師のようだ。

「へえ、あなたが例の。思っていたより可愛い娘ね」

その女性は部屋に入り込み、ベッドの上に座った。

そしてタイトスカートから伸びたすらっと長い脚を組む。

「私の事はロリーナから聞いてるでしょ?」

その言葉に私はピンときた。

実はIS学園に潜伏している組織の人間は私だけじゃない。『教師側』にもう一人、サポート役として情報部から工作員が派遣されているのだ。目の前の美女が、私をサポートしてくれる『教師側』の人間であるらしい。

「ええ、話だけなら。でも、会うのは初めてですよね？」

「そうね。同じ傘下で活動してはいるんだけど。で、あなた名前は？」

「アリス・リデルです」

「私はエイダよ。よろしくね」

そう名乗り、持ち込んだ缶ビールをプシュッと空け、旨そうに喉を鳴らす。

「なんだかガサツそうな女性ですね。こんなので諜報員エージェントなんて勤まるのでしょうか。」

「あ、今『こんなエージェントで大丈夫か？』って思ったでしょ？ 大丈夫よ。こう見えて、イギリスの軍事情報局第6部の出身だから」

イギリスの軍事情報局第6部。秘密諜報局Secret Intelligence Serviceとも言われる英国の対外諜報組織だ。——と言われてもピンとこないだろう。でもM I 6 と言えば、馴染みがあるのではないだろうか。

そう。M I 6は映画『007』で有名な諜報員『ジェームズ・ボンド』が所属していた組織だ。

「ところで、あなたの名前に『リデル』ってついているけど、それってもしかして、もしかするの？」

「ええ、その、もしかして、です」

私のリデルという姓。欧米では珍しくないが、私たちの間では特別な意味を持つ。

これは組織内で『代役が存在しない人材』に対して付けられる特別な識別子コードネームなのだ。私以外には、ロリーナがこのコードネームを持つ。「じゃあ、あなたが噂に聞くヘルイスの子供たちなの。まあ、これからよろしくね」

「はい、こちらこそ、よろしくお願いします」

こうして互いの自己紹介が終わったところで、私はふとある企みを

思い付いた。

せつかく教師側に職員がいるのだから、ちよつと利用させてもらおうか。

「ねえ、エイダ。さつそくで悪いのですが、調べてほしいことがあります」

「ん？ なに？ もしかしてオルコットのこと？」

「それもなのですが、この学園に在学している生徒の名簿が欲しいです。それもI Sの適正値、稼働時間、戦闘傾向といった情報が記載されているものが」

「ん、手に入らなくもないけど、何に使うの？」

ちよつとね、と悪い顔をする。

そんな私の顔がお気に召したのか、エイダは了承するように肯いた。

「了解。用意してあげるわ」

そう約束してくれたところで、エイダは立ち上がった。

「さて顔合わせも終わったし、お酒もなくなったから、行くわ。名簿の件、任しておいて」

「よろしくお願いします」

そう言つてエイダは空のビール缶を片手に、ふらふらと部屋を出て行った。

これでようやく一息つけそうですね。

第4話 英雄の武器

二日目の授業が終わった放課後。私と一夏は学園の物資搬入用ドックにやってきた。

目的は今日搬入される一夏の専用機〈白式〉を受け取るためだ。

現在、この場所には受取人の一夏と、確認のための織斑先生と山田先生、そして、私と篠ノ之さんがいる。それと一夏と篠ノ之さんは気付いていないかもしれないが、眼鏡をかけた大人しそうな子が隅からこちらの様子を窺っていた。はて、誰でしょう。

「俺のISか。なんだか、ワクワクするな」

「その気持ち、わかりますよ」

一夏の場合は特例だけど、専用機の受領はIS操縦者にとって目標のひとつだ。自分の専用機があると操縦者としての株も上がる。私も自分の専用機〈赤騎士〉を受け取った時は興奮したものだ。

そうこうしていると、搬入ドックに大型トラックがやってきた。

「うむ、諸君、出迎えご苦労だ」

助手席から現れた女性は、白衣にスクール水着（正確にはIS用のスーツだが）というなんとも痛々しい姿をしていた。胸の刺繍に『ヒカルノ』とあるので、それがおそらく名前なのだろうけど。

「ヒカルノ、無理を言ってますまないな」

「んにゃ、かまわんよ。他ならぬ千冬の頼みだからね」

「痛み入る」

千冬さんを名前で呼んでいるところを見ると、それなりに親しい仲のようだ。

歳も近いように見えるけど、どういう関係なのだろう。

「えっと、織斑先生は彼女とお知り合いで？」

「ああ、紹介しよう。彼女は倉持技研のIS開発を担当しているメカニカルチーフ、篝火ヒカルノ。私の高校時代の同級生だ」

「どうも、紹介に預かった篝火ヒカルノさね。現在独身、彼氏募集中だッ」

いうなり、篝火さんはぐっと親指を立て、ニカッと犬歯をのぞかせ

た。スクール水着に白衣という姿もあり、かなり珍妙な光景だ。彼氏
がいないのもなんだか領けてしまう。

「で、君が巷で騒がれている、ISを動かした千冬の弟くんかい？」

「え、あ、はい、そうです」

篝火さんはぬう〜つと一夏の顔を覗き込んだ。

「うん、こうしてみるとイイ男だね。どうだい？ 今夜お姉さんとい
いことしない？」

刹那、バシッつとただならない音が篝火さんの頭上で響いた。

その場にのた打ち回る篝火さんを、千冬さんが凄いい剣幕で睨み下
す。

「はは、冗談じゃないの。ホント、千冬は昔から冗談と物理攻撃が通じ
ないんだから」

「物理攻撃は余計だ。わかったら、さつきとく白式をよこせ」

「わかった。わかったから、その怖い顔やめて」

出席簿の角を研磨する織斑先生に、篝火さんは恐々の様子で下され
たコンテナに手を翳す。

それによつて指紋認証と思わしき認証が行われ、ついにコンテナの
ハッチが開いた。

圧縮空気が抜け、あたりに煙が立ち込める。

晴れた視界の先に“白”がいた。

新雪のような白。ウェディングドレスのような白。美しいまでの
白い機体がそこにあった。

ISは従来のパワードスーツと一線を画した形状を持つ。また、そ
の性能ゆえ神聖視されることも珍しくない。ISの一号機く白騎士
くがまさにその証左だ。目の前に現れたく白式くは、まさにそんな
美術品白騎士を彷彿とさせる機体だった。中世の甲冑を彷彿させるフォル
ムと、女性的な曲線美を持つその機体は、観賞用としても耐えうる美
しさを讃えている。

「織斑、これがおまえの専用機く白式くだ」

一夏は導かれるように白式の前に立った。

そして、どうでもいいけど、さつきから鼻がムズムズする。へ、へ、

へ……

「〈白式〉、これが俺の専用」「へぶちツ」「機——つておい、アリス！
いい雰囲気だったのに、くしゃみやみとかするなよ！　なんか、いろいろと台無しになったじゃないか！」

「すみません。圧縮空気で舞いあがったダストの所為で鼻がムズムズ
していて……」

「くそつ、納得いかねえ、やりなおさせてくれ！」

え？　もしかしてこのシーンをやり直すのですか。それはさすがに面倒というか、手間というか……。仮にやり直しても最初ほどの感動は得られないと思いますけど。

「織斑、残念だが、やり直しはなしだ。面倒くさい」

「私も千冬に賛成かにやー。コンテナに戻すの大変だし」

「一夏、あきらめろ」

どうやら、みんな同じ意見らしくTAKE2はなさそうだった。

「そ、そんな……。主人公と主役機が邂逅する大事な場面だったのに……」

がつくしと項垂れ、両手両膝をつく一夏。メタいですね。

そんな一夏を、陰からずつと見ていた眼鏡の女の子は、なぜかクスクスと笑っていた。本当に誰なんでしょう、あの水色髪の女の子。

「ともかく、〈白式〉はしかと受け取った」

まだいじける一夏を余所に、織斑先生が篝火さんの出した書類にサインする。

そのあと〈白式〉は山田先生の手でアリーナに運ばれた。〈白式〉を使って訓練を行うためだ。

「ところで、武装の方は？」

〈白式〉が運ばれていく傍らで、私は懸念していた事案を口にした。

「いや、まだ完成していないそうさ。急かしてはいるんだが、なかなか」

「依頼した相手が相手だしねえ」

織斑先生と篝火さんは二人揃って渋い顔をする。

二人にそんな顔をさせるなんて、一体どこに開発を依頼したのだろうか。

「ともかく、試合には間に合わせる。最悪、私が押しかけてでも完成させるから安心しろ」

「お願いします」

弟の晴れ舞台でもあるのだし、お姉さんにはがんばってもらおう。

「それと武器の仕様書だけ届いたので、おまえに渡しておく」

「わたしに?」

「あいつはISに触れて日が浅い。より専門的な知識を必要とされるこの仕様内容をあいつが理解できるか危うい。となれば、この武器の有用性とリスクにも気づけないだろう。それではこの書類も——《雪片式型》も宝の持ち腐れだ」

「私ならこの武装のリスクを加味し、有効な運用ができる?」

「ああ」

買い被りすぎだ。私は入試テストで手を抜いた。IS適正だつて【C+】だ。普通に考慮すれば、織斑先生の評価は過大評価だといえる。けれど、織斑先生は確信めいた口調で言った。

「自分の弟を自讃するわけじゃないが、あいつは良くも悪くも『可能性』の固まりだ。クラスには一夏を否定的にみる者も多いが、物事の本質を見抜ける人間は一夏に何かを見出している」

「私がそうだと?」

千冬さんは小さく頷いた。

「でなければ、オルコットたちを敵に回して、一夏の味方についてなどないだろう。あいつに手を貸したのは、一夏にリスク以上の価値を見出したからではないのか?」

彼女の指摘は正鵠を射ていた。

私の思惑をそこまで見抜いていた織斑先生に、驚きつつも、怖くなる。恐ろしい観察眼だ。

「おまえは年齢不相応な達観した考え方を持っているようだな。それをどこで養ったかは知らんが、おまえならこの《雪片式型》の可能性も見極められるのではないかと思っている」

「まあ、やれるだけのことはやってみます」

正直ここまで期待されると重圧だけど、期待に副えるよう頑張らせてもらおう。

私は武装の仕様書を受け取り、速読に近い速度で目を通した。そして驚愕する。

「これほんとうですか？」

「ああ、それが《雪片式型》の能力だ」

もし仕様書の内容が本当なら、オルコットさんが相手でも勝機が見えてくる。だが注意深く読み解くと、一夏の敗北も強くイメージできた。《雪片式型》とはそんな武器だ。

「はやくも、そいつのリスクと有用性を見出したようだな」

織斑先生の満足そうな顔に、私は頷いた。

「立场上、私はアイツを鼻肩にできない。私に代わって弟を頼む」

「はい、頼まりました」

♡

♣

♠

＜白式＞の受け取りが終わったあと、私と一夏はさっそくISのアリーナにやってきた。

オルコットさんと戦うには、とにもかくにもISに慣れることだ。

オルコットさんはおそらく100時間以上ISに乗っている。対する一夏はトータルで2時間だと言っていた。この絶望的な差を埋めるには、一に訓練、二に訓練、三四がなくて、五に訓練だ。

「へえ、ここがISのアリーナか」

中世ヨーロッパのコロッセオを思わせるISアリーナを見渡しながら、一夏が言う。

ISアリーナとは言葉通りだ。ISが試合・模擬戦を行う競技場。それがISアリーナ。大きさは陸上競技場と同じぐらい。試合時には特殊なシールドが展開され、観客に危害が及ばないよう工夫されている。IS学園にはそれが計7つ存在している。

「では、さっそくISSの特訓を始めましょうか」

「いいのか？ 知識の無いままいきなり実機の訓練なんて」

と、言ったのは篠ノ之さんだ。

ISSは強力な武器にも成り得る。それを生半可な知識で扱えば事故に繋がりがかねない。そうならないためにも、まず操縦者がISSについて理解しておく必要がある。——とは織斑先生の弁だが、残り6日で彼を代表候補生と対等に戦わせるには、とにかく時間が足りない。「理論や理屈も大事ですが、それを丁寧に教えていては、時間が足りません。一夏には酷だと思えますが、〃習うより慣れろ〃の精神でやってもらいます。いいですね、一夏」

「おう、もともとそのつもりだ。俺は頭より身体を使う方が得意なんだ」

「よろしい。——では、訓練を始めましょう」

私は<白式>を撫でた。それを合図に一夏が<白式>をよじ登り、身を預ける。

同時にセンサーがそれを検知して、内部機構が彼にフィットした。

「乗り込めたようですね。次はイニシャライズです」

「イニシャライズってなんだ？」

「パーソナライズしてフィッティングすることです」

「ぱーそならいず……？ ふいつていんぐ……？」

ぼんつと一夏の頭がショートした。

うくん、今日授業で習ったことなんだけどなあ……。

「では、篠ノ之さん、説明してあげてください」

「ぱーそならいず……？ ふいつていんぐ……？」

ぼんと篠ノ之さんの頭がショートした。あ、あなたもですか……。

仕方ないので、私はふたりに初期設定について説明を行った。

「簡潔に説明しますね。まずパーソナライズとは、操縦者の情報をISSに認識させることをいいます。そしてパーソナライズで得た情報を基にISSを最適化することがフィッティングです。この二つを行うことで、ISSを自分の身体みたいに扱えるのです」

ISSを構成する骨格やアクチュエーター、その制御システムは人の

構造を模している。そこで操縦者のフィジカルデータをスキャンし、IS側に渡してやることで、より自分あったシステムを構築できるわけだ。

「ああ、そういうえば入学試験の時にやったな、そんなこと」

「なら話は早いです。まずコンソールを開いて、初期設定を選択してください。そこにイニシャライズの項目があると思うので、それを選択すれば、開始されます」

「おう。これだな」

「メッセージ：〈白式〉のイニシャライズを開始しますか？ YES
／NO 〉

一夏がYESを選択すると、周囲に多数の投影型ウィンドウが現れた。

その中を無数のデータが走っていく。あとはISが自動で最適化してくれるのを待つだけだ。

「これってどれくらいかかるんだ」

「機種にもよりますが、数分でしよう」

「そうか。ところでアリスはISの稼働時間どれくらいなんだ？」

「うーん、30時間ぐらいでしょうか」

実際は1800時間ぐらいになると思うけど、正直には答ええない。

私は密偵としてこの学園に潜入しているので、周囲を欺くためプロフィールを改ざんしてある。

「へえ、手慣れているからもっと長いのかと思ったぜ」

「でも、教えるのは得意ですから安心してください」

「おう、頼りにしてるぜ、アリス」

そういつて一夏は信頼を寄せるように、拳を突き出した。私は『任せてください』とその拳に自分の拳を軽くぶつける。交わした拳に連帯感が生まれたような気がした。

（悪くないですね、こーいいの）

同年代の男の子とこーいいうことをするのは、生まれて初めてのことだった。

新鮮な経験ができて、なんだかちよつと嬉しい気持ちになる。が――

(…………….) ジー

背後のちくちくとした視線が私の背中をムズ痒くした。

「いえ、その、違いますよ?」

ちよつと浮かれていた自分を隠すように、交わした拳を背中に隠す。

いえ、なにもやましいことはしていませんけどね。

「私は何も言っていないぞ?」

そうなんですけど、怪しむような目は私に何かを訴えていて……。私に特別な感情はないけれど、篠ノ之さんに怪しまれていると、なんだかとても気まずい。

(速くフィッティング終わらないかな……。)

片時も視線を外さない篠ノ之さんに、私は先から嫌な汗をかきつばなしだ。

あとで体育館の裏とか、屋上とかに呼ばれないですよ? 少女マンガみたいにな。

「お、アリス、フィッティングが終わったみたいだぞ」

「あ、わかりました」

彼の報告を聞くなり、私は<白式>に飛びついた。

「では、次の作業です。ISを起動し終えたら、まず動力の切り替えを行います。今ISはAPU——すなわち補助動力で動いています。これでは本来の力を発揮できないので、動力源をAPUからジェネレーターに切り替える必要があります」

「メイン動力をジェネレーターつてのに切り替えるんだな。OK」

一夏は覚束ない手付きながらも、コンソールを呼び出す。

それから<PowerUnit>という項目を選び、主動力をAPUからジェネレーターに切り替えた。

「ん? アリス、ジェネレーターの項目にいろいろ設定があるんだが」「GPL——ジェネレーターの出力設定ですね。それは水道の蛇口だと思ってください。捻ればたくさんの水が出る。閉じれば水は出ない。用途と状況に応じて調整します。今は戦闘をするわけじゃない

ので、巡航モードに設定しておいてください」

「了解、巡航モードだな」
クルーズ

一夏はコンソールを開き、出力レベルを待機モードから巡航モードに変更する。

するとAPUとは比べものにならない電力が供給され、〈白式〉にパワーが漲った。

「できたみたいですね。では、まず歩行して感触を確かめてみましょう」

「うっし」

一夏はISを装着した状態で歩行を開始した。そして徐々に歩く速度を上げていき、歩行から走行に移行していく。〈白式〉は問題なく彼のモノになっているようだった。

「おお、すげーな。全然、違和感がないぜ、まるで自分の身体みたいだ」
「フィッティングが正常に完了した証拠ですね。では、今度はついに飛行テストです。おそらくこれがISの基本操縦の中で一番の難所です」

「よしきた。で、どうすればいいんだ?」

「ここを使います」

一夏の質問に、私は自分のこめかみを突っ突いた。

「え、頭?」

「ええそうです。あなたの頭部に装着されているヘッドギアは〈イメージ・インターフェイス〉と呼ばれる装置です。それは操縦者の脳波パターンを読み取り、ISに伝えることができます」

意外と呑み込みの速い一夏は理解したように頷いた。

「つまり空を飛ぶイメージを思い浮かべたらいいんだな?」

「その通りです」

さらに、この〈イメージ・インターフェイス〉を用いれば、武装の展開や各部装置もこれで操作できる。熟練したIS操縦者はこの〈イメージ・インターフェイス〉を介してISを操縦する。

「まず心を穏やかにしてください。そうですね、最初はイメージし易いよう目を瞑るのがいいかと思います。自分の前方に角錐を展開す

るイメージを思い浮かべてください」

「難しいな……。やってみる」

難色を示しながらも、一夏は目を瞑った。

私と篠ノ之さんも、彼のイメージを妨げないよう口を嚙む。

しばらくして、＜白式＞の推進器がポツポツと火を噴き始めた。

徐々に浮き上がる＜白式＞。やがて完全に火が入ったスラスタ
は彼を遥か上空へと打ち上げた。

「きゃっー」「うわっー！」

その衝撃でめくれ上がるスカートを咄嗟に押さえたが、たぶん丸見えだっただろう。というのも、私は篠ノ之さんの白いシヨーツをぼつちり目撃したから。たぶん、私もハートの柄物をさらけ出していたに違いない。

でも、一夏に見られたという心配はなさそうだった。彼はとつくと遥か上空まで上昇していた。

『うおお、このッ』

悪戦苦闘しながら機体を制御する彼は、左右によるよると安定しない飛行を続ける。

けれど、それも最初だけで、5分すれば安定した慣熟飛行を行えるまでに至っていた。

「さすが、ブリュンヒルデの弟」

という褒め方はよくないかもしれないが、彼の才覚は目を見張るものがあった。

本来、一日は必要とする飛行イメージを五分たらずでモノにしてしまおうとは、幸先がいい。

しかも遊覧飛行を楽しむ余裕まであるらしく、彼はとても楽しげだった。

『ははははッ、アリス、これ楽しいな』

そんな一夏に、苦笑をもらしたのは篠ノ之さんだ。

「まったくいい歳をして、あのはしやぎようはないだろう」

「いいじゃないですか、楽しそうで」

男はいつまでたっても子供だというし。私はそういう人、嫌いじゃ

ないです。

「童心、忘れべからず、か。——ん？」

篠ノ之さんがそう言った時、子供のようににはしゃぐ一夏がおかしな飛行を見せた。

まるで木枯らしに舞う枯葉のような挙動は、飛行制御を誤った時に起きる蛇行飛行だ。

『あっ』

「うわああーッ！」

すっかり乗り熟した気になっていた一夏は、その油断から制御ミスを起こして墜落していった。

どーんと派手な音を立てて、アリーナの土煙が宙を舞う。

視界が開けた先に、耕された土塊と寝そべる一夏が見えた。

『やれやれ』

私と篠ノ之さんは顔を見合わせ、一夏の許に向かった。

「大丈夫ですか？」

「し、死ぬかとおもった……」

不時着した飛行機のように地面を抉った一夏はダラダラと冷や汗をかいていた。

まあ、ISの保護機能が無ければ無事じゃ済まなかっただろうしね。気を失っていないだけ、肝が据わっているといえるだろう。墜落時にふらつと気を失ってしまう操縦者も多い。もっと酷いケースだと、墜落がトラウマとなって飛べなくなる場合もある。

「油断大敵ですよ。常に神経をすり減らす気持ちで操縦してください」

「お、おう、肝に銘じておく」

バクバクと跳ねる心臓を押さえながら忠告を噛みしめる。

その直後、〈白式〉の警戒システムがアラートを鳴らした。

↑——警報：照準レーダー波を受けています——↓

それは敵からのロックオンを告げるものだった。つまり誰かがこちらに銃を向けている。

驚く一同の許に見知らぬISやってきた。

蒼い装甲。フィン状のユニットを装着した非固定浮遊部位^{アンロックユニット}。マニピュレーターには近未来的なスナイパーライフル。現れたのは対戦者のセシリア・オルコットさんだ。しかも、そろそろと取り巻きらしき人まで連れて。

「なんの用だよ、オルコット」

一夏は機体を起こしながら、オルコットさんを睨んだ。

「専用機が与えられたという噂を聞きましたので、敵状視察に」

優雅に金髪を弾くオルコットさんに、私は内心で苦笑を洩らした。

堂々と敵の前に現れる偵察がどこにいるだろうか。彼女が煽りに来たのは明白だ。

その証拠に、彼女は気に障る口調でこう言った。

「ですが、その必要はなかったかもしれないわね、フフ。そんな操縦でわたくしと勝負になるのかしらん？」

悔しいけど、ならないだろうなあと思う。アラートの際、動かなかった事を鑑みれば、彼はまだ戦えるレベルじゃない。わざわざ目視可能距離でリーダー照準を使ったのは、彼の技量を見定めるためだろう。

一夏も自覚があるのか、何も言い返さなかった。ただ、ぎゅつと拳を握るだけだ。

それをいいことに、周りの取り巻きの女性が良いように彼を囓り立てた。

「織斑くん、今の内に辞退した方がいと思うよ〜?」「うんうん、セシリアってホント強いんだから、勝てっこないよ」「男は大人しく女に傳いなければいいんだって」

彼の思い上がりを正すように、彼女たちは口々にそう言う。

さすがに言いわれっぱなしは癪なので、私は反撃に転じた。

「確かにいまは無理でしょう。でも六日後、オルコットさんを倒させてみせます」

「え?」

ノーマークだった私からの援護射撃に周囲がやや驚き気味になる。しかし、それも束の間のこと、直ぐに「誰こいつ?」という具合

の表情を作る。中には一夏に味方する私を『もしかして、織斑くんが好きなのかな?』『やだー』と笑う者ものいた。そんな彼女たちを代表するように、生徒の一人が私に言う。

「ねえ、キミ、本気で言っているの?」

「はい、私は本気です」

怯まない私に、その生徒が「ムツ」と面白くなさそうな顔をした。

「じゃあさ、そこまで言って、もしセシリアが勝ったらさ、あなた、裸で——」

きつと彼女は私に“負けたら裸で踊れ”とでも要求するつもりだったのだろう。

だが、彼女の提案は思わぬところから拒否された。

「やめてくださいませんか?」

そういつたオルコットさんは、軽蔑の表情をその生徒に向けた。

「あなた、自分で戦いもせずに、なに勝手な提案をしてらっしゃいますの。彼女が気に入らないのなら、自分で負かしなさいな。わたくしはあなたの為に戦う気など毛頭ありませんわよ」

「え?」

まさか味方に批難されるなんて思っていなかったのだろう、その生徒は面を喰らっていた。

こちらとしても意外だったが、丁度いいので私はその生徒に好戦的な視線をくれてやる。

「ですって。どうします? 受けて立ちますよ」

劣等生の仮面を外す私に、その生徒は何もいわずオルコットさんの後ろに隠れた。

「——腰抜けめ」

と、罵る篠ノ之さんに苦笑する私を、オルコットさんが見据える。

「貴女は確かアリス・リデル、だったかしら」

「栄えあるイギリスの代表候補生に名前を覚えてもらえるなんて光栄ですね」

「ええ、あなたのその赤い髪、実は気に入っておりますの。その情熱的な色、素敵だと思いますわ。——どうかしら、そんな女々しい男など

捨てて、わたくしの許にいらっしやらない？ 愛でて差し上げますわよ？」

たぶんいま、私はすごく意外そうな顔をしていると思う。

「だけど、髪を褒められた程度で心変わりするほど、私はちよろくない。」

「結構です。私は走狗いぬですが、くそファツキンつたれた貴族ノーブルに振るうしつぽは持ち合わせていません」

これから私は一夏と二人三脚で歩んでいかなければならない。

互いの信頼関係が大事だから、ここで自分が誰の味方なのか、はつきりさせておく。

私が中指を突き立てるなり、オルコットさんは顔を真っ赤にした。

「フアフアフア、キ!? なんて言葉づかいをしますの、貴女！ この女王陛下より一角獣の紋章を賜った由緒正しきオルコット家のわたくしに、なんたる暴言！——天へ唾棄するに等しい行為ですわよ！」

「生憎、私はサタニストでしてね。神も、仏も、お偉い貴族さまも敬わないのです」

「キーツ——わかりましたわっ！ わたくしの寵を無下にしたこと、後悔させてあげますッ！」

「それはこちらのセリフです。あなたのビックベン級のプライド、押し折ってあげますから」

「いいでしょう。わたくしがクラス代表になった暁には、貴女を小間使いとして扱き使ってあげますから、覚悟してらっしやい！」

顔を真っ赤にして、オルコットさんは自らの専用機を綺麗に180度旋回させる。無反動ゼロリアクトターン旋回だ。

その際に靡いたクリーム色の金髪はとても綺麗だったが、表情は「切り裂きジャック」も逃げ出す形相だったに違いない。

そんなオルコットさんのあとを他の生徒たちがぞろぞろついていく。

ようやく邪魔者が居なくなるところで、私は訓練を再開しようとした。

「さてと、訓練の続きを——って一夏、何を笑っているのです？」

「いや、スカつとしたつていうか、なんていうか」

「もう、笑っていないで訓練しますよ。あなたが負けたら、私はオルコットさんの小間使いにされるのですからね」

煽った私も悪いけど、一夏には何がなんでも勝ってもらわないと。

「わかっているって。俺も負けたらこの学園でやっていける気がしないからな」

「よろしい」

もうお互い引けないところもまできた。私と一夏は運命共同体だ。負ければ、お互いいろんな物を失うだろう。私は訓練に気合いを込める事にした。

第5話 第一の矢《ファーストアロー》

第5話 第一の矢《ファーストアロー》

「気に入りませんッ、気に入りませんッ、気に入りませんわッ！」

第二アリーナ。自らの専用機を展開したセシリアは、仮想上の的に向かつて引き金を引いた。

近未来的な造形をしたライフルから迸る青い閃光が、的確に仮想的を次々射抜く。

100、100、100。ややしてARのスコアボードにフルスコアとくCongratulationの文字が浮かんだ。

「ふんッ」

文句なしの最高スコアであったが、セシリアは苛立ちを吐き出すように鼻を鳴らした。

普段なら喜びこそしないが自慢げに胸を張るところだ。しかし、心中に居座るあの赤い少女の所為で、どうにも気分が晴れない。

「まったく何様なのかしら。わたくしのことを、クソ貴族だなんてフェア○キンノール……」

このセシリア・オルコットの寵愛を無下にし、あまつやあの言葉使い。

生まれも育ちも上流階級のセシリアにとって、あんな暴言を吐かれたのは生まれて始めてだった。

侮辱。侮辱である。あの場で組み伏せてもよかったが、それではエレガントじゃない。自分は女王陛下より一角獣の紋章を賜った高貴な人間なのだから、それ相応な手段で自分との違いを教えてやるべきだ。

「ふふふッ。わたくしが勝ち、クラス代表になった暁には……」

あえて、あの少女を自分の召使いにしよう。可愛いフリフリのメイド服を着せて、自分の半歩後ろを歩かせるのだ。そして、これでもかと厭味ったらしく小突きまわしてやる。

「見てらっしゃい、アリス・リデル」

再び、ライフルを構えて発砲する。

その一撃は、自らの勝利を暗喩するように、ターゲットのド真ん中を打ち抜いた。

「わたくしを怒らせたこと、後悔させてさしあげますわ!」

そしてぼつちりと決めポーズを取ったところで、セシリアの許に一人の生徒がやってきた。

「ねえ、あなた、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットよね」

話しかけてきたのは、セミロングの生徒だ。

見たところ、顔つきは日本人のようで、日本製の第二世代型IS<打鉄>を装備していた。

「ええ、そうですが、なにか?」

「私は二年の藤山陽子。よかったら、私と模擬戦してもらえないかな」

上級生の申し出に、セシリアは口に出さず『またか』と思った。

実はここ数日よく模擬戦を申し込まれるのだ。彼女で3人目になる。自分の専用機が原因なのだろうけれど、セシリアは乗る気がしなかった。彼女が搭乗している訓練機<打鉄>は第二世代型。自分の第三世代型より旧式だ。そんな機種と戦っても得られる成果は少ない。けれど――

(相手は二年生ですし)

機体性能で劣れど一日の長があるぶん、歯ごたえがあるかもしれない。

それを理由に、セシリアは二年の藤山陽子との模擬戦を受けることにした。

「わかりましたわ。このセシリア・オルコット、貴女の申し込みを受け入れます」

セシリアはジェネレーター出力を上げ、臨戦態勢に移った。

倣って藤山も借りてきた訓練機の動力に火を入れる。

「では、いきますわよー!」

「うん!」

二機のISは上昇して戦場を上空へと移す。その後、セシリアと藤山の模擬戦が始まった。

結果からいうと、模擬戦はセシリアの勝利で終わった。

二年生ということもあり、藤山の操縦技術には目を見張るものがあったものの、そこはイギリス代表候補生。卓越した操縦技術を駆使し、セシリアは試合を優位に進めていった。

これから経験を積み、優秀な操縦者に成長するだろう。そうアドバイスしたセシリアに、藤山は『イギリスの代表候補生にそんなことを言ってもらえるなんて光栄だね』と嬉しそうに答えた。

「模擬戦してくれてありがとうね」

「いえ、こちらこそ」

「じゃあ、私はこれで」

セシリアに頭を下げ、藤山はピット入口へと向かっていった。そしてピットに入り、レンタルしていた訓練機を返却用ハンガーにかける。それからセシリア戦で得た戦闘データを抜き取り、それを大事に抱えながら人気のない通路の一角に向かう。

きよろきよろと辺りを見渡したあと、藤山は小さく声を発した。

「ねえ」

彼女の呼びかけに闇の奥から少女がやってくる。

赤い髪に、青い瞳。セシリアがメイドにすると宣言したアリス・リデルだ。

「どうでした?」

「はい、これ」

藤山は大事そうに抱えていたセシリアの戦闘データをアリスに渡す。

アリスは自前の端末にデータを写し、その中身を確認した。

「ふむ、問題ありませんね」

画面に表示された戦闘データに満足したアリスは、ポケットから茶封筒を取り出した。封筒には日本紙幣が四枚。金額にして四万円が同封されていた。これがセシリアと戦った彼女への報酬だ。

「ありがとう。——でも、よかったの？　模擬戦するだけで5万なんて」

模擬戦を一回熟すだけで五万の報酬（前金として一万払っている）。普通に考えれば羽振りが良すぎる話だ。懐疑的に思うのも無理はない——というのは世界情勢を知らない者の意見だ。

現在、世界は冷戦下にある。その状況下に於いて、軍事力の要であるISの情報はどの国家も喉から手が出るほど欲しい情報だ。セシリアの専用機の情報も、相手が相手なら5万どころかその十倍、百倍の値段で買ってもらえる。実は損をしているのは藤山の方だったりするのだが、そんなことを教えてやる必要も義理もない。

「多いと思うなら、返金してもらってもかまいませんが？」

「え、えっと、それは……」

貰った報酬を後ろに隠し、視線を泳がせる藤山にアリスはクスツと笑う。

「冗談です」

そう言ったアリスに、藤山はほつとしたように胸を撫で下した。

「じゃあ、私は行くね」

「はい、お疲れさまでした」

ひそひそと去っていく藤山を見送り、アリスは改めてセシリアの専用機の情報を確認した。

そこには専用機の各部出力と、武装に関する情報がぎっしり詰まっている。それもそのはず。過去セシリアが模擬戦を行った三人全て、アリスの差し金だったのだから。

「さてと、これでウカウカしていられなくなりましたよ、オルコツトさん」

どんな時代でも情報量とその正否が戦況を左右する。これだけ相手の情報があれば、戦力の不利も覆せるだろう。最早、セシリアという堅牢な城の外堀は埋めたに等しい。あとは内堀を埋め、城門を破つて突撃するだけ。しかもこちらには強力な攻城兵器がある。

誰もいない闇の中で、アリスはニヒルに笑った。

オルコットとの決闘を4日前に控えた夜。ISの訓練を終えた俺たちは、アリスに多目的室へ呼ばれた。なんでも対オルコット戦の作戦会議を開くという話だ。

俺と箒が多目的室に入ると、アリスはプロジェクターの準備をしているところだった。

「来ましたね。適当にかけてください」

「おう」「うむ」

俺と箒は並んで席につく。アリスは部屋にロックをかけ、さらにカーテンを広げた。それから俺たちに資料を配る。さらに長丁場に備え、ミネラルウォーターとお菓子を用意してくれた。

「では、これより対オルコット戦の作戦会議を始めます」

アリスはミネラルウォーターで口を潤し、説明を始めた。

「ここ最近、私はオルコットさんとその専用機について情報を集めていました」

「箒との稽古中にいなかったのはそのためか。——で、成果は？」

「有力な情報を手に入れました。まずオルコットさんの専用機について説明していきましょう」

そう言い、アリスはプロジェクターのスイッチを入れた。前方のスクリーンに映し出されたのは、蒼いISを装備したオルコットだ。画面端にはジェネレーター出力とスラスタ出力らしき数値が貼付されていた。

「これがオルコットさんの専用機、機体名は〈ブルー・ティアーズ〉。〈ナイトソード〉社が開発したイギリスの第三世代型です」

「第三世代、〈白式〉と同じか」

だとしたら性能は〈白式〉と同じぐらいだろうか。なんて思っていたら、箒が挙手した。

「話の途中すまないが、第三世代とはなんだ？ 第二世代の〈打鉄〉と何が違うのだ？」

「では、専用機の説明をする前に、ISの世代について説明していきましようか」

「む、無知ですまない……」

箒は申し訳なきように頬を赤くした。アリスは『いいんですよ』と笑む。

俺も二世代と三世代の区別がつかないので、この説明は大いに助かる。

「まず第一世代についてですが、これは一般的にISの第一号<白騎士>の技術を継承して開発されたISを指します。しかし、この第一世代は実験的な意味合いの強い世代で、一部の部隊を除き、ほとんど実用配備されませんでした」

「女性にしか扱えなかったからか？」

環境整備や軍規改正が進み、今でこそ女性軍人は珍しくないけど、10年前は全体の1%に満たなかったそうだ。そういった人材不足の理由から、実用配備が遅れたのだろうか。

「そうですね。それもあるでしょう。またISは未知の技術が多く、そのことから専用の武器や装備の開発も遅れていました。固くて速いだけのパワードスーツ。それが第一世代です。また既存兵器との互換性も悪く、そのため効果的な運用方法がなかなか確立せず、長く試行錯誤する期間が続きました」

「その末に始まったのが、二世代型の開発か？」

「その通りです、篠ノ之さん。二世代型ではISの技術解析が進んだことで、様々な武器や兵装を装備できるようになりました。それにより高い汎用性を有し、多様な状況に対応できます。ちなみに、それも二世代からの技術です」

アリスは俺の腕に装着された白いガントレットを指した。これは<白式>の待機状態だ。ISはポジェシヨナライズという処置を施すことで、こういう風に形態変化させてアクセサリーみたく携帯できる。これも二世代からの技術だという。

「しかし、あのISが防具ひとつに収まるなんて不思議だな」

箒が俺のガントレットを不思議そうに覗き込む。

いきなり、ぐっと顔（とおっぱい）が近づいてきて、俺は慌てた。

「ほ、箒、ち、近いつてッ」

「あつ、す、すまんッ」

ぼつと顔を赤くする箒に、俺もなんだか照れくさくなって俯く。

アリスはゴホンとわざとらしい咳をして、

「あの、進めてもいいですか?」

俺と箒は『ああ!』と声を揃えて頷いた。

「では、続けますね。——第二世代では多彩な武器を装備できるようになり、汎用性が向上しました。しかし、その総合的な火力は戦闘へりに毛が生えた程度なのです。ISは〈アラスカ条約〉でサイズが規定されていますので、積載できる装備の大きさに限界があるのです」

「確かに、人の大きさはじゃ戦艦のような大砲は積めないしな」

「だな」

俺は箒の意見に同意しながら、置いてあったチョコを口に放り込んだ。

「現在では30ミリ口径を越えると、ISのサイズでは効率的に運用できないと言われています。そこで各国はさらなる火力向上を図るため、ISの高出力ジェネレーターを活用した兵器——指向性エネルギー兵器^{D E}の装備を試みました」

「指向性エネルギー兵器とはなんだ?」

「エネルギーに指向性を与え、放出することで対象を破壊する兵器の総称です。代表的なものはレーザービームが有名でしょうか。オルコットさんの専用機にも、このレーザー兵器が装備されています」

アリスはプロジェクターを操作し、画像を切り替えた。

〈ブルー・ティアーズ〉に続いて出てきたのは、近未来的な形状を持つライフルだ。

「これがオルコットさんのレーザー兵器、名称は〈スターライトMkⅢ〉というそうです。さらに〈ブルー・ティアーズ〉には、強力なレーザービームを照射する独立した子機——ビットが四基、装備されています」

アリスがさらに映像を切り替える。ライフルに続いて映し出され

たのはフィン状の機器だ。

さらに下の小さい窓には、縦横無尽に飛び回るビットの動画がループ再生されていた。

「まるで動く砲台だな、こりゃ。——これに四方八方から狙われたら、ぞつとしない」

「これの対抗策についてはおおいおい説明しましょう。次です——」

その後、アリスは近接用のショートブレードが一本、ミサイルランチャーが二基あることを説明し、次いで操縦者——セシリア・オルコットの説明を開始した。

「二夏も知つての通り、彼女はイギリスの代表候補生です。数いる操縦者の中から選抜されたエリート中のエリート。実力は間違いなく屈指です。強敵と言つて間違いありません」

「ああ、それは理解しているつもりだ」

俺の姉は日本の元国家代表。千冬姉の強さ≡国家代表の強さと考えれば、必然的にその候補生たるセシリアがどれくらい強いのか検討がつく。

俺が侮っていないことを示すと、アリスは頷いて続けた。

「ですが、彼女もオールマイティーという訳じゃありません。——これを見てください」

アリスが再びプロジェクターを操作する。今度は三項目からなるグラフが現れた。

射撃、格闘、機動という項目が五段階評価で表されたそれは、オルコットの能力図のようだ。

「射撃S、格闘C、機動A。オルコットは射撃能力が高いのか？」

「はい。オルコットさんは非常に高い射撃能力を持っています。特に長距離射撃の腕前に関しては、プロも舌を巻くほどです。正直、天才と言つていいレベルでしょう」

「凄腕のスナイパーってわけか。俺、射撃訓練とか全然やってないけど大丈夫か？」

ここ数日やっている特訓といえば、エリアル・コンバット剣道と空中格闘に関する訓練ばかりだ。未だ実弾の一発すら撃っていない。そんな俺にこんな狙

撃手の相手なんてできるのだろうか。

すると、隣の箒が呆れたように頭を突っ突いてきた。

「何も相手の得意な場で戦う必要などないだろう」

そう言っつて、格闘の項目を指差す箒。アリスも『その通りです』と頷く。

「オルコットさんは射撃能力こそ特出していますが、格闘能力は平均的です。しかしあなたには剣道で培った人並み以上の剣術があります。そこに突き入るスキがあります」

「な、なるほど、そういうことか」

そんな単純なことに気づかなかったダメダメな俺に、箒が踏ん返り返った。

「だ、だから、私がこうやって剣術の指南をしてやっていたのだからッ！」

その理由は何となく後付け臭かったが、俺は『そうか、ありがとよ』と礼を言った。

「さて、大まかな説明はこれで終わりです。今度はこれらの情報を踏まえ、オルコットさんに勝つための作戦を説明していきます。そこで勝手ながら、この作戦に名前を付けさせて頂きました」

「そいつはいい。で、なんて名付けたんだ？」

アリスは身を乗り出し、会心の出来だというようにこう言った。

「名付けて〈トリプルアロー〉です」



トリプルアロー 三本の矢

アリスが『対オルコット戦』の作戦にそう名付けたのには、ふたつの理由があるそうだ。

ひとつは日本の武将、毛利元就の有名な逸話を肖つてだ。

昔、毛利元就は三人の子どものまえて『一本の矢は簡単に折れてしまうが、三本の矢は簡単に折れない。三人で協力することが大事だ』

と教えた。俺たちのチームも三人だったので『俺、箒、アリスが結束すれば、きつとイギリス代表候補生が相手でも簡単に負けたりしない！』という縁起を込めたらしい。

二つ目は、オルコットを倒すためには、三つの条件をクリアする必要があつたからだという。

それで、まずひとつ目の条件——『第一の矢』だが、それは情報戦でオルコットに勝利することだ。これはアリスがオルコットを偵察してくれたおかげで問題ない。

次にふたつ目の条件——『第二の矢』だが、これが問題だつた。何が問題かというところ、この『第二の矢』で大きな役割を果たすはずだつた<白式>の武器がまだ届かないのだ。

そう、オルコットとの試合を1時間後に控えた現在にも。

今日はあの作戦会議から既に4日が経っていた。だというのは、搭載予定だった武装は未だ届いておらず、そういう理由もあって、アリーナのピット内は物々しい雰囲気にも包まれていた。特に箒は落ち着きがなく、同じ場所を行ったり来たりしている。

「まったく、指定日に納入しないと、なんて業者だ、信用問題だろう！」

「5月に搬入予定だったものを今に繰り上げましたからね。無理なものいかもしれません。織斑先生も朝から開発者の許へ出向いているようですし、いまはそれを待ちましょう」

落ち着いた様子でそういったアリスは、先ほどから<白式>に端末を繋ぎ、調整作業に勤しんでいた。たぶん警戒システムの調整だろう。<ブルー・ティアーズ>の情報を入力しておくことで、戦いやすくしてくれているのだ。

「そういえば、朝の織斑先生、すごい形相でしたね」

と、千冬姉に代わってクラスを任された山田先生が言う。

「ああ、あれはまるで閻魔が顕現したようだった」

今朝、搬入係から『武器がまだ届いていない』と聞かされるなり、千冬姉は『アイツめッ！』と凄い形相をして、学園を飛び出していったという。その様子ときたら悪鬼も裸足で逃げ出しそうな剣幕だった

らしい。

「で、仮に武器が間に合わなかったどうなるんだ？」

オルコットを倒すべくアリスが考案した〈三本の矢〉作戦。

その一本が欠けたらどうなるか、それを考案者に訊いた。

「勝率は3割以下まで落ち込むでしょう」

「3割か……。厳しいな」

第二の矢——〈白式〉の専用武器がどれだけ重要かって思い知らされるな。

まあ、俺もアリスから武器の仕様を教えられたとき『これ、勝てんじゃね?』って思ったし。

「最悪、武装が届かなかったら、用意した武器で戦うしかないですね。一応、対〈ブルー・ティアーズ〉用に使えるような武器をいろいろ用意しましたが」

視線を遣った先には、いくつかの武器が並んでいた。

ラックに立て駆られているのは、刀に似た近接ブレードと、大型の物理シールド。そして四連装のグレネードランチャーを備えたアサルトライフル。どれも使ったことのない武器ばかりだ。

「まあ、仕方ないよな。素手でやるよりマシだろう」

俺が置いてあったアサルトライフルに触れた時、通路とピットを繋ぐ扉が開いた。

入ってきたのは、額に汗をにじませた千冬姉だ。

「待たせたな、お前たち」

待ちに待った人物の登場にピットが活気だった。

「千冬姉ッ!」「千冬さん!」

「織斑先生、だ。——それよりも持ってきたぞ」

いうなり、格納庫とピットを繋ぐエレベーターが稼働した。上がったきたのは長方形のコンテナが二つと、〈倉持技研〉のメカニックチーフである篝火さんだ。

エレベーターが停止するなり、篝火さんはパチンと両手を合わせた。た。

「ごめんね、遅くなって。お詫びにお姉さんのお尻を好きなだけ触ら

せてあげよう」

「おい、ヒカルノ、さっさと手伝え。時間がない」

千冬姉がすごい剣幕で篝火さんのお尻を蹴る。篝火さんは『ぎゃふん』と前につんのめった。

確かに試合まであまり時間がない。冗談を言っている暇はなさそうだった。

「ほら、さっそくインストールを始めるぞ」

「あ、あい……」

涙目のヒカルノさんはお尻を撫でながらコンテナのひとつに手を当てた。それによって認証が行われ、長方形のコンテナがぱっくり割れる。中から飛び出してきたのは刀状の近接武装だ。

「これがく白式>の武装？」

「ああ、銘は《雪片式型》だ」

それは嘗て千冬姉が現役時代に愛用していた武器の名だった。

つまり、千冬姉を世界一に導いた武器、その後継がいまここにある。そして、その新たな担い手が俺ってわけか。

「ヒカルノ、《雪片式型》をインストールしてくれ。私はモジュールを取り付ける」

「あいさね」

感慨に耽る俺を置き去りにして、武装のインストール作業が進められていく。

篝火さんが二つ目のコンテナをオープンさせると、そこには大掛かりなユニットが仕舞われていた。

「これは？」

「《雪片式型》の力を最大限発揮させるための専用モジュールさね」

説明と並行して、千冬姉たちはそのユニットの取り付けにかかった。専門的な知識の俺たちは、その作業をすこし離れた場所から見守る。しばしの間、作業は淡々と進んでいった。

「マッチングクリア。よし、モジュールの取り付けは終わったぞ」

「こつちも調整完了。あとはく白式>が自動でシステムをアップデートトしてくれるけど——」

篝火さんがちらつと自前の腕時計を見て、険しい顔をした。

「——タイムアップかな？」

時刻は決闘の時間を示していた。本来なら出撃の準備をしなければならぬが——

「システムがアップデートされないと、＜白式＞は動けないんですか？」

「んにや、起動や操縦に問題はないよ。ただアップデートが終わるまで『雪片式型』は使えない」

「アップデートにはどれくらいかかりそうですか？」

と、アリスが篝火さんに訊く。

「10分ぐらいかな」

「10分ぐらいなら、延期してもらえるのではありませんか？」

篝の提案に、千冬姉と山田先生は難色を示した。

「今回の試合は公式戦のルールに則っています。公式戦では整備不良による試合延期は原則として認められていません」

そりや普通のスポーツでも『急に腹が痛くなったから、治るまで試合を延期してくれ』とは言えないしな。体調管理が選手の務めなら、機体整備も選手の務めってわけだ。

「仕方ありません。このまま行きましょう。今の彼なら10分ぐらい凌げます」

そう言ったのはアリスだった。

「そうか。なら信じよう。熱心に織斑の世話を焼いたおまえがいうなら、な」

アリスはきよとんとした。

「いえ、私は別に大したことは何も」

「よくいう。情報の収集、装備の調達。一夏のために西へ東へ奔走したそうじゃないか。それを日本ではなんと知っているか？

内助の功というんだ。おまえは一夏の嫁か？」

『違いますから……ッ』と、アリスは顔を真っ赤にして目線をそらす。

千冬姉は『私もまだ一夏をやる気はないがな』と笑ってから俺の方

を向いた。

「織斑もいいいな?」

俺は力強く頷いた。ある意味、俺以上に俺の実力と〈白式〉の性能を熟知しているアリスがそう言うなら問題ないだろう。どちらにしろ、時間が迫っている以上、行くしかない。

「では、準備にかかれ」

「はいー」

俺は颯爽と〈白式〉に飛び乗った。装着した具合は以前と変わりにくなく、起動にも問題はない。乗り込んだ直後に〈白式〉の裏で何か起動したような気もしたが、それ以外に違和感はなかった。

「一夏、気分はどうだ?」

「ちよつと緊張してる」

俺は正直な気持ちを打ち明けた。千冬姉も同じ心境のようで、身持ちがちよつと硬いように感じられた。俺を一夏と呼んだのも、その影響だろう。

「無理もない。だが安心しろ。仮に負けても私がなんとかしてやる」

たぶん千冬姉は「クラスに俺の居場所がなくなることを心配しているのだろう。」

そうやって、いつも俺のことを第一に考えてくれる千冬姉に、俺は感謝に代わってこう告げた。

「俺さ、ずっと千冬姉に手を引いてもらいなから歩いてきた」

「私はおまえの姉だ。当然だろう?」

「でも、俺はもう15だ。そろそろ自分の足で歩かないといけないと思うんだ。いつまでも手を引つ張ってもらうわけにはいかない。それでさ、この決闘をその第一歩にしようと思う。だから、強い言葉で送り出してほしい」

「そうか。では、こう言おう。——存分に暴れてこい」

寂しさ半分。嬉しさ半分。そんな表情で千冬姉が檄をくれる。

俺が強く頷くと、そこへ箒がアリスに背を押さながらやってきた。

「ん、どうした、箒?」

「いや、その、だな……」

言いたいけど、言い出せない。そんな筈の背をアリスが「ほら、篠ノ之さん」と押す。

それでようやくと決心が固まったのか、筈が思い切ったように言った。

「二夏、剣は全ての道に通ずる。今日までやってきた稽古は、決して無駄ではないはずだ。——だから、自分の力を信じる。さすれば、どんな苦難の中でも、きつと活路がみえてくるはずだ」

同門からの激励に俺は強く頷く。

ああ、わかつているぜ。今まで篠ノ之道場で教わった事は一つだつて間違つていなかった。

「それと、その、なんだ、お、応援しているからな」

「ああ、見ていてくれ、おまえが鍛え直してくれた剣で、アイツに一泡吹かせてやるからさ」

恥ずかしそうに俯く筈にそう答えたあと、アリスがラックの武装を指差した。

「とはいえ、さすがに武器なしは無謀なので、アレ持つて行ってください。役に立つはずですよ」

「ああ。そうする」

俺はアリスが用意した大型の物理シールドとアサルトライフルを手取る。銃なんてロクに使えないだろうけど、脅しの道具ぐらいにはなるだろう。盾は時間稼ぎに使えそうだから持つていく。近接ブレードは《雪片式型》があるので置いていこう。

「では、織斑くん、こちらへ」

「はい」

山田先生の誘導に従い、〈白式〉をアリーナへの射出ユニットに装着する。

さあ、俺のデビュー戦の始まりだ。

第6話 第二の矢《セカンドアロー》

一夏が出撃したあと、私は場所をピットからアリーナの管制室に移動した。

アリーナの管制室は試合を監視・誘導する特別室だ。有事の際には司令室としても機能する。ここでならあらゆる視点から試合を観戦でき、指示できる。〈白式〉の状態が状態なのでここへとやってきたわけだ。

専用のオペレーター席につくと、私はテストを兼ねて一夏に通信を繋ぐ。

「私です、一夏。聞こえますか？」

『お、おう、よく聞こえる』

インカムから届いた声はやや硬いが、音声の問題はないようだ。

「OKです。では、試合が始まる前にルールを復習しておきましょう」

『おう、頼む』

「まず、ISバトルの勝敗についてです。ISバトルには勝利条件がふたつあります」

『相手のポイントをゼロにすること。相手を戦闘不能にすること、だな』

「そうです」

ISバトルでは両者に一定のポイントが与えられる。そして攻撃を受けると威力に応じたダメージが数値化され、ポイントから減算される仕組みだ。このポイントがゼロになると負けとなる。

また“自機のエネルギーが底をつく”あるいは“行動不能”に陥っても負けとなる。

「では、次はクリティカルヒットについてです」

『相手の《絶対防御》を発生させることだな』

《絶対防御》とはISのシールドが突破された際に発動する最終防御装置のことだ。

高い防御力を誇るISのシールドも絶対ではない。断続的に攻撃を受け続ける、もしくは威力の高い攻撃を受けるとシールドは一時的

に無力化される。その時に発動するのが《絶対防御》だ。

この《絶対防御》が発動すると操縦者はあらゆる攻撃から守られるが、代わりにポイントも大幅に失う。これをISの競技用語で《クリティカルヒット》と呼ぶ。

「ルールの方は大丈夫ですね。——さて、対戦相手がやってきたようです」

丁度ルールの確認を終えたところで、Bピットから対戦相手のオルコットさんが現れた。

同時に管制室の中央モニターがオルコットさんの映像に切り替わる

蒼い装甲に、騎士を思わせるフォルム。非固定浮遊部位には格納されたピット。手には長い特殊レーザーライフル《スターライト Mk III》。どれも収集した情報と合致する装備だ。決闘用に新装備を持ってきた様子はない。

「では、行きましょう。試合開始です」

『おうー!』

織斑くんの気合溜めのあと、試合開始のアナウンスが鳴った。



「あら、逃げずにいらっしやいましたのね」

アリーナ中央。俺と対峙するなり、オルコットはお得意のポーズでそう言った。

まるで勝ち誇ったような態度が気に障るけれど、ここはぐっと堪える。軽い挑発に乗って作戦を台無しにしたら、俺は一生アリスに顔向けできない。

「今からでも遅くありませんわ。この場で降参なさったら？ わたくしが勝つのは自明の理ですもの。戦っても観衆の前で惨めな姿を晒すだけですわよ?」

素なのか、それとも挑発してこちらの心を揺さぶっているのか。

どちらにせよ、俺の返事は既に決まっている。

「わかっていないな、オルコット。負けるより、ここでしつぽ巻いて逃げ出す方がよっぽど惨めつてもんだ。俺は敵に背を見せない主義なんだ。例え負けるにしても、やられるときは前のめりだ」

俺の覚悟と意気込みに、オルコットがフツと笑む。

「それを聞いて安心しましたわ。わたくしも逃げる相手の背を撃つのは好みません」

「俺も女を後ろから襲う趣味はない。だから、ビビって逃げ出す真似はやめてくれよ」

「あら、誰にそんな口を聞いているのかしら、わたくしはイギリスの代表候補生ですわよ」

互いに引く気はない。その意気込みをぶつけ合うと、俺たちはジェネレーターの出力を上げた。

待機から巡航へ。巡航から戦闘へ。膨大なエネルギーの供給を受けたく白式>が関の声を上げる。

へでは、両者、試合を開始してください

山田先生のアナウンス後、セシリアがライフルのグリップを握り直す。

それに合わせてく白式>が警報を鳴らした。

↑—警報：入力データA3と照合。1. 8秒後、射撃モーションに移行——↓

撃ってくる。

アリスがデータを入力してくれていたおかげで、俺は早い段階から相手の攻撃を察知できた。

「では、踊りなさい、わたくしとくブルー・ティアーズ>の奏でるワルツで」

射撃モーション。俺は慌てる事なく、物理シールドを射線上に置く。

直後、アリスの情報通りレーザービームと思わしき蒼い閃光が盾に命中した。

「うっ」

眩い閃光に目が眩む。だが、物理シールドは何事もなくレーザーを遮断した。

そのあとプシューと排熱処置が働き、加熱されたシールドが冷却される。

「へっ、狙撃は得意でも早撃ちは苦手か？」

初手を防がれたことにやや驚き気味のオルコットを小ばかにして、構えを解く。

オルコットは忌々しそうに、綺麗な眉を顰めた。

「対レーザーシールドですって？」

「アリスがおまえの主力はレーザービームだから、これもってけつてさ。なんでもおまえのことを徹底的に調べ上げたらうれしいぞ」

それこそ、専用機の性能から、操縦者のくせまで。

俺が先の一撃を防げたのも、オルコットのデータクセをアリスがく白式クセに入力しておいてくれたからだ

そのアリスが言うに、オルコットは精密射撃をするまえ、密かに銃のグリップを握り直すクセがあるらしい。いまく白式クセはモーシヨセンサーでそのクセを逐次監視している。そして、それを検知したら、すぐ警告するよう設定されてある。

「わたくしのことを……？ まさか、わたくしに模擬戦を申し込んできた方々は……！」

「詳しくしらんが、だろうよ。——ん、件のアリスからだ」

俺は通信方式をプライベートチャンネルから、オープンチャンネルに切り替えた。

『ちなみに、私はあなたが愛読しているタブロイド紙の銘柄も知っています。オルコットさんは、ただれた男女関係のアンモラルな記事がお好きなようで』

オルコットは顔を真っ赤にした。

「バツ、ばか言わないでくださいませ。わたくしはそんな低俗な物を読んだりしませんわッ！ それはメイドが趣味で買っているだけで、たまたま、ちよこつと、チラつと見たことがあるだけです！」

と、アリーナの管制室に向かってなにやら弁解するオルコット。

毎度、毎度、『女王陛下より一角獣の』と高貴さをアピールしている手前、大衆紙の購読がバレると恥ずかしいのだろうか。確かにオルコットって窓辺で詩集とか読んでいそうなイメージだしな。ゴシツプはイメージじゃない。

てか、スキだらけなのだが、攻撃してもいいのだろうか。

「おい、オルコット、試合の続きをしようぜ」

「わかっていますわよッ！」

怒鳴りつけるなり、オルコットが《スターライトMkⅢ》の引き金を続けさまに引いた。

発砲、発砲、発砲。降り注ぐレーザービームの雨を、俺は対レーザーシールドで防ぐ。箒との稽古が功を奏し、セシリアの攻撃に身体は難なく動いてくれた。箒との稽古がなければ、こうはいかなかっただろうな。さんきゆうな、箒。

「くっ、鬱陶しいですわね、そのシールド」

「俺はイラついているお前を見て、愉快痛快だけどな」

「黙りなさいッ」

オルコットがずつしりと《スターライトMkⅢ》を構える。狙撃で防御のスキを狙い撃とうというのだろう。だが、同時に「クセ」を検知したく白式が射線とおよその着弾ポイントを計算して俺に報せてくれる。

「おっとッ」

無理なく攻撃をかわした俺に、オルコットは綺麗に整った眉を吊り上げた。

「貴方も身を隠してばかりいないで攻撃してきてはどうですか？ 防いでいるだけではわたくしに勝てませんわよ」

「そう言われてもな……」

横目でシステムアップデートの進捗を示すウィンドウをみる。

進捗具合は今で50%を少し超えたところだ。完了まであと5分ぐらいだろうか。それまではこうして逃げ回るしかない。たとえば、集音機能が『逃げ回っているだけじゃん』『つまんなッ』という観衆の不満を拾ったとしても。

「織斑くん、やりますね」

試合開始10分。一夏の奮戦に、山田先生が感動したように言った。

今モニターにはオルコットさんの射撃をしのぐ一夏が映し出されている。彼の機動は危なげだが、訓練の成果が実り、今のところダメージらしいダメージは負っていない。イギリスの代表候補生を相手に大した健闘ぶりだといえる。

「特訓の成果がでているようだな」

「はい。彼の呑み込みの速さが成長に一役買ってくれました」

当初、私の予想では基本操縦の体得に一週間かかると踏んでいた。けれど、実際にかかった日数は3日あまり。おかげで回避機動と空一格闘の特訓に時間を裂くことができた。これが大きい。

「ですが、喜んでもいられないようです」

私は〈白式〉のステートに目を通して、僅かに渋面を作った。

「どうした？」

「システムのアップデートが予定より遅れています」

メインモニターの端に表示されている進捗バーを示す。試合開始からすでに10分。にも関わらず、システムアップデートはやっと65%を超えたところだった。

「ヒカルノ、これは？」

「うーん。戦闘中だし、負荷で処理に遅延が発生しているのかも。けど、それを加味しても65%は不可解だね。〈白式〉のプロセッサなら戦闘中でもここまで処理落ちしないはずなんだけどにやー」

「もしや処理する情報量が増大した？」

「有力な考えだね。なにせ《雪片式型》を作ったのはあいつだし。なんか仕込んであったのかも」

苦笑する篝火さんに、千冬さんは忌々しそうに顔を歪めた。

それが管制室内を不安な雰囲気にする。

「リデル、あのシールドの耐久値は？ あとどれくらい持ちそうだ？」
「冷却材には、まだ余裕があります。残り時間なんとか持ち堪えられるでしょうけど、それは戦況が『現状のままなら』という話です。もし反撃できないこちらの状況を覚られたら……」

「間違えなく全力で仕留めにかかってくるな」

千冬さんの意見に同意して頷く。

オルコットさんは＜白式＞の情報を持っていない。意図的にそう仕向けたからだ。可能な限り情報を秘匿したので、序盤は警戒して様子を見てくるだろうと予測していた。その間に『アップデートが終了すれば』というのが私の思惑だ。

けれど、アップデートが長引き、こちらの不利を覚られたら、容赦はしてこないだろう。

「いまはこちらの不備が知られないことを祈るしかありませんね」

とは言ったものの、オルコットさんもバカではない。攻撃してこない一夏に何か感じているはずだ。《雪片式型》が使えない今、全力で潰しにかかれたら、シールド在りきでも耐えきれるかどうか。

「大丈夫だ。あいつのしぶときは私がよく知っている。簡単にやられたりしない」

篠ノ之さんは、はつきりとした口調でそう言った。それに続いたのは千冬さんだ。

「そうだな。たとえ追い詰められても、きつと耐え凌ぐ。一夏はそういう男だ」

彼女たちの発言が苦し紛れでないことは一瞬で判った。

彼女たちは幼馴染であり姉だ。私などより長い時間、彼と苦楽を共にしてきたている。その中で培われた言葉なら、これ以上に信頼できるものはない。

「そうですね。幼馴染のあなたがいうのなら、信じましょう、彼を」
篠ノ之さんの言葉を信じ、私はモニターに意識を集中した。



試合開始から15分。アリーナ・ステージの観客席で、一人の生徒があくびを噛みしめた。

「ふあああ、なんだか、つまらないね」

「うん、男の方は逃げ回っているだけだし、退屈う〜」

言ってまた欠伸をかみ殺す。

希有な男性操縦者の一戦とあって、当初は活気づいていた彼女らだったけれども、一方的な展開に飽きが来ていた。それも無理のない話。観客は常に刺激を求めるものだ。変化の無い試合展開はどうやったって人を退屈させる。

「てかき、相手はイギリスの代表候補生でしょ？ 素人が勝てる相手じゃないじゃん」

「どうせIISに乗れるから調子のつたんでしょ。男ってそうだよ。すぐカッコつけたがってさ。現実が見えてないのかな」

「ホント、ホント。さつさと負けちゃえばいいのに」

試合に飽きた観衆の空気は、いつしか「女に喧嘩を売った愚か者」を糾弾する空気へと変化していた。いまにも野次ひとつでバツシグが起こりそうな雰囲気だ。けれど、結果的にそうならなかったのは、ある生徒が彼女たちを諫めたからだだった。

「あら、戦わずの傍観者が戦士を愚弄してはダメよ」

そう言ったのは水色の髪をしたクセっ毛の生徒だ。手には近未来的な扇子が握られている。

その扇子を開くと、そこには彼女たちを諫めるように失礼千万の文字。

「確かにこの試合展開、見世物としては盛り上がりには欠けるかもしれない。けれど、この試合はエキシビジョンじゃない。互いの矜持を賭けた決闘よ。観客を盛り上げる必要なんてないわ」

彼女の言葉は正しかった。

観客を気取っている彼女たちだが、本当はただの野次馬に過ぎないのだ。招待された客ならまだしも、珍しいもの見たさで寄ってきた野

次馬を楽しませる義務など一夏にもセシリアにもない。

「それにあなた達にはわからない?」

「は? なにがよ?」

彼女の問いに、生徒は疑問符を浮かべた。『どうせ、あの織斑一夏つて子がイギリスの国家代表生に公開処刑されるだけだろ』というような、まるで解っていない顔だ。だとしたら彼女たちの観察力は幼いと言わざるを得ない。

「わからないなら戦局を見極める目を養った方がいいわ。でなければこの業界で生き残れない」

ISの業界は、ISが定数しかないゆえに実力至上主義である。

要は本当に優れた操縦者が467人いれば事足りるのだ。その467人を選ばれるべく強者が強者を蹴落としかつていてこの世界で、戦局を見極められない者は真つ先に蹴落とされる。

扇子少女の言葉はこの世界の極意を語っていたが、生徒は苛立だつて立ち上がった。

「なによ、あんた、さつきから偉そうにさッ!」

「ん? だって、私、偉いもの」

そういつて、扇子少女がゆっくり振り返る。途端、女子生徒の顔が青ざめた。

確かに彼女は自分たちより遥かに偉い立場の人間だった。

なぜなら、彼女は全生徒を束ねる生徒会——その長だったのだから。

IS学園は特殊な教育機関ゆえに、その生徒会もまた特殊な存在である。その長ともなれば、学園内での地位や権限は一般的な教員より上にある。そんな相手に啖呵を切ることが何を意味するか、社会に疎い十代の少女にだって理解できた。

「す、すみません、生徒会長ツ! 私、全然、気づかなくてツ、その……」
いまさら言い訳を捻り出したところで手遅れだが、それでも生徒は体裁を取り繕うとする。

しかし、当の生徒会長は気分を害した様子もなく大らかに言った。
「いいのよ。それより試合を楽しみましょう。きつと、ここからおも

しろくなるから」

「は、はいッー！」

器量の大きさに感動する女子生徒をさしおいて、生徒会長はアリーナに視線を戻した。

そして何かを探るように扇子を口に宛がう。

（あの子どもたちは気付いていないようだったけど、彼は何か秘策を隠し持っている）

けれど、それはイギリス代表候補生も薄々感づき始めているはず。それを易々と見逃してくれるような優しい相手ではないが。

（さあどうする、織斑一夏くん）

すつと表情を険しくする生徒会長は、歴戦の兵^{つわもの}を彷彿とさせた。



（やりますわね……）

試合開始16分。思いの外、動ける彼にセシリアは僅かな驚きを感じていた。

けれど、焦りを感じるほどでもない。操縦術、知識、経験、どれをとっても自分の方が一枚も二枚も上手だ。専用機の性能は未知数であるが、操縦者があれでは宝のなんとやら。

（このままいけばチェックメイトを掛けられるのはわたくし）

そう、このままいけば――

（けれど、それではあまりに呆気なさすぎますわ）

さきほどから彼は防戦に徹して、ろくに反撃してこない。時より散発的にライフルを撃ってくるが、どれも効果的な射撃ではなかった。むしろ下手過ぎて、話にならない。

まるで素人の戦い方。

もともと素人なのだし、この程度といえ、この程度なのかもしれない。けれど、どうにも腑に落ちない。釈然としないのだ。

アリスは自分にこう言った。——『一夏をあなたに勝たせる』と。あれだけの大口を叩いたのだから、何か秘策があつたはずだ。こんな幕引きを望んでいるとは思えない。だとしたら、彼の「逃げる」という行動には意味があるはず。セシリアはその意味について考えた。(何かの時間稼ぎ? それともこちらの消耗を狙っているのかしら) あちらはこちらの機体特性を把握している。当然、この機体の弱点も。

<ブルー・ティアーズ>は強力なレーザービームを装備しているが、その照射には膨大なエネルギーを消費する。そのエネルギーを自機の動力で賄っているため<ブルー・ティアーズ>は長期戦を不向きとしていた。

(長期戦に持ち込んで、こちらが後手に回ったところを反撃する魂胆かしら……)

だとしたら、この中盤はエネルギーを温存し、様子を窺った方が賢明だ。

けれど、もし時間稼ぎが目的なら——その行動は完全な裏目。相手の思う壺だ。

(そういうえば——)

そこでセシリアは今朝のHRに千冬がいなかったことを思い出した。

(なぜかしら、あの厳格な織斑先生がHRに来ないだなんて……。——もしや!)

その時、セシリアに閃きが走った。

(もし彼の専用機に何かトラブルがあり、そのために織斑先生が駆り出されたのなら——)

そして、そのトラブルが未だに解決しておらず、攻撃に転じられないのなら——

全てが腑に落ちた気がした。彼は攻撃してこないのではなく、できないのか。

(だとしたら、彼が逃げの一手であるのも頷けますわ)

なにせ、まっとうな攻撃手段が無いのだから、防御にまわるしか

い。

ここはエネルギーを温存せず、もっと攻撃に転じるべき。出し惜しみをすべきじゃない。

生憎、セシリアに「相手が万全な状態になるまで待つてやろう」という気概はなかった。

これは真剣勝負だ。真剣勝負だからこそ狡猾に勝ちを拾いにいく。プロ世界の厳しさを教える意味でも、セシリアは自機のとっておきを出すことを決めた。

「お往きなさい、《ブルーティアーズ》！」



〈ブルーティアーズ〉の非固定浮遊部位から放たれたフィン状のパーツは、それ自体が命を持ったように、飛び出していった。

B Tレーザーを装備した攻撃機動端末——通称ビットは操縦者の攻撃イメージを〈イメージ・インターフェース〉から読み取り、体現する攻撃兵装だ。制御に鮮明な想像力とそれを描き続ける精神力が必要であるため、これを戦闘レベルで扱える操縦者は、英国にも10人といない。けれど、じゃじゃ馬が乗りこなせれば名馬となるように、ビットも使い熟せれば強力な武器になる。それが一夏に牙をむいた。

『ついに出してきましたね。一夏、高度を下げてください！』

「おう！」

一夏はバトルフィールドにしていた上空30メートルの高度を一気に1メートルまで落した。

ビットの特性は、その機動性を活かした包囲攻撃だ。ライフルのような一方向からの攻撃ならシールドで対応できるが、多方向から攻撃されては防御しきれない。そこで一夏は高度を落とすことで、まず下方からの攻撃を封じた。さらに観客席まで後退し、背面への侵入を防ぐ。

だが、それが根本的な対策にはなっていないことは、セシリアにも御見通しだ。

「それで『ブルーティアーズ』を看破したおつもり？」

セシリアは鼻で笑った。

「甘いですわ。わたくしの可愛いしもべからは簡単に逃れられなくてよ」

セシリアは猟犬をイメージした。俊敏に敵を追い詰め、鋭い牙で得物を捉えるイメージだ。

わたくしはハンター、彼を狩るもの。

そう念じ、ビットに命令を下す。ビットたちはその命令を忠実に再現した。

まるで訓練された軍用犬のような二次元機動と集団戦法でビットが一夏を追尾、包囲する。やがてアリスの対抗策はセシリアが思い描く勝利のイメージによって塗り潰された。

(捕えましたわッ！)

敵の包囲を感じ取ったセシリアは目を瞞つてビットたちに攻撃命令を下した。

命令信号を受けたビットが、銃口から一斉にレーザーを照射する。

殺到するレーザービーム郡に、一夏は比較的包囲が甘い上方に機体を逃がした。

素人とは思えない判断だった。おそらく背後にいるオペレーターの指示だろう。けれど、セシリアの執念か、包囲発砲した一発が離脱する一夏の物理シールド、その冷却システムに命中した。

加熱された冷却材が暴発し、物理シールドがあるべき機能を失う。そこに生じた僅かなスキを、セシリアは見逃さなかった。すかさず腰部のミサイルユニットを可動させ、レーザーブースターに火を入れる。

「いただきましたわッ」

発射。打ち出されたミサイルは青い火を曳きながら一夏を破壊せしめんと誘導装置を起動させた。PPPとく白式>の電子アラートがミサイルの接近を報せる。しかし、シールドの誘爆で動きが止まっ

ていた一夏は、これに対応できなかった

「しまっ——」

物理シールドを投げ捨てると同時に、ミサイルは〈白式〉に着弾した。

高性能爆薬による凄まじい爆風で、舞い上がる粉塵。その煙幕に、誰もが〈白式〉の状態を確認できなくなる。

けれど、これほどの爆発。無事で済すはずがない。

観客の誰もがセシリアの勝利を確信する中、彼女は燃え上がる煙を淡々と睨めつけた。

(意外と手古摺らされましたわね)

正直な感想だった。まさかイギリス代表候補生の自分がこんなに手古摺らされるとは……。

しかし、腹立たしいという感情はない。むしろ自分相手に頑張ったと賞賛する気持ちすらあった。

だから、劳いの言葉ぐらいかけてやろう。——そう思った次の瞬間だ。

アリーナを覆っていた土埃が、突如巻き起こった衝撃波によって吹き飛ばされた。

晴れる視界の中から現れる〈白式〉。それに沸く観客席と管制室。そして——

「待たせて悪かったな、オルコット——シヨードダウソ——決着の刻だ」

銀光を放つ眩い“刃”を手にした彼は不敵に笑った。

第7話 第三の矢《ソードアロー》

ショーダウン。それはポーカーで互いが手の内を晒すときの掛け詞だったか。

では、よくやく彼の手札が揃ったということか。

いいだろう。散々逃げ回って手に入れた彼の^{カード}手札。見せてもらおうじゃないか。

「《ブルーテイアーズ》！」

セシリアは展開していた《ブルーテイアーズ》を呼び戻し陣形を張った。

さらに自らも《スターライトMkⅢ》を構える。

4基のレーザービットに、一丁のレーザーライフル。戦車一輛、易々と蒸発させられる火力だ。

ポーカー的というならば、フォーカードにジョーカーを加えたファイブカードか。

(さあ、^{ショー}あなたの^{カード}はなんですか！)

セシリアは引き金を引いた。

B Tレーザーによるバースト射撃。——その着弾の刹那、一夏が《雪片式型》を振り下ろす。

その刃先にレーザーが触れた瞬間、蒼い閃光はその存在を否定されたように消滅した。

「!?」

眼の前で生じた現象に、セシリアはおろか観衆のほとんどが瞠目した。

照射されたレーザービームをブレードで斬り伏せた？

「な、なんですか?」

たつたいま起こった現象にセシリアは僅からながら動揺を見せた。

対照的に一夏は勝気な笑みで、レーザーを斬った刀《雪片式型》の銚をセシリアに突き付ける。

「これがおまえを倒すための第二の矢——《雪片式型》の能力さ」

中央のモニターに映し出された、レーザーを切り裂く映像に、私たちは心底安堵した。

試運転なしでの実戦投入。システムアップデートの遅延。不安要素がありすぎてうまくいくかハラハラしていたけれど、《雪片式型》はちゃんと機能しているようだった。これには千冬さんもホッと胸を撫で下ろしている。

「突貫工事だったが、なんとかあったな」

「ええ。《雪片式型》は能力を発揮しているようです」

《雪片式型》の能力。それはエネルギー体をその性質に関係なく消失させる能力だ。

当然ながら指向性エネルギー兵器であるレーザービームもその対象に入る。これを利用して〈ブルー・ティアーズ〉の武装を無力化する。それがヘトリプルアロー〈第二の矢〉だ。

「それにしても、いつ見ても綺麗ですね。まるで魔法の剣みたいですよ」
山田先生がどこかうっとりした様子で〈白式〉を見つめる。

確かに淡い光を放出し纏う《雪片式型》はファンタジーに出てくる武器のようだ。禍を払う聖剣。そんな印象だろう。事実、エネルギーを無効化する《雪片式型》は、科学というより魔法の域に近い。

「充分に発達した科学は魔法と区別がつかないものだ」

千冬さんの言葉に、私は『アーサー・C・クラークですか？』と訊いた。

しかし、千冬さんは『そうなのか？』と訊きかえしてきた。

「この言葉は《雪片式型》開発者の受け売りなんだ。私が初めてISを装備したとき、『まるで魔法の鎧だ』と言ったら、そいつがそう言うってな。——なるほど、クラークの言葉だったのか」

「そういうえば、《雪片式型》の開発者ってだれなのですか？」

私たちは《雪片式型》の開発者が誰なのか未だに聞かされていない。《雪片式型》の話をするとき、千冬さんは限って「開発者」と実名を

ぼかす。

「いずれわかる時がくるさ。——それよりも織斑は《雪片式型》のリスクを知っているか?」

露骨に話を逸らされた気もしたが、私は『大丈夫です』と答えた。

《雪片式型》は反則的な能力を有するけれど、強力な武器はハイリスクかハイコストと相場が決まっている。《雪片式型》も例にもれず、その能力を発揮する際には莫大なエネルギーを消費する。それを知らずに使えば《雪片式型》はただの自傷兵器なのだ。だが、それを踏まえて一夏を訓練したので、自滅の恐れはないだろう。

「そうか。やはりおまえに託して正解だったな」

「それほどでもありません」

そう答える私に、千冬さんは『可愛げのない奴め』と肩を竦めた。

♡

♣

♠

「雪片……もしか、ブリュンヒルデ織斑千冬の……」

この学園を首席で入学したオルコットだけあって、その銘に聞き覚えがある様子だった。

かつて織斑千冬を世界制覇に導いた剣——それが《雪片》だ。

「それがいま貴方の手の中に?」

「そういうこった。俺は織斑千冬の弟だぜ? なんら不可解じゃないだろ?」

「ええ、むしろ、その可能性を考慮しなかった自分を責め立ててやりたいところですよ」

ここに来て、オルコットの表情から余裕が消えた。理由は理解できない。

オルコットの専用機は第三世代型——つまり指向性エネルギー兵器を装備したISだ。対し《雪片式型》はそのエネルギー兵器を無力化できる武器。〈ブルー・ティアーズ〉にとって〈白式〉は天敵なわけだ。その事実がオルコットから余裕を奪った。

「わたくしが追っていた得物は、小鹿ではなかったわけですね」
「ああ。猛獣だったってわけさ。それも毒を持ったな。――で、今度はおまえが追われる番だ」

俺が《雪片式型》を正眼で構えると、オルコットも警戒するようにライフルを構えた。

↑――警報：入力データB2と照合。1.6秒後、射撃モーション――
↓

アラートと同時に、＜白式＞が着弾ポイントと射線を計算してARで表示する。

その情報に従い、俺は軽やかに《雪片式型》を振るった。

一閃、二閃、三閃。銀刀が翻るたび、蒼い閃光が《雪片式型》の能力によって無に帰す。

それを目の当たりにしたセシリアが表情を歪ませた。

「やりますわね。わたくしの射撃をブレードで掃うなんて」

「毎日、全国レベルの幼馴染が稽古をつけてくれたんでな」

箒の剣道の腕前は全国レベルだ。そんな相手が繰り出す神速の太刀筋を毎日凌いでいれば、これぐらいの芸当は可能になる。もちろんアリスが調整したアナライズシステムがあつての話だが。

「でしたら、これはどうです。――《ブルーティーズ》！」

オルコットは非固定浮遊部位からビットを射出した。

ビット。オルコットから独立して攻撃してくる機動端末だ。意識すべき目標が一気に増え、頭の中が一瞬パニックになるが、俺には頼れるオペレーターがいる。

『二夏、ビットは操縦者の攻撃イメージを具現する兵装です。その仕様上、操縦者の攻撃特性が強く反映されます。オルコットさんは遠距離攻撃を得意としているので、ビットも必然と遠い位置からの攻撃が本命となっています。それだけに注意を割いてください。あとの三基は牽制で、そうそう命中しません』

「ああ、わかってる。それでビットのコントロール中は、本体からの攻撃が止まるんだよな」

俺は＜白式＞の外被に埋め込まれたアクティブレイダーを最大活

用して《ブルーティアーズ》の位置を把握する。そして、もつとも遠いビットに意識を割きつつ、得た位置情報をアリーナの管制室に送信。すると、すぐさまアリスから指示が帰ってきた。

『六時方向にグレネード！』

「おうー！」

俺は腰に預けていたアサルトライフルを構え、銃身に備わったグレネードをビットに投射した。

榴弾自体は命中しなかった。爆発もしない。代わりに細かな金属片を大量にばら撒いた。

それに包まれたビットが痙攣を起こす。ビットの動きが止まった。『榴弾に電子欺瞞紙を詰めておきました。いまビットは本体から送信される命令を妨害されて、動きが緩慢になっています。———いまです。叩き斬って！』

「おうー！」

俺は機体のスラスターを吹かせて、スパークを放ち痙攣するビットに斬り込んだ。

斬撃。二つに別たれたビットは蒼い電光を走らせて爆散した。

「まず一機目ッ！」

『接近警報。9時方向にビット』

俺はすかさず上半身をひねり、もう一度グレネード弾を発射する。それから先の要領で二基目のビットを両断した。これに調子づいた俺は、同じ戦法で三基、四基と撃墜していく。

最期のビットを撃墜され、セシリアの表情に驚愕が浮かんだ。

「チャフによる妨害?! もしやあなた《ブルーティアーズ》の周波パターンまで!?!」

「言ったら、アリスはおまえの事を徹底的に調べあげたって」

「だからと言って！」

「だったら、ずっとそう思ってるよッ！」

猟犬を失ったオルコットは、機体を下げ、距離を取る。射撃に有効な距離を確保するつもりだ。

させるか。俺はスラスターにブーストをかけて執拗に追いかけた。

もともと推力では高機動型の〈白式〉に分がある。多少の被弾を覚悟すれば、代表候補生相手でもそれなりに追いつける。

加速、加速、加速。《雪片式型》の能力を盾にして更に加速。

高機動の名に恥じない加速力で距離を詰めると、オルコットの表情に焦りが灯った。

動揺で揺れるオルコットのすきをつき、俺は上段から《雪片式型》を一気に斬り下す。

「くっ……」

オルコットは咄嗟に持っていた《スターライト MkⅢ》を盾にしたが、俺はそれよりもオルコットを《雪片式型》で斬り伏せた。

↑——判定：クリティカルヒット——↓

それは相手に多大なダメージを負わせたことを示すメッセージだ。

ISバトルではシールドが無効化されると、大幅にポイントを失う。これが《クリティカルヒット》。そして《雪片式型》のエネルギー消滅効果はISのエネルギーシールドに対しても有効だ。つまり当たれば必ず《絶対防御》が発動し《クリティカルヒット》が発生する。しかし、いくら強力な武器でも、攻撃を当てられなければ意味がない。

そこでアリスは俺にこう言った。

『オルコットさんが相手じゃ苦戦は必至でしょう。ですが、何がなんでもオルコットさんに一矢報いてください。その一矢こそがヘトリプルアロー〈第三の矢になります〉』

トリプルアロー、最後の矢。それは俺自身が矢となり、セシリアに一太刀あびせる事だ。

「形勢逆転だな、オルコット。どうする、まだ続けるか？」

三本の矢が全て通ったことで、オルコットは全ての戦力を失った。ショートブレードを使ったとしても、近接格闘戦は俺が得意とし、オルコットが苦手とする展開になる。つまり、俺のフィールドに相手を引きずり出せたわけだ。しかも、こちらには《シールド無効化攻撃》というアドバンテージもある。

さらに先の《クリティカル》攻撃でポイントも大幅に失っている。

俺の優位はきつと揺るがない。

それでもセシリアは気丈に振る舞った。

「あら、ご慈悲を頂けますの？ 意外と紳士ですね。——ですが、わたくしをそこらのか弱い女と一緒にされては困りますわ。わたくしはイギリスの威信を背負いし代表候補生。最後まで戦います。民を守る騎士は敵に背を向けません」

オルコットは最後の武器——近接防御用のショートブレード《インターセプター》を抜く。

刃渡り60センチあまりのひ弱なそれを、オルコットが両手で構えた。装備は貧相だが、蒼い瞳には闘志が宿っているように見える。矜持か、自尊心か、見栄か、いずれにせよ。彼女にも負けられない理由があるのだろう。ここにきて、俺は初めてオルコットに好感を持てた気がした。

「オルコット、俺はいま初めて、おまえのことをすこし好きになれた気がするよ。——だけど、負けてやる気はねえ。こんな俺にも譲れないものがあるんだ」

俺に力を貸してくれた人たちのためにも。ここで男を笑っている奴を見返すためにも。

俺は絶対に負けられない。これは男——織斑一夏一世一代の大勝負なんだ。

「わたくしも、あなたのことを改め直しましたわ。——では、幕引きと行きましょう」

「ああ」

俺は腰を落して《雪片式型》を腰に宛がう。篠ノ之流剣術、居合の構えだ。

オルコットも《インターセプター》を両手で握り絞め、後方へ引く。

刹那、張り詰めた弓の矢のごとく、俺たちは互いに踏み込んだ。

「うおおおおおーッ！」「てやあああーッ」

スラストターの出力を全開にし、その勢いを切先に乗せる。

矜持、名誉、尊厳、すべてを賭して俺たちはぶつかり合った。

白と青が交叉した瞬間、動かぬ両者に観客は静まり返っていた。みな呼吸を忘れていた。それほどまでに無謀だと嗤った少年の奮闘が衝撃的だったのだ。

ようやく観客が固唾を呑むに至ると、アリーナ中央の投影型モニターに勝利者が表示された。

映し出されたのは精悍な顔つきの少年だ。その頭上には勝利を意味する王の冠がある。

この戦い制したのは、自分たちが男というだけで蔑んだ少年だった。

〈勝者、織斑一夏！〉

アナウンスが勝利者を告げると、一人の生徒が彼の健闘を讃えるように拍手を送った。

その拍手は波及してアリーナ全体に広がっていく。そこに一夏を笑う者は誰一人いない。

小さな試合の小さな勝利であつたけれど、少年にとっては大きな勝利であつた。



試合終了後。

割れんばかりの喝采と拍手を背にしてピットに戻ると、箒が駆け足で寄ってきた。

「やったな、一夏！」

「おう！」

俺と箒は翳した手と手でハイタッチを交わした。

そこにアリスと千冬姉が並んでやってくる。二人は俺の戦いを讃えるように微笑んだ。

「よくやった——といたいところだが、最後の最後でしてやられたな」

千冬姉はく白式>の胸部に付いた擦過傷を見た。オルコットがつけた傷だ。

激突の刹那で交わした刃は、互いに届いていた。そう、届いていたのだ。

もしこれが生身の戦いだったら、俺たちは引き分けていたことになる。それでも俺が勝利できたのは単純に武器の性能差だった。とどのつまり、俺は《雪片式型》の性能に救われたというわけだ。

「俺ってまだまだだな」

相手が代表候補生だと考えれば金星なのだけど、得意なフィールドに持ち込んで相打ちという事実は、俺に実力不足を実感させた。千冬姉なら徹頭徹尾、相手を完封してみせただろう。

それでも千冬姉は満足そうに笑ってくれた。

「それでいい。勝利はただの通過点にすぎない。一度の勝利に酔いしれていては底が知れるという物だ。本当に強くなりたければ、常に己の強さについて問い続ける」それからどこか照れ臭そうに頬をかき、「——だが、まあ、代表候補生相手によく勝利した。姉としても鼻高々だ」

俺は首を左右に振った。

「アリスや箒が力を貸してくれたおかげだよ。二人がいなかったら俺は勝てなかった」

アリスが作戦を立て訓練し、箒が剣術を鍛え直してくれたから、俺はあそこまで戦えた。

二人がいたからこそ俺は戦えたんだ。これは間違いのない事実。今回の勝利は三人の勝利だ。

「ありがとな、アリス、箒」

心の底から感謝する俺に、箒とアリスは顔を見合わせて笑った。

「なに、礼などいらさない。おまえこそ、その、か、かつこよかったぞ?」「ええ、カツコよかったですよ」

頬を赤める箒と、片目をウィンクしてみせるアリス。

それを見て、千冬姉が「いい仲間を持ったな」と俺に視線を遣す。まったくもってそう思う。俺はいい仲間と幼馴染、そしていい姉を

持った。

「よし。では、撤収するぞ。——まだ授業が残っている。遅刻するなよ、おまえら」

そうだった。この試合はアリーナの都合上、4時限目を削って行われた。

IS学園は一コマ60分で6時限目までである。まだ2コマも授業が残っているのだ。

(ああ、あの難解な授業を二時間も受けないといけないのか)

オルコットとの決闘で精根尽き果てた俺にすれば、それは苦行に他ならない。

なんだか勝利の余韻が一気に眠気変わったような気がした。



試合が終わり、誰もいなくなったアリーナ。

その観客席でひとりの生徒が戦いの余韻を楽しむかのように佇んでいた。

生徒の長、生徒会長だ。

その生徒会長の許に一人の生徒がやってくる。眼鏡をかけ、赤色の棒ネクタイを結んだ生徒だ。物腰はキャリアウーマンと言った体で、スーツ姿なら秘書に見えたかもしれない。

「お嬢さま、まもなく5時限目が始まりますが」

秘書風の生徒がそう言っても、生徒会長は動く素振りをみせなかった。

あからさまに授業をさぼる気配。

千冬が知ったら烈火の如く怒りそうなものだが、彼女にはそうしても許される立場と権利があった。生徒会長だから——というのも理由のひとつではあったけれど、彼女のもう一つの肩書が教師に授業のボイコットを黙認させていた。

「いくら国家代表の身分とはいえ、このような行いでは生徒に示しが

つきませんよ」

国家代表候補が次に目指すステージ——国家代表。それが彼女のもう一つの肩書だった。

彼女はここでのカリキュラムを全て修めているため、こういう自主行動が許されていた。

とはいえ、生徒の規範たる生徒会長が授業をさぼるようでは、他の生徒に示しがつかない。

だが、そんなことなどどこ吹く風といった様子で生徒会長——更識楯無は言った。

「ねえ、うつほ虚ちゃん、先の試合どう思う？」

唐突に投げ掛けられた質問に、虚と呼ばれた三年生は淡々と答えた。

「良い試合だったと思います。あの織斑一夏という生徒には目に見張るものがありました」

今回の決闘は、間違いなくIS学園の歴史に残る名試合だっただろう。

なにせ、あの場所にいた観客が自らの価値観を改めさせられたのだから。彼はこのIS学園に新たな風を吹かせたといえる。やがて、その風は逆風に苦しむ男性の追い風となるだろう。そんな予感をひしひしと感じさせる試合だった。

しかし、虚は『けれど』と続けた。

「今回の試合に置いて、真に注目すべきは彼の裏方にいた人物かと」

「やっぱり虚ちゃんもそう思う？」

生徒会長は真剣な面持ちで手持ちの扇子を開いた。そこには「内助の功」。

「織斑一夏は誠実な少年ですが、策を弄するタイプではないようです。裏でセシリア・オルコットの情報を集め、傾向と対策を構築し、それを踏まえて織斑一夏を訓練した者がいる。彼の勝利はその人物の功績が大きいかと」

「よね。しかも、やり方がすごくプロクさいわ」

「同感です。余程の手慣れでなければ、織斑一夏を勝ちに導けなかつ

たでしょう」

「彼に軍配を齎した勝利の女神は、篠ノ之箒だと思っ？」

「その可能性は低いでしょう。彼女は優秀な剣術を持ってはいるようですが、こういった作戦を画策できる生徒ではないようです。おそらく彼を勝利に導いたのは彼女かと」

無駄のない動作で、小脇に抱えていたファイルから一枚の資料を差し出す。

アリスの証明写真とプロフィールが記載されたそれを、会長は目を細めて見た。

「アリス・リデル。姓名は至って平凡、どこにでもいそうな名前ね。保護者がロリーナ・リデルというのはちよつと作為を感じるけど。で、出身はイングランドつと。彼女は自国の代表候補生を敵に回したわけなのね」

楯無はさらにページをめくった。

「入試テストは700満点中592点。実技テストも1000点中68点。教官との模擬戦も負けていて、IS適正值は「C+」。なんとかギリギリで入学できたって感じの成績ね」

生徒会長は読んでいたプロフィールを虚に返す。そしてニヤツと笑みを浮かべた。

「でも、本当はどうなのかしら」
プロフィールからは欺瞞の匂いがした。——否、欺瞞の匂いしかなかった。

この資料に記されている情報はほぼ全て嘘で塗り固められている。生徒会長にはそれが判った。なぜなら彼女もまた「嘘つき」だからだ。嘘つきは嘘の匂いに敏感だ。そして相手の嘘を暴きたくなるのも、また嘘つきという人種である。

「——虚ちゃん、彼女の情報をもっと集めて頂戴。気になるわ」

「畏まりました。妹にもそのように伝えておきます」

「ありがとう」

楯無に一礼し、虚は踵を返した。

「それにしても、今年の入学生は逸材が多いわね」

今年も近年でも稀にみる豊作だといえる。織斑一夏という存在がその最たるものだろう。

それはこの学園が騒がしくなるということ暗喩していたが、生徒会長に楽しげにセンスを口にあてがう。トラブルが増えるとなれば、自ずと気が滅入りそうなものであるけれど、生徒会長にそんな様子はなかった。

なぜなら、彼女自身がトラブルメーカーだからだ。

♡

+

♠

「これにて今日の講義を終了する。このままホーミングを行うので席は立つな」

地獄のような睡魔に襲われながらも、なんとかやり過ごした放課後。

6時限目の講義を終えた千冬姉は、その流れのままHRを始めた。「それではまず、まだ決まっていなかったクラス代表についてだが、オルコットの提案でクラス代表を決める試合を行った結果、織斑が勝利した。これにより一年一組のクラス代表は織斑一夏となるが——これについて異論があるものはいるか？」

教室を見渡す千冬姉に倣って、俺も固唾を呑んで様子を見守る。

以前、俺の抜擢に揉めに揉めたクラス代表の選出。しかし今度は誰も意を唱えなかった。

ただ、一人の生徒がおずおずと手を挙げる。確か『男は女の下で働くべきだ』と主張した生徒だ。

もしかしてまた同じような主張をする気なのだろうか。——そんな予想は簡単に裏切られた。

「あの、今回の試合を見て、わたし感動しました」

その一言に触発されたのか、他の子も次々に感想を漏らし始めた。

「わたしも。男の人の底力を見たような気がして、胸が熱くなったよね」

「ええ、私も熱くなりました。男性は格好ばかりだと思っていましょけど、織斑くんは実力を以ってオルコットさんを下し、その強さを証明しました。自尊心ばかりが強い私たちとは大違いです……」

「うんうん。あたしたちは社会地位を武器に男の人を攻撃してさ。やり返せない相手を見て、〝どんなもんだ〟って優越感に浸ってたけど、そういうのって強いつて云わないんだよね」

「わたしはさ、入試の成績悪くて、この学園でうまくやっていけないのか心配だったけど、織斑君の試合を見て『がんばれば、私も代表候補生になれるかも』って希望を貰った気がしたよ」

「私も。挑戦する大切さと、その勇気を教えてもらった気がする」

「これからは、立場に甘えないで、織斑くんを見習わなきゃね」

「おりむー、カッコよかったよー」「見直したわ」「男性も捨てたもんじゃないわね」「ねえ、今度、一緒に訓練しよ」「イギリスの代表候補性に勝つなんてすごいよね」「やるじゃん」

「おまえら……」

なおも教室のいたるところから湧き上がる賞賛に、俺は目頭が熱くなるのを堪えられなかった。

努力した事。それが報われた事。それらが緋い交ぜになって、言葉にできない激情になっていた。

「よし、織斑がクラス代表で異論はないようだな。オルコット、おまえはどうだ？」

今まで様子を見守っていたオルコットが、ここで初めて発言した。

「ありませんわ。今の彼ならクラスの代表に相応しい実力をお持ちです。なにせ、このセシリア・オルコットを下したのですから。少々――いえ、正直に申しませう。とても悔しいですが、自らが提案したことです。チェス盤をひっくり返すような行為はいたしませんわ」

オルコットはぐつと拳を握りしめていたが、最後には優しい笑みを与える。

彼女の碧い瞳には、悔しさを超えた賞賛の色があった。

「織斑一夏さん、わたくしは貴方をこのクラスの代表として認めます」

「おう、ありがとな」

イギリスの代表候補生のお墨付きを貰えた俺は、何だか鼻高々だった。でも、それ以上に決闘を通してオルコットと何かを通じ合えたことが、なんだか嬉しかった。

だからこそ思う。——セシリアは本当に女尊男卑の人間だったのだろうか。

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏で決定だな」

『はいッ！』

最終確認のあと、千冬姉はこちらに視線を寄こした。同意を求め一瞥だ。

俺は頷いた。当初は「クラス代表なんてまっぴらごめんだ」と思っていたが、クラスメイトに認められた今なら「彼女たちの為に頑張ってみよう」という気になっていた。

「よし。クラス代表も決まったところで、放課後のHRは終わりにする。放課後も訓練に勤しめ」

そう言つて、千冬姉は授業資料をまとめ、教室を出ていく。

俺はその後を追いかけた。千冬姉に伝えたいことがあったのだ。

「千冬姉」

俺の呼びかけに、千冬姉は足を止めて振り返る。

「だから、織斑先生だと何回いえば——」

まるで学習しない俺に呆れた様子の千冬姉だったが、訂正はしない。

千冬姉と呼んだのは、家族として聞いて欲しいことがあったからだ。千冬姉もそれを汲んでくれる。

「どうした、一夏」

「千冬姉、俺、ここに入学した時、不安でいっぱいだった」

男卑の風潮が蔓延る現代。女性しかない学園で男性一人という孤独。最初は疎外感と閉塞感で押し潰れそうだった。本当を言うとも直ぐにも逃げ出したかった。だけど、そんな中にも力を貸してくれる味方がいて、やがてクラスのみんなが俺の存在を認めてくれて——。

そんな今なら、いえることがある。

「でも、今はなんとかやっていけそうな気がするよ」

俺の立場は特殊だ。どこにも逃げ場なんてない。たとえココがどんなに過酷な環境であっても、俺はココでやっていくしかない。

そんな俺を、千冬姉はずっと心配してくれていた。その千冬姉を一番に安心させたかったのだ。

「そうか。それを聞いて安心した」

和やかに微笑む千冬姉に、俺も家族のそんな笑顔が見られて安心した。

「では、その調子で来月のクラス対抗戦に向けて訓練を続けろ。最後に栄光を掴むのは怠惰なウサギではなく、邁進するカメだ。それを忘れるな」

「はい」

俺の返答に満足した千冬姉は踵を返した。その背中をしばらく見つめる。

ずっと見てきた姉の背中中は相変わらず、大きくて頼もしい。

けど、千冬姉に頼ってばかりもいられない。そろそろ自分の足で歩き出さないとな。

(よし、クラス対抗戦もがんばるか)

気持ちを入れ替え、来た道に戻るべく踵を返す。

すると、背後にアリスと箒が立っていた。

「お、どうしたんだ二人とも」

「いえ、急に教室を飛び出していったものですから、ね？」

「ああ、何かあったのかと、な。——それで何かあったのか？」

「いや、なんでもないよ。それよりアリーナに行こうぜ。来月にはクラス対抗戦もあるって話だからさ。今日もコーチを頼むぜ、アリス」
「あ、そのことですが、あなたをコーチするのは今日で終わりです。——私の役目はあなたをオルコットさんに勝利させることでした。それを成したいま、私の役目は終わりましたから」

「え？ ちょっと待ってくれ。いきなりなんだよ、それ」

てつきり、これからもコーチしてくれるものだと思っていた俺は驚愕の一言だった。

そんな俺などどこ吹く風のアリスは俺の肩に手をおく。

「大丈夫ですよ、あなたはもう戦いのイロハを知っているはずですよ」
「いや、でもよ」

「すごくいいコーチだと思っただけに、俺はショックを拭え切れ
ない。」

正直に言おう。いまの俺は未練たらたらである。

「もお、そんな捨てられそうな子犬の顔をしないでください。何か
あったら相談に乗りますし、たまには訓練にも顔を出しますから。こ
れからは篠ノ之さんと二人三脚でがんばってください」

そういつて、箒にエールを送るようなウインクを見せる。

それにどういう意図があったのか解らなかったが、箒はボツと顔を
赤くした。

「では、私はこれからやるべき事があるので。特訓がんばってください
い」

「……………おう」

くるつと来た道を帰っていくアリスに、俺はがつくしと肩を落と
す。

そんな俺を見た箒が――

「今のおまえ、妻子に逃げられた旦那みたいだぞ」

そんなことを言った。俺は言い得て妙だと思った。

第8話 英雄と女王さま

オルコットさんとの決闘が無事終わった放課後。私は自室で報告書の作成に勤しんでいた。

<白式>のこと、<ブルー・ティアーズ>のこと。それに関するあれやこれや。

その報告書が半分ぐらい書けたところで、うぐんと背筋を伸ばす。それから一夏が特訓しているであろうアリーナの方角に視線を馳せた。

(ちよつと悪いことしたかなあ)

私の任務は密偵。彼に感じてばかりもいられないので、早々に身を引いたわけだけど、子犬みたいな顔をする彼を思い出して、ほんのすこし胸が痛んだ。

せめてクラス対抗戦までは面倒を見てあげてもよかったかな。

そう思ったところでハツとする。いけない、いけない。彼に感じてないで続きを書かないと。

私は気持ちを取り直して、報告書の作成を再開する。そんな折り、私の携帯端末が鳴った。

【From】：織斑一夏

【Title】：なし

【本文】

なんだか、食堂で俺のクラス代表おめでとうパーティーをするらしいぞ。

アリスもこないか？

というわけで、会場である食堂を訪れるたわけなのだが、パーティー会場は既に盛り上がりを見せていた。規模自体はそこまで大きくないが、ちゃんとした装飾が施され、横断幕まで掲げられている。その下では、一夏がクラスメイトから祝福を受けていた。

「織斑くん、クラス代表おめでとう」

「お、おう、サンキューな」

「ほらほら、飲んで飲んで」

「おりむー、いつきだよー、いつきー」

そんな様子を遠くから見ていたら、篠ノ之さんが私の許に駆け寄ってきた。

手には分厚いISの参考書。一夏をサポートしようとかんばっているようですね。

「アリス、遅いではないか」

「ちよつと野暮用がありました。——にしても、随分と派手にやっていますね」

てつきりもつと質素かと思っていた私はやや驚き気味だった。

先の大弾幕にしてもそうだけど、料理だってちゃんとしたオードブルだし。

「どうせなら派手にやろうって布仏がはりきったらしいぞ」

「ああ、彼女が」

布仏さんとは、さきほどから一夏を「おりむー」と呼んでいる生徒だ。ダボダボな服と間延びした口調が特徴で、人を和ませる雰囲気からのほほんさんと親しまれている。

「実は今回のパーティー費用も布仏持ちなんだそうだ」

「気前がいいですね」

「本人はM資金と言っていたぞ」

「M資金？」

近場のオードブルから唐揚げを取りながら首を傾げる

GHQが占領下の日本から接取した秘密資金を、布仏さんが持っているとは思えないけど。

その時、パーティー会場に颯爽とカメラを持ったひとりの生徒が乱入してきた。

「はーい、新聞部の黛薫子です。みんな楽しんでるかなー？」

そういつてパーティー会場に入ってくるなり、新聞部の黛さんは会場を見渡した。

「うんうん、みんな楽しんでもらえていようで何よりだね。奮発した甲斐があるってものね」

その言葉にピンとくる。もしや新聞部からこのパーティー費用が出ているのだろうか。おそらく布仏さんが言ったM資金とは——MAYUZUMI資金のことか。で、その出資目的は——インタビューの場を設けるためかな。

「じゃあ、さっそく話題の新生である織斑くんにインタビューさせてもらおうかしら」

予想通り、黛さんはICレコーダーを取り出し、それを一夏に向けた。

この手の対応に不慣れなのか、一夏は戸惑う様子を見せる。

「い、インタビューですか……?」

「うんうん。ほら、織斑くん注目度ナンバーワンでしょ？ それにさっきの決闘! 『どんな人か知りたい!』って要望が多く寄せられていてね、新聞部で特集を組むことにしたの。だから、先輩の顔を立てるつもりで協力してくれると嬉しいのだけど」

『お願いっ』と日本人らしく両手を合わせる黛さんに、一夏はまた戸惑いを見せる。

しかも、食べるもの食べているので、断りづらそうだ。

「じゃあ、すこしだけ」

「ありがと！ じゃあ、さっそく。織斑くん、今回のクラス代表決定戦、どうでしたか?」

マイク代わりにICレコーダーを一夏に向ける。

「手ごわかったです。オルコットはイギリスの代表候補生でしたので」

「でも、勝ちましたよね。勝因はなんだと思います」

「き、機体の相性だったと思います。あと仲間に恵まれたことです」
言って私に目配せし「彼女がコーチしてくれたおかげで、俺は代表候補生を相手に勝てたのだと思います。彼女にはとても感謝しています」

「なるほど。アリス・リデルさんが試合の立て役者だというわけです」

ね。では、そのアリス・リデルさんに質問しますね。なぜ織斑一夏くんに協力を？」

その質問に、私は微かな違和感を覚えた。いや、違和感というほどのものでもないのだけれど、黛さんの言葉に探るようなニュアンスを感じたのだ。

もしかしたら私の背後を探るつもりなのかもしれない。ならばと私はこう言った。

「チキン南蛮を頂いたので」

「え？ チキン南蛮？ 学食の？」

「はい。それと交換条件で協力しました」

言って唐揚げを頬張る私に、黛さんが理解に苦しむ顔をする。

当然の反応だ。逆の立場だったら、私も同じような顔をすると思う。

「本当にそれだけの理由で？」

と、黛さんが一夏に視線をやる。

「はい、まあ、そうですね」

「うくん（これじゃ記事に書けないわね……。いつそ捏造して……）」

あ、この顔は何か企んでいる顔ですね。

妙なことを書かれると厄介ですし、釘を刺しておきましょうか。

「言っておきますけど、捏造された新聞記事なんて紙屑ですからね？」

「え？ も、もちろん、心得ているわ、よ？」

「ほ・ん・と・う・に・？」

「——あ、織斑くん、次の質問いいかしら！」

黛さんは俊敏な動きでICレコーダーを一夏に向ける。

逃げられた感が全開だけど、釘は刺せましたし、よしとしましょうか。

「えっと、それで織斑くん、お姉さんの織斑先生は第一回へモンドグロツソ〜優勝者でしたよね？ 織斑くんもお姉さんのように代表候補生とか目指そうと思えますか？」

「いえ。今は身の周りの事で手一杯なので。状況が落ち着いたら考えます」

「確かに今は騒がれていて大変そうですものね。では、最後に一言お願いします」

「あ、はい」

一夏は深呼吸して言葉を整理した。

「俺に女性を見下す気持ちはありません。今回の決闘も男女に優劣をつけたくて戦ったわけじゃないんです。——ただ、男って奴は存外に捨てたもんじゃないぞ」。そう思ってもらいたくて決闘に挑みました。それが伝わったようで、今は嬉しく思っています」

黛さんは満足した顔でICレコーダーの停止ボタンを押した。

「うん、いいコメントね。あなたのその言葉、みんなに伝わるようないい記事にするわ」

ぐつとICレコーダーを翳す黛さんに、一夏が「はい、よろしくお願いします」と礼を言う。

黛薫子。警戒していたけど、存外まじめな人かもしれないね。

「じゃあ、最後に写真いいかしら？」

「はい、わかりました」

掲載用の写真ということもあり、一夏は身嗜みを正した。

「アリス、変じゃないか？」

「ネクタイが曲がっていますよ、——ほら」

「お、さんきゆな」

私が右にずれていたネクタイを直してやると、彼は照れくさそうに後頭部をかいた。

その様子を見ていた黛さんが、ニヤニヤしながら断りもなくシャツターを切る。

「ちよつと。何を勝手に撮っているのですか」

「あ、ごめんね、すぐく画に為っていたからつい」

「画も何も、私はネクタイを直しただけです」

「あれ、もしかして自覚ない？ 今の『旦那を見送る新妻』みたいだったわよ。ね？」

同意を求める黛さんに、周囲のクラスメイトがうんうんと頷く。

確かに言われてみれば、映画やドラマで見たような気もするけど。

「いや、あの、私はそういう意図でしたわけではなく……あくまで親切心で」

赤面しながら弁解する私に、会場から『天然!?!』と驚く生徒が続出した。

私って天然なのでしようか。この際、天然でもいいので、誤解をしないでもらえると助かります。

「うん、わかった。そーゆーことにしておいてあげる。——じゃあ、写真撮るわね。力抜いて」

「あ、はい」

両肩の力を抜き、一夏が自然体を演出する。

黛さんはOKサインを出してぱしゃつと何度かシャッターを切った。

「うん、掲載用の写真はこれでOKね。あとはセシリア・オルコットさんのコメントと写真が欲しいんだけど、どこかしら……」

「そういえば、見かけないな」

私たちも一緒になって周囲を見渡すが、あの可憐な金髪はどこにも見当たらなかった。

もしかしてこのパーティーに参加していないのでしょうか。

実際このパーティーに参加している生徒は十数名で、クラス全員というわけじゃない。

「居ないなら仕方ないか。じゃあ、オルコットさんへのコメントは日を改めるとして。織斑くん、リデルさん、協力ありがとう。引き続きパーティー楽しんでちょうだい。じゃあね」

撮った写真をチェックし終えた黛さんが、手を振りながら会場を出ていく。

インタビュ어가終わったことで、パーティー会場は再び活気に包まれた。

その中で、一夏はひとり何かを考え込む。気になった私は声をかけた。

「どうしました?」

「あ、いや、オルコットって女尊男卑だったのかなと思ってき。確かに」

アイツは俺を見下していたかもしれないけど、根っこの部分は違うよ
うな気がするんだよなあ」

偶然にも彼が考えていたことは、私も気になっていたことだった。

「同意です。——彼女、私のこの髪を褒めてくれましたから」

「ん？ どういうことだ？」

「イギリスは私のような赤毛に対する偏見や差別意識が強い国なので
す。けれど、オルコットさんは私の髪を素敵だと褒めてくれました。
それが妙にひっかかるというか……」

社会心理学に〈群集心理〉という言葉がある。群衆の中では、人は
感情的になりやすく、また感化されやすくなるという。それゆえ、理
性的な判断力や正常な思考を失ってしまうという心理状態のことだ。
これの極限状態がいわゆる集団ヒステリー。(女尊男卑もこの〈群集
心理〉が働いたのではないかと言われている)

けれど、オルコットは差別意識がある環境で暮らしていても、それ
に付和雷同せず自分の意見を述べた。そうするには強い意志が必要
だ。そんな確固たる“自分”を持つ彼女が、女尊男卑の風潮に惑わさ
れたりするのだろうか。それが密かに疑問だった。

「うくん、確かにそうだよな……」

そう言つて、真剣に考え込む一夏に私は感心の念を抱く。

相手を理解しようとする姿勢は、とても大事なことだ。アインシュ
タインもこう言っている。

Peace cannot be kept by force.
It can only be achieved by und
erstanding. (力では平和を維持できない。理解しようと
する行動のみが平和を作る)

人は拳で語り合うこともできるかもしれない。だが、最後に必要な
のは歩み寄りと対話だ。

「二度、オルコットさんと話してみては？」

一夏は『そうだな』とオルコットさんを捜しに会場を出て行く。

その背を静かに見送っていると、私の許に一人の生徒が駆け寄つて
きた。二年の藤山陽子さんだ。

「あ、リデルさん、いたいた」

「あら、藤山さん。どうしました？」

「うん、実はあのアルバイト、もう一回できないかなって。実は欲しいバックがあるの」

一回の模擬戦で5万の報酬。高校生からすればいい小遣い稼ぎになる。それに味を占めてしまったようだ。けれど、今は特に情報を仕入りたい相手もないですし……。

「悪いですが、今は——」

と、断りかけた時、ぬくくと藤山陽子さんの背後から人影が現れた。我々が一年一組の担任、織斑先生である。

「おまえら、楽しそうな話をしているな。私にも聞かせてくれないか」ひやつとするような口調に毛穴から脂汗がだらだらと流れる。

IS学園では、学生間の金銭のやり取りが校則で禁止されているのだ。

「おまえら、ちよつと生徒指導室にこい」

「いやあゝッ」「織斑センサー許してくださいッ！」

こうして私と藤山さんは織斑先生に引き摺られながら、パーティー会場を後にした。



セシリア・オルコットという少女は美少女ぞろいのIS学園でも一際目立つ美貌を持つ。

そこで「セシリア・オルコットっていう金髪の綺麗な子を見かけなかったか？」と尋ね回ったところ、すぐに目撃情報が手に入った。

その情報を手掛かりに一夏がやってきたのはIS学園の中庭だ。

十字に切り開かれ中庭の中央には噴水が設置されており、それを囲うようにベンチが併設されている。そのベンチのひとつにセシリアの姿があった。

「オルコット、ここにいたのか」

一夏の声に、セシリアは食べていた夕食のサンドウィッチを口から離した。

「あら、織斑さん、どうなさったので？ 今晩はあなたを祝うパーティーがあるのでは？」

「ああ、それなら抜けてきた。——あ、となり座つてもいいか？」

『ええ、かまいませんが？』と了承を貰い、一夏はセシリアの隣に腰を下ろした。

「しかし、主役が抜け出しては、パーティーが盛り上がりませんわよ？」

「そういうおまえこそ、なんでパーティーに来なかつたんだ？ はっ、もしかして——」

「違います！ ちゃんと招待は受けましたわ！ ただ庶民の開くパーティーに興味がなかつただけです！ それに女王陛下から一角獣の紋章と北の領地を賜ったオルコットは領民からとても慕われていた貴族なのですからねッ！」

“わたしはハブられてない”と吠えるオルコットを、一夏はわかつたわかつたと宥める。

相変わらず、キレルポイントが判らない女だと一夏は密かに思った。

「でも、庶民のパーティーも悪くないぞ。たこ焼きパーティーとか。そりゃセレブのパーティーに比べたら、貧相に見えるかもしれないけど、意外とたのしいぞ」

たこ焼きをひっくり返す仕草をする一夏に、セシリアはくすつと笑った。

「ふふ、確かにそれは楽しそうですわね」

「ああ、きつと楽しいさ。今度みんなでやろうぜ、箒や——アリスも呼んでさ」

「アリス……」

その名を聞くなり、セシリアはムスッと機嫌を悪くした。もしや恥をかかされたことをまだ根にもっているのかもしれない。地雷を踏んだと思った一夏は慌ててフォローを入れた。

「そういえば、アイツ “おまえに髪を褒めてもらえてうれしかった” って喜んでいたぞ」

「あら、そうでした?」

「ああ。——でも、驚いてもいたな。イギリス人に髪を褒めてもらえるとは思わなかったって」

「ああ、わたくしの国には赤毛を忌み嫌う方も多いですからね。中には赤毛というだけで悪魔や吸血鬼扱いする方もおられますわ」

「酷い話だな。赤い髪の何が悪いんだよ」

「理由はいろいろありますわ。赤色は血を連想させるため “短気” や “血の気が多い” というマイナスイメージを与えやすいという理由や、キリストを裏切ったユダが赤毛だったからという理由など。宗教的な背面もあるので、赤毛差別は男性差別より根深いんですの」

「でも、おまえは違う」

きつぱりと言い切る一夏に、セシリアはちいさく頷いた。

「ええ、わたくしに良くしてくださいだった恩人が同じ赤い髪でしたから。その女性は世間がいう赤毛のイメージからはとても縁遠いです。優しく、聡明で。その女性を見ておりますと、世間に蔓延るステレオタイプを理解あさく鵜呑みにしてはいけないのだと深く思い知らされます」

セシリアの言葉に一夏の疑問が確信に変わる。やはり彼女は外見で人を判断する人間じゃない。

はたして、そんな正常な思考の持ち主が、女尊男卑に成り得るのか。一夏は訊いた。

「なあ、オルコットは男性を蔑んでいたりするか?」

一夏の問いに、セシリアは『心外ですわ』と綺麗な唇を尖らした。「わたくし、そういう方と一緒にさせていただきましたのね……。まあ、わたくしも高圧的に接してしまうクセは自覚していますし、そう思われても仕方ないのかもしれませんが……」

セシリアは苦笑を見せた。

コミュニケーションの仕方に問題があるのは自覚しているようだ。「けれど、わたくしは決してそのような人間ではありませんわ。むしろ

る社交界に入ってから、わたくしはそういう人たちをとて嫌悪しております」

「社交界に入って？」

「ええ。ISが登場し、女性の機運が高まると、各国の政府はそのモチベーションを社会発展に繋げるべく、さまざまな優遇政策を実施しましたでしょ？」

「ああ、いろいろ保障されるようになったな。学費も大学まで免除されるようになった」

「それらを始めたとした政府の優遇政策によって、女性の起業リスクはとて小さくなりました。銀行等の金融機関や投資家も女性には喜んで融資してくれるようになりましたわ」

「そりゃ国が後ろ盾になってくれればな」

「ええ。そのリスク緩和が追い風となって、21世紀は起業する女性が急激に増えました。そして成功を収める女性企業家が相次ぐと、男女の資本関係や所得関係は次第に逆転していきましたわ。いまでは“女性が出す資本で男性が働く”という企業形態が多くみられます」

「そういうえばクラスのひとりが“男は女の下で働くべきだ”って主張していたけど」

「それは女性資本が生んだ弊害ですわね。経済活動の中心が女性に移り、社会地位が盤石になると、男性の価値はとて低くみられるようになりました」

10年前、まだ女性の社会的地位が低かったころ、女性は男性の権威に身を寄せることで、安定や安心を得てきた。しかし、経済的に自立し、社会が過保護に権利を保障しはじめた今、女性が男性の権威に身を寄せる必要はなくなった。

必要なくなった者が、冷遇されるのは世の常。それが男性軽視の傾向となったとセシリアは告げた。

「結果、男性を単なる労働力としかみない女性が増加し、それと並行して過酷な労働を強いる女性経営者が急増するようになりました」

「ニュースでも聞いたことあるな」

何でも、パワハラや、過重労働、賃金未払いが平然とまかり通っているという話だ。

訴えても、社会が女性至上だから泣き寝入りするしかないというのが現状だという。

「そうやって人を奴隷にし、自分だけが甘い蜜を啜る。自分が裕福でいられれば、他はどうなってもいい。いまセレブ界ではそんな利己的な人たちが幅を利かせておりますの」

「オルコットはそういう女性が嫌いなわけなんだな」

「はい。先ほど言った通り、オルコットは領民にとっても慕われていた貴族ですの。それはギブ・アンド・テイクを大事にしていたからですわ。あくまで利得関係はWin-Winが好ましく、一方的に搾取するやり方は、貧困をつくり、争いを育てるだけなのです」

世界の争いの根底には人々の貧困がある。それは一夏でも聞いたことのあるフレーズだった。

人々は貧しさから逃れるために、戦いへ駆り立てられるのだと。

「今の女性は強権を行使する事で、男性から利益を搾取し、富を築いています。——ですが、そんな利己的な女性と同じぐらい、わたくしはタダ言いなりになるだけの情けない男性が嫌いです」

思い当たる節があった一夏は、初日の出来事を思い出した。

女性に囲まれオドオドする一夏を、セシリアは酷く批難した。残念な男、と。

「でも、どうしてそんなに？ そりゃ情けない男が好きって奴もいないだろうが」

「きつと父の影響ですわね」

苦笑いのセシリアに、一夏は『お父さん、どんな人だったんだ？』と訊いた。

「わたくしの母——アリシア・オルコットはとても優秀な経営者でしたわ。そんな母の許に婿入りした父は、優秀な母に負い目を感じ、窮屈な思いをしておりました。けれど、父は足掻こうともせずへらへらと卑屈に笑うばかり。そんな父が、わたくしはずつと嫌いでした。だからなのでしよう。ISが登場し、男性の立場が弱くなると、街を行

きかう男性たちがみんな嫌いな父親のように見えませんでしたわ」

女性至上になった現代社会。男性は背を丸め、俯きながら歩いている。そんな世の男性たちに嫌いな父親の面影を見てしまうたび、セシリアはこの世界に憂鬱さを感じるようになったという。

「だから、あなたの存在を知ったとき、この世界に光が差し込んだ気がしましたの」

「光だなんて、それは期待し過ぎだよ」

「ええ、確かにそのとおりでしたわ。わたくしはあなたに過度な期待を寄せ、そして失望しました。結局、あなたも父と同じ。卑屈に笑うだけなのかと。——でも、いまは違います。決闘で見せたあなたの勇姿。そこにはわたくしが求めていたモノがありました」

セシリアが決闘を申し込んだとき、彼の威勢はただの強がりだと思っていた。

退くに退けなくなった苦し紛れの虚勢。男性によくある見栄だと。

しかし、勝利は生半可の覚悟で得られるほど安いものじゃない。下剋上だというなら尚更だ。セシリアはそれを知っている。だから、彼に負かされた時、彼が見せた“女性に媚びない姿勢”や“逆風に立ち向う強い眼差し”が本物なのだと、認めざるを得なかった。

同時にその事実は彼女の胸を熱くさせた。

媚び諂うのじゃない。卑屈になるのでもない。苦難に立ち向かうとする直向きな男性。

父を逆連想させるそんな人物像はセシリアの胸を躍らせた。

もちろん彼はまだまだ精神的に未熟で、世間知らずな面は否めない。それでも——

「いまのあなたなら、わたくしは——」

そつと視線を逸らし、頬を赤めるセシリアを一夏が覗き込む。

「どうした？」

「い、いえ、いまのあなたなら力になっても良いと言ったのです。何か協力できることがあれば、言ってくださいな！」

照れ隠しで言ったその一言に、一夏が表情を変えた。

「ほんとうか？ そりゃ助かる」

「ええ、何でも仰ってくださいな。こう言つてはなんです、わたくしは女王陛下より一角獣の紋章を賜つた由緒正しきオルコット家の女。お婆さまやお母さまから受け継いだや莫大な富があります。望みなら大抵の事は叶えて差し上げられますわよ」

彼女の実家——オルコットは世界でも有数の資産家である。彼女が有する不動産や知的財産、企業グループの収益は強大で、大手企業の株主をミトコンドリア・イブ的に突き詰めていくと、大概はオルコットに行き当たる。

彼女に取り入れれば、将来の安泰は間違いない。でも、一夏はこう申し出た。

「じゃあ、よかつたら、ISのコーチを頼めないか？」

「ふえ？ そんなことでよろしいの？」

「いいんだ。俺には守りたいものがあるんだ。それを守り抜くために力をかしてくれ」

自分のためじゃない。誰かのために戦うその姿勢。

それは自分に貧しさの意味とへ高貴な者の義務を教えてくれたあの人ノブレス・オブリージュに似ていて、セシリアの胸をさらに熱くさせた。

「わかりましたわ。このセシリア・オルコット。あなたのコーチを引き受けましょう。ですが、よろしいので？ あなたにはもうコーチがおられるでしょ？」

「アリス・リデルさんが」と口先を尖らせるセシリア。

なぜ彼女の名がでると彼女は不機嫌になるのか、一夏には判らな

が、
「それがさ。自分の役目は終わったって言われてさ。もうコーチして貰えないんだ」

もうコーチをしてもらえない。それを聞くなりセシリアはニパーと笑った。

まるで仇敵の家が火事になったと聞いたような顔だ。

「まあ！ まあ！ そうですよー！」

「ど、どうした、そんなににんまりして……」

「いえ、なんでもありませんわよ。アリスさんって意外と薄情ですよ

ね、ふふふ」

「いや、薄情ではないと思うが」

本当に薄情な女なら、彼女の躰を買ってまで自分に力など貸してくれるわけがない。

だが、セシリアはまるで聞いてはいなかった。彼女は揚々と自分の胸へ手を置き、

「ですが、気に病む必要はありませんわ、一夏さん。女王陛下より一角獣の紋章を賜りし由緒あるオルコツト家の跡継ぎにして、イギリスの代表候補生たるわたくしがついておりますわ！」

「お、おう」

セシリアのハイテンションにやや圧倒されるも、快く引き受けてくれたようなので、一夏は何もいわなかった。ただし——些細なことなのだが——すこし気になったことがあった。

「てか、いま名前で呼ばなかったか？」

「え、あ、もしやお嫌でしたかしら？ でしたら、ミスタとでも——」

「いや全然いいぞ。代わりに俺もオルコツトのことセシリアって呼ばせてもらうな？」

「はい、ぜひ♡」

セシリアは頬を桜色にほーっと赤く染めながら、嬉しそうに両手を叩く。

こうして夜が更けていくなか、二人は語らいを続けた。

へ咆えよ、ドラゴン」

第9話 襲来のドラゴン

この場所を的確に表現できる言葉はない。

だが、あえて乏しい人の言語から適当な言葉を列挙したならば、虚空、虚無、虚構といった言葉が挙げられるかもしれない。その空間には、およそ光と呼べるものがなかった。それにも関わらず、中央に佇む——そこが空間の中央であるかは不確かだが——テーブルを視認できた。

この空間は物理を超越した概念を内包している。もし熱心な信者がこの場所を訪れていけば、涅槃と呼んでいたかもしれない。そして、何の前触れもなく現れた少年を、神に類する言葉で崇めていただろうか。

「諸君、よく集まってくれた。今宵も〈神々の宴〉を始めるとしよう」少年の言葉に呼び起さるるように、円卓を取り囲む座席から複数の幽鬼が浮かび上る。

数はおおよそ七人。容姿、年齢、性別は実に様々だ。白人がいれば黒人や黄色人もいる。若者もいれば初老もいて、男もいれば女もいる。

その「七人」は、それぞれ腰を上げ、各自少年に敬意を表した。「かけてくれ」

それぞれの挨拶を受け取った少年は手で着席を促し、自身も席に坐す。

「それでさっそくだが、諸君らの協力で進めていた〈ナルヴィ計画〉についてだ。先日、稼動テストが終了し、残すのは実戦テストのみとなった。それでだ——」

そこで少年が指をパチンと鳴らす。すると、円卓の中央にある建築物が映しだされた。

映し出されたのは、六角形状のメガフロートだ。

敷地面積は東京ドーム1個分に値するだろうか。それが計7つで

構成されている。中央には、権威を象徴するかのような近未来的なタワーが聳え立っていた。

それは、誰もが知る世界的施設——IS学園だった。

「皆、この施設はご存知だろう。そう、ココは世界が誇るISの最高学府『IS学園』だ。ここにはあらゆる操縦者が集い、様々な機種が揃っている。まさにISの坩堝。実戦データを取るには、最良の場所といえるだろう。そこでくナルヴィンの実戦データもココで収集しようと思う。どうだろうか？」

少年が7人に意見を請う。

誰一人として異論を唱える者は現れなかった。沈黙の了承だ。

「では、私がIS学園の方に赴きましょう」

と、一人の女性が、そう申し出る。

紅蓮のような紅い髪に、ヴィクトリア朝時代を彷彿させるドレスを身に纏った美女だ。傍目から見れば、時代錯誤も甚だしい格好だったが、彼女に限ってはまるで違和感がない。むしろ、額縁に入れて飾っておきたいほど容姿と衣装が調和している。

「その必要はない。君は次期〈ブリュンヒルデ〉の最有力候補だ。実力は理解している。だが、くナルヴィンは自動人形オートマトンでの無人稼動を前提にしたISだ。有人では求めている稼動データを収集できない。理解できるな？」

「はい」

紅い女性は口調を変えず答えるが、心なしか表情は無念そうだった。少年に良い場を見せそこなったのが、堪えたのだろうか。その僅かな変化を読み取った少年は、嘆息を付きながら言った。

「がっかりするな。出番は後からいくらでもある。〈魔剣〉が実用段階になればな」

「魔剣……？」

知らぬ開発コードに赤い髪の少女がわずかに首を傾げる。

「第四世代型ISの開発コードだよ。ローズちゃん」

彼女の疑問に応じたのは、エプロンドレスで身を包み、機械仕掛けのウサギ耳で頭部を装飾した女性だ。端正な顔立ちは間違いなく美

人に分類できたが、目下のクマがそれを台無しにしていた。加え、徹夜あけなのか、説明し終えるなり『わあく』とあくびをこらえる。眉はどこか気怠るそうだ。

「第四世代、ですか？」

彼女の記憶が正しければ、ISはまだ第三世代の試作機ができたばかりのはずだが。

「俺と母さんと共同開発した《展開装甲》を実装した次世代のISだ。コイツが実用段階に入れば、嫌ってほど働いてもらう事になる。その時は期待しているからな、ローズマリー」

「はい、ロキ」

少年の期待の籠った視線を向けられ、ローズマリーはわずかに破顔した。

ウサギ耳の女性を除く3人は、熱の帯びた頬で答える紅の美女をヤレヤレといった面持ちで見つめる。

そして、揃いも揃って同じ感想を漏らしていた

——織斑千冬をして、唯一の対抗馬と謳われている彼女も、ただの乙女ということか、と。

もちろん、口に出すのは憚れる。

自分たちとて彼に魅せられた人間なのだから。彼女にとやかく言える権利などない。

「では、どのような方法で〈ナルヴィ〉をIS学園に？」
話を戻す。

随伴なしにISをどう持ち込むのか。まさか無人ISそのものを入学させるわけでもあるまい。

言葉の意図を理解しかねたローズマリーが、少年に視線を遣る。少年は口の端を吊り上げて言った

「近々、このIS学園でクラス対抗戦なるものが行われるらしい。我々もそれに参加させていただく。とはいえ、俺たちに出場枠があるわけじゃない。そこで、飛び入り参加させてもらうことにした。そのための仕込みも、もう終えてある」

少年の言葉の意味を察した者から、わずかにざわめき上がる。

彼は学園の襲撃を示唆しているのだ。

確かに兵器開発にはより実戦的なデータが必要だ。

しかし、IS学園は国際的な重要機関である。そこを攻撃する。それは世界への宣戦布告に他ならない。狂気の沙汰ではないか。そう強張る者たちを代表するように、部屋の一角に座っていた初老の男が口を開いた。

短髪に口髭を蓄えた巨軀の男だ。長身で堀が深く、肩幅も広い。まとう気配は軍人のそれだ。

「御言葉ですが、そんな事をすれば、世界を敵に回します」

「何だ？ 怖いのか、イワン。ロシア連邦の大佐ともあろう男が肝つ玉の小さい事だな」

男の声音には有無を言わさぬ威厳さが含まれていたが、少年は意に介さず、せせら笑った。

「まったく、お前がそんな弱腰でどうする。ロシアの鷹派の許で、国家代表やっていたおまえの娘の方がよっぽど肝が据わっているぜ？——まあ、そんな話はどうでもいいか」

少年は話を翻した。

「なあ、イワン。俺は浅ましい正義で卑しく保身を図ろうとするこの世界に厭き厭きしていてね。大人が始めた戦争。差別を助長する価値観。それを正しいと思わせる社会。そんな時代に、俺は終止符を打つ。そのための力が、俺にはある」

少年が手を翳すと、その手にあたたかも暗黒物質ダークマターで構成されたような結晶体が現れた。

「コイツは世界を滅ぼす第二の核兵器だ。カタストロフ今やコイツ一つで世界のパワーバランスが一変する。だが、世界にはコイツが467基しか存在しない上、新たに製造する事も不可能だ」

しかし、だ。と少年は付け加えた。

「今、俺の指先にあるコイツは468基目のコアだ。その意味が解るな？ つまり俺には世界と戦う力と覚悟があるという事だ。だから、俺は世界を敵に回そうが構いはしないのさ」

世界と戦う。本来なら若輩者の世迷言か、狂人の誇大妄想だと一蹴

するところだろう。

だが、できなかった。

少年の放つ「霸王」ともいうべき貫禄が、与太話に真実味を与えていた。

「さあ、それを踏まえて選べ。俺と組んで世界と戦うか、尻尾を巻いて祖国で自棄酒ウオツカを煽るか。すくなくとも、おまえの娘は泣き寝入りなんてしなかったぜ？」

少年の深海のような深く重い瞳が、初老の老いた碧眼を捉える。

初老の男は軍人という井出立ちであり、風格もそれにそぐう雰囲気フウキョクを醸し出している。

普通に睨み合えば、少年が引き下がるのが道理。しかし、身を引いたのは初老の男だった。

「私も此処に残り、貴方に従います」

初老の男は畏まりながら少年に告げた。

けして、少年を恐れた訳ではない。ただ魅せられたのだ。瞳の奥に秘められた強い野心に。

彼に従えば、恐れるものは何もない。そう信じさせるに足るモノが少年にはあった。

「次は皆に問おう。俺に従うか否かを」

再び、少年が七人に意見を請うが、誰一人異論を挟まなかった。沈黙の了承であった。

そもそも自分たちは、世界の不条理に打ちのめされて、彼の許に集ったのではないか。

息子を冤罪で投獄された者。虐げられた男性に娘を殺されたもの。政府の陰謀に妻や母を消された者。異端として虐げられてきた者、夢を挫かれた者。ここににいる者たちは、誰もが世界に大切な物を奪われてきた者たちだ。

「諸君、賢明な判断だ。俺はうれしいよ。理解のある同胞を持って」

少年は満足そうに目を細め、掌のクリスタルを手品のように消す。

「では、語り紡ごうじゃないか。これからの世界について——」

この時、世界は、明日も、明後日も、何もかわらない日々を送れる

と、信じているだろう。

だが、世界は知らない。闇の亡霊たちが世界を貶めんと、水面下で囁っている事を。

それはきつと遠くない未来。秩序が塗り替えられる時、世界ラゲナロクに落日が訪れる。

♡

◆

✦

♠

「失礼しました……」

校則違反で生徒指導室に連行された私たちは、午前八時過ぎ、ようやく解放された。

幸いにも処罰はなく厳重注意だけで済んだ（一夏のためという事情もあったので、執行猶予をつけてくれたらしい）けど、織斑先生の教育的指導は心身を消耗させた。一緒に怒られた藤山さんもなんだか血相が悪い。

「い、一時はどうなるかと思ったよ。——あ、はい、これ、もらったお金」

「いえ、いいですよ」
差し出されたあの時の報酬——オルコットさんへの当て馬代——の返却を私は拒んだ。

確かにIS学園では学生間の金銭のやり取りが禁止されているけど、彼女は報酬分の働きをした。報酬を受け取る権利がある。

「その代わり、織斑先生には内緒にしておいてくださいね」
ウインクする私に、藤山さんはぱあと顔を明るくした。

「うん、わかったわ」

「では、私はこれから事務所に寄り道しますので、これで」
「うん、おやすみなさい」

寮と校舎の分かれ道で藤山さんと別れたあと、私は訓練機の申請のため、総合事務室がある方角に足を進めた。訓練機を借りてブランクを埋めておこうと思つてのことだ。

寮の外はすっかり日が落ちていた。この時間帯になると校舎も施錠される。大概の生徒は寮に帰宅している時間帯なので、人気も全くない。だというのに――

「だあくー！ 総合事務受付ってどこよー！」

静寂を引き裂くような叫び越えが聞こえ、私は驚いて身をすくめた。

「び、びっくりしました……。なんでしよう、いまの叫び声」

そちらに視線をやったら、長い髪を両端で結んだ少女が、猛獣のように吠えていた。

体格は小柄だか、妙に迫力のある少女だ。外見はアジア人のようだけど、どこか鋭い眼は日本人ではなく、中国人特有のものに見える。そして華奢と呼べそうな腕には、近未来的なブレスレット。

それが気になった私は中国人の少女に近づいた。

「どうしましたか你怎么了？」

「ひッ!？」

背後から話しかけたら、中国人の少女がびっくりして飛び上がった。

「ちよ、ちよつと気配もなく急に話しかけないでよ、びっくりするじゃない」

特殊作戦部にいる職業柄、日頃から足音を消すことクセがついている。

その所為で驚かせてしまったらしい。これは悪いことをした。

「すいません对不起」

「まあ、いいわ。――ところであなた、誰よ」

中国の少女はしげしげと私を見た。――って日本語をしゃべれるのですか。

「私はこの一年です。なんだか、お困りのようだったので、声をかけたのですが」

「ああ、あんたもこの生徒なの。丁度よかったわ。ちよつとここに行きたいんだけど」

そう言つて中国少女はポケットに手をつ突っ込み、乱暴な動作で一枚

の用紙を取り出す。クシヤクシヤになっているそれを見ると、なんだか彼女の性格が表れているようで可笑しくなった。

「ん、なにを笑ってんのよ、あんた……」

「いえ、なんでもないですよ。——えっと、ちよつといいですか?」

彼女の半眼から逃れるように、しわくちやになった用紙を受け取る。それを丁寧に引き延ばすと、この学園の案内図であることが分かった。そして総合事務所の場所に☆マークが記してある。どうやら、この場所が彼女の探している目的地のようだ。

「ここは学園の事務所のようなですね。私もそこに用があるので一緒にします?」

「え、そう? それは助かるわ。ここでつかいし、似たような建物ばかりだし、目印になるようなものもないしさ。おまけに人も全然通りかからないから、困っていたのよね」

「もう時間が遅いですからね」

原則八時を過ぎると学園設備は施錠されるので、この辺りをうろろしている人はいない。

いるとしたら許可をとって設備を使っている整備科の人ぐらいのものだ。

「じゃあ、さつそく案内してもらおうかしら♪」

言つて、可愛らしいツイントールを揺らす。

私は『了解しました』と事務所に繋がる通路を、彼女と並んで歩き出した。

「そういえば、名前を聞いていなかったわね。——あんた、名前は?」

「アリス、アリス・リデルです」

「そう。あたしは、鳳鈴音。こう見えて中国の代表候補生なのよ」

その言葉に私はすくなくならず驚いた。

中国の代表候補生。彼女もまたオルコットさんと同じ実力の持ち主だということか。

「では、そのブレスレットは、やはり専用機で?」

「ええ、そうよ」

ニヤと得意げに笑い、ブレスレットを見せる。それを聞くなりIS

オタクの血が騒いだ。

中国の代表候補生の専用機か。現在、旧東側で普及しているISといえ、ロシア製の第二世代型だけど、経済成長めまぐるしい中国では、独自の技術発展を遂げている。となると――

「もしかして、最新の第三世代型ですか？」

「ふふくん。まあね。ベースは第二世代型のレアンだけど」

レアンとは、中国がロシアの第二世代型<ヴォルグ>のライセンスを買い、その技術ノウハウを吸収して改良した中国の第二世代型ISのことだ。現在では中国の主力になっている。

「レアンベースなら、稼働率と実用性を重視にしたタイプということでしょうか。私見ですが、レアンはいい機体だと思うんですね。一般の評価は低いですが、高い稼働率を誇っていますし、なによりラングコストが安い」

中国の改良型という『劣化模造品チャイナコピーか』と思われがちだが、レアンに限ってはそうじゃない。私がISを語ると長くなるので、具体的な説明は割愛しますが。

「わかってんじゃない。あんたとはいい酒が飲めそうだわ。あたしのは鈴って呼んでくれていいわよ」

自国の機体を褒められたのが嬉しいのか。鈴が上機嫌にバンバンと私の背中を叩く。

そんな調子で中庭の渡り廊下を歩いていたら、鈴が急に叩いていた手を止めた。

「どうしました？」

鈴は中庭の中央をすごく険しい顔で睨んでいた。

それはまるで恋人の浮気現場を目撃したような……。はて、なにがあるのでしょうか。

鈴に倣って目を凝らすと、中庭の奥に知った顔が二つ並んでいた。

「一夏とオルコットさんじゃないですか」

「あんた、あの二人知ってんの？」

「ええ、ふたりはクラスメイトですから。なんだかとてもいい雰囲気ですね」

すっかり打ち解けた感じのふたりは、何やら楽しげに語り合っていた。綺麗な花々と月明かりの演出もあって、すごくいい雰囲気だ。遠目からは恋人同士に見えるかもしれない。

「なんだか、邪魔しちや悪そうですね。鈴、そろそろ行きましようか」
あんまりじろじろと盗み見るのも良くないので、私はそつと場を離れようとする。

けれど、鈴はじつと二人を睨み付けたまま動こうとしなかった。

「鈴？」

「……………」ムー

ダメだ。私の言葉が左から右に抜けている様子だ。

なにをそんなに睨む必要が——とそこで、私はもしやと思った。

「鈴、彼のが気になるのですか？」

「バツ!? んなわけないでしょ!？」

ようやく私の声が届いたのか、鈴がぴよんとツインテールを揺らして飛び上がった。

すごくわかりやすい子ですね。東洋人は感情が読めないっていいますけど。

「そ、そんなことより、さっさと事務所にいくわよッ！」

「え、ええ」

フンつと鼻息を荒げながら、大股で歩き出す鈴の後をあわてて追う。

結局、総合事務受付の窓口まで彼女はずっと不機嫌なままだった。



「ふあ〜……………」

翌朝、私はすごく眠たそうな表情で教室に続く廊下を歩いていた。

結局、一夏VSオルコットさんに関する報告書は朝までかかってしまった。おかげで得られた睡眠は2時間足らずだ。眠いたらなくて、気を抜くと直ぐに夢の世界だ。

(ふあゝ、仮病でも使ってサボりたいです……。)

でも、こういう時に限って織斑先生の授業ばかりなんですよね。

織斑先生の授業で仮病なんて使った日には、鬼の補習を受ける羽目になる。ああ、無情です。

「おはようございます……」

HR 5分前。遅刻ギリギリに私が登校すると、なぜか教室がいつも以上に賑わっていた。

なんででしょう。面白い話題でもあるのでしょうか。

「みなさん、おはようございます」

顔を出した輪の中に、たまたまいた一夏が『おはよ』と手を挙げた。その右隣にいた篠ノ之さんも『ああ、おはよう』とあいさつをくれる。

ただ左隣にいたオルコットさんだけは、ぷいっとそっぽを向いた。

私、嫌われていますね……。自業自得ですけど。それはさておき、

「で、なにかあったのですか」

「実は、隣のクラスに転入生がいるんだってよ。その転校生が二組の代表になったんだって」

転校生と聞いて、私は昨晚に出会った中国人の少女——凰鈴音を思い出した。

「ああ、中国の代表候補生でしょ？ 専用機持ちらしいですよ。第三世代の」

「そうなのか。さすがアリス。もうチェック済みか」

偶然、手に入れた情報だったけど、一夏は感心した顔を見せた。

逆にムーツと睨んできたのはオルコットさんだ。

「わ、わたくしだって、それぐらいの情報、持っておりますわッ」

「ふん、どうだかな。アリスとの情報戦に負けた奴がそう言ったところで怪しいものだ」

篠ノ之さんがオルコットさんの痛いところを突く。

私に味方してくれるのは嬉しいのですが、そんなことを言うと私への風当たりが……

「ぐぬぬ……」

ほら、オルコットさんが悔し涙を浮かべながら、睨みつけてくるじゃないですか。

目は完全に「これで勝ったと思わないことね」と言っている。

「でもさ、やっぱり代表候補生っていうぐらいだし、強いんだろ？」
オルコットさんに睨まれ苦笑する私を尻目に、一夏が関心ありげに腕を組む。

そこでオルコットさんが「待っていました」と自慢のポーズを取った。

「ええ、ええ。それはもうきつと強いこと間違えありませんわ。なんせわたくしと同じ代表候補生ですから。ですが、ご心配なく一夏さん」と私をチラ見して「イギリス代表候補生のわたくしがついておりますわ。必ず一夏さんを優勝に導いてさしあげます」

“だから、わたくしを頼りになさって”というように、オルコットさんが自分の胸に手を置く。

ただ視線だけは私に向けて。へんな対抗意識を持たれたなあと思つた、そんな折り――

「そう簡単にいくからしらね？」

窓辺から活発そうなハスキーボイスが聞こえてきて、私たちはそちらを向いた。

廊下側の窓辺で頬杖をついていたのは件の転校生――凰鈴音だ。

「鈴じゃないか」「鈴じゃないですか」

ハモった私と一夏は互いの顔を見た。

「一夏は鈴を知っているんですか？」

「おう、中学の時、一緒の学校だったんだ」

「そういうことよ」と鈴は頷いた。

なるほど、なんかいろいろ腑に落ちた。昨晚、鈴が不機嫌になった理由とか。

「で、今日は宣戦布告に来たってわけよ。二組のクラス代表としてね」
鈴がぐつと拳を私たちに突き出す。その手に備わったブレスレットを見せつけるように。

だが、私たちの関心はそのブレスレットじゃなく、彼女の背後に向

いていた。理由はすぐにわかると思いますが。まあ、見守っていてください。

「悪いけど、クラス対抗戦の優勝はあたしとく甲龍くがもらうからね」

「おい」 ポン ↑ 鈴の肩に誰かが手を置く音。

「だから、負ける覚悟しておきなさいよ」

「おい」 ポン ↑ 鈴の肩に再び誰かが手を置く音。

「勝つのはあたしだから。って、さっきから鬱陶しいわね！ いま宣戦布告の途ちゅー!?」

さきほどから呼びかけてくる相手を睨めつけるなり、鈴は戦慄して気を失った。

それもそのはず。鈴がガンつけた相手は——我らが担任、織斑千冬だったのだから。

「おい、おきろ」

「は、はい！ 起きますー！」

千冬さんの一言に再起動を果たす鈴。我らが担任の前では、気絶さえ許されないのである。

「先程、宣戦布告の途中と言ったが、それは私への宣戦布告とみていいのだな、んん？」

目を細める千冬さんに、鈴が壊れたブリキ人形のようにこちらを向いた。

「……………」（助けて）

瞬きを利用した鈴のモールス信号を解読し、私は首を横に振った。

「ごめんなさい、鈴。私たちじゃどうすることもできません。相手が悪すぎます。」

「おい、聞いているのか？」

「は、はい、もちろん、耳の穴、かつぽじってよく聞いてます！」

さきほどの猛虎のような威勢はいずこへ。まるで借りてきた猫みたいに大人しくなる鈴。

千冬さんはやれやれという具合の表情を作って、しっしっ手を払った。

「もういい、ホームルームが始まるぞ、早く二組に帰れ」

「あ、はいっ！ わかりましたッ！ じゃあ、あたしはこれでッ！」
低姿勢でへこへこしたあと、鈴は二組に走った。が、急にUターンして帰ってくる。

「い、一夏、また来るからね。覚えてなさいよ！」

どうやらチンピラみたいな負け台詞を残すために引き返してきたらしい。

そんな鈴に一夏が『おう、またあとでな』と手を上げる。鈴はニヒツと嬉しそうに手を振った。

そんな二人を篠ノ之さんとオルコットさんがどのような顔で見ているかは、ご想像にお任せします。

第10話 進撃のドラゴン

午前の授業が終わって昼休み。俺は大きく背伸びして、一息ついた。

「さて、ようやく昼か」

ここに入学して半月。どうにか基礎知識ぐらいは覚えたが、未だ理解が及んでいない分野も多い。特にアーキテクチャーの分野に関してはちんぷんかんぷんだ。座学はこういう授業ばかりだから肩も凝る。

俺は固くなった身体を解しながら、ふと通路側の窓——鈴が宣戦布告した窓を——見た。

「しかし、あの鈴がIS学園に転校してくるとはなあ」

しかも、アリスによると今は中国の代表候補生らしい。一年見ない内に立派になったものだ。

千冬姉への苦手意識は克服できていないようだったけど。

「おい、一夏、ちよつといいか」

肩をほぐす俺の許にやってきたのは幼馴染の箒だ。

箒は俺のところに戻ってきたり、ごほん咳をして神妙な顔をした。

「さ、さつき女子について詳しく聞きたいのだが」

さつきの女子？ ああ、鈴の事か。

そういえば、鈴と箒はふたりとも俺の知り合いだけど、二人には面識がなかったな。

「その事について、わたくしも詳しく知りたいですわ」

と、箒に続いてやってきたのはセシリアだ。

あの決闘以来、セシリアは積極的に話しかけてくれるようになった。そのセシリアも鈴のことが気になるのだろうか。そりゃ鈴は専用機持ちだし、ここの学生なら興味も出てくるだろう。現に俺も鈴の専用機について知りたいし。

「そうだな。でも、まず昼飯食いに行こうぜ」

鈴について話すのは一向に構わないが、駄弁って昼食時間を減らすのはおしい

腹も減っていることだし、休み時間には限りがある。時間は有効に使おうぜ。

「まあ、お前がそういうならいいだろう」

「そうですね。行って差し上げない事もなくってよ」

「決まりだな。じゃあ、あとアリスも誘うか。箒たちもいいよな？」

「ああ、私はかまわないぞ。いつものことだからな」

「まあ、あまり気乗りしませんけど、一夏さんがそういうならやぶさかではありませんわ」

快く了承する箒に対し、どこか不満げな様子なのはセシリアだ。

うくん、俺には優しくなったセシリアなのだが、アリスに対しては
いまだツンケンしたままなんだよなあ。俺としては仲良くしてもら
いところなのだが。

ちなみに、箒はセシリアをどこか警戒している感じだ。『セシリア
が新しいコーチになってくれた』と告げた時なんか、『父親の再婚を
聞いた娘』みたいな顔をしてたな。俺はおまえのパパか。

ともあれ、俺は左後ろの席で、腕を枕代わりに眠りこけるアリスに
声をかけた。

「おい、アリス、メシいこうぜ」

「……………」スウー スウー

「うわ、爆睡してやがんな。なんだ、寝不足なのか？」

そこで俺は面白いこと思いついた。

俺はクラスに『静かにしてくれ』と人差し指を立て、息を大きく吸
い込んだ。

「火事だ あ！ ！」

「！ ？」

アリスの耳元で大音量の火災発生（ウソ）を告げるなり、彼女は椅子の上で飛びあがった。

そして、勢いあまってイスと一緒に後ろへひっくり返る。

がっしやーんと盛大な音を鳴らしたあと、アリスは教室を見渡して、こう言った。

「ひ、火元は！？」

周囲に気を配るアリスを中心に笑いが起こったのは、いうまでもないだろう。

その後、事情を話し、俺たちは顔を真っ赤にするアリスを連れて、食堂に移動した。



場面は変って食堂。俺は食券販売機で日替わりランチを選択する。隣では箸がきつねうどん、セシリアが洋食ランチ。そしてアリスはというと、ムスッと不機嫌そうな面でメニューを選んでいった。どうやらさっきのことを根に持っているらしい。

「そんなに怒るなって」

「怒りますよ。危うく火災警報器を鳴らしに行くところだったんですからね」

「あぶねえ。そんなことされた日には千冬姉に大目玉だぜ」

ちなみに火災警報器は押すと消防署にも通知されるから、気をつけろよ。学校だけの騒ぎじゃすまないからな？　押すなよ、絶対押すなよ、フリじゃないからな。

「しかし、あんな派手に驚くとはな」

あ、ダメだ。ひっくり返るアリスを思い出したら、また笑えてきた。俺の思い出し笑いが収まらないでいたら、アリスが恥ずかしそうに視線を寄こしてきた。

「き、今日は寝不足で注意力が下がっていただけです。いつもは違うんですからね」

「わかった。わかった。じゃあ、お詫びに昼食を奢ってやるよ。それで許せて。な？」

「いいでしょう。それで今回の件は水に流してあげます」

相変わらず食い物に弱いアリスは、言うなり券売機のメニューの品定めを始めた。

IS学園の学食は和洋中を網羅し、メニューが豊富である。選びだすと意外と迷うのだ、これが。アリスもタダ飯が食べるとあって、メニューの選択に余念がない。

「うくん、ここの学園ってメニューが豊富で何を食べようか、いつも迷うんですよね」

「じゃあ、俺と一緒にしたらどうだ？ 唐揚げ定食、うまそうだろ？」

「あ、いいですね。では、そうします」

メニューが決まったところで、券売機に紙幣を入れる。そこでアリスが何かをみつけて「お？」という顔をした。アリスが見つけたのは、新メニューのタグが貼られたチョコプリンという品だ。

「一夏、これも追加で」

「おい、定食をオゴってやったろ？」

「いいじゃないですか、ケチ言わないでくださいよ」

アリスはとんとと自分の身体をぶつけつ、「ね？」と上目使いでチョコプリンをねだる。

うくん、コイツには世話になったしな。180円のプリンぐらい買ってやるか。

「その代わり、俺にも一口くれよ？」

「え？」

おい、人に払わせておいて、自分はプリンを一人占めする気か！

「おまえな、金を出すんだから一口ぐらいいいだ、ろ！」

さっきの仕返しだというように、今度は俺がアリスに肩をぶつける。すると、アリスは『ダメです』とぶつけ返してきた。俺は『いいだろ』とまたぶつけ返す。

それから二人で『いいだろ』『ダメです』『いいだろ』『ダメです』の押し競まんじゅうをしていたら、後ろの上級生が壁をドンと殴ってこちらを睨んできた。

「あ のー、早くしてもらえませんか

ね？」

やべ、怒られた。俺らがなかなかメニューを決めないから、イライラしたのかな。

そのわりには、食券を買い終えた箸やセシリアまで壁を殴ってるけど。

ともかく、これ以上の押し競まんじゅうは他に迷惑が掛かりそうなので、とりあえず先に食券を買う。

それを食堂のおばちゃんに交換してもらい、俺たちは品を持って箸たちと合流した。

「わりー、またせたな、箸、セシリア」

「まったくだ。危うく、壁が一枚ダメになるところだったぞ……」

「アリスさんたら本当に油断も隙もないんですから、フフフフフフフフフフフフ」

赤くなった拳を撫でる箸と縦^ドロール^ルを高速回転させるセシリアに、俺たちは顔を見合わせた。

一体、俺たちが何かしたっていうんだよ。周りの連中も『天然こわい』みたい貌をして……。饅頭こわいのパロか？

「ま、とりあえず、席を探そうぜ」

昼時ということもあり、食堂は人で溢れかえっている。無駄口を叩いていると席が埋まってしまおうので、俺たちは早々に移動を開始した。そんな時である。

「やっと来たわね。一夏」

俺たちの進路方向にどくんと現れた生徒は——二組の鈴だった。

それも、ずっと待っていたのか、片手のラーメンが完全にのびている。

「やれやれ」 という思いに駆られた俺は、鈴にこう言った。

「待たせて悪かったな。じゃあ、一緒にメシ食うか？」

「仕方ないわね。あんたがそういうなら、一緒に食べてあげなくもないわよ？」

と言いつつも、鈴のツインテイルはなんだか嬉しそうに揺れていた。

というわけで、私たちは鈴を交えて昼食を取り始めたわけなのだけ
ど——

「そういえば、鈴、いつ帰国したんだ」

「帰国——って言い方も変だけど、まあ、こっちに来たのは昨日の晩
よ」

「それなら一言、言ってくれよ。迎えにいったのに」

「バカね。そんなことしたらサプライズにならないじゃない」

「サプライズって……。もしかして、今朝のアレか？」

「どう？ 驚いた？」

「変にカッコつけてて、引いたわ」

「があー!!」

「吠えんな、吠えんな。驚いたのは確かだよ。それに嬉しかったぜ、鈴
と再会できて」

「え？ そ、そう？ じゃあ、サプライズ成功？」

「ああ、成功だな。じゃあ、今度は弾たちも驚かせてやろうぜ」

「あ、いいわね。——じゃあ、あそこの、駅前のファミレスでやりま
しょうよ」

「あ、あそこ潰れたぞ」

「え、マジ!？」

とまあ、こんな具合に一夏が鈴とばかりしゃべるもんだから、篠ノ
之さんとオルコットさんの不機嫌メーターは針が振り切れそうな勢
いだった。

ちなみに私も二人ばかりしゃべられるので困っていた。だってオ
ルコットさんが腹いせに私の唐揚げを勝手に食べるんですもん。6
個もあつたのに、残り3個ですよ？

これ以上、犠牲を出さないために、私は二人の会話を遮った。

「あの、一夏に鈴、私たちもお喋りに混ぜて下さい」

「そうだな、こうして集まったのだから、二人だけで会話するのはどうかと思うぞ」

「ええ、アリスさんのいう通りですわ。わたくしたちを除け者にしないでくださいませ」パクツ

散々仲のいいところを見せ付けられたせいか、二人の言葉にはどこか刺々しかった。

私もちよつと心が荒んでいる。オルコットさん、また私の唐揚げ食べましたね？（6/2）

「そうだな。悪い、悪い。鈴が相手だと、つい話が弾んじまうんだ、昔から」

「ええ、昔からそうだったわよねー、昔からー」

ちよつと鈴。挑発的な流し目をオルコットさんたちに向けるの、やめてください。

わたしの唐揚げが完食されてしまいます。（6/1）

「——じゃあ、改めて紹介するな。こいつは凰鈴音。俺のセカンド幼馴染だ」

「幼馴染だど？」

セカンド幼馴染。それに一番早く反応したのは、同じ幼馴染の篠ノ之さんだ。

一夏と幼馴染なら、自分とも幼馴染であるのが普通だし、二人に面識がないのはおかしい。篠ノ之さんが怪訝そうなのも当然だ。

「あゝ。えつとだな。箒が引越していったのが、小四の終わりだっただろ？ 鈴が転校してきたのは、小五の頭なんだ。それで中二の時の終わりに中国へ帰ったんだよ」

なるほど。入れ違いで知り合ったから、お互い面識がないのですか。

それにしてもセカンド幼馴染とは。この調子だとサード幼馴染とか、果てにはファイナル幼馴染みとかでてきて、バトルしそうですね。なんだか売れないティーンズノベルみたい。

「んで、こつちが箒。前に話しただろう。小学校からの幼馴染で、俺が通っていた道場の娘」

「ああ、あの篠ノ之博士の妹さんだっけ？」

鈴は不審者でも見るような目付きでジロジロと篠ノ之さん（特に胸）を観察した。

篠ノ之さんも篠ノ之さんで、負けじと鈴を睨み返す。

「まあ、なんだ、よろしくたのむ、凰鈴音（幼馴染は私だけではなかったのか！）」

「あ、よろしく、篠ノ之箒さん（なんつーうらやましい胸してんのよ、この娘！）」

一見、友好的に見えた二人だったが、視線の間にはバチバチと火花が散っていた。

しかも、背後で龍と虎が睥睨し合っていて、妙な迫力がある。

そこへ除け者にされていたオルコットさんが勇ましく介入した。

「ごほん。わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生！」

胸を反り、片手を腰に添えて言い放つ姿は相変わらず様になっていた。

けれど、鈴がその威光に怯むことはなかった。

「あんたは確か……」

「あら、わたくしのことをご存じあるようで？」

昨日の夜、鈴は一夏と一緒にいるオルコットさんを目撃している。けれど、それを知らないオルコットさんは自分の知名度によるものだと勘違いしたらしく、得意げに髪を手の甲で弾いてみせた。

「まあ、当然ですわね。わたくしは女王陛下より一角獣の紋章を賜った由緒正しきオルコットの跡継ぎにして、イギリスの代表候補生ですもの。なんでしたら、わたくしと出会えたこの日を記念日にしてもよろしくってよ？」

「二夏、あんたどれくらいISを動かせるの」 ↑ 関わりとめんどくさそうと思った。

見事なスルースキルを発動する鈴に、オルコットさんがその場で地団駄を踏む。

このままだと唐揚げ（6／1）が危ない。

私は彼女を和ませようと、持っていたわり箸を額に押し付け一発芸を披露した。

「オルコットさん、見てください。——ユニコーン！」

オルコットさんは「は？」と一瞥くれるだけで、クスリともしなかった。

まだです。まだ諦めませんよ。

「デストロイモード！」

私は額に押しつけた箸を左右に割り、V字を作る。

でも、やっぱりオルコットさんはクスリともしなかった。

い、一夏にはウケしたんだけどなあ……。

「もしかして、あなた、オルコットの家紋をバカにしてらっしゃるの？」パク

そして私の抵抗むなしく、オルコットさんの胃に収まる最後のから揚げ。

『ああ……』と大切なものを守れず嘆く私、それを無視して、話は進んでいく。

「まあ、ほどほどには使えるかな。つつても鈴ほどじゃないけどな」

「じゃあさ、あたしがISの操縦、教えてあげよつか？」

鈴がそう提案した瞬間、篠ノ之さんとオルコットさんがドンとテーブルを叩いて立ち上がった。

その衝撃で揺れるテーブル。そこから慌てて味噌汁を退避させると、篠ノ之さんが凄厲剣幕で鈴に詰め寄った。

「勝手な事言うな。一夏に教えるのは私の役目だ！ なんせ私は一夏の幼馴染だからな。気兼ねないというものだ」

「勝手を言わないでくださる？ 一夏さんを指導するのは、このわたしですわ。なんせわたくしはイギリスの代表候補生ですもの。わたくし以上に適したコーチはおりませんわ」

ハモリながら、いかに自分がコーチに相応しいか主張する篠ノ之さんとオルコットさん。

あの、お二人とも、失念していませんか、鈴の立場を。

「なら、あたしが一番適任ね。だって、あたし一夏の幼馴染で、代表候

補生だもん」

『ぐっ！』

自分の言葉を逆手に取られた二人は、これまた見事にハモる。

そう、自分たちのアドバンテージを主張しても、鈴が有利になるだけなのだ。そう言った意味でいうと、鈴は二人の天敵かもしれない。それでもふたりは食い下がった。

「だ、だとしてもだ！　そもそも一夏は一組の代表だ。敵の施しは受けん」

「そうですね、一夏さんは一組の代表。二組がでしゃばらないでください」

「なによ、敵に塩を送っちゃいけないわけ？」

「COシューオーを送るですって!?!　もしやガス攻撃をなさる気!?!」

「違うわよ、バカ。情けを掛けてやろうって言ってるの！」

「ふん、敵の情けは受けん」

「そのとおりですわ。それにわたくしがおりますもの。手助けなど必要ありませんわ」

ふくむ、篠ノ之さんもオルコツトさんも完全に鈴を敵視していますね。

まあ、篠ノ之さんにしても、オルコツトさんにしても、鈴は自分の優位を揺るがしかねない天敵なわけですから、一夏から遠ざけたい気持ちは解らないでもない。

でも、大事なものは「一夏がどうしたいか」だと思っただけです。

というわけで、私はテーブルの下で一夏の足を軽く蹴った。どうするんですか、と。

「まあ、鈴、気持ちはうれしいけど、今回は遠慮しとくよ」

「えっ？」

豆鉄砲を喰らったハトのような鈴に、一夏は理由を告げた。

「実は昨日、セシリアにコーチをお願いしたんだ。セシリアも協力するって強く言ってくれていて、当面は彼女に訓練をみてもらおうと思ってるんだ」

「ふふくん、そういうことですわ！」 ↑完全勝利したセシリアUC

「だから、その、なんだ、すまん。代わりとってはなんだけど、今度どっか遊びに行こうぜ」

断ったことへのケアなのだろう。そう提案する一夏だが、鈴はむくれたままだった。

「だけど、一夏がそう言った以上、聞き入れないわけにはいかず、鈴はしぶしぶ頷いた。

「あつそ。わかったわよ。——あとから後悔しても遅いんだからね」
苦笑する一夏を置いて、ラーメンを勢いよくズルルとすすする。

そのまま平らげた鈴は、ガタンつと席を立ち、『ふんツ』とそそくさテーブルを去っていった。

「俺、悪いことしたかな?」

「まあ、仕方ないんじゃないですか?」

複数コーチの場合、コーチ同士の連携が重要になってくる。けど、先の口争いを見る限り、それは見込めそうにない。最悪、足の引っ張り合いなりかねないなら一人に絞る方が建設的だろう。

鈴の気持ちを考えると、ちよつとかわいそうだったかもしれないけど。

「あとで私がフォローしておきますので、一夏は訓練に集中してください。」
「さっ」

「すまん、恩に着る」

「着なくていいですよ。——対価はすでに支払われています」

言って、買ってもらったチョコプリンを味わう。プリンの甘味の中にビターな味わいがあつて、ちよつと大人な味がした。おいしい。から揚げは全部取られたけど、これが食べられたからよしとしましう。

「うまいか?」

こくこく。おいしそうに頷く私を見て、一夏が「そうかそうか」と微笑む。

そんな私たちをムスつと見ていたオルコットさんが、こほんと可愛く咳をした。

「あの一夏さん、これからの訓練についてお話したいんですけど」

「おう。そうだな」

「今日はクロス・グリットターンを習得して頂こうと思えますの。そこでわたたくし、〈白式〉のカタログスペックを基に、機動の適正出力を計算してみましたの」

「いふなり大量の資料を取り出し、『ご覧になって』と一夏に見せる。なにやら事細かに記載されたそれに一夏は「んん?」と目をチカチカさせた。

「見て頂いた通り。〈白式〉のスペックでは、クロス・グリットターンの時のP I C出力は23%。スラスタ―出力は37%、バランス―出力は67%が最も好ましく、機動がいつそう美しくみえますわ。習得時にはこの値を意識してもらってですね――」

あ、一夏がこつちを見ていますね。目が「これ、どう思う?」と訊いている。

オルコットさんは理論派なのでしょう。体で覚えるタイプの一夏とは相性が悪いかもかもしれませんね。

(まあ、これだけの資料を一晩で作ったんです。そのがんばりは汲んであげてください)

(その気持ちはすげーうれしいんだがな……)

なおも理路整然――というより数式と数値に基づいた機動術のコツを熱心に解説するオルコットさんに、一夏の表情は険しくなっていく。私はチョコプリンを味わいながら、見守り続けた。

第1話 逆襲のドラゴン

放課後。来月のクラス対抗戦に備え、俺とセシリアは第三アリーナに向かっていた。

しかし、これから訓練だというのに、俺は軽い頭痛に悩まされている。

原因は俺の手にある大量の資料だ。これはセシリアが作成してくれた《シールド無効化攻撃》の戦術フローチャートなのだが、その複雑な分岐に俺は頭がパンクしそうだった。

「これ、全部おぼえないとダメか？」

「ええ。全て暗記してくださいませ。できればクラス対抗戦までに」「わ、わかった……」

資料に目線に戻し、大量の分岐条件と睨めっこして、また頭痛に悩まされる。

この戦術チャート。ルートが樹齢百年の大木ばりに枝分かれしているのだ。そこに分岐条件が加わると、かなりの情報量だ。それをセシリアは2週間足らずで覚えろという。泣けるぜ。

「これも一夏さんのためですわ」

そういわれると、俺も何も言えなくなる。

コーチがこう言っているのだから、俺は信じて従うしかない。

「ん？」

「あら」

俺たちがアリーナに到着すると、<打鉄>を装備した筈が待っていた。

<打鉄>は堅牢な防御能力を備えた純日本製の第二世代型ISだ。武者を模ったフォルムと刀を模した専用ブレードを装備しており、それが実に日本のお国柄を表している。比較的初心者にも扱いことから、学園の訓練機として採用されていた。

「お、今日は訓練機が使えるのか」

学園の訓練機は生徒の数だけ揃っていない。なので、専用機のように「いつでも好きな時に訓練」とはいかない。本来、機材が生徒分な

いというのは教育機関としてかなり致命的なのだが、I Sの数が決まっているので増設は難しいらしい。

「ああ、そういうことだ。久しぶりに手合せしてくれないか」

「ん？ ああ、いいぜ」

俺は〈白式〉を展開し、唯一の武器《雪片式型》を抜刀した。それを正眼で構える。

冷然とした雰囲気周囲に広がり、空気が緊迫した。おそらくこれが殺気と呼ばれるものだ。

「では、尋常に勝——!?!」

緊張感がピークに達したその時、青い物体が箒の視界を遮った。

遮った青い物体は、セシリアの専用機〈ブルー・ティアーズ〉だ。

「お待ちなさい。一夏さんのコーチ役を任されたのは、このセシリア・オルコットですよ。わたくしに断りもなく勝手なことされては困りますわ。こちらにはこちらのスケジュールがありますのよ」

「ふん、セシリアの頭でつかちなやり方は一夏に向かん！ こいつは戦いの中で成長するタイプだ！ ずがくとやるのが肝要なのだ。そもそも私はお前を一夏のコーチと認めてなんかいない」

「認めてもらおうとも思いませんわ。それにわたくしの理路整然としたカリキュラムこそ一夏さんに必要ですわ！ 貴女こそはひとりですか〜ンとでもガガ〜ンとでもやってなさいな！」

「分ならず屋め。退かないというなら、押し通すまでだ！」

何でそうなるんだよ。——って思っている内に、箒が袈裟斬りを繰り出した。

セシリアはそれをあらかじめ展開しておいたショートブレード《インターセプター》で受け止める。そして後方に跳躍して剣撃の勢いを殺しつつ、射撃に必要な間合いを確保した。

「無理を通せば、道理が引つ込むとお思いで？ でしたら、大きな間違いですよッ」

言うが早く、流れるような動作でBTレーザーライフル《スターライトMkⅢ》を展開し、連続で引き金を絞る。相も変わらず正確無比な射撃だったが、箒は超高速で飛来する光の弾丸を〈打鉄〉の強固な

物理シールドで凌ぐ。

お、さすが箒、剣道をやっているだけにはあり、反射神経と動体視力が抜群にいいな。

「——つて感心している場合じゃない！ おい、俺の訓練はどうした！」

と、叫ぶがバトルフィールドを上空へ移した彼女らには聞こえない。

ああー、なんで、こうなるんだよ。そりやセシリアの指導法には俺も一言あるが(箒のやり方にも一言ある)、肝心な俺を置き去りじゃ本末転倒だろうが。

「こうしてみると、アリスがどれだけうまくやっていたか、わかるな……」

「私がどうしました？」
「うおっ」

噂をすれば影。気づくとアリスが隣にいて、俺は腰を抜かしそうになつた。

しかしアリスは気にせず、目を細め、上空を凝視する。

「模擬戦ですか。でもあれ、篠ノ之さんとオルコットさんですよね。なぜ二人が戦っているのです？ もしかして“技は見て盗め”というヤツですか？」

「いや、違うんだよ。なんか、俺の指導方針の違いで衝突してさ。箒は実戦派で、セシリアは理論派みたいなんだ」

「はは、そうなりましたか」

苦笑するアリスは、なんだかこうなる事を予測できていたような口ぶりだった。

「なあ、アリス、何かいい解決法はないか。これじゃ訓練もままならん」

「はつきり意思を伝えるのが一番だと思います。これは一夏の訓練なのだし」

「でも、聞き入れてくれるか？」

箒もセシリアも我が強い。特にセシリアは自分の指導法に並々な

らぬ自信を持っている。

素人の俺がとやかく言ったところで、すんなり聞き入れてくれるか怪しいものだ。論破される未来しか見えない。

「その時は強気に出ればいいのですよ。あなたには強みがあるのですから」

「強みってなんだよ。ふたりより優位に立てる要素が、俺のどこにあるっていうんだ」

「ふふ、一夏ってホント鈍いですよね」

なんだ、こいつ、いきなり意味深な含み笑いをしやがって。

まるで俺が相手の惚れた弱みを握っているみたいな言い草じゃないか。

「まあ、それはそれとて、鈴のことなのですけど」

「おお、どうだった。やっぱり断ったこと、怒ってたか？」

「ええ、多少はね」

「はは、そうか。なんだか、仲間はずれみたいなことしちゃったしな」
「でも、この状況を見てみると、強ちあなたの判断は間違っていないかっ
たと思います」

俺そっちのけで模擬戦(?)をするふたりに、アリスが苦笑をもらす。

確かに昼食での出来事を見る限り、鈴がいたら確実に三つ巴だった
だろうな。

「でも、ちゃんと理解しているようでしたから、すぐ収まるでしょう。
私も弁護しておきましたから。——ただ、また何か企んでいるよう
でしたので、その注意を呼びかけに」

「そのために来てくれたのか。——で、企むってなにをだ？」

「そこまではわかりません。けど、また騒がしくなるんじゃないです
か?」

「まじかよ」

今日の昼間の出来事を思い出し、軽く頭痛がするのを感じた。

俺は真面目にISの訓練をしたいだけなんだが……。

そのとき、《スターライトMkIII》の流れ弾が俺たちの近場に着弾し

た。

その衝撃で、砂嵐が舞い、俺たちの周囲に暴風が駆け抜ける。

俺はISを装着しているので平気だが、生身のアリスはそうもいかない。

特に風に弱いスカートなんかは……。

「きゃー!」

捲れる上がるスカートを慌てて押さえるアリスだが、ISの方が早かった。

モニターに映し出されたのは、鮮明かつ拡大化された逆三角形の布。

スカートの中は——白式、つまり純白だった。

「み、見ました?」

見た。ワンポイントのリボンがカワイイ、白のショートツだった。——と言えるわけもなく、気まずくなった俺はアリスから視線を逸らす。けど、それがいけなかった。

「やっぱり見たんですね。しかもハイパーセンサーの視覚拡張機能^{ダイレクタビユー}まで使って!」

「いや、これは意図して使ったわけじゃないんだ。ISが勝手に」
俺は慌てて証拠^{ウィンドウ}を消そうとする。

く、こんな時に「保存しますか」とか訊いてくんない。しねーよ! 早く消せ!

「もお、一夏のスケベっ!」

と、真っ赤になりながら、アリスが綺麗な脚を蹴り上げる。

こら、そんな事しても自分が痛いだけだぞ。

「あうッ!」

ほら、言わんこっちゃない。生身でISの装甲を蹴りや、そうなるだろう。

っていうか、片足でケンケンするな。またパンツ見えるぞ。

「まったく何をやってんだよ、おまえは……」

「だって、恥かしい目に遭わされたのですもの。仕返しぐらいしたくなります」

「そうか。まあ、そうだな」

派手にパンツを視られたのだ。女なら蹴りの一発ぐらいかましたくなるだろう。

しかし、こういう場合、ラッキースケベが痛い思いをするもんなんだけど——ん？

↑——警告：＜ブルー・ティアーズ＞にロックオンされました——↓

俺が「へ？」と呆けた顔をした瞬間、セシリアの狙撃が俺の腹部を打ち抜いた。

シールドで身体は無事だが、勢いは殺せない。俺はコントみたいにひっくり返った。

そんな俺を見下すようにすうーと下りてくるセシリアの＜ブルー・ティアーズ＞と箒の＜打鉄＞。

その光景はまさに女神光臨。でも微笑は浮かべていない。代わりに血管の青筋を浮かべていた。

どうやら女神たちは大変ご立腹らしい。

「一部始終、拝見させて頂きましたわ。乙女の秘密を覗くとはいただけませんね」

「男の風上にも置けない奴め。その性根、私が叩き直してやる」
こうして俺はわりを食うのだった。

けど、俺の中で密かに芽生えた「そうだ、これでいい」という安心感はなんだろうか。



特訓を終えた俺は、満身創痍の身体を引きずりながら帰路に就いていた。

アリスのパンチラ騒動のあと、ふたりは『やっぱり一夏さんは実戦の方がよろしいですね』『そうだろ？』と意気投合するやいなや、結束して俺に襲い掛かってきた。

二人は訓練だと憚らなかつたが、アリスは虐待行為^Dと言っていた。

訴えたら勝てるとも。

今回は甘んじた——俺にも非はあったわけだし——が、これが続けば正直体がもたんな。

ともあれ、訓練が終わるころには、ふたりともやりすぎたと反省してくれたので、次回は大丈夫だろう。

「遅かったじゃない、一夏」

俺が疲れた足取りで自室に辿りつくくと、部屋の前で鈴が佇んでいた。

自前のポストンバックをクッション代わりに足を組む鈴は、まるで不貞腐れて家を飛び出した家出娘のようだ。断じて口には出さないが。出したら蹴られる。

「お、鈴、今特訓が終わったところなんだよ」

「ふくん、随分とクタクタね。どんだけハードな訓練してきたのよ」

「一度に複数を相手する特訓とか、かな」

「随分と実戦的な訓練を積んでんのね。ちよつと感心したわ。じゃあ、これあげましょう」

そう言つて鈴がスポーツドリンクを投げる。しかも、ぬるいやつ。

さすが俺の幼馴染。俺は「スポーツ後の飲み物はぬるいもの」と決めているのだ。

「おお、悪いな、鈴。サンキューな」

「いいわよ、お礼なんて」

礼を告げる俺に、鈴がプイッと視線を逸らす。その頬はちよつと赤かった。

普段はこんな気遣いをしない鈴だから、恥かしがって照れているのかもしれないな。

「まあ、立ち話もあれだし、中に入れよ。茶ぐらいならご馳走するぞ？」

「じゃあ、そうしようかな」

『おう、そうしろ』と俺はドアのロックを解除して、鈴を部屋に招き入れる。

そして『好きなところに掛けてくれ』と声をかけ、俺は茶を淹れる

べくキッチンに向かった。

「と、ところで一夏、あんたって一人部屋なの？」

俺のベッドの淵にこしかけ、鈴がそんなことを訊いた。

「いや、私と住んでいる」

そう答えたのは俺じゃない。音も無く現れた箒だ。

おい、いつ帰ったんだ。『ただいま』くらい言えよ。びっくりするじゃないか。

「私と住んでいる」

お、二回言った。なんだ？ 重要な事なのか？ それはわからないけど、俺のルームメイトは箒だ。なんでも、稀有な俺の安全面を考慮した結果らしい。二人の方が襲撃され難く、でも知らない女性と二人部屋にするわけもいかなかったため、幼馴染の箒が選ばれたわけだ。

「へえ〜そうなんだ」

「うむ、そうなのだ」

「じゃあ、あたしと部屋代わってくれない？」

と、にっこりん。

あ、箒の眉がぴくぴくと動いた。なんだか怒ってる様子だ。

「なぜ、私ができるような事をしなくてはいけない」

うん、箒にしてはもつともな意見だ。

「えっと、ほら、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？ その辺あたしは平気だから」

「けっこうだ！ 別にイヤではない！ その……い、一夏限定で、だが」

なんで俺を見る。さては、お前など男性とみていない的なことか？ 別にかまわないが。

てか、鈴の奴、愛用のポストンバックを持ってきたって事は、始めからココに住むつもりだったのか？

「ともかく、あたしはどうしてもココに住みたいの。だから譲ってよ」
「断る！ 私もこの部屋が気に入っているのだ。譲る気は毛頭ない」

なおも熾烈を極める幼馴染の口論。これじゃ関係は険悪になる一方だな。

何かこの場を収めるいい方法はないだろうか。——あ、いいこと思いついたぞ。

「わかった。じゃあ、今日からここに住めよ」

「お、おい、一夏っ!」

俺は詰め寄ってくる箒を「まあ、待って」と手で制し、続ける。

「じゃあ、まずこの寮監に許可をもらわないとな」

そういつて俺は寮監に電話をつなぎ、その受話器を渡す。

鈴は「まあ、そうよね」と受け取った受話器を耳にあて「あのもしもし」と言った。

『私だ。その声は嵐か。どうした』

「ち、千冬さん!」

やっぱり今日転校してきた鈴は、この寮の管理人が千冬姉だと知らなかったらしい。

通話相手が千冬姉だと判るなり、鈴はびくんと背筋を正した。

『ここでは織斑先生だ。——で、どういう要件だ。こっちは忙しい。手短に話せ』

「えっと、実は部屋を移動したいなく、なんて」

鈴はおどおどしながら、相手の様子を窺うように要件を告げた。

『部屋の移動希望か。確かおまえは二組のハルミントンと同室だったな。特に素行や生活態度が悪いと聞いていないが。何か不都合でもあるのか? あるなら考慮してやるが』

「いえ、ないです……。ただ一夏と一緒に部屋のなりたくてですわ……」

『ふむ、気持ちはわからんでもないが、無理だ。お前の言い分を聞いてしまえば、他の生徒も同じことを言い出しかねない。それでは際限がなくなるうえ、周囲にも迷惑が及ぶ。よって部屋の移動は許可できません。わかったな。——では、私は忙しい。切るぞ』

それつきり受話器からはツーツの音しか聞こえなくなった。

鈴は「やってくれたわね」という顔をしながら、受話器を俺に渡す。俺は得意げに言った。

「というわけだ。千冬姉がそう言ってんだ。諦めろ」

「そうだそうだ」と腕を組んで頷く筈に対し、鈴は「ぐぬぬ」と唸る。そんな鈴の機嫌を直そうと、俺は鈴を床に座らせ、茶と菓子で持て成してやることにした。

「まあ、そう怒るなって。遊びに来るぐらいならいつでも来ていいからさ」

「むく、そういったからには毎日きてやるッ」

「おいつー!」

「まあまあ、筈。——そういえば、おばさん元気にしているか?」

と、淹れた茶を渡しながら、俺はちよつと気になっていたことを訊ねた。

実は鈴の両親は離婚しているのだ。それが転校するきっかけで、今は中国にいる母親が親権を持つているらしい。今の時代、女性の方が経済的に裕福だから。とはいえ、女手一つというのは何かと大変だ。それを案じての質問だ。

「うん、元気よ。ちよつと元気すぎるぐらい。じゃなきや、ここに入学したりしないわよ」

「そりやそうか。じゃあ、またおばさんの酢豚、食わせてくれよ。あれすっげーうまかったし」

「お母さんのだけ? あ、あたしも酢豚、うまく作れるようになったわよ」

そこで鈴は一拍の沈黙を置き、唐突に頬を赤めた。

「ねえ、一夏、あの時の、約束、覚えている」

「約束?」

「そう、あの時の約束。覚えているよね?」

鈴は急に恥ずかしそうに上目使いでこちらを見てくる。それは只ならぬ期待を寄せる目だ。

同時に間違えを許させない目でもあった。

俺は慌てて過去の記憶をサルベージする。イメージとしては、たくさん小さい俺が図書館を走り回っている感じだ。

約束、約束。そう言えば、昔、小学生の時に何か約束してたような……。

「もしかして、あれか。小学生の時に約束した、料理の腕前が上がったら、毎日酢豚を――」

「そ、そうっ！」

と、行つて立ち上がる鈴に、俺は続きを言った。

「――おごつてくれるつてやつか？」

確か小学生の頃にそんな約束をした覚えがある。

我ながらよく覚えていたな。偉いぞ、俺。サルベージしてくれたミニ二夏たちにも感謝だ。

「……はい？」

「だから、鈴が料理をできるようになったら、メシをタダでご馳走してくれるつて話だろ？」

そのとき、パシんつと唐突に乾いた音が木霊した。

その音が鈴の平手打ちによるものだど判つたのは、俺の左頬が痛み出したあとだ。

(はっ……?)

何が起こつたかわからず、面を食らう。が、その戸惑いは直ぐ怒りに変換された。

特訓で疲れていたのもある。そこに先の同居騒動だ。いい加減、俺も不満が噴出した。

「なにすんだよ、いきなりひっぱ叩きやつて！」

「あんたが悪いんでしようが！」

「悪いつてなんだよ！ たかが約束のひとつぐらいで殴ることないだろ！」

「……………たかがですつて?! たかがじゃないわよ、バカ!!」

口を強く結んだ鈴は、瞳に目一杯涙を溜め込んだ。俺を叩いたであろう右手は、血が滲みそうなぐらい強く握られている。それでも気丈に振舞おうとしているのが、どこか痛々しい。

流石に言い過ぎたか。

そう思った矢先、鈴は置いてあつたポストンバックをひったくつて部屋を飛び出していった。

開けられた自動ドアがカシャツと閉まる。そのドアが再び開くこ

とはなかった。

「……何なんだよ、アイツ」

何が何だかさっぱりだ。俺が何をした。約束だつてちゃんと思いつ出したじゃないか。

なのに、殴られた挙句、約束程度であんなに怒鳴られなくちゃいけないんだよ。

「二夏、お前な……」

筈の呆れた声が聞こえてきたが、俺は聞こえないフリをした。

俺は悪くない。でも、誰かの言葉を聞けば、俺が俺の正しさを信じられなくなりそうだった。

(ま、時間が解決してくれるだろ……)

俺と鈴は幼馴染だ。今までくだらない喧嘩を何度もしてきた。その度、時間が解決してきてくれた。きつと今度も時間が解決してくれるはずだ。早ければ明日。遅くても明後日には、いつもの通りの鈴が俺の前に帰ってくるはずだ。

だが、俺は後に知る。己の甘さと愚かさを。



食事を終えた私は、自室に続く廊下を歩きながら二機のISカタログを見比べた。

〈ラファール・リヴァイヴ〉と〈打鉄〉。

IS学園には、この二機が訓練機として採用されているが、どちらをレンタルするか迷っていた。

私には専用機があるけど、公然で使えない。けどブランクが空きすぎると、いざという時にハマをしかねない。そこでココの訓練機でそのブランクを埋めておこうと思ったのだ。

「ねえ、〈レットクイーン〉はどちらがいいと思います?」

《……………》

本来なら直ぐに的確な意見をくれるのだが、なぜか今回は返事がな

い。

もしかしてシステム不備とかじゃないですね？ 困りますよ、ここじゃ整備できないのに。

「あの、〈レッドクイーン〉？」

《——ハニーには私以外のISに搭乗してほしくない》

ようやく返ってきた言葉がそれであった。しかも、あからさまに不服そうな声。

「どうやら、私が〈赤騎士〉以外のISに乗ろうとしたから、機嫌を損ねたらしい。」

機械が機嫌を損ねる。通常では考えられないが〈レッドクイーン〉は普通のAIじゃない。

彼女の頭脳には脳神経回路網ニューラルネットのメカニズムを利用した演算処理装置ニューロコンピュータが使われており、喜怒哀楽といった感情の表現を理解できる。彼女はチューリングテストにも合格した極めて人間的なAIなのだ。

閑話休題。

「気持ちは解らないでもないですが、〈赤騎士〉を公に使用できない以上、他のISに頼らざるを得ないでしょ？ わかりますよね？」

《状況は理解している。でも、乗ってほしくない》

もお、なんてワガママなAIなのでしょうか。

初期の頃は違ったのですが、ロシアでの一件以来、このようなですよね……。

「じゃあ〈コア〉のダミー国籍が手に入るまで我慢してください」

《むう……》

〈レッドクイーン〉はわかったような、そうでもないような生返事で答える。

私は勝手に『納得した』と結論付け、カタログに目を戻した。

「ここはやっぱり〈打鉄〉ですね」

〈ラファール・リヴァイヴ〉の多様な武装は捨て難いが、〈打鉄〉はここでもしか搭乗できないレア感がある。というのも、日本は装備や武器を原則国外に輸出しない国家なので、純国産の〈打鉄〉に乗るに

はここか、自衛隊に入隊するしかないのだ。

「では、〈打鉄〉と」

ポケットから申請用紙を取り出し、その場でチェックを入れる。

《……浮気者》

AIがやきもち焼いていますけど、そんなの知りません。

「あとは、装備する武器ですが——ん？」

私が自室の前に辿りつくと、見知った顔の少女がドアの前で佇んでいた。

まるで捨てられた仔猫のような風情。その少女は2組のクラス代表——鳳鈴音だった。

「鈴、どうしたのですか、こんな所で」

声を掛けても反応がない。活発な彼女らしくない反応に、私は嫌な予感を覚えた。

すぐさま彼女の許に駆け寄り、様子を伺う。彼女の頬には涙の跡が見えた。

もしかして、泣いていた？

「鈴？」

再度の呼びかけに鈴はハツとした。ようやく私の存在に気付いたようだ。

「アリス……」

「中に入りますか？ 暖かいモノ、用意しますから」

とりあえず涙の理由は訊かず、彼女を自室に入るよう勧める。

私の部屋の前に居たという事は、私を頼りにきたという事。なら、力になってあげないと。

「うん……」

私は力無い声で頷く鈴を部屋に招き入れた。

第12話 慟哭のドラゴン

「何か飲みますか?」

鈴を部屋に招き入れた後、私はソファア―にちよこんと腰掛ける鈴に訊いた。

「何でもいい」

うん。何でもいいというのが一番困るのですよね。じゃあ、ホットミルクにしましょうか。

私はマグカップに牛乳を注ぎ、電子レンジで温める。その間、沈黙が続いた。

「はい、どうぞ。熱いから気をつけてくださいね」

「ありがとう」

私が差し出したホットミルクを、鈴はちびちびとそれを啜り出した。その姿はまるで仔猫だ。

ミルクを飲み終え、落ち着きを取り戻したところで、私は本題――涙の訳にふれた。

「それで何があったのです?」

「実は一夏と喧嘩してね。でもね、悪いのは一夏なの。アイツが約束を覚えていないから」

「約束?」

私がオウム返しのように聞き返すと、彼女は頬を赤くして俯いた。「実はね、小学校の時『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる?』って約束したの」

「毎日……。もしやプロポーズだったりします?」毎日、味噌汁を作ってくれ』みたいな」

私の推測に、鈴は耳まで真っ赤になった。どうやらの射たようだ。

しかし『毎日酢豚』とは、変わったプロポーズですね。鈴らしいと言えば鈴らしいですけど。

「それで、あたしはそのつもりだったんだけど、でも、あいつついたら『あたしが料理上達したら毎日、酢豚をおごってもらえる』って勘違いし

「……」

「その勘違いで喧嘩を？」

鈴が頷く。

大方の事情が呑み込めたところで、私は内心で苦笑をもらした。見解の食い違いからくる諍い。典型的な痴話喧嘩の原因ですね。第三者から意見させてもらえば、どっちもどっちのような気もしますが。「でも、あの一夏ですよ。ここは大目に見てあげては？」

一夏の女性に対する鈍感ぶりは怒りを通り越して呆れるレベルだ。意図を汲みとりきれなかった一夏も悪いけど、それは鈍感な相手に回りくどい言葉を選んだ鈴の失敗もすくなくからずある。

それを踏まえ、今回は温情で許してはどうか。そう提案したが、鈴は首を横に振った。

「いや。だって、あいつ、約束のこと『たかが』って、言ったんだもん……」

そう言つて、悔しそうにまた目頭に涙を溜め込む。

それでも泣かまいと気丈に振舞おうとする鈴に、私は初めて同情の念を抱いた。

付き合い始めた日、初めてキスした場所、結婚記念日、エトセトラ。女は些細な記憶、思い出を大事にする生き物だ。対して男はそういった事にとことん無関心で無頓着だ。だから平気な顔で『忘れた』『覚えていない』と大切な思い出を否定する。それが女性にとって酷く堪らない事だというのに。

だから、鈴も大事な思い出を軽率に扱われ、悲しい思いをしたのだろう。

私も同じ女なので、彼女の気持ちは痛いほど理解できた。

「そうでしたか。それは辛かったですね」

私は鈴の隣に場所を移し、慰めるように彼女を抱きしめてやる——優しく、慈愛を込めて。

すると、鈴の中から何かの楔が外れたような音がした。

「うわあああ〜ん」

声を上げて泣き出す鈴を、私は母親のように優しく撫で続けた。

彼女が泣き止むまで、ずっと。



それからどれくらいの間が経っただろうか。永久にも感じたが、刹那であったような気もする。感傷的になっていた所為か、時間の感覚が曖昧になっていた。

「で、これからどうします?」

すすり泣く声が止んだところで、私は腕の中にいる鈴に訊いた。

こんな事があっても、彼女は一夏の事を想っている。なぜなら、彼女の恋心は此れしきの事で醒めてしまうほど弱くないはずから。もし簡単に醒めてしまうような恋ならば、三年間も彼の事を想い続けてはいない。

だからといって、このままでいい訳でもない。

いくら強い想いがあっても、行動を起こさなければ、何も変えられないのだから。

「土下座……」

私の腕の中で、鈴がボソツと漏らした。私は聞き間違えかと思ひ、聞き返す。

「いまなんと?」

「一夏に土下座させる! あたしにこんな思いをさせたんだから当然の報いよ」

鈴はガバッと私の腕から離れ、充血した目でそう意思表示した。泣いてすつきりしたのだろうか、その口調はいつもの天真爛漫な鈴だ。元氣を取り戻してくれたのは嬉しいけど、私は鈴の要求に苦笑いだ。

「今の彼が素直に謝ってくれるとは思えません?」

そもそも無理矢理謝らせても、根本的な解決にはならないだろう。そういうのは和解と呼ばないし、相手が非を認めない謝罪に意味はない。

「じゃあ、どうしろっていうのよ」

「では、しばらく様子を見ましようか。一夏だつて鈴を泣かせた事に何か感じているでしょう」

まず冷静になることが大事だと思う。いま二人とも感情的になっているから、顔を合わせても怒りが再燃するだけだろう。けれど、時間を置き、客観的になれば、自分の非にも気づけるかもしれない。そう思つてのことだ。鈴も「そうする」と頷いた。

「さて——」

時計を見るば、時刻は10時前になっていた。

IS学園では、原則10時以降の外出が認められていない。そろそろ鈴を部屋に帰した方が良いのだが、妙な保護欲に囚われていた私は、ある提案を持ち出した。

「ねえ、鈴、よかつたら泊まつていきませんか？」

寮外での外泊は許されていないが、寮内での外泊は認められている(ただし、無断外出にならぬよう寮監に一報入れないといけないが)。着替えもあるようだし問題ないだろう。

私の提案に、鈴は『うん、じゃあ、そうしよつかな』と答えた。

「寮監には私から連絡を入れておきます。鈴は先にシャワーでも浴びてください」

『ありがとう』という礼を背中で聞き、私は寮監の部屋に内線を繋ぐ。

しばらくして、聞き覚えのある声が聞こえてきた。織斑千冬先生の声だ。

『私だ。どうした？』

「今日、風鈴音さんが私の部屋に泊まるので、その連絡を」

『わかった。風だな。………もしかしてうちの愚弟が何かやらかしたのか？』

一拍おいて発せられたその声音は、教師というより保護者——姉のようだった。きつと『鈴の外泊に自分の弟が絡んでいるのでは？』と推測したのだろう。さすが一夏の実姉、鋭い。

けれど、織斑先生も忙しい身だ。要らぬ心配を掛けさせるのは心苦

しい。私は織斑先生に悟られないよう平然を装った。

「いえ、そういう訳ではなくて、ただ意気投合しまして」

『そうか、ならいい。つまらない事を聞いたな、忘れてくれ』

そう言つて、織斑先生が内線を切る。

仕事では生徒の心配、プライベートでは身内の心配。オンでもオフでも苦勞が絶えませんね。

(本当に「苦勞様です」)

彼女に勞いの言葉をかけながら、私は受話器を置いた。

それから浴室から戻ってきた鈴と入れ替わる形でシャワーを浴びに行く。

私がシャワーから戻ると、鈴が肉球模様の入った可愛らしいパジャマでくつろいでいた。髪もいつものツイーンテールじゃなく、下ろしたストレートだ。アジアンビューティーというのだろうか。そこには普段と違う愛らしさがあった。

「綺麗な髪ですね」

「そう?」

と、得意げに艶やかな髪を手の甲で靡かせてみせる鈴。

そんな雑談を繰り返す事一時間。私たちはベッドに身体を埋め、眠りについた。

「ねえ、アリス? まだ起きてる?」

午前1時を回った時間。夜も更けたころ、暗闇の中に鈴の声が聞こえ、私は瞼を開いた。

「ええ、起きてますよ」

「そう……。ねえ……。あのさ……。よかつたら、そっちに行ってもいい?」

静かに呟かれた声は、まるで甘えるような声音だった。もしかしたら一夏の事を思い出して、人肌が恋しくなったのかもしれない。そう思うと、受け入れるのに何のためらいもなかった。

「ふふ、さびしがり屋なのですね、鈴は」

「う、うるさいわね」

と、茶化しつつも、私は枕を抱いてやってきた鈴をベッドに迎え入れた。

向かい合うように寝そべった鈴は、どこか切なそうな表情だ。喧嘩のあとは、いつだって切ないものだ。仲の良い人との喧嘩なら尚更。そんないじらしい鈴に私の悪戯心が顔を出した。

「ねえ、鈴。鈴は一夏のどこが好きなのですか？」

私の質問に鈴の小さい肩がぴよこんと跳ねた。

「な、なによ、急に！」

「少し気になつて。言いたくないなら、いいですよ？」

「いや、まあ、そうね。自分の意思を貫こうっていう信念があるところかな。ほら、今、世の中は女尊男卑でしょ？ 大概の男は女の顔色を伺つて弱腰でいるけど、あいつは女に媚びたりしないで、自分の意見をはつきりと言うの。そういう真っ直ぐなところ、素直にカツコいいなあつて思う」

なんとなくだが、鈴の言いたいことを理解できた。

確かに一夏には、そういう周りに左右されない強い意志がある。私も彼のそういうところは好感が持てるし、だからこそ、オルコツトさんの決闘に力を貸した。

「あと、さりげなく気を遣ってくれる優しさも好きだし、たまに見せる子供っぽい笑みも好きかな。もちろん顔も好きだし、あの暖かい手も、優しい声も好き。それから——」

「ふふふ」

鈴があまりにも幸せそうに語るの、私は和み過ぎてしまった。

「な、なによッ！ なんて笑うのよッ！」

「すみません。鈴って本当に一夏の事が大好きなんだなあつと思いまして」

「だ、大好きってほどじゃないわよ！ す、好きのちよつと上ぐらいよ！」

「好きのちよつと上？ ふふ、よく言いますね。プロポーズまでしたくせに」

プロポーズするのは、大好きな証拠、愛している印。

それをしてしまった鈴はもう言い逃れできない。言い訳は見苦しいだけだ。

「大好きなんですよ？ 一夏の事が」

「ぐう……そ、そうよ！ 大好きよ！ あたしは一夏のことが大好き！ 悪い!？」

形振りかまわず、気持ちを吐露する鈴は、暗闇の中でも判るぐらい真っ赤だった。

そんな彼女に、私は肩を竦めて言う。

「とんでもない。人を好きになることは素晴らしいことです。今度は一夏の前で言いましたよ」

「バカじゃない！ そんな事したら恥ずかしくて、一夏の前に顔出せなくなるじゃない！」

「そう言いつつも寂しくなって、ひよっこり顔を出しちゃうのが鈴でしょ？」

「ぐっ……」

言葉に詰まった。まったく鈴は可愛いですね。これが恋バナの楽しさなのでしょう。

楽しくなってきた私は、もつと鈴の話を聞きたくなってきた。

「ねえ、よければ話ついでに一夏との馴れ初めを聞かせてください」

調子に乗った私のリクエストに、鈴は『仕方ないわね。特別よ?』と語り口を切る。

「あれは5年ぐらい前だったかな。両親の都合で日本に来て、そのまま日本の学校に入学する事になったんだけど、ほら日本人って中国人を毛嫌いしているところがあるでしょ?」

「そういう人もいるかもしれませんがね」

近年、日中関係は冷え込む一方で、日本の常任理事国入りや領土問題が持ちあがるたび、中国国内では過激な反日活動が頻発する。それあって中国人と聞いただけで毛嫌いする日本人も少なからずいるのだろう。もちろん全てがそうだという訳ではないと思うけど。

「んでさ、その入学した学校でも、あたしが中国人だからって『リンリ

ンってパンダみたいな名前だな、笹食べよ、笹』とか、『中国人なのになんでアルつけないんでアルか?』とか、そういう下らない誹謗中傷を受けたの。さすがにあたしも頭にキてき、喧嘩になって……その時、味方してくれたのが一夏だったの」

その時を思い出してか、鈴は『えへへ』と嬉しそうに笑った。

きつとそれは鈴にとつて忘れられない日の記憶なのだろう。

「それでアイツつたらさー、カッコよく名乗り出たくせに、返り討ちにされちやつてさー。まあ、多勢に無勢だったから仕方なかったんだけどね。そのあと、あんまりにボロボロだったから『あんた傷だらけだけど、大丈夫?』って訊いたの。そしたらあいつ『傷だらけなのはおまえの方だろ』って、あたしの胸の内を察してくれてね。……すごく嬉しかった」

「それが二人の馴れ初めですか?」

「うん。たぶん、そう。あの時から一夏のことを意識するようになったと思う」

「想いを告げようとは思わなかったのですか?」

「思ったわよ。でも、怖かったの。それでずっと胸の裡に留めていたら、お父さんとお母さんが離婚してね。親権を得たお母さんが本国に帰ることになったから、あたしもそれについて行って……。それで想いを告げられないまま離れ離れ。その時『なんで告白しなかったんだー!』って自分の臆病さ加減に腹が立ってき。そんな自分を変えるつもりでIS操縦者に候補したの」

「そうだったのですか」

「で、代表候補生まで上り詰めたし、自分なりにちよつと強くなれたかなって思ったから、思い切つて一夏に告白しようとココに入学を決めたの。なのに、あのバカ!」ゲシッ

「ひゃん。鈴、私を蹴らないでください」

「あ、ごめん、ごめん、ついうっかり。でも、今思うとちよつと失敗したかなって思う。いきなり押しかけて、約束のことを持ち出して……。大事なことだったんだから、もつとゆっくり思い出して貰つてもよかったのに」

「もしかして、焦っていたんですか？」

鈴と出会ってからの、この二日間。鈴の行動は何かと忙しかった。コーチを申し出たり、部屋に押しかけたり。何かを得ようと躍起になっていたように感じる。

「たぶん、そうかも。——あたしき、ここに来るまでいろいろ期待していたのよ。でも、いざ入学してみたら、クラスは別々だし、イギリスの代表候補生とはイイ感じだし、他に幼馴染がいるし、なんだか〝これヤバイかも〟って思えてき」

「それでコーチ役を買って出たり、押しかけ女房したり？」

「お、押しかけ女房……。まあ、そうよね。コーチを断られたから、焦って一夏の部屋におしかけて。でも、結局うまくいなくて、苦し紛れに約束のこと、問質しちゃったわけ。その結果がこの有様よ」

「はあく、ホントあたしってダメなやつよ……」と自嘲する鈴を、私は不器用だと思った。

でも、その不器用さに愛おしさを感じた私はこう言った。

「うまく言えませんが、そういうダメなところも全部ひつくるめて、あなたの魅力だと思います」

「そう？ そんなこと言われたの、はじめてよ。ありがとう、アリス。——ところで、あなたは好きな人とかいないの？」

一転。言うなり、鈴が興味津々な目つきで、私を覗き込んでくる。ふっ。さては私の好きな人を聞き出して、なじる気ですね。でも、お生憎さま。

「残念ながら、私は未だ恋というモノをした事がありません」

「だったら、さっさとしなさいよ！」

「そう言いますが、このIS学園でどう恋をしろと？」

IS学園の男女の比率は、ざっと1対450。女が出会いを求めるには聊か環境が悪すぎる。

なにより、進んで恋人を作ろうという気概がない。すくなくとも、私が誰かを本気で好きになるまでは、そんなスタンスが続くだろう。「さて、そろそろ寝ましようか。明日も早いですし」

「ちよっと、人の話だけ聞いておいて自分は話さないなんてズルイわ

よ。せめて好みのタイプぐらい聞かせなさいよ！」

「ふあー、眠い、眠い。鈴も早く寝ないと明日に差し支えますよ」

私は鈴の追及を逃れるように布団をかぶった。

「もおっー」

不平たらたら鈴だったが、頑な私に諦めをつけ、同じように布団を被る。

そして『おやすみなさい』と身を寄せ合い、私たちは眠りについた。

♡

◆

♣

♠

時は流れ、4月も下旬。鈴と喧嘩してから1週間になる。

あれからというもの、鈴は一言も口を聞いてくれない。それどころか俺を避けている節すらあった。当初は時間が解決してくれると思っていた俺だが、さすがに「このままじゃまずい」と肌で感じていた。でも、具体的な解決策が思い浮かばず、俺は途方に暮れていた。

「はあく……」

「そんな顔していると、幸せが逃げますよ」

俺がため息交じりでアリーナに向かってしていると、アリスが声をかけてきた。

そういえばアリスって最近、鈴と仲良いよな。

何かあったら相談に乗るって言うてくれていたし、ちよつと相談してみるか。

「丁度よかった。実はアリスに相談した事があるんだ」

「私に相談？　鈴のことですか？」

ああ、例の事を知っているんだな。じゃあ、話は早い。

「そうなんだ。でき。なんていうか、どうしたらいいのか、わからなくて」

「それなら大丈夫ですよ。鈴は怒っていますが、嫌っているわけじゃありませんから」

「でも、滅茶苦茶シカトされているぞ？」

「鈴が無視しているのは、催促ですよ。あなたに謝らせたいためのね。なので一言『ごめん』と心から謝れば、許してくれますよ」

「でも、別に俺は悪い事をしたわけじゃないしなあ……」

そう、ちゃんと約束を覚えていたのだから俺は悪くない。

頭を下げる事に躊躇はないけど、謝る理由がないまま謝罪するのはお断りだ。

「でも、鈴は涙を流して泣いたのですよ？ 知っていることだと思いますが、鈴は女優のように涙を操れるほど器用な娘じゃありません。そんな彼女が流した涙には、深い意味があつたはずです」

謝罪を洩る俺の目を見据えて、アリスが蒼い瞳で真っ直ぐ告げる。その言葉に俺はハッとさせられた。

そうだ。鈴は器用な女じゃない。むしろ不器用で、辛い時だって強がりを見せるやつだ。

その鈴が顔をくしゃくしゃにして泣いた。

なぜだ。解っている。俺が鈴を傷つけたからだ。

なのに、俺は泣かした罪悪感に苛まれるのが怖くて、自分を正当化する術ばかり探していた。

結局、俺は自分のことしか考えていなかったんだ。

泣かした女を蔑ろにする。俺は男の風上にも置けない最低野郎じゃないか。

「無理に謝れとはいいません。ただすこしだけ歩み寄ってははどうでしょう。お互い、意地を張ったまま受け身の姿勢を取っていても、関係は改善しませんよ」

「そうだな。殴られた理由はまだわからないけど、俺は鈴に『たかが約束のひとつ』って言っちゃまった。まずそのことだけでも謝らないとな」

なんだか、やるべき事がわかって、足取りが軽くなった気がした。でも、とりあえずは訓練だな。それを終えたら鈴の許へ謝りに行く。あいつが好きだった中華まんを買っていくのもいいかもしれない。

そんな事を考えながら、第三アリーナAピットのドアのセンサーに

触れる。すぐさま指紋認証が行われ、開放許可が下りた。中に入る。すると、部屋の中央に例の当事者——鈴が立っていた。

「ゴ、コンニチワ……」

「お、おう、こんにちは？」

なんだ、ぎこちない会話は……。

つーか、なんでずつと俺を避けていた鈴がここに？

(——あ、さては鈴もアリスに諭されてここにきたな)

きつと俺たちを見ていて、業を煮やしたのだろう。

その予想を裏付けるように、アリスが『ほら』と肘で突いてきた。わ、わかつてるよ。

「えっと、鈴、そのさ、この前の約束のことなんだけど。あの約束、おまえにとつて大事な約束だったんだよな。なのに「たかが」なんて軽率なこと言つて、本当にすまなかつた。すごく反省してる」

言い辛いそうに、でも、ちゃんと誠意を持って詫びを入れる。

鈴も鈴で間の抜けた声を上げた。

「え、あ、その……ふ、ふん！ 悪いと思つているなら土下座ぐらいしてみせなさいよ！」

う、土下座か……。でも、ここで引き下がったら逆戻りだし、背に腹はかえられないか。

俺が意を決し、膝を着こうとしたとき、『鈴！』とアリスの強い声が飛んできた。

「鈴、一夏は自分の態度を改めて、こうして詫びてきたのです。土下座なんて強要しないで、寛大な心で受け入れてはどうですか？」

打つて変わつて、アリスは朗らかな声音で続ける。

「それに鈴の本心が、一夏の土下座を望んでいない事ぐらい、私にはわかります。だって、貴女は『女性に媚びない一夏がカッコイイ』と言つたじゃないですか。ここは意地を張らず、素直になりましょうよ。ね？」

アリスに諭された鈴は、しばし沈黙したあと、バツの悪そうな顔で頬をかいた。

「そうよね。今のはナシ。ちゃんと謝つてもらえたから、その、許す

わ。それと、その、あたしこそ、殴ってごめんね？ 痛かったでしょ？」

視線を逸らしながらも、そういつてくれた鈴に、心のもよもやがスウーと引いていく。

ああ、胸の内が晴れるとはこの事だろうか。

「いや、もういいんだ。気にしてない。悪いのは俺だったんだし。それでさ。本題の約束なんだけど。俺、何か間違っていたか？ よかったら教えてくれよ」

もし約束の内容を誤っていたのなら改める必要がある。改めて、ちゃんと約束を果す。

約束の真意を求める俺に、鈴はモジモジと狼狽しながら真っ赤になった。

「え？ えっと、それは、あの……あれで……と、ところでさ——」

「おい、はぐらかさないでくれ。俺は真剣なんだ」

「うう〜えっとね、それはね……」

「何をそんなに躊躇ってるんだ？ 酔豚うんぬんにそこまで躊躇う理由がどこにあんだよ」

カチン。

なんだ、いま鈴から何かが切れる音がしたような……

「なによ、こっちの気も知らないで！ こっちにもこっちの事情があるの！ 察してよ！」

カチン、今度は俺の中で何かが切れる音がした。

ははくん、わかったぞ、さつき聞こえた音は、堪忍袋の尾が切れる音だ。

「なんだよ、それ。察せないから、こうして訊いているんだろ！」

「言いたくないから察してって言ってるんでしようが！」

こうなると堂々巡りだった。仲睦まじかった雰囲気が一気に険悪なムードになる。

そんな俺と鈴を見かねたのは、やっぱりアリスだ。

「二人とも落ち着いてください」

アリスは『くつついたり、離れたり、あなたたちは磁石ですか』と

苦笑し、

「まあ、相談を受けた私ですから、鈴が言い出し難い理由はわかりません。かといって、一夏の鈍さも筋金入りのようですし、察せというのも酷でしょう。そこでこういうのはどうかでしょう。今週行われるクラス対抗戦で、勝ったほうの主張を通すというのは？」

いい提案だ。鈴は強情っぱりだから、これ以上口論を交わしても埒が明きそうにない。

なら、強制力を持って迫れば、観念してぜんぶ吐くだろう。俺が提案を呑むと、鈴も頷いた。

「望むところよ。怖気づいて逃げ出さないでよね、一夏」

「俺は男だぞ。誰が逃げ出すか、馬鹿」

「馬鹿とは何よ、馬鹿とは。この朴念仁！ マヌケ！ アホ！ 馬鹿はあんたよ、手加減してあげようかと思っただけど、もう許してあげない。ボコボコにしてやるから覚悟しなさい！」

そう怒気を纏わせながらピットを飛び出していく鈴。

閉まる自動扉に俺は『おまえこそな！』と強気な発言を叩きつける。

「たくつ、鈴のやつ、見てろよ。目に物を見せてやる」

「ふふ、中国の代表候補性を相手にずいぶんと強気ですね。もしや幼馴染なだけに弱点でも？」

「え、いや、そうじゃないんだけど、弱気であるよりいいだろ？」

まず自分に負けない事。本当の敵は我にあり。篠ノ之道場で習ったことだ。

弱気は諦めに繋がる。だから、俺は気持ちだけは強く持とうというも心がけている。

それにアリスがクスツと笑いをこぼした。

「一夏らしいですね。——でも、鈴は間違いなく強敵ですよ。それに一夏がオルコットさんに勝てたのは、＜白式＞の能力とそれを秘匿できたことが大きいです。でも、今回は立場がまったく逆です」

「ああ、わかってる」

＜白式＞の情報は公開済みだが、鈴の専用機については何の情報もない。加え、純粋な技量ではあちらが上だろう。つまり、こっちは

不利な要素しかないってことだ。

「でも、そんな敗色濃厚な試合を科したのは私ですから、多少はお手伝いしましょう」

「もしかして、コーチしてくれるのか!？」

「いえ」

期待に胸膨らんだ俺をアリスは一蹴した。俺は思わずガクつとなる。

「私でもオルコットさんと連携するのは難しいですから。なので、役割分担をはっきりさせます。私は情報収集に徹しますので、一夏は今まで通りオルコットさんの訓練を受けてください」

「わかった……」

「コーチしてもらえないのは残念だが、彼女がサポートしてくれるのはありがたい。」

アリスはさっそく自前のケータイを取り出し、誰かと連絡を取り始めた。

「あ、私です——藤山先輩、例のアルバイトがあるのですが」

第13話 ドラゴンスレイヤー

クラス対抗戦当日。天気はこれ以上ないぐらいの快晴。絶好のIS日和となった。

まあ、ISは全天候型なので、雨でも雹でもIS日和なのだけど。それはさておき、朝食代わりのカロリィメイトを啜え、事前に配布された試合表を広げる。プログラムによれば一回戦から1組VS2組——つまり一夏対鈴となっていた。

初端から専用機同士の戦い。まさに最初からクライマックスですね。

「一夏は勝てるでしょうか」

決闘を提案した身として、公平な試合ができるよう、私は再び彼に手を貸した。

とはいっても、前回のようにつちり訓練したわけじゃない。操縦術そのものはオルコットさんに一任して、私はサポートに徹した次第だ。具体的には情報と装備を提供した。

(さて、一夏はどんな戦いを見せてくれるのか。相手は相手で強敵ですよ)

例の方法で集めた情報によれば、鈴の機体は安定性と稼働率を重視したバランス型。あらゆる局面に対応できるよう設計されている。＜白式＞のような一点突破型では看破し難い機体だ。加え、強力な特殊兵装も積んでいる。それは間違いなく一夏の不利に働くだろう。

「ふふ、これは面白くなりそうですね」

勝敗が分かった試合など見ていても面白くない。手を貸した甲斐あって楽しい一戦になりそうだ。

私がカロリィメイトを食べ終わると、音だけの花火が上がった。開会を告げる合図だ。



第一アリーナ、第一試合。俺は待機時間を利用して、アリーナを見渡した。

「すげー人だな……」

会場の観客数はクラス代表決定戦に比べ三倍以上だ。学園行事ということもあり、全校生徒が勢ぞろいしているのだろう。それだけに緊張の度合いも大きい。俺は吞まれないよう気を強く持つ。

そうこうしていると、対戦相手である鈴のISが遅れてやってきた。

鈴の専用機は、濃い目のマゼンタに塗装されたマッシュシブな機体だ。左右に浮遊する球状の棘付き非固定浮遊部位アンロックユニットが特徴的で、それが攻撃的な印象を与えてくる。

アリスがくれた情報によると機体名は＜甲龍シエンロン＞というらしい。名前だけで手強そうなISだ。

＜それでは両者、指定の位置まで移動してください＞

クラスの声援を受けながら、アナウンスの指示でアリーナの中央へおもむと赴く。

両者の間合いが縮まったところで、鈴が開放回線オープンチャンネルでコンタクトを取ってきた。

『逃げずにきたわね、一夏。——で、その眼帯はなんなのよ』

俺は左目に備わった眼帯型のゴーグルを親指でコンコンと叩いた。

これはアリスが情報と共にくれたアイテム、立体情報型眼帯ソリッドという装備だ

「カツコイイだろ？ こいつはおまえを倒すための秘密兵器さ」

『秘密兵器？ バカじゃないの。そんな装備一つであたしに勝てるわけないし』

「だったら、そう思っていればいいさ。試合が始まったらわかることだ」

俺が不敵に笑うと、試合開始のアナウンスが鳴った。

＜両者、試合の準備を始めてください＞

俺は＜白式＞のジェネレーターのパワーレベルを上げ、模擬戦／試合用プログラムを起動する。

800。視界の右端に現れたその数字が、競技における〈白式〉の
ヒットポイント
HPだ。

ちなみに、このポイントは機体の総エネルギー量を表しているのではない。機体によって総エネルギー量が異なるので、総量≦ポイントにすれば試合の公平さが失われてしまうからだ。

〈では、開始してください〉

試合開始のブザーと共に俺は《雪片式型》を展開した。鈴も做って得物を展開する。

鈴が展開したのは馬鹿でかい青龍刀だった。いや、青龍刀と呼ぶにはあまりに歪な形をしている。刀身の幅は鈴の身体を覆えるほど広く、柄は両手で握っても余るか、余らないかという長さ。最早、それは青龍刀と呼ぶより包丁と形容した方がしっくりくる。

↑——武装情報：甲龍専用近接武装《双天牙月》——↓

少し遅れて、青龍包丁の情報がARタグで表示された。

しかし、確認している余裕など、俺にはなかった。

鈴が得物をバトンのように振りまわしながら、こちらに斬りかかってきたからだ。

眼前に迫る攻撃を受け止めると、衝撃で全身の骨格が悲鳴をあげた。

外観通りの威力。いや、外観から想像した以上の威力だ。

「ふん、攻撃を受け止めたのは失敗だったわね。〈甲龍〉は根っからのパワータイプなのよ。力比べで高機動型の〈白式〉なんかに負けたりしないわッ！」

鈴の言葉を体現するように〈白式〉がパワー負けし、どんどん追い詰められる。

なんてパワーだ。どんなに力を込めても相手の刃を押し戻せないなんて。

(まずいな。押し負ける……)

これ以上、鏝迫り合いを続けても、挽回の余地はないだろう。そう踏んだ俺は逆推力装置スラストリバーサーを目晦ましに使って、鈴から距離を取る。しかし、鈴はそんな俺を追おうともせず、得意げに鼻を鳴らした。

「ふうん。うまく逃げるじゃない。イギリスの代表候補生に勝ったのはまぐれじゃなさそうね」

「ああ。だから、舐めていると痛い目を見るぞ」

そう言つて、《雪片式型》にシールドを突破する能力を付加させる。だが、鈴はまるで警戒する様子もなく、得物の《双天牙月》を肩に担いだ。

「知っているわよ、それ。シールドを無力化して強制的に《クリティカル》を発生させるんでしょ？ 確かにそれだけ聞くと脅威だけど——
——要は当たらなければいいのよ」

鈴は《双天牙月》をもう一本展開。それらを連結させ、オールのような形状にする。

そしてミキサーのような回転を加え、臆することなく斬りかかってきた。刃に遠心力を乗せ、高速回転しながら連続攻撃してくる鈴はさながら暴風雨だ。

俺は目を血走らせ、左右から迫る斬撃をなんとか凌ぐが、如何せん攻撃手数が多すぎて反撃に転じられない。防戦一方では、《雪片式型》のシールド無効化攻撃も繰り出せなかった。

(なるほど、手数を武器に《雪片式型》のシールド無効化攻撃を封じる気か)

攻めて、攻めて、攻めまくる。まさに攻撃は最大の防御つてやつだ。そうやって相手を攻撃に転じさせず、防御に徹っさせてシールド無効化攻撃を使わせない。

(鈴の奴、ちゃんと対策をしてきたか)

俺とセシリアの試合映像は学園の対戦アーカイブに保存されている。生徒が望めばその試合を何度も見直すことが可能だ。鈴の攻撃方法を見る限り、あいつも試合映像を見て対策を練ってきた可能性が高い。

(おまけに空エリアル・コンバット中格闘の技術に関しては向こうの方が手練れてる)

悔しいが、こうやって相対している内は、俺の不利が続くだろう。

微小だが、ポイントも着実に削られつつある。このままじゃ切り札まで封殺されかねない。

(だが、迂闊に距離を取れば――)

俺は鈴との近接格闘を諦め、後方に距離を取るが――

「――退いたわねっ!!」

直後、＜甲龍＞の固定浮遊部位が開き、その中央が黄金色に輝いた。その輝きに背筋がぞつとする。

次の瞬間、俺は銃撃でも斬撃でもなく、見えない何かに殴り飛ばされ、一気に高度を失った。

「このっ!」

俺は姿勢制御装置パランスサーを駆使して、なんとか地面寸前のところで体制を立て直す。

そして、憎らしげに鈴を見上げた。

「やっぱり使つてきやがったか……」

予想通りの展開に俺は苦笑を洩らした。

先ほど、俺を襲った攻撃の正体。それは第三世代型IS＜甲龍＞に装備されている指向性エネルギー兵器によるものだ。

そしてここまでの一連動作が、鈴の構築したバトルスタンス。

つまり、接近戦では手数でシールド無効化を封じ、苦しくなって距離を取れば先の特殊兵器で狙い撃つ。接近すればまた回転攻撃で対応する。それを繰り返し返す。

(まったく、おそろしい奴だぜ)

現状を分析して、俺はそう思った。――鈴の戦法戦法を予測していたアリスに。

だから、俺もこうなることは予想できたし、予測できたからには対策もある。

「今のジャブだからね」

「ジャブか。なら、選択を間違えたな。今のはストレートを打つべきだった」

俺は左目に備わった眼帯型ゴーグルをオンにする。

表上のLEDが点灯し、＜白式＞とのデータリンクが確立したところで、俺は挑発的に言った。

「撃つてこいよ、鈴。次はきつと当たらないぜ?」

「いうじゃない。だったら受けてみなさいよ」

挑発に乗って、鈴が再び攻撃体制に移行する。同様に<甲龍>の非固定浮遊部位が光った。

再び見えない何かが俺に迫る。――が、今の俺にはそれが見えていた。俺はその攻撃を軽やかなステップ移動で躲してやる。

当たると確信していた鈴はわずかに眉をひそめた。

「ふん、どうせまぐれでしょ!」

「なら、もう一発撃ってみろよ。偶然なら二度はないだろう?」

俺が見せた余裕への苛立ちか、鈴はその見えない攻撃を連発した。

けれど、見えている俺には避ける事も容易い。俺は機体を後方に下げ、次々に攻撃をかわす。

外れ続ける攻撃に鈴はとうとう驚愕を浮かべた。

「まさか、この衝撃砲《龍咆》が見えているっていうの!?!」

俺は眼帯型ゴーグルを叩く事で、正解を示してやった。



アリーナの管制室。

大スクリーンの中で、鈴の攻撃を易々といなした一夏に筈は目を開いた。

「なぜ一夏は攻撃を躲せるのだ? ——いや、そもそも鈴の攻撃はなんなのだ」

画面を食い入るように見ていた筈の疑問にセシリアが答えた。

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、その余剰で生じる衝撃を砲弾化して打ち出す兵器ですわ。その特徴は砲身も砲弾も不可視ということですよ。それに先の一撃を見る限り、砲身斜角の制限がないようですよ」

<甲龍>の武装について解析する様は、さすがイギリスの代表候補生というべきか。

しかし、その解説だけでは一夏が攻撃を見切れる理由が解らない。

むしろ疑問は深まった。

「なら尚更だ。一夏はなぜ鈴の攻撃を躲せる。衝撃砲とやらは攻撃が見えないのだから？」

「それは光圧センサを応用しているのですわ」

「光圧センサ？」

箒の疑問に千冬が解説を加えた。

「光の歪みを検知するセンサだ。衝撃砲は空間に圧力をかけて砲身を生成する。おそらく、その生成時に局所的な重力場が発生するのだろう。それも光が歪むほどのな。その歪みを検知し、視覚化して眼帯内に投影しているのだろう」

千冬はセシリアに視線を遣る。セシリアはその通りですと頷き返した。

「じゃあ、今の一夏には砲身が見えているのか」

「ええ、砲身が見えていれば、その斜角や方位から弾道や着弾ポイントを予測できます。それに空間圧兵器はトリガーから発射までにラグがあるのですわ。あとはわたくしとの試合に使用した早期警戒ソフトと組み合わせてやれば——」

「先読みしてかわすことも可能、ということか。——空間圧兵器の原理を理解し、その上で対抗手段を練ってくるとは、さすが代表候補生といったところだな」

「い、いえ……、そ、それほどでもありませんわ……」

本来なら得意げに髪を弾いて見せそうなものだが、セシリアは気まずそうに視線を逸らした。

それに千冬は苦笑する。この対抗策を考案したのが、他の誰かなのだと察したからだ。

「ですが、衝撃砲の攻撃が見えたところで、＜甲龍＞を攻略した気なるのは早計でしょう」

真耶の指摘に千冬が頷く。

「そうだな。なにせ＜白式＞には中距離レンジに対応した武装がない。回避できても反撃する手段がなければどうにもならんだろう。

《雪片式型》でも衝撃波は無効化できん」

かといつて近接格闘戦に持ち込んでも、空中格闘戦は鈴に分がある。

ならば、どうやって敵に倒すつもりなのか。

そこでセシリアが待っていましたと言わんばかりに、声を張った。

「それなら問題ありませんわ。このわたくし、セシリア、オルコットがイグニッションブースト瞬時加速の習得をレクチャーしましたから」

「なるほどな。イグニッションブースト瞬時加速ならば、中距離からでもすぐ相手の懐に飛び込める」

イグニッションブースト瞬時加速は、一時的に爆発的な速度を得るISの戦闘機動術だ。

その特性によりISは中距離レンジでも格闘戦を展開できる。つまりイグニッションブースト瞬時加速を習得した操縦者にとって、中距離でさえ〝得物の間合い〝になるわけだ。

そこに衝撃砲のスキを見切れる〝目〟があれば——竜殺しの芽もでてくる。

「これはおまえの作戦か？」

「ええ、そうですわ！ 見ていてくださいいな！」

セシリアが胸を張ると、モニター内で焦れた鈴が最大出力の衝撃砲を発射する体勢に入った。

空間圧兵器はその威力に比例してチャージのインターバルも長くなる。つまり現在<甲龍>に大きな隙が生じている。それを視ることでできる一夏は、それを見逃さなかった。

刹那、爆発的な加速を得た<白式>が<甲龍>に肉薄する。イグニッションブースト瞬時加速を発動したのだ。

ミドルレンジいれば<白式>からの反撃はない。そう踏んでいた鈴は、これに対応できなかった。

<白式>が一気に接近し、シールド無効化攻撃を見舞う。——次の瞬間、

唐突に管制室のモニターがダウンした。

「ちよつと、なんですの。いいところでしたのに！」

いい場面で途切れた映像にセシリアが地団駄を踏む。それとシンクロして室内が大きく揺れた。『おいセシリア、加減をしろ……』と

箒。『え、わたくしの所為!』とセシリア。

そんな二人の横で千冬は冷静に状況を確かめた。

「山田先生、状況を」

「えっと、急にシステムがダウンした模様です……。あ、再起動はいます」

真耶がチェックを始めるやいなや、管制室のモニターが息を吹き返した。

だが、一同は表情を強張らせる。モニターに禍々しい未確認のISが映し出されていたからだ。



それは俺が〈甲龍〉にシールド無効化攻撃を喰らわそうとした時だ。

《雪片式型》の切っ先がまさに〈甲龍〉を斬ろうとした瞬間、それは上空よりやってきた。

↑——警報：上空より高エネルギー反応——↓

(何だ……?)

いや、考えている時間などない。俺の生存本能が『よける』と全力で警鐘を鳴らしていた。

俺は攻撃を諦め、慣性制御装置Pと逆推進装置Cでその場から急いで後退する。

刹那、正体不明の赤い閃光が、俺を掠め、アリーナに大きな窪みを穿った。

「何だ、今の光は……」

頭上から放たれた一撃に俺は目を剥く。

もしかして鈴の奥の手か？ いや、違うな、鈴自身も驚愕している。

(なら、先の攻撃は一体……?)

怪訝な顔つきで攻撃方向に目を遣ると、その先に人影らしきものが見えた。

しかも、その人影は遙か上空——アリーナの遮断シールドより高い位置にいた。

もしかして、アイツがアリーナの遮断シールドを突き破って、俺たちに攻撃を？

「まさか敵襲……?」

すると、黒い人影が自ら開けたシールドの穴からスウーとアリーナの中央へ降りてきた。

下りてきたISは腕部が異常に長く、丸太のような太さをもつ機体だ。操縦者は全身装甲を装備していた。

↑——IS情報：検索結果なし。ライブラリーと一致する機体はありません——↓

↑——IS詳細：コアナナンバー不明、無所不明、味方識別信号無し——↓
↑——警告：未確認機と断定——↓

やっぱり所属不明のISか。でも、誰が何の目的でこんな事を……。

そこで鈴から個人秘匿通信が飛んできた。

『一夏、試合は中止よ、今直ぐピットに戻って!』

そりやそうだよな、正体不明のISに襲撃されたんだ。試合どころではないだろう。

鈴の切羽詰まった声のあと、今度はアリーナの管制室から通信が開かれた。

『織斑君、鳳さん、無事ですか!?!』

俺と鈴は無事を伝えるように頷いた。

「はい、俺も鈴も無事です」

『よかったッ! では、今すぐアリーナから離脱してくださいッ!』

そこは危険ですッ! ただちに先生たちが迎撃に向かいますからッ!』
異常事態だからか。普段の先生からは想像もできないような声音だった。

でも、俺は《雪片式型》を見つめながら、あの夜のセシリアの言葉を思い出していた。

——持つ者は持たざる者を守る義務があるのです。

彼女はそれが〈高貴な者の義務〉^{ノブレス・オブリージュ}だと言った。

力は略奪や搾取のためにあるのじゃない。その義務を果たすために与えられるんだと。

俺は高貴な身分じゃない。でも、力を持っている。〈白式〉という力を。

なら、いまの俺にはみんなを守る義務があるのではないか。——強く俺はそう思った。

「じゃあ、先生たちが来るまでの間、俺たちがアイツを食い止めます」
例え倒すことは叶わなくても、時間を稼ぐぐらいならできるはずだ。それにあの傍若無人な振る舞い方。そこに政略や軍略の意図があるとは思えない。

だとすれば狙いは一つ——『破壊』だ。なら一瞬だって野放しにできない。

「いいな、鈴」

「そうね。あんな危険なヤツ放っておけないわ」

俺と鈴は互いの顔を見合い、力強く頷く。それに悲鳴を上げたのは山田先生だ。

『ちよつと、織斑君、風さん！ いけません！ もし生徒さんに何かあつたら——』

そこで未確認ISの野太いビームが、通信を遮るように割り入ってきた。

それをなんとかしてかわす。どうやら、乗っている操縦者はあまり気が長い方じゃないらしい。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさい。武器それしかないんでしょ？」

「ああ、その通りだ」

隠す必要もないので肯定する。そして俺たちは二人並び、揃って獲物を値踏みした。

火力は戦艦クラス。エネルギー残量は未知数。強敵に間違いはないだろう。

俺と鈴は《雪片式型》と《双天月牙》の鋒を合わせる。それは無言

による俺と鈴の鬨の声。

そして、俺たちは即席のコンビネーションで、飛び出した。

♡

♣

♠

「織斑君、鳳さん、聞こえますか？ 応答してください！ 織斑君！
鳳さん！」

副担任の山田真耶は、顔面蒼白で何度もコンソールに向かって呼びかけた。

しかし、音信不通になったコンソール画面はうんともすんとも言わない。意図的に通信を切っているのか、それとも何者かの妨害か。どちらにしろ、真耶は青褪めるしかなかった。

「もう！ これは模擬戦でも試合でもないんですよ！」

そう、これは模擬戦でも試合ではない。死が伴う実戦なのだ。泣こうが、喚こうが、相手がその気なら命の保障など何処にもない。それに相手は『IS学園』というISの総本山に単機で乗り込んでくるような狂人だ。その事実が、いつそう真耶の不安に拍車をかけていた。

「まあ、おちつけ」

落ち着いた千冬の声。

平時と変わらぬ千冬を、真耶は思わず捲し立てた。

「な、なに呑気なことを。実の弟さんが危険に曝されているんですよ！」

「わかっている。だが、慌ててどうなる。まずは状況確認が先決だ」
千冬はアリーナの制御コンソール画面を操作し、遮断シールドの状態を表示した。

表示されたアリーナの現状況に、セシリアと真耶が度肝を抜かれる。

「アリーナの遮断シールドが<Level5>に設定？」

「しかも、全ての扉がロックされているですって！」

襲撃を受けているのだから、シールドの強度が最高レベルに設定さ

れる理由は解る。こうしておけば、アリーナからの攻撃が施設に及ぶことはない。逆も然りなのだが、それはいい。

問題なのは、全ての通路がロックされている点だ。これでは生徒の避難も叶わない。

聡明な彼女は、直ぐにこの事態の原因に気付いた。

「もしかして学園のシステムがサイバー攻撃を受けていますの!？」

「そういう事だ。どうやら学内施設の制御システムが何者かの手に落ちたらしい。システムを奪還できない限り、私たちはアイツらを救出しに行く事も、援軍として加勢する事もできない」

声を荒げるセシリアに、千冬が毅然とした態度で状況を説明する。

だが、その指は苛立ちを表すように忙しくパネルを叩いていた。

とどのつまり自分たちは「鳥籠のカナリア」だった。外敵に襲われないが、空は羽ばたけない。

「このわたくしが、ただ待っている事しかできないなんて……」

額を押さえながら、ヨロヨロとその場にへたり込む。

武力、財力、知力。彼女はいくつもの「力」を手に行っている。それでもなお、想い人ひとり助けられない事実、その残酷さに眩暈がした。

「それでもないぞ」

そんなセシリアに千冬が不敵な言葉に投げかける。セシリアは顔を上げた。

「ですが、遮断シールドを解除できないのでは、どうしようも」

「そうだな。システムは何者かの掌中にあり、シールドを解除できない。強行突破しようにも、この学園の火力では不可能だ。おそらく《雪片式型》でもな。だが、遮断シールドを物理的に突破できないなら、そのエネルギー供給元を断てばいい」

千冬の奇策にセシリアは意表をつかれた。そうだ。何も正々堂々と勝負してやる必要はない。

向こうがダーティーに攻めてくるなら、こちらもダーティーなやり方に訴えるまでだ。

「ただし、動力部の隔壁はもしもに備えて強固に設計されている。突破には相当なパワーが必要だが、〈ブルー・ティアーズ〉の火力なら

問題あるまい。——いけるな？」

「はい」

セシリアは頷き、いそいで自機のステータスを呼び出した。

エネルギー残量、武装、駆動部、推力装置、防御機構。自機に並みならぬ愛着を持つセシリアは日頃から専用機のメンテナンスを欠かしていない。出撃に一切の問題はなかった。

「あ、あの織斑先生、私にも何かできることはありませんか」

いそいそと出撃準備を整えるセシリアを一瞥し、そう言ったのは箒だ。

しかし、帰ってきたのは、現実的な言葉だった。

「おまえにしてもらえることは何もない。邪魔にならないよう座っている。ここは安全だ」

返事は予想の範疇だった。自分のことは自分が一番理解している。自分には専用機もなければ、特別な技能もない。この状況においては剣道の段位も役に立たないだろう。それでも胸中の無力感を払拭したい一心で、箒は食い下がった。

「で、でも、なにか私にも——」

「いいからじっとしている。今は話し相手になってやれる暇がない」

千冬の言葉どおり、管制室は彼女の指示を仰ぐ言葉でこつた返した。

「織斑先生、一部だけですが、通信を確保できました。B経路の非常用通信です」

「よし。では、〈国際IS委員会〉の危機対処規定に則りコードレットを発令。所属不明機を敵性勢力と断定し、我々はこれの殲滅にあたる」

「了解。コードレット発令。コードレット発令。教員の方は規定に則って行動してください」

「まず教師部隊に到達。教師部隊は〈クラスA〉装備でアリーナの各ピットで突入の準備。オルコットが供給ラインを破壊する。シールドが解除され次第突入だ。突入タイミングはこちらで指示する。それとマルガリータに“コードレットだ。容赦するな”と伝えておい

てくれ」

「弟の舞台を汚した報いを受けさせろ」と付け加え、淀みなく指示を続ける。

「生徒会とその他の専用機持ちには、生徒たちの救助と避難誘導をさせろ。必要なら隔壁の破壊も許可する。人命を優先しろ。現場の指示は更識に一任する」

「織斑先生。こちらの準備も整いましたわ」

「よし。これが学内の動力配線図と教師部隊の暗号化通信プロトコルだ。頼んだぞ」

「お任せを」

慌ただしく動く教師たちとセシリアから外れ、箒は言われた通り管制室の隅に身を置いた。

ここで自分が何かを言ったところで、邪魔になるだけ。そう思ったゆえの行動だ。

（私はなんて無力なんだ）

大事な想い人が戦地で窮地に陥っているというのに何もできない自分。

部屋の隅でただ蹲るしかできない無力感に、箒はあふれる涙を堪えるしかできなかった。

第14話 ドラゴンヒーローズ

外へ続くアリーナの通路は、襲撃から避難してきた生徒でひしめき合っていた。幸い怪我人はいないようだが、表情は一様に暗い。それが事態の深刻さを物語っていると、通路の奥から恐怖に駆られた少女のたちの悲痛な叫び声が聞こえてきた。

「どうして、どうして開かないの!!」

「お願い! 誰かここから出して! 誰か助けてよッ!」

「イヤッ! 私こんな所で死にたくない!!」

声が出た方向では、生徒たちが閉ざされた電子扉を必死で押し開けようとしていた。しかし、施設のシステムがダウンしているらしく、堅く閉ざされた扉はまるでびくともしない。

やがて、一人の生徒が恐怖に心を折られ、その場に泣き崩れてしまった。

「もう、ヤダよ、こんな……出して、お願いだから……出してよお」
無理もない。襲撃を受け、こんな場所で缶詰にされれば、泣きたくもなるだろう。

私はそんな彼女の許に歩み寄り、膝を折って視線を合わせた。

「大丈夫ですよ。今頃、先生たちが救出に尽力しているはずですから。もう少し辛抱すれば、直に助けが来ます。だから今はがんばって耐えましょう。ね?」

私はハンカチでその女子生徒の涙を拭い、手を力強く握って励ます。

その生徒は泣くのをやめて、弱弱しくも頷いた。

「ヒック、ヒック……うん。あたし、がんばる……」

私は『強い子です』と励まし、彼女をその友人に任して、場を離れる。

人気のない場所まで来たところで、ひとり難しい貌をした。

(あの子の手前、ああ言いましたけど、実際のところ、救助の見込みは薄そうですね……)

システムがダウンしている状況から察するに、事態は切迫している

と見ていいだろう。なにより、私の研ぎ澄まされた戦士の感が”
クライシス
危機”を強く感じ取っていた。私もそろそろ、普通の生徒をやめて、
何か行動を起こした方がいいだろう。

そうするにあたって、まず欲しいものは情報だ。

そこで、私は持つてきていたモバイル端末を起動し、エイダに通信
を繋いだ。

『アリス、どうしたの？——いや、どうしたって聞くのは野暮ね。何が
知りたい？』

「施設内の状況と外の情報が欲しいです」

『了解。簡潔に言えば、かなり深刻な状態よ。施設内のシステムが何
者かに乗っ取られてしまって、こちらのアクセスもコマンドもまった
く受けつけない状態なの』

「だからこの有様なのですか。で、外の方は？ 例のISはどうなっ
ています？」

『織斑と凰が応戦してくれているわ。けど、試合後の疲弊した二人
じゃどれだけでもつか。私たち教師陣も出撃に備えているけど、遮断
シールドを〈Level 5〉に変更してしまったから、援軍には迎
えそうにないわ』

一夏と鈴が未確認のISと戦っている。しかも、孤立無援の状態で
……

私の脳裏にもしもの不安が過ぎる。だが、私はそれを払拭するよう
に赤毛を振り乱した。

今自分がやるべき事は、彼らの身を案じることじゃない。状況を把
握する事だ。

「それで学園はどのような対応を？」

『三年のエンジニアと教員たちが総掛かりでシステムの奪還を図って
はいるわ。けど、まだ目途は立っていない。かてて加え、学園外部へ
の通信手段が全て遮断されているみたいで、完全に隔離された状態
よ。これじゃ政府に助勢を要請するのは無理そうだわ』

それを聞き、小さく舌打ちする。

IS学園は日本海域に建設されている。これは日本の有事でもあ

る。だが、I S学園はある種の自治権を保持するため、どここの政府もI S学園に戦力を駐屯・派遣できない。できるのは、学園側が要請した時だけだ。つまり、こちらが要請しない限り、日本政府も指をくわえて見ているしかできない。いつだって武力介入を困難にしているのは、政治的な壁だ。

だからこそ、どこの国家体制にも依らない我々が創立された。

政治の向こう側で死にゆく者たちを救う。そのために、私たちはある。

「エイダ、私は作戦部に連絡を入れます」

学園の通信システムは無力化されている。だが、私たちは学園システムから独立した長距離可能な通信装置を持ってきている。私の場合は専用機に装備されていた。それを用いれば作戦本部と連絡が取れる。

「私も情報部に繋いでみるわ」

そう言つてエイダとの通信が切れる。私も人気のない場所に移動し、〈赤騎士〉を展開した。

通信を解放して本部に繋ぐ。僅かな待ち時間のあと、若い女性の声が出た。通信担当の女性だ。

「はい、こちら通信基地局。あら、我らが姫君。元気にしてた?」

「ええ。ですが、ゆっくり世間話をしている暇がありません。ボスに繋いでください」

「あら大変。わかったわ。すこし待っていて」

直後、通信機の向こうで、機械的な音が出た。通信経路が切替わる音だ。機密保持のため、下層部の人間は上層部の人間と直接通信できない。そのためには複数の基地局プロキシを経由しなければならぬのだ。

しばらくして、通信の確立を告げるARが表示された。

『私だ。どうした?』

野太く、けれど威厳のある声音。ボスの声だ。私はどこかにいるボスに緊急事態を告げた。



◆
学園が襲撃された時、ロリーナは新造潜水艦の航行テストに同行している最中だった。

艦内放送で「テスト航海の中止」が告げられると、ロリーナは速足で発令所に出頭した。厚い二重の防水扉を潜る。発令所区画では、同じく航行テストに同行していた作戦部長が既に待機していた。隣には艦長もいる。ロリーナは艦長に視線を送った。

「どうしたの」

「緊急事態だそうです」

若い女性の声で艦長が言う。

この艦には通常艦と異なる技術が導入されており、その制約から女性で艦長を務めていた。

「待たせた。状況を説明しろ」

サウンドオンリーと表示されたモニターにエドガーが告げた。

『IS学園が襲撃を受けました。どこの勢力かは不明。数は1。しかし、敵はISを装備しています。ライブラリーに該当しない機種です。完全な新型かと思われます』

さらに、一夏たちがその機体と交戦していること。学園の制御システムがサイバー攻撃で機能不全に陥っていること。それに対し学園側がどのような対処を行っているか。アリスはそれらを簡潔かつ詳細に説明した。

「ずいぶんと大胆なマネをしたものね。それにテロリストがISなんて」

状況を聞いたロリーナが難しい顔で言った。

嚴重管理されているISを入手するには、資金とコネクションが必要だ。政治力も重要になる。そこらのテロ屋には無理だ。おそらく襲撃者の背後には大きな組織がある。

しかし、目的がわからなかった。

ISを使用し、サイバー攻撃まで仕掛け、目的が単なる破壊とは思えない。

「何かの陽動かしらう？」

その可能性は否定できなかった。襲撃で世界の気を引き、その裏で本当の目的を果たす。よくある手だ。仮にそうなら、安直な部隊の派遣は的確な判断といえない。

このまま学園に事態の收拾を一任し、事の成り行きを見守るのもひとつの手ではあったが、

『私に介入の許可をもらえませんか。5分で片づけてきます』

場の成り行きを静かに見守っていたアリスが、そう意見した。

事務的な口調ではあったが、それは感情の発露であった。——友人を助きたいという感情の。

兵士が感情に流されては三流である。本来なら諫めるべき場面だったが、彼女が友人の危機を黙って見過ごせるほどクールじゃないことは、この場の誰もが知っている。そして、それが彼女の魅力であることも。

そんなアリスをロリーナが後押しする。

「敵の真意がどこにあるにしろ、目の前の脅威は無視できないわ。それに私たちは“彼”を失えない。彼を守ること、彼女の重要な任務のひとつよ」

「わかった。——アリス、キミは織斑一夏の援護に迎え、脅威を排除しろ。ただし、こちら側の素性は可能な限り明かすな。君の正体をまだ学園側に知られるわけにはいかん。システムの奪還と救助の問題はこちらで対処する」

『了解しました。感謝します。——以上、通信おわり』

通信が閉じられたモニターにOFFLINEの文字が浮かぶ。

それを確認することなく、彼らは早々に行動を開始した。

まず情報部に要請して情報収集を行ってもらわなければならない。襲撃に備え、各国のインテリジェンス・コミュニティーに警戒を促す必要もある。その間に各地の陸戦ユニットと空戦ユニットを招集、編制し、有事と救助に備える。

その指示を出すエドガーの隣では、ロリーナが艦長と話をしていた。

「この艦のコンピュータシステムで、IS学園のシステムに侵入してみるわ」

このハイテク艦には高度なサイバニクス電脳兵装とデータリンク能力に加え、強力な第5世代型コンピュータが装備されている。その気になればペンタゴン国防総省のファイヤーウォールですら、ものの数十秒で突破できる。
「命令の優先順位を書き換えてシステムをリカバリしてみるわ」
「わかりました」

艦長は操舵手に進路変更と最大船速を命じた。

♡

+

♠

未確認IS<ゴレム>——便宜を図るためそう仮名した——との戦いは苛烈を極めていた。

敵から放たれるビーム兵器を凌ぎ、鈴が衝撃砲で牽制しながら、俺が攻撃を見舞う。そういった攻防の中で、俺たちはある確信を得ていた。

それは<ゴレム>が無人であるということ。

外観は精巧に人間を真似ているが、挙動に人間特有のしなやかさがなく、なにより俺の眼帯に備わった生体センサーがそれを証明していた。

その事実が俺たちを手古摺らせている。

機械ゆえの合理的な判断力と、それに裏付けされた高い回避力。それあつて俺たちは<ゴレム>に決定打を与えられず、試合の疲労もあり、なかなか戦局の流れを掴めないでいた。

それを証明するように、鈴の援護を得て放った3回目の攻撃も難なく躲される。

「二夏、これ以上の深追いは危険だわ。ここは一度退いて作戦を練り直しましょう」

「そうだな。わかった」

折角詰めた間合いだ、エネルギーを温存するため一度後退する。

そして鈴が衝撃砲で土煙を発生させ、そのうちに俺たちは岩陰へ身を潜めた。

相手が俺たちを見失っている内に、対策を立てないと。まずは状況把握だ。

「アイツ、あとどれくらい動けると思う？」

「わからない。排熱と駆動音から見て、出力の高いジェネレーターを積んでいるみたいだし、まだ余裕なんじゃない？ たぶん、あたしたちの残りエネルギーを合わせても向こうが有利でしょうね。そろそろ援軍でもこないと、こつちがやばいわ」

勝気な鈴にしては、らしくない弱音だった。でも、気持ちは解る。

現状の打開が難しいというのに、増援や救援も来る気配がないのだから、気持ちが悪くなるのも無理ない。俺も棺桶に片足つつこんだ気分だ。それでも——いやだからこそ俺はある決意をした。

「なら、もう俺たちでアイツを倒すしかない」

「それができたら、苦労しないわよ、バカ」

確かにそのとおりだが、無策でそんなことを言っているわけじゃない。い。

「《零落白夜》を使えば、勝機はあるかもしれない」

俺はセシリアとの決闘の中で得たく白式＜唯一無二の能力を口にした。

「《零落白夜》？ 何それ？」

「この《雪片式型》の全力攻撃の名前だ。でも、この《零落白夜》の能力は高すぎて、最悪相手を死に至らしめる危険性があるんだ。だから、模擬戦や学内対戦では使用できないけど——」

そこで俺は不敵に笑う。

「相手が無人機なら容赦する必要はないだろう？」

《零落白夜》には《絶対防御》すら突破する威力がある。そのため相手の命まで奪いかねない。だから、今まで使用を控えていたのだが、相手が無人なら手加減をしてやる必要はない。

ちなみに決闘の際、《雪片式型》のアップデートが遅延したのはコイツの所為らしい。

「てか、そんなもんあるなら、最初から使いなさいよ！」

「こいつはエネルギーの消費がバカ大きいんだ。ほいほい使えないんだよ」

俺たちがここに残った理由は、生徒の避難時間を稼ぐためだ。だから、エネルギーの消費が大きい《シールド無効化攻撃》は控えてきた。もし救援前にエネルギーが尽きたらぞつとしないからな。

「時間を稼ぐのは構わないが、倒してしまっても構わないのだから死亡フラグだ。」

「でも、救助の見込みが無いまま、このままだどこつちがやられる」「だから持久戦から決戦にシフトするべきだと思ったのね。でもさ、いくら《零落白夜》ってのが強力でも、当たらなきゃ意味ないでしょう？ あたしたち、まだあいつにまともダメージを与えられてないのよ」

「策ならある」

そう、無人機であるがゆえの盲点を突いた、突拍子もない作戦が。「わかったわ。あんたの作戦に乗ってあげる。で、あたしは何をすればいいわけ？」

「鈴はアイツに向けて最大威力の衝撃砲を撃ってくれ」

「それだけ？ 別にいいけど、当たらんないわよ？」

「いいんだ。当たらなくても。要は——」

俺は作戦の全貌と鈴に果たしてもらいたい役割を簡潔に伝えた。

「なるほど。でも、《龍咆》の最大チャージ中はあんたを援護してあげられないからね」

鈴曰く、最短で《龍咆》を最大チャージするには、均等に割かれているエネルギー配分を一時的に《龍咆》へ集中させる必要があるらしい。当然、その間シールドやスラスタに供給されるエネルギー量が減る訳だから、防御力も機動力も低下する、との事だ。

「最大チャージまで最短でも10秒。その間、無防備になるんだから、しっかり守ってよね」

「おう、任せろ。鈴には指一本触れさせねえよ」

「頼んだわよ、一夏」

頼もしそうに俺を見て、首肯する。よし、これで準備は整った。

「アイツに目にもものを見せてやろうぜ！」

「ええー！」

俺たちはジェネレーター出力を「戦闘」にして、潜めていた岩陰から飛び出した。

同時に鈴が最大威力の衝撃砲を発射するため、《龍砲》のチャージに取り掛かる。

俺は囀役を演じるため、単独で敵に突貫した。

「おい、木偶ゴレムの坊。こつちだ!!」

敵の注意を逸らすため、俺は大声を上げながら派手に立ち回る。

そういえば、鈴がイジメられていた時も、こんな風に大立ち回りしたっけ。あの時は多勢に無勢で返り討ちにあつたけど、今度こそは鈴を守りきって見せる。——そう、決意した時だ。

「一夏あ!!」

敵の注意を引き付けている俺の許に、中継室から聞き馴染んだ声が飛んできた。

「あれは………箒?! なんでアイツがここに?!」

ハイパーセンサーのダイレクトビューで見ると、箒は肩で荒々しく息をしていた。

表情には焦燥と不安が入り混じっていて、いつもの剣呑な雰囲気はどこにもない。

もしかして俺を心配して、わざわざ駆けつけてくれたのか……?」

我が身の危険を顧みず?

「男なら……そんな敵に勝てなくてなんとする! お前の矜持をみせてみる!!」

喉を潰さんばかりの大声。それは掠れていて酷く聞き取り難い。

でも、俺の鼓膜にはしっかりと届いていた。——箒の激励が、魂の叫びが。

(ああ、分かっているぜ、箒。俺はこんなヤツに負けたりしない)

すると《ゴレム》の眼を横したアイセンサーが箒を睨んだ。

興味を持ったのか、もしくは敵性があると判断したのか。しかし、

注意が箒へ反れたことで、こちらへの警戒が薄れた。それはピンチでもあったが、同時にチャンスでもあった。箒が身を挺して作ったスキを逃すわけにはいかない。

「鈴!!」

「もう少し待って——100 110 120 ——完了!!」

↑——報告：《龍咆》 圧縮度120%：最大出力《神龍の咆哮》 発動可能——↓

↑——警告：《龍咆》 内部に歪を検知。【原因】空間の過度圧縮：《龍咆》 使用停止を推奨——↓

「うっさい、甲龍!シエンロン いくわよ、一夏!!」

「おう、やってくれ!!」

そう指示を出して、俺は鈴の視界を遮るように《龍咆》の射線上へ躍り出る。

同時に非固定浮遊部スバイクアーマーの棘が伸び、空間に突き刺さった。おそらくあの棘は《龍咆》の反動制御を行うスタビライザーなのだろう。

そして、今までとは比にならない——発射口そのものが破損するほどの衝撃砲が放たれた。

それを背中で受け止めつつ、俺は瞬時イクニツションファースト加速を発動する。

「ぐおおーッ」

《龍咆》の後押しを受けた瞬時イクニツションファースト加速は、まるで世界を置き去りにするような速さだった。

〈ゴレム〉からの反撃はほとんどなかった。〈白式〉がスペック上の最高速度を上回ったことで、実際の数値とデータベースの数値の間に齟齬が発生し、反応が遅れたのだ。

《龍咆》を用い、予想を超えるオーバースピードで相手の反応を上回る。これが俺の策だ。

いける。そう確信した俺は、《雪片式型》の本当の力を解放した。

↑——報告：単一仕様能力ワンオフ・アピリテイ《零落白夜》 発動可能——↓

俺は《雪片式型》が纏う光を収斂し、一振りの光刃へと変えた。

これが《雪片式型》の最大火力形態——《零落白夜》だ。

その絶対的な刃を以ってして、俺は俺の真骨頂を発揮した。

「俺の大事な物に手出しはさせねえー！」

守る。その信念を《雪片式型》にありつたけ詰め込めこんで、渾身の一撃を振う。

俺が放った一撃は、シールドも絶対防御も突破して<ゴーレム>の頭上から股下を一直線に切り裂いた。

「やったか？」

充分な手応えを感じた俺は、間合いを取って相手の様子を窺った。頭頂点から股下にかけて深く切り裂かれた<ゴーレム>は、それでもゼンマイの切れたブリキ人形のように手を伸ばそうとする。

俺は息を呑んだ。――「やったか」はフラグだったか。

だが、そのフラグはぼつきり折れ、<ゴーレム>がそれ以上動く事はなかった。

「終わった……か？」

頭部のセンサーラインが完全に消失したところで、俺は改めて目の前のISを凝視した。

操縦者を担っていた自動人形からは、集積回路や血とも似つかないゲル状の液体が零れていた。

どうやら相手は本当に無人機だったようだ。

確信はあったものの、これには心底安堵した。もし有人だったら俺は人を殺した事になる。

(ISってやっぱり兵器なんだよな)

相手の無残な惨状を見て、俺は改めてISが兵器――人殺しの道具である事を自覚した。

俺は一度『ISに乗る意味』について深く考える必要があるかもしれない。でも――

「やったじゃない一夏！ 惚れ直、じゃなくて見直したわよ！」

――今は彼女たちと勝利の美酒に酔いしれよう。

「これも鈴、それと箒のおかげだ」

そう言いながら、鈴を見て、箒に手を振る。

鈴は『そうね、あたしのおかげね』と嬉しそうに笑い、箒は『よくやった』と頷いていた。

「試合はめっちゃくちゃになったけど、これで一段落だな」

あとは先生たちに任せて、俺たちはピットに戻ろう——そう思ったときだ。

《プライマリリーダーダウン パージ
一番機行動不能。破棄》

生気の籠らない機械的な声が聞こえ、俺は咄嗟に振り返る。

その先では沈黙したはずの<ゴレム>のコクピットに同タイプの人型が召還されていた。

《セカンダリーアクティヴ
二番機始動。マツチング完了。サブ電力供給。〃戦闘継続〃を設定》

「なっ……………」

その音声を耳にし、俺は血の気の引く音を聞いた。もしかして、こいつまだ動けるのか？

——いや違う。俺が破壊したのは人間擬きの装置だ。IS本体は無傷のまま。

だから、こいつはまだ動けるのではない——まだ戦えるのだ。

「い、一夏…………どうしよう。あたしもうエネルギーが…………」

鈴はおそらく先の衝撃砲に全てのエネルギーを注ぎ込んだのだろう。

俺も《零落白夜》の使用で、補助動力のエネルギーしか残っていない。

その状態を察してか、放送室の箒が切羽詰まった声で叫んだ。

「一夏あ!! 早く逃げろお!!」

でも、俺はそんな気になれなかった。悪い箒。俺にはやらなければならぬ事がある。

この事態は《零落白夜》が当たれば勝てると見誤った俺の責任。だから——

俺を信じてくれた鈴だけは、命に代えても守らないといけない。
「鈴、お前はなんとかして逃げろ。ここは俺が命にかえて時間を稼ぐから」

輝きを失った《雪片式型》を構え、俺は絶望的な戦いに赴く。

体が重く感じるのは電源の^{A.P.U}パワー不足か。いや、ちがう。怖いからだ。——鈴を失うのが。

その恐怖から小刻みに震える俺を、鈴が取り乱しながら止めてくる。

「そんなのダメ！ 一夏だけ置いていくなんて、あたしにはできない！」

切実な表情でしがみついてくる鈴を俺は突き放した。

「行け鈴。行ってくれ！ このままじゃ二人ともやられちゃう！ だからお前だけでも——」

「イヤ！ 一夏が残るなら、あたしもココに残る!! だって——」

そこで時間が止まった。

「あたしは一夏の事が好きだから！ ——だから、最後までいあんたと一緒にいさせてよ！」

幼馴染だと思っていた女性からの告白に、俺は危機感を忘れ、戸惑いと驚きに囚われた。

鈴が、そこまで俺の事を想っていてくれていたなんて……。

けれど、悠長に想いを確かめ合っている時間はなかった。

〈ゴーレム〉の禍々しい光を帯びた掌底がゆつくりと——そう、ゆつくりと俺たちに向く。

〈白式〉のエネルギーは底をついている。攻撃を防ぐ手立てはない。逃げる術も、またない。

「あたし、一夏と一緒になら怖くないよ」

そう微笑みかけてくれる鈴に俺は少し救われた気がした。

俺はその笑みを生涯——いや、死んだ後も、きつと忘れないだろう。

「ありがとな、鈴」

〈白式〉の腕部を解除し、鈴の涙を拭ってやる。それが鈴にしてやれる最後の優しさだった。

そして俺は鈴を庇うように強く抱きしめ、やがて訪れるであろう〈破滅〉を待った。

第15話 Counter Attack

訪れる破滅を前に、俺は鈴を守れなかった無念で心が砕けそうになる。

せめて、鈴だけはどうか助かってくれ。そう何百回も念じ、抱き留め、祈る。

届かないのは、わかっている。それでも好きと言ってくれたこの幼馴染の無事を願って。

——大丈夫です。あなたの祈り、しかと聞き遂げました。

どこからともなく響いたその言葉が、優しく俺の耳朵を打つ。

その囁きに恐る恐る目を開けると、赤いビームが「何か」によって遮られていた。

「これは一体……？」

ビームから俺たちを守ってくれたのは、硝子のように透き通った赤い円環の盾だった。

周囲には短剣らしき機器が円環状に配置されており、それがこの盾を形成していると解かった。

「あたしたち助かったの？」

「みたいだ」

「よかった……」

「ああ、よかった。ほんとうに。——でも一体誰が……」

互いの無事を確認め合いながら、俺たちは去っていく短剣を目で追いかけた。

その先に居たのは赤いISだ。

赫々と燃えるような赤い装甲に、盾形の非固定浮遊部位。両肩の武装支持架には大型のブレードを装備している。さながら中世の騎士を思わせる意匠。そのISは、非固定浮遊部位と腰部のサイドバインダーに例の短剣を格納すると、俺たちを庇うように降り立った。

「なあ、鈴、あの赤いIS見たことあるか？」

「ううん。初めて見る機体だわ。ようやく救援がきたってこと？」

「でも、そうなら一言あってもよさそうじゃないか」

俺たちを助けたISは登場してこのかた、何も言っていない。それを不可解に思った俺は、シンプルな質問を投げかけた。

「お前は何者なんだ？ 学園の関係者なのか？」

……問い掛けるに對する返答はなかった。

もしかしてアレも無人機なのだろうか。——そう思った時だ。

〈君のファンの一人だよ〉

赤いISから思わぬ返答が帰ってきた。

しかも変声機を使っているのか、男性とも女性ともとれない声音で。

「俺のファン？ どういうことだ？」

困惑する俺に赤いIS——だと抽象的すぎるので〈レッド・ティアーズ〉とそう仮名をつけることにする——は何も答えず、〈ゴレム〉に肉薄した。しかもマウントされた大剣を抜かず、徒手空拳で。

対しく〈ゴレム〉は、自慢の豪腕を見せ付けるかのように粒子ビーム砲を構えた。

しかし、ひらりひらりと蝶のように舞う〈レッド・ティアーズ〉の機動に翻弄され、中々のを絞れない。そのせいで、空を掻き混ぜるように何度も何度も照準を切り替えている。

「鮮やかな動きね。絶対、相手の射線上に入らないようにしてる」

相手の射線上に入らない——要するに〈レッド・ティアーズ〉は銃口が自分に向けられるより早く回避行動を取っているのだ。だから、相手は的を絞れない。

これを言葉で言うのは簡単だが、実演は途轍もなく難しい。なぜなら初動——相手が銃口を動かした瞬間 “どこへ向けられるか” を正確に読み取り、行動に移さないといけないからだ。

「大した操縦者ね。あれはもう代表候補生、いえ——国家代表クラスの実力だわ」

素人目でもすごかったが、代表候補生から見てもあの動きは他と一線を画しているらしい。

そして、あたふためく〈ゴレム〉を嘲笑うように〈レッド・ティアーズ〉が距離を詰める。懐を許した〈ゴレム〉は剛腕を振りか

ぶるが、〈レッド・ティアーズ〉は物ともせず受け止めた。

「ちよつと、一夏、アレ!？」

そして、俺たちは〈レッド・ティアーズ〉の取った反撃方法に瞠目した。

〈レッド・ティアーズ〉が掴んだ両手を抱えたまま〈ゴレム〉の背後に回り込み、力任せに腕部を引き千切ったのだ。

「あのIS、なんてパワーだ!？」

「それだけじゃない。ISの脆弱性を狙った内部破壊をうまく活用したんだわ」

圧倒される俺たちを余所に〈レッド・ティアーズ〉は尚も一方的な攻勢を見せた。

〈レッド・ティアーズ〉は腕いだ腕をフルスイングして〈ゴレム〉をかつ飛ばし、バランスが崩れたところに回し蹴りを叩き込む。さらに転倒した〈ゴレム〉の頭部センサーを踏み引き、力の差を悠々と見せ付けた

圧倒的な力量差。俺はその光景にただただ啞然とした、そんな時だ。

「一夏、ちよつとアレ」

鈴が指差す先で、〈ゴレム〉の目を模したセンサーレンズが自然に点滅し始めた。

直感的にその点滅が示すモノを理解する。——あいつ、苦し紛れに自爆するつもりか!

一体どれくらいの規模の爆発が起こるのか。予想もできないが、こっちはISの防御機能を失っているんだ。このままだとマズイぞ。自爆されたらタダじゃすまない。

〈レッド・ティアーズ〉もそれに気付いたのか、行動を起こした。

「アイツ、〈ゴレム〉をどうする気?」

〈ゴレム〉を締め上げた〈レッド・ティアーズ〉は、赤い粒子をまとい始めた。

量子化——ISが形態移行する際に見られる現象だ。

でも、〈レッド・ティアーズ〉が形態移行しようとしているように

は見えない。

では、なんなのか。それを理解するより早く、〈レッド・テイアーズ〉は完全に量子化して、この場から消えていなくなっていた。自爆寸前の〈ゴレム〉と共に。

「消えた……」

「どこいっちゃったのよ、あいつら……」

今までの出来事が嘘だったように静まるアリーナ。鈴と俺は呆然と立ち尽くすしかなかった。

ただ難は去ったとみていいのだろう。そう思うと、俺の裡から安堵が込み上げてきた。同時に全身が鉛のごとく重くなる。緊張の糸が切れ、疲れがどつと押し寄せてきたのだ。

なんとか踏ん張ってみたが、俺は力なくその場へ崩れ落ちてしまった。

「二夏さん、助けに参りましたわよ！」

そこに綺麗な声が聞こえてくる。セシリアの声だ。

他にいくつも声が聞こえた。どうやらようやく救助部隊がきてくれたようだ。

俺は安心して意識を手放した。



「まったく、自爆なんて悪役の考えそうな事ですねっ！」

量子テレポートのあと、私は連れてきた〈ゴレム〉を眼前の大海原に向かって蹴り落とした。

そして、爆発の衝撃に備えて、再度《単一仕様能力》のエネルギーを充填する。

だが、その作業は不要に終わる。

海面ギリギリで体勢を整えた〈ゴレム〉のセンサーラインから点滅が消えたのだ。

《自爆シークエンス解除、〃戦闘続行〃を設定》

きっとココでの自爆は効果的じゃないと判断したのだろう。

〈ゴレム〉は体勢を立て直し、改めて私と対峙した。私も高周波ブレード《ヴォーパル》を抜き、それに応える。

「いいでしょう。ならば戦争です。ヘレッドクイーン〈、準備はいいですか?」

《I'm Ready——いつでも、どこでも》

「では、始めましょうか。——IS 同士による、とんでもない戦争つてヤツを!」

私の宣戦布告に〈ゴレム〉が隻腕のビーム砲を構えた——
が、遅い。

私は瞬間^{イグニッションブースト}加速を発動し、相手の攻撃よりも早く懐に飛び込んだ。運動エネルギーを乗せた斬撃で〈ゴレム〉の片腕を切断する。さらに無防備になった腹部に渾身の蹴りを叩き込んだ。

「鈴の恋路を邪魔するヤツは、私に蹴られて地獄に落ちろ!」

金属が拉げる音と共に、ゴレムの巨軀がくの字に折れる。

ゴレムはなんとか体制を立て直して、肩の副兵装を——小型ビーム砲を私に向けた。

「だから、遅いんですよ。——いけよ、シュナイダー!!」

《Yes My honey——Off with their heads!!》

首を刎ねろ。そう命じられたソードビットが、鋭い体軀を翻して〈ゴレム〉に突貫する。

〈ゴレム〉は残った副兵装で迎撃を試みたが、数と機動性で勝るビットの前では、殆ど無力だった。

呆れるほどスマートに、ソードビットが肩のビーム砲を無力化していく。〈ゴレム〉を完全武装解除するのに、そう時間は係らなかった。

「おわりですね。——貴方の心臓^{コア}、この私が貫き受けることにしましょう」

相手のエネルギーが尽き果てたところで、私は左腕部のグレネードランチャーを構えた。

その内部には《剥離弾^{リムーバー}》という特殊頭が装填されている。それを投射すると、蜘蛛のような形状に変形した弾頭が、〈ゴーレム〉を黒いクリスタルに変貌させた。ISを強制コア化し、再展開不能にする。それが《剥離弾》の効果だ。

《Checkmate——目標の完全停止を確認。鹵獲完了》

「了解。評価レポートをZ1^{ズール}に保存」

新兵器の効果をAIに保存させ、私は禍々しく〈ゴーレム〉の〈コア〉を手に取った。

ロリーナの話によると初期化されたコアは透明らしく、イニシヤライズを行うと搭乗者にあったと色へと変色するらしい。そして《第二次形態移行》や《単一仕様能力》を得ると、いつそう強い光を放つという。

「さて、あとはこれを技術部へ引き渡すだけですな」

その後、技術部が〈ゴーレム〉の部品から学園襲撃を企てた黒幕に繋がる手掛かりを見つけてくれるだろう。私はその報告を待つばかりだ。

(それにしても大変なことになりましたね)

こんな事態になってしまったけど、二人はうまく仲直りできたでしょうか……。

もしかしたら、まだ仕事が残っているかもしれない。

そんな事を思いながら、私は〈赤騎士〉を不可視モード^EにしてIS学園を目指した。



俺が目覚めると清潔感のある天井が目に入った。

さらに薬品のような臭いが鼻腔をつく。この独特の臭い。ここは学園の保健室か。

「目を覚めましたか」

ベッドの側で丸椅子に座る千冬姉を見つけ、俺は覚醒半ばのまま身

体を起こした。

だが、思うように動かない体に四苦八苦する。なんだ、身体がすげー怠いんだが。

「無理をするな、ストレスと疲労からくる倦怠感だ。しばらく動ける身体ではない」

疲労とストレスか。確かにこの一ヶ月、気の休まる時間なんてほとんどなかったからな。

それが積もりに積もってこの有様か。

「はは、この程度で根を上げちまうなんて、情けないな」

「何を言う。あれだけハードな生活をおくれば、大抵の人間は参って当然だぞ」

「でもさ、千冬姉ならこれぐらい軽くこなしそうじゃないか」

千冬姉が俺と同じ境遇を追体験しても、キョロっとしていそうだ。

そんな俺の思考を読み取ってか、千冬姉が苦笑をもらった。

「おまえは私をサイボーグか何かと勘違いしていないか？ 私だって人間だ。働き続ければ疲れるし、ストレスを感じることもある。——それでも、こうして働き続けられるのは、おまえが影で労ってくれていたからだろ？ おまえには感謝している」

「ち、千冬姉？ ど、どうした？」

普段は扱き使うだけ使って、礼のひとつも言わない姉に、俺は軽く戦慄した。

千冬姉も千冬姉で、自分の言ったことが恥ずかしくなったのか、急に視線を逸らす。

「ばかもの、おまえが心配をかけさせるからだ」

「ああ」

俺はくゴレムくが襲撃してきた時を思い出した。

あの時、俺はみんなの避難時間を稼ぐため、その場に留める決意をした。山田先生も悲鳴を上げていたし、千冬姉の心労も半端じゃなかったに違いない。それが千冬姉にいろんな事を省みさせてしまったのだろう。

「その、千冬姉、心配かけてごめん」

「いいさ。男はやんちゃな方がいい。それに手間が掛かる子ほど可愛いというだろ」

「わふッ!？」

笑顔で頭をガシガシと撫でられ、俺は泡ふためいた。

こんなことされたのは、いつ以来だろう。つーか、今日の千冬姉はやっぱりおかしいぞ。

「さて、無事に目が覚めたようだし、私は後始末があるので仕事に戻る。それからおまえには後日、事情聴取を行うからそのつもりでいろ。それまでしっかりと療養しておけ」

そう言つて踵を返し、スタスタと保健室を出て行く千冬姉。

事情聴取か。きつと例の所属不明のISとか、赤いISかと、いろいろ聴取されるのだろう。

千冬姉に言われたとおり、俺は今の内に療養を取ることにした。

(しかし今日は色々あったな)

そういえば約束の件どうなるんだろう。そう思いながら、俺は眠りに落ちた。



夕暮れに染まる学校。誰もいない教室で、少年と少女が楽しげに語り合っていた。

少年は黒髪の短髪で、少女は髪を左右に結んでいる。どこかで見た二人だ。

そんなふたりを、俺は映画を見るように客観的な立場から眺めていた。

「ねえ、一夏」

少女が少年に言う。

ん、一夏？ あ、もしかしてこの子供たち、俺と……鈴か？

「なんだよ、鈴」

少年が少女に答える。やっぱりそうか。じゃあ、ココは俺が通つて

いた小学校か。

「どうやら俺は、自分の思い出を第三者として垣間見ているらしい。あのね。もし料理が上達したら——毎日あたしの酢豚食べてくれる?」

子供の鈴が子供の俺に言う。その表情は夕焼けに照らし出されてか、ほのかに赤い。

そうか、鈴の言っていた“約束”ってそういう事だったのか。

すると、急激に意識が薄れだした。学校が、教室が、霞んでいく。俺は夢から醒めようとしていた。



人の気配がして、夢と現の狭間にいた俺は薄っすら目を開けた。その目に綺麗な女性の顔が映る。しかも、その近いこと、近いこと。下手すれば、鼻先がくっ付きそうな近さだ。

「鈴? 何やってんだ?」

俺は今日、共に戦った戦友の名を口にした。

「い、一夏!?! あんた起きてたの!?!」

「いや、なんか変な気配がしたから目が覚めたんだ」

「へ、変な気配……(うう、ロマンチックなつもりだったのに……) どうした鈴、急に怨めたしい顔して。」

まあいい。それより俺は約束について触れた。

「そうだ、鈴。約束の件んだけど、思い出したんだ。正確には『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる?』だったな。ごめん、俺でつきり毎日タダメシを食わせてもらえるものだと勘違いしてた」

「あ、あ、う……」

「——それで、あのき、ふと思ったんだが、あの約束ってもしかして他の意味があったのか? 例えば『俺に毎日味噌汁をく』みたいなプロポーズだったとか?」

「ぷぷぷぷぷぷ、プロポーズ!!」

冗談半分のつもりが、鈴は赤ペンキで塗り手練つたみたいに赤くなる。

どうした鈴。もしかして本当にプロポーズ、だった……のか!?

そういえば、あのとき鈴は俺を好きと言ってくれた。もしかすると、もしかするののか。

(だとしたら、俺はなんて答えれば……)

そんな俺の心配は不要なものになった。

「ば、バカじゃない! そんな事ある訳ないでしょ、深読みしすぎよ! 　ただ、あんたに美味しい酢豚をご馳走したかっただけよ　あは、あははは……!」

俺の背中をバシバシ叩き、全否定する鈴。……そっか。やっぱりそうだよな。俺と鈴に限って、そういう関係になるわけがない。きっと俺に好きって言ったのも『友達として好き』って意味なんだろう。

でも、がつくりと肩を落としているのはなぜだろう。『はあ……』と深い溜息までついて。

「どうしたんだ、鈴?　急に落ち込んで」

「なんでもない。ただ、あの頃から何も変わってない自分に絶望しているだけ」

「絶望って、それ何でもなくないだろ」

目を虚ろにした鈴は、なおもパイプ椅子の上で項垂れ続ける。

やべー、傍から見ると完全に廃人だ。

そこでガシヤツと自動ドアが開く音がした。顔を覗かせたのはアリスだ。

「どうも。具合はどうですか?」

アリスは部屋の様子を窺いながら、俺と鈴を交互に見る。

そして俺と鈴が二人きりなのに気づき、「あら♡」という意味深な微笑みを見せた。

「倒れたと聞いたので、お見舞いに来たのですが、もしかしてお邪魔でしたか?」

「いや、そんな事ねえよ。せっかく来たんだし、座れよ」

今回の件において功労者である彼女を無碍にはできない。

アリスは鈴の様子を伺いつつ『では、少しだけ』と空いている席に腰掛けた。

「それにしても、今日は大変な日でしたね」

「ああ、まったくだ。アリスの方は大丈夫だったか？」

「ええ、なんとか。すぐシステムが復旧しましたので。怪我人もなかったそうですよ」

「そうか、それを聞いて安心したよ」

「ところで約束の件はどうになりました？　それが気になって寄せてもらったんですけど」

「ああ、それなら解決したぜ。誤解もちゃんと解けたぞ」

言うなりアリスは目をワクワクと光らせた。

「では、返事をなんと？」

「返事？　あ、いや、返事って別にプロポーズとかじゃないらしいぞ？」

俺もちよつとそうなのかなって思ったんだけど、鈴が深読みするなって笑われたぜ。本当は俺にちゃんと酢豚を味わって欲しかったわけさ」

たぶん、俺がぶたれたのはタダで飯を食おうとしたからだな。

そりゃ鈴は定食家の娘だ。幼馴染であろうと、無銭飲食しようとするれば怒るわな。

「——ってあれ、なんでアリスは白目むいてんだ？」

俺の話を聞いたアリスは「どうしてこうなった」というを顔していた。

対し、隣の鈴は、サーッと血の気の無い顔でガタガタ震えている。

「鈴、ちよつとお話があります」

「え、あたしは、な、ないけど？」

「いいから、OHANASIがあります」

言つて鈴の首根っこを掴み、隣のベッドに引きずり込む。

シャツと広げたカーテンの向こうから、何やら言い争う声が聞こえてきた。

「鈴！　これはどういうことですか！　あなたが真意を捻じ曲げてど

うするんです！」

「仕方ないじゃない！『プロポーズか？』なんて訊かれて、恥かしくなっちゃったんだもん」

「なら、最初から言わないでくださいよ」

「だって、クラスも違うしー、コーチも断られるしー、同室も取られるしー。なんかひとつ優位に立てる要素が欲しかったのよ。知ってるでしょ？」

「あのね、そういう計画性のない戦力の逐次投入が一番しちやいけないですよ。あなたはベトナム戦争で何を学んだのですか」

「いやいや、あたしベトナム戦争とか参加してないから」

「ともかく、これじゃ、いろいろ心配した私がバカみたいじゃないですか」

「ごめんごめん。この通り」テヘペロ

「……………」

なんか言い争っているようだけど、よく聞こえん。——お、出てきた。

「何を話していたんだ？」

「いえね、鈴が急に人体模型とフォークダンスを踊りたいと言い出しました」

「は？ あたしそんなこと一言も言ってないけど。てか、なんでそんなハズいまね——」

「いいましたよ ね」ゴゴゴ

「うん、言った。すごく言った」

アリスに睨まれ、びくつとツイントールを撥ねさせた鈴は、いきなり保健室の人体模型に飛びつく。そして『マイムマイム』を口ずさみながら、ひとりフォークダンスを踊りだす。シニールだ。すごくシニールだ。てか、あいつ泣いてんぞ。

「恥ずかしいなら、やらなきゃいいのに」

「優しい目で見守ってあげてください。さて、私はそろそろ行くと思います」

なんだか鈴のひとりフォークダンスに満足したようで、アリスは席を立った。

そして部屋を出て行くこうとして——何かを思い出したように立ち止まる。

「ねえ一夏。女性優遇制度で女性の社会的立場は強くなりました。けれど、けして女性そのものが強くなったわけじゃありません。彼女たちは強がっているだけで、その本質は弱いままで。いつだって心の何処かでは、男性の力強さや優しさを求めています」

唐突にそんな事を言うアリスの意図を測りかね、俺と鈴は顔を見合わせた。

そんな俺たちに優しい笑顔を送り、アリスは続ける。

「それは鈴たちとて同じこと。だから一夏。鈴や篠ノ之さん、オルコットさんたちが苦しみ、悲しんでいる時は、貴方が彼女たちの力になってあげてください」

アリスがなぜこんな話をしたのか、その真意はまだ解らない。

でも、答えは既に決まっている。

「もちろんだ、女を守るのが男の役目だからな。この信念は曲げないつもりだ」

「頼もしいですね。その気持ち、これからも忘れないでください」

「ああ。それと、あれだぞ、アリスもちやんと守ってやるからな」

カッコつけたわけじゃない。本心からの言葉だ。

そう告げるとアリスは驚いた顔をした。それから微笑みながら俺の方に歩み寄る。

「私は守られるほど弱くありませんよ」

「いてっ」

アリスは俺にデコピンし、ふわっとスカートを膨らませながら踵を返す。

そして「私を守りたいなら、もっと強くなることです」と言い残し、後ろ手を組んで保健室を出ていく。それと入れ違う形で入ってきたセシリアに軽く会釈し、彼女は去って行った。

「アリスさん、えらく機嫌がよさそうでしたが、何かありましたの」

「いや、なにも？ 気のせいじゃないか？」

経緯を話すと、セシリアが不機嫌になりそうなので、俺は何事もなかったように装った。

それでも気になるのか、ジーとみてくる。気まづくなった俺は別の話を振ることにした。

「そうだ、セシリア。実はおまえに聞きたい事があるんだ。これはきつとセシリアにしか分からないと思うから、ぜひ教えて貰いたいんだけど」

「あら、わたくしにしか分からない事？ あ、もしかしてわたくしのスリーサイズを!? し、仕方ありませんわね。一夏さんが言うなら♡ ごほん、上から8——「違うわよ」

胸の話が出てきたからか、鈴が人体模型をセシリアに放り投げつけた。

それをひょいっとかわし、なおも3サイズを言おうとするセシリアを、今度は俺が止めた。

「鈴の言う通り、スリーサイズじゃなくて。——実は『ビットを搭載したISって<ブルー・ティアーズ>以外にも存在するのかな』って訊きたいんだよ」

「何です、そんな事ですの……。現在ビットを搭載したISはわたくしの<ブルー・ティアーズ>だけですわよ」

セシリアはしよんぼりと道端の石を蹴るような仕草をした。

そんなにスリーサイズを自慢したかったのだろうか？ 確かにス

タイルよさそう——って、そうじゃない。

「本当か？ 例えば、短剣のようなビットを積んだタイプはないのか？」

「開発プランはありましたけど、まだ設計段階で形すらありませんわ」「そうか。——実は俺たち、ビットを装備したISに助けられたんだ」「それは本当ですか？」

俺と鈴は顔を一度見合わせ、一緒に頷く。セシリアは細い指をあごに当て思案顔をした。

もしかしたら自分たちの技術が漏洩しているのでは、と危惧してい

るのだろうか。

「わかりましたわ。一度、開発局の方に問い合わせてみます。でも、期待はしないでくださいな。言ってもわたくしは一介の代表候補生、得られる情報には限度がありますの」

優遇こそされているが、代表候補生はあくまで軍属。国家機密を閲覧できるほど権限は与えられていないだろう。だから『君には知る資格がない』と門前払いされる可能性が高い。

期待は薄いだろう。それでも俺は、感謝の意を込めて、礼を言った。

「ありがとな、セシリア」

「礼には及びませんわ。その代わりに、有力な情報が手に入りましたら、わたくしとデートなど」

セシリアは上目使いで、人差し指の先をツンツンと合わせる。

それくらいお安い御用だったが、なぜか鈴が猛烈に反発した。

「なんでそうなるのよ！ 礼には及ばないって言ったじゃない！」

「り、鈴さんは黙っていてくださいいな！」

なんで、このふたりといい、箒といい、すぐ喧嘩するかな。もう付き合ってられんわ。

俺は耳を塞ぎ、夕焼け空に目を遣る。

そして赤いISについて思い返した。〈レッド・ティアーズ〉、お前は一体何者なんだ？

第16話 次のステージへ

IS学園の地下50メートル地下にある機密特区。通称『アスガルド』。

ここは『どこの国家にも帰属しない』という特性を持つIS学園が、独自の自治を形成するために設けた区画である。ゆえにこの場所に入室できる人間は一握り。教師であれば<Level4>以上の権限が必要で、生徒にいたっては生徒会長のみが入室できる。

そんな場所の一角——分析室では、いま「解剖手術」が行われていた。しかしそれは人体の解剖ではない。なぜなら切開した箇所から臓腑の代わりにコードや集積回路が覗いていたからだ。

そう、解剖されているのは一夏たちが破壊した自動人形オートマトンであった。「どうだ？」

大方の解剖が終わったところで、千冬が出頭した真耶に尋ねた。

「IS本体を回収できなかつたので、断言はできませんが、ISの起動に必要な生体情報を持っていました。おそらくあの装置があれば、ISを無人で稼働できるかと思われれます。それにしても、一体どこがこんなものを……」

ISの無人化。スタンドアローン

ISに限らず、無人航空機UAVを始めとした無人兵器の研究は、ベロニカと呼ばれる人物の技術で飛躍的に進歩した。しかし、これらの自立制御は未だ不完全で、戦場の完全なる自動化は何十年先だと言われている。

にも関わらずゴーレムは単機で戦場に適応し、それなりの戦果を上げた。

そんな高度な無人テクノロジー、アメリカやイスラエルですら持つていない。

「さあな、きっとどこかの天才の仕業だろう」

どこか確信めいた口調だったが、真耶は気づかず続けた。

「それで、学園の対応は」

真耶が『今回の件をどう処理するか』を決める職員会議に参加して

いた千冬に尋ねる。

「ここはまがりなりにも教育機関だからな。今回の事件について説明はするそうだ。」

IS学園は特殊な学校であるが、教育機関である事に変わりはない。子供を預かる身として、相応の対応を見せる必要がある。これが学園上層部の意向であった。

「まあ、そうしたところで批難は避けられんだろうがな」

最強のIS操縦者へブリュンヒルデを抱え、60機以上のISを配備しておきながら、たった一機のISに勝手を許したのだ。総本山の名折れもいいところである。これは確実に世論の批難を買うだろう。教師陣の対応、学園の安全性、今後の対応。厳しく言及されることは間違いない。

「こちら側は被害者なんですけどねえ……」

「世論というものは、そういうものだ。正否は関係ない。当分は事後対応に追われるぞ」

千冬は読むのがうんざりしそうなマニュアルの束を手渡した。

真耶は苦笑しながら軽く書類に目を通す。その中にある記述を見つ、顔を上げた。

そこには以下のこと記してあった。

1：当学園を襲撃した所属不明のISは、当学園の生徒が撃墜した事とする。

2：1において『織斑一夏』と『鳳鈴音』の両名をその功労者とする。

「これって……」

内容から学園の魂胆を理解するなり、真耶は思わず千冬を見た。

「そうだ。撃墜者を学園の在学生にして、生徒の質の高さをアピールする。そうする事で『襲撃された』というマイナスのイメージを『学園の生徒は襲撃者を退けるほど優秀』というプラスのイメージに世論を操作するつもりなのだろう」

この学園の運営費が日本国民の血税で賄われている以上、世論は他人事ではない。

ゆえに真実はどうあれ、学園を保守するためには、こういった手段を取らざるを得なかった。

「では、凰さんが報告した赤いISについても？」

「公表されない。公表しようにも、映像はおろかく白式>やく甲龍>のIS活動記録さえ消されたように残っていないからな。そもそも『突如現れたISが、颯爽に襲撃者を倒し、去って行った』など誰が信用する？ カバー原作の方がまだよくできている」

苦笑交じり告げる千冬であったが、僅かに苛立ちのようなモノが募っていた。

当然だろう。在りもしない事実で自分の弟が英雄に祀り上げられるのだから。

良い顔などできるはずがない。でも、彼女は言う。

「仕方あるまい」と。

けれど、そう言う千冬の顔は、その言葉にそぐわないものだった。



「一夏ああ!!」

歩けるまでに回復した俺が部屋に戻ると、いきなり箒が抱き着いてきた。

それをなんとか受け止めるも、全身がブリキ人形と化していた俺は、一緒に尻餅をついた。

「ど、どうした箒。そんなに目を泣き腫らして」

「死んだのかと思ったぞ!!」

死んだかと思った？

ああ、そうか。てつきり俺がああ襲撃者に殺されたものだと思っただんだな。

でも、待てよ。箒もあの場に居ただから、俺が赤いISに助けられた事も知ってるはずじゃ？

「不甲斐ない。私はお前に何もしてやれなかった。お前がやられそうになった時、私は気を……」

「もしかして——気を失っていたのか？」

「……………うん」

要するにこういう事だ。箒は俺が殺されかけたショックで失神し、<レッド・ティアーズ>に助けられた事を知らないまま、今に至る、と。

しかし、あの箒がショックで失神とはな。相当、胆が据わっていると思っていたんだが。

ともあれ、俺は心配をかけたことをあやまるように、箒の頭を撫でた。

「そつか。心配かけて、悪かったな」

「ふん、まつたくだ。これからは余計な心配をかけさせるなよッ」

ふんつとそつぽを向く箒に、俺は答えず髪を撫で続けた。

悪いな、箒。たぶんそれはできない。すくなくても、俺に専用機ちからがある内は。

持つ者は、持たざる者を守る義務がある。

たとえ、また危険な目に遭うとしても、俺は大事な人たちを守るために立ち向かうと思う。

「なんだ、その申し訳なさそうな顔は」

「なんでもねーよ。それより鈴から伝言だ——『押しかけて悪かった』ってさ」

「ふん、悪いと思っているなら、伝言ではなく自分から謝りにくるべきだ」

腕を組んでそう主張する箒だが、表情はさほど怒っているようには見えなかった。

なにはともあれ、これからは幼馴染同士うまくやってくれるだろう。

「ところで、箒。メシはもう食ったか」

「いや、まだだ。いま起きたところなんだ」

「じゃあ、一緒にメシ食いにいくか？」

「ああ、そうだな、そうしよう。腹もすいたことだしな」

「よし決まりだな」

俺は立ち上がり、箒にそっと手を差し伸べる。

そして、ちよつとキザつたらしくエスコートしながら食堂へ向かった。

♡

◆

♡

「きゃー、織斑君よ!」「おつかれさまだよ、織斑くん!」「今日の活躍、聞いたよ!」「良かったら、こっちの席にきて、今日の話を聞かせて!」「わたしも、わたしも」

場面は変つて食堂……なのだが、入るなり俺たちは強烈な熱視線を受けていた。それも日頃から受ける男卑の視線とは違う、まるで英雄の凱旋を待ちわびていたかのような視線だ。

「箒、一体何があつたんだ?」

「私を知ると思ふか?」

だよな、今まで気を失っていた箒が原因を知るわけもない。

ともあれ、考えても仕方がないので、俺たちは視線の集中砲火を掻い潜りながら、食券を買った。そして適当な席を探すが、時間が遅かつた事もある、どこも満席状態だった。

仕方ない。テーブル席は諦めて、適当に座れそうな場所を見つけて

「一夏さん、こちら二人分空いていますわよ」

と、声をかけてきたのはセシリアだ。おお、セシリア、ナイス。

というわけで、俺と箒はセシリアの場所に向かった。その途中『ええ、そつち行ついつちやうの』とか『今日の話とか聞きたかつたのに』とか、いろいろ聞こえてきたが無視だ、無視。断固、無視だ。

「お? 鈴とアリスも一緒なのか」

同席では鈴とアリスが仲良くラーメンを啜っていた。

「ん、ばったりあつてね」

「そうか。ところでさ、いつに増して騒がしいんだが、何かあったのか？」

「学園の窮地を救った英雄の凱旋ですから、湧き立つのは当然では？」
レンゲの中にミニラーメンを作りながら、アリスがそんな事を言う。

俺は自分の耳を疑った。学園を危機から救った英雄？ 俺が？

それは鈴も同じだったらしく、持っていたレンゲをピタリと止めた。

「違うわ。あたしたち——いえ、学園を窮地から救ったのは、あの赤いISよ」

「そうだ。俺は無残にやられただけだ。学園も、鈴も、何も守れちゃいない」

俺と鈴が異論を唱えても、アリスは『赤いIS？』と不思議そうに首を傾げるばかり。

ただ状況が飲み込めない筈だけは、首を傾げ、『赤いISとはなんなんだ？』と疑問符を浮かべていた。

「でも、みなさん、噂してますよ。織斑一夏が勇敢に戦い、襲撃者を倒したと」

「それは噂だろ。当事者がこう言っているんだ。間違いない」

「その事についてだが、織斑、鳳、ちよつとこい」

アリスとの口論に、割り込んできたのは千冬姉だ。

千冬姉は目線で『ついてこい』と俺たちの退席を促す。

きつと今回の件についてだろうと踏んだ俺と鈴は、素直に従った。

「この辺でいいだろう」

食堂からやや離れ、人気の無い所までやってきたところで千冬姉は足を止めた。

「もう気付いていると思うが、所属不明のISはお前たちよつて破壊された事になっている。これは単なる噂ではない。学園の意向だ。以後、そのように振舞え。いいな」

「なんで、そんな事するんだよ。ちゃんと本当の事、話せばいいだろう？」

「なら話すか？ 『例のISを取り逃がしたから、再び学園が襲撃されるかもしれない』と。そんな不安を煽ってみろ。学食で食事している連中はどういう顔をする？ パーティー会場が一瞬で通夜になるぞ？」

千冬姉の言葉に俺は唇を噛んだ。

千冬姉が言うとおりで。ああやって騒いでいられるのは「俺がアイツを倒した」という事実があるからだ。嘘で人が幸せになる事だってある。真実が人を不幸にする事も……

「それに全てが嘘でもない。おまえがああ娘共のために、決死の覚悟で戦ったのは事実だ」

「でも、戦っただけだ。結果的に俺は何も守れなかった」

俺は拳を強く握りしめた。

勇敢に戦っただけじゃ意味がないんだ。守りたいものを守れてこそ、そこに意味がある。

大事なのは結果。いくら努力が尊くても、その過程を誇ってしまったては本末転倒だ。

「そうか。なら、嘘を真実に変えてみせろ」

「え？」

「例のISが、おまえの言うくレッド・ティアーズに撃墜されたとは限らないだろう。事実としてくゴレム>の残骸は発見されていない。なら再び襲撃してくる可能性もある。もし、そうなった時、今度はお前の手で仕留めろ。そして偽りの英雄から真の英雄になればいい」

千冬姉の言葉を、俺は強く自分の中で反芻させた。

そうだ。今回は何も守れなかったけど、今度は俺の手でみんなを守ってみせよう。

「千冬姉、俺、英雄なんかに興味はないけど、強くなるよ。強くなって、今度こそみんなを守る」

「それでこそ私の弟だ」

千冬姉はどこか嬉しそうに俺の頭をクシャクシャと乱暴に撫でた。

「鳳、おまえはIS操縦者として、そして専用機持ちとして一夏の先輩

だ。よろしくたのむぞ」

「え！ は、はい！」

面を食らう鈴だったが、すぐさま嬉しそうに返事した。
きつと織斑先生のお墨付きを貰えたのが嬉しかったのだろう。

「愚弟を頼んだぞ」

酷い言われようだが、期待されているのは分かった。俺もそれに応えないとな。

千冬姉は闇へ溶け込むように姿を晦ます——途中、思い出したように振り返った。

「それと、お前たちが見た赤いISについてだが、学園は取り扱わない方針を出した。どうしても知りたいなら、『危険』が及ばない程度に、自分たちで調べろ」

学園は<レッド・ティアーズ>について調査しない、それでも知りたいなら自分で調べろ、か。

命の恩人だし、礼ぐらい言いたいな。おそらく学園の生徒だろうし、ちよつと探ってみるか。



食後。帰宅した一夏は備えられたデスクに腰を下した。それから無料配布されているタブレット端末とISの参考書を開き、セシリアが作成した《シールド無効化攻撃》戦術チャートに目を通してはじめる。
その顔は『向上心に溢れている』というより、使命感に駆られたような表情だった。

もしかしたら、鈴を守れなかった負い目がそうさせているのかもしれない。

(今日ぐらい、休めばいいものを)

同室の箒はそう思う。けれど、そう言ったところで彼は『大丈夫さ』というだろう。

それがわかる箒は、台所に向かった。リラックス効果のあるハーブ

ティーがあつたはずなのだ。

「あまり、根を詰めすぎるなよ」

箒が淹れたハーブ茶を、一夏は「お、サンキュ」と受け取った。そして口にして「うまいな」と微笑む。箒は照れ隠しに「当然だ、私が入れたのだからな」と威張った。その取るに足らないやり取りが、とても愛おしかった。

(これがずっと続けばいいな)

好きな彼と時間を共有できる嬉しさに心を弾ませていると、ノックの音が届いた。

「はい、いま出ます。——あれ、山田先生、どうしたんですか、こんな時間に」

夜中の訪問者は真耶だった。箒はなぜか嫌な予感がした。

「夜分、遅くにすみません、織斑くん。いきなりですが、篠ノ之さんに部屋を移動して頂こうと思ひまして」

「え？」

その言葉に、箒は奈落へ突き落とされたような気分になった。

お引越し、お引越し、それは箒が子供の頃から散々してきたもの。そして大嫌いなもの。

もう縁がないと思っていたのに、またお引越し……

『私はヤドカリじゃないんだぞ』と心で叫びながら、箒は冷静を装い言った。

「それはどうしても、なのででしょうか？」

さきほど時間を共有できる喜びを噛みしめていたばかりだ。

それに専用機がない箒にとって、一夏と同室は恋のアドバンテージなのである。

箒は思わず食いが下がった。

「ええ。やはり若い男女を同室にするのは、良くないと指摘されました」

「わ、私なら大丈夫かと。もし一夏が不埒な行為に及んだら私が成敗しますのです」

「でも、篠ノ之さん、押しに弱そうですし」

「そんな事は……」

　　以下、箒の妄想

『箒、俺もう我慢できないんだ』

『ま、まて、一夏。私はまだ心の準備というモノが……』

『いいだろ。それとも箒は俺の事が嫌いか？　俺は箒の事が好きだぞ』

『そんな言葉ずるい』

『大丈夫、優しくするから。な？』

『うん……』

確かに一夏に迫られたら、押しつける自信が——いやいや、そんな事ないぞ！

「来月の転入生のこともありますので、篠ノ之さんは荷物をまとめてください」

ああ、現実是非常である。もう腹を括るしかないのだろうか。

箒は最後の望みを託すように、一夏へ視線を送った。

「俺なら大丈夫だ。箒がいなくても、一人で起きられるし、歯も磨けるぞ」

(赤ん坊じゃあるまし、そんなのは出来て当然だ！)

と、箒は内心で拳を握りしめながら怒りを抱く。

それ以上に一夏の平気な態度がなぜか頭にきた。アリスの時は未練たらたらだったくせに！

「わかりました！　今すぐ部屋を移ります！　ええ、今すぐ！」

もうこんな唐変朴なんか知るか。夜な夜な私が去った寂しさで一人枕を濡らすがいい。

視線でそう訴え、箒は乱暴に荷物をまとめる。もともと私物は多くないので、荷造りは直ぐに終わった。

「世話になったな！」

と、乱暴に言葉を叩きつけ、箒は大腿で部屋を出ていく。

一夏は引きとめようせず「おお、達者でな」と手を振り、それを見送った

箒は　　“……もお！　一夏のばかつ！”と内心で罵った。

夕食を終えたあと、なんとか誤魔化しきった私は、ヘトヘトな気分
で部屋のカードリーダーに学生証をスラッシュした。

アンロックの文字が表示されるのを確認してドアノブを回す。――
次の瞬間、人の気配を感じ、私は臨戦態勢に入った。

私に同居人はいない。知人なら断りなく部屋に上がるマネなどし
ないだろう。

とすれば不法侵入の可能性が高いが、おかしな事に部屋の明かりは
ついていて。

「こんばんは、月が綺麗ね」

と、部屋にいた女性が嗜んでいたコーヒカップを軽くあげる。

優雅なプラチナブロンズを月明かりで煌めかせ、そう微笑んだ女性
はロリーナだった。

私はどっと力が抜けた。はあく、来るなら来るって連絡ぐらいして
ください。

「どうしたの？」

「いえ、なにも……」

私はとりあえず部屋に入り、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り
出す。

それをパキッとひねり、デスクのチェアに腰かけた。

「しかし、よくこのロックを外せましたね」

IS学園は国防の肝となるIS操縦者を育てる学校だ。防犯とセ
キュリティーはしっかり成されている（ちなみに、この部屋のガラス
だって密かに防弾ガラスだ）。学園が配布するIDカードがないとこ
の施設には立ち入れないはずだが。

「学園の機能をリカバリーしたときに、ちよつと細工をね」

サイバー攻撃を受け、ダウンしていた学園のシステムは、私の帰還
と共に回復した。

それは、彼女が奪われたシステムに侵入してシステムをリカバリーしたからだ。彼女はそれほどコンピューターの造形が深い。

「そうでしたか。で、今日はどのような要件で？ 必要な報告はすでに行いましたか？」

「あらあら、せっかく会いにきたのに素っ気ない。昔はどこへ行くにも、私のあとをつけてきたのにね？ あの頃の可愛いアリスはどこへ行ってしまったのかしら」

と、すねたように腕を組むロリーナ。母性たつぷりな巨乳がたゆんと揺れた。

「それは捏造です」

私が組織に加入したのは1年とちよつと前だ。それ以前はアメリカにいた。

彼女とは組織加入からの付き合いなので、彼女が私の幼少期など知るはずがない。

「うふふ、そうだったかしら。まあいいわ、本題に移りましょう。鹵獲したISなのだけど」

「何かわかりましたか？」

「残念ながら、最初から他の手に渡ることを想定していたみたいで、部品の出所がわからないよう隠蔽されていたわ。でも、ナノレベルで調査すれば、何か手掛かりが掴めるかもしれないわ。時間はかかるでしょうけど」

あれだけ準備周到だったのだ。それぐらいの細工はしてあつて当然か。

「でも、現時点でこれだけは言えるわ。学園襲撃を目論んだ組織はかなり高い技術力、それこそ私たちと同等か、それ以上の力を持っていると見ていい」

「ほんとですか？」

〈デウス・エクス・マキナ〉の技術力は米軍をも凌ぐ。それらを齎しているのが、目の前の才媛ロリーナ・リデルであるのだけど、そんな彼女より高いテクノロジーを持つテロ組織がある。にわかには信じられない話だ。

ロリーナの言葉に自然と空気が重くなる。空気の粘度が増した気がした。

「じゃ、今回の襲撃の目的は？」

「陽動、だったのかしら。情報部は各国のインテリジェンス・コミュニケーションと連携して警戒にあたっているけど、今のところ動きがあったという報告はないわ。もしかしたら、他の目的や意味があったのかもしれない」

「たとえば私たちへの挑戦状？」

「ありえるわね。『我々は世界を転覆させるだけの力を持っている。さあ、止めてみる、秩序の番犬を名乗る偽善者どもめ』とでも言いたいのかも知れない。なんにせよ、再び世界が荒れそうだわ」

「荒事には慣れています」

「頼もしいわね。期待しているわ、アリス・リデル」

ロリーナのウインクに、私は『はい』と強く頷く。

その時、部屋にノックの音が響いた。

「ロリーナ、お客が来たようです」

と、振り返るが、そこにもうロリーナはいなかった。

「あなたを可愛がるのは今度にするわ」という置き手紙と、ほのかな甘い香りを残して。

忙しい女性だなど思いながら、私は来客の応対に向かった。

「どちら様でしょうか？」

ドアを開けると、山田先生と不機嫌な篠ノ之さんが立っていた。

なんででしょうか。遊びに来たという具合ではなさそうですが。

「こんばんは、リデルさん。えっと。実は部屋割りを変更することになりました」

「変更？」

「はい、若い男女を同じ部屋にするのはいろいろと問題があると指摘されました。篠ノ之さんをこちらに移すことになったんです」

なるほど。二人とも多感な時期ですからね。一夜の過ちで何が起こるか分からない。

もし、そんな事が起きれば、学園側としても一大事だ。

「そういう訳なので仲良くしてあげてください。——では、私はこれで」

篠ノ之さんを残して、山田先生は部屋を退室していった。まだ事後処理があるらしい。

私はとりあえず、不機嫌そうな篠ノ之さんを部屋に招き入れた。

「では、改めて。これからよろしくお願いしますね、篠ノ之さん」

「ああ、よろしく頼む」

挨拶もそこそこに、篠ノ之さんは荷物を乱暴に置き、不貞腐れたように腰掛けた。

この様子だと一夏と一悶着あったようですね。とりあえず、話だけでも聞いてみましょうか。

「篠ノ之さん、ご機嫌ナナメのようですが、どうしたのですか？」

「別に私は機嫌を損ねてなどいない。生まれつきこういう顔だ」

そう言うも、顔にはしつかり『私は機嫌が悪いぞ』と書かれている。

前から思っていたのですが、篠ノ之さんって硬派を演じているわりには、意外と顔に出やすいタイプですよ。

「もしかして一夏と同室じゃなくなつたからですか？」

篠ノ之さんはぐつと唸って狼狽したが、

「だ、男女七歳にして同衾せず。先生は正しい対応をした。それは理解している。ただ……」

「ただ？」

「私は一夏にほんの少しさびしがる素振りを見せて欲しかったのだ」

篠ノ之さんは頬を赤くして本音を告げた。

なるほど。去り際の態度が素っ気なかったから、すねているのか。

一夏に懸想する篠ノ之さんとしては、気の利いた別れ言葉が欲しかったのだろう。

その気持ちが分からないでもなかった私は、彼に代わって気の利いた言葉を探した。

「大丈夫ですよ、そんなことで悩まなくなつて。あなたと彼には強い絆があるでしょ？」

一夏と篠ノ之さんの間に特別な絆がある。剣道という、切り結ぶこ

とで紡いだ絆が。

その絆は部屋が別々になったぐらいじゃ、きつと揺らがない。

「そうか、そうかもしれんな」

「ええ、そうですとも。それに今生の別れをしたわけじゃないじゃないのだし」

私がそう笑みかけたその時、部屋に再びノックが響いた。

今日はなんだが訪問者の多い日ですね。鈴でも遊びに来たかな？

「は〜い、どちらさまで？」

「俺なんだが、ちよつといいか？」

声は件の一夏だった。私は「もしかしたら」と篠ノ之さんに期待させるような視線を送る。

それから「いま、開けます」と部屋のドアを開けに向かった。

「どうしました。もしかして篠ノ之さんに用でも？」

「いや、そうじゃないんだ」

さらつと期待を裏切る一夏に、私は同情の念を抱かずにはいらられなかった

だが、彼が発した次の言葉は、それとは比較にならない衝撃を私たちに齎した。

「あのさ、アリス、よかつたら、付き合ってくれないか？」

この時、背後でめそつと誰かが泣く音を聞いた気がした。

「母さん、俺だ」

「おお、ロキくん、どうだった」

「学園に送り込んだナルヴィの信号がロストした。おそらく撃破されたか、そのあたりだろう」

「そっか。まあ、仕方ないね、開戦の使者の末路は、総じてそういうものだから。それに＜ナルヴィ＞は十分に囷の役割を果たしてくれたんでしょ？」

「ああ、警備が薄手になったおかげで、IS学園の地下区画の侵入も安易だった」

「で、東さんの〈探し物〉は見つかったかい？ ワクワク」

「いや、残念ながら見つからなかったようだ。レインの報告によれば、IS学園の深層部に侵入するには、よりレベルの高いセキュリティークリアランス＜Level5＞が必要だったらしい」

「ん？ 白式を媒体に潜伏させたプログラムでもセキュリティを無力化できなかったの？」

「ああ、深層部には特別強力な侵入検知装置が使われていたそうだ。人工免疫を取り入れたセキュリティシステムだ。正当なコードでなければ、アクセスは全て異物として駆除される仕掛けらしい。母さんのプログラムは＜Level4＞まで無力化できたが、深層部の侵入に必要な＜Level5＞は突破できなかった

「むむ、やるなー。でも、これで明らかになったね。学園にはそうまでして守りたいものがある」

「ああ、IS学園はただの教育機関ではない。あそこには何かがある」

〈黒うさぎエンゲージ〉 第17話 新たな任務

5月下旬。襲撃のごたごたも落ち着き、学園は平穏を取り戻しつつあった。

とはいえ、アリーナの復旧工事は、まだ完了しておらず、警備システムの見直しもあり、学園設備の大半は使えない状態だ。今週中には終了するそうだが、その間は訓練も行えないので、時間を持て余した生徒たちの多くは町へ繰り出している。

私もその中のひとりで、いまは待ち合わせの最中だった。

襲撃事件の晩、一夏から「俺と（買い物に）付き合ってくれないか」と誘われたからだ。

「——あの時、いじける篠ノ之さんを慰めるのにどれだけ苦労したか」待ち合わせの合間。私は衛星通信で、いまある経緯を相手に愚痴った。

しかし、通信相手は楽しそうに笑うだけだ。

『ふふ、昔からどこか抜けたところがあつたからね。誰に似たのやら。

——じゃあ、これからデート？』

「違いますよ、買い物に付き合うだけです」

『男女がふたりで出かけたなら、それはデートよ。まあ、呼び方なんて、なんでもいいわね。折角の機会ですもの。楽しんできなさい。スクールライフを謳歌するのも、任務のひとつよ』

「気持ちはいれしいのですが、私よりもこういうことを望んでいる子いると思うと、素直に楽しめないというか、気が重いというか……」

会話の合間、私は立ち並ぶビルの一角に視線をやった。その先で何かがきらりと光る。

双眼鏡のレンズに、太陽光が反射して起こる現状だ。

つまり、誰かがこちらを監視している。監視しているのは、間違いなく篠ノ之さんたちだろう。

「篠ノ之さんに、イギリスの代表候補生に、中国の代表候補生に。彼すごくモテるんですよ」

『あらあら、なんだか心配ねあ。あの子、昔から鈍いところがあつたから。アリス、片手間でもいいわ。うまくフォローしてあげてくれる？』

「一夏くんが刺されないように」

「刺されるって、まあ、刺されそうですけど。——あなたがそういうなら、そうします」

組織の最高意識決定ルイス・キャロルがそういうなら、私は一肌も二肌も脱ぐ所存だ。

『ありがとう、頼りにしているわ。それとくれぐれも、私のことは内密にね』

と言った直後、何の前触れもなく、私の背後に一夏が現れた。

「よ、アリス、待たせたな」

「ふあッ!」『ふあッ!』

私は（とおそらくルイスも）、その場で数センチ飛び上がった。

「い、いえ、私もいまきたところですよ?」

「そうか。——で、誰と電話していたんだ?」

私は慌てて通信機を隠した。組織のこと。通信相手のこと。そういった諸々の事情を、一夏に知られてはいけないのだ。特に通信相手の存在については。

「ちよつと遠くの友人とね。急にかかってきました」

「お、おう?」

詮索されたくない私は適当に誤魔化し、『では、また連絡します』と通信を切る。通信機から『あつ』と何か言いたそうな声が聞こえてきたけど、いまは話を逸らす方が先だ。

「——それで今日はどこに行く予定で? 何を購入する予定があるのでしょ?」

「ああ。実は、箒たちにプレゼントを贈ろうと思ってさ。それで何がいいか、アリスに選んでもらおうと思ったんだ。こういうのは、男性目線より女性目線の方がいいだろう」

「なるほど、そういうことでしたか」

誘われた意図がわかって、すつきりした気分になる。

そういうことなら喜んで協力しよう。ルイスにもフォローしてくれって言われているし。

「でき、何がいいと思う？ 女性なら、やっぱりアクセサリーか」

「そうですね……。思いついてランジェリーなんてどうですか？」

「できるかつ。そんなもん贈った日には、俺は完全な変態だ！」

冗談半分だったけど、本気にした一夏は顔を真っ赤にした。

「つーか。おまえだって、そんなもん贈られたら困るだろ」

「その日に燃やしますね」

「それはそれでひでーな……」

だって、気持ち悪いじゃないですか。その人の下心が透けて見えて。

でも、これが恋人からの贈り物なら、がんばって着てみようって気になるけど。

「まあ、とりあえず、ランジェリーは却下だ。他のプレゼントで頼む」

「イエッサー」

私は敬礼しながら、何がいいか考えた。

感謝を伝えたいなら、花束でもいいと思うけど、——と、そこで、私の目にあるお店が留まる。

ファンシーな雰囲気、柑橘系のいい匂い。その店は、お風呂用品を取り扱う店だった。

「一夏、入浴剤なんてどうですか？」

「入浴剤か。ぴんと来ないが、女性は喜ぶのか？」

「ええ、消耗品なので処分にも困りませんし、値段も手ごろなので、贈った相手に気を遣わせないでしょう。なにより、篠ノ之さんもオルコットさんも、お風呂好きですからね」

特にオルコットさんなんて、自室に浴槽まで持ちこんでいるという話だ。なんでも、大衆浴場が苦手らしい。ちなみに、オルコットさんは学園に多額の寄付をしており、特待生として優遇されている。その待遇を利用して、部屋を丸々改装させたという話だ。

「よし。じゃあ、そうするか」

「ええ、そうしましょう」

というわけで、私たちは、お風呂用品店に足を運んだ。

店頭をやつてくると、店員さんが店頭で実演販売を行っていた。テールには、見慣れぬ機器に水槽と薬剤が置かれている。一体、なにをする道具なのでしょう。興味が沸いた私たちは、店員さんに尋ねた。

「これはなんですか？」

「いらつしやいませ。——これは自宅で泡風呂が楽しめる装置です。こちらの機器に専用の入浴剤を入れていただきますと、このようになります」

おお、機械に液体を入れたら、モコモコと泡が沸いてきましたよ。

「おもしろいですね、これ」

私は子どものようにはしやぎながら、その泡を両手で掬い取った。

「一夏、ふう〜」

私は手に取った泡を一夏に吹き付けた。

「うわ、なにすんだ」

一瞬で泡まみれになった一夏がおかしくて、私はたまらずフフフと笑う。

一夏は、やりやがったな、こいつ……と、纏わりついた泡を払った。

「ふふふ、おちやめな彼女さんですね」

微笑む店員さんに、私と一夏はいえいえと手を振った。

「いえ、彼女はクラスの同級生なんです。別に付き合っているわけじゃなくて」

「あ、これは申し訳ありません。当店には、カップルの方も多くご来店いただいております、ついそのような関係かと」

「確かに多いな」

店員さんの云うとおり、店内には男女ペアが多く見受けられた。てつきり、こういうお店は女性客が主だと思っていただけに、ちよつと驚きだ。

「最近、お風呂デートを楽しむカップルが増えているようでして」「お風呂デート？」

聞き慣れない単語に一夏と私は顔を見合わせた。

「恋人がお風呂でスキンケアを楽しむことだそうです。彼氏さんに身体を洗ってもらったり、彼女さんに身体を洗ってもらったり。そうやって仲を深めるんですって。まあ、洗い合いですね」

「あ、洗い合いです……」

一夏は顔を真っ赤にした。思春期の彼にはちよつと過激的な言葉だったかもしれない。

「ふふ、一夏だったら、顔を赤くして、純情ですね」

「そういうお前こそ、顔真っ赤だからな」

そりゃ私だって多感な時期ですもの。

「男女がお風呂で洗い合いです」なんて言われたら、ワードだけでドキドキします。

「ふふ、お二人そろって純情ですね。本当に付き合ったらっしやらないんですか？」

いやいや、そんなジューッと真剣に疑われても。私たちは正真正銘ただのクラスメイトだし。

なおも店員さんは『お似合いだと思っただけですけどね』と首を傾げ、「まあ、そういうわけもあって、当店ではカッパルの方によりお風呂デートを楽しんでいただけるよう、いろいろな商品を取り扱っております。よろしければ、ご覧になって行ってください。——あと、よければ、これをどうぞ、皆様にお配りしている試供品です」

店員さんが私たちに手渡したのは、どこが毒々しい紫色の液体が入った小瓶だった。

ラベルに「ラブポーション」とある。見るからに怪しい感じの液体だけ……

「あのこれは？」

「媚薬効果のある入浴剤です。入浴剤代わりに使ってください、えっちい気分になります」

『いや、結構です』

「大丈夫ですよ、効力は私自身が身を以て経験済みですから。夜も眠れませんでした」

いや、いい顔して、親指を立てられましても。別に効果を疑っているのではくて……

「タダなので、もらってください」

結局、女性店員さんに押し切られ、私はラブポジションとやらを受け取ってしまった。

はあ、どうするんですか、これ。使っても、ひとり悶々するだけなのに……。



買い物を終えたあと、私と一夏はオープンカフェで昼食を取ることにした。その食後。

「今日はありがとな。おかげでいいプレゼントが買えたよ」

「いえ、こちらこそ、昼食をご馳走してもらえましたから」

私は食後のジェラートを頬ばりながら、ご満悦な笑みを浮かべた。

ちなみに、篠ノ之さんにはお香、鈴にはアロマキャンドル、オルコツトさんには入浴剤を購入した。それに感謝のメッセージを添える予定だ。

「でき、今日アリスに付き合ってもらったのは、他にも理由があるんだ」

と、一夏は急に神妙な顔つきでそう言った。

「なんです？」

と、食後のジェラートをひとくち。

「実は<レッド・ティアーズ>について調べてほしいんだ」

<レッド・ティアーズ>。一夏が私の専用機につけた便宜的な仮名だ。彼を助けたとき、私は自分の正体を明かせなかった。そのため、彼は<赤騎士>^{レッド・ティアーズ}が、私だと知らないのだ。

「アリスって、こういう情報を集めるの得意だろ。それを見込んで調べてほしいんだ」

そう言った彼の目は、真剣そのものだった。それは興味本位や好奇

心で<レッド・ティアーズ>の正体を暴こうとしているのではなく、何か別の大きな目的があるように思えた。

(どうしようかな)

なにせ自分のことだ。調べるもなにもない。かといって、本当のことも言えないし。

私がかんのジェラートを口にしながら返答に困っていると、ひとりの女性がやってきた。

妖艶な紫苑の瞳。神秘的なプラチナブロンドの女性。私の上司、ロリーナだ。

「あら、ロリーナじゃないですか」

「なんだ、この美人さん、アリスの知り合いか？」

「ええ。紹介します、彼女は私の友人のロリーナです」

「うふふ、初めまして。お会いできて光栄よ、織斑一夏くん」

ロリーナは母性的な声音でスカートの袖を摘み、柔らかな物腰で頭を下げる。

優雅な大人の色気に見惚れがちだった一夏は、ハツとして言った。

「俺を知っているんですか？」

「ええ。世界で始めてISを動かした男性。ニュースを見ていれば、誰もが貴方を知っているわ」

彼の適正が判明したあと、その希少性からメディアの格好の餌食となった。それあって彼の知名度は、そこらのコメディアンより高い。もっとも、ロリーナは報道される以前から知っていたのだろうけど。でなければ、直後に私へ命令が下ったりしない。

「それでロリーナはどうしてココに？」

「暇が取れたから、ちょっと<倉持技研>にいる知り合いと食事でも、と思っただけ」

<倉持技研>は、<白式>を開発した日本の国防技術研究所だったはず。

もしかして、ロリーナはあの奇人である篝火さんと知り合いなのだろうか。

「でも、次世代機の開発が忙しいみたいで、断られてしまったのだけど

ね。——とところで、これから何か予定があったりするかしら？」

「い、いえ、特には」

プレゼントも買い終えたので、あとはぶらついて帰るだけだ。これといった用事はない。

「じゃあ、少しアリスをお借りしてもいいかしらん？」

と、意味深な流し目を私に送る。その意図を汲みとり、私は頷いた。「わかりました。そういう事なので、この辺で失礼してもよろしいでしょうか？」

「おう。でも、寮の門限までには帰ってこいよ。うちの寮監、規則にうるさいからな」

「わかりました。それと、例の件について、一応調査しておきます」

「お、ありがとな」

「では、私はここで」

一夏にそう別れを告げ、私はロリーナと、カフェを後にした。



一夏と別れた後、私たちは話し場を設けるため、人気の少ない喫茶店に足を運んだ。

70年代のレコード曲に、ジュークボックス。クラシックな雰囲気ながらもアダルトな店だ。大通りから脇にそれた場所にあるので人氣が少なく、密談するにはもってこいの場所になっている。

「ご注文のホットコーヒーとイチゴパフェをお持ちしました。では、ごゆっくりどうぞ」

ウェイターから注文の品を受け取ると、私は改まった顔でロリーナを見た。

「それで私に用とは？」

「任務よ。まずこれを見て」

ロリーナは持っていたタブレット端末を操作して、何かの資料を表示させた。

資料には、幼い少女の写真が一枚添付され、隣には名前や性別、生体情報や成長過程が事細かに記載されていた。さながら医療カルテのようだ。使われている言語がドイツ語なので、余計にそう見える。「C—0037?」

資料に記載された名を読み上げる。それはおおよそ人の名前ではなかった。

「それは識別名。現在ではラウラ・ボーデヴィツヒという名前で呼ばれているそうよ」

「まるで彼女が製品であるかのような扱いですね。彼女は一体?」

「彼女は〈遺伝子強化素体〉。いわゆるデザイナーズベイビーよ」

デザイナーズベイビー。受精卵の段階で遺伝子操作を受け、人工的に容姿や能力を操作されて生まれてきた子供の総称だ。大概は「理想の子供が欲しい!」という親のエゴによって行われたりするが、この資料を見る限り、そんな単純なモノではなさそうだった。

もっと、欲深い——人の業のようなモノを感じる。

「彼女は、強力無比の兵士を作るため、軍用に遺伝子操作された子供なの」

その言葉に、私は気分を害した。

子供に遺伝子改造を施し、戦争利用する。計画の考案者は神にでもなったつもりなのだろうか。だとしたら滑稽な話だ。やっていることは、他ならぬ悪魔の所業だ。

「螺旋機関が聞いたら激怒しそうな話ですね」

螺旋機関。2003年ヒトゲノムの解析が終了したと同時に発足された、遺伝子に関する研究機関だ。世界保健機関の部門だった頃は、遺伝子の解析が主な仕事だったけれど、独立してからは「倫理に反する遺伝子操作が行われていないか」などを監視する組織となっている。

「それで、どこの国がこんな事を?」

「ドイツよ。計画自体はナチス時代から。その後、ソ連が研究データを接收し、東ドイツで研究が続けられていたそうよ。西と統合されてからも、密かに行われていたみたいね」

「という事は、こんな研究が何十年も？」

「もちろん、すべての科学者が賛同していたわけじゃないわ。東ドイツ時代では良心の呵責に苛まれて、西側へ亡命しようとした研究者もたくさんいたそうよ。でも、その大半が叶わなかったわ」

「壁を越えられなかった？」

「ええ。そして、連れ戻された。——いつもそうよ。政治の勝手な都合で科学者は利用される」

ロリーナは苛立ちを発露するように、パフエのラズベリーをスプーンで押しつぶした。

彼女は優秀な技術者だ。それゆえに望まぬ研究や開発を強要されてきたのだろうか。

そんな彼女の心情を察しつつ、私は話を進めた。

「それで私は何をすれば？ 遺伝子のサンプルでも採ってくればいいのか？」

「いえ。ラウラ・ボーデヴィツヒ自体は直接のターゲットじゃないの。貴女に調査して欲しいのは、彼女が乗る第三世代型IS〈シユヴァルツエア・レーゲン〉」

黒い雨。シユヴァルツエア・レーゲン 不吉な機体名だな、と私は思った。

黒い雨は、原爆投下地である広島や長崎で降ったとされる、放射能を含んだ雨のことだ。

核熱で燃えた都市の煤を含んでいたため、黒く淀んでいたらしい。それをISのコードネームにするなんて、名付け親は無知か、悪趣味か、どちらにしろ、まともな奴じゃないだろう。

「でね、この機体にはくシユバルツエア、ツヴァイクと呼ばれる姉妹機が存在するのだけど、レーゲンは何故かこのツヴァイクと異なる場所^ラで製造されたの。なぜだと思う？」

「遺伝子強化素体^ラの専用機として、機体をカスタマイズするためですか？」

「いいえ、レーゲンにVTシステムを搭載する為よ」

「ヴァルキリー・トレース・システム……ッ」

ヴァルキリー・トレース・システム。

〈モンド・グロツソ〉の部門優勝者〈ヴァルキリー〉の力を機体に投影するシステムのことだ。しかし、VTシステムは安全性の面から〈アラスカ条約〉で、開発の一切が禁止されているはず。

「子供に遺伝子改造を施し、兵器として扱うような連中が条約ごときを守ると思う？」

ロリーナの言葉に、私は苦虫を噛み潰したような顔をした。

そうだ。生命を冒瀆し、倫理を踏み躪るような連中が条約など守るはずがない。

「それでラウラ・ボーデヴィツヒは、来週辺り<シュヴァルツェア・レーゲン〉を携えてIS学園へ入学してくるそうよ。目的は、今月行われる〈学年別個人トーナメント〉に出場するため。近々、欧州連合で統合防衛計画〈エイグニツシヨンプラン〉の次期主力ISを決めるコンペがあるの」

統合防衛計画『イグニツシヨンプラン』。

〈白騎士事件〉発生以降、大国間の衝突を危惧した欧州連合は、共通防衛政策における独立的軍事行動を唱え、欧州安全保障防衛政策を規定した。〈エイグニツシヨンプラン〉は、そのESDPに盛り込まれた共同防衛プロジェクトのことだ。

そこで採用する次期主力ISのコンペが行われていることは、私も知っていた。

「ドイツは学園のトーナメントを利用して、<シュヴァルツェア・レーゲン〉の性能を委員会にアピールするつもりなのよ」

「そこで私の出番という訳ですか」

ロリーナは頷く。

IS学園は一種の治外法権区なので、外部から学園の生徒に干渉できない。だから、VTシステムの調査を行えるのは、学園内部の人間に限られる。そこで白羽の矢が立ったのが、私だという訳だ。

「貴女には<シュヴァルツェア・レーゲン〉にVTシステムが搭載されているか調査して、その証拠を掴んで欲しいの。もし搭載されていた場合は、破壊も視野に入れて」

「破壊も、ですか……」

「ええ。VTシステムはヘヴアルキリーレベルの操縦者を安易に生み出せる画期的なシステムかもしれない。けれど、同時に操縦者を廃人にしかねない危険なシステムなの。覚えているでしょ？ VTシステムが条約で禁止されるきっかけになった米軍の事件を」

「ええ。まだ記憶に新しいです」

それは私が組織に所属する以前、アメリカ軍に所属していた頃の話だ。

アメリカの開発したVTシステムでISが暴走し、試験を勤めていた米兵が三人、亡くなった。その内の一人が——私の親友だった。名前はエイミーといった。

「軍事は倫理よりプライオリティが高いわ。必要性があれば、人は倫理のハードルを容易く乗り越えられる。だからといって、VTシステムの開発を許すわけにはいかない」

「了解しました」

「気をつけてね。ラウラはへ黒うさぎ隊の隊長を務めるほどの手練れだから」

「黒うさぎ隊。ドイツの特殊部隊ですよ。話では隊員全てがナノマシンによる人体強化を施されているとか？」

「ヴァオルダン・オーシュ越界の瞳ね。ナノマシンを注入する事で、視覚信号の高速化と、超高速戦闘下での動体反射を向上させているらしいわ。加えて、彼女の駆るISは、第三世代型実戦機よ。貴女の見てきたブルー・テイアーズ>やく甲龍>といったEMD試作機とは、まるで完成度が違う。真つ向勝負では、貴女でも分が悪いわ

操縦者は、遺伝子改造とナノマシンによる肉体強化を施された強化人間。

駆る専用機は、過酷な実戦に耐えうる性能を秘めた第三世代型。

鬼に金棒とは、こういう事をいうのだろう。今回ばかりは私でも一筋縄でいかないか。

「万全を期す為にも、今回からく赤騎士>の使用を許可するわ。訓練用のくラファール・リヴァイブ>やく打鉄>では、厳しいところがあるからね。——はい、くコア>のダミー国籍とその資料よ」

私はロリーナからメモリーディスクとその資料を受け取った。

「それで国籍は」

「イギリスよ。国籍登録後は書類上だけイギリスの所属になるから、そのつもりでいてね」

「了解しました。で、資料にある『登録後、＜赤騎士＞はBT試作機とする』というのは？」

「それは＜赤騎士＞が『イギリスのISである』という信憑性を高めるための欺瞞よ」

「でも、私のクラスには、BT試作一号機を駆るイギリスの代表候補生がいるんですけど」

私のクラスには＜ブルー・ティアーズ＞の専属操縦者セシリア・オルコットがいる。

彼女は思量深く聡明だ。おまけに知識にも富む。＜ブルー・ティアーズ＞の系譜に＜赤騎士＞なんてISが存在しない事ぐらい、すぐ見抜くのではないだろうか。

「大丈夫よ、英国政府にも根回ししてあるから。もし彼女が感づいたとしても、英国政府や開発局が貴女に口裏を合わせてくれるわ」

「そうですか。でも、あのイギリスがよく協力してくれましたね」

「私たちとの利害が一致したからね」

「利害が一致？」

「そう。イギリスの＜ブルー・ティアーズ＞も、ヘイグニツシヨンプランのコンペに参加しているの。もし、私たちがドイツの条約違反を白日の許に晒せれば――」

「ドイツの＜シュヴァルツェア・レーゲン＞がヘイグニツシヨンプランの選考から落とされて、イギリスの＜ブルー・ティアーズ＞が一歩有利になる」

なるほど。どうりで、あの気位の高い英国が、こんなに優遇してくれる訳だ。

いや、この様子だと＜テンペスタII＞を押ししているイタリアも一枚噛んでいるのかもしれない。

「それにしても、貴女には酷な仕事ばかり押し付けてしまっているわ

ね」

「気にしないでください。私は組織の走狗。与えられた任務をこなすのが仕事ですから」

「仕事、ね……」

慰めたつもりが、ロリーナは逆に表情を曇らした。

「貴女が組織のために尽力してくれるのは嬉しいわ。でも、貴女はまだ年端も行かない16歳の少女。本来なら青春を謳歌させるべきなのに、私たちは貴女にこんな事を命じている。酷い大人ね」

ロリーナは、私を妹のように可愛がってくれている。だから、「戦え」と命じるたび、心を痛めていた。きっと、あの人も。だから「学園生活を楽しむのも任務の一環」と言ってくれたのだろう。

私は、そう思ってもらえるだけで十分だった。だから言う。

「今は青春を謳歌させてもらっています」

任務という名分はある。それでも、私はいままで生きてきた中で、一番楽しい時間を過ごしている。その機会を与えてくれたのは、他ならぬロリーナたちだ。彼女たちには感謝している。

「そう言って貰えると、救われるわ」

「いえ、むしろ、礼を言うのは私の方です。それで、礼というわけじゃありませんが——」

私はさきほどの入浴剤店でもらった試供品を取り出した。

「疲労に利く入浴剤だそうです。よかったら、使ってみてください」

「あらそお？　こここのところ疲れていたから、喜んで使わせてもらおうわ」

手渡した毒々しい小瓶を、ロリーナが喜んで受け取る。

疑いもしないで、媚薬入浴剤を大事そうにしまうロリーナに、私はイタズラが上手くいってニヤける顔をがんばってこらえた。

第18話 太陽と月

「ええっと、ですね。今日は転入生を紹介したいと思います。しかも二名……」

月曜日の朝。SHRでの出来事だ。

山田先生の第一声に、クラスは休日明けの気怠さを忘れ、大いに賑わった。

「えー！ 転校生!?!」そんな情報、全然入ってきてないよ!?!」「情報班、なにやってんの!」

予期せぬ転校生の登場に、女子たちが騒ぐ中、俺は大して驚きもせず、頬杖をついた。

(転校生ってまたか……)

IS学園は世界的な教育施設。世界中から少女が留学して来るわけだし、転入生が多いのは理解できる。だが、一度に二人は多くなかろうか。それも両方一組って。普通は分散させないか？

——もしかして、俺が関係しているのだろうか。

俺がそんな疑問を抱いていると、山田先生が転入生に入室の許可を出していた。

「では、入ってきてください」

関心が薄かった俺は、横目でそれを見る。そして、驚きのあまり言葉を失った。

「お、おとこの、ひと?」

そう、転入生の一人は、男性だったのだ。

瞳はエメラルド。長髪のブロンドを後ろで束ねた美少年だ。体つきは華奢で、顔つきも中性的だが、柔らかな物腰と上品な雰囲気は、誇張でも、比喻でもなく、王子か貴公子といった感じである。

転校生は、動揺するクラスメイトに驚くことなく、丁寧に自己紹介した。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。このクラスに僕と同じ境遇の方がおられると聞いて、本国から転入してきました。何かと不慣れな事も多いですが、みなさん、よろしくお願いします」

子犬を連想させる人懐っこい笑みで自己紹介するシャルル・デュノアという転校生。

それはもう同性でもクラッとするような眩しきで、クラスがどわつと湧き立った。

「いやん、守ってあげなくなる系の美男子。わたしのドストライクだわ！」

「ずっと待ってました。あなたのような白馬の似合う王子様を！」

「ああ、私のアンドレイになってください！ 私はあなたのオスカルになります！」

クラスのあちらこちらから湧く黄色い声に、俺は苦笑いする。

あの襲撃事件以来、このクラスの男卑も大分改善されてきたよなあ。

「騒ぐな、静かにしろ」

シャルルの魅力に騒ぐクラスを、鬼教官が一喝する。

ピタッと静まる生徒に、千冬姉は『まったく、これだからガキどもは……』と辟易してから、山田先生に視線をやった。

「山田先生、続きを」

「あ、はい。では、次の人、お願いします」

山田先生の言葉に合わせて、もう一人の転校生に視線を移す。

その転校生は、ある意味でシャルル・デュノアと正反対な生徒だった。

性別は女性。髪は美しいアッシュブロンドで、体はとても小柄だ。

放たれる気配は、研ぎ澄まされたナイフのように鋭く、右目を覆う眼帯が、彼女の剣呑な雰囲気をつつそう強くしている。

仮にシャルル・デュノアを『灼熱の太陽』と例えたなら、彼女は『凍える月』といったところだろうか。

「……………」

紹介された本人は、未だ口を閉ざしたままだった。それどころか侮蔑を含んだ視線でクラスの女の子たちを睨んでいる。そのせいかな、教室が痛い沈黙に包まれた。

「あの人、ボーデヴィツヒさん……？」

「ボーデヴィツヒ、黙っていないで、挨拶ぐらいしろ」

山田先生がオロオロし始めたので、見かねた千冬姉が転校生を注意した。

一転、ラウラと呼ばれた転校生は、毅然とした態度で千冬姉に敬礼する。

「はい、教官」

教官？ みんなが怪訝な顔をする最中、千冬姉は面倒臭そうな顔で言った。

「そう呼ぶな。私はもうお前の教官ではない。呼ぶなら、織斑先生と呼べ」

「E i n v e r s t a n d e n」

何語かで返答——おそらく『了解しました』的な意味だろう——した後、ラウラは両足を軽く開き、後ろ手を組んで姿勢を正した。軍隊の基本教練の一つ『休め』というやつだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……
……
……

それだけ。皆、続きを期待していたのだが、それ以上言葉が紡がれる事はなかった。

「あの、以上……ですか？」

「以上だ」

それだけを告げ、貝のように口を閉じるラウラ。

再び、教室が痛い沈黙に包まれた。山田先生はなんとか場の空気を換えようと、

「え、えつと、あのですね、ボーデヴィツヒさんはドイツの出身ですね。本国では『黒うさぎ隊』という特殊部隊の隊長を務めていて、階級は若いのに少佐という——」

「先生。無闇に所属を明かさなideてください。任務に支障をきたします」

鋭い眼光で睨まれ、山田先生が『す、すみません』と萎縮する。

なんとか場を和ませようと試みた山田先生だったが、見事に裏目に出たな。でも、その努力は評価していいと思うぞ。どんまい、どんまい。

(それに比べて、ラウラとかいう奴、ちよつとは空気を読めよな。学校は協調性を育む場でもあるんだからさ)

そう、嗜めるように見ていたら、不意に目が合ってしまった。

「!——貴様かッ!」

何だ? 目が合うなりスタスタと俺の方にやって来て。

「ん? 俺に何か用——」

『か?』と問おうとした瞬間——ラウラが俺に向かって右手を薙ぎ払った。

左頬に走る鋭い痛み。

唐突すぎる暴力に、俺は言葉を失った。

しかし、ラウラは呆然とする俺を無視して、冷たい隻眼のルビアーイで言い放った。

「私は認めない! お前があの人弟など認めるものか!」



「私は認めない! お前があの人弟など認めるものか!」

教室に響き渡るラウラの怒声に、クラスの全員が目を白黒させる。

教室が騒然とする中、理不尽な暴力に腹を立てた一夏が、椅子を跳ね除けて立ち上がった。

「てめえー、いきなり何しやがる!」

しかし、ラウラは激昂する彼など歯牙にもかけず、鼻を鳴らして、充てられた席に歩いていく。席に腰掛けるなり、彼女は武器庫に立て掛けられた銃のごとく沈黙をきめた。

(ラウラ・ボーデヴィツヒ。報告にあった性格と違いますね)

情報部の調査では『ラウラ・ボーデヴィツヒはヘドイツの冷水』と称されるほど冷静沈着な性格で、自制心の塊のような人間』と報告さ

れていた。だというのに先の顛末だ。彼女は明らかに感情を爆発させていた。

(それだけ一夏が憎い相手だった?)

とは考えにくいけど、発せられた殺気は紛れもない本物だった。

だからなのか。教室は和気藹々と転校生に質問できる雰囲気じゃなくなっていた。

「やれやれ……」

と、首を振ったのはやっぱり千冬さんで、彼女は頭痛を堪えるようにHRを進めた。

「時間的に少し早いけど、これでSHRは終了とする。——それと今日は一組と二組で合同実習だ。着替え終えたら、第二アリーナに集合しろ。遅れてきた者は、例の如く実習の後始末だ。もたもたするなよ」

織斑先生は両手を叩いて皆の行動を促したあと、苛立つ弟に視線を向けた。

「織斑、デュノアと同じ境遇だ。面倒はおまえが見てやれ」

「わかりました。——じゃあ、とりあえず自己紹介はあとにして行くぜ」

「行く? ど、どこへ?」

「いや、男子がいたら、女子が着替えられないだろ……」

「あ、そっか……」

そうなのだ。早く出て行ってもらわなければ、私たちはいつまで経っても着替えられない。

なのに、デュノアくんは一夏の指摘で、ようやくそれに気づいた様子だった。

「もしや、おまえ、女子と一緒に着替える気か?」

「ちちち、ちがうよッ。——みんな、ごめんね、気づかなくて」

「ほら、いくぞ」

謝るデュノアくんの手を引いて、一夏が慌ただしく教室を出ていく。

そんな一連のやり取りを見て、私は違和感を抱いた。

(二人目の男性適正者、ですか)

仮に適正を持つ男性が一億分の一であつても30人ぐらいは存在するわけだし、二人目が現れたこと自体に不可解な点はない。ただ、その人物がIS企業の間人というものは、聊かできた話だろう。ましてや、経営状況が芳しくないデュノア社の人間なら。

(まさか男装の麗人。——なんてね、考えすぎですね)

何にしろ、今回のミッションにおいて、彼が『男』であるか否かは重要じゃない。

私は気持ちを切り替え、ISスーツを取り出す。

ISスーツとは、IS装備時に着用する特殊スーツのことだ。内部にスマートスキンを応用したセンサー群が取り付けられていて、操縦者のバイタルを読み取ることができる。

それを机に置き、制服のボタンを外していると、前の席の相川さんがこちらを向いた。

「あ、リデルさんのISスーツ、見たことないデザインだね。どこ製のなの？」

「これは市販品じゃなくて、オーダーメイドなんですよ」

「えっ、オーダーメイド!?!」

相川さんは驚いて、私のISスーツをまじまじと見つめた。

基本的に、この生徒は学園が指定したISスーツを購入して使用する。そのため、私のようなオーダーメイドのスーツを使用している生徒は少ない。理由はとても簡単。高価だからだ。

「ねえ、さわってもいい?」

「ええ、いいですよ」

私の了承を得て、相川さんがお洒落を楽しみように、スーツを自分の体に宛がう。

私のISスーツは、パーソナルカラーの赤をベースに黒いラインが入ったデザインだ。形状は競泳用防水着に近いけど、兵装保持用のアタッチメントとプロテクターが備わっているため、どこか近未来的に見える。

「リデルさんのISスーツって、SFちつくでカッコイイね。やつぱりオーダーメイドっていいな」

「え、リデルさんのISスーツ、オーダメイドなの?」「うそうそ、見せて見せて!」「あ、ほんとだ、見たことないデザイン!」

気がつけば、私の周りにたくさんのクラスメイトが集まっていた。こういう高性能スーツは、ここじや羨望の対象になる。鈴曰くブランドバックを持つている女子高生みたいなものらしい。

クラスメイトたちは、私のスーツを手取るなりワイワイと盛り上がった。

「わあ、これ最新の脊椎プロテクターだよね」「これ、うわさの対衝撃素材じゃない。二階から落としたり卵を受け止められるやつ」「すごい。これめっちゃくちゃいいスーツじゃん」

「ていうか、これさ——」

そこで空気が読めないウザカワクラスメイト——岸原理子さんが口を開いた。

私はなぜか嫌な予感がした。

「——セツシーのISスーツより良くない?」

その一言に、着替え中だったオルコットさんの手が止まる。

クラスで最も高性能なISスーツを使っているのは、オルコットさんだ。なにせ、彼女は国家代表候補性だから、スーツも最新式のオーダメイドである。本人もそれを自慢に言っていた。つまり、

「なんですって?」

岸原さんの一言は、オルコットさんの対抗心に火をつけてしまったということだ。

「わたくしのISスーツは、ナイトソード社の最上級モデルをフルカスタムしたものですわよ。防刃防弾にも優れ、なおかつ動きを阻害しない伸縮性と快適性をかねた最新式ですわ。これ以上のものなんて他には——」

「でも、リデルさんのISスーツには、最新のショックアブソーバーがついているよ」

「ぐッ」

「ウエアブルコンピューターもあるよ」

「ぐぐぐッ」

「それに、これ。出血箇所を感知して、自動で止血してくれるんだって」

「ぐぐぐぐぐッ」

私のISスーツは軍用なので、防刃、防弾、耐衝撃からメデイカル機能に加え、データリンク可能なコンピューターも装備されている。それらはオルコットさんのISスーツには無い機能ばかりだ。

「た、確かにかなり良いものをお使いのようですが……」

でも、負けを認めたくないオルコットさんは、ぐぬぬと強がるように下唇を噛む。

そのオルコットさんの頭上で、ぴこんと電球が灯った。

「ふふふ、でもおろ、いくらスーツの性能が良くて、専用機がないなら意味ないんじゃない？ その点、わたくしには＜ブルー・ティアーズ＞がありましたよ。おっほほほほ」

勝った。そう宣言するように高笑いするオルコットさん。

でも、私は彼女の言う通りだと思った。

どれだけ高価なISスーツを使っても、肝心なISがなければ意味がない。

「そうですね。スーツの性能が良くてもISがないのじゃ意味ありませんよね、はは」

私はそつと赤いナイフ——＜赤騎士＞の待機形態——を後ろに隠した。

どうしよう。＜赤騎士＞を展開した時の、オルコットさんの反応が怖くなってきた。

一方、そのころ一夏たちは——

「うおおおお!! 走れえく!! 止まったら死ぬぞく!!」

SHRを終えた俺とデユノアは、更衣室に続く廊下を全速力で駆け抜けていた。

通り過ぎた学内掲示板には『廊下を走るな!』という張り紙がしてあったが、あえて無視する。なぜなら、

『男の新生入生よく追えく追えく追いかけるく』

デュノアを一目見ようと集まった女子生徒たちに、追いかけられていたからだ。あの集団に捕まったら最後。遅刻は確実。そうなれば、鬼教官による地獄のお説教が待っている。絶対に捕まるわけにはいかない。

「デュノア、こっちだ!」

「え、う、うん!」

俺は学園の構造に詳しくないデュノアを先導するように、その手を引く。

手を結ぶ俺たちを見て、女子から一斉に黄色い声が上がった。

「きゃー見て、二人が手、繋いでる!」

「ほんとだー、織斑君とデュノア君、一体どっちが受けだろ?」

「そんなデュノア君が受けに決まっているじゃない。異論は認めない」

「いいえ、反論させてもらうわ。大人しそうなデュノア君が、雄々しい織斑君を責めちゃうそのギャップに興奮するんじゃない!」

「私は嫌がりながらも織斑君に屈服していくデュノア君が見てみたいわ!!」

だ、ダメだコイツら、早くどうかしなないと。本当にどうかしなないと……

とても大事な事なので二回言っておく。じゃないと、俺×シャルルの薄い本が出かねない。

「デュノア、このまま一気にまくぞ!」

「う、うん」

俺はデュノアと廊下の角を曲がった。相手が一瞬だけこちらを見失う。俺たちはさらに角を曲がった。それを何度も繰り返す。

そうやってなんとか追手を振り切り、俺たちは目的地である更衣室に入り、一息ついた。

「はあ、はあ、何とか逃げ切れたな」

「うん。それにしても驚いたよ。僕、てっきり冷たい扱いを受けるものだと」

「まあ、世の中、女尊男卑だからな。でも、ああいう歓迎の仕方は考えもんだ」

「そうだね。えっと、織斑くん、でいいのかな？」

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「よろしく、一夏。僕の事はシャルルって呼んでくれたらいいよ」

「おう。じゃ、そろそろ着替えようぜ。授業に遅れたら、おつかない教官に怒られるからな」

「え、あ、そうだね」

俺はそそくさシャツの脱ぎ捨て、ベルトに手をかけた。

しかし、シャルルは一向に制服を脱ごうとせず、なぜかモジモジするばかりだ。

「どうした、シャルル。早く着替えないと授業に遅れるぞ」

「う、うん。その、よかつたら、あつちで着替えてもらってもいい？」

見られながらだと、その恥ずかしくて……」

「ん？ まあ、別にいいけど……」

男同士なのだから別にいいだろうに。——とは思うが、恥ずかしいなら仕方ない。

俺は要望に応え、自分のISスーツを持って、シャルルと反対側のロッカーに移動した。

(でも、女性の着替えには動じなかったのに、男性との着替えは恥ずかしいのか?)

それじゃ、まるで男性に興味が——……………一瞬、腐女子の言葉が脳裏をよぎる。

「一夏」

「うおっ！」

ひよっこりローカーの角から顔を出したシャルルに、俺は反射的に尻の穴を引き締めた。

そして高速でISスーツに着替える。なんだか裸のまま彼に会う

のは危ない気がしたのだ。

「ど、どうしたシャルル。な、なにかあったのか？」

「僕はもう着替え終えたから。それより、どうしたの、そんなに慌てて？」

「いや、なんでもないぞ。と、ところで、シャルルの着ているスーツで、着やすそうだな。どこ製なんだ？」

俺は胸中を悟れないよう、目についた物で話題を摩り替えた。

「ん、このISSスーツ？ これはデュノア社のオーダーメイドだよ」

「デュノア社って、あのデュノア社か？」

確かデュノア社は、フランスで一位二位を争うISSの大企業だったはず。

千冬姉に『勉強するなら、操縦技術だけじゃなく、ISSに関わる機関や企業についても知っておけ』と指摘されたので、そのあたりの事情についても多少は勉強したのだ。

「そう言えば、シャルルの姓もデュノアだよな？」

「うん、デュノア社は、僕の父が経営している会社なんだ」

「おお、そうなんだ。じゃあ、シャルルは御曹司なのか。やっぱりな」

「うん？ やっぱりって？」

うんうんと納得する俺に、何か引つかかる物を感じたのか、シャルルは首を傾げた。

「ほら、シャルルって気品があるというか、いいところの育ち！ って感じがするからさ」

柔らかな物腰。丁寧な口調。シャルルには、そこかしこに上品さがある。きつとメイドとか、執事がいるような、上流階級の教養を受けてきたのだろう。特別、そういう生活が羨ましいわけじゃないけど、中流階級の人間としては一日体験ぐらいしたいものだ。

「いいところの育ち、か……」

シャルルは急に表情を翳らせた。まるで忌むように、あるいは嘆くように、顔を伏せる。

強く噛んだ唇からは、血がこぼれそうになっていた。

それに、俺はただならぬモノを感じとった。深い、深い、絶望のよ

うな何かを。

「ど、どうしたんだ、シャルル？ 俺、何か気に障ることあったか？」

「え？ ううん、そんなことないよ。だから安心して」

シャルルは慌てたように両手を突き出し、左右に振るった。

その表情に先の絶望はない。あつたのは優しい笑顔だ。俺の考え過ぎだった、のだろうか……

「それより早く行こう。遅れたら、後始末しないといけないし」

「お、おう」

どこか逃げるように更衣室を飛び出していくシャルルを、俺は慌てて追いかけた。



「よし、全員そろったな」

第2アリーナ。

一組と二組の両クラスが揃ったところで、千冬姉が入学から初となるIS実習について説明を行った。

「では、今日の訓練についてだが、起動から基本動作までをマスターしてもらおう。ここ一ヶ月で習得した知識とシミュレーターでの経験があれば、そう、難しい実習でもないだろう。だが、実機を用いた訓練だ。事故も起こり得る。みな、気を引き締めてかかれ」

『はいー』

「では、実習の前に、せっかく専用機持ちが5人もいる事だ、諸君にISの模擬戦を見てもらおう」

千冬姉の言葉に、生徒たちから『おお！』という歓声があがった。専用機持ちは1年で6人しかいない（これでも多い方らしいが）。そんな彼女らの戦闘を間近で見られるのは、正直レアなのだ。俺は見慣れているので、特別おもうことはないけどな。

「では、オルコット、凰に実演してもらおう。ふたりとも前にでろ」

思わぬ抜擢に、指名された二人は目をぱちくりさせた。

「え、何でわたくしが？　なんか、見世物のようで気が乗りませんわ」
「え、あたし？　なんか面倒くさいなあ〜」

おいおい、そんな怠けた態度だと、また千冬姉に怒られるぞ。――
と思っただが、意外や意外、千冬姉は清ました顔のままだった。代わり
に二人へ近づき、耳元で何かを囁いた。

（ここでアイツにイイところを見せれば、他の連中を出し抜けると思
わんのか？）

「!?」「!!」

なんだ、セシリアと鈴の顔つきが変わったぞ。

「こほん。やはりここはわたくし蒼穹の狙撃手こと、セシリア・オル
コットの出番ですわね」

「そうね。あたしたち代表候補生の実力がどれほど凄いか、感心させ
るいい機会だわ」

（ふふ、わたくしの可憐な操縦テクニックで一夏さんの視線を釘付け
ですわ♡）

（ふふ、前回のクラス対抗戦じゃイイところ見せられなかったけど、こ
こで挽回してやるわ♡）

なんか二人が熱の籠った視線を送ってくるんだけど、なにこれ、怖
い。

「それでお相手はどちらに？　わたくしは鈴さんでも構いませんが
？」

「ふん、返り討ちにしてやるわ」

「騒ぐな、馬鹿ども。相手ならもうじき来る」

そう言うが早く、遠くからキーンと空気を劈く音が聞こえてきた。
この音は、ISのスラスト音だろうか。そこまで判ったが、機種ま
では特定できなかった。でも、隣のシャルルは違ったようだ。

「この音は<ラファール・リヴァイヴ>だね」

「わかるのか？」

「うん、<ラファール・リヴァイヴ>はデュノア社が開発した機種だか
ら」

<ラファール・リヴァイヴ>は、<打鉄>と並んでIS学園に採用

されている機種だ。汎用性の高い拡張性能と、優れた操縦性能を持つことから、世界シェア率第三位を誇っている。

シャルルの予想通り、モスグリーンのIS<ラファール・リヴァイヴ>がこちらに飛行してきた。

しかし、どこか様子がおかしい。

何がおかしいかというところ、操縦者が水面で溺れる子供のようにジタバタもがいているのだ。

素人目から見ても、あれは制御不能に陥っているとしか思えない。

「わあ〜〜どいてくださ〜いっ！」

聞いたことのある、やや幼い声。どうやら、あのISの操縦者は、副担任の山田先生らしい。

そういえば、入試の時の山田先生も、こんな感じだったな。あんな風に手足をバタつかせながら、俺の方に突っ込んできて——つて、俺の方に突っ込んできてるだど!?

「や、やばい、早く<白式>を展開しねーと！」

妙な既視感に囚われていた俺は、すっかり展開するのが遅れてしまっていた。

その間もぐんぐんと山田先生が接近してくる。だめだ、間に合わない。あ、これ、死んだかも。

「レットクイーン」《Yes My honey》

俺が絶望に打ち拉がれていると、隣から澄んだ声が二つ、聞こえてきた。

「この声は……」

俺が声の正体に気付いた時、既にその正体——アリスは飛翔していた。

アリスは空中でISを展開させて、突撃してくる山田先生を優しく抱き止める。

そして、絶妙な反動制御で衝撃を殺し、その場に静止した。

しかし、俺の意識は、その見事な機体制御じゃなく、別のところに

持って行かれていた。

「こいつは……」

赫々と燃えるような赤い装甲。身丈ほどある大剣。短剣を携えたサイドバインダー。見覚えのあるその後姿は、俺と鈴を窮地から救ってくれたIS——<レッド・ティアーズ>だった。

第19話 実習I

「え、あれリデルさんの専用機？」

「うそ、持ってたの？　というか、いまの機体制御すごくなかった」
「それにしても、全然みたことのない機種だよね。どこの機体なんだろう」

注目を集める自分の愛機に私は人知れず溜息をつく。

V Tシステムの確証が得られるまで、〈赤騎士〉の存在は秘匿したかったけど、こうなつては仕方ない。私は機体を回頭させて、驚愕する一夏たちの方を向いた。

「アリス、そのIS……」

「まさか、あんたがああの時の……」

驚愕。まさしく二人はそんな顔をしていた。

オルコットさんに至つては、桜唇を噛み、赤面しながらぐぬぬと唸っている。

「えっと、言いたい事はあると思いますが、問答は後にしましょう」

と、私は不甲斐なさに落ち込む山田先生をおろし、千冬さんの様子を窺った。

「わかっているじゃないか。詳しいことは後々訊くとして、おまえも実演に参加しろ」

「私もですか？」

「ああ。凰の話だと、例の襲撃者を圧倒したのだから？　おまえの实力に興味がある」

私は思案した。私は密偵。これ以上、周囲の関心を引くのは好ましくない——のだが、千冬さんの命令じゃ私に拒否権はないのだろう。NOと言つてもやらされるに決まっている。

「わかりました」

観念した私はオルコットさんの隣に並んだ。

その私を、オルコットさんが涙目で見てくる。

「あなたからすれば、先のわたくしはさぞかし滑稽だったでしょうね……」

「着替えでの一件でしたら、何も思っていませんから……」

とフォローするも、オルコットさんは「フンツ」と顔をそらす。

「素晴らしいながら、どうせ内心では笑ってらしゃったくせに」

「あなたにとって、わたくしはクソ貴族ですものねー」と、オルコットさん。

はあ、なぜこんなに根に持たれているのでしょうか。なにかしました？——あ、しましたね。

「まあ、いいですわ。それより、アリスさんも専用機をお持ちでしたね。驚きましたわ。ええ、本当に。IS適正Cだと、お聞きしていましたのに」

目頭に浮かんでいた涙を拭い、疑念を孕んだ口調で彼女はそう言った。

彼女が疑うのも無理のない話だ。

ISは大隊も駆逐できる兵器。そんな物の使用可否を個人の理性に委ねるのだから、専用機持ちの選考は、入念かつ厳重に行われる。間違っても、適性値が【C+】——ISの適性値というモノは、その管理能力の有無を見定めるものでもある——の私に専用機が託されることはない。

「それに、本国がそんな機体を開発していたなんて聞き及んでおりませんでしたわよ？」

「これには、いろいろ事情がありました……」

強くなる懐疑の眼差しに、私は『やっぱりそうなりますよね』と内心で泣いた。

一応、〈コア〉には、イギリスの国籍が登録してある。組織のステーションも「一角獣と獅子」のペイントで隠しておいた。第三者から見ればイギリスの機体に見えるけど、さすがにイギリスの代表候補生の目は欺けませんよね……。

「あら、そうですの。ま、いいですわよ？」

とは言うものの、疑いの視線は強まる一方で——

「それでわたくしたちの相手は？ 個人的にはアリスさんと闘ってみたいのですけどー」

挑戦的な流し目を寄こされ、私はあぶら汗をかいた。あからさまに「探り」を入れてこようとするオルコットさんから逃げるように、私は事を進めた。

「そ、それで、私たちの対戦相手というのは、やはり？」

「そうだ。おまえたちの対戦相手は山田先生だ」

予想外の対戦相手だったのか、鈴とオルコットさんは目を丸くした。

「山田先生だけ？ 二対二のツーマンセルじゃなくて？ 流石にそれはねえ」

「ええ。わたくしたちを甘く見すぎではなくて？」

鈴が肩を竦め、オルコットさんがせせら笑う。だが、千冬さんは不敵な笑みを零した。

「お前らこそ、真耶を侮りすぎだ。今のお前らでは、真耶の相手にならないぞ」

「でも、さつきコントロール不能に陥っていませんか？」

「あれはISの制御を誤るとどんなに危ないかを教えるためだ。なんせ山田先生は、私と渡り合った元日本代表候補だからな、制御ミスなぞで起こすわけがないだろう」

声を大きくして、織斑先生はそう言った。

山田先生はキョトンとするが、織斑先生は構わず、堂々と続ける。

「その気になれば、お前らなど瞬殺だ」

瞬殺。教師の使う言葉ではなかったが、それが二人の闘志に火をつけた。

「そこまで言うならやってやろうじゃない！」

「仕方ありませんわね。恥の上塗りになっても知りませんわよ？」

「よし。では、しばらく待機している」

やる気を出した二人に満足した織斑先生は、山田先生の所へ向かい、何かを耳打ちした。

私はく赤騎士の集音機能を使って、それを盗み聞いた。

「山田先生、遠慮はいらない。天狗の鼻を押し折ってやれ」

「いいんですか？」

「ああ、強くなるには、時に敗北も必要だ」

「ご尤もな意見ですけど、無敗で頂点に立ったあなたが言うと言説力に欠けますね。」

それはそうと、山田先生が私たちを圧倒できるという話だが、数的戦力、機体性能、どう見てもこちらが有利なのは間違いない。それをひっくり返すだけの技量が、山田先生にあると思えないけど。

(でも、あの織斑先生が言うからには、ウソではないのでしよう)

私自身、模擬戦の勝敗に興味はないけど、鈴たちは一夏にイイところを見せたいようだし、なにか手を打っておきますか。

私は反重力装置リバルサーリフトで機体を浮かせ、鈴たちに歩み寄った。

「あの、鈴、オルコットさん、ちよつといいですか」

「ん、何？」

「何ですか？」

「山田先生は強敵そうなので、連携が取れるようフォーメーションを決めておきませんか？」

にわかスリーマンセルよる即席の連携。どこまで通用するか判らないが、無いよりはいい。

しかし、鈴とオルコットさんは、私の提案をせせら笑った。

「強敵？ あの山田先生が？ 冗談はおよしになって、アリスさん」

「そうよ。どう見たって素人じゃない。あたしたちの敵じゃないわよ」

「でしたら、せめてポジションニングだけでも」

〈赤騎士〉は近距離型、〈甲龍〉は中距離型、〈ブルー・ティアーズ〉は遠距離型。私たちのチームは全てのレンジをカバーできている。連携ができなくても、布陣さえしっかり張れていれば、それなりに対応できる。

「心配性ですわね。仮にも専用機持ちなのですから、もっと優雅に構えたらどうですか？」

「そうよ。あんな先生、あたし一人でも十分なぐらいよ。今に解るわ」

「ですが……」

なおも説得するが、二人はまったく聞く耳を持ってくれない。それどころか、いかに一夏に魅せるかで頭が一杯らしく、肝心な思考が別の場所に行っている様子だった。

「ふふ、見ていてくださいね、一夏さん。蒼穹の狙撃手ことセシリア・オルコットがエレガントな操縦テクニックで、貴方のハートを打ち抜いてみせますわ」

「ふふ、一夏、あたしがいかに凄い幼馴染を思い知りなさい。そして、想い改めるのよ」

なんとという恋は盲目だろうか。気持ちは解りますけど、負けたら魅了も何もありませんよ？

はあ〜と深い溜息をついたあと、私は彼女たちとの連携を諦める事にした。

（頼れるのは、あなただけのようです。アテにしますよ、ヘレツドク
イーン）

《Yes My honey——がんばる》



「では、始め!!」

千冬の合図で、緑、青、朱紫、赤色のISが宙へ駆け上がっていく。そして、上空100mまで上昇したところで、4機のISは速度を緩め、模擬戦／試合用プログラムを起動した。投影型モニターに、ISのヒットポイントともいえる数字が表示される。

各々はそれぞれの武器を展開し、臨戦態勢に入った。

「先生、先に言っておきますけど、手加減はしませんからね」
「悪いけど、本気でいかせてもらうから」

意気込みを見せつけ、先制攻撃を仕掛けたのはセシリアだった。その後を鈴が続く。

代表候補性たちが真耶と交戦するなか、最後尾にいたアリスだけは

動かない。

《ハニー、いかないの?》

「ええ、いまは後方に下がって、鈴とオルコットさんの援護に回りま
す」

《むむ? つまり後方支援?》

〈赤騎士〉は白兵戦特化のIS。手の懐に潜り込んでこそ、真価が
発揮される。だというのに、後方へ下がって遠・中距離型の後方支援
を行うなどナンセンスだ。

しかし、そのナンセンスこそ、実は現状でのセオリーだった。

「私たちは、ぶつつけ本番で組まされたスリーマンセル。連携は求め
られない。下手に飛び出せば、誤射の恐れもある。ブルー・オン・ブ
ルーなんて、まっぴらごめんですからね。それに鈴たちは、一夏にイ
イところ見せたいと思っています。しゃしゃり出て、魅せ場を奪うな
んて無粋でしょ?」

《hmm...:Yes My honey》

実力を発揮できないのが不服なのか。渋々といった様子で了承す
る〈レットクイーン〉。

そんな彼女に苦笑しつつ戦場に意識を戻すと、セシリアが真耶の射
撃を巧みに躲していた。

——いや、違う。そう見えるだけだ。

一見、セシリアが可憐に攻撃をいなしているように見えるが、真耶
の射撃には攻撃の意図が含まれていなかった。前衛として、ポイントマン場数を
踏んできたアリスには、それがわかった。

なら、何のための射撃か。真耶が眼鏡の奥に知的な鋭さを宿した瞬
間、その解は現れた。

「先生、そんな甘い射撃じゃ、わたくしは墜せま——きやつ!」

余裕を以って回避したセシリアが、あるものにぶつかる。彼女がぶ
つかったのは《龍咆》チャージのため一時停止していたく甲龍>だっ
た。

セシリアを誘導して、鈴にぶつける。これが真耶の射撃の狙いだっ
たのだ。

「ちよつ、あんた何してんのよ!? 早く離れなさいよ!!」

「鈴さんこそ、早く離れてくださいな!!」

ぶつかつた衝撃で纏れた機体を引き離そうとするが、それぞれの非固定浮遊部位が干渉し合い、思うように機体を引き離せない。

これは相手にとつて絶好のチャンス。——いや、真耶の計算どおりというべきか。

「貰いましたー!」

真耶は60mmグレネードランチャーを展開し、未だ絡み合う二人にその砲口を向けた。

動きを封じられている二人は、回避行動を取れずにいる。これでゲームセット。——と思われた瞬間。

ヒュン。

風を切る音と共に、照準を定める真耶へ“何か”が勢いよく飛来した。

その回避でグレネードランチャーの銃口が反れる。榴弾は明後日の方向に発射され、爆発した。

「ななな、なんです!?!」

真耶は回避でズレた眼鏡を掛け直し、飛来してきた“何か”を確認した。

途端、掛け直した眼鏡がまたズレる。

手裏剣のように飛来してきた物体の正体が、^{ヴォー}バカでかい^パ大剣^ルだったからだ。

「得物を投げつけるなんて、相変わらず無茶な戦い方するわね、あんた」

「あら、鈴だって《双天牙月》をよく投げるじゃないですか」

「よくいうわ。双天牙月はそういう風にできてんのよ」

《双天牙月》は力学に基づいて設計されているので投擲武器として使用できる。投擲後、ブーメランのように帰還してくるのはそのためだ。しかし《ヴォーパル》は違う。それで自分たちを援護したのだから、鈴が驚き呆れるのも無理ない。

だが、どうあれ今の一撃で助かったのは、事実にはならない。これ

には『ナイスフォロー』と言わざるを得なかったが、アリスに助けられたのが面白くないセシリアはそっぽを向いた。

「別に助けてもらわなくても、自分で何とかできましたわ！」

「もちろん、わかっていますとも」

セシリアを立てつつ、アリスは腕部のワイヤーガンで投げた《ヴォーパル》を回収する。

そして、朗らかな笑みを崩し、真耶に不敵な眼差しを向けた。その瞳は猛禽類のように鋭い。

「では、舞踏会ダンスパーティーの再開と行きましょう。準備はいいですか？」

《I'm ready》——いつでも、どこでも》

「では、始めましょう。IS同士によるとんでもない戦争——」

と、そこで思い留まる。

いま、＜赤騎士＞はイギリスのIS。それらしく振舞った方がいいか。

「いえ——踊りなさい。私と＜赤騎士＞の奏でるワルツで!!」

「ちよつ！ わたくしの決めゼリフ——!!」

セシリアの批難などなんのその、アリスは《ヴォーパル》を構え、真耶に肉薄した。

真耶は《レッドバレット》のセミオートでこれを迎撃する。それに対し＜赤騎士＞が喧しく警告音を鳴らすけれど、アリスは無視して突撃した。(《レッドクイーン》は「また新品の装甲に傷がつく」と嘆いた)。

アリスには解っていたのだ。回避しても無駄だと。

真耶の射撃の腕前はピカイチ。下手な回避は、先ほどのように誘導される。ならば、下手な駆け引きはせず、被弾覚悟で特攻した方が利口だと判断したのだ。

すると、真耶の射撃精度が急激に上がった。誘導を諦め、本気で撃墜する気になったようだ。

だが、その判断は既に遅い。

「——ここは、私の距離です」

アリスは真耶に向かって《ヴォーパル》を縦一線に振り下した。真

耶はアサルトライフルを放棄し、武装ラックからIS用ナイフ《ブレッドスライサー》を抜いて受け止める。

激しくぶつかり合い、膠着する<赤騎士>と<ラファール・リヴァイヴ>だったが、

「くっ！　なんて切れ味ですか……」

《ヴォーパル》によって切断され始めた《ブレッドスライサー》に、真耶は驚愕した。

《ヴォーパル》は高周波超振動とPICによる慣性質量操作で、あらゆる物を切り裂く。更に<赤騎士>のジェネレーター出力は、<ラファール・リヴァイヴ>の二倍である。ジェネレーターの出力は、ISの性能を表す指標。出力が二倍なら、性能も二倍と言っていい。

それを証明するように、<赤騎士>は猛烈なパワーで<ラファール・リヴァイヴ>を切り払った。

暴虐な力に打ち負かされた<ラファール・リヴァイヴ>が、得物とその姿勢制御を失う。

大きなスキを晒した真耶にアリスが叫んだ。

「今です、鈴、オルコットさん！」

「言われなくても!!」「わかってるわよ!!」

二人は声を揃えて答え、そして応えた。

セシリアは《ブルーティーズ》4基によるフルバーストを、鈴は衝撃砲の最大チャージ《神龍の咆哮》を、無防備な状態を晒す真耶の<ラファール・リヴァイヴ>に叩き込んだ。

壮大な爆音と暴力的な爆風で、大気が震える。その振動はアリーナの外で観戦していた一夏たちまで及んだ。

「これはやったでしょ」

今回の試合方式はクォーターゲーム。シールドポイントを1/4減らせば勝利というものだ。

先の一斉掃射は、確実に1/4以上のポイントを減少させただろう。自分たちの勝利は疑う余地もなかった。だというのに、いくら待っても、ISのウィンドウに『Win』の文字が表示されない。

これは、もしかして……

『ありえない!!』

鈴やセシリアだけではなく、千冬を除いた、全てのギャラリーがそう叫んだ。

なんと、あれだけの猛攻を受けたにも関わらず、真耶のくらファール・リヴァイヴは健在だったのだ。

どうやら、彼女は土壇場で持ち直し、あれだけの攻撃を凌いでみせたらしい。

「今のは正直ダメかと思いました」

彼女自身も、自分がやってのけた神業に半信半疑の様子だった。

だが、それにより現役時代の感覚を取り戻した真耶は、瞳に強い自信を宿した。そこに頼りない今までの彼女はいない。まさに『眠れる獅子』が目覚めた瞬間であった。

「いきますッ！」

両手にマシンガンを展開した真耶が、イグニッションブースト 瞬時加速を使う。

標的はくブルーティアーズ。

最初に狙撃手を潰すのは、戦場の布石。基本に忠実に従って、真耶はセシリアに肉薄した。

「い、迎撃なさい、《ブルーティアーズ》！」

迫る真耶のプレッシャーにたじろぎつつ、セシリアはビットに命令した。

しかし《ブルーティアーズ》は迎撃しない。それどころかうんともすんとも云わなかった。

「え、どうして!?!」

と、素っ頓狂な声を上げ、碧眼をパチクリさせるセシリア。

焦るセシリアに、くブルーティアーズのコンソールパネルが非情な報告を告げる。

↑ 警告：《ブルーティアーズ》No1：BT—Energy [EM

PTY] [Online] ↓

↑ 警告：《ブルーティアーズ》No2：BT—Energy [EM

PTY] [Online] ↓

↑ 警告：《ブルーティアーズ》No3：BT—Energy [EM

PTY】[Online]——↓

↑——警告：《ブルーティアーズ》No4：BT—Energy「EM
PTY】[Online]——↓

どうやら、先のフルバーストで、ビットのエネルギーを全て使い切ったらしい。

こうなれば《ブルーティアーズ》はプカプカ浮かぶただの的だ。障害物にすらならない。

セシリアは慌てて《ブルーティアーズ》を回収しようとするが、それより早く真耶が接近してきた。

「くっ！ インターセプター——」

「ていつー！」

咄嗟に呼び出した近接武装を、真耶はサマーソルトキックの要領で蹴っ飛ばした。

さらに、その勢いを活かして一回転し、至近距離からマシンガン二丁を連射する。

50、40、30、20、10——0。

マシンガンの弾雨を余すことなく浴びたセシリアのポイントが、瞬く間にゼロになる。

「オルコットさんッ」

アリスが咄嗟にフォローに回ろうとしたが、すでに遅かった。

「くっ、私が付いていながら……」

《ハニー、ヴォーパルを放棄して！》

いきなり武装を捨てると言うヘレッドクイーンに、アリスは顔を顰めた。

その真意を確かめるべく《ヴォーパル》の刀身に視線を移す。

すると、《ヴォーパル》に粘土のような固形物がベツタリ貼り付いているのが見えた。

「——セムテックス!？」

《ヴォーパル》の刀身に張り付いていた固形物はセムテックス——

一般的にプラスチック爆弾と呼ばれる代物だった。その爆弾は粘土のように形を自在に変えられるのが特徴で、様々な場所に設置でき

る。ISとて例外ではない。しかし、いつ設置された？

——もしかして真耶と鏢迫り合いをした時か！

間違いない。真耶に接触したのはあれが最初で最後だ。

真耶は押し切られると判断して、置き土産にプラスチック爆弾を残していったのだ。

(山田真耶、誘導射撃だけではなく、こんな破壊工作までできるとは……)

真耶の器用さに脱帽しつつ、アリスは《ヴォーパル》を放棄した。

直後、大きな爆発が起きる。

「レッドクイーン、損傷報告を」

《Yes My honey——本機は異常なし。《ヴォーパル》は高周波発生装置、及びPICを損傷》

「了解。もう、あの《ヴォーパル》は使い物になりませんね。放棄します」

《ヴォーパル》は高周波発生装置とPICがあつてこそ、驚異的な切断力を発揮する。

その二つを失えば、鈍刀も同然だ。回収してもデットウェイトにしかならない。

一方、アリスが足止めを食らっているころ、真耶は鈴に猛攻を加えていた。

「当たれ、当たれ、当たれえ!!」

鈴は迫りくる真耶に向かって、最大威力の《龍咆》を放つが、まるでかすりもしない。

見えないハズの砲弾が、いとも容易く躲される。その状況に鈴は目を見張った。

「もしかして、この《龍咆》が見えているとでもいうの!?!」

実際には、真耶にも衝撃砲の弾は見えていなかった。

では、なぜ躲せているのか。

真耶は、鈴の攻撃パターンから衝撃砲の発射タイミングを予測して、砲撃を凌いでいた。

もちろん、これは彼女の長年の経験と洞察力、観察眼の賜物である。誰にでもできる芸当ではない。そして、この神懸りの分析能力は、あの織斑千冬でさえ苦しめた。

「くっ！一発でも当たれば、こっちの勝ちなのに!!」

この時の鈴は、追い詰められた人間にありがちな心理に陥っていた。

それは、焦燥による冷静さの欠如。

こういった心理に陥ると、柔軟性が失われ、動きが単調化する。戦場に於いてワンパターンな戦術が、戦局をひっくり返す事はない。そう、策を労さない戦士に、勝利の女神は微笑まないのだ。

そこへダメ押しするように、真耶が4連装の空対空ミサイルランチャーを展開した。

それが、面白いように命中する。

すぐさまく甲龍くのシールドポイントがゼロになり、鈴も戦線離脱を余儀なくされた。

こうして真耶とアリスが戦場に残ったわけだが、二人が対峙し合う事はなかった。

「降参です」

アリスが武装解除し、両手を挙げたのだ。

「え、まだポイントは残っているのに」

確かにく赤騎士くのシールドポイントには、まだ余裕がある。

戦闘継続に問題はなかったが、それでもアリスは白旗を下げなかった。

「これ以上戦っても、結果は見えていますから」

苦笑混じりにそう言うアリスの姿には、どこか諦めにも似た哀愁が漂っていた。

しかし、それが彼女の演技だと、どれだけの人が気付いただろうか。(鈴、オルコットさんが退場したいま、私が先生を負かすメリットはない)

仮にアリスが真耶を負かせば『一般生徒 く 教師 く 代表候補生』という関係ができてあがる。それは真耶や鈴たちの面子を潰す事に

なるだろうし、アリスの評価も上がってしまう。

逆にここで降参しておけば『教師』 < 代表候補生 ≧ 一般生徒』にする事ができる。

若干、代表候補生の株価が下がるのは否めないが、それは対策を怠った彼女たちの自業自得だ。

「誘導射撃、破壊工作、分析能力、どれも見事でした。感服です」

アリスは腕部装甲を解除し、純粋な敬意を込めて真耶に握手を求めた。

真耶もその敬意に応えた。

「アリスさんも良い腕前でした。代表候補生に選ばれていないのが不思議なぐらいです」

「いえ、ここまで戦えたのは、私の実力じゃありません。『彼女』の性能です」

そう言つてく赤騎士の装甲をコンコンと叩く。

しかし、真耶はアリスが謙遜を見破っていた。

今回の模擬戦。チームワークは最悪だった。その中で、彼女は代表候補生たちをアシストし、自分を追い詰めさせた。個々の成績に囚われず、全体を考慮して立ち回れるのはプロの証拠だ。

(なのに、IS適性値C+、ですか)

IS適性値は【S】【A】【B】【C】【D】に【±】を加えた10段階で評価される。

もちろん、その中の最低ランクは【D-】であるが、【C+】も決して高いとはいえない。おおよそ、平均以下、落第予備軍という位置づけである。なお【D±】は一般的に不可(適性が無い)扱いされるので、このIS学園に適性値【D】を持つ生徒は存在しない。

閑話休題。

つまり教師の経験から述べれば、アリスの適性値は【A±】あたりが適当だった。

視力の良くない真耶だが、人を見る目はある。おそらく自分の評価は間違っていない。

『ヒツジの皮を被ったオオカミ』。

真耶がそう呟いたことを知ってか知らずか、アリスは敗因を突きつけ合う鈴たちの許に向かった。

「ちよつとき、何でぶつかってくるのよ。ビットを積んでるくせに、空
間認識もできないわけ？」

「そういう鈴さんこそ、バカの一つ覚えみたいにバカス力衝撃砲を無
駄撃ち過ぎですわ」

「ふん、肝心な時にエネルギー切れ起こしている奴に言われたくない
わよー！」

「まあまあ、二人とも、責任の擦り付け合いはやめましょうよ」

《ハニーの言う通り。どちらが悪いという事はない。どちらも悪い》
「なんですって！」「なによー！」

《僚友の助言の無視。自身の過大評価と対象の過小評価。織斑一夏を
意識し過ぎた見るに堪えないスタンドプレー。ミス山田は強敵だっ
たけど、相手の戦力を把握し、的確な布陣を張った上で、連携攻撃を
駆使していれば、けてして勝てない相手ではなかった。つまり、わたし
たちは勝てた勝負をみすみすドブに捨てたのも同じ》

〈レットクイーン〉が犯したミスを的確に列挙していく。なまじA
Iだけに容赦がない。

悔しいが、反論の材料が見当たらなかった。そこへ千冬がやってく
る。

「まったくレットクイーン〉の言うとおりだな。己の力を驕り、私欲
のために戦っては必ずそうなる。よい勉強になっただろ？」

『はい……』

今回、その事を痛感——痛いぐらい学んだ鈴とセシリアは、素直に
頷いた。

「さて、これで諸君らにも、教員の実力が理解できただろう。以後、敬
意を以って接するように」

千冬が両手をパンパンと叩き、皆の注目を集めながら、模擬戦の終
了を宣言する。

アリスたちも反省会をそこそこに、各クラスの場所へと戻っていっ
た。

第20話 実習Ⅱ

「では、これより実機を用いた実習訓練を行う。全員、心してかかれ」
『はいッ！』

千冬姉の注意喚起に、生徒たちは緊張と興奮の混じった声で返事をした。

IS学園のカリキュラムでは、まず一ヶ月間に亘り、講習とシミュレーター訓練を受ける。実機の訓練は、それが修了してからだ（俺の場合は時間がなかったたので、その過程をすっぽかしたが）。

そして今日が初の実機訓練となる。それあって、生徒たちのやる気も高い。

「よし。まずはグループ分けだ。A班からE班の5つに別れる。専用機持ちは各自のグループリーダーとなるように。A班は織斑、B班はオルコット、C班は風、D班はデュノア、E班はボーデヴィツヒだ。では、行動しろ」

千冬姉の手を叩く音に合わせて、それぞれが移動を始める。

9人あまりのグループが5つできあがると、女の子たちはさっそくお喋りに勤しみ出した。

「あ、織斑君の班だ。よろしくね♪」

「セシリアって入試、主席だったよね。いろいろと教えてね」

「鳳さん、今度よかったら、襲撃の時の話、聞かせてよ」

「よろしくね、デュノア君。ちなみに、わたしはミサンドリーじゃないよ」

「……………」

それぞれの班が雑談に花を咲かす中、ラウラだけのグループだけ静まり返っていた。

原因は言わずながらラウラだ。ラウラの人を蔑むような目付きと、馴れ合いを拒むオーラが和気藹々とした雰囲気許さず、その場を絶対零度に変えていた。

仮に勇気を出して、コミュニケーションを図ってみても――

「よ、よろしくね、ボーデヴィツヒさん」

「……ふん。馴れ馴れしく話しかけてくるな」

この顛末である。これが照れ隠しなら可愛いものだけど、本気の拒絶だから手に負えない。

さすがに同グループの女の子が可哀想になってきたな。クラス代表として何か言つてやろうか。

「織斑、おまえが行つたら、火に油を注ぐようなもんだぞ。今朝の出来事を忘れたのか？」

千冬姉の自制に、俺は踏み出した足を止める。

そうだった。あいつは俺を嫌悪している。そんな俺が注意したところで、アイツは耳を貸さないだろう。それどころか反発して、場の空気をもっと悪くしてしまうかもしれない。

「わかつたら、授業に集中しろ」

「はい……」

俺は渋々自分のグループに戻る。

全班が準備を終えたところで、山田先生が配備するISについて説明した。

「いいですか、みなさん。これから各グループに4機ずつ訓練機を配ります。機種は<打鉄>と<ラファール・リヴァイヴ>です。好きな方を班で決めてくださいね。早いもの勝ちですよ〜！」

先の模擬戦で自信を取り戻したのか、山田先生の口調は覇気にあふれていた。動きもいつにもなく機敏だ。胸も3割り増しで弾んでいゑる。こう、ぽよんぽよんといった感じに。

「おい、鼻の下が伸びてるぞ」

「の、伸びてねえよ」

幼馴染の指摘に、くしゃくしゃと顔を洗って誤魔化す。

そうだ。別に鼻の下を伸ばしていたわけじゃない。元気な山田先生が微笑ましかつただけだ。

「まったく、男はどうして、そう、アレなのだ……」

「あれってなんだよ」

「なんでもない。それよりさっさと訓練機を申込みに行け。グループリーダーが怠けるな」

箒の言う事ももつともなので、俺は訓練機を取りに向かった。



(男というヤツは、なぜ女性の胸ばかり……)

一夏が訓練機を取りに行っている間、箒はそんなことばかり考えていた。

男心に疎い箒にすれば、男性がこうまで女性の乳房にデレデレする理由がわからなかった。ただ、一夏が他の女性の胸に見とれていると、なんだかおもしろくない気分になってくる。

(一夏のヤツめ、女の胸に興味があるなら、その、私を見ればいいではないか)

大ききこそ劣るが、自分のモノも捨てたもんじやないと思う。それにやわらかい。

決して悪くないはずなのに、なぜ想い人は靡いてくれないのか。そこまで考えて、箒は他人の胸に嫉妬する自分に気づき、自己嫌悪した。

(私は何をやっているんだ……。大事なのは胸の大ききじやないだろうに)

大事なのは胸の大ききより、ハートの大ききだ。

それをアピールするため、ここ毎日、箒は一夏の為にお弁当を作っていた。しかし、魔の悪さと気恥ずかしきから、ずっと渡せない日が続いていた。その連敗日数は、今日で7日目。そろそろ決着(?)をつけねばならんだろう。

(よし、今日こそ手作りの弁当を渡すぞ)

「おい、箒?」

(それで睦言を交わしながら、おかずを食べさせ合いっこなんかして……)

「おい、箒ってば! 聞いてんのか!」

「ひゃい!」

急に話かけられ、箒は変な声をあげた。

「なななな、なんだ一夏?! 私は何もやましいことを考えていないぞ!?!」

「知らねーよ。それより箒の番だぞ? って、大丈夫か? 顔、赤いぞ」

先程まで彼との甘いひと時を想像していたせいかな、箒は耳まで真っ赤になっていた。

これは恥ずかしい。箒はすぐさま顔面の筋肉を総動員して、いつものむっつり顔を作った。

「わ、私は正常だ。そして平常だ。何の問題点もない。それで何の用だ?」

「何の用だって、だからおまえの番だって」

一夏の言葉で、箒はようやく今が実習中である事を思い出す。

「そ、そうだったな。すまない、少し妄想、じゃなくて考え事をしていました」

「ま、いいけど。じゃあ、抱えるからじつとしていろよ」

言うなり、一夏が箒の身体を抱え上げる。それは俗にいうお姫様抱っこだった。

「まままま待て、いきなり何をするんだ!?!」

そんな至極当然の疑問に、一夏はあっけらかんと答えた。

「見てなかったのか? 前の人がISを立たせたまま、装着を解除させたんだよ。これじゃ装着しづらいから、専用機を持っている俺が運べって、山田先生にそう言われたんだ」

「よし登ってもいいのですが、安全を考慮しましてね。初めての実機訓練でもありますし」

山田先生の説明を、彼の腕の中で聞いていた箒は、なるほどと理解した。

要するに、このお姫様抱っこは、安全を考慮しての措置であるらしい。

「そうか、なら仕方ないな。うん、うん、安全は大事だ」

思わぬ『柵ラッから牡丹餅キ』に自然と語尾が弾む。ついでに豊かな胸も。

「とういうわけだ。しっかりと掴まっっているよ」

「うむ♡」

箒が身を預けたことを確認し、一夏が＜白式＞を飛翔させる。

想い人の体温と鼓動を間近で感じて、箒は思わず頬を緩ませた。

（はあく、これがお姫様抱っこというものか。いいものだな。これは♡）

こんなにも近くで想い人を感じられ、胸が幸福感でいっぱいになる。

また、周りの女子が羨望の眼差しを向けてくるのがよかった。優越感と幸福感。この二つを感じて、頬が緩まない者はいない。もしいるとしたら、きつとそいつは顔面神経痛だ。

（はあくこのまま誰もいない場所へ連れ去ってほしいな）

授業中である事も忘れ、そんな願望に囚われる。心中はすっかりどこかのお姫様だった。

しかし、そんなお姫様を、現実という名の魔女が迎えにやってきた。「よし、じゃあ、コックピットに乗り込んで、まず歩行制御をやってくれ」

コックピット。歩行制御。なんと現実的で近代的な言葉だろうか。夢もへったくれもない。

だからと言って文句を言うのはお門違いなので、箒は黙って＜打鉄＞に乗り込んだ。

（ん、待てよ、これはいい傾向なのではないか？）

アクシデントによるお姫様抱っこ。これは自分に運ツキ気が向いてきた証拠では？

今なら、何をしてもいける気がする。——否、いけるはずだ。

（一夏を食事に誘うには今しかない！）

箒は頬に籠る熱を感じながら、＜打鉄＞からぐっと身を乗り出した。

「お、おい、一夏。今日の昼なのだが、何か予定はあるか？」

「いや、特にないけど？」

「そうか！ なら、一緒に昼食をとるとしよう！ 場所は屋上でどう

だ？」

「お、いいな」

「購買では何も買ってくるなよ？ いいな？」

「？……ああ、わかった」

（よし、やった！ やったぞ！）

喜びのあまり飛び上がるうとするが、＜打鉄＞の関節がロックされていた為、それは叶わなかった。



「ああ、いいなあ、篠ノ乃さん。わたし、織斑君の班がよかったかも」
「あたしも。あっちの班の方がなんか楽しそうだよね」

一頻り実習項目を終え、小休憩をはさんでいたら、そんな会話が聞こえてきた。

何事かと視線をやれば、一夏にお姫様だっこされる篠ノ之さんの姿。

（なるほど、これを見てはしゃいでいたのですか）

まあ、うらやましい気持ちはよくわかる。なんとたってこつちの班はこの有様ですからね。

「あ、あのボーデヴィツヒさん、ISの起動、これで間違っていないよね？」

「ふん。間違っていたら指摘してやる。さっさと起動させろ」

「う、うん。……あ、やった、動いた！ でも、全体の出力があらない？」

「誰が補助動力で実習をやれと言った。さっさとジェネレーターに切り替えろ」

「うん。えっと、メイン動力をジェネレーターに設定……これでいいのかな？」

↑ 報告：ジェネレーター出力数値が変更されました ↓

↑ 警告：設定された値が安定基準値を超えています。再設定を推

奨——↓

「おい、さっさと設定を戻せ。そんな値で起動させたら、ジェネレーターがオーバーロードする。それとも何か？ お前は自爆したいのか？」

「じじじ、自爆!?!」

「死にたいなら止めはしないがな」

「た、助けて、ボーデヴィツヒさん、あたし死にたくない……」

「知ったことか。貴様の責任だ」

「大丈夫ですよ、ジェネレーターは限界値を超えたら自動停止するよ
うに設計されていますから」

優しく言って、涙ぐむ女の子を安心させる。

彼女が平常心取り戻したことに合わせて<打鉄>に上り、ジェネレーターの設定を元に戻した。

「はい、これでもう大丈夫ですよ」

「リデルさん、ありがとー……」

「いいえ」と言って、私は<打鉄>から降りる。そして無然とするラウラに視線をやった。

「すこし厳しすぎませんか？ もう少し優しく教えてあげてもいいでしょう」

「甘いな。ISは歴とした兵器だ。生半可な覚悟や意識で扱うべきじゃない。だというのに、こいつらときたらどうだ。ISをファクションか何かと勘違いしている。私はそれが気に入らない」

なるほど。彼女が辛辣なのは、生徒たちのISに対する認識の甘さがそうさせているのか。私としてもラウラの意見には同意できた。確かにここの生徒は危機意識に疎く感じられるが——。

「でも、IS学園は士官学校でも軍の訓練所でもない。少なくとも建前はそうです。彼女たちに職業軍人のような精神を求めるのは酷だ
と思います」

「兵器を扱う人間に、兵士の精神を求めて何が悪い」

ラウラはクラスメイトへ鋭利な視線を送る。

私はかばうように立った。

私とラウラの対立で班の空気が険悪になる。それを察したのか、山田先生がやってきた。

「どうしましたか？ トラブルですか？」

「いえ、トラブルというわけじゃありません。——でも、班の訓練が遅れているようなので、よろしければ、班員たちにご指導いただけますか？」

「え？ あ、はい、わかりました」

山田先生は「まかせてください」と力強く頷き、止まっていたラウラ班を集めて、訓練を再開させた。山田先生のやさしい指導に、班員たちも気を取り直して、訓練に勤しみだす。

その様子を呆れるように見ていたラウラが、私に視線を寄こした。

「貴様はいつらと訓練しないのか？」

ラウラは、いつまでもそばにいる私に「さつさと立ち去れ」と言いたげな顔を見せた。

でも、そういうわけにはいかなかった。

「私にあの手の訓練が必要でないことは、あなたも理解しているでしょ？——それにあなたに訊きたいことがあるんです。なぜ一夏を敵対視しているのか、そのわけをね」

山田先生に指導を頼んだのは、ラウラにそれを聞く機会がほしかったからだ。

「ふん、貴様には関係ないことだ」

「ええ。そうですね。関係ない事です。でも、興味がある」

「興味本位か。なら余計な詮索はよせ。出すぎた好奇心は身を滅ぼすぞ」

ラウラの鋭い隻眼が私を睨む。平和ボケしている人間には出せない迫力だった。常人なら肝が冷えているか、泡を噴いているところだろう。

だが、生憎、私は常人ではない。だから、余裕たっぷり言い返してやる。

「脅しなら通用しませんよ。なんせ、私は戦乙女を目指す女ですから。その程度で恐れ戦くようではへブリユンヒルデはおろかへヴァルキ

リー」にも成り得ません」

私の言葉に感心した——という訳ではないが、ラウラは警戒心を緩めた。

「ふっ。少しは骨があるようだな。いいだろう。少しばかり付き合つてやる」

「では、改めて訊きます。あなたはなぜ一夏を敵対視しているのですか?」

「それを答える前に、お前は第二回へモンド・グロツソ」の真実を知っているか?」

「第二回へモンド・グロツソ」の真実?」

「教官、いや、織斑千冬が第二回へモンド・グロツソ」で優勝を逃した本当の理由についてだ」

記憶が正しければ、第二回へモンド・グロツソ」で織斑千冬は二連覇を逃していた。

決勝戦放棄という形で。

二連覇確実と言われていただけに、この事態は大きな波紋を呼んだ。裏では『国家間に何かしらの密約があった』『実はデキレースで、千冬は優勝を譲歩する代わりに巨額の金を貰っていた』など様々な陰謀論が囁かれている。だが、どれも憶測の域を出ず、真相は闇の中だ。その真相がいま語られようとしている?」

私が興味を示すと、ラウラは一夏を一瞥して言った。

「教官が決勝戦を放棄したのは、陰謀でも、ましてや金のためでもない。囚われた弟を助けるために、勝負を投げ出したのだ」

「一体、彼の身に何があつたというのです?」

「決勝戦当日、織斑一夏は警備員に扮した何者かに誘拐されたのだ」

予想の斜め上をいく事実には、私は眉をひそめた。

「犯人とその動機については公表されていない。だが、織斑一夏が誘拐された事は事実なのだ。その誘拐犯から弟を救うために、織斑千冬は決勝戦を放棄した。それが第二回へモンド・グロツソ」織斑千冬・不戦敗の事実だ」

驚いた。まさか第二回へモンド・グロツソ」の裏側でそんなことが

あつたとは……。

でも、それと「ラウラが一夏を嫌悪する理由」とどう関係あるのだろうか。

そんな私の心中を察してラウラは言った。呪詛のような、ドロドロした憎悪を以って。

「つまり、織斑一夏の所為で、教官は二連覇を逃したわけだ。織斑一夏さえいなければ、教官はヘモンド・グロツソゝ連覇という偉業を成し遂げていただろう。だから、私は許さない。教官に汚点を残させた織斑一夏を」

そう告げ、ラウラは私に背中を向けて去っていく。

同時に授業終了のチャイムが鳴るが、私の耳には届かなかった。

ラウラの放った言葉が鼓膜から離れなかったのだ。



昼休み。憩いの時間とあって、食堂に続く廊下は生徒たちの談笑で賑やかだった。すれ違う生徒たちは、ISや昼食の話で盛り上がっている。しかし、私はひとり難しい顔で廊下を歩いていた。

「おかしい」

何がおかしいのか。それはラウラの言動についてだ。

『織斑一夏さえいなければ、教官は連覇という偉業を成し遂げていただろう』

『あいつが教官に汚点を残させた張本人』

『だから、私は斃す。そして教官の無念を晴らしてみせる』

その言葉がどうも腑に落ちなかった。

どう考えたって不戦敗の原因は、一夏を誘拐した犯人だ。未然に防げなかったドイツの警備隊にも責任がある。ただの被害者である一夏に不戦敗の原因を擦り付けるのは、お門違いもいいところだ。彼女の言葉はまるで筋が通っていない。

(もしかして、他の理由で一夏を恨んでいる?)

そう考えるのが妥当な線だろう。

おそらく、それらしい理由を作って自分の行動を正当化しようとしているのだ。

では、そこまでして彼女が為そうしている事とは、一体何なのだろうか。

その時、私は思考に耽るあまり、背後へ忍び寄る影に気づかなかつた。

「アリス、ここにいたのか」

「ひゃん！」

私は変な悲鳴を上げた。

背後から呼びかけてきたのは、例の当事者——一夏だ。

「もう、いきなり話しかけないでください。びっくりするでしょ」

「悪い、悪い。遠くから声をかけても反応がなかったからさ」

「そうでしたか。ちょっと考え事をしていまして。それで何の用でしょう？」

「用ってほどじゃないんだけど、よかつたら一緒に昼飯でもどうかなと思つてさ」

「え？ 一夏は篠ノ之さんと昼食をとるんじゃないですか？」

着替えの時、私は篠ノ之さんから『聞いてくれ。一夏と食事の約束を取り付けたのだ。今日こそお弁当を渡すぞ』とその意気込みを聞いていた。なのに、何故この人は私を食事に誘うのだろう。嫌な予感がある。

「ああ、箒も一緒だ。あと鈴やセシリア、シャルルもくるぞ」

「……………」

はあー。どうせ『みんなで食事を取つたほうが楽しいだろ？』的な発想なのだろう。

なんでしよう。私のシリアスな気分が一気に吹き飛んだ気がする。

「乙女の純情を踏み躪る男は、馬に蹴られてしねばいいのですよ？」

「なんだ、いきなり物騒な。まあいいや、それより行こうぜ」

呆れる私など歯牙にもかけず、一夏が私の手を握って颯爽と歩き出す。

私は『あわわわ!』と化学反応のように顔を真っ赤にした。

「ちよ、ちよっと待ってください。私は行くなんて一言も!」

「いや、アリスは強制参加だ。絶対、逃がさないからな」

「あら♡」

私こういう積極的な、嫌いじゃないです——つて違う、違う。

「どうしてですか。もしかして実習の事、根に持っています?」

「いや、持ってねえよ。ただ、アリスには聞きたい事がある」

聞きたい事——私が専用機や実力を隠していたことだろう。

なら致し方ない。私も説明すると言った手前があるし。でも、逃がすまいと手を強く握らないでほしい。恥ずかしくて、しんでしまいうだ。

「ううー……」

結局、私は情けない赤面を晒しつつ、手から変な汗が出ないよう努力し続けるしかなかった。

ああ、『乱暴なエスコートですね』とか言える心の余裕がほしい、今日この頃だ。



誰もいない更衣室。実習を終えたセシリアは、着替えもせず、更衣室の片隅で一人佇んでいた。

その表情は険しく、普段の高貴な雰囲気は見るからに感じられない。

彼女はいま、ISを介した衛星通信で、本国の開発局とコンタクトを取っている最中だった。

目的は<赤騎士>と呼ばれるISについて詳細なデータを要求するためだ。

「納得いきませんわ!。そんな説明でわたくしが納得するとも!?!」

だが、得られた返答はセシリアの満足いくものではなかった。

<赤騎士>はBT試作三号機<ブランドッシュ・ノトス>のプロト

機？ 何の冗談かしら？」

それはおかしな回答だった。BT試作3号機の開発は、データ不足により凍結されたのだ。

そのため、現在BTレーザーを装備した試作機は2号機までしか開発されていない。

そもそも<赤騎士>と<ブルー・ティアーズ>の間には、技術的な齟齬が多すぎる。ジェネレーター出力、人工知能しかり、これらの点から、<赤騎士>がティアーズ型の系譜ではないことは明白だった。

だというのに、本国はそれを否定し、ひたすら見苦しい言い訳をしてくる。

なぜ、そこまでして<赤騎士>を擁護するのか。セシリアはそれが知りたかった。

いや、そういうと語弊があるかもしれない。彼女が本当に知りたかったのは――

「まあ、いいですわ」

これ以上問い詰めても時間の無駄。そう判断したセシリアは、要求を変えることにした。

そもそも、この要求は本題を振るための前置きだったのだ。

「では、その専属操縦者アリス・リデルのデータをくださいな」

『それはできない』

癪に障る淡白な返答。

お嬢様育ちのセシリアでさえ、我を忘れて、舌打ちしそうになった。「なぜですか？」

『ニード・トゥ・ノウの原則だ』

知る必要の原則。『知る必要のある者だけに情報を開示する』という機密保持の原則だ。言い換え、『知る必要のない人間には情報を開示しない』という原則でもある。つまり、回線先の相手はこう言っているのだ――『お前がアリスについて知る必要はない』と。

それでもセシリアは食い下がった。

「では、現場の人間として情報を要求します」

セシリアは『今、自分はその情報を知るに足る人間だ』と強調する。だが、向こう側も頑な姿勢を崩さない。それどころかセシリアの立場を逆手に取った。

『その要求には応えられない。そもそも君の任務はBT兵器のデータ収集だ。それに従事したまえ。我々は君が送ってくるデータに満足していないのだぞ』

<ブルー・ティアーズ>の肝というべき装備——BTレーザー。そのデータを収集するために、セシリアはIS学園にやってきた——のだが、その進捗状況は芳しくなかった。BT稼働率は低空飛行を続けているし、初陣ではデータ収集どころか敗北を喫している。そして、先ほどの模擬戦。

その事実がセシリアの心に突き刺さる。物理的な力はないのに胸が痛んだ。

「わ、わかりましたわ」

悔しいが、彼らの言い分は正しい。私情で責務を投げ出してはいけない。

それは解っている。けれど、湧き上がってくる不満は抑えようがない。

セシリアは苛立ちながら通信を切った。

「よろしいですわ、アリス・リデル。わたくしが貴女の正体を暴いてみせます」

淀んだ瞳には、対抗意識や興味本位と違う、黒い感情が見え隠れしていた。

第21話 Let's ランチタイム!

学校の屋上というと、みなさんはどんな場所を想像するだろうか？

一面コンクリートで、給水塔があったりする場所？

フェンス越しに町が一望できる場所？

近からず遠からず、そんな場所だろう。IS学園の場合は、各所に花壇が設けられ、季節の花々が植えられている。その色彩はとても豊かで、ふとした瞬間ココが人工物であることを忘れさせてしまう。そんな場所に美男美女が集えばさぞかし画になるのだが、二名の不機嫌そうな顔が全てを台無しにしていた。

一人目は、篠ノ之さんだ。原因は一夏が他の娘を誘ったことだろう。

二人目は、オルコットさんだ。こちらの原因は私だろう。

オルコットさんにいい顔されないのは日頃からだけど、今はいつにも増して私を見る目が険しい。まるで『コイツは宇宙人に違いない』と疑うオカルト研究家みたいな顔だ。

ともあれ、私は隣にいる篠ノ之さんに耳打ちした。

(今さら一夏の鈍感を怨んでも仕方ありません。気持ちを入れ替えましょう)

(うむ、そうだな)

篠ノ之さんと私がコソコソしていると、一夏がこちらを見た。

「なんだ、二人して内緒話か？」

「いえ、なんでも。それより篠ノ之さんが、あなたにお弁当を作ってくれたそうですよ」

「お、そうなのか？」

「あ、ああ。実は分量を間違えてな。処分するのももったいないし、お前に弁当でも作ってやろうと思ったのだ。そ、その勘違いするなよ。他意はないぞ、他意は。本当に作りすぎてしまっただけなのだ」

というのは、もちろん篠ノ之さんの照れ隠しだ。

実を言うと、篠ノ之さんは一夏のために毎日お弁当を作っていた。ただ、勇気が出せず、ずっと渡せず仕舞いだったのだ。

そして、渡せずとその日が終わると『今日も渡せませんでしたね』
『ああ、今日も渡せなかったな』と残ったお弁当を二人で食べるのが、
最近の日課だった。なので、最近の私はすこし太り気味。

「そっか。ついでだとはいえ、嬉しいよ。ありがとな、箒」

「ふふ、礼には及ばないぞ」

ハニカム一夏につられて、篠ノ之さんも嬉しそうに微笑む。

しかし、そのほんわかかな雰囲気を快く思わない人物が二人。鈴とオルコットさんだ。

鈴はふたりの雰囲気をぶち壊すようにタッパーを繰り出した。

「はい、これッ、あたしから！」

次いで、オルコットさんがバスケットをスースーと差し出す。

「実はわたくしも早起きをして、こういうものを用意いたしましたの」
そう言つて、オルコットさんがバスケットを開ける。中身は美味そうなBLTサンドだ。だけど、それを見たみんな(デユノア君を除く)の顔からサーと血の気が引いた。

はつきり言おう。セシリア・オルコットの料理は壊滅的に不味いだ。

「あ、ありがとな、セシリア」

「別によろしくつてよ。何でしたらこれから毎日でも——」

「よゝし、みんな飯食おうぜえゝい
! ?」

必要以上に大きな声を出して、オルコットさんの好意を聞かなかったことにする一夏。

私たちは視線で非難するが、事情を知らないデユノアくんだけは――

「おおゝ、みんなでごはんたべようゝ」

と、一夏のノリに合わせていた。

「あ、あれ、もうかしてこういうノリじゃなかったッ!」

ほかくんとする私たちを、デユノアくんがきよろきよろと伺う。

いえ、空気を読み間違えたわけじゃないんですけど、意外な反応に驚いたというか。

「いや。大丈夫だぞ。ほら、シャルルもこう言っているし、みんな食おうぜ」

「そ、そうだな」

「じゃあ、まず箸の弁当からもらうな。お、唐揚げに鮭の塩焼きか、豪勢だな」

「ああ。特に唐揚げは自信作だ。あれこれいろいろな試行錯誤したんだ」

一夏はどれどれと唐揚げをつまむ。

それをぽいっと口に放り込んで、もぐもぐと咀嚼。そして目を睜いた。

「うおっ、うめえ！ 何だこれ。シヨウガと醤油と……なんだ？」

「おろしニンニクだ。それとコショウを少し混ぜてある。あとは隠し味に大根おろしが適量だな」

「なるほどな、おろしたニンニクと大根おろしか。よし、俺も今度試そう」

うんうんと感心しながら、一夏がまた唐揚げを口に運ぶ。

そんなに美味しいのでしょうか、あの唐揚げ。失敗作なら食べた事があるけど。

「なんだ、アリス、じくと見えてきて。もしかして食べたいのか？」

「ええまあ。あなたがそんなにも絶賛するものですから」

「じゃあ、一個やるよ。ほら、あくん」

箸でつまんで差し出された唐揚げに、私はぎよつとした。

いくらなんでも、彼女たちの前で「はい、あくん」はちよつと……。

ほら、篠ノ之さんとか「なんでアリスばかり」って涙目で訴えかけてきているし、鈴なんて「食べたら泣かす」って顔に書いてある。オルコットさんに至っては、目に熱が無い。

「ほらほら、どうした？ 食わないのか？」

目の前で泳ぐ唐揚げに、私は思わず「ごくり」と生唾を飲んでしまう。カラッと揚げられた衣は、食わずとして旨いと断言できるだろう。こうして近くで見れば見るほど、美味しそうだから揚げだ。結局、私は食い意地に負けてしまった。

「では、一つだけ」

私は横髪が邪魔にならないよう耳にかけながら口を開いた。

「あくん♡」

「あ、やっぱりやめた」

急に唐揚げをサつとUターンさせる一夏。

スカされた私は「きやふん」とブルーシートと接吻した。

「あれだけ見せびらかしておいて、やめるなんてひどいですよ、一夏！」

「ははは、しかたないだろ。急に食べさせたくなくなったんだからさ」
一夏は悪戯が成功した子供のようにつけて、私が食べるはずだった唐揚げを頬張る。

さては、最初から食べさせる気なんて無かったんですね、このひとでなしは！

「唐揚げなのに、あげないなんて、そんなの唐揚げじゃないです」

「お、うまいこと言ったな、よし、そんなアリスには——」

「あ、くれるんですか？」

「このバランスをあげよう」※バランスを知らない人は、グーグル先生に聞いてみよう。

「いいませんよ！」

と、言いつつも貫つたバランスをムシヤムシヤ食べる。少しだけ肉の味がした。

「まったく、お前らは何をやっているんだ。ほら、私の唐揚げをやるから機嫌を直せ」

私の惨めさを見かねてか、篠ノ之さんが自分の唐揚げを分けてくれる。

ああ、なんと優しい人でしょうか。決めました。篠ノ之さんは私の嫁にします。一夏なんて、その辺のベンチにいる青いツナギを来たイイ男と結ばれればいいのですよ。ホイホイついていけ！ ベーだつ！

「てかさ、箸のばかり食べてないで、あたしのも食べなさいよ！」

と、先ほどから篠ノ之さんのお弁当ばかり食べるもんだから、拗ね

た鈴が頬を膨らませる。

ライバルのお弁当ばかり食べられたら、確かに面白くないだろう。「まあ、そう声を荒げるなって、鈴。ちゃんと食うからよ」

一夏がタッパを開くと、辺りに甘酢のいい香りが広がった。人参、筍、ピーマン。タッパの中身は鈴の得意料理、酢豚だ。彩も綺麗で、それが食欲を駆り立ててくる。

一夏は豚肉を頬張って「おおっ」という顔をした。

「うまい。うまいぞ、鈴。ほどよく甘辛くて、全然しつこくない」

「そうでしょう、そうでしょう。お母さん直伝の、あたしの勝負飯だもの」

褒められた鈴はどこか得意げだ。一夏も美味しい手料理を味わえて、ご満悦の様子である。

だが、その至福の時も、そろそろ終わりに近づきつつあった。

オルコットさんが「次は自分の番だ」とニコニコしていたからだ。

「では、一夏さん、次はわたくしのお弁当を召し上がってくださいな」「お、おう」

意気揚々と勧められたバスケットに、一夏が戦々恐々の様子で手を伸ばす。その様子に「食べたくない」という彼の本心が透けて見えるようだった。でも、他の娘のお弁当を食べて、彼女のお弁当だけ食べないわけにもいかない。一夏は振るえる手で、サンドウィッチを取った。

そして、手にしたサンドウィッチを数秒ぐらい凝視したのち、何かを閃いた顔で私を見る。

「アリス、あくん」

「シャーッ！」

毒物を近づけてくる一夏を、私はヘビのように威嚇した。

さては、ラブコメを利用して、私に毒物进行处理させようという魂胆ですねッ！

「誰が食べますかッ！ そんな劇物ッ！」

と言ったところで、私は自分の失言に気づいた。

「わたくしの料理が劇物ですって？」

オルコットさんは、自分の料理が上手いと信じて疑わない。私の言葉は、彼女にとって侮辱に他ならなかった（そんな気はこれぼつちもないのだが。）しかも侮辱した相手が私とあって、怒りも二倍だ。「あ、いや、あの……そのですね……」

私は鈴たちに助けを求める。だが、みんな首を横に振るばかり。事情を知らないデユノアくんだけが、にこやかな表情を浮かべている。こうやって、みんなで食事できるのが嬉しいのだろうか。なんであれ、楽しそうで何よりである。私はこれから死ぬかもしれないので、ちつとも楽しくないが。

「劇物なんて冗談ですよ、フフ。美味しそうですね、——いただきませう」

観念した私は普通のサンドイッチであることを祈りながら口に入れる。

しかし、祈り虚しく、噛みしめた口内を未知の味が支配した。

味の要素は、甘味、辛味、酸味、苦味、旨味であるけど、そのいずれにも属さない味わいは、いうなれば闇味^{やみ}だった。食べたことないけど、暗黒物質^{ダークマター}に味があつたら、こんな味がするかもしれない。

「これは、ひどい……」

結局、私はそのまずさに耐えきれず、ややして意識を失った。



気づくと、私は真っ白な花畑に立っていた。視界を埋め尽くす、穢れ無き純白の花弁たちは、この世のモノとは思えない美しさを讃えている。そんな美しい景色の中で、一人の少女が私に微笑んでいた。

淡い桜色の髪に、愛らしくも賢さを宿したサファイアアイ。手には小さな本。

そのちいさな本が聖書だと判ったのは、私が彼女を知っていたからだ。

「エイミー……」

死んだ友人との再会に、私はその場から駆け出していた。

ずっと会いたかったのだ。会って、話がしたかった。——そんな私に、エイミーが持っていた聖書を振りかぶる。

「そいやッー！」

つて、え、投げるですか！

命中した聖書に、「ぎゃふ」と思わず涙ぐむ私。視界の端では、エイミーが優しく手を振っていた。

まだこつちに来るのは早い。自分の世界に戻れ。そういうように。

——ああ、あなたに謝りたいことがあったのに……。

その願い虚しく、私はエイミーに追い返される形で、この世界から去った。



「あ、気が付いた？」

私が死の淵から生還すると、デュノアくんが私の顔を覗き込んでいた。

後頭部には柔らかい感触。彼が私を膝枕してくれているらしい。どうやら、意識を失った私を、デュノアくんが介抱していてくれるようだ。その事実気づいた私は慌てて体を起こした。

「あ、すみません。手を煩わせてしまったようで」

「そんなことないよ。むしろ、リデルさんみたいな綺麗な女性を介抱できて得した気分さ」

さすがフランスの貴公子。口が上手い。でも、彼の甘言に反応したのは鈴だった。

「なになに、デュノア、甘い言葉はいちやって、こいつに気でもあんの？」

鈴は日頃から私に“恋人を作れ”とうるさい。だからなのだろう。デュノアくんの甘いセリフを聞いた鈴は、私たちの間に嬉々と割り込んできた。

この思いかげない鈴の行動に、デュノアくんが「わっ」と驚く。その拍子に持っていたコップからお茶が宙を舞った。綺麗な放物線を描くお茶。それを頭から被った私はずぶ濡れとなった。

「ああ、ごめんね、リデルさんッ！」

デュノアくんが慌ててハンカチを取り出し、濡れた私を拭く。

透けたシャツの上から。私の胸を。ふにふにと。私はバカみたいになくなった。

「だ、大丈夫ですきやら。しよこは、び、敏感なところでもありません……」

ダメだ。恥かしすぎて、呂律が回らない。

「でも、ちゃんと拭かないと染みになっちゃうから」

わざとなのか。それとも天然なのか。なおも私の胸を熱心に拭くデュノアくん。

私が羞恥心を超え、得体のしれない新境地を開きかけそうになっていると、箒が助け舟を出してくれた。

「ごほん、デュノア、そこはアリスの胸だぞ」

「え？……あッ！」

篠ノ之さんに指摘され、デュノアくんは慌てて私から手を放した。

「ごめんね、ごめんね、わざとじゃないんだ！」

そう、何度も謝罪するデュノアくんの横腹を、鈴が肘でつつく。

「やるわね、このすけべ。——で、アリスのおっぱい揉んだ感想は」

「え、ごぶりだけど、とても、やわらかかった、よ？ ——って何を言わ

すの、鳳さん！」

「だってさ、アリス」

「ぐすん、もうお嫁にいけません」

私は両手で顔を覆い泣くマネをする。そんな私の背を擦りながら、篠ノ之さんが言う。

「嫁に行けぬとは、一大事だな。ちゃんと責任を取れるのか、デュノア」

「せ、責任!?!」

「取れないなら事案発生ですわね。でも安心してください、アリスさ

ん。わたくしの知り合いに、この手の案件を得意とする弁護士がおりますわ。ええ、大丈夫です、女性の弁護士ですから」

「弁護士!？」

「きつと乙女を辱めた罪で、デユノアは全員にフレンチフルコースの刑ね」

「全員にフレンチフルコースの刑!？」ど、どうしよう、一夏!？」

「落ち着け、それ、大した刑じゃないから。というか、おまえら、あんまりシヤルルをいじめんな」

狼狽えるデユノアくんを見てケラケラ笑う私たちを、一夏が半眼で諫める。

その様子を見て、ようやく冗談だと気付いたデユノアくんが胸をホツと撫で下ろした。

「なんだ、冗談だったんだ……、びつくりしたよ」

「すみません。反応がおもしろかったのでつい」

「だが、女性の胸をさわったのだから、これぐらいは当然の報いだろ」と、篠ノ之さんが代わりのお茶をデユノアくんに渡す。私にもお茶を渡してくれる。

それから、しばらく食後の団欒を楽しんだあと、鈴が思い出したように、あの事にふれた。

「そーいやさ、あんた、専用機持っていたのよね?」

鈴がお茶をすすりながら、私を見る。一夏と篠ノ之さんも私を見る。

オルコットさんはスッと目を鋭くした。

「わたくしも詳しく知りたいですわ。——本来、専用機持ちになるには、A以上の適正と100時間以上の稼働時間が必要ですわ。アリスさんには、その資格がおりじゃないでしょう?」

「いえ。私はその条件を満たしています。ただ——」私は言葉を詰まらせ「ただ、人前で専用機を使えない事情がありました」

「あら、一体、どんな事情がおりだったのかしら。教えて下さらなくって?」

「すみません。それは言えないんです」

知りたい箇所を誤魔化されて、オルコットさんが更に視線を強める。

反対に擁護してくれたのは一夏と鈴だった。

「まあ、セシリア。そう、問い詰めてやるなって」

「ですが、一夏さんだって、知りたいでしょ？ 彼女が何者なのか」

「確かに訊きたい事はたくさんある。でも、アリスにもいろいろ事情があるんだろ？」

「ええ、詳しくは話せませんが」

「ほら。それに俺たちはアリスにどういう事情があるかなんて、どうでもいいんだ。たとえば、どんな理由があっても、アリスはアリスだと思うからさ」

「あたしも一緒。だから、あんたが何者かは訊かない。でも、ひとつだけ言いたいことがあるの」

一夏と鈴は顔を合わせ、優しい笑顔で言った。

「助けてくれてありがとうな、アリス」

「ありがとう。あんたのおかげで、あたしはまた一夏とこうやって一緒にいられる」

告げられた真っ直ぐな感謝に、私はうまく言葉を紡ぎ出せなくなつた。

多くを語れない私に、“あなたはあなただから”と言ってくれたこと。

その信頼が、とてもうれしくて。

「……………こちらこそ、その、こんな私を信じてくれて、ありがとうござい
ます」

辛うじて絞り出した言葉は、ほとんど涙声だった。

そんな私を、鈴がカラカラと笑う。

「なに泣いてんのよ。あんたは、信頼に足るだけのことをしてきたのよ。当然じゃない。——で、あんた、実際どれくらいISに乗ってるの？ あの操縦を見る限りだと長いでしょう？」

鈴の軽い対応に感謝しながら、私は正直に答えた。

「そうですね、1800時間ぐらいでしょうか」

『ぶっ』

お茶を噴出したのは一夏と篠ノ之だった。

ふたりには30時間って言っていましたからね。

「1800……。60倍だな……。どこでそんなに?」

「実はアメリカの空軍にいた経歴がありまして。もう除隊した身ですが、その第6 I S 航空団特務小隊という部隊で、2年ほど経験を積んでいました」

「第6 I S 航空団特務小隊ですって……」

当然、オルコットさんが蒼い目を見開いて、驚愕をあらわにした。

「なんだ、セシリア、その I S なら小隊っての知ってんのか?」

「はい。主に試験評価やアグレッサラーなどを行っている部隊ですわ」

「アグレッサラーって?」

「部隊に戦い方を教導する人。要するに、プロを訓練するプロたちだよ。僕たち代表候補生も実戦的な技術を身に付けるために、そういう人たちを雇ったりするよ」

「プロを訓練するプロか。どうりで教えるのが上手いはずだよな」

一夏と篠ノ之さんは、すこぶる納得した様子でうんうんと頷いた。

「それにしてもオルコットさんは、私のいた部隊に詳しいですね」

「実はわたくしの知り合いだった者が、かつてその小隊に所属していましたの」

だった。過去形。おそらく、その人物は故人なのだろう。

だから、判ってしまった。それが誰なのか。

(エイミー……)

まさか、オルコットさんがエイミーと知り合いだったなんて。

エイミーもオルコットさんと同じ越境鉄道の事故で両親を亡くしていたけど、同じ被害者という境遇から、二人は知り合ったのだろうか。

そんなことを薄ら考えていたら、一夏が真剣な眼差しで私を見つめてきた。

「どうしました?」

「いや、そのだな、実はお前の实力を見込んで、お願いがあるんだ」

「なんです?」

「アリス、もう一度、俺を鍛えてくれないか?」

姿勢を改め、深々と頭を下げる一夏に、私は優しく返事した。

「お断りします」

「え?」

「却下、拒否、不採用、です。済し崩し的にコーチを増やすのはよくないって知ってるでしょ? あなたに、既に何人のもものコーチがいるではないですか」

「でも、知ってるだろ、あいつ等の教え方が“あれ”で“それ”なのは……」

あやふやな言い方だったけど、言いたい事は伝わった。

彼女たちの教え方は『ぐおんとやれ』とか、『感覚よ、感覚』とか、『その角度は38度を意識して』とか、超抽象的か、超具体的なのだ。教えようという熱意は伝わってくるのだが、教わる側は理解に苦しんでならない。

そのせいか、このところ、彼の勝率は伸び悩んでいた。

それに襲撃の時、鈴を守れなかった一夏は、今まで以上に「強くなりたい」と思っている。代表候補生に勝利させた私に、再びコーチを依頼したい気持ちはわからないでもない。わからなくもないけど、篠ノ之さんたちの恋路を妨害してしまうのは避けたいし、何より私にはVTシステム捜査の任務がある。

さてどうしましょうか

私が悩んでいると、意外な人物が解決案を提示してくれた。

「じゃあ、リデルさんに代わって、僕がそのコーチ役に立候補してもいいかな? 僕、こう見えてフランスの代表候補生なんだ。専用機もあるし」

デユノアくんは首から鷲を模ったペンダントを取り出し、それを見せた。

名案ですね。女の私より、男である彼の方がいろいろと融通が利くし。

「どうかな?」

「ほんとうか！ 助かるぜ、シャルル！」

一夏は、感謝の意を込めてデユノア君の手を握った。

その時の篠ノ之さんたちの表情は……嫉妬とも安心とも取れない複雑な顔だったけど。

「じゃあ、まず試験期間として一週間コーチするよ。ダメだったら解雇して」

「おう、わかった。じゃあ今日の放課後からたのむ」

話がまとまったようなので、なによりです。あとはデユノア君が教え上手である事を願おう。

さて、海から吹きつける風が眠気を誘ってくるが、ウトウトはしてられない。もうじき午後の授業が始まる。

第22話 本日は突風 時々雨なり

ハワイ州ヒツカム米空軍基地。真珠湾の南東に位置するこの基地に、一機のISが降り立った。

抑制された灰色。右肩の武装支持架にアサルトカノン。両膝に50口径のアサルトカービン。その中でも目を引いたのは、操縦者のスーツに張られた弓矢を構えた女戦士のエンブレム。それは第6IS航空団特務小隊のエンブレムであった。

「おーい、帰ったぞー」

トップガンの『Dangerzone』をBGMに、帰宅した亭主のような口ぶりで帰還したのは、イーリス・コーリング曹長だ。ショートヘヤーに、マツシブな体軀。どこか野生味を感じさせる女性だ。

彼女はIS——アメリカ製第二世代型IS<ヴァンガード>をハングアーに預け、やってきた整備兵に口頭で指示したあと、弾薬コンテナの上にドカツと座った。

「おつかれさま、イーリ」

簡易な休憩を取る彼女の元に、同じくISスーツを纏った女性がやってくる。

艶やかな金色の長髪。長身スレンダーな体つき。イーリスにはない、気品を感じさせる美女だ。

彼女は労いと共に給水パックをイーリスへ差し出した。

「おう、ナタルか、サンキュー」

イーリスは、ナタルと呼んだ女性から給水パックを受け取り、それを頭から被った。

頭皮がきゅんと冷え、汗が引いていく。それがたまらなく気持ちよかった。

「で、どうだった、新型<ヴァンガード>の着心地は？」

気持ちよさそうに前髪を拭ったイーリスに、ナタルが訊いた。

<ヴァンガード>とは、現在世界シェア1位を誇っているアメリカの第二世代型ISだ。彼女はそのアドバンス機の評価試験を終え、帰

還してきたところだった。

「初期型に比べれば、操作性は格段によくなった。反応も悪くない。いい仕上がりだ」

この〈ヴァンガード〉は高い性能を有する反面、扱いが難しく、縦者に相応の技術と知識を要求する。そこで改良されたのが、イーリスが試験評価していたA1型だった。

「で、そっちはどうなんだよ、例の第三世代型、〈エンジェル計画〉の「ああ、〈銀の福音〉のこと？」

「そう、それだ。仮想オペレーションで最高スコアを叩き出したんだろ？」

「うふふ、そうね。機密事項だから詳しく話せないけど、いいわよ、すごく♡」

まるで恋人との甘い一時を語るように、ナタルは頬を赤めた。

上官を虜にするそんなISに興味を引かれたのか、イーリスがさらに身を乗り出した。

「やっぱり例の新型スラスターか！ 試験機の段階で化け物スペックだったもんな！」

「いえ、機体性能がどうかではなく、あれに乗っていると、どこまでも飛んで行けるって気分になれるの。きつと相性が良いのね。今までいろいろなISに乗ってきたけど、〈銀の福音〉ほど一体感を感じられた機体は無いわ」

長年ISに乗っていると、時より全能感にも似た一体感を感じる事がある。

これを《セカンドフォームシフト第二形態移行》の予兆ではないかという技術者もいるが、真相は定かではない。ただ、この感覚を味わい続けた操縦者は口を揃えこういう。——『これだからIS乗りはやめられない』と。

「相性か。確かに相性は大事だな。ISも、男も」

熱を帯びた言葉に共感できるものがあつたのか、イーリスも頻りに頷いていた。

「しつつかし、いいよな。アタシもはやく第三世代型に乗りてなあー。早く〈フアング・クエイク〉〈ロールアウト〉しねえかなあ」

コンテナの上でバタバタと足をばたつかせるイーリスに、ナタルが言う。

「そういえば、遅れているそうね、＜フアング・クエイク＞の開発」
「そうなんだよ。きつと海軍の嫌がらせを受けてんだな。じやなきや海兵隊だ」

米軍の『陸軍』『海軍』『空軍』『海兵隊』は軒並み仲が悪い。特にIS登場以降、空軍が予算を独占するようになってからは余計だ。それはもう酒場で鉢合せすれば、乱闘騒ぎになるほどである。

イーリスが怒り余って拳を握ると、ブシユつと掌中にあつた水のパックが破裂した。

そんな時である。ひとりの下士官がこちらに駆け寄ってきた。

「ナターシャ・ファイルス少尉、ここにおられたのですか。貴女に客人ですって」

若い下士官が連れてきたのは、セミロングのブルネットの髪をした女性だった。

年は18ぐらいだろうか。顔立ちも綺麗だ。クラシカルなメイド服に身を包み、頭部をカチューシャで装飾していた。その服装から察するに、軍関係者や観光客の類ではなさそうだ。

『なんだ。アキバからの使者か』と言うイーリスを無視し、ナターシャがメイドに尋ねた。

「どちらさまかしら」

メイドは優雅な動作で恭しく頭を垂れた。

「わたくしはチエルシー・ブランケットと申します。オルコット家の使いで参りました」

オルコット。ナターシャはその名に聞き覚えがあつた。確かヨーロッパ方面にいくつもの企業を傘下に持つ英国の大資本家だつたはず。そのオルコット家の使いが、こんな場所に何の用だろうか。

「名家のメイドが、私たち軍人に何のようかしら？」

「実は、ある少女について、お尋ねしたい事があります」

そう言つてチエルシーは、鞆から一枚の写真を取り出す。

写真には、IS学園の制服を着た紅髪碧眼の少女——アリス・リデ

ルが写っていた。



「一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、戦術が単調化しているからだよ」

第二アリーナ。

シャルルとの模擬戦を終えたあと、俺は彼からIS戦闘に関する指導を受けていた。

その内容は、俺の戦術に関する認識の改めと、その対応策についてだ。

「模擬戦して判ったんだけど、一夏はすぐに瞬時加速を使ったがる傾向があるね。安易な突撃が多すぎるよ。もしかして『白式』はエネルギー消費が大きい機体だから、早く決めなきゃ』っていう焦りとかある?」

「ああ、あるわ。後半になるほど不利になる機体だからな。勝ち急いでいるのかもしれない」

「たぶん、それが安易な突撃戦法につながっているんだと思う。今の一夏に必要なのは、余裕を持って試合を運ぶことかな。そして戦術をもっと複雑化することだと思う」

確かにワンパターンな突撃戦法で生き残れるほど、ISバトルは甘くない。それは代表候補生たちと山田先生の模擬戦で証明されている。

しかしながら、シャルルは本当に教え方がうまいな。的確に問題点を指摘してくれるし、その解決策も指導してくれるから、向上している実感がすごいのだ。アリスの再来と言ってもいいぐらいに。

(それに引き換え……)

俺は解説の傍ら、チラリと前コーチたちを盗み見る。

プレゼント作戦が功を奏したのか、箒と鈴は上機嫌な様子で、談笑していた。ただ、セシリアだけは『ブルー・ティアーズ』でアリスを

追いかけて回していた。〈白式〉の集音機能で盗み聞くと『さあ、わたしと決闘なさい』とか、言っている。

(そういや、セシリアの奴、前にも増してアリスに突つかかっているんだよね)

箒の話だと、部屋にまで押しかけているらしい。

まあ、セシリア、アリスをストーカーするのはいいが、あまりイジメるなよ。イジメていいのは俺だけなんだからな。

「——って、一夏、ちゃんと僕の話、聞いている？」

おっと、シャルル先生のお叱りを受けてしまった。

俺は意識を、〈赤騎士〉の反撃を受けて追いかけて回されるセシリアからシャルルに移した。

「もちろん聞いているぞ。で、何の話だ？」

「もう……。あのね、一夏の〈白式〉って後付装備がないんだよね？」

後付装備の話か。そう、シャルルの言うとおり、〈白式〉には後付装備がない。

というか、〈白式〉は装備を追加できない仕様になっている。

「そうなんだ。なんでも『雪片式型』のモジュールに全部の拡張領域を使っているみたいだし」

「『雪片式型』のモジュール？」

「千冬姉が言うに、ISのエネルギーを『エネルギーを消滅させるエネルギー』に変換する装置らしい。それで、その変換したエネルギーを放出するデバイスが『雪片式型』なんだ。んで、その出力を格段に上げるのが『零落白夜』らしい」

「そっか。武器を追加できないなら、操縦技術で対処するしかないね」
シャルルはピアニストのような指を顎にあて、しばらく黙考した。

「じゃあ、まず対射撃戦の技術を身につけようか。これを習得できれば戦術の幅も広がるし」

「そうだな。で、何をすればいいんだ？」

「まず、実際に射撃を行って、その特性を肌で感じてみようか」

「まず敵を知る。ってことだな。でも、〈白式〉には銃が一丁もな
くわ。」

「なら、僕の装備を使うといいよ」

そう言つて、シャルルが専用機の武装リストをく白式>に転送してくる。

転送されてきたリストには、20個近い武器の名称が書き連ねてあつた。

「多いな!? これ全部、専用機の武器なのか!」

本来、ISに追加できる武装の数は3つか4つ。機種にも依るけど、大体それぐらい。

シャルルの20個という数は並みならぬ多さだ。

「僕の専用機はカスタマイズしてあつて、通常のくラファール・リヴァイヴ>より積載量ベイロードが多く確保されているんだ」

シャルルの専用機はくラファール・リヴァイヴ・カスタムII>と
いって、シャルル用にチューンナップしたくラファール・リヴァイヴ
>の改良型だそうだ。外観はオリジナルよりシャープで、カラーリン
グもモスグリーンではなくネイビーオレンジだ。

「でも、この武器数を実現するために、基本装備プリセットや電子兵装アサエオニクスをいくつも犠牲にしちやつているから、それ以外の強みはないんだけどね。——
どう、決まつた?」

「いや、わりー、まだだ」

俺は渡された武器リストをスライドして、銃器選びに専念した。

それにしても種類が多いから、選ぶのも一苦労だ。悩み抜いた結果、無難にアサルトライフルをチョイスした。それをシャルルから受け取り、TVで見た特殊部隊の見よう見まねで構えてみる。

「構えはこんな感じでいいか?」

「うん。でも、脇はもつとしめた方がいいよ」

と、シャルルが正しい銃の構え方を教えるため、俺に肌を密着させる。

それを見た周囲の女子から黄色い声飛び交つた。

「きゃー見て、二人が身体を密着させてる!」「織斑君は受け、それも総受け!」「デュノアくんの鬼畜責めとかっ! 私得ッ」「あれ、絶対入っているよねッ」

入ってねーから、お前ら頬を赤めてないで、さっさと訓練に戻れ。それと、ペンを走らせている、その君。ネタ帳と書かれたそれをあとで燃やしておくように！」

「ったく、これが数馬の言っていた腐女子ってやつか」

俺は気を取り直してアサルトライフルを構えた。安全装置を解除し、初弾を装填する。シャルルの誘導に従いつつ、展開されたARターゲットに銃口を向け、いざ銃爪を絞ろうとした——そのときだ。

「うそっ、あれってドイツの第三世代型!？」

「え、本国でまだ試験段階で聞いていたけど!？」

最初は、また例の井戸端会議だと、無視を決めようとした。

だが、できなかつた。

驚く彼女たちの先に——ドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒがいたからだ。

その彼女が黒いISを展開し、こちらに鋭い視線を送ってきていた。そう、こちらに。

「おい」

冷たい一言。たった一言で場が凍りつく。

だが、怯んでもいられない。俺はアサルトライフルを下し、ラウラと対峙した。

「なんだよ。いま訓練中なんだが?」

「お前も専用機持ちだそうだな? なら、話は早い。私と戦え」

あいさつも無しに戦えとききたか。一発殴られた後だから、いまさら驚きはしないが。

だからといって、戦う気にはならない。俺はラウラの申し出を淡白に断った。

「悪いが、模擬戦の相手が欲しいなら他をあたってくれ」

「なんだ、私と戦うのが怖いのか、この腰抜け」

「そんな安い挑発には乗らねえよ」

「そうか。ならば、こう言ってやろう。『貴様の所為で、私の敬愛する教官はヘモンド・グロツソで二連覇を成し遂げられなかった。その無念を教官に代わって晴らさせろ』とな」

「……………」

その言葉に、2年前の忌々しい記憶が脳裏に蘇る。

忘れもしない。あれは千冬姉の二連覇があったヘモンド・グロツソンの決勝戦の日のことだ。

その日、俺は姉の勇姿を観戦しようとして会場に向かっていた。その途中、何者かに誘拐されたのだ。その俺を助けに来てくれたのが、決勝戦を放棄してやって来た千冬姉だった。

俺は千冬姉によって無事救助されたが、千冬姉の方はそうもいかなかった。

千冬姉の試合放棄という行為がファンや関係者の怒りを買ったのだ。

その後、帰国した千冬姉に送られたのは『日本の恥』だの『よく日本に帰ってこられたな』とかいう、心無い誹謗中傷の嵐。メディアも、千冬姉の不戦敗を面白おかしく囃し立てた。

ラウラは、敬愛する千冬姉をそんな目に遭わした俺が憎いのだろう。

俺の中にあつた疑問がひとつ氷解したが、それでも俺はラウラの要求を突き返した。

「悪いが、それでもおまえとは戦わない。おまえと戦っても千冬姉への償いにならないし、おまえが俺を倒したところで、千冬姉の無念が晴れる訳じゃないだろう？」

「ふん、詭弁だな。お前はそう言って、自らの罪から目を逸らそうとしているだけだ」

俺の頭に血が滾った。

俺が罪から目を背けようとしているだと？ 勝手な事いいやがって！

「知った口をきくな。てめえは、俺がどれだけ償いの方法を探してきたか知ってるのか！」

「そういう言い訳がましい物言いが詭弁だと言っているのだ。——もう御託はいいだろう」

まるで痺れを切らしたように、ラウラのISの装備——大型のレー

ルがこちらを向いた。

「私と、この〈シユヴァルツエア・レーゲン〉が貴様を裁いてやる」
言うが早く、砲身に凄まじい電光が迸り、極音速の砲弾が放たれた。
俺は何もできず、咄嗟に目を逸らす。

しかし、いくら待てども衝撃は訪れない。不審に思い、逸らした視線を戻すと、

「聞き捨てならないですね、今の言葉」

アリスがビットのシールドでラウラの攻撃を防いでいた。



「聞き捨てならないですね、いまの言葉」

私は展開していた《シユナイダー》を〈赤騎士〉に戻し、一夏の前へ降り立った。

「一夏を裁く？ バカを言う。全ての元凶は、一夏を誘拐し、千冬さんを陥れた誘拐犯です。あなたが本当に裁かなければならない相手は彼らのはずです。あなたがしようとしている事は、断罪でもなければ、制裁でもありません。——それでも一夏に罰を与えたいと言うなら、私を倒してからにしてください」
「ふん、いいだろう。私の邪魔をするなら、まず貴様から排除してやる」

ラウラの挑戦的な視線に、私は内心でほくそ笑んだ。——乗ってきた、と。

実習での言動から、ラウラが再び一夏を攻撃してくる事態は予想できていた。

そこで一夏をエサに「釣り」をさせてもらったのだが、こうもあっさり釣れるとは。これどうまくいけば、VTシステムの有無について何か情報が得られるかもしれない。もちろん、相手はドイツの代表候補生、リスクはある。でも、虎穴に入らずんば子虎は得ずってね。

「ヘレツドクイーン」、訓練用プログラムを全て凍結。モードミリタ

リー」

《Yes My Honey——訓練用プログラム凍結。制御リミッター解除。戦闘モード》

戦闘準備を整えた私は、改めて<シュヴァルツエア・レーゲン>を観察した。

<シュヴァルツエア・レーゲン>は、私から見て右側に備えられた大型カノンが印象的なISだった。それを支えるドラム缶状の非固定浮遊部位には6機のブレード。腕部にも何かの出力口が見える。

あとは<シュヴァルツエア・レーゲン>の第三世代兵器だが、外観からでは確認できない。

それを確かめるため、私は肩部の武装支持架ハートポイントから山田戦で損傷した《ヴォーパル》を外し、投擲した。

「無駄だ」

ラウラは避ける素振りさえ見せず、ただ淡白な一言と共に右手をかざす。

瞬間、まるで時間が凍結したかのように、投擲した《ヴォーパル》が急停止した。

「AIC。やはり、積んでいましたか」

Active Inertial Canceller。物体の慣性を相殺する、対外的慣性制御装置だ。

それが<シュヴァルツエア・レーゲン>の第三世代兵器。

あれの前では銃弾はもちろん、運動エネルギー兵器の類は全て無力化される。が、

「レットクイーン、得物が食いつきましたよ」

《Yes My Honey——イグニツション!》

<レットクイーン>が叫んだ瞬間、AICの掌中にあつた《ヴァーパル》が突如爆発した。

《ヴォーパル》にあらかじめ高性能爆薬を仕込んでおいたのだ。

「小癩なマネをッ」

ラウラは目じりを吊り上げ、爆風から逃れようとするが、——遅い。回避より早く、灼熱の炎が<シュヴァルツエア・レーゲン>を抱擁

するように包み込んだ。

「予想通りです」

A I Cは運動エネルギー兵器に対して反則的な能力を発揮する。だが、化学エネルギー兵器の類は防御できないようだ。要するに、銃弾では歯が立たないが、ロケット弾やミサイルならA I Cを看破できる。

「やってくれる……」

爆風が霧散し、視界が晴れると、ラウラの<シュヴァルツエア・レーゲン>が姿を現した。

装甲が黒いため判りづらいが、損傷具合は軽微だろう。それで十分だった。

私は折った膝を勢いよく伸ばし跳躍。爆破の余波で生まれたスキを突いて、ラウラに迫撃をかけた。

「ふんっ！」

振りかざした一撃を、ラウラは腕部に装備されたプラズマブレードで打ち払った。

私は続けざまに斬撃を打ち込む。一呼吸に一回、一呼吸に二回、一呼吸に三回。さらに残滓を残す速力を剣に与え、狡猾なフェイントをいくつも織り交ぜる。

だが、ラウラは的確にそれをいなす。

私は舌を巻いた。ドイツの特殊部隊を率いるだけはある。動きの一つ一つが合理的で無駄がない。また、その動きに追従できる<シュヴァルツエア・レーゲン>の性能も侮れなかった。

「やりますね。正直、驚きました。見事なものです」

「おまえこそ。私と格闘戦グランプリングできる奴がココにいるとはな。貴様、私と同じ臭いがするぞ」

「かくいう私も戦場で育ちましたからね。ブラより銃の方が付き合いは長いです」

「道理でそこらの温室育ちとは違うわけだ。——だが、まだ甘い！」

ラウラが放った上段の回し蹴りが、側頭部に迫る。それを屈んで躲すと、そのスキに距離を取ったラウラが、非固定浮遊部位からワイ

ヤーブレードを射出した。それが、まるで地を這う蛇のように迫ってくる。

数は4基。私は怯まず対応した。

「ヘレッドクイーン」、《シユナイダー》カウンタリリース！」

《Yes My Honey—Off with her head!!》

ヘレッドクイーンへの射出したソードビットが、ワイヤーブレードを迎撃する。

衝突。互いを切り裂き合い、撃墜し合った下僕たちの合戦は痛み分けとなったが——

《接近警報。ハニー、下方!》

「下方!?!」

私が意識を下方に向けた瞬間、地中から2基のワイヤーブレードが飛び出してきた。

しまった。初撃の4本は陽動で、地中から飛び出してきた二本が本命か!

「足許がお留守だぞっ!」

私の失態を嗤うように、ワイヤーブレードがく赤騎士への両脚部を捕える。ラウラは嬉々としてワイヤーブレードを巻き取った。磁石のように引き合う私とラウラ。距離が縮まったところでラウラがAICを発動した。

「ようやく捕まえたぞッ。これは手間を掛けさせてくれた礼だ!」

身動きが取れなくなつた私に、ラウラがくシユヴァルツエア・レーゲンへの非固定浮遊部位に接続された大型の砲門^{レール}を向けた。その二枚の板の間に、凄まじい電光が奔る。

(まずい、レールガン!?)

レールガンは、電磁場を用いて極音速の砲弾を打ち出す兵器だ。弾丸速度は初速マッハ7。それをこの至近距離から喰らうのはまずい! だが、AICの檻^{ワンオフアビリティ}については回避行動も……ッ。

(しかたない、単一仕様能力を——)

私は惜しんでいた切り札の行使を決断した——その時だ。

「クリアバツシヨン
「清き熱情」

突如、起こった凄まじい爆発で、私たちはアリーナの壁に勢いよく叩きつけられた。

衝撃で肺から空気が抜け、意識が遠のく。私は頭を振って何とか意識を繋ぎとめた。

「れ、ヘレツドクイーン、今の爆発は一体……？」

《戦闘開始以前より湿度が高くなっている。何かしらの手段で空気中の水分子を超振動させ、生じた熱エネルギーで爆発を発生させたものと思われる》

「……まさか《清き熱情》!?!」

これを可能とするISには心当たりがあつた

あれは遡ること約4ヶ月前の事だ。

その時、私はある作戦のためイランにいた。そこでロシアの代表『ソフィア・カトウリスキー・アルジャンニコフ』が駆る第三世代型IS（グストロイ・トゥマン・モスクヴェ）<モスクワの深い霧>というISと遭遇戦をしたのだが、このIS（グストロイ・トゥマン・モスクヴェ）<モスクワの深い霧>が先のような爆発現象を発生させることができた。

（もしや彼女がここに?）

交戦した私は、彼女のISとその<コア>を再起不能にしている。

その後、風の便りによれば、『ソフィア・アルジャンニコフ』はこの責任を取るため、代表候補生の座を辞任せざるを得なくなつたらしい。そのため、私を酷く恨んでいるとか。

（まさか、私に復讐しに?）

私は冷汗を浮かべ、ハイパーセンサーを広域索敵モードに切り替える。

アクティブレーダーが新型の機影ISを捉えた。

透き通った装甲と菱形の立体クリスタル。手には円錐状の突撃槍と、いくつかの刃節から成る蛇腹剣。所々異なる点はあるが、そのISは<モスクワの深い霧>に酷似していた。

「……………」

私は息を呑む。だが、私の予想は良い意味で裏切られた。

「こんな風にアリーナを使われたんじゃ、お姉さん、黙っていられないなあ」

流暢な日本語だった。しかも、柔らかな口調。ソフィアとは似ても似つかない。

でも、目の前にいる I S は、間違いなく彼女の専用機グストーイ・トゥマン・モスクヴェ <モスクワの深い霧>。

一体どういう事でしょう？ 私は確かめるため、操縦者に尋ねた。

「あなたは？」

「あら、I S 学園の生徒たる者が私を知らないなんてね。いいわ、教えてあげる」

芝居がかった物腰と、一世代前のヒーロー番組のような台詞で、その生徒はこう告げた。

「私は I S 学園生徒会のその長、人呼んで更識楯無よ！」

名乗って取り出した扇子をバンツと広げる。そこには『見参』の文字。

「さて、これ以上続けるなら、お姉さんが相手をしてあげるわ。さあ、かかってらっしゃい！」

扇子を閉じ、その先を私に突きつける。同時に彼女の周囲を漂うクリスタルから水が溢れ出し、ドレスのように彼女を覆った。その姿は水の妖精『ウンディーネ』のようだ。

「いえ、降参します」

ばつちし臨戦態勢に入った生徒会長に向かって、私は無条件降伏した。

相手は生徒会長だ。そんな人に喧嘩を売るほど、私はやんちゃじゃない。肩透かしを受けた生徒会長が、ガクつと立ったとしても知った事ではなかった。

ラウラも〈生徒会〉を敵に回すつもりはないらしく、舌打ちして臨戦状態を解除していた。

「邪魔が入ったな」

興が逸れた。態度でそう告げ、ラウラは私に背を向けた。

「あら、ちゃんとこうなった経緯を説明してもらいたいんだけど？」

「話ならその女にでも訊け」

事情の説明を私に丸投げして、ラウラがアリーナから去っていく。

その時、ラウラと一夏の視線が交叉したように感じられたが、私はそれどころじゃなかった。

「じゃあ、そのあなた、事情聴取として生徒会室までご同行願えるかしら」

私は怪訝な顔をする。

確かに訓練用リミッターを解除して戦闘したけど、連行されるほどの事じゃない。

でも、今は逆らわないのが吉だろう。そう判断し、私は『わかりました』と素直に答えた。

第23話 チェシヤ猫が笑う

生徒会。一般的にそう言えば、学校行事を取り仕切ったりする組織であるが、IS学園の〈生徒会〉はちよつと事情が違う。その理由の一つに、学園の立場上の問題があった。

パワーポリティクスで動く現代社会において、軍事力を左右するISは重要な外交カードだ。

当然ながら、それを扱う本校生徒の重要性は高い。過去には、彼女たちを狙って偽装入学してきた工作員が摘発された事例もある。(かくいう私が、そのいい例だ)。

しかし、IS学園はある種の治外法権地区なので、国家の保安組織に頼れない。

そこで発足されたのが、この〈生徒会〉だ。彼らは学園の自警団と防諜を担い、さらには疑似的な警察権さえ有している。逆らえば、公務執行妨害(的なもの)になる。私が素直に従った理由のひとつだ。

さて、長くなってしまったが、私は今そんな組織の中枢に案内、もとい連行されていた。

「どうぞ、入って」

生徒会長に促され、生徒会室に入る。

内装はいたってシンプルだった。事務デスクが六つと、資料を収めたアルミ製の棚があるだけ。

あとは液晶テレビと最新ゲーム機、ティーセットがいくつか。

ここが学園の自警団〈生徒会〉の本部？ どうみても、ただのオフィスにしか見えない。

「思っていたのと違うって顔ね。ここは表の生徒会室よ」

そういうことか。自警団としての仕事をする生徒会室は別にある、と。

「お〜アリスだあー、どしたの?」

私が身近にあった椅子に腰を下ろすと、知った声が聞こえてきた。

間延びしたしゃべり方と、ゆるいこの声は――

「布のほとけ仏さん?」

布仏さんこと、のほとけほんね布仏本音さんは、私のクラスメイトの一人だ。

ぽわぽわした雰囲気の特徴で、人を和ませることから『のほほんさん』と慕われている。

「なぜ布仏さんが生徒会室に？ あ、もしかして、あなたも何かやらかしたのですか？」

「えー、違うよー。わたし〈生徒会〉の一員なんだよー」

「ふふ、面白い冗談ですね。もしかして、またドジして、学校の備品を壊したのですか？」

「いえ、彼女も列記とした〈生徒会〉のメンバーなのよ」

私は椅子から転げ落ちそうになった。

とろくて、いつも眠そうな布仏さんが〈生徒会〉のメンバーですって？

「ほ、本当ですか？」

「本当ですよ。——どうぞ」

私が布仏さんに疑惑の眼差しを向けていると、横から湯のみが差し出された。

『あ、どうも』と、その湯飲みを受け取る。

持て成してくれた人は、眼鏡を掛け、髪を三つ編みにした生徒だ。物腰は『仕事のできる女』といった感じで、知的な雰囲気を漂わせている。リボンが赤色だから、学年は三年生のようだ。

「あなたは？」

「私は布仏のほとけうつほ虚、本音の姉です。以後、お見知りおきを」

布仏虚と名乗った三年生は、雰囲気こそ正反对だが、よく見てみれば、目元や口元に妹と通じるところがあった。それにしても、姉妹の名が虚ウツと本音ホントとは。——いえ、いまはどうでもいいですね。

早く退室したい私は、話を進めた。

「で、なぜ私を生徒会室に？ 事情聴取、というわけではなさそうですか？」

そもそも訓練用リミッターを外して戦闘しただけだ。処罰は嚴重注意ですむ。

この対応には裏があるとみていい。

「ふふ、話が早くて助かるわ。それでさっそくだけど、——あなたへ生徒会〉に入らない？」

生徒会長が『勧誘』という扇子を広げた。

「実は、前々よりあなたに目をつけていたの。僅か稼働時間2時間の少年を、代表候補生に勝たせる指導力。敵の情報を集め、対策を構築する戦術力。大したものね。それを見込んでのことよ。どうかしら？」

一見ただのヘッドハンティングのように思えた。でも、きな臭さが拭えない。何か裏を感じる。あの笑顔の裏側には、何かが陰謀めいた企みがあるようではなかった。

これ以上は関わらない方がいいだろう。そう判断した私はNOと言った。

「お断りします」

「あらそう。残念ね。——でも、あなたにはへ生徒会〉に入ってもらわ。絶対にね」

その言葉に、私の警戒レベルが跳ね上がった。

自然と体に入力する私に、生徒会長がスツと何かを差し出す。一枚の写真だった。

「それはイランで撮影された写真よ」

写真に写っていたのは、<赤騎士>を駆る私の姿だった。イランで撮影されたという事は、例の作戦で撮影されたものだろう。その写真を私に見せて、どうするつもりなのだろうか。どうも嫌な予感がする。

「実は私の知り合いに、その操縦者をすごく憎んでいる人がいてね」

私の眉がピクつと動く。即座にその人物の名前が脳裏に浮かんだ。

彼女が仄めかしている人物は、ロシアの元代表候補生、ソフィア・アルジャンニコフだ。

「もし協力してもらえないなら、その怖いお姉さんに、あなたのこと、教えちゃおうかしら」

私は思わず内心で舌を打った。

ロシアという名詞が出た時から嫌な予感はしていたけど、こんな手

段に訴えてくるとは……。

「生徒の規範となるべき生徒会長が脅迫ですか？」

「悪いとは思っているわ。でもね、お姉さんの住む世界は、きれい事だけじゃ渡っていけないの。——さて、アリスちゃん、私たちと仲良くするか。ソフィアと仲良くするか。二つに一つよ」

生徒会長は、私の皮肉など歯牙にも掛けず『二者択一』と書かれた扇子を広げた。

出来るならソフィアは相手にしたくはない。かといって、この読めない生徒会長に協力するのも控えたいところだが……。

「他に交渉の余地は？」

「ないわ」

「……………5分、考えさせてください」

そう言つて、一時的に生徒会室を退室する。そして、廊下に誰もないことを確認し、＜赤騎士＞を介した衛星通信で、上司であるロリーナに暗号通信を繋いだ。

『あらあら、アリス。どうしたの？ 私が恋しくなったのかしら？』

「面倒な事になりました。実は——」

私は経緯を簡単に説明し、上司に対応を求めた。

『いいんじゃない？』

帰ってきたのは、呆れるほどあつかんとした返答だった。

私は一瞬「はっ？」とまぬけな声を出してしまう。

「いいのですか」

『ええ、〈生徒会〉なんて所詮小さな箱庭の組織でしょ？ できる事なんて高が知れているわ』

「しかし、〈生徒会〉を取り仕切っているのは、あの更識ですよ？」

一般には認識されていないが、更識は日本の対暗部用暗部——現代カウンターインテリジェンスで云う防諜組織だ。

日本は対外諜報機関を持たないと公言しているが、情報を守るための組織は持っている。

『大丈夫よ。例え相手が日本の防諜組織だったとしても、切り札はこちらにあるから』

「切り札？」

『そういう事だから、とりあえず今は相手の要求を受け入れときなさい』

それだけ告げ、ロリーナは通信を切った。

私はしばらく《Offline》と表示されたウィンドウを訝しい目で見つめる。どうにも腑に落ちなかったが、組織の上層部へお茶会へのメンバーであるロリーナがOKを出したのだ、末端の私はそれに従うしかない。

丁度5分後。私が生徒会室に戻ると、生徒会長が得意げな貌で待っていた。

「ふふ、考えはまとまったかしら？」

おおよそ、私がどんな返答をするか予測できているのだろう。

全てを見透かしたような目に苛立ちを覚えながら、私は『呑みます』と了承した。

「じゃあ、交渉成立ね。——虚ちゃん、例のものを」

「はい。では、アリスさん、この書類にサインを」

渡された書類に簡単に目を通す。

契約内容に問題がないことを確認し、私は乱暴に書類へサインした。

「これで満足ですか」

「うんうん、大満足。これであなたも晴れて、生徒会の犬——じゃなくて一員ね」

「今、犬って言いましたよね、犬って！」

確かに私は走狗イヌですが、この人に言われると腹が立つ。私、この人、嫌いです。

「ふふふ、そう怒らないで。それに悪いことばかりじゃないわよ？」

〈生徒会〉に入れば、色んな特権が与えられるわよ。それに虚ちゃんがおいしいお茶とお菓子を用意してくれるわ」

「え♡——いえ、何でもありません……」

私は耳まで真っ赤になって俯く。一瞬でもお菓子に目が眩んだ自分が恥ずかしかった。

お菓子につられるなんて、これじゃ本当に犬じゃないですか……。
「ふふふ、可愛いところあるじゃない。お姉さん、あなたのことが気に入っちゃったわ♡」

「私はすこぶる気に入りますが、一応、よろしくとだけ言っておきます」

「こちらこそ、よろしくね。それでアリスちゃんには、これから二人一組で〈生徒会〉の仕事にあたってもらうから、そのつもりでいてね」
「はいはい、わかりましたよ……。それで私のパートナーというのはやはり？」

「はいはい、わたしだよー」

見当は付いていましたけど、やっぱり布仏さんですか。なんだか不安ですね……。

「本音、迷惑かけないようにね」

「だいじょーぶだよー！」

布仏さんはえっへんと胸を張るが、虚さんは不安そうな顔だ。

その気持ち、すごくわかる。私だって幸先に不安を感じていますから。

「ねーねー、アリスー、コンビ組んだんだし、ニックネームで呼び合おうよー」

「いいですけど、なんでまた急に？」

「本音は、刑事ドラマが好きなんです。それもハードボイルドな」

布仏さんは得意げに指鉄砲を作って「ばきゅん☆」と撃つ真似をした。

虚さんの話によれば、警察のドラマでは、刑事同士がよくニックネームで呼び合うらしい。

「わかりました。では、布仏さんのニックネームは……無難に『のほほん』で」

「うん、いいよー。じゃあ、アリスはぎっちよん、ね。よろしくー、ぎっちよん」

「絶対にいやです。なんですか、ぎっちよんって。訂正を要求します」
私が強く抗議すると、のほほんさんは姉の後ろに隠れた。

そこから半分だけ顔を出して、こちらの様子を伺う。

「だめー。もう決めちゃったもん」

「ぎつちよん、いいニックネームだと思いますよ?」

と、虚さん。私は『どこがですか』と半眼で言い返す。

「さて、ニックネームも決まった事だし、のほほん、ぎつちよん。あなたたちにさっそく仕事よ」

私に変な呼び名にげんなりしていると、椅子に腰掛けていた会長が言った。

その手には、なぜかとても大きなワイングラス。しかも、女性には不釣合いなサングラスまで掛けている。どこかで見たことのある格好だ。誰とは言うまいが。

「ぎつちよん、これを」

ぎつちよんで確定なのか。私は肩を落としながら、虚さんからクリップボードを受け取る。

クリップボードには、知った顔のプロフィールが挟んであった。

「シャルル・デュノア?」

「実はね、彼には性別詐称の疑いがかけられているの」

やっぱりか。私も彼の性別については、怪しいと思っていたけど。

「それで、あなたたちには、その証拠を掴んできてほしいのよ。同じクラスでしょ」

「でも、わざわざ調べる事ですか? 仮に彼が女性だったとしても、それは些細な事でしょ?」

ほぼ全ての個人情報虚偽の私に比べれば、彼の性別詐称なんて可愛らしいものだ。

「そうね。男か女かなんて些細な事だわ。——ここが普通の学校ならね。ここでは性別の違いが、その存在価値を大きく変えてしまうの。あなたもそれを知っているでしょ?」

「それはまあ……」

この学園に於いて性別というものは、適正値以上に重大なファクターだ。

それに些細であつても詐称である事に変わりはない。なら、運営側

——特に学園の治安維持を務めている〈生徒会〉からすれば、何かしらの措置を講ずる必要がある。見逃す事は論外。それは学園の信用問題に関わる。

「わかりました。で、許容範囲は？」

許容範囲。つまりは生徒に対してどこまで行っているのか、という話だ。

「できるなら、強引な手は控えてちょうだい。拉致して、衣服を引剥がすとかはダメ。盗撮とか生徒のプライベートを著しく侵害するのもダメよ。可能な限りソフトなやり方が好ましいわ」

「それって実質、自供しか手がないじゃないですか」

これは難しい。私は口がうまい方じゃないのに。

「それでもないわ。ハニートラップっていう手もあるわよん♡」

ハニートラップ。男性を誘惑して懐柔することだ。

私は一瞬だけデュノア君と肌を重ねる自分を想像してしまった。

『アリス、僕が気持ちよくしてあげるね♡』

デュノア君の甘い声が脳内再生され、私は紅潮を通り越し、のぼせそうになった。

「あなた、可愛いからうまくいくわよ」

「むむむむ、無理ですよ、私、キスもまだなのに……!」

私は悪魔召喚のような怪しい動きをしつつ、目をうずまきのようにグルグル回す。

実のところ、私はそーゆー経験が一切ない。その、処女、なのだ……。

「奇遇ね。実はお姉さんもまだなのよ」

会長は自分の唇に人差し指を当てて、艶やかになぞった。

「お姉さんのファーストキス、奪ってみる？」

「いいません!」

「ふふ、ムキになるところが可愛いわね。このツンデレさんは」

「仮にそうだったとしても、あなたみたいな人には絶対デレませんか。誓っていいです」

「そんなこと言われたら、余計に攻略したくなるわね」

「残念ながら、私は攻略不可です。よってアリスルートもアリスEDも存在しません」

「そう。じゃあ、代わりにソフィアとのBADENDフラグを立てちゃおうかしら」

「ぐすん、会長なんて嫌いです……」

「私は好きよ。あなたの事」

「あの、お二人方、話が脱線し過ぎです。話を戻しますよ」

虚さんが口論する私と会長を窘め、話の路線を戻す。

「ではアリスさん、シャルル・デュノアの件よろしくお願いしますね。あと念のためにコレを」

と、虚さんから渡されたのは、正方形のビニール製品だ。真ん中には『家族作りは計画的に』というメツセージがプリントしてある。これは、もしかしてアレの時に使うゴム製品ですか!?

「なななな、なんでこんな物を私に!」

「もしシャルル・デュノアが真正正銘の男性だった場合、必要になってくるおそれがあります。なんせ、男はみんなオオカミですから。きつとフランスの貴公子と呼ばれている彼も例外ではありません」

「いや、待ってください。私はハニートランプを仕掛けるなんて一言も……」

「そ、そして、終わったたら、ぜひ、感想を聞かせてください!」

虚さんの瞳があまりに真剣だったので、私は何も言えなくなつた。

虚さんってまじめな人だと思っていたけど、やっぱり、そういうところが気になる年頃なのですね。

「じゃあ、今日はこれでお開きにしましょうか」

「じゃあ、失礼します……」

一秒だつてココにいたくなかつた私は、そそくさ荷物をまとめた。

「あら、もう帰っちゃうの……?」

まるで遊びに来た恋人との別れを惜しむような、甘えた口調だつたけれど、私は無視した。

どうせ本心じゃないし、ぐっともこない。きてもこまるけど

「そういうことは、自分の恋人に言ってください」

気力ゲージがゼロだった私は、そそくさ踵を返した。
そんな私の後ろを、のほほんさんが『ぎつちよん、一緒に帰ろー』と
付いてくる。

断る理由もなかったなので、私は彼女と並んで生徒会室を後にした。



「ようやくね」

夕焼け色に染まる時刻。アリスがいなくなった生徒会室で、更識楯
無は一人つぶやいた。

ようやくだ。ようやくあの組織へ近づくための“手掛かり”を手
に入れることができた。

「ヘデウス・エクス・マキナ」

白騎士事件以降、世界では籬が外れてしまったように様々な問題が
浮上した。

冷戦、女尊男卑、第三世界の核保有、バイオショック、モラルハザ
ード、国連の機能不全。そんな悪化の一途をたどる国際情勢の裏で暗躍
する武装組織「ヘデウス・エクス・マキナ」。

この数年で、彼らの影響力は次第に大きくなっている。
いまでは大国でさえその存在を無視できず、それぞれがアプローチ
をかけている。

更識もその中のひとつだった。

しかし、更識の力を以てしても、彼らとの接触は困難を要していた。
そんな矢先に現れたのがアリスだ。

アリスが組織への足掛かりになることを確信した楯無は、強引な手
段に訴えてでも、彼女の身柄を自分の影響下に置いておく必要があつ
た。——彼女を懐柔し、仲介役として使うために。

そう、彼女は知っているのである。拷問より懐柔の方が、諜報的に
効果的であることを。

愛は静かに相手の心を麻痺させる。愛情は諜報員にとって最も便

利なスパイアイテムなのだ。

(さて、どうしようかしら)

懐柔とはいかにして相手の心に侵入するかだ。しかし、あの手の――意志の強い人間には、心のセキュリティホールがない。つまり、更識でも骨が折れる相手なのである。

だが、楯無の顔に面倒の色はない。むしろ、人たらしの性が疼いてしかたなかった。

「また、何か好からぬ事をお考えですか？」

やらしく舌舐めずりする楯無の後ろで、虚が言った。

「あら、わかる？」

「はい。私はあなたの幼馴染ですから」

どこか誇らしげな虚に、楯無はにこやかに笑った。

更識と布仏は、本家と分家の関係にある。その間柄から、楯無と虚は幼い頃から苦楽を共にしてきた。今や言葉を交わさずとも、相手の気持ちを汲み取るなど造作もない。

「じゃあ、明日のお茶、奮発してもらえるかしら。あの娘、甘い物が好きそうだから」

「餌付けですか？」

「ええ。昔から言うでしょ。意中の相手を射止めたのなら、まず相手の胃袋を握れってね」

「わかりました。では、話題の人気店『リップ・トリック』のケーキを用意しましょう」

「うん、お願いね」

『はい』と答え、虚はさっそく用意に取り掛かった。

『リップ・トリック』のケーキは人気があるため、前日に予約しなければ入手困難なのだ。



「なにかアリスに面白そうなことが起こりそうな気がする」

ラウラとの一騒動終えた帰り道。なぜか、俺はそんな気がして足を止めた。

「くそ、最近アリスをいじる奴が増えてきた気がするな……」

アリスは俺にとつて数少ない、っーか、唯一からかえる女の子だ。そんな彼女をからかうのが、風呂に次ぐ俺の楽しみだったのに……。

「ぐぬぬ」

「何が『ぐぬぬ』なんだ？」

誰もいないはずの背後から声が聞こえ、俺は慌てて振り返った。背後に立っていたのは千冬姉だった。

「うわっ、千冬姉！……じゃなくて、織斑先生、どうしてここに？」

「アリーナで騒ぎがあつたと聞いてな。どうも、ラウラがまた難癖をつけてきたようだな」

神妙な顔をする千冬姉に、俺は先の出来事を思い出した。

「難癖というか『貴様のせい』で、織斑教官はヘモンド・グロツソで二連覇を成し遂げられなかった』とか『その無念を教官に代わって晴らさせる』とか、そういうことは言われたけど」

「そこまで言って、怒りで体が熱くなった。」

でも、それはラウラに対する怒りからではない。自分の弱さに対する怒りからだ。

「それで、その、千冬姉、俺は……」

俺が胸中のモヤモヤを吐き出そうとすると、千冬姉がスーと目を閉じた。

これは千冬姉の癖だ。悩み事や考え事がある時、こういう仕草を見せる。

「そうか。まあ、それについては、気に病むな。私は二連覇を逃したことに未練も無念もない。ましてや、その責任がお前にあるなど、一度も思つた事はないから安心しろ」

千冬姉には珍しく、優しい声音でそう慰めてくれる。

みんなもそうだ。アリスも、箒も、鈴も、お前は悪くないって言うてくれる。

「だけど、いくら優しい言葉を貰っても、俺に対する俺の『怒り』は簡単に消えてくれなかった。」

「でも、思うんだ。あの時、俺に『力』があれば、せめて抗うだけの力があれば、千冬姉はあんな目に遭わなくて済んだんじゃないかって……。そう思うと、俺、悔しくて、悔しくて、堪らなくなるんだ」

無力だった自分。その悔しさから拳を硬く握る。強く、血が滲みそうなぐらいに。

そんな俺の肩に千冬姉が優しく手を置いた。

「では、その悔しさを糧に強くなれ。そして、今度はお前が誰かを救ってやればいい」

「え……う？」

「いいか、一夏。償いとは、己を咎め続ける事でも、ましてや自ら命を絶つ事でもない。その経験で感じた事を糧に、人として強く、優しくなることだ。そして、その強さと優しさを以って、人々の幸せに貢献する。それが償いだ」

人として強く優しくなること。それを以て人の幸せに貢献すること。

そうか、俺は大きな勘違いをしていた。

己を咎め続ける事も、死んで詫びる事も、全て自己満足でしかない。それでは誰も報われない。大事なのは、他の誰かのために、何をしなくてはあげるか。

「わかったら諫めるのをやめて、特訓に励め。今のままじゃトーナメントも初戦敗退だぞ」

千冬姉は微笑みながら、俺の額を小突く。

なんだろう。まるで憑き物が落ちたような、不思議な気持ちになった。

「ありがとう、千冬姉。今ならラウラとも真っ直ぐ向き合えそうな気がするよ」

「そうか。——なら、ラウラについて少し話をしてやろう」

「ラウラについて？」

「ああ、なぜラウラがあそこまで私に固執するのか、についてだ」

それはすぐく気になった。

いくら敬愛しているとはいえ、ラウラの千冬姉に対する執着は常軌を逸している。

「それでまず、私が少しの間ドイツ軍でIS部隊の教官をしていたのは知っているな?」

「ああ」

前にも言ったが、千冬姉は一年間ほどドイツ軍の教官を務めていた事がある。

実は俺の誘拐事件の際、捜索に尽力してくれたのが、ドイツの特殊部隊^Gの隊員^Gだったのだ。

その時の借りを返すため、千冬姉は一年間だけドイツIS部隊の教官を買って出たのである。

「ラウラと出会ったのは、その時だ。だが、当時のラウラは今と違って酷いものだったぞ。目は虚ろで、頬は痩せこけていた。今のような覇気もなく、まるで亡霊のようだった」

意外だった。圧倒的な存在感を放つ今のラウラからは、想像もできなかった。

「さすがに、そんなラウラを訓練するのは気が引けてな。ISの技術を教える傍ら、いろいろな世話を焼いてやったんだ。飯をご馳走してやったり、女の嗜みを教えてやったり、さながら母親のようにな」

千冬姉はどこか懐かしむように語っていた。

もしかしたら千冬姉も千冬姉で、ラウラの世話焼きが楽しかったのだろうか。

「だが、今思えば、私はラウラに情を注ぎ過ぎたのかもしれない。それがある問題を浮上させた」

ある問題? 下士官に慕われる事のどこに問題があるのだろうか。

そんな表情をする俺に、千冬姉は神妙な顔つきで重々しく言った。

「実はラウラの出自は特殊でな、両親がいない」

俺は驚きで目を睜いだ。両親がいないだって……?」

「まさか俺たちと一緒に、親に捨てられたのか?」

「いや、あいつの場合、事情はもつと複雑だ。詳しくは聞かない方がいい」

何だろう、凄く気になる。でも、訊かない方がいい気もしてきた。

千冬姉があえてそう言ったって事は、俺が激昂するような、胸糞悪い理由なのだろう。

「それであいつは、生まれながらの天涯孤独でな、ずっと『家族』というものに憧れを抱いていた」

「もしかして、ラウラは千冬姉のことを本当の家族のように？」

千冬姉は頷き、肯定した。

「だから、ラウラは私にこう言ってきた。『自分を貴女の家族にしてほしい』とな」

「それって織斑家の養子にしてくれって事か？ それで、どうしたんだ？」

「どうしたも、こうしたもない。私はおまえにラウラを紹介した事があったか？」

いや、なかった。そもそも千冬姉の話は1年以上前のことだ。もし千冬姉がラウラを養子に引き取っていれば、こんな事態に発展してない。つまり、千冬姉はラウラの申し出を断ったのだ。

「でも、なんで？」

経済的な理由？ それとも法的な問題？もしかして俺が原因だったりするのだろうか？

素朴な疑問を投げかけると、千冬姉は視線を逸らし、どこか遠いところを見た。

「——自信がなかった」

千冬姉が、か細い声でそう漏らす。

あまりに弱々しい声音だったので、俺は聞き逃してしまった。

「え？ 千冬姉、今なんて？」

「何度も言わすな、自信がなかったのだ。——お前とラウラを平等に愛せる自信がな。所詮、私はちよつとばかりISの扱いに長けただけの小娘だ。聖人君子みたく万人を愛せるほど出来た人間ではない。やはり、赤の他人と実の弟では、実の弟の方が可愛い」

俺はいろんな意味で言葉を失った。

なんだろう、うれしいはずの言葉なのに、なぜか素直に喜べない。「片や愛情。片や同情。そんな不平等な愛し方では、ラウラが辛いだけ。そう考えて、私はラウラに言った。

『私には弟がいる』とな。

その言葉を聞いた途端、ラウラは何も言わず、その場を駆け出していった。おそらく『私には弟がいる——私の家族はその弟だけだ』、大方そんな風に受け止めたのだろう。いま思えばあの言葉は浅慮だった。私がつと言葉を選んでいれば、こんな事態にはならなかっただろう……」

千冬姉は自虐的な笑みを浮かべた。

千冬姉のそんな表情を見るのは初めてで、俺は少し面を食らってしまふ。

「じゃあ、ラウラが俺に突っかかってくる理由って」

「おそらく、自分が私の『家族』になれないのは、お前がいるからだ、と思っっているのだろう。だから、ラウラはお前を否定し、抹消する事で、私の『家族』になろうとした。〈モンド・グロツソ〉の一件を引張り出してきたのは、お前を否定するための口実材料だろう」

そうか、〈モンド・グロツソ〉の事を引き合いに出して、俺の存在を否定する。

そうすることで、自分の方が千冬姉の『家族』に相応しい事を証明しようとしたのか。

「でも、そんな事をしたって『家族』にはなれないだろ。『家族』はそうやって作るもんじゃない」

「その通りだ。だが、ラウラは戦う事しか知らない不器用な娘なんだ。人の愛し方も、愛され方も知らない。やり方は歪だが、あいつはあいつなりに、私の気を惹こうと一生懸命なんだ。だから、あいつを悪く思わないでやってくれ。悪いのは、あいつの気持ちに伝えてやれない私なんだ」

「千冬姉……」

俺はかける言葉が見つからなかった。家族として何か言っただけ

たいのに、何も出てこない。

それに自分の未熟さを思い知りつつ、俺は辛うじて言葉を絞り出した。

「その、俺は平気だから。ラウラを恨んだり、憎んだりしてないよ」

ラウラに腹が立つところはあつたし、気に入らないところもあつた。でもそれは、明日には忘れてしまうような些細な苛立ちだ。ドロドロした感情じゃじゃない。それに千冬姉から話を聞いた事で、ラウラに対する俺の認識も変わりつつあつた。

「そうか。それは助かる」

それだけを言い、千冬姉は『話はこれで終わりだ』と踵を返す。

「それと、これは私とラウラの問題だ。おまえが気を遣う必要はないからな」

その後、千冬姉は振り向くことなく、そのままアリーナの方へ歩いていく。

俺は何も言わず、それを静かに見送った。

第24話 シャルル・デュノアのコンプレックス

いま起こった事を、ありのまま話すぜ？

千冬姉と別れた後、俺は「ラウラと、どう接していくか」を考えながら、帰路に着いていた。

その途中、浴室のボディースーツが切れていたのを思い出したんだ。あれがないとシャルルが困るだろうと思って、学園内にある売店に寄って、ボディースーツを買って帰ったんだよ。そして部屋に着いたら

女性下着（フェミニン）をつけたシャルルを運ぶ、アリスとのほんさんがいたんだ。

何を言っているか解らないと思うが、俺も何が起こっているのか解らないんだ。

なぜ、男のシャルルが女性下着をはいているのか。

なぜ、彼は気を失っているのか。

なぜ、俺の部屋にアリスとのほんさんがいて、彼を運んでいるのか。

でも、コレだけは云える。俺は見てはいけないモノを見てしまったのだ。

その証拠に、のほんさんがゾンビのように両手を突き出して襲ってきた。

「おーりーむー、見ーたーなー」

このままだと目撃者として消されかねない！俺は、咄嗟にドアを勢いよく閉めた。

その向こう側で、バコつという派手な音が鳴る。どうやら勢い余ってドアにぶつかっただらしい。

「だ、大丈夫か？」

必要以上に大きい音だったので、俺は心配になって部屋の様子を窺った。

「おりむー。ドア、きゅーにしめる、だめ。わたし、きゅーに止まれない……」

真つ赤になった鼻を押さえながら、のほほんさんは言った。

「いや、その、すまん」

涙ぐみながら蹲るのほほんさんにそう謝る、そのあと、俺は気づいた。——アリスが居ない事に。

直後、背後に誰かの気配。アリスだ。

しかし、そう思った次の瞬間には、視界が逆さまになり、俺は意識を失っていた。

くそ、なぜ俺がこんな目に……

なぜ、彼がこんな目に遭わなければならなかったのか。

それは、時をさかのぼること、数十分前の事だ。

私は面倒事を真つ先に片づける主義だ。それは仕事でも同じで、たとえ疲れていても、さっさと片付けるようにしている。というわけで、私はデュノア君の件を片付けるため、彼の部屋をノックした。

だが、いくら待っても、応答が返ってこない。

「いないんでしょうか……う？」

もしかしたら、まだ一夏との訓練から帰ってきていないのかもしれない。ない。

時間を改めようかと思いつつ、なんとなくドアに触れると、扉が開いた。カギはかかっていたいなかったようだ。無用心だなど思いながら、私はのほほんさんと顔を合わせた。

「どうします？」

「入っちゃおーか？」

のほほんさんの提案に、私はすこし考えた。

「そうですね。確認を兼ねてお邪魔させて頂きましようか」
「うん」

というわけで、私たちはそーつとデュノア君の部屋に入る。部屋は仄暗く、人の気配はなかった。

本当に誰もいないのかと思いきや、バスルームから水の流れる音が聞こえてきた。

「でゆつちーかな？」

だとしたら、チャンスだ。彼の入浴を覗ければ、決定的な証拠を掴めるかもしれない。

もちろん、バスルームにいるのが、一夏だという可能性もある。それはそれで——いえ、なんでもないです！

「のほほんさん、このシチュエーションでぞかない手はないですよね？」
「ないよね」

ふたりしてグフフと笑い、忍び足でバスルームへ向かう。

脱衣所に忍び込みこむと、ガラス越しのバスルームに人影が見えた。ぼかしガラスなので断言はできないが、入浴中の人物は金髪のようだ。俄然、デュノア君の可能性が高くなる。

「なんかどきどきしてきたー」

「私もです」

正直、傍目からは完全に変態だったけど、私たちは構わずガラスの戸を開けた。

そこから漏れる湯気に目を細めつつ、浴室を覗き見る。そこには――

少女が立っていた。

慎ましく膨らんだ二つの乳房。くびれた腰から続く綺麗な尻。それらが描き出す芸術的な曲線美。滴るしずくが、その曲線をなぞる度、ドキリとする色気が醸し出された。

まさに美少女。

だが、その顔はフランスの貴公子こと、シャルル・デュノアその人だ。

これで決定ですね。〈生徒会〉の読み通り、シャルル・デュノアは男装の麗人だった。

あとは気づかれないように、この場を――

(ぎつちよんだけ、ずるい。わたしも見る)

そう言つて、のほほんさんが横から体当たりしてくる。

その拍子にドアが全開になり、私とのほほんさんは雪崩れ込むようにバスルームへ。

「えっ……っ！」

ドタンバタンと浴室に入ってくる私たちに、デユノアくんが目を丸くする。

無理もない。男なら悲鳴を上げればいいですけど、相手が女ではね。

とはいえ、気まずい雰囲気であることに変わりはない。私がどう誤魔化そうか考えていたら、のほほんさんがグツと親指を立てていた。

「シャルル君、ないすばでいー」

さすがのほほんさん、この状況でものほほんだ。

「あ、ありがとうございます……」

そして、満更でもなさそうなデユノアさん。

いや、あの、私が言うのもアレですが、そこはお礼を言うところじゃないと思いますよ？

「じゃなくて……いや、あのね、これは、違うんだよ……」

ようやく事の重大さに気づいたデユノアくんが、血相を変えた。そして、慌てて私たちに詰め寄ろうとする。だが、それがいけなかった。

ツルツ

慌てるあまり、濡れた床に足を滑らしたデユノアさんは、ドジツ娘よろしく引っくり返った。

私たちが「あ」と言う間もなく、床に頭部を強打して気を失うデユノアさん。

しばらくの間、シャワーの音だけがバスルームに響く。

「今のうちに、逃げますっ！」

私のろくでなし発言に、のほほんさんは冷静な口調で言った。

「風邪を引いたら大変だから、冷えない内に体を拭いてあげて、ベッドに寝かせてあげるべきだと思うー。それと目が覚めたら事情を説明して、念の為に頭の検査を受けてもらった方がいいかもー」

ハキハキと——でも口調はのほほんと——的確な意見を述べるのほほさんに、私は感心した。

逃げようなんて思った自分が恥ずかしいかぎりだ。

「そうですね、そうしましょう」

デユノアさんの体を浴室から運び出し拭いたあと、私たちは彼女の体を拭き、下着を着せた。それから私が頭部を持ち、ほほんさんが足側を持って、彼女を脱衣所から運び出す。そうやってデユノアくんをベッドに運んでいると、自動ドアの開く音がした。

——入ってきたのは、ルームメイトの一夏だ。

一夏は下着姿のデユノアさんを運ぶ私たちを見て、持っていたビニール袋をドサッと落した。

「え？ なにしてんだよ、おまえら」

動揺する一夏に、私とのほほんさんが顔を見合わせる。

参りましたね。ここで一夏に騒がれたら、面倒なことになります。

(しかたありません。彼の口を封じましょう)

(第一目撃者は消される運命)

アイコンタクトで頷き合い、まずのほほんさんが動いた。

「おーりーむー、見ーたーなー」

のほほんさんが両手を突き出し、一夏の口封じにかかる。

でも、相変わらず動きが遅い！ あれじゃ……

バタン！

予想通り、ドアを閉められてしまった。

「ふえい!」

急に閉まったドアに驚くのほほんさんだったが、減速できず、そのまま派手に衝突した。

あちゃー、これは完全に逃げられ——

いや、そうでもなかった。一夏が音に反応して、部屋の様子を窺ってきたのだ。

「おりむー。ドア、きゅーにしめる。だめ。わたし、きゅーに止められない……」

「いや、その、すまん」

一夏の意識がのほほんさんに向いているのを見計らい、私は素早く背後に回り込んだ。

そして近接格闘術で、彼を床に叩きつけ、意識を刈り取る。一夏は目を回して、動かなくなった。

「これで一安心です」

無事、情報漏洩を防げたので、私は蹲るのほほんさんの様子を窺った。

「——大丈夫ですか、のほほんさん、派手にドアとキスしましたけど」
「うー、大丈夫じゃないー、鼻がジンジンするー」

ああ、鼻が真っ赤になっていきますね。かわいそうに。

「では、私が痛くなくなるお呪いをかけてあげましょう」

えっぐえっぐ、と涙ぐむのほほんさんの鼻を撫でながら、私は魔法の呪文を唱えた。

「痛い、痛い、飛んでいけー。生徒会長のところへ飛んでいけー」
♪

私が生徒会室の方向へ指を指すと、のほほんさんがびたつと泣き止んだ。

「あれー、ほんとうに痛くなくなったー！ ぎゅちよん、すごーいー」
ふふ、こう見えて私、黒魔術や呪術に精通していますから。

そして、憎き生徒会長は鼻を押さえて悶絶している頃でしょう。愉快痛快です。

「じゃあ、一夏たちをベッドに運びましょうか」

「はい」

無事復活を遂げたのほほんさんと共に、私は手早く二人をベッドに運んだ。



お母さんとよく歩いたシャンゼリゼ通り。

私の家は裕福じゃなかったから、洋服とかあまり買ってもらえな

かったけど、不満はなかった。

お母さんと並んで歩ける。それだけで、私は幸せだったから。それだけで私は……

私の大好きなお母さん。お父さんのいない私の唯一の家族。でも、そんなお母さんはもういない。

——強く生きて。そして、必ず幸せになってね。それだけが私の願い。

そう云い残して、お母さんはこの世界のどこでもない場所に行ってしまった。

お母さんの優しい声も、陽だまりのような笑顔も、全て『過去』のものでしかない。

それからだった。あの人が私の前に現れたのは。

その日から私は人形になった。何も感じない人形に。

そして、思い出せなくなった。お母さんの願いも、自分の名前も。



二人をベッドに運び終えて20分あまり。

介抱の片手間、私がフランスの経済紙を読んでいると、デユノアさんが目を覚ました。

「り、リデル、さん……？」

ベッドで目を覚ましたデユノアさんは、不思議そうな顔で私を見た。

それから、状況を整理するように、しばらく天井を見つめる。

「……そっか、僕、バレちゃったんだっけ……」

事のあらましを思い出したデユノアさんは、不自然なほど冷静だった。

その反応に少し驚く。てっきり、もっとあたふためくかと思っていたのだけど……

ともあれ、私はまず事の経緯を説明した。

「実は、あなたに性別詐称の疑いが掛けられていましたね。〈生徒会〉の方から、その真偽を確かめるよう命令を受けたのです」

「そっか。それであんな事を……」

「はい、失礼かとは思いましたが、一番手っ取り早い方法だと思いましたが、」

そう言うと、一夏がお盆に湯飲みを乗せてやってきた。

ちなみに、一足早く目を覚ました一夏には、既に上記の経緯を説明してある。

「ほら、はいったぞ」

私とデュノアさんは彼に礼を言い、緑茶の入った湯飲みを受け取った。

とてもいい香りがした。一夏は虚さんに負けず劣らず、お茶の淹れ方がうまいようだ。

「ん？ のほほんさんは要らないのか？」

一夏が私の隣にいるのほほんさんに尋ねるが、俯いたまま答ええない。

妙に思った私が耳を澄ますと、微かな寝息が聞こえてきた。

そう言えばここへ来る途中『昨日は徹夜だった』と言っていていましたね。起こすのもかわいそうですし、このままにしておいてあげましようか。事情は私が聞けばいいですし。

「それで、なぜデュノアくんは男装を？ 趣味という訳ではなさそうでしたが？」

一夏が腰かけるのを見計らい、私は事情を聴いた。

「実は、デュノア社の社長に、そうするよう命令されてね……」

「社長ってシャルルの親父だよな。なんで自分の娘にそんなことを？」

一夏の疑問はもつともだった。

普通の親なら愛娘に『性別を偽れ』などと命じたりしないだろう。だが、一体この世界に子を虐待する親がどれだけいる事か。デュノアさんのお父さんがその類の人種だったとしても何ら驚かない。ありふれた話だ、と思うだけだ。

だけど、デュノアさんが発した言葉は、私の予想の斜め上をいった。「僕はね、父と愛人の子なんだ」

愛人の子。さすがの私も言葉に詰まった。一夏も驚愕に目を開く。千冬さんではないが、私たちはまだまだ小娘だ。だけど、愛人という言葉が、男女のどういた関係を示すかぐらいは知っている。つまり、彼女は不倫という背徳の末として生まれてしまった子……

「話を戻すね。それで二年前、僕を生んで育ててくれたお母さんが亡くなっただんだ。それから一週間もしない内に、僕の父を名乗る人がやってきてね。身寄りの無かった僕は、その人の邸宅で暮らすことになっただけど……」

デュノアさんは掴んでいた湯飲みをぎゅっと握り、表情を顕著に曇らす。きつと良い目には遭ってこなかったのだろう。特にデュノアさんに対する本妻の態度は想像するに難しくなかった。

「まあ、出自が出自だったから、本妻の人から嫌がらせはたくさん受けたよ。『泥棒ネコの娘はさっさと出て行け』とか、『お前は不徳の子だ』とかね。はは」

デュノアさんは平然を装うとして失敗した。それを取り繕うとして、また失敗する。

ようやく作った笑みでさえ乾いていて、見るに堪えない。

それが当時の壮絶さを物語っているようで、私と一夏は愛想笑いですら返せなかった。

「それからしばらくして、デュノア社が経営危機に陥ったんだ」

「ちよつと待ってくれ、おまえの会社、経営危機なのか？」

デュノアさんの言葉に、「豆鉄砲をくらった鳩のような顔をしたのは一夏だ。」

彼の反応も当然か。デュノア社はフランスのIS企業最大手。量産機の世界シェアは第三位を誇る。一見すれば、順風満帆な企業に見える。だが、実際はそうじゃない。

「実はクラファール・リヴァイヴの後継機に、クラファール・リヴァイヴ・カスタム>っていうISがあるんだけど、これが全然売れなくてね」

「それってシャルルの専用機だよな。いい機体だと思うけど、なんで売れなかったんだ？」

「需要を見誤ったからですね。現在ISの需要は、第三世代型に移りつつあります。たとえば性能が良くても、顧客のニーズに合っていないければ、どこも買わないでしょう」

兵器開発には技術力も必要だけど、それ以上にマーケティングの才能が必要だ。

それにくらフアール・リヴァイヴ・カスタムは、デユノア社の次期主力商品として莫大な資金を投じられたIS。投資を回収できなかったことが、大きな経営打撃になったのだろう。

「一応、デユノア社も、第三世代型の開発に着手し始めたんだけど、なかなか形にならなくてね。第三世代型の開発には、技術革新が必要なんだ。いまのデユノア社には、それだけの技術力がない」

「要は勝負商品が満足に売れず、会社の資金ぶりが悪化。起死回生の第三世代型の開発も行き詰り、その結果がこの経営危機だという訳です」

「そうだったのか。——で、それが男装と、どう関係があるんだ？」

「簡単、広告塔になれるからだよ。男性操縦者は希少だから、研究者や投資家の耳目を集められる。その宣伝効果をエサに、提携を結んでくれそうな企業や融資を集めようって目論んだんだ」

「でも、そんなことしても、すぐバレるだろ」

「うん。だから、僕は転入してきたんだ。一夏のデータを奪って偽装するために」

「じゃあ、俺のコーチを買って出たのも……」

「偽装工作の一環。でも、バレちゃったから目論みはここまでだね。話はこんなところかな。聞いてくれてありがとう。それと騙していい、本当にごめんね」

デユノアくんは深く頭を下げ、騙していた一夏に深く謝罪した。

しかし、一夏はデユノアくんの肩を掴み、乱暴に顔を上げされる。

「謝らなくいい。悪いのは、そんなことを命令した親だろ。それに俺が慕っていたのは、シャルル・デユノアっていう人間の人間柄だ。性別

がどうのこうので掌を返したりしない。——で、それよりどうなんだよ」

「……どう、って?」

「シャルルは俺たちに自分の出生や境遇を話してくれた。でも、おまえがそれに対してどう思っているかを、俺たちはまだ聞いていない。それでどうなんだよ、この事についてお前はどう思っているんだ?」
「どうも思わないよ。どう思ったって、どうにもならない。僕には、身寄りがないんだ。あの人の言うことを聞いて、生きていくしかないんだよ」

子供は大人の扶養がなければ生きていけない。着る物も、食べる物、住む所も、与えてくれるのは全て大人だ。子供が生きていくには大人の力が必要だ。その大人がどんなに腐っていても。

「くそっ……」

その現実を目の当たりにして、一夏は酷く苛立っていた。彼はいまデユノアさんの父親を、全力で殴りたい気持ちでいっぱいだろう。——自分の子供を道具にするなって。

けれど、殴ったところで、何も解決しないことを知っているから、彼は酷く苛立っているのだ。

私はそんな彼を慰めるように、肩に手を置く。それから、改めてデユノアさんと向き合い、シンプルな問いを投げかけた。

「あなたはそれでいいのですか?」

「え……?」

「親権とか、扶養とか、そんな事はどうでもいいのです。心を殺し、家の傀儡に成り果てること。それであなたは幸せなのですか?」

「僕の……幸せ……?」

——強く生きて。そして、必ず幸せになってね。それだけが私の願い。

刹那、何かを思い出したように、彼女の心の中で光が灯った。

私は続ける。

「もし私が亡くなったお母さんなら、そんな事、望まないと思いますよ?」

我が子の幸せが親の願い。

それが全ての万人の想いとはいわない。けど、デュノアさんのお母さんは「子の幸せ」を願ったはずだ。なぜなら、デュノアさんのお母さんはデュノアさんを、こんなにも優しい子に育て上げた人だから。親の愛情なくして、こんな優しい少女は育たない。

人が人に愛情を注ぐのは、人を思うがゆえだ。では、何を思うのか、それは幸福に他ならない。

「ほ、僕は……」

私の言葉に無感動だったデュノアさんの心が動き始めた。

まるで古びた歯車が動き出すように、ゆっくりと、凍っていた心が動き出そうとしていた。

「……こんなの、全然、幸せじゃないよ……。友達をだまして……。自分を偽って……。いやだよ……。もっとふつうでいたいよ……。でもね、僕にはどうする事もできなくて……」

デュノアさんは嗚咽を堪えながら、一つ、一つ、嘆くように言葉を紡ぐ。

身寄りがなく被扶養者であるデュノアさんは、父親の傀儡に成らざるを得なかった。

本妻には嫌味を言われ続け、窮屈な生活を強いられていたのだから。

今まで、ずっと。

そして、これからも、ずっと。

彼女はデュノアという鳥籠で飼われている小鳥。飼われた小鳥は飼い殺される。それが運命。

でも、運命は変えられる。人と出会うことで。そして、彼女は私と出会った。

「辛かったのですね。なら、そんな悲しい日々、今日で終わりにしましょう」

「終わりに？」

「何、簡単な事です。この手を掴むだけでいい」

そうやって私は差し伸べる。悲嘆と絶望に暮れた少女に、救いの手

を。

「私は救世主^{メシア}ではありません。だから、たくさんの人は救えないけど、少女一人ぐらい救ってみせますよ。だから、貴女は私を信じて、この手を掴めばいい」

私は差し伸べる。悲嘆に暮れた少女に、救いの手を。

「……………リデル、さん……………」

デュノアさんは救いを求めるのように、か細く、か弱いその手を伸ばした。

私は、しっかりと、強く、硬く、握りしめた。彼女がこの手に希望を抱けるように。

「あなたの想い、しかと受け取りました。これより私が貴女のジャンヌ・ダルクです」

そう、かつてジャンヌ・ダルクがオルレアンを開放へ導いたように。今度は、私がデュノアさんを開放し、自由へと導いてみせましょう。

「まったく、アリスはずるいな。一人だけいい格好してさ」

と、笑いながら一夏が、私たちに手を重ねてきた。

「俺もだ。俺もシャルルの力になるぜ」

それは中途半端な正義感でもなければ、場の空気に流されたわけでもなかった。

彼は思っていた。心の底から『彼女の力になりたい』と。

なぜそう云えるのか。彼女の不遇を怒り、自分の無力さを嘆く、彼を見たからだ。

「いいの、一夏？」

「ああ。俺にできる事なんて高が知れてるけどさ、それでも俺はシャルルの幸せに少しでも貢献したいんだ。だから、俺にできることなら何でも言ってくれ。全力で力になる」

「一夏……………ありがとう」

「これは頼もしい味方ができましたね。あなたがいれば百人力ですよ」

「じゃあ、わたしが加われば、百一人力だねー」

そう言っつて、私たちの手に小さな手を重ねてきたのは、のほほんさ

んだ。いつ目を覚ましたのか判らないけど、『ふふふ』という不敵な微笑が、全て承知の上だと物語っていた。

「ありがとう、リデルさん、ありがとう、一夏。そして布仏さんも」
デュノアさんから死相染みだ表情が消え、その頬に熱い涙が伝う。
デュノアさんは顔をぐちゃぐちゃにしながら、泣いていた。

けれど、部屋が暖かい雰囲気にも包まれた気がした。陽だまりの中にいるような、暖かさに。

「では、あなたの本当の気持ちを聞かせてください。私たちが力になりますから」

私が改めて訊くと、デュノアくんははつきりと自分の気持ちを打ち明けた。

「わからない。でも、一夏たちと過ごした日々は楽しかった。一緒に食事して……、一緒に訓練して……、その時だけは、家のことを忘れられた……。ぼくは……。わたしは……。ここにいたい。偽りのない、ありのままの自分で」

「わかりました。では、そうした上で、ココに残れるよう会長に話をつけましょう」

「ありがとう、リデルさん」

さて、まだ一件落着とはいきませんが、これでひとまずこの件については——コンコン。

訂正。もう一悶着ありそうな気がしてきた。

「一夏さん、いらっしやいますー?」

扉越しに聞こえてきたのは、オルコットさんの声だ。

これは、まずい。なにがまずいって、デュノアさんの格好だ。今の彼女は男装用のコルセットを外しているため、体つきがどう見ても女なのだ。目撃されたら、誤魔化しようがない。

「返事がないわね。寝てんのかしら?」

この声は鈴。鈴も一緒なのか。

これは尚更まずい。私、一夏、デュノアさんはバタバタ騒然とした。「シャルル、とりあえず、どこかに隠れる」

「そうですね。では、とりあえず、クローゼットに」

「バカ、なんでクローゼットなんだよ！ てか、なんで、アリスと一緒に入ってたんだ！」

「す、すいません。気が動転して……でも、ココ以外隠れられそうな場所が……」

「シャルル君、お布団に隠れたらいいよー」

『それだ！』

のほほんさんの意見で、一夏が布団を捲り上げ、そこへデユノアさんが滑り込む。

何も本人を隠す必要はない。布団で体を覆ってしまえば、それで事なきを得られる。

「なにやら、中が騒がしいですわね」

「そうね。カギ、開いてるみたいだし、入ってみよつか」

そんな会話と共に自動扉が開く。デユノアさんを寝かしつけた私たちは、慌てて席に戻った。

それと一寸狂わぬタイミングで、鈴とオルコットさんが部屋に入ってくる。

「よよ、よお、鈴にセシリア」

「あら、一夏さん、おられましたの？」

「あんたね、いるなら返事ぐらいしなさいよ」

「悪い、悪い。で、なんだ、二人して？」

「実は夕食のお誘いをしようかと思いましたが。ところでデユノアさん、どうかいたしましたの？」

布団に包まるデユノアさんを見て、オルコットさんが不思議そうに首を傾げる。

私たちの間に、緊張が走った。のほほんさんは、のほほん。

「ああ、ちよつと体調が悪いみたいでさ。今、看病していたところなんだ」

「あら、そうですの？」

「う、うん、ちよつとね。うー、苦しいなー、うー、辛いなー、うー、うー」

「……………」

ワザとらしい演技に、脂汗を浮かべる私と一夏。流石に大根過ぎますよ、デユノアさん。

でも、幸い、鈴とオルコットさんは疑う素振りを見せなかった「ふくん。で、アリスも心配になって見舞いにきたわけ？」

と、私を見てニヤニヤする鈴。そんな彼女の瞳が言う。『やっぱり、そーゆー事なのね』と。

実はあの昼食会以来、鈴は私とデユノアさんの仲を若干誤解している節があった。

確かにデユノア君の転入以来、ずっと気には掛けていた。でもそれは『デユノア君って本当に男性なのだろうか』と疑っていたからだ。でも、鈴には私の勘ぐる視線が恋する乙女の視線に見えていたらしく、度々いらぬお節介を——いや、それは別の機会に話すとして、

「ええ、まあ、そんなところです。で、鈴はどういった用件で？」

「や、野暮な事聞かないでよね、そ、そんなの決まってるじゃない」

鈴は頬を赤め、視線を逸らす。そんな彼女に『だと思いました』と私。

「という事らしいですし、一緒に食事でも取ってきたらどうですか？」

「うん、僕は大丈夫だから、行ってきなよ、一夏」

「そうだな……そうするか」

誘いに応じれば、鈴たちをデユノアさんから離せる。

その事に気づいた一夏が首肯した。

「じゃあ、いくわよ」「では、参りましょう」

そうと決まれば、二人の行動は早かった。

二人は仲良く一夏の両手をさらって、部屋を出て行く。私たちは手を振った。

「いってらっしゃい」

「ごゆっくり」

「いってらー」

「あんたもくるのよ」

と、部屋を出る途中、鈴がのほんさんの襟を掴んで、部屋から連れ出す。

さては、私とデユノアさんを二人きりにしようって魂胆ですね。

鈴、気持ちは嬉しいんですけど、こういうった気遣いはけっこうです

！

そんな私の心情など知る由もない鈴は、『うまくやんのよ』とウィンクして部屋を出ていった。

「やれやれ。鈴には困ったものです」

と、かぶりを振う。

でも、せつかく二人きりになれたので、アレをデユノアさんに渡しておこう。

「そうです、デユノアさん。貴女にこれを渡しておきますね」

私はデユノアさんの手を取り、ポケットに入れていた例のゴム製品を握らせた。

デユノアさんが不思議そうに掌を開く。そこには『家族作りは計画的に』という文字。

「え!? これ、その、あれだよね! アノの時に使う! なな、ななんで、僕にこれを!」

「ほら、これから三年間、一夏とこの部屋で生活する訳ですから」

一夏は品行方正だ。それでも一夏だって年頃の男の子。デユノアさんに劣情を催すこともあるだろう。何かの拍子に、そーゆー事態にならないとも限らない。だから、万一に備えておいて損はないはずだ。

「そ、そうだね。備えあれば、憂いなしっていうもんね。ありがたく貰っておくよ」

デユノアさんはお守りでも扱うように、受け取った『ゴム製品』を大事にしまった。

「ところで、こういうの持つてゐるってことは、リデルさんは経験あったりするの?」

「ふえ?」

まさかの質問に、私は頬をポッと赤くした。

「ほら、最近の女の子は早いつて聞くし、どうなの?」

興味津々と聞いてくるデユノアさんは、貴公子というより年頃の少

女のようにだった。

しかも、妙な迫力――。言わないと、言うまで聞かれそうな迫力がある。

「いえ、その、お恥ずかしながら、まだです、えへへ……」

恥ずかしさ余って、照れ隠しの笑いを零す私。

あうー。自分の経験を語るのが、こんなに恥ずかしいなんて思いませんでした。顔から火が出そうです。というか、みんな普通にまだですよね？ 私だけ遅いとかないですよね？

「そうなんだ。じゃあ、僕がリデルさんの「初めて」もらってもいいかな？」

「ひゃいっ!？」

私は椅子の上で転げ落ちた。

確かに、ほの暗い照明がイイ雰囲気ですし、二人きりですけども！

「いや、その、こーゆー事は、もつと仲良くなってからといいますか……もちろん、デュノア君が嫌いなわけじゃありませんし、好意はうれいですけど、そもそも私なんかでいいんですか？」

悪魔召喚のような怪しい動きで、意味不明な言葉を口走る。

すると、デュノアさんが『クスツ』と笑った。

「リデルさん、僕は女の子だよ？」

そういわれて、彼女の冗談だということに気づく。

「はは、ですよね……」

冷静に考えれば、デュノアさんは女の子なのだから、貰うも、貰わないもない。

うー、デュノアさんが凜々しい顔をするので、すっかり性別が混濁してしまった。

「でも、経験がないなんて意外だなあ。リデルさん、綺麗なのにね」

「あ、ありがとうございます。お世辞でもうれいです」

「お世辞じゃないよ。もし僕が正真正銘の男の子だったら、きつと放っておかないよっ!」

「褒めても何もでませんよ？ 見てのとおり、何もない女ですから」

「じゃあ、リデルさんのこと、アリスって呼んでもいいかな？」

褒められ、ちよつといい気分になっていた私は、上機嫌に『ええ、どうぞ』と答えた。

そこへ水を差すように、私のお腹がグウーと鳴る。

そんな私を見たデュノアさんが堪え切れず、口元に手を当てクスクスと笑った。

「ふふ、アリスは花より団子なんだね」

確かにその通りだったので、私は反論できなかった。

すると、今度はデュノアさんのお腹がグウーとなった。私とデュノアさんは揃って笑う。

「あはは、僕のお腹も鳴っちゃった」

「ふふ。では、食事にしましょうか。デュノアさんはここで待っていてください。私が食堂に行って何か貰ってきますから」

私は『ありがとう』という声をその背に受け、部屋を出た。

第25話 ラウラ・ボーデヴィツヒのレゾンデートル

夕食時の食堂。千冬は一人思いに耽りながら、夕食のカレーを掻き混ぜた。

IS学園のカレーは市販のルーに頼らない本格派で、香るスパイスはさぞ食欲を駆り立てるが、千冬の手元にあるカレーライスは一向に減っていない。

別に食欲不振というわけではない。ただラウラの事が頭をよぎるたび、食の手が止まるのだ。

「さて、どうしたものか……」

やはりあの時、ラウラの望みを叶えてやるべきだったのだろうか？ いやしかしだ。彼女の想いを受け入れたところで、自分は彼女を幸せにできただろうか。

なにより、両親を失ったあの日から、自分の愛情は一夏だけのものと決めたではないか。

しかし、このままではいけない事ぐらい千冬も解っている。

保留という名の現状維持は、未来を殺す行為。千冬が決断を下さない限り、ラウラは千冬に固執し続け、その場に留まり続けるだろう。そうさせないためにも、次に進むべき道を標してやらなければならぬ。そう、全てが手遅れになる前に。

「それにしても、あのラウラと互角にやりあうとは……。アリス・リデル、大したものだ」

ラウラは伊達で代表候補生や特殊部隊の隊長をしているわけじゃない。

その彼女を相手に、互角の振る舞いをしたアリスの實力は驚愕に値した。

「しかも、専用機は＜赤騎士＞といつたか」

赤騎士は、ルイス・キャロル著『鏡の国のアリス』に登場するキャラクターのことだ。

作中では、赤の女王の命令で、主人公のアリスをさらいにやってくる。そのアリスを助けるのが、白騎士というキャラクターなのだが、

果たして＜赤騎士＞の開発者は、何を思つてアリスの専用機に赤騎士と名づけたのか。

そんな時である。うわさをすれば影、件のアリスが食堂に現れた。

♡

♣

♠

「うーん、来るのが少し遅かったですかね？」

券売機の前に立ち、顎に手をやる。その目に映るのはたくさん【売り切れ】タグ。

時間が遅かったこともあり、メニューのほとんどが売り切れ状態だった。

「困りましたね」

「おや、そこのお嬢ちゃん、もしかして買いそびれちゃったのかい？」

と、話しかけてきたのは、食堂のおばさまだ。

「はい、そうなのです」

「そうかい。在り合わせの食材でよけりや、何か作つてやるよ。値段は500円ぽつきりさ」

「では、よろしくお願いします」

「ほいきた。ちよつと待つてな」

恰幅のいいおば様はどんと胸を叩き、厨房の奥へと消えていった。

その背に『ありがとうございます』と礼を言う。

「これでなんとか食事を確保できそうですね」

さて、出来るまで少し時間が掛かりそうだし、どこかに座つて待つていようか。

私は給水機からコップ一杯の水を汲み、それを啜りながら食堂を見渡す。

食事時であつて席は満席だったが、一箇所だけぽつんと空いている席があつた。

ドイツの冷水こと、ラウラ・ボーデヴィツヒが座る席だ。

ラウラは四人掛けのテーブルを一人で独占し、黙々と夕食を食べて

いた。

ほかに空いている席も見当たらないですし、相席させてもらいましょうか。

「ラウラ、この席、いいですか？」

私が訊ねると、ラウラは露骨に嫌そうな顔をした。

「また貴様か……」

「はい、また私です」

にっこり笑う私に、ラウラが溜息をつく。

でも、拒まれなかったので、私は椅子を引き、腰を下ろした。

「ところで、ラウラは和食派なのですか？」

テーブルに置かれていたのは、おにぎりに味噌汁、漬物という純和食だった。

「だったらなんだ？」

「いえ、てつきりレーションとか、軍用携帯食品ばかり食べているのかと」

「私にも食を味わうぐらいの感性はある」

『失礼な』と言いたげな顔で、ペロペロと手についたご飯粒を舐め取る。

小動物のような仕草に、私は不覚にも和んでしまった。

「ふふ、まるでリスですね。——ほら、ラウラ、ご飯粒ついてますよ」

頬についていたご飯粒を取り、自分の口に放り込む。ラウラは慌てたように怒鳴ってきた。

「わわ、私にふれるな！」

だけど、その声には殺気がなく、怖くもなんともない。

もしかしたら、照れているのかもしれない。可愛いところあるじゃないですか、ラウラも。

「まあ、そう怒らず仲良くしましょ。昨日の敵は今日の友といいますし」

「貴様と戦ったのは今日の事だ。なら、貴様はまだ私の敵だ！」

「では、明日になれば、友達になってくれるのですか？」

「だ、誰が貴様と仲良くするものか！ 貴様は永久に私の敵だ！ わ

かったら、さつきと去れ。去らないなら、私がここから叩き出してやる！」

ナイフを繰り出し、ラウラがその切っ先を私に突き付ける。

私はラウラの怒号を『そうかつかしいないで』と受け流し、

「あ、そのおにぎり美味しそうですね？　一ついいですか？」

「……………もう、好きに、しろ……………」

脅しが通用しないと解かるやいなや、ラウラは疲れた顔でナイフをテーブルに置いた。

「まったく貴様は何なのだ？　なぜ、私に構う？」

「私はアリスで、貴女はウサギですから。アリスがウサギに興味を抱くは当然でしょ？」

ウサギの耳を作っておどける私に、ラウラが『ふっ』と笑う。

「だが、私は黒ウサギだ。白くないぞ」

「それをいうなら、私だって金髪碧眼ではなく、紅毛碧眼ですから」

「ああいえば、こういう女だ。——ほら、食べ。ほしかったんだろ？」

そう言つて、ラウラがお皿に残っていたおにぎりを私に差し出す。

お腹が空いていた私は、『では、遠慮なく』と大口でおにぎりにかぶりついた。

「ふっ。品の無い食べ方だ。頬にご飯粒がついているぞ」

すると、先の仕返しだというように、ラウラが私の頬のご飯粒を取って、口に含んだ。

「ふ、これで貸し借りなしだぞ」

ラウラはまるで長年連れ添った戦友にでも告げるように、得意げな口調でそう言った。

そこにいつもの剣呑な気配はない。あるのは、愉楽の笑みだ。

まるでラウラではないみたいだ。——と思つたが改める。これがラウラ本来の姿なのだ。

今、ラウラは私に気を許している。そう感じた私は、例の話題にふれた。

「ねえ、ラウラ。貴女はなぜそんなにも一夏を倒そうと必死なのですか？」

「二度も聞くな。前にも言ったはずだ」

「なら、私にも二度言わせないでください。貴女の考えは間違っています。貴女自身もその事に気づいている。違いますか?」

ラウラが口をつぐむ。でも、私は止めなかった。

「だから、気になるのです。そこまでして、あなたが何を為そうとしているのか」

「何をしようが、私の勝手だろ。貴様の関知することではない」

「いいえ、しますよ。あなたが討とうとしている人は、私の友達ですから。理由もわからないまま、友人を討たせるわけにはいきません。わかるでしょ?」

そこで初めてラウラが視線を落とした。迷っている。そんな風に見て取れる。

私は声音のトーンを下げ、優しくもう一押しした。

「――よければ、話して貰えませんか?」

沈黙のあと。ややしてラウラが折れた。

「……いいだろう」



自分は戦うために生み出されたデザインベイビーだ。

最初にラウラは自身の事をそう語った。鉄のような、意欲の無い、冷たい声で。

「私は人工遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた試験管ベイビーだ。母と呼べる女性もいなく、父と呼べる男性もない。だから、ふと街角で、楽しそうに談笑を交わす家族を見るたび、得体の知れない感情に襲われた。それが孤独という寂しさだと気づいたのは最近のことだ」

ラウラはグラスに注がれた氷水を見つめながらそう話した。

きつと『味わった孤独は、さながら冷水の中にいるようだった』と云いたいのだろう。

「それを紛らわすため、私は同じ出自の人間を『家族』だと思い込んだ。C-036は姉で、C-038は弟、という具合にな。そんな紛い物の『家族』でも、私はそれなりに満足していた。だが——」

ISの登場で、私のそんなささやかな『家庭』は崩壊した。

そう言つて、ラウラは右目の眼帯を筆り取るように剥いだ。

露わになる黄金の瞳。私はそれを知っていた。

ヴォーダン・オーージュ
「越界の瞳、ですか」

「知っていたか。そうだ、ISの適合性向上のため導入されたナノマシン越界の瞳だ」

ヴォーダン・オーージュ
「ですが、あなたの越界の瞳は、少し違う。なぜ片目だけ？」

「私の越界の瞳は欠陥品なのだ。——危険性はない、不適合など起きない、と言われたにも関わらず、ナノマシンが暴走し、利き目しか機能しない上、開閉すらできなくなった」

「そうか。制御不能で開閉できないから、あの眼帯で消耗を抑えているのか。」

危険性も不適合もない。それは詭弁だ。

ナノマシンはそのサイズゆえ、ウイルスのメカニズムと生体分子が用いられる。つまり、ナノマシンは人工的に作られたウイルス、あるいは機械仕掛けのウイルスだといえる。

そして、インフルエンザにしろ、HIVにしろ、元来ウイルスとは当然変異を起こすものだ。人工のウイルスとはいえ、それがウイルスであるなら、宿り主の環境によって当然変異を起こし、制御不能に陥る事も予見されて然るべき。

きつと開発者はそれを怠った。ラウラはそのツケを払わされたのだ、自身の身体で。

「おかげで、私は出来損ないの烙印を押され、部隊から蔑みの対象となった」

ラウラは眼帯を付け直し、悲しげに続ける。

「加え、視覚という兵士の命も奪われ、戦うことさえ儘成らなくなった。自らの存在意義を失ったとき、私は思い知った。この世には絶望より下があるのだと」

「それでも、あなたは隊に残った」

「私は固執していたのだ。『家族』という存在に。それが紛い物だと解かっているにも、私は寂しさから隊を捨てられなかった。だから、私は軍に残り、訓練を続けた。出来損ないと笑われながら。不完全だと蔑まされながら。幸せだったあの頃に戻れる事を夢みてな」

だが、そんな日など訪れなかった。と、ラウラは言葉を紡ぐ。

「どれだけ訓練しても、私は出来損ないのままだった。連中もそんな私を認めたりはしなかった。もうダメと思った。そんな私の前に現れたのが、織斑教官だ」

そこで悲壮感を帯びていたラウラの声音に、ほんのりと明かりが灯る。

「教官は過度な訓練でやつれていた私をいろいろ世話してくれた。食事をご馳走してくれたり、女性の嗜みを教えてくれたり、な。そんな教官に、私は敬意とも違う、暖かい感覚を覚えた」

あの頃を追憶するように語るラウラの声音は、心成しか嬉々としているように聞こえた。

さぞかし、千冬さんと過ごした日々が楽しかったのだろう。

「だから、あんなに千冬さんを」

「ああ、私はずっとこの人の側にいて、あの人の温もりにふれていたかった。だから、教官が帰国される直前、私は思い切って『自分を貴女の家族にしてほしい』と願い出た」

「自分を、家族に……」

「だが、教官は言った。慈しむような、優しい表情で、『私には弟がいる』と。同時に私は全てを悟ってしまったんだ」

——織斑千冬にとって織斑一夏こそが、唯一愛する存在なのだ。

「一度は理解し、諦めようとした。だが、教官への未練は簡単に消えてくれなかった」

「だから、こんな強攻策に打って出た？」

「そうだ。私は織斑一夏を斃す。斃して、教官の寵愛を手に入れる。嘲笑いたければ、嘲笑え。これが醜い嫉妬である事は百も承知だ。だが、どれだけ嘲笑われようとも、私にはもうこれしかないのだ」

ラウラは憤るようにこぶしを強く握りしめる。
そこに負の感情や悪意はない。ただ悲しさと悔しさだけが、握った
手に滲み出ていた。

♡

◆

♡

ラウラと別れたあと、私は食堂のおばさまに作って頂いた定食を手に、誰もいない廊下を歩いていった。

学生たちは食堂で食後の余韻を楽しんでいるため、廊下はとても静かだ。

その静寂が否応無しにラウラの言葉を呼び起こす。

——私は織斑一夏を斃す。斃して、教官の寵愛を手に入れる。

ラウラのやり方は乱暴すぎると思う。

それに物理的な攻撃を加えたところで、千冬さんの心から一夏を消せはしないだろう。

でも、彼女は兵器として作られた存在。戦うこと以外を知らない少女だ。やり方は歪だけど、ラウラはラウラなりに、千冬さんを振り向かそうと一生懸命なのだろう。そんなラウラを、私は常識や道徳という言葉で軽々しく否定できなかった。

(彼女の想いが届くよう応援してあげたい気持ちはある……)

けれど、一夏を討たせるわけにはいかない。彼には討たれる罪も謂れもないのだから。

《ハニー、まだラウラ・ボーデヴィツヒの事を考えている?》

私が思考の海に潜りかけていると、ヘレツドクイーンが言った。

「よくわかりましたね」

《ハニーはお節焼きだから。でも、ハニー。ハニーはなぜラウラ・ボーデヴィツヒの事を気にかける? 私たちの任務はVTシステムの確認、及び破壊。ラウラ・ボーデヴィツヒの内情を探ることじゃない》

「それは、そうなのですけど」

《それに、これはラウラ・ボーデヴィツヒと織斑千冬の問題。二人の間で解決すべき事柄。ハニーの関知することじゃない。デユノアの件といい、何でもかんでも頭を突っ込むのはハニーの悪いくせ》

「はは。面目ないです。でも、彼女を放っておけないんですよね」

《なぜ?》

「なぜって……そうですね」

なぜか。理由はいろいろある。

任務のためとか、一夏のためとか。でも、一番の理由は――

「どこか昔の自分に似ているからでしょうか」

そう、ラウラは昔の自分に似ていた。孤独で、人の愛情に飢えていた頃の私に。

だから、シンパシーを感じて、助けてあげたいと思っっているのかもしれない。

すると、《レットクイーン》が無い首を傾げた。

《昔の自分? 米軍時代のころ?》

「そういえば《レットクイーン》は知らないんですね。幼いころの私を」

《Yes My honey――そのデータはない。関係向上ためにも、ぜひ聞かせてもらいたい》

「いいでしょう。たまには昔話をするのも悪くない」

私は歩く速度をそのままに、語り口を切った。私の幼き過去、出世について。



私が生まれた国は、アメリカでも、イギリスでもない。ローデシアと呼ばれる国だ。

だけど、ローデシアという国は公式上、存在しない事になっていた。かつて、この国を植民地にしていた大英帝国が、その存在を認めなかったからだ。そう、地上最悪の独裁国家『ジンバブエ』と呼ばれる

ようになるまでは。

私はそのジンバブエに生まれた。

私の父はジンバブエの白人農園主だったけど、母はイギリス・イングラントの出身だった。

そんな二人の馴れ初めは、国境なき医師団に所属していた母が、アフリカに蔓延する飢餓や感染病から子供を救うべくこの地を訪れていた事からだ。その後、二人は恋に落ち、私が生まれたわけだけど、その両親は私が幼い頃に殺害されてしまった。

発端は当政権の政策失敗。相次ぐ国営の失敗により経済を破綻させてしまったジンバブエ大統領は人種隔離政策アパルトヘイトで苦しめられていた黒人を炊きつける事で、人種対立を煽情し、自分に対する批判を反らそうとしたのだ。

結果、黒人による白人農園主の襲撃事件が頻発し、私の一家もその中に含まれた。

そう、己の政治生命を維持するために、私たち一家はその生贄に捧げられたのだ。

こうして、家族を失った私は、アフリカという灼熱の地でストリートチルドレン天涯孤独の身となった。

その日から、宛ても、果てもない、地獄の日々が始まった。

両親と住む場所を奪われた私は、打捨てられた不衛生な小屋の下、毎日餓えに喘ぎながら生き永らえた。空腹に耐え切れず、泥水を啜ったこともあれば、盗みを働いたことも一度や二度ではない。当時の私の良心は、生存の為に腐り果てていたのだ。

とても過酷な日々だった。

今のラウラは、その頃の私によく似ていた。身も心も飢えていた、あの頃の私に。

だから、放っておけなくて、助けてあげたくなってしまっただろう。

でも、ヘレッドクイーン^〳の言う通り、これはラウラと千冬さんの問題。私ごとやかく言える権利はない。でも、やはり——と逡巡して、考えが一周りする。そこで、

「探したわよ」

大人の声がした。凜とした声音だ。

誰かと思いい振り向くと、私のサポートエージェント、エイダが立っていた。

「あら、エイダ。なんか久しぶりですね」

「うるさいわね。どうせ、私はモブ——つてそんなメタはどうでもいいのよ。はい、これ、頼まれていた『織斑一夏誘拐事件』に関する資料、集めて貰ったわよ」

エイダは憤慨しながら、紙の束で私の頭を叩いた。

『助かります』と礼を言い、私はさっそく『N2960・織斑一夏誘拐事件に関しての報告』と記された表紙をめくった。そして、速読に近い速さで読破していく——途中、気になる単語があった。

「反モンド・グロツソ団体？」

資料には、この団体が事件の主犯だと記されているのだが、聞ききれない名前だった。

首を傾げる私に、エイダが補足を加えてくれる。

「名前の通り、IS世界大会へモンド・グロツソの開催に反対している団体よ。あなた、へモンド・グロツソが倫理的に問題視されているのは知っているでしょ？」

「ええ」

へモンド・グロツソは殺傷能力のある武器を使用しているので、倫理的・道徳的に問題視されている。事実として『これはスポーツではない。ただの殺し合いだ』という批難の声も多い（危険だからこそ人氣を博したという者もいるが）。

「彼らはへブリュンヒルデの弟を人質に、大会の中止を要求するつもりだったでしょう。おおよそ、自分たちの意見に耳を貸さず、第二回の開催を慣行した委員会への報復つてところじゃないかしら」

「くだらない。でも、なぜこの事実は公表されなかったのです？」

ラウラは『犯人の素性は不明だ』だと云っていた。

それに事実を公表すれば、すこしは千冬さんの汚名も削がれただろうに。

「それは委員会が団体の肥大化を懸念したからよ。事件の真実を公に

すれば、団体の存在が世間に知れ亘るわ。そうなれば組織が肥大化し、〈モンド・グロツソ〉の反対運動が大きくなるかもしれない」
「確かに反対運動が激化して、〈モンド・グロツソ〉を開催できなくなれば、ISを保有するための建前——競技という基盤が瓦解しかねない」

それを危惧して、事件の真相を闇に葬った。

だとしたら、この書類は非常に機密度が高いことになる。そんなものをどこで手に入れたのか

「〈ワンダーランド〉にIS委員会のデータベースを漁らしたら、あっさり出てきたそうよ」

「ああ、例の検索機構ですか」

〈ワンダーランド〉。

コンピューター技術とネットワークの発達によって超情報化社会となった現代。あらゆる情報がデジタル化され、ネットワークを介し日々蓄積している。そんなデジタル情報を世界規模で取捨選択するシステムが、この〈ワンダーランド〉だ。

この〈ワンダーランド〉は最高レベルの機密事項なので、〈リデル〉である私でさえ装置の所在はおろか、アクセス権限すら与えられていない。知っていることは、そんなとんでもない装置がこの世界のどこかにあるという事だけ。

閑話休題。

「ともかく、ありがとうございました」

私はエイダに再度礼を言い、頭を下げる。

エイダは『まあ、がんばりなさい』と手をヒラヒラ振って去っていった。

「さて、随分、遅くなってしまいましたね」

立ち話をし過ぎた所為で、すっかり時間を食ってしまった。

食事が冷めないうちに、早くデュノアさんのところへ戻らないと。



誰もいない部屋。電気もつけず、ラウラはその身をベッドに沈めた。

光の無い部屋で闇と静寂が彼女を優しく包み込む。まるで母が我が子を抱擁するように。

人は光より生まれるというが、ラウラは違った。彼女は闇から生まれ、影によって育まれた。

そう、人の業という名の闇によって。

<Les Enfants Terribles>。それがラウラを生み、育んだ闇の名だった。

1953年、DNAの二重らせん構造が発見され、1980年代にはその塩基配列を解析しようと『ヒトゲノム計画』と呼ばれるプロジェクトが開始された。その過程で“人”の容姿や性格、能力は、遺伝子によって大きく左右されている事が提唱された。

なら、その遺伝子を人為的に操作できれば、望んだ人間を意のままに生成できるのではないか？

そんな悪しき遺伝子決定論信者の妄執から生まれたのが、この<Les Enfants Terribles>だ。

この計画では、遺伝子操作により戦争に適した人間を人為的に生み出し、それらに徹底した戦闘教育を施すことで、超人的な兵士を量産することが試みられた。ラウラは37体目の試作品だった。

「……………」

ラウラは腿に携えたケースからナイフを抜き、それを見つめる。

無機質なナイフは、暗闇の中でもその殺伐とした光沢を十二分に放っていた。

——まるで私のようだ。

ナイフを見るたび、ラウラは幾度無くそう思ってきた。

人を殺すために作られた道具。人を殺すために生まれた私。どちらにも一緒だ、と。

だけど、あの人はそれを否定した。

お前には心がある。そして生きている。
ならば、お前は生きとして生きている65億の人間となんら変わ
ない。

そんな優しい言葉と共に、あの人は自分を抱きしめてくれた。

遺伝子強化素体は産声を上げないとされるが、その時だけは赤子の
ように泣きじやくった。

一人の人間として認められたことがうれしくて、ただうれしくて、
その事を今でも覚えていてる。

そして、もう一度、あの時のように、その腕で私を抱きしめて欲し
いと思う。

でも、それが叶わない事を、彼女は既に知っていた。

——あの人の温かい腕は、アイツだけのモノ。アイツを抱きしめる
ためだけに、あの腕はある。

判っている。でも、抑えられない。嫉妬してしまう。どうしても奪
いたい。だから——

「織斑一夏、貴様は、斃す」

ラウラは起き上がり、飾ってあった織斑姉弟の写真へナイフを投げ
つける

鋭い切っ先は、闇を切り裂き、千冬と並ぶ一夏の額へと吸い込まれ
ていった。

裂かれる織斑一夏の額。

それを現実のモノとするべく、ラウラは爪を研ぐ。奴の骨肉を切り
裂くために。

第26話 代表候補生VS代表候補生

放課後。トーナメントに近いこともあって、アリーナはたくさんの生徒で賑わっていた。

そこで偶然にも鈴と鉢合わせしたセシリアが、驚いて目をぱちくりさせる。

「あら、鈴さん、今日は一夏さんのコーチをしなくてもよろしいので？」

「そういうあんたこそ、今日はアリスを付け回さなくていいわけ？」

まるでストーカー呼ばわりである。セシリアは心外そうにしたが、周りを嗅ぎ回っていることは事実なので、咽喉から出そうになる反論を飲み下す。

「ゴホン、それはともかく、今回のトーナメントでは、専用機持ちや候補生も多く出場いたしますし。わたくしもアリスさんにかまけていないで、少しばかり特訓しようかと」

「確かに、今年の一年は専用機持ちや候補生が多いらしいしね。ウカウカしてられないわよね」

「ええ。きっちり功績を上げてこそそのエリートですわ。それに——」
戦績が振るわないセシリアにとっては、ここらで挽回したいところであった。

今回の学年別トーナメント。是非とも優勝ないし良い成績を残したい。

(そうになると、鈴さんは大きな壁になりそうですわね)

ちらりと鈴を横目で見ると、鈴と目が合った。

「どうやら、お互い同じ事を考えていたようだ。ならば、やることは一つ。」

「鈴さん、わたくしと模擬戦いたしませんか？」「セシリア、ちよつとあたしと模擬戦しない？」

意見が合致するやいなや、二人は弾けるように跳んだ。そして、専用機を展開し、互いの攻略法を見つめるべく意識を集中する。

そのとき、二人の氣勢をそぐように、予期せぬ事態が発生した。

↑——警報：照準レーダー波を検知しました——↓

突如、出現した警告メッセージは、別の方向からの『ロックオン』を知らせるものだった。

「くっ！ 何ですの!？」「ちっ！ 誰よっ!？」

警戒を強める二人の許に飛来してきた物体は、杭に翼が生えた砲弾。装填筒付き翼安定徹甲弾だった。

第三者からの攻撃に驚きながらも、二人はすぐさま後方へ跳んでかわす。同時に予告も無しに攻撃してきた無礼者の正体が拡張現実で表示された。

↑——IS情報：ドイツ第三世代型『シュヴァアツェア・レーゲン』——↓
『<シュヴァアツェア・レーゲン>!？』

<シュヴァアツェア・レーゲン>。二人はこのISをよく知っている。その操縦者が誰なのかも。

「いきなり、挨拶ね、ラウラ・ボーデヴィツヒ。一体、どういふつもりよ」

「ええ。攻撃の意図を明らかにしてもらえます？ まさか誤射なんておっしやらないですわよね」

ラウラは特殊部隊だ。よもやハイテク装備の扱いに長けた専門家が、素人のような暴発や誤射を起こすはずがない。つまり、先の攻撃は、故意に他ならないということだ。

しかし、ラウラは肯定も否定もしなかった。ただ、態度でその目的を示した。

↑——警報：シュヴァアルツェア・レーゲンのジェネレーター出力の上昇を確認——↓

なおも上昇していく<シュヴァアツェア・レーゲン>のパワー。備えられたレールガンにも紫電が奔る。それは紛れもない臨戦態勢への移行であり——彼女たちに対する明確な挑戦状であった。

「何？ 戦る気？ あたしにボコられたいわけ？」

鈴の憎まれ口に、無口を通してきたラウラが笑った。

「ボコる？ はっ、無理だな。——見せてもらったぞ、貴様らの模擬戦。第二世代一機に二人掛かりであのザマとは、同じ候補生として片

腹痛い」

「なんですつて?」

「候補生などやめて、下らん種馬に尻でも振っていると言っている」
侮蔑と嘲笑の籠った冷笑。件の模擬戦だけなら、セシリアも鈴も笑って流せた。

だが、想い人を、その胸の中に秘めた恋心を、ぞんざいに扱われては黙っていられなかった。

それが起爆剤となり、冷静だった二人の感情が一気に爆発する。

「貴女、ちよつと下品でしてよ」

「あいつの事知らないくせに、軽々しくバカにしないでくれる!」

両者の得物を握る手にも自然と力がこもる。

ラウラはその二人を挑発するように、クイクイと人差し指を動かした。

「なら、私を屈服させてみる。できたなら、撤回してやる」

「上等!」望むところですよ!」

三度、セシリアと鈴の声が重なり合うと、二機のジェネレーターが唸りを上げた。



代表候補生同士が激戦を繰り広げている頃。それを知る由もない一夏とシャルルは、和気藹々と会話を弾ませながら、アリーナへ続く通路を歩いていた。話題は今月おこなわれる学年別ペアトーナメントについてだ。

「一夏、今日も特訓するんだよね」

「ああ、トーナメントも近いしな。今日もコーチ、頼むぜ、シャルル」
「うん、任して」

シャルルが鞆を掲げて応える。それに一夏は頼もしさを感じる。

あの夜、シャルルが事情を打ち明けたことで、ふたりは以前より打ち解けた関係になっていた。男性の友人を作り損ねたことは残念

だったが、こうして新しい友人ができたことは素直に喜ばしい。

しかし、それを歪解や誤解する者がいることが悩みの種だった。たとえば、音もなく現れた篠ノ之箒もその一人だ。

「おまえたち、最近、いやに仲がいいな」

「うおっ!?」「えっ!?」

前触れもなく現れた第三者に、一夏とシャルルは揃って飛び上がった。

それに不満を漏らしたのは、現れた第三者——篠ノ乃箒だ。

「な、なんだ、その反応は。人を幽霊みたいに……」

「ああ、悪い悪い」

「ごめんね、突然のことで、びっくりしちゃって」

「いや、怒っているわけじゃなくてだな」

平謝りする一夏と、ちゃんと謝るシャルルに、箒は毒気を抜かれる。

それにいきなり話しかけた自分にも非はあるので、彼女は矛を収めた。そんな時である。

「ねえねえ、第2アリーナで代表候補生同士が模擬戦やってるって!」

「え、誰と誰?」

「わかんない。でも、両方とも専用機持ちらしいよ!」

と、生徒たちが興奮した様子で、一夏たちの横を走りすぎていく。

それを横目で見ていた箒が言った。

「代表候補生で専用機持ち?」

この学園に専用機持ちの代表候補生は10人といない。

とくれば、該当する人物は自然と限られてくる。

「セシリアと鈴が模擬戦をしているのか?」

トーナメントに近いこともあり、二人が模擬戦をしている事は大いに考えられる。

だが、一夏の直感——いや、悪寒がそれを否定した。

脳裏を過る、隻眼の少女。嫌な予感がした。途轍もなく嫌な予感が。

「俺たちも行ってみよう……」

そういうが早く、一夏たちは走り出した。

「ココが整備区画ですか」

IS学園では、二年過程からISの開発と整備を専攻した学科がひとつ設けられる。私がやってきたのは、その学科生たちが実習を行う区画だ。この区画にはISの開発や整備に必要な機材や設備が用意されている。それを利用して連戦で消耗したく赤騎士を整備しようと思つて訪れた次第だ。

「さてと、12番ハンガーですね」

自主学習に勤しむ整備科二年生を眺めながら、私は充てられた整備ハンガーに向う。

その途中、颯爽と一人の二年生が現れた。

「リデルさん♪」

陽気な声で現れたのは、二年のエースで新聞部部长、まゆずみかおるこ 黛薰子先輩だ。

実は、この一週間、ずっとパラッチされているのだ。なんでも『新しい専用機持ち』である私をどうしても取材したいらしい。目立ちたくない私は頑固拒否しているのだけど。

「またあなたですか。取材は受けないって、何度も言っているでしょ？」

「そう言わないで。今月の一面は『突如現れたダークホース。その素顔』で行こうと思つているのよ。だから、お願い！ このとーり！」
両手を合わせ、拝み倒されても、私は断固拒否した。

ええ、ダメですとも。一言も受け答えする気はありません。

「わかつたわ。こうなったOKして貰えるまで徹底抗戦よ！」

黛先輩は何処からかパイプ椅子を引っ張り出してきて、ハンガーの前にドンと腰掛けた。

はあー。この人、私がOKするまで、ココを動かないつもりですね……。

「勝手にしてください。ヘレッドクイーン、〈赤騎士〉を待機モードAで展開」

《Yes my honey——待機モードAで展開》

そう命令して、赤いナイフをハンガーに放り投げる。

ハンガーに収まった〈赤騎士〉を見た黛先輩は、興奮気味にICレコーダーを取り出した。

「おお、これが噂に聞く〈赤騎士〉ね！　ねえ、AIさん、あなたのご主人様ってどんな人？」

《ハニー？　ハニーは勇敢さ可憐さを兼ね合わせた、まさに戦乙女のような——》

「こら、ヘレッドクイーン！　余計なことしやべってないで自己診断プログラムを起動しなさい。精度はレベル3。診断対象は全システム。診断結果は私の個人端末に出力する！」

余計なことをしゃべられては敵わないので、乱暴にインタビュを遮る。

隣で黛先輩が頬を膨らましていますけど、そんなの知りません。

《Yes My honey——自己診断プログラム〈Lv3〉、対象ALL プロセス開始 RUN》

自己診断プログラムが走り出すと、システム画面でウサ耳を生やした女の子が『うんしょつ』と〈Please Wait〉のプラカードを掲げた。これは〈赤騎士〉のOS〈ホワイトラビット〉のステータスガジェットだ。

それが私の端末に〈赤騎士〉の診断結果が出力する。

「なにになに？　駆動系と動力系に〈クラスB〉の不具合か」

深刻というレベルでもないけど、これは一度分解して、総点検した方がいいかもしれない。

私は専用の器具で〈赤騎士〉のパーツを外しに取りかかった。

《ふふ♪》

「どうしました、ヘレッドクイーン？　ずいぶんと機嫌がいいですね」

《こうしてハニーの手で可愛が^{メンテナン}ってもらうのは久しぶりだから》

「そう言えばそうですね。一カ月ぶりぐらいですか？」

《正確には42日と16時間32分19秒ぶり。可能ならハニーの手で定期的に見てほしい》

「整備班のメカニックの方が腕は確かですよ？」

《でも、ハニーの手でメンテナンスしてもらえる方が——》

「してもらえる方が？」

《うれしい！》

「そう言ってもらえると専用機持ち冥利につきますね」

さて、次は動力ユニットだ。

私はジェネレーターの外殻を取り外し、動力炉リアクターの点検に取り掛かった。

《あはん。ハニー、そこは大事なところだから、やさしく♡》

「気色悪い声を出さないでください。さもないと外部電源のプラグを引っこ抜きますよ？」

《No No my honey——そんなことされたら、ハニーとおしゃべりできなくなる……》

色っぽい声をだすヘレツドクインを窘め、動力内部をチェックする。動力ケーブルの消耗が進んでいたので、新しいケーブルに交換しておく。

あとは動力炉——正確には反物質ペレットという部位——の消耗が増してきたので、交換しておきたいところだったが、あいにく<赤騎士>のリアクターはこの学園の訓練機と互換性がない。つまり、<打鉄>や<ラファールリヴァイヴ>のリアクターは使えないのだ。

武装も失いましたし、あとでパーツを送ってもらおうよう伝達しておかないと。

「さて、点検の方は、大体こんなものでしょうか。——ん？」

額に滲んだ汗を拭くと、整備科の生徒たちがザワついていることに気づいた。

なにやら、巨大モニター前に大きな人集りが出来ているけど、どうしたのでしょうか。誰かがアリーナで模擬戦をしていて、それを観戦しているようですが。

(それにしても、やけに騒がしいですね)

生徒の模擬戦なんて珍しくないから、そうそう騒がしくならぬだけだ。

どうにも嫌な予感がした私は『すいません』と人を掻き分け、中継されているモニターの前に向かった。

「やっぱり……」

案の定、戦っていたのは、鈴とオルコツトさんと——ラウラだった。

「やってるのはイギリスと中国の代表候補生かな？　相手は最近転入してきたドイツの？」

うしろからついてきた黛先輩に『ドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒです』と答えた。

「ほお、じゃあ、代表候補性同士の模擬戦か。そりや盛り上がるわけだ。——っていうか、あの三人、試合用プログラムを起動してなくなっている？　訓練用リミッターまで外してるし」

試合用プログラムは試合判定を制御するプログラムだ。そして、訓練用リミッターはパーツの消耗を抑える制御プログラム。その二つを使用していないということは、彼女たちは、模擬戦でも、試合ではなく、制限なしの戦闘をしていることになる。

「これってやばくない？　止めた方がいいよね」

「ええ、このままじゃ鈴たちが危ないかもしれません」

鈴たちの実力は、代表候補性として遜色ない。だが、ラウラの実力はその上にある。特殊部隊としての経験、遺伝子的素質、ナノマシンによる強化処置。さらに<シュヴァルツェア・レーゲン>は実戦に耐えうる完成度を持つ。二対一であっても、彼女の優位性は変わらぬ。

試合形式で挑まなかったことを鑑みれば、ラウラは鈴たちを再起不能にするつもりだろう。

（今すぐ止めに行った方がいいですが——）

分解され、どこかグロテスクな容貌を晒す<赤騎士>を見て、私は親指の爪を噛んだ。

オーバーホール中にある<赤騎士>は、現在動かせる状態にない。

今から組み立てたとしても20分は容易にかかるだろう。それまで鈴たちは持ち堪えられるだろうか。いや今の戦況を見る分には……。(何か策はないでしょうか……)

私は忙しなく辺りを見渡す。すると、あった。この状況を打開できる策が。

「黛さん、あなた、整備科二年のエースでしたよね。それを見込んでお願いがあります」

♡

◆

♣

♠

唐突に挑んできたラウラに、二人は苦戦を強いられていた。打つ手、打つ手がいなされるのだ。決定打どころか、装甲に傷を負わずとも敵わなければ、反撃の余地もない、その状況はまさに「手も脚も出ない」だった。

「アリスはこんな奴とひとりで……このっ！」

鈴は苦し紛れに衝撃砲を放った。しかし、ラウラは予見していたかのように手を翳す。

それだけ。たったそれだけのしぐさで、渾身の衝撃砲が霧散した。

「くっ、A I C……。こうも攻撃を無効化されたんじゃ……」

《龍咆》は空間を圧縮し、衝撃波を打ち出す運動エネルギー兵器。運動エネルギーを奪うA I Cは、まさに《龍咆》の天敵といえた。かといって《双天牙月》で近接戦闘をしかけようにも、やはりA I Cがある手前、迂闊に近づけない。

「ふっ、その程度か、中国の代表候補生。どうやら機体も腕前も二流のようだな！」

ラウラは一步踏み出し、イグニッションブースト瞬時加速を発動した。間合いを詰めるやいなや、レールガンの砲身を鈴の腹部に叩き込む。そのまま砲身の先端で鈴を持ち上げ——発砲。

「!?!」

ゼロの距離から極音速の徹甲弾を捻じ込まれ、鈴の眼球が焦点を

失って暴れ回る。

『鈴さんっ！』というセシリアの遼友を案じる声さえも、今の彼女には届かなかった。

「なんてまねをつっ！——おゆきなさい 《ブルーティアーズ》」

射出されたビットを警戒して、ラウラは機体を後退させた。それをビットが三次元機動で追撃する。執拗に、狡猾に、狩りでもするように。やがて訓練された猟犬のごときビットがラウラを追い詰めた。

（捉えた！）

包围を核心したセシリアが、ビット全機に発砲命令を下す。

撃て、撃て、撃て、撃て。

……………しかし、ビットたちは命令を履行しなかった。

「なぜですの!?!」

セシリアの脳裏に真耶との一戦が過ぎる。まさか同じ失態を？

セシリアは慌てて《ブルーティアーズ》のコンソールに視線を落としましたが、

↑——《ブルーティアーズⅠ》BT—energy [■●□□□] (O

ffline) ↓

↑——《ブルーティアーズⅡ》BT—energy [■●□□□] (O

ffline) ↓

↑——《ブルーティアーズⅢ》BT—energy [■●□□□] (O

ffline) ↓

↑——《ブルーティアーズⅣ》BT—energy [■●□□□] (O

ffline) ↓

エネルギーならまだ残っていた。では、なぜビットはその撃鉄を下ろさない？

もしかして、技術的なトラブル?……技術的な、トラブル……そうか、そういう事か!

「ECM!!」

ECM。Electronic Counter Measures。電子対抗手段のことだ。

〈シユヴァツェア・レーゲン〉はこれを用いて《ブルーティアーズ〉

から《ブルーティアーズ》へ送信される攻撃命令を妨害していたのだ。初歩的な手だが、初歩的だからこそ見過ごしがちになる。

ラウラは本機と子機の通信途絶しているうちに、ビットをワイヤーブレードで撃墜した。

「くっ、ビットがなくても……」

ビットを撃墜された焦りから《スターライトMkⅢ》を連発するが、精密性を失った射撃はラウラに突き入る隙を与えるだけだった。

セシリアの攻撃を掻い潜り、接近したラウラは、まずセシリアの^{スターライトMkⅢ}得物を打ち払った。次いで無防備になった胸部へ肘打ち、裏拳、正拳突きと流れるような打撃技を打ち込む。相手がよろめいたスキに背後を取り、裏膝を蹴って跪かせ、頭部を地面に叩きつけた。

この間2秒足らず。

セシリアはショートブレード《インターセプター》を展開することさえできなかった。

「狙撃の腕は大したものだが、格闘技術はまるで素人だな。貴様程度の操縦者、私の部隊には五万というぞ？　むしろ下から数えた方が早いぐらいだ」

這いつくばるセシリアを踏みつけ、ラウラがその背に向かってレールガンを発砲する。

それにセシリアの体が不自然なほど跳ね上ががる。しかし、ラウラは攻撃の手を緩めず、なおもレールガンに次弾を装填した。再び発砲。

「ぐうは——ッ！」

勝敗は決した。にも関わらず、ラウラは戦闘を継続する。

その死体に鞭打つ行為に、瀕死の鈴が力を振り絞って激昂した。

「あんたねっ！　なんのつもりよ、こんなマネしてッ！」

鈴は<甲龍>の非固定浮遊部位をスライドさせて、《龍咆》を構えた。

その中央が黄金色に輝くも、ラウラは動じない。この攻撃パターンは既に読んでいた。

「見誤ったな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うのは、失

策だ」

指摘通り、《龍咆》が衝撃砲を吐き出すより早く、ワイヤーブレードがその中心部を貫いた。

内部機構を蹂躪された《龍咆》が、その威力を發揮することなく爆散する。

さらにラウラはワイヤーブレードを翻して<甲龍>の四肢を拘束し、ワイヤーを介した電撃を加えた。

「!!」

もはや声にもならなかった。

精神力を根こそぎ奪われた鈴が地に墜ちる。それをラウラは嘲笑った。

「ははは、もう終わりか、チャイニーズ」

「ふ、ふん。まだ、これから、よ」

肩で息をしながら、なんとか鼻で笑う。

しかし、彼女が限界なのは誰の目から見ても明らかだった。

「そうか。それなら手加減はしない」

サディステイックな笑みを浮かべると、<シュヴァルツエア・レーゲン>のレールガンに紫電が走った。レールガンの威力は電力量に比例する。余剰電力が変質するほどなら、その威力は想像しがたいものになる。文字通り、加減なしだ。

<甲龍>のエネルギー残量は僅か13。さしもの鈴も『ここまでか』とまぶたを閉じた。

その時だ。

「ラウラ、何してやがるっ!!」

アリーナに一夏の声が響いた。

♡

◆

♣

♠

俺たちがアリーナに駆けつけると、目を覆いたくなるような光景が広がっていた。

虫の息であるセシリアたちをこれでもかと翔るラウラの所業に、血が滾り、理性が揺らぐ。

ISも《機体警告維持域》に達しており、ひっきりなしに戦闘停止を訴えていた。

「まづいんじゃないか？ あのままじゃ機体だけじゃなくて、操縦者にも危害が及ぶぞ」

箒が言った。現在セシリアたちのISは、辛うじて補助動力で維持されている状態だ。

その補助エネルギーまで切れてしまったら、冗談でもなく二人の命にかかわる。

堪らなくなった俺は叫んだ。

「ラウラ。てめえーなんのつもりだ!!」

俺の声に気づいたラウラがこちらに振り向く。そして待ち侘びたような笑みを浮かべた。

「見ての通りだ。釣りをしている。貴様を釣る為のな。こいつらはそのエサだ」

そういつて、ぐったりとする鈴を蹴り飛ばす。俺は不覚にも感心してしまった。

コイツ、俺の事をよく知ってやがる。仲間を虐げられて、黙ってられるわけがない。

俺は道徳的な判断よりも本能に近い反射で〈白式〉を展開した。

「シャルル、鈴とセシリアを頼むっ！」

「でも、一夏ひとりじゃボーデヴィツヒさんにはー！」

わかっている。俺の実力じゃラウラに敵いつこない。

だけど、俺が鈴たちを助けに行くのは悪手だ。ラウラの狙いは俺。その俺が救出に向かえば、その矛先が鈴たちに再び向きかねない。逆に俺が囷になれば、ラウラから鈴たちを引き離せるはずだ。

「いくぞ、〈白式〉っ!!」

素早く《雪片式型》を展開して、《零落白夜》でアリーナの遮断シールドを破壊する。出来た裂け目に向かって瞬時加速を発動し、俺はラウラに斬りかかった。それをラウラがプラズマ手刀で受け止める。

スパークする二つの得物。それ越しに、俺は怒りをぶつけた。

「ラウラ、こんな事はやめろ！　こんな事をして、お前の求めているモノは手に入らない！」

「分かっている！」

帰ってきた返答に俺は氣勢を削がれる。

なんだよコイツ、最初から分かかっていてこんな事を？

「だったら、何でこんなことしてんだよっ！」

「それしか術を知らないからだ！　誰も私に人の愛し方を教えてくれなかった！　教わったのは、いかにして人を殺すかという術だけだ！」

激情をぶちまけながら、ラウラがプラズマ手刀で《雪片式型》を打ち払う。

解除される罫迫り合い。しかし、俺は次の一手を繰り出すことができなかつた。

ラウラが酷くしゃがれた顔をしていたから。

「教えてくれ、織斑一夏。どうすれば、あの人に愛してもらえる？……私はどうすればいい！」

ラウラはひどく困惑した様子だった。

そんなラウラの姿に、俺は言葉を失う。

どうすれば千冬姉に愛してもえらえる？　わからない、そんなこと。当たり前のように愛されてきた俺は、愛される理由など考えたことすらない。そんな俺がラウラに愛を諭せるはずがなかった。

「——答えられないなら、私に指図をするなッ！」

何も言わない俺に、ラウラが失望の色を強く滲ませる。同時にA I Cで俺の自由を奪った。

そして、動けなくなった俺の額に、レールガンの砲口をポイントする。

「終わりだ、織斑一夏。貴様を斃し、この想いを成就させる！」

足掻きとして体を揺さぶってみたが、まるでびくともしなかつた。くそ、やられる。

そう覚悟を決めた次の瞬間、どこからともなく一発の砲弾が飛来し

た。それがくシユヴァツエア・レーゲンへのレールガンに命中して、照準をぶらす。おかげで徹甲弾が俺から外れた。

「シャルルか？」

プライベートチャネル

個人間秘匿通信で確認するが、シャルルは首を横に振って否定した。

『違うよ。彼女が来てくれたみたい』

どこか意気揚々と語るシャルルの視線の先には、彼女が立っていた。

そう、頼りになるアイツ——アリス・リデルだ。

「ちよっと、おいたが過ぎるんじゃないやありませんか？」

120mm滑腔砲《バウンサー》を装備したく打鉄に乗るアリスが、勇ましく言い放った。

第27話 ラウラ・ボーデヴィツヒは友達が少ない

「おいたが過ぎるのではありませんか、ラウラ?」

44口径120mm滑腔砲を携え、私は悠然と言い放った。

しかし、内心でじわりと冷汗を流す。

ラウラは<赤騎士>でも散々手古摺らされた相手。正直、<打鉄>では心許ない。かてて加え、メンテナンス中の機体を拝借してきたため、コンディションも万全とは言い難く、すでに二箇所駆動系が不調を訴えている。専用の近接ブレードや予備弾装もない。

(でも、勝機はある)

現在、黛さん率いる整備科の生徒たちが、急ピッチで<赤騎士>を建造してくれている。五分もすれば、<赤騎士>をここに送り込んでもくれるだろう。それまで持ち堪えられれば、こちらの勝ちだ。

「さて、悪い子はお仕置きですよ。ヘレツドクイーン、モードミリタリー」

.....

うんともすんとも言わないコンソール。当然だった。

カツコよく言い放つてこの有様に、一同が「ん?」と首を傾げる。

「い、いまのは忘れてください」

私は赤面しながら手で動力をAPUからジェネレーターに切り替える。

『どうせ俺には——』なんて怒ったように、<打鉄>の出力が乱暴に跳ね上がった。

「さ、さて、仕切りなおしといきましょう」

私は膝に蓄えた跳躍力を解放、FCSのターゲットカーソルでラウラを捕捉して、引き金を絞る。

発砲。

だが、ラウラはAICを発動し、戦車一輦を破碎する装弾筒付翼安定徹甲弾を容易く受け止めた。

(はやり、正面からの攻撃では、ラウラに通じませんか。——ならば)

と、私は<打鉄>の脇腹に装備されている小太刀型のHEATダ

ガーを抜いた。

ただし、狙いは<シユヴァルツヘア・レーゲン>本体ではなく、その足元だ。

爆風で舞い上がった粉塵が、ラウラの視界を遮る。

A I Cは視覚に依存するところがある。視界を奪った状態なら反応も鈍くなるはず。そう読み、素早く<シユヴァルツヘア・レーゲン>の側面に回り込んで、零距离から装弾筒付翼安定徹甲弾を撃ち込む。

予想通り、放った徹甲弾がラウラの横っ腹に突き刺さった。

「ぐっ……」

横殴りに強い衝撃を受けたラウラが、たまらず怯む。

すかさず、2射目の引き金を絞る。――が、そこで<打鉄>がアラートを鳴らした。

↑――警告：第三、第七アクチュエーターの出力が低下。戦闘用出力を維持できません――↓

↑――警告：反動制御スタビライザーに異常を確認。照準に深刻な誤差が発生――↓

くっ、反動の強い火器を使った所為で、機体の不調に拍車が掛ったか。

「ふん、そのコンディションでは、もう戦えまい」

機動が鈍る私に、ラウラがすかさずレールガンで反撃してくる。

極音速で迫りくる翼付きの徹甲弾。こちらと同じAPSFDSだ。

私は咄嗟の判断で、身を前方に放り投げた。機体に鞭打つての緊急回避。さすが日本製、こんな状態でも、どうにか動いてくれた。

しかし、その場を凌いただけで、不具合は継続中だ。

「アリスッ！ 下がってー！」

そこへデユノアさんのISが二丁のアサルトライフルを構え、ラウラに掃射した。

12・7mmタンクステン弾の弾雨にさらされたラウラが堪らず距離を取る。そのラウラを一夏が<白式>の機動性を活かして追撃する。その間に、デユノアさんが私のカバーに入った。

「アリス、大丈夫?」

「ええ、おかげで助かりました。——武器と弾薬を」

一夏がラウラの注意をひきつけている間に、榴散弾砲《レイン・オブ・サタデー》とその予備弾装を受け取る。弾を<打鉄>の武装支持架に備え付けたところで、一夏がこちらに吹き飛ばされてきた。

それを優しく受け止めると、<打鉄>の全身から気化した緩衝材が噴き出す。

↑——報告：ダメージコントロール成功。衝撃の相殺率94%——↓

<打鉄>には優れた衝撃吸収装置ショックアブソーバーが装備されており、それこそ戦車の砲火を受けても怯まない。<打鉄>が堅牢なISだと称される謂れはここにある。まさに守るための軍隊——自衛隊の主力機に相応しいISだ

「大丈夫ですか、一夏」

「わりー。助かった。でも、勢いよく向かって行って振り返り討ちとは、ざまーねえな」

「いえ、あなたが気を引いてくれたおかげで、無事に武器を受け取れましたよ」

自嘲する一夏にそう返答し、《レイン・オブ・サタデー》のポンプをスライドさせる。

それに倣ってデュノアさんもクイックリロード高速装填で弾倉を交換した。一夏も《雪片式型》を構え直す。

対するラウラは<白式>を放り投げたであろうワイヤーブレードを回収し、体制を整えた。

「アンティーク第二世代が二機に、擬きが一機。これでようやく、まともな戦闘ができそうだな」

圧倒的な数的不利にも関わらず、ラウラの表情に焦りはなかった。その余裕は虚勢や強がりでもなく、本当にこの状況を看破できると見込んでいる様子だ。

そして事実、私たちもラウラを止められる気がしなかった。AICのまえでは、実弾系の武器も《雪片式型》のシールド無効化攻撃も止められてしまう。圧倒的に決定打不足なのは否めない。

「こんなことならリヴアイヴを爆装してくるんだったよ。アリス、何かいい作戦はない？」

「あります。ですが、まだ使えません。だから、もう少し耐えてください」

エースの名が伊達でなければ、そろそろ黛さんたちがく赤騎士を送り込んでくれるはず。

そうならば決着など、すぐ着けられるのだけど、その見通しはまだ立っていない。今はこのく打鉄で粘るしかなさそうだった。

「では、リターンマッチというか」

ラウラが得物を見定めるように身を屈め、突撃体制に入る。私たちも得物を構える。

次の瞬間、私たちの視界を遮るように、赤い機体が割り込んできた。

赫々と燃えるような装甲。騎士を彷彿させるフォルムと大剣。私の相棒く赤騎士だ。

「やっつですか。遅刻ですよへレッドクイーン」

《Sorry my honey——迎えに手間取った》

「まったくへレッドクイーンに呼ばれて来てみれば……。これだからガキの面倒は疲れる」

へレッドクイーンとは異なる厳かな声音。

ラウラはオッドアイを大きく瞠き、驚愕を露わにした。

「きよ、教官!？」

そう、私に代わってく赤騎士を操縦していたのは、織斑千冬だった。

「アリーナのシールドを壊される事態になったら、教師として黙認しかねるからな。責任者である私が出張ってくるのは当然だろう。さて、これ以上続けるようなら、私が相手になるぞ？ 丁度、勝手の良いI Sもあることだしな」

動揺を隠し切れないラウラに、千冬さんが《ヴォーパル》を突きつける。

ラウラに動揺が走った。

「きよ、教官、わ、私と戦うおつもりですか!？」

一步下がり、たじろぐラウラの瞳は、何かを訴えかけるように震えていた。

だが、千冬さんは意に介さず、猛禽類を彷彿させる双眸で睨みつける。

「そうだ。素行の悪い生徒には、体で解らせる。ヘレッドクイーン、システムを戦闘用に切り替えろ」

《Yes Brunhild——訓練用プログラム凍結、リミッター解除。モードミリタリー》

ヘレッドクイーンが命令を履行し、赤騎士がその真価を発揮するべく鬨の声をあげる。システムは正常に動作しているようだった。さすがは整備科のエース、腕は確かのようなのだ。

「さて、おまえはどうする、真つ当な言い分があるなら、聞いてやらなくもないぞ?」

「……………いえ、ありません。騒ぎ立てしたことを、申し訳ありませんでした。猛省します」

そう詫び、ラウラはシユヴァルツエア・レーゲンを解除した。

そして肩を落とし、どこか覚束ない足取りでアリーナを去っていく。

どこか哀愁が漂う背中ではあったけど、私たちは安堵した。

「ふう、千冬姉、助かったよ……。あ、いえ、助かりました、織斑先生」
慌てて訂正する一夏だったが、千冬さんは注意せず、私の方にやってきた。

そして、私をぎゅーと抱きしめる。

「リデル、あまり無茶するなよ」スリスリ

衝撃的な画に、一夏とデュノアさんが「え?」「な?」と開口した。気持ちにはわかる。いきなり千冬さんが私にデレたのだから、驚きもするだろう。

でも、これにはちゃんとした理由があるから聞いて欲しい。

「一夏、勘違いしないでください。彼女は千冬さんではなく、ヘレッドクイーンです」

「は?」

「だから、この千冬さんはヘレッドクイーン<の自動人形による欺瞞です。ほら、ヘレッドクイーン<、そのテクスチャーを解除して、あなた専用のテクスチャーを展開しなさい」
「うむ」

次の瞬間、千冬さんの姿がぱつと光って、赤色スーパーロングの美女に早代わりした。

それを見て、ようやく理解に及んだ一夏が掌をポンと叩く。

「なるほどな。こいつは<ゴレム>の亜種みたいなもんか」

「じゃあ、アリスが言っていた作戦って、このこと？」

「ええ、ラウラは千冬さんに従順ですから。それを利用して彼女の暴拳を止めるのが作戦でした」

「じゃあ、さっきのはヘレッドクイーン<が一人二役を演じていたってこと？」

《Yes Ms Dunois——なかなかの演技ではなかっただろうか？》

「うん、ハリウッド女優も顔負けの名演技だったよ。すっかり騙されちゃった」

《ふふ——ところでハニー、いつまで<打鉄>に乗っているの？》
「気付くとヘレッドクイーン<の瞳からハイライトが消えていた。

そのクセ、顔はニッコリと穏やかだ。なんか、とても怖いですが、それ。

《そんなに<打鉄>がいいの？》ゴゴゴ

「え？ <ヘッドクイーン>、どうして《ヴォーパル》、抜いて……？
ひゃ!？」

私は振りかざされた《ヴォーパル》を寸前のところで躲した。

《あー！ よけたっ！》

「よけるでしょ普通！ 学園の備品を壊す気ですか！」

《私という専用機がありながら、他のISに現を抜かすハニーが悪い！》

「抜かしていません！ ……いいISだとは思いましたが……（ボソ）」

《ほらッ!》

なおも、振りかざされる《ヴォーパル》。

臆病風に吹かれた私は、個人間秘匿通信で一夏たちに助けを求めた。

「あ、あの、一夏、デユノアさん、た、助けて貰えませんか?」

「助けてって、＜赤騎士＞はお前の専用機だろ? 自分でなんとかしろよ、ぷぷ」

「あ、今笑いましたね。自分の専用機に迫られて涙目の私を笑いましたね!」

なんていう人でしょう。傍目から見るとは、面白いと言いたいのではないか!

せっかく助けてあげたのに、この仕打ち。人の所業とは思えません!

「さて、鈴とセシリアは箒たちが運んでくれたようだし、見舞いがたちよつと様子を見にいつてくるわ。じゃあな、アリス」

「あ、待って一夏。僕も一緒に行くよ。じゃあね、アリス。また後で」

二人は私に見向きもせず、仲良くアリーナを去っていく。

その後、操縦者とその専用機の奇妙な鬼ごっこは、私が土下座するまで続いた。

♡

◆

+

♠

場所は移って保健室。

箒と他の生徒たちの手によって運ばれた鈴とセシリアは、保険室で療養を受けていた。

幸いにも、ISの保護機能のおかげで、症状は軽い打撲で済んだそうだ。いま、彼女たちは備えつけられたパイプベッドの上で養生を取っていた。

「何で助けにきたのよ。あの後、あたしがどかーんと逆転するところだったのに」

「そうですね。あの後、わたくしの可憐な逆転劇が待っていましたのに」

開口一番。それが見舞いに来た一夏に対する第一声だった。

どうやら、派手に負けたのが恥ずかしいらしく、それを隠すために強がっているらしい。

一夏は苦笑しながら「そりや悪かった」とあたりさわりのない相槌を打ち、

「それよりすまん。俺とラウラのいざこざに巻き込んでしまった」

今回、ラウラは自分に一夏を嫉妬するため、あのような暴挙を仕出かした。それだけに責任感の強い一夏は、自身の非を感じられずにいらなかった。——自分がもつとしつかりしていれば、ラウラの暴挙を止められたのではないかと。

「気になさらないでくださいませ。ラウラ・ボーデヴィツヒさんと戦ったのは、わたくしたちの意思。巻き込まれたわけじゃありません。負い目を感じる必要はありませんわ」

「そうよ、あんたが気に病む必要はないわ」

「そう言ってくれれば、助かるよ」

柔らかな笑みを浮かべる鈴とセシリアに、一夏はすこし救われた気がした。

もちろん、それだけで胸の内が晴れたわけじゃなかったが。

(やっぱり、このままじゃいけないよな。俺がラウラをなんとかしないと)

ではなければ、犠牲者が増えていく一方だ。

また、それを未然に防ぐことが、巻き込んでしまった彼女たちへの罪滅ぼしになるだろう。

そんな使命感に駆られた時、どどどと保健室が激しい揺れに襲われた。その揺れに棚の薬瓶がカチカチンと音を立てる。保険医が慌てて戸棚を支えようとした瞬間、保健室のドアが乱暴に開いた。

そこから雪崩れ込んでくる、人、人、人。某日のビックサイトを彷彿させるような人の群れだ。

流れ込んできた人の群れの手には、一様に一枚の用紙。

それから察するに、彼女たちはケガ人や病人の類じやなさそうだが。

「ねえ、私と組んでっ！」

そのうちのひとりが例の用紙を差し出し、一夏とシャルルに頭を下げた。

それを皮切りに他の生徒たちも「組んで」「組んで」と用紙を差し出してくる

「いや、いきなり組んでっといわれても……」

事態が呑み込めない一夏は、とりあえず差し出された用紙を手に取る。

文面には以下の事が記されていた。

・「緊急」学年別個人トーナメントの仕様変更について

今月、開催する学年別個人トーナメントでは、より実践的な戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが組めなかった者は、参加資格が与えられないので注意すること。

「なるほど。組んでくれて、この事か」

つまり一夏とシャルルにペアを申し込むため、わざわざココにやってきたという訳だ。

襲撃事件以降、彼の風当たりは和らいだが、まさかここまで態度が柔和するとは……。もともと貫き通したいほどの信念でもなかったのだろう。

「まあ、待て、落ち着けっ」

なおも用紙を突きつけてくる女子を宥めながら、一夏はシャルルに目を遣った。

案の序、彼も同じ状態に陥っていた。いや、人数的にはシャルルの方が圧倒的に多い。彼がデュノア社の御曹司であることが大きな要因だろう。玉の輿を狙っているのかもしれない。それあって一夏より難儀しているように見える。

性別偽称の件もあって、それを考慮した一夏は、何かを決心するように声を張り上げた。

「わりー、みんな、シャルルは俺と組むんだ！ だから、ペアは諦めて

くれ！」

一夏は大きい声でパチンと両手を合わせた。

すると、効果靨面。突き出されていた申込用紙が、次々と引っ込んでいった。

「そっかー、織斑君、デユノア君と組むのかー」

「もう決まっているんじゃないかな。まあ、男同士つてのも画になるしね」

諦めた様子で、撤回を始める女子たちに、一夏がホッと溜息をつく。

あとは風の便りが、無遠慮なペアの申し込みを減らしてくれるだろう。

（ありがとう、一夏。気を遣ってくれて）

（いや、それより俺でよかったか？ なんなら他と組んでくれてかまわないからな）

一夏が言ったペア云々は場を収めるための口実に過ぎない。

シャルルにその気がないなら、直ぐにも撤回するつもりだ。だが。彼は首を横に振った。

（ううん、僕は一夏と組むよ。一夏こそ僕でいいの？）

（そりやシャルルなら大歓迎さ。機転が利くし、操縦うまいし）

というわけで、いきあたりばったりながら、二人のペアが成立した。

——のだが、それを鈴とセシリアが、ジーと不平を訴えるような眼差しで見ている。

「なんだよ、おまえら。なんか言いたそうだな」

「別に何にもないけど？　ところでデユノア、こいつホモだから組むのやめた方がいいわよ」

スパンと叩く音がして、鈴のツインテールが波打った。

気づくと、一夏の手のスリッパが握られていた。

「なにすんのよ」

「俺はノンケだったの」

とスリッパでぽんぽん頭を叩く一夏に、チッと舌打ちをする鈴。

ペアを解消させて、あわよくば一夏と組もうと目論んだ鈴の野望は容易く潰えた。

(まあ、いいですわ)

そんな幼馴染コントの傍らでは、セシリアがすました顔をしていました。

一夏とペアを組めなくなったのは惜しいが、できる女とは余裕を持てる女だ。一夏もペアを決めたというし、ここは身を引くしかない。それに名誉回復のために是非とも優勝したいセシリアからすれば、一夏より技量のある相手を選んだほうが建設的である。そう考えたセシリアは鈴の方を向いた。

「鈴さん、こうなったら、わたくしと——って、誰にお電話していますの?」

鈴はスマートフォンを耳に当てながら、セシリアの疑問に答えた。

「え? 誰って、アリスよ。ラウラとまともに戦えるのってアリスぐらいなもの」

どうやら鈴も優勝を狙うつもりのようなのだ。そこでラウラと対等に戦えるアリスをペアに選ぶのは理解できる。理解できるのだが、自分を差し置いてアリスを選んだ鈴に、セシリアはいつもの対抗心を抱いた。

「鈴さんは、えらく彼女を買ってますよね」

「まあねー、あいつ、いいヤツだし」

唇を尖らせるセシリアなど、どこ吹く風の鈴は、アリスへコールを続けた。

しばらくして相手が出た。

「あ、アリス、今どこにいるの? ……え、整備科? そう。ところで、例の学年別個人トーナメントの緊急告知見た? ……そうそう、それぞれ。それでさ、あたしと組まない? ……え、一夏? ダメ、あのすかぽんたん、デュノアと組むんだってさ」

「おい、誰がすかぽんたんだ。誰が」

「うっさいわね。今アリスとラブコール中なんだから静かにしててよ。——んでき、どう? 正直、あんたがいると心強いんだけど………え?」

そこで鈴の表情が凍りついた。

「ラウラと組むことになったって、どういう事よっ!？」

♡

◆

✦

♠

鈴がアリスに電話する約10分前。ラウラ・ボーデヴィツヒは困っていた。困り果てていた。

原因は、ラウラの手に握られた一枚の用紙——学年別個人トーナメント緊急告知の内容にあった。そこには『ペアが組めなかった者は、参加資格が与えられないので注意すること』と記されていたのだが、「困った……私にはペアを頼める友人がいない……」

そう、ラウラ・ボーデヴィツヒは友達が少なかった。というよりいなかった。

当然ながらペアを頼める親しい人などおらず、彼女は途方にくれていたのだ。

(しかし、トーナメントを棄権するわけにもいかない)

元々ラウラは、この学園で行われる学年別個人トーナメント——現状では学年別ペアトーナメントが正しいが——を利用して、<シユヴァルツエア・レーゲン>の性能を欧州連合の重役にアピールする為やってきた。

すなわち、ラウラにとって、トーナメントの不参加は任務放棄と同義。厳格な軍人として育てられた彼女にとって、そんなことはできるはずがなかった。

「しかたない、適当に見繕うか」

この際、相手を選ぶのはやめよう。要は、参加資格させ得られればいいのだ。

そう思いながら、校内の生徒を物色しはじめたラウラの目に、青いリボンの生徒が留まる。

「おい、そこのお前」

「ひいー、ごめんなさいッ!」

話しかけた途端、その生徒は脱兎の如く逃げていった。

まあ、散々暴力的な振る舞いをしてきたのだ。それを鑑みれば、さほどおかしい反応でもなかった。むしろ、今となつては、ラウラに好意的な態度を示す生徒の方が珍しいぐらいだ。

ラウラは逃げ去った生徒に『腰抜け』と吐き捨て（そういう態度がダメなのだが、彼女は気付いていない）、新たな相手を探し始める。今度はちよつと学習して、気の強そうな生徒に声をかけた。

「おい、ちよつとそこのおまえ、話があるのだが」

「ボ、ボーデヴィツヒさん!? なな、なんでしようか?」

今度はなんとか逃げられずに済んだが、奥歯をカタカタ言わしていた。

この生徒もラウラに恐怖心を抱いているようだ。まあ散々——以下同文。

「ペアがいなくて困っている。だから、私と組め」

「いや、あの、えっと、それは……」

釣り目の生徒は、困つたように視線を泳がせた。あからさまに断る口実を探している様子だ。

「ご、ごめんなさいっ!」

結局、断る口実を見つけられなかった生徒は、謝るだけ謝つて逃げていった。

これで二連続。今さらながら「もうちよつと愛想よくしておくべきだったか」なんて後悔する気持ちかわいてくる。完全にあとの祭りだが。

そしてラウラはめげず、次の相手を探し始める。

それから10分余り。結果は全滅だった。

ラウラが話しかけると、みんな跳んで逃げるのである。取り合つてさえくれない。

さすがにトーナメント出場の雲行きが怪しくなり始め、ラウラに焦燥感が募った。

「これは本格的にまずいな……」

まるで敵に包囲され『増援は来ない』と言われたような気分だった。あるいは、輸送機のパイロットが『燃料が漏れているッ!』と叫んだ

時の気分でもいい。つまり危機であった。

そんなラウラの頭にある名案が浮かんだ。

「こうなったら、奴に頼もう」

奴とは一度だけ食事をした仲だが、他の生徒より自分に理解を示していた。

それに、これ以上ハントを続けても結果は見えている。ここはもう彼女に賭けるしかない。

（もし「いいえ」と言おうものなら、無理にでも「はい」と言わしてやる）

なに、難しいことではない。自分の拷問テクニクがあれば、すぐに泣いて協力を乞うだろう。

すると、噂をすれば影。ラウラがいう奴——アリス・リデルが現れた。手には紙袋。おそらく世話になった整備科への差し入れか何かだろう。

図ったようなタイミングに、ラウラはしめたと駆けだした。

「おい、アリス・リデル！」

「あら、ラウラ。どうしたのですか、まるで核戦争が始まりそうな顔して?」

「確かに危機的状況ではあるが、そうではない。貴様、トーナメントのペアは決まったか?」

「トーナメントのペア?」

アリスは首を傾げた。どうやらルールが変更された事をまだ知らないようだ。

ラウラはその旨を手短かに説明してやる。

「それで貴様とペアを組みたい。『はい』か『Yes』で答えろ」

「その様子だと、散々断れたようですね」

全てを見透かしたような表情に、言葉が詰まる。凶星だった。

しかし、これを断れたら20連敗の大台である。悔しいのをぐっと堪え、ラウラは懇願した。

「そ、それでどうなのだ? 組むのか? 組まないのか?」

「うくん、そうですね……」

どこか切実な顔のラウラに、アリスは顎に指を当てて思案した。ラウラのパートナーになれば、監視がやすくなる。それはいろいろ都合がいい。それに孤高を貫いてきたラウラが、初めて誰かに頼ろうとしているのだ。心動かされるものがある。

しかし、過去の行いもあるので、簡単に了承するのはつまらない。というわけで、アリスは、ちよつとしたイジワルすることにした。「まあ、組むのは吝かではありません。でも、それは人に頼む態度じゃないと思います」

「む？　なら、どう頼めばいいのだ？」
「それはね」

コクンと首を傾げるラウラに、アリスが耳打ちする。ごによごによ、と。

アリスの話をきくなり、ラウラの頬が真っ赤になった。

「き、貴様！　そ、そんなふざけた真似できるか！」

「ならペアの話はなかったことに」

そう言い残して立ち去ろうとするアリスを、ラウラは慌てて引き止めた。

「わ、わかった。する。するから行かないくれ……」

もう後がないラウラは、背に腹は変えられないと覚悟を決めた。

そして、ネコの手にした両手をクイクイと動かしながら、ペアを申し込む。

「に、にやあー、にやあー、ペ、ペアがいなくて困ってるにや。組んでくれにやー」

そう、これが、アリスがラウラに教えた“人にものを頼むやり方”であった。

「おい、も、もう許してにや。これ以上は恥ずかしくて、どうにかなってしまいそうにや……」

自制心の塊と呼ばれたラウラも、この猫かぶりは相当恥ずかしいらしい。顔も赤ペンキで塗り手練ったように真っ赤だ。

それが可笑しくもあり、可愛くもあって、アリスは大満足な顔をした。

「いいでしょう。そこまでいうならペアになってあげますよ、ニヤウラ」

「誰がニヤウラだ。変な呼び方するにや」

「といつつも、C-037より聞こえはいいな——と密かに思うウラ改め、ニヤウラであった。」

♡

+

♠

というわけで、アリスとラウラが組む事になったのだが、鈴は頗る納得いかなかった。

「きー！ あいつらが組んだら、誰も太刀打ちできないじゃない！」

二人の実力は学園トップクラス。国家代表でも出場しない限り、きっと誰も止められない。

だからといって、ここで諦めないのが鈴である。この諦めの悪さが鈴の美点だ。

「上等だわ。あたしが二人まとめてやつつけてやろうじゃない！」

鈴は手にしたスマートフォンを強く握り締め、闘志を滾らせた。

だが、まずはパートナーだ。ペアが組めなければ、優勝以前に出場できない。それにあの二人を相手にするなら、それなりの実力者が好ましい。とくれば、もう彼女しかない。

鈴は隣のセシリアを見た。すると、彼女もこちらを見ていた。

「やってやりましょう、鈴さん」

どうやら、セシリアも鈴と同じ事を考えていたようだ。

「ええ。アイツらをぎゃふんと言わせてやろうじゃないっ！」

二人は手を繋ぎ、結束を顕にした。

いまの自分たちならどんな強敵にも打ち勝てる。そう思えた矢先「水を差すようですが、現状では、おふたりのトーナメント参加は許可できません」

意気込む二人にそう言ったのは、当然あらわれた真耶だった。

真耶は持ってきたカルテらしきものを鈴たちに手渡し、続けた。

「おふたりのIS、先ほど確認したところダメージレベルが【C】を超えていました」

ISの損傷^{ダメージ}レベルは、クラスAからクラスDの五段階で評価される。

その中でクラスCはいわゆる「中破」に値する。

この場合、修理には専門の技術士が必要となる。しかし、技術者側にもスケジュールがあるため、依頼しても直ぐ取り掛かってもらえないわけではない。特に第三世代の開発に携わった技術者は、その有能さゆえに多忙だ。今から彼らのスケジュールを調整し、招集し、修理し始めて、果たしてトーナメントに間に合うか。

正直、かなり難しい。訓練用制御リミッターを外して戦闘したツケだった。

「機体に損傷がないこと。それがトーナメント出場の最低条件です。それを満たしていない状態では、出場を許可できません。出場するなら、必ず整備書を提出してからお願いします」

整備書。ISに故障がないことを証明する書類群のこと。自動車という車検書だ。

その書類がなければ、公式戦はもちろんのこと、学内戦に出場することもできない。

「はい……」「わかりましたわ」

「では、私はトーナメントの準備がありますので」

そう言い残しは、真耶は保健室を後にした。

トーナメントの形式が変更された事もあり、教師陣もその対応に追われているのだろう。

かくして、それぞれのペアが決定し、トーナメントまで、あと一週間となった。

さて、何が起こるのか。

第28話 Blue Tears

自室に戻ってきた俺はベッドに身を沈め、天井をぼんやりと見つめた。

その白い天井に思い浮かべるのは、銀髪隻眼の少女——ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

転入当初は毛嫌いしていたけど、千冬姉にその生い立ちや境遇を聞いたあの日から、俺の彼女に対する感情は一八〇度変わっていた。いまや俺の思考の半分は、ラウラが占めていると言ってもいい。——いや、だつてさ、

教えてくれ、織斑一夏。

どうすればあの人に愛してもらえる？ どうすれば、あの人に……あんなしやがれた表情をされたんじゃ、放っておけるわけないだろう？

それに、今日の出来事で確信した。アイツは今すごく寂しい場所にいるって。

例えるなら、そう、誘拐事件で俺が監禁されていた場所だ。冷たくて、寂しくて、心が折れてしまいそうな場所で、ラウラは一人ずつと足掻き続けているんだ。俺の時のように、千冬姉は助けに来てくれなから。そんな彼女を、俺は——

「一夏、お茶、淹れたよ」

そこでシャルルが湯飲みを持って、こちらにやってきた。

「お、サンキュー」

俺は考えるのをやめ、差し出されたお茶を啜った。緑茶の芳しい香りが、心を落ち着かせてくれる。紅茶やコーヒーも好きだけど、やっぱり俺は日本茶派だな。しみじみそう思う。

「ねえ、一夏」

うまいお茶に癒されていると、シャルルが言った。

「ん、なんだ？」

「あの、もしよかったら、ボーデヴィツヒさんとの間に何があったの

か、聞いてもいいかな」

「あー、俺とラウラの事か……」

俺は口籠った。一瞬『これは織斑家の問題だから』という迷いが脳裏を過ぎる。

でも、シャルルは自分の出自や境遇を俺に明かしてくれた。なら、今度は自分が話す番だろう。

そう思い、俺は頷いた。

「ああ、わかった。実はな——」

俺は湯飲みを置き、シャルルに向き直る。

そして、自分の知っている全て——特殊な出世であるラウラには親がない事。そんな自分の面倒を見てくれた千冬姉に好意がある事。その千冬姉の気を惹くために、あんな暴拳を仕出かした事——を包み隠さず語る。

シャルルは一言も挟まず、最後まで黙って聞いてくれた。

「そっか……。ボーデヴィツヒさんにも、そんな過去があっただね……」

シャルルは手を胸の上に置き、すごく神妙な表情をした。

シャルルとラウラ。お互い出世に違いはあるけど、『親の愛情』という点で通じるところがある。もしかしたら、自分の境遇とラウラの境遇を重ね合わせているのかもしれない。

「それで、これから一夏はどうするの?」

「それなんだが……」

俺は胸の内を曝け出すように、正直な気持ちを打ち明けた。

「俺はラウラを救いたいんだと思う」

「救いたい……?」

シャルルがすこし驚いた顔をした。

「ああ。ラウラと同じで俺にも両親がない。だけど、寂しくはなかった。千冬姉がいてくれたからな。でも、ラウラは違う。アイツは誰にも愛してもらえず、ずっとひとりだった。アイツはそんなさびしい場所から抜け出そうと必死なんだ。あんな暴拳に打って出たのも、それだけ孤独が大きかったからなんだと思う」

そんなラウラを、俺は救ってやりたい。あの時、千冬姉が俺を救い出してくれたように。

とは言っても、具体的な策があるわけじゃないし、たとえば手段を見つけられたとしても、ラウラはそれを拒むだろう。アイツにとって、俺の優しさなんて疎ましいだけだから。

それでもだ。それでも、俺はあんな寂しそうな顔をするラウラを放っておけなかった。

少しでもいい、僅かでもいい。俺はアイツに今よりマシな場所を作ってやりたい。

「そっか、一夏らしいね。ねえ、一夏、よかったら、僕もその力にならせてくれないかな?」

シャルルの申し出に、今度は俺が驚いた。

「……いいのか? 俺に関わったら、またとばつちりを受けちまうぞ?」

「かまわないよ。——僕ね、不徳の子だと知ったとき、両親の愛情を疑ったんだ。もしかしたら、私は望まれた子じゃないのかもしれない。って。そう思うと、怖かった。まるで自分の存在が否定されてしまうようで」

「シャルル……」

「たぶん、ボーデヴィツヒさんは、僕が感じた恐怖と同じ恐怖を感じている。僕は自分の殻に引きこもってしまったけど、ボーデヴィツヒさんはそれと戦うことを選んだ。強い子だよ。僕はそんなボーデヴィツヒさんの味方になってあげたい。アリスが僕の味方になってくれたみたいに」

シャルルの言葉には、力強さがあつた。共感があるからこそ、生まれる力強さだ

おそらく、シャルルは俺よりラウラを理解している。そんな彼女が味方になってくれること。こんなに心強いことはない。俺は躊躇わず、手を差し出した。

「わかった。俺たちでラウラを孤独から救い出してやろう」

「うん」

差し出した俺の手を、シャルルが強く握る。

固く結ばれた手と手は、俺たちの結束の強さを表しているようだった。



午後八時を回ったあたり。私はへロッカールームと呼ばれる場所にいた。

へロッカーとは、専用機持ちに与えられる特別な保管スペースのことだ。主に専用機の予備パーツや専用パッケージを保管する際に用いられる。

私も先日ようやくこのへロッカーを設けてもらったのだが、中身は空っぽ。ずっと専用機存在を隠匿していたため、予備パーツの搬入が遅れているのだ。兵站の方に申請はしたが、トーナメントまでに間に合うか怪しいところだった。

「参りましたね……<赤騎士>の装備も失われたままですし」

山田先生との模擬戦で《ヴォーパル》、ラウラとの戦闘で《シユナイダー》を4基。幸いにも、動力部に異常はなく、トーナメント出場に問題はないけど、こんな状態でVTシステムと戦えるのでしょうか……

「ヴァルキリー・トレース・システム、か」

その言葉を囁くと、あの時の——酷く陰鬱な過去が蘇るようだった。

「エイミー……」

あの時、VTシステムに呑み込まれていく親友を、私は助けることができなかった。

その日から私の心には、悔恨という空虚な穴が空いている。教会で懺悔し、軍医のカウンセリングも受けたが、未だにそれを塞ぐ術を、私は見つけられていない。

埋まらない心の穴。それを埋めたくて、埋められなくて葛藤する毎

日。

——ねえ、エイミー、あなたなら、今の私にどんな言葉をかけてくれますか？

無意味な問いなのは解かっている。けれど、そう問わずにはいられなかった。

その時である。何処からともなく声が響いた。

「探しましたわよ、アリス・リデル」

滲んでいた涙を拭い振り返ると、オルコットさんが立っていた。

♡

◆

♠

ここ数日、セシリアはあらゆる伝手を使ってアリス・リデルについて調査を行った。

しかし、満足な成果は得られなかった。

確かな情報といえば、嘗てアメリカ空軍に所属していたこと。その情報を元に、幼馴染であり専属メイドのチェルシー・ブランケットに渡米してもらったが、有益な情報は得られなかった。当時の上官ナターシャ・ファイルスに話を訊いても、除隊後の足取りは知らないらしいのだ。

「確かに実力はおありのようですけど」

だが、それだけではアリス・リデルという少女を信用できなかった。

無理もない。素性不明の人間を、どう信用しろというのか。しかし、一夏たちは違う。彼らはアリス・リデルという少女に強い信頼を寄せている。それがセシリアには信じられなかった。

——おかしいのは自分？ それとも周り？

まるで全てが狂っているような錯覚。まるで不思議の国に迷い込んだようだった。

どれだけ調べ、嗅ぎまわっても、これ以上の進展は望めそうにない。

ならば、残された手段は一つ、直接対話だ。

そう判断したセシリアは、アリスの許に足を運んだ。彼女が何者な

のか。その答えを知るために。



「探しましたわよ、アリス・リデル」

アリスを見つげ出したセシリアは深呼吸し、鋭い表情で話しかけた。

だが、アリスが振り向いた直後、セシリアは思わず面を喰らってしまった。

彼女の瞳に、涙の後を見つけたからだ。

(もしかして、泣いていましたの……?)

アリスに警戒心を剥き出しにしていたセシリアは、出端を挫かれる形となった。狼狽えこそしなかったが、一言に詰まってしまう。そんなセシリアに代わって、アリスが涙を拭いながら言った。

「こんばんは、オルコットさん。どうしましたか、こんな時間に」
やや不意打ちを食らった気分だったが、セシリアは咳払いし、改めてアリスと対峙した。

「実は、貴女にお話がありました。わたくしはあまりダラダラと喋るのが好きませんから、単刀直入に言わしていただきませすわ。——アリス・リデル。貴女は一体何者ですの?」

碧眼に鋭い眼光を宿し、アリスを見据える。その表情にいつものエレガントさはない。まるで狩人のような鋭さだ。凡人なら思わず後退りしていただろう。

だが、生憎アリスは凡人ではない。見かけは可憐でも、中身は戦士だ。この程度では動じない。

「何者、ですか……。その口調から察するに、いろいろと調べたようですね」

まるで観念したような口調だった。

彼女自身、自分に施された継ぎ接ぎだらけの欺瞞に限界を感じていたのだろう。

遅かれ、早かれ、こうなる事を予期していたアリスは、取り繕うことなく続けた。

「わかりました。詳しいことはお話できませんが、可能な範囲でお話しましょう」

その返答にやや不満を感じたが、セシリアは『では、聞きましょう』と目で促した。

「まず、VTシステムについてご存知ですか？」

「VTシステム!?!」

セシリアが呻く。

学年首席で入学した彼女が、VTシステムを知らない訳がなかった。

「ご存知あるようですね。では、その事を前提で進めていきます。実は数ヶ月前、有力な筋から英国に『ドイツがVTシステムを搭載したISを開発している』という情報が齎されました」

「ドイツのISにVTシステム……!?!」

すぐさまセシリアの脳裏に、漆黒のIS<シユヴァルツエア・レーゲン>が浮かんだ。

まさか同盟国であるドイツがへアラスカ条約で禁止されたシステムを開発していたとは。

その事実には苛立ちが募った。

再び、あのシステムが開発されたということは、世界がエイミーの死から何も学んでいないということ。すなわち、彼女の死が無駄死に他ならなかったということだ。

「しかし、情報だけで確証がありませんでした。そこで英国政府は、それを確かめるべく調査員を派遣しました」

「その調査員が貴女？」

「はい。そうなります」

合点がいった。なぜアリスはラウラに接近し、戦いを挑んだのか。全ては<シユヴァツエア・レーゲン>にシステムが搭載されているかを見定めるため。

「でも、なぜ貴女なの？」

「私は以前、VTシステムの暴走を止めた事があります。おそらくその実績を買われたのでしよう」

アリスの言葉を聞き、米国で起こった『VTシステム暴走事件』を思い出す。

同時にドロドロとした黒い疑念が浮かび上がった。

「……貴女が米国のVTシステムを止めた張本人？」

「そうです」

「では、貴女がエイミーを？」

「はい、私がエイミーを殺しました」

セシリアはハンマーで殴られたような衝撃を受けた。次いで腹の下がぐるぐる回るような感覚に襲われる。きつとこれが、腸が煮えくり返る、という感情なのだろうと、セシリアは思った。

「あなたが、エイミーを……ッ！」

セシリアの感情を表すように、イヤーカーラフが眩しく光る。

瞬く間に物質化された《スターライトMkⅢ》を、セシリアはアリスの額にポイントした。

「エイミーは自分も両親を喪ったのに、いつもわたくしを気にかけて、勇気づけてくださいましたの。今のわたくしがあるのは、彼女のおかげ。そう言っても過言ではありませんわ。そんなわたくしの恩人を貴女が殺した!？」

「はい、殺しました。復讐しますか？ 構いませんよ」

目の前にいるのは親友の仇。そう思うと、セシリアは銃爪を引きたい衝動に駆られた。

だが、アリスは怯えた様子も見せず、言い訳も、抵抗もしない。

親友を殺した時から咎は受けるつもりだった。それが死であつても甘受する覚悟はできている。

それに奪われた者には、奪った者に復讐する権利がある。よく『復讐は憎しみを生むだけだ』と云う者がいるが、そんなチープな理屈では誰も報われない。彼女はそのことを知っている。

しかし、セシリアが引き金を引くことはなかった。

なぜか。気づいたのだ。引き金を絞る指、そこに籠る感情の正体

に。

復讐は己のために行うものじゃない。逝ってしまった人間の無念を晴らすために行うものだ。だから、力を込める指先にエイミーの意思が介在していければならない。

だというのに、自分の指先に、それが見当たらなかったのだ。

セシリアは、どうやっても「アリスを討て」と願う親友の姿を、銃鉤に見いだせなかった。

それにセシリアは悟ってしまう。

引き金を絞る指先にある感情が、他ならぬ自分のものだということに。

(もしかしたら、わたくしは彼女に嫉妬していたのかもしれないわね)

だから、アリスを貶める口実が欲しかった。想い人が慕う、この少女を貶められる口実が。

そうすることで、裡から湧き上がる感情を払拭したかったのだ。

ただそれだけのこと。元から疑念などなかった。自分はルサンチマンになっていただけ。

(わたくしだったら、結局、自分のことばかり……。)

けれど、アリスは自らの死を以って、エイミーの無念を晴らそうとした。

自分の命で、あなたやエイミーが報われるのであれば、と。

それは「彼女の死」や「残された者の想い」と、真摯に向き合っていたからこそできた尊い行為だ。

それを知った瞬間、セシリアはアリスが何者なのか、もうどうでもよくなった。

彼女は友人を想い、慈しめる人間。それ以上でもそれ以下でもない。

それだけの事で、人は人を信頼する事ができる。

「もう、いいのですわ」

セシリアは武装解除して、アリスにそつと歩み寄る。そして、その腕で彼女を抱きしめた。

かつて、親友がそうしてくれたように。強く、優しく。アリスは目を見開いた。

「いいのですか?」

「いいも、わるいもありませんわ。あなたには許から裁かれる罪などなかったのです。あなたはやるべきことをやった。だから、もう自分を責めるのは、おやめなさい」

そう言っただけ強く抱きしめる。

その温もりに、心の隙間が埋まっていく実感を得たアリスは、セシリアに身を預けた。

セシリアはそれを支えた。彼女が自責の念で押しつぶされないうに、と。

「ありがとうございます」

「いいえ、礼を云うのは、わたくしの方です。貴女のおかげで、わたくしは一つ成長できました」

そう微笑んだあと、セシリアはボロボロなく赤騎士に視線を移した。

欠けた武装。くたびれた装甲。連戦で疲弊したアリスの愛機に、セシリアは苦笑いした。

「それにしても、あのラウラさんを相手取ろうというのに、この状態はどうなの?」

「実は予備のパーツがなくて……。これが現状で出来る精一杯なのです」

「なら、わたくしの〈ブルー・ティアーズ〉のパーツをお使いなさい。互換性はあるのでしょ?」

アリスがきよんとする。思ってもみない申し出だった。

「いいのですか?」

「ええ。困っている人を助けるのは当然の事。高貴な者の義務ノブリス・オブリージュです。よ。それと、わたくしのことは、セシリアでかまいませんわ。むしろ、そう呼んで頂けませんこと?」

「はい、では、親愛を込めてセシリアと呼ばせていただきます」

「ふふ。では、アリス、さっそく整備区画に参りましょう」

二人はへロツカーを後にし、誰も居ない夜の整備区画に向かった。

♡

✦

♠

整備区画に移った私たちは、さっそく赤騎士の修理を始めた。まずくブルー・ティアーズからレーザービットを取り外し、く赤騎士に装備する。

元々く赤騎士のソードビットは、イギリスの技術を流用した装備であるため、無改造で換装できる。不具合も特に発生しなかった。

ビットの換装が終わると、失われた《ヴォーパル》の代用品として《スターライトMkⅢ》を肩部の武装支持架に装着する。あとはくブルー・ティアーズから武器情報を読み取り、火器管制システムにインポートすれば、移植作業は終了だ。

「では、インポートの間に、BTレーザーについての解説を行いましょう」

「あ、はい、よろしくお願ひします」

く赤騎士に追加された新装備——《ブルーティアーズ》と《スターライトMkⅢ》には、今までにない特殊な技術が用いられている。それらを扱うにあたって、原理や特性を知っておく必要がある。

——というわけで、私はセシリア先生の講義に耳を傾けた。

「まず、アリスはレーザーの原理をご存知で？」

「ええ。大まかには。レーザーは、Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation（輻射の誘導放出による光増幅）の略称で、誘導放出を起こす物質【レーザー媒質】にエネルギーを注ぐことで発生するレーザー光を集束し、照射する指向性エネルギー兵器ですよね」

「正解ですわ。それで一概にレーザーと言っても、たくさん種類がありますの。例えば、ルビーを用いた固体レーザーや、砒化ガリウムを用いた半導体レーザーなどですね」

「では、BTレーザーは何を【レーザー媒体】にしているのですか？」

「BTレーザーは、名の通りBlue Tearsとよばれる物質を【レーザー媒質】にしていますの」

セシリアは投影型モニターをオープンし、武装のコンソールを操作した。

表示されたのは、青い綺麗なクリスタルだ。

まるで滴った雫がそのまま固形化したようなこの物質がBTレーザーの【レーザー媒質】か。

「でも、この物質——Blue Tearsは自然界の物質ではありませんの」

「つまり人工物だど？」

「ええ。製造技術は国家機密でわたくしも詳しく知りませんが、これにISのエネルギーを注ぐことで強力なレーザー光を生み出すことができますの。さらにBlue Tearsを媒体に生成されたレーザー光は、非常に集束率に優れていますのよ。そのため、従来のレーザービームよりも高熱で威力が高いのですわ」

「なるほど、レーザーが青いのはそのためなのですわ」

青色のレーザーは波長の関係で、赤いレーザーより集束率が高い。

ブルーレイディスクが同じ面積でDVDより多くの情報を記憶できるのは、そのためだ。

「それだけじゃありませんわよ。精神感応制御——サイコシンパシービット制御に使用されている技術ですわね——を用いることで、照射したレーザーを偏向させることも可能ですの。これを偏光制御射撃と呼びますわ」

「偏光制御射撃ですか」

もしこれで複雑な弾道制御が可能になれば、従来では考えられなかった射撃戦闘ができる。

まさにBTレーザー兵器は、現代兵器の常識を覆すような兵器といえますね。

「さらにこのBTレーザーは、その高い収束性を活かすことで推力装置としても利用できますの」

「レーザー推進というヤツですか？」

これは私も聞いたことある。確かレーザービームを自らに投射し、

その反作用で進む未来の航行法だ。将来的にはロケットエンジンに変わる推力装置として期待されている。

「現在、それを最大限に活用した強襲用パッケージ（ヘストライクガンナー）が、本国で開発中ですわ。早ければ、来月辺りにはロールアウトする予定です」

「なるほど、特性と原理は大体理解しました。では、そのフレキシブルを私に伝授してください」

「うっ、えっと、それは……ですわね……」

私の要望にセシリアは視線を泳がせ始める。一体どうしたのでしようか？

「——あ、もしかして？」

「ち、違いますわ。わたくしはBT適正值Aでしてよ？ でも、ちよつと苦手です……」

「どれくらい苦手なのですか？」

「一回……」

「一回？」

「も、成功した試しがありませんの……くすん」

とうとう追い詰められたセシリアが、膝を抱えていじけてしまった。

おまけに、どうせわたくしは稼働率15%の女ですわ……などと云っている。

「それでもよろしいのでしたら、わたくしが知る限りのノウハウを伝授いたしましょう……」

「はい、ぜひに」

気が滅入った感じのセシリアは、覚束無い様子で私に偏光制御射撃の講義を始めた。

講義中、セシリアは何度もいじけたが、私は励ましながらそのノウハウを吸収していった。

「さて、夜も更けてきましたし、今日はこの辺りで終わりにいたしましょうか」

講義が終わると、すっかり夜が更けていた。そろそろ整備区画も戸

締められる頃だ。

セシリアはくブルー・ティアーズを待機形態であるイヤーカーフに変えて言った。

「アリス、わたくしはラウラ・ボーデヴィツヒさんに敗れました。悔しいですが、今のわたくしではドイツの陰謀を打ち砕くことも、エイミーの想いに報いることもできません。だから、アリス、貴女にわたくしの想いを託しますわ。よろしくて？」

「はい、この紋章に誓って、必ず完遂してみせます」

私はく赤騎士にペイントされたイギリスの国章の前で頷く。

イギリス国章に刻まれているユニコーンはスコットランドを表し、ライオンはイングランドを表す。スコットランド生まれのセシリアと、イングランドの血を引く私が、その前で手を繋ぐのは、どこか感慨深いものがあった。

第29話 集いし者と潜む闇

〈モンド・グロツソ〉は、ISの世界大会である。格闘技術を競う『格闘部門』。射撃技術を競う『射撃部門』。速さを競う『高速戦闘部門』。全ての技術を用いて鎬を削る『総合部門』の4部門から構成され、部門優勝者には〈ヴァルキリー〉、総合部門優勝者には〈ブリュンヒルデ〉の称号が贈られる。

記念すべき第一回の〈ブリュンヒルデ〉は、言わずと知れた操縦者——織斑千冬だ。

しかし、第二回〈モンド・グロツソ〉では、〈反モンド・グロツソ団体〉の妨害によって、二連覇を成し遂げられなかった。

では、彼女に代わって〈ブリュンヒルデ〉の栄光を得たのは誰なのか。

それはアメリカ国家代表のジェニファー・J・フォックスだ。

〈モンド・グロツソ〉では、高速戦闘部門で二年連続〈ヴァルキリー〉の称号を獲得し、それから派生したISバトルレース〈キャノンボール・ファースト〉でも連覇を成している。

そんな彼女はいま、IS学園行きモノレールの車窓から目的地であるIS学園を眺めていた。

目的はひとつ。先月のような有事に備えてのことだ。

依頼したのは千冬本人。ジェニファーと千冬は第一回〈モンド・グロツソ〉から交友があり、それを通じてジェニファーが人肌脱いだのである。

『次は終点、IS学園前、IS学園前。お降りの際は忘れ物のないように——』

「おっと」

車内アナウンスに、ジェニファーはグラマラスな姿態を起こした。

その拍子に揺れた巨乳が、同乗していた男性の視線を奪う。サービスピ精神旺盛なジェニファーは、男性に投げキッスを贈って、停車したモノレールから颯爽と降りた。そして、改札を抜け、駅を出ると、手でサンバイザーを作って周囲を見回す。

話だと千冬が迎えに来ているはずなのだが、それらしい人物はいない。

「トーナメントの準備が忙しいのかしら」

なら仕方ない。ジェニファアは艶やかな長髪のブロンドを左右に揺らしながら、IS学園に向かって歩き出した。それから歩くこと十分余り、目的地である学園正門に辿り着いたのだが――

「すみません。ここから先は関係者以外、立ち入り禁止です」

警備員の男性に呼び止められてしまった。

だが、ジェニファアは動じず、薬指にはめた指輪をちらつかせる。

その指輪は〈ニーベルングの指輪〉と呼ばれるもので、〈ブリュンヒルデ〉の称号を得た者に贈られる装飾品の一つ――端的にいうと〈ブリュンヒルデ〉の証だった。

「ほれほれ、この指輪が目に入らないの？ 私はこういう者よ」

「え？ はい？」

しかし、いくら指輪を見せびらかしても、警備員は首を傾げるばかり。

どうやら、指輪の意味をイマイチ理解できていないようだ。きっとISに関わらない男からすれば、この〈ニーベルングの指輪〉など、ただのアクセサリーにしか見えないのだろう。

ジェニファアを怪しく思った警備員は、怪訝な顔つきで言った。

「あ、あの、他に身分を証明できるものは？」

「え？ え、えーとっねー、ちよつと待ってね」

すっかり印籠を翳した水戸黄門気分だったジェニファアは、慌ててローライズジーンズのポケットをまさぐった。しかし、出てきたのは、コーラの割引券と、朝食に食べたハンバーガーのレシート。指輪以外に身分を証明できそうな物は無かった。

（これは不味いかもしれないわね……）

いや、確実にまずい。このままでは文字通り「門前払い」だ。

ジェニファアは『仕方ない』とグラマラスな身体で「しな」を作り、色気たっぷりに言った。

「いれ て ♡」

「おい、警察を呼べ。変な女がいるとなっ！」

「わー！ ごめんなさい。私が悪かったですッ！」

ジェニファーは慌てて、警備員を止めにかかった。

（ブリュンヒルデ）日本の警察に連行される、など洒落にならない。洒落になっても笑えない。

定年間近の警備員と世界最強のIS操縦者がてんやわんやしていると、黒いビジネススーツの女性と、金髪碧眼の若い女性がやってきた。

「お前ら、何をやっているんだ？」

その人物たちを見た途端、ジェニファーは歓喜のあまり泣き出しそうになった。

「千冬っ！、来るのが遅いわよっ！」



「まったく、酷い目にあつたわ……」

すったもんだの挙句、ようやく正門を潜れたジェニファーは、うなだれながら呟いた。

「バカ者、警備員に色仕掛けする奴がいるか、バカ者」

「あー、二回言ったー。人をバカバカ言わないでくれる？ こう見えて、あなたより年上なんですからねー。ちよつとは敬いなさいよ」

「ふん、バカに払う敬意などない」

「相変わらず辛辣ね。そんなだから、恋人の一人もできないのよ。もつと愛想よくしたら？ あなた、容姿はいいんだから、ちよつと慎ましくすればモテるわよ？ 私が保障する」

「余計なお世話だ。それに男運の悪いお前に保障されても嬉しくはない」

「はいはい、どうせ私は男運が悪いですよー。今まで付き合った男は、みんな散々だったしー。でも、そう言うあなただって、弟くん大好きなブラコンじゃない。——おっと」

唐突に振りかざされた出席簿をひらりと回避するジェニファア。
不意打ちに近い千冬の攻撃を躲すとは、さすがへブリュンヒルデと
言ったところか。

「私はブラコンではない。人より少しだけ弟思いなだけだ」

睨んでくる千冬に、ジェニファアは『それをブラコンっていうのよ』
と呟く。

もちろん、心の中で。声に出せば、再び殴ってくるのが目に見えて
いる。

「それにしても、来てくれて助かったわ。あと三分遅かったら強行突
破していたわね」

「やめろ。前回の襲撃事件で全員ナーバスになっているのだぞ」

そう言ったのは、千冬に同伴していた女性だ。ジェニファアと同様
の金髪碧眼。ただし、鋭角な碧眼は武人を彷彿させた。マルガリー
タ・オラゴン。教師部隊の隊長を担う彼女は、ジェニファアを半眼で
睨んだ。

「そんな事したら、わたしの部隊が目の色変えて飛んでくるからな」

「お手並み拝見ね」

「おい、抵抗するな」

「ふふ、冗談よ」

ケラケラ笑うジェニファアに、軽い頭痛に悩まされるマルガリー
タ。

根っからの堅物で、どちらかといえば融通の利かない彼女は、どう
にもお調子者のジェニファアとそりが合わなかった。

（千冬、あんなのが、へブリュンヒルデで本当に大丈夫なのか？）

（言うな。あんなのでも、実力は申し分ない。あんなのでもな）

千冬の肩を自分に寄せ、マルガリータがボソッと不満を漏らす。

警備員に色仕掛けして、まかり通ろうとした女である。彼女の不安
を理解できないでもなかったが、千冬はどこか諦めモードで首を左右
に振った。

（そもそも、おまえが負けなければよかったんだ、マルガリータ）

（それこそ、言わないでほしいものだ）

元スペインの国家代表である彼女は、前モンド・グロツソでジェニファーに敗れている。

こんなキツネに負けたとあって、彼女はずっと悔恨を抱えていた。ちなみに、影であんなの呼ばわりされるジェニファーは背後で「？」と首を傾げていた。

「ねえねえ、さつきから、お姉さんを仲間外れにしないでくれるかしらー？」

「わかった、わかった。では、いくぞ」

日が上る国ニッポンと、日の沈まぬ国スペインの(二元)国家代表は、顔を見合わせて、はあーとため息をついたあと、駄狐を連れ、再び校舎に向かって歩き始めた。

「そういえば、聞いたわよ。前回の襲撃事件。大変だったそうね」

千冬に次いで〈ブリュンヒルデ〉となった彼女は、現在〈国際IS委員会〉に席を置いている(〈ブリュンヒルデ〉の称号を言えた操縦者は、国際IS委員会への所属が義務付けられている)。当然、先月の襲撃事件についても、その詳細を把握していた。

「おかげで委員会も、その事で紛糾したわ」

「そりやそうだろう。今回の事件で委員会の監査体制の甘さが露呈したんだからな」

〈国際IS委員会〉は、ISの軍事転用防止と平和利用の促進を目的とし、その保有数や流通、運用、開発を監視する国連組織だ。つまり先月のような襲撃事件を未然に防ぐことが仕事であり、使命なのである。しかし、防げなかった。失態である。その事について現在委員会内では、監視体制の強化が議論されていた。

「それだけじゃない。〈コア〉の流失問題に、兵器運用を禁じた条約の形骸化、どちらも棚上げにされたままだ。この杜撰な管理体制が続けば、核兵器の二の舞だぞ」

核拡散防止条約や国際原子力機関。これらを以ってしても核兵器の拡散を防げないのは、その背景に監視体制の甘さがあったからだ。〈国際IS委員会〉はそれらの失敗を教訓に発足された組織。だというのに、結局この組織も同じ道を辿っている。

「もしこのまま問題を棚上げにし続ければ、いずれ大きなツケを払わされるぞ。そして、そのツケを払うのは国民だ。それを忘れてはいけない」

かつて〈国際IS委員会〉が目を見てきた問題——〈反モンド・グロツソ団体〉によつて、一夏誘拐というツケを払わされた千冬の言葉は、誰の言葉よりも説得力があり、そして重かった。

「そうね。先輩のお言葉、委員会の方に進言しておくわ」

千冬の言葉を真摯に受け止め、ジェニファアは校舎内へ進む。

それからしばらく談笑しながら歩いたところで、千冬が足を止めた。プレートには会議室とある。

「さて、着いたぞ」

「ん？　ここは？」

ジェニファアの問いに、千冬が部屋のノブに手を掛けながら答えた。

「代表たちの控え室だ」

そう言つて入室する千冬。彼女に続いて入室すると、ドーナツツ型のテーブルが目に入った。

そのテーブルを5人余りの女性が囲っている。

容姿は実に多種多彩。袴姿の少女がいれば、チャイナドレスの女性もいるし、古めかしいドレス姿の女性もいる。中にはゴスロリ少女や、素顔を仮面で覆った女性など、個性的な女性もいた。

その中の一人が、ジェニファアの登場を歓迎した。スリッドの入ったチャイナ服。深めの茶髪を後頭部でお団子にした女性だ。容姿と衣装から察するに、彼女は中国の国家代表のようだ。

「ジェニファアか。久しぶりだな」

「あら、久しぶりね、フリー」

ジェニファアはフリーと呼んだ国家代表と再会を喜びあうように抱擁する。

千冬と同様、彼女も第一回〈モンド・グロツソ〉からの仲だった。

「フリー、少し痩せた？」

「ああ。少しな。実は手の掛かるやんちゃな候補生がいてな。いつも

振り回されている。だが、私を超える逸材、天賦の才の持ち主だよ。この学園に在学しているから、ぜひ会ってやってくれ」

「厳しいあなたがそこまで推すなんて。ふふ、楽しみね。ぜひそうさせてもらおうわ」

挨拶を終えたところで、フーの隣に座っていた少女が勢いよく立ち上がった。

漆塗りのような長髪に袴姿、まるで日本人形のような少女だ。その少女は深々頭を下げた。

「はははは、初めまして、ジェニファー様！ ご、ご活躍のほどは千冬様より常々！」

「あら、あなたはもしかして日本の？」

「はは、はい、日本の代表を勤めさせていただきます、輝夜月子かぐやつきこと申しましゅー！」

大物ブリュンヒルデを前に噛んでしまった日本代表は、黒髪のとっぺんから湯気を噴いた。

「そう緊張しないで。ところでカグヤつてあのカグヤ？」

「ああ、コイツは『輝夜重工』社長の一人娘だ」

輝夜重工とは、日本の国防に関わる装備を開発している企業である。ISの開発にも携わっており、＜打鉄＞を開発した倉持技研もこの企業が抱える研究施設の一つだ。

「へえ、あの＜打鉄＞の開発元の。——それにしても大変でしょ？ 千冬の後釜って」

無敗の強さ見せつけ、IS界の生きる伝説となった千冬。その後釜を継ぐ事に、重圧を感じる候補生も多い。現にそのプレッシャーに耐えられず、代表を辞任した候補生もいる。1組の副担任、山田真耶もその一人である。

とてもではないが、こんなオドオドしている娘に、千冬の後釜が勤まるのだろうか。

そんないらぬ心配をするジェニファーに反し、月子は力強い言葉で言い放った。

「はい。大変ではありますが、代表の名に恥じないよう力の限りを尽

くし、必ずやへブリュンヒルデの座を物にしたいと思います。たとえ、ジエニフアー様がお相手でも、容赦いたしません」

「ほお、大した意気込みね。先の慌てぶりが嘘のようだわ。——さては千冬、何かした？」

「ああ、へブリュンヒルデになれたら、弟の一夏をやってもいいと言った。コイツ、一夏に惚れているんだ」

「あーっ！ 千冬さま、それは言わん約束やったのにつー！」

慌てて口を塞ごうとする月子を、千冬がアイアンクローで突き放す。

輝夜重工の社長である『輝夜翁』は、月子の実父であると共に、織斑姉弟の養父でもあった。そのため、月子と織斑姉弟は幼い頃から面識がある。その頃から、月子は一夏に淡い恋心を寄せていた。

『あうあう』と悶える月子を尻目に、ジエニフアーはふと彼女を凝視した。

「ところで、あなた、歳は？ ずいぶんと若く見えるけど」

「ここ、今年で16になりますッ。いたいです、千冬さま」

月子はアイアンクローされながら、答えた。

「16!?!」

若い。ジエニフアーは思わず声をあげて驚いた。

へモンド・グロツソに参加者する国家代表の平均年齢が約20代前半——IS操縦者として大成するには、学園を卒業してなお5年の訓練と実戦が必要といわれている——だという事を鑑みれば、16で国家代表とは随分若い。

「ですが、私は最年少じゃありません。欧州には私より若い代表がおられますよッ。いたたた」

やっぱり月子はアイアンクローされながら答えた。

「あー、そういえばいたわね」

以前、委員会での若すぎる国家代表にへモンド・グロツソの参加資格を与えるかで一悶着あった。その事を思い出しながら、欧州の代表たちが座る席の一角に視線をやる。

「若干14歳で国家代表に選ばれたのは、あなただったわね、アイリー

ン・フォン・エーデルシュタイン」

まるで呪文のような名前を唱えると、ゴスロリ少女がこちらを向いた。

ついでに彼女の頭に乗っていたミニハットの黒猫も一緒にこちらを向く。

「いかにも。ドイツが誇る魔装の使い手アイリーン・フォン・エーデルシュタインとは我の事だ!」

「みにや、みみみみ、みやにやにやにや! (その使い魔^{ペット}アドルフ!)」
アイリーンが子供っぽい仕草でふんぞり返って、頭上の仔猫がネコ語で何かを言う。

おそらく主人に倣って自己紹介しているのだろうが、生憎ジェニファーには翻訳できなかつた。

「そういう汝は噂に聞く棚^{ラッ}から牡丹餅^キのへブリュンヒルデ^クか? クク」

千冬が決勝戦を試合放棄したため、ジェニファーは不戦勝でへブリュンヒルデ^クになった。

それが災いし、時よりアイリーンのように、運の良いへブリュンヒルデ^クと嘲る者がいる。だが、幸運なだけと笑うことなかれ。実力は間違いなく指折りである。それを知ってか、知らずか、アイリーンは不敵な笑みを浮かべた。

対するジェニファーも挑発的な笑みで応える。

「そうよ、相手の力量を測れない未熟^{ルーキー}な娘は私をそう呼ぶわ」

「ほお、我が未熟だと?」

アイリーンの瞳が輝く。越^{ヴァ}界^{オーダー}の瞳^{ダン・オー}だ。

それもラウラとは異なる完全なもの。両目が金色に輝いている。

「我が未熟かどうか、確かめてみるか?」「しやーッ! (望むところにゃー!)」

「お望みなら相手になるわよ? IS用のアリーナもあることだしね」

力量を持ち合わせている二人だけに、自ずと場の空気が張り詰める。

その時、一本の剣へフランベルジュが殺伐とした二人の視線を隔てた。

「それぐらいにしては？　ここで決着を着けずともへモンド・グロツソは近いのですから」

凜とした声。そこに立っていたのは紅い長髪の美女だ。ヴィクトリア朝時代を彷彿させる紅いドレスに身をまとい、薔薇のブローチで頭部を装飾している。

傍目から見れば、かなり時代錯誤な格好だったが、彼女が身に纏っていると思議と違和感がない。さらにクラシカルなメイドを引き連れていると、一層その雰囲気は際立った。

付き添いのメイドはともかく、ジェニファアは彼女を知っていた。

「ああ、あなたが噂に聞くイギリスの国家代表ローズマリー・ライオンハート？」

ローズマリーはメカニカルな剣を鞘に戻し、ドレスの裾を掴まんで、優雅に腰を折った。

「はい。初めまして。ジェニファア・J・フォックスさま」

「こちらこそ。会えて光栄よ。あなたの逸話はスコールから聞いているわ。で、そちらは？」

ジェニファアは、ローズマリーの後ろで佇む黒髪のメイドに視線を遣る。

「こちらは私の専属メイドの、オータムです。オータム、挨拶を」

「はい、お嬢様。ローズマリー様に仕えておりますオータムと申します」

ローズマリーに紹介された黒髪の美人メイドは恭しく頭を垂れた。「お付きにメイドがいるとは、さすが英国屈指の名家つてところなのかしら？」

ライオンハートは十九世紀より有力な貴族議員の一員として、大英帝国の政に関わってきた由緒正しい貴族の家系だった。現在は富裕層向けの投資業務とプライベートバンキングを運営しており、オルコットとならぶ資産家として有名だ。

「よければ、ご紹介しましょうか？　よいものですよ？」

「そうね、何かと忙しい身だし、考えておくわ。必要になったら、お願いするわね」

「はい、その際は一報を。家政婦学校に知り合いがおりますので、良いメイドを紹介いたしますわ」

そう軽めの挨拶を終えたところで、再び部屋の扉が開く。

入ってきたのは、IS学園の制服を着た少女と、栗色の三つ編みを後頭部で結った女性だ。

「あら、私たちが最後かしら」

制服姿の少女が言う。

その少女は各代表を見渡し、『全員集合?』と書かれた扇子を広げた。

「どうも、皆様はじめまして。ロシアの国家代表、更識楯無です。以後、お見知りおきを」

楯無が名乗ると、欧州の席に座っていた仮面の女性がクスッと笑った。

片目を紫紺のショートウェーブで隠さんばかりに覆った、どこか寡黙な雰囲気的美女だ。

「……ふふ、あなたがロシアの代表? ……とてもそうには見えないけど?」

ミステリアスな女性が妖艶に笑う。楯無も妖艶に笑った。

「これには、いろいろと事情がありました。そういうあなたはイタリアの?」

「……アンジェリカ・バレンティンよ」

「では、あなたが、かのアリーシャ・ジョセスターフの後任者」

アリーシャ・ジョセスターフ。元イタリアの国家代表で、世界に4人しかいないヘヴアルキリーヴのひとりだ。不慮の事故で右腕を失い、現役を引退したが、その勇姿は今なお多くのIS操縦者の憧れとなっている。彼女はその後任だった。

「おや、アンジェリカ、もう来ていたのかい? 時間にルーズなキミらしくないね。いつも一時間は遅れてくるくせに」

そう、アンジェリカを皮肉っぽく野次ったのは、楯無と入室してき

た美女だ。

名はノエル・ラ・フォンテーヌ。フランスの国家代表だ。

「……ノエルこそ時間ぎりぎりだなんて、珍しいわね」

「いや、2時間以上も前からココに着いていたよ。でも、うちから輩出された男性IS適正者がココに入学していたね。その事でロシアの代表という話していたんだ」

「……ああ、例の。確かシャルル・デュノアといったかしら？」

「ああ、あのデュノア社の嫡男だよ。ところで、その仮面はなんだい？
まるでオペラ座の怪人じゃないか」

「……これ、専用機の待機形態なの。……不快なら外すけど？」

「いや、むしろよく似合っているよ。歌姫ディトゥワのキミにぴったりだ」

「……ふふ。ありがとう」

イタリア代表アンジェリカが柔らかに笑うと、つられてフランス代表のノエルも笑う。

ようやく全員の顔合わせが終わったところで、千冬が国家代表たちの視線を集めた。

「さて諸君。忙しいところ、よく集まってくれた。集まってもらったのは他でもない。前回の襲撃事件を考慮してだ。ありえないとは思うが、もし先月のような事態が再び発生したら、諸君らにはその対応にあたって貰いたい」

「……それは構わないけど、各国の代表を集めるほどのこと？」

アンジェリカがぼやく。それは至極当然の意見だった。

国家代表が八名。一国の軍隊ですら手出しできない戦力である。襲撃に備えてとはいえ、聊か過剰な戦力と云えるだろう。虫を殺すのにバズーカーを用意しているような物だ。

「備えあればなんとやらだ、アンジェリカ。準備しておくことに、越したことはない。準備不足で嘆くより、骨折り損だったと後悔する方が幾分もマシだからな」

その言葉に全員が納得した様子を見せた。そうだ。何事にも準備するに越したことはない。

ましてや人命に関わるなら尚更のこと。想定外などという言葉で

は許されない。

「有事の際には私の指揮下に入ってもらい、私の命令で動いてもらう。いいな?」

千冬が同意を求めるように視線を馳せる。おのおのが返答した。

「りよーかい」

「了解した」

「黎明期に活躍された古株のお二人と戦えるなんて光栄です!」

「こちらにも光栄だよ、月子くん。危なくなったら、ジェニファーを盾にしているからな」

「ええ、月子ちゃんは私が守ってあげる。その代わりにフーは私を守ってね」

「虎の威を借りる狐か。自分の身ぐらい自分で守れ」

「じゃあ、欧州のルーキー組にがんばってもらいましょうか。お手並み拝見よ、あなたたち」

「……ほどほどにがんばるわ」

「ちゃんとしなよ、アンジェ。さもないとアーリイさんに言いつけるぞ」

「……あの人、シャイニイをけしかけてくるから、嫌い。……ネコ、苦手なの」

「ほれ、アドルフ」にゃくん」

「……………」ビクッ

「くつくつく、猫が恐ろしいとは、相変わらず、残念なやつめ」

「……残念美少女にいわれたくないわ」

「わ、我のどこが残念だというのだ!」

「その奇抜な衣装ではありませんか?」

「ローズマリーお嬢様、あなたも人の事を言いませんか?」

「更識、他の代表に迷惑をかけるようにな」

「ええ、大丈夫ですわ、先生」

分かったのか、分かっているのか、それぞれが曖昧な返事をする。

千冬は怒った様子もなく続けた。

「開会まであと小一時間ある。その間、自由にしてくれて構わない。

出歩きも許可する。では、私は準備があるので、ひとまず失礼させてもらう。では、またあとでな」

そう言い残し、千冬は会議室を後にした。各代表たちは思い思いの時間潰しを始める。

日本代表の月子はロシア代表の楯無に何かの相談を持ちかけ、その隣ではアメリカ代表のジェニファーとドイツ代表のアイリーンが再び睨めっこを始めていた。そんな様子をイタリア代表のアンジェリカが仮面越しに微笑む。

中国代表のフー、フランス代表のノエル、イギリス代表のローズマリーは、ココに在学している代表候補生に会うべく席を立った。



「まったくスコールの命令とはいえ、何であたしがこんな格好をしなきゃいけないんだよ……」

会議室を出て、生徒控え室に続く通路。

人気が無くなった場所で、メイド『オータム』は乱暴に頭のカチューシャを剥いだ。

その仕草たるやお淑やかさの欠片も無い。歩き方も博打に負けたチンピラのようなだ。

「あら、私は、とても似合っていると思いますよ？」

しかし、ローズマリーは豹変したオータムにも動じず、穏やかに言った。

「てめえーに褒められても嬉かねーよ。つーか、大体、なんであたしがお前の護衛なんだ。他にも暇そうな奴が居ただろ、ライラやら、陰陽姉妹やらよ」

「貴女が部隊の中で一番信用できるからですよ」

「あたしが？　なんでだよ。他の奴は信用できねえのか？」

「ええ、そういえば、貴女はまだ〈ファンタム・タスク 亡国機業〉に入って日が浅かったですね」

「ファントム・タスク」
〈亡国機業〉。それが彼女たちの所属する組織の名前だった。

第二次世界大戦後、50年以上も昔に創立された組織で、運営方針を決める幹部会とその手足となって動く実働部隊から構成されている。

彼女は、その実働部隊に所属して数か月の新顔だった。

「私が貴女を連れてきたのは、組織の内情が関係しています。まず、貴女は組織の目的を知っていますか？」

「ああ、世界の裏から軍事力をコントロールして、各国のパワーバランスを凶ろうつてんだろ？ だから、幹部の連中は、どいつもこいつも軍産複合体やら軍需企業の重鎮だって聞いたぜ？」

「その通りです、しかし、その幹部会は現在一枚岩じゃありません。そのため様々な派閥が存在します」

「そういえば、スコールがそんな事を言っていたな」
「ピロトークで？」

艶めかしく笑むローズマリーに、オータムは赤面した。まるで初夜の乙女のように。

それを誤魔化そうと、オータムは語尾を強めた。

「そ、そんな事より話を続けろよ、マセガキが！」

「ふふ。それで現在、組織内部では幹部たちによる派閥抗争が行われています」

「派閥抗争だあ？」

「ええ。組織の膨大な資金を巡ってのね。組織には世界大戦を10回やっても、おつりがくるほどの莫大な資金が存在するのです」

オータムは思わず、口笛を吹いた。世界大戦10回とは大した額だ。

「一体どんなことすりゃ、そんな法外な金額を集められるんだ？」

「資金の出所を説明するには、組織が創立された50年前の話をしなればなりません。今からおよそ50年前、〈白騎士事件〉に相当する未曾有の事態が起こりました。知っていますか？」

「50年前の未曾有の事態………キューバ危機か」

ローズマリーは頷いた。

「1957年、東西冷戦下キューバ。フィデル・カストロによりバティスタ政権が打倒され、アメリカの南に共産主義国が誕生しました」

「教科書でいうキューバ革命だな」

「アメリカはこの事態に危機感を抱き、キューバに対する経済封鎖を慣行。さらにCIAを使いカストロ暗殺を企てました。一方、カストロ政権はソ連との親密化を進め、その支援の下でアメリカのキューバ侵攻に備えたのです」

そして、キューバにアメリカ本土を狙い打てる中距離型核ミサイルが配備されたことで、緊張の色合いが一気に濃くなった。それが世に知られるキューバ危機だ。

「当然、アメリカはミサイル基地の撤去を要求し、新たなミサイルが配備されぬようキューバの周辺海域を封鎖。しかし、ソ連はそれに応じず、ミサイル配備を進めた」

こうして事態は押収されぬまま、米ソによる全面核戦争へ向かっていったのである。

「だが、最終的には国連緊急安保理の仲介もあり、ソ連がミサイル基地の撤退に同意し、アメリカもキューバ不可侵の証として、トルコから核ミサイルを撤去した」

「ええ。こうして米ソ全面核戦争による世界滅亡は回避されました。しかし、それが東の間の安息だという事を、両国は自覚していました。この東西冷戦が続く限り、核戦争の危機は何度でも訪れる」

「もう大丈夫だ、と楽観視するには、アメリカもソ連も核兵器を持ち過ぎていからな」

「そこで当時のアメリカ大統領ジョン・F・ケネディは、ホットラインを通じて、ソ連フルシチョフ書記長に、ある提案を持ちかけました。――『もし我々の作り出した核兵器が世界を滅亡へ追いやってしまったら、その責任として我々がこの世界を再建しなければならぬ。そのためにも、私たちは手を取り合う必要がある』と」

「それにフルシチョフは同意した？」

「ローズマリーは再び頷き、肯定した。」

「ソ連側も『核戦争に勝利はなく、あるのは文明の滅亡』という事を理

解していましたから。そして、米ソは、来るべき第三次世界大戦に備えて隠し持っていた莫大な秘密軍資金を資金源に、国家、宗教、民族、思想、いずれにも還らず、『核戦争後、世界を再建するための組織』を創立しました」

核戦争で世界を二分する米ソが滅亡すれば、世界秩序は失われ、果てない混乱が生まれる。

そこで、自分たちに代わって世界を再建、先導する組織が必要だと両国は考えた。

「それが〈亡国機業〉フアントム・タスク創立の起源か」

「ええ、亡国とはおそらく核戦争で滅んだ米ソを指すのでしよう。彼らは膨大な資金を活かし、米ソ問わず有能な科学者を集って、様々な研究や計画を実行しました。その中の成果の一つが『アポロ計画』です」

「アポロ計画って、あのアポロ計画か!？」

「そのアポロ計画です。もし核戦争でT T A P S理論に提唱されている『核の冬』が訪れば、地球は人の住める環境ではなくなります。そうなった時、人類はこの星を捨てなければなりません」

「アポロ計画は『核の冬』に備えての第一歩、フェイズ1だった、と」
「ええ。——しかし、東西冷戦が終結し、米ソの全面核戦争の危機が去ると、存在意義を失った組織は形骸化。1991年にソ連が崩壊すると、莫大な資金も散り散りになりました」

「その欠片を寄せ集めて、再結成されたのが今の〈亡国機業〉フアントム・タスクか？」
「そういう事です。ですが、今の〈亡国機業〉フアントム・タスクに創立当初の理念は最早ありません。先も言ったとおり、あるのは組織の莫大な資金を巡った謀だけです」

なるほどな、とそうつぶやきながら、オータムは心中で皮肉をこぼす。

フアントム・タスク。金に群がる姿は、どちらかという亡霊よりハイエナだな、と。

「で、亡霊の幹部共は、その莫大な資金を独占して何をしようっていうんだ？」

「それは幹部によつてまちまちでしょう。でも、ひとつだけ目的がはつきりしている派閥があります。それは、アレクサンドロス・アルツェバルスキー大佐の派閥です。彼はソ連時代の強硬派将校を父に持つ、ロシア・タカ派の男です」

ソ連の強硬派将校。キューバ危機以降、フルシチョフがアメリカと始めた“平和共存政策”を弱腰と叩いた連中だ。彼らは世界滅亡を目の前にしても『やられる前にやれ』と強硬な姿勢をとり、あくまで核軍拡を支持した。

そんな過激な思想を継いだ連中が、現ロシアに存在する。その総統が亡国機業の幹部のひとり。

「彼はロシアの復権——それも“強いロシア”の再建に憑りつかれています」

「なるほど、組織の莫大な資金を使つて、ソ連を再興しようつて魂胆か。——で、そのアレクサンドロス派と、おまえが属するロキ派との関係はどうなんだ？ やつぱり悪いのか？」

「非常に険悪な関係です。特にロキがここで〈ナルヴィ〉の実践テストを行ったことが、大佐を始めとした幹部たちの強い怒りを買いました」

「じゃあ、お前も、その親玉であるロキつてガキも、他の幹部から失脚、暗殺の標的になつていっているのか。だから、他の派閥に所属する部隊の連中を連れて歩けない？」

「そういう事です。私たちの実働部隊は、幹部たちの私兵で構成されていますからね。けれど、あなたは違う。ロキはあなたの恋人であるスコールと手を組んでいますから」

「だから、あたしを連れてきたわけか」

「さて、組織の話はおしまいです、今度は国家代表の仕事もしないと。さあ、貴女もですよ」

「へいへい、おじよーさま」

選手控え室に到着したところで、オータムはメイドのカチューシャを装着して、姿勢を正す。

それを確認し、ローズマリーは生徒たちの控え室に入室した。

第30話 開始、学年別ペアトーナメント!

開会式が終わり、第一試合目が始まるまでの時間。

鈴は朝食代わりに購入したホットドックを頬張りながら、席を探していた。

手筈では、セシリアが席を確保してくれているはずなので、それを目印に観客席を見渡す。

「鈴さん、こちらですわ」

アリーナを囲むように広がる観客席の最善列。

とびつきり一番見晴らしのいい場所からセシリアの声が上がった。

「いたいた。場所取り、ご苦労様」

鈴は頼まれていた飲み物とホットドックを手渡しながら、隣に腰を下ろした。

「そういえば、セシリアとこの代表も来てんの?」

「ええ、いらしてましたわよ」

「やつぱり、怒られた? トーナメントに出られなかった事」

「いえ、それほど。ローズマリーさまはお優しい方ですから」

ローズマリーはセシリアの生い立ちや境遇を知っている。そのため、度々便宜を図ってくれていた。セシリアを代表候補生に推してくれたのも彼女だ。そんなローズマリーをセシリアは心から敬愛している。そして、将来はあんな風になりたい、とも。

「いいわねー、うらやましいわ」

「その言い草だと、鈴さんは怒られたようですわね?」

「こっ酷く怒られたわよ。そりやね、わがまま言ってココに入学した挙句、機体は中破、肝心なトーナメントには出場できないってなれば、怒られるのは当然なんだけど、おしりを叩くのは勘弁してほしいわ。おかげであたしのライフポイントはゼロよ」

言って、ホットドックを乱暴に噛み千切る。心なしかイラついているようにも見えた。

「鈴さんは中国代表の事がお嫌いなのかしら?」

「いや、別に嫌いって事はないんだけどね……」

兄弟、姉妹のいない鈴にとって、フーは姉のような存在だ。

それにたった一年足らずで『専用機』と『国家代表候補生』という重要ステータスを手に入れられたのも、一重に彼女が尽力してくれたおかげだ。また、入学の時『IS学園に気になる人がいるから、入学したい』と言い出した自分に渋った高官を説得したのも彼女だ。

後任を育てるのも国家代表の勤めではある。だが、フーがこうして好くしてくれるのは、鈴を妹のように慕っているからだ。それが判らないほど、鈴も子供ではない。

「ただ、ちよつと子ども扱いしないでつて話ッ」

照れ隠しにホットドックを詰め込む。セシリアが「ふふ」と笑うと、アリーナのメインモニターが切り替わった。一試合目の組み合わせが表示されたようだ。

「あら、織斑一夏、シャルル・デュノア対ラウラ・ボーデヴィツヒ、アリス・リデル」

「うわ、一夏のやつ、いきなりラウラたちと当たっちゃうなんて、運の無いやつ」

各国の代表や政府関係者が観戦している、このトーナメント。学園の生徒であるなら、優勝はできなくても、それなりの成績を残したい。だというのに初端から優勝候補とあたるとは、クジ運がないということかなんというか。

〈では、第一回戦、選手の入場です〉

アナウンスに従って、計4箇所あるピットから四機のISが出撃してくる。

白、橙、黒、赤。多彩な色取りのISたちは機体に制動をかけ、中央に集結した。

出そろった出場者たちを見て、鈴がある違いに気づく。

「ちよつと、なにあれ！ <赤騎士>になんで《スターライトMkⅢ》が!？」

そう、入場してきた<赤騎士>の肩部ハードポイントに、<ブルー・ティアーズ>の主力武器BTレーザライフルが装備されていたのだ。それだけではない。非固定浮遊部位には4基の《ブルーティア

ズ》が装備されている。

一夏たちもそれに気づいたらしく、二人は顔を見合わせていた。

「ちよつと、セシリア、どういう事!」

セシリアははずつとアリスを敵視していた。それは周知の事実だ。そんな彼女が愛機の装備を仇敵に提供するなんて、どういう気の迷いか。——あの夜の出来事を知らない者なら、そう思っても仕方ない。相對している一夏とシャルルも同じ心境だろう。

「わたくしと彼女の問題が解決した。それだけですわ」

しかし、セシリアはただ優しく、母親のように微笑むだけで、多くを語らなかつた。

鈴は、首を傾げる。

そんな彼女に何も言わず、セシリアはアリスに向けて指鉄砲を作つた。アリスも同じように指鉄砲を作る。そして、何かを確かめ合うように二人はBANと撃つ真似をした。

♡

✦

♠

指鉄砲で互いを撃ち合つたアリスとセシリアに、俺はそういうことかと悟つた。

二人の間に何があつたのか、気にはなる。だが、乙女の事情に男が顔を突つ込むと、ろくな目に遭わない。俺は無粋な詮索はやめて、特設されたVIP席を見た。

「しかし、すごいメンツだよな」

急遽設けられた代表席には、アメリカ、ロシア、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、中国、日本の各代表が一堂に会している。各国の代表が集結したさまは圧巻だ。

「他にも政府関係者や企業関係者の面々も来ているみたいだよ」

隣のシャルルが言った。

「控室のみんながピリピリしていたのはそのためか」

もし、このトーナメントで代表の御眼鏡に適えば、代表候補生への

道が一気に開ける。機関や企業の目に留まれば、専用機を授けてもらえるかもしれない。この生徒にしてみれば、千載一遇のチャンスだというわけだ。

(国家代表、か……)

今まで意識したことなかったけど、この先、IS操縦者として生きていくなら、俺も国家代表とか目指した方が良いのだろうか。

(まあ、今は頭の隅に置いておくか)

進路。それは大事なことだけど、今はトーナメントに集中する方が先決だ。

余計な事を考えていたら、まず勝てないだろう。相手はあのアリスとラウラなのだから。

へでは、両ペア、試合を開始してください

開始の合図と同時に、俺は淀みない動作で《雪片式型》を展開した。そしてスラスターにブーストをかけて、弾丸の如くラウラに突撃する。

「ふん、突撃バカめ。そんな単調な攻撃を、私が食らうと思うか」

落胆か、嘲笑か。あるいはどちらとも取れる言葉で、ラウラはAIを発動した。

瞬く間に機体に制動がかり、＜白式＞の加速がみるみる衰える。けれど、俺は威勢を崩さない。

「思ってたねーよ。けど、動きが止まったぜ」

次の瞬間、俺の背後に潜んでいたシャルルが飛び出し、対戦専用のロケット弾を放った。正面突撃でわざと捕まったのは、ラウラの意識をこちらに向けるためだ。

しかし、ロケット弾が白い尾を曳いて向かってきても、ラウラは表情ひとつ変えなかった。

「だからどうということはない」

ラウラが余裕たっぷりな笑うと、ロケット弾が蒼い閃光に打ち抜かれ、爆発した。

「ええ、私がいいますから」

《スターライトMkⅢ》でロケット弾を狙撃したアリスが、スコープ

から目を離す。

見事な狙撃をみせた彼女に『おおおー!』と観客席から歓声が沸いた。格闘の印象が強いアリスだが、射撃も熟せるのか。こいつは厄介な誤算だな。

「アリス・リデル。織斑一夏は私がやる。お前はフランスをやれ」
「了解」

そう答え、アリスが続けさまに《スターライトMkⅢ》の銃爪を絞る。

シャルルは離れまいと応射して距離を保つけど、いかんせん動けない俺を庇いながらなので、うまく距離を維持できない。アリスの射撃の腕前もあって、チームは瞬間に分断されてしまった。

「さて、これで助けは求められなくなったぞ?」

「じゃあ、早速、切り札を使わせてもらおうさ」

俺は一度息を吐き、《雪片式型》のシールド無効化能力を発動させた。ただし、あえて収束率を下げる。《雪片式型》を中心に発せられたエネルギー波は、＜白式＞に纏わりついていたAICの対外的慣性制御エネルギーに干渉し、中和した。

「……ッ」

強制解除されるAICに、意表を突かれたラウラは咄嗟に距離を取った。

あのラウラに距離を取らせたことができた。それに気をよくした俺は得意げに言い放った。

「これで自慢のAICは、もう通用しないぜ?」

「ふん、AICを看破したぐらいで凶に乗るなよ」

ラウラは鼻をならし、非固定浮部位からワイヤーブレードを射出する。

乗らないさ。ラウラが強いのはAICを使えるからじゃない。そんな事は解っている。でも、相手の能力をひとつ潰せたことは、俺の気持ちに余裕を作った。



アリーナ管制室。その中央モニターには、ワイヤーブレードを打ち払う一夏が映し出されていた。

一夏は迫る4本のブレードを《雪片式型》で打ち払い、さらに地上から飛び出してきた二本のワイヤーブレードにも対応してみせる。そして、その一本を掴み取り、力任せにラウラを引き寄せて、《シールド無効化攻撃》を見舞った。

惜しくも攻撃は躲されてしまったが、一夏は戦いの流れを掴みつつあった。

「織斑くん、あのボーデヴィツヒさん相手によい立ち回りをしますね」
「ああ、機体の武装や戦法をよく解析している。リデルがコーチをやめて以来、チャージ&アサルト突撃バカの傾向にあったが、改善されたようだな」

アリスが指導をやめて以来、一夏の戦術は単調の傾向にあった。原因はいわずもがな箒たちの指導方法だ。彼女たちの『どつかくんとやれ』や『感じんよ』という要領を得ない指導が「戦術性のない突撃」を生む原因となり、連敗という結果を生んでいたのである。

その因果関係を断ち切ったのがシャルルだった。（セシリアもその因果に気づいていたが、彼女のロジカルな解説が彼の理解を阻害していた）。一夏の連敗が「勢い任せ」だと見破ったシャルルは、彼に複雑性と柔軟性のある戦術の重要性を説いた。

その甲斐あって、今の一夏には、クラス代表戦やクラス対抗戦で見せた狡猾さがある。

だが、その狡猾さを以てしても勝てるかどうかというのが、ラウラという相手だが。

「しかし、ボーデヴィツヒは本調子じゃないようだな」

「そうなのですか？」

「ああ、あいつは軍の特殊部隊員だ。素人程度に遅れをとったりしない。おそらく感情的になっているせいだろう。一度使った戦法を使い回しているのがいい証拠だ」

そう語ったあとで『一夏が相手では無理ないか』と心中で呟く。

同時に、胸を締め付けられるような痛みを感じた。

ラウラが必死に戦っている理由は、任務でも、義務でもない。他ならぬ千冬を想つてのことだ。

『千冬を振り向かせたい』。ただそれだけのために、彼女は猛り、吼え、戦っている。

なのに、自分ときたらどうだ。何もせず、教師という仮面を被って傍観に徹している。

事態は自分を中心に回っているのに。

こんな姿を妹が見たら、どう思うだろうか。晒うだろうか、蔑むだろうか。あるいは……

「マドカ……」

心中の言葉が意図せず唇から漏れる。それを訊いた真耶が首を傾げた。

「織斑先生、どうかしましたか？」

その声にハツとする。そして、千冬にしては珍しく慌てた様子で冷静を取り繕った。

「い、いやなんでもない。それより学園の周囲状況はどうだ？」

「え？ あ、はい、異常なしですね。哨戒に当たっている先生たちからも異変を告げる報告は入ってきていません。アリーナの制御システムや、セキュリティーも正常に動作しているようです」

「ふむ。理事長に直談判して、警備を整えさせた甲斐があつたというものだな。あとは何も起こらないことを祈るばかりか」

しかし、夢くもその祈りが届くことはなかった。

そして、それは訪れることとなる。彼女にとつて最悪の形で。

その事を千冬はまだ知らない。知る由もない。

♡

◆

♣

♠

右、左、上、下、そして正面。矢継ぎ早に振るわれるプラズマ手刀を、俺は目玉をギョロつかせながら、死に物狂いで打ち払う。フェイ

ントや眼晦まし。そういった狡猾な攻撃を、俺は神経をすり減らす気持ちでしのいでいく。

「ふん、格闘の方はますますだな。イギリスよりはセンスがいい」

「ありがとよ、これでも剣道経験者なんでな」

「なるほど、得物に対する心得はあるわけか。——では、これはどうだ」

腰を沈めての水面蹴り。体勢を崩されたところに、ラウラが強烈な踵落としを仕掛けてくる。

受け止めた衝撃で全身の骨格が軋むが、俺はなんとか相手の脚部を押し除け、不意打ちの刺突で反撃に転じた。

しかし、ラウラが後方に飛び退き、あと一歩のところまで剣先が届かない。

そこで俺は《零落白夜》を発動した。

展開された《雪片式型》の刀身からエネルギーが放出され、刺突のリーチが倍になる。

この二段構えの攻撃、流石のラウラでも躲せまい。

しかし、予想に反しくシユヴァツェア・レーゲンへの攻撃はかすめる程度に終わってしまった。

「——ラウラッ、何をやっているのです!」

アリスの放ったワイヤーガンが、ラウラを無理やり後方に牽引したのだ。

今のダメージじゃ《絶対防御》は作動しなかった。——が、結果オーライだ。

ラウラを助けた事で、アリスにスキが生じた。それを逃すシャルルではない。

「よそ見は迂闊だよっ!」

ここぞとばかりに20mm二連装ガトリング砲と、その給弾タンクを展開したシャルルが、容赦なく引き金を引く。

六門の銃口から成るガトリングが四其、カラカラと破滅の前奏曲を奏でながら火を噴いた。



《ハニー、敵機照準、3時方向。20mm二連装ガトリング砲!》
「言われなくてもッ」

私はガトリングの射線から飛び出し、乱数機動でアリーナを逃げまわる。

デユノアさんの展開したガトリングは、毎分4500発を吐き出す。それが四基。一度でも攻撃を受ければ、断続的に弾雨を浴びてしまう。だが、逃げてばかりいても結果は同じだ。逃げ切れる保証もない。

徹甲弾が周囲を穿つ傍らで、私は非固定浮遊部位からBTレーザービットを射出した。

「させないよ」

まるでCIWSがミサイルを迎撃するように、デユノアさんがガトリング砲でビットを迎撃する。＜ラファール＞タイプの火器管制システムは優秀だ。すぐさまビットの一機が徹甲弾を喰らって撃墜された。

でも、私はニツと笑う。ビットは陽動だ。

私はすかさず回避運動をやめ、スライド移動しながら《スターライトMkIII》を構えた。

火器管制システム・オン。スタビライザー減揺補正、照準。狙いはガトリング砲の給弾ドラム

「踊りなさい。私と＜セシリア・アールコット＞が奏でるワルツで」

友人の口癖を借り、《スターライトMkIII》の引き金を絞った。

直後、レーザーに穿たれた給弾ドラムが、けたたましい爆音を上げた。

「え、ビットの展開中に本体から狙撃!？」

《あなたが戦っているのはハニー一人じゃない》

(そうか、ビットのコントロールをAIに……ッ)

ぱちぱちと弾薬が弾ける音と強い爆風が彼女を覆い隠す。

強烈な余波に飲み込まれるくらファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ
>を見て、私は《スターライトMKⅢ》を下した。

「やりましたか?」

《ハニー、やったかはフラグ》

「ですよね」

私はハイパーセンサーを索敵モードに切り替え、《スターライトMKⅢ》を構え直す。

刹那。立ち込めていた黒煙が四散し、その中央からデユノアさんが現れた。しかも、尋常ではない速力を得て。この加速力は瞬間^{イグニッションブースト}加速か。爆風に乗じて、私に近接戦を仕掛けようというのだろう。

だが、瞬時加速は直線にしか動けない。距離を確保すれば迎撃も可能だ。

——発砲。

だが、デユノアさんは着弾ポイントを見切り、最小の動きでこれにかわす。

なんて無茶を。——そう思わずにはいられなかった。音速移動時の運動制御は、機体に途轍もない負担が掛かる。その制御を誤れば、ISといえコントロールを失いかねない。最悪、墜落もありえる話だ。

だが、冷静に考えれば、デユノアさんに限ってそれはあり得ない話だった。彼女はくらファール・リヴァイヴ>の特性を誰よりも熟知している。限界と可能の閾値を熟知している彼女なら、先の回避行動も不可能ではない。

相手の理解を見誤り、迎撃に失敗した私は、デユノアさんの接近を許した。

「この距離なら——」

デユノアさんは不敵な笑みを浮かべ、物理シールドの先端をパージした。内部から出現したのは、リボルバー機構と銀の杭が一体化した装置だ。

69ミリ口径パイルバンカー^{グレイスケール}《灰色の鱗殻》。——通称^{シールドピアース}《盾殺し》。

第二世代型の兵器の中で、随一の打撃力を誇るそれが私を捉えた。

「アリスが相手でも外さないっ！」
強い衝撃。

液体火薬によって撃ち出された超合金製の杭に穿たれ、私は大きく後方へ弾き飛ばされた。

(してやらやられましたね……)

警戒を怠ったわけでも、慢心があつたわけでもない。ただ今回ばかりは彼女が一枚上手だった。

さすがフランスの代表候補生。だけど、ただでは転びませんよ？
(痛み分けです)

私は人差し指を立て、手前に折る。すると、先ほど放つたBTレーザーがUターンし、くらファール・リヴァイヴ・カスタムⅡのマルチラスターを打ち抜いた。加熱された推進器が熱暴走で派手な爆発音を上げる。

「え、かわしたはずなのにっ!」

珍しく狼狽えるデユノアくんは、私はしたり顔を作る。

BT高稼働時に行える偏光制御射撃^{フレキシブル}。土壇場使用したが、うまくいきましたね。

以後の戦闘継続にも大きな支障がでただろう。とはいえ、こちらのダメージも甚大だったが。

♡

◆

+

♠

「やるな、シャルルも、アリスも」

上空で繰り広げられる熾烈な攻防戦に、俺は喝采を贈りたい気分になつていた。

できるなら、じつくり二人の一戦を観戦したいところだが、今の俺にそんな余裕はない。

↑——警告：照準、ロックされています——↓

飛来してくる翼付き徹甲弾を、俺は後方に跳躍してやり過ぐす。

そして着地と同時に《雪片式型》をラウラへ投擲した。

「なにっ!？」

まさかかの攻撃に、ラウラが驚き、怯む。

当然だろう。唯一の武器である《雪片式型》を投げ捨ててしまえば、
〈白式〉は裸も同然。

だが、悪手は悪手ゆえに、時として相手の意表を突ける。

しかし、そこはラウラ。この奇策にもA I Cで対応してみせた。

「はんっ! 唯一の武器を奪われてはもう戦えまい!」

その言い草からもう戦えないと思っっているのだろう。

事実《雪片式型》を奪われたら、イコライザのない〈白式〉にはも
う武器が無い。

と、思うだろう？

「ラウラ、教えておいてやるよ。男の最大の武器ってのは、この拳なん
だぜ!」

何も剣や銃だけが武器じゃない。腕力に乏しい女性には及びもつ
かない事かもしれないが、拳つてのは何にも勝る強力な武器なのだ。

俺は徒手空拳で突撃し、〈白式〉の余剰パワーを臂力に回して、渾
身のストリートを放った。

A I Cの制御に集中していたラウラは、これに対応できなかった。

「がはっ!」

さらにラウラがよろめいた隙に《雪片式型》を回収し、シールド無
効化攻撃で追撃する。

ラウラは咄嗟に手を交差し、シユヴァルツェア・レーゲン〉の腕
部で攻撃を受けとめたが、

↑——警告：両腕部に装甲強度を超える過負荷を検知——↓

↑——警告：プラズマ発生装置に〈クラスD〉の損傷。復旧は不可——↓

〈シユヴァツェア・レーゲン〉の装甲強度より《雪片式型》の攻撃
力が勝った。それに《絶対防御》が作動し、〈シユヴァツェア・レー
ゲン〉のポイントがみるみる減少する。このままいけばあと一撃で
相手をダウンさせられる。

「もらったぞ、ラウラ!」

勝利の兆しが見え、感情が高まる俺に、ラウラは小さくつぶやいた。

「私は……、負けられないんだ……」

「それは俺も同じ事だ」

「同じ？ 違う！ 同じであるものか!!」

貴様は負けても、何も失わない！ あの人も！ あの人の愛も！

だが、私は負ければ、再び孤独な闇の中なのだ！ 貴様にその苦しみが解るか！

当然のように愛され、当然のように慕われ、その暖かい世界で生きてきた貴様に！

その幸福すら自覚していない貴様に！

私は負けない。貴様などに負けてたまるか。斃す、どんな力に身を委ねても！」

ラウラは力任せに《雪片式型》の刀身を押し戻した。

狂気染みた執念。それと呼応するように<シュヴァツェア・レーゲン>に紫電が奔る。

俺はそれが<シュヴァルツェア・レーゲン>の故障か何かだと思っ
た。

だが、それはすぐ改められる。

直感が俺に告げたのだ。これは凶兆だと。何か良からぬ事が起ころうとしているのだと。

それが意思とは関係なく、俺を後方へ大きく下がらせた。

<シュヴァルツェア・レーゲン>に異変が起こったのは、その直後だ。

人は愛を知ったとき、生まれた意味を知るという。

なら、私が生まれた意味は何だ。

親もいなく、誰にも愛されない私は何のために生まれてきた？

本当に、私には兵器としての価値しかないのか？ 人としての価値

ラウラを、今度はフルスキンが病のように蝕んでいく。

まるでISが人間を取り込んでいくような光景に、俺は激しい嫌悪感と生理的な拒絶を覚えた。

「な、何が起こっているんだ？」

全身が強張る俺の前で、全身装甲をまとったラウラは胸部から柄のような物を引き摺り出した。

まるで心臓でも引き摺り出すように捻り出されたそれは、千冬姉の武器——《雪片》だった。

ただ、本来真っ白なはずの刀身は真っ黒で、どこか禍々しい気配を醸し出している。

《倒ス、ソレガ……唯……イツ、ワタシの——ッ》

ラウラが呪詛のような言葉をつぶやいたかと思えば、今度はまるで何百回と繰り返したような淀みのない太刀筋で、俺に斬りかかってきた。

その剣撃に意識を持って行かれていた俺は、攻撃に対して無防備になつていた。

しまった！ やられる！

そう覚悟した瞬間、二発の銃声が鳴った。これは14.5mm突撃砲《ガラム》の砲声だ。

直ぐ特定できたのは、それを好んで使う操縦者をよく知っていたからだ。

「アリス、今のうちに一夏をッ！」

シャルルがそう叫んだ直後、軽い衝撃が俺を襲った。

アリスが俺をラウラから、かつさらったのだ。

「大丈夫ですか、一夏」

「ああ。それよりラウラの奴、どうしちまったんだ？　なんでアイツ、千冬姉の真剣の技を」

そうなのだ。先ほど見せた一撃。あれは千冬姉が篠ノ之道場で体得した真剣の技だった。

俺も同じ流派で稽古した身だから、見間違はずが無い。

「なるほど、そういう事ですか」

「なるほどって、どういう事だ。俺にも解るように説明——」

俺がアリスに食って掛るより早く、再びフルスキンのラウラが襲ってきた。

「説明はあとでします。——デユノアさん、一夏を。私はラウラを止めます」

「うん、わかった」

俺の身をシャルルに預け、アリスが一人ラウラに向かっていく。

状況が把握できず、半ばパニック状態に陥っていた俺は、なおもシャルルに説明を求めた。

「シャルル、一体何が起こったんだ。俺にも解るように説明してくれよ」

「ごめん、僕にもよくわからない。アリスは何か知っているようだったけど。ともかく、試合は中止だと思う」

シャルルがそう言うと、アリーナにアナウンスが鳴った。

〈緊急事態発生、緊急事態発生。ISの暴走を確認。トーナメントは中止。状況をレベルDと認定。来賓および、トーナメント参加者、生徒は直ちに避難する事、繰り返す——〉

「そういう事みたいだから、僕たちも引こう。ここにいちや危険だし。しかし、俺は素直に応じられなかった。

「まっつてくれ、アリスはどうするんだ。置いていく訳にはいかねえだろ?」

アリスの身を案じる俺の許に、本人から公開通信が開かれる。

『私に構う必要はありません。早く撤退しなさい』

「だがよ」

『私には彼女の暴走を止めなければならぬ理由がある。だから、構わず撤退してください』

アリスの蒼い瞳には使命感、いやそれを上回る強い意志が宿っていた。

それだけでアリスと「アレ」の間には何かあるとわかった。だが、引けないのは俺も同じだ。

「なら、俺も残る」

『なに馬鹿なことを。私に構わず離脱しなさい』

「聞いてくれ。そいつが何なのかは解らない。でも、俺はラウラを救うって誓ったんだ。なのにこの場から逃げ出したら、俺は俺に嘘をついた事になる。それだけは絶対にできないんだ。だって、自分の信念を平然と曲げちまうような奴に、大切なモノなんか守り抜ける訳がないだろ?」

『ですが、その機体でどう戦うというのです』

《零落白夜》の使用と、先の一撃で〈白式〉のエネルギーは残り少ない。

アリスの指摘通り、戦闘に参加できても、まともに戦えるかどうか……。

「なら、リヴァイヴの残りエネルギーを使うといいよ」

そう言っつて、俺の肩を叩いたのはシャルルだ。手には一本のプラグ。

「いいのか、——いや、その前にそんなことできるのか」

「できるよ。その代わり、必ずラウラを助けてあげて。約束だよ?」

シャルルが強い眼差しで俺に何かを託す。俺は強く頷いた。

「わかった、約束する」

「僕の想い、確かに託したよ。——アリス、エネルギー供給に120秒欲しい。稼げる?」

『まったく、あなたたちときたら。……わかりました。任せてください』

いうなり、アリスはソードビットを俺たちの護衛に残し、ラウラへと肉薄していった。

激しい剣戟を繰り広げる二人の背後で、シャルルが〈白式〉へのエネルギー供給を始める。

↑報告：外部リアクターとの接続を確認——↓

↑報告：外部リアクターの解放許可を受諾。供給開始、充填率1%、終了まで118——↓

俺はエネルギー残量を示すインジケータをしきりに眺めながら、早く早くと念じる。

待ってるよ、ラウラ。かならず救い出してやるからな。

♡

◆

✦

♠

先刻の襲撃事件から、千冬はあらゆる事態を想定し、その準備も怠らなかつた。

セキュリティシステムの強化、警備の増援。国家代表の召集。万全にして磐石。そういう体^{てい}で挑んだはずの学年別トーナメント。

だが、事態はその予想を上回った。千冬にとって最も残酷な形で。

「どうして、あのシステムが……？」

変貌したくシユヴァツエア・レーゲン、いや、ラウラを見て千冬は失語した。

驚愕、焦燥、呵責、あらゆる感情が入り混じり、うまく言葉を紡ぎ出せなくなる。

それでも、ひとつだけ呻くように発した。

「罰、なのか……」

ラウラの一途な想いに目を背け、一夏を理由に逃げてきた自分に対する罰なのか。

だとしたら、私はまた同じ過ちを犯してしまった……。

「お、織斑先生……？」

鉄火面の如く表情を変えない千冬がここまで動揺しているのを、真耶は初めて見た気がした。

しかし、宥めている場合ではないことを、真耶は理解している。彼女は毅然と言った。

「織斑先生、指示を、お願いします」

その言葉が功を奏し、千冬は本来の役職を思い出した。

そうだ、私は指揮官。役目を果たさなければならぬ。後悔に暮れるのは明日だ。

「すまない、山田先生。取り乱してしまった」

「いえ」

「では、来賓、生徒の避難を最優先して対応に当たれ。避難誘導には〈生徒会〉の連中を当たらせる。教師部隊はそれぞれのISで、指示があるまで待機。装備は〈クラスA〉を許可する。あと、ジェニフアーたちをココに呼べ」

「もういるわよ」

振り向くと、既に国家代表たちが集結していた。

しかし、いたのはアメリカ、中国、イギリス、ドイツ、イタリア、フランスの6名だ。

「更識と月子はどうした？」

「ロシア代表なら生徒会長として、来賓の護衛と避難誘導に当たっているわ。それでも人手が足りないみたいだから、月子ちゃんと他の候補生が手伝っているわ。――で、状況は？」

ジェニフアーは分析官に口頭で何かを指示したあと、千冬に現状説明を求めた。

「機体状態が不安定なことに加え、操縦者が正常な判断力を失っている」

千冬は苦い表情で、管制室のコンソールを呼び出した。

メインモニターが、ISの状態と操縦者の数値に切り替わる。状態図では動力炉に当たる部分が赤色で点滅していた。操縦者の数値では脳波が不規則な周期を示している。どちらも正常な数値を示していない。

「こちらの管制誘導に従うよう呼びかけていますが、応じる気配がありません」

真耶がそう言った。

「完全な暴走状態ってことかしら。被害予想は？ 出た？」

ジェニフアーが指示した分析官に訊く。「三番モニターに出します」と分析官は言った。

表示された「時間」と「被害」の比例グラフには、40度の角度で上昇するラインが刻まれていた。下のサブベイには、いくつもの被害予想がリアルタイムで更新されている。

「仮にコンピューターの被害予想が全て的中した場合、学園は深刻な

ダメージを被ると思われます。そうなれば、30分以内に、避難している生徒たちにも、大きな危害が……」

ジェニファアは表情を険しくした。

「コードレッドに相当する事態ね……」

〈国際IS委員会〉では、ISによる危機的状況がいくつも想定されている。中でもISの暴走や所属不明機の襲撃など、大規模な物理的被害が予測された場合に発令されるのがコードレッドだ。

発令時には可及的速やかな事態の收拾が望まれ、ISの破壊が推奨される。

この処置は〈白騎士事件〉で〈白騎士〉が世界に畏怖を与えたためだ。

〈白騎士ショック〉と呼ばれるそれにより、世界はISの暴走に対して過剰な防衛反応^キを見せるようになった。そのため、コードレッドの際は、操縦者の生命のプライオリティが低く設定される。

だからなのだろう。千冬は苦しい表情を浮かべていた。

いまコードレッドを発令すれば、不用意にラウラの生命を危機に晒してしまう。

「千冬」

ジェニファアは決断を迫る声音で言った。

「わかっている、わかっているさ」

千冬は解っていた。自分が何をすべきなのか。何を守るべきなのか。

ラウラは自らの意思で禁忌にふれ暴走した。その違反者を庇い立てて、傷つく謂れのない人間に危害が及ぶような事態は避けなければならぬ。

だが、胸の奥から鳴り響く警鐘のようなざわめきが、合理的な思考を押しつけてくるのだ。

「やめろ、取り返しがつかなくなるぞ」、そんな焦りが裡からずつとせり上がってきていた。

「辛いのは解るわ。でも、事は急を要する。あなたが指示を下さないと誰も動けない」

彼女は正しい。司令である自分が決断しなければ、誰も動けない。事態も可及的速やかに収束を図らなければ、被害が拡大する。

千冬は伏せていた視線を上げた。その目に監視カメラの映像が映る。シエルター内では生徒たちが震えながら身を寄せ合っていた。アリーナでは、暴走したラウラの凶刃に一夏が曝されている。

彼女を守らねば。

強くそう思った。そう思ったから、彼女は英断した。苦渋の果て、断腸の思いで。

「コードレッドを発令する。〈国際IS委員会〉の危機対応規定に則つて、我々は対処にあたる。〈シユヴァルツェア・レーゲン〉を可及的速やかに破壊し、被害の拡大を食い止める」

たった数十文字の言葉だったが、吐き出すのに途方もない労力がいった。

そんな千冬に代表たちは姿勢を正し敬意を払う。ジェニファアは彼女の肩に手を置いた。

「最善は尽くすわ」

「ああ。たのむ」

慰めにならない慰めに千冬は小さく頷く。彼女は希望も期待も持たなかった。

ジェニファアは〈国際IS委員会〉の人間。ISの脅威から、力なき人間を守る使命がある。

「いくわよ。あなたたち」

と、それぞれが軀を馴らしながら、代表たちがアリーナの管制室を出て行く。

ただ、アイリーンだけが千冬に何かを言いたそうな顔をしてから、部屋を出て行った。

そんな彼女たちを、千冬はどこか臍気に見つめていた。

「あの、その………いえ、なにも」

真耶が何か言葉をかけようとして、断念する。

そんな彼女の気遣いに、千冬はいつもの凛々しい表情を取り戻そうとして、

失敗した。

第31話 黒い雨がふる

前回の襲撃事件の経験が生きてか、生徒、来賓の避難は滞りなく進んでいた。

ほどなくして目ぼしい人物の避難が完了したところで、避難誘導にあたっていた、セシリア、鈴、そしてアリーナから帰還したシャルルは通路に集合した。

「こっちの避難は終わったわ。あとはあたしたちだけよ。どうする？」

「わたくしはアリーナの管制室に向かいますわ。見届けなければならぬ事がありますの」

「僕もいくよ。僕も一夏たちの戦いを見届けたいから」

「仕方ないわね。じゃあ、あたしも付き合っただけあげるわ」

意見がまとまり、三人は誰もいなくなった通路を走り出した。

避難が完了しているため、通路に人気はない。そのはずが、進路先にふたつの人影を見つけ、三人は足を止めた。

「箒さん？」

「箒！」

三人が見つけた人影のひとつ——箒が振り返った。

「セシリア、鈴。それにシャルル」

「何をしていますの。早く避難しなさいな。危険ですわよ」

「わかってはいるが、一夏が……」

先刻の襲撃事件が不安を駆り立てているのか、箒は表情を顕著に曇らせた。

恋敵ゆえに彼女の心境が痛いほど理解できたセシリアと鈴は顔を見合せた。そして、先月の彼女の行動を思い起こし、頷き合う。

「では、わたくしたちと一緒にアリーナの管制室へ参りましょう。そこでなら一夏さんの戦う姿を見守れるはずですよ。ここにいますより良いでしょう」

「すまない」

「で、こっちの子は？」

鈴の一言で、箒の後ろにいたもう一人の生徒がビクッと肩を震わせた。

水色のセミロングヘヤーに、物静かな物腰。かけた眼鏡がどこか知的な雰囲気の少女だ。

「彼女は私のペアの更識簪だ。なんでも彼女には優秀な姉がいるらしくてな、私に感じるものがあつたらしい。それで組むことになったんだ」

「更識簪。確かロシア代表の妹さんで、日本の代表候補生でしたわよね？」

〈ブリュンヒルデ〉から代表候補生まで。あらゆるIS操縦者の情報を網羅しているセシリアは、一目で簪の正体に気づいた。対し、そういう情報に疎い鈴は、半信半疑の眼差しを簪に向ける。

「へ？ この気弱そうな娘が日本の代表候補生なの？」

「……は、初めまして」

と、軽く会釈する簪には、国家代表候補生に伴う気迫——どっしりした気構えが感じられなかった。どちらかといえば機械オタクキョウタクと言われた方がしっくりくる。事実、彼女はギークだった。

「まあ、いいだろ、鈴。ひとそれぞれだ」

箒は簪をかばい、その簪に言った。

「簪、私はこれからアリーナの管制室に行く。お前は どうする？」

「……一緒に、いく。これでも、代表候補生。……何かできること、あるかもしれない」

「わかりましたわ。では一緒に参りましょう」

セシリアが頷き、5人は再びアリーナの管制室に向かって走り出した。

「しかし、ラウラのあれは一体何なのだ？ ラウラの身に何が起った？」

セシリアの後に続きながら、あのゾットとするラウラの絶叫を思い出す。

あの叫びは一体何だったのか。その疑問に答えたのはセシリアだった。

「VTシステムが発動したのですわ」

苦しげに放たれた彼女の言葉に、代表候補生三人は驚きを露わにする。

ただISの専門知識に疎い箒だけは、一人顔をしかめた。

「VTシステムとはなんだ？」

「それを説明する前にお伺いしますわ。箒さん、武の神髄とは何かしら？」

思いがけない質問にやや戸惑いつつも、箒は即答した。

「心・技・体だ」

心と技と体。心を磨き、技を学び、体を鍛えること。武の根幹はそこにある。箒は剣術の師であり、実父である『篠ノ之柳韻』からそう教わった。

はたして、それがVTシステムと、どういう関係があるのか。——
そうか、そういうことか！

「VTシステムとは、つまりそういう事か！」

「ええ、VTシステム——ヴァルキリー・トレースシステムとはへヴアルキリー」が持つ「心・技・体」を操縦者に体得させるシステムですの」

なるほどと納得した。同時にある疑問が浮かび上がる。

「でも、そんな事は不可能だ。確かにISのパワーアリストを使えば【体】を鍛えたことになるだろう。ISのモーションマネージメントを使えば【技】を再現できるのかもしれない。だが【心】はどうする。どうやってへヴアルキリー」が持つ【心】を体得させる？ 心は経験によつて養われるものだ」

心は経験を積むことでしか養えない。経験だけが人を磨く唯一の研磨剤だからだ。

故に人は言うのである。『苦労は買つてでもしろ』『かわいい子には旅をさせろ』と。

しかし、そう熱弁する箒の言葉を、セシリアは冷淡な言葉で否定した。

「残念ながら、現代科学では人の心でさえコントロール可能ですの」

「一体どうやって!」

「環境演出型権力と仮想現実を用いて、操縦者に〈ヴァルキリー〉が送った人生を疑似体験させますの。そうする事で〈モンド・グロツ〉を制した〈ヴァルキリー〉の【心】——すなわち何事にも屈しない強靱な精神を体得させる」

「所詮それは理屈だ! 〈ヴァルキリー〉と同じ人生を体験したからと言って、必ずしも〈ヴァルキリー〉と同じ精神構造になるとは限らない! 人の心はそんな単純なものじゃないだろ!」

「ええ。だから、システムが人の精神にどういう影響を与えるか、調べる必要があります」

「〈シュヴァルツェア・レーゲン〉は、そのための実験機だったというのか……。でも、なぜラウラなのだ。やつは特殊部隊の隊長だぞ。ドイツの代表候補生でもある」

「それは……」

セシリアは言葉に詰まる。アリスから告げられた事実を語るべきか、迷いが生じていた。

彼女の出世を知った時、正義感の強い彼女は必ず憤るだろう。

だとしても、この世界で生きとして生きる人間なら知らなければならぬ。

人間の愚かさを。

それを知り、省み、戒め、そうすることで世界は前に進んできたのだから。

無知は罪だ。そう判断し、セシリアは言った。

「それはラウラさんが軍事用に遺伝子操作を受けた〈遺伝子強化素体〉だからですわ」

「遺伝子、強化、素体……?」

最初、セシリアから発せられた言葉の意味を、箒は理解し兼ねた。しかし彼女とて馬鹿ではない。言葉のニュアンスと話の脈絡から、それなりに察する事はできる。

おそらく彼女がいう〈遺伝子強化素体〉とは実験動物、あるいはそれに類する存在なのだろう。

「実は、VTシステムには大きなリスクが伴いますの」

「リスク？ 一体どんなリスクがあるのだ？」

「……VTシステムの発動時、操縦者の脳に押し掛かる負担は想像を絶する」

「当然よね。何十年分の経験を数秒で体験させんだから。そりゃ脳みそも悲鳴を上げるわよ」

彼女たちの言葉で、疑問のひとつが氷解した。

なぜラウラがこの世のモノとは思えない絶叫を上げたのか。それは織斑千冬という人格を構成した24年分の膨大なデータ——24年の歳月の中で発生したあらゆる感情——が脳内に流れ込んだためだった。

「米軍の試作タイプはその膨大な情報量に脳の処理が追いつかず、テストパイロットが錯乱を起こし、暴走に至りましたわ。でも、肉体を強化された〈遺伝子強化素体〉であるラウラさんなら、あるいは……」
そこでようやく話の全貌を呑み込めた。

つまりドイツはVTシステムなるものを開発するため、〈遺伝子強化素体〉という実験動物^{モルモット}を利用して人体実験を行ったのだ。

「胸糞悪い話だ。何故そんな非道なマネをしてまで、そんなシステムを開発する必要がある」

「……それは、きつとわたしみたいな子がいるからだと思う」

そう言ったのは、簪だった。

「わたしみたいに心の弱い子がいるから、心を強^Vくするシ^Tステムが必要になるんだと思う」

「あなただけの所為じゃありませんわ。この学園の生徒はISに対する認識が甘いですもの」

ラウラも言っていた。ここの生徒は危機意識に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしていると。

無論、その背景には政府のプロパガンダやアジテーションの影響があるわけだが、はたしてそんな彼女たちが戦場の現実を知った時、それだけが病まずにいられるだろうか。

その解決策としてVTシステムが開発されたのは、ある意味必然

なのかもしれない。

だが、箒はこのVTシステムに酷い嫌悪感を覚えた。

かつて猛者と謳われた古き戦士たちは、己の力で心を律し、強靱な精神を体得してきたのだ。

それをシステム化し、安易に体得させようなど戦士への冒瀆に他ならない。ゆえに箒は言う。

「そんなもの、強さじゃない」

本物の強さとは、無感動に人を殺められる非情さじゃない。

人の強さとは、力強さとは、もつと暖かいモノのはずだ。

だから一夏には負けないでほしい。そして本当の強さとは何なのかを証明してほしい。

その想いが顔に出ていたのか、セシリアは真摯な瞳でこう言った。

「大丈夫ですわ、一夏さんは負けません。だって、彼女がっていますもの」

彼女。それがアリスだと気付いたとき、5人はアリーナの管制室に到着した。



ラウラが振りかざした《偽雪片》の一閃を、アリスは《ヴォーパル》で受け止めた。

そこから鏢迫り合いの接点をずらし、刀身を滑らせる。攻撃を受け流され、よろめいたラウラの横腹に、アリスは蹴りを入れた。

「——一夏、いまですー!」

バランスを失ったスキに乗じ、俺は縦一文字の袈裟斬りをラウラの頭上に放った。

だが、《雪片式型》を振り下ろした瞬間、全身が凍りつくような不快感に襲われる。

「この違和感——A I Cか……!」

この状態でも集中力の必要なAICが使えたとは……。

俺が不可視の力で拘束されていると、体制を建て直したラウラが、深く腰を落した。

あの構えは篠ノ之流剣術の一つ『明鏡止水』。静寂と最速を一撃必殺とする抜刀術だ。

「——っ！」

まるで何百回と繰り返し返したような淀みない動作で、ラウラが神速の居合切りを繰り返す。

躲せない。——そう思った時、俺は横殴りに強い衝撃を受けた。次いで、柔らかい感触が俺を襲う。

なんだ、いったい……。

戸惑う俺が顔を上げると、綺麗な女性の顔が映った。澄んだブルーの瞳。艶やかな金髪。頭部には短剣のような装置が聳え立っており、まるでキツネのようだ。

(この人は一体……?)

当惑する俺に、〈白式〉が狐耳のお姉さんの正体を教えてくれる。

↑—IS情報・ライブラリー照合。第三世代型IS〈ナインテイル・フォックス〉——↓

↑—IS詳細：専属操縦者ジェニファー・J・フォックス——↓

↑—追加情報：現アメリカ国家代表 二代目〈ブリュンヒルデ〉——↓

二代目〈ブリュンヒルデ〉。

という事は、目の前の女性は、あの時、千冬姉が戦うはずだった決勝戦の相手？

「弟くん、大丈夫？」

「え？ あ、はい。おかげさまで」

「そう、よかったわ」

ジェニファーさんは軽い口調でウィンクし、お姫様抱っこしていた俺を地面に下した。

「——じゃあ、あとはお姉さんに任せなさい」

彼女が一步に踏み出したところで、俺は彼女の専用機が持つ名の意味を知った。

ジェニファアさんの尾骶部から白いエネルギーが迸り、九本の《尾》を形成したのだ。その姿はまさしく白面金毛九尾の狐。へナインティル・フォックスだ。

「さて、狩りの始まりよ——」

ラウラを見据えたジェファアさんから飄々とした雰囲気が消え失せる。

鋭さが増す彼女の双眸に、俺は千冬姉のような凄みを感じ取った。同時に躰の芯から理解する。

(——この人、むちゃくちゃ強い)

俺の言葉を体現するように、ジェニファアさんは狐のような俊敏さでラウラに肉薄した。

ラウラは《偽雪片》を振りかざし、神速の太刀筋で彼女を迎撃する。しかし、ラウラの斬撃はジェニファアさんが展開した得物によって呆気なく弾かれた。

展開された得物は日本刀だった。

それも漆黒の《雪片》とは違う、銀色の刀身を持つ刀。見た事がある。あれは——

↑——IS情報：＜暮桜＞専用近接ブレード《雪片》——↓

やっぱりそうか。あの近接ブレードは《雪片型式》の先代。本物の《雪片》か。

それが分かった次の瞬間、攻撃を弾かれ無防備になったラウラのボディに九尾のラッシュが叩き込まれた。なんてエキセントリックな戦い方をするISなんだ。

「その程度？ 千冬の攻撃はもつと鋭かったわよ？」

なおも重量を感じさせない躍動で、ラウラの剣捌きを《尾》あるいは《雪片》でいなし、その都度生じたスキに強烈な攻撃を打ち込む。その一連動作は流麗でスキがない。これが《ブリュンヒルデ》の実力か。「つえーな、あの人」

「そんな呑気な事、言っていられないかもしれませんよ」

圧倒的な実力差を見せつけるジェニファアさんを、アリスは浮かない表情で睨んでいた。

まるで何かを危惧しているかのような——敵を見る貌だ。

「まずいですね」

言うなり、アリスは相対するジェニファーさんとラウラの間に向かって飛翔した。

そして俺が制止するよりも早く、両者の間に入って、左右から迫る剣撃を受け止める。

両者の剣戟を止めたアリスは、ジェニファーさんに言った。

「ジェニファー・J・フォックス。目的の意図を明らかにしてください」

「コードレットが発令されたわ。その規定に則って<シユヴァルツェア・レーゲン>を破壊する」

<シユヴァルツェア・レーゲン>の破壊。それはラウラの身を保障したものののだろうか。

救出と言わなかったジェニファーさんに冷たいものを感じ、俺は漏らすように訊いた。

「破壊つて、ラウラの安全は……？」

「最善は尽くすわ。でも、あんな状態だもの。保障はできない」

その言葉に、俺は胸を締め付けられたような錯覚に陥った。

「操縦者は正気を失っている。果てしない暴走を続けるでしょう。I Sの暴走が如何に危険なものか、あなただって知っているでしょ？」

だから、被害が大きくなる前に、暴走を止めないといけない。言っていることは理解できた。

傍若無人に振る舞うI Sがどれほど怖いものか、俺は身を以て知っているから。

「それとも彼女の安全を優先して、ここにいる何百の人を危険にさらす？」

「さらさない。みんなも守って、ラウラも救う！」

そのために厳しい特訓を積んできたんだ。<白式>だってそのための力だろ。

「立派ね。でも、私たちにはそれができない。いい、覚えておいて、弟くん。何かを守護する組織は功利主義で動かなければならないの。」

天秤の傾きが全てなのよ。1のために100を危険にさせない」
ジェニファアさんの言葉は理解できる。

軍隊や警察という組織が、一人のために百という人間を犠牲にする事はできない。

最大の幸福と最小の不幸。それが彼女の正義であり、行動原理。

だが、俺は感情が熱くなるのを抑えられなかった。

ラウラがあんな形に歪ってしまったのは、そうまでして千冬姉に振り向いて欲しかったからだろ。

「そうだ、千冬姉だ」

千冬姉ならこの人を止めてくれるはず。

俺は急いでアリーナの管制室に通信を繋いだ。

「千冬姉！ あの人を止めてくれ！」

回線先にいる、いつもの毅然とした千冬姉にそう訴えかける。

しかし、帰ってきた言葉はあまりにも非情な回答だった。

『それはできない』

俺は心臓を掴まれたような感覚に襲われた。

「な、なんでだよ！」

『私がジェニファアにくシユヴァルツエア・レーゲン>の破壊を命じたからだ』

息が詰まり、胃に何か重い物が落ちる。吐き気に代わって込み上げてきたのは憤怒だ。

「なんでだよ！ ラウラは千冬姉の事が好きで！ 大好きで！ だから、あんな風になっちまったんだぞ！ なんて助けてやらないんだよ！」

『……………。今、優先すべきは学園の被害を最小限に留める事、学園生徒の安全を守ることだ』

わずかな沈黙のあと、千冬姉の発した言葉に、俺は強い失望感を抱いた。

「見損なっただぜ、千冬姉。俺の知っている千冬姉は、そんな理由で人を見捨てたりしない」

『失望でもなんでもしろ。私には果たさなければならぬ仕事があ』

る』

「わかったよ。千冬姉がそういうなら——俺がラウラを救う」
『大言壮語を吐くのも大概にしておけよ、一夏。おまえがそうやって大盤振る舞いできてきているのは、学園の庇護があったればこそだ。自分の権利さえ守れない人間に何が守れる?』

俺は強く奥歯を噛みしめた。千冬姉の言葉を撥ねつけられなかった、その悔しさに。

『仲間を守る』。俺は幾度なくそう口にしてきた。

でも、俺は今まで何かを守れただろうか。いや、守れていないんだ。自分の身さえ。

『わかったら、ヒーローごっこは終わりにして、帰投しろ、いいな』
それだけを告げ、千冬姉は通信を切った。結局、俺は最後まで何も言い返せなかった。

ただ無力さだけが、腹に落ちる。そんな俺の前に誰かが立った。アリスだった。

「なんだよ。俺を笑いにでもきたか?」

俺は顔を逸らす。こんな姿を彼女に見られなくなった。

しかし、アリスは嘲ることなく真摯な瞳を向けた。

「一夏。戦いに必要なのは、意志の力です。戦えない者に勝利はない。——たとえ結果がどうであれ、私は最後まで戦います。私には果たさなければならぬ、友との『約束』がある」

そう告げ、俺に背を向ける。きつと、友との約束を果たしにいくのだろう。

遠ざかる背中には、強い意志が感じられた。どんな苦難でもやりぬこうという意志が。

「そして、あなたにもあるはずですよ。託された想いが」

最後にアリスはそう言った。そうだ。このく白式にはシャルルの想いが託されている。

己の弱さを理由に、その想いを無碍にするのか、織斑一夏。

そんなわけにいくか。たとえば、非力でも最後まで戦う。それが相手の想いに報いることだろ。

「アリス、俺も行くよ」

俺は告げた。己の意志を貫くため、そして、友人の想いに応えるために。

たとえ、何も守れなくても、俺は俺のできることを全力で成す。もう千冬姉の言葉は恐れない。

「それを聞いて安心しました。でも、これからの戦いに正義はない。いいですね」

「ああ、ここからは俺たちの個人的な動機だ。でも、その覚悟はできている」

強く頷く俺に、アリスは不敵な笑みを浮かべた。

そしてラウラと剣戟を広げるジェニファーさんの許に割り入って、こう言う。

「ジェニファー・J・フォックス、あとは私たちがやります。あなたは退いてください」

「なにをする気?」

「クロツシング・アクセスを使います」

クロツシング・アクセス
相互意志干渉。授業で聞いた覚えがある。操縦者同士が波長を合わせる事で発生する特殊な相互通信だ。それをを用いて錯乱状態にあるラウラを正気に戻して、〈シユヴァツエア・レーゲン〉の暴走を止めようというのか

「無理よ。正気を失っている彼女と波長を合わせるなんて不可能だわ。仮に成功したとしてもヘコアネットワークを通じて、VTシステムシステムの暴走があなたにも及ぶ。あの子のようにになりたいの」

ラウラの剣戟を躲し、ジェニファーさんが視線でこちらを牽制する。桁違いの迫力だった。それだけでこっちが尻尾を巻いて逃げたくなる。だが、アリスは臆することなく言い放ちやがった。

「昔の私も同じことを思っていました。けれど、そのあとに残ったのは後悔です」

「……。そう、あなたがあの時、VTシステムを止めた操縦者」

「分が悪い賭けなのは、承知の上です。——ラウラはたくさんの

ものを奪われてきました。愛、自由、権利。これ以上、彼女の大切なモノを奪わせはしない。たとえば、世界を敵に回しても」

アリスは強い意志の宿し、そう言い放った。公然と世界へ告げるように。

そんなバカみたいな宣戦布告に、俺は胸が熱くあるのをやめられなかった。

だが、ジェニファーさんは怯まず、あくまで冷静にいった。

「それでもあなたの行為は許可できない。私はあの子が遺伝強化素体だから、軽はずんでいるわけじゃない。大切なものを奪われたくないのは、ここにいる子供たち、みんながそう。みんな理不尽に命を奪われたくない。私たちはその子供たちの命を守る。力に在る者の義務として」

ジェニファーさんが手を振り上げる。それを合図に5つの影が現れた。

♡

♣

♠

5つの影の正体。それはイギリス、ドイツ、フランス、イタリア、中国の代表だった。

おのおのが専用機を駆り、その堂々たる風格を見せつけながらアリスを見下ろす。

だが、アリスは怯まなかった。

「もしかして、あいつ、国家代表を敵に回す気!?!」

アリーナの管制室。無謀な行動をするアリスに、鈴は頭を抱えた。確かにアリスの強さは他と一線を画しているが、許容範囲というものがあるだろう。

あれだけの国家代表を敵に回すなど、もはや勇敢を通り越して愚かですらある。

いや、本当にそうだろうか。

悲哀にくれた少女のために、世界と戦う事が、本当に愚かな行為な

のだろうか。

鈴には判らなかつた。

確かにラウラは好かない奴だつた。でも、こんな所で潰えていい命ではないと思う。

もしく甲龍>が使えたら……自分はどちらに味方していただろう？

「ちよつとよろしいでしょうか」

葛藤する鈴の横を、セシリアが優雅に横切つた。

そして、真耶に一言いれ、アナウンスのスイッチを入れる。

「お征きなさい、アリス・リデル！」

セシリアの思いかげない行動に、千冬を含めた全員が目を？いた。

そんな視線などどこ吹く風で、セシリアは続ける。

「——エイミーはVTシステムの実験で亡くなりました。ここで同じ結末を辿れば、わたくしたちはあの事件から何も学んでいないこととなります。それではエイミーの死が無駄になります。彼女の死には意味があつたのだと、それを証明するためにも、必ずやラウラさんを救い出してくださいませ。彼女の死から多くを学んだ貴女ならきつとできます。——では、あなたに女王陛下のご加護がありますように」

『Yes My Majesty』

回線の向こうのアリスが、セシリアの激励に強く応える。

彼女の返答に満足したセシリアは澄ました顔で、ポカンとする真耶にマイクを返却した。

「オルコット、どういうつもりだ」

千冬が怒号を飛ばしても、セシリアは怯まなかつた。

「あの方の言い分は正しい。合理的だとも思います。けれど、人間やその魂は不合理なものです。だからこそ、わたくしたちは“愛”という不確かなモノを信じていける。理屈がこの世の全てじゃないのですわ。だから、わたくしは彼女に言いましたの。——“自分の魂に従え”と。織斑先生、あなたも自分の魂に従ってはどうです」

青い瞳に揺るぎはなかつた。臆することなく、千冬を見据えてい

る。

堂々たる彼女の振る舞いに、鈴は胸が熱くなるのをやめられなかった。

たぶん、この場面で胸が熱くなるのは「合理的」ではないのだろう。でも、彼女はアリスの「分の悪い賭け」に、「不合理な賭け」に乗ってみたいと思った。そう思った鈴は真耶からマイクをぶんどった。

「アリス、存分に暴れてやんなさい！ あたしが許す！」

そんな鈴に誘発されたのか、今度は箒とシャルル、簪までもがマイクに駆け寄った。

「アリス、悔しいが今の私には共に戦える力がない。だから、私に代わりに一夏を頼む」

「僕からもお願い。アリス、ラウラを助けてあげて。あの子は僕と一緒になんだ」

「……わたしからもお願い。あの子を……救ってあげて」

『任せてください』

彼女たちの言葉に応え、アリスは《シュナイダー》を射出した。それを円環状に配置し、前方に姿見を形成する。その鏡面に飛び込むと、＜赤騎士＞に変化が現れた。

皆の表情に驚きの色が灯る。この現象を鈴たちは知っていた。そう、これは――

『セカンドフォームシフト』
『《第二形態移行》!!』



避難が終了し、閑散としたアリーナの観客席。そこに二人の女性が佇んでいた。

白衣らしき衣装に身を包んだ二人は、傍から見れば学者のように見えた。

「始まったわね。彼女の贖罪の戦いが」

白衣姿の一人——ロリーナは鏡を抜け、《セカンドフォームシフト第二形態移行》したく赤騎士〈を〉を見やる

《セカンドフォームシフト第二形態》に移行したく赤騎士〈は、ステンドグラスのような翼を羽ばたかせた。右腕には巨大な小手——輻射波動機構を内蔵した多機能武装腕アームド・アームを装備している。尾骶部からは《単一仕様能力》のティルコンデンサーが伸びていた。

総じて、その姿は竜騎士という風貌で、精悍だったく赤騎士〈より鋭利な風格を漂わせている。

「まるでウエルズア・ド・ライグ・ゴツホの赤い龍」

ロリーナの横にいた、もう一人の女性が言った。

言い得て妙だ。

禍々しいも逞しいその意匠はイギリス・ウエルズの守護龍に見えなくもない。

もつとも、その専属操縦者はイングランドの血を引く人間であったが。

「見るのは初めてかしら？」

「ええ。私の専門は遺伝子学とナノマシン。ISの開発は管轄外でしたから。それはともかく彼女、大丈夫でしょうか？ あれだけの国家代表を相手に」

いかに《セカンドフォームシフト第二形態移行》したISが規格外の性能を得えたとしても、国家代表が6人がかりでは手に余るだろう。かてて加えく赤龍騎士〈にはその性能と引き換えに制限時間というリミットが発生する。不利な状況が打開された訳ではない

「大丈夫よ、第二形態のく赤騎士〈にアリスが乗ればへスコードロン〈にも対抗できるわ」

「確かにく赤騎士〈の潜在能力は未知数です。でも、ロリーナ。それはへワンダーランド〈が弾きだしたシミュレート結果に過ぎません。《フルセイバー》もインストールされていないのでしょ？」

「いいえ。あの子の力が、想いが、不可能を可能にするわ」

女性は驚いた顔をした。

ロリーナが、そんな非科学的で根拠のないモノをあてにするなん

て。

「ふふふ、科学者がそんなことを言うなんて変？」

「はい。科学者はみんな数字に縛られて生きていますから」

「そうでもないわ。科学者は意外にもロマンチストよ。だから、人が起こす奇跡を信じてみたくなるの」

ロリーナが愉快そうに笑うと、女性もつられたように笑った。

奇跡。人が起こす想いの力。遺伝子に刻まれていない何か。

たまにはそういう非科学的なものを信じてみるのも、悪くない気がした。

「さあ、括目しなさい。彼女が起こす奇跡を。リデルのコードネームは伊達じゃないわ」

♡

♣

♠

↑——<赤騎士>《セカンドフォーム・シフト第二形態移行》完了。稼働限界まで600——↓

600秒。およそ10分。それが<赤騎士>の稼働限界時間。

《第二形態》の<赤騎士>は破格の性能に伴い、エネルギー消費と部品消耗が著しい。そのため、《第二形態》を維持できる時間には限りがある。それを理由に今まで使用を控えてきたが、もう出し惜しみをする必要もないだろう。

「10分です。10分間、私が何とかして彼女たちを食い止めます。

そのうちに相互意識干渉クロッシンググアクセスを使って、ラウラを正気に戻してください」

本来なら彼にこんな危険な役目を押し付けたくない。だが、国家代表を相手にしながら相互意識干渉を発生させるのは、私でも無理だ。今は彼にラウラの救出を託すしかない。

「一夏、あなたの優しさが本物なら、きっと届くはずですよ」

「ああ、任せろ」

一夏は力強く頷いたあと、<白式>を回頭させた。そこに先ほどの弱腰な彼はいない。

うん、やっぱり男の子はこう勇ましくないとはいけません。

なら、私も彼の勇ましさには答えられないといけませんね。と、眼前の敵——各国の国家代表を見据える。

↑——IS情報：第三世代型IS<ナインテイル・フォックス>——↓
↑——IS詳細：専属操縦者・アメリカ代表『ジェニファー・J・フォックス』——↓

↑——IS情報：第三世代型IS<甲虎>——↓
↑——IS詳細：専属操縦者・中国代表『フー』——↓

↑——IS情報：第三世代型IS<サイレント・ゼフィルス>——↓
↑——IS詳細：専属操縦者・イギリス代表『ローズマリー・ライオンハート』——↓

↑——IS情報：第二世代型IS<シュヴァルツェア・イエガー>——↓
↑——IS詳細：専属操縦者・ドイツ代表『アイリーン・フォン・エーデルシュタイン』——↓

↑——IS情報：第三世代型IS<テンペスタ・プルガトリーオ>——↓
↑——IS詳細：専属操縦者・イタリア代表『アンジェリカ・ヴァレンティン』——↓

↑——IS情報：第二世代型IS<ラファール・エトワール>——↓
↑——IS詳細：専属操縦者・フランス代表『ノエル・ラ・フォンテーヌ』——↓

代表の専用機名と知る限りのスペックがARフォログラムによる追記される。

どの機体もその国が誇る最新鋭機だと一目で判った。
「なるほど、機体も操縦者も一級品というわけですか」

《Don't worry My honey——相手が一級品だとしても、私たちは超一級品。問題ない》
《レットクイーン》の小粋なジョークに、私は再び笑った。

「レットクイーン」、今から死地へ赴きます。付き合ってくださいますか？」

《Of course My honey——地獄の果てまでも》

「では、始めましょう。IS 同士による、少女を賭けた世界大戦つてやつを！」

Through the Looking-Glass,
What Alice Found There.
To be continued

第32話 本日ハ晴天ナリ

「——私は弟くんの無茶を止めるわ。あなたたちは、あのお転婆娘を抑えておいて頂戴」

ジェニファーが指示を下すと、各国家代表たちがアリスの前に立ちはだかった。

「私たちは国家代表。全操縦者の規範となる存在だ」

「……私たちが規律や規則を守らなければ、全てが済し崩しになるわ」
「だから、違反者を庇い立てするキミの行いを許すことができない」
「悪く思うな。秩序を乱す者には、それ相応の報いを与えねばならぬのだ」

それは正しい言葉だった。だけど、正し過ぎてアリスには全て綺麗ごと聞こえた。

そんな彼女たちにアリスは中指を突き立て言ってやる。

「I don't give a fuck!」

これには各国家代表も失笑を漏らした。この場に及んで『私の知った事か』とは。

もしこの場に元同僚のイーリスが居れば、腹を抱えて笑っていただろう。

「正義を語れるのは勝利者だけ。正義を論したいなら、私を屈服させてからすることです」

アリスは『ヴォーパル』を掲げ、『かかってこい』と人差し指で挑発した。

「まったく、キミには驚かされるよ」

「……では、お望み通り、言葉ではなく武力を以て黙らせるとしよう」
最初に動いたのは、イタリヤ代表アンジェリカが操る<テンペスタ・プルガトリーオ>だった。

アンジェリカは背面に装備された二つ折りの火砲を可動させて、前方に構えた。砲身は2m。砲口は5インチ。人が扱うにはあまりにも大きすぎるそれが、イタリヤの第三世代兵器——グラビティースター『ベアトリーチェ』だ。

「……拝聴しなさい。《ベアトリーチエ》が歌うダンテの神曲を」
アンジェリカがひどく涼しく、かつ美しい声で言った。
発砲。

凄まじい反動と共に、特大の砲口から漆黒の砲弾が撃ち出される。
グラビティーブラスタ―は局所的重力場を発生させる砲弾を撃ち
出す兵器。当たれば、物体は一瞬で圧潰される。

だが、アリスは躲そうとしなかった。

直撃。光が屈折して、空間がぐにやりと歪む。しかし、重力嵐が過
ぎ去っても、そこには何もなかった。あるのはブラスタ―の砲撃が
作った大きなクレーターだけ。〈赤騎士〉の姿はない。

「……手ごたえが、ない……？」

不振がるアンジェリカの肌がざわつと波打つ。

〈テンペスタ・プルガトリーオ〉の装甲に埋め込まれたレーダー素
子が反応した。

↑——接近警報：方位、上空、距離5——↓

「……うそ」

アンジェリカの無気力な表情が驚愕に染まる。

当然だ。先まで照準を合わせていた敵が、上空5フィート——1 m
上にいたのだから。

こちら側は、まったく察知できなかった。

これは一体……。光学迷彩を用いたステルス攻撃？ いや、もつと
異質な何かだ。これは——

「——量子ジャンプ!?」

量子ジャンプ。

量子エンタングルメントのねじれを利用した物理転送の一種だが、気付いた時にはもう
遅い。

「貴女の歌は好きですが、今は黙っていてください」

アリスは多機能武装腕《ジャバウオック》で、アンジェリカを力任
せに捻じ伏せた。

さらに、内蔵された輻射波動機構から、サイクルの短いマイクロ波
を照射する。それによって生じた誘電加熱が、〈テンペスタ・プルガ

トリーオ〉の装甲を熔解し、さらに計器類を狂わせた。マイクロ波が精密機器に損傷を与えたのだ。

しかし、ISにはEMP対策として、電子回路に強力なパワーローが施されている。システムには予備もあるだろう。足止めは精々60秒がいいところだ。

だが、劣勢を極めているアリスには、この一分が貴重な貯金になる。そのため、わざわざエネルギー消費の大きい《単一仕様能力》ワンオフ・アベリテイを使つたのだ。

「まず一機！」

量子ジャンプ用の外部コンデンサーをトカゲの尾のようにバージし、新たな外部コンデンサーを展開する。これで残りコンデンサーは二つ。量子ジャンプができる回数も、あと二回だ。

《接近警報。9時方向。距離30。どうやらトラの尻尾を踏んだらしい》

〈レッドクイーン〉が言った。アリスはすかさず回頭。視線の先に〈甲龍〉に似た白いISが見えた。力強いフォルム。ネコ科を思わせる敏捷さを備えた造形。〈甲龍〉のようなスパイクマーマーはなく、代わりに宝玉を握る龍のような非固定浮遊部位を装備している。

↑——IS情報：ライブラリー照合。中国製第三世代型IS〈甲虎〉シェンフー

↓
どうやら、今まさに迫りくるISは、鈴が使っている〈甲龍〉の後継機らしい。

それだけに武装も予測がついた。

案の定、〈甲虎〉の非固定浮遊部位が黄金色に輝き、その中央から衝撃砲が放たれる。

「無駄ですよ。そちらの武器の特性は把握済みです」

攻撃を予測していたアリスは、《ジャバウオック》で不可視の砲弾を受け止めた。

衝撃砲の原理は、文字通り空気の衝撃波、つまり——振動だ。

同じく高周波で大気中に振動の壁を作つてやれば、相殺する事も不可能ではない。

「射撃戦では分が悪いか」

こちらの特性を読まれ、砲撃を無力化されては、射撃戦でイニシアティブは取れない。

そう判断したフーは衝撃砲を閉じ、両手に赤い方天戟——《紅蓮花葬》を展開した。

「疾っ！」

可憐なスラスタ―捌きで間合いを詰めるや、可憐な槍術を繰り出す。

アリスもすかさず《ヴォーパル》を引き抜き、応戦した。

金属同士の金切り音を奏でながら、突き、斬り、の応酬を繰り返す二人。

機体の性能と、得意分野もあつて、格闘術はややアリスが優位だったが、

《ハニー、接近警報。9時方向。距離100。機種くらファール・エトワール》

9時方向——自分の背後から接近してくるフランスの国家代表に、アリスは舌を打った。

「龍対虎か、画に為るね」

「だが、私だけでは画竜点睛に欠くようだ。君が足りない分を補ってくれてもいいぞっ！」

「そうか。なら、私が仕上げを務めさせてもらうよ」

ノエル・ラ・フォンテーヌが駆るくらファール・エトワール>の手には、3mに亘るハルバートが握られていた。腰部には二対のアサルトブレードが装備されている。それから格闘仕様のくらファール・リヴァイヴ>である事が推測できた。

まるで躍るような、エトワールの名に相応しい躍動で、ノエルがハルバートを薙ぐ。

アリスは咄嗟に尾骶骨から生えた《尾》を振るい、ハルバートを打ち払った。

「お、やるじゃないか！ さすが私たちに挑むだけはある！」

「……………」

ノエルが感心した声を上げるが、アリスは無反応——というより返
えす余裕がなかった。

前からは中国代表の《紅蓮花葬》による槍撃。後ろからはフランス
代表の斧槍による斬撃。

とてもではないが、攻撃を捌くだけで手一杯だった。

(さすがにきつい……)

当然といえば当然だ。相手は国家代表が二人。弱音が漏れるのも
致し方ない。

しかし、それがいけなかった。

国家代表が相手では、些細な弱音でさえ致命的な隙になる。素人な
ら確実に見逃していただろうその隙を、国家代表であるフーとノエル
は見逃さなかった。

「はっ!」「疾っ!」

まるで計ったようなタイミングで放たれる両者の刺突。

咄嗟に《ヴォーパル》で受け止めたが、アリスはその反動で後方に
大きく吹き飛ばされた。

そんな無様なアリスを嘲笑うように、<ナインテイル・フォックス
>が上空を抜けていく。

アリスは苦い表情をした。まずい、一夏を止めに行くつもりだ……
!

「一夏のところへは行かせない! 《シュナイダー》!」

《Yes My honey—Off with their
heads!!》

アリスはすぐさま体制を立て直し、非固定浮遊部位からソードビッ
トを射出する。

しかし、ソードビットの追撃を、上空から降ってきた極音速の徹甲
弾が妨害した。

「くつくつく、我が血を凝固した魔弾《ツェアシュテイレレン・バトローネ世界を穿つ戦渦の星弾》に穿て
ぬものはない」

ドイツの国家代表アイリーン・フォン・エーデルシュタインは、自
らが駆る専用機<シュヴァツェア・イエガー>の電磁誘導狙撃砲で、

《シユナイダー》を軽々しく打ち墜としていく。〈越界の瞳〉があるとはいえ、セシリアに並ぶ美しい狙撃術だった。

とはいえ、やはりというか、アリスに感心する時間はなかった。早くアイリーンの妨害を突破しジエニファーと止めなければならぬ。

アリスは、目には目を、狙撃には狙撃と《スターライトMkⅢ》を構えた。

すかさず照準。アイリーンとの距離はざっと200m。狙撃が専門外のアリスでも困難な距離ではなかったが――

「悠長にスコープを覗いている暇はないぞ」

〈甲虎〉のヒートランス《紅蓮花葬》の打突がく赤騎士〉の装甲を掠める。

アリスは狙撃を諦めて後方に飛んだ。が、その先では既にノエルが待ち構えていた。

「季節外れだが、クリスマスプレゼントだ。受け取ってくれ」

ノエルが優雅にほほ笑むと、ハルバートの先端部分が稼働し、別の武器へと変形した。

鋭利な先端を持つそれは、シャルルが使っていた69ミリ口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》だ。

しかも、こちらは炸薬を使わず、EMLで打ち出すタイプだった。連射ができないぶん威力はこちらが高い。

「アン」

ノエルは、アリスをハルバートで突き刺し――

「ドウ」

持ち上げ――

「トロワ」

最大まで密度を高めた超合金の杭が、容赦なくアリスを穿つ。

咄嗟にシールドの出力を高めたが、脳天を劈くような衝撃を相殺しきれなかった。

「がはッー」

アリスは眼窩から眼球を取りこぼさんばかりに引ん？き、苦悶に喘いだ。身体の機能――骨が、肉が、脳が、戦闘継続の危険を訴え、彼

女の意識を落そうとする。

それでも彼女は奥歯を噛みしめ、暗転しそうになる意識を、獣じみた咆哮で繋ぎ止める。

まだ戦おうとするアリスに、ノエルが瞠目した。

「大したものだよ。——でも、これが君の限界だ」

ノエルの後退を見計らい、〈甲虎〉が衝撃砲を、再起動を果たした〈テンペスタ・プルガトリーオ〉がグラビティーブラスターを、〈シュヴァルツエア・イエガー〉が電磁誘導狙撃砲を構えた。

照準レーダーを受けた〈赤騎士〉が、『狙われている』『止まるな』『動け』という旨の警告をひっきりなしに鳴らしてくる。動かなければ、やられる。頭ではわかっていた。だが、激痛で体が言うことを聞かなかった。

ダメだ。視界を覆い尽くす一斉掃射に、そう思った——その時、

アリスの眼前で蒼い傘が開いた。



↑——接近警報：方位9時。機種〈ナインテイル・フォックス〉——↓
迫ってくるジェニファーさんを迎え撃つべく俺は回頭し、身構えた。

相手は千冬姉と同じ〈ブリュンヒルデ〉。代表候補生、国家代表より強い存在。

(そんな人を俺にやれるのか?)

不安が脳裏を支配する。でも、ここでやらなければ、アリスの行為が気泡に帰る。

怯えるな。気を強く持て。できないと思っっている内は、本当に何もできない。

俺は震える両手を叱咤し、《雪片式型》を握る。

そして間合いに入ってくるジェニファーさんに《雪片式型》を構え

た瞬間――

「《清き情熱》」
クリアバッション

＜ナインテイル・フォックス＞が大きな爆発に巻き込まれた。

しかし、ジェニファーさんは《尾》を自身に播きつけ、繭のようにして身を守る。

「はあーっ！」

そこへもう一機。侍を模ったIS――＜打鉄＞がジェニファーさんに畳み掛けた。

操縦者は黒髪の少女だ。一瞬、筈かと思ったが違う。でも、俺はその少女を知っていた。

「月子!？」

♡

◆

♣

♠

雨霰と降り注ぐ国家代表たちの一斉攻撃を遮った蒼い傘。それは《ブルーティアーズ》によく似た遠隔機動兵装^{ビット}だった。

「これは……?」

一瞬セシリアかと思ったが、それは直ぐ改められた。

「ローズマリー・ライオンハート……」

BT試作式号機＜サイレント・ゼファイルス＞を駆るイギリス国家代表ローズマリー・ライオンハートは、蒼い傘――シールドビット《アンブレラ》をプラットフォームに戻し、アリスの前に降り立った。

「どういうつもりだ、ローズマリー?」

中国代表の鋭い詰問にも、ローズマリーは怯むことなく答えた。

「虐げられる少女を眺めるのは、気分の良いものじゃなかったもので」

ローズマリーはアリスを背に隠し、敵対するように国家代表たちを威嚇する。その視線はまるで親の仇でも見るような眼差しだ。憎悪すら宿っている。

そんなイギリス代表に異議を申し立てたのは、意外にもアリスだった。

「待ってください。私は世界に喧嘩を売った。貴女に助けられる謂れはない」

アリスは世界に反旗を翻した反逆者。肅清を受けて当然の立場だ。もし苦戦するアリスに同情して助けたのではあれば、お門違いもいところだ。

「いえ、ありますよ、貴女に味方する列記とした謂れが」

懐疑的な眼差しを向けるアリスに、ローズマリーはしつとりとした声で告げた。

「セシリア、ですか？」

アリスとイギリス代表を繋ぐ接点といえば、それしかないが——「それもあります。ですが——いえ、あとにしましょう。きます」

相手——国家代表たちは既に彼女を敵と見做し、臨戦態勢に移行していた。

どうにも腑に落ちないが、これ以上彼女と言い争っている暇はなさそうだ。

「わかりました。ここは私が引き受けます。貴女はジェニファーを」

ローズマリーは首を軽く横に振った。

「その必要はないですよ。見てみなさい」

ローズマリーが目線で促した先では、ジェニファーが二機のI Sと交戦していた。

一機はロシア代表更識楯無が駆る<霧纏ミステリアス・レイデーの淑女>。もう一機は学園の訓練機<打鉄>

「どうやら、寝返ったのは、私だけではないようです」

♡

◆

♣

♠

「もしかして、お前、月子なのか!？」

ジェニファーの前に立ち塞がった<打鉄>の操縦者に一夏は叫ん

だ。

輝夜月子。両親が蒸発し、そのあと引き取られた先で出会った少女だ。

千冬が自立してからは、めっきり疎遠な関係になっていた少女が、一夏の目前で<打鉄>を駆り、ジェニファーと戦っていた。一夏にすれば、幻を視ているような気分だった。

「あら、お姉さんには何もなし？　月子ちゃんだけじゃないわよ？」
月子の隣でそう言ったのは、水色髪の活発そうな女性——更識楯無だ。

楯無はジェニファーを警戒しながら、一夏におちやらけてVサインを出した。

「でも、どうして二人が俺を？」

今一夏たちは学園の意向に逆らって、ラウラを救おうとしている。生徒会長である楯無や、国家代表の月子にしてみれば敵のはずだ。そんな疑問に二人は、ユニゾンして答えた。

「可愛い後輩に『あの人たちを助けてあげて』なんてお願いされたら、断れません」

「可愛い妹に『あの人たちを助けてあげて』なんてお願いされたら、断れないわよ」

『可愛い後輩』『可愛い妹』。それらが一体誰なのか。

おそらく同一人物なのだろうけど、一夏には見当がつかなかった。

「そ、それに、夫を支えるのが、つ、妻の務めですから……♡」

「いゃん、のろけ？　お姉さん妬げちゃうなー」

赤面する月子の尻に、楯無が自分の尻をぶつける。

月子は『ちや、ちやうねん！　そんなつもりやなくて！』とまた赤くなった。

まったくもって場違いも甚だしい光景だったが、国家代表二人が味方についてくれたのは、これ以上ないぐらい心強かった。

「ともかく、わたしたちがジェニファーさまを食い止めます。一夏さ

まはドイツの候補生を」

「そうよ。あなたの行いにこの戦いの命運が係っているんだから。ぼさつとしない」

「すみません、更識会長。月子もありがとう。——じゃあ、行ってきます」

一夏は二人と、二人が言う『妹・後輩』に感謝の念を送りつつ、機体を回頭させた。

それをジェニファーが「待ちなさい」と追いかけてようとするが、「いかせないわよ」

楯無がくニンテイル・フォックスの《尾》に蛇腹剣ラストイーネイルを絡ませて、引き留めた。

「行きたいなら私を倒すことです、へブリュンヒルデく」

「あなたね、軍隊と警察が争ってどうするのよ」

千冬率いる教師部隊はいわば学園の軍隊。対して楯無率いるへ生徒会は学園の警察と言える。

その二つがいがみ合うなど不毛な争いに違いない。しかれども、楯無は言い放った。

「私はIS学園の生徒会長、生徒たちを守る存在。そのように振る舞うだけよ」

「わたしも申したはずです。例えば、ジェニファーさまがお相手でも容赦しないと」

月子はく打鉄の近接ブレードを一閃。楯無も円錐状のランス《蒼流旋》を突き出す。

即席とは思えない息の合った一撃だったが、ジェニファーは《尾》でいとも容易くいなした。

「こつちだつて友人の弟を危険な目に遭わせられない」

さすがはくブリュンヒルデ。国家代表二人を相手にしても一歩も引かない。

「邪魔するなら容赦しないわよ新米代表ルキ」

彼女にも使命があり、プライドがある。おいそれと負けてやる気は

なかった。



「私が後方支援組を押しえます。貴女は前方近接組を」

ローズマリーは、複合型B Tライフル《スターブレイカー》でアイリーンの狙撃を牽制し、シールドビット《アンブレラ》でアンジェリカの砲撃を抑える。

ビットを統制しながらの射撃は高度な技術を要するが、ローズマリーは容易く行っていた。

それも国家代表相手に行っているのだから、彼女の実力は計り知れないものがある。

『……ノエル、このビット何とかして。プルガトーリオの装備じゃ対応しきれないわ』

＜テンペスタ・プルガトーリオ＞の重力砲はその威力に比例して、連射性が低い。多方向から包囲してくるビットを迎撃するには不向きな武装だった。

『……このままじゃエネルギーより私のやる気が……』ボツ

『わかった！ なんとかするから、もうすこしががんばるんだ！』

ノエルはビットを封じるべく、＜サイレント・ゼフィルス＞に近接戦闘をしかけた。

「させません」

その間にアリスが割り込み、攻撃を多機能武装腕《ジャバウオック》で受け止める。

さらにサイクルの短いマイクロ波を照射して、ノエルのハルバートを溶解した。

『逸ったか……』

鉛細工のように爛れたハルバートを投げ捨て、ノエルは腰のアサルトブレードを抜いた。

『……もう。……ノエルなにやっているの？ ……やる気ある？』

『キミにいわれたくない!』

追撃してきたアリスの攻撃をアサルトブレードで受け止めつつ、ノエルが叫ぶ。

戦闘中でなければ、彼女の尻を蹴ってやるところだが――

『ノエル、そのまま彼女を押さええていてくれ。私がローズマリーを止めろ』

『了解』

紅い方天戟《紅蓮花葬》を頭上で振り回し、今度はフーがローズマリーに肉薄した。

軽やかな躍動と尖鋭的な機動を以て、フリーライオンハート虎が獅子に近接格闘を挑んだ。

「……………ッ」

<サイレント・ゼフィルス>には近接用の武器が無い。

これにはローズマリーもアイリーンへの射撃を断念し、防御に回るしかなかった。

『よくやった。残念ヘタリアは我に任せろ。今こそ闇の力を解放して――』

『……………闇でも光でもいいから早くして』

《スターブレイカー》の攻撃が止んだことで自由を得たアイリーンが、再び狙撃を開始する。

もしアンジェリカが自由になれば、今度は強力な重力砲が火を噴く。そうなれば掴みかけた戦いの流れが逆流しかねない。何としてもアイリーンを止める必要があった。

「アリス・リデル! ここは私に任して、貴女はドイツ代表を」

「わかりました。ヘレツドクイーン、飛びます。転送の座標計算を」

《Yes My honey――座標計算完了。クアンタリゼーション・ジャンプ。レディ》

<赤騎士>のテイルユニットが本体に膨大なエネルギーを送り込む。

それを使って<赤騎士>を量子化。

次いで刹那の暗転。視界が回復した時には、アリスがアイリーンの

背後を捉えていた。

「くっ！　またテレポルトとはなっ！」

接近に気付いたアイリーンが腰からプラズマブレードを抜くが、既に《ジャバウオック》がその罅を^{アキト}開いていた。

アリスは輻射波動を照射しながら急降下して、アイリーンを地面に叩きつける。

「こ、こやつめ……」

激しい衝撃で、アイリーンの肺から空気が抜け、視界がぐにやりと歪んだ。

そこで失神しないのは、さすが国家代表か。しかし、先の攻撃で狙撃砲を破壊した。これでもう援護射撃はできない。ローズマリーの参戦で変わり始めた戦いの流れは、まだこちらにある。

（――頼りになりますね）

イギリス国家代表と共闘する中で、アリスはそう実感していた。

ローズマリーの卓越した操縦技術は、三人の国家代表たちを相手取っても遅れを取っていない。大した実力を言わざるを得ない。セシリアが国家代表になるには骨が折れることだろう。

その後方では、ロシア代表と日本代表がジェニファア相手に善戦してくれていた。

圧倒的に不利だった戦況も、いまは均衡状態にある。あとは一夏のがんばり次第だ。



俺は振り向かず、前を向いて、目の前のラウラに心血を注いだ。

不器用で、誰からも愛されず、ずっと一人ぼっちだったラウラ。

そんなラウラに、俺は教えてやるんだ。――おまえは、ひとりじゃないって。

おまえのためなら世界を敵に回したって構わない。そんな奴がいるってことを。

「ラウラーツー！」

俺は《雪片式型》を投げ捨てた。

誰かを守るには力が必要だけど、誰かを救うのに力はいらぬ。差し伸べる手と、相手を包み込める優しさがあればいいのだ。

だから、これからの戦いに武器は必要ない。

「■■■■■っ！」

悲しい声で頭上から振り落とされた黒い《雪片》を、俺は素手で受け止めた。

真剣白刃取りだ。

そしてゆっくり目を瞑り、祈るようにへコアネットワーク^心を解放する。

そう、ラウラの悲しみを、苦しみを、怒りを、全て受け入れるように。

刹那。眼前で閃光が弾け、暴風のような情報の濁流が俺を襲ってきた。

酷い頭痛がした。いや、あまりの激痛に頭痛なのかさえ判らない。

気が狂いそうになる。意識が乖離する感覚に、自分が自分でなくなる恐怖を覚える。

それでも俺は踏み込んだ。ラウラを救う。たったそれだけのために。

(待つてろラウラ……。今、助けてやるからな……)

弾ける閃光の中、俺は情報の奔流に抗いながら入口を探した。

ラウラが囚われている場所、その入口を。

(あれか)

扉が見えた。直観的にそれがラウラの心の扉と知覚する。

酷く重たそうで冷たそうな扉だ。だけど、迷わず、その扉を開く。

向こう側には、深淵の闇が広がっていた。

広さも、深さも解らない。それでも飛び込む事に躊躇いはない。

ラウラを救いたい。その意思が俺を突き動かす。

そして、俺はラウラの心の——闇へと身を投じた。

フォックスハウンド
キツネ狩り。そう息巻いてみたが、楯無はジェニファー相手に苦戦を強いられていた。

(国家代表が二人ならイーブンに持ち込めると思ったけど……甘かったかしら)

現在く霧纏ミステリアス・レイデーの淑女N E M Sの残りエネルギーは半分を切っていた。水分子を操作するナノマシンの貯蓄量も残り20%を切っている。頼みの綱である月子のく打鉄ウチガネも、度重なる被弾で稼働に大きな支障をきたしていた

どちらも長くは動けないだろう。端的に言うところピンチというヤツだった。

対しジェニファーのくナインテイル・フォックスは無傷でこそないが、損傷は明から少ない。

エネルギーにもまだ余裕が見受けられた。これが世界を制した操縦者の実力ということか。

(強いわね……。だからといって勝ちを譲ってやる気なんて毛頭ないけどツ)

にへらと笑って楯無は瞬時イグニッション・ブースト加速を使った。

ジェニファーは月子と剣戟を繰り広げており、こちらへの注意が逸れている。

(——これならっ！)

流水をまとった円錐状ランス《蒼流旋》を突き出し、渾身の打突を繰り出す。

超振動するランスの先端は、確実にジェニファーの背を捉えた。が、

「くナインテイル・フォックスはバックアタックは通用しないのよ」

くナインテイル・フォックスの《尾》が、寸前のところでそれを絡み止めていた。

「くッ！」

毒づく楯無を九本の《尾》で拘束し、そのまま月子に放り投げつける。

月子がうまく受け止めたことで楯無にダメージは無かったが、奇襲は完全に失敗だった。

「世界最強の前じゃ、学園最強の名も霞むわね」

「……。〈霧纏ミステリアス・レイディの淑女〉だもの。しかたないわ」

ここぞとばかりにおどけるが、楯無は改めて「ヴァルキリー」クラスの力を痛感した。

楯無とて弱い訳ではない。だが、彼女たちには技術や性能じゃ説明できない強さがあった。神秘の力と言ってもいい。その力を持つがゆえにIS適正値「S」という並外れた値を叩き出すのだろう。

所詮、自分は学園という箱庭の「最強」。その実力はまだまだ——
(拙い……)

自分の弱さを実感していると、〈霧纏ミステリアス・レイディの淑女〉がジェニファアの胸部に空間の歪を検知した。

歪パターンは空間圧兵器に似ていたが、生成されていくエネルギー量は衝撃砲の比ではない。

↑——IS情報：第三代兵器。高エネルギー相転移砲《狐火》——↓
〈ナインテイル・フォックス〉は胸部に作り出した真空のエネルギー準位を高い状態から低い状態へ相転移させ、高エネルギーを抽出した。それを圧縮し、楯無たちへ放出する。

全てを破砕する暴力的なエネルギーの奔流が渦を成して、楯無たちを呑み込む。

その前では〈霧纏ミステリアス・レイディの淑女〉の《アクアヴェール》も〈打鉄〉の堅牢な盾も意味を為さなかった

(一夏君、早くしてくれないと、おねえさん、もたないかも……)



目を開けた先にあったのは、乱雑に積まれたコンテナと置き捨てられた鉄鋼だった。

ここは倉庫だった。そう、俺が誘拐された時に、監禁された倉庫だ。不思議なことに積まれている貨物や冷たい雰囲気、自分の服装さえ、当時のままだった。

ただ一つ違うところを挙げれば、隣にラウラがいるということだろうか。

「ラウ——」

〈一夏っ！〉

俺がラウラに話しかけようとした時、唐突に倉庫の扉が破られた。差し込む光と共に現れたのは、〈暮桜〉を纏った千冬姉だった。

〈一夏っ！ 無事だったか！〉

駆けつけるなり、千冬姉はあの時と同じように俺を抱きしめてくれる。

だけど、そんな千冬姉に俺は違和感を覚えた。

大切な人からの抱擁なのに、何の温もりも感じなかったのだ。感じたのは、雨のような冷たさだけ。

〈さあ、こんな場所からさっさと出るぞ〉

思わず拒絶したくなる俺の手を引つ張り、千冬姉は逸早くここから出ようとする。ラウラには見向きもしない。まるで彼女の存在を否定するかのよう。それが堪らなくなった俺は、千冬姉の手を払って、言った。

「待ってくれ、千冬姉。ラウラも一緒に」

〈どうしてだ？〉

どうしてだ？ その言葉で千冬姉に対する違和感が最大になる。

「ちよつと待てよ、千冬姉！ なんでそんな事言うんだよ！」

〈あいつは遺伝子強化素体だ。代わりなどいくらでもいる。助ける必要などないだろ〉

「違うぜ、千冬姉」

俺は煮えたぎる感情を抑えながら、低い声で唸った。

「覚えているか、千冬姉。初めて俺に真剣の技を覚えてくれた時の事を」

〈なんのことだ〉

「その時、真剣の重さに振り回される俺に、千冬姉は言った。『重いだろう。それが命を絶つ武器の重さだ』って。そしてこうも言った。『だが、人の命はそれよりもずっと重い。もし誰かを殺めれば、その重さを一生背負う事になる』ってな」

だから、俺に命の大切を教えてくれた千冬姉が、そんな事を言うはずがない！

「——お前、千冬姉の偽物だろ」

俺が確信を突くと、千冬姉は口元を三日月形に歪めた。

へふん、ダメなやつだとは思っていたが、姉の見分けもつかなくなるとはな

千冬姉はくすんだく暮桜を展開して、眼窩から黒い液体を流した。

それに確信する。——間違いない。この千冬姉はシステムが作ったプログラムだ。

そうと判ればやる事は一つ。この千冬姉擬きをブツ飛ばして、ここからラウラを連れ出す！

「こい、く白式くー！」

叫んで相棒を展開し、く白式くの唯一にして最強の武器《雪片式型》を抜刀する。

刀身には既に《零落白夜》の淡い光が帯びていた。まるでこの時を待っていたかのように。

——そうか、《雪片》、お前もあんな千冬姉、認めないってことか。

——よし、俺たちで偽物をぶちのめそう

俺はくゴーレムくと戦った時のような全能感を感じながら神経を研ぎ澄ました。

おそらく勝負は刹那だ。決着は一瞬でつくだろう。

そう確信した俺は腰を落とし、居合の構えを取った。

『一夏、刀はその重さを利用して振り抜くものだ。手にするのではなく自分の一部として扱え』

不意に千冬姉の言葉を思い出す。

大丈夫だよ、千冬姉。く白式くを始めとする《雪片式型》はもう身

体の一部だ。

あとは、無駄なく、隙なく、油断なく、《雪片式型》を振るうだけ。「いくぜ、偽物野郎っ！」

俺と千冬姉擬きの初動は同時だった。

黒いく暮桜>がくすんだ《雪片》を振りおろす。鋭く、速い、袈裟斬りだ。

でも、所詮は二番煎じの猿真似。千冬姉の剣技を見てきた俺なら見切るのも容易い。

「はあーっ！」

俺は頭上から振るわれた《雪片》の一閃を、横一文字に打ち払う。初撃の勝負は引き分けかと思われた。が、違う。篠ノ之流剣術の真骨頂はここからだ。

俺は風のような流動で《雪片式型》を翻し、すぐさま頭上に構え直して、今度は縦一文字に千冬姉擬きを切り裂く。

一足目で閃き、二手目で絶つ。これが篠ノ之流剣術の神髄『一閃二断』の構えだ。

△■■■■■っ！△

胸部を大きく切り裂かれた千冬姉擬きが、断末魔を挙げながら悶え苦む。

やがて、＼1＼でも＼0＼でもない完全な＼無＼となつて、この場から消滅した。

「俺にやられるようじゃ、お前を作ったエンジニアは三流だなっ！」

そう吐き捨てて、俺は膝を抱えるラウラの許へ歩み寄つた。

「ラウラ、ここはお前の居場所じゃない。俺がもつと暖かい場所に連れて行ってやるよ」

「……あたたかい、場所？」

その声はか細く弱々しく、まるでラウラじゃないみたいだと思つた。いや、違うんだ。この弱々しさこそが本来のラウラなのだ。こんなにも弱いから、剣呑な鎧を纏う必要があつた。

でも、そんな鎧はもう脱ぎ捨てていい。もう強がる必要などないのだから。

「ああ、外の世界で、おまえを待つてる人がいる」

「わたしを待っている人？」

「ああ。おまえの為なら、世界を敵に回したっていいっていうバカな奴がな」

俺はボロボロになりながらも、今この時も戦っている戦友を思い出す。

ラウラは呆れたように笑った。

「そうだな。そいつは大バカ者だな。私なんかのために……でも、嬉しいのはなぜだろう」

「それはお前が人間だからだよ。お前が人だから嬉しかったり、寂しかったりするんだろ？」

「そうか。これが人間……、私は人になれたのか……」

ラウラの白い頬を涙が伝う。俺はそれを拭わなかった。

その涙から伝わる、*“生”*を、*“心”*を、実感してほしかったから。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

強くうなづくラウラの手を取り、俺たちは光の扉をくぐった。

意識が世界から乖離する感覚と共に、光が視界を塗り潰していく。

……

……

……

「ううつ……ラウ、ラ？」

目を覚ますと、俺はその腕にラウラを抱えていた。

その表情はどこか嬉しそうだ。そんな幸せそうなラウラに、そつと告げる。

「おかえり、ラウラ」

第33話 少女が生まれた日

「バ、カ、ど、も、が！」

第1アリーナ。Aピットに高らかな出席簿の音が響き渡った。

出席簿アタックを受けた、俺、アリス、更識会長、月子、ローズマリーさんは叩かれたところを抑えながら、揃いも揃って『あうあう』と悶絶する。さぞかし同情を誘う光景だったが、千冬姉は容赦なく続けた。

「まったく。お前たちは何をしでかしたか、わかっているのか？」

表情こそいつもの千冬姉であるが、口調には怒気が含まれていた。

それに誰もが口を閉ざす。

俺たちが多くの人を危険にさらした事は紛れもない事実だ。反論の仕様もない。

だけど、俺には一つだけどうしても告げたい思いがあった。

「千冬姉。確かにたくさんの人を危険に曝したし、迷惑もかけた。その事については素直に悪いと思ってる。だけど——それでも救いたい命だったんだ！」

胸中の気持ちをさらけ出すと、アリスが言葉を紡いだ。

「ラウラは不器用で、誰にも愛されず、求められず、ずっと一人ぼっちでした。そんな日々の中でようやく貴女という光を見つけた。彼女はそんな光を掴もうと必死だったのです。そんなラウラを私たちは見捨てられなかった」

「千冬姉、罰なら受ける。グランド100週でも、反省文1000枚でも、何だつてかまわない。だからほんの少しでいい。ラウラに優しくしてやってくれ。じゃあなきや、アイツがあまりにも報われなさすぎる」

そう訴えると、千冬姉は瞳を閉じ、考える素振りを見せた。

ピットに沈黙が満ちる。いろんな思いが交錯しているのか、千冬姉はしばし無言だった。

その間、俺たちは固唾を呑んで千冬姉の返事を待つ。

しばらくして、千冬姉はふわりと柔らかか笑みを浮かべた。そこに先

の剣呑な表情はない。

「……そうだな。確かに私は<シユヴァルツェア・レーゲン>の破壊を命じた。だが、心の中ではこうなる事を望んでいた。だとしたら、私はお前たちを咎める権利も資格もないな。それにお前たちが命がけで救った命だ。もう無碍にはできまい。私もオルコットの言う通り、自分の魂に従おう」

「千冬姉!」「千冬さん!」

「だが、お前たちにもけじめはつけてもらう。罰として一週間トイレ掃除だ。いいな」

打って変わって、ニヤリと意地悪な笑みを浮かべる千冬姉。

一週間のトイレ掃除か。それで今回の事を水に流してもらえら破格の処罰だろう。

それに、俺たちは千冬姉の感謝と労いを感じ取った。

しかし、それに顔を見合わせたのは、お嬢様育ちのローズマリーさんと月子だ。

「あの千冬さま、それはわたしたちも、でしょうか?」

「もちろんだ」

「一週間ですか?」

「そうだ、住む込みしてもらう。メイドは使うなよ、ローズマリー」

千冬姉に言われ、二人は心底嫌そうな顔をした。特にローズマリーさんの表情は形容し難い。

まあ、遙々IS学園にやってきてトイレ掃除をさせられたんじゃ嫌な顔もしたくなるだろう。

それを見かねた代表候補生たちが、各代表の許に駆け寄った。

「ローズマリーさま、わたくしもお手伝い致しますわ」

「ありがとうございます、セシリア。とても助かります」

「……月子、私も、手伝う」

「簪ちゃん、ありがとう」

「おねえーちゃんも手伝って欲しいなー、なんて」チラチラ

「……うん、……い、いいよ」

「ほ、ほんとに! やっほーい!」

妹さんに手伝ってもらえるのがうれしいのか、更識会長は『狂喜乱舞』と書かれた扇子を取り出し、喜びの舞を披露しはじめた。その顔は満面の笑みだ。

「では、今日はこれで解散とする。お前たちは部屋に戻ってトイレ掃除に勤しめ」

そう告げ、千冬姉はジェニファーさんと何かの相談を始める。

すると、ピットと通路を繋ぐ空気圧縮の扉が開いた。

入ってきたのは黒いスーツの男性が数人と、白衣を着た女性が数人。胸にはISCのワツペン。彼らは〈国際ISC委員会〉に所属する監査機関の人間のようなのだ。

後々聞いた話だと、ラウラを歪めたアレはVTシステムというヘアラスカ条約に違反する代物だったらしい。その証拠品である〈シユヴァルツエア・レーゲン〉を回収しに来たのだろう。

その中に一人見知った顔があった。先月出会った異国美女、ロリーナさんだ。

(ロリーナさんって国際ISC委員会の人間だったのか?)

そういえばISC関係の仕事に就いているって言っていたような気がする。

まあいいか。それよりもトイレ掃除に取り掛からなければ。



学園のカリキュラムや訓練上、事故の発生はやむを得ないため、学園には『保健室』とは異なる最新の医療機器を備えた医療区画が存在する。ラウラが搬送された先はその区画だ。

MRIの検査を終えたラウラは、いまベッドの上で眠りについていた。

そのラウラを、同伴した千冬が優しい瞳で見つめている。

先生曰く『疲れて眠っているだけよ、しばらくすれば目を覚ますわ』とのことだ。

その言葉に違わず、ラウラはしばらくして目を覚ました。

「目が覚めたか。気分はどうだ？」

ラウラは『大丈夫です』と苦痛に顔を歪めながら体を起こした。

「無理をするな。無茶な動きをした所為で筋肉が痛んでいる。しばらく動ける身体じゃない」

「大丈夫です、私は強化された人間ですから。それより試合はどうなりました？」

「それなら中止だ」

淡白な返答。その言葉に、ラウラは堪らず顔を伏せた。

『お前がVTシステムを使った所為でな』と言われたような気がしたのだ。

「軽蔑しましたか？ あんな力に頼った自分を」

刹那的とはいえ、欲の為に自分は禁忌に身を委ねてしまった。

その結果の暴走。欲に負けた羞恥と、軽蔑される恐怖で、身を焼き焦がされる思いだった。

「いや。軽蔑などしていないさ。かつて偉大な戦士はこういった。『死の直前まで、戦略を練る。それが戦士だ』と。おまえは、最後まで戦おうとした。VTシステムの使用さえ戦略のひとつにして。おまえは立派に戦った。それを責める権利など、私にはない。——それよりすまなかつたな」

てつきり酷く叱られると思っていたラウラは面を食らった。

「なぜ教官が謝るのです!? 悪いのは私です！」

「そうでもないさ。お前は私を振り向かそうと、一生懸命になっただけだ。なのに、私はお前の気持ちに気づいていながら、一夏を理由にずっと逃げてきた。私がかちゃんと向き合ってさえいれば、あんな事態にはならなかつただろう。全て私の責任だ」

千冬は胸に手を当て、過去の行いを懺悔するように語った。

ラウラとしては当惑を禁じ得なかつたが、千冬は構わず続ける。

「だが、そのおかげで決心ができた事もある」

千冬はまっすぐラウラを見つめ、こう言った。

「ラウラ、私の家族にならないか？」

それが今回の事件を通して、千冬が導き出した答えであり、けじめだった。

一夏と同じように彼女を愛せるか、その不安はある。だが、ラウラのために戦う弟を見て、思ったのだ。——一夏がいてくれたなら、ラウラを幸せにできるんじゃないか、と。

彼はもう与えて貰うだけの子供じゃない。誰かに与えられる人間だ。一夏と二人なら、きつと。

しかし、ラウラは首を振った。——左右に。

「もういいんです、教官」

今度は千冬が面を食らう番だった。

「なぜだ？　これはお前が望んでいた事だろ？」

「はい。でも、教官の望んだ事じゃありません。——私はVTシステムが作り出した世界の中で、たくさんの『教官』を見てきました。そして改めて理解しました。教官にとって織斑一夏が、どれだけ大切な存在なのかを」

ラウラは胸に手を置き、VTシステム闇の中で体験した出来事を思い出した。

苦しい時、哀しい時、楽しい時、嬉しい時。いつだって彼女の心は弟への想いで満ちていた。

それを千冬自身になりきることで追体験したラウラは、はつきりと告げる。

「あなたは、織斑一夏のために在る。私のためじゃない」

「お前はそれでいいのか？」

ラウラは千冬から寵愛を受けることで、自らの存在意義を見出そうとした。

それを諦めるという事は、彼女にとって自らの存在を消し去る行為に他ならない。

そんな事が彼女にできるのだろうか？　できないから戦い続けてきたのではないのか？

しかし、ラウラの表情には不安も恐怖もない。あるのは未来を信じたい明るい笑み。

「大丈夫です。織斑一夏が私に教えてくれましたから。おまえは一人

「じゃない、と」

「ああ、そうだったな」

千冬は赤毛の少女を思いだした。

彼女はもう一人ではない。この世には、ラウラの為に戦ってくれる人がいる。

「でも、教官、一つだけお願いをしてもいいですか？」

「なんだ、言ってみろ」

「生まれ変わった私に、名前をくださいませんか」

今までのラウラは、千冬という母なくして生きられない胎内の胎児だった。だが、自己の存在意義を見出したことで、外の世界に生れ落ちることができた。

それにあたって名前が必要だ。ドックタグ識別評に刻むためではない。世界にその存在を叫ぶための名が。

「名前か。いいだろう、とびっきりのいい名前を付けてやる」

「お願いします」

「では、今日からお前はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

千冬は、たった今この世に生を受けた、白く美しい少女にそう名づけた。

「お前はもう遺伝子強化素体ではない。一人の人間、私が担任を受け持つ一年一組の生徒『ラウラ・ボーデヴィツヒ』だ。これからはピシバシしごいていくから覚悟しておけ」

「では、これからも教官とお慕いしても？」

「ああ、構わんさ。ただし学園にいる時は織斑先生、だ。いいな」

「はい、織斑先生。では、これからもご指導よろしくお願い致します」

そう言って二人は心の底から笑いあった。

そこに血の繋がりはない。だが、絆は確かに存在していた。



証拠品の〈シユヴァルツエア・レーゲン〉を積んだ〈国際IS委員
会〉のトラックは、エンジンをふかしながらIS学園の物資搬入口か
ら出発した。そのトラックを先導するように黒塗りのセダンが先頭
を行く。

5分あまり走ったところで、助手席のロリーナは見飽きた車窓から
視線を外し、後部座席に座る女性をルームミラー越しに見やった。

紅い瞳に、真珠色の銀髪が美しい女性だ。その顔立ちは、とてもラ
ウラに似ている。

それも当然のこと。ラウラの受精卵には、彼女の卵子が使われてい
ただから。

つまり、彼女がラウラの〈マザー〉。名はララ・ボーデヴィツヒと
いった。

「本当に良かったの？ あの子に会っていかなくて」

ロリーナの問いにララは薄く笑った。まるで、我が子の成長を喜ぶ
ように。

「はい。今の彼女はもう一人で歩いていけるみたいですから」

「確かに巣立った雛鳥に親鳥は必要ないのかもしれないけど、あなた
はそれでいいの？」

「会いたい気持ちはあります。けれど、私は嘗て自分の知的欲求を満
たすために、ラウラたちを作りました。そこに愛情などはなく、私は
ずっとラウラたちを研究成果の一つ程度にしか扱ってきませんでした」

「そんな自分が、いまさら母を名乗るのは烏滸がましい、と」

「はい。改心したところで、私の罪が許されたわけでも、贖われたわけ
でもない。だけど、あなたたちと共に、彼女たちが戦わなくて済む世
界を作れたなら、その時は会いに行こうと思います」

彼女たち——〈遺伝子強化素体〉が戦わずに済む世界。

そんな世界を彼女たちに与えられたのなら、自分は母を名乗りでる
事ができるような気がした。

それまでは草葉の陰から彼女を見守り続ける。それが自らに科し
た彼女の戒め。

「そう。早く会えるようになるといいわね」
ふわりした笑みを浮かべ、ロリーナは鏡から視線を外した。

♡

◆

♠

学年トーナメントはVTシステムの暴走により中止が決定した。これによりアピール機会を失った生徒に対する配慮として、現在、第一アリーナでは、国家代表を交えた立食パーティーが開かれていた。会場の至ることでは、学園の生徒たちが企業や代表に自分を売り込んでいる。セシリアたち代表候補性も、その仲介で大忙しといった具合だ。

その様子を離れたところで見ていたら、私の許に一夏がやってきた。

「お、おう、アリス……」

「どうしました、随分とお疲れのようですけど」

一夏は苦笑しながら何十枚の名刺を見せた。

なるほど。企業の押し売りを受けて、クタクタなのか。

「相も変わらず挙って『うちの装備を使ってみないか』とか『専用機を提供させてくれ』とか。正直、俺の独断では決めかねる話だしさ、断るのも一苦労だったよ」

「男性操縦者は、宣伝効果が期待できますからね」

「デュノア社がシャルルに男装させたのは、こういう狙いがあったんだよな。で、そのシャルルだけどさ、学園はシャルルをどうするって？」

〈生徒会〉にデュノアさんの性別詐称を報告した私に、一夏が訊いた。

「本来なら学籍抹消なのですが、事情を考慮してもらって、再入学にしてもらいました」

ちなみに、件のデュノアさんはこのパーティーに参加していない。

現在、彼女は再入学のための入試テストをやり直している最中だ。

「フランス代表にも、便宜を図ってもらえるようお願いしたので、今まで通りの生活を送れるでしょう」

デュノアさんは未成年だから、独立して生計を立てるのが難しい。そこで、もしもの場合には、フランス代表が彼女の扶養者になってもらえるようお願いしてある。

「——ま、頼んでくれたのは、会長ですけどね」

私はフランス代表と面識がない。そこで同じ国家代表である会長に事情を説明し、話をつけてもらったのだ。今回の件で嫌いな会長に借りを作ってしまったけど、今は諦めている。

「本当、おまえって大した奴だよな。それに比べて、俺は……」

千冬さんの言葉がまだ尾を引いているのだろうか、一夏は俯き、拳を握りしめた。

私は、そんな彼の固く握られた拳を手に取り、そつと解いてやる。

「貴方の言葉はデュノアさんを救ったと思いますよ。だからこそ、デュノアさんは貴方に力を貸してくれたのではないですか？」

「それは……そうかもしれないけど」

「それに今日ラウラを救ったのは他ならぬ貴方です。私だけでは彼女を救えませんでした。貴方がいてくれたからこそ、ラウラを助けられた。あなたは決して無力じゃありません」

「そ、そうか？」

微笑む私に、一夏が恥ずかしそうに視線を逸らす。

そんな彼を可愛く思っていると、会場の向こうから、山田先生がたわわな胸をゆらしながら走ってきた。

「あ、織斑くん。ここにいたんですか、探しま——あ、もしかしてお邪魔でしたか!？」

手を重ね合う私たちを目撃して、山田先生が顔を赤くする。

あからさまに誤解している様子だったので、私は慌てて弁解した。

「いえ、あの、これは——」

「照れなくてもいいのですよ、リデルさん。先生もまえから、二人はお似合いだと思っていましたから。苦惱する王子のピンチを救う女騎士。ロマンスです！でも個人的にはちよつといじわるなお姫様の

妨害があつたほうが盛り上がると思いますか」

「――それで彼にどのような要件で？」

「妙な物語を語り始めたので、これはダメだと私は声を張った。」

山田先生も自分の世界から戻ってきて、ぽんと両手を叩く。

「はい。今日はボイラーの点検で大浴場が使えない日だったので、予定より早く点検が終わりましてね。折角なので、男子生徒に大浴場を解放しようという計らいになったんです」

「本当ですか、それは！」

提案を訊いた途端、一夏がくわつと目を開いた。

「ええ、本当ですよ、織斑くん」

「じゃあ、さつそくMYお風呂セットを取りに行つてくるぜ！」

言うが早く、一夏はパーティー会場を飛び出していった。

私と山田先生はヒラヒラと手を振りながら、それを見送る

――つて、MYお風呂セットなんか持っているのですか、この子は

……

「山田先生、ここにいたんですか」

「あ、織斑先生、どうしたんですか？」

「実は大浴場の使用について変更がありましたので、それを伝えるに」

「変更ですか？ 一体どのような？」

「急遽、国家代表に大浴場を使つてもらふ事になりましたので、その報告を」

「えええええええ!!」

「おお、さすがに広いなー」

脱衣を済まし、浴場に向かうと、俺はその広さに圧倒された。大浴槽にバブルジェット。さらにサウナ室まで完備されており、ざつと見た感じでは、完全にスパリゾートだ。

体を洗い終えるなり、俺はさつそく一番大きい湯船につかった。

「くうく、生き返る」

心身に染みわたる熱が疲労を忘れさせてくれるようだった。魂の選択とはよく言ったものだ。

ああ、極楽である。俺はここ二ヶ月の疲労を癒すつもりで、思いっきり羽根を伸ばした。

「しかし、俺の学園生活は戦いの連続だった気がするなあ」

クラス代表決定戦、クラス対抗戦、襲撃、学年別トーナメント。そして、VTシステムの暴走。

その度、俺は苦しくも勝利、あるいは生き残ってきたけど、その影にはいつもアリスの姿があった気がする。

その事実が俺にアリスの存在を強く意識させた。

(アリス・リデル、か)

彼女を想うと、心の裡から形容できない感情が沸いてくる——気がした。

それをなんと表現すればいいのだろうか。ただ、彼女を想うと、勇気が湧いてくる。アリスがいてくれたなら、俺はどんな強敵にも立ち向かえる気がした。こういう存在をなんと呼べばいいのだろうか。

そんなとき、不意に脱衣所から女性の声が聞こえてきた。

「む？ アンジエ、また大きくなったんじゃないか？」

ん、この声、どこかで聞いたような……。

「……そういうノエルは、その……残念ね」

「なっ！ そんな憐れむようなジト目で、私を見ないでくれよ！」

「……いや、この目付きは元からのだけど……」

よく聞くと、その声は女性のものだった——つて、女性だど!!

待て、待て、今日は俺の貸し切りじゃなかったのか？ しかも今の

声、国家代表たちじゃないか！

(やばいぞ。バレたら国際問題(?)だ!——どうする? どうしよう

? どうしたらいい?)

俺が謎の三段活用でテンパっていたら、ついに美女美少女の一団が入ってきた。

その光景たるや、まるで神話の女神たちが絵画を抜け出てきたような光景だ。

「あら、広いわね」

一番に感想を漏らしたのは、アメリカ代表のジェニファーさんだ。ジェニファーさんはグラマラスな体躯と豊満なバストをタオルで覆いながら、浴槽を一望する。そこで俺を見つけ、驚くように言った。

「あら、弟くんじゃない」

「いえ、俺は桶太郎デス」

とつさに桶を被つて誤魔化す。我ながら酷い誤魔化しようだ。

当然ながら、そんな誤魔化しなどへブリュンヒルデへに通じる筈もなく、

「ふふ、もしかしてお姉さんのお風呂を覗きにきたのかしら?」

さすがへブリュンヒルデの一人。悪戯っぽく笑うだけで、悲鳴を上げたりはしない。それどころか蠱惑的な笑みさえ浮かべる余裕さえあるようだ。

しかし、まったく恥ずかしくない訳じゃなく、頬には仄かに赤みが指している。

「いえ、実は山田先生に『大浴場を使ってもいいですよ』と言われてきたんですけど……」

「あらそうなの? 私たちは千冬から『大浴場を使ってもいいぞ』つて

言われてきたのだけど。教師の間に手違いがあったのかしら」

「そうみたいです。——じゃあ、俺あがりますから、ごゆっくり！」

おもむろに立ち上がり、隠すところ隠して、そそくさ湯船を上げる。

「まあ、そう言わず、ゆっくりして行きなさい。あなただって今きたところですよ？」

「いやいや、そういう訳にもいきませんよ！」

そりやー俺も男だ。こんな美女たちと混浴できるなら望むところだ。

でも、鈴やセシリアたちに知られたら、ただでは済まない気がするのだ。きつとレーザービームや衝撃砲が飛んでくるに違いない。とにかく酷い目に遭わされそうな気がするのだ。

「鈴の事を気にしているなら心配ない。私は口が堅い方だ」

と、言ったのは、いつの間にか現れた中国の国家代表フーさん。

ジェニファーさんに負けず麗ら美しい身体のフーさんは、まさにアジアンビューティーといった美貌で、西洋人には出せない魅力を醸し出していた。それでいて綺麗かつ顕著なバストをお持ちになられていた。

「ローズマリーはどうだ？」

「御二方がそういうなら。私もセシリアに妙な勘違いをされたくありませんし」

と『俺には興味なし』といった態度で、ローズマリーさんは淡々と自分の身体を洗いだした。ビスクドールのような白く麗しい肢体にスポンジを滑らせるその様は、動作だけで思わず生唾を呑みそうになる。

「あなたたちも、いいわよね？」

「ああ、シャルルも世話になったことだしな。少しサービスしようじゃないか」

ジェニファーさんの呼びかけに、フランスの代表が答えた。

ノエルさんは現役のバレリーヌだけあって華奢な体つきだったが、乳房から腰回りへの曲線にメリハリがあり、女性らしさが強調されていた。そんなノエルさんの胸を、イタリアの代表アンジェリカさん

が、後ろからもみあげる。

「……サービス？ マットの上でぬるぬるとかしてあげるの？」

「ち、違うぞ、そういう意味じゃないぞ、アンジェ。キミも変な誤解をするな！」

「してません！」

俺は咄嗟に否定した。つーか、マットの上でぬるぬるってなんだ！

「……ふふ、残念だったわね」

アンジェリカさんが大人の女性特有のグラマラスな体軀で魅惑の“しな”を作る。

そこへ魅惑の谷間と艶やかな声音が加われば、想像を絶する破壊力があつた。怠惰に見える人だが、女性の魅力は申し分ないようだ。

「まあ、彼女たちもそう言っていることだし、安心するといい」

「でも、あとで千冬姉に怒られそうなので」

「千冬には私から言っておくわ。それにあなたと混浴したいって子もいるわよ？」

ジェニファーさんは殺し文句を放った後、視線でぱつつん髪の少女に流し目を送った

月子は『ジェニファーさま!』とびっくりして、床に転んだ。その拍子に、たわわな胸が弾み、タオルと綺麗な黒髪が宙で踊った。俺は咄嗟に視線を逸らした。

「そういうことだからゆっくりしていきなさい」

俺を強制的に湯船へ戻したあと、ジェニファーさんは身体を洗いに行つた。

観念した俺は身体を洗々——内心、得した気分だつたりするが——湯船に浸かり直す。

「でも、なんでそこまでして？」

しばしして、帰ってきたジェニファーさんにそう訊く。

正直そこまでして俺と混浴したい理由が解らない。いや、俺は歓迎なんだけど。

「それはね——」

「きつとジェニファーは汝の貞操を狙っておるのだ」

子猫を桶に入れ、ドーンと現れたのはドイツの国家代表アイリーンさん。

首筋から爪先まで長くすらつとしたアイリーンさんの華奢な肢体は、ビスクドールのようにくすみなく、それらから織り成される美貌が、まだ幼い少女の躰に仄かな色香を与えていた。——つて、アイリーンさん、ちよつとは隠してください！ ちっばいが丸見えです！「泣かすわよ、アイリーン。弟くんも身を守らないでくれる？」

「あ、はい」

言われて、身体を抱きしめるような仕草をやめる。

ジェニファーさんは『私、年下は守備外だから』と付け加え、湯船に浸かった。

「実はね、あなたと一度ゆっくり話がしたかったのよ」

「なんせ、君とこう話せる機会は多くないからな」

そう言つてフーさんが櫛で後ろ髪を器用にまとめながら、湯船に入ってきた。

話す機会か。それりや国家代表と唯の学園生徒では身分が違い過ぎる。

「それに弟くんも私たちに何か訊きたいことがあるんじゃない？」

確かにその通りだった。

これも何かの縁だろう。この機会に思い切つて、訊いてみるか。

「あの、なんでジェニファーさんの専用機には《雪片》が積まれているんですか？」

「その前に、弟くんは千冬がへブリュンヒルデになった理由を知っている？」

質問するなり質問で返される。俺は少し考えてみた。

千冬姉は地位や名誉を欲しがるような人じゃないし、やはり金——生活費を稼ぐためか。

俺がそう言おうとした瞬間、ジェニファーさんがすらつと長い美脚を組み替え、言った。

「友人のためよ」

友人？ 千冬姉の友人と聞き、真つ先にあの人の姿が浮かんだ。

「それって東さんですか？」

「そう。あなたも学園の生徒なら知っていると思うけど、IS運用規定——通称〈アラスカ条約〉の草案を作ったのは篠ノ之束なの。でも、各国は篠ノ之束が提示した草案を自分たちの都合のいいように解釈し、様々な例外措置を加えていった」

「結果、ISは篠ノ之束の思惑とは懸け離れた形で運用されるようになりました」

そう言つてローズマリーさんが形の良い豊満な胸を抱えて、湯船に入ってくる。

思わず凝視しそうになる気持ちを抑え、俺は尋ねた。

「ISの兵器化ですか？」

「それだけじゃありません。ISの競技化も、篠ノ之束にしてみれば忌み嫌う対象でした。ISの兵器、競技化。それに反比例して進まない宇宙進出。それに嫌気が挿した篠ノ之束は〈コア〉の製造をやめました」

「だから、世界には467個しかコアが存在しないわけだ。数字自体に意味はない」

と、言いながらフリーさんが肩を回す。

あの大きさだと凝るのだろうかと思っていたら、話し手がジェニフリーさんに戻った。

「そこで千冬は〈ブリュンヒルデ〉になることで、世界が歪めたISの在り方を正して、ISのベクトルを宇宙進出に向けようとしたの。〈ブリュンヒルデ〉の発言力は、それぐらい大きいのよ」

それを聞いて、俺の古傷が痛み出した。

「でも、俺のせいだ……」

「そう、あなたが誘拐された事で、千冬が目論見は潰えてしまった——
——かと思えたわ」

「え？」

「さて、ここで弟くんの疑問に答えましようか。——なぜ、私の専用機に《雪片》が装備されているか、だったわね。それは私が千冬の意志を継いだからよ。《雪片》はその証なの」

「千冬姉の意思を？ それって……」

「そう、私は千冬の意思を継いで、ISの宇宙進出を実現させる。——私ね、ずっと宇宙飛行士になりたかったのよ。そう、マーキュリー・セブンのような宇宙飛行士にね」

ジェニファアさんは天井——のさらに上、宇宙を見上げる。

そこに思いを馳せるジェニファアさんの横顔はとてもきれいだっ
た。

「じゃあ、ジェニファアさんがIS操縦者になったのも」

「ええ、その夢に近づけると思ったから。まあ、現実には『最速の狐』なんて呼ばれて、地べたを這いずり回っているだけだけど。もしかしたら、それが私の限界なのかもしれないわね」

苦笑するジェニファアさんに俺は『そんなことないです！』と言う。

彼女は『ありがとう』と答え、千冬姉との話を続けた。

「私と千冬が目指したものは似ていた。だから、千冬から意志を継ぐことに躊躇いはなかったわ。——これが私の専用機に《雪片》がある理由よ」

「そうだったんですか」

ジェニファアさんの話を聞いて、俺の中にあつた千冬姉に対する疑問が一つ解明した。

『なぜ、千冬姉は現役を引退したのか』

最初は、俺を守るために決勝戦を放棄したから関係者との信頼を失い、止めざるを得なかったのだと思っていた。おそらくそれも原因の一つだろう。

でも、未練なく潔くやめられたのは、ジェニファアさんに、願いを託せたから。

きつと《雪片》は、彼女たちの『夢』というリレーを繋ぐ信頼のバトンなんだ。

——だとしたら、ジェニファアさんの次の走者は？

そう考えたところで、不明瞭だった将来のビジョンが鮮明になった。

「あのジェニファアさん、へブリュンヒルデになるのって難しいです

か？」

そんな質問をする俺に、ジェニファーさんがきよとんとした。

「そうね。血反吐を吐くほど努力しても届かない。そういうレベルね。というのもへブリュンヒルデは実力が有ればなれるモノじゃないのよ。活動費を出資してくれるスポンサー。専用機を開発してくれる技術者。そういったものを得られないと、なるのが難しいわ。千冬だって例外じゃなかったはずよ」

ジェニファーさんの言葉は事実だろう。

千冬姉だってへ輝夜重工の後援を受けていたし、束さんの協力も大きかったに違いない。

「もしかして、弟くんはへブリュンヒルデになりたいの？」

俺は素直に肯いた。

「千冬姉の夢が潰えたのは、俺の所為でもありませんし、ただく白式に乗っているだけじゃないかと思っていましたから。こうして男性でISを扱える身ですし、俺にできる事を精一杯しようと思います」

「そう。私もあなたのような後継者がいてくれると心強いわ。でも、あえて言うわ。大変な道のりよ？ 人一倍の実力、人一倍の知識、人一倍の人望が必要になるわ」

「精進します。そして必ずへブリュンヒルデになつてみせます」

俺が決意を告げると、バブルバスに居たアンジェリカさんがクスツと笑った。

「なんです？ 俺の決意、おかしかったですか？」

ムツとする俺に、アンジェリカさんは首を横に振るつた。

「……ごめんなさい。そうじゃなくて、男なのにへブリュンヒルデつて変ねと思っただけなの」

そう言われたら、そんな気がしてきた。

へブリュンヒルデとは戦乙女の名だ。男が名乗るには、聊か似合わないかもしれない。

「アンジェリカがいうことも一理あるわね。じゃあ、へジークフリートなんてどうかしら？ ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指輪』におけるへブリュンヒルデの恋人。どう？」

「ヘジークフリート」……」

「ヘジークフリート」か。いいな、かつこいいじゃないか。

まだ獲得したわけでもないのに、なんだか気分が高揚してきた。

「俺、がんばってその「ヘジークフリート」を目指します」

「ええ、期待しているわ」

「だが、君の往く道は荊の道だと思ってくれ。なんせ、うちの鈴は強いからな」

「セシリアのことも忘れなく。彼女の実力は一級品です」

そうだ。この道を歩むなら必然的に鈴やセシリアたちとの勝負は避けられない。

だが、俺は望むところだと思った。だけど、その前に――

「まずは代表候補生にならないと、ですね。私も及ばずなら協力させて頂きます」

そう言って両手を叩いたのは、日本の国家代表である月子だ。

慎ましく微笑む月子は、儚げ容姿に反して、とても心強く見えた。

「スポンサーはもう大丈夫みたいね。私も今日の活躍、評価しておくわ。――それと」

ジェニファーさんは片腕で胸を隠しつつ、もう片方を俺に差し出した。

「彼女たち国家代表の代表として、私と握手をしてもらえるかしら」
「え?」

「今日、あなたは私たちができなかつたことを成し遂げた。その勇気と行動を表してね」

ジェニファーさんの言葉に、国家代表全員が「そうだ」と頷く。

国家の代表から敬意を向けられ、その反応に困りつつも、俺はその敬意を素直に受けとった。

「それと最後にもうひとつ。あまり千冬に心配かけないようにね」

そういつてジェニファーさんがカラカラ笑いながら俺の額をつつく。

俺は苦笑しながら「心がけます」と答えた。

第34話 告白

月に照らし出された校舎の一角。静寂に包まれた場所で、一人の女性立っていた。

美しい女性だ。空色の髪が美しく、妖精のような美貌が闇夜に負けず、映えている。

「——私です。VTシステムは発動したようです。確認しました。情報は正しかったようです。近々、開発元のヘラルクユーレ・ウエポンへ〈国際IS委員会〉の査察が入るでしょう」

透き通るような、耳触りのいい声音だった。美声と評しても差し支え無い。

女性は夜風に長髪をなびかせながら続けた。

「遺伝子強化素体の情報も、すでにマスコミにリークしました。いまごろ、螺旋機関や人権団体の間では、蜂の巣を突いた騒ぎですよ。これでドイツの国際的信用は失墜したのも当然です。フランスのデュノア社のV字復活もないでしょう」

言って、スッとアリーナの一部分に視線を落とす。

視線の先では、シャルルが再入学のため、教師と模擬戦闘をしていた。

「フランス経済の低迷、ドイツの国際信用の低下。ユーロ価値を支える大国がこの体たらくでは、しばらく東欧諸国も欧州連合に加盟しようと思わないでしょう。——ええ、全ては祖国再建のためには、私はこれで、アルツェバルスキー大佐」

回線先の相手にそう告げ、女性はコリをほぐすように首を鳴らした。

「やれやれ、あの大佐も人使いが荒い」

ドイツ、フランス、日本を渡り歩いて、かれこれ30時間。そろそろ疲労もピークだった。

しかし、まだ休めない。少なくとも後ろで盗み聞きしているネズミを処分するまでは。

「さて、出てきたらどうだ？」

女性が振り向かず言うと、一角から一人の学園生徒が現れた。

外に跳ねた水色の癖毛。陽気そうな面持ち。それでいて、目の前の女性に負けていない美貌を誇っている。彼女は学園の自警団へ生徒会をとり仕切る長、更識楯無だった。

「よく気付いたわね」

「オレは感度がいいんでね」

「あら、そうなの？ 私は不感症だって聞いていたけど」

「ははは。そうだった。オレはセックスじゃイヤくない女だった」

何が愉快なのか、女性は額に手を当て大いに笑った。

その姿にどこか薄ら寒いものを感じる。初夏の夜にも関わらず、背筋が冷えた。

「それで、私をどうするの？」

楯無はボロボロのく霧纏の淑女を展開し、その手に円錐型のランス《蒼流旋》を握った。

突撃槍に内蔵されたガトリングの砲門が女性を睨む。

ジェニファアとの一戦を終えたばかりのく霧纏の淑女は、所々損傷が見受けられた。戦闘になれば、完全に後手だろう。苦戦は否めない。しかし、この事態を想定していなかったわけではない。

ここは彼女のホームだ。戦闘が起これば、全てが彼女の有利に働く。

しかし、女性は攻撃の意思を示さなかった。

「どうもしないさ。故郷が違えども、君はロシアの人間だ。同志を討つのは心が痛む」

「あら、見逃してくれるっていうの？ ——ソフィア」

楯無は柔らかに、けれど鋭いで瞳で——ソフィア・アルジャンニコフを睥睨する。

しかし、かつてアリス・リデルに敗れた女性は、友好的に笑った。「そういうことだ。君とは知らない仲じゃないからな。——それと、知り合いがたら、ひとつ忠告しておくよ。君が諜報活動の一環として国家代表をやっていることは、FSBの連中も感づき始めている」「嗅ぎまわるのを、やめろってことっ。」

「ああ、大人しくして国家代表をしておけ。さもなくば、国へ帰れ。ロシアは諜報員に寛容な国家じゃない。当局に拘束されても、オレは助けてやれないぞ。わかったな」

それだけを言うと、ソフィア・アルジャンニコフは踵を返した。

楯無はそれを黙って見送る。生徒会には、来校者を拘束する権限がなかったからだ。アリスに手を下したならまだしも、ソフィアがココで破壊工作や諜報活動を行ったわけじゃない。

「では、これで失礼させてもらう。今度会った時は美味しいボルシチでもご馳走するよ」

背中であれ語って、ソフィアは微温湯に溶ける氷の如く姿をくらました。

楯無は、待てと言わなかった。

♡

◆

♠

「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞いてください」

V T システム暴走事件から一夜明けた翌日のホームルーム。

山田先生が神妙な顔つきで教団に立つと、クラスが正ならぬ雰囲気にも包まれた。

(大事な話。おそらくデユノアさんについてでしょうか)

そう憶測すると、クラスのドアが開いた。入ってきたのは、案の定、デユノアさん。

ただし服装がいつもと違う。彼女は男装用のコルセットを付けず、女性用の制服を着用していた。その姿はもう誤魔化しようのないくらい「女性」だ。それを見たクラスメイトからざわめき声上がる。

「傾注しろ」

千冬さんの一言で、クラスのざわめきがひとまず収まる。

それを見計らい、デユノアさんが真剣な面持ちで話し始めた。

「実はみなさんに、お詫びしなければならぬ事があります。見ての通り、私は女なのです。本当の名前はシャルロット・デユノアとい

ます。詳しくは話せませんが、家庭の事情で性別を偽って入学してきました。それで、今日はその事をここで謝りたいと思います。——みなさん、騙っていて本当にごめんなさい！」

未だ当惑を見せるクラスメイトたちに、デュノアさんが誠心誠意、頭を下げる。

(一夏)

(ああ、わかってる)

あらかじめ事情を知っていた私と一夏は、クラスの掌返しに備えた。

人は憧れや期待を裏切られると、驚くほど残酷になる。もしかしたら、批難や罵声を浴びせてくる者が出てくるかもしれない。それを考慮してのことだ。

しかし、デュノアさんに投げかけられた言葉は、驚くほどあっぴりかんとしたものだ。宝塚みたいな人だなーとは思ってたんだけどさ」

「アンドレイじゃなくて、オスカルだったわけね！」

「わたしはー、知ってたよー。きりっ」

『絶対ウソ！』

「えー？ ほんとだよー」

元々デュノアさんは寛容で、慈しみ深い人物だった。

その仁徳が活きたのか、沸き上がる声は一樣に明るく、軽蔑や侮蔑の色は微塵もない。

陰險な嫌がらせが始まったらどうしようかと思っていたが、この分だと杞憂に終わりそうだ。

「という事です。みなさん、これからもシャルル・デュノア君、改めシャルロット・デュノアさんと仲良くしてあげてください。先生からお願いします」

「お願いします」

先生とデュノアさんが頭を下げると、教室から『はい！』と明るい返事が返ってきた。

それにたまらず安堵の溜息をつく。これでひとまずデユノアさんの一件は落着かな。

と、思っていたら、そうでもなかった。

「そういえば、デユノアさんって織斑君と同じ部屋だったよね？」

「じゃあさ、じゃあさ、当然デユノアさんの正体を知ってた訳だよね！」

「待って、待って。それじゃ実習の時どうしてたの？ 知ってて一緒に着替えてたの!？」

『どうなの織斑君!』

疑惑の矛先が向き、一夏はぎよっとした。まあ、バレればそういう流れになりますよね。

私も更衣の時、どうしていたのか気になる。やっぱり一緒に着替えていたのでしようか（赤面）

「ちよっと一夏！ これはどういうことよ！」

すると、教室のドアが乱暴に開いた。入ってきたのは二組の関羽こと、鳳鈴音だ。

もしかして、今の話が二組にまで聞こえていたのだろうか。なんとこの地獄耳。むしろ盗聴？

「その話、詳しく聞かせてもらおうじゃない、一夏！」

逆鱗に触れたか竜が如く肩を震わしながら、一夏に詰め寄る鈴。

今にも口から火炎を吹き出しそうな鈴に、危機を感じた一夏は真っ青になった。

「いや、待て、鈴！ これにはいろいろ事情があつたんだよ！」

「うっさい、しねっ！」

説明をしたのにその対応はあんまりだと思つたが、鈴は止まらない。い。

床を蹴つて、某バツタ怪人のような必殺の飛び蹴りを繰り出す。足底が燃えているように見えるのは錯覚だろうか。錯覚なのだろう。

「はは……」

完全に諦めモードの一夏は、最早笑うしかないらしく、乾いた笑みを浮かべていた。

そんな彼の眼前を冷たい風が駆け抜ける。まさに疾風迅雷の如しそれは――

「ラウラ!」

ラウラは飛び蹴りしてくる鈴をくるつと引つ繰り返し、地面に叩きつけた。

その衝撃で鈴が目を回す。まったくもって見事なカウンターだった。さすがラウラだ。

「無事か?」

「あ、ありがとな、ラウラ、助かったよ」

一夏が礼を言うと、ラウラはいつもの仏頂面で応えた。

「うむ、礼には及ばない。これからは私がお前を守る」

「は? おまえ、急に何を言ってる……?」

言葉の意図を測りかねた一夏が、またきよんとした。

幾度なく衝突してきた相手が、いきなり守ってやると言っているのだ。当惑もするだろう。

「守るって、どうしたんだ、いきなり」

「私は闇の中で、教官がどれだけお前を大事に思っているか再認識した。そこで、私もお前を守りたくなった。これからは、私がお前に降りかかる火の粉を払ってやる。安心するがいい」

ラウラの言葉には強い意志が宿っており、目には『変更はない』という光が輝いていた。

千冬さんはやれやれと肩をすくめていたが、表情はどこか嬉しそうだ。

「ま、なんだ、その、よろしく頼む」

「うむ、まかせろ」

未だ状況が呑み込めない様子の一夏だったけど、ラウラはどこか満足そうだった。

「よし。では、まもなくトーナメントが始まる。出場する者は準備しろ」

例の如く千冬さんが出席簿を叩いて、皆の行動を促す。

昨日、あのような事態が起こったけれど、企業や政府の『データだ

けでも採りたい』という意向から、一回戦だけ全て行われる事になっている。もっとも一回戦を終えた——と言っているのか判らないけど——私たちはもっぱら観戦するだけだ。

ちなみにへブリュンヒルデのジエニファーは事後処理のため、今朝学園を発ったそう。

でも、欧州の代表やアジアの代表は残っているので、生徒たちの意気込みは依然高い。

「リデル、私は凰を二組に送っていく。代わりに教室の戸締りをしておいてくれ」

「わかりました」

鈴を背負って教室を出ていく千冬さんにそう答え、私は戸締りの準備に取り掛かった。

♡

✦

♠

「アリス・リデル」

教室の戸締りを終えたあと、背後から声を掛けられ、アリスは振り向いた。

「あら、ラウラ。トーナメントを見にいかないのですか？」

「いや、行く。だが、その前にお前と少し話がしたくてな。待っていた」

私と話？ と、首を傾げるアリスに、ラウラは真剣なまなざしをした。

「先日のトーナメントの時、お前は各国の代表に向かって『私の為なら世界だって敵に回してやる』と豪語したそうだな。——なぜ、そんな事をした？ 私はへ遺伝子強化素体だ。いくらでも代えが利く。守る価値のある命じゃない」

傍からみれば自分は、ただの兵器。ただの消耗品。そんな自分を庇って戦うなどナンセンスだ。

ラウラはそう思っていた。それゆえに彼女のトーナメントでの行

動が理解できず、その真意を確かめなくては、ラウラはアリスを待っていた。

「——実は私、アフリカの孤児なのです」

その言葉はラウラに少なからず驚きを与えた。

高貴に見える赤髪と名前から、てつきりイギリスの上流階級出身だと思っていたのだ。

「私も幼い頃に両親を亡くして、ずっと人の愛情に飢えていました。だからでしょうか、あなたが心の裡を明かしてくれた時、痛いほど、その苦しみが理解できたのです。理解できたこそ、あなたを救いたいという気持ちでいっぱいになりました。それがあなたを助けた理由です」

アリスはまるで我が子を愛でるようにラウラを撫でる。

彼女の手には人の温もりが込められていた。その暖かさが、言葉に偽りが無いことを示す。

そして、アリスは彼女の戦いを讃えるように、敬礼して続けた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、貴女はよく戦い抜きました。これからは何にも縛られることなく、魂の感じるままに生きてください。生きて、素敵な出会いをたくさんして、一度限りの人生を存分に謳歌してください。一人の少女として。——それが貴女の次のミッションです」

朗らかに告げられたアリスの言葉を、ラウラは心の中で反芻した。人生を謳歌する。〈遺伝子強化素体〉としてではなく、一人の少女として。

そんな事が私にできるのだろうか。戦う事しか知らない自分が、戦争の無いこの場所で。

そんなラウラの心内を汲み、アリスは言った。

「あなたならできますよ。〈遺伝子強化素体〉という呪縛から自らを解放できたあなたなら。もし挫折そうになったら、私が支えます。病める時も、健やかなる時も、私はあなたの味方ですから」

「病める時も、健やかなる時も、私の……」

まるで誓いの言葉だ、とラウラは思った。そう思うと、身体に熱いものが駆け巡った。

自分は兵器と同じ消耗品。使えなくなれば、破棄され、処分される。その程度の命。

ずっとそう思ってきた。それが嫌で、否定したくて、誰かの愛情を求めた。

愛されれば。求められれば。自分には兵器以上の価値がある、そう思ってた。

でも、誰も自分を愛してはくれなかった。

訓練所の人間には蔑まれ、敬愛する人にも振り向いてもらえず、ただ孤独に苛まれる日々を送ってきた。だが、ようやく出逢うことができたのだ。不完全で、不器用で、戦う事しかできない自分を理解し、想い、戦ってくれる人が。こんな嬉しいことはない。

その感動が涙となって頬を伝う。その温かさにラウラは悟った。

自分は何の為に生まれてきたのか。——きつと彼女と出会うために生まれてきたのだ。

しかし、困った事に胸の内から込み上げてくる感情をうまく言葉にできない。

できないけれど、ラウラは自分の持てる限りの知識を使って、この感情を表現した。

「お、お前を私の嫁にする！」

きつと、おそらく、『わたしの家族になってほしい』という旨を伝えなかったのだろう。

不器用な彼女の気持ちを汲み取ったアリスは、ラウラの片手を優しく取った。

「はい、これからずっと一緒です。死が私たちを分かつまで」

そう言われると、もう我慢できなかった。堪らず床を蹴って、胸に飛び込む。

押さえていた感情が溢れだして、いうことを聞かなかつた。

「ふふ。ラウラ、甘えるのはいいですけど、トーナメントが始まってしましますよっ。」

「トーナメントなどどうでもいい。私はお前とこうしていたいのだ」
擦り寄ってくるラウラに、アリスは少し困ったように笑ってから、

「でも、いかないと、千冬さんに怒られますよ?」

「そ、そうか。ならしかたない。行くとしよう」

そう言った時、丁度一回戦第二試合の開始ブザーが鳴った。

♡

◆

♡

その場所は静謐に包まれていた。大きさは小劇場ほどで、周囲には無数のスクリーンが取り囲んでいる。その中央に設えられた近未来的な座椅子には、風変りな女性が一人、佇んでいた。

紺色のワンピースに純白のエプロン。頭からは機械仕掛けのウサギ耳。まるで『不思議の国のアリス』を一人で体現したような姿だ。

「ふん♪ ふん♪」

そのアリス擬き——篠ノ之束は、スクリーンを泳ぐ無数の数値と睨めっこしながら、キーボードを打ち込んでいく。タタタタとリズムカナルなタイピングは、さながらピアノ演奏のようだ。音階を付ければ、さぞかし美しい音色に化けるだろう。

「ふふくん、ファームウェアの最適化はこれでよしと。あとはメタ運動野パラメータを更新したいところだけど、箒ちゃんもあれか鍛えているだろうしねー。こればかりは現地でやるしかないかな。ふふ、楽しみだね7月7日が」

そう言って、クマのできた不健康な顔でデジタルカレンダーを眺める。

その7月7日には、二重のハートマークが書き込まれていた。その日は最愛の妹、箒の誕生日なのだ。

「箒ちゃん、喜んでくれるかな、束さんのサプライズ」

愛しき妹が生まれた素晴らしきこの日を最大級祝福するため、束は様々な仕事を仕込んできた。

一夏をIS学園に誘導し、それを追って箒が入学できるよう、日本政府にIS学園の推薦状を発行させたのも彼女の仕業だ。それらの手回しには相応の対価を支払ったが、妹を想えば安いものだ。

東が気味悪くニンマリ笑っていると、室内のスピーカーから音声が漏れた。

《お姉さま、A経路回線G1より秘匿暗号通信です。繋がりますか?》
施設を管理しているAI（声は何故か箒）からだった。それに、東が椅子の上で小躍する。

この回線を知っている人物はそう多くはない。しかもA経路で繋いでくる人物は一人だけだ。

「おおー、もちろんだよ！ さあ、さあ、繋いでおくれ、HALL」
《了解です、お姉さま。通信許諾、解放。どうぞ》

箒声のAIがそう告げると、前方のスクリーンに白髪の少年が映し出された。

それを見るなり、東は両手を鷹揚に広げ、歓迎の意を露わにする。
「やあ、我が息子ロキくんよ。あれ以来、連絡くれないから、お母さん寂しかったよ！」

『それはすまない。こちらも色々忙しくてな』
「うんうん、ロキくんは〈亡国機業〉の幹部だもんねー」

『それで連絡したのは、その〈亡国機業〉についてなんだ。実は、幹部会による臨時の査問会議が開かれることになった』

打って変わって、白髪の少年ロキが真剣な面持ちをした。
東もわずかに表情を強張らせる。

「もしかして、ロキくんがIS学園を攻撃したからかい?」
先月、ロキは独断で学園を攻撃した。それについての査問は、まだ行われていない。

自分の有用性を盾に、言及を逃れてきたのだ。しかし、それも時間の問題だった。だが――

『いや、かけられるのは、アルフレッドという亡国機業の幹部だ』
「それって、確か〈ワルキューレ・ウエポン〉社のCEOだったっけ?」
〈ワルキューレ・ウエポン〉。ドイツの大手IS企業で、〈シユヴァルツェア・レーゲン〉の開発元だ。VTシステムを開発した疑いで、近々〈国際IS委員会〉の査察が入る予定になっている。

『ああ。〈ワルキューレ・ウエポン〉の資本金は、〈亡国機業〉の秘密軍

資金から出資されている。今回のVTシステムの事件は、組織に不利益をもたらした”。大佐はそれを口実にアルフレッドを査問にかけて、〈亡国機業〉から追放するつもりらしい』

「で、ロキくんとか、他の幹部どう動くの？」

『俺や他の幹部もその方針で固まりつつある。これに伴って、幹部席がひとつ空席になる。——そこで、俺は母さんを新しい幹部に推薦したい。どうだろうか』

世界の裏から軍事力をコントロールする亡国機業。その幹部席は、世界に影響を与える魅力的な席だ。もつとも、組織内部は策謀が渦巻いているため、一度座れば、謀殺の危険はあるが。

しかし、自派の幹部が増えれば、組織内での発言力も強くなる。

束も、息子のためなら、身を危険に晒すことも吝かではなかった。

——が、束は断った。

「ごめんね。力になってあげたいけど、今はクロエと一緒にいてあげたいんだよ」

『そういうと思った。では、代わりの人物を推薦しよう』

ロキがどこか嬉しそうに肩を竦めると、部屋と通路を繋ぐ扉が開いた。

「束さま、ココアを入れてまいりました」

入ってきたのは、10歳あまりの少女だ。小さなメイド服に身を包み、流水のような白髪を一本の三つ編みにしている。実に愛らしい少女であるが、どこか翳のある少女だ。

少女は両手で大きめのマグカップを握り絞め、てくてくと束の前にやってきた。

「おおー、くーちゃん、いいところに来たね。お兄さんからお電話だよ」

ココアを受け取り、やってきた少女——くーちゃんを膝の上に乗せる。

くーちゃんと呼ばれた少女は、嬉しそうに目を輝かせ、目の前の映像に食いついた。

「お兄さま、ご機嫌麗しゆうございますー！」

『ああ、久しぶりだな、クロエ。母さんに迷惑をかけていないか？』
「はい、クーはいい子にしています」

「うんうん、クーちゃんはとってもいい子にしているよ。症状も良くなってきたるしねー」

束が愛おしそうにクロエを頬擦りし、クロエも甘えるように擦り寄る。

実に仲睦まじい光景だ。それを見た実の兄——ロキも安心したように微笑んだ。

妹クロエはある禁断症状を抱えていた。その所為で義理の母——束の手を煩わしているのではないかと危惧していたが、二人の様子を見る限り、いらぬ心配のようだ。

「お兄さまこそ、ローズマリーさまにご迷惑をおかけしていませんか？」

『それなら大丈夫だ。むしろアイツの所為で、このところ寝不足なんだ』

束はウサミミをぴよこんと立てた。

「わお！ 御盛なんだね。その調子だと孫の顔を拝めるのも、そう遠くないかな!？」

『いや、誤解しないでくれ。別にそういう意味じゃないんだ。急遽アイツの要望で<レーヴァテイン>の仕様を変更する事になったんだ。寝不足なのはそのためだ』

「ぶー、なんだ、そういうことかー。束さん、残念でならないねー」

残念そうに唇を尖らせる義母に、息子は苦笑した。

「それでどうだい？ 魔剣は7月7日に間に合いそうかい？」

『間に合わせるさ。でなければ、7月7日”を始められない。そういう<紅椿>はどうだ？』

「それならばつちりだよ。あとは箒ちゃんを乗つけて最適化処理するだけさー」

ブイブイとVサインを画面の息子に突き出す。倣ってクロエもブイブイとした。

その背後で、紅のISがその存在感を漂わす。

〈紅椿〉。東が最愛の妹のために用意した次世代 I S だ。彼女曰く『最高性能』にして『代用の利かぬもの』。しかし、これほどのモノを完成させられたのは、ひとえに彼の尽力によるものが大きかった。

「これもロキくんのおかげだよ」

『礼には及ばない。あんたは命の恩人だ。あんたがいなければ、俺たち兄妹は灼熱の地でくだらない死に方をしていた。それに学を与えてくれたのもあんただ。あんたには感謝してもしきれない恩がある』
かくいうロキという少年は、東の実の子ではない。彼は、東が逃亡途中に拾った少年だった。

その後、東は彼に衣食住、そして自らの知識を与えた。

義理堅い少年はその恩を忘れず、組織に所属してからも、こうして東に便宜を図っている。東が住まうこの移動型ラボ（デイスカバリ）も、また彼が提供したものだ。逃亡の身であるにも関わらず、これだけの設備や物資を揃えられたのも彼がいればこそだった。

『——さて、魔剣の調整があるので、俺はそろそろ失礼させてもらう。邪魔したな』

「いやいや、邪魔なんてとんでもない。ロキくんのためなら24時間フルオープンだよー」

「クーも、クーもです。クーもお兄さまの為なら眠たくてもがんばって起きます」

『いや、クロエはよく寝ろ。じゃないとローズマリーみたいな女にならないぞ』

兄に諭され、妹はしぶしぶ肯いた。

そんな愛娘を撫でながら、東が『うんうん、寝る子は育つってうしね』と付け加える。

「むー。わかりました。たくさん寝て、ローズマリーさまのような美人になります」

『ああ、そうしろ。母さんも研究はほどほどに、身体に気をつけてな』
ディスプレイから少年の映像が消え、代わりに《Offline》の文字が浮かぶ。

東はそれを名残惜しそうに見る。寂しさを紛らわせるため、クロエ

をぎゅっと抱きしめた。

だが、いつまでもそうしてられない。早々に準備に取り掛かる必要がある。

来たるべき7月7日に備えて。

〈星に願いを／月に祈りを〉 第35話 夏が始まる

6月下旬。IS学園の一年生専用寮。その1020号室に、けたたましい警報が鳴り響いた。

再入学の一件で、部屋を移動することになったシャルロットが、その部屋を訪れた時の出来事である。寮中に響くけたたましい警報を耳にし、シャルロットは目を丸くした。

「え、なに、どういうこと?」

自分は山田先生から鍵をもらい、普通にこの部屋に入っただけだ。

ちゃんとした手続きを経たはずなのだが、この侵入者のような扱いは、一体……。

「寮の警備システムの誤作動とかかな……?」

そもそも、重要人物である一夏の部屋にさえ、こんな警備装置なんてなかったが……

シャルロットはこの警報を不信に思いながらも部屋に入った。すると、備えられたベッドの下から何かが出てきた。薄い円状の機器だ。それが主人を迎えるペットの如くシャルロットに寄ってきた。

「あ、お掃除ロボットだ」

と思った——次の瞬間である。

ロボット掃除機の中央から何か飛び出し、強烈な閃光を放った。

(え? フラッシュユバングレネード!?)

まさか、お掃除ロボットに扮した自走式地雷だと思いきやなかった。シャルロットは、一瞬で視界を奪われてしまった。

同時に窓から誰かが突入してくる。その侵入者が、視界を封じられたシャルロットの肘を手際よく捻じ曲げる。シャルロットは、ほとんど無抵抗に床へ抑えつけられた。

(一体、誰が……)

もしや父の回し者か。

しかし、視界が回復するにつれ、シャルロットの心配は杞憂に終

わった。

「ぼ、ボーデヴィツヒさん？」

自分を拘束していたのは、クラスメイトのラウラ・ボーデヴィツヒだった。

ラウラは慌てる様子もなく、いつものむつつり顔で言った。

「む、おまえは、シャルロッテ・デユノアか」

シャルロットの顔を確認して、ラウラが拘束を解く。

シャルロットは「シャルロットね」と苦笑しながら身を起こした。

「それで、これは一体なんなの？」

「見ての通り、赤外線センサと自走式地雷を組み合わせた警備システムだが？」

まるで悪びれた様子も見せず、ラウラは警報装置のアラームを切った。

「どうして、そんなものを部屋に……？」

「この学園は国際的にも重要な施設だ。だというのに警備が甘すぎる」

だから、自前で警備を強化したという話だった。

自分の身は自分で守る。確かにそれは正しいのだが――。

「でも、こんなことしてたら、来る人来る人、迷惑しちゃうんじゃない……」

赤外線センサに個人を識別できる能力はない。無差別だ。

来るたび、お掃除ロボットにお掃除されていては訪問者がたまらない。

「安心しろ、この部屋に他の生徒はこない」

つまり『もしココを訪れる者がいたとすれば、それは侵入者に他ならない』。そういうことだった。言い換え、それは『誰もラウラの部屋に遊びに来ない』ということでもあって、なぜか、シャルロットの目頭が熱くなった。

「でも、織斑先生とかアリスは来るでしょう？」

人から敬遠ならぬ嫌遠されているラウラであるが、例外として千冬とアリスには慕われている。他の生徒が部屋にこなくても、そのふたりなら訪れることもあるだろう。

「嫁も教官も、この程度の警備システム、簡単に無効化するから問題ない」

「そ、そうなんだ……。でもさ、ラウラ——」
「でも、でも、うるさいやつだな。デモがしたいなら外でやれ。迷惑だ」

迷惑を被っているのはこちらなのに、この言いぐさである。

温和なシャルロットもさすがに苛立ったが、これから一緒に暮らすのだ。ここは自制心を総動員してグッとこらえる。

「そ、そんなこといわないでさ、仲良くやろう。ルームメイドになるんだし」

「ルームメイド？　そうか、教官が言っていたルームメイドとは、おまえだったのか……。てつきり嫁がくるものだ……。非常に残念だ」

ラウラは優秀な兵隊でも、学園ではかなり浮いた存在だ。そんな彼女と共同生活できる人物は多くない。ラウラもその自覚があるのか、ルームメイドにアリスが来るのだと期待していたようだ。

「ラウラってほんとアリスのこと、好きだよね」

V Tシステムでの一件以来、ラウラはアリスにべったりだった。どこでもついていくもんだから、クラスから「すりこみのヒヨコ」だの言われている。

そして、そんな二人を見るたび、シャルロットはうらやましきのような、得体のしれない感情に襲われていた。だからなのだろう。シャルロットの言葉にはどこか棘があった。

しかし、ラウラはまったく意に介さず、

「アリスは私の嫁だからな。そういうおまえこそ、やけに嫁に甲斐甲斐しくないか？」

「え、え？　そ、そんなことない、よう」

思わぬ反撃に視線を泳がせるシャルロット。

実は、当番でもないのに教室掃除を手伝ったり、手作りのお菓子をプレゼントしたり、そう言われる節がいくつもあったのだ。

ジッとラウラの視線に耐え切れなくなったシャルロットは、話をぶったぎった。

「ともかく、今日から僕もここに住むからよろしくね！」

「逃げたな。まあいい。シャルロット・デユノア。ここへの住居を許可してやろう」

どこか「やらやれ」といった様子のラウラだったが（シャルロットにすれば、こつちがやれやれなのだ）、ともあれ居住を認めてくれたようなので、シャルロットは荷を解き始めた。

衣服、小物、勉強用品。

それをどこにしまおうかと部屋を見渡していたら、クローゼットに目が留まった。

「ねえ、ラウラ、ここ使ってもいい？——」

そう言つて、シャルロットがクローゼットに近づくと、当然、顔の真横をナイフが通過した。背後から飛んできたナイフが、クローゼットに突き刺さつてばいゝんと揺れる。

シャルロットは慌てて投げた本人を見た。

「ラウラ、いきなり、なにをするのさ!？」

「そのクローゼットには絶対に触るな、いいな。絶対だぞ」

ラウラは、腹に響くような低い声で言った。ただならぬ気迫に、シャルロットは「この中には知られたら不味いものがあるのだろう」と悟る。ラウラは軍人なので、機密性の高い暗号化通信機とかだろう。

「ご、ごめんね。絶対触らないから、ナイフ下ろしてくれ」

「まったく……。以後、気をつけろ」

言つてナイフをしまうラウラに、ひとまず安堵する。

しかし、これから先、ずっとこんな調子なのだろうかと思うと、シャルロットは気が重くなった。

♡

◆

♠

6月下旬も過ぎ、衣替えの季節とあつて、やってきた食堂でも夏服の生徒が多く見受けられた。ばったり見かけたアリスも、カッター

シャツとベストを着用していた。半袖から覗く健康的な腕がまぶしい限りだ。

俺に気づいたアリスは、口をつけていたカフェオレを掲げて見せた。

「おはようございます、一夏」

「おはよう、アリス。この席いいか？」

「ええ、どうぞ」

俺は朝食の塩鮭定食をテーブルに置き、アリスの正面に座った。

「ところで、アリスは何を読んでんだ？」

「F・アルゲマイネ。——ドイツの新聞です。ちよつと気になる記事がありました」

「どんな記事だ？」

「ドイツのVTシステムに関する記事です」

それを聞き、先月の一件を思い出す。

先月、IS運用協定〈アラスカ条約〉で禁止されているVTシステムなる装置が暴走し、大きな騒ぎとなったのだ。それについての記事が載っているようだ。

「どうやら、〈シユヴァルツエア・レーゲン〉、もといVTシステムを開発した〈ワルキューレ・ウエポン〉に〈国際IS委員会〉の査察が入ったそうです。近々〈国際IS委員会〉が〈ワルキューレ・ウエポン〉にIS開発の停止処分を下すだろうと書かれています」

「そうか。当然だな。——で、ラウラに何か影響ありそうか？」

VTシステムは、研究、開発、運用の全てが禁止されている。当然、それを運用したラウラも責任を言及されるだろう。セシリアの話だと、操縦ライセンスの永久剥奪も有り得るらしい。そうなれば、ISの特殊部隊であるラウラの兵士生命は絶たれる。この学園にもいられなくなるだろう。

「本人の話だと、ドイツ代表候補生を解任されるだけで済んだようですよ」

「それだけか？」

「それだけです。この破格の処罰はきつと、どこかの狐が手を回した

のでしよう」

俺は艶やかな金髪の女性を思い浮かべた。

そうか、ジエニフアーフリップンヒルデさんが気を利かせて、裏で手を回してくれたのか。

「朝食が不味くならずにすみましたね」

「ああ、まったくだ」

俺が安心すると、件のラウラが食堂にやってきた。

「お、ラウラじゃないか。おーい、こっちにきて一緒に飯でもどうだ？」

「む、一夏か。すまない、今から任務を遂行しないといけないのだ」

「任務？」

「ああ。嫁の命令で、今学期中に友達を10人作らないといけないのだ。できないと嫁と離婚しなければならない。そういう訳だ。今は一緒に食事できん。すまないな。また誘ってくれ」

そう言っ、ラウラは朝食の盆を持ち、どこか緊張した面持ちで去っていく。

俺は怪訝な顔でアリスを見た。

「友達作りってなんだ、急に？」

「ほら、せっかく、この学園にいられるのです。どうせなら、存分に学園生活を謳歌してもらいたいじゃないですか。だから、ラウラに言ったんです。友達を作りなさいって」

「でも、離婚って？」

「それでも言わないと、『私には嫁がいるからいらん』って言うんですよ」

「はは、ラウラはアリスにべったりだもんな」

「別に悪い気はしないんですけどね。でも、ラウラには他の人とも仲良くしてほしいんです」

「楽しい学園生活を送りたいなら、友達は必要だしな。良い提案だと思っ」

俺も『よく寝たー』と狸寝入りで休み時間を過ごすラウラを見たくない。

俺が鮭を摘みながら賛同していると、ラウラがクラスメイトに相席を申し出ていた。

『こ、この席いいか?』

『ボーデヴィツヒさん!? え、えっと、い、いいよ』

『う、うむ。で、では、座らせてもらう』

先日の悪評が尾を引いているのか、相席した女の子の態度がよそよそしい。仲良し度が微妙な友人に『一緒に帰ろう』と誘われた時の、あの感じだ。離れているこの席にまで、気まずい空気が伝わってくる。

ラウラ、がんばれ、超がんばれ。何か会話を切り出すんだ。

『おい』

そうだ、いいぞ、ラウラ!

『お前はIS用のライフルに使われている弾が、なぜ劣化ウランではなく、タングステンなのか、知っているか?』

俺は思わず白飯を吹き出しそうになった。

おい、食事の場でその話題はねーだろ……。いや、ラウラらしいと言えばラウラらしいけど。

『へ? えーと、知らない、かな?』

『よし、では、私が教えてやろう! まず劣化ウランについてだが、劣化ウランは天然ウランを濃縮する過程で排出された破棄物をそう呼ぶ。この劣化ウランは、比重が鉄の2.5倍ある。同じ速度で、より大きな威力が見込めるので、砲弾の弾芯などに有効なのだ』

『へ、へえ』

『しかし、劣化ウランを使った劣化ウラン弾は、衝突すると酸化ウランの微粒子を大気中にばら撒き、人体に害を及ぼす危険性がある。そういう経緯からISバトルでの劣化ウラン弾の使用が〈アラスカ条約〉で禁止されている。それに代わって採用されているのがタングステンだ』

『そ、そうなんだ……』

『ただ、タングステンはレアメタルなので、劣化ウランに比べ貴重で高価なのだ。逆に、劣化ウランは度重なる核実験と原子力の普及でストックがある。安全だが高価なタングステンか、コスト安だが危険性

のある劣化ウランか。悩みどころだな。お前は どう思う?』

『え、えつと、た、タングステン? がいいんじゃない?』

『だが、それだと国防費や軍事費がかさむぞ?』

『じゃあ、劣化ウラン?』

『どつちなのだ。これは大事な問題だぞ。ちゃんと考えるべきだ』

『ご、ごめん……』

うわく……なんだか目も当たられない状況になってきたぞ……。

相手が無関心な話をうだうだした挙句、意見を批判するのはコミュニケーションで一番やつちやいけないことだぞ、ラウラ。

『仕方ない。私がこの問題をどう考えるべきかを——』

『あ、そうだ! 私、日直だった! ごめん、ボーデヴィツヒさん、先行くね』

あれ、今日の日直は筈だろ? はっ! さてはラウラとの相席に耐えかねたな!

いや、無理ねえか。あんな話題じゃ息が詰まって飯も食えんだろ。

「なあ、アリス、あんな調子じゃ、ラウラに友達なんてできっこないぞ」「ラウラって、知識がすごく偏っているんですよ。そのうえ、もともと危機意識や問題意識が低い人間を好いていませんでしたから。すぐさつきみたいになっちゃうんですよ」

「本人に自覚があるのが、まだ救いか」

テーブルで一人『またやってしまった……』と暗い影を落とすラウラを見て苦笑する。

「こればかりは、少しずつ変えていくしかないですね」

「そうだな。俺も協力するよ」

ラウラの華やかなしい学園生活のために団結すると、シャルルが慌てて食堂に駆け込んできた。

相当急いでいたのか、夏服にリボン巻かずに、握ったままだ。

「おはよ、シャルロット」

朝食を購入してやってきたシャルロットに、俺は箸を上げた。

「あ、おはよう。一夏、アリス」

「おはようございます。また寝坊ですか？ 最近多いですね」
同感だった。このところ、週二回ぐらいは今ののように朝寝坊している。

俺と同室だった頃は、寝坊なんて一度もしなかったのに。

「実は、ラウラが部屋にセントリーガンを取りつけだしてね——」

話によると、シャルロットの決死の説得で、例の赤外線トラップは撤去されたそうだ。だが、代わりに監視カメラとセントリーガンを組み合わせた防犯システムを設置し始めたというのである。それが夜中ずつと部屋を見張っているため、寝つけないという話だった。

「ずつと銃口を突き付けられている気分でき、落ち着かないんだ」

「それはなんていうか、苦勞してんな……」

と、その時、食堂にチャイムが鳴り響いた。HRの始まりを告げる予鈴だ。

「おっと、もうそんな時間か」

俺とアリスは早々に立ち上がり、急いで食器を返却口に置く。

食堂から校舎まで走っても、5分はかかる。急がないと遅刻だ。

「ちよ、ちよつと二人とも、おいていかないでよお！」

シャルロットがトーストを口に捻じ込みながら、悲痛な面持ちで俺たちを呼び止める。

だが、俺たちは足を止めない。だって、今日のSHRは千冬姉。遅刻は地獄だ。シャルロットには悪いが、俺はまだ地獄を見たくない。

「シャルロット」

「あ、ラウラ。ラウラは待ってくれるの？」

「遺族への手紙は私が書いておいてやろう」

シュツと敬礼して、びゅんと回れ右をするラウラ。

どうやら一緒に死んでやる気はないらしい。賢明な判断だ。塩分と死者は最小限でいい。

「みんなの薄情者お！」

シャルロットの叫び声に耳を塞ぎ、俺たちは食堂を飛び出した。

本鈴まであと5分。ギリギリ間に合うか、かなり際どい。

「僕、HRに間に会ったら、お母さんの墓参りするんだ」

シャルロットさん、それは死亡フラグです。



「うわーん、みんな酷いよ。確かに織斑先生が怖いのは解るけどさー」

片道5分かかる通学路を、シャルロットは愚痴りながら走った。

時刻は8時59分。HR開始まで残り1分。今から上履きに履き替え、三階の階段を全速力で駆け上がったも、間に合いそうにない。

もうここまでか。シャルロットがその足を止めかけた時、

「デュノアさん！」

誰かが自分の名を叫んだ。叫んだのは——アリスだ。

アリスは片手にシャルロットの上履きを持ち、もう片方に赤いナイフを握っていた。

「アリス？　もしかして僕と一緒に死んでくれるの？」

「いいえ、貴女を生かすために待っていました。——ヘレッドクイン！」

《Yes My honey》

アリスは<赤騎士>を展開し、シャルロットをお姫様抱っこで拾い上げる。

「え？」

シャルロットの小さな戸惑い無視し、アリスは<赤騎士>のスラスターに火を入れた。

重力に引つ張られたシャルロットが小さく「きゃッ」と悲鳴を上げる。

「危ないので、しっかりと掴まっけていてください」

「う、うん」

言われた通り、アリスにぎゅつとしがみつく。体重を預けたアリスの身体から仄かに香る匂いは、梔子のように甘かった。それでいて、生物的本能に訴えかけてくる“何か”ある。

(僕、この匂い好きかも♡)

シャルロットがどこかうっとりしていると、〈赤騎士〉が1年1組の窓際に着地した。

教室には、既に千冬の姿があった。

しかし本鈴のチャイムはまだ鳴っていない。どうやら、ギリギリ遅刻は逃れられたようだ。

「ギリギリセーフといったところか、しかしだな、リデル——」

早朝から織斑先生の出席簿が唸った。

「指定された場所以外でのIS展開は禁止事項だ、バカもの」

「でも、〈生徒会〉の役員は、学内での展開を許可されているはずですよね？」

そうなのである。学園の自警団を務める〈生徒会〉の人間は、学内での展開が許可されている。アリスも紆余曲折あつて、今は〈生徒会〉の役員だ。彼女には正当な権利があつた。

「む？　そういうえば、おまえ〈生徒会〉のメンバーだったか」

千冬は珍しくバツの悪い顔をした。

対してアリスはここぞとばかりに批難の視線を向ける。

「痛かったです」

「う、なんだ、その、悪かつた。今度遅刻した時は、目を瞑ってやるから許せ」

今回ばかりはこちらに非があるので、千冬は謝罪の意を込め、叩いた箇所を撫でてやった。

それを目撃した教室の女子たちから黄色い声が沸きあがる。

「きゃー、リデルさんが千冬姉さまにナデナデされてるー！」

「うらやましいー！　私もナデナデされたーい！」

「きよ、教官が嫁をナデナデだと!？」

「うるさいぞ、おまえら。さっさと席につけ。出席を取るぞ」

例の如く鬱陶しそうに生徒を宥め、千冬が教壇に立つ。

そして、出席を取ったあと、千冬は今日の連絡事項を告げた。

「では、まず来週からはじまる校外特別実習期間についてだ」

そう言つて、日直の箒が持ってきたプリントを各列に配る。

プリントには『臨海学校について』という名目の許、様々な注意事項

項が記されていた。

「詳しい集合時間や、日程などはその用紙に書いてある。各自、熟読しておけ。それと自由時間があるからといって、羽目を外し過ぎるなよ。あくまで訓練の一環だという事を忘れるな」

クラスから『はい！』と元気な返事が返ってくる。

「よろしい。では、次だ。今日の実習は4組と合同で行う。よって集合場所は第二アリーナだ。遅れてきた奴には例の如く後始末をしてもらうからな」

その後、簡単な連絡事項が告げられ、ホームルームは時間内に終了した。

♡

✦

♠

「では、これよりISのACMについて訓練を行う」

第二アリーナ。全員そろったところで、織斑先生が本日の実習内容を告げた。

ACMとはAriel Combat Maneuverの略で、ISが可能とする複雑な運動を組み合わせた一連動作のことを言う。一般的な航空機と違い、ISは地上戦も可能なので単にコンバットマニューバーと呼ばれることもある。

「では、例の如く専用機持ちに実演してもらおうとしよう。デユノア、ボーデヴィツヒ」

「はい」

千冬さんと呼ばれ、デユノアさんがヘラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡを展開する。

しかし、ラウラはISを展開せず、立ち止ったままだ。

「申し訳ありません。実演したいのは山々なのですが、今は専用機がない身でして」

V Tシステム事件後、彼女の専用機＜シユヴァルツェア・レーゲン＞はその証拠品として（国際IS委員会）に押収された。そのため、現

在ラウラは専用機を持っていない。

「そうだったな。では、その嫁に代わりを務めてもらうとしよう」

……

……………

……………

「あ、私ですか？」

嫁なんて言われ方するから、つい反応が遅れたしまった。

「わかりました。——レッドクイーン、準備はいいですか？」

《I am ready——いつでも、どこでも》

私は待機形態の赤いナイフを、自分の胸に突き立てた。そこから紅い粒子が血飛沫のように噴出す。それが瞬く間に像を成して、赫々と燃えるようなIS<赤騎士>を形成した。

「よし、まずは上空を巡航。のちに私の合図で垂直降下し、地上10cmで急停止しろ」

「強襲用のレイダーマニューバーですね」

レイダーマニューバー。迎撃の暇を与えず、敵の防空網を強行突破する戦闘機動だ。

「じゃあ、僕が先にいくね。——いきますー！」

デュノアさんが垂直離陸し、あつという間に上空100mまで上昇する。

続いて私もスラスターにエネルギーを注いだ。

<赤騎士>の推力は<ラファール・リヴァイヴ>より高いので、す

ぐさま追いついた。

「さすが<赤騎士>。速いね」

《Yes Ms. Dunois——私のスペックは世界最高水準。えっへん》

と、無い胸を得意げに張るレッドクイーン。

デュノアさんは『相変わらずおもしろいAIだね』と笑ってから、

「ところで、さっきはごめんね」

「なんのことです？」

「ほら、僕を助けたせいで、織斑先生に叩かれたでしょ？」

「それなら気にしないでください。少なからず、私にも責任がありますから」

もし、私が事前にラウラを注意していれば、デユノアさんも睡眠妨害を受けずに済んだかもしれない。彼女の寝坊の原因には、少なからず私の責任もある。たからこそ、私はデユノアさんを助けたわけだ。「これが終わったら、ラウラにセントリーガンを外すようお願い聞かせておきます」

「うん、お願いするよ」

とデユノアさんが苦笑すると、千冬さんから通信が入った。

『では、降下を始めろ』

私たちは『はい』と答え、巡航を停止。戦闘機動の体制に移行する。

「では、今度は私が行きますね」

「うん。じゃあ、アリスの120秒後に続くよ」

私は頭を地に向けて、急降下を開始した。ぐんぐん迫る地面。高度計の数値が目まぐるしい速度で減っていく。素人なら恐怖で制動をかけたくなるところだが、私はさらに加速した。

地面がみるみる近づき、＜赤騎士＞が緊急停止を警告するが、まだだ。

まだ……。まだ……。まだ……。よし、今！

私は機体の上下を反転、脚部装甲を地面に向けてPICを作動し、急制動をかける。

ガクンと僅かな衝撃後、＜赤騎士＞が地上10cmで停止した。うん、我ながら完璧な強襲機動だ。

「さすがだな。ジエニファーに喧嘩を売っただけはある。では、次、デユノア」

「デユノアさん、がんばってください」

私は個人間秘匿通信プライベートチャネルでメールを送った。

『うん、ありがとう』

そして、デユノアさんが降下を始めた。



(さすがだよね)

急降下する中、シャルロットはアリスの戦闘機動に対する感想を漏らした。

機動は危なげなく、それでいて緻密。数いる代表候補生の中でも、あそこまで絶妙に機体を制御できる操縦者は多くない。けれど、それだけの實力を持ちながら、彼女は国家代表でもなければ、代表候補生でもない。

(アリスって不思議な娘だよね)

そう思ったところで、自分は彼女のことを何も知らないのだと気づかされる。

彼女はどんな人が好みで、どんな食べ物が好きで、どんな音楽を聴くのだろうか。

そんな「興味心」が心を占めていく。

やがて、それが「知りたい」という願望に代わった時、シャルロットは気づいた。

——地上との距離が無いことに。

慌てて、制動を駆けるが、——間に合わない。

かくして、シャルロットは愛機と共に地面へ激突したのだった。

「デュノアさん、大丈夫ですか!」

自分が作ったクレーターを滑り降りてくるアリスに、シャルロットは二つの意味でドキっとした。一つは派手な失敗をやらかして。もう一つは気になる相手が急接近してきて、だ。

シャルロットは二重の恥ずかしさから、しどろもどろになった。

「ただ、大丈夫だよ。ISの防御機能のおかげで、全然痛くなかったしッ」

「そうですか。でも、どうしたのです。あなたらしくもない。もしかして整備不良ですか?」

「いや、あの……………」

あなたの事を考えていて、墜落しました、など言えるはずがなかった。

(うー、恥かしいよお…………)

代表候補生なのにこの失敗。それを気になる人に見られたのが、また恥ずかしい。

そんなアレコレが入り混じり、シャルロットは『穴があつたら入りたい』気持ちになった。いや、既に穴の中だつたりするのだが、それでも『穴があつたら入りたい』と思った。



放課後。シャルロットは自分の空けた穴をせっせと埋めていた。傍らでは同じくスコップを持ったアリスが、作業を手伝ってくれている。

そんなアリスに感謝しながら、シャルロットは今日の出来事を思い返した。

(はあ、前はあんな失敗、絶対しなかつたのに…………)

どうにも、ここ最近、アリスに気を取られることが多くなってきている。

なぜ、こんなにもアリスのことを考えてしまうのか。理由は解らない。けれど、始まりはしっかりと覚えていいる。それは自分が出自を明かした時だ。父に縛られ、悲哀に涙する自分にアリスは言ってくれた。

私は救世主^{メシア}じゃない。たくさんの人間は救えないけど、少女の一人ぐらい救ってみせます。

そして、アリスは証明してみせた。——ラウラを救うことで。

先月、アリスはラウラのために戦っていたが、同時にシャルロットのためにも戦っていた。

シャルロットが自分の言葉に希望を抱けるように、と。

それに気づいて以来、シャルロットはアリスに熱い感情を抱くようになった。

「どうしました、デュノアさん？ 私に何かついてきますか？」

アリスが不思議そうに言った。どうやら、想い耽っている内にアリスを見つめていたようだ。

シャルロットは、手のスコップを取りこぼしながら両手を振るった。

「ううん、何でもないよっ！」

「ならいいのですが。でも、最近のデュノアさんは失敗が多い気がしますね」

全部、アリスのせいだよ！

と、言いたい気持ちはあったが、彼女に非はないので、胸の裡にとどめる。

でも、胸のモヤモヤが収まらないので、シャルロットは気分転換に話題を変えた。

「と、ところで、アリスはもう臨海学校の準備した？」

「大方は。でも、水着はまだですね。デュノアさんは？」

「僕もまだ」

「そうですか。では、今週の日曜日、一緒に買いに行きますか？」

「え、一緒に♡」

何の変哲もない、友人からの誘い。そのはずなのに、感情が昂った自分に驚く。

ああ、これはもう認めざると得ないだろう。自分は彼女に友達以上の感情を抱いているのだ。

だが、その感情をなんと呼べばいいか、シャルロットには解らなかつた。アリスが男性なら恋と呼べたのかもしれないが。

(ま、呼び方なんて何でもいいよね)

友情であっても、恋心であっても、どちらでもいい。

今はこの甘酸っぱい感情をぞんぶんに堪能しよう。シャルロットはそう決めた。

「うん、行くよ！」

「決まりですね。では、さっさと片付けて予定を立てましょう」

アリスが作業スピードを上げる。それに倣ってシャルロットもスコップを握る手に力を込めた。

二人でせつせと穴を埋めていると、見知った顔の生徒がこちらに走ってきた。

ダボダボな袖。人を和ませる雰囲気。のほほんさんの愛称で親しまれる布仏本音だ。

のほほんさんはダボダボな袖を振り回しながら、アリスに抱き着いた。

「ぎゅちゅくん、助けて〜」

「どうしたのですか、のほほんさん。——あ、また虚さんに怒られるような事を?」

「違うよー」

のほほんさんは長い袖をぐるぐる振り回しながら、こう言った。

「ぎゅちゅんに、かんちゃんを叱って欲しいの〜!」

第36話 彼女たちの問題

「ぎゅちゅん、こっち、こっち」

ほんさんに連れてこられた場所は、IS学園の整備区画だった。ここは訓練機や専用機の整備を行う区画で、二年生から設けられる整備・開発学科の実習区画としても使われている場所だ。

のほんさんは、ここに私を連れてきて一体どうしようというのでしょうか。

「あの、のほんさん、そろそろ事情を説明してもらえませんか？」

「実はね。かんちゃんが『来週の臨海学校、行かない』って言うのー！」

「かんちゃん？」

かんちゃんとは、誰だろう。——そう思っていると、一機のISの前に連れてこられた。

＜打鉄＞系統のISだろうか。全体的なフォルムは、堅牢な鎧武者を彷彿とさせた。しかし、＜打鉄＞の特徴的だった盾型非固定浮遊部位は、＜白式＞のような多機能推進翼に換装されている。

その機体の背後から、内気そうな少女が恐る恐る顔を出す。

彼女には見覚えがあった。先月、私に力を貸してくれた会長の妹さんだ。

「……本音、姉さんを連れてくるなんて卑きよ——って、違う？……姉さんじゃ、ない？」

更識簪さんは、私の顔を見てコクリと首を傾げた。

どうやら、説教役に会長を連れてくると思っていたようだ。

「どうも。更識簪さんですね。私はアリス・リデルです」

「……知ってる。世界に喧嘩を売ったひとで、姉さんの犬」

「犬じゃありませんよ！」

私が大声を出すと、更識さんは『……うっ!?!』と＜打鉄＞の後ろに隠れてしまった。

そして、そろそと顔を出し、怯えたようにこちらの様子を窺う。

あー、怖がらせてしまった。

「確かに、私は生徒会の役員ですけど、会長に魂まで売った覚えはあり

ませんから。なんなら、この場で踏絵してもいいですよ。喜んでします」

「……そこまでしなくていい……」

「そうですね。で、のほほんさんから聞いたのですが、臨海学校に行かないとか?」

更識さんはコクンと肯いた。それを見たのほほんさんが、長い袖を振り回す。

「なんでー、絶対楽しいのにー!」

「私も楽しいと思いますよ? それとも行けない理由でも?」

「……わたしは、これを、完成させなくちゃ、だから……」

更識さんは<打鉄>を愛おしそうに撫でた。

「この機体、まだ完成していませんので? てつきり完成しているからここにあるのかと」

「……未完成の機体を、わざわざ譲り受けたの」

「またなぜそんな事を? 開発元に任せればいいじゃないですか」

日本の技術者は優秀だと聞く。あのローリーナが太鼓判を押すぐらいなのだから間違いない。

そんな彼らに任せる方が効率的というか、合理的な気がするのだけど。

「……姉さんは専用機を、自分で組み上げたから」

そういえば、会長も<霧纏ミステリアス・レイディの淑女>を自分の手で組み上げたと言っていた。なんでも、私が大破させた<モスクワミステリアス・レイディの深い霧>をその

まま引き取り、自前で修繕した機体が<霧纏ミステリアス・レイディの淑女>であるらしい。

姉への対抗心か、更識さんも自前で専用機を組み立てることに、こだわっているようだ。

「でもね。進捗状況がよくなってね。このまま成果が出ないなら、開発は打ち切り、<倉持技研>が開発を引き継ぐっていう話になっっているの」

のほほんさんの話に、私は「妥当な話ですね」と返答した。

ISの開発には莫大なお金がかかる。予算も更識さんのポケットマネーじゃなく、開発元から出ているだろう。頓挫が見えているな

ら、打ち切られるのは当然。むしろ、学生に任したこと自体、私には信じられなかった。

「つまり、期限が迫っているので、臨海学校に専用機の開発時間を取られたくない？」

あくまで臨海学校の目的は『非限定空間におけるISの稼働訓練』。つまりアリーナみたいな限定された空間ではなく、よりオープンな空間での稼働を学ぶのが、臨海学校の主旨だ。滞在先の設備は整備科ほど充実していないため、作業を進められない。

「……期限が迫っているから1日でも無駄にしたくない」「なるほど」

私は大体の事情を聴いて、目の前のISを観察した。

「ちなみに、どんな専用機を作っているのですか？」

「……こういうの」

簪が私に書類の束を渡す。それは<打鉄式式>の仕様をまとめた設計書だった。

(どれどれ。仮機体名は<打鉄式式>。<打鉄・改>をベースにしたISですね。武装は荷電粒子砲2門と48連装ミサイルを内蔵予定。さらに電子戦も可能にする、か。でも、これでは装備の情報量が多すぎて、操縦者とそのコントロールに振り回されるんじゃないでしょうか。それに<打鉄>のジェネレーターで、この出力の荷電粒子砲二門は重いでしょう)

設計書の仕様は、明らかに<打鉄>のキャパシティーを超えている。実現させたいなら、既存の機体をカスタムするんじゃない、新規で開発した方が建設的だろう。まあ、その場合、予算も手間も飛び跳ねるけど。

「ところで、更識さんは開発の経験が？」

更識さんは首を横に振った。

(これが初めての試みか。なら、経験豊富な技術アドバイザーが欲しいところですね……)

こうして開発を任されたのだから、それなりの知識はあるのだろう。

けれど、現場には魔物が潜んでいる。その魔物に対処できるのは知識じゃなく経験だ。だから、経験豊富なアドバイザーがいてくれるだけで、効率が格段に変わってくる。

そこで私の頭上にぴこんと電球が灯った。

「更識さん、ベロニカ・エインズワースという人物をご存じですか？」
唐突な質問に一瞬きよとんとしたが、頷いた。

「……うん。アメリカの天才的技術者。……彼女の著書も読んだことがある」

「その彼女を、技術アドバイザーとして迎えるのはどうでしょう？」
ベロニカ・エインズワース、改めロリーナ・リデルがいれば、何か活路が開けるかもしれない。

しかし、更識さんは目を細め、私の正気を疑うように見てきた。

「……何を言っているの？ ……そんな人が一介の学生に、力を貸してくれるわけない……」

「ところがぎゅちゅん。私は彼女と友人でしてね、私が頼めば協力してくれるかもしれません」

「え……。ほ、ほんと！」

更識さんが表情を明るくする。そこですかさず条件を提示した。

「ただし、臨海学校に参加すること。それが条件です。もし、あなたが臨海学校に参加するなら、私も協力してもらえよう計らいましょう」

更識さんは考えた。でも、結果は既に見えていた。なにせ、学校行事に参加するだけで世界的技術者が手を貸してくれるかもしれないのだ。断る手はないだろう。

しかし、彼女の返答は異なった。

「……なんで、そこまでしてくれるの……？」

確かに更識さんからすれば、そこまでされる理由がない。

でも、私にはある。のほほんさんの頼みとは関係なく、彼女に協力する理由が。

「あなたは、私たちに力を貸してくれましたから」

先月、私たちがラウラを救えたのは、更識さんが二人の代表に呼び

かけてくれたからだ。

彼女がいなければ、私たちはラウラを救えなかっただろう。私は彼女の行動にすごく感謝している。

「……そんな、大したこと、してない……」

「だとしても、私たちが助けられたのは事実です。だから、この取り計らいは、その恩返しだと思ってください。ギブ・アンド・テイクです。それじゃ納得できませんか?」

更識さんは、さらに悩む素振りを見せた。

そのあと、のほほんさんの寂びそうな顔を見て、小さく頷く。

「……わかった。あなたの言葉に甘えて、素直に、受け取る」

「交渉成立ですね」

それにのほほんさんが、ダバダバの袖を振り回して喜んだ。

「わーい、かんちゃん和海だー、ありがとう、ぎっちよん」

「よかったですね、のほほんさん。——では、連絡がついたら報告します」

そう言い残し、場を去ろうとする。

その私を、のほほんさんがスカートを引っ張って、引き留めてきた。

「待って、ぎっちよん。どうせなら、一緒にかんちゃんのお手伝いしようよ」

「私ですか? 私はISの開発について詳しくありませんよ?」

私は操縦者であって技術者じゃない。もっぱら動かす方が専門なので、開発の方は素人だ。そんな私が手を貸したところで、大した力にはなれないと思うけれど。

「でも、三人あつまれば、饅頭の知恵っていうよー?」

「……本音、それを言うなら文殊の知恵。……饅頭のアンコに知恵はない」

「そうともいうー」

「……そうとしかいわない。でも、あなたが力を貸してくれたらうれしい、かも?」

と、首を傾げる更識さん。いや、訊かれても……。

でも、これも何かの縁ですか。

それに進級したら整備科に進むつもりだし、予習がてら手伝うのも悪くない。

「わかりました。私で良いなら手を貸しましょう。で、どれくらい完成しているのです?」

更識さんは、<打鉄式式>のステータスコンソールを開いた。

周囲に複数の投影型ディスプレイが浮かび上がり、いくつかのデータが開示される。

「本体のハードウェアはほぼ完成している。あとは装備と、OS」

「OS? オペレーティングシステムも自作しているのですか?」

これは驚いた。本来、OS規模のソフトウェアは、何十人規模で開発するものなのに。

それを一人で作製するなんて。更識さんって、実はとんでもないエンジニアなのかもしれない。

「すごいですね……」

脱帽する私に更識さんは首を横に振った。

「……全然すごくない。……リソースの半分は<ラファール・リヴァイヴ>のOSを流用した。拾ってきたオープンソースも活用してる。自分で書いたコードは3割ぐらいだし」

それだって並大抵のことじゃない。

私は内心で『私じゃ彼女の役に立てないな』と自嘲して、<打鉄式式>の話を続けた。

「で、武装の方は?」

「……こっちは全然。……48連装ミサイルは管制誘導システムができていない。……荷電粒子砲は、電荷コンバーターと粒子加速器、冷却装置はできているけど、試射すらしてない状態」

「では、できそうなところからやりましょうか。私は何からやればいいですか、更識さん?」

「……簪でいい。更識の名は重たいから、あまり呼ばれたくない」

どうやら更識と呼ばれることに抵抗があるらしい。姉が関係しているのだろうか。

ともあれ、私は要望通り、彼女を『簪』と呼ぶこととした。

第一アリーナ。授業を終えた一夏は、ラウラの指導の下、ISの訓練を行っていた。

今は模擬戦を終え、ラウラが一夏の問題点を洗い出しているところだ。

ただし、現在ラウラは専用機を持っていなかったのだから、鈴に模擬戦の相手を代行（普段はシャルロットの力を借りているのだが、今日は居残りしていたので）してもらったのだが、

「基礎は問題ないな。格闘のセンスも悪くない。だが、機動面がまだま——」「いい、一夏？ 攻守の切り替えはね、メリハリが肝心なの。わかる？ 大体あんたさ、回避行動に移るのが遅いから見ていて冷や冷やするのよね。そこんところをさ」

「——おい、凰鈴音。説明の途中だ。邪魔だ、どけ」

話中に横やりを入れられたラウラが目くじらを立てる。

しかし、鈴はラウラの睨みなど歯牙にも掛けず、けろんと言った。

「やーよ、今日こそあたしが一夏の特訓の面倒をみるんだから」

例の戦鬪で負けて以降、鈴は何かとラウラに対抗するようになっていた。それは日常的なことだからIS云々まで。ラウラもラウラで、嫁にちよっかいを出す鈴を快く思っておらず、何かあればこうして彼女と衝突していた。

大概はアリスかシャルロットが宥めて終わるのだが、あいにくふたりとも出払ってしていない。

「そもそもお前は事あるごとに、なぜ私の邪魔をするのだ！」

「それはごっちのセリフよー！」

なおも『あーだ』『こーだ』と言ひ合いを続けるラウラと鈴。優しいが甲斐性なしの一夏はただただ頭を悩ませるしかなかった。

そんな彼を、遠くから見つめていたのは箒だ。

その表情はなぜか淀み、憂いに曇っている。いつもの剣呑な迫力も

鳴りを潜めていた。

(一夏は、強くなったな……)

入学して二ヶ月と半月。セシリアとの決闘、無人機の襲撃、ラウラの暴挙、VTシステムの暴走。さまざまな戦いを経て、彼は技術的にも、精神的にも逞しく成長した。そこまで成長した一夏に、箒がしてやれることは何も無い。

それゆえ、周りから取り残されていく感覚を、箒は否定できないでいた。

物理的な距離はこんなにも近いのに、心の距離はとても遠くに感じてしまう。

(これでは何のためにIS学園に入学したのか)

元々、箒はスポーツ推薦で一般高校へ通うつもりだった。だが、メディアが一夏について報じるなり、彼女は導かれるようにIS学園へ進路を変えた。理由は単純にして明快。一夏と再会を果たすため。彼と再会を果たして、6年前に凍った時間を、再び動かすためだ。

しかし、今の自分は、彼と同じ時間を生きているのだろうか。

(大丈夫だ、こうやって、あいつの側にいれば、いずれきつと)

箒は心に「強がり」という麻酔を打って、自分を奮い立たせた。



「え、簪って日本の国家代表候補生だったのですか！」

今日の作業を終えた私たちは、その場の流れで一緒に食事を摂るところにした。

メニューはそろってかき揚げソバだ。

そのかき揚げの食べ方(私はサクサク派)について論争を交わしたあと、私が言った。

「……そ、そんなに驚かなくても……ちよつと……傷つく」

「あ、すみません」

謝りつつ、ソバを啜る。

にしても意外だった。代表候補生って凄いオーラを発している人が多いから。

簪のような内気な子が国家代表候補生だと言われても、しっくりこない。

「……わたしにすれば、アリスが、代表候補生でないことに、びっくり……」

「ほら、私は可愛くありませんから。候補生の選考は容姿も含まれているでしょ？」

本当はイングランドという国籍もIS適正值も偽装だから。——とは言えないので、無難なことを言って誤魔化す。が、何故か簪たちの響感を買った。

「うわー、ぎつちよんがいうと嫌味にしか聞こえないよー」

「……本音に同意。あなたが可愛くなかったら、この世に可愛い子なんて、存在しない」

う、半眼で睨まれた。でも、遠まわしに褒められているような……？

「ほんと、あなたがいうと私たちへの皮肉に聞こえるわね」

私が反応に困っていると、別の方向から声がした。

やってきたのは、IS学園の生徒会長——更識楯無。簪のお姉さんだ。

「うふふ、たのしそうね、私も混ぜてもらっていいかしら？」

会長がたぬきうどんを持ってやってくると、急に簪が立ち上がった。

そして、私たちに『……先、行くね』と言い残し、そそくさ去っていく。

「……………」

食堂を去っていく妹に、会長がどよんと暗い翳を落す。

不仲なのはそれとなく察していたが、これほどだったとは思いませんでしたね……。

「おじよーさま、どんま」

「ありがとう、本音」

のほほんさんに励まされながら、会長は簪が座っていた席に腰かけた。

そして、割り箸を割りながら、先ほどからニヤニヤしっぱなしの私に半眼を向ける。

「ところで、アリスちゃん。あなた、嬉しそうね……」

「うふ、会長の不幸は蜜の味ですから。天そばが3割増しでおいしいです」

「もう……。ちよつとくらい励ましてくれても罰は当たらないわよ？」

「あなたに優しくするぐらいなら、罰が当たる方を選びますよ」

「相変わらず反抗的ね。すこし躰が必要なのかしら？ 言っておくけど、更識の女は床上手なんだからね？ あなたなんか一夜で手籠めにできるんだから」

耳元でそう囁き、綺麗な指で私のももをなぞる。

ゾクゾクする寒気が背筋を駆け抜け、私は身体を強張らせた。

「わかった？ わかったら、お姉さんを本気にさせないようにね」

会長は扇子を綺麗な桜唇にあてがい、色っぽく私を諷める。

貞操の危機を感じた私は、素直に自重することにした。

「わかりましたよ。——で、露骨に避けられていますけど、何があったのですか？」

会長は態度を改め、七味をぱっぱと振りながら、目をすこし寂しげに伏せた。

「簪ちゃんはね、その、私に劣等感を感じているのよ」

「劣等感、ですか」

解らなくもなかった。更識楯無という人物は実に優秀だ。人望もある（私は嫌っているけど）。その上、学園の生徒会長でロシアの国家代表だ。そんな人物が姉なら、妹は劣等感の一つも感じるだろう。

でも、私はそれだけじゃないような気がした。今はまだうまく言葉にできないけど。

「みんながみんな、一夏君と織斑先生のようにはいかないってことよ」
そう苦笑する会長の表情は酷く憂いていた。

簪と自分の関係を、彼女は本当に思い悩んでいるのだろう。

今まで会長の不幸を笑ってきた私だけど、そればかりは笑うことができなかった。

「なんにせよ、ありがとうね。臨海学校の件、説得してくれて助かったわ」

「いえ、なりゆきです。私も彼女に義理がありましたから」

「そう。——ところで、あなたに姉妹か兄弟は？」

「どちらもいません。まあ、姉代わりをしてくれた人ならいましたが」

私は脳裏に二人の女性を思い描いた。

一人はロリーナだ。

ロリーナには私生活から組織の事柄まで、いろいろと世話になっている。私にとっては姉同然の存在で、彼女も私を妹のように慕ってくれている。

もう一人は、米軍時代の上官だったナターシャ・ファイルス。

彼女にもいろいろと世話になった。ISの操縦から口紅の塗り方まで。いろいろと。

(そして——)

ん？　そして？　今、私は一体誰を思い出そうとしたのでしょうか？

私が姉と慕う女性は二人だけだったの思うのだけど……。

(なら、きつと気のせいですね)

そういえば、ナターシャとは随分と会っていませんね。時間ができたら、少しぐらい顔を出しましょうか。

その時が思いの外早く訪れる事を、この時の私は知る由もなかった。

♡

◆

♣

♠

食事を終え、自室で寛いでいた簪の携帯電話に一通のメールが届いた。

ディスプレイの差出人には【織斑一夏】と表示されている。
「なんだ。一夏からメールか。珍しいな」

箒は買ったばかりの慣れない端末を不器用に操作し、受信フォルダを開いた。

【From:織斑一夏】

【Title:なし】

【本文】

今週の日曜日、空いてるか？

本文を読み、箒の鼓動がドキンと高鳴った。

日曜日、空いているか。これはもしかして逢引の誘い？ 一見そうにも見て取れるが、

「いや、一夏のことだ、他の娘も誘っているに違いない」

以前にも似たような事があり、がっかりしたことがある。

その事を思い出しながら、冷静に返信の文面を作成した。

『空いているが、他にも誰かくるのか？』と

送信。数分もしない内に、返事がきた。

【From:織斑一夏】

【Title:Re;なし】

【本文】

いや、誘っているのは箒だけだ。

「なん、だと」

箒は目をこすった。後々『いつからデートだと錯覚していた？』と言われたら赤面ものなので、まじまじとディスプレイを眺める。ついでにジャイロセンサーが壊れそうなほど振ってみたが、メールの内容が変わって見えることはなかった。

どうやら、信じがたいことに一夏は自分だけを誘っている、らしい。

これはもしかして、もしかするのだろうか？

箒は期待に震える指で、返信の文面を打った。——送信。

【From:織斑一夏】

【Title:Re;Re;】

【本文】

〜にぜだ？ 沸けをきこう。

なぜだ？ 訳をきこう、でいいのか？

誤字だらけでよく読めないんだが

「ぶっ！」

どうやら興奮しすぎて、訳のわからない誤字メールを送ってしまったらしい。

これは酷いと思った箒は一呼吸してから、改めてメールを打ち直した。

「そうだ。私だけを誘った訳を聞きたい、と」

今度はしっかりと読み直し、送信。すぐさま返信が返ってきた。

【From:織斑一夏】

【Title:Re;Re;Re;】

【本文】

箒に大事な話があるんだ

ポロツ。本文を読んだ箒の手から携帯が転げ落ちた。

「こ、これは……」

自分だけを誘い、大事な話があるときたらもう、これはそういう事なのだろう。

「ふふふふ♪」

箒はベッドの上でぴよんぴよんと子供のように飛び跳ねた。

自分は一夏に必要とされているのだ。これを喜ばずにいられようか。

その後、待ち合わせ場所と時刻を決めたあと、箒はクローゼットを開けて服を並べた。

それを険しい顔で見下ろす。

「こ、困ったぞ、デートの時は何を着ていけばいいの？」

何せ異性とのデートなど、生まれて初めなのである。こういう時、どういう服を着ていけばいいのか、まったくわからなかった。冠婚葬祭なら詳しいのだが……

「そういえば、以前、立ち読みした雑誌には『初デートは大胆な服装で』とか書いてあったな」

しかし、別の雑誌には『初デートはストイックに。露出が多すぎると彼に引かれちゃう!』と書いてあった気もする。これはどちらが正しいのだ……?」

うう、これは困った。こういう時、相談できる相手がいると頼もしいのだが、

「私にはそういう事を相談できる友人がいない」

そうなのだ。ラウラほどではないが、自分も決して友人が多い方はなかった。

部活にも仲間はあるが、正直頼みにくい。箒は幽霊部員なのだ。男の相談など持ちかた日には、滅多打ちにされる。顧問のマルガリータは『男に感けてないで、練習にこい』と言うに違いない。

小・中学生時代の友人は例の事情で交友がなかったため、どちらもいない。

「そうだ、セシリアや鈴に相談を……」

代表候補生である二人は度々ファクションモデルとして活動している。

その二人なら何かいいアドバイスをくれるかもしれない——と考え、すぐ自分の愚行に気づく。恋敵にデートの約束がバレれたら、きつと妨害されるに決まっている。

「ぐぬぬ、やはり自分の力で、こーでいねいと、しないとダメか」

しかし、自分にファクションセンスがないことを思い出し、思考が前に戻る。

そんなループを繰り返すこと5回、ドアの扉が開いた。入ってきたのは同室のアリスだ。

「アリスッ! いいところに帰ってきた!」

彼女の帰宅を知るなり、箒はアリスに飛びついた。

第37話 サマーシヨツピング①

約束のデートの日。一夏と箒は校門で待ち合わせたあと、モノレールに乗った。

そのボックス席に座るワンピースの箒を見て、一夏が言う。

「——その服、かわいいな」

箒が着ている白のワンピースは、鎖骨部分と背中部分が大きく開いた大胆なデザインだ。しかし、胸元はしっかりガードされている。スカート部分も7分丈で、足は見えるが、太ももは見えない。

この「見せるけど、見せすぎない」コンセプトが、見事に清楚と大胆の両立させていた。

「そ、そうか?」

「ああ、すげー似合っているよ、一瞬見惚れちゃったぞ?」

「(よしッ!)」

不意打ちの褒め言葉に赤くなりながらも、箒は内心でガッツポーズを決める。そして、『篠ノ之さんはスタイルがいいから、露出しなくても魅力的です』とアドバイスしてくれたアリスに心から感謝した。

そうこうしていると、モノレールが駅に入った。そこで改めて箒が行き先を聞いた。

「で、これからどこに向かうのだ?」

今回のデートプランは全て一夏任せにしてある。行き先は聞かされていなかった。

「実は臨海学校の水着を買おうと思ってさ。箒はもう準備したか?」

「いや、すっかり忘れていた……。そうだな、せっかくなので、私も新調しよう」

「おう。行き先は駅前のレゾナンスでいいよな」

レゾナンスは、学園から近い大型複合シヨツピングモールのことだ。量販店から一流ブランドまで、あらゆる品が網羅しており、曰く『ここに無いなら市内のどこにもない』と言わしめ品揃えらしい。買い物をするにはもってこいの場所だ。

「ああ、任せる」と箒が答え、ふたりは駅のホームを抜けた。レゾナ

ンスは駅舎と地下街が合併した施設なので、改札を抜けてすぐの場所にある。雑談を交わす間もなく、二人は目的地に到着した。

「うわ、混んでんな」

目的地のエントランスは大勢の人で賑わっていた。週末ということもあり、親子連れや恋人連れで溢れかえっている。その中の一組——手を繋ぐカップルを横目で見ていた箒が、急に一夏の袖を引いた。

「ん？ どうした箒？」

「いや、そのだな、はぐれたら面倒だし、私たちも手を繋がないか？」
確かにこれだけの人混みでは逸れかねない。予防策として手をつなぐのは良い案だろう。

もつとも、箒の思惑が別の所にあったのは、言うまでもないだろうが。

「ああ、そうだな。そうするか」

何気ない動作で一夏が箒の手を取る。手と手に触れた瞬間、彼から伝わる微熱に、思わず「あ♡」と甘い吐息が漏れそうになるが、箒は何とかこらえた。

「よし、しっかりと握つとけよ。はぐれたら面倒だからな」

「うむ、わかった。離ればなれは、もうイヤだからな♡」

彼と時間を共有できている喜びに、自然と語尾が弾む。

しかし、こんなに物事が順調に進むと、逆に後から何か起こりそうで怖くなる。

案の定、箒たちからすこし離れた場所に、彼女たちを盗み見る二つの視線があった。

二人から少し離れた場所。視線の正体は——案の定、鈴とセシリアであった。

二人がデートに気付いたのは、ついさっきのことだ。

たまたまセシリアが学園の校門前を通りかかったところ、仲良く歩く二人を目撃したのである。セシリアは『こうしてはいられない』と鈴を呼び出し、箒の尾行を開始。今に至る。

「……ねえセシリアア……アレ、手え握ってない？　ぎゅって」
「……ええ、握ってますわねえ、間違いなく、ぎゅって」

不器用な箒に出し抜かれたのがショックだったのだろう。二人は虚ろな瞳で、結ばれた手を見つめていた。その様子ときたら、目撃した子供が泣き出したほどだ。通り過ぎていく人たちも、漂う惨劇の匂いを警戒して、彼女たちを避けていく。

そんな異様な空間を作り出す二人に、勇敢にも声を掛ける人物が現れた。

「楽しそうですね」

二人は瞳孔の開き切った目で「どこがッ！」と振り返る。

まるで人を殺せそうな眼光であったが、その人物——アリスは怯まなかった。

「あらあら、どうしましたの、アリス。お買い物のかしら？」

アリスと判るなり、セシリアの淀んだ瞳が浄水のように澄み切る。

鈴が『アリスは下水処理場か』と言ったが、セシリアは気にしなかった。

「ええ、ラウラたちと臨海学校の買い物に」

アリスは視線で制服姿のラウラと、私服のシャルロットを指す。二人はアリスのうしろで軽く会釈した。どうでもいいが、シャルロットがすこし不満そうに見えるのはなぜだろうか。

「アリス、丁度いいところにきたわね。ちよつと手を貸しなさい」

そう言って、アリスを自分たち側に引き込もうとする鈴。

すぐさまラウラが反対した。

「ダメだ。嫁はこれから私と買い物だ。貴様の作戦には参加できない」

「別にあんたの許可なんか求めていないわよ」

「アリスは私の嫁だ。その旦那がダメだと言っているのだからダメだ」

視線をぶつけ合わせ、バリバリと睨み合う鈴とラウラ。

アリスは『また始まった』と思った。

「まあ、二人ともケンカしないで。ほら、一夏を見失いますよ？」

「あつ！」

視線を戻せば、一夏と箒が遠近法で米粒のようになっていた。週末のレゾナンスは人でごった返している。見失えば、再び見つけ出すのは困難だろう。

「ふつ、標的から目を離すとは偵察兵スカウト失格だな」

「うっさいわねッ！——追うわよ、セシリア」

「はいな、鈴さん。——では、アリス、また後で」

「はい、またあとで」

凜に引つ張られながら手を振るセシリアに、手を振りかえす。

二人を見送ったあと、アリスは案内掲示板を見た。

「さて、私たちも行きましょうか、まずは水着売り場から行きます？」

「そうだな。今作戦の第一目的だからな」

「はあく水着かあ……♡」

「デュノアさん、随分と楽しそうですね」

「う、海の事を考えたらついでね！（いえない、アリスの水着姿を想像したなんて！）」

シャルロットはこの妄想を墓まで持っていこうと、ひそかに決意した。



「おお、すごいな」

やってきた水着売り場には、カラフルな水着が所狭しと並べられていた。女性水着は言うに及ばず、男性水着からプール用品まで、多彩な商品がラインナップされている。市内一の品ぞろえというレゾナンスの謳い文句はウソじゃないようだ。

「で、箒はどうする？ 水着、買うのか？」

「そうだな。それで、そ、そのよければ、私の水着を、選んでくれないか？」

と、上目使いでお願いしてくる箒に、俺は『え？』と戸惑いの声を

上げた。

いや、自分の水着なのだから、自分の着たい水着を選べばいいと思うのだが。

「だ、だめか？」

「いや、ダメじゃないが……」

箒の上目使いには、有無を言わせない威力があった。こう、男心をくすぐるような。

結局、箒の頼みを断れなかった俺は、箒と女性水着売り場に入る。

「では、選んできてくれ。私は更衣室の前で待っている」

「わかった。でも、センスは期待しないでくれ」

そう予防線を張って、俺は水着のジャンルに突入した。

さて、どうしたものか。女の水着なんて選んだことないから、選択基準がわからんな。『女性に着てほしい水着』というのはあるけど、それを箒が気に入るとは限らないし。むしろ反対されそうだ。こんな着られるかって。

「うくん、これとかどうだろう」

俺はタンクトップとスパッツを組み合わせたような水着を、箒に持って行った。

「なんだ、これは。競泳水着じゃないか。なぜこれを選んだ……？」

「いや。箒ってストイックだし、露出が少ない方がいいかな、と」

「うー……まあ、とりあえず着てみる」

どこか納得いかない様子で更衣室に入る。しばらくして、着替えた箒が出てきた。

「どうだ？」

「地味だな」

スポーティーなフォームが箒の姿勢とマッチしていて、なかなかカッコよくなる。

でも、ファッション性より機能性を重視しているためか、地味なのは否定できない。

「地味……」

と、箒。あれ、なんか複雑な顔している。

ストイックな箒には、こういう水着の方が目を引かないから良いと思っただけだ。

「一夏、もつと、ろ、露出が多くても大丈夫だぞ?」

「本当か? おまえ、顔が真っ赤だぞ」

「わ、私が大丈夫だと言っているのだから、大丈夫だ!」

「わかった、わかったって」

箒が怒鳴るもんだから、俺は再び別の水着を探しに向かった。

こんなことなら『新調するか』なんて聞かなければよかった。でも、吐いた唾は呑めない。

「露出の多めの水着か、やっぱりビキニかな……お?」

俺の目にちよつと過激なタイプのマイクロビキニが止まる。

箒にはハードルが高そうだけど、冗談半分で持つて行つてみるか。

「箒、これとかどうだ。ちゃんと露出の多いやつだぞ」

持つてきた黒のマイクロビキニに、箒は真っ赤になって飛びあがった。

「な、なんだ、それは! ただの紐ではないか!」

「しかも、うしろはこんなんだ」

「てえーだと!」

過激な水着の仕様に、箒が顔から湯気を吹き出す。

さすがに刺激が強すぎたか。かくいう、持つてきた俺も赤面している。

「どうだ?」

冗談半分で訊くと、箒はもぞもぞと言った。

「い、いちかは、こういうのが好みなのか?」

「え?」

そりゃ俺も男だ。こういう水着を見て、興奮しないわけじゃないけど。

「むく、その反応は、好きなのだな、じゃあ、がんばつちえみる」

え? これ着るのか? てつきり『こんなもの着られるか!』って突っぱねると思っただけ。

予想外だ。持つてきただけで、着せるつもりなんてなかったんだけ

ど……。

「無理なくていいぞ、箒。半泣きじゃないか」

しかも嘔んでるし。それだけで尋常じゃないぐらい恥ずかしがっているのが判る。

きつとこんな着た日にや、恥かしさのあまり卒倒するに違いない。

「だだだだだ、大丈夫だ！ 女は度胸だからにや！」

いや、女は愛嬌です。度胸は男ですよ、箒さん！

あくもう、なんで俺の幼馴染は、そんなに男気があるんだよ！

「ま、まっ待っていりよっ、着替えてくりゆ！」

散々カミ倒したあと、箒は水着を引っ手繰り、更衣室のカーテンを閉めた。

俺はドキドキした。だって美少女で巨乳の幼馴染がカーテンの向こうでエロ水着に生着替えしているんだぜ？ ドキドキしない奴は、きつとホモに違いない。あいにく俺はノンケだ。

「ぐくっ」

俺が生唾を呑むと、ついにカーテンが開く。

開けた先には、思春期の男子を悩殺する官能的な画があった。少ない生地から覗く豊満な胸が劣情を駆り立て、食い込む紐が柔らかそうな肉感をさらに強調している。これは下手な全裸よりも刺激的な格好だった。

「ど、どうだ？」

恥かしいのか、箒は頬を赤めながら視線を逸らした。身体を抱え悶える箒の腕から豊満な胸がこぼれそうになる。正直、健全な男子高校生には、刺激が強すぎた。

「なんだ、顔をそらして……。も、もしかして見るに堪えないのか？」

「いや、逆だ。眩し過ぎて直視できないんだ」

明後日の方向を向く俺に、箒がどこか嬉しそうに笑った。

「そ、そうか。なら、その……後ろも見るか？」

「う、うしろ！」

うしろはTバックだったはず。肉感的なお尻にTバック。これは

……

「ぜひ見せてくだ——ぎゃん！」

本能の赴くままに頷く俺の頭部を、誰かがぶん殴る。

目からチカチカとお星さまが飛ぶが、俺は怯まず怒った。織斑一夏は激怒した。

「誰だよ、いまいいところなんだぞ！——邪魔するんじゃないや……ねえ……」

煩惱を燃料に沸々燃えていた怒りは、みるみる鎮火していく。

そりやそうだ。だって、殴った人物が千冬姉だったんだもん。

おまけに、うしろには山田真耶先生とエイダ先生までいた。山田先生は『織斑君……』と顔を真っ赤にし、エイダ先生は『やるわね』と笑っていたが、千冬姉だけは怒りで米神を引き攣らせていた。

「おまえはどうして、そう女性にふしだらなんだ。篠ノ之、おまえもおまえだ。なんでもかんでも、こいつのいうこと聞くな」

『す、すいません』

千冬姉の言う通りだ。さすがに今回は調子に乗り過ぎたな。ちやんと反省しよう。

「まあ、お説教はそのぐらいでいいんじゃない？ 場所も場所だし」と、優しい言葉をかけてくれたのはエイダ先生だ。

エイダ先生って千冬姉とは対照的なんだよな。異性交遊にも寛容だし。それあって千冬姉や山田先生には相談できないような悩み——恋や性の相談を率先して受けているらしい。きっと経験豊富なのだろう。千冬姉と比べて。

「なにか言ったか？」ゴゴゴ

「な、なにも？ ——で、千冬姉も水着を買いに？」

「まあな。コイツが水着を買えとうるさくてな」

そう言つて、エイダ先生を睨みつける千冬姉。

どうでもいいけど、千冬姉、そうやってすぐ人を睨む癖、やめた方がいいぞ。

「だって、千冬ったら、学生時代に買ったものを引っ張り出して使うつていうのよ？ ——そうだわ。せっかくだから、大好きな弟くんに水

着を選んでもらったら?」

「大好きな」は余計だ。――が、まあ、それもいいか」

うえ、また水着を探さないといけないのか?」

「なんだ? 幼馴染の水着は選んでも、姉のは選べないとも言うのか?」

「いや、そうじゃないけど……なんで急に不機嫌な顔するんだよ」

「バカ者。誰が不機嫌だ。ほら、さっさと行ってこい。私はここで待っている。ただし、あまりに過激なモノはよせ。私とて恥じらいがある。あくまで模範的な水着を持って来い」

模範的な水着ってなんだよ。あれか、学校指定のスクール水着の事か。

千冬姉、悪いことは言わない。それだけはやめておけ。千冬姉の歳であればアウトだ。



一方、一夏が千冬の水着選びに専念している頃。

いくつかの水着の壁を挟んで、奇遇にもアリスたちも水着売り場にきていた。

「うくん、これだけ数があると、選ぶのも一苦労ですね」

さすが市内一の品揃えを豪語するだけあって、かなりの品数だ。その中からお気に入りの一着を探すのは骨が折れる。かといって年に一度の買い物なので、妥協もしたくもなかった。

そこへシャルロットがやってくる。手には紙袋。彼女はもう水着を買い終えたようだ。

「アリス、いいの見つかった?」

「いえ。欲しい柄はあるのですが、欲しい色じゃなくて」

「じゃあ、一緒に探してあげるよ。欲しい色ってやっぱり赤色?」

「ええ、赤は私のパーソナルカラーですから」

アリスは母親譲りの赤い髪をとても気に入っている。もしジン

ジャーだの、キャロットヘッドだのバカにしようものなら、彼女の反感を買うので要注意だ。

「——あ、これなんてどう?」

シャルロットが手にした水着は、赤を基調にしたビキニだった。

露出も多すぎず、トランプ模様のデザインが可愛らしい。ただ——お尻にハートマークの穴が開いていた。丸見えではないが、尾骶骨はかなり露出している。見かけによらず過激な水着だ。

「こ、これはちよつと……」

銃声と硝煙をファツションにするアリスだが、人並みの恥じらいはある。

あまり過激な衣装は敬遠するところだったが、

「そ、そう? アリスなら絶対似合うと思うよ♡」

「そ、そう、ですか……?」

やたら色っぽい熱視線で推してくるシャルロットに、アリスは半歩退いた。

そんな二人の間から、ニョキと金色が飛び出す。セシリア・オルコットだ。

セシリアはシャルロットが持つ過激な水着を睨みつけ、サツとアリスを遠ざけた。さながら害悪ある物から子供を遠ざける母親のように。

「シャルロットさん、わたくしのアリスにあまり破廉恥な水着を薦めないでくださる? アリスに悪い虫がでもついたらどうしてくださいますの?」

破廉恥。アリスを想って選んだのに、この言い草。

あまりな言葉に、さすがのシャルロットも頬を膨らませた。

「そんなことないよ! アリスはヒップが綺麗だから、こういうのが絶対似合うの!」

西洋人の血を引くアリスは骨盤が広いため、腰回りのメリハリが顕著だ。さらに鍛えているだけあって無駄なたるみもない。こういったヒップラインを強調するデザインは、彼女の美を映えさせるのかもしれないが——。

「セシリアはアリスのことを何もわかってないんだね」

「なんですって？」

シャルロットの一言が、セシリアの対抗心に火をつけた。

「ならば、どちらがアリスをより美しくコーディネートできるか勝負ですわ！」

「望むところだよ！ 百年戦争の決着、ここでつけてあげる！」

「あの、お二人方。水着は自分で選びますから……」

「アリスは更衣室の前で待ってて！」「アリスは更衣室の前で待っていてくださいな！」

「はい……」

強い言葉でアリスを制し、二人は水着のジャングルへと飛び出していった。

かくして、イギリス代表候補生とフランスの代表候補生の因縁は、ここから始まったのだった。



時間は少し遡って、アリスがシャルロットとセシリアの着せ替え人形と化している頃。

ラウラは店内の外れで一人、水着を物色していた。

「海の必須装備だから、準備するように言われたが……」

生まれてこのかた、ファッションというものに無関心だったラウラ。水着にも興味が湧かなかつたけれど、とりあえず、ワンピース水着を手にとってみる。軽く引っ張ってみると、思いの外よく伸びた。「ウレタン繊維にナイロンを混ぜた混合繊維と言ったところか。しかし、これでは防弾防刃に不安が残るな。そもそもこの水着とやらは、何の戦術的優位性も感じられない。アリスはなぜ必須装備だと言ったのだろうか。これならISスーツを着用した方が良いと思うのだが……」

全て機能優先で考えるラウラは、ISスーツより性能が劣る水着に

何の価値を見出せなかった。

そんなラウラの耳に、ある二人組の女性の会話が聞こえてくる。

「ほんと、水着を選ぶ時って迷うよねえ〜?」

「うんうん、カレシの前とかでダサイ水着とか選んだら、幻滅されるしねえ〜」

「ほんと、ほんと」

それを聞いたとき、ラウラは『バカバカしい』と思った。

しかし、部隊の者が『ファッションには他者を楽しませる意味もある』と、言っていたことを思い出した。もしや、アリスが『水着を買え』と催促してきたのは、『自分を楽しませろ』という理由があったからなのだろうか。——ラウラはそんな風に考えた。

だとしたら、彼女たちの言う通り、水着の選択次第で失望される可能性はあるではないか!

こうしてはいられない。ラウラは目を血走らせながら、水着を凝視した。

「うむむむ!?!」

しかし、ラウラからすれば、どれが戦術的——アリスの好み——に優れた水着なのか判らない。

自分一人で決めるには、水着の種類が多すぎたし、あまりに情報が少なすぎた。

最早一人では、どうにもならない。そう判断したラウラは携帯電話を取り出した。

ドイツ・フランデンブルク。

その地にラウラが隊長を務める特殊部隊『黒うさぎ部隊』の訓練キャンプ地があった。

黒ウサギ部隊は、特殊部隊の技能にISの操縦技術を加えた試験的なハイテク部隊だ。この部隊では部隊の全員が空挺技術や隠密侵入、サバイバルといった特殊技能を身につけつつ、ISの操縦も熟す。創立からまだ数年と若い部隊であるが、高い錬度を誇っている。

「遅い、あと20秒短縮しろ！」

ストップウォッチを片手に怒号を飛ばしたのはクラリツサ・ハルフォーブ。

ラウラ不在の間、部下を預かっている『黒ウサギ隊』の副隊長である。階級は大尉だ。

「よし、休め。30分後に再開する」

訓練プログラムを終え、部下に休憩を指示したところで、自前の携帯電話が鳴った。

着信音はなぜか日本語の着ボイス。それも日本声優のものだった。

「はい、私です。如何が為されました、ラウラ隊長」

『重大な問題が発生した。是非そちらの指示を仰ぎたい』

冷静沈着なラウラの声が緊張しているのに気づき、クラリツサは表情を硬くした。

「了解しました。で、どのような問題が？」

『実は来週、臨海学校なるものに参加するのだ。それで水着を購入する事になったのだが、数があり過ぎて選択に迷っている。そこでお前に助言を貰いたい』

「水着ですか。それなら隊長の好みでお選びになられては？」

『私も最初はそう思ったのだが、どうやらこの国では水着の選択を間違うと、意中の相手に嫌われるそうなのだ』

「なんと！」

ラウラからもたらされた情報に、クラリツサが驚愕する。

部隊の中でもジャパニーズカルチャーに詳しい方だったが、それは初耳だった。

『私は嫁に嫌われたくない。なんとか最良の選択をしたいのだが、いかんせん、私はファッションというもの疎い。そこで、ぜひお前たちの協力してもらいたい』

「了解しました。ただちに部下を招集して、意見を聞いてみます」

『すまない。お前には苦勞をかける』

「いえ、隊長の苦勞に比べれば——」

「おい、クラリツサ！」

『些細なものです』と言おうとした時、乱暴な横やりが入った。

赤みのかかったピンクの髪をヘッドドレスで装飾し、小柄な体をゴスロリ服で包んだ少女、ドイツの国家代表アイリーン・フォン・エーデルシユタインである。

ちよつとアレでもアイリーンはドイツの国家代表なので、時折こうやって〈黒ウサギ隊〉の駐屯地を訪問していた。

目的はもっぱらクラリツサのサブカルチャーグッツだったりするが、真面目に訓練に参加する事もあるし、場合によっては狙撃手として作戦に参加する事もある。それあって、ラウラが代表候補生をやめてからも、近からず、遠からずの関係であった。

「汝の貸してくれた少女漫画とやらはつまらん。魔術師も吸血鬼も出てこないではないか」

「当然です。お貸しした漫画は大富豪の少年と貧しい少女が、貧富の差を乗り越えて添い遂げるラブロマンスです。吸血鬼も魔法使いもでてきません。陰謀もありません」

「む、そんなモノのどこが面白いのだ？」

「何をおっしゃります、代表！」

急にいきなり熱くなるクラリツサに、アイリーンは肩をビクつと震わす。

しかし、そんなアイリーンなど無視して、クラリツサは作品について熱く語った。

「貧富の壁を乗り越え、愛を成就させようという二人の姿に胸が熱くなりませんでしたか？ 特に14巻でトシキが葛藤の末『俺には愛している女がいるんだ』と婚約者を突き飛ばし、ヒロインのトモミのそこへ駆け出すシーンなんて最高じゃないですか！ でも、それによってトシキの婚約者であるアイナの嫉妬心に火がついてですね。トモミに対する卑劣な嫌がらせが始まるのですが、それも二人の愛の力で――」

「わかった。わかったから、やめろ」

熱弁するクラリツサに、アイリーンは鬱陶しそうな顔を向ける。

クラリツサは『自分だって妙な設定をべらべら語るくせに』みたい

な顔をする。

それを見た部下たちは『どつちもどつちだ』という顔をした。

『む、その声はアイリーンか。また来ているのか?』

すると、受話器の向こう側のラウラが言った。

それを聞いたアイリーンが、ひよいとクラリツサの手から携帯電話を奪う。

「その声は我が眷属に名を連ねしラウラ・ボーデヴィツヒか。久しいな、幾星霜ぶりか」

『いや、先月あつたではないか。お前、幾星霜といたいだけだろ』

凶星を突かれ、アイリーンのヘッドドレスがぴよこんと跳ねる。

「ち、ちがうもん」

『凶星か。まあいい。それよりクラリツサと代われ。私は相談があるのだ』

「ふむ、その必要はない。吸血鬼の真祖にしてへヴアルプルギスの夜〈の字名を冠するこのアイリーン・フォン・エーデルシュタインがへアカシツクレコード〉に接続すれば、いかなる問題も——つてこら、クラリツサ、勝手に取るな!」

「はいはい、アイリーン代表のありがたい御言葉はまた別の時に承りますから。——おい、フィーネ軍曹。代表の相手をしてさしあげろ。例のやり方だな」

なおもアイリーンが縋ってくるので、クラリツサは空いた手で部下に指示を出した。

クラリツサの指示でやってきたブルネットの軍曹は『はっ!』と敬礼し、そしてアイリーンに向かってシユバつとポーズを決める。

「ククク、見つけたぞ、真祖の吸血鬼にして、へヴアルプルギスの夜〈を冠する魔女、アイリーン・フォン・エーデルシュタイン。私は神の子にしてヴアチカンより遣った祓魔師フィーネ・ファルケルだ。今日こそ貴様を滅してやる。受けよ、聖典——魔を滅する聖銃!」

フィーネ軍曹は訓練に使っていたペイント弾装填のサブマシンガン^{H&K MP5}を乱射した。

「ふん、教会の使いか。昼なら我を倒せると思ったか。浅墓だな。――その行い、愚行と知れ」

フィーネ軍曹の放ったポイント弾をノリノリで躲しつつ、アイリオンは愛銃のG22狙撃ライフルに7.62mmライフル弾（空砲）を装填する。そして、ネコのようなしなやかさで射線を確認し、発砲した。空砲なので弾は出ていないのだが、フィーネ軍曹は苦しむ。

「く、さすが真祖。しかし、こんな事もあるうかと、聖なる十字架ハイリヒックロイツを装備していたのだ」

「少しはやるようだな。だが、我が血を凝固した魔弾ツェアシュテイルレン・バトローネ《世界を穿つ戦渦の星弾》の前では無意味だ」

「何！ そんな切り札を持っていたなんて！ ならば、こっちは――」
なおも意味不明な呪文やら、技名を叫びながら打ち合いをする二人。

アイリオンが謎のゴツコ遊びに夢中なのを確認し、クラリツサは受話器を耳にあてた。

「御持たせしました。それで用件は水着の選別でしたね」

『そうだ。できれば、嫁のドキドキさせられるようなものがいい』

「任せください。こう見えて狙った獲物は、男女問わず必ず落してきましたから。必ずやアリス殿のハートの射止める見事な水着を選んでみせましょう」

『おお、頼もしいな』

この時のラウラはまだ知らなかった。

彼女が落した男女というのが、次元の一つ足りない、いわゆる二次元の住人だという事を。

そう、彼女は乙女ゲーとギャルゲーを雑食する、わりとコアなオタクだったのである。

第38話 サマーショットピング②

水着を購入したあと、私たちはアミューズメントパーク、いわゆるゲーセンにやってきた。

折角、外に出かけたのだし、ラウラに今時の「遊び」を知ってもらおうと思ったのだ。

「ずいぶんと賑やかな場所だな」

煌びやかな電飾に彩られたフロアでは、あちらこちらから賑やかな効果音が鳴り響いている。

ラウラは興味津々という様子で辺りを見回していた。

「ラウラはゲームセンター、初めてですか？」

「うむ、縁がなかったからな。シャルロットはどうだ？」

「うん、僕もあんまりテレビゲームとかやらなかったから。アリスは？」

「私はわりとよく遊びましたよ。特にポータブル系を」

仕事の都合上、長時間に亘って待機させられることも多い。その時間つぶしに携帯ゲームは最適なので、私は常にゲーム機を持ち歩いている。

私たちはそんな雑談を交わしながら、さまざまゲームを物色して回った。

シューティングゲームにコインゲーム。あ、あの太鼓のゲーム面白そうですね。

「むー」

多彩なゲームマシンに目移りしていると、ラウラがあるボックスケースに興味を示した。

ゲームセンターでは、メジャーなゲームマシン、UFOキャッチャーだ。

「ラウラ、コレやってみたいのですか？」

「いや、そういう訳ではないのだが、中にある人形が気になってな」

ラウラがケース内にある景品をちよんちよんと指差す。

ケースの中には、黒いウサギと白いウサギの人形が置かれていた。

「あの、黒いウサギの人形、ほしいな」

「どうやら、あの黒いウサギ人形が気に入ったらしい。」

ラウラが隊長を務める〈黒ウサギ隊〉も、眼帯をしたウサギを部隊章にしていますしね。

「挑戦してみます?」

「うむ」

ラウラは揚々と、硬貨を投入口に入れた。

「いいですか。左のボタンで横移動、右ボタンで縦移動です」

「把握した。——これより救出作戦を開始する」

操作方法を確認したラウラは慎重にボタンを押した。まず横移動。次に縦移動。

絶妙なボタン操作で、ラウラは円盤状の機械を黒いウサギ人形の上空に運んでいく。

「ドローンの操縦は得意だ。見ろ、スマート爆弾さながらの正確さだ」
「そう豪語するだけあって、運ばれた円盤のアームはきっちりウサギの首根つこを掴んだ。」

しかし、ヒヨロヒヨロなアームは、掴んだウサギの人形を簡単に取りこぼしてしまった。

「おい!・なんだ、この貧弱なアームは!」

UFOキャッチャーにありがちな仕様に、ラウラがだんだんと床を踏んで怒る。

最近のUFOキャッチャーは景品を簡単に取られないようアームを弱く設定してあるんですよね。

「くつ、こんなへなちよこアームでは一生かかっても無理だ」

「どうします?・ あきらめます?」

「愚問だな。我々〈黒ウサギ隊〉は仲間を見捨てない」

「どうやらショーケースの黒ウサギ人形は、既に仲間の一員らしい。では、その誠意に敬意を表して、私が力を貸してあげましょう」

二度目の失敗で憤慨するラウラの隣に並び、私はさっそうと硬貨を投下した。

「それは心強い。で、どうするのだ?」

「私に策があります。縦を操作するので、ラウラは横を操作してください」

「夫婦の共同作業というわけだな。了解した」

まずラウラが「1」のボタンを操作して円盤型のアームを横にスライドさせる。続いて私が「2」のボタンを操作して、アームを縦に移動させた。ただし、停止位置は人形から横にずらす。

「おい、それではうまく掴めないではないか」

「まあ、見ていてください」

ラウラの指摘通り、クレーンは人形を掴み損ねた。けれど、アームの先端が人形のタグに引っかかる。それによって、人形が落ちることなく降下口まで運ばれていく。

「はい、どうぞ」

私は取り出し口から人形を取り出し、ラウラに手渡した。

「驚いた。こんな手があったとは。さすが、私の嫁だな」

手に入れた人形を、ラウラはぎゅっと抱きしめた。

普段は見せない、少女らしい仕草に私とデュノアさんの心がほつくりする。

「お、アリスたちも買い物に来てたのか」

そこに同じく買い物にやってきていた一夏たちがやってきた。

後ろにはセシリアと鈴もいる。尾行はバレたらしい。まあ、あんな粗末な尾行ではね。

「ええ、臨海学校の準備で」

「俺たちと同じか。で、どうしたんだ、そのぬいぐるみは？」

「ぬいぐるみではない。私と嫁の子どもだ」

よしよしと黒ウサギの人形をあやすラウラに、一夏がプツと吹いた。

なるほど、夫婦の共同作業でしたからね。そう言えなくもありませんか。

「ええ、私とラウラの愛の結晶です。えっと、名前は——」

「ライラだ」

「そうか、ライラか。いい名前だな。じゃあ、今度出産祝いに何か贈ろ

う」

「裁縫セットを頼む。手芸用の綿やフェルトとかでもいいぞ」

確かに、解れたりしたら必要になりますもんね。私も裁縫を覚えた方がよさそうです。

さて、意図せず全員そろったので、私は密かにやってみたかったアレをみんなに提案した。

「あの、よかったら、みなさんで、アレ、撮りませんか？」

そう言っ指差したのは、プリント倶楽部——通称プリクラと呼ばれる写真撮影機だ。

実は前からやってみたかったですよね、コレ。

「あ、いいわね」

真っ先に賛成したのは鈴だった。鈴ってプリクラとか好きそうですもんね。

それに、一夏が『いいな』と賛成に加わると、意見は一気にまとまった。

「機種はアレでいいか？」

「撮ったあとにラクガキできるやつね。いいんじゃない？」

「へえ、そんな機能まであるんだ」

「うん、すごいヤツだと、可愛く補正して見せてくれるヤツとかあるわよ。そうだ、後で中学生時代に一夏と撮ったプリクラ集を見せてあげるわ」

「ああ、見せてくれ。そして、油性ペンでお前の顔を塗りつぶしてやる」

「ば、バカやめなさいよ！」

というわけで、私たちはそろそろとプリクラのカーテンを潜った。

立ち位置は、前列にラウラ、私、シャルロット。後列に篠ノ之さん、

一夏、鈴、セシリアだ。

「背景はこれでいいですね」

適当な背景を選択し、撮影準備に入る。撮影画面の隅でカウントが始まった。

(鈴、俺は右からアリスの頬を押さえる、お前は左を頼む)

(クフフ。OK。任して)

背後で一夏と鈴が何か喋っていたが、私はカウントダウンを始めた。

「では、いきますよ、3、2、1——くひゅー！」

カウントがゼロになった瞬間、背後から両頬を押さえられ、変な声を出す。

同時にシャッターが下りた。え、もしかして今の顔を撮影された？

予想通り、撮影画面にはムチューと唇を突き出すマヌケな私が映し出されていた。

「いやー、私だけ変顔プリクラーツ！」

画面の中で、みんなイイ笑顔しているのに、私だけバカみたいな顔を晒していた。

何ですか、これ！ 卒業写真の欠席の子より浮いているじゃないですか！

「何するんですかー！」

私は背後でハイタッチを交わす一夏と鈴を怒鳴りつけた。

しかし、二人は『俺たちに背を向けるお前がいけない』と悪い顔をする。

「ぐぬぬ……いや、確か一回だけ撮り直しができ——」

「篠ノ之流剣術——牙突零式！」ポチ

「ああ！ 篠ノ之さん、印刷ボタンを押しちやダメですうー！」

「すまん。うまく撮れていたもので、つい……」

うー、篠ノ之さんが印刷ボタンを押したから、撮り直しできなくなっちゃいました……

仕方ありません。こうなったら意地でも、この変顔プリクラを渡さないままでです。——ダツ！

「あ、アリスが変顔プリクラ持って逃げたぞ！」

「追うのよー！ 追えー！ 追えー！」

結局、散々追い掛け回されたあと、私は捕まり、変顔プリクラを取り上げられた。さすがにセシリアや篠ノ之さん、デュノアさんやラウラまで参戦されては、どうしようもなかった。

ぐすん、こんな事なら『一緒にプリクラを撮ろう』なんて言わなければよかったです。

「さて、これからどうする？ 門限までまだ時間があるけど」

私の変顔プリクラをみんなに配り終えたあと、一夏が言った。

水着を買って、食事して、そのあとにここへ寄ったので、時刻は3時を過ぎたあたりだ。

門限は6時半なので、まだ余裕がある。けれど、私にはちよつと用事があった。

「すみません。私、4時から簪の専用機開発を手伝うことになっていました」

「簪の？ 簪と知り合いだったのか？」

「ええ、のほほんさん経緯でね。以前、彼女には助けられましたので、お礼に専用機開発の手伝っているのです。そういう訳なので、私は一足早く失礼させて頂きますね」

そう告げて、私はみなさんより一足早くレゾナンスをあとにした。



「あつ」

レゾナンスから戻り、向かっていた整備科実習区画で、私は珍しい人物と出会った。

黒い長髪に切り揃えられた前髪。日本人形のような姿勢。日本の国家代表『輝夜月子』だ。

「こんにちは、日本代表。先月はどうも、ありがとうございました」
学年別トーナメントの時、私は彼女に大変助けられたのだ。

その時を思い出し、深く感謝を告げる。日本代表は慌てたように両手を振った。

「いえいえ。こちらこそ簪を説得してくださったようで」

「その事ならお気になさらずに。場のなりゆきなので」

「いえ、本来なら代表である私が言い聞かせなくてはいけないところ、

代行して頂いたのです。これに対しては、きちんと礼を申し上げなければなりません。ありがとうございます」

日本代表が奥ゆかしい仕草で深く頭を下げる。

日本人って本当に礼儀と恩を重んじていますよね。どっかの誰かさんに見習わせたいです。

「まあ、そう畏まらないでください。私も畏まってしまいますから」
「では、お言葉に甘えて。わたしのことは月子と呼んでくださいませ」
胸に手を置く月子の姿は、とても清楚で初々しい。まさにはんなりといった感じだ。

私にはできない仕草だと思った。大剣やナイフを嬉々と振り回す私には。

「ところで、今日はどういった要件で？」

「〈打鉄式式〉の装備——対複合装甲超振動薙刀《夢現》ができましたので、それを搬入しに」

「わざわざ国家代表自ら？」

驚く。物資や武器の搬入なんて、国家代表がやる仕事じゃない。

「実は、〈打鉄式式〉の進捗状況が芳しくないと聞きましたので。様子を見についでに」

「ああ、〈打鉄式式〉の開発費用は輝夜重工から出ていますもんね」
そんな会話をしているうちに、整備区画の〈打鉄式式〉用ハンガーに到着する。

整備ハンガーでは、簪が複数の入力装置を使ってデータを打ち込んでいた。その隣では、のほほんさんが美味しそうにアイスキャンディなんぞを味わっている。仕事しなさい、のほほんさん。

「……アリス、やっときた。あ、月子も」

「《夢現》搬入して置いておきましたから、時間がある時に確認しておいてください」

「……わざわざ、ありがとう、月子」

「で、簪、今日はどうするんですか？」

「……今日は荷電粒子砲を試射する」

簪は〈打鉄式式〉の背後に積まれたコンテナの山を指した。

それに月子が手をパンツと叩く。

「ついに完成したん？」

「……一応、形だけだけど。でも、ちよつと前進」

簪がちいさく控え目なガッツポーズを決める。

のほほんさんはなぜか自分の功績のように、ドヤ顔でVサインを出していた。あなたは、アイスクャンディーを食べていただけでしょ。

「で、どこで試射するんですか？」

「……今日は第三アリーナが開いていたから、そこです。……わたしは、冷却ユニットと電荷コンバートユニットを運ぶ。……アリスは粒子加速ユニットを運んでほしい」

「わかりました」

私は<赤騎士>を展開して、《Particle—Accelerator—Unit》と表記されたコンテナを二つ抱えた。簪は<打鉄式式>で《EC—Converter》と《Refrigerator—Unit》と表記されたコンテナを持つ。のほほんさんは<赤騎士>に掴まり、前方を指差した。

「れっつ、ごっ」

のほほんさんの号令に従って、私たちは第三アリーナにある射撃場へ向かった。



私たちが持ってきた荷電粒子砲のパーツを組み立てると、巨大な砲台が完成した。

砲身の長さはざつと2メートル。どちらかと言えば、戦車や戦艦に積んだ方がしっくりきそうな大きさだ。冷却ユニットを含めれば、最早ISの携帯できるサイズではなくなっていた。

「大きいですね」

「小型化はあとで考えましょう。今はちゃんと撃てるかですよ」

月子が荷電粒子砲と<打鉄式式>の動力をパワーケーブルで繋ぎ

ながら言った。

私は電荷コンバーターを調整しつつ、『そうですね』と答える。

「冷却装置の準備できたよー」

のほほんさんが頭上で大きく^{マル}〇を作る。

それを確認して、簪がく打鉄式式のジエネレーターに火を入れた。荷電粒子砲の粒子加速装置が動き出し、電荷コンバーターがぐーんと唸り出す。従来の発動機では荷電粒子砲に必要な電力を賄えなけれど、ISの高出力ジエネレーターならそれが可能だ。

「えねるぎー120ぱーせんと、波動砲しよーじゅん！」

「……本音、それ違う。……これは荷電粒子砲」

のほほんさんにそうツツコミながら、簪は荷電粒子砲の斜角と方位を調整した。狙いを前方の仮想ターゲットに設定する。距離は100メートル。命中させるのは、そう難しくない距離だ。

「……サブコンデンサー電圧上昇、……粒子チェンバーへの供給開始、……発射準備OK。——本音、月子、空気摩擦で電磁波が飛び交う。周りが電子レンジみたいなるかも。……危ないからアリスのISに守ってもらって」

「では、二人ともこちらに。ヘレッドクイーン、シールドの展開範囲を変更」

《Yes My honey——シールドの展開範囲および出力を変更。……完了》

「準備OKです。——いつでもどうぞ」

私たちが肯くのを確認し、簪がキーボードの《Enter》キーを押す。

「……発射」

荷電粒子砲の砲身——リング状の加速器が輝き、加速した粒子を吐き出す。

粒子と空気の摩擦で、波長の違う電磁波が飛び交い、視界が七色に輝いた。まるでオーロラのようなようだ。

「おおー！ きれいー！」

私もそう思った。しかし、その光景に反して簪の表情は険しい。

よくよく見れば、肝心なターゲットが破壊できていなかった。

「粒子が拡散して、満足な威力を得られてへんね」

月子が言った。

「粒子が拡散？　どういうことですか？」

正直、荷電粒子砲のメカニズムなんてさっぱりな私は詳しい解説を求めた。

「簪ちゃんの荷電粒子砲は粒子をプラスに電荷し、それを磁場で引って張って加速しています。ですが、プラスに電荷された粒子は、プラスに電荷された粒子と反発し合うのです。磁石と同じですね。結果、ビーム状を維持できず——」

「充分な威力を保持できていない、と。——では、どうすれば？」

「粒子ビームの密度と速度を上げ、拡散しきる前に、標的に命中させる。そういう方法もあるかもしれません。ただし、消費電力と粒子加速器の大きさが、いまの2倍必要になるでしょう」

「仮にそうしたとして使い物になりますか？」

月子は苦笑いを見せた。

「普通に44口径の滑腔砲やレールガンを使用した方が賢いと思いません」

「ですよね……」

そもそも私たちが解決できるような技術的問題なら、とつくに世界の優秀な技術者たちが解決している。それができていないから、未だ実用化に至って——いや、待てよ。

「あるじゃないですか。実用化されている荷電粒子砲が」

掌をポンつと叩く私に、一同はポカンとする。

それからしばらくして、簪が思い出したように言った。

「……あ、〈ゴーレム〉」

「そうです」

二ヶ月前、この学園を襲撃した正体不明のIS。便宜的に〈ゴーレム〉と呼ばれたそのISの腕部には、未だ実用化されていないはずの粒子ビーム兵器——荷電粒子砲が装備されていた。

本体は私が鹵獲して組織の技術部へ送ったけど、それ以前に掬いだ

〈ゴーレム〉の腕がこの学園の地下に保管されていた。それを参考にすれば、問題解決の糸口が見つかるかもしれない。

「でも、〈ゴーレム〉の腕が保管されているのは、地下の機密特区。一般生徒は立ち入れない」

「入るにはLv4が必要おー」

IS学園地下にある機密特区——通称へアスガルドへに立ち入るには、《Level4》の権限が必要だ。のほほんさんのような一般生徒は《Level1》、私や簪のような専用機持ちの権限は《Level2》、教師でも《Level3》の権限しかもっておらず、《Level4》権限を持っている人間は学園でもごく一部だけ。生徒では生徒会長だけだ。

会長に頼めば、入れてもらえなくもないと思うけど、私も簪も会長の手は借りたくない。

そうなれば、もう手の打ちようがないわけだけど、私にはもう一つアテがあった。

「私に任せてください」



夕日で茜色に染まるモノレール車内。

アリスと別れたあと、一夏と箒は喫茶店で休憩をとり、雑貨を見て回って帰路に就いた。

現在、車内には一夏と箒しかいない。大事な話があったので、ラウとシャルロットに頼み二人きりにしてもらったのだ。

「今日は楽しかったな」

「そうだな。こんな風に誰かと出かけたのは久しぶりだ」

小学生時代から中学生時代、箒は政府の意向で交友を制限されていた。こうして誰かと町を歩いたのは、本当に久しぶりだった。ましてや、その相手が一夏だというのだから、喜びも一入だ。

だが、クライマックスはこれからだ。

自分はまだ、彼が言う「大事な話」を聞いていない。それを聞かずに、今日は終われない。

「そ、そういえば、一夏、私に大事な話があると言っていないかったか？」

「ああ、実はさ——」

一拍おいて語りだした一夏に、箒はぎゅつとスカートの端を握った。

胸が高鳴り、顔が焼けそうなほど熱くなる。

しかし、一夏から紡がれた言葉は、箒の予想外のものだった。

「剣道、続けないのか？」

紡がれた言葉は、愛の告白でもなければ、求婚の言葉でもなかった。意外を通り越して、箒は思わず拍子抜けする。

なぜ彼はそんなことを切り出したのか。箒はその意図を測りかねた。

「け、剣道？」

「ほら、IS学園にきてから、めっきりやらなくなっただろ？」

「それは、そうだが」

実は入学して以来、箒は剣道をやらなくなった。学園の剣道部にこそ所属しているが、顔を出す頻度は月に一度程度だ。そうなった理由は簡単。一夏との時間を取ろうとするあまり、剣道の方がおろそかになってしまっていたのだ。

一夏はそれを気にしていたのだろう。だから、彼女を呼び出し、こんな話を切り出した。

「せっかく全国大会までいったんだし、やめちゃうはもつたいないよ」それは箒も常々思っていたことだった。けれど素直に『わかった』と口にできなかつた。

ここで『そうだな』と答えてしまえば、彼との距離がもつと開いてしまいそうな気がした。

「し、しかしだな……」

我ながら未練がましいと思ったが、箒は羞恥を押し殺して言った。

専用機もない。知識も、技術もない、そんな自分がしてやれる事など何もない。わかっている。けれど、私はお前の役に立ちたい。そばにいたいんだ。でなければ、私がIS学園に来た意味がない。

「俺なら大丈夫だよ。いざとなったら、ラウラたちもいてくれるしよ。なにより、アリスもいてくれるから。ほら、あいつ頼りになんだろう？」
アリス。親しみを以って発せられたその名は、箒にとってトドメの一撃に等しかった。

私だって、お前に必要とされたいのに……。

「だから、もう俺に構うなつて。また剣道やれよ」

彼に悪意があったわけではないだろう。ましてや箒を疎んでいゝわけでもない。

彼は純粹に箒の剣道の実力を尊敬し、続けてほしいと言っている。幼馴染であるがゆえに、切磋琢磨し合った仲であるがゆえに、箒もそれを理解できた。

しかし、掻き筆りたくなるようなやるせなさは、うまくコントロールできない。

——そんなこといわないでくれ、一夏。

——まるで『もうお前はいらぬ』と云われたみたいで、辛くなる。もし胸の裡から湧き上がるこの憤りを撒き散らせたなら、どんなに気持ちいいだろうか。

しかし、憎らしいほど自制心が働いて、それは叶わなかった。

「……そう、だな」

箒は素直に彼の言葉を受け入れた。

これ以上取り繕うのはあまりに滑稽で無様だ。何より惨めすぎる。「がんばれよ。俺もがんばるからよ」

「ああ」

箒はありつたけの麻酔を心に打ち込んだ。

心が悲鳴を上げたようにも聞こえたが、それすらも押し殺した。そうしなければいけなかった。



◆

学園には、ナノマシンをキーに使ったセキュリティシステムが導入されている。

扉に近づくと、体内のMEMSが生体情報を送信し、受け取った扉側が解除に必要な認証を行ってくれる仕組みだ。これにより従来の網膜や指紋を押し当てる動作も、音声を発する必要もない。

そんなハイテクで塗り固められた扉を抜け、私たちは《Level 4》区画にやってきた。

「こちら、のほほん。レベル4区画に潜入した。これより潜入任務を開始するー」

目的地に到着するなりのほほんさんは、被っていたダンボール箱を脱ぎ捨てた。

きつと何かの真似なのだろうけど、私には解らなかった。

「かんちゃん大佐、食欲を持て余す」

「……もうじき夕食だから、それまで我慢して」

腹ペコなのほほんさんを連れ、私たちは仄暗い通路を進んだ。それからしばらく歩くと《関係者以外立ち入り禁止》と記された最重要保管庫が見えた。そこへ私たちは足を踏み入れていく。

ちなみに月子は国家代表という立場を考慮して、地上でお留守番だ。

「……あった」

収納されていたくゴレム>の腕を見つけ、簪は持ってきた端末を開き、解析を始めた。

無知な者が手伝っても邪魔になるだけなので、私は離れた場所からそれを見守る。

「にしても、ラウラの次は更識の世話焼きか、リデル」

簪の作業を眺める私に、千冬さんが言った。

私たちここに連れてきてくれたのは、彼女なのだ。

「いいえ。二年から整備科に進学するつもりなので、その予習がてら手伝っているだけです。——それよりもありがとうございます。助

かりました。でも、よかつたのですか？」

〈ゴーレム〉の情報はまだ解禁されてないはず。頼んだ身でこんなこと訊くのはアレだけど。

「問題ないさ。今学期が終われば開示される情報だ。それにいち早く情報を得られるのが、この生徒の特権だ。まあ、おまえには借りがあつたから、というのものもあるが。——そういえば、一夏を助けてもらった礼を、まだ言っていないかつたな。礼を言っておこう」

「え？ あ、いえ……」

真顔で礼を言われ、わずかに面を食らう。千冬さんは気にせず、一拍おいて続けた。

「礼のついでと言つてなんだが、おまえに一つ訊きたい事がある」

「なんででしょうか」

千冬さんは簪たちが作業に夢中なのを確認し、こう言つた。

「お前がここに來たのは、母さん——織斑千春の差し金か？」

私の息が止まる。あまりに直球な質問に言葉が出なかつた。

「以前——第1回へモンド・グロツソ〉でのことだ。〈ブリュンヒルデ〉になつた私の許に、母さんが祝いにやってきてな。同時に、ある組織に所属している事を示唆した。おまえは、母さんが示唆した組織の間なのか？」

これ以上の沈黙は不利。そう悟つた私は、覺束ない口調で言つた。「どうして、そう思うのです？」

『不思議の国のアリス』は母さんが好きな童話でな。小さい頃、よく読んでもらった。家には絵本だけじゃなく、翻訳されていない原版も置いてある。その母さんなら『不思議の国のアリス』に因んだコードネームを、部下につけるのではないかと思つたのさ。アリス・リデル、〈赤騎士〉、〈赤の女王〉という風にな。——で、どうなんだ？」

「いいえ、違います」

私は努めて冷静にいつた。でも、誤魔化せたかどうか、自信はない。それでも千冬さんは踏み込むような行為はせず、温和に言つた。

「そうか。ならいい。妙なことを訊いたな。今の話は忘れてくれ」
「気のないように言うが、私に対する疑いが晴れたとは、とても思えなかった。」

その所為か、その後の沈黙がやけに気持ち悪く感じられた。いつもの事、全てを吐露してしまいたくなるような、そんな空気だ。私はその空気を払拭したい一心で、適当な話題を切り出した。

「そういえば、ここへ来るとき《Level5》の区画を見つけましたが。てっきり学園の最高権限は《Level4》だと思っていたのですけど」

「あるな。その区画に関しては、私も詳しく知らない。あの区画は私の権限でも入れないんだ」

「千冬さんでも?」

意外だった。教師部隊の指揮を執る千冬さんですら、入れない区画があるなんて。

「おそらく学園上層部の人間だけが立ち入れる区画なのだろう」

「学園上層部……ですか」

学園行事を執り行っているのは学園の教師陣だけど、学園全体の大きな方針を決定しているのは、この学園上層部だ（学園理事会ともいわれているが）。

実質、この集団が学園を支配しており、千冬さん率いる教師部隊も、会長率いる（生徒会）も、それに従う下位組織でしかない。だからなのだろう、千冬さんでさえ学園の全貌を知ることが許されない。

「Level5に何かがあるんでしょね」

「さあな。私も興味がある。だが、入ろうにも見ての通り頑丈な扉に阻まれているからな、簡単には入れないだろう。——ISでもない限り、突破するのは無理だろうか」

真面目な顔で考える千冬さんを見て、私は冷や汗を流した。

「あの、なんかISがあったら突破したい、みたいに聞こえるんですけど……」

「安心しろ、私はそんなことしない」

そうですよね。厳粛で厳格な織斑先生がそんなことするわけ——

「やるのは真耶だ」

私は聞かなかったことにした。

この場に山田先生がいたら、きっと悲鳴を上げていたに違いない。

「冗談だ、本気にするな」

「普段、冗談を言わない人が言くと、本気に聞こえますからやめてください」

「そうか、それはすまなかつた。気を付けよう」

千冬さんは小さく笑う。それから表情を改め、どこか遠くを見据えた。

「だが、この学園の不明瞭な部分に対して、やきもきしているのは本当だ。——実はな、私はこの学園に赴任してから一度も、学園を取り仕切る上層部の人間と会ったことがない。立場上、従ってはいるが、正直、信頼に値しない」

「だから、確かめたい。——一夏のために？」

千冬さんは沈黙で肯定した。

一件、IS学園にいる一夏は安全に思えるが、断言はできない。学園の方針を決めている学園上層部が不明瞭な存在だから。いきなり掌を返されることもありえる。千冬さんはそれを恐れているのだろう。

「私は、私が利用されるのは許せる。だが、一夏が誰かに利用されるのは看過できない」

その言葉は怒りにも似た強い言葉だった。同時に一夏への強い想いを垣間見た気がした。

なぜ彼女はこんなにも強いのか。きっと弟の存在がそうさせるのだろう。私はそう思った。

第39話 お茶会とウサギ

深緑の木々に覆われた森の中。枝木の開けた場所に、アンティークテーブルと5つの席が設えてあった。その席に、二人の男が腰かけている。一人は、白黒のチャック服にシルクハットを被った男だ。その帽子男は、テーブルのスクリーンを手に取り、不満そうにかじった。

「しかし、こんな時に〈お茶会〉とねー、彼女も人が悪い」

ティーパーティ
「定例報告会は組織として必要な措置だ」

そう答えたのは、白の礼服に身を包み、顎鬚を蓄え、屈強な体格をしたもう一人の男だ。

帽子男とは対照的に堅物の印象が強い。さながら一国の王か、軍隊の長といった井出立ちだ。

「それは間違いないがね。——それより出てきたらどうだ」

帽子男が鋭い視線を森の一角に向ける。その先から一人の女性が現れた。

美女だ。プラチナブロンドと紫紺の瞳が妖艶で、中世ヨーロッパに出てきそうな美貌を醸し出している。甘い香りと、時間の流れさえ緩やかにさせてしまうような、ゆったりした物腰は、強い女性の包容力を感じさせた。

「ふふふ。もう少し二人のやり取り聞いていたかったのだけれど、残念」

「男二人の覗き見なんて、何がいいのやら。男日照りで異常性癖に目覚めたか、ロリーナ」

帽子男のセクハラ紛いな発言に、ロリーナは『あなたほどじゃないわ』と返す。

そこに新たな人物が二人ログインしてきた。

一人は70歳あたりの老人紳士。物腰は穩やかだが、好々爺然とした面構えは歴史を感じさせた。背筋も真っ直ぐだ。

もう一人は、妙齢の女性だ。彼女もまたロリーナに負けない美貌の持ち主だったが、艶やかな黒髪には東洋の色気があった。瞳の奥には、強い意志とカリスマが感じられる。

「おやおや、にぎやかですね」

老人紳士は若者三人の談笑を聞き、楽しそうに笑った。

「あら、十歳おじさま、ご機嫌麗しゅう。お体の方はよろしいので？」
「この通りですよ」

老人——轡木十歳は帽子のつばを挙げ、にこやかに笑った。

そして、同伴してもらったもう黒髪の女性に椅子を引いてもらい、そこに腰を下ろす。

「全員そろったようね。では〈御茶会〉を始めましょうか」

そういつて十歳と共に現れた女性——ルイス・キャロルが自らの席に腰を下ろす。

それを見計らい、帽子男がスコーンから口を放した。

「しつかし、こんな時に〈御茶会〉なんてな。こっちはいろんな件で忙しいってのに」

「あなたが忙しくなっているからこそ、組織の方針を今一度改める必要があるのよ」

情報部の長たる彼が忙しいということは、それだけ世界情勢が変化しているということだ。それに対して今一度、組織の意向を整理し、統括する必要がある。帽子男もそれを理解しているのか、黙って口を噤んだ。

「では、始めにIS学園襲撃の件について、報告をしてもらえるかしら」

「ああ。例の学園を襲撃した未確認機についてだが、部品の出所を掴んだ。使用されていた骨格系のレアメタルを解析した結果、オーストラリアのミューゼル社から出荷されたものと判った」

「ミューゼル社、スコール・ミューゼルが立ち上げた会社ね」

スコール・ミューゼル。第一回〈モンドグロツソ〉で射撃部門のヴァルキリーとなったオーストラリア出身の元イギリス国家代表だ。引退後は、その知識と経験を生かし起業、わずか数年で大企業まで成長させた敏腕経営者だ。

その彼女が経営する会社がIS学園の襲撃に関与しているかもしれない。と彼は告げていた。

「出荷記録と照らし合わせてみたが、該当するパーツは出荷されていなかった。だが、資金周りや個人口座に疑わしい金の流れもない。どうも、利益目的での横流したわけじゃないらしい」

「学園を襲撃したテロリストに同調、あるいは襲撃テロリストそのものの主犯格である可能性が高いか」

「いずれにしても協力しているのは確かだね。その彼女をエスコートできなにかしら？」

「エスコートねえ……。簡単に言ってくれるな。相手は大企業の社長だぜ？ 数日でも行方不明になれば、騒ぎになる。事態が表沙汰になるのは、こちらとしても遠慮願いたいところだ」

「だが、それをどうにかするのがお前の仕事だ」

「そうだな。時間をもらえれば、いくらか手の打ちようがある。もつともあまりレディーふさわしくないエスコートなるが。———つても、問題はそこじゃない」

「専用機ね」

「ああ。横流ししている相手にコアを製造できる技術があるなら、スコール自身も専用機を有している可能性が高い。その場合、かなり厄介な事態になるだろうな。なんせ相手は元へヴアルキリーだ。もしもに備え、最低でも国家代表クラスの操縦者と、『単一仕様能力』を持ったISが欲しい」

そこで情報部部長の視線が作戦部部長へ動く。作戦部部長は肯いた。

「———わかった。アリス・リデルを手配しよう。だがその間、織斑一夏の警護はどうする？」

アリスは密偵であるが、有事に備えての伏兵という側面も持っている。＜ゴーレム＞襲撃事件の際には、早くもその側面が活かされた。だからこそ、アリスの＜赤騎士＞露見は不問となったのだが、彼女を引き上げさせれば、何か生じたとき、後手に回りかねない。

「彼女たち」の動きが活発化しつつある今、迂闊にアリスを引き上げるのは危険だろう」

「そうね。5月の一件を考慮すると、最早IS学園は安全な場所とい

えないわ。またあのような強硬策に打って出られたら、エイダ一人じゃ対応できない。それに8月からIS学園は、夏季休校に入るのでしたわよね、十蔵おじさま？」

老紳士はゆっくり肯いた。

「ええ。彼が帰郷を望めば、学園の力では彼を守れなくなりますね。我が校の『国家機関から干渉されない』という特性は、校内にいる時だけ適用されます。校外の人間はその対象ではありません」

語り終えた轡木十蔵は苦しげに咳をした。辛そうな表情から、大病を患っているようだ。

十蔵の苦痛が和らぐの待ってから、ルイス・キャロルが言った。

「もし〈彼女たち〉の手に彼が渡れば、大きな喪失になるわ」

「なら、彼の護衛は俺が手配しよう」

「あらあら、もしかして娘さんを使うのかしらん？」

意地悪な笑みを浮かべるロリーナに、帽子男は肩を竦めた。

「刀菜じゃないさ。アイツは、あれでも国家代表だからな、夏季休暇もロシアに戻るそうだ」

「近々、東シナ近海でSCCの大きな軍事演習があると聞いたが、それに？」

上海協力機構^cは、旧ソ連と中国が、国境の画定と信頼の醸成を図るために発足した同盟だ。

しかし、〈白騎士事件〉以降、軍事同盟としての色合いが強くなりはじめている。

事実上、北太平洋条約機構^oに対抗できる唯一の軍事同盟とされていることから、その肥大化をEUやアメリカも警戒している。

「いいや、それには参加しない。別件らしい。詳しいことは俺も聞いていない。最近、俺に反発的だな。反抗期ってやつかな？」

「うふふ、遊樂呆けしている女好きなパパじや、反発もしたくなるんじゃないかしら？」

ロリーナが綺麗な声で皮肉るが、帽子男は誇らしげに笑った。

「俺が女を口説くのは、諜報活動の一環さ。人を誑し込んで、人脈を形成する。その人脈が貴重な情報を齎すんだ。HUMINT^tの歴史

じや、イスラエルの諜報特務庁より古いんだぜ？」

イスラエルの諜報機関「モサド」が最強の諜報組織と云われるのは、各国のユダヤ系移民者によるネットワークがあるからだと言われている。更識は人を誑し込むことで、それに代わるネットワークを形成し、諜報活動に活かしている。更識が人たらしである所以はここにある。

そして、ヘデウス・エクス・マキナがアリスやロリーナといった稀少な人材を集められたのも、彼の人脈があったればこそだった。

「しかし、そういった意味でいうと織斑一夏は逸材だな。あの誑しっぷり、ぜひ部下に欲しいね」

帽子男がケラケラ笑うと、ルイス・キャロルが視線で痛烈に批難した。

それに、帽子男がジワつと脂汗を流す。

「いや、わ、悪るかった。怒るなって……」

「では、続けなさい」

「ああ。ともかく、織斑一夏の警護は情報部が請け負う。ただし、最悪のケース——敵ISとの交戦を考慮して<リリイ>一機と<ヘビシヨツプ>パツケージを用意してくれ」

「わかった。手配しよう」

その後、2時間に亘り、各部の長たちによる細かな報告が行われた。スコール捕獲の詳しい段取り。織斑一夏護衛の引き継ぎ。さらに新造艦の処女航海が終了したこと。新しい兵站と装備について。様々な意向と方針が新たに取りまとめられた。

「以上ね。では、各自スコール・ミューゼルのエスコートの準備に取り掛かって頂戴。その間、織斑一夏の警護は情報部に請け負ってもらわ。——では、今日はお開きにしましょうか。みんなご苦労さま」

ルイス・キャロルが総括で締めくくると、テーブルを囲う各々が姿を消していった。

最後にロリーナと十蔵が残る。そこでロリーナが思い出したように言った。

「そうだわ、実は十蔵おじさまに、少しばかりお願いがありましたの」「なんででしょうか？ この古いぼれにできることなら何でも」

轡木十蔵が帽子のつばを挙げると、ロリーナは言った。

「来週、IS学園で臨海学校がありましたわよね？ そこへ私も顔を出したいのだけど、許可書を頂けないかしら？ 話によれば、関係者以外は参加禁止ということだから」

「構いませんよ。しかし貴女がわざわざ出向くとは、臨海学校に何かありますのかな？」

ロリーナは柔和に笑って言った

「当日は7月7日。もしかしたら、マーチラビット狂ったウサギに会えるかもしれないから」

抽象的な表現であったが、十蔵は理解したように頷いた。

「わかりました。私から妻に伝えておきましょう」

「ありがとうございますわ」

ロリーナはスカートの端を摘み、優雅に礼を告げた。



7月6日。臨海学校当日。学生を乗せた5台の観光バスと訓練機を積んだ3台のトラックは、仰々しい列をなして、海の見える旅館の駐車場に停止した。

宿泊先の名前は花月荘。なんでもIS学園は毎年ここのお世話になっっているそうだ。

「よろしくお願いますー！」

三日間お世話になる旅館に到着した私たちは、出迎えてくれた若女将さん筆頭に挨拶した。

「ようこそ御出で下さいました。私はこの旅館の女将をしております、清州景子でございます」

「こちらこそ。今年も三日間お世話になります」

千冬さんが学園を代表してあいさつすると、若女将も『こちらこそ』

と微笑んだ。

「では、各自荷物を持って移動しろ。間違っても従業員さんや仲居さんに迷惑をかけるなよ」

千冬さんの注意事項に『はい!』と答え、私たちは荷物を持ち、各々移動を始めた。

私も部屋割り表を片手にロビーを抜け、当てられた部屋へ歩いていく。

「松の間の二十二、ここですね」

部屋の戸を潜ると、のほほんさんが荷解きしていた。他には、おさげが可愛らしい谷本癒子さんと、ウザイけど憎めない岸原理子さん、特徴がないのが特徴の夜竹さやかさんがいる。

「おー、ぎつちよんだー、ぎつちよんもこの部屋?」

「みたいです」

「やつほーい! んぎつちよんといっしょの部屋だあー!」

今日も元気いっぱいいなほほんさんが、私に抱き着いてくる。

のほほんさんが同室か。夜は賑やかになりそうだ。

「ぎつちよん、さつそく、がーるずとーくしようよー」

「のほほんさん、気が早いですって」

のほほんさんを放しつっ、手持ちの荷物を下す。

ガールズトークは臨海学校の醍醐味だけど、そういうのは夜になってからの楽しみだ。

「でも、わたしも興味あるわー、リデルさんの恋バナ」

「わたしもあります」

「うんうん、リデルさんつて織斑くんと仲いいもんねー」

と、谷本さんと岸本さん、夜竹さんまでがニヤニヤと私を見てくる。

なにかと一夏に協力しているもんだから、最近、勘違いをされる事が多くてかなわない。

「もしかして、もうこーゆー関係だったりして?」

いうなり、岸原さんが私の背後に回り込んで、胸を揉んでくる。

おまけに、クンカクンカと髪の毛の匂いまで嗅いでくるから、鬱陶しいこと、この上ない。

「あん、違いますってば。私と一夏は何もありませんよ——つて、夜竹さん、どさくさに紛れて私の胸を突かないでもらえます?」

「あ、すいません。リデルさんの、思っていたより大きかったもので。うらやましいです」

「ねえ、ねえ、リデルさん、ちよつとアレ」

岸本さんたちとてんやわんやしていたら、谷本さんが戸を指差した。

その先では小さな白髪の少女が、こちら——たぶん私——をジッと覗き見ていた。

「旅館の子かな?」

白いメイド服姿は、旅館のお手伝いに見えなくもなかったけど、おそらく違うだろう。

彼女は日本人ではなく白人のようであったし、それもアフリカ系のように見えた。

「あの——」

「!」

私が話しかけた途端、白人の少女はぴよこんと跳ね、脱兎の如く逃げていった。

なんだったのでしょうか。気になった私は、彼女を追うことにした。



「ここがおまえの部屋だ」

千冬姉に連れてこられた部屋には『職員用』という張り紙が貼ってあった。

「さすがに女子と同室はさせられんからな。お前は私とここで寝泊まりしてもらおう」

まあ、そうだな。これは学園行事なのだから、そのあたりはきっちり区別しないとイケない。

でも、ちよつと残念ではある。いやさ、部屋の友達とガヤガヤするのも臨海学校の醍醐味だろ？ それをできないってのは、ちよつと寂しいじゃないか。

「なんだ、不満そうだな」

「そんなことないよ。千冬姉の部屋じゃ友達を呼べないなーって思っただけ」

「ほお、自分の部屋に女を連れ込めないのが残念だと？」

ニヤと意地悪く笑う千冬姉に、俺は慌てて言った。

「ちよつと、誤解を招くような言い方はやめてくれ！」

俺はあくまで友人として友達と遊びたいだけだ。別にやましい事がしたいわけじゃない！

「冗談だ。おまえにそんな甲斐性がない事ぐらい、私が一番よく知っている。——では、入れ」

教師モードになった千冬姉に促され、俺は『はい』と部屋に入った。

部屋は二人部屋だった。だというのに間取りは十畳以上ある。さらにテラスまであり、海を一望できた。東向きだから、きつと日の出も拝めるのだろう。なんとも贅沢な部屋だ。

「さて、今日は終日自由時間だ。好きに遊んで来い」

初日は終日自由時間で、訓練は二日目からになっている。本来は三日とも訓練であったのだが、なにかと襲撃や暴走が続いたので、その息抜きに自由時間が設けられたらしい。

「織斑先生には、自由時間はないんですか？」

「これから他の先生と打ち合わせだ。そのあとは持ってきた機材の点検がある」

「はあ、大変ですね」

「だが、生徒との交流という名目で、教師陣にも多少なり自由時間がある。だから安心しろ。水着はちゃんときてやる」

ふふん、と得意げな貌をする千冬姉に、俺はやや困惑した。

自分の選んだ水着を着てもらえるのは嬉しいけど、姉の水着姿ってそんなに興味ないな。どちらかといえば、他の女の子の水着姿の方が楽しみだ。たとえば――

「なんだ、その顔は。私よりリデルの水着姿をこそ所望か？」
「ばっ！ な、なんで、そこでアリスが出てくるんだよ！」

確かにちよつと楽しみだけどき、名指しで言われると恥ずかしくなるだろ！

「織斑先生、そろそろミーティングのお時間です」

俺が顔を真っ赤にしていたら、部屋の外から声がした。声の主は山田先生だ。

『わかった、今行く』と言って、千冬姉は準備に取り掛かった。

「そういうことだ。おまえは遊んで来い。ただし、羽目を外し過ぎるなよ」

そう言い残して、千冬姉は資料を手に部屋を出て行く。

残された俺は、そうそうに着替えを始めた。着替え終えたら、紫外線対策のために軽くパーカーを羽織る。それから荷物からビーチサンダルと浮き輪を取り出した。

「よし、俺は海賊王になる！」

意味不明な事を言いつつ、まず旅館ロビーに向かった。

「ん、なんだ？」

本館と別館を繋ぐ渡り廊下に来てきたところで、俺は奇妙な事態に遭遇した。本館から風変りな女の子が、こちらに走ってきたのだ。年は10歳ぐらいで、白髪のメイド姿をした少女だ。そんな少女を、なぜかアリスが追いかけていた。

「あ、一夏、ちようどいいところに。その子を捕まえてください」

「おっ？ お、おう？」

状況は掴めないが、とりあえず俺はその少女を「通せんぼ」した。ききーと慌ててメイド少女がブレーキをかける。

「あわわ、いっくんさま、道を開けて頂けると助かりますでございませう」

メイド少女は可愛く、えっほえっほと足踏みしながらそう言った——って、いっくん!?

いっくん。俺をそう呼ぶ人物は、この世に一人しかいない。この少女はもしかして——

そう思った時だ。突如、東の上空から何かが勢いよく降ってきた。その衝撃で大量の砂埃が宙を舞う。それを手で払い、視界を確保すると、そこには――

「ニンジン!?!」

が、地面に埋まっていた。大きさは人間の二倍ぐらい。なぜか表面がメタリックに輝いていた。

意味不明である。まったくもって意味不明である。だが、その意味不明さが逆に確信に繋がった。

間違いない。こんな非常識なものを作る人間はこの世に一人しかない。

「やあー、やあー」

案の定、ぱつかくんと『桃太郎』みたく人參から出てきた女性に、俺は見覚えがあった。

紺色のワンピースにエプロン姿。頭には機械仕掛けのウサミミ。こんな奇想天外で摩訶不思議な姿をした女性は彼女しかない。

「束さん!」

そう、ISを開発した希代の天才にして、箒の実姉――篠ノ之束しか。

「やつほー、おひさだね、いっくん」

「お久しぶりです、束さん。相変わらず、目のクマが酷いですね。寝てます?」

「あはは。天才は思考から解放されないからね。もう長らく真面目な睡眠はとってないよ」

「相変わらずですね。――で、この子は?」

俺は束さんの後ろに隠れているメイド少女を見た。

「ああ、この子は束さんの愛娘、くーちゃんさー。さあ、くーちゃん、挨拶して」

「はい、束さま。わたしはクロエと申します。親愛を込めてくーちゃんとお呼びくださいませ」

エプロンドレスの端を摘まみ、愛らしく頭を垂れるメイド少女のくーちゃん。

俺も彼女に倣って自己紹介した。

「こちらこそ。俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ——って、ええ、娘え!？」

なんだってツ！ さらつと言うから、聞き流しそうになったじゃないか！

「東さん、お子さんがいたんですか!？」

「うん。あ、でも、くーちゃんは東さんがお腹を痛めて生んだ子じゃないよ」

「そうですか。ですよね」

くーちゃんの外見は10才あたり。逆算すれば、東さんが14歳の時に生んだ子になる。それなら俺も知っているはずだ。それ以前にくーちゃんの容姿から「そうじゃない」と判別できるじゃないか。どうみたってくーちゃんは外国の女の子なのだから。

「で、そっちの子が、アリスちゃんかい?」

「はい。初めまして、篠ノ之博士」

舐めるようにアリスの周りを徘徊して、東さんはアリスを見据えた。

一頻り観察したあと、東は口元を三日月型に変えた。

「ねえ、アリスちゃん、東さんちの子にならない? キミなら歓迎するよ?。」

東さんがずんと身を乗り出し、アリスの瞳を覗き込む。

その光景は、まるで「白ウサギ」が「アリス」を不思議の世界に誘っているようだ。

「いえ、遠慮しておきます。私には「やらなければならない事」がありますので」

アリスは膝を折って、東さんの腰に抱きつくくーちゃんをやさしく撫でる。

その言葉の、行動の真意に気づいたらしい東さんは、満足そうに笑った。

「そっかー。話に聞いていた通りの子だねー。東さんは余計にキミが欲しくなったよ。——でも、今は別の用があるから、キミを連れて行

くのは、あとにするよ」

東さんはニンマリと口元を楽しげに歪め、ぴよんとアリスから退く。

それからクルツと一回転して、今度は俺の顔を見た。

「——とところで、いつくん、ちーちゃんはどこかな？」

「千冬姉なら、職員会議とかで今部屋にいませんよ？」

「そっか。じゃあ、ちよつとぶらぶらして時間でも潰そうかな。んじゃね、いつくん」

「え、あ、はい」

言うなり、びゅーんと漫画のような効果音を出して去っていく東さん。

その後をくーちゃんが一礼して追いかける。こちらはトトトつていう効果音が似合いそうだった。

「世話しない人でしたね。篠ノ之さんと血が繋がっているとは思えません」

「昔からあんな感じだったよ。箒もずっと振り回されっぱなしだった」

あの人は昔から自分の時間で生きている。いや、唯我独尊といった方がしっくりくるか。

ともかく、他人には絶対流されない。良くも悪くも自我が強い人だ。

しかし、そんな東さんに見られて動揺一つしないアリスも大したものだと思った。

大抵の人は、東さんが持つ独特の「凄み」にあてられて、あたふたするものだけだ。

「ん、どうしました？ 私の顔に何かついていますか？」

「いや、アリスは制服姿だけど、海にいかないのかなってさ」

「もちろん、行きますよ。ただあの子が気になって」

「くーちゃんか。そういうえば、何でアリスはくーちゃんを追いかけていたんだ？」

「深い意味はありません。あまりに気にしないでください」

そう告げ、アリスは何事もなかったように踵を返した。

「では、ビーチで落ち合いましょう」

「ああ。アリスの水着姿、ついたら一番に見せてくれよ？ 楽しみにしてっからな」

こてんっ。

あ、アリスがこけた。

「ば、バカ言ってるで、さっさとビーチに行ってサメにでも食べられてなさい！」

遠くからでも判るぐらい真っ赤になるアリス。はは、相変わらず、面白いやつだ。

第40話 ビーチガールズ

午後11時。水着に着かえた私は、浜辺の砂を踏みしめつつ、広がる水平線の海原を一望した。

サファイヤブルーの海。パールホワイトの砂浜。

以前はハワイに住んでいたので、ビーチは見飽きていたけど、久しぶりだと心が騒いだ。

「さて、どうしましょうか」

泳ぐのもよし。ビーチで遊ぶのもよし。パラソルを差して日光浴も悪くない。

私がどうしようか迷っていると、背後から声をかけられた。

「お、アリス、ようやく来たか」

「あ、一夏と……鈴?」

振り返った先では、なぜか鈴を肩車する一夏が立っていた。

はて、なんでしょう。新車の準備体操、というわけでもなさそうですが。

「二人は何をやっているんです?」

「監視塔(っこよ」

監視塔ゴッコ? 監視員ゴッコではなくて? 理解に困るけど、鈴

のことだから意味なんて無いのかもしれない。そう自分を納得させ、私は鈴の水着に意識をやった。

「鈴の水着、可愛いですね」

鈴の水着は、オレンジ色を基調にしたスポーティーな水着だった。トップはキャミソールを短くしたようなタイプで、ボトムは短パンのような構造になっている。露出は多くないけど、活発な鈴のイメージが映えていてよく似合っていた。

「一夏もそう思いませんか?」

「ああ、そうだな。すげー似合ってるよ、かわいいぞ、鈴」

「なッ!? う、うっさいわね。あんたになんかに褒められても、全然、嬉しくないわよ!」

照れ隠しに、鈴が一夏の頭を『ばかばかばか』とポカポカ叩く。

ふふ、鈴だったら、相変わらず素直じゃない。

まあ、私は鈴のそんなところが好きなわけだけど。もちろん、友人という意味で。

「そういうアリスの水着も可愛いよな」

「セシリアとデユノアさんが選んでくれたんですよ」

私の水着は、赤を基調したビキニタイプで、ハイビスカスの柄が入っている。腰回りにはパレオを巻き、麦わら帽子を着用している。ちなみに水着を選んだのはセシリアだけど、パレオと麦わら帽子のチョイスはデユノアさんだ。

「そっか、ふたりともセンスあるな。アリスもよく似合っていると思うぞ」

「お、お世辞なら、よしてく下さい」

男性に褒められ慣れていない私は、気恥ずかしくなって手で自分を仰いだ。

「お世辞じゃないって。本心だよ」

「うー……。あ、ありがとうございます」

真顔でそんなことを言われると余計に照れますね。

その照れ顔を見られるのが恥ずかしかった私は、麦わら帽子を深くかぶって顔を隠した。

「ほんと、アリスは照れ屋だな——って、いきなり足に力を入れるな、鈴！　くるしい……」

「あんたさ、そうやって誰でも彼でも褒めるの、やめなさいよ！」

「そ、それは俺の勝手だろ！」

「その身勝手な振る舞いのせいで、いろんな人が冷や冷やすんの！」

「わかった、わかった、自重するから足を緩めてくれ！　締まってるッ！」

腿で首を絞めてくる鈴の膝を、青い顔の一夏がタツプする。

蒼白になるまで追いつめて、ようやく鈴は『ならよろしい』と力を抜いた。

「じゃあ、一夏、今度はあっちをパトロールしにいくわよ！」

「え、まだ続けるのかよ、この監視塔ごっこ。おまえを担いで歩くの、

つらいんだぞ」

「これもISの訓練よ。あたしだって訓練生時代、03式自動歩槍を担いで砂浜を走ったんだから」

「アサルトライフルとお前じゃ、重さが違い過ぎる！」

と、文句を言いながらも付き合う一夏はいい人ですね。ほんと、いいコンビだと思う。

そう思いながら二人を見送っていたら、再び声をかけられた。今度はセシリアだ。

「アリス、鈴さんたちは何していらっしやいますの？」

フラフラと浜辺を哨戒する二人を見て、セシリアは首を傾げていた。

「監視塔（こ）つこですって」

「なんですの、それ？」

私もよくわからないので『さあ?』と答えた。

「しかし、鈴さんだったら相変わらず品がありませんわね。女が男の上に跨るなど、淑女としての品格はないのかしら……。まあ、それはそうと、アリス。ちゃんと日焼け止めオイルは塗りましたの？」

「いえ、まだですけど」

セシリアは『まあ!』と私を見た。まるで子供のいたずらを発見した母の反応だ。

「それはいけませんわ! わたくしたちにとって紫外線は天敵ですよ?」

「それは、まあ……知ってますけど」

私やセシリアのような白人は肌のメラニン色素が薄いため、紫外線の影響を受けやすい。対策しないと酷いことになる。でも、私は太陽（アフリカ）の子なので、しなくてもへっちやらのだ。

「こら。ちゃんと予防をしないといけませんわ。紫外線は美容の天敵。油断すれば、すぐ染みができてしまんですから。なにより皮膚ガンになったらどうしますの」

「皮膚がんなんてオーバーですって」

「オーバーじゃありません。それに貴女にもしものことがあつたら天

国のエイミーに顔向けできませんわ。さあ、わたくしが日焼け止めを塗ってさしあげますから、こつちにいらつしやい」

「え、あ、はい……」

有無を言わせない迫力で手を引かれ、私はしぶしぶセシリアの後についていった。

しかしながら手を引かれる私の姿は、これまた母親に叱られた子供のようなだった。

「さあ、ここに横になってくださいな」

私は言われるがままブルーシートの上うつ伏せで寝そべった。

「では、塗りますわよ」

言ってセシリアが手になじませたオイルを私の背中に塗る。やわらかい感触と優しい手つきに、私はついうっとりした。これはなかなか気持ちいい。セシリアもセシリアで何やら気分がよさそうだった。(ふふ、アリスの肌はしっとりしていて、さわり心地がいいですわね。それになんてかわいいおしりをしているのかしら。はあく、わたくし、なんだが妙な気持ちになってきましたわ……♡)

さわ。

いきなりセシリアの手が水着の中に入ってきて、私は思わずのけぞった。

「ひゃん!? あ、あの、セシリア。そこはいいですから!」

心を許している相手とはいえ、友人におしりを擦られるのはさすがに抵抗がある。

「いいえ、ちゃんとここも塗っておかないといけませんわ、ふふふ」
でも、セシリアの手は止まない。それどころか、さわさわ、むにむにと、ますます遠慮がなくなる。なおも、おしりを触られ続ける恥ずかしさに『あうあう』と悶絶していると、それを見た生徒たちから、妙な声が上がった。

「ああ! セシリアがアリスのお尻さわってる!」

「あー、ほんとだ! セシリアがアリスにえつちいことしてる!」

クラスメイトに冷やかされ、セシリアが頬を真っ赤にした。

「え、えつちいことなんて……、オ、オイルを塗っているだけですわよ

「？」

「でも、セシリアの目付き、完全にやらしい男の目付きだったよね？」

「そんなことありませんわ！ わたくしの視線は、我が子を見守る優しい母の眼差しですよ！」

「じゃあ、近親相姦だーッ！」

「き、きんしん、そーかん？ な、なんですか、それ？」

聞きなれない日本語にセシリアが首を傾げる。私にもわからなかった。

うーん、これでも日本語は堪能な方なのだけど。日本語って奥が深いですね。

「きつと『仲が良い』という意味では？」

「ああ、そうですね。でしたらそうですね。わたくしとアリスはきんしんそーかんですわ」

セシリアが誇らしげに仲の良い事をアピールする。すると、何人かの日本人生徒が顔を真っ赤にして引いていた。どうしたのでしょうか。「変態だあー」みたいな顔して。私たち、何か変な事を言いました？

（——ん？）

私が周囲の反応に戸惑っていたら、ぬーと誰かの人影が私を覆った。

人影の正体は、オレンジ色を基調したストライプ水着のデユノアさんだった。

「アリス。さつきから、ちよつとベタベタし過ぎじゃないかな？」

デユノアさんは太陽を背に笑顔で言った。逆光のせいか、笑顔なのになんだか迫力がある。

よくわからないけど、べたべたしている私に怒っている様子だ。

私は自分の肌をぺたぺた触ってみた。

うーん、別にベタベタしていない。むしろサラサラしている。そもそもセシリアの使っている日除けオイルは、ベタつかないタイプのはずだけど。

「普通ですよ？」

「え、普通なの!?(それってセシリアと日常的にこんな事してるってこと!?)へえ、そうなんだ……」

なんです、急に眼を細めて。しかも、ハイライトがないんですけど。そもそもオイルのべたつく、べたつかないで、なぜそんなに怒るのかわからない。

もうわけが分からなくなってきた私は、話を逸らすことにした。

「えっと、デュノアさん、私になにか用があったのでは?」

「え? あ、うん、そうなんだ。実はラウラがね、アリスに見せたいものがあるって」

「ラウラが? で、そのラウラはどこにいるのです」

辺りを見渡しても、居るのはセシリアとデュノアさん。

あとはデュノアさんの後ろに佇むミイラぐらいだ。——つてミイラ?

「嫁、私はここだ」

ミイラがしゃべった。

「ああ、あなたがラウラだったのですか。で、なぜタオルをぐるぐる巻きに? 新手のUV対策ですか? でしたら、これを。これは日焼け止めオイルという便利なものでしてね——」

「ち、ちがう。紫外線対策でこうしているのではなくてだな……?」

「実はね——」

デュノアさんが『ラウラが何故こんな格好をしているのか』を耳打ちしてくれた。

「なるほど。私に水着姿を見られたくないから、こんな格好を」

「うむ。『相手に水着姿を気に入ってもらえないと嫌われる』という話を聞いてな。それで、もし気に入ってもらえなかったと思うと、なかなか披露する勇気が出なくてだな……」

「ふふ、なんですか、それ」

あまりにバカバカしくて、笑いがでてきた。

一体誰でしょうか、そんな事を吹き込んだのは。クラリツサさんとは思えないけど。

「アリスはそんなことで嫌いになつたりしないよ？」

「デュノアさんのいう通りです。だから見せてください。ラウラの水着姿」

「そ、そうか？　で、では、（クラリツサ、お前たちのセンスを信じるぞ！）」

意を決したラウラが全身を包んでいたバスタオルを脱ぎ捨てる。

露わになったラウラの水着は、黒いゴシック調のビキニに、豪華なフリルがあしらった水着だった。さらに赤い薔薇の髪飾りで髪を左右に結っているのが、倒錯的なアクセントになっている。

神秘的なラウラの容姿とマッチしたそのコーディネイトに、私たちは『おお！』と感動の声をもらした。

「ど、どうだ？　変じゃないか？」

頬を赤めつつ、視線を泳がせるラウラに、私は絶賛の言葉を贈った。

「驚きました。すごくイイですよ。ぎゅーってしたくなりました」

「そ、そうか、ぎゅーとしたくなつたか」

ラウラは嬉しそうに頬へ手をやり、にやにやと緩む頬を抑える。

朱色に染まった顔を覆いながら悶えるラウラは、とてもいじらしかった。

「水着をお披露目できましたし、日焼け止めを塗ってあげましょうか？」

「うむ、ぜひ頼む」

嬉しそうに私の膝の上へ飛び乗ったラウラは「念入りにな」と私に注文する。

その様子を見たデュノアさんが、どこかうらやましそうな顔をした。

「あ、いいなあ、僕もまだなんだ」

「では、デュノアさんもあとで——」

「ダメだ。嫁にオイルを塗って貰えるのは、その旦那だけなのだ」

言って『これは私のものだ』と私に抱きつく。

すっかり甘えモードだ。このモードになると、いつも以上に独占欲が強くなるんですね。

「でも、僕も塗らないと、赤く日焼けしちゃうし……」

「ならセシリアに塗ってもらえればいいだろ」

すると、浜辺で『セシリアはエロいことしてくるから、気をつけて』と誰かが叫んだ。

セシリアは『しませんわよ!』と近くにいたカニをその生徒に投げつけ、

「ごほん。アリスの手を煩わせるのもアレですし、わたくしが塗って差し上げましょう」

「え」

本気で嫌そうな貌だった。

「なんですの、その顔……。女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコット家のわたくしが庶民のために、労力を割いて差し上げようというのよ。それのなにが不服なのかしら?」

「別に不服じゃないけどー?」

と、いっつも、すねたように頬を膨らませる。

「なんだか、気に障るお返事ですけど、いいですわ。さあ、横になってくさいな」

「うん。——でも、えっちなことしないでね?」

『しませんわよ!』と、セシリアは寝そべるデュノアさんのおしりをひっぱ叩いた。



「もう、本気で叩くことないのに……」

オイル塗りが終わったあと、デュノアさんはパラソルの下で叩かれたおしりを撫でていた。彼女の可愛いおしりには、セシリアの手形がくつきりついている。

ちなみに、ひっぱ叩いた張本人であるセシリアは、いま一夏と一緒だ。

「そうばやくな。彼女なりのスキンシップだろ」

不平たらたらデユノアさんに対し、ラウラは上機嫌な様子だ。私にオイルを塗ってもらえたのが良かったらしい。

その彼女は、いま私が持ってきたかき氷をしゃくしゃくとおいしそうに頬張っていた。

「じゃあ、一夏を叩いたのもスキンシップだったの?」

「あれは憎くてやった」

言動が矛盾していることに、気づいているのか、いないのか。

そう平然とそう言っただけのラウラに、デユノアさんがなんとも言えない顔をした。

「まあ、そう怒らずに、かき氷、食べないと溶けますよ」

「うん」

私がデユノアさんにカキ氷を手渡すと、そこへのほほんさんがやってきた。

「あー、ぎつちよん、いたいた」

「あ、のほほんさん、——ってなんですか、その水着は……?」

のほほんさんの水着姿に二回瞬まばたきする。彼女はキツネの着ぐるみを着ていたのだ。

思わず熱中症を心配してしまうが、のほほんさんは元気そうに言った。

「ねえ、ぎつちよん、かんちゃん知らない?」

「簪? いいえ、見ていませんが。いないのですか?」

「うん。ビーチの端から端、探したけど見つからなかった」

「おかしいですね」

出発前に話したので、臨海学校にはきてはいるはずのただけど。私は顎に手を当てて考えた。おそらく隠れてく打鉄式式の調整をしているのだろうか。

荷電粒子砲の開発が進んだので、以前よりく打鉄式式の開発にのめり込んでいるのだ。

「ヘレドクイーン」、プレイベートチャネル簪に個人間秘匿通信を繋いでください」

《Yes My Honey》

プレイベートチャネルが繋がると、モニターにバツの悪そうな簪の

顔が映し出された。

思った通り、隠れて<打鉄式式>をいじっていたみたいだ。まったく、もう……。

「か ん ぎ し ？」

半眼で睨む私に、簪はビクつと肩を竦ませた。

「今すぐ作業をやめて、こっちにいらっしやい。のほほんさんが探しています」

『……わ、わかった。……でも、もうちよっだけ。……あとすこしで調整が終わるから』

「ダメです。30秒しか待ちません。遅れたらカキ氷早食いの刑です」

『!?』

「本気ですからね。30！ 29！ 28！ ——」

問答無用のカウントダウンに、モニターの簪が慌てて後片付けを始める。

そして、きつちり3分後、息を切らせた簪がやってきた。よほど急いだのか水着じゃなくISスーツ姿で。

「……ま、間に、合った？」

「全然、150秒も遅刻です。なので、罰としてカキ氷早食いの刑を執行します」

「……も、もともと30秒なんて、無理。……減刑を要求する」

簪が涙目で訴えてくるが、私は無情に一蹴した。

「ISで飛んで来れば、間に合っていましたよ。——では、のほほんさん」

「はい、ぎつちよん。——のほほんスペシャルをお持ちしました」
「……え、なにこれ」

のほほんさんが持ってきたのは、赤、青、黄、白が混ざったパステルカラーのカキ氷だった。だが、驚くべきところは、その色合いよりもその大きさだろう。なんと氷がどんぶりに盛られているのである。

これがのほほんスペシャル。後にも先にも、のほほんさんしか注文しないだろう逸品に驚愕する簪を置いて、私たちは合いの手を入れ

た。

「はい、いつき、いつき」

「いつきく、いつきく」

もう後に引けないと観念したのか、簪はどんぶりのカキ氷をレンジでかきこんだ。

「くくくくッ!!」

そしてあの頭痛に襲われ、頭を抱えるてのたうちまわる。かなりキているのか、簪は何度も地面を叩いていた。うむ、十分苦しんだようですね。では、これにて刑の執行は終了です。

「……アリス、鬼……」

簪が青い唇で恨めしそうに言ってくるけど、私は『自業自得ですよ』と知らんぷりする。

その後、簪が食べ残した大盛りカキ氷は、のほほんさんが美味しく頂きました。

「さてと、簪のお仕置きもすみましたし、何かしましたよ」

せつかくビーチに遊びに来たわけだし、何もしないのはもったいない。

何がいいでしょうか。傍にビーチボールがあるから、ビーチバレーでもいいけど。

「ぎつちよん、これで勝負しよう」

と、のほほんさんが取り出したのは、旗がついた小さい棒だ。

「ビーチフラッグですか？ いいですけど、私が圧勝しますよ」

足の速さには自信がある。100m10秒フラットですから。はつきり言つて、のほほんさんには負ける気がしない。

「じゃあ、2番目に取った人が勝ちってことで」

「……それ、ただの譲り合い」

簪がボソつとツツコミをいれる。

同感だ。きつと『どうぞ、どうぞ』ってなりますよね。

「でも、ビーチフラッグっていうアイデアは面白いかもしれません」

私の頭に面白いアイデアが浮かんでいた。これは盛り上がるかもしれない。

「ちよつと、セシリア、暑苦しいから一夏と手を組むの、やめなさいよ」
「そういう鈴さんこそ、暑苦しいですわ。一夏さんから離れてくださいな」

(いや、一番暑いのは俺なのだが……)

と、思いつつも強気になれない俺は、鈴とセシリアに両腕を掴まれながら浜辺をおつちらおつちら歩いてきた。くそ、熱いのに、なぜ密着してくるのだろうか……。

おまけに、両側からふにふにと柔らかい感触が腕にあたっていて、余計に熱があがる。

これはいかな。とりあえず、一回離れてもらおう。

「なあ、二人とも、のど渴いてかないか？」

「そうですね、わたくしも少々喉が渴きましたわ」

「確か先生たちが、お店を出してるんだっけ？」

そう、今回の臨海学校では先生たちが、「海の家」を出してくれているのだ。

提案したのは、エイダ先生らしい。なんでも『日本人は夏の過ごし方を知らな過ぎる』とのこと。セシリアの話によれば『イギリス人は夏を満喫するために、全力を注ぐ人種』なんだそうだ。イギリスは夏が短いって聞くけど、それと関係があるのかもしれない。

店に到着した俺たちは、揃ってカキ氷を注文した。

「せんせー、あたしイチゴね」

「じゃあ、俺は練乳」

「わたくしはブルーハワイで」

「はいはい、ちよつと待ってね。——はい、どうぞ」

注文の品を受け取った俺たちは、店の適当な席に腰かけた。

店内には『The Beatles』の曲——これもエイダ先生の選曲だろうか——が流れていた。海の家なのに、なんだかパブっぽい

選曲だな。なんて思いながら、カキ氷を堪能していると、うしろの席から気になる話題が聞こえてきた。

「ねえ、ねえ、なんか1組の子が、なんかイベントするらしいよ、知ってる?。」

「知ってる。知ってる。景品もでるんでしょ?。」

一組の子? ということは、俺らのクラスメイトが主催者か。

一体、誰だろう。こういうことが好きそうなのはリアーデか、田島だけだ。

「あれ、ティナじゃん」

「どうやら、背後でしゃべっていた生徒は、鈴の知り合いだったらしい。」

「あ、鈴じゃん。何、デート?。」

「まあ、そんなところ。で、さっきの話、詳しく聞かせてほしいんだけど」

「いいわよ。なんかね、一組のリデルって子がビーチフラッグの大会を開催するんだって」

『アリスが!』

俺たちは異口同音で叫んだ。

「相変わらず、アグレッシブな奴だな」

そうアリスの行動力に感心していると、鈴がケータイを取り出していた。

アリスに詳細を聞くつもりのようなだ。

『はい、私です。どうしました?』

「聞いたわよ。ビーチフラッグの大会を開くんだって?。」

『ええ。鈴たちも参加しますか? 優勝と準優勝には賞品がでますよ』

「何がでるの?。」

『夕食の時、一夏の隣の席を座る権利です』

へ? 夕食、俺の隣に座る権利? なんだそれりや。いや、別にいいけどよ。

つーか、そんなしょっぱい賞品じゃ誰も集まらないんじゃないか——

「あたしも出るわー！」

「アリス、わたくしも出場いたします。今すぐエントリーを！」

と、二人の大声参加申し込みに、耳がキーンと遠くなる。

どうした、いきなり。そんな意気込むほどの景品じゃなかっただろ。

『わかりました。エントリーしておきますね。開始は午後からです』

そう告げ、アリスは通話を切った。

「ふふ、一夏さんの隣で夕食。これは絶対に負けられませんわ」

「こう見えて足には自信があるんだから。絶対優勝してやるわ」

と、意気込む二人。俺は理解に困った。そんなに俺の隣で飯が食いたいんだろうか。

なににせよ、今夜の夕食は賑やかになりそうだ。それだけは理解できた。



「アリス・リデル主催のビーチフラッグ参加者はこちらです。手の甲に“1”と書かれた人は、ラウラ・ボーデヴィツヒさんのところへ。“2”と書かれた人はシャルロット・デュノアさんのところへ移動してください」

午後。“海の家”でお腹を満たした私は、集まった参加者を指定の場所に誘導していた。

集まった人数は18名。予想以上に多く集まったので、2グループに分け、そこから勝ち上がってきた各一名（計2名）で決勝戦を行う方式を採用した。

「では、“1”グループのビーチフラッグを始めます。準備してください」

私の指示に従い、まずセシリアを含む9名がスタートラインに立つ。

全員の準備が整ったのを見計らい、空砲のピストルを空に向ける。

「では、位置について、よろい——ドン！」

空砲が鳴ったと同時に、第一グループの参加者が一齐に走り出す。先頭に躍り出たのは、やっぱり代表候補生のセシリアだった。そのあとを、同じ一組の自称『7月のサマーデビル』谷本癒子さんが追いかける。てつきりセシリアの圧勝かと思っただが、これは予想外の展開だ。

「おお、これは熱い展開です！」

気づけば、二人は肩を並べていた。

そして、レースも終盤にさしかかり、ゴールを目前に控えた二人は勢いよく浜を蹴った。

「もらいましたわッ！」「させないっ！」

両者がフラッグに向かって飛び込む。

ここからでは、ほぼ同時に見えたが。——さて、勝ったのはどっちでしようか。

「旗を手にした人は、それを掲げてください」

手を挙げたのは——谷本さんだった。

「お待ちになって。勝ったのはこのわたくし、セシリア・オルコットです。よ」

そう言っ立ち上がったセシリアの手には、私の用意したフラッグ。

じゃあ谷本さんが掲げているモノのは……………？

「あ……………」

よくよく見たら、谷本さんの掲げていたそれはフラッグじゃなかった。

彼女が掲げたもの。それはセシリアの水着だった。しかもトップの方。というものは——

『わあああ!! セシリア、前! セシリア、前え!!!』

場にいた全員がジエスチャーで『胸を隠せ!』と伝える。

それに気づいたセシリアが、恐る恐る自分の胸元を見下ろし——

「きゃあぁー!!」

そして、浜辺に響き亘るような悲鳴を上げた。

その後、セシリアはしばらく放心状態だった。

幸い50m先のぼろりだったので、はつきりとは見えなかったけれど（私には綺麗なヴァージンピンクの頂点が見えたけど）、セシリアは心に深い傷を負った様子だった。ああ、恐るべし。7月のサマーデビル。谷本癒子。まさに悪魔だった。

その後、谷本さんは浜辺に穴が開くほど、セシリアに土下座した。「さて、気を取り直しましょう。次は第二グループです。——参加者は、位置についてください」

私はピストルを挙げ、参加者に準備を促す。

それにしたがって、鈴を始めとする第二グループがスタートラインに並んだ。

「では、位置についてよ——」

ドン。その合図と共に抜き出たのは、やっぱり鈴だった。

鈴は猛烈なスタートダッシュを切り、小柄な体格と俊敏さを活かして後続をどんどん引き離していく。ほとんど独走状態で、彼女は50メートルを走り切った。が、しかし——。

「へへ〜ん、楽ッ勝——って、あれ？ 旗は？ ないんだけど……」

え、旗がない？

おかしいですね。ちゃんとレース前にセットしたはずなのですが。『どうしましょうか……』

思わぬハプニングにやり直しを考えていたら、ある声が聞こえてきた。

『東さま、こんなものを拾いました』

『おお？ なんだい、くーちゃん？ 旗？』

『そこに生えておりました』

声の所在は、散歩していた篠ノ之博士とくーちゃんからだった。

そのくーちゃんの手には、ビーチフラッグの旗。
「あつた！」

フラッグを見つけた鈴が、二人の下に駆け寄る。

『ちよつと、それ、貸して！』

『え……。これはくーが見つけたのでございます』

『いいから、よこしなさいよ！』

『ふえ、くーの旗が……』

涙目になるくーちゃんから旗を奪う鈴。その背後にゆらつと何か
が忍び寄る何か。

それは篠ノ之博士だった。

篠ノ之博士は非常にご立腹な様子だった。くーちゃんを泣かされたのが、博士の逆鱗に触れたようだ。

『よ〜く〜も〜く〜ちゃん〜を〜泣〜か〜し〜た〜な〜！』

『ひいー』

鈴が悲鳴を上げた直後、篠ノ之博士のバックドロップが炸裂した。
ボボンと浜辺に埋まる鈴の頭。なんだか最近の鈴って、こんな役ばかりな気がしますね。



篠ノ之博士が立ち去ったあと、私は鈴を勝者にした。

あの時、くーちゃんが旗を拾わなければ、勝っていたのは間違いなく鈴だったでしょうから。

というわけで、決勝戦は予想通りセシリアと鈴の一騎打ちとなったのだが、

「酷い目にあつたわ」「酷い目に遭いましたわ」

散々な目に遭わされた二人は、どこか草臥れた様子でスタートラインに立った。まあ胸をポロリしたり、バックドロップを喰らったり、いろいろありましたからね。私も気の毒に思います。

なので、私は二人を元気づけるためにサプライズを用意した。

「二人とも、元気を出してください。決勝戦用に特別なフラッグを設けましたから」

「特別な?」「フラッグ?」

「ええ、アレを見てください」

私は前方で手を振るう一夏を指差す。そう、彼が決勝戦用の特別フラッグだ。

察しのいい二人は、このシチュエーションの意味に気づいた。

「これって」「もしかして」

「はい、先に一夏の許へたどり着いた方が優勝です。一夏には『ちゃんと受け止めてあげてください』と言っているのです、遠慮なく、彼の胸に飛び込んでください」

特別ルールを告げるなり、二人は瞳に燃えるような闘志を宿した。

ふふ。勝てば一夏に抱きしめてもらえるのだ。二人がやる気を出さないわけがない。

「鈴さん、悪いですけど、この勝負わたくしが頂きますわ。怨まないでくださいね」

「それはこっちのセリフよ。この勝負は絶対、負けないから」

視線をぶつけ合い、闘志を滾らす鈴とセシリア。

ヒートアップする二人に、会場もヒートアップする。うん、盛り上がってきましたね。

「では、位置について、よーい」

二人は前駆姿勢になって、スタートに備えた。

「——ドン——」

の合図で、二人が猛スピードで駆け出す。

スタートは身軽な鈴が一步リードした。しかし、後半はセシリアがすらつと長い脚を活かして追い上げる。そして肩を並べる二人。まさにデットヒートと呼べる展開だった。これはどっちが勝つか検討もつかない。

「さあ、勝つのはどっちでしょうか!——ってあれ?」

まさに決着がつこうとしたその瞬間、それは起こった。

なんと、急に一夏が二人に背を向けて逃げ出したのだ。

目をギラつかせながら走ってくる鈴とセシリアに、俺は怖くなつて身を翻した。

だって、アメフトのラグーマンもびっくりな勢いなんだぞ？ 見ろよ、ふたりの形相。

「いぢがぁー！ あたしを受け止めなさい！」

「いぢがぎーん！ わたくしを受け止めてくださいな！」

今の二人を生身で受け止めたら、きつとバラバラになっちまう！

俺はレスラーじゃないんだ！ ISなしじゃただの高校生なんだぞ！ 逃げ腰にもなるつ。

「ちよつと、なんで逃げてんのよッ！」

「そうですね、旗が逃げてどうしますのッ！」

「だったら、もう少しスピードを落としてくれ！」

『落としたら、負けちゃうでしょうが！』『落としたら負けてしまいますわー！』

「一夏、当たって砕けろ、ですよ！」

「砕けたくないから、逃げてんだバカヤロー！」

心からそう叫んだあと、俺は命欲しさにひたすら突き走った。

もう無我夢中である。そのせいか、前方不注意で何かにぶつかってしまった。

でも、ぶつかったそれは顔が埋まるぐらい柔らかくて、暖かくて、そう、まるで女性の――

「ひふふへえ〜？ (千冬姉)」

気づけば、俺は千冬姉の豊満な胸に顔をうずめていた。

「なんだ、一夏、いきなり私の胸に飛び込んできて。私が恋しくなったのか？」

千冬姉は俺を胸にうずめたまま、カツコよく腰に手を置いた。その顔は満更でもなさそうだ。

だけど、それも数瞬の間のことです、すぐさま普段の厳格な織斑先生の顔になった。

「——だが、時と場合を弁えろ。いいな？」

時と場合を弁えたら、いいのだろうか。——という些細な疑問は置いておいて、俺はとりあえず、謝ることにした。

「え、あ、うん、ごめん、千冬姉」

「うむ。わかればいい。——で、お前たちは何を見ているんだ？」

千冬姉から顔を離すと、背後でセシリアと鈴がこの世の終わりみたいな顔をしていた。

あ、もしかして傍目からは、俺が千冬姉の許へ逃げ込んだように見えたのだろうか。

「二夏さんは、やっぱりお姉さんのことが……」

「二夏のバカ、こんな結末あんまりよ……」

セシリアと鈴が自信喪失した表情で辛みを吐き出すと、後方でアリスが宣言した。

「勝者、織斑先生！」

かくして、アリス主催のビーチフラッグは千冬姉の優勝で幕を下ろしたのだった。

第41話 臨海学校、その夜——その1

午後六時半。初日の自由時間を終えた俺たちは、大宴会場で夕食を取っていた。

気になる夕食のメニューだが、刺身に小鍋、山菜の和え物、赤だしという和食だ。しかも、刺身は高級魚であるカワハギである。高校生の飯にしてはなんとも羽振りの良いメニューだ。

「夕食はお刺身ですか。一夏、この魚はなんですか?」

俺の正面に座るアリスが刺身を見て不思議そうに言った。

「ああ、これか? これはカワハギだ。高級魚なんだぜ?」

「ほう、カワハギ。初めて聞きました。で、この醤油に付けられればいいのですか?」

「おう、それと添えてある本ワサをたんまりつけるとうまいぞ」

俺のアドバイスに日本人の生徒がぎよっとする。

しかし、俺を信じて疑わないアリスは、カワハギの刺身に大量のワサビを盛って一口。

「お、これはなかなか——うツ!」

ワサビがツンときたのだろう。それから逃れようと、謎のシャドウボクシングを始めるアリス。

おそらくワサビと戦っているつもりなのだろうけど、その程度でワサビの辛さから逃れられるはずもなく、目からは漫画みたい涙があふれ出していた。くく、まさか、こんなにうまくいくとはな。

「もう、ちよつと、一夏やりすぎよ。——はい、アリス、お酢」

と、隣の鈴がアリスに透明な液体の入った小瓶を渡す。

それを水だと思ったアリスは『ありがとうございます』と一気に飲んで、

「ぶっ!」

大層に吹き出した。まあ、そうなるわな。酢だし。

「ふえー、りん、謀りましたね……」

ワサビと酢のダブルパンチを受けたアリスの顔は涙と涎でぐちゃぐちゃだった。

そんな見るも無残な様相を呈すアリスを見かねたのはラウラだ。ラウラはどんと箸をおいた。

「お前ら、人の嫁に何てことをするんだ！ 嫁が酸っぱいではないか！ ケホケホ」

「ホントだよ。——ほら、アリス、これで涙と涎を拭いて。綺麗な顔が台無しだよ？」

涙と涎でぐちゃぐちゃになったアリスの顔を、シャルロットが綺麗に拭やる。

それを見届けてから、ラウラが鬼の形相を鈴に向ける。

「常々思っていたが、貴様の嫁に対する悪ふざけは看過しがたい」「だったら、何？ あたしとやる気？」

「もちろんだ。やられたらやり返す。報復攻撃は国際社会の常識だ。——くらえ！」

「ああ！ あたしの小鍋に大量の酢が！ ケホケホ、これじゃもう食べられないじゃない！」

小鍋から立ち上る酸味に俺まで咽せる。こりや、もう食うのは無理かもしれないな。けほけほ。

「ふふ。嫁を泣かした報いだ。存分に咽び泣くがいい。ケホケホ」
てか、おまえまで咽てどうする。報復には自分も痛みを伴うと言いたいのか。

「もう、あつたま、きた！——一夏ちよつと手を貸しなさい。ドイツを泣かすわよ」

え、ここで日中同盟かよ。

火種を投げたのは俺だが、これ以上戦火を拡大させる気はないぞ。

「ドイツに制裁を加えて、賠償として小鍋を徴収してやるんだから」

「ふん、私が共産主義のネコに負けるものか。さっさとかかってこい」
ラウラもラウラでいらん挑発をするな。てか、共産主義のネコってなんだ。

ともかく両手に持った醤油を下げ。食卓を血の海、じゃない。醤油の海に変えるつもりか。

「おい、お前ら!!」

鈴とラウラが醤油を持って睨み合っていると、大宴会場のふすまが勢いよく開いた。

入ってきたのはご立腹な千冬姉、改め、織斑先生だ。

「お前らは、静かに食事をするのができんのか!!」

『ひいー国連がきたー!』

千冬姉の怒声に鈴とラウラが抱き合って震えあがった。

うん、千冬が国連か。言い得て妙だな。誰も逆らえないという意味で。

「まったく、おまえらときたら……。織斑、嵐、罰として刺身をリデルにくれてやれ」

ええー! そんなあ……! !

今夜のメインディッシュを、高級魚のカワハギを、か!

「い・い・な?」

鋭い目付きで睨まれ、俺と鈴はアリスに多額の戦争賠償^{カワハギ}を支払ったのであった。

今回の教訓、食べ物で遊ぶな。

しつつかし、まさかメインディッシュのカワハギを失うことになるうとは。こんなことなら先食っておけばよかったぜ……。

「二夏、カワハギっておいしいですね。おいしいですね。本当に美味しいので二回言いました、てへへえ」

く、アリスめ、完全に見せびらかしながら食ってやがる。ちきしよーめ。

「二夏さんたら、そんなに食べたいのでしたら、わたくしのお刺身を差し上げましょうか?」

俺が箸をガリガリ齧りながら見ていたら、隣のセシリアが言った。

おお、カワハギをくれるのか。なんていい奴だ。これが^{ノアリス、オプリージュ}持つ者の義務か。

「あ、もしかして、セシリア。刺身、嫌いなのか?」

「そんなことありませんわよ。お寿司も大好きですわ。でも、一夏さんてば、おやつを取られた子供みたいなんですもの。なんだか可愛らしくて、あげたくなってしまうのですわ。——はい、どうぞ」

手慣れた手付きで刺身を一切れ摘まみ、それを俺の口元に差し出す。

これはもしかしてあれか、いわゆる『はい、あくん』で食べさせようとしているのか？

さすがに大勢の中で『はい、あくん』は恥ずかしいんだが。

『セシリア、くれるのはありがたいんだが、自分で食べられるから』

『そういうわず、ほら、ほら一夏さん、早くしないと、お醤油が垂れてしまいますわ』

やたら嬉しそうに、さあ、さあ、と進めてくるセシリア。

えくい、据え膳くわぬは男の恥か。俺は羞恥心に耐えながら、口を突き出した。

「じゃ、じゃあ、あ、あくん」

「はい、あくん♡」

俺は流されるがまま、カワハギを口に含んだ。

「お味の方は如何かしら？」

「そ、そうだな——」

『セシリアが食べさせてくれたから、倍うまかった』とか言えたら大物なのだろうけど、善の小鉢ぐらい小物な俺は赤面して『うまかった』と答えるのが精一杯だった。それでもセシリアは満足したのか、

「ふふ、お粗末様でしたわ♡」

と、嬉しそうに頬を赤めて、箸の先を咥えた。それが間接キスだと気づいたのは、食事が終わったあとのことだ。



「よし、大方食事は済んだな。まだの者は食べながら聞け」

和気藹々とした食事も終え、一同がその余韻を楽しんでいると、千冬姉が言った。

生徒たちも何事かと、箸や湯飲みを置いて、耳を傾ける。

「今より肝試しを行うことになった。よって、各自、8時までにはロビー

へ集合しろ」

肝試しって、夏の風物詩でもある、あの肝試しだよな。

しかし、しおりで確認してみても、そんな予定はどこにも記載されていない

「えっと、日程にそんな予定、ありましたっけ？」

「いや予定にはないのだが、旅館の計らいというか、勘違いでな」

「勘違い？」

「ああ。実は去年、ある生徒の提案で肝試しをやってな。そのことから仲居さんたちが、今年もやるものだど勘違いしたらしい。先生たちと相談した結果、せっかく準備してくださったのに断るのも悪いだろうという事で、今年も行おう事にした」

へえ、ベテランそうな女将さんなのに、意外とうっかりさんなんだな。

でも、肝試しとは面白そうじゃないか。臨海学校らしくなってきたな。

「ぐぬぬ、会長め、いらぬことを……」

そんな風に心を躍らせる俺の正面では、なぜかアリスが怨めしそうに箸を握り絞めていた。

「会長？　会長って生徒会長の楯無さんのことか？」

「そうです。さつき千冬さんが言った。去年肝試しを提案した生徒は、きつと生徒会長のことです。こんな事を提案する生徒なんて、彼女ぐらいしかいません」

IS学園の臨海学校は、毎年この花月荘のお世話になっているそうなので、現在2年生である楯無さんも去年はここにやってきたのだろう。その時に『肝試し』なんてものを提案した。あの人、そういうこと好きそうだな。

「まあ、いいじゃないか」

「よくありません！」

怒鳴られて、俺はひるんだ。アリスがそんな事でムキになるなんて珍しい。

普段なら『いいじゃありませんか。面白そうで』とか言いそうなの

に。ははくん、さてはお化けが怖いんだな、コイツ。



食後、午後8時半。千冬さんの唐突な『肝試し』発言から一時間後。私たちは旅館から数百メートル離れたある寺に招かれ、住職から怪談を聞かされていた。

「嫌な感じがするなーと思いつつも、男性は海の方へ向かって歩き出すと、そこには——」

話の内容は、海難事故にあった少女が、その寂しさから次々と人を襲うという話だ。しかも、恐ろしい事に実話らしい。目の前には、その少女の持ち物だという靴が供養のため置かれていた。

「はうう……」

本堂の最後尾。この手の話が苦手な私は、座布団を被り、今か今かと終わるのを待つ。

そんな私を見て一夏がニタニタわらう。完全に怖がる私を楽しんでいる様子だ。

「はは、やっぱり、アリスはこういうの苦手だったか」

その小ばかにしたような口調に、私はかちんときた。

「バ、バカ言わないでください。こんなの、へへへっちやらですうーツ。え、Xファイルだって一人で見れるんですからねッ！どんなもんですかっ！」

「いや、全然すごくねーから——って、今アリスの後ろに何かいなかったか？」

「へ?」

ちよつと、真顔で何を言っているのですか、この人。

私たちが最後尾なのだから、後ろに人がいるわけなのに。きつと幻覚でしょう。

「はは、一夏、あなた疲れているのよ」

だから、一夏の見た物は幻、けっして幽霊とか、幽霊とかじゃない。違うったら、違う！

仮に一万歩ゆずって幽霊だったとしても、化けて出ていいのは両親とエイミーだけです！

(ううう、一夏が変なことを言うから、余計に怖くなってきましたよお……)

人間、恐怖に駆られると、草木の擦れる音も声に聞こえるといいますが、本当のようですね。外から聞こえる風の音も、なんだか女性の声に聞こえてきてしまう。

(やつほく、ちくちゃん。遊びにきたよ♪)

(来ましたー)

(帰れ)

(ふえ……、帰れなんてひどいでございます) ウル

(あく、ちーちゃんがくーちゃんを泣かしたあー。いっけないだつ！

いけないんだつ！ せーんせいに言っつてやろつ！)

(バカめ、私とその先生だ——ってそんなことよりも、東、ニヤニヤしていないで手を貸せ！ お前の子だろ！ ああく、ちびっこ、お前に言っつたわけじゃなんだ。だから、ほら、泣くな) オロオロ

これも幻聴だ、幻聴。絶対に人の声じゃない！

「やがて、海辺からぴちやり、ぴちやりと濡れた足音が聞こえてきて——」

ああ、物語が佳境に入り、怖さが増してきた。住職の語りにも力が入ってきてる。

うー。これは本当にダメです。こ、こうなったら、恥を忍んで——「せ、セシリア……」

恥も外聞もなく、私は情けない声でセシリアに縋りついた。

「あらあら。アリスつたら怖いのかしら？ 仕方ありませんわね。では、話が終わるまでわたくしがぎゅつとしてさしあげますわ。これなら怖くないでしょ？」

「はー」

私は言葉に甘えて、セシリアの豊満な胸に顔を埋め、ぎゅつと抱き

しめもらう。

その暖かさに、長らく忘れていた母親の温もりを思い出した。
ああ、癒されます。

「むー、私という旦那がいながら……」
「ごめんなさい、ラウラ。こういうのはセシリアではないとダメなんです。」

「むー、セシリアばかり……」

それとデユノアさんはセシリアが嫌いなのでしょうか。最近、仲が悪いですよね。

「——それ以来、少女の霊は現れなくなったとのことですが」
セシリアの腕の中で耳を塞いでいると、ようやく話が終わったよう
だ。

これで肝試し終了ですよね？ さあ旅館に帰りましょう。みんな
で手を繋いで（↑これ重要）。

「よし。では、これから参道を通って、祠からお守りを取ってきてもら
う」

え、今から参道を通って祠の守りを？

参道って、ここへ来る途中に見かけた、真っ暗で不気味の道のこと
ですよね？

幽霊がこぞって入居を申し出そうな雰囲気、あの獣道ですよね？

あそこを通ってお守りも持って帰ってこい、と……？ はは……

「せんせー、リデルさんが泡吹いて倒れましたー！」

「安心しろ、リデル。ツーマンセルだ」

私は息を吹き返す。よ、よかった。それはすごく助かる。

よし、そうと決まれば、私のパートナー候補は彼女しかいない。

「篠ノノノノノノのきーん、私と組みませう！」

神社の娘である篠ノのさんと一緒なら怖いものは何もない。

きっとお化けが出て、『悪霊退散』とかいつて祓ってくれるに違
ない。

「リデル、ペアはくじ引きだ」

「せんせー、リデルさんが泡吹いて倒れましたー！」

「起きろ、リデル。くじ引きにしないと、バカどもが織斑に押し駆けるだろ」

そうですか、そうですね。揉めないようにくじにするのは良い手だと思えます。

こうなったら、自力で篠ノ之さんとのペアを勝ち取ってみせます。「こうみえて、運だけは強いんですから」

意気込んで列に並び、くじを引く。番号は9番だった。

さっそく篠ノ之さんの許へ行き、番号を確かめる。

「篠ノ之さん、番号は何番ですか？ 何番ですか？ 何番ですか？ 何番ですか？」

「そう急かすな。——む、これは9番だな」

「本当ですか！」

「いや、待て、これは6番だ」

ひゅーと、冷たい風が私の髪をあざ笑うかのように撫でる。

あ、は、あははは……。終わりました。私は、もう、だめ、かもしれない。

「と、ところで、その、一夏は何番なのだ？」

「俺か？ ちよつと待てくれ、今開ける」

一夏が紙を開くと、6番と書かれていた。

「おお！ 6番だな」

番号を聞いた篠ノ之さんが嬉々と言った。

逆に私は怨霊のような表情で一夏を睨む。うらやましやー。うらやましやー

「いや、待て箒、これは——9番だ」



というわけで、一夏とペアになった私は仄暗い参道を提灯片手に歩いていた。

参道は仄暗く、空気は生暖かい。『お化け出ますよオーラ』がむん

むん漂っている。できるなら、すぐさま回れ右をして帰りたいところだ。

「アリス、足元暗いから気を付けろよ」

「にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー」

「よし、こつちの道を右だな」

「にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー」

「あとはこの先に目的地の祠が」

「にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー、にやー」

「——つて、さつきからにやーにやー、うっせーなもう！ 少し静かにしろよー！」

「仕方ないでしょ！ こうして叫んでないと怖いんですよ！」

こうやって大声を出しているうちは、気が紛れてすこし怖さが和らぐのだ。

我ながら素晴らしい対処法だと思うのに、一夏はそれが鬱陶しいという。

「ともかく、そのにやーにやー、ネコの鳴き声みたいなのやめてくれ」
「わかりましたよ」

「ここまで嫌がられたら仕方ない。別の方法にしよう。」

「にやー？ にやー？ にやー？ にやー？ にやー？ にやー？
にやー？ にやー？ にやー？」

「疑問形にしたらだけじゃねーか!!」
「にやー？」

「ダメ?』みたいに首を傾げてもダメだ！ 俺は叫ぶのをやめろって
言ってるんだ」

「しよ、正気ですかにや!!」
怯えている女の子に向かって、黙れなんてひどい発言にや！

「俺は正気だ。っーか、にやーにやー言っている奴に正気を問われた
くねー」

「だったら、怖くないようにエスコートしてくださいにや」
「わかったよ。——ほら」

そう言つて、空いた手を私に差し出してくる。

え？ 手を、握れ、と？ 私は恐怖心を忘れて、頬を朱色に染めた。
「え、えつと……？」

視線を泳がしながら照れる私に、一夏が半眼を向けてくる。

「おまえな、エスコートしろつて言ったのはアリスだろ？」

「そ、そうですね。すみません」

言い出して、拒否するのは相手に失礼だ。

私は一夏の右手に、自分の右手を差し出した。

「いや、おまえ、握手してどうする……」

気が動転していた所為で、差し出す方の手を間違えてしまった。

「ああ、すみません！ こっちですね！」

「よし。じゃあ、行くぞ」

言つて、一夏が私の手を引く。私はやや引つ張られる形で歩き出した。

「うう……」

一夏と手を繋いで歩くのはこれで二回目だけど、未だになれない。ドキドキとビクビクが入り混じり、変な感じだ。何かで気を紛らわさないで、私の中で妙な化学反応が起きそうだった。

「にやー……」 ボソ

「おい、にやーにやー言うのは無しだぞ」

「ちくせう」

釘を刺されたので黙る。そのとき、草木がざわつと不自然に揺れた。

「ん？ なんだ？ 何かいるのか？」

明らかにモノの気配がした。しかも近づいてきている気がする。

いつもなら体が勝手に臨戦態勢を取るのだが、今回はまるで動いてくれなかった。戦場の恐ろしさとは違う、霊的な恐怖に体が竦んでいた。

「い、一夏？」

怖くなった私は一夏の手を強く握った。その手を一夏が『大丈夫だ』と握り返してくれる。

それに頼もしさを感じ、私は場違いにもきゅんとしてしまった——次の瞬間、物影が正体を現した。

「あ〜り〜す〜ちや〜ん、う〜ら〜め〜し〜や〜」

ぬ〜と草木の中から浮かび上がったのは、あどけない女性の顔だった。

どこか愛嬌があり、可愛らしくもある。でも、女性には——首より下がなかった。

「うにやあああああああああ!!!」

現れた首なし女に、私は絶叫して尻もちをつく。で、でたー、生首女!

「うお、なんだ、東さんじゃないですか。脅かさないてくださいよ」

「え? 東さん?」

言われてようやく気づく。生首女性の正体がISの開発者——篠ノ之東博士だということに。

どうやら顔だけを懐中電灯でライトアップしていたため、生首と勘違いしてしまったようだ。

隣にはくーちゃんもいて、一夏に『トリック・オア・トリート』と意味不明なこと言っていた。くーちゃん、それハロウィン。

「ふふ、アリスちゃん、びっくした?」

「はは、わ、わたしがびっくりするはずないでしょ?」

強がる私に、くーちゃんがふふつと口元を押さえて笑う。

「でも、うにやあーって叫んでおられました」

悲鳴を上げた私が可笑しかったのか、くーちゃんはなおもクスクスと笑う。

こんな年下に笑われるなんて情けない。恥ずかしかった私は露骨に話題を逸らした。

「で、なんでこんなところに」

「肝試しするって聞いたから、いっくんたちを脅かしてやろうと思っただのさー! ブイー!」

「ブイじゃありませんよ！」

まあ、そんなことだろうとは思いましたけど！

「わー、アリスちゃんが怒ったー！ くーちゃん、にげろー」

私が怒鳴ると、束博士は怯えもせず闇の中を引き返していった。その後をくーちゃんが『束さま、おいていかないでくださいませ、一人は怖いでございます』と慌てて追いかけていく。

私はひどく疲れた気分になり、深い溜息をついた。

「まったく……」

「まあ、そう怒るなって。人を脅かすのも肝試しの醍醐味だろ」

「そういうことにしておいてあげ——」

ます、と言いかけたところで、私は下半身の違和感に気づいた。

「どうした、アリス？ もしかして腰が抜けたのか？」

私はギクつとした。まさにその通りだったのだ。

「はは、世界に喧嘩を売った天下のアリス・リデルでも腰を抜かすんだな」

「ど、どうせ私は腰抜けのおマヌケさんですよーだ！」

「こら、砂をかけるな。——で、どうだ？ 歩けそうか？」

「だいじょうぶですよ、これぐらい——きちゃん」

強がり、一人で立ち上がろうとするも、足腰に力が入らず、また尻もちをついてしまう。

私は赤面した。どうやら、歩くどころか、立ち上がることも儘らないようだ。

「立てないみたいだな。歩けそうもないし、おんぶしてやろうか？」

おんぶという単語を聞いて、私の胸がどきんと跳ねた。

歩けない以上、一夏に運んでもらうしか手はないわけだけど、

「へ？ 変なこと、しません？」

と、ほんのり赤面しながら上目使いで一夏を見上げる。

「しねえよ。むしろ、アリスの方こそ俺に変なことするなよ？」

「しませんよ、私をなんだと思っているんですか！」

「だから、砂をかけるなって！」

「もう……。じゃあ、その、お願いできますか？」

一夏は任せろと私に背中を向けた。それによじ上って身を預ける。彼の背中は思いのほか大きく、そしてたくましかった。

「ん？ どうした？」

「いえ、やっぱり一夏って男の人なんだなあと思ひまして」

広い背中もそうだけど、私を軽々しく持ち上げる姿にやっぱり男性なのだと実感する。

それはとても不思議な気分——今まであまり感じた事のない気分だった。

「——じゃあ、しつかり捕まってるよ」

「あ、はい」

言われて、恐る恐る彼の首周りに手を回す。

彼の体温が直に伝わってきて、心臓の高鳴りは尋常じゃなくなつた。ありきたりな表現だけど、心臓が張り裂けそうになる。

「ん？ なんだ、おまえ、緊張してんのか？」

見抜かれ、心臓が一際跳ねる。それを誤魔化すように、私は口調を強めた。

「ま、まさか、これぐらいで私が緊張するわけないでしょ？ へっちゃらですよ」

「ウソつけ。手を握られたぐらいで赤面しているやつが何をいうか」
痛いところを突かれて押し黙る。けれど、悔しかった私は強気に言い返した。

「そ、そういう一夏だって、どうせ緊張しているのでしょ？ 私みたいな美女を背負って」

「ばか、そんなわけあるか——いや、そのわりー、今のウソだ。言出した俺がいうのもあれだけど、今ちよっとドキドキしてる」

「え？」

「あ、でも、下心があつて言い出したんじゃないから、それだけは安心してくれ！」

そう言った彼は耳まで真っ赤になっていた。おぶられているので、それがよく判る。

でもって、慌てて弁解する彼がなんだか可愛くて思えて、私は

ちよつと愉快的な気分になった。

「わかつていますよ。あなたがそういう人じゃないくらい♪」

「そうか、それは、その助かるよ」

「いえ。こちらこそ、その迷惑かけて、ごめんなさい……。すぐく助かりました」

「気にするな。こういう時ぐらいしか、俺はおまえの役に立てないからな」

「そんなことありません。日頃から役にやっていますよ」

「そうか。そりやよかつた」

それつきり会話は途絶えた。でも、不思議と痛い沈黙ではない。お互い、この沈黙を愉しんでいるように感じられた。こういうのを「いい雰囲気」というのだろうか。

それからしばらくして、目的の祠に到着した。その中に用意されていたお守りを手に入れ、来た道を引き返す。本堂にたどり着く間、私は相変わらず腰抜けのまま、結局、最後の最後まで一夏におんぶしてもらったことになった。

「アリス、そのお守り、お前にやるよ。なんかご利益ありそうだし」

「そうですか。では、記念に貰っておきます」

「ああ、腰が抜けた記念にもらつとけ」

「一夏！」

「はは、ほら。ついたぞ」

境内では、肝試しを終えた生徒たちが、旅館が用意したあんみつを味わっていた。

見たところ、全員いる。どうやら、私たちが最後のようだ。

「あー！ リデルさんが織斑くんにおんぶしてもらってるー！」

一夏におぶられる私を見た生徒が声をあげた。

それに反応して、そろそろ女の子たちが集まってくる。中には篠ノ之さんの顔もあった。

「一夏、貴様、アリスになに不埒なことしている！」

「不埒って。アリスが腰を抜かして立てなくなったから、こうやっておぶってるだけだ」

顔から火が出そうになったけど、事実なので黙る。

でも、篠ノ之さんは納得いかないようで、さらに責め寄ってきた。「ウソをつけ。あのアリスが腰を抜かすものか。見苦しい言い訳は男らしくないぞ」

「いえ、お恥ずかしい話、本当なのです」

自分のせいで一夏が責められるのは心苦しいので、私は事情を説明した。

「——実は驚かされた拍子に腰がぬけてしまいました。そこで一夏におぶってもらったのです。一夏に邪な気持ちがある訳ではなく、あくまで善意なので、そう怒らないで上げてください」

「む、そうか。アリスがそういうなら。でも——」

「でも？　なんだ？」

「いや、なんでもない」

そう言って、面白くなさそうに視線をそらす篠ノ之さん。

一夏は理解できなかつたみたいだけど、女の私には彼女の言葉が理解できた。

（好きな男性に別の女性が接近すれば、それに故意がなくてもいい気はしないですよ）

今回は篠ノ之さんに悪い事しましたね。かといって私にどうにかできたわけでもありませんし。

よし、今回の件は全部会長の所為にしましょう。そうしましょう。篠ノ之さん、この臨海学校が終わったら、生徒会長を泣かしに行きましょう」

「うむ。うむ？　せ、生徒会長をか？」

「そうです。あの人が諸悪の根源です。私たちが学園生活を謳歌するには、あの女狐を退治しないといけません。私と共に戦いましょう」
「フンと意気込む私に篠ノ之さんが苦笑する。

こうして肝試しは無事（じゃないけど）終了した。その後、私は旅館まで一夏におぶってもらうことになったのだが、篠ノ之さんの表情はずっと暗いままだった。

第42話 臨海学校、その夜——その2

肝試しを終え、旅館に帰ってきた私は、教師が宿泊する別館へと向かっていった。

手には売店で買った適当な差し入れ。迷惑をかけた一夏に礼をしようと思つてのことだ。

私が別館へ向かうと、いつものメンバーたち——篠ノ之さん、鈴、セシリア、ラウラ、デユノアさん——が千冬さんの部屋の前で聞き耳を立てていた。その顔はなぜか興奮しているようにも見えるが。

「何をしているのですか?」

話しかけると、全員が『シー』と人差し指を立てた。

そして、ジェスチャーで部屋の戸を指し、無言で『お前も聞け』と指示する。

(はて、なんでしよう?)

彼女たちの指示に従い、戸に耳を押し当てる。室内から二人の会話が聞こえてきた。

『ん、ばかもの、もっと優しく、しろ——んん!』

『はいはい、もしかして、だいぶん溜まつてた? ここ、すごく固いぞ?』

『ん! ああつ。ちよつと、そこは、やめつ……あん』

部屋から聞こえてきた声は、やたら色っぽい女性の喘ぎだった。

声の主は千冬さんのようだけど——

(こ、これはどういうことですか!?)

興奮半分。驚愕半分で聞くと、みなさん揃って『こつちが聞きたい』という表情をした。

どうやらここにいる全員が、この状況を把握していないらしい。でも、行われている内容は見当がついているらしく、

(これって大丈夫なの?)

(いや、大丈夫じゃないでしょ。いくら仲がいいって言っても姉弟なんだし)

(だが、日本ではよくあることだと聞いたぞ?)

(そうなんですの!?)

(ないない! 誰だ、そんなことを言ったやつは!)

(私の部下だ。クラリツサは博識でな。特に日本の文化に詳しいのだ)

(なら、その部下に言っておいてくれ。カルチャーとサブカルチャーは違うとな)

(それよりどうします?)

仮にこの戸の向こうで想像通りの事が行われていたら大問題だ。何せ教師と教え子というだけでもアウトなのに、血縁の姉と弟である。私はこれをルイスにどう説明すればいいのか。

(もう少し様子を見よう。我々の早合点かもしれんしな。はあ、はあ)(あんだ、単純に続きが聞きたいだけでしょ)

私も思った。ラウラつてば、さつきからモジモジと忙しないですものね。

きつと敬愛する千冬さんの艶やかな声を聞き、興奮したのでしよう。

その気持ちはわかりますよ。大っぴらには言えませんが、私も興奮しています。

(ラウラの言うことも一理あると思います。声だけでは判断材料として不十分です。誰かファイバースコープを持っていませんか?)

(持っている訳ないでしょ、そんなもん)

では、仕方がない。ここで盗み聞きを続け、証拠を掴むしかないだろう。

私たちはもつとよく聞こうと、戸に耳を強く押し付ける。と、

戸が私たちの重みに耐えかね、部屋の内側に倒れた。

ばたくん。そんな擬音を発しながら、事の最中であろう二人の部屋に雪崩れ込む。

.....

折り重なるように倒れ込んだ私たちを見て、千冬さんが半眼を向けた。

「おまえらは、何をやっているんだ？」

そう言う千冬さんは服を着ていた。一夏もちゃんと旅館の浴衣を着ている。

「いったい、これはどういう事でしょう。もしかして着たままする気だったとか？」

「その顔を見る限り、どうせつまらん誤解をしているのだろう。だから、先に言っておいてやる。私は一夏にマッサージをしてもらったただけだ。やましい事など何もないぞ」

へ？ みんながそんな顔をした。一夏にマッサージをしてもらっていただけ？

「エツチな？」

「普通のだ！」

私はバシンと頭を叩かれた。



「まったく、おまえらときいたら……」

呆れた奴らだ、と付け加え、千冬が備え付けられた椅子に腰かける。はずかしい誤解をした挙句、盗み聞きがバレたアリスたちは、千冬の前に正座をさせられていた。

その光景たるや町奉行が小悪党を裁いているようで、さながら時代劇の『遠山の金さん』を連想させた。今にも千冬が『おうおう、このく暮桜>に見覚えがねえとは言わせねえぜ』とでもいいそうな雰囲気だ。

「まあいい。今回は大目に見てやる。で、腰の具合はどうだ、リデル？」

「え？　まずまずですが」

アリスは自分の腰を擦った。

あれから時間が経ったこともあり、調子は戻りつつある。歩く分には不自由ない。

「そうか。では、こいつにマッサージしてもらえ
「え!？」

思わぬ提案に、アリスの身体が数センチ浮いた。

「束が迷惑をかけたみたいだからな。実はあいつを肝試しに参加させたのは私でな。その詫びだ。——一夏もこいつの世話になってい
るんだろ? 少しは労ってやってはどうだ?」

「よしきた。じゃあ、アリス、その布団で横になってくれ」

と、言うなり腕まくりし、先ほど千冬が寝ていた布団を叩く。

どことなく断れる雰囲気ではなかったので、アリスはおずおずと横
になった。

「こ、こうですか?」

「ああ、それでいい」

うつぶせになったアリスの上に一夏が跨る。

ビクツとアリスの身が強張るが、一夏は構わずマッサージを始め
た。

「じゃあ、始めるぞ。痛かったら言ってくれ」

「は、恥ずかしくなった時は?」

「がまんしろ」

「うゝ……」

羞恥プレイを強要された気になってアリスは逃げ出したくなつた
が、いざマッサージが始まってみると、程よい圧に自然と心が和らい
だ。これはなかなか、いや、かなり気持ちがいい。

「じゃあ、今度は背骨のあたりをマッサージしていくからな」

一夏は脇腹辺りに手を掛けた。そのくすぐったい感触にアリスが
身を窄める。

「きやはは、一夏。そこ、くすぐりたいです」

「ん? こここがくすぐりたいのか?」

「きゃふふ、そうです。そうですってば、ふふふ。もう真面目にしてく
ださい」

「はは、悪い悪い。ちゃんとやるよ。——ほれ」

「ふふふ、ど、ど、どがちゃんですか。ふふ、お、怒りますよっ。」

「わかった、わかった」

アリスが唇を尖らすと、一夏は笑いながらくすぐるのをやめた。そんな二人の様子を五人が険しい目で見つめる。じゃれ合う二人は、完全に恋人のそれだった。

「おまえら、仲がいいな。さては壁屋の回し者か？」

五人の気持ちを代弁した千冬に、二人は顔を赤くした。そして、一夏は追及を逃れるようにマッサージを再開し、アリスは誤魔化すように適当な話題を振った。

「それにしても、一夏は本当にマッサージが上手ですね。専属マッサージ師として抱えたいぐらいですよ。——どうですか？ 払うものはちゃんと払いますよ？」

「お、いくら出す？」

「リンゴ三つでどうです？」

「俺は昭和のアイドルか！」

グググ。急に強く指圧され、アリスは痛さにバンバンと布団を叩いた。

「わ、わかりました。では、篠ノ之さんのメロン二つでどうです？」

「よし、手を打とう」

一夏とアリスがぐつと親指を立てる。箒は二人に手刀を落した。

「人の胸を賃金にするな！ やるならお前のパンケーキ二つをくれてやれ！」

箒の反撃にアリスがガーンとショックを受ける。

確かにそんなに大きくないけど、パンケーキはあんまりだ。肉マンガくらいはある。

「どうせ、篠ノ之さんからみたら、私はパンケーキです……」

「あ、わ、悪かった。言い過ぎた」

ムスつと枕に顔を埋めて不貞腐るアリスに、箒が反省する。

一夏は苦笑しながら、優しく慰めてやるようにマッサージを続けてやった。

「さて、マッサージはもういいだろう。一夏、風呂にでも入ってこい。部屋が汗臭くなると困る」

「そうだな、じゃあ、ちよつとひとつ風呂浴びてくるよ。みんなはゆつくりしていつてくれ」

『できたら、だけど』と付け加え、一夏は苦笑しながら部屋を出て行った。

一夏が出ていくなり、部屋の空気がずーんと重くなる。心成しか、酸素が少なくなった気がした。

「……………」

「……………」

「……………」

苦手意識のある鈴はもとより、社交的なセシリア、付き合いが長いはずの箒ですら口をつぐんでいる。千冬のプレッシャーに気圧され、口が開けないという具合だ。

「どうした？　いつものバカ騒ぎはしないのか？」

騒げない原因を知っているくせに、と三人は心の中で思った。

そんな事をいうあたり、千冬はサドツ気があるのかもしれない。

「情けないやつらだな。すこしはあいつらを見習ったらどうだ？」

千冬は視線で、キャツキヤとじゃれあうアリスとラウラを指した。

二人は千冬のプレッシャーなど露ほども感じていない様子だ。アリスもラウラも千冬慣れしている。

「はは、みんな、がんばって」

シャルロットも比較的落ち着いている様子だった。

箒たちと違い、想い人の姉というプレッシャーがないからだろう。その分、気が楽なのだ。

「まあ、いきなり肩の力を抜けというのは無理か」

そう言つて立ち上がると、備え付けられた冷蔵庫の前にゆき、中から冷えた清涼飲料水を6つ取り出した。それをぽいぽいとアリスたちの方へ投げる。アリスはりんごジュース、箒は緑茶、鈴はスポーツドリンク、セシリアは紅茶、シャルロットはオレンジジュース、ラウラは炭酸飲料を受け取った。

「私からの差し入れだ。遠慮するな。飲め」

アリスたちは『では、頂きます』と受け取った飲料水のプルを引き、

中身を煽る。

それを一瞥するやいなや、千冬がにやりと笑った。

「では、私はこれをいただくとしよう」

千冬が新たに冷蔵庫から取り出されたのは、星のラベルが輝く缶ビールだった。

それを見て、アリスたちはきよんとする。

「お酒？ いいのですか？ 今は職務中なのは？」

「固い事を言うな。こっちは問題児を多く抱えているせいで、毎日ストレスがたまるんだ。これぐらいの息抜きがないとやっていけん。そういうわけだ。大目に見ろ」

全員が『いつもは自分たちに固いことを言って、息もつかせないくせに』と思ったが、千冬の気苦労は自分たちの所為でもあるので、誰も批難しなかった。それに、こちらは既に“口止め料”を受け取っている。

「安心しろ。明日の職務に影響が出るほどは飲まん」

千冬はプルを起こすと、喉を鳴らしながら一気に飲み干した。仕舞には『くうー』という始末。

いつもの厳格な織斑先生らしかぬ、どこかおやじ臭い仕草に、箒たちはポカンと口を開けた。

「どうした？ 教官は元からこういう人だぞ？」

その中たつた一人、ラウラだけが驚かずに言った。

「そうなの？」

と、オレンジジュースをすすりながら、シャルロットがラウラに尋ねる。

「ああ。我が国で教官を務めていた時も、職務が終わればビヤガーデンで一杯やられていた。私はそんな教官を見ながらソーセージをかじるのが好きだった」

「はは、そんなこともあったな。——よし、ラウラ、帰国する機会があったら土産に地ビールとつまみのソーセージを買ってきてくれ」

「やー」

ラウラが敬礼をする。こうしてみると、この二人は本当に仲がいい

のだと改めて思えた。

なんとなしに場の空気が和む。

それが千冬の狙いだったのかは判らないけれど、少しずつ場の緊張がほぐれていった。

「さて、肩の力が抜けてきたようだな。では、そろそろ本題に入るか」とその前に、と一口ビールを仰ぐ。

「——で、おまえら、一夏のどこが好きなんだ？」

緊張がほぐれたのも束の間、再び緊張が箒たちを襲った。

「お、織斑先生、突然何をおっしゃって!？」

「おいおい、あれだけ解りやすい好意を振りまいておいて、今さら否定する気か？」

「そ、そうじゃありませんけど」

「それに、あれでも私の大事な弟だぞ。姉として聞いておきたいのは当然だろ?——で、どうなんだ? ん? 包み隠さず言ってみろ。とこういうか言え」

千冬は威を以て問い詰める。まるで圧迫面接だった。

有限会社織斑一夏、入社試験。代表取締役、織斑千冬との最終面接。あなたが本社を選んだ動機はなんですか? 内容次第では即不採用です。ごごごご。まさにそんな空気だ。

「それとも何か? 私には言えないような内容なのか。それは困るな。ストーキングやら、監禁などしてくれるなよ? 特に幼馴染はそういう異常者になりやすいと聞くからな」

『しませんよ!』

異口同音で叫んだ。ここはきっちり否定しておかないと、異常偏愛者に思われかねない。

このまま黙っていても印象は悪くなる一方なので、各々おずおずと口を開いた。

「えっと、あたしは別に一夏のことなんか。ただの腐れ縁なだけで」

「わ、私は女性にだらしない一夏が気に入らないだけです。別に、す、好きなわけは……」

本当は大好きなくせに、とアリスは思った。

そんな素直じゃない幼馴染ズに対し、千冬は真剣な顔（の振り）をして言った

「そうか。では、嵐と篠ノ之は花嫁候補から外しておこう。喜べ嵐、これで腐れ縁も終わりだぞ」

千冬の言い草に『くああー！』と頭を抱え込む筈と鈴。

完全にツンデレ体質が仇となった。

「で、オルコットはどうだ」

千冬がセシリアに視線を移すと、彼女は朗々と歌うように語った。

「それはもちろん、何事にも屈しない勇敢なところですよ。それでいて紳士的で、遅しくて、精悍な面持ちは凛々しく、ヤマトダンシというのは一夏さんのようなお方を——」

「ああ〜そんな美辞麗句はいい。あいつはそんな立派な人間じゃないぞ」

千冬は白けたように「やめろ」と手を振った。

筈たちと同じ轍は踏まぬよう慎重に言葉を選んだつもりが、逆効果だったようだ。セシリアの目には、千冬の頭上に好感度DOWNの文字がはつきりと見えた。

「で、最後にリデル。お前はどうか？」

「え？」

思わぬキラークラスに、手中のジュースが躍った。

外野を守備していたら、いきなり顔面ライナーが飛んできた気分だ。

「わ、私ですか？」

気付けば、千冬だけではなく、みんなの視線がアリスに向いていた。

『そういうえば、最近あんたち、仲がいいわよね』と怪訝そうに睨む鈴。

『一夏さんもよくアリスを話題にしますわ』と浴衣を噛むセシリア。

『ぼ、ぼくも気になるなあ』となぜか不安そうなシャルロット。

『一応聞いておこう』と仏頂面のラウラ。

『……………』と無言で威圧してくる筈。

「え、何です。その『私も知りたい』的な視線は。そんなに興味があるのですか？」

「そりやそうだろう。私の見解では、おまえが一番あいつと仲がいい」
「そうなのですか？」

一同が肯く。どうもそうらしい。

確かに、彼の自分に対する接し方が、他と違うのは薄々感じていたが、

「あの、期待に副えず申し訳ありませんが、特にこれといって語るようなことはないです」

「そんなことはないだろう。語る価値のない男に力など貸すまい？」
「ぐっ……」

痛い所を突かれた。女が男に力を貸すのは、少なからずその人物に魅力を感じているからだ。

仕方ないので、アリスは自分の気持ちに問い掛けながら、ひとつずつ言葉を紡いだ。

「そうですね。直向きに努力し続ける姿は好感が持てますね。だからでしょうか。見ていると、力を貸してあげたくなくなりますし、頼りないところを見ていると、その、ま、守ってあげたくなくなります。この気持ちに恋なのかは、私にもわかりません」

アリスが言葉を紡ぎ終わると、千冬は三人と違う反応を見せた。

「なるほどな。あいつは才能に恵まれていない。その分を努力で補おうする。その姿は確かに心動かされるものがあるな。私もあいつのそういうところは嫌いじゃない。そうやって成長していく姿は、姉として嬉しくあるし、時に守ってやりたくなる」

千冬は飲みかけていたビールを止めて、微笑んだ。

きつと本心からそう想っているのだろう。言葉の節々に優しさが垣間見えた。

「——なるほど、おまえたちの気持ちはわかった」

それぞれの気持ちを聞いて、千冬は満足そうにした。

それぞれ想いの形は違うにせよ、弟を慕ってくれる人がこれだけいる。姉としては喜ばしいことだ。だが、感謝の言葉を素直に言えない千冬は、アルコールの力を借りて、ぶっきらぼうに言った。

「まあ、なんだ、不出来な弟だが、よろしく頼むぞ、おまえたち」

まるで大事なものを託すような柔らかい笑み。

それを過大解釈したのか、箒、鈴、セシリアは表情を喜色に染めた。

「もしかして」「一夏を」「くださいますの?」

「バカめ、誰がやるか——よろしく頼むとは言ったが、誰もやるとは言っていないぞ」

『そんなあく……』

三者三様、がつくり肩を落とす。セシリアは『ぬか喜びもいいところですよ』と愚痴った。

そんな三人をシャルロットが『でも、信頼さえているってことだよ』と慰める。

しかし、持ち上げておいてこれである。やはり千冬にはサドつけがあるのかもしれない。

♡

✦

♠

猥談を終えたあと、箒は一人湯あみに訪れていた。

学園が貸し切っているだけあって、脱衣室には他の客の姿はない。賑わいがないのは少々殺風景に感じられたけれど、胸にコンプレックスを抱く箒には丁度よかった。これでむやみやたらと胸をこねくり回される心配もない。安心して脱衣に取り掛かれる。

箒は贅沢に脱衣籠を二つ使い、着替えを分けた。そして、頭部で結んだりボンを解く。

所々解れ、くたびれたりボン。

本来ならそろそろ処分する頃合いであったが、箒には捨てられない理由があった。この白いリボンは、一夏が初めて箒にプレゼントした思い出の品なのだ。そんな大事な品を捨てられるはずもなく、箒はそれを6年間も使い続けてきた。

「あれから、もう6年になるのか……」

箒は解いたりボンをそっと胸に抱え、感慨に耽る。

そう、あれは初夏。6月のことだ。父が仕切る道場に一人の少年が

門下に入ってきた。

その少年こそが、一夏だった。

しかし、当初の私と一夏は仲が悪く、事あるごとに衝突していた。それは食べ物好き嫌いからはじまり、互いの言動にまでケチをつけ合ったほどだ。その度、私たちは剣を交えた。

勝つのは、いつも私だった。

当然だ。私は篠ノ之流剣術の継承者として育てられた女。そこらの馬の骨に負けるはずがない。

けれど、彼は私に負けると、翌日私より早く道場を訪れ、人一倍鍛練に励むのだ。

そして、また私に勝負を挑んでくる。でも、勝つのは私で……。

しかし、ある日、ある出来事を境に、私たちの関係は唐突に終わりを迎えた。

姉さんがISを開発し、その力を世界に知らしめからだ。

その所為で私たち一家は、政府の保護プログラムにより故郷を離れることになった。

そして出家の当日。出発日時が極秘だったにも関わらず、一夏は私を見送りにやってきた。

息を切らしながらやってきた一夏の手には、白いリボン。彼はそれを差し出しながら言った。

『これやる。これで誰もお前のこと、“男女”なんて言わなくなるよ』
男勝りだった私は、クラスの男子から度々『オトコ女』と悪口を叩かれていた。

引越先で同じことが起こらないとも限らない。それを案じて用意してくれたのだろう。

彼は続けざまに言った。

『ほら、遠くにいつちまうと、おまえを守ってやれなくなるだろ？』
男子の無自覚な悪意が向けられるたび、身を挺して守ってくれたのも、また彼だった。

その言葉が胸を熱くする。同時に私は初めて自覚した。——ああ、私は彼が好きなのだ。

『でもさ、いざつとなったら俺が助けに駆けつけてやるからな』
できもしないことをさらつと言つ。でも、その気持ち嬉しくて、
何もいえなくなった。

『ありがとう』も。『さようなら』も。『また会おう』も。——『好き
だ』とも。

そのまま、何も告げることができず、私は彼の許を去ってしまった。
その後、一夏がくれた「魔法のリボン」は何度も私を守ってくれ
た。勇気をくれた。

(このリボンは私と一夏の繋がり、絆そのもの)

でも、そう思っていたのは、たぶん自分だけなのかもしれない。

一夏の瞳に自分はもう映っていない。モノレールの一件で、箒はそ
れを気づいてしまった。

(どうすれば、彼の心を自分に繋ぎ止めておくことができるのだろう
か)

そう思った時、最初に思い浮かんだのは、一夏を支えてきた存在、ア
リスだった。

もし、彼女のようになれたのなら——その時、脱衣所に誰か
入ってきた。入ってきたのは千冬だ。

「あ、千冬さん」

「織斑先生だ」

流石に脱衣所まで出席簿を持ってきていなかったのか、千冬は手刀
を下した。

「す、すみません」

「まあ、いい。それより今から入るのか？」

「はい」

「そうか。では一緒しよう」

いうなり、千冬は脱衣を開始した。浴衣をぱさつと脱いで、肢体を
さらけ出す。曝け出された身体は、思わず見惚れるような美しさだっ
た。鍛えられた体は強靭さを誇っているが、女性らしいのしなやかさ
にも溢れている。肉体美と女性美を兼ね合わせた美しさだ。

「そういえば、明日は7月7日。お前の誕生日だったな」

「はい」

「束が何かしてくるかもしれん。注意をしておけ。私も——警戒しておく」

そう言った千冬は怖い顔だった。瞳には敵意すら宿っている。

珍しいことだった。束に呆れ、怒鳴ったりするものの、こうして敵意を剥き出しにすることは、今まで無かったことだ。少なくとも箒の知る限りでは一度もない。

「その、姉と何かあったんですか？」

「いや」

なにもない。と言いかげ、千冬はやめた。彼女にしては珍しく、歯切れが悪い。

それからしばらく黙考して千冬は思い切ったように打ち明けた。

「今のアイツは——束は信用できない」

「え？」

奇人『篠ノ之束』の唯一の理解者である千冬がそういった事に、箒は驚いた。

「実は、一夏がIS学園に入学するよう誘導したのは束なんだ。あいつが工作したから、一夏の存在が明るみに出たんだ」

「でも、一夏の適正が判明したのは偶然だったと聞きましたが？」

発覚の経緯は、一夏が受験会場を間違えたことだ。本来、一夏は藍越学園という高校を受験するつもりだったのだが、何かの手違いでIS学園の受験会場に入ってしまった、そこに置かれていたISを起動させたことで、彼のIS適正が発覚したのだ。

全ては偶然によるもの。それを束が操作できたとは思えないが――

「知っているか？ 今年の高校受験はカンニング対策のため、試験本番まで受験会場が明かさなかったら？」

「はい、知っています」

異例の処置だと話題になったので、箒もそのことを知っていた。

「一夏が受験する予定だった藍越学園の受験会場も当日に公表され

た。しかも、迷宮のような場所として有名なホールが充てられた。そんな場所だ。迷うこともあるだろう。そうなれば必然的に案内板に頼ることになる。その案内板にサブリミナル効果を仕込んでおく。IS学園の受験会場に向かえ、そして置いてあるISを起動させろ、とな」

サブリミナルとは、潜在意識より下の意識階層に刺激を与えることだ。

一種の暗示のようなもので、無意識下に相手の行動を誘導することができる。

「でも、なんでそんな手の込んだことをしてまで、なぜ一夏をIS学園に？」

「おまえがIS学園に入学するよう誘導するためだろう」

千冬の言葉に、箒は息が止まるような衝撃を受けた。

自分の意思で決めたことが、姉さんの誘導によるもの？ その事実
に背筋が凍った。

「おまえは姉の発明を嫌悪していた。一家離別の原因を作ったISを、な。きつと自らの意思でIS学園に入学しない。それが解っていたアイツは、おまえを誘導することにした」

一夏をエサに使って。ここで、箒は千冬が放つ敵意の理由をはつきりと理解した。

彼女は一夏が利用される事を極端に嫌っている。だから一夏をエサした束が許せない。もし束が工作しなければ、一夏が数々の事件に巻き込まれることもなかっただろう。

「今は大目に見ている。〈白式〉の件もあるしな。だが、これ以上自分の欲のために一夏を危険にさらすようなら、私はあいつを許せなくなるだろう」

「だから、私にこの話を……？」

「そうだな」

千冬は『もしかしたら私はおまえの姉と対決するかもしれない』と言っている。

そうなった時、おまえはどうする？ 一夏につくのか？ 姉につく

のか？

その事を頭の隅に置いてほしくて、千冬は箒に心境を明かしたのだらう。

「私は……」

正直どうするべきなのか解らなかつた。自分のことで手一杯なのだ。姉まで頭が回らない。

思い悩む箒に、千冬は申し訳なきような顔をして、彼女の髪に手を置いた。

「まあ、可能性の話だ。そうなるかもしれないし、そうならないかもしれない。私もそうならないよう努力するつもりだ。これでも私はアイツの幼馴染だからな。簡単には仲違いしないさ」

箒の不安を和らげるように、優しい言葉を投げかけた。少しだけ不安が晴れた——気がした。

そんな箒に千冬が明るい声で言う。

「よし、久しぶりに私の背中を流してくれるか？」

「はい」

箒は湯船に向かう千冬を追いかけた。

第43話 紅椿

臨海学校二日目。早朝から、俺たちは浜辺に整列した。

今日からは終日ISの訓練となっている。名目は非限定空間におけるISの稼働試験。アリーナのような閉鎖空間でなく、障害物のないオープンな空間に於けるより実戦的な戦闘技術を学ぶのが、今日の趣旨だ。

「よし、全員そろったようだな。——おい、遅刻者」

「はいっ！」

整列した最後尾、呼ばれたラウラが肩を竦ませた。

寝坊でもしたのか。ラウラは珍しくきつちり五分遅れて集合場所にやってきていた。

「そうだな、コアネットワークに関して説明してみせろ。できなら今回だけ大目に見てやる」

「ヤー。ISのコアネットワークは広大な宇宙間での相互位置確認と通話のために開発された量子通信の一つです。通常より大容量かつ高速な情報のやり取りが行えます。しかし、特筆すべきは〈相互意思干渉〉と呼ばれる意識レベルのやり取りができることです」

よどみない口調で説明するラウラに『おお！』と感心の声があがる。さすがエリート操縦者。ISの説明は朝飯前といった具合だ。いまは朝飯後だけど。

「とても良い解説だったわ。でも、あと付け加えるなら、星間距離において、遅延のない通信ができるようタキオン化の技術が用いられているってことかしら。ある意味、情報のタキオン化が篠ノ之東の一番の成果かもしれないわね」

そうラウラの説明を補足したのは千冬姉じゃない。もつとゆったり声音の人物だ。

聞き覚えがあるこの母性的な声音は、もしかして——

「ロリーナさん？」

皆が声のする方に視線をやると、優雅なプラチナブロンドの女性が「うふふ」と笑っていた。

しかも、白いビキニ姿で。豊満なバストから連なるくびれたボディラインは妖艶で、少女には出せない大人の色気を醸し出していた。——って、なんで彼女がここにいるんだ!?

「おい、現在ここはIS学園の関係者以外立ち入り禁止だぞ?」

驚く生徒を守るようにして、千冬姉が前に出る。

しかし、ロリーナさんは相変わらず優雅な物腰でお辞儀した。

「あらあら、これはどうも、織斑千冬女史。アリスがお世話になっておりますわ」

「む? リデル、だと」

千冬姉とみんなの視線がアリスに向く。

向けられたアリス本人も、ロリーナさんの登場に驚いている様子だった。

「こいつはおまえの知り合いか?」

「ええ、そうです」

「そうか。だが、現在ここは学園関係者以外立ち入り禁止だ。出て行ってもらえ」

「それなら安心してください、千冬女史。ちゃんと許可は貰っていますから」

ロリーナさんがツンと空間を叩いて、ウィンドウを呼び出す。

そこには、彼女の立ち入りを許可する文章と轡木素子という人物の署名が標されていた。

「学園長の許可を取ってきているなら仕方ない。ただし、実習の邪魔はしないでもらいたい」

「それは失礼いたしましたわ」

騒がしたことを丁寧に詫び、ロリーナさんはアリスの方を向いた。「私は少しばかりバカンスでも愉しんでくるわ。彼女もまだ来ていないようだし」

彼女。どうやらロリーナさんは誰かと会うため、ここにやってきたみたいだ。

一体誰だろうか。見当が……つかなくもない。——もしかしたら、たぶんあの人だ。

「じゃあ、またあとでね、アリス」

ロリーナさんはヒラヒラと手を振って俺たちから去っていった。
それをアリスと千冬姉が見送る。

「すみません、知り合いがお騒がせしました」

「かまわん。それより実習を始めるぞ」

千冬姉は手を叩き、みんなの注目を集めた。

「では、これより実習を始める。一般生徒は山田先生のところへ向い、指示に従え。専用機持ちはこちらにこい。送られてきたへパツケージを返却する」

へパツケージとは、複数のへ後付装備^{イコライザ}を梱包したISの一式装備の事だ。

専用機持ちは、合宿メニューと並行して送られてきたへパツケージのデータ取るそうだ。まあ、後付装備^{イコライザ}の無いく白式には当然へパツケージもないので、俺には関係のない話だけど

「それと篠ノ之もこっちにこい」

一般生徒に混じり、実習の準備をしていた箒が呼ばれて作業の手を止める。

「私に専用機はありませんが……?」

「いや、今日からおまえにも——」

その時だった。千冬姉が何かを言い掛けたところで、旅館の方からすごい勢いで女性が走ってきた。

紺色のワンピースに、フリルのエプロン。頭には機械仕掛けのウサミミ。腰には白髪の少女が振り落とされないうよう必死にしがみついている。すごい勢いで走ってきたのは箒の姉さん、篠ノ之束さんだ。

「ちゅちゅくくくん! ——とお!」

豪快な助走で飛び上がると、束さんは放物線を描きながら千冬姉にダイブした。

それを千冬姉はアイアンクローで受け止める。

「束、私をその名前で呼ぶなど何度言ったらわかる?」

「相変わらずつれないな!。そんなことよりハグハグしよ!、愛を確かめよう」

「ええい、暑苦しいから、近づくな。鬱陶しいぞ！」

痺れを切らした千冬姉が、束さんを海に放り投げる。ばしやーんと壮大に水しぶきを上げる束さんだったが、不思議なことに戻ってきた束さんは濡れていなかった。

「ちえ、ちーちゃんのいけずー。いいもん、いいもん。箒ちゃんに慰めてもらうから」

すねた束さんは、なぜか岩陰に隠れていた妹の許に歩み寄った。

「やあ、久しぶりだねー、箒ちゃん。少し見ないうちにまた大きくなつたね」

「え、ええ、10センチほど身長が——」

「ううん、おっぱいが！」

妹の胸をワシヤワシヤ揉もうとする束さんに、箒が一閃。

鈍い音が鳴って、束さんの機械仕掛けのウサミミがビシッと立ち上がった。

「姉とはいえ殴りますよ？」

そして何食わぬ顔をして警告する箒さん。ぱねえです。

「うわーん、もろに殴ってから言ったあ……。くーちゃん撫でてく撫でて〜」

「よしよしでございます」と殴られた箇所をくーちゃんに撫でてもらう束さん。

千冬姉のアイアンクローを平気そうだったのに、あれは痛いんだ……。と、変な感想を抱いていたら、周りの生徒がざわめき出した。それを察した千冬姉が、束さんのお尻を蹴る。

「おい、姉妹コントはそれぐらいにして、自己紹介しろ。生徒が戸惑っているだろ」

「えー？ I S学園の生徒なら束さんを知っていて当然でしょ？ 自己紹介なんて必要ある？」

そりやそうだと思っただが、千冬姉がそれを許さない。

「いいから、やれ」

再び千冬姉が束さんのお尻を蹴る。

つんのめった束さんは、蹴られたお尻をさすりながら言った。

「うー、面倒臭いなあ。——はろー、私が天才の篠ノ之束さんだよー」
束さんはVサインを出し、次にクーちゃんを抱っこする。

「んで、こっちが束さんとクーちゃんの愛の結晶、愛娘のクーちゃん
！」

「私はおまえと子作りした覚えなど無い！」

今度は千冬姉の出席簿が一閃した。

ベキッと嫌な音が鳴って、束さんの目から漫画みたいな涙があふれる。

「い、痛いよ、クーちゃん」

「パパ、DVはよくありません」

「ちびっこ、おまえも私をパパとか呼ぶな！」

「もう、クーちゃんつたら、照れずに認知してもいいんだよ？」

「誰がするか！」

連続のツツコミで、千冬姉も「はあ、はあ」と肩で息をしていた。こんなに翻弄される千冬姉を久しぶりに見る。さすが束さんというか……。そして、クーちゃんのノリの良さにちよつとびっくりだ。

「それで、私が呼ばれたのは？」

箒が大いに脱線していた話を戻すと、束さんの目がきらーん☆と輝いた。

「よく聞いてくれたね、箒ちゃん。さあ、天空をご覧あれ」

束さんに促されて、俺たちは天を仰いだ。その先にキラんと星が輝く。——いや、早朝なのだからそんなはずはない。おそらく空中で金属製の物体が閃いたのだ。俺も目測どおり金属の物体が制動傘ドラグシュートを開いて、ふらりふらりとこちらに落下してくる。

落下してきた物体はISだった。

紅い装甲。シャープなフォルム。中でも印象的なのが、背部に設けられ大型のバインダーだ。大きく開いたそれは、まるで花卉のように見える。武装はざっと見た感じで近接戦用ブレードが二対。それが腰のハードポイントにマウントされている。

「じゃじゃーん☆ これが箒ちゃんの専用機<紅椿>だよ。みんな拍手——」

くーちゃんがぱちぱちと手を叩くと、俺たちもつられるように手を叩いた。

俺たちが「おお」と驚くなか、しかし、箒だけが戸惑いを見せる。「私の、専用機？」

どうやら、箒はこの事を知らされていないなかったようだ。サプライズってヤツだろうか？

「いやー、そろそろ専用機が欲しくなる頃じゃないかなーって思ってたねー。違った？」

「それは……」

ぬうーと妹の瞳を覗きこむ東さんに、箒は顔を背けた。けれど、視線は眼前のISを捉えて離さない。魅入られている、とまでは言わなくても、深い関心があるように見えた。

「まあ、いらぬならポイしてくれていいよ。とりま、乗ってみて」東さんにグイグイと背中を押され、箒はしぶしぶ<紅椿>に身を預けた。

同時に開いていた内部機構がぎゅつと箒にフィットする。

「じゃあ、さっそくイニシヤライズを始めよっか」

「あ、はい」

東さんが宙を撫でると、投影型のモニターとキーボード型の入力装置が出現した。

それをピアノ演奏のような手つきで叩き始める。

「じゃあ、まずは<パーソナライズ>からやっつけていくね」

<パーソナライズ>とは、操縦者の情報を遺伝子レベルで解析し、その人物の特性や傾向をISに認識させることだ。そして<パーソナライズ>で得た情報を基にシステムや各部装置をキャリブレーションすることを<ファイティング>という。

ちなみに男性が搭乗した状態で<パーソナライズ>を行うと『パーソナライズが正常に終了しませんでした』という原因不明のエラー表示が出て、システムが強制フリーズしてしまうらしい。俺の場合は出なかつたけど。

と言っている間に、<紅椿>の<パーソナライズ>が終了した。

「さてさて、あとはISが自動でキャリブレーションしてくれるから、すこし待っててね」

「はい、わかりました」

「もう、硬い堅い。おねえちゃんなんだから、もっとフレンドリーでいいんだよ?」

「いいえ、今のままで充分です」

取りつく島もない。それでもいいのか、束さんは文句ひとつ言わなかった。

そんな二人に、俺はちよつとむず痒いものを感じてしまう。

二人の事情はそれなりに知っているけど、姉妹なのだからもつと仲良くすればいいのと思うのだ。筈にすれば、完全なお節介だけど。そんなことを考えていると、やることがなくなった束さんが俺の所にやってきた。

「ねえ、いっくん、よかったら、束さんに〈白式〉を見せてよ」

「あ、はい。——こい、〈白式〉!」

右手のガントレットにそう念じ、俺の専用機〈白式〉を展開する。

IS学園に入学して三ヶ月。ISの展開も慣れたものだ。

「んじゃ、さっそくデータ見せてね。ブスリ♂」

端末のコードを〈白式〉のスロットに差し込むと、すぐさま束さんの周囲にいくつものウィンドウが現れた。その中を流れる情報群を、束さんがふむふむと読み解いていく。

その様子を見つめながら、俺はかねてより聞きたかったことを尋ねた。

「ところで、束さん、何で男の俺がISを動かせるんですか?」

「ん? あーそうだね。それを説明する前に、いっくんは男性と女性の違いってわかる?」

ジェンダーの話かと思っただけど、話の脈絡からして違うだろう。

たぶん、オスとメスの生物的な話だ。

「性機能ですか?」

男は命を宿せるが、育むことができない。女は命を宿せないが、育むことができる。

それが男性と女性の明確な違いだと思う。あくまで生物的な意味で、だけで。

「ピンポン、その通りだね。じゃあ、その機能を決定している要因は何か知ってる？」

「うわ、急に話が難しくなりましたね」

と、顔をしかめつつ、俺は持てる知識を総動員して回答を絞り出した。

「えっと、Y染色体とX染色体でしたっけ？」

「X染色体とY染色体。」

お父さん^{X_Y}の染色体とお母さん^{X_X}の染色体を半分ずつ受け継いで、その組み合わせが、X染色体同士だと女の子。X染色体とY染色体の組み合わせだと男の子が生まれてくるって話だ。つまりY染色体が、男性の設計図だというわけだな。

「おお、意外と物知りだね、いっくん」

「ええ、どうも」

稀代の天才に褒められ、俺はちよつと気分を良くした。

「んで、実はね、そのY染色体は次の世代に受け継がれる度、劣化しているらしいんだよ」

「劣化ですか？」

「うん。伝言ゲームがわかりやすい例かな？ あれって、内容を相手に伝えるたび、正確さが失われていくでしょ？」

伝言ゲームは最初に言葉のお題を決めて、それを伝えていくゲームだ。最後に伝えられた人が、最初のお題を正確に答えられたらゲームクリア。でも、伝えていく過程で、覚えそこなったり、間違ったりで、大抵はうまくいかない。それを楽しむゲームなのだが、束さんはその様子を遺伝子の劣化に例えているのだ。

「その所為で、いまY染色体の中にある遺伝子の数は、最初の10分の1以下まで減っているんだって。逆に女性の場合は、同じX染色体同士で構成されているから、劣化しても互いを修復し合えるんだ。そのことから、男性と女性では遺伝子の数が全然ちがうんだよ」

「それが、男性がISを動かせない秘密？」

「うん、どうもパーソナライズ——つまり遺伝子解析する際に、一定以上の遺伝子情報が習得できないか、あるいは特定の遺伝子情報がないと、システムがエラーを起こすっぽいんだよね〜」

「でも、俺の時は何も起こりませんでしたよ？」

〈白式〉を受領した時も、すんなりパーソナライズできた。

「それはね、いつくんのY染色体が、特異型だからだよ」

「え？ 特異型？ 俺の遺伝子が？」

「あ、シヨックだった？ でも、心配いらないよ。いつくんの生殖機能に何か問題が生じるわけじゃないから。普通に筹ちゃんと子作りできるところから安心してね☆」

「いや、まあ、その……」

『はい、安心しました』とも言えず、恥かしくなった俺は話を強引に進めた。

「で、俺は特異なY染色体の持ち主だから、男なのにISが使えるってことですか？」

「うん。これは東さんの憶測だけど、きつといつくんのY染色体は、劣化していない原初のY染色体なんだよ。東さんは無神論者だけど、もしこの世にアダムとイブがいたとすれば、いつくんはアダムの生まれ変わりと言っつていいね」

「俺がアダムの生まれ変わり……？」

原初の男。人類最初の男性。あまりに壮大な前世に実感がわかなかった。

でも、〃世界で唯一ISを動かせる男〃という事実を鑑みると、あるいは話でもないのか？

「まあ、東さんは遺伝子について詳しくないから、断言はできないけどね。——で、ここからが重要なんだけど、実はそんないつくんの存在を認めたくない女性たちがいるんだよ」

「俺を認めたくない女性たち？」

「うん、いつくんの存在によって男性たちの機運が高まれば、現代の差別社会に対する反対運動が過熱するかもしれない。それによって〃

自分たちの利益や支配が損なわれるんじゃないか”って恐れている人たちがいるんだ」

俺はセシリアの言葉を思い出した。

今の時代、女性は強権を行使し、男性から富を搾取することで利益を得ている。

「彼女たち」は自分たちの利益を守るため、いろんな方面に働きかけてきた。メディアを使って女性を群集化したりね。ヘモンド・グロツソ」だって、そのひとつだよ」

「ISの世界大会が？」

「うん、エンターテイメントの力を使って、国民を愚民化する手法は古くからあるんだ。古代ローマのコロッセオが有名かな。——愉樂は不満を忘れさせてくれるし、快楽は考える力を奪ってくれる。国民が無関心でいてくれるほど、支配者にとって都合のいいことはないんだ」

「……目先の娯楽ばかりに気を取られてしまったから、今の社会ができてしまった、と？」

「うん。信じるか信じないかは自由だけど、差別社会は現実として存在する。そして、それを演出しているのは「彼女たち」なんだ。でも、自分たちが演出する舞台に、いきなり脚本にない人物が登場したもんだから、さあ大変」

「だから、さっさとその舞台から俺を退場させたい」

「ISは女性しか動かせない」「そのISを動かせる女性は偉い」そんな価値観が支配する女尊男卑の社会に於いて、俺というイレギュラーは云わば癌細胞だ。その癌細胞が肥大し、他に転移すれば、やがて自分たちが支配する社会を死に至らしめるかもしれない。だから、末期に至る前に切除して、社会から取り除きたい。

俺は改めて差し迫った危機感を覚えた。

今まで危険な目には幾度なく遭ってきたが、それとは違う異質な恐怖に肌が震える。

「大丈夫だよ。いっくんには東さんたちがついてるからね」

ブイブイとピースする東さんに、俺は情けなくも頼もしさを感じて

しまう。

すると、ピクピクと束さんのウサミミが反応した。

「お、＜紅椿＞のフィッティングが終わったみたいだね。じゃーちよつと喋ってくるねー」

そう言つて、束さんが手を振つて俺の許を去っていく。

俺の胸の裡には、しこりのような不安だけが残つた。

♡

✦

♠

「はい、これでイニシヤライズは終了つと。次は起動させてみるね。リアクターを動力モジュールに接続つと。ジェネレーター点火。反応炉、臨界。パワーフロー正常。各部へのエネルギー供給開始。G P Lを待機から戦闘へ。バイパス比はオールスリーでいいよね?」

「え? はあ、お任せします」

「ほいほい。近接戦闘を念頭に置いて設計してあるからすぐ馴染むと思うよ」

「わかりました」

お姉さんに対して、篠ノ之さんはどこまでも素っ気ない。

でも、＜紅椿＞にはご執心の様子で、ちよつと興奮気味になつているようだった。

「じゃあ、試しに飛んでみよっか」

「はい。——では、いきます!」

推進器に火が入り、＜紅椿＞が空へ向かつて舞い上がる。その速度に私たちは目を張つた。

「は、はやいっ!」

誰かが驚く。同感だった。一瞬にして高度3000フィートまで到達する速力。尋常ではない。

「ヘレドクイーン、これは!」

《Yes My honey——ジェネレーター出力は＜赤騎士＞と同クラス。推力に至つてはそれ以上》

私は息を呑んだ。

〈赤騎士〉は現行ISを上回るスペックを有している。なにせ、あのロリーナが手掛けたISなのだから。その〈赤騎士〉を上回る性能とは、さすがISの生みの親である篠ノ之束の手製。

「うんうん、いい感じだね。——じゃあ、今度は武装を使ってみて。右にマウントしてあるのが《雨月》で、左にマウントしてあるのが《空裂》ね。今武器特性のデータを送るよん☆」

タタタンと空中キーボードを叩くと、データを受け取ったと思われる篠ノ之さんが、日本刀型の近接ブレードを構えた。篠ノ之流剣術は知らないけど、スキのない構えだ。

「《空裂》は対集団仕様の武器で、斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーを放出するよ。んで、対の《雨月》は打突に合わせて複数の攻性エネルギーを放出する対単体仕様の武装だからね。——ってことで、試しにこれを撃ち落してみよう」

ぼちつとな、という具合にキーボードを押すと、砂浜が盛り上がった。

現れたのは地対空ミサイルシステムだ。

いつのまにそんなものを仕込んでいたんだと思っっている内に、本機から6発の対空ミサイルが吐き出された。私ならビットをデコイにしてECMを使うが、

「やれる、この紅椿なら——！」

篠ノ之さんは〈紅椿〉の驚異的な機動性でミサイルを惹きつけ、《空裂》を一閃。

そこから放たれた光刃が六発の対空ミサイルを全て爆散させた。さらに爆風から抜けてきた追加のミサイルに向かって《雨月》の刺突を繰り出す。銚先から放たれた六本の光条は、残りのミサイルも全て撃墜した。

「たった二振りで。いやはや大した性能ですね」

爆炎を背景に威風堂々たる風格を見せつける〈紅椿〉は、さながら鬼神のようだった。

みんなもその迫力と性能に呆然とし、実習中であることも忘れ、立

ち竦んだ。

しかし、そんな私たちなど視界に入っていない様子で、篠ノ之さんの唇が何かの言葉を紡ぐ。

私は読唇術でそれを読み取った。

——これで私もアリスのように

アリスのように。 “私のように” とはどういう意味だろうか。

彼女の言葉を理解しこねていると、背後に誰がやってきたロリーナだ。 <紅椿>の試運転が見えたので、バカンスを切り上げてきただろう。

「あら、アレがあの子の専用機？」

「ロリーナは篠ノ之博士がここへ来ることを知っていたのですか？」

「ええ。今日は7月7日、最愛の妹の誕生日。何かしてくるだろうと思っていたからね」

今日は篠ノ之さんの誕生日だったのですか。

一夏も水臭いですね。何か言ってくれば、プレゼントを用意したのに。

「ところで、ロリーナは篠ノ之博士と面識が？」

「うーん、ある事はあるのだけど……」

ロリーナは手のブルーハワイを私に渡して<紅椿>の許に歩き出した。

私もあのISに興味があったので、ロリーナの後をついていく。

「ご機嫌麗しゅう、狂ったウサギさん」

ロリーナがブルーハワイをカランと鳴らすと、篠ノ之博士の眉がツリ上がった。

「うげっ、怪獣オタク！」

怪獣オタク？ あー、ロリーナ、特撮映画が好きですものね。ゴジラとか。

私がかここへ転入する前は、休日によく日本の特撮映画を見させられましたっけ。

「なんで怪獣オタクがここにいるんだよ……」

「あらあら、私がいてはダメなのかしら？」

「ダメだね。ダメダメだね。今は箒ちゃん専用機をみんなに見せびらかす場面なんだよ。お呼びじゃないんだよ。空気読みなよ。そんなだから万年喪女なんだよ」

喪女。確かにああ見えてロリーナは『年齢〓彼氏いない歴』なんですよね。美人なのに。

高嶺の花過ぎるんでしょかね。知的な女性はモテないっていいますし。

「……………」ムスー

あ、ロリーナが怒った。本人は結構気にしているみたいですね。そう言えば、千冬さんもちよつと気にしていましたっけ。

「引きこもりの貴女に言われたくないわ」

「は？ 引きこもりは神代からある日本の文化なんだよ」

ギリギリと額をこすり合わせながら睨み合う二人

傍から見ると、頭の悪そうなヤンキーがメンチを切り合っているように見えた。

本当は凡庸な私たちが束になっても敵わない崇高な頭脳の持ち主なのだけど。

「まあいいわ。——ねえ、篠ノ之妹さん、よかったら、お姉さんにそのIS見せて」

「篠ノ之流——閃走・六兎おお！」

＜紅椿＞に近づこうとしたロリーナへ、篠ノ之博士がよくわからぬ蹴りを放つ。

ロリーナは「ギャオスっ」と怪獣みたいな悲鳴をあげて、砂浜に転がった。

「な、なにするのかしらッ」

「怪獣オタクに見せてやるもんなんか、ネジ一本、ないんだよ！」

そして、取っ組み合いながら、互いの頬を抓り合う。

子供みたいに喧嘩をする二人に、私と箒さんは顔を見合わせて『身内がすみません』みたいな顔をした。

「おまえら、いい加減にしろ！」

二人の喧嘩を見かねた千冬さんが、睨み合う二人の首根っこを掴ん

で頭をぶつけ合わせた。

ガチンと二人の頭から火花が散って、二人はフラフラつとその場にバタンキューする。

「おまえらがどれだけ偉くて賢いかは知らんが、授業の邪魔をするな。いいいな？」

散々授業を妨害されて不機嫌だったのだろう。千冬さんの目はかなり据わっていた。

『はい……』

天才二人組は、揃って頭を下げた。

うくん、どれだけ崇高な頭脳を以てしても圧倒的な力の前では無力ということですね。

「大変です、織斑先生」

千冬さんが天才二人を熱い浜辺の上に正座させていると、山田先生が走ってきた。

その表情は深刻そのもので、私に何か嫌な予感を抱かせる。

「どうした、山田先生」

「先生、これを」

そういつて渡された端末を見るなり、表情の険しさが増した。

「特務任務レベルA。現時刻より対策を始められたし……」

特務任務。

IS学園が保有するISは全部で40機。扱う人材も逸材ばかり。それだけの戦力を遊ばしておくには惜しいため、他国から学園へ軍事的な助勢の要請がくる事もある。それが特務任務。もちろん、拒否権はあり、受理するかは学園理事会の判断に委ねられている。

だが、千冬さんに命令が来たということは、学園がGOサインを出したということだ。

しかも、レベルAということはIS関係の依頼。

「私は他の先生方にも連絡を入れてきます」

「ああ、頼む。——全員注目。現時刻より我々教員は特務任務行動に移る。今日のテストは中止。各自、装備を片付け次第旅館へ戻れ。その後、こちらの指示があるまで待機しろ」

不測の事態に生徒たちからざわめきが上がる。

だが、一刻一秒を争う事態なのだろうと察した生徒たちは、迅速に行動を開始した。

「何か臭うわね」

「ロリーナもそう思いますか」

こう見えて私は鼻がいい。特に陰謀を嗅ぎ付ける嗅覚に関しては犬並みだ。

千冬さんの表情を見てから、ずっと私の嗅覚が危険を嗅ぎつけていた。

第44話 ブリーフィング

旅館の一室。宴会用の大座敷『風花の間』に簡易の作戦室は設けられた。

周囲には持ち込まれた情報処理装置や通信機材、モニターが所狭しと並べられ、物々しい雰囲気醸し出している。そんな中、作戦要員に選ばれた先生たちが情報を分析しつつ、逐次モニターを更新していた。

召集を受けたのは、私を始めとした専用機持ちと、セシリアを筆頭にした代表候補生たち。

そして――

「これよりブリーフィングを開始する――その前に、おまえは何をしているんだ……」

千冬さんがこめかみを引き攣らせて見遣ったのは、私の隣に座るロリーナだ。

ロリーナは水着のまま、その上にパーカーを羽織って、焼きそばを食べていた。

「ごめんなさい、実は朝食を食べそこなってね。うふふ」

「そんな事は誰も訊いていない。何でおまえがここにいるかを訊いているんだ」

「そちらね。実は学園上層部から要請を受けてね。是非、この作戦の技術アドバイザーとして、協力してほしいと依頼されたの。

「東さんほどじゃないけどね!こう見えてISの造詣には詳しいから」

「……………」

上の指示なら、千冬さんは黙るしかないようだ。でも、思いなしかな苛立っているように見える。

篠ノ之博士といい、さつきからペースを乱されっぱなしですからね。

ところで、話の途中に変な声が混ざりませんでした？ たぶん、天井からだと思うのですけど。

「わかった……。では、改めてブリーフィングを開始する。傾注せよ。」

——現時刻より二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ製第三世代型IS<銀シルバリオ・ゴスベルの福音>、以下<福音>が制御下を離れ暴走、監視空域を離脱したという報告があつた。——山田先生

「はい」

情報統括官担当の山田先生がキーボードを操作すると、中央モニターの太平洋地図に《Silverion Gospel》という事務的な書体の文字が追記された。続いて、赤と緑の曲線が追加表示される。おそらく緑は<福音>がたどってきた軌跡。赤はその針路予想だろう

「米軍機の追跡の結果、<福音>はこの近海を通過する事が判明した。遺憾ではあるが、学園上層部の決定とアメリカの助勢により、我々がこの対処に当たる事となつた」

千冬さんの言葉で、風花の間に緊張が灯る。

そんな中、一夏と篠ノ之さんだけが状況についていけず、呆気にとられていた。

「あの、織斑先生。なんで俺たちがアメリカのISを止めないといけないんですか？ 暴走したのはアメリカのISなんだから、アメリカが止めればいいでしょ？」

至極まつとうな意見だ。普通に考えれば、一学生が米軍のISを止めるなんておかしな話だし、何のために最強の軍隊を所持しているのかという話だ。篠ノ之さんも同意見らしく、しきりに頷いていた。

「それは近々アメリカの大統領選挙があるからでしょう」

そんな二人に私が答えた。

「現在、アメリカ国内では軍政に対する国民の不満が大きくなつていくのです。もし今回の事件が公になれば、大統領選挙に悪影響が出かねない。そこで事態を内密に処理するため、私たちに依頼したのでしよう。私たちだけなら事を大きくせず済みますからね」

「なんだよそれ……。自分がもう一度大統領になりたいからって……」

一夏は忌々しそうにつぶやいた。曲がつた事が嫌いな一夏らしい反応だ。

「まあ、そう批難するもんじやないわ、一夏くん」

そういつたロリーナは、口に着いたソースを拭い、

「現アメリカ大統領ルーシー・ファイルスは保身のために、再選を狙っているわけではないわ。もうすこしで新S T A R Tの調印に漕ぎ着けられそうだから、彼女は再選を狙っているの」

「す、スタートってなんですか？」

「戦略核兵器削減条約のことよ。そして、新S T A R Tというのは、^S〈白騎士事件〉後の軍拡で、破棄された第^T二次戦略核兵器削減条約^Aの後継となるもの。——ねえ、一夏くんはなぜこの冷戦が始まったか知ってる？」

「い、いえ」

「それはね、〈白騎士事件〉以降、明日は我が身かと恐れたアメリカが、大規模な軍拡を始めたからなの。それを報復の準備と恐れたロシアや中国もまた軍拡を始めたわ。ロシアがユーラシアに幅を利かせれば、ヨーロッパも当然警戒する。その結果、アメリカ、ロシア・中国、EUによる、三つ巴の対立構造ができあがったわけよ。——でも、この冷戦も、もう長く続かないと言われているわ」

「なぜですか？」

「兵器の開発や維持にはね、とんでもないお金がかかるの。この10年間で使われた軍事費は目玉が飛び出るほどよ。その所為で、どの陣営も経済的に困窮し、疲弊しつつあるの」

「当然のことだな。軍拡競争はゴールのないマラソンだ。いつかバテるに決まっている」

ラウラが頷くと、ロリーナは続けた。

「そこでファイルス大統領は、新S T A R Tを推進することで『私たちは報復しません』だから、無作為に兵器を突き付け合うのは、もうやめませんか？」というメッセージを世界に発信しようとしているの」

ロリーナの言葉を私が続ける。

「でも、再選できなければ、この政策は破棄されるでしょう。彼女の対抗馬は、軍拡を推し進めるタカ派なのです。そのタカ派が当選し、再びアメリカが軍拡に乗り出せば、デタントどころではありません」

それだけではなく、ロシア内部にも『やられるまえにやれ』と叫んでいる過激なタカ派がいる。

その二つが政権を握れば、ようやく終わろうとしている冷戦は延長戦に突入するだろう。

「さて、今の話を踏まえて、一夏くんに訊くわ。一夏くんはどちらを支持する？ 歩み寄りと融和を推し進めるハト派のファイルス大統領か。力で他国を抑えつけようとするタカ派の対抗馬か」

一夏は顎に手をやり、真剣な面持ちで考える。

「戦争は嫌だし、やっぱりハト派のファイルス大統領かな」

「私もよ。私は兵器開発に携わってきたけれど、平和が一番だと思っているわ。でも、平和は一人の力でつくれるものじゃない。みんなの協力が必要なの。もし平和を願うなら、ファイルス大統領に力を貸してあげていいと思うの」

ロリーナは優しく上品に微笑む。その姿は艶やかというより、賢者のように賢くみえた。

一夏も諭されたように『そうですよね』と頷く。

「よし、話をついたな。まあ、本作戦については賛否両論あるだろう。しかしながら、学園理事会が許可を出した以上、私たちは従わなければならぬ。——では、話を戻すぞ。我々教員は訓練機を使って空域および海域の封鎖を行う。よって、＜福音＞の撃墜はおまえたちに担当してもらいたい。——それに当たって、リデル。おまえがチームリーダーだ」

思わぬ指名に、私は声を上げた。

「私ですか？ ラウラではなく？」

私より黒ウサギ隊を率いているラウラの方が、隊長として優秀だと思っただけだ。

「今回の作戦はアメリカ部隊との合同作戦になる。そのチームというのが、おまえが嘗て所属していた第6 IS 航空群特務遊撃小隊だ。この小隊の運用方法に関しては、私やラウラよりおまえの方が詳しいだろう？」

「ですが、小隊にはナターシャ・ファイルス少尉がいるはずですよ」

指揮力はナターシャの方が優秀だ。彼女の方が適任だと思うのだけど。

「そのナターシャ少尉は現在不在だ」

「不在？ 隊長が？」

私の脳裏に嫌な予感が過った。そして、こういう悪い予感に限って当たる。

「もしかして……暴走したく福音の操縦者というのは……」

「そうだ、そのナターシャ・ファイルスだ」

私は奥歯を強く軋り鳴らした。エイミーの次はナターシャか。本当にウンザリする。

この苛立ちを、罵声と共に撒き散らせたら、どんなに気持ちいいだろうか。

「アリス……」

そんな私をセシリアやみんなが心配そうに見てくる。

私は、毒づきたくなる感情を抑え、努めて冷静に言う。

「わかりました」

私は米軍を除隊した身だ。アメリカへの愛国心は最早ないけれど、面倒を見てくれたナターシャへの恩を忘れたわけではない。私は補佐官として千冬さんの隣に整列した。

「よし。では、まず志願者を集める。志願する者は挙手しろ」

IS学園は、時より他国から助勢の要請がくる。

しかし、生徒に限り強制参加ではなく、希望者のみとなっている。

参加条件は基礎カリキュラムを終えていること、ISの稼働時間が100時間を超えていること。ただし、専用機持ちは前述の条件が除外される。専用機受領の条件に、それらが含まれているからだ。まあ、例外が二人いるけど、今は無視してほしい。

千冬さんが挙手を求めると、一人を除く全員が手を挙げた。挙げなかったのは簪一人。

「……わ、わたしは、その、さ、参加を、辞退します……」

振るえる肩で、そう言った簪はおもむろの立ち上がった。

代表候補生とはいえ、実戦経験の少ない者が多い。足がすくんでし

まうのも無理らかぬこと。それに簪の性分上、こういう荒事は向いていない。

「わかった。ただし、ここにいた時点で守秘義務が発生している。いいな」

「……はい」

返事し、彼女は逃げるように風花の間を出て行った。

そんな彼女を、鈴とラウラが非難めいた顔で見る。まるで臆病者だというように。

「鈴、ラウラ。続けるぞ」

「はい」「了解です」

「まずく銀の福音の性能についてだ。——山田先生」

中央モニターを切り替えてもらうよう山田先生に指示を出す。

即座に中央モニターの内容が、太平洋の地図からISのスペック表に切り替わった。

「ミサイル防衛を目的とした広域殲滅型IS？」

と、セシリアが言う。

「そうだ。〈白騎士事件〉のような事態が再び発生した場合、従来のミサイル防衛構想では対応しきれない。そこで考案されたのが、この広域殲滅に特化したIS〈銀の福音〉だ。このISは面攻撃と、圧倒的な機動力で多数のミサイルを一度に迎撃する

「ですが、火力と機動性があればいいというものでも」

「その通りだ。〈銀の福音〉には偵察衛星や地上イージス艦と緻密な連携ができるよう優れたデータリンク能力がある。また、広域高性能レーダーを始めとした強力な電子兵装も積んでいる。だが、その高性能化が仇になったようだ」

「どういうことですか？」

と、デユノアさんが訊く。山田先生が答えた。

「〈銀の福音〉には操縦者が膨大な情報を処理できるように、脳の深い部分でリンクした外部脳型拡張AIが搭載されているそうです。そのAIが何かしらのシステム不良で、操縦者を脳空間に幽閉してしまっただけです。その結果が、この暴走だというわけです」

「AIが操縦者を……。まるでSFホラーだね。——それでAI以外に具体的な装備は？」

「複合型相転移砲《銀の鐘》が36門。高エネルギー相転移砲《ベツレヘム》を装備している」

「相転移砲か。ジェニファーさんの専用機にも同じ装備が積んであったな」

と、一夏が先日のとーナメント時を思い出しながら言う。

「この＜銀の福音＞はアメリカ代表の専用機の発展型だそうだ。＜銀の福音＞の武装や新型推進翼には、＜ナインテイル・フォックス＞と同じテクロノジーが使われている」

「そのわりには、ずいぶんと外観が違うわね」

翼のような独特の推進装置を持つ＜銀の福音＞は、一言で表すと天使という具合だ。

九本の《尾》を武器とする＜ナインテイル・フォックス＞とは、似ても似つかない。

「＜ナインテイル・フォックス＞の基礎設計をしたのは、私だからな。私がアイツの名前にちなんでいろいろと手心を加えた結果、あの外観になったんだ。似てないのはそのためだ」

と、鈴の疑問に千冬さんが答える。

なるほど。だから、ジェニファーの専用機は日本の妖怪を模しているのか。

「話を戻す。《銀の鐘》は複数の標的を一度に攻撃でき、《ベツレヘム》にはミサイルサイロの隔壁を一撃で破壊できる威力がある。どちらも脅威だ。しかしMDを主眼に開発された本機は、近接攻撃に弱いとされている」

「近接戦闘なら勝機はあるか？」

「だからって、そう何度も接近を許してくれないでしょう。初撃で決めるのが効率的だわ」

「ということとは、一撃必殺が可能な機体であたるしかありませんわね」

セシリアの一言で一夏に視線が集まった。当人はぴよこんと肩を躍らせる。

「もしかして《零落白夜》で墜とすのか？ でも、待ってくれ。《零落白夜》は《絶対防衛》を突破する威力があるんだぞ。確かに一撃必殺は可能だけど、それじゃ操縦者の命が……」

そう。確かに《零落白夜》があれば＜銀の福音＞を一撃で撃墜できるだろう。

しかし、それでは操縦者——ナターシャ・ファイルスは助からない。その事に気づいたみんなが、私の表情を窺ってくる。

「そうだ。ラウラの時みたいに相互意識干渉クロッシンググアクセスを使って」

「残念ながら、＜福音＞はへコアネットワークを完全に切断している。通常ネットワークは生きているようだが、へコアネットワークでなければ、相互意識干渉クロッシンググアクセスは発生させられん」

「くそ、そんな……」

まるで自分の事みたく悔しがつてくれる一夏に、私は嬉しい気分になった。

そんな一夏を安心させるように、ロリーナが視線を送る。

「大丈夫よ、一夏くん。今回は秘密兵器があるわ」

ロリーナは胸元からグレネード弾に似た弾丸を取り出す。ISの機能を停止させる《剥離弾リムーバー》だ。

ちなみにラウラの時はこれを使うことができなかった。＜ゴールム＞に使った一発が、最初で最後の一発だったのだ。

「これを使えばISを強制停止させられるわ。ただし、効力を発揮させるには一度シールドを突破しなければいけないの。でも《雪片式型》のシールド無力化攻撃があれば問題ないでしょう。あとは一夏くんの覚悟次第よ」

「俺の覚悟……」

「織斑。これは軍事作戦だ。訓練でもISバトルでもない。今までやってきた戦闘とは毛色が違う。終わっても勝利の美酒なんざ味わえんだろう。それでも戦う覚悟はあるか？」

僅かな沈黙の後、彼は言った。

「……この＜銀の福音＞には、アリスの知り合いが乗っているんだよな？」

「はい。米軍時代、大変お世話になった上官が乗っています」

「アリスはいつも俺を助けてくれた。そんなアリスの助けになれるなら、俺は力になりたい。ちよつと怖いけど、俺にできるのなら、やらせてください」

覚悟を決めた一夏の表情がぐつと引き締まる。

場違いな感想だけど、私はその表情をかつこいと思ってしまうた。

「決まりだな。次は一夏をどうやって運ぶかだが」

《雪片式型》のエネルギー消費を考慮すると、全て攻撃に回す方がいい。となると運搬役にもう一機ISが必要だ。それも＜福音＞の最高速度以上の推力を有するISが好ましい。

「＜赤騎士＞の《単一仕様能力》で運べない？」

「残念ながら無理です。＜赤騎士＞の《単一仕様能力》——量子ジャンプの飛距離はそんなに長くありません。あくまで緊急回避用なので、移動には不向きなのです」

「じゃあ、純粋な速度で追いつくしかないね。この中で最も速度が出るISは？」

デュノアさんがみんなを見渡すと、セシリアが再び挙手した。

「でしたら、わたくしの＜ブルー・ティアーズ＞が。本国から強襲用高機動パッケージ（ストライクガンナー）が送られてきていますわ」

「ああ、話に聞いていた、レーザー推進を用いた？」

「ええ。数字上なら＜銀の福音＞以上の速度が出せますわ。超高速下の訓練も受けております」

確信に満ちた表情をするセシリアに、千冬さんは肯いた。

「よし。これで作戦遂行に必要な駒は揃ったな。では——」

「ちよつと待ったーッ！」

千冬さんが具体的な作戦を組もうとした時、底抜けに明るい声がそれを遮った。

何事かと思ひ周囲に注意を払うと、天井からニョキツと機械仕掛けのウサミミが飛び出した。

「あのアイテムは——」

予想通り、天井から現れたのは、ISの開発者にして稀代の天才――篠ノ之博士だった。

篠ノ之博士は、くるんとアクロバティックに着地すると、ズズッと私たちの所にやってくる。

「ちーちゃん、もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティングだよ！」

「いや、その前にあれを何とかしてあげた方が……」

篠ノ之博士の背後で、宙ぶらりんになったままのくーちゃんを指差す。

どうやら一人では降りられないらしく、着かない足をずっとバタバタさせていた。

「束さまー」バタバタ

「あわわ、待ってて、くーちゃん。今束さんが受け止めて上がるからね！」

必死にぶら下がるくーちゃんの許へ篠ノ之博士が慌てて駆け寄る。

そんな二人を、私と千冬はやれやれの表情で見守った。

「どうします、千冬さん？ 何か話がありそうでしたが」

「そうだな。話ぐらい聞いてやるか。――おい束、話があるならさっさとしろ」

「おう、おう、そうだったね。うっかり束さんだったよ」

千冬さんが急かすと、篠ノ之博士は思い出したように手の平を叩いた。

本当にマイペースな人だ。こっちは時間が押しているので早くしてもらいたのだけど。

「で、いい作戦とは？」

「うんうん、ここはね、断然く紅椿>の出番なんだよ」

「え、く紅椿>の？」

驚いたのは、その持ち主である篠ノ之さん本人だ。

そんな篠ノ之さんに代わって私が尋ねた。

「どういうことですか？」

「まあ、見えて」

篠ノ之博士は自分の周囲にキーボードと投影型モニターを展開して、それを操作する。

すると、〈銀の福音〉を映し出していたモニターが〈紅椿〉のデータに切り替わった。

「ほら、〈紅椿〉をちよつと調整してやれば、パッケージがなくてもこの通り♪」

表示された〈紅椿〉の推力は、確かに〈銀の福音〉の推力を上回っていた。

だが、一同の意識は別のところに向いていた。《展開装甲》。そう表記された一点に。

「《展開装甲》？」

と、一夏と篠ノ之さんは仲良く首を傾げる。

どうやら、二人はこれが何なのか解っていないようだ。

「むむ、その顔は解らないって感じだね。じゃあ、束さんが説明してしんぜよう」

言うなり、束さんはバツと女教師チックなインテリ眼鏡を取り出し、装着した。

千冬さんに比べるとかなり似非っぽい女教師だが、今はツツコまずにいよう。

そして、クーちゃんから教鞭を受け取るなり、それをビシつと一夏に突き付けた。

「いっくん、《展開装甲》っていうのはね——」

「攻撃、防御、機動を即時に切替えられるISの特殊装甲をいうの。第四世代の設計思想でもある即時万能対応——リアルタイム・マルチロール・アクトレスを実現する次世代の装備よ」

篠ノ之博士の言葉を遮って、ロリーナが説明する。

篠ノ之博士は額に漫画みたいな血管マークを浮かべた。

「おい、怪獣オタク！ 束さんの説明を取るんじゃないよ！」

「ういふ♡」

激昂する篠ノ之博士に、ロリーナはしてやったりと笑む。

しかし、ロリーナの説明がみんなの驚愕に繋がらない一夏は、首を

傾げたままだ。

「あの、ロリーナさん、《展開装甲》ってのが、どういったものなのか解りましたけど、それって凄いですか？ いまいち、みんなが驚いている理由が解らないんですけど」

「あー、いっくんが束さんじゃなくて、怪獣オタクに訊いた！ ひどい！」

「え？ じゃ、じゃあ、束さん」

「あら、酷いわ、一夏くん。説明したのは私なのに。ぐすん」

「じゃあ、ロリーナさん」

「いっくん！」

『いい加減にしろー！』『いい加減にしてくださいー！』

私と千冬さんは張り合うロリーナと篠ノ之博士を同時にはり倒した。

まったく時間が押しているに。くだらない争いで時間を取らせないでください！

「いいですか、一夏。第四世代の設計思想でもある即時万能対応——リアルタイム・マルチロール・アクトレスは概念だけで、それを実現する技術はまだ机上の空論なのですよ。つまりそれを実現している《展開装甲》は世界のどこにもない代物なのです」

なおも、やいのやいのと取っ組み合う二人に代わって私が説明する。役立たず

それで、ようやく事の重要さに気づいたようだ。

「世界のどこにもない……？ でも＜紅椿＞には実装されているんだろ？ その《展開装甲》が」

「ほら、束さんは世界の数世紀先をいく天才だからさ。早くも作っちゃったんだよ」

にやははと笑う篠ノ之博士に、みなさんが言葉を失う。

呆れているのか、驚いているのか、あるいは——畏怖しているのか。なにせ、世界ではようやく第三代型の試作機がロールアウトしたばかりなのに、それを素っ飛ばして第四世代が出てきたのだ。驚愕で口が聞けなくなるのも無理からぬことだろう。でも、今はその時間す

らおいしい。

「話を進めましょう。それで〈白式〉の運搬役ですが――」

「アリス、織斑先生、わたくしに一夏さんを運ぶ役目を任してくださいませ」

と、強く訴えてきたのはセシリアだ。

その瞳には自らの自信と、篠ノ之さんの力量に対する僅かな不安が見え隠れしていた。

私も正直な気持ち、セシリアの方が頼もしいが、

「――例のレーザー推進の調整には、どれくらいかかりそうだ？」

「それは……専用装置を30分あれば……」

30分か。時間が押しているので、半時間はちよつと惜しいところだ。

「〈紅椿〉なら5分でできちゃうよっ」

篠ノ之博士の言葉に再び黙考すると、篠ノ之さんが私を見た。

「アリス、一夏を運ぶ役目、私に任せてくれないか？ 私が必ずやり遂げてみせる」

〈紅椿〉を手に入れてからというもの、篠ノ之さんの中で何か心情の変化があったように伺える。それが一体、どのような変化なのか。そこまでは判らない。それが不安だった。

「確かに〈紅椿〉は作戦遂行に必要なスペックを満たしています。ですが、篠ノ之さんは特別訓練を受けていませんし、実戦経験もありません。それは一夏より劣ります。正直、不安が残ります」

「私もアリスの意見に賛成だ。力を得たばかりの人間は、力を過信する」

ラウラの辛辣な意見に篠ノ之さんが眉を顰めた。

「おまえと一緒にするな。私は力の扱いを誤ったりしない」

篠ノ之さんは、ラウラがVTシステムに頼ったことを批難しているのだろう。

そう云われると、ラウラは言葉を嚙むしかなかった。

「私なら大丈夫だ。今の私にやれないことはない。私に任せてくれ」とても力強い言葉だった。高揚しているようにも感じられる。

同時に悪い傾向だとも思った。今の彼女は何か大事なものを見落としていたような気がする。

しかれども、時間は押し迫っていた。あまり時間は費やせない。私は逡巡してから、

「信じていいのですね?」

「ああ、信じてくれ」

「わかりました」

私は千冬さんに同意を求める視線をやった。

「リアル、篠ノ之は実戦経験が皆無なうえ、稼働時間もこの中で最も少ない。いくら＜紅椿＞が第四世代型だとしても、事を仕損じるかもしれないぞ?」

「篠ノ之さんの稼働時間は考慮の上です。それに今回は一夏を運ぶだけです。そう難しい任務でもありません。念のため、バックアップに私とセシリアがつきます。——それと千冬さんに一つお願いがあります」

「なんだ?」

私はふん☆と得意げな篠ノ之博士を盗み見る。

「篠ノ之博士の監視をお願いしたいのです。おそらく彼女は何かを企んでいる」

「わかった」

相談を終えると、千冬さんが改めてみんなの方を向いた。

「次に具体的な作戦の説明を行う。まず織斑と篠ノ之はその速度を活かして先行。途中、早期警戒型＜ヴァンガード＞が＜福音＞の監視に当たっているので、合流して最新の情報を受け取れ。受け取り後、作戦開始だ。織斑は＜福音＞へ奇襲を仕掛け、《雪片式型》のバリアー無効化攻撃と《剥離弾》で＜福音＞を止めろ」

「了解です」

「説明は以上だ。——何か質問があれば挙手しろ」

今度は誰も手を挙げなかった。

「ないようだな。では。各自準備に取り掛かれ」

第45話 天使はラブソングを歌わない

時刻は正午を回った頃。

照りつける太陽の下、灼熱の砂浜の上。俺は〈白式〉を装着しながら、作戦の最終チェックを行っていた。動力部、駆動系、推進装置、武器装備の点検とシステムの最適化はいわずもがな、イメージトレーニングも欠かさない。

今回の作戦成功の要は俺。失敗が許されない分、念には念を入れる。

視界の外れでは、ラウラがペンキを片手に〈白式〉を抑制された灰色に塗装していた。

「ラウラ、それは？」

「RAM塗料だ。レーダー波を吸収してくれる」

そういえば千冬姉は『福音には広域の高性能レーダーが装備されている』と言っていた。

そのレーダーに引っかけたら奇襲もへったくれもない。この塗装変更はそのための対策か。

「じゃあ、〈紅椿〉は？」

東さんによる調整を受けている筈を盗み見ながら訊く。

あの錦のような絢爛豪華たる〈紅椿〉の装甲は、遠目から見てもかなり目立つが。

「《展開装甲》には高性能なステルス機能があるそうだ」

「そんな機能まであるのか」

いやはや、本当に万能なんだな、《展開装甲》ってのは。

「よし、大体こんなものだな。では、私は向うのチームの準備を手伝ってくる」

「おう、ありがとな」

塗装を終えたラウラが、塗料を置いてセシリア班の方に駆けていく。

そのセシリア班では、〈ブルー・ティーズ〉に強襲用パッケージ〈ストライクガンナー〉をインストールする作業が行われていた。た

だし、強襲用高機動パッケージと呼ぶわりにブースターのような補助推力装置は見当たらない。背面に『巨大なリング状のパーツ』が追加されているだけだ。

(それになんだ、あの装置)

さらに<ブルー・ティアーズ>の側では、鈴たちが大掛かりな装置を急ピッチで建造していた。それはどう見ても砲台だった。しかも、ローズマリーさんの専用機<サイレント・ゼフィルス>が装備していた《スターブレイカー》によく似ている。

その固定砲台のような装置に、ロリーナさんが端末を繋いで調整を行っていた。

「<赤騎士>のBT稼働データを少々♪セイルの量子膜濃度を再調整♪へレッドクイーン<、光圧リフレクションの反動率、再計算、おねがいね♪」

周囲に光の端末を展開し、歌うように調整を行うさまは、あかたかも妖精と戯れているようだ。そんな幻想風景に見とれていると、プライベートチャネル個人間秘匿通信が開かれた。セシリアからだ。

『一夏さん、すこしお時間よろしいかしら?』

『ああ。大丈夫だが、どうした?』

『実は作戦前におきたい大事なお話がありますの』

『大事な話? 作戦についてののか』

セシリアは首を横に振った。

『いえ、そうではなく、個人的な。わたくしとエイミーについて』

エイミー。確か今回の作戦で協力してくれている小隊に所属していた少女だったか。

話では米軍が開発したVTシステムの暴走で亡くなったと聞いていたけど。

『実はVTシステムによって暴走したエイミーを止めたのは、アリスですの』

『そうだったのか!?!』

それを聞いて、俺は驚愕した。

『ただし、ラウラさんの時のようにはいきませんでしたわ』

セシリアは具体的な結末を語らなかったが、想像は安易にできた。だって、エイミーという少女は死んでしまったのだから。ハッピーエンドな訳がない。

「だから、アリスはラウラに助けようとあんなにも必死だったのか……」

セシリアは米軍で起こった悲劇を繰り返してはいけない、とアナウンズで語った。

アリスもきつと同じ心境だったのだろう。だから、世界を敵に回してまでラウラを助けようとした。

「でも、待てよ。エイミーって人はおまえの友達だったんだろ？
じゃあ、アリスは……」

『はい。わたくしにとつてアリスは親友の仇ですわ』

俺は息が止まる音を聞いた気がした。そして、恐る恐る口にする。
「で、でも、憎んではいないんだよね？」

震えた声で尋ねると、セシリアは『はい』と首肯した。

それに心底で安堵する。いや、日頃の行動を見ていれば明白なことなのだが、それでも俺は安心せずにはいらなかった。

『わたくしも事実を知ったときは、怒りに身を焦がされる思いでした。でも、アリスは自らの行いを酷く後悔し、罪の意識に苛まれておりましたの。それを知り、わたくしの憎しみは消えましたわ』

「そうか。それを聞いてよかった」

『その後、芽生えた感情は母性というべきものでしたわ』

「母性か。セシリアがアリスの世話を焼く理由がよくわかったよ」

セシリアは『ふふ』と笑む。

我が子を慮る母親のようなその微笑みに、俺は話の道筋を理解した。

「セシリアはアリス心配なんだな？　だから、こんな話を」

『はい、彼女は強くみえますが、実はとても繊細な子です。それに怒りや憤りを内側に閉じ込めるくせがあります。今はああやって冷静を装っていますけど、内心ではさまざまな感情が渦巻いているはずですよ。わたくしはそんな彼女が心配でなりません。だから――』

我が身のようにアリスを案じるセシリアに、俺は強く頷いた。

「ああ、わかつている。〈福音〉の暴走を止めて、必ずナターシャさんを救って見せる」

「ふふ、頼もしいかぎりですわ。それでこそ、わたくしの選んだ殿方。——では、わたくしは調整の方に戻ります」

セシリアが個人間秘匿通信を閉じる。

それと入れ替わるように、今度は作戦本部から公開通信が開かれた。

『一夏、篠ノ之さん、時間です。スタンバイはいいですか?』

「あ、ああ」

声を強張らせる俺に、アリスが和ますような笑みを向けた。

『もしかして緊張してます?』

「ああ、初めてだからな、こういうこと」

『そうですよね。——ところで、一夏は“シン・レッド・ライン”を見たことありますか?』

いきなり、アリスがそんな事を訊いてきた。

「シン・レッド・ライン?」

『ええ。1998年のテレンス・マリック監督の戦争映画です』

「いや、見たことないな」

『そうですか。では、プライベートライアンは?』

「ああ、それならあるけど、どうしたんだ、急に」

『いえね。これからあなたたちが向かう戦場は、プライベートライアンで描かれているような戦場じゃないから、肩の力を抜いて大丈夫ですよ、と言いたかったのです』

「そうか。でも、あんまりうまい緊張のほぐし方じゃないな」

アリスは『私もそう思います』と苦笑した。

「でも、ありがとな。すこし気が紛れたよ」

『いえ。では、作戦の最終確認をします。まず、二人は〈銀の福音〉の警戒にあたっている〈ヴァンガード〉と接触して、最新の情報を受け取ってください。その後、〈紅椿〉の機動力を活かして〈福音〉を奇襲してください』

「わかった」

「アリス、私は状況に合わせて一夏のサポートをすればいいか？」

と、割り込んできたのは箒だ。

『ええ、そうですね。ですが、今回の作戦は冗長性の低い作戦です。エネルギー切れしても回収の人手を割けません。篠ノ之さんはく紅椿>での戦闘経験が皆無ですから、くれぐれもエネルギー切れには気を付けてください』

「わかった。肝に銘じておく」

そこで作戦開始の時間を告げるタイマーが鳴った。

『時間ですね。各自、出撃の準備をしてください』

「了解」

「了解した」

アリスの指示で、俺は箒の背中に身を預ける。

IS同士を接続するコネクタなどはないため、本当に身を預けるだけだ。

「本来なら女の上に男が乗るなど、私のプライドが許さないが、今回だけ特別だぞ？」

「お、おう？」

専用機が手に入って、気持ちが高揚しているのだろうか。その声音はどこか弾んでいるように聞こえた。なにより、箒が軽口を叩くなんて珍しい。それに僅かな不安を覚えた俺は、注意するように言った。「なあ、箒。専用機が手に入って嬉しいのはわかるけどさ、もうちょっと気を引き締めていこうぜ。これから俺たちは暴走したISを相手にするんだからさ」

これでも俺は二度にわたり、ISの暴走事件に関わってきている。その度、肌で実感してきた。ちよつとした気の緩みが死に繋がるってことを。

暴走しているISが水平線の彼方にいるため、今は実感が沸かないかもしれない。だからこそ今の内に気構えをしつかりしておかないといけないと思うんだ。そういつた旨を伝えようとしたのだが、箒はフフフと笑うだけだ。

「無論、心得ている。大丈夫だ。ふふ、どうした、怖いのか？」

「ああ、怖いさ。作戦が失敗するのがな。——〈福音〉に乗っているのは、アリスが世話になった上官なんだぞ？ 作戦が失敗したら、アリスが悲しむ。俺はアリスのそんな顔をみたくない」

俺が真剣な面持ちで言うと、箒は僅かに視線を落した。

「……お前は、アリス、アリス、だな。私だって……」

「どうした？」

「いや、なんでもない。まあ、そう心配するな、一夏。お前と私がいれば、できないことなんてないだろ？ それにいざとなったら、私がお前の力になってやる。今の私には“力”があるのだから。大船に乗った気分にいるといい」

そう言われても、俺の不安は増すばかりだった。

でも、込み上げてくる不安を俺は自制した。作戦のキーである俺が冷静さを失えば、作戦は失敗する。それだけは許されない。他ならぬアリスの為にも。

『では、現時刻を以て作戦を開始します。アルファチーム、発進！』

アリスの号令で、箒が〈紅椿〉のスラスタに火を入れる。次の瞬間、〈紅椿〉が浜の砂を舞い上げながら、加速度的なスピードで飛翔した。高度計の数値が跳ね上がり、体にとんでもない重力加速度圧しかかる。意識を持って行かれないよう気を強く持てば、機体は既に高度1000メートルまで上昇していた。

「一夏、しっかり捕まっているんだぞ。振り落とされても拾ってやらないからな」

「お、おう」

「では、一気にいくぞー！」

箒は《展開装甲》を高機動モードに切り替え、〈紅椿〉をさらに加速させる。

速度インジケータの数値が跳ね上がり、機体はすぐさま音速の域まで達した

(なんつー加速だよ……。これが第四世代の性能なのか!?)

空気の壁を突き破って〈紅椿〉がさらに加速する。俺が見てきた

中で、間違いなく一番の速度だった。どうやら束さんの『現行ISで最高のスペック』という弁は本当のようだ。

「二夏、例の早期警戒型が見えてきたぞ」

箒が言うと、前方に早期警戒型〈ヴァンガード〉が見えた。右肩に大型のアサルトカノン。左肩に円盤状の装備——レドーム。背後には情報処理用の演算モジュールを積んでいる。

「二夏、接触する」

「了解」

IFFから味方識別信号を受け取り、俺たちは早期警戒型〈ヴァンガード〉に機体を寄せた。

俺たちの接近に気づいた〈ヴァンガード〉の操縦者が敬礼で応じてくれる。

「織斑二夏さんと篠ノ之箒さんですね。私はイリス・コーリング曹長であります。話は聞いております。この度は作戦にご協力頂き、感謝いたします」

「いえ、それほどでは。その、困った時は助け合いが肝心ですし」

「恐縮であります」

イリスさんは明らか俺たちより年上に見えたが、口調はとても丁寧であった。

先輩だからといって、学生である俺たちを見下たり、バカにした態度は全くない。

「では、データをそちらの機体に転送します」

イリスさんから〈コアネットワーク〉を介して、〈銀の福音〉の詳細なデータを受け取る。

エネルギー残量、機体のコンディション、操縦者のバイタル、AIのステータス、などなど。

「じゃあ、俺たちは先行して〈銀の福音〉を止めに行きます」

「了解。ご武運を」

イリスさんから離れて、俺たちは再び加速状態に入る。

その直後、箒から個人間秘匿通信プライベートチャネルが開かれた。

「想っていたより礼儀正しい人なのだ。アメリカ兵とはもつと口が

悪いものだと思っていた」

「そりゃ偏見だろ。つーか、作戦に集中しようぜ」

箒は『……うむ、そうだな』と前を向いた。——その直後だ。

「一夏、視えたぞ」

箒の声と同時に〈白式〉のレーダーが、下方を飛行する〈銀の福音〉の機影を捉えた。

拡大された画像に映し出された〈銀の福音〉は、その名に相応しい銀色の装甲と、エンジェルリングのようなレドームを頭上に装備していた。背部には二対四枚の翼。おそらくそれが〈銀の福音〉の主力武器である《銀の鐘》に違いない。

「ふうー」

一度大きく深呼吸して、心の準備を整える。そしてGPLを待機モードから戦闘モードに移行し、《雪片式型》を展開。バリアー無効化攻撃を発動する。さらに空いた手に《剥離弾》を握りしめた。

「いくぞッー」

箒が《展開装甲》とスラスタの出力を上げ、〈銀の福音〉へ肉薄した。瞬く間に〈福音〉との距離が縮む。〈銀の福音〉はまだこちらに気づいていない。俺は《紅椿》から離脱し、その慣性を活かしつつ瞬時^{イグニッション・ブースト}加速の体制に入った。

（よし、これならいける！）

そう確信して《雪片式型》を振りかざした次の瞬間——

《接近警報！》

〈銀の福音〉が翼を羽ばたかせ、攻撃を躲した。



風花の間・仮作戦司令部。

一夏の奇襲攻撃失敗の映像は、中央スクリーンにはつきりと映し出されていた。

「アルファチームの奇襲作戦は失敗した模様です！」

CIO担当の山田先生の報告を、私は努めて冷静に受け止めた。彼の攻撃にスキはなかった。単純に＜福音＞の反応速度がそれを上回ったか。

「わかった。アルファチームを一度戦線から離脱させろ」

経験乏しい彼たちに福音の応戦は酷だ。そう踏んだ千冬さんは二人を一度下からせる。

私も千冬さんによく形で、イーリスに通信を繋いだ。

「イーリス。攻撃は失敗しました」

『くそつたれ！』

「いまから一夏たちと合流して第二波攻撃をしかけます。合流まで一夏たちを」

『了解』

次いで、浜辺のセシリアへ通信を繋ぐ。

「セシリア、一夏たちの奇襲攻撃が失敗しました。調整にあとどれくらいかかりそうですか？」

『それならたつたいま完了いたしましたわ。いつでもいけますわよ』

「今からそちらに向かいます。機体をホットにして待機してくださいください」

『了解しましたわ』

セシリアの返事を聞き、私は羽織っていた制服を脱ぎ捨てた。

「出撃します」

「わかった。気をつけてな」

千冬さんに指揮権を一任し、私は風花の間を出る。

渡り廊下にさしかかると、見知った少女が立っていた。作戦前に席をたつた簪だ。

「どうしたのですか？ 作戦要員以外は自室待機のはずでしたが？」

「……………えつと、あの……………」

「ああ、例の件なら大丈夫ですよ。ちゃんとロリーナに話しておきますから」

「……………うん、それは、いいの。……………ただ、その……………あなたに『気をつけて』って言いたくて。……………わ、わたし臆病だから、こういうとき、怖

くて何もできないし、みんなの無事を祈るぐらいしか」

心の弱さを嘆くように、両手の掌を合わせる簪。その肩にそつと手を置く。

「大丈夫。あなたが祈っていてくれれば、全員無事に帰れますよ」

ええ。必ず作戦を遂行させて、みんなでこの場所に返ってみせる。ナタルも含めて。

♡

✦

♠

＜銀の福音＞が翼を羽ばたかせて身を翻した瞬間、俺の放った剣撃は右側を掠めていった。

その所為で、＜銀の福音＞のシールドを無効化できず、＜剥離弾＞リムーバーを使えない。

（くそッ、奇襲は失敗かッ！）

俺が毒づくくと、重力を感じさせない軽やかな機動で＜福音＞が二対四枚の翼を展開した。

《対象を作戦の妨害と見做し、迎撃モードに移行する。《銀の鐘》威力行使》

無機質なマシンボイスと共に展開されたそれは、32門から成る高エネルギー相転移砲の群れだ。圧縮された羽根状のエネルギー弾が雨霰と降り注ぐさまは、まるで白い壁が押し寄せてくるようだった。

「くっ！　なんて数だ！」

面で攻撃されては、＜紅椿＞や＜白式＞の機動性を以てしても躲し切れることが難しかった。なんとか《雪片式型》のエネルギー無効化で場をしのぐも、被弾に次ぐ被弾でシールドの耐久値がみるみる減少していく。

（このままじゃ、アリスたちと合流するまえに撃墜されちゃうぞ……）
想像以上の手数に圧倒されていると、レーダーが一機のISを捉えた。
た。

やってきたのは、先ほど情報を提供してくれた早期警戒型＜ヴァン

ガードのイーリスさんだ。

『援護する！ そのうちに下がれ』

イーリスさんは両膝にマウントされた12.7mmアサルトカービンを取り、俺たちが躲しきれなかった「白い羽」を悉く撃ち落とし、牽制射撃で＜福音＞の頭を押さえる

二世代型なのにまるで引きを取っていない。そんな彼女の技量に思わず喉が鳴った。

(練度が違いすぎる。兵には、世代差なんて関係ないのか)

改めて自分の未熟さが身に染みるが、彼女が駆けつけてくれたのは助かった。

ここは場馴れしたイーリスさんに任せて、俺たちは一度戦線を離脱して体勢を立て直そう。そしてアリスたちと合流して第二波攻撃を仕掛ける。

「箒、一度退くぞ」

しかし、箒はそれを否定した。

「いや、もう一度アタックだ！ 私たちの手で＜福音＞を止めるんだ！」

「なにいつてんだ。無理だ！」

意表をついた奇襲攻撃を躲す相手だぞ。真つ向からの攻撃が通用するとは思えない。

それに俺たちが無闇に動けば、イーリスさんの足を引っ張りかねない。

「大丈夫だ。お前には私がついている！ 私を信じろ！ ——行くぞ！」

箒は俺の制止を振り切って、単独で＜銀の福音＞へ肉薄していく。

『おい、バカやろう。ここはあたしに任せて下がれ！ 出てくるな！』

イーリスさんが箒の無謀な行動に怒声を飛ばすけど、その制止させ箒は振り切った。

『おい！ アイツを止めろ！ 墜ちてえーのか！』

「すみません！」

イーデイスさんの豹変ぶりに驚くより早く、俺は箒の後を追いかけた。

心中で『力を得た人間は力を過信する』というラウラの言葉を思い出しながら。



私が浜辺に到着すると、セシリアは調整が終了したくブルー・ティアーズの前で金髪を手の甲で弾いて見せた。

「おそくてよ、アリス。こちらの準備は完了していますわ」

「すみません」

詫びてく赤騎士を装着し、セシリアのくブルー・ティアーズの隣に並ぶ。

セシリアは私の背後に回り込んで、く赤騎士を抱きかかえるように持ち上げた。

「では、参りますわ。——ソーラーセイル展開」

言うのと、くブルー・ティアーズの背面に装備されたリングから青い膜が広がった。

くブルー・ティアーズの専用オートクチュールパッケージへストライクガンナーは、背にソーラーセイルという帆を張り、そこへBTレーザーを照射して加速する装備だ。それを以て、反撃の暇も与えず敵地にISを送り込む。それが高機動強襲用パッケージへストライクガンナーのコンセプトだそうだ。

「《スターゲイザー》エネルギー充填開始。斜角設定プラス30」

本体のくブルー・ティアーズからエネルギーを受け取った照射装置《スターゲイザー》が、斜角を調整してこちらに照準を合わせる。「では、いきますわよ。——BTレーザー照射開始、発進！」

BTレーザーを背の帆で受けたくブルー・ティアーズは、爆発的に加速した。その重力的加速度に一瞬だけ意識がブラックアウトしかける。この速力ならすぐに一夏たちの許に駆けつけられそうだ――

—そう思ったとき、本部から通信が開かれた。

『リデル、まずい状況になった。篠ノ之がこちらの作戦を無視して突貫した』

『なんですって!?!』

「それにエネルギーをかなり消費している。あんな戦い方では長くもたない』

『通信は?』

『コールしているが、出ない。気付いていないようだ。急いでくれ』

『なんてこと……。——わかりました。急ぎます』

そう告げるも、現状ではこれ以上の速度を出せなかった。今がトツプスピードなのだ。

私はもどかしさを抱えながら、水平線の延長を睨むしかできなかった。



大量に降り注ぐ攻撃の雨を自前の機動力で凌ぎ、先行する<紅椿>を<白式>が追う。だが、もともと推力で劣る<白式>では、<紅椿>の尻に付くのがやっとだった。かてて加えて、第二波に備えてエネルギーを備蓄しておかなければならない<白式>は、全力を出せない。

対し、<紅椿>は先を考えずのフルパワーだった。これではあと数分しかもたない。

「箒! エネルギーを無駄使いするな! アリスが来るまで持たないぞ!」

そう言った一夏に、箒は小さく唇を噛んだ。

(お前はまたアリスを頼りにする。私だって、お前に必要とされたいのに!)

そんな欲求に駆られ、箒は自分の行動に歯止めを掛けられなくなっていた。

彼女より強く。彼女より紅く。それが齎すアドレナリンの分泌が
箒を闘争に駆り立てる。

——銀色の福音。アメリカの第三世代I.S。それがなんだという
のだ。

——この〈紅椿〉の性能の前では、無意味だ。叩きのめしてやる。

——そして彼に認めてもらうんだ。アリスのように。

〈紅椿〉は箒の闘争心を的確に汲み取り、機体の《展開装甲》に反
映させた。

第四世代の設計思想コンセプトであるリアルタイム・マルチロール・アクトレス。〈紅椿〉においては、操縦者の精神に感応することで、より迅速な即時対応を実現している。つまり、人が持つ『殺人衝動』や『防衛本能』に応じて装甲が即時変化するよう設計されていた
しかし、その機能が悪い方向へ傾きつつあった。

↑——報告：攻撃型《展開装甲》。AEB出力120%——↓
箒の闘争心を汲み取った〈紅椿〉は、バインダーから過剰な攻性エネルギーを放出した。

より強力に、より攻撃的に。その姿はまさに一輪の花が開花したよう。

だが、その花は——けして美しくなかった。

禍々しいエネルギーを放出し続ける〈紅椿〉は、異臭を放つラフレシアのようだ。

なおも紅椿という花は咲き誇ることなく、無駄に花卉を散らしながら〈福音〉に追い続った。

対する〈福音〉も負けてはいない。『羽根』をばら撒き、悪魔的な攻撃を加えてくる。

「ええい！ 鬱陶しい！」

箒は多数攻撃を想定した武器《空割》を十字に振り、文字通り、空を割る。

十文字斬りといわんばかりの攻撃により、僅かながら突破口が開いた。

「そこだ！」

その突破口に〈福音〉攻略の糸口を見出した筈が、スラスターを吹かして一気に突撃する。

これには〈福音〉も意表を突かれたようで、わずかながら動きが止まった。

「動きが止まったっ！——今ならー！」

これ好機と踏んだ筈が、単一仕様の《雨月》で打突を繰り返す。

その切っ先から放たれた無数の閃光は、狙い違わず銀色の天使を捉えたが、

《LaLaLa》

マシンとは思えない声と共に〈福音〉は機体を翻し、光の閃光をやり過ぎした。

そして、開けた先にいたのは——友軍のイーリス機。

『なッ!』

彼女の驚愕と機体への着弾は、ほぼ同時だった。

《雨月》から放たれた幾条の閃光が、〈ヴァンガード〉の武装、レドーム、装甲を易々と破壊せしめ、おまけと云わんばかりに、機体を熱の塊に変える。

そこでようやく〈福音〉に誘導されたのだと気づく。あの面攻撃は筈の視界を塞ぐためだったのだ。功績ばかりに囚われていた筈は、周りの状態を把握しきれていなかった。それを狙われたのだ。

バラバラと砕けながら海に墜ていくイーリスの光景が筈の網膜に焼きつく。

「あつ、あ、あ……わ、わ、た、わた……しは」

自らの暴挙に気づいた筈は、過呼吸気味に言葉を吐き出した。

いや、沸き上がる自己嫌悪と自責の念が緋い混ぜになって、言葉にすらなっていない。

「ああ…… わ、私は……。なんてこと、を……」

仲間の討った自分の行いに恐怖し、頭皮を掻き走る。

そんなスキを見逃す〈福音〉ではなかった。なまじ機械であるぶん決断は速かった。

《武装選択。高エネルギー相転移砲 《ベツレヘム》》

〈福音〉は両手を天に掲げ、相転移で膨大なエネルギーを発生させた。

〈福音〉の頭上で輝くエネルギー体は、まさにキリストが生まれた町ベツレヘムで輝いた一番星。

《エネルギー準位移行、チャージ率120%……完了。威力行使》

もし〈福音〉に「レッドクイーン」ほどの「心を汲み取る力」があれば、多少の手加減はしていたかもしれない。だが、それを持たぬ〈福音〉は、自機が持ち得る最高威力の攻撃を箒に行使した。

「ひッー！」

箒の悲鳴と共に放たれた膨大なエネルギーの濁流が、紅い花を呑み込もうとする。

その時、彼女を庇うように、白い影が射線上へ躍り出てきた。一夏の〈白式〉だ。

「やらせるかッー！」

一夏は《零落白夜》を発動させた《雪片式型》で、相転移砲のエネルギーを打ち消す。

そこからは根競べになった。

〈白式〉のエネルギーが尽きるか、相転移砲のチャージが尽きるか、その根競べだ。

「箒は絶対にやらせねえ！」

一夏の気持ちを汲み取るように〈白式〉が白く、淡く、輝く。

RAM塗料を吹き飛ばした淡い光は、相転移砲のエネルギーを完全に相殺し、一夏に軍配を齎した。

「大丈夫か、箒？」

満身創痍の機体を回頭させ、一夏が優しく笑む。

箒は、失態を晒した羞恥と、助かった嬉しきで言葉を出せなかった。

それでもなんとか言葉を絞り出そうとした瞬間、——突如〈白式〉が爆ぜた。

「——えっ？」

〈福音〉の攻撃によるものかと思ったが、違った。爆炎は〈白式〉の内部から上がっている。

彼は意図的に動力炉の安全装置を外してオーバードロッドさせていたのだ。そうしないと膨大なエネルギーを消費する《零落白夜》を維持しきれなかったのだろう。

そのツケが内部爆発という形で現れた。

爆発の余波に負け、一夏の身体がぐにやりと折れる。次いで赤い液体が飛び散った。

「……………え？」

その赤い液体が血だと認識できたのは、返り血を浴びた筈がそれを拭った瞬間だった。

ISにはシールドという防御装置があるけれど、それは外的要因にしか働かない。ISは内側からの衝撃に案外と弱いのだ。

「いち、か？」

小爆発を繰り返し、バラバラと崩壊ながら落ちていく<白式>を、筈は呆然と見送ることしかできなかった。小爆発の火花でリボンが燃えていたことにさえ気づかない。

それから数瞬遅れて、言い表しがたい感情——先程の感情を遥かに上回る激情の波が押し寄せてきた。

「うわあああああああああああああああ!!!」

絶叫を超えた絶叫に、喉が潰れそうだったが、そんなことはどうでもよかった。

一夏を失った苦痛に比べれば、そんな痛みなど痛みに値しない。

《LaLaLa♪》

絶叫する筈へ<福音>が歌う。まるで墜ちていった一夏に鎮魂歌でも歌うように。

その声音が、酷く耳障りで、たまらなくなった筈は<福音>を睨み付けた。

「貴様アツ!!」

荒れ狂う感情を仇敵<福音>に向ける。それに感応した<紅椿>がバインダーから大量のエネルギーを放出する。禍々しく燃えるようなく<紅椿>はまさに鬼神だった。

だが、その鬼神がその力を発揮することはなかった。

↑――警告：リアクター反応停止、エネルギー残量0%まで低下――↓

↑――警告：各部、戦闘用出力を維持できません――↓

↑――警告：エネルギーが危険域に到達。補助動力への切り替えを実行――↓

ガチんと背後で重たい音が鳴る。補助動力に切り替わった音だ。

<紅椿>の動力は、<赤騎士>と同型で活動可能時間もそれに倣う。通常なら量産機より長く活動できるが、《展開装甲》の乱用で動力炉が限界に達していた。

「おい、どうした<紅椿>！ 動け！ 仇が目の前にいるのだぞ！」
そうだ。一夏の仇が――敵が、まだ眼前にいるのだ。

天使の形をした悪魔は、エネルギー切れだからと言って容赦などとはしてくれない。

《エネミーダウン。残り攻撃対象1。排除を続行する》

<福音>は頭上に作り出した“一番星”を箒へ翳した。

彼女を守ってくれる騎士はもういない。押し迫る死の感覚に、瞳を強く閉じた、その瞬間。

↑――報告：六時の方向より高エネルギー反応――↓

恐怖に耐える箒の頭上を、一条の青い光線が駆け抜けた。

それが福音“一番星”を撃ちぬく。一番星はスーパードヴァのように爆発して消滅した。

『これ以上はやらせませんわ！』

白い騎士の代わって現れた“蒼い騎士”と“赤い騎士”は、そう言い放った。

第46話 その手に勇気を

落ちる、落ちる、どこまでも。深く、深く、どこまでも。

力を失った騎士は、母なる海に抱かれて、深淵の底へと落ちていく。どれぐらい沈んだのだろうか。すでに辺りは暗黒の世界で、太陽の光さえ届かないでいる。

↑ 報告：メイン動力大破。回復不能。補助動力への切り替えを開始——↓

↑ 報告：操縦者保護機能作動。各部エネルギーカット。生命維持を優先——↓

↑ ISが操縦者を保護すべくその機能を働かせたとき、けたたましい警告音が鳴った。

↑ 警告：第一ソナーに反応。三時の方角より接近する物体あり——↓

↑ 警告：音紋及びパターン解析。ライブラリーと一致する機体なし——↓

↑ 警告：未確認機と判断。S1と認定。警戒レベル3——↓

↑ しかし、操縦者は反応しない。操縦者は既に意識を失っていた。爆発の衝撃で脳震盪を起こしていた。

↑ 接近警報：なおもS1接近中。警戒レベル5——↓

↑ なおもISが警戒を促す中、それはゆっくりと操縦者に近づいてきた。外観は丸みを帯びていて、鰭のような手と足がある。優雅に泳ぐ様は生物学的であったが、光る眼はどこか機械的だ。また、それを証明するようにISの生体センサーも反応していない。

↑ 生物学的な人工物はISに向かってカチカチと額を何度も光らせた。光メッセージだ。

↑ 報告：光メッセージを受信。表示——↓

↑ メッセージ：『もう大丈夫。安心して』以上——↓

↑ そう告げ、生物学的な人工物は操縦者を回収し、来た道を引き返した。

アリスが作戦空域に到着した時、事態は想定していた最悪のケースの一手手前だった。

イーリスが墜ち、一夏が墜ち、辛うじて残った箒はエネルギー切れ。酷い有様だ。これでは＜福音＞の撃墜どころか、二人の救助が関の山かもしれない。

そう、心の隅で思いながら、アリスとセシリアは行動を開始した。

「セシリア、一夏たちを救助します。＜福音＞の注意を逸らしてください！」

「わかりましたわ！」

セシリアが攻撃を開始し始めたのを見計らい、アリスは箒の許へと駆け寄った。

「篠ノ之さん、撤退してください。その機体ではもう戦えません」「待ってください、一夏が！ 私の所為で！ 助けないと！」

箒はアリスの手を振り払い、海面の周囲を見渡した。一夏を失ったのがよほど堪えたのか、彼女は冷静さを欠いていた。彼女の心情は察してあまりあるが、気遣ってやれる暇もない。アリスは口調を強めた。

「篠ノ之さん、早く退きなさい！ エネルギー切れした機体を守りながら戦える相手ではないくらい、あなたが一番よく知っているでしょ！ 貴女が退かなければ、何もできないのです！」

箒がここに留まり続ける限り、貴重な戦力を割かなければならぬ。い。

まだ足を引く張る気か。そう言われたような気がして、箒は苦しげに首肯した。

「わかった。すまない……」

彼女の叱咤で、我に返った箒は唇を強く噛んだ。

「一人で帰投できますね」

「ああ、大丈夫だ」

箒は<紅椿>を回頭させた。<紅椿>の主動力は死んでいても、辛うじて補助動力が生きている。自力で安全圏まで離脱できなくても、鈴たちが拾ってくれるはずだ。

箒の離脱を見送り、アリスは全センサーをアクティブにして友軍を搜索した。

中破したイーリス機の<ヴァンガード>は、思いのほか簡単に見つかった。

「大丈夫ですか、イーリス？」

「……………」

操縦者の保護機能が働いたのか。彼女は気を失っていた。機体は酷い損傷だったが、命に別状はないようだ。だが、安堵には程遠い。

——一夏が見つからないのだ。

アリスが最悪の事態を想定していると、一通のメッセージが届いた。

発信元は「セイウチ」とある。学園関係者ではなかったが、アリスはその宛先を知っていた。

↑——メッセージ：織斑一夏はこちらが回収した——↓

メッセージを確認し終えたアリスは、セシリアに個人間秘匿通信を繋いだ。

「セシリア、イーリスを回収しました。離脱します」

「一夏さんは？」

「大丈夫です。友軍が回収してくれました」

友軍？ セシリアの脳裏に様々な憶測が飛び交うが、深く考えないようにした。

アリスが友軍というなら、きっと信用できる相手だろう。そう自分に言い聞かす。

「わかりましたわ。——では、撤退を援護いたします。アリスは戦闘空域から離脱を」

「了解」

空域から離脱するアリスを守るため、セシリアがヘストライクガン

ナー」に梱包されている大型B Tレーザーライフル《スターダスト・シューター》を構え、牽制攻撃を開始した。

発砲

〈福音〉は持ち前の機動力でひらりと躲して見せた。が、セシリアの攻撃はこれで終わらない。

「ダンスはここからですよ！」

《スターライトM k―Ⅲ》と異なり、《スターダスト・シューター》は内部バッテリーにより継続的なレーザー照射が可能になっている。セシリアは《スターダスト・シューター》の銃身をスライドさせ、点の攻撃から線の攻撃にシフトした。

薙いだレーザービームが〈福音〉の肩翼を挽ぐ。

推進器の一つを失った〈福音〉は、姿勢制御を失って海面へ墜落していった。

「アリス、今の内に離脱を。わたくしはこのまま追撃いたしますわ」

「……わかりました。絶対に帰ってきてくださいね」

「もちろんですわ。あなたのウエディングドレス姿を見るまでは、絶対に死ねませんもの」

そうウインクして、すかさず〈福音〉の墜落ポイントに向かう。

墜落ポイントでは、既に〈福音〉が体制を立て直していた。片翼の天使はどこか哀愁を感じさせたが、油断はできない。〈福音〉にはまだ19門の相転移砲が残っている。十分な脅威だ。

《攻撃目標を変更。《銀の鐘》威力行使》

〈福音〉が片翼から無数の羽根型エネルギー弾をばらまく。セシリアは線の攻撃で“羽根”を薙ぎ払った。だが、数発を撃ち漏らす。面で攻撃されては、線の攻撃でも防ぎきれなかった。どうしても数で圧倒されてしまう。

（だからといって、やられるわけにはいきませんわ——）

セシリアは視界の外れに展開されたメッセージウィンドウを見遣った。そこには綺麗な筆記体英語で『アリスをよろしくお願いね』とある。綴ったのは、このヘストライクガンナーを調整したロリーナだ。

(ええ、もちろんですわ)

セシリアは一夏を想うぐらいアリスを想っている。だから、約束を違えたくない。

無数に飛来する光の羽根を、セシリアは機動のみでやりすぎす。

まるで雨のように降り注ぐ光弾を、鋭角な機動で躲しきつたセシリアは、再び《スターダスト・シユーター》を構えた。そして最大までBTエネルギーをチャージし、最大出力のレーザービームを放つ。

その冗談みたいな出力のレーザーに対し、＜福音＞は最大火力の攻撃《ベツレヘム》で対抗する。

刹那、両者の持ち得る最大威力の攻撃がぶつかり合った。

エネルギー同士の衝突が生む余波で大気が電離し、両者間にプラズマの熱波が襲う。

その暴虐的な熱の濁流を受け、二機のISは強く海面に叩きつけられた。

「や、やりましたの……?」

逸早く海面から飛び出したセシリアが前方の＜福音＞を凝視した。確かに手ごたえはあったが――。飛び込んできた光景に、セシリア

は思わず瞠目した

「――なッ!? 《セカンドフォーム・シフト第二形態移行》!?」

驚愕する碧眼の瞳が映し出したものは――白い膜に包まれる＜福音＞の姿だった。

「なんてことー!」

《第二形態移行》したISは、性能が飛躍的に上昇する。現状のスペックでも手を焼いているのに、これ以上パワーアップされては、本当に手がつけられなくなる。

(形態移行し終える前に、阻止しなければ……)

セシリアはすぐさま機体の状態を確認した。動力部、駆動部、防衛機構、装甲、武装。どれも消耗していたが、戦闘継続に問題はなかった。

セシリアはFCSが提供する照準十字カーソルと、グリッドを二つ重ねて狙いを絞る。

「狙い撃ちますわ」

発砲。狙いは完璧。海面を疾駆した青い閃光は狙い変わらず、＜福音＞に命中した。

が、BTレーザーの熱で発生した蒸発気が晴れると、そこには無傷の＜福音＞が佇んでいた。

「くツ、なんてシールド強度ですのツ！」

続けさまに、2射、3射と撃ち込むが、やはり効果は得られなかった。

どうやらあの白い膜は《絶対防御》のようだ。どうやってもこちらの攻撃を受け付けない。

↑——警告：エネルギー残量10%まで低下。戦闘停止を推奨——↓

さらに3発撃ち込んだところで、＜ブルー・ティアーズ＞が活動限界を訴えた。

〈ストライクガンナー〉は、レーザー推進装置〈スターゲイザー〉を使い、迎撃不可の超スピードで強襲し、《スターダスト・シューター》の圧倒的な火力で制圧するというコンセプトで開発された。つまりは短期決着を想定しており、長期戦用には設計されていない。

かてて加え、もともと＜ブルー・ティアーズ＞は動力の関係上、稼働時間の短さに問題を抱えていた。第二世代型の動力でBTレーザーという第三世代型兵器を扱うには聊か重すぎるのである。

「こんな肝心な時に！」

苛立つて海面を叩くが、そうしたところでエネルギーは回復してくれない。

「撤退いたしますわ……」

ここで苛立つても何も解決しない。早く帰還して作戦を練り直した方が賢明。そう判断したセシリアはビットを射出した。その《ブルーティアーズ》のBTレーザーを自らに照射し、爆発的に加速する。

その後、取り残された4機の《ブルーティアーズ》は内部に仕込まれた高性能爆薬を起爆した。

どこまでも続く大海原。無限に続くかと思える白い砂浜を、俺は永遠と歩き続けていた。

目的地はわからない。けれど、やめるわけにはいかなかった。歩みを止めてしまったら、そこで何かが終わってしまう気がしたから。

「それしてもどこまで続くんだろうな」

まるで終わりが見えない旅路に、ふと振り返る。

不思議な事に足跡は波に浚われることなく、ずっとその場所に存在し続けていた。

「それはあなたが生きた軌跡、貴方が存在している限り消えはしません」

不意に誰かの声がして俺は前を向いた。

そこには真っ白な少女が立っていた。

髪は白く、白いワンピースから覗く手足もまた白い。容姿は「彼女」によく似ていた。

「君は？」

白い少女はワンピースの端を摘まみ、優雅にお辞儀した。

「わたくしは——この先の旅路を貴方と共に歩む者です」

共に歩むもの？ それはどういう意味だろうか。

それにしても、この白い少女はなぜこんなにも「彼女」に似ているのだろうか。

「よければ、貴方が紡いできた物語を私に聞かせてくださいませんか？」

「俺の物語を？」

「はい。その為に待っております。わたくしは過去これまでと未来これからをあなたと共有したいと思っております。——そうですね。場所はあちらでよろしいでしょうか」

そう言って白い少女が指差したのは、浜辺に打ち捨てられたソファアール。

ソファアの樹皮は剥げ落ち、既に白く朽ちている。それでも白い少女は気にせず歩み寄った。

「さあ、こちらに——」

彼女につられるように腰かけると、俺は何から話そうか迷った。

幼馴染の話。親友の話。尊敬する姉の話。戦友たちの話。

いろいろ思い浮かんだけど、俺はある少女について語ることにした。

「そうだな。じゃあ、俺の好きな女の子の話を、君にするよ」

俺は、俺を支えてくれた少女について語り始めた。

作戦が失敗に終わったあと、箒は呆然自失のまま部屋に閉じこもった。

アリスはもとより、セシリアたちに合わせる顔がなかったのだ。

自分の愚かな行いで作戦は失敗した。結果、アリスの恩人は助けられず、大切な人も傷つけてしまった。これだけの失敗を犯してなお平然でいられるほど、箒は面の皮が厚い人間じゃなかった。

「なぜ、私はいつもこういうのだろうか……」

部屋の片隅で膝を抱えながら、ひとりごちる。

ISも、恋愛も、何をやっても、うまくいかない。力を持てば誰かを傷つけ、好きな人にも振り向いてもらえず、そんなどうしようもない自分が心底嫌いになっていた。

そんな惨めな気持ちを抱えながら、そつと掌を開く。

そこにあっただのは焦げた布きれ。一夏がくれた「魔法のリボンの燃え残りだった。

「こんなことならISなんて、専用機なんて、受け取らなければよかった」

自分が専用機に目が眩まなければ、彼は傷つかなくてすんだ。ラウラの言葉は正しかったのだ。自分の愚かな振る舞いに対する悔恨に苛まれ、箒は手首に巻かれた金銀の鈴——<紅椿>の待機形態——を部屋の片隅に投げ捨てた。

「この臨海学校が終わったら、退学届を出して学園を去ろう」

こんな愚かな自分など、彼はもう信賴しないだろう。仲間も失望したに違いない。

何もかも失った。ならば学園に残る理由もない。

そして、また孤独な日々に戻るのだ。家族のいない家に住み、一人ぼっちの日々を送る。

そんな日々を想像すると、体が震えた。今さら孤独が怖くなった。

「ひとりぼっちは嫌だ……」

厚かましくも、まだ人の繋がりを欲している自分に気づき、箒は口を塞ぐ。

そのとき、部屋のふすまが静かに開いた。

入ってきたのは、ある意味、箒が一番会いたくなかった人物——アリスだ。

「ここにいたのですか」

部屋に入ると、アリスは床に転がる<紅椿>を見つけ、拾い上げた。

「はい、これ」

「わたしはもう、戦わない……。ISにも乗らない……」

差し出された<紅椿>を拒絶するように、視線を逸らす。

アリスはすこし困ったような表情をし、隣に腰を下ろした。

「私も過去に大きな過ちを犯したことがあります」

すぐく興味を引かれる話だった。何事も恙なく熟す彼女が一体どんな過ちを……？

箒はアリスを見た。

「……何をしたんだ？」

「私は親友を、恩人というべき女性ヒトを、この手で殺めたんです」

箒は驚き、唾液を飲み下した。

「し、親友を？ ど、どうして？」

「軍の命令だったんです」

「命令だからって、そんなことをしたのか！ ——あ、いや、すまない」

熱くなったことを謝り、浮かした腰を戻す。アリスは怒らず、続けた。

「篠ノ之さんの言葉は正しいと思います。でも、その時の私は命令が正しいと思っていました。友人はVTシステムの影響で暴走していたのです。誰かが止めなければいけませんでした」

「それがアリスだった？」

「ええ。私は親友の命と引き換えに、システムの暴走を止めました。——けれど、彼女の亡骸を見下ろして思ったのです。『本当にこれでよかったのだろうか』って。他に選択肢があったんじゃないかって」
事実、別の選択肢は存在し、それを選択していれば別の結末も在り得た。

6月のVTシステム暴走事件。あれこそが、在り得たもう一つの結末。

「親友を救わなかった事を、私はずっと後悔していました。——そんな時です。私の罪を裁くべく断罪者が現れたのは」

「罪を裁く、断罪者？」

「あなたがよく知る人物です。イギリスの代表候補生でもありますね」

「まさかセシリアか！」

思いもよらぬ人物に、箒は瞠目した。そんな身近な人物だとは思ってもみなかった。

「でも、どうしてセシリアがアリスの罪を？」

「私の親友は、セシリアの親友でもあったのです」

その言葉を聞き、箒は彼女の言う『罪を裁くべく現れた断罪者』の意味を深く理解した。

親友の仇討に現れたセシリアを、アリスは親友を見殺した罪を裁くに相応しい人物だと思ったのだろう。だから、復讐者ではなく断罪者と比喩した。

「でも、セシリアは引き金を引かず、もういいのだと許してくれました。もちろん、それで私の罪が消えたわけじゃありません。でも、すぐく救われた気になりました。私は後悔に囚われているあなたにも、そうなって欲しいと思います」

「私を許すというのか？——なぜだ。私のせいでお前の恩人を助け損

なったのだぞ?」

「確かにそうです。でも、ここであなたを責める意味なんてありませんから。叱る意味もまたない。だって、あなたは既に自分の失敗を悔いているではありませんか」

箒が責任を感じていないなら、アリスは責めただろう。

箒が反省をしていないなら、アリスは箒を叱っただろう。

だが、箒は責任を感じ、失敗を悔いている。ならば、アリスがすべきことはひとつ。彼女が再び立ち上がれるよう過ちを許すだけ。かつて、セシリアがそうしてくれたように。

「——なにより、あなたは私の仲間だから」

アリスは朗らかな笑みで、箒の髪を撫でた。

アリスの手から熱が伝わる。優しい熱だ。まるで全てを許すような。——その赦免が、箒の心を蝕んでいた自責の感情を浄化していく。同時に、愚かな自分を尚も「仲間」と呼んでくれたアリスに、懺悔——自分が犯した過ち、その根底にあった苦悩を、聞いてほしい気持ちでいっぱいになった。

「アリス、私はずっと寂しかったんだ。姉さんが作ったISの所為で、家族は離散し、毎日一人で、友達もいなくて……。だが、一夏との繋がりが、そんな私を支えてくれていた」

一夏が私を想ってくれている。そう思うと「自分は孤独じゃないんだ」と思えた。

そう、胸の裡を明かし、箒は続けた。

「だが、アイツが成長するにつれて、私から一夏が遠ざかっていく感じがしていたんだ」

「それで私のようにになりたい、と」

「ああ、一夏はお前に憧れている。惹かれていると言っているいいだろう。だから、私はお前のような存在になりました。お前のような頼られる存在になれたなら、一夏の心を繋ぎとめられると思ったんだ。だが、結果はこのありさまだ。こんな私など、もう一夏は……」

「それは被害妄想ですよ」

強く否定するアリスに、箒は『え?』と驚いた。

「だって、一夏はあなたを、身を挺して守ったじゃありませんか。あなたが大切な存在だったからこそ、彼は危険を顧みずあなたを守った。違いますか？」

「それは……」

「なら、私は一夏の気持ちに報いるべきだと思います。——彼は私のために全身全霊を賭けてく福音を止めようとしてくれました。でも、失敗した。あなたの暴拳のせいだ」

「……………ッ」

「なら、あなたが負った責任は、彼が成せなかったことを成すことでしか果たせない」

アリスの言葉に箒はようやく気づいた。自分の責任の取り方がどれだけズレているか、を。

箒は自分の所為で一夏が傷ついたことに責任を感じていた。それは正しい。けれど、一夏の前から消えても、責任を取ったことにはならない。それは責任から逃げていただけだ。

「もし一夏を想うなら、もう一度剣を取り、く福音を止めるべきです」

アリスは箒の手を取り、そこに金と銀の鈴を置く。

そのとおりで。箒の戦いはまだ終わっていない。なぜなら、く福音はいまこの時も暴走を続けているのだから。それを止めるまでは、IS学園から去ることも、専用機を捨てることも、決して許されない。「ああ、そうだな」

金と銀の鈴を強く握りしめる。アリスは立ち上がり「行きましよう」と手を差し伸べた。



怪我の功名ともいふべきか、セシリアとの交戦でく福音が《第二形態移行》したため、「足止め」には成功した。篠ノ之束によれば、形態移行の完了までく福音は現空域に留まるだろうという話だ。

しかし、樂觀視はできない。〈福音〉が《第二形態移行》を終えれば、脅威はさらに高まる。

現在、作戦室では《形態移行》を阻止べく分析と監視が続けられ、代表候補性たちには浜辺で再出撃の準備と待機が命じられていた。——その浜辺にて。

「ねえ、セシリア、少し落ちついたら？」

同じ場所を行ったり来たりしていたセシリアは、ムスツとして足を止めた。

そして、険しい面持ちでシャルロットを睨み返す。

「これが落ち着いていられる状況でして？」

「気持ちにはわかるよ。僕も〈福音〉の許へ飛んで行って、ナターシャさんを助けたいけどさ」

「だが、向かったところで、何かできるわけじゃない。いまは教官たちの指示を待つのが賢明だ。——それより箒はどうする？ 連れて行くのか？」

ラウラの言葉に、全員が複雑な顔をして押し黙る。

今回の一件で箒が起こした失敗は、少なからず彼女たちの関係に翳を落した。険悪、とまではいかずとも、多少の不和が生まれている。それが顕著なのは同じ幼馴染の鈴だ。

「あたしは反対。味方に撃たれたくないもの」

辛辣だが、無理もない意見だった。想い人を怪我させた事に対する不満もあるのだろう。

そんな鈴とは対照的に、箒を擁護したのはシャルロットだ。

「僕は名誉挽回のチャンスをあけてもいいと思う。それに〈紅椿〉は第四世代だし、戦力としては惜しいよ？」

「だが、どのみち、今の精神状態で戦闘は無理だろう。連れて行っても足手まといになりかねない。第四世代の性能が惜しいなら、私が乗ろう。その方が建設的ではないか？」

箒を連れて行くかいかないかで、意見が分かれる。鈴、ラウラは反対、シャルロットは賛成。

そんな場をまとめたのは、静かに意見を聞いていたセシリアだ。

「わたくし達だけで行きましょう」

静かに、しかし強い口調でセシリアは言った。それに一同の視線が集まる。

「正直、箒さんの愚かな振る舞いには失望しましたわ。ですが、失敗は誰にでも訪れるもの。それを乗り越えた時、人はひとつ強くなれるものです。もし彼女が本当に強くなりたいと願っているなら、きつと葛藤を乗り越え、わたくしたちを追ってくるはずですよ」

そして、追ってきた時は、彼女を迎え入れてやればいい。

それが、自分たちが箒にしてやるべきこと。そう言うセシリアに全員が頷く。

「そうだな、戻ってこなければ、アイツはその程度の女だったということだ」

「そうね。このまま戻ってこないようなら、あたしの恋敵にふさわしくないわ」

「じゃあ、僕たちは僕たちにできることをしよう」

「ええ、とつとと＜福音＞を止めて、ここに戻って参りましょう」

一同が一致団結して肯くと、浜辺にアリスがやってきた。となりには件の箒もいる。

やや申し訳なきように現れた箒に、セシリアが代表して言った。

「ちゃんと戻ってこられましたのね」

「アリスのおかげだ。——それと、みんな、迷惑をかけた。本当にすまない」

自分の犯した過ちを認め、丁寧に腰を折る箒に、各々がやさしく微笑む。

「戻ってきたのであれば、なんにも言うことはありませんわ」

「そうね。『もうISには乗らない』とか言い出してたら、ブツ飛ばしていたけど」

「おかえり、箒。必ず戻ってくるって信じていたよ」

「私も許そう。だが、信頼を回復したいなら、言葉ではなく行動で示すべきだな」

「ああ、そうだな」

箒は強く頷き、ラウラの言葉を心に留めた。

彼女たちのわだかまりは、少しずつ溶けていった。そこに作戦室から通信が開かれる。

『よし、全員いるな。では傾注。これよりパーティーの二次会について説明する』

第47話 赤と紅の共演

俺が目を覚ますと、見知らぬ天井が見えた。清潔感のある天井だ。ここは一体どこだろうか。旅館の一室には見えないが。

そもそも俺は何していたのだったか。記憶に霜がかかってよく思い出せない。

「——ええ。まだ貴女を受け入れるには、心の準備ができていないでしょうし。一番適任な彼女も今はく福音の件にあたって貰っているから。——そうね、話は私からしておくわ」

記憶の糸を辿る俺の耳に、女性の声が聞こえてきた。それもどこかで聞いたことのある母性的な声だ。

「あの……」

俺はベッドから身を起こし、部屋の端で誰かと話している女性に声をかけた。

気づいた女性がこちらを向く。

「あら、目が覚めたようね」

フワリとした、でも官能的な声音が鼓膜をくすぐる。

声の主は——プラチナブロンズが優雅な女性、ロリーナさんだった。

「具合はどう？ 気分は悪くない？」

「はい、大丈夫です。ところで、ここはどこなのでしょう？ 旅館じゃなさそうですが」

寝かされていた部屋には窓がなく、どこか無機質な部屋だ。所々に医療器具らしきものが設えてあるが、病院といった感じでもない。何よりロリーナさんしかいないのも気になる。

「海の中よ」

ロリーナさんはベッドの端にあった椅子に腰かけて言った。

「海の中？」

海の中とは、どういう意味だ。——と疑問に思った瞬間、断片的だった記憶が鮮明に蘇った。そうだ。俺はアメリカのISと戦っていて、墜とされて、海に！

「あの、〈福音〉は！ 箒は！ どうなって——ぐっ！」
いきなり大きな声を出したせいも、酷い頭痛がして、包帯に血が滲んだ。

「落ち着いて、傷に響くわ」

ロリーナさんが包帯に滲んだ血をやさしく拭いてくれる。

冷静になった俺に、ロリーナさんが説明をくれた。箒とイーリスさんは無事だということ。作戦は失敗だということ。〈福音〉が《第二形態移行》を始めたこと。

説明を聞き終えた俺は、自分の不甲斐なさに拳を握りしめた。

「俺が撃墜に失敗したから……」

「そう自分を責めないで。貴方は自分の出せる全てを出し切ったわ。そういうこともある。それにナターシャ・ファイルスを救える手が無くなったわけじゃないわ。今、アリスがそれにあたってくれている」
「本当ですか！ じゃあ、俺もアリスたちと合流して——」

「そう、急がないの。話はまだ終わっていないわ」

急いでベッドから飛び出そうとする俺を、ロリーナさんの華奢な手が止める。それを振り切りつつ飛び出したい衝動に駆られるが、ロリーナさんの真剣な目がそれを許さなかった。

「——それに貴方には大事な話があるの。貴方の今後を左右するかもしれない大事な話よ。悪いけれど、それを話し終えるまでは、貴方をここから出せないわ。解ってちょうだいね」

ロリーナさんの声には、有無を言わせない真剣さが帯びていた。拒否は許さない、そんな声音だ。

気づくと俺は気圧されてベッドに戻っていた。

「いい子ね。——では、まず貴方は自分の事をどれだけ自覚しているかしら？」

唐突な質問に戸惑ったが、冷静に考えて答えた。

「世界で初めてISを動かした男、ですか？」

ロリーナさんは一度だけ頷いた。

「そうね。じゃあ、それがどういう意味を持つか、わかる？」

「もしかしたら、今ある女尊男卑の世界を変えられるかもしれない？」

東さんは浜辺で俺にそう言った。

俺自身、そんな自覚とかないのだが、俺にはそれだけの可能性が秘められているらしい。

「ええ。男性の身でＩＳを使えるあなたは、世の男性たちの希望に成り得るわ」

希望。かつてセシリアが俺に見出したものだ。

セシリアは俺を、憂鬱なこの世界を変えられる存在、へガイ・フォークスと呼んでいた。

ロリーナさんは置いてあつたリングゴに果物ナイフを入れながら続ける。

「では、本題に移りましょうか。——私はある組織に所属しているわ。組織名は〈デウス・エクス・マキナ〉。組織の目的は、世界をひとつにし、人々を宇宙に進出させること。それを実現するため、私たちは現体制を覆せる貴方の可能性を欲しているわ」

「あの、ちよつと待ってください。話がよく……」

ロリーナさんの話の意図が理解できず、俺は困惑した。

俺が求められる理由はなんとなくわかる。だが、『人々を宇宙に上げようとする組織』が、何故『差別社会を引つ繰り返せるかもしれない俺』を欲するのか。その理由がいまいち結びつかない。

「考えてみて。女尊男卑という社会問題を抱えたまま、人々が宇宙に進出すれば、男性はどのような扱いを受けるか」

ロリーナさんの言葉で、二つの線が一本の線に繋がった。

今のまま人類が宇宙に進出すれば、男性は宇宙という過酷な環境での労働を強いられるだろう。今の男性は女王アリに仕える働きアリだから。それは彼女たちが目指す宇宙進出ではない。だから、ロリーナさんの組織は『女尊男卑という差別社会を覆せる俺』を必要としている。そういうことか。

「それで、俺にあなたの組織へ入れと？」

じゃなきゃ、俺をここに引き留めたりしないだろう。

しかし、思わず身構える俺を裏切つて、ロリーナさんは朗らかに答えた。

「いいえ、そうじゃないわ」

思わぬ返答に俺は拍子抜けした。

話の脈絡からてつきり、組織への加入を迫られるものだと思っただのに。

「いいんですか？」

「ええ。貴方には貴方の考えがあるでしょ？ 私たちは貴方の意思を尊重するわ。それが組織の意向でもあり、あの人の意向でもあるの。——はい、どうぞ」

ロリーナさんはウサギ型に切り分けたリングを、俺に手渡す。

緊張続きで喉が渴いていた俺はありがたく頂いた。

「じゃあ、なんで俺にこんな話を？」

「私たちの存在を知ってほしかった。それが一番の理由ね。貴方は良くも悪くも世界に影響を与える。その影響力を危惧して、貴方を消そうと目論む組織があるの」

不意に束さんが言っていた「俺の存在を疎む組織」の存在が脳裏を過る。

ロリーナさんが示唆する組織は、その組織のことなのだろうか。

「一体、どんな組織なんですか？ その、俺を狙う組織ってのは？」

「構成、目的、詳しいことはまだわからないわ。でも、各国の政府にかなりの影響力を持っているのは確か。貴女に＜福音＞の撃墜を依頼したアメリカ大統領ルーシー・ファイルスも、その組織の一人よ」

それを聞いて俺の背中に冷たいものが落ちた。

アメリカ大統領が俺を狙う組織の一人？ その事実を知り、俺の中で恐ろしい想像が働いた。

「もしかして、＜福音＞の暴走は——」

俺を狙ったものだったのか？——その言葉は、恐ろしくて紡げなかった。

だが、ロリーナさんは否定するように首を振る。

「確かにルーシー・ファイルス大統領は貴方を狙う組織の人間だったわ」

「だった？」

だった。過去形だ。というと、現在は？

「元々、彼女は女尊の風潮を強めるために祭り上げられた傀儡だったけれど、今は（彼女たち）の意向に反し、自らの意思で動いているわ。新STRATも冷戦のデタントも彼女の意味。彼女は組織を離反したの」

「どうして離反を？」

「彼女はジョン・F・ケネディーを政治の師として尊敬しているの。そんな彼女は『ウォーレン報告書』に刻まれた、ケネディー大統領が暗殺前に残した暗号（ケネディーコード）を辿って、彼が生前行おうとしていたことを知ったの。それを知った彼女は組織の離反を決意した」

「一体、何を知ったんです？」

『火星移民計画』。ケネディー大統領は、ソ連と共に人々を宇宙に上げようとしていたの」

「それって……」

ロリーナさんたちの組織と同じ目的じゃないか。

そう、続けるより早く、ロリーナさんが領いた。

「でも、この離反が（彼女たち）の反感を買ったみたいなの。（彼女たち）はファイルス大統領を失脚させるため、＜福音＞の暴走事件を演出した。軍内で不祥事が起これば、次期大統領選挙にも多大な影響が出るからね」

「大統領選挙ってそこまで大事なんですか？」

「ええ。合衆国憲法によつて、就任した大統領は4年間、解任させられないの。たとえば（彼女たち）でも、失脚させることが難しい。だから、メディアを利用して彼女の醜聞を掻き立て、支持率を下げようとしているの。裏切り者への報復と粛清。それが＜福音＞暴走を企てた（彼女たち）の狙いよ」

俺は黙って、ロリーナさんの話を聞いた。正直、どこまでが真実なのか判らない。

荒唐無稽だとも思う。だが、嘘を語っているようにも思えなかった。

「へ彼女たち」は傲慢で狡猾な連中よ。目的の為なら手段を選ばない。貴方の周囲の人間も巻き込まれるかもしれないわ。警察組織もあてにできなくなるでしょう。そんな時、別の頼れる力が必要でしょ?」
ロリーナさんの声は穏やかで頼もしく思えた。でも、俺は警戒するように答える。

いきなり『味方です』と言われて『はいそうですか』って信用するほど平和ボケしちやいない。

「気持ちがありますですが、貴女たちは信頼するに足るのでしょうか?」

表情を強張らせる俺の返答を、ロリーナさんは予期していたように答えた。

「わからないわ。私たちが信頼できるかどうかは、貴方が決めることだから。私から言えるのはただ一つ。アリスは貴方にとって信頼できる人ではないかしら?」ということだけね」

一瞬、驚きが込み上げてきたが、すぐに納得する。

薄々そうじゃないかと感じていたが、やっぱりアリスも彼女と同じ組織の人間なのか。

「私たちが信用できないなら、それでもかまわないわ。でも、あの子は信用してあげて。あの子は必ず貴方の力になってくれるわ。――」

「あの子はアフリカのジンバブエで生まれたの」

「ジンバブエ? インフレで有名な?」

「ええ。ジンバブエには、昔、酷い差別政策があったの。
人種隔離政策アパルトヘイトっていうね。今は撤廃されているけど、白人に対する黒人の怨恨や怨嗟は今も残っているわ。彼女の両親はその怨恨や怨嗟に殺されたの」

「怨恨や怨嗟に?」

「そう。ジンバブエの大統領は国営の相次ぐ失敗で経済を破綻させてしまった。その国民の不満を逸らすため、人種差別で苦しめられた黒人を煽情し、怒りの矛先を反らそうとしたの。その所為で彼女の両親は、焚き付けられた黒人によって殺害されてしまったわ」

俺も両親が蒸発した身だから、そうそう他人の不幸に同情なんかし

たりしない。

けど、彼女の想像を絶する生い立ちに、俺は失語を禁じ得なかった。「——そんな過去から、アリスは今ある女尊男卑という差別社会に対して強い危機感を抱いているわ。差別は迫害を生み、迫害は虐殺を生む。そうやって生まれた怨嗟や怨恨は、罪のない子供たちを不幸にする。そんな事はあつてはならない。だから、アリスはあなたを命がけで守ろうとするわ。そんなアリスの力になってあげてほしいの」

「アリスの力に、ですか」
俺は自分の掌を開き、その手をみつめる。自分に何ができるのか。何をすべきなのか。

それはまだ判らない。だけど、俺の中に決意のような強い感情が芽生え始めていた。

「——さて、『大事なお話』はこれでおしまい。次は貴方の相棒の話をしましょうか」

相棒という言葉聞き、俺は右手に〈白式〉がないことに気づいた。

「〈白式〉のところに案内するわ。いらっしやい」

ロリーナさんは椅子から立ち上がり、白い手を俺に差し出した。



部屋から連れ出された俺は、狭い通路にやってきた。薄暗く、見通しも悪い通路だ。

俺は改めて自分のいる場所に疑問を持った。

「そういえば、ここはどこなんです？」

今さらな質問に、ロリーナさんが歌うように言った。

「潜水艦の中よ♪」

潜水艦。ロリーナさんが言った『海の中』とは、そういう意味だったのか。

どうりでさつきから窓がないわけだ。通路が異様に狭いのも、その

関係だろう。

「正式名称は超静穏多目的潜水艦ウォルラス級一番艦＜ウォルラス＞。超伝導推進とPICを応用したベクトル推進で泳ぐ、世界で最も静かな潜水艦よ。この艦はもうじき作戦海域に入るわ。騒音規制が布かれていいるから、静かにね」

ということなので、俺は声をひそめながら、ロリーナさんに訊いた。

「この艦はこれから戦闘をするんですか？」

「そう。動けない米軍の代理としてね」

「動けない？」

「ええ。福音の開発は極秘で行われた。その福音のシステムに干渉し、暴走を引き起こせる人間がいるとしたら、米軍内部の人間に限られる。つまり、米軍内部に＜彼女たち＞の作業員エージェントがいるということよ。そのせいで、ファイルス大統領は自軍を思うように動かせない」

「じゃあ、俺たちに＜福音＞撃墜の依頼をしてきた本当の理由も？」

「米軍内部に＜彼女たち＞の作業員がいると知っていたからでしょう。ISの暴走は早急に解決すべき懸案だけど、迂闊に軍を動かせば＜彼女たち＞の思う壺。だから、自軍ではなく外部の信頼できる相手に、この案件を依頼しないといけなかった」

そこで白羽の矢が立ったのが——アリスか！

確かにアリスは元米軍で、ナターシャさんに恩を感じている。信頼できる相手だろう。

でも、それはあまりにも虫が良すぎないか？ アリスから親友を奪ったのは米軍だろ？

いや、今はそういう事を責めている状況じゃないな。

「ファイルス大統領の代理として、私たちが福音の暴走を止める」

「じゃあ、俺もそれを手伝わせてください」

「いいの？ また怪我をするかもしれないわよ？」

「かまいません。傷は男の勲章ですから。それに＜福音＞を墜とせなかったこと、箒の暴走を止められなかったこと、どちらも俺の責任です。——だから、男としてけじめをつけにいけます」

自分に与えられた責任を果たさないまま退散だなんて、男が廃るっ

てもんだ。

決意を告げた俺に、ロリーナさんは小声で『うくん、あと5年早く生まれてきてくれたらよかったのに』なんて言った。ん？ どういう意味だ？

「あの、ロリーナさん？」

「うふふ、何でもないわ。そういうと思って準備しておいたわ。いらっしやい」

ロリーナさんに連れてこられたのは、工場のような広い場所だ。

艦の格納庫だろうか。様々な機材や航空機が置かれていて、中にはISまであった。

「——貴方の相棒はこっちよ」

ロリーナさんに連れられ、俺は格納庫の一角に案内される。

案内された先には、俺の相棒——〈白式〉がハンガーに掛けられていた。

しかし、今までの〈白式〉とは姿が違う。左手には〈赤騎士〉の《第二形態》が装備していた多機能武装腕が備わり、ウイングスラスターは大型化していて、より翼らしくなっていた。

「これは……」

「〈白式〉の《第二形態》、〈雪羅〉というそうよ。彼女がそう言っていたわ」

「彼女？」

《わたくしのことです》

〈白式〉から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「え、えっと、いましゃべったのは……」

「〈白の女王〉。〈赤の女王〉と同じ思考回路ニューロコンピュータを持つAIよ」

「なんで〈白式〉に〈赤騎士〉と同じAIが？」

「私からのささやかなプレゼントよ。《形態移行》したことで、火器制御や姿勢制御が以前より複雑化してしまったから。今の貴方には荷が重いと思って、操縦者を支援するAIを積ませてもらったわ」

そうなのか。まだIS操縦者として日が浅い俺にとって、それは多いに助かる。

「ありがとうございます。じゃあ、音声のアリスなのはロリーナさんが？」

そう、目の前の〈白式〉から発せられる音声はアリスのものだった。

「いいえ、声は〈ホワイトクイーン〉が選んだみたいよ」

《『対話』の結果から、この音声はダーリンの士気向上に繋がると思っています》

「そんなことはないっ！」

恥ずかしくなった俺は思わず叫んだ。その隣でロリーナさんが可笑しそうに笑う。

さらに恥ずかしくなった俺は、さっきよりも大きい声を出した。

「てか、対話ってなんだよ！ おまえと話すのは、今が初めて——」

初めて？——いや、違う。俺は彼女と話したことがある。

というか、なぜ気づかなかったんだ。彼女は——

「夢で話したあの白い少女は、おまえなのか？」

《Yes My darling——正確にいうとダーリンが見た夢は、私が作った電脳世界です》

夢の真実を聞き、俺はさらに恥ずかしくなった。

俺はあの世界を夢だと勘違いし、アリスのことをいろいろ話してしまったのだ。

《ちなみに、ヒューマンインターフェースのモデルにアリスさまを起用したのは、ダーリンが一番警戒なく接せる相手だと判断したからです。おかげで円滑に『対話』を進められました》

「わあー！ わかった、わかったから、それ以上、しゃべるな！」

もう、顔から火が出そうだった。AIに内心を暴露されるって、どんな拷問だよ！

「あと、〈ホワイトクイーン〉、できればその声もやめてくれ！」

《なぜでしょうか？ お気に召しませんでしたか？》

「いや、そうじゃないんだけど……」

AIの音声クラスメイトの声だなんて知れたら、きっと白い目で見られる。

しかも俺の事を『だーりん』って呼ぶんだぞ。間違いなく俺は痛いヤツだ。

「とにかく、その声はやめてくれ。変更だ」

《変更ですか……。意外と気に入っているのですが》

「それでも変更だ。他の声を当ててくれ。じゃないと俺の沽券にかかわる」

《……どうしても?》

「どうしてもだ」

《残念ながら、一度設定されると以後変更はできないのです》

「うそつけ、ヘレッドクイーン」はこころ声を変えていたぞ」

《……ちっ》

「おい、今舌打ちしたろ!」

なんなんだ、このAIは。人のいうことを全然聞かないじゃないか。

「ふふ、おかしいわね。初期のヘレッドクイーン」を見ていたみたいだわ。——さて、もう少し見ていたけれど、そろそろ時間ね。一夏くん、そろそろ出撃の準備をしてもらえるかしら?」

「あ、はい、わかりました」

新しくなった〈白式〉を簡単に確認し、装着を開始する。再フィッティングのあと、システムを起動。すると、OSの画面で白いウサギ耳少女が《Welcome to the Infinite Stratios》というプラカードを掲げた。なんだこれ、かわいいな。

「〈白式〉のOSを変更させてもらったわ。詳しいシステムの変更点については〈ホワイトクイーン〉から聞いて。一夏くんは、あそこの一番エレベーターで待機よ。指示があるわ」

「わかりました」

急激に慌ただしくなった格納庫を、人とぶつからないように進む。

《NO1》と書かれたベースに移り、俺はステータスパネルを開いて最終チェックを行った。

「そうだ、新装備のデータを見せてくれ。今の内に把握しておきたい」

《Yes My Darling——どうぞ》

〈ホワイトクイーン〉が言うと、前面に小手みたいな装備が3Dで浮かび上がった。

新しく追加された装備——多機能武装腕《雪羅》は、その名に相応しく『射撃モード』『格闘モード』『防御モード』という三つのモードを持つようだ。

「にしても、名前が《雪羅》とはな」

雪羅というのは、現役時代の千冬姉の異名だ。雪のような刀身を持つ《雪片》を修羅の如き強さで振ったことに由来するそうだ。それをこんな形で受け継ぐとはな。

俺が感慨に耽っていると、通信ウィンドウが開かれた。

通信相手はロリーナさんじゃなく、見知らぬ黒髪の女性だ。

『織斑一夏くんね。私は艦長のベルベット・カーペンターです』

女の人が潜水艦の艦長さんなのか。珍しいな。基本、潜水艦は父権社会だと聞くけど。

この艦がISである事と関係しているのだろうか。きっとそうなのだろう。

『今からあなたをIS専用の垂直発射装置^vで打ち上げます。その後、南東8キロの地点へ向かってください。そこにあなたの倒すべき敵、〈銀の福音〉がいます』

「わかりました」

『では、ぐ(武運を)』

通信が切れ、今度は別の声が響いた。管制官の声だ。

『射出シークエンス開始。第一VLSカタパルト、リニア・ボルテージ上昇。700を突破。ハッチ解放。進路クリア。射出タイミングを織斑一夏に譲渡します。どうぞ』

「はい、織斑一夏、〈白式・雪羅〉いきます」

視界の端にあった赤色の《STANDBY》パネルが黄色の《READY》に変化したことを確認し、俺は打ち上げ用の最終シークエンスを了承した。パネルの表示が《LAUNCHAR》に切り替わる。

『ゴッドスベード
神のご加護を』

管制士官の言葉と共に、エレベーターがリニアの力で急加速を始める。

そのすさまじい加速に意識を持って行かれそうになるが、なんとか耐えて海面に飛び出す。水平線の向こう側では、夕日が沈もうとしていた。そこに仲間がいる。

「ホワイトクイーン、俺には守りたい人がいる。俺に力を貸してくれ」

《Yes My darling——御心のままに》

「ありがとう。——じゃあ、行くか！」

俺は新しくなった力を引つ提げ、戦場へと飛びだった。

♡

♣

♠

松の間。学園の特務任務につき、自室待機を命じられた一般生徒たちは暇を持て余していた。

持ってきた遊具も遊び飽き、やることのなくなった生徒たちは、猥談に花を咲かしていた。

「ねえ、ねえ、特務任務ってなんなのかな？」

「さあ？　でも、なんかヤバそうな感じだったよな」

「うんうん、先生たち忙しそうだったし。——更識さんはなんか知っているんでしょ？」

急に話を振られ、部屋の隅っこで膝を抱えていた簪は肩を躍らせた。

「え？　あ、……ご、ごめん。……守秘義務、あるから」

「ええー。大丈夫だよ、ばれないって。だから、教えてよ」

「……ごめん。……口外にできないから」

「ええー、いいじゃん。ケチ！」

申し訳なさそうに視線を外す簪に、尋ねた女子生徒が唇を尖らせる。

けれど、頑な簪に彼女は問い詰めるのをやめた。

「まあ、いいや。てかき、更識って代表候補生だよな？ 何でここにいの？」

「それは……」

聞かれたくない質問に口籠る。別の場所から声が上がった。

「あれじゃない？ 更識さん、専用機が完成してないからでしょ？」

「そっか、そっか。なるほどね」

合点がいくと、その女子生徒は掌を叩いた。その後ろで簪が小さく唇を噛む。

彼女たちに悪気はないのだろう。だが、居心地の悪さをどうしようもない。

そのあと、場の流れで『更識さんも人生ゲームやる？』と誘われたが、彼女たちの垢抜けた雰囲気についていけなかった簪は『……いい』と断り、また一人部屋の隅で膝を抱えた。

(……アリスたち、無事、かな?)

作戦内容は知らないが、どうにも長引いている気がする。

きつと作戦が難航しているのだろう。そう思うと不安でいっぱいになった。

(……もし私が作戦に参加していれば……)

と、思うが直ぐに打ち消す。それは思い上がりの過大評価だ。臆病な自分が参戦したところで、何かが変わるはずもない。自分はその人と違って弱い生き物だから。

(……)

アリスのために何かしてあげたい、とは思う。

姉と比較されるのが憂鬱で、人との関わり合いを最小限にしてきた簪の交友関係は狭い。また人見知りも一役買って、学園にも友人がない。そんな簪にとつて、アリスは学園でできた初めての友人だった。彼女は自分の専用機開発のために、いろいろ尽力してくれた。そのアリスに何かしてあげたい。

大勢の役には立てなくても、一人の少女のためなら、何か役に立てるだろうか。

簪は中指の指輪——<打鉄式式>の待機形態に視線を落した。
サファイヤを思わせる青い宝石がキラリと光る。そう、まるで『い
くか?』と問うように。



結局、<福音>のシールドを解除する方法は見つからなかった。そ
こで千冬は最大火力を以って、これを強行突破する力技に打って出る
ことにした。

その要員に選ばれたアリスと箒が、先行して<福音>補足可能距離
まで移動している。

「しかし、試作。パッケージをぶつつけ本番で使うことになるとは思い
ませんでしたね」

現在、<赤騎士>の右肩には大型のガンランチャーが装備されてい
る。

このガンランチャーは単独でも使用できる武器であったが、僚機を
接続することで、より強力な砲撃が可能になる。それが現状の最大威
力を有していたため、<赤騎士>が選抜され、同時に高いジェネレー
ターの出力を持つ<紅椿>がその僚機に選ばれたのだ。

「なあ、作戦開始前にひとつ聞いていいか?」

目標補足まで200m。

ガンランチャーの有効射程距離までやってきたところで、箒が言っ
た。

「なんででしょう」

「おまえは何のために戦っているんだ?」

アリスは軍人でもなければ、代表候補生でもない。国家のためでも
なく、己が名誉のためでもなければ、彼女は何のために戦っているの
か。愛しい彼を惹きつけて止まない彼女が戦い続ける意味とは何な
のか、箒は聞かずにいられなかった。

「私は両親や親友、たくさんの人から愛情と優しさを分け与え貰いま

した。こうして生きていられるのは、そういう人たちのおかげです。私には返すべき恩がある。けれど、見ての通り私は戦うことしかできない女です」

東博士のように知力があるわけじゃないし、セシリアのように財力があるわけじゃない。

自分にあるのは武力という戦う力だけ。

「そんな私でも戦うことで、救える命がある。私が戦うことで誰かを救えたのなら、それは自分を生かしてくれた人たちへの恩返しになる。——そのために戦っています」

誰かに生かされてきたから、今度は誰かを生かすために戦う。

ガンランチャーの調整を行うアリスの背後で、箒は理解した。

そうか。そうだったのか。多くの人を活かし、生かすことが、自分を想ってくれたことへの恩返しになる。すなわち彼女の剣は一殺多生の活人剣。

「篠ノ之さん、恩義や感謝とか、私に特別な感情を持つことはありません。ただ、誰か分け与えてもらえたなら、あなたも誰かに分け与えられる人になってください。——では、状況を開始します」

背中であげ強く語り、アリスはウエポンコンソールを開いた。

「レッドクイーン」、《ハイメガランチャー》を使います」

《Yes My honey——《ハイメガランチャー》準備。拡張バレル展開》

《レッドクイーン》の声と共に《ガンランチャー》の内部に折り畳まれていた砲身が駆動して二倍まで延長される。さらに後部のボックスが開いて、ソケットとトリガーが飛び出した。

そのソケットに箒が《紅椿》のパワーケーブルを接続する。

次にステータスコンソールを開き、《赤騎士》への専用供給パイパスを構築した。

（私も彼女のようになれるだろうか？）

箒は拳を強く握りしめる。その手は、再び同じ過ちを犯すのではないかと震えていた。その手をもう一つの手で抑え込む。その様子を一瞥もせず、アリスが言った。

「大丈夫ですよ。——あなたならきつとなれる」

「ああ、ありがとう、アリス」

その力強い言葉に後押しされ、箒は《ハイメガランチャー》のトリガーを握った。

そこに『もう戦わない』と怯えていた彼女はいない。彼女は自らの弱さを認めた上で、強くなることを決めたのだろう。葛藤を乗り越え、覚悟を決めた箒は戦士の貌をしていた。

《コネクト完了。補機セカンダリのリアクター解放を確認。エネルギー供給開始、チャージ完了まで残り3、2、1——完了。発射コントロールをプライマリ赤騎士>から<紅椿>に移行》
「篠ノ之さん、遠慮せず、ぶっ放してください」

「わかった」

箒が《ハイメガランチャー》の引き金に指をかけ、目一杯絞る。

刹那、膨大なエネルギーを得た《ハイメガランチャー》が極太のエネルギーを吐き出した。

『いけえー!!』

赤を超えた紅のエネルギー奔流が海面を蒸発させながら、<福音>へ突き進む。

膨大な熱量をもったエネルギーで水蒸気が辺りに立ち込める中、紅の閃光は狙い変わらず<福音>に命中した。が

「これも耐えますか!」

それでも<福音>のシールドは健在だった。おそるべき耐久力だ。

「アリス、フルパワーでいく!」

「わかりました!」

箒は<紅椿>のステータスコンソールを開き、リアクターを完全開放する。各部に割いていたエネルギーを全て《ハイメガランチャー》に回した。

これで出力は先の2倍だ。

これには<福音>のシールドにも歪が生じ始めた。

まるで鍍金が剥げるように白い破片が散り、中にいる<福音>が微かに透けて見えはじめる。

「いけるっ！」

と、突破の兆しが見え始めた時、《ガンランチャー》の砲身から煙が立ち込めた。

《ハニー、砲身の冷却が追いつかない》

〈赤騎士〉のウエポンコンソールには、真っ赤に染まり上がった《ハイメガランチャー》のグラフィックと警告文が浮かび上がっていた。どうやら、許容を超えるエネルギーを放出し続けたため、砲身の冷却が追いつかなくなっていたらしい。このままじゃ熱暴走だ！

「まずい、こっちもエネルギー残量が10%を切った！」

〈紅椿〉のステータスコンソールには、エネルギーの危険域を告げる警告が表示されていた。

このままでは《ハイメガランチャー》の出力を維持できない！

(く、あともう少しだというのに……)

けれど、これ以上の動力炉に負荷をかけ続ければ、自壊の危険もあった。

「わかりました。分離します」

これ以上の続行は危険。そう判断したアリスは、〈紅椿〉とのドッキングを解除した。

そして、すぐさま本部に状況を報告する

「こちら、アリス。最大出力で砲撃しましたが、〈福音〉は健在。〈赤騎士〉はエネルギーを60%消費。〈紅椿〉はエネルギーを90%消費」

『了解。篠ノ之は後退しろ。――残りの戦力で対応する』

「わかりました。――アリス、力になれずにすまない……」

先刻の戦闘で痛い目をみているため、この場でしゃしゃり出るようなマネはしない。

筈はGLPを変更し、機体を引き下がらせた。アリスはそれを見送り、再び通信を繋ぐ。

「織斑先生、もう総力を以って全火力を集中する他ありません」

〈赤騎士〉の最大攻撃でも突破できないとなれば、それ以外に打つ手はない。

もつとも、それでさえほとんど突破の見込みはなかったが。

『それしかないな。では、全ユニットへ、これより総力を以って、＜福音＞の《第二形態移行》を阻止する。オルコット、凰、デユノアはリデルと合流——……いや、待て』

急に言葉を切った千冬に、アリスが怪訝な顔をした。

「どうしました、織斑先生」

『いや、すまない。——全ユニットへ、先の命令は撤回だ。その必要はなくなった。繰り返す、その必要はなくなった』

どういうことだ——そう思った時、夜空で何かが煌めいた。

まるで流星のように舞い降りてきたそれは——白いISだ。

「俺に任せな！」

天空より舞い降りてきたのは、新たななく白式＜を纏った一夏だった。

第48話 結集、結末、そして結末の果てに

天空より舞い降りてきた一夏に箒は目を奪われた。

いや、視線だけじゃない。新たな力を手にして戻ってきた彼に心さえ奪われる。

(ああ、一夏が戻ってきてくれた……)

無事だった安心感。彼を傷つけてしまった罪悪感。駆けつけてくれた嬉しさ。

様々な気持ちが続いて交ぜなつて、心を満たす。

箒は一夏がいる空を見上げた。彼の額には血の滲んだ包帯。自分を庇って負った傷だ。遠目から見ても痛々しい。今も痛むのだろう。それにも拘わらず、彼は駆けつけてきた。

たぶん、アリスのために。

だが、不思議と妬ましくない。今は二人を微笑ましく見守れる自分がいた。

諦観ではない。なぜなら、箒の裡からは強い意思が溢れだしていた。

自分を守ってくれた彼。自分を許してくれた彼女。

そんな二人の為に、もう一度、戦いたい。彼らの恩に報いたい。

「だから、もう一度、彼らと戦う力をくれ、＜紅椿＞。私には守りたい背中があるんだ」

強く切実に願う。それと呼応するように、背部のバインダーから金色の粒子が放出された。

その光がまるで咲き誇るように豪華絢爛たる＜紅椿＞の装甲を彩っていく。

「これは……」

＜紅椿＞のステータスパネルに視線を遣ると、エネルギーゲージが回復し始めていた。

15、20、25。なお、回復を続ける＜紅椿＞のエネルギーは最大値を超えても上昇を続けた。

「一体どうなっているんだ？」

ISの工学知識を持ち合わせていない箒は、この現象を1%も理解できなかった。

だが、脳裏の片隅に浮かんだ単語が、それを解決してくれる。

〈紅椿〉の《単一仕様能力》か？)

——いや、なんだってかまわない。

自分はもう一度、戦える。今はその事実だけで充分だ。

「そうか、〈紅椿〉。もう一度、私を戦わせてくれるのだな？」

応えるように各部へエネルギーが供給されていく。翼に力が蓄えられ、四肢に力が漲る。すさまじい力だ。心が躍動する。熱を以て跳ねる。だが、箒は湧き上がる暴力への衝動を自制した。

(これは誰かを傷つけるための力じゃない。守るための力だ)

大丈夫。うまくやれる。彼女をイメージすれば、湧き上がる衝動を抑えられる。

そして、制御した力を胸に秘め、箒は決意を固めた。

赤い椿の花言葉は「気取らない優美」「慎み深さ」「控え目な美德」「高潔な理性」。

〈紅椿〉を駆るならば、私はそんな花言葉が似合う女性となろう。

「よし、往こう〈紅椿〉、彼らの許に」

黄金の衣をまとい、太陽の如し光を放ちながら〈紅椿〉が飛翔する。

孤独、嫉妬、罪悪。欲望、それらを乗り越え、自らを昇華させた今の彼女に敵はいない。



「俺にまかせな！——へホワイトクイーン〉、《雪羅》をクローモードだ！」

《Yes My Darling》——《雪羅》をクローモードに変更！》

新たに得た〈白式〉の新武装——多機能武装腕《雪羅》を格闘モ—

ドに切り替え、五本の爪先から《零落白夜》の光刃を放出する。それで相手のシールドを無力化して内部から＜福音＞を引き摺り出す。その勢いを利用して、俺は＜福音＞を海に放り投げた。

海面に叩きつけられた＜福音＞が無抵抗に沈んでいく。だが、これで終わりじゃないことはわかっていた。

《おそらく再起動を果たして戻ってきます》

「やっぱり、そう簡単にはいかねーよな」

俺は全センサーをアクティブにして警戒するように下方の海面を睥んだ。

そこにアリスが駆け寄ってくる。背後にはセシリア、鈴、シャルロットもいた。数時間の別れだったのに、俺は数年越しの再会のように思えた。

「みんな、心配かけたな」

「ふん、心配なんかしてないわよ、あんたのしぶとさはあたしが一番よく知ってたんだから」

「でも、《第二形態移行》して、戻ってくるなんて驚いたよ」

「ところで、一夏さん、その傷は、大丈夫でして？」

「すこし痛むが、大丈夫だ。仲間のためなら瀕死だって駆けつけるさ」

《ええ、ヒロインがピンチなのに、主人公が床に臥せたままだなんて、格好がつきません》

〈ホワイトクイーン〉が喋って（ちなみに音声は拝み倒して別の物に変更してある）、一同がきよとんとした。

「あんた、そのAIどうしたの」

『詳しい事情は後だ、鈴。今は＜福音＞に集中しよう』

と、通信機から本部にいるラウラの声。

そうだ。まだ＜福音＞の暴走は止まっていない。再会の喜び合うのも、〈ホワイトクイーン〉のことを語るのも、＜福音＞を止めてからだ。

「そうね。じゃあ、行きましょう」

「——待ってくれ。私も参戦させてくれ」

鈴が頷くと、新たなISがやってきた。紅く豪華絢爛な意匠のI

S、箒の〈紅椿〉だ。

幼馴染の無事な姿を見て、俺は思わず声を上げた。

「箒、無事だったか！——それになんだ、その光は……？」

絢爛豪華なく紅椿〉を取り巻く金色の光に、俺たちは目を奪われた。

眩しいけれど、優しい光。この光は一体？ 《零落白夜》が放つ光にも似ているけど。

「〈紅椿〉の《単一仕様能力》ワンオフ・アビリティが発動したようだ。エネルギーが回復した」

「エネルギーが……？」

アリスが驚く。

本来、ISのエネルギーを回復させるためには、リアクター内部にある反物質ペレットを交換しなければならぬ。けれど、〈紅椿〉はそれを交換せずにエネルギーを回復させたという。

「ああ、そうなんだ。——アリス、これを」

未だ言葉を信じられないアリスに、箒が手を差し伸べる。

アリスが箒の手を掴むと、まるで火が燃え移るように金色の光が〈赤騎士〉に流れ込んだ。

《ハニー、残りエネルギーが80%まで回復した》

《レッドクイーン〉の報告に、アリスは驚きを露わにした。

それは俺も同じだ。〈紅椿〉の《単一仕様能力》は回復だけではなく、譲渡も可能なのか。

「この通り、私はまだ戦える。——だから、私も参戦させてほしい」
「わかりました。あなたと、私たちで、今度こそ〈福音〉を止めましょう」

アリスは箒を見て、俺たちを見る。俺たちは頷いて、臨戦態勢に移行した。

そんな俺たちの前に光の柱が立ち上る。〈福音〉が御出でなすつたようだ。

「じゃあ、いこうぜ、みんな。最終対決だ」

それぞれが力強く頷く。みんなの心がひとつになった気がした。

東さんの話。ロリーナさんの話。思う事はたくさんあるけど、今はもう何も怖くない。

この仲間たちとなら、どんな困難にも立ち向かえる。そんな気がした。

♡

◆

♠

風花の間。

仮の作戦室のモニターには《第二形態移行》した〈白式〉の姿が映し出されていた。

「〈白式〉の《第二形態》、〈雪羅〉ですか。懐かしい名前ですね」

どこか感慨深い表情で真耶が千冬を見る。千冬は『そうだな』と肩を竦めてみせた。

「それにしても、織斑君、今までどこにいたんでしょうか……」

「さあな、おそらく米軍の許に身を寄せていたのだろう」

「その割には、こちらに何の報告もありませんでしたよね」

一夏の無事を知らせる報告は、アリスから千冬に伝えられた。米軍からは何の報告も受けていない。それを怪訝に思う真耶だったが、千冬は語調を変えずに言った。

「なんにせよ、こうして帰ってきたんだ。詮索は不要だろ」

と、言うものの、千冬表情には様々な思いが交錯しているようだった。

瞳には無事を喜ぶ安堵の感情も伺えたが、奥には忌むような黒い感情が渦巻いている。

（私たちを捨てたお前が、なぜ今になって私たちの前に現れる……？）

意図せず組む腕に力が籠る。憎しみか、怒りか、あるいは別の感情からくるものか。

なんであっても、おそらく遠くない未来、自分は『あの女』と対峙する日がくるのだろう。

だが、それが今じゃないことは確かだ。今すべきことは別にある。

「今は〈福音〉を墜とすことが優先だ」
気持ちを切り替え、千冬は眼前のモニターに意識を集中した。

♡

◆

♠

戦闘開始の口火は〈ブルー・ティアーズ〉の狙撃が切った。

強襲用パッケージへストライク・ガンナーに梱包された高出力B
トライフル《スターダスト・シューター》の放った閃光が、〈福音〉
の挙動を牽制する。しかし、先の戦闘で〈ブルー・ティアーズ〉の戦
法を学習していた〈福音〉は、片翼を器用に羽ばたかせ、セシリアの
狙撃をすり抜けた。

「くっ、読まれていますわね！」

めまぐるしく移動する天使を照準カーソルと十字グリッドで追う
が、なかなか捉えられない。《ブリリアントクリアランス》の補助を以
てしても、捉え切れないとは、恐るべき学習能力だ。

なおも、必死に的を絞るが、命中はしなかった。

そうこうしている内に、〈福音〉が〈ブルー・ティアーズ〉の懐に
潜り込んでくる。

《高出力相転移砲、チャージ。威力行使》

強襲用パッケージへストライクガンナーは、近接戦を想定してい
ない。懐に潜り込まれては、対応の仕様がな。しかし、セシリアは
動じなかった。

「ふっ、やれるものならやってみなさいな」

その直後、セシリアと〈福音〉の間に割入ったシャルロットが、
“盾”を展開した。

「セシリアはやらせないよ」

シャルロットが展開した“盾”は物理シールドとエネルギーシ
ールドの二つを備えたハイブリットシールドだ。その防御力は、ミサイ
ルサイロの隔壁を打ち抜く〈福音〉の相転移砲でさえ防御ができる。
これがくラファール・リヴァイヴ・カスタムIIの防御特化パッケー

ジへガードン・カーテン〉の力だ。

《S1からS4を補足。照準。《銀の鐘》最大威力行使》

〈ラファール・リヴァイヴ・カスタムII〉の防御を突破できないと悟った〈福音〉は高度を上げ、月を背に銀の翼を広げた。32門の砲門が開くと同時に、天使の羽根を模したエネルギー光弾が地上に降り注ぐ。無差別に攻撃するつもりだ。

世界に祝福を齎さん。そう告げんかりの圧倒的な攻撃手数であったが、一同は怯まなかった。

「鈴さん！」

「ええ！ 〈甲龍〉、とっておきをお見舞いするわよ！」

鈴が凄むと、〈甲龍〉に追加された新装備〈崩山〉が唸りを挙げた。両肩の衝撃砲《龍咆》に加え、増設されて二門の衝撃砲を開き、そこから不可視の砲弾とは違う赤い衝撃砲が放たれる。

その数は4。

32の手数を撃ち落すには貧弱な数だったが、赤い衝撃砲は羽根の群れに入るなり、何十倍に膨張した。放出された熱エネルギーが、無数の光の羽根を一斉に蹴散らす。その光景は、さながら夜空に4つの太陽が咲いたようだ。

「箒、今よ！」

「任せろ！」

熱拡散衝撃砲の裏に身をひそめていた箒が、〈福音〉に突貫した。

《展開装甲》を高機動モードに切り替え、箒が相手に迎撃の暇を与えない速攻を仕掛ける。

「受けてみよ、今宵の〈紅椿〉は一味違うぞ！」

右手に《空裂》を展開し、攻性エネルギーを纏わせながら、斬撃を見舞う。

〈福音〉はこれを躲してみせたが、箒はさらに《雨月》を展開して、打突を繰り返した。

これには福音もよけきれなかった。

胸部に鋭い突きを貰った〈福音〉がよろめき、機体のコントロールを失う。

《タスク・プライオリティー変更。現空域から撤退を最優先とする》
圧倒的な不利を悟った＜福音＞は、体制を立て直し、現空域から撤退しようと試みた。

が、そんなことはアリスが許さない。

「逃がしませんよ」

《単一仕様能力》で＜福音＞の進路先に回り込んだ＜赤騎士＞が、羽交い絞めにして動きを奪う。

＜福音＞は四肢を振り回し、振り払おうとするが、臂力では＜赤騎士＞に分があつた。

「チャンスだ！ これで、決めるぞ、箒！」

「ああー」

抑え込まれて身動きが取れない＜福音＞に紅白のISが肉薄する。
＜白式＞と＜紅椿＞だ。

それを＜福音＞が悪あがきの高エネルギー相転移砲で迎え撃つ。

動きを封じられていても、相転移砲に特別な砲口は必要ないため、行使が可能だつた。

「箒、俺の後ろに隠れる！ ——〈ホワイトクイーン〉、《雪羅》をシールドモードだ」

《Yes My Darling——《雪羅》シールドモードに移行。

《霞衣》、レディ》

雪結晶のような盾を展開し、＜福音＞の胸部から放たれたエネルギー砲を無条件で打ち消す。

力と力が均衡し、奇しくもファーストアタックでの再現が出来上がった。となれば——

《ダーリン、《零落白夜》のエネルギー消費率がジェネレーターのエネルギー生成率を越えつつあります。このままでは《零落白夜》の出力を維持できません！》

〈ホワイトクイーン〉の報告に、先刻の戦闘が脳裏を過る。

連戦で疲弊しているとはいえ、エネルギー総量では燃費の悪い＜白式＞より＜福音＞に利がある。このまま断続的に攻撃を受け止め続ければ、先の戦闘の二の舞になりかねない。けれど、強硬突破しよう

にもエネルギーが足りなかった。

「くそ、〈福音〉を止めるチャンスだったのにッ！」

「大丈夫だ、一夏！」

退いて体制を立て直すべきか。そう苦慮する一夏の背中に、箒がそつと触れる。

次の瞬間、〈紅椿〉の《単一仕様能力》が発動し、〈白式〉のエネルギーが回復した。

「そのまま突き進め、一夏！ お前の信じる道を！ 私が支えてやる！」

「箒!? ああ！ わかった！」

箒の力強い言葉に後押しされ、一夏は迷わず瞬時加速のチャージにかかった。

《第二形態移行》したことで、チャージは三分の二まで短縮されている。すぐさま完了した。

『いっけええー!!』

《雪羅》の対エネルギーシールドで相転移砲を相殺しながら、最大速度で突き進む。そして、〈福音〉の懐に潜り込み、《雪羅》のクロームモードでシールドを突き破ると、掌に小さい榴弾のような物体を展開した。作戦前に渡された《剥離弾》だ。

『止まれえー!』

展開した《剥離弾》を、一夏と箒の手で〈福音〉に押し付ける。

瞬間、眩しい光と共に〈福音〉が肌蹴け、フワリとたくさんの羽根に変化した。その中から銀色のクリスタルと、ブロンドの若い女性が出てくる。彼女が〈銀の福音〉に囚われていた操縦者ナターシャ・ファイルスだ。

ISを失い、宙に放り出されたナターシャをアリスがやさしく受け止めた。

「任務完了ですね」

あの頃と何も変わっていない隊長の姿に、アリスの胸中に懐かしさと安堵が込み上げる。

そんな二人を見守りながら、一夏と箒が顔を見合わせた。

「ありがとな、箒。助かったぜ」

「いや、礼には及ばない。私も一夏とアリスの役に立てて嬉しい」
嬉しそうに微笑むと、セシリアたちがやってきた。

「やりましたわね、アリス、一夏さん、そして箒さん」

「これもみなさんのおかげです」

セシリアたちを見回し、深々と礼を告げる。

告げられた側は照れくさいような、嬉しいような、様々な反応を見せた。

「でもなんか、拍子抜けっていうか、呆気なかったわよね。まあ、満身創痕のIS相手に6対1で挑んだわけだし、こんなもんちゃこんなものなのかもしれないけど」

『そういうな、鳳鈴音。何の被害も出ずに作戦を完遂できたことは喜ぶべき——ん?』

作戦本部で状況を見守っていたラウラが、唐突に言葉を切った。その直後だ——。

《ハニー、接近警報!》《ダーリン、9方向から新たなISが接近してきます!》

〈レッドクイーン〉と〈ホワイトクイーン〉が共に警報を鳴らした。

接近してくるIS? 今頃になって援軍だろうか。そう憶測する一同を各自の愛機が否定した。

〈——IS情報：検索結果なし。ライブラリーと一致する機体はありません——〉

〈——IS詳細：コアナンバー不明、無所不明、味方識別信号無し——〉

〈——警告：未確認機と断定——〉

警戒する一同の前に、それは姿を現した。

眼前に現れた未確認機を目にして、一同は驚愕で言葉を失う。

「これって……」「赤、騎士?」

アリスが無意識にそうつぶやく。そう、眼前に現れたISは、彼女の愛機〈赤騎士〉だった。

いや、正確にいうと〈赤騎士〉に酷似したISだ。

〈赤騎士〉に酷似したISは、〈赤騎士〉よりも赤い緋色の装甲

と、《ヴォーパル》のような大剣を背面に装備していた。エッジの利いたフォルムは炎に包まれているようで、その未恐ろしい姿は、どこか世界の終焉を彷彿とさせる。きつとく赤騎士を禍々しくしたらこんな機体になるだろう、そう思わせる意匠だ。

「貴女は何者ですか？　米軍、ではなさそうですが……」

全員が警戒する中、アリスがナターシャを箒に預けながら訊いた。「冷戦の墓場からやってきた亡霊。あるいは、スルトと呼ばれている者です」

変声機で声は変えられていたが、『地声は美しいのだろう』と思わせる、そんな声音だった。

素顔はフルフェイスのヘルメットを被っていて判別できないが、きつと美人だろう。

「スルト？　北欧神話の巨人が何の用です？」

「く銀の福音を頂きにきました」

スルトは一夏の掌中にあるコアを指した。それに一同の警戒レベルが跳ね上がる。

未だコイツの正体は判らない。だが、敵だということは、たった今理解ができた。

「渡さないと言ったら、どうします？」

「奪うまでです」

「全機散開!!」

スルトが背面の近接武装を抜くのと、アリスが命令を下したのは、ほぼ同時だった。

「一夏と篠ノ之さんは、く福音とナタルを連れて撤退してください。私とセシリア、鈴、デュノアさんで未確認機の足を止めます」

『わかった』『了解!』

一夏と箒はすぐに機体を回頭させた。それを守るように、残ったアリスと鈴が前面に飛び出す。

アリスは《ヴォーパル》を、鈴は《双天月牙》を握り、挟み込むように畳み掛けた。

格闘戦に秀でた二人の挟撃。そう容易く防げまい——というのは、

ただの前ふりにしかならなかった。

「なにっ!？」

右側面から迫る《ヴォーパル》を、スルトは緋色の太剣で軽々しく受け止めた。さらに左側面から迫る《双天月牙》の斬撃を《展開装甲》で跳ね返す。

これにはアリスも度肝を抜かれた。この<赤騎士>擬きは《展開装甲》を装備しているのか。

「まさか、第四世代だということですか!？」

「ご名答、この<レーヴァテイン>は第四世代のISです」

スルトはすぐさま《展開装甲》を防御モードから攻撃モードに切り替えた。

爆発的に高まったパワーで、二機を太剣の一振りで薙払う。咄嗟に攻撃を受け止めた二人だったが、その圧倒的なパワーに成す術なく弾き飛ばされた。他より優れた膂力を持つ<赤騎士>と<甲龍>が、だ。

「二人とも下がって!」

二人が<レーヴァテイン>から離れるのを見計らい、セシリアが引き金を絞った。

《スターダスト・シューター》の放ったレーザービームが炎の魔人を正確に捉える。

だが、スルトは腕を振り払ってBTレーザービームを偏向させた。「え……。今のは偏光制御!？」

BT稼働率が高い時に使える偏光制御。それを使ってBTレーザーを反らした？

通常のISどころかBTシステムを搭載した<ブルー・ティアーズ>でさえ、外部から放たれたレーザーを曲げるなんて不可能なのに。

(いえ、いまは、驚いている場合ではありませんわ!)

セシリアは湧き上がる疑問を抑え込み、戦闘に意識を戻した。

(攻撃は避けられましたけど、すきは生まれました!)

そして、それを逃す仲間たちじゃない。

セシリアの信頼に応えるがごとく対狙撃に意識を割いていたスルト

トへ、虎視眈々とスキを窺ってシャルロットが円筒型のロケット弾を撃ち込んだ。

絶妙なタイミングで放たれたHEAT弾が容赦なく<レーヴェテイン>を火の玉に変える。

しかし。

吹き付けるメタルジェットの嵐から現れた<レーヴェテイン>は無傷だった。

ダメージらしいダメージはない。彼女の防衛本能を汲み取った<レーヴェテイン>が《展開装甲》の防御機能を働かせたのだ。彼女は薄いシールドの膜に守られていた。

「よく戦場を観察していますね。見事な不意打ち——あら？」

賞賛を送った矢先、スルトはシャルロットを唐突に見失った。

刹那、なんの前触れもなくスルトの眼前にシャルロットが現れる。傍らには<赤騎士>。

(なるほど、先の攻撃は目晦まし、というわけね。考えましたね)

<赤騎士>の量子ジャンプで飛んできたシャルロットは、右手装甲と一体化した物理シールドのカバーをバージし、内部の69ミリ口径パイルバンカー《灰色の鱗殻グレースケール》を露出させた。

「これならどう！」

「隠し武器ですか。——私にもありますよ」

シャルロットが《灰色の鱗殻》内の炸薬に火を入れようとした瞬間、<レーヴェテイン>の爪先からプラズマブレードが展開された。それによるスルトの回し蹴りが、<ラファール・リヴァイヴ・カスタムII>の《灰色の鱗殻》をパイルバンカーごと破壊する。

完全に意表を突いた奇襲攻撃だったはずなのに、気づけばやられたのはこちらだった。

「見事な奇襲です。ですが、私へ傷を負わずには、まだ拙かったですね」

スルトは相手を称賛する余裕さえ持って、両脚部のプラズマブレードと、右の大剣による三刀流で、<ラファール・リヴァイヴ・カスタムII>を解体せしめた。一瞬で<ラファール・リヴァイヴ・カスタム

IIの装甲、スラスト、武装を破壊したスルトに、二人は戦慄する。「なんですか、こいつは……」

策を弄し、連携を駆使してなお、この有様。

生身で猛獣を前にしたような危機感が二人の間に駆け抜けた。

「アリス、シャルロットさんを！ 鈴さん、カバー！」

「了解！」

「この装備でカバーなんて！ やるけどさー！」

すかさず、アリスが行動不能になったシャルロットを回収し、鈴がそれを援護する。

セシリアも《スターダスト・シューター》の引き金に指をかけるが、「——遅い」

大剣をライフルに変形させたスルトが、セシリアに向かって発砲した。

それがものの見事に《スターダスト・シューター》だけを破壊せしめる。

「な!? この距離から、わたくしを!」

手の中で爆散する《スターダスト・シューター》に、セシリアは驚愕を禁じ得なかった。

ここは自分の距離。狙撃の距離だ。その距離をもろともせず、武器だけ打ち抜くとは……。

「なんなのよ、こいつ！」

「名なら、既に名乗ったはずですが？」

衝撃砲をばら撒いて、弾幕を張る鈴に、スルトがサイドバインダーをオープンする。

そこから射出された8基のソード型ビットが縦横無尽に走り、鈴を包囲した。

「なにっ！ このビットにも《展開装甲》を積んであんのっ!」

《展開装甲》の万能性を備えたそのビットは、《ブルーティアーズ》のような射撃機能と、《シユナイダー》のような格闘機能、そして《エネルギーアンブレラ》のような防御機能を巧みに使い分け、〈甲龍〉を襲った。

「くっ。こんな装備じゃ……」

なんとか奮闘する鈴だが、相性が悪かった。〈甲龍〉の専用パッケージ〈崩山〉は、次弾装填に長いインターバルを要する。そのため、ビットに有効な弾幕を張れない。その鈴を援護すべくアリスが自機のソードビットを展開する。

「——いけよ、《シユナイダー》！」

展開装甲ビットとソードビットが夜空で激しいドックファイトを繰り広げる最中、4門の衝撃砲と姿勢制御装置を打ち抜かれた〈甲龍〉は、〈赤騎士〉の援護でなんとか敵包囲網から抜け出した。

だが、損傷が酷く、戦闘継続は不可能に近い。

もはや戦闘可能な機体は〈赤騎士〉のみとなった。

「どうしましたか？ おしまいですか？」

軽々しくIS三機を中破させたスルトに、4人は苦しい表情を浮かべた。

4人がかり、しかも国家代表生が束になって、手も足もでないとは……。

(強い……)

スルトのISが第四世代というのもある。しかし、それ以上に恐ろしいのはスルト自身の卓越した技能だった。格闘、射撃、機動はいわずもがな、《展開装甲》の運用方法さえ熟知している。誇張でも尾鰭でもなく、最強クラスの操縦者だった。

「撤退します……」

悔しいが、このまま戦闘を継続しても全滅するのが目に見えている。

それに一夏たちが安全圏まで脱出する時間は稼いだはずだ。これ以上の戦闘は無用。しかし——

「それは困ります。私も手ぶらでは帰れません」

どうやら、向うはこちらを見逃す気などないようだ。

「〈福音〉には逃げられましたし、少なくとも2機、いえ3機は欲しいところですね」

三機の強奪。彼女の實力なら可能だろう。

……このままでは友人を奪われる。自分のために戦ってくれた大事な友人を。

(どうする。逃げたところで、第四世代の加速のまえじゃ、すぐに追いつかれる)

だが、誰かが残れば、あるいは……

「ヘッドクイーン」、《第二形態移行》。同時に座標計算、あいつと跳びます！」

《Yes My honey——座標固定。クアンタリゼーション・ジャンプ、レディ》

「——セシリア、鈴、デュノアさんは撤退してください。私があいつを食い止めます」

鈴、セシリア、シャルロットが驚くと、＜赤騎士＞が《第二形態》にシフトした。

背面からステンドグラスを想わす美しい翼が生え、尾骶骨から逞しい尾が伸びる。左腕には多機能武装腕《ジャバウオック》が展開され、＜赤騎士＞が翼竜のような姿に変化した。

「ちよつと、あんたはどうすんのよ！」

「大丈夫です。＜赤騎士＞の《単一仕様能力》は逃げるのに特化した能力ですから」

そう言い残し、アリスは単機でスルトに突撃した。

『アリス！』

セシリアと鈴、シャルロットの叫び声は、もう彼女に届かなかった。



刹那の暗転のあと、私とスルトは揃って海面に強く叩き付けられた。

その勢いでしばらく海面を転がったあと、私たちは弾かれるように距離を置いた。

「さて、月夜の海上で、二人きりですよ。ロマンチックですね」

「そうですね。やっと二人きりになれた」

私の軽口に、スルトと名乗る女性は大剣型の近接武装を背部にしまった。

「この時を、私は待っていました」

スルトの言葉に顔を顰める。彼女の口振り、まるでこの状態を狙っていたように聞こえる。

スルトは唯一露出していた口元を緩め、フルフェイスのヘルメットを脱いだ。

露わになつたスルトの素顔に、私は驚愕する。

「あなたは……ローズマリー、ライオンハート!？」

私の眼前に現れたのは、イギリスの国家代表だった。

同時に合点がいく。彼女が相手では苦戦するはずだ。なにせ、彼女は織斑千冬の対抗馬と謳われている女性。その強さは先月のトーナメントで身を以て実感している。

(しかし、なぜ彼女が私たちのISを?)

彼女は察したように告げた。

「私の狙いは、ISではありません。ISを狙うような素振りを見せたのは、あなたとそれ以外を分断させるため。あなたはとても優しい少女、言換、典型的な自己犠牲タイプのようですから、必ず自分が残ると思っていました。そして、それはうまくいった」

私は思わず舌を打ちそうになる。私の行動は全て彼女の計算通りだったわけか。

「で、イギリスの国家代表がわざわざ小芝居を打って、私を一人にした理由はなんですか？」

「あなたと、こうしてゆっくりと話がしたかったからです」

「私はあなたと話したいことなんてありませんが」

私が提案を突き返すと、ローズマリーはどこか寂しそうに言った。

「私があなただのお姉さん、だと言っても？」

一瞬、ローズマリーの言葉が理解できなかった。
ローズマリーが私のお姉さん？ バカらしい。それはあり得ないことだ。

「まさか、英国のお嬢様からそんな冗談を聞くとは思いませんでした」
「私が冗談を言っているように見えますか？ ましてや、こんな場所に赴いてまで」

私は彼女の言葉を否定できなかった。確かに彼女がこんな手込んだ冗談を言うとは思えない。

では、私を拐わかすために、虚言を吐いた？

それも考えづらい。もしそうなら、もつと有効な嘘があつたはずだ。

「……本当に、貴女が、私の、姉？ だということですか……？」

頭痛がした。まるで思い出せと叫ぶような、頭痛が。

私の記憶の奥底で何かが引っかかっている。大事な記憶の断片が。

「ええ。あなたとわたしは同じお母さんのお腹から生まれたの。私とあなたが同じ髪の色なのは、そのため。この赤毛は母から受け継いだものなの。ライオンハートの人間は赤毛の遺伝体質を持つのです」

私は言葉に詰まり、形容しがたい感情に襲われた。

困惑、当惑、混乱。さまざまな感情が入り乱れ、気がどうにかなりそうだった。

「だとして、私をどうしようというのです？！」

「あなたを私の組織に連れて行きます」

私は怪訝そうに顔を顰めた。

イギリスに連れて行く、という訳ではなさそうだが……。

「私の組織はそう遠くない未来、あなたの組織と対峙するかもしれません。米ソの秘密資金を巡って——」

「米ソの秘密資金？」

「その様子だと知らないようですね。嘗て、キューバ危機を発端に、世界の存続を危ぶんだ米ソが世界再建の為に合った秘密資金です。私の組織はそれを資金源に活動してきました。しかし、10年前、資

金を管理していたある男が資金の半分を持ちだし、組織を脱退しました。その男の名は轡木十蔵」

その名には聞き覚えがあった。

面識はないが、確か〈デウス・エクス・マキナ〉創立者の一人だ。「つまり、貴女の組織は轡木十蔵が奪った米ソの秘密資金を取り戻したいと?」

「その通りです。おそらく骨肉の争いになるでしょう。そうなった時、私はあなたと争いたくありません。私とあなたは血の繋がった姉妹なので。剣を交えることなどできません」

「だから、私を自分の組織に連れて行こうというのですか。なら、あなたが私の許にければいい。そうすれば、私たちが争うことはない」

ローズマリーに手を差し伸べるが、彼女は首を横に振った。

「それはできない」

「なぜ!」

「組織には私の最愛の人がいます。私は彼を裏切れない」

「自分勝手な女ですね……」

私と争いたくない。組織も裏切りたくない。だから、お前が組織を裏切れ。

そういう彼女に、今までの当惑を吹き飛ばすような強い怒りが沸き上がってきた。

「悪いですが、私は貴女の我がままに付き合う気はありません」

「アリス……!」

ローズマリーが悲痛な面持ちで叫ぶが、私は意に介さず《ヴィーパル》を構えた。

「レットドクイーン、彼女を捕縛して組織に連れて行きます」

「なら、私もそうしましょう。言い聞かせられないなら、力づくであなたを連れて行く」

ローズマリーは悲痛な面持ちになりながらも、背面の可変型近接武装を抜く。

そして、全身の《展開装甲》を解放し、目が眩みそうな速度で迫ってきた。

「くッ!？」

私はすぐさま《ヴォーパル》を振り下した。

《ヴォーパル》とそれに似た大剣がぶつかりあい、激しき鏖迫り合いが展開される。

「アリス、この争いは不毛だと思いませんか？ 姉妹が戦い合うなんて」

「何が姉妹です！ 貴女は私の敵です！ 今さら姉ぶるな！」

「……………ッ」

私の言葉に動揺したのか、僅かながらローズマリーにスキが生じる。

その僅かなスキに乗じて<レーヴァテイン>を力任せに押し戻し、さらに多機能武装腕《ジャバウォック》の貫き手を繰り出す。が、ローズマリーはいとも容易く躲してみせた。

（くっ……今の不意打ちでも躲しますか）

それに実力差を痛感していると、<レーヴァテイン>の脚部にあるプラズマブレードが、回し蹴りと共に近づいてきた。条件反射でウイングを前面に展開して防御したが、あまりの威力に機体ごと弾き飛ばされる。さらに右翼が砕け、バラバラと宙に散った。

《損傷報告。右翼アクセラレーターにクラスCの損傷!》

A Iの報告を無視し、海面ギリギリでP I Cを使い、なんとか体制を立て直す。

が、その時にはすでにローズマリーが眼前に迫っていた。

「わかりました。私が敵だというなら、今だけは私もあなたを敵と見做しましょう」

ローズマリーの非情な言葉と共に振り翳される、大剣とプラズマブレード。

次の瞬間、<赤騎士>は容赦なく八つ裂きにされ、武装の全てを失っていた。

（……)まで手も足も出ないなんて……)

あまりの圧倒的な力量差に茫然とせざるを得なかった

これがへブリコンヒルデ<クラスの實力……。今の私では実力が足

りなさすぎる。

《ハニー、撤退して！ このままじゃやられる！》

〈レットクイーン〉の叫ぶ声で、我に返る。

「りよ、了解！」

最早ローズマリーの捕縛は不可能だった。それどころか、このままでは私が彼女に捕まる。

私は機体を回頭させ、現空域からの離脱を試みるが、ローズマリーの方が早かった。

「逃がすと思いますか？」

背後から羽交い絞めにされ、動きを拘束される。

「レットクイーン〉、量子ジャンプで跳びます。座標演算を！」

「させません」

ローズマリーは《展開装甲》を持つビットで《単一仕様能力》用のコンデンサーを破壊した。

くっ……。テイルコンデンサーが……。これでは量子ジャンプで離脱することも……。

「万策尽きましたね。では、大人しく私についてきてもらいましょうか」

「誰が……！」

語調を強めて四肢を振るうが、〈レーヴァテイン〉を払い除けられない。

ここまでか、と思った時、通信ウィンドウが開いた。通信相手は――

『……アリス、わたしが援護する……』

未完成の〈打鉄式〉に乗る簪だった。

その直後、虹色の粒子ビームが私の際どい所を抜け、〈レーヴァテイン〉に命中した。

第49話 篠ノ之束博士の異常な愛情

照準がぶれる。砲身が震える。システムの所為じゃない。自分の手が震えているのだ。

未確認のISと戦うことに対する恐怖が、そのまま荷電粒子砲を握る手に現れていた。

それでも簪は持ち得えるありったけの勇気を振り絞り、照準をつける。

「……弾道制御、予測。斜角マイナス10。方位5修正」

FCSの弾道計算ソフトが弾きだした演算結果に従って、砲身の斜角と方位を調整する。

自分は決して狙撃が得意じゃない。しかも、アリスに当てず、所属不明機だけ命中させるのは至難の業だ。だが、幸いにもインストールしたく打鉄の砲撃特化パッケージ〈撃鉄〉の弾道計算ソフトは、世界最高クラスの命中率を誇っている。今はそれと、彼女と共に作ったこの荷電粒子砲を信じるしかない。

「……臆病者の一撃、見せてあげる」

簪は一呼吸入れて、引き金を絞った。

発砲。

撃ち出された粒子ビームは海上を疾走し———〈赤騎士〉を拘束していた所属不明機に命中した。

(……よし！)

柄にもなく振り上げたくなる拳を制し、二射目を放つ。

今度は難なく躲される。三発目も同じ。でも、敵を〈赤騎士〉から引き剥がすことができた。

チャンスだ。簪はすかさず、アリスへ個人間秘匿通信を繋いだ。

『……アリス、援護する。逃げて……』

『了解！』

アリスはすかさず機体を回頭させた。

うまくいった。けれど、まだ安心はできない。アリスが安全圏に離脱するまでは。

(……アリスは、やらせない。……アリスは、わたしが守る)

<打鉄式式>のハイパーセンサーが<赤騎士>を追うとする未確認機を捉える。

簪は再び荷電粒子砲の引き金を絞った。未確認機は側転するように<打鉄式式>の攻撃を躲す。同時にその状態から発砲してきた。その一撃が<打鉄式式>の右翼ウィングスラスターを打ち抜く。

「……えっ!?! この距離からカウンター!?!」

炎上する自機の損傷を確かめる間もなく、今度は左翼のウィングスラスターを撃ち抜かれる。

「……あ、……あ」

推力を失い、ぐらりと機体が揺らぐ。簪は機体制御を忘れ、恐怖に打ちのめされた。

圧倒的な強さを目にして眩暈がする。

そこに個人間秘匿通信が開かれた。通信相手は、一年一組の副担任、山田真耶だ。

『更識さん、よくがんばりましたね。あとは私たちに任せて撤退してください』

通信終了後、簪の頭上を6機の<ラファール・リヴァイヴ>が通過していった。今まで海域を封鎖していた教師部隊だ。<福音>が確保されたことで、こちらにやってきたのだろう。

教師部隊の大半は元国家代表やその候補生で構成されている。その強さは折り紙つきだ。

けれど、安心できないのはなぜだろうか。簪は胸の裡で燻る不安の炎をなぜか消せなかった。

(……教師部隊でも、あのISには太刀打ちできない)

気づくと、教師部隊の中にいる担任エドワース・フランシイに個人間秘匿通信を繋いでいた。

『……先生、あれと戦っては、ダメです』

『大丈夫よ。先生を信じなさい。こう見えても、元カナダの国家代表なんだから』

そういつてウィンクし、エドワースは通信を切った。

「先生……」

今まさに衝突しようとする教師部隊と謎の未確認機の戦闘を心配そうに見守る。

しかし、簪の心配をよそに戦闘は行われなかった。緋色のISが機体を翻し、撤退したのだ。

(……逃げた?)

だが、相手の異様な強さを体感した簪には、そう思えなかった。

間違いない、あの緋色のISには教師部隊と互角以上に渡り合う実力があつた。

(……きつと見逃してくれたんだ)

緋色のISは現行ISにあるまじき速度で現空域から離脱していく。＜ラファール・リヴァイヴ＞の推力では、それに追いつけない。教師部隊は＜レーヴァテイン＞を見送るしかできなかった。

ともあれ。簪はここにきてよくやく安堵の溜息をついた。

♡

✦

♠

日が沈み、漆黒に染まる海の上。

簪の助けを借り、命かながら撤退したアリスは、ずっと口を閉ざしていた。

自分の姉を名乗る女性が現れたこと。それに対する当惑が胸中ずっと渦巻いていた。

「……………」

本来なら『有り得ない』と鼻で一蹴するところだが、どうしてもそれができなかった。

記憶の奥で、母じやない女性に抱きかかえられていた記憶があるのだ。

「……………くそっ!」

アリスはアリスらしからぬ汚い言葉で悪態をついた。

《ハニー? メンタルの数値があまりいい数字を示していない》

「私は大丈夫です」

口調を強めて言い返すが、苛立っているのは誰が見ても明らかだった。

ただ、何に対して苛立っているのか、それはアリスにも判らなかつた。だが、ひとつだけ決心する。

「この事は、セシリアには黙っておいてください」

イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットは、イギリス代表であるローズマリー・ライオンハートを敬愛している。もしこの事を知ったら、さぞショックを受けるだろう。そして、板挟みの立場に苦悩するかもしれない。

「苦しむのは、私だけでいい」

誰にいうでもなく、そうつぶやく。

その背後で夕日が沈んでいく。アリスの長い一日がようやく終わろうとしていた。



「お前たち、よくぞ無事で帰ってきた。これにて状況終了だ。今日はゆっくり休め」

アリスたちが帰還すると、旅館の玄関口で千冬が待っていた。

口調は普段どおりだが、顔には若干の安堵が窺えた。作戦中は冷静を装っていた彼女だが、内心では<レーヴァテイン>の出現に肝を冷やしていたのだろう。

千冬の労いに全員が姿勢を崩す。

腑に落ちない点はいくつもあったが、当初の目的は達した。一応は作戦完了といって差し支えないだろう。

「それと、篠ノ之はちよつとこい」

そういつて千冬が、箒に視線をやる。箒は黙って彼女の前に歩み出た。

「ジェニファーから、おまえに話があるそうだ」

「アメリカの国家代表が、私に？」

箒は千冬から通信機を受け取り、それを耳に当てた。

『初めまして。篠ノ之箒さん。私のことは知っているわね？』

「はい。それで私に話とは？」

『あなたの専用機についてね』

箒は表情を強張らせた。

ISは稀少だ。その数が新たに増えたなら、それを管理する機関が動くのは当然だ。

『今あなたの専用機はこの国家にも所属していない。それはとても問題なの。わかる？』

それは箒にも理解できた。ISは強大な力を持つ。使い方次第で凶悪な兵器にもなる。そんな物の使用可否が国家非公認の少女に委ねられているのである。国家からすれば穏やかな話ではない。

「はい。わかります。それで＜紅椿＞はどうなるのでしょうか」

『一度＜国際IS委員会＞が預かることになるわ』

「そのあと、返してもらえますよね？」

その答えにジェニフアーは短く沈黙したあと、冷たく言った。

『難しいと思うわ。おそらく、然るべき措置が取られるでしょうね』

「然るべき措置とは？」

『ISの保有を認められた国家や機関に分配されるか、あるいは――』

「なっ！ なぜです！ ＜紅椿＞は私の専用機ですよ！」

『そう思っているのは、あなただけなのよ、篠ノ之さん。いい？ 本来、専用機は国家が認めた操縦者にしか受領されないの。厳しい言い方をするけど、査定基準をクリアしていないあなたには、専用機を持つ資格がないのよ。それでもあなたが専用機を持っているのは、姉が気まぐれを起こしたからに過ぎない』

彼女の言葉は正論だった。

今の箒は、親に買い与えてもらった自動車を、無免許で運転しているドライバーとさして変わらない。しかも、一度は運転を誤り、事故を起こしている。そんな彼女にISを預けておくことは危険だ。それがジェニフアーの、ISを管理する人間の言い分だった。

「でも、〈紅椿〉は姉さんが私のために作ってくれた大事なISなんです……」

『知ってる。事情は千冬から聞いたわ。でも、ISは強力な兵器の側面を持っていて、なおかつ一定数しか存在しない。それを個人が所有することは難しいの。わかってもらえる?』

「それは……」

言い分は理解できる。だが箒は拳を握りしめた。

ようやく自分の進むべき道がみえたというのに、〈紅椿〉を失っては、また振り出しだ。

往生際が悪いのは承知の上で、箒は食い下がった。

「その、ジェニファーさんはへブリユンヒルデ〜なんですよ。なんとかなりませんか?」

『なるわよ』

「やっぱり、無理ですよね……—え? なんとかなるんですか!?!」

箒は顎が外れそうになった。

『ええ。〈紅椿〉を国家に帰属させず、IS学園に寄付すればいいのよ。寄付後、学園があなたを〈紅椿〉の専属操縦者に任命すれば、あなたは国家の認定がなくなるとも〈紅椿〉を専用機にできるわ』

箒は思わず掌を叩きそうになった。そんな手があったのか。

『私が委員会に〈紅椿〉の学園寄付を進言するから、その後、千冬に〈紅椿〉の専属操縦者として任命してもらって。千冬にはその権限があったはずだから』

有事の際、教師部隊の指揮を執っている千冬には、学園の訓練機を他に譲渡する権限がある。その権限で箒を〈紅椿〉の専属操縦者に任命すれば、晴れて〈紅椿〉は彼女の物だ。

しかし、問題はまだあった。

「だが、訓練機を一人の生徒に独占させれば、他の生徒から不満の声があがらないか?」

ただでさえ、学園の訓練機の少なさに生徒から不満の声が噴出しているのだ。

教師が学園の訓練機を一人の生徒に独占させれば、鼻屑と不服の声

があがるだろう。

「なら、いい方法があります」

そんな問題に妙案をもたらしたのは、アリスだった。

「〈生徒会〉に入ればいいのですよ。IS学園の〈生徒会〉は、学園の治安維持に務めています。その大義名分を、そのまま受領の口実にしてしまえばいいのです」

「つまり学園の治安維持に貢献するため、特別専用機が与えられた、とするのだな？」

「はい。ちゃんとした名目があれば、文句はでないでしょう。それに篠ノ之さんは剣道の全国大会で優勝しています。〈生徒会〉が勧誘するには十分な理由です」

千冬は頷いた。

「わかった。楯無には私から話をつけておこう。篠ノ之もそれでいいな？」

「はい」

提案に応じると、箒は回線の向こうにいるジェニファーにも頭を下げた。

「ジェニファーさんも、ありがとうございます」

『いいわよ。ただ、お姉さんにあなたから言っておいて。あまり勝手なことするなって』

「わかりました」

申し訳なさと感謝を込めて、箒は再びジェニファーに頭を下げた。

『——じゃあ、千冬に代わってくれる？』

「はい」

箒は通信機を千冬に渡した。

「すまないな。今回の件といい、ラウラの件といい。お前には世話になりっぱなしだ」

『ほんとよ。今度、ディナーでもご馳走しなさい』

「わかった、今度あの店を予約しておこう。ではな」

そう礼を言って、千冬は通信を切った。

「では、全員旅館に戻れ。作戦に参加したものはデブリーフィングを

行う。更識、お前もな」

千冬の号令で全員が旅館に戻っていく。

いくつかの謎を残しつつも、ようやく戦士たちに休息の時間が訪れようとしていた。

♡

◆

♠

臨海学校二日目の夜。大広間にて帰還報告を終えた俺たちを迎えたのは、大勢の生徒だった。

自室待機を解かれた彼女たちは、興味津々な様子で俺たちを囁し立ててきた。

「ねえ、織斑くん、何があったの？ よかったら食事の時に話させて」

「篠ノ之さん、お疲れ様。初めての特務任務、怖くなかった？」
そんな質問を俺たちは愛想笑いと適当な返事で誤魔化した。

『俺を疎む組織が、ISの暴走を演出して、アメリカの大統領を失脚させようと目論んでいた』だなんて荒唐無稽な話を語ったところで、誰も信じないだろう。何より作戦に参加した俺たちには守秘義務があるからな。

（でも、最後に現れたあのISはなんだったのだろうか）

なんでも、アリスたちでも逃げるのが精一杯だったそうだ。鈴があとで教えてくれた。

「なあ、アリス、あのく赤騎士>に似たIS。何者だったんだ？」
旅館が用意してくれた海鮮料理に舌鼓を打つアリスに小声で訊く。
アリスは表情を険しくして、箸を止めた。

「わかりません。でも、あのISには《展開装甲》が装備されています。……おそらく篠ノ之東博士の関係者でしょう。《展開装甲》は篠ノ之博士だけが持っている技術ですから」

「そうだとしたら、あのISの操縦者は何が目的だったんだ？」

「私たちのISだと言っていましたよ」

「でもさ、東さんの関係者なら、ISを奪う必要なんてないだろう？」
東さんはISを<コア>から製造できる。わざわざ奪わなくても自作すればいい話だ。

だとすれば、緋色の操縦者の行動には、別の目的があったということになる。もしかして、ロリーナさんと同じ目的だったのだろうか。そう意見しようとする、アリスが表情に暗い翳を落した。

「もうこの話はやめましょう。折角のおいしい食事が不味くなりま
す」

「お、おう？」

確かに、食事中にする話じゃなかったな。でも、俺はアリスの表情に何か引つかかるような物を感じた。まるで、ふられたくないものに、ふれられたような……。

(なら余計この話題はやめて方がいいな)

改めて食事を再開すると、アリスが思い出したように言った。

「そういえば、7月7日は篠ノ之さんの誕生日なんですってね」

「ああ」

「実は私もプレゼントを用意したのです」

そう言っ、ポケットから可愛いメモリスティックを取り出す。

「よかったら、これを渡しておいてください」

「それはいいが、アリスから渡さないのか？」

「私はこのあと、もう一仕事ありますので。ほら、今<福音>はこの旅館にあるでしょ？ それでロリーナがまたこちらに来るそうなので。それに付き添わないといけないので」

俺たちが止めた<福音>は、今晚にも米軍へ引き渡される予定になっている。その前に<福音>のAI内部にあるという<彼女たち>の手掛かりを手に入れようというのだろう。

「それに簪のことをロリーナにお願いしないといけませんし」

と付け加え、アリスは俺にメモリスティックを渡した。

「わかった。ちゃんと渡しておくよ」

「お願いします」

さて——箒のプレゼントを受け取った俺は、それをどのタイミングで渡すか考えた。

7月7日もあと数時間で終わるし、食事を終えたあとでも、声を掛けるとういようか。

♡

◆

♣

♠

「一夏、待たせたな」

食後の自由時間。旅館を抜け出し、月夜を眺めていた俺の許に、箒がやってきた。

実は食事が終わったときに、『浜辺ですこし話さないか』と声を掛けていたのだ。

「お、箒も水着か」

「あ、ああ」

少し気恥ずかしそうに身をよじらせた箒は、白のビキニ水着を着ていた。

過激すぎず、地味すぎず、良いバランスの水着だ。以前、過激なマイクロビキニを着せたことがあったけど、純粋な愛らしさでは、こちらの方が良かった。

「綺麗だな。よく似合っているよ」

「そ、そうか？ あ、ありがとう」

箒はぎゅつと身を抱きかかえて視線をそらした。恥じらう箒に、俺の鼓動が跳ねる。

ギャップというのだろうか。普段は威風堂々としているから、余計にグツとくるものがあった。

このままだと、気まずい雰囲気になりそうなので、俺はさっそく本題にふれた。

「そういうえば、今日は箒の誕生日だったよな？」

「ああ、そうだな。覚えていてくれたのか？」

「当たり前だろ。——ほら」

驚く筈のスキを見て、俺は誕生日プレゼントを取り出した。

「俺からの誕生日プレゼントだ。開けて見てくれ」

筈は『あ、ありがとう』と驚きつつも、ラッピングのテープを剥がして中身を取り出した。

出てきたのは、シンプルな白い生地のリボンだ。

いろいろ考えたけど、筈にはこれが一番だと思ったんだ。俺が前にあげたリボンは随分と草臥れていたし、俺と筈にとってリボンは特別な意味のある品だからさ。

「あの時と同じ、リボン……」

筈はリボンをギュツと握り、急に瞳を潤ませた。

急に目頭に涙を蓄えた筈に、俺は動揺した。

「ああ、悪いッ！　もしかして気に入らなかつたか!？」

ああ……、やつぱり、こういう時は洒落たアクセサリーとかが良かったか？

しかし、筈はフルフルと綺麗な黒髪を振り乱しながら首を左右に振った。

「いや、違うんだ。リボンには特別な思い出があるから、その、いろいろ込み上げてきて。——紛らわしい事をしてすまない。すごく嬉しい。大事にする。今度は絶対に燃やしたりはしない」

そう言つて、人差し指で涙を拭う。月に照らし出されたその笑顔はとても綺麗だ。神秘的ですらある。他では見せないであろうその一面に、俺は彼女の幼馴染でよかつたと、わずかに思った。

「それで、一夏……その、今日のことなのだが……」

今日のこと。俺が筈を庇つて＜福音＞に撃墜されたことだろう。筈はそのことでボロボロになるまで自分を責め続けていたらしい。心なしか、俺にも若干やつれているように見えた。

「すまない。私の所為でお前に怪我を負わせてしまった」

「いや、いいって。大した傷じゃなかつたし」

「大きい、小さいは関係ない。私の愚かさがお前を傷つけた。それに対する償いをしたい。お前が望むなら、その、切腹でもかまわない」
俺は苦笑した。切腹つて、おまえはいつの時代の人間だよ。

「そんなことされても俺は嬉しかねーよ」

「そ、そうか。とにかく、私を罰してほしい。でないと申し訳が立たない」

真剣なまなざしで罰を欲する箒に、俺はもう一度苦笑した。

みんなが許しているのだから今のままでいいと思うのだが、生真面目で責任感の強い箒のことだ。簡単には引き下がらないだろう。そんな箒に俺は表情を改め、「償い」について語った。

「実はさ、俺も償いの真っ最中なんだ」

箒は驚いたように、目を開いた。

「そうなのか？」

「ああ。みんなには言ってないけど、千冬姉が〈ヘモンド・グロツソ〉で連覇を逃したのは俺の所為なんだ。そのことをずっと悩んでいたら、千冬姉が俺に言ったんだ。『償いとは、己を咎め続ける事でも、自ら命を絶つ事でもない。その経験で感じた事を糧に、人として強く、優しくなることだ。そして、その強さと優しさを以って、人々の幸せに貢献する。それが償いだ』って」

「人として強く、優しくなること。それを以て、人々の幸福に貢献すること……」

千冬姉の言葉を強く反芻する箒に、俺は肯いた。

「ああ、己を咎め続ける事も、死んで詫びる事も、全て自己満足でしかないんだ。それじゃ誰も報われない。大事なのは、誰のために、何をしてあげるか」

そこまで言って、俺は自嘲しながら頬を掻いた。

「まあ、俺はまだまだ半人前で、みんなにしてやれる事なんか殆どないんだけどな」

今ある生活は学園の庇護があるからだし、不自由なく暮らせているは千冬姉のおかげ。〈白式〉に乗って戦えるのも、そういう人たちの膳立てがあるからだ。結局のところ、俺は一人じゃなにもできない無力な人間なんだ。

それでも続けようと思う。アリスが『あなたには誰かを救える力がある』って言ってくれたから。

すると、箒が何かを決心した面持ちで俺を見た。

「なら、私が手を貸そう。お前がひとりでも多くの人を守れるように」
決めた、それが私の償いだ。——言うなり、箒は俺の前に仁王立ちした。

そして、手慣れた手付きでいつもの髪型——ポニーテールを作る。
「お前がくれたこのリボンに誓おう。お前に立ちはだかる苦難は私が斬り伏せる」

神々しい月を背後に語る箒の姿は、あまりに綺麗で、俺は言葉を失ってしまう。

でも、それ以上に彼女の気持ち嬉しくて、俺は素直に礼を告げた。

「ありがとう、箒。心強いよ、本当に」

「礼をいうのは、こちらの方だ、一夏。よくぞ、私に道を説いてくれた」

「道なんてオーバーだよ」

そう言って笑い合うと、俺と箒は揃って天を仰いだ。

夜空には満天の星が輝き、綺麗な天の川が流れている。流星が天の川を跨いでは消えていった。



旅館の浜辺から離れたある岬の一角。

東は岬から足を放り出した足をばたつかせながら、小さいモニタを微笑ましそうにみつめていた。その画面には仲睦まじい男女が映し出されている。まるで、天の川を越えて再会した織姫と彦星のように。

「ふふ、箒ちゃん、がんばったね。《絢爛舞踏》も発現できたし」

モニタを切り替えると、画面に高速で渦を巻く粒子群の映像が表示された。

それは〈対生成反応〉と呼ばれる現象だった。これを発現させるために、東は危険な作戦に〈紅椿〉を推した。東にはそうしてでも《絢爛舞踏》を発現させたい理由があったのだ。

〈紅椿〉の動力炉は既存機と互換性がない。つまりエネルギー切れした時、新たに充填することができない。東の立場上、安定した補給を行えないため、ここを離れる前に《絢爛舞踏》を発現させておきたかったのだ。

「でも、こんなところで〈彼女たち〉の陰謀に巻き込まれちゃうとわねえ」

本来は〈レーヴァテイン〉に〈紅椿〉をぶつけることで《絢爛舞踏》の発現を促す予定だった。

だが、〈福音〉が暴走したことで、そのシナリオを大きく変更せざるを得なくなった。結果的には《絢爛舞踏》の発現に漕ぎ着けられたが、得られ損なつたものも確かにあった。例えば――

「〈紅椿〉と〈レーヴァテイン〉が戦うところ見たかつたなあ」

自分が作つた最高傑作と、息子が作つた最高傑作。操縦者の技量が違うため、勝敗は明らかだが、四世代同士の戦闘だ。それ自体に大きな意味がある。

「楽しそうね。狂つたうさぎさん」

母性的で優しい声音が、東の背後から聞こえた。音もなく現れたのはロリーナだ。

東は浜辺での態度は見せず、かといって振り向きもせず言った。

「よくここがわかつたね」

「貴女に訊きたいことがあつてね。部下にあなたを監視させていたの」

「ふくん。で、訊きたいことつてなんだい？ 今日気分がいいから、答えてあげなくもないよ」

「助かるわ。では最初に、あの緋色のIS、〈レーヴァテイン〉は何なのかしら？」

東は海岸から放り出した足をバタつかせながら答えた。

「レーヴァテインは悪神ロキが魔人スルトのために鍛えた魔剣だよ」

まるで答えになっていなかったが、ロリーナは苦笑した。

「まるで今のISの在り方に対するあてつけね」

最高のIS操縦者に与えられる称号〈ヴァルキリー〉は北歐神話に

由来する。

そのヴァルキリーが住まう世界アスガルドを焼き払ったのが、巨人スルトのレーヴァテインだ。ロリーナの言葉通り、〈レーヴァテイン〉というコードネームは、まるで今のISの在り方に対するあてつけに聞こえる。

「それをいうなら〈赤騎士〉だって〈白騎士〉^わに対するあてつけでしょう？」

「いいえ。〈赤騎士〉は〈白騎士〉が成しえなかった偉業を成すISよ」

対抗意識からではなく、純粋に真実を語るような口調だった。

それに興味を惹かれたのか、束のウサミミがピクピクと反応する。

「ふくん。〈赤騎士〉は〈白騎士〉に代わって、何を成すっていうんだい？」

「《第三形態移行》^{サードフォームシフト}よ。《第三形態》に移行して、究極^{アルティメット}の単一仕様能力を得るわ」

オペラでも歌うかの如く、月夜を見上げ、誇るように語る。

究極の《単一仕様能力》。それが何か知る束は、ロリーナに流し目を送った。

「ロリーナはそれがどんな能力か知っているの？」

「ええ、全ての《単一仕様能力》を内包する能力でしょ？——でも、私が欲しいのは、二つの能力。《零落白夜》と《絢爛舞踏》よ。この二つの《単一仕様能力》を〈赤騎士〉に実装したいの」

《零落白夜》の能力は理論値のオーバーフロー。簡潔にいうと性能の限界突破だ。〈白式〉が《絶対防御》を看破できるのは、これで《雪片式型》の性能を限界突破させているからである。そして《絢爛舞踏》は無尽蔵のエネルギーを生む《単一仕様能力》だ。

「このふたつの《単一仕様能力》を〈赤騎士〉に実装して何の意味があるんだい？」

「〈赤騎士〉の《単一仕様能力》は量子ジャンプ。でも、その能力は限定的なの。跳躍距離、使用回数に制限があるわ」

ロリーナの言わんとすることを理解した束が、続きを紡いだ。

「そこで《零落白夜》と《絢爛舞蹈》かあ。《零落白夜》の限界突破能力があれば量子ジャンプの飛距離は飛躍的に伸びるだろうね。そして、その超長距離ジャンプに必要なエネルギーを《絢爛舞蹈》で補う。で、ロリーナの目測ではどれくらいの距離を跳躍できるようになるの？」

「ざっと約3億キロメートルね」

東は月夜を仰いで哄笑をあげた。

「ははは、そりやすごいね。火星までひとつ跳びだ。——でも、《第三形態移行》は＜白騎士＞ですら成し得なかったことだよ？」

「言ったでしょ？ ＜赤騎士＞は＜白騎士＞が為せなかった偉業を成すISだって。＜赤騎士＞はニューロAIを介することで、操縦者の“想い”や“意思”を的確に汲み取れる。アリスが強く願えば願うほど、＜赤騎士＞は自らの進化を加速させるわ」

「アリスちゃんなら＜赤騎士＞を《第三形態移行》させるっていうのかい？」

ロリーナは誇るように頷いた。

「ええ。彼女の強い意志がそれを成す。彼女は“地球”と“火星”を繋ぐ架け橋になるわ。やがて訪れる世界的飢餓から、大切な人たちが住むこの世界を救うためにね」

「そつか。あの子が言っていた“やらなきやいけないこと”ってそういうことだったんだね」

東は渡り廊下でのやり取りを思い出し、合点がいったように笑った。

「もしかして欲しくなった？ でも、あげないわよ。アリスは誰にも奪わせないわ」

そこで初めてロリーナの瞳が恐ろしげに光った。しかし、東は怯まず、ひよいつと立ち上がる。

「奪う？ 違うよ、ロリーナ。返してもらうんだ。妹はお姉ちゃんのものなんだから」

東がくるりとこちらを向く。その背後に緋色のISが浮かび上がった。

赤騎士に酷似したIS。世界を火の海にするための魔剣——<レーヴァテイン>だ。

「その言葉、私たち姉妹に対する敵意と取っていいのね？」

「ご自由に受け取りください。それとアリスはあなたの妹ではありません。私の妹です」

間違えるな。そうとも取れる強い言葉で答え、ローズマリーは束を抱えて後方に下がる。

その去り際、ロリーナが最後の問いを投げかけた。

「束、最期に教えてくれるかしら。——結局、あなたはISで何がしたかったの？」

束が失踪する以前、ロリーナは束を食事に誘ったことがあった。いまの質問は、その時に尋ねた質問だ。

その時、束は食べるだけ食べて何も語らなかった。

その時間けなかつた答えを再び聞くため、ロリーナはここを訪れたのだ。

「ロリーナは地球を外から見たことある？」

束は夜空を——いや、宇宙を見上げ、そこに想いを馳せるように問い掛けた。

ロリーナは簡潔に答える。

「いいえ、ないわ」

「わたしはあるよ。ISを使って成層圏からね。——そこには、神さまなんていなかった」

「ガガーリンも言っていたわね。——地球は青かった。でも神はいなかった」

「それどころか国境の線引きも、民族の色分けもなかった。地球にはね、わたしたちを区別するものなんて何にもないんだよ。そこでわたしは悟ったんだ。国家、宗教、民族の違いなんて些細なことではないんだって。——ロリーナ、わたしたちは地球という家に住むひとつの『家族』なんだよ。だから、思ったんだ。わたしたちはもっと仲良くすべきだって」

「その気持ちを世界の人々が共有できるよう、ISで人類を宇宙に上

げるつもりだったの？」

「まあね。わたしが感じたことを、みんなにも感じてほしかったんだ。ロリーナ、人の世界は、社会意識の共有化によって成り立っているんだよ。『私たちは社会の一員。秩序や規範を守り、助け合わなければならぬ』。そんな強迫観念に似た意識、あるいは暗黙のルールを人々が共有しているから、社会は円滑に回っている」

同様に世界がひとつの集団意識——束が云う『わたしたちは地球という家に住む一つの家族なのだから、人類はもつと仲良くすべきだ』という意識をみんなが共有できたのなら、きっと世界は今より円滑に回るだろう。やがて、その社会意識が国家や宗教、肌の色を越えて、世界をひとつにする。

新たな社会意識の萌芽。それが、束がISに込めた願いなのだろう。

「でも、それが目的なら〈白騎士事件〉を起こす必要なんてなかったはずよ」

ISが人類を宇宙に導くツールだというのなら、兵器の側面を見せる必要はなかったはずだ。

〈白騎士事件〉は自分自身の手で、我が子というべきISの存在を貶めたことに他ならない。

「それはISを世界に受け入れさせるためだよ。科学の進歩は日進月歩。ある日突然、急激に発達することはまず在りえない。だからなんだろうね、ISを発表した当初は、ISは科学を冒瀆しているって言われたよ。だから、ISを世界に受け入れさせるには、センサーシヨナルな出来事が必要だと思ったんだ」

「それだけ？ それだけの理由で何百万の人々を危険に曝したの？ 貴女は酷いエゴイストだわ」

「否定はしないよ。でも、それは全人類にいえることでしょ？ みんなが自分勝手だから、尊重し合えないから、世界はひとつになれないんでしょ？ でも、わたしのエゴはそんな世界のエゴを飽和する」

「でも、できなかつたわ。貴女のエゴは、世界のエゴに押し潰された。現実を見てみなさい。世界は無作為に兵器を突き付け合い、社会は差

別を容認し続けている。どれひとつとして貴女の望みは叶っていない。貴女は理想を追い過ぎるあまり、現実が見えていなかったのよ」
彼女は理想を追い求めるあまり、現実に対して盲目だった。だから、世界の傲慢さに気づけなかったのだ。利己的主義者は平和の祈りだつて、スイッチ一つで吹き飛ばす。そんなエゴを少女一人のエゴで飽和できるほど、世界は優しくなければ寛容でもない。

ロリーナは続けた。

「貴女の想いは間違っていなかったと思うわ。ただ、貴女はやり方を間違えた。それが個人範囲に収まっていれば『若気の至り』で済んだでしょう。でも、貴女と織斑千冬が起こした『白騎士事件』は、世界を冷戦という混沌に陥れた。もう若気の至りだなんて言葉では許されないわ。貴女は世界に対して贖罪すべきよ」

「わかってる」

強く避難するロリーナの言葉を、束は真摯に受け止め、そして言った。

まるで既に決意を固めているような声で。

「償いはちゃんとするよ。くーちゃんのためにもね」

「くーちゃん、一緒にいたアフリカの子ね？」

ロリーナはクロエの翳のある容貌から、彼女の正体に気づいていた。

「うん。くーちゃんはね、アフリカの児童労働者だったの。毎日、毎日、ダイヤモンド鉱山で過酷な労働を強いられて、奴隷のように扱き使われていた。でも、くーちゃんは生きたんだ。人権を奪われ、逃げられないように麻薬漬けにされても、くーちゃんは精一杯生きた。くーちゃんには夢があったから」

「夢？」

「くーちゃんの夢は『大人』になること。大人になって『お母さん』になること」

子供はやがて大人になり、親になる。当たり前のことだが、彼女の住む世界では、違った。飢餓、疫病、紛争。残酷な現実を前にして、多くの子供が大人になれないまま死んでいく。彼女の住んでいた世界

はそういう世界だった。

それでもクロエは夢を見続けた。自分に明日がある事を信じて。「くーちゃんと出会う前は、自分の発明品を正しく使えない世界なんか『どうにでもなっちゃえ』って思ってた。——でも、ダメなんだ。どんなに残酷でも、この世界には夢を持って生きている子供たちがいる。そんな子供たちの未来に『冷戦』や『女尊男卑』なんてものは必要ない」

健気に明日を夢見る少女と出会ったことで、束の裡で何かが変わったのだろう。

それが再び世界と向き合う覚悟を束に与えたのだ。

「だから、わたしは帰ってきたんだ。わたしの作った罪を後世に受け継がせないために」

誰よりも強い意志を以って語る束の瞳は、優しい母親の色をしていた。

そう、子の幸せを願う母親の。ロリーナは微笑んだ。ここに来て初めて的笑みだ。

「束、貴女は科学者に向いていないと思うわ。だって、科学者は自分が作り出した物が未来にどういう影響を与えるか考えないといけないもの。なのに、貴女はそれを怠り、へ白騎士事件なんて事態を引き起こした。科学者失格ね。——でも、いい母親にはなれると思うわ。今の貴女はとても優しい瞳をしているもの」

ロリーナの言葉に、束の表情がすこし綻んだ。

「じゃあ、これからは一人のお母さんとして、世界と向き合っていくよ」

『ありがとう』の代わりにそう告げて、束は<レーヴァテイン>と共に岬を離れた。

「またね、ロリーナ」

「ええ。『また』があればね、ウサギのお母さん」

ロリーナの言葉に一度だけ微笑んで、束はローズマリーと共に岬を離れた。

闇夜に溶け込むように、二人は姿を晦ます。

彼女の去った世界をしばらく眺めてから、ロリーナは踵を返して、口を開いた。

「あなたの親友は、自分の進む道を見つけたみたいよ。——あなたはどうするの？」

柏木の影に身をひそめていた人物——織斑千冬は無言のまま答えなかった。

第50話 受け継がれる意思

周囲から上がる無数の警報。眼前で敵が武器を構えている。私は戦っていた。孤独な少女のために、世界を敵に回して。戦力比はざつと5:1。多勢に無勢だった。その戦力差を前に、私はほとんど成す術がなかった。敵の攻撃。咄嗟に回避運動を取る。だが、激痛で体か思うように動いてくれない。途切れそうになる意思を繋ぎ止めるだけで、精一杯だった。

これまでか。そう思ったとき、私を守るように蒼い傘が開いた。驚く私の前に、天空より赤い髪の女性が静かな風と共に舞い降りてくる。

今思えば、あの時に気づくべきだったのかもしれない。

<サイレント・ゼフィルス>の専属操縦者のローズマリーが私の姉だ。

——私にはあなたを庇う歴とした謂れがある。

あの言葉はそういう意味だったのだ。

目を覚ました私の目に、見知らぬ天井が映った。

「あれ……？」

私は国家代表と戦っていたのではなかったか。——いや、違う。いまは学園の臨海学校に来ていたんだ。ここはその宿泊先だ。どうやら、生々しい夢を見ていた所為で、現在と過去、夢と現の感覚が曖昧になっていたようだ。

現状を把握した私は、気怠さを感じながら身を起こす。

「ん？」

精神的な倦怠感に、しばらくぼくとしてっていると、背後に人の気配を感じた。

私の背後にいた人物は、黒い髪の女性だ。清楚な佇まいで静かに正座をしていた。部屋がほの暗いこともあって、どこか不気味な光景だ。私は思わず『ひっ』と悲鳴を上げた。

「し、篠ノ之さん、何をしているのですか？」

私は柳の下で佇む幽霊よろしく私の背後に座っていた篠ノ之さんに言う。

篠ノ之さんは確か隣の二十三号室だったはずだけど。

「実は、これいってアリスに頼みたいことがあって、参った次第だ」
「参った次第だ、って」

危うくこっち参ってしまうところでしたよ。私、お化け苦手なのに。

ともあれ、私は乱れた浴衣を整え、正座する篠ノ之さんと向き合った。

「それで、早朝から私に何を頼みたいのです？」

篠ノ之さんは真剣な面持ちで、畳の上に正座し直した。

「実は昨日の晩、一夏と話したのだ。そこで、あいつの想いを聞いた。それを聞き、私はあいつの力になりたいと心の底から思った。——だが、今の私は未熟だ。とりわけISに関しては、素人に毛が生えたようなものだ。そこでだ、アリス。ぜひ私にISの稽古をつけてほしい。たのむ！ この通りだ！」

篠ノ之さんは、深々と頭を下げ、畳に額を押し当てた。

「それは構いませんが、私でいいのですか？」

教えるのは一向に構わない。でも、私ではなくラウラの指導を受ければ、一夏と一緒に訓練できるから、篠ノ之さんの的に良いと思うのだけど。

「私はお前がいいのだ。——戦う理由を訊いたとき、お前は言った。『私が戦う事で救える命がある。その為に戦っている』と。その言葉に、私は感銘を受けた」

感銘か。篠ノ之さんの言葉に、私は感慨深いものを感じた。

その言葉は〈国境なき医師団〉にいた母の言葉なのだ。母はもう亡き人だけど、母の残した言葉がこうやって影響を与えている事に、偉大さというか、そういうものを感じてしまった。

「この通りだ。私はお前からISの技術だけではなく、その生き様を

学びたいのだ」

篠ノ之さんは床に穴を空けそうな勢いで、額を畳にこすり付けた。この勢いだと、了承するまで顔を上げないだろう。そういうところはととても頑固だから。

「わかりました。引き受けましょう」

篠ノ之さんは勢いよく顔を上げた。

「本当か!？」

「ええ」

特段、断る理由もなかったので、私は了承した。むしろ、歓迎だった。

役職上、身を危険にさらす機会が多い私は、いつ死ぬかわからない身の上だ。私が死ねば、母の意思もそこで終わる。母の言葉に感銘を受けてくれた箒が、その意思を継いでくれるなら、これほどありがたいこともない。

「では、これからよろしくお願いしますね」

「はい、よろしくお願いします。お師匠様」

正座で三つ指を突き、頭を下げる篠ノ之さんに、私は苦笑をした。

「その呼び方はやめてください。今まで通りでいいですよ」

「しかし、父から師は敬えと」

「構いませんよ、同い年なのだし。もっとフランクに行きましょう」

「そうか？ アリスがそういうなら、わかった。では、私のことも箒と呼んでくれ」

「わかりました。そういえば、いつからココにいたのです？」

現時刻は、まだ6時を過ぎたところ。まだ起床時間前だ。

一体いつ頃から、私の隣に居たのだろうか。

「4時だ」

「4時ですか!？」

思わず吹き出しそうになった。

箒は2時間も私の側で起きるのを待っていたのか。どうりで、変な夢を見る筈だ。

◆ ♡ ♣ ♠

箸と別れたあと、私は朝食を取るため、旅館の広間に向かっていた。隣には同屋ののほほんさん。ただし、表情はのほほんじゃなく、ぶんぷんだ。

「どうしたんですか、のほほんさん」

「ぎつちよん、昨日さつさと寝ちやうからつまんなかったー！」

ああ、昨日の晩は、任務の疲れからすぐ寝てしまいましたからね。そのせいで、のほほんさんが楽しみにしていたガールズトークをできなかつた。

「そう怒らないでください。お詫びに朝食のメニューを一つあげますから、ね」

「えー、ほんと〜!？」

のほほんさんは一瞬で破顔した。こういう時ののほほんさんは、食べ物で釣るに限るのだ。教えてくれた虚さんに曰く『本音は食いしん坊なので、食べ物を上げれば大概は機嫌がよくなります』ということらしい。

私は「ぶんぷんさん」から「のほほんさん」に戻った布仏さんと共に広間の戸を開ける。

広間には既に朝食の準備がなされていた。メニューは白飯に味噌汁、塩鮭、味海苔、納豆と、純和食だ。膳の前では、既に大勢の生徒がついていた。席は自由のようだ。

「あ、ぎつちよん、かんちゃん隣の隣、空いてるよー」

「あ、ほんとですね。——箸、おはようございます。隣いいですか？」 私たちに気づいた箸がやや眠そうなに顔を上げた。

「……あ、アリス。おはよう。うん。いいよ」

「では、失礼して」

箸に許可を貰い、私とのほほんさんは、箸を挟む形で席についた。

私は朝食の味海苔をのほほんさんにあげつつ、昨日の出来事について感謝を告げた。

「そういえば、昨日は本当に助かりました」

昨日の夜、私はあわやローズマリーに連行されそうになったところを、簪に助けもらった。彼女がいなければ、私はこうして朝食を取れていなかっただろう。

「……うん。わたしの方こそ、アリスにいっぱい、してもらったから。それにアリスがいなかったら、荷電粒子砲も完成させられなかった。あ、ありがとう……」

「いえ、それほどありませんよ」

むしろ、荷電粒子砲の件に関しては、千冬さんが大きく貢献している。

すると、納豆ご飯を食べていたのほんさんが『わたしは？』と自分を指差した。

「……ほ、本音も協力してくれて、ありがとう」

簪の礼に満足したのほんさんは、納豆ご飯を頬張りながらグッと親指を立てた。

あれ、私の記憶だとアイスキャンデーを食べていた記憶しかないけど。まあいいか。

「それはそうと、ロリーナ——ベロニカの件ですが、OKしてくれましたよ」

「ほ、ほんと!？」

「ええ。是非、手伝わせていただくわ、と。ただ忙しい身なので、全ての作業工程に参加できないそうですが、可能な限り協力してくれるそうです。——よかったですね。きっと開発も捗りますよ。私もあなたへの借りを早く返せそうです」

すると、簪は嬉しげな表情から一転、どこか不安げな表情で箸を置いた。

「簪、どうしました?」

私が様子を窺うと、簪は不安げにこちらに視線を寄越した。

「……アリス……<打鉄式式>の開発が終わっても、わたしと友達でいてくれる、よね?」

「どうしたのですか、急に?」

「……その、＜打鉄式＞が完成すれば、あなたがわたしを手伝う理由、なくなるから……」

確かに、私がこうして＜打鉄式＞開発の手伝いを買って出たのは、学年別ペアトーナメントでの借りを返すため。その借りを返せたら、私が簪を手伝う理由もなくなる。その時、私が去ってしまったわいか、不安だったのだろう。

「……わたし、友達少ないし、作るのも苦手だから。……その、ずっとそばに居てほしい……」

どこか切実な簪に、私は考えるまでもなく告げた。

「もちろんですとも。どこにも行きませんから、安心してください」

私が不安に震える簪の頭をぽんぽんと叩くと、安心したように

「……うん」と頷いた。

「でも、ずっとそばにいてほしいだなんて、なんだかプロポーズされた気分です」

私の何気ない言葉に、簪は手から箸を取りこぼした。

その表情は膳に乗せられた梅干しより真っ赤だ。

「……プ、プロポーズ!? ……ち、ちがう、わたしはそういう意味で言ったんじゃない……」

「もちろん、わかっていますって」

「……でも、アリスが、そう受け取ったなら、責任、取る」

「ふふ。では、私がお嫁に行きそびれたら、貰ってやってください」

「……ふふ、うん……」

簪はどこか嬉しそうに食事を再開した。心成しか箸の動きも軽やかに見える。

それから私たちは今後の作業スケジュールの話しながら食事を進めた。



朝食後、俺たち専用機持ちは実習用に持ち込んだ機材をトラックへ

と運んでいた。これが終われば、あとは学園のバスに乗って帰宅するだけになる。すこし名残惜しいが臨海学校もこれにて終了だ。

(それにしても大変な二泊三日だったな)

〈福音〉の件で、行うはずだった訓練プログラムは全てパー。本当に海水浴を楽しんだだけになった。それに対して千冬姉は酷く頭を悩ましていた。そりやそうだよな。ここまで悉く学園行事が潰れたのだから、教師陣は頭が痛いに違いない。

それもあつて、俺はロリーナさんの話を千冬姉に切り出せないでいた。

唯でさえ、千冬姉の周りは問題事でいっぱいなのだ。そこに身内の心配までさせてしまったら、いくら千冬姉でも潰れてしまうかもしれない。それが怖くてなかなか切り出せなかった。

(でも、今の俺には頼もしい仲間がいるしな)

アリス、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。誰もが頼もしい面々だ。そんな彼女たちが一緒にいてくれるなら、どんな困難にも立ち向かえる気がする——とまでは言わないが、精神的にかなりの支えになっていることは確かだ。

それにアリスが所属する〈デウス・エクス・マキナ〉という組織の存在も大きい。もし俺たちでどうにもならなくなった時は、千冬姉や、東さん、ロリーナさんの、大人の力を借りよう。

そう決意し、最後の弾薬箱をトラックに積み込む。

その後、俺は〈白式〉を解除し、自分の組のバスへ向かう。車内では、既に全員が座席についていた。どうやら、俺が最後のようだ。俺は適当に空いていた席に腰を下ろした。席についたところで、俺は喉が渴いていることに気づいた。

「しまったな。旅館の購買で何か飲み物を買ってくればよかった」

今から下車して買ってこようか。

いや、そろそろ出発時間だし、みんなを待たせるのはな……。

(仕方ない、休憩所のサービスエリアまで我慢しよう)

と、決めた時、ミネラルウォーターの入ったペットボトルが目の前に差し出された。

「はい、どうぞ」

「お、サンキュ——って、え!?!」

ペットボトルの差し出し主を確認し、俺はきよとんとしてしまった。

俺の前に立っていたのは、金髪と澄んだ碧眼が綺麗な外国の女性だ。長身で手足はすらつと長く、まるでモデルのような美貌を誇っている。また、着ているカジュアルスーツがカッコよく、ルージュの口紅が色っぽい。

その女性はく福音の専属操縦者で、アリスの元上官のナターシャ・ファイルスさんだった。

「こんにちは、勇敢なナイトくん。昨日の夜はお世話になったわね」
ナターシャさんが色っぽいルージュの唇をやんわりと曲げて微笑む。

それに思わず視線を奪われそうになるが、なんとか堪えて答えた。

「あ、い、いえ。それよりどうしたんですか？　こんな場所に」

「実はあなたに昨日のお礼を言いに来たの」

ナターシャさんは色っぽい表情を改め、優しい表情でいった。

「母のために戦ってくれてありがとう。心から感謝するわ」

そうだった。ナターシャさんは現職のアメリカ大統領の娘だったんだ。

それを思い出して俺は急に緊張し出した。いや、緊張しない方がおかしいだろう。

「いえ、その、任務でしたから」

緊張でちぐはぐなになった俺に、ナターシャさんがクスつと笑った。

「そう。じゃあ、これは私からの勲章ということだ」

そう言つて、先ほどのミネラルウォーターを俺に手渡す。

丁度、喉が渴いていた俺は遠慮せず、そのミネラルウォーターを受け取った。

「ありがとうございます」

俺が礼を言った時には、ナターシャさんは『じゃあね』と踵を返し

ていた。そして、バスの下車前にヒラヒラと手を振って俺たちの前から去っていく。その後ろ姿はまさにランウェイを歩くモデルのようで、軍人には到底みえなかった。

「ふう〜」

ナターシャさんを見送ったあと、俺は貰ったペットボトルのキャップをひねった。

ちよつとキャップが緩い気がしたが、構わず口をつける。

「ぶは〜……」

喉が潤され、思わず一息つく。

そんな俺を、箒とセシリアがなぜか険しい目で見てきた。なんだ、どうした？

「おい、一夏、それはなんだ!?!」

「は？ ただのミネラルウォーターだろ？」

「違いますわ。一夏さんが口をつけた場所の赤いのですわ!」

「え?」

セシリアに指摘され、俺は初めてペットボトルに付着した「赤いもの」に気づいた。

これは口紅? しかもこの色はナターシャさんがしていた口紅と色が似ているような……。

「あつ……」

まさか俺はナターシャさんと間接キス、を……?!

同時にナターシャさんの色っぽい唇が脳内再生されて、俺は湯沸かし器みたいに沸騰した。

「おい、一夏、何赤くなっているんだ!」

「わ、わたくしとした時はそんな反応しませんでしたのに!」

「お、おちつけってふたりとも」

そう宥める間に言い訳を探すが、動揺で何もでてこない。そもそもこの展開だとどんな言い訳をしても無意味な気が……。いや、ともかく、このままだと身が危なそうなので、俺は頼りになる教官殿に助けを求めた。

「すまん、ラウラ、助けてくれ……!」

「ふむ。仕方ない奴だな。——二人とも、そう声を荒げるな。間接キスぐらいなんだ。直接したわけではないのだから、大目に見てやっただろうだ？ 嫉妬深い女は読者に嫌われるから節度が必要だと、クラリッサも言っていたぞ？」

『ぐ……』

ラウラの一言がグサつときたのか、箒とセシリアが言葉に詰まった。

読者つてのはよくわからんが、クラリッサさん、いいこというじゃないか。

「た、助かったぜ、ラウラ」

「うむ。これで遠慮なくナターシャ・ファイルスのペットボトルをペロペロできるな」

「しねえーよ！」

「しないのか？ 思春期の男は女の私物に性的興奮するものだと、クラリッサが言っていたぞ」

「それは極めて特殊なヤツだ！ 俺はそんなことをしたことも、思ったこともない！」

前後撤回。

ラウラにこんな知識を教えたクラリッサという女性をとつちめたくなつた。

だがしかし、事態はそれどころじゃなくなっていた。

なぜかラウラの言葉に即発された箒とセシリアが、しおらしく自分のペットボトルに口付けして差し出してきたのだ。目には「上書き」とか書いてあるんだけど、どういうこと？



賑やかな少年少女のやり取りを聞きながら、ナターシャ・ファイルスはバスを下車した。降りた先には嘗ての部下——アリスが待っていた。アリスは寄りかかっていたバスの側面から体を離れた。

「お久しぶりです、ナタル」

「あら、アリス」

歩み寄ってきたアリスをナターシャは歓迎するように抱きしめた。そして、その頬に熱烈なキスをかます。擬音にしたなら『ぶちゅうー』という具合のキスだ。それは最早、愛情表現というよりセクハラに近いキスだった。その証拠にアリスの頬にはくつきりキスマークが残っている。

「あ、相変わらず、愛情表現が過激ですね、ナタル……」

「貴女も相変わらず、元気そうなので嬉しいわ」

「はい、見ての通り、何とか生きています。ナタルも元気そうで」

「まあ、今日が元気でも、明日はどうかかわからないけどね」

ナターシャが苦笑し、アリスも苦笑する。彼女たちは軍人だ。命の取り合いをする職業である以上、明日の身の保障はどこにもない。明日、戦場で命を落とす事だって有り得る。それが極端な例だとしても、彼女が数時間前まで生きるか死ぬかの瀬戸際にいたのは確かだ。「そう思うなら軍なんかやめればいいのに。ナタルなら再就職に困らないでしょ?」

軍人の再就職は難しい。アメリカホームレスの3割が元軍人であることからそれが窺える。だが、それは男性に限ったことだ。女性優遇時代の現代に於いては、女性が就職に困る事はすくない。

「モデルとかどうです?」

「悪くないわね。イーリはバカにするでしょうけど」

ナターシャにつられ、アリスも笑った。イーリス・コーリングは着飾った女性をみると、すぐ毒を吐きたがるのだ。どうも幼少期、貧しかったのが原因らしい。彼女は経済的徴兵者だった。

「そう言うあなたは、今どうしているの? フリーランス?」

「まあ、そんなところです」

「そう。——ねえ、私の部隊に戻ってくる気はない?」

ナターシャの誘いに心が動くも、アリスは首を横に振った。

「いえ、気持ちは嬉しいですが」

「エイミーのことなら、誰もあなたを責めていないわよ?」

「知っています。でも、他にやらなければいけないことができましたので」

「そう」

アリスの返事に、ナターシヤは優しい笑みを見せた。

エイミーでの一件以来、アリスは戦うことをやめ、自分の殻に引きこもった。その彼女が新たな剣を手にし、戦場に帰ってきたのだ。それは、彼女が新たな目標に向かって歩み始めた証拠。その歩みを止める事は誰にもできない。例え元上官で、恩師であっても。

「でも、何かあつたら迷わず帰ってきなさい。いつでも歓迎するわ」その言葉を保障するように、もう一度、包み込むようなハグをする。アリスはナターシヤに身を預けた。そして心の中で声そつと思う。

——ナタルが、私の本当の姉さんだったらよかったのに。

もし彼女が本当の姉だったら、胸の裡にある得体の知れない感情に苦しむこともなかっただろう。

しかし、そう願ったところで、血の繋がりは簡単に絶てはしない。それでも「今だけは」と、アリスはナターシヤに身を預けた。

それから一頻り甘え、アリスはナターシヤから離れる。——が、すぐさま引き戻される。

「ナタル？」

「ああ、やっぱり名残惜しいわ。ねえ、本当に戻ってくる気ない？」

「ええ、気持ちは嬉しいですか」

と言っているにも関わらず、ナターシヤはアリスをズルズルどこかに連れて行くこうとする。

そんなナターシヤの後ろに、ぬつと人影が現れた。同僚のイーリス・コーリング曹長だ。

「なにやってんだ、お前は……」

イーリスがチョップを落とすと、ナターシヤは涙目になった。

「いたらい。ちよつと何するのよ、イーリ」

「そりや、こつちのセリフだ。大統領の御令嬢が、人前で女を拉致ってんじやねーよ」

「だって、部隊にガサツなマッチョ女しかいなから、潤いが欲しいの

よ」

「おう？ ガサツなマッチョ女ってあたしのことか？ あたしには潤いがないってか？」

「ええ、そう言っているのよ」

そう言つて、睨み合うイーリスとナターシャ。

いつしか見た光景が蘇ったみたいで、懐かしくなったアリスから笑みが零れた。それに釣られるようにナターシャとイーリスも笑い出す。そして、一頻り笑い合うと、イーリスはアリスを見た。

「さて、あたしはいくわ。元気だな」

「はい。時間ができたら、またシユワルツネツガーの映画でも見ましよう」

まだアリスが部隊にいた頃、休日イーリスの家で、シユワルツネツガーの映画を見て過ごすのが通例だった。別にマッチョな男性が好きというわけじゃなく、宇宙の捕食者だろうが、未来の液体金属だろうが、終末のサタンだろうが、たっぷりの火薬と銃弾で解決してしまうシユワルツネツガー映画の様式美が、彼女たちのお気に入りだった。

「おう、楽しみにしとく。5・1チャンネルのサラウンドスピーカーを買ってな」

「はい、では」

イーリスが『よし行くぞ』とナターシャの肩を叩く。最後にナターシャが告げた。

「元気なあなたに会えてよかったわ。ちゃんと立ち直れたのね」

「ここにいる仲間のおかげです」

「そう。良い友達ができたようで、お姉さんは安心したわ」

そういつてナターシャは、今までのやり取りを静かに見守っていた千冬に視線を移した。

気づいた千冬が顔を上げ、車内の様子を視線で示す。

「まったく、余計な事をしてくれたな。おかげで帰路が騒々しくなる」

「これは失礼しました、ミス・ヴァルキリー。ちよっとしたお礼のつもりだったのですが」

「それで、この後どうするんだ？」

ここからは米軍の管轄。千冬の関知するところではないが、ナターシャの動向に千冬は僅かな関心を示した。〈福音〉の暴走は意図して行われたものに間違いない。今回の一件に関与した者である千冬してみれば、ナターシャの動向が気になるのも無理からぬことだった。

「もしかして、〈福音〉を暴走させた者を追うつもりか？」

ナターシャは強く頷いた。

「ええ。あの子を狂わせ、母を貶めようとした連中を私は許しません」
明確な敵意を以て、ナターシャが水平線に視線を馳せる。

千冬には『たとえ相手がこの世界の支配者でも』と決意を表しているようにみえた。

「では、私はこれで」

「ああ。気をつけてな」

ナターシャは一礼して踵を返し、イーリスと共に千冬の前から去っていく。

ふたりを見送ってから、アリスが千冬に言った。

「あの、織斑先生、化粧水か何かありませんか？　これを落したくて」

そう言つて、ナターシャがつけた真つ赤なキスマークを指差す。

「ラウラに見つかったら、折檻されてしまいます」

そういうと、千冬は笑いながら自前のバックからメイク落としの化粧水を取り出した。

「聞こえる、ルイス？」

「ええ、聞こえるわ、ロリーナ」

「＜銀の福音＞のAIユニットから〈彼女たち〉に繋がりそうな暗号化プロトコルコードを手に入れたわ。＜福音＞が《第二形態移行》したから、システムがオーバーライドされていたけれど、なんとかこれだけはサルベージできたわ」

「彼女に頑張ってもらった甲斐があつたというものね。暗号の解読にはどれくらいかかりそう？」

「暗号化には桁数の大きい素因数分解によるRAS暗号方式が使われているわ。普及している暗号方式だけど、信頼性は高い。アルゴリズムの解析には世界最高性能のスーパーコンピューターを使用しても数世紀を要するわね」

「でも、解読できれば〈彼女たち〉の支配ネットワークに侵入できるはず。〈彼女たち〉の支配に終止符を打つための、大きな足掛かりになるわ」

「ええ。でも、〈彼女たち〉から解放された時代を担うのは私たちじゃない」

「そうね、次世代の担うのは私たちじゃない。私たちの子どもたち。そのためにも、私も娘と向き合えないといけないわね。例え憎まれているとしても」

〈ヘスタート・サマーバケーション〉

第51話 8月7日

光の薄い部屋。置かれた円卓を囲む7つ不明瞭な存在がロキを見ていた。

彼らを映し出しているホログラムシステムの解像度が低いため、どれもが曖昧模糊としている。それは高度な暗号化による影響であったが、あたかも亡霊のような姿形は彼らの存在を、ある意味で明確に表現しているようであった。

フアントムタスク。その幹部たちがオンライン会議で一同に介し、ロキを糾弾していた。

五月、ロキが独断で行った学園の襲撃。これに対する質疑応答である。

あの襲撃以来、〈国際IS委員会〉では査察監査の強化が議論されている。もし〈国際IS委員会〉がIS開発の規制を強めれば、政府と兵器開発の間に介在し、世界のパワーバランスを図ってきた組織に影響を及ぼしかねない。また、〈国際IS委員会〉はアメリカ主導の傾向が強い。アメリカがIS最多保有国であるため、その意向を無視できないのだ。彼の蛮行はアメリカを凶に乗らせる口実を与えたようなものだった。

その原因を作った彼への質疑が終わり、一人の男性が発言した。

「弁明はあるか」

厳かな口調でそういった人物は、不明瞭な映像でもわかるはずしりとした体格の男だ。伴う強権的な威圧は軍人のそれである。対象的に、彼の後ろにひかえる女性は長髪のしなやか美女だ。男の愛人とも囃されるソフィア・アルジャンニコフだ。

まるでアンバランスな二人組に、ロキは思わず笑いそうになったが、

「いや、ないよ。アレクサンドロス・アルツェバルスキー大佐殿。俺は幹部会の了承もなく、独自の判断でIS学園に試作機を投入した。異

論も弁解もない」

彼は平然とそう言った。これに気分を害したのは、大佐の隣に座っていた長身痩躯の男だ。

アジア系の黄色肌。細い目に鼻筋の通った美形だ。その美顔が今は怒りに染まっていた。

「報告によれば、ボクのお気に入りの凰鈴音も害を被ったそうじゃないか。それに対しての釈明さえないと、如何なモノかな？」

「春狼、今は彼の学園襲撃に対する詰問する場よん。私情は慎んでもらえるかしらん」

金髪の妖艶な美女、スコール・ミューゼルが春狼と呼んだ中国人幹部を諫める。

春狼は不服そうに浮いていた腰を下ろした。だが怒りが収まらないのか、彼はスコールの隣に腰かけている初老の女性に怨念をぶつけるような視線を送る。

「ボクは彼の他に、彼を幹部に推奨した彼女にも責任があると思うね」「それは……」

春狼に睨まれ、赤毛の老女が萎縮したように言いよどむ。老けていた顔がさらに老け込んだように感じられた。

そんな彼女に代わって発言したのは、ロキの後ろに控えていたローズマリーだ。

「しかし、彼を幹部に承認したのは我々ではありませんか」「春狼の言い分だと、わたしら全員に責任があるサね」

ローズマリーの言葉に便乗した女性が、手元に持っていた煙管を遊ばせる。纏う装飾も奇抜で、着崩した着物を身に纏っていた。けれど、垢抜けた容姿は日本人のものではなく、ラテン系を彷彿とさせる井出立ちだ。

彼女に発言に春狼が言葉を嚙む。ただ苛立ちが晴らせず、小さく舌を打った。そんな彼を控えていたシンメトリーのような白と黒の双子が慰める。

「左様、我々は同意して、おまえを同胞に迎え入れた」「彼の技術力には目に見張るものがあつたからさね」

「うむ、おまえの齎す知識はまさに叡智だ。だから優遇した。素行の悪さにも目を閉じてきた。だが、おまえは、ついに蛮行に走り、米国に我々を滅ぼす口実を与えた。これはまことに遺憾だ。ここで振る舞いを改めないのであれば、我々はおまえの処遇を考え直さねばならない」

ロシア人の凄みが増す。けれど、ロキは恐怖をおくびにも出さずに言った。

「好きにするといい。だが改めるつもりはない。俺はこれからも俺のやり方でやらせてもらう」

もしこの組織に創立当初の理念が残っていたのであれば、彼も忠義立てをした。

だが、この組織は既に腐敗化しつつある。パワーバランスの調律とは名ばかりで、実質この冷戦を維持することで得られる利益が目的だ。そこに捧げる義は既がない。

「狂犬的な物言いだな」

「俺が忠犬じゃないことは確かだ」

「我々はお前のやり方を看過できんと言ったはずだが」

「首に縄を付けられるのはごめんだ。俺はあなたたちの子飼いになる気はない。それでも繋いでおきたいなら——」

ロキが手を挙げる。傍らのローズマリーが僅かに臨戦態勢に移った。

言いなりにはならない。それでも繋いでおきたいなら——「飼い犬に手を噛まれる」ことも覚悟していただきたい。つまりはそういうことだ。

「その反骨精神がおまえの身を滅ぼすぞ」

大佐の眼光がいつそう強くなった。隣にいた美女——ソフィア・アルジャンニコフも静かに殺気立つ。さらに春狼の側に控えていた双子も攻撃体制を見せた。世界でも屈指の実力を持つ〈亡国機業〉の戦闘員がにらみ合う。回線越しの対峙だというのに、空気が切迫した。

「心得ておけ」

厳かに告げられたその一言を期に、彼への質疑応答は急速に終わり

を告げた。



8月7日。燦々と照る太陽の日差しは、既に夏のものだった。平均気温も30度を平然と超え、IS学園でも暑い日が続いている。だが、その熱さにヒイヒイ喘ぐ生徒は少ない。8月1日にIS学園の一学期が終了したため、多くの生徒が帰省しているのだ。

私の友人もその多くが帰省している。代表候補生である鈴やセシリア、デユノアさんは一学期の成果を報告するため各々の帰国しており、ラウラも一度部隊の様子を見に三日ほど前からIS学園を発つていた。

というわけで、学園には、一夏、箒、あと簪が残っている。

そして、同じく学園に残った私は箒の訓練を行っていた。

「箒、中心のバルーンを基点に、円状飛翔制御のまま、周回軌道を維持してください」

私の指示で箒が、中央に浮遊するバルーンの周囲を周回する。

円状飛翔制御は、定めた中心点と向き合いながら、その周囲を周回する戦闘機動だ。これにより常に敵を眼前に捉えることができ、相手に背後を取られ難くなる。ISの機動術に置いては必須のスキルだ。

『わ、わかった……』

だが、箒はこの戦闘機動に苦戦しているようだった。周回時に発生する遠心力を相殺しながら、正確な円軌道を描くのが難しいのだろう。だが、この戦闘機動は基礎に属する。これを習得できなければ、先の球状飛翔制御に進めない。

「前傾姿勢になりつつ、爪先に力を集中してください。爪を空中に突き立てる感じですよ」

『こ、こうか？ う、うむ、なんとなく感覚がつかめてきたぞ！』

さすが箒。呑み込みが早い。まだ拙い機体制御であるが、機動を自分のモノにしつつある。

これだったらこのまま球状制御飛翔も——と思った矢先、箒が唐突に円軌道から外れた。

そして、遠心力に押し込まれ、アリーナの壁にぶつかった。

(あはは、さては気を抜きましたね)

私は<赤騎士>を反重力装置リバルサーリフトで浮かせ、箒のところへ向かった。

「箒、慣れてきたからといって、気を抜いてはダメですよ?」

「ああ、すまない。悪いクセが出たようだ。次から気をつける。では、続きをしよう」

<紅椿>を起こし、再び円状制御飛翔のモーションに入ろうとする箒を私は制した。

「いえ、このへんで一度休憩しましょう。もう三時間も休憩なしですし」

「そうか? 私なら大丈夫だが?」

「こういうのは適度な休憩が必要なのです。詰め込んでも直ぐに上達はしませんよ」

「うむ、お師匠さまがそういうなら、そうしよう」

「だから、その呼び方はやめてくださいって」

そうやって笑い合いながら、互いの専用機を解除し、アリーナの休憩所に向かう。

休憩所につくと、自販機で飲料水を二つ購入した。その一本を箒に渡す。

「ところで、《絢爛舞踏》はどうです?」

《絢爛舞踏》。I Sのエネルギーを自動回復させる<紅椿>のワンオフ・アビリティ《単一仕様能力》だ。

その実態はI Sの動力機関<対消滅反応炉>と真逆の反応を発生させる<対生成反応炉>と呼ばれるものらしい。これにより<紅椿>はI Sの動力源である反物質を自前で生成できる。

「概ね良好だ。なんとか自分の意思で発動できるようになった」

「そうですか、それはよかったです」

<紅椿>のリアクターは学園に常備されている予備のリアクターと互換性がない。そのため、《絢爛舞踏》を自在にコントロールできな

いと、〈紅椿〉はエネルギーを再充填できないのだ。

「だが、エネルギーが自動充填できても、予備のパーツがな……」

第四世代である〈紅椿〉には、《展開装甲》という特殊な機構が装備されている。これは未だこの世界に存在しないオーバーテクノロジーで、製造どころか、開発すらされていない。つまり《展開装甲》が故障した場合、修理も交換もできないということだ。

「束博士と連絡は？」

「音信不通だ。いつだってそうだ。あの人は後先の事を考えないから困る」

深い溜息をつきながら、箒は〈紅椿〉の待機形態である金と銀の鈴を見た。

その表情はどこか嬉しそうで、にこやかだ。

「やっぱり姉からのプレゼントは嬉しいものですか？」

何気なく訊くと、箒は慌てたように視線を外した。

「そ、それは……まあな。……〈紅椿〉を作ってくれたことは感謝しているが」

照れくさそうに笑む箒に、私は僅かに悟った。

箒は姉である束博士を嫌っているようだけど、決して憎んではないのだろう。たぶん、ほんのちよつと気持ちが悪く感じているのだ。互いが素直になれば、きつといつでもやり直せる。

(うらやましいな)

と、思う。彼女の何がうらやましいのかは判らないけど、なぜかそう思った。

すると、通路と休憩所を繋ぐドアが開いた。

入ってきたのは一夏だ。その隣には見知った顔の少女——日本代表の輝夜月子がいる。

「おつす、箒もここに来てたのか？」

「ああ、アリスの指導を受けていたところだ。——それと隣の女性は確か日本の？」

箒が月子に視線をやる。月子は深々と頭を下げた。

「初めまして。篠ノ之箒さま、わたくしは妻の月子です」

「こら、ウソをつくな」

私たちが『妻っ!』と驚くよりも早く、一夏が月子に手刀を落とした。

手刀を食らった月子が、『きやふっ』と可愛い悲鳴を上げ、その場に蹲る。

「今のはコイツのボケだ。笑ってやってくれ」

そう言うと、月子が恨めしそうに一夏を見た。

「……ボケちやうのに……」

「じゃあ、なんだっていうんだよ?」

「篠ノ之さまへの宣戦布告です!」

ああ、月子は一夏が好きですからね。

箒もその事を理解したらしく、いつも以上に口元を“へ”の時にして勇んだ。

「受けて立つ」

「負けません」

大和撫子の二人が、一人の男子を巡って睨み合う。しかし、この嬉し恥かしの展開に、一夏はよく解らないという顔をしていた。ほんと熱中症でしねばいいのに。

「で、月子がどうして学園に?」

「夏休みでコーチがみんな帰っているだろ? だから、月子に頼んで来てもらったんだ」

「へえ、よく応じてくれましたね」

国家代表といえれば候補生より多忙だと聞く。きっと月子も忙しかつたに違いない。

その合間を縫って召喚に応じてくれるとは、月子も人が良いですね。

「まあ、昔から月子は俺の子分みたいなもんだっただしな。はは」「子分!」

日本国家代表を手下扱いする一夏の背後で、月子が「がくん」とシヨックを受ける。

逆に箒が『私は幼馴染だがな』と勝ち誇った顔をしていたけど、見

なかったことにした。

「よし、じゃあ、そろそろ模擬戦始めようぜ」

「はい、親分……」

すっかり意気消沈した月子が持つてきた<打鉄>のコンソールを開いて準備する。

そこで私はある提案をした。

「よければ、私たちと2対2で模擬戦しませんか？」

「おお、いいな。月子もそれでいいか？」

「はい、かまいません」

「決まりですね」

こうして私たちは二対二——一夏・月子ペアと私・箒ペアのタッグ戦を開始した。

その後のタッグマッチで、私は国家代表の実力を改めさせられた。私たちの中で唯一の二世代型だったにも関わらず、彼女は終始戦いを有利に進めていた。被弾率も私に次ぐ少なさだ。

一夏、もう月子を子分とかいうのをやめなさい。どうみてもあなたの方が下っ端です。



午後。月子との模擬戦を終え、一緒に食事をしたあと、私は整備科にやってきていた。

整備区画は地獄のような暑さだった。一応、空調は効いているものの、ほとんど「焼け石に水」状態だ。箒もまたその熱さにへばっていた。

「調子はどうですか……」

「……悪い」

いつも以上に簡素に答え、箒は再びうなだれた。

まあ、この暑さじゃ仕方ありませんよね。かくいう私もシャツのボタンを三つまで開けていますから。

「この暑さですもんね……」

堪らず、スカートをバサバサと大胆に仰ぎ、中に風を送り込む。

パンチラどころかモロパンの私に、簪はなぜか頬を赤めた。

「……アリス、はしたない」

「仕方ないじゃないですか。スカートの中が蒸れるんですよ」

「……でも、いちごのパンツが、丸見え」

「大丈夫ですよ。ここには女の子しかいませんから」

もちろん一夏の前では絶対にしない。こういう行動はあくまで女

子の前だけだ。

「それで今日は何をするんですか？」

「……荷電粒子砲の調整が終わったから、マルチロックオンシステムを製作する」

マルチロックオンシステム。＜打鉄式式＞にはサイドアームズとして、48連装の高性能マイクロミサイルを装備する予定になっている。それらのミサイル群を誘導管制するシステムが、簪というマルチロックオンシステムだ。

そこで私は素朴な疑問を投げかけた。

「つかぬことを訊きますが、通常のロックオンシステムではダメなのですか？」

「……通常のロックオンシステムでも運用は可能。……でも、通常のロックオンシステムは目標を識別して、その情報をミサイル側に渡すことしかない」

「それじゃダメなのですか？」

通常、ミサイルにはホーミングシーカーと呼ばれる自動追尾装置が備わっている。

撃ったあととは、その追尾装置が敵に命中するまでミサイルを誘導してくれるため、発射後、操縦者が管制誘導する必要はない。
ファイヤー・アンド・フォーゲット

撃ちっ放し機能っていうやつだ。
「……＜打鉄式式＞のミサイルは小型だから、搭載できるシーカーが小さくて、命中率が低い」

「まあ、ミサイルの命中率は、乗せているコンピューターの能力に左右

されますからね」

かといって命中率を上げるために高性能なコンピュターを積み、ミサイルが大型化してしまう上、一発当たりのコストも高くなる（高性能コンピュターを使い捨てるわけだから）。

そこでようやく簪が目指すマルチロックオン・システムの全貌が見えてきた。

「ミサイルには最低限の誘導装置だけを積み、管制に必要な計算は＜打鉄式式＞のコンピュターで行う。そうすることで、ミサイルを小型化し、かつ命中精度を上げようというのね？」

そう語ったのは私ではなく、別の声。ロリーナだ。

「あ、ロリーナ、来ていたのですか」

「ええ。しかし、ここは熱いわね。とけちゃいそうだわ」

ロリーナは手でパタパタと自分を扇ぐ。それでも汗が止まらず、数滴の汗が頬を伝って、豊満な谷間に落ちて消えていった。何でしょ、すごくやらしく感じるのは私だけでしょうか？

そんな私を傍目に、簪があたふたと腰を折った。

「……はは、はじめまして！ ……わ、わたしは、さ、さらしき、かか簪、で、で、す」

すごくテンパってますね。さすが人見知り。まあ、簪たち技術者にとって篠ノ之束博士やロリーナは雲の上の人らしいですからね。緊張してしまうのは無理もないでしょう。

「ロリーナよ。よろしくね、簪さん。話はアリスから聞いているわ」

「で、話を戻しますけど、つまり誘導計算をミサイル自体に処理させるんじゃないかって、＜打鉄式式＞にさせようというのですね？」

「……うん」

「残念だけど、それだと操縦者が処理しなければならない情報が膨大になるわ。おそらく、負荷であなたが情報に振り回されるでしょう。複雑な制御を簡単に操作できるようにする。それがシステム化のメリットよ。あなたのマルチロックオンシステムは、あまり実用的とはいえないわ」

「でも、ロリーナなら何とかできるんでしょう？」

「ふふ、えらく私を買ってくれているのね」

「だって、私を知る中で一番の科学者ですから」

ISの世界では篠ノ之束博士の影に隠れがちで、永遠の二番なんて言われているロリーナだけど、私はロリーナが一番の科学者だと思っている。だって、彼女が作ったく赤騎士は世界最高の相棒だから。

「——で、あるのですよ?」

「ええ、手はあるわ。——アリス、貴女はどうやって8基のソードビットを制御している?」

《私がしている》

と言ったのは、く赤騎士の人工知能へレッドクイーン。

そう、私の場合、ビット制御のほとんどはAIのへレッドクイーンが行っている。だから、8基のビットを操りながら格闘が行えるのだ。そこでロリーナの言葉の意味を理解する。

「ミサイル管制誘導の情報処理をAIに代行させるわけですね?」

「そういうことよ。——そして、ここには私がいるわ」

様々な分野に秀でたロリーナであるが、得意分野は人工知能とロボット工学だ。

そんなロリーナがいてくれれば、百人力どころか、千人力だ。

「では、貴女にAI開発のノウハウを伝授する——前に場所を移しましょう。ここは熱すぎるわ」

ロリーナは説明中もずっと汗をかきっぱなしだった。その所為か薄手のブラウスが半ば透けていて、下着が浮き出ている。しかも紫とか。なんだか、いちごの柄物ショーツをはいている自分が子供っぽく思えてきますね。

「で、どこに移動します?」

「とにかく涼しいところがいいわ」

「……じゃあ、コンピューター室がいいと思う」

コンピューター室はISのソフトウェア開発などに使われる実習室だ。

何台ものコンピューターが設置されているため、強めの冷房が効いている。

「そうしましょう、そうしましょう」

私とロリーナは二つ返事で答え、整備区画をあとにした。



「――従来、人工知能へのアプローチ方法には、過去の膨大な情報を統計分析して規則性や判断材料を抽出したり、過去の事例や因果関係を解析して未来を推論することで学習する機械学習が代表的ね」

場所は移ってコンピュータ室。そこでロリーナがAI理論の講義を始めたのだが、私は開始十分で強烈な睡魔に襲われていた。だって、出てくる用語は難解ですし、説明は意味不明ですし……。

でも、簪はロリーナの説明が理解できているらしく、挙手していた。「……ヘレッドクイーンも機械学習を行うことで、知性を獲得しているのですか？」

「ええ。でも、機械学習は、彼女の知性を司る中で補助的なものに過ぎないの。彼女の知性の源泉はニューラルネットワークが齎す複雑な計算知能と並列分散処理能力よ。コネクショリズムと言い換えてもいいわ。彼女のプロセッサは人間の脳神経回路網と同じ複雑性を持たため、非常に膨大なパターンを認識・解析ができるの」

「……ヘレッドクイーンが高水準な言語能力を有しているのはそのため？」

「その通りよ。複雑なパターンを解析できるから、自然言語を処理することができるの。言語形態解析、構文解析、語義曖昧性の理解。それを可能としているため、ヘレッドクイーンは東京大学の入試を満点で突破したわ。それだけじゃない。彼女は自らコードを綴ることができるの」

「……つまりヘレッドクイーンは自分自身をプログラミングしているってことですか？」

「それだけじゃないわ。シナプスの結合を強めることで、学習を行い、問題を解決する能力があるの。さらに彼女の思考モジュールに組み

込まれた遺伝アルゴリズムは、人間のようアイデアを生み出すことも可能よ」

という具合に、さつきからロリーナと簪が問答を交わしている。無知な私は完全に取り残された形だ。なので、備え付けられたパソコンのアプリを起動し、適当に時間を潰そうとしていると、

「こくら、ちゃんと話を聞きなさい」

ロリーナに怒られた。

「だって、全然話についていけないんですもん」

機械学習？ コネクショリズム？ 遺伝的アルゴリズム？ なんですかそれ？

そもそもAI開発は簪の仕事だし、私が学ぶ必要はないと思うのだから。

「言っておくけど、まだイントロダクションよ？ この程度で躓いていては落第だからね？」

「いいですよーだ。どうせ私は劣等生ですから。——あ！ ロリーナのせいで、地雷を踏んじやったじゃないですか！ あと1個でクリアだったのに！」

口先を尖らせると、怒ったロリーナが油性マジックを投げてきた。

それが私の額をスコーンと打ち抜く。某スナイパー並みの見事なヘッドショットだ。

「アリス、本気で怒るわよ」

「心の底からごめんなさい」

久々にロリーナの怒り顔を見て、私は姿勢を正した。

「じゃあ、講義を続けるわね。それでマルチロックオンシステムに搭載するAIのタイプだけど、ヘレドクイーンのような高度な思考計算や自然言語処理能力は必要ないわ。あくまで操縦者を補助する膨大な情報処理システム、知能エージェントであればいい。——ところで、簪さんはLISPを扱えるかしら？」

「……はい、それなりに」

「なら話は早いわ。——次は開発環境ね。確か私のラボに多量情報処理用のフレームワークあったと思うから、それをベースに開発しま

しよう。あとIS開発に使えそうなソースやリファレンスも用意しておくわ」

言うところ、ロリーナは持ってきた資料をトントンとまとめた。

「じゃあ、今日はこれまでにしましょうか。——それと貴女にはこれを渡しておくわ」

そう言っただけしたのは名刺のようなものだ。

表にはNBSの文字。裏にはURLと、何かのバーコードがある。
「No Border Scientist
「国境なき科学者たち」？」

「私が運営管理するシンクタンクよ。貴方に渡したカードは、そのSNSサイトにアクセスできるURLとログインパスワード。サイト内では、私が招待した科学者や技術者たちが、国家や思想に囚われず、意見交換をしているわ。貴女の専用機開発に役立ててちょうだい」
「い、いいんですか？ わ、わたしなんか、その、そんなメンバーに入って……？」

「あなたの知識、技術は大したものよ。科学の未来を担える素質があるわ。だから自信を持って」

「……は、はい！ ……ありがとうございます！」

簪は嬉しそうに、貰った名刺サイズのナンバーカードを大事に抱えた。

雲上人のロリーナに認めてもらえるのは、すごく名誉なことなのだろう。

「それと劣等生には補修があるから残って頂戴ね」

「ですって、簪」

「……それはアリスのことだと思う」

「やっぱり？」

というわけで、私は一人、コンピューター室に残ることになった。

「で、補習とは？」

簪が教室から退室したところで、私は改めて訊いた。

きつとロリーナは私に補習を受けさせたいわけではない。別件があつて私を残したのだ。

「新しい任務があるの。——はい、これ」

やっぱりかと思いつつ、渡されたクリップボードを受け取る。

そこには若い女性の写真とプロフィールが挟まれていた。セレブ然とした美しい女性で、年は二十代半ば。年相応の色気を醸し出す、その美女を私は知っていた。

スコール・ミューゼル。オーストラリア出身の元イギリス代表で、第一回〈モンドグロツソ〉で射撃部門〈ヴァルキリー〉に輝いた操縦者だ。別名〈砂漠の逃げ水〉ミラージュ・デ・デザート。

「彼女をどうしろと?」

「彼女は学園襲撃事件に加担している疑いが強い。そこで私たちは彼女の身柄を確保することにしたわ」

「つまり、その作戦に私も参加しろというわけですね」

「相手は第一回〈モンドグロツソ〉の射撃部門〈ヴァルキリー〉。もし専用機を有していた場合、身柄確保が困難になるわ。そうなった時、〈ヴァルキリー〉に対抗できる貴女が必要になる」

「わかりました。それで私はどうすれば?」

「今から一週間後、スコールはイタリアで行われる経済界のパーティーに参加するわ。貴女にもそのパーティーに参加してもらって、スコール・ミューゼルの身柄を確保してもらおう」

ふむ、夏休みに地中海ですか。悪くありませんね。任務ですけど。

「言っておくけど、遊びじゃないからね? バカンス気分でいられると困るわ」

「わかっていまずとも。——それで、具体的な段取りは?」

「確保後、近海で〈ウォルラス〉が待機しているから、そこへスコールの身柄を移してくれば任務完了よ。あとは作戦部が情報部へ身柄を移すわ」

「了解しました」

「気を付けてね。相手は〈ヴァルキリー〉クラス。戦闘になれば手強いわ」

「……ええ、十分にわかっています」

〈ヴァルキリー〉の実力は身を以て理解している。

私は先日ヴァルキリークラスの实力者——ローズマリーに叩きの

めされたばかりだ。

「それと貴女のお姉さん、ローズマリーのことだけど」

不安が表情に出ていたのだろうか。ロリーナが私を気遣うように見た。

ロリーナはローズマリーと私の関係を知っている。当然、私の心中に渦巻く複雑な心境も。

「大丈夫です」

なんとなくロリーナの顔が見られなくて、私は視線を外しながら答えた。

そんな自分を内心で嗤う。何が大丈夫だ、視線も合わせられないで。

「無理しなくてもいいのよ。肉親なのだから」

ロリーナが私を気遣うように微笑む。それが嬉しくて、私は素直に答えた。

「大丈夫です。血の繋がりはなくても、私には素敵な姉がいますから」
今度はちゃんとロリーナの目を見て言った。

私には心から姉と慕える女性がいる。今はそれだけで十分だ。

「ありがとう。じゃあ、貴女の姉として、私も全力でバックアップをするわ」

「それはとても心強いです」

私はロリーナの気遣いに、心の負担がすこし軽くなる。

だが、心の底で疼く、ローズマリーというノイズまでは消せなかった。

第52話 8月8日

8月8日、正午。

箒の訓練が終わったあと、私は与えられた任務の準備のため、荷造りをしていた。

「どうしましょうか……」

焼けたハマグリみたいに、ぽっかりと開いたパンパンの鞆を前に腕を組む。

旅行先での着替えやパスポート等の書類、資料諸々。14日間の滞在になる予定なので、あれやこれや詰め込んだら、あつという間に鞆に収まりきらなくなっていた。

「思い切って新しいものを買いませんか。そこまで高いものでもないし」

そうと決まれば、明日にも買いに行くでしょう。場所はレゾナンスでいいか。あそこはなんでもそろっているし。——と決めたとき、勢いよく部屋の扉が開いた。入ってきたのは、ラウラだ。

「嫁、いま帰ったぞー!」

ラウラは部屋に入るなり、腰に手を当ててふんぞり返った。

さながら一仕事終え、我が家に帰ってきた亭主のような振る舞いだ。

「ちよつとラウラ、ダメだよ。ノックぐらいしないと」

と、ラウラに続いて入ってきたのは、両手に小奇麗な紙袋を抱えたデユノアさん。

デユノアさんがラウラを窘めるけど、ラウラは意に介さず、頷いた。

「問題ない。嫁の部屋は、私の部屋も同然だからな」

「そうなの!?!」

それはラウラの勝手な思い込みではなく、公然とした事実だったりする。なにせ、私の部屋に置かれている備品の3割ぐらいはラウラの私物だから。

こうなつた経緯は、単純にラウラが訪問のたび、私物を部屋に置いていくからだ。別に迷惑でもないのので何も言わないけど、同室の箒は

ラウラの私物が増えるたび、眉を顰めている。

それはさておき、

「おかえりなさい、ラウラ、デュノアさん」

「うむ、ただいまだ」

「ただいま」

「ちよつと散らかっていますけど、自由に付けてください」

やってきた二人を部屋に招き入れつつ、散らかった衣服を部屋の隅に追いやる。

それから、もてなしの茶を淹れるべくキッチンに向かった。

「早い帰りでしたね。帰ってくるのは、8月の後半だと聞いていましたけど」

「予定より早く業務が終わったのでな。定日の便より早い便で帰ってきたのだ。嬉しいか？」

「はい、とても。ラウラがいなくて寂しかったですよ。——で、デュノアさんも？」

「うん、僕も似たような感じかな。それとアリスにお土産を買ってきたよ」

淹れたお茶を二人のところに持っていくと、デュノアさんが小奇麗な箱を取り出した。

「お母さんの墓参りのあとに、シャンゼリーゼ通りに寄ってね。そこでアリスに似合いそうな服があったから、お土産に買ってきたんだ。

——開けてみて」

「はい」

私は箱の包装を解いた。中に入っていたのは、淡い桃色のワンピース。綺麗な薔薇の刺繍が施されており、生地の肌触りは非常に滑らかだ。触った感じだけでも、高級な素材だと判る。

「いいのですか。こんな高そうなもの」

凱旋門が有名なパリ・シャンゼリーゼ通りには、セレブたちが御用達にする高級店が軒を連ねている。そこで購入したのなら、さぞかし高かったに違いない。それだけに貰う事が躊躇われた。

「うん。アリスに着てほしく買ったんだから、ぜひ貰って」

そこまで言われては貰うしかない。私は貰ったワンピースを身体に宛がい、クルつと回った。

普段は銃器やナイフをファッションにする私だが、それでも女だ。可愛い服には心が躍る。

「どうですか?」

「うん、とてもよく似合ってるよ♡」

「ありがとうございます」

熱っぽい瞳で見つめられ、私はなんとなく照れくさくなった。

デユノアさんって中性的なところがあるせいか、見つめられるとドキドキするんですね。

「ごほん、嫁、これは私からの土産だ」

ラウラが紙袋を前に出す。中から取り出したのは短機関銃だった。

「これはH&KのMP7?」

「ああ。以前、IS非装備時に携帯する小型火器が欲しいと言っていただろ?」

〈赤騎士〉は自動人形を使って自立行動できるので、時に二手に分かれて行動する場合がある。

その単独行動時に携帯する火器——自衛用火器^Pが欲しいな、と以前ラウラに話したことがあった。そのことを覚えていてくれたらしい。

「MP7は、そのコンパクトさから携帯性と秘匿性に長けている。重量はおよそ1.2kg、マガジンを挿入しても1.8kg。同じPDWであるFN P90より軽いぞ。火力も問題ない。ケブラー性の装備も打ち抜ける威力がある。個人携帯用火器としては申し分ないだろう。——どうだ?」

私はそれを手に取って感触を確かめた。まずマガジンを抜き、装弾されていないことを確認する。それから薬室に初弾が込められていないことをチェックし、引き金を引いた。

カチンと軽い音が鳴って撃鉄が下りる。うん、いい音だ。

「装弾数は?」

「30連装だ。一応、40連装のマガジンも用意してあるぞ」

ラウラは紙袋から40連装マガジンと専用の弾薬となる4.6x

30mm弾のケースを取り出した。

さらにはダットサイト、サップレッサー、レーザーサイト、専用ホルスターまで取り出す。

「これ、全部もらったいいのですか？」

「もちろんだ、嫁のために用意したのだからな」

私は『ありがとうございます』と礼をいい、アクセサリーを手にとった。そして新しい玩具を買ってもらった子供のように、各部をいじりまわす。最新の銃を手にするとワクワクしますね。

（むっ……なんか、僕のワンピースを貰った時より嬉しそうな気がする……）

デユノアさんがなぜかむくれ面になっていたが、私は構わずいじり続けた。

今すぐ試射したいなあ。確かIS学園には射撃場があったはず。あとで行ってみよう。

「ところで、何かの支度をしていたの？ いろいろと散らかっているけど」

デユノアさんが部屋の隅の旅行バックに目を遣った。

「ええ、ちよつと5日後にイタリアへ行く予定がありましたね」

MP7にサップレッサーを装着しながら答える。二人は『えっ!?!』と驚きの声を出した。

「聞いていないぞ!?!」「聞いてないよ!」

「言ってますからね。先日決まったんですよ……」

「で、どれくらい行くの?」

「2週間ぐらいです」

聞くなり二人は『2週間も!?!』と揃って愕然とした。

なんででしょうか。その、世界の終りを聞いたような表情は……。

「せつかく、夏休みをアリスと一緒に過ごそうと思つて早く帰つてきたのに……」

「まったくだ。これではほとんど嫁と一緒にいられないではないか……」

二人揃つて、がくりと肩を落す。そ、そんなにショックなことなの

でしょうか……。

「僕も一緒に行っちゃダメ？」

まるで訴えるような上目使いには、表現しがたい破壊力と魅力があった。

男ならトキめいて、二度返事で了承していただろう。でも私は女な訳なので、

「すみません。観光ではないので」

もしこれが観光なら喜んで二人を誘うのだけど、実際は組織の作戦に参加するためですから。

とはいえ、御預けをくらった子犬のような二人を見ると、申し訳ない気分になってくる。

「あ、あの、よければ、明日一緒にでかけませんか？」

あまりにしよんぼりされたので、居た堪れなくなった私は、そんなことを提案した。

丁度、旅用のキャリーバックを新調しようと思っていたところだったし。

「本当か!？」

私の提案に、俯いていたラウラが勢いよく顔を上げた。

デュノアさんもパーと笑顔を咲かせる。

「うんうん、いくー!」

「では、明日の10時、この部屋に集合ということだ」

こうして明日の予定が決まり、私はふと外に視線をやった。

(そういえば今日は鈴とセシリアが帰ってくる日でしたっけ)

帰宅時刻は聞いていないけれど、そろそろ帰ってくる頃だろう。

あとで様子を見に行くのもいいかもしれない。と思いつつ、私は二人の土産話に耳を傾けた。



「ホントに、この国は熱いたらありやしないわねッ!」

ISS学園の校内に足を踏み入れるなり、凰鈴音は晴天の大空に向けて咆哮した。燦々と輝く陽光の槍が日焼けした肌をヒリヒリとさせる。しかし、彼女の苛立ちの原因は別のところにあった。

「それに、なに、幼馴染が帰ってきたっていうのに出迎えもないなんて、どういうつもりよー！」

わざわざ帰国日付と時刻をメールしてやったというのに！

「滞在中も電話一本よこしてこなかったし、あたしってその程度の存在なのかしら……」

出迎えが高望みだとしても、電話の一本ぐらい寄こしてくれてもいいではないか。

これでは自分に興味が無いみたいでちょっと——いや、かなりショックだった。

「いやいや、ネガティブになるなあたし」

鈴は自分に言い聞かすように日焼けした頬を叩く。

悪い事を考えだすと、悪い方向にしか転がらない。何よりネガティブだなんて自分らしくないが、

「でも、気持ちが一番通行なのは確かよね……」

「一夏が好き」という気持ちは誰にも負けない自信があるけれど、
「彼にどう想われているか」を考えると、複雑なところだった。何より早まって「切り札^{やくそく}」を出した挙句、それを自分で全否定してしまったのが痛かった。

「でも、勝負はまだこれからよ」

鈴はポケットからくしゃくしゃになったチケットを取り出した。今月、開園されるテーマパークの無料チケットだ。本国を発つ時、中国代表のフーが一「織斑一夏と楽しんでこい」と持たせてくれたものだ。

これで、華々しく二人の関係を進展させてやるつもりだ。

もう『鈴は二組だからいない』だなんて、誰にもいわせないのだから。

「見てなさいよ、箒、セシリアー！」

意気込んでポストンバックを担ぎ直す。思いついたら吉日、目指す

は一夏の部屋だ。



IS学園の校門をひとりの少女がくぐった。白の貴婦人帽子。白のワンピース。上品で清楚な佇まい。イギリスでの仕事を終えて戻ってきたセシリア・オルコットだ。

「ああ、やっと一夏さんの許へと帰ってこられましたわ」

オルコット家の財産管理、代表候補生としての仕事、旧友との交友。それらを熟して7日ぶりに戻ってきたセシリアは、どこか切ない溜息をついた。

（はあ、やはり、好きな人とは一緒にいたいものですわね。今度、帰国するときは、ぜひ一緒に来てほしいものですわ）

帰国の際、セシリアは一夏を『イギリスに来ないか』と誘った。しかし、金銭面を理由に断わられてしまったのだ。あまり無理強いするのもよくないので、潔く引き下がったが、今度は是非ロンドンの古き町並みを共に歩きたいと思う。そして共に両親の墓参りをし、一夏の紹介をして――

（でも、できたなら元気な両親の前で、一夏さんを紹介したかったですわね……）

叶わぬ願いだと解っていても、そう思わずにはいられないのが人の心だった。

（ああ、お母様、お父様、なぜ私を置いて先に逝ってしまったのですか？）

セシリアの両親は、超境鉄道の事故で既に亡くなっている。

それを“不運”と言ってしまえばそれまでだが、それで自身を納得させられないのもまた人の心。

それに、両親の旅行にはいくつか腑に落ちない点があった。

（仲の悪かった両親が、なぜその日だけ一緒にいたのかしら……）

優秀な経営者だった母に、父は負い目を感じていた。母もそんな父

を毛嫌いしていた節があった。仮面夫婦だった二人が一緒に旅行なんて。——その疑問がセシリアの胸中で、ずつと渦巻いていた。が、セシリアは改まった。

「いけませんわ。これから一夏さんへ会うのに、こんな顔をしていては」

そう、これからデートに誘うつもりなのだ。難しい顔をしていては、雰囲気壊してしまう。

セシリアは陰険な考えを追い出すように金髪を振り乱し、ポケットからチケットを取り出した。

（ふふ、このテーマパークに一夏さんをお誘いし、一気に関係を進展させて——）

「お嬢様」

セシリアが頬を緩ませていると、背後から一人の女性がぬーと現れた。

暗殺者の如く現れた人物は、セシリアの専属メイドで幼馴染のチエルシー・ブランケットだ。

「ひゃい!？」

メイドの突然の登場にセシリアは、思わず尻もちをつきそうになった。

てつきり、セシリアの私物を部屋に運んでいる最中だと思っていたのだ。

「なぜ、あなたがここに!？」

「荷物の運び込みが終わりましたので」

「もう、終わりましたの？ あんなにあつたのに？」

「はい」

メイドはケロッと答えた。友人への手土産、新しい洋服、生活用品、インテリア、かなりの数あつたはずだが、それを数分もしないうちに運び終えたという。さすがオルコット家を仕切るハウスキーパー。仕事がスピーディーで無駄がない。

「ところで、お嬢様、滞在時に購入された水着の件なのですが」

「え？」

これまた唐突に切り出された話題に、セシリアは視線を泳がした。帰国前、一夏とのデートを企てていたセシリアは、それ用に新たな水着を秘密裏に購入していた。それも大部分が紐で構成された過激なヤツだ。臨海学校での反応がイマイチだったので、思い切つて露出が激しいものを選んだのだ。

チエルシーはそれをいつているのだろうか？　だとしたら、どこでそれを知ったのか。

その過激さゆえ反対を恐れて細心の注意を払ったつもりなのだが。

「な、なんのことかしら？」

「ネット通販で購入された、黒のマイクロビキニについてのことです」

白を切つてみたセシリアだったが、メイドの目は「知っているぞ」と光っていた。

このメイドに隠し事は通用しない。長年の付き合いから、それを知るセシリアは白状した。

「やっぱりダメかしら？」

「はい、年頃のお嬢様が着用するには、聊か露出が多すぎるかと思われ
ます」

「でも、一夏さんは鈍感ですし、これぐらい過激なモノでないと気を惹
けませんわ……」

人差し指と人差し指をツンツンとしながら、上目使いで訴える。

そんなセシリアに専属メイドはピシヤリと言い放った。

「そもそも露出で男性の気を引こうというのが、間違いなのでござい
ます。元来、男性を誠に惹きつけるのは女性の母性、すなわち生活力
や包容力でございます。特に日本人男性はその辺りを重視する傾向
にあるようです。お嬢様の場合は、まずその辺りに重点——特に料理
(ボソ)——を置いた方がよろしいかと」

「ぐっ……」

すごく諭された気になって怯むセシリア。

チエルシーは、年齢よりも落ち着いた振る舞いで頭を垂れた。

「今は亡き奥様より、娘に悪い虫がつかないように」と仰せつかつて
おります。くれぐれも軽率な行動はお控えくださいませ。どうもお

嬢様は俗世に流されやすいところがあるようなので」

自分の姉的存在であるメイドにそう云われては、反論の余地などなかった。

「わ、わかりましたわ」

「ご理解いただけただけで、うれしゅうございます」

もう一度礼をするチエルシーに、セシリアは敵わないなど内心でつぶやいた。

「それでお嬢様、これから織斑さまの許へ？」

「ええ」

何せ7日間も離れ離れだったのだ。会いたくて仕方がなかった。

「そう仰ると思い、既に用意しておきました」

そう言ったチエルシーの足元には、一夏の為に買った土産が置かれていた。

いやはや、大したメイドだとしか言いようがない。セシリアも主人としても鼻が高かった。

「では、参りましょう。私もお供します」

「え？ もしかして、チエルシーも来ますの？」

「はい、一度、織斑さまにもご挨拶せねばと、思っておりましたので。よろしいですね？」

「そ、それは構いませんけど」

なにせ、これから戦場（？）に出向くのだ。味方は多い方がいい。ただ、チエルシーには別の思惑があるように感じられた。

（きつと一夏さんを品定めするつもりですわね）

チエルシーは「織斑一夏」をセシリアの話とプロフィールでしか知らない。

この機会に「どのような男性なのか」自分の目で見定めようというのだろう。

（う、チエルシーの御眼鏡に合わなかったらどうしましょう……）

とにかく一夏は女性の好意に疎い。そのくせモテる。

見方によっては、女性関係がだらしく見えるかもしれない。それが不安だった。

(だ、大丈夫ですわ、一夏さんはチエルシーから見ても品性良好に映るはず)

何せこのセシリア・オルコットのハートを射抜いた男なのだから。そんな根拠のない自信を抱えながら、セシリアは一夏の部屋に向かつて歩き出した。

♡

◆

♠

「さて、これどうしようかな」

冷房の効いた自室で、俺は扇状に広げたチケットを眺めていた。

このチケットは、近々開園するウォーターワールドの入場無料券だ。《第二形態移行》した白式のデータ収集に来ていた倉持技研の人がくれたのだ。その使い道について、俺は悩んでいた。

このチケットは一枚で二人まで参加できるのだが、それが3枚しかないのだ。

(6人だといつもメンバーを全員誘えないんだよな……)

かといって誰かを仲間外れにするのも気が引ける。

さて、どうしようかと悩んでいたら、部屋にノックの音がした。

「あ、は〜い」

チケットをポケットにしまい、ドアを開ける。訪問者はセシリアだった。後ろには見知らぬメイドさん。もしかしてオルコットの使用人だろうか。まあ、それは後で訊くとして。

「お、セシリア、帰ってきてたのか」

「ええ、たった今こちらに到着いたしましたの。それでちよつと寄り道を」

「そうか。まあ、入れよ。そちらの方もどうぞ」

「では、お言葉に甘えて」

「お邪魔致します」

二人を部屋に招き入れ、俺は「適当にかけてください」と言つてキッチンに飲み物を取りに行く。二人は「お構いなく」と言ったが、そう

「うわけにもいかない。俺はコップに冷えた麦茶を注ぎ、二人の許に戻った。」

「外、熱かったろ」

「はい、とても」

コップに注いだ麦茶を二人に差出し、俺も適当なところに座る。

「——それでそちら女性は？」

「彼女はチエルシー・ブランケット。わたくしの専属メイドで幼馴染ですわ」

紹介を預かったチエルシーさんが、小さく頭を下げた。

「初めまして、織斑一夏さま。私はお嬢様の身の回りのお世話をしております、チエルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

「こちらこそ、チエルシーさん。話はセシリアから聞いています」

チエルシーさんは『ほお?』と関心を示した。

「恐れながら、お嬢様は私のことをどのようによ？」

「綺麗で機転が利いて、とても頼りがいのある幼馴染だと」

「そうですか」

チエルシーさんはどこか嬉しそうに麦茶を啜った。

セシリアはセシリアで『もう、一夏さんたら』と頬を赤くして麦茶をすすする。

(それにしても、メイドか……。)

本職にしているだけあり、チエルシーさんの佇まいはすぐく様になっっていた。

そこらのコスプレメイドとは雰囲気の違い、動作一つ一つに趣がある。

「私に何かついておりますか?」

ふわっとした雰囲気に見とれていたなら、チエルシーさんが俺の視線に気づいた。

「いえ、本職のメイドを見るのは初めてで、つい」

「そうでいらっしやいましたか。では、一度、本場の給仕を体験してみますか? 幸いにも、夏季休校中は私もここに滞在する予定でございます」

ますし、いかがでしょう?」

そう微笑むチエルシーさんに、思わずドキリとする。

その柔らかな微笑みには人を和ませる魅力があつて、俺はしどろもどろになつた。

「いえいえ、いいです。チエルシーさんみたいな美人に給仕してもらつたら緊張しそうですし」

「あら、織斑さまは口がお上手ですね。——ですが、将来的に私が織斑さまの身の回りのお世話をすることになるかもしれません。今の内にメイドの奉仕に慣れておくのも良いかと思われます」

「はーっ」

いきなり話が飛躍して、俺はついていけなくなつた。

将来的にチエルシーさんが俺の身の回りの面倒を見るかもしれないって、どういうことだ?

チエルシーさんの言葉の意味を計りかねていたら、セシリアが真っ赤になつていた。

(チエルシーつたら! なんてこと言いますの!)

(織斑さまの婿入りに備え、今から気構えを身につけて頂いた方がよろしいかと思ひまして。わたくしの前任者エリーハウスキーパーも亡き旦那様が婿入りする前から、上流階級の振る舞いや、社交界について教育していたと申しておりましたので)

(だとしても気が早いですわ! わたくしと一夏さんはまだ、そんな関係じゃ……)

(しかし、将来的にはそうお考えになつているのでは?)

(う……、それは……、でも、まだ希望の域といえますか、現実味が……)

一体、二人は何をコソコソ話しているのだろうか。

時より聞こえてくる、婿入りとか、旦那様とかいう単語が気になるのだが。

「あの二人で何を話しているんですか?」

「それは女同士の内緒話です♡」

ふふふと妖艶さを秘めた声で人差し指を立てるチエルシーさん。

うまい具合にはぐらかされ、俺はこれ以上踏み入る事ができなくなつた。

「それはそうと、お嬢様。織斑さまにお話しがあつたのでは？」

「ええ、じ、実はこのようなモノを手に入れました」

セシリアは身を正してバックから一枚のチケットを取り出した。

海の描かれたそのチケットは、〈倉持技研〉の人がくれたそれと同じ物だ。

「よかつたら、ここに一緒に行きませんか？」

「おう、いいぜ」

断る理由もないので即答する。元からセシリアを誘うつもりだったしな。

快く了承した俺に、セシリアが表情をパーと明るさせる。

「本当ですよ！」

「ああ、実は俺もそのチケット、持ってたさ。セシリアを誘おうと思つていたところなんだ」

「まあ、そうでしたの！（もしや、一夏さんもわたくしとひと夏のアバンチュールを）」

俺の言葉にセシリアが頬を紅潮させてフリフリと金髪を振るう。

そんな時だ。部屋のドアが無遠慮に開き、七日ぶりとなるセカンド幼馴染が入ってきた。

「お、鈴。帰ってきたのか」

「ええ。——って、成田についたってメールしたじゃない」

「あ、わりい、見てなかったわ」

午前は〈白式〉のデータ取りで忙しかつたからな。

それはさておき、俺は鈴の手に握られたチケットに注目した。

「なあ、おまえが手に持っているチケットって、ウォーターワールドのだよな？」

「え？ そうよ。どうせあんたのことだから暇しているだろうと思つて、誘いにきてやったのよ」

「そうか、そりゃ丁度よかつた。実はさ、セシリアとそこに行こうかつて話になつててさ、鈴も一緒にどうだ？」

俺がチケットを見せると、鈴の手からはらりとチケットが落ちた。同時にセシリアの表情がこわばる。なぜかチエルシーさんだけは、呆れたような深い溜息をついていた。

「織斑さまは本当に鈍いのですね……。お嬢様が可哀想になってまいりました」

うが、チエルシーさんまで、そんなことを云う。なぜか、チエルシーさんに云われると堪えた。

——メイドでアルバイト編
第53話 8月9日 午前

「ふあ〜……」

8月9日。デユノアさんたちと買い物を買った日。レゾナンスに向かうモノレールのボックス席で、私はあくびを噛み殺し、溢れてくる涙を拭いた。

眠気眼を擦りながら、うつらうつらする私を、隣のデユノアさんが心配そうに見てくる。

「アリス、もしかして寝不足？」

「ええ、実は昨日、鈴とセシリアが泊まりに来ていました」

そして、愚痴を延々と聞かされたのだ。『一夏はどうしてああ鈍いのか』とか、『女心が全然わかっていない』とか、そんな話を深夜の1時まで延々と。おかげですっかり寝不足だった。

「おのれ、また凰鈴音か……。いつも私の邪魔ばかり。いつかとつちめてやる」

ラウラは親の仇を見るような目で、自分の掌を殴りつけた。相変わらず、鈴の名を聞くと、目くじらを立てるラウラである。デユノアさんは苦笑しながら、再び私を見た。

「セシリアってよくアリスの部屋に泊まるの？」

「ええ、わりと頻繁に」

私とセシリアは仲が良いので、遊びに来ては泊まってい

い。
逆のパターンもあるので、夜を共に過ごしている時間は意外と長い。

「なんかズルいなあ、セシリアばかり。僕はまだ一回も泊まったことないのに……」

ラウラもラウラだけど、デユノアさんもデユノアさんでセシリアの名が出ると、妙に拗ねるんですね。特に私が見たと余計に。嫌いなわけじゃないのでしようけど、何か思うところがあるらしい。

「じゃあ、今度、泊まりにきますか？」

ご機嫌とりにそう提案すると、デュノアは腿に両手を挟んでモジモジこちらを見た。

「いいの？」

「ええ。大したもてなしはできませんが」

「じゃあ、さつそく、今日、泊まりに行ってもいい？」

唐突だったけど、問題もないのでOKする。私も年頃なので、友人との夜更かしは大歓迎だ。

すると、私たちのやり取りを見ていたラウラが「んっ」と藪から棒に体をぶつけてきた。これは「私も誘え」というラウラの催促だ。誘って欲しい時や、構って欲しい時によくこういう事をする。

「よかったら、ラウラも泊まりにきませんか？」

「うむ、嫁がそういうなら、行ってやらなくもないぞ」

催促しておいて、この態度である。でも、ここで『いいです』なんて言おうものなら半日はガツカリするので、私はさもお願ひするように言った。

「ぜひ来てください」

「では、行ってやろう」

「じゃあ、今日の夜は三人でパジャマパーティーだね」

ラウラが満足そうに了承し、デュノアさんが楽しそうに両手を叩く。

私は『パジャマ』という単語を聞き、あることを思い出した。

「でも、ラウラってパジャマを持っていませんよね？」

私を知る限り、ラウラは寝るとき、下着姿——質素なスポブラとショーツだ。泊まりの時は、なぜか私のYシャツを勝手に着ている。ラウラがちゃんとしたナイトウェア着ている姿を、私は見たことがない。

「ああ、持っていないな。寝袋なら持っているが」

「じゃあ、丁度いい機会だし、ラウラのパジャマもついでに買おうか。ラウラも、いいよね？」

「ふむ、必要だというなら、購入しよう」

今日の目的が決まったところで、モノレールが駅に停車した。私た

ちはプラットフォームを抜け、改札を通り、レゾナンス三階にある寝具売り場へ向かう。

到着した寝具売り場には、ナイトウェアを始めとした様々な寝具が数多く取り扱われていた。種類も豊富で、スウェットからガウンまで、選り取り見取りだ。

「ラウラはどんなパジャマがいいですか？」

「なんでもいいぞ——」

私とデュノアさんは顔を見合わせ、ため息をついた。

ラウラって我は強いですけど、ファッションの類には全く興味を示さないんですね……。

「では、私たちが選んでもいいですか？」

「任せる」

ラウラの了解を受け、私とデュノアさんはラウラのパジャマ探しに取り掛かった。

各所で店内の品を物色し、それぞれが似合いそうなものをラウラへ持っていく。

「ねえ、ラウラ、これなんてどう？」

デュノアさんが持ってきたのは、夏物の白いパジャマだ。

シルクの生地がさわり心地よく、着心地もよさそうだ。シンプルなデザインもいい。

「いいですね。でも、こっちもいいですよ」

デュノアさんに遅れて私が持ってきたのは黒のネグリジエだ。

レースがちよつと大人っぽいけど、黒色はラウラの銀髪に映える。

「そっちも可愛いね。——ねえ、ラウラはどう？」

「どっちでもいいぞ」

本当にラウラはどっちでもよさそうな顔だった。

ろくに見比べもせず頷くラウラに、私とデュノアさんはそろって肩を落とす。

「ラウラ、せめて少しは考えてください。『なんでもいい』『どっちでもいい』だと選び甲斐がありません」

「そうだよ。そんなに無関心な態度だと、奥さんに愛想を尽かされ

ちやうよ？ 手の込んだ料理を作っても何も言わない。おしやれしても気づかない。奥さんに気苦労をかけてばかりだと、夫婦の関係はすぐ冷えちやうんだから」

「夫婦の関係が冷えるだど？ ま、まさか。私の嫁に限ってそんなこと……」

ラウラが恐る恐る私を見る。いい機会なので、私はあえて冷たく「ふん」と背を向けた。

私に（おそらく初めて）冷たくされたラウラは、今までになく動揺した。

「よよよよ、嫁?」

さらに、私の冷たい態度にあたふためくラウラに、デヌノアさんが悪魔の如く囁いた。

「ラウラはダメ夫♥」

ずきゅくとラウラの胸に『ダメ夫』の言葉が矢のように突き刺さる。

悪魔シャルロットの一言に心折られたラウラは、脱力して床に両膝をついた。

「わ、私はダメな夫なのか……。確かに甘えていたばかりで、嫁に何もしてやれていない気が……」

両手両足をつくラウラに、私とデヌノアさんは顔を見合わせた。ま、こんなもんでしよう。

私は『ダメ夫、甲斐性なし、社会のくず』と悪い方向に転がるラウラの肩を叩いた。

「これからは、ちゃんと意見してくれますか?」

「わ、わかった! どっちでもいい”、”なんでもいい”は言わない! ちゃんと意見しよう! だから私を捨てないでくれ。お願いだ。

私にはお前しかいないのだ。私はお前なしじゃ生きていけない!」

「あら、そうですか? もう、ラウラは仕方ない娘ですね。じゃあ、ずっと一緒にいてあげます」

腰にしがみついてくるラウラに『ラウラには私がついていないとダメ』という保護欲が湧く。

デユノアさんは『これが共依存か』とかなんとか言っていますけど、あーあー聞こえない。

「じゃあ、まず欲しい色とかありますか？」

ラウラは細い指を綺麗な顎にあてて真剣に考えた。

「そうだな、色は黒がいいだろうか。形は……あ、あんな感じがいい」
やや恥ずかしそうに指差したのは、ネコを模った着ぐるみのパジャマだ。

「どうだろうか？ へ、へんか？」

「いいえ。いいと思いますよ」

ラウラって小柄だから、ああいった小動物の着ぐるみとか似合いそうだし。

しかし盲点だった。着ぐるみがいいだなんて。はやり、本人に訊いてみて正解でしたね。

「そ、そうか。なら、嫁も同じものを買わないか？」

ラウラは頬を赤めながら、でも握り拳を作って私にパールツクを要望する。

私もそういう着ぐるみは嫌いじゃないから、快く了承した。

「じゃあ、おそろいのを買いますようか」

色は白と黒があつたので、ラウラが黒、私が白を選択する。

その様子を見ていたデユノアさんがうらやましそうに言った。

「あ〜いいなあ。ねえ、僕も一緒に買っちゃだめ？」

「ええ、いいですよ」

（む、私は嫁と二人だけのパールツクが良かったのに……）

「ホントに？ ありがと！」

デユノアさんは私と同じ白色のネコパジャマを手を取った。そのパジャマを自分に宛がい、くるりと一回転する。「えへへ、おそろいのコーデかあ」と見せた表情はとても嬉しそうだ。

（デユノアさんもお揃いでいいですよね？）

（ああ、特別シャルロットは許してやるか）

こうして私たちはお揃いのパジャマを持って、レジへと向かった。

♡ ◆ ♣ ♠
ラウラのパジャマを買い終えたあと、私たちは店内のオープンカフェで昼食を取っていた。

店名は『アフエットウオーソ』。言いにくいけど、落ち着きのある大人な雰囲気のお店だ。

「ふふ（はやくこれを着て、嫁に甘えたいものだ……）」

ネコのパジャマを買ってからというもの、ラウラはずっと大事そうにそれを抱えていた。

何でしょうか。熱にうなされたような顔をしていますけど。

「ラウラ、どうしたんですか？ 顔が赤いですよ」

「む！ い、いや、大丈夫だ！」

ラウラはハッと我に返った顔で、オレンジジュースを一気飲みした。

「———そ、それより、昼からどうするのだ？」

目的の品は買い終えたけど、このまま帰宅というのも味気ない。

せっかく、こうして三人外出したのだから、どこか寄り道して帰るのも悪くないだろう。

「雑貨屋めぐりはどうかな？」

「そうですね、丁度、部屋に置く小物とかが欲しかったところですし」
「では、そうするか」

午後の予定が決まったところで、食後のデザートを運ばれてきた。

美味しそうなミカンのジェラートにスプーンを入れた時——

「はあ……。よりによって、こんな大事な時に……ホントにどうすればいいのよ……はあ」

後ろの席から深い溜息が聞こえてきた。それはもうマリアナ海溝もかくやという深さだ。事情は分からないが、困っている様子が席越しに伝わってくる。

声からして女性のようにだけど、一体どうしたのでしょうか。声をかけてみようか。

(お人よしもいいが、深入りはするなよ)

流石、私の旦那さま。私のことをよく知っている。

ラウラのお許しが出たので、私は席越しから困っている女性に声を掛けた。

「あの、どうしましたか？ 先程から深い溜息をついているようですが」

「え？」

振り向いた女性は二十代半ばで、薄いサングラスを掛けていた。服装はタイトなビジネススーツ。一見して芸能マネージャーのようにも見える。そのマネージャー風の女性は、私たちの顔を見るなり、『おっ！』という表情をした。さらに後ろのラウラを見て、『おっ！』という顔をする。

「ねえ、あなたたち、ちよつといいかしら」

「え、ええ」

答えるなり、彼女は注文していたアイスコーヒーを持って私たちの席にやってきた。

そして懐から名刺を取り出す。表には『@クルーズ店長——如月あかね』と書かれていた。

「ねえ、よかつたら私の店でバイトしてみない？」

女性——如月あかねさんは、私たちの目の前でパチンと拝むように手を合わせた。

私たちは目を点にする。アルバイトですって？



話をかいつまんで説明しよう。

如月さんが経営している喫茶店『@クルーズ』ではいま人手不足——特にウェイトレスが足りていなくて困っているそう。なんでも従業員が急病で来られなくなったらしく、かてて加えて、本社から視察の人間がやってくるらしい。そこで私たちにお店の手伝いをして

ほしいということだった。

余程、困窮しているようだったので、(如月さんがレゾナンスに来ていたのは臨時社員をスカウトするためだという)、私たちは手伝う事を了承したのだが、

(まさか、こんな格好をするはめになるなんて……)

『@クルーズ』の更衣室にある姿見を見てぼやく。

鏡には、紺色ワンピースにフリフリの純白エプロンドレスを身につけた私が映っていた。頭にはカチューシャ。その姿はどこからみても『お帰りなさいませ、ご主人様』のメイドだった。

「まさか@クルーズがそういうお店だったとは……」

そう。@クルーズはウェイトレスがメイド姿で給仕する、いわゆるメイド喫茶だったのだ。

私がスカートの手端を持ち上げ、自分のメイド姿を怪訝そうに見ていたら、背後からデュノアさんが抱きついてきた。

「えへへ、アリスのメイド姿、可愛いね♡」

「そうですか？」

「うん (なんだか、いじめたくなっちゃう♥)」

一瞬、デュノアさんの瞳が妖しく光り、背筋が寒くなった。

「たまにデュノアさんって怖いときがあるんですよ……。Sっ気があるんでしょうか？」

「えっと、お、お嬢様？ お、御戯れは……」

「なんだか怖くなった私は、やんわりデュノアさんに離れてもらおうとする。なにより、いまのデュノアさんは執事姿だったから。この光景は、見ようによつてはメイドと執事が乳繰り合っているように見えなくもない。目撃されたら大変な事に――」

「ジー………」※SEは火曜サスペンス劇場OP。

「と言っているそばから、一人のメイドがこつそりとこちらを覗いているのが見えた。」

リアル『家政婦を見た』だ。――なんて思っている場合じゃない。

「ラウラー！ これは誤解ですからね！ 私とデュノアさんは何もしてませんからね！」

「うんうん、僕が足を滑らせちゃっただけなんだよ！」

この状況を誤解されないよう、私たちは必死になって弁解した。というものの、銀髪を一本だけ唾えるラウラがどこか鬼女めいていて怖かったのだ。

「本当か？」

むすくと頬を膨らますラウラに、デュノアさんが何度も頷く。

「私の言葉が信じられませんか」

「むく、嫁がそういうなら信じよう。だが、浮気だったら許さんぞ」

ラウラは私を信用し、ムスっとした表情をいつものむつつり顔に戻した。ただし、逆にデュノアさんは『妻を束縛したがるダメ夫』となんだか皮肉っぽいことを言っていたが、ラウラは気にせず、

「ところで、シャルロット、その姿はもしや執事というやつか？」

「実は店長さんがね、絶対こつちの方が似合うからって……」

デュノアさんがどよんと暗い影を落とす。ある意味で男装はデュノアさんの黒歴史ですからね。

でも、本人の心境に反し、彼女の執事姿はとてもカッコよかった。なんでもそつなく熟しそうなイケメン執事という感じだ。『実は女の子』というのもいいエッセンスになっている。

「でも、執事だって、よくわかりましたね」

知識が軍事に偏っているラウラが執事を知っているなんて意外だった。

「クラリツサの元旦那が執事だったからな」

「えっ!？」

驚愕の事実が明るみになり、私は声を上げた。

クラリツサさんの元旦那が執事という事実にも驚いたけど、バツイチだったのですか……。

「うむ、キャスティングボイスとグラフィックのマッチが結婚の決め手だったそうだが、続編で声優が変更になったから別れたらしい。愛が一気に醒めてしまったそうだ」

「二次元の話ですか！」

だと思いました。クラリツサさんはコアな乙女ゲーユーザーでし

たもんね……。

特殊部隊の副官がそんなんでいいのか、なんて心配をしていると、如月さんが入ってきた。

「みんな、着替えたわね。——うん、うん、私が見込んだ通りみんな可愛いわ。じゃあ、あなたたちにはさっそくフロントに入って貰おうかしら」

「わかりました」

「はい」

「うむ」

さて、生まれて初めてのアルバイトだ。がんばろう。



「アリスさん、4番テーブルに紅茶とショートケーキをお願いします」

「はい、わかりました」

時刻は午後を過ぎたにも関わらず、お店は賑わいを見せていた。あちらこちらで注文の声があがり、その度に私は、右に走り、左に走り、店内を忙しなく駆け回っていた。

客層はまばらで男性だけではなく、女性も多い（デザートが美味しからだろう）。中には親子連れもいて、元気な子供たちがフロアを縦横無尽にはしやぎ回っている。——と言っているそばから、駆けてきた子供に足元を掬われる。その拍子に注文のケーキが宙を舞った。

「おっとっと」

崩れたバランスを整えつつ、宙に舞ったケーキとカップを空中でキャッチする。

その様子を見ていた子供が『おおー！』と驚きを露わにした。

「お姉さん、すごいーい！」

「ふふ♡」

私が得意げなウインクを送ると、少年の母親らしき女性が慌てて走ってきた。

「ああ、すみません、うちの子がご迷惑を」

「いえ、私なら大丈夫です。ですが、ぶつかると危ないので、店内では走り回らないでくださいね」

「はい、すみません。——ほら、タカトも『ごめんなさい』って言いなさい」

「ごめんなさい。メイドのお姉さん」

お母さんに怒られながら頭を下げる少年——タカト君。

私はタカト君と目線を合わせるように膝を折り、彼の頭を撫でてやった。

「よく言えました。——では、私は仕事に戻りますので」

そう言って立ち上がる。視界の外れで男性客が手を挙げていた。

「ねえ、その赤い髪のメイドさん、注文いい？」

「はい、ただいま」

手持ちの紅茶とケーキを4番テーブルに素早く置き、帰りに6番テーブルへ向かう。

「お待たせいたしました、ご主人様。ご注文はいかがいたしましたでしょうか？」

私は長いスカートの手端を持ち上げてお辞儀した。

「えっと、コーヒー2つ、ひとつはエスプレッソで」

「俺はカプチーノ」

「えっと、コーヒー二つ、エスプレッソとカプチーノですね」

「あ、それとき、できれば、あの子に持ってきてもらってもいいかな？」

「俺は、あつちの銀髪の子で」

言って、二人が指差したのはデュノアさんとラウラだ。

この店では、指定したメイドに注文の品を持ってこさせ、給仕させることができる。そして、デュノアさんとラウラは、数いるメイドの中でも指名数一位二位を争う人気者だった。そりゃね——

『お嬢様、お砂糖とミルクはいかがいたしましたでしょう。よろしければ、お入れいたしますでしょうか？』

『はい、お願いいたします♡』

『かしこまりました、お嬢様。では、失礼いたしますね』

と、美形の執事にやさしく給仕された女性客は見事に骨抜きにされていた。また、男装の執事というコンセプトが受けたらしく、店内から『男の娘萌え』とか『女執事サイコー』という声が上がっている。一方、ラウラの方はというと――

『ほら、注文の品をもってきてやったぞ』

『えっと、その……』

『何、ミルクを入れてほしい、だど？ まったく面倒のかかる奴だ……』

『へへ、すみません』

『まったく。――ほら、飲め。冷めると不味くなるぞ』

と、やや面倒臭そうに給仕しているが『逆にそれがイイ』と好評を得ていた。

また眼帯をした軍人メイドという容姿がオタク受けして男性の支持は鰻登りだ。ラウラの給仕を受けた男性はみな『教官』だの、『大佐殿』だのと言って興奮している。

そして、私だけ――まあ、そのゼロです。

指名ゼロ。接客担当のメイドは全員で6人弱いるけど、私は断トツのビリだった。

どうやら金髪の男装執事や銀髪の軍人メイドに比べて、赤毛のメイドは需要がないらしい。

「かしこまりました」

スカートの端を掴まんで一礼し、席を離れる。

厨房に戻ると、キッチンメイドに注文の品を告げた。

「6番テーブルにコーヒー二つ。エスプレッソとカプチーノ。給仕にデユノアさんとラウラを指名です」

「は〜い、わかりました〜」

ホールの返事を確認し、再び接客に戻ろうとする。

その時、ホールを担当しているキッチンメイドさんが私を呼び止めた。

「待って、アリスさん。あなたに給仕の指名が入っているわよ」

「私ですか？ デユノアさんやラウラじゃなく？」

「ええ、そうよ。——はい、これを9番テーブルのお客様に」
「わかりました」

私はコーヒーとパフェを@と刻まれたトレーに乗せ、9番テーブルに向かった。

さて、私を指名してくださいましたご主人様はどんな人なのか。

「あら、タカトくん？」

9番テーブルへ向かうと、先ほど私とぶつかった少年が待っていた。

「さきほどはどうも。実はこの子があなたに食べさせて欲しいというものですから」

「えへへ」

「ご迷惑ではありませんでしたか？」

「いえ、むしろ指名していただいて、ありがとうございます」

遠慮がちなお母さんの対応をしながら、注文の品をテーブルに置く。

それから『では、失礼して』と断りを入れ、タカトくんの隣に座った。

「はい、では、ご主人様、あーん」

「あーん」

大きく開けたタカト君の口にチョコレートパフェを運ぶ。

それを彼は幸せそうにぱくつと頬張った。

「美味しいですか？」

「うん！」

ふふ、可愛いですね。千冬さんが一夏を可愛がるのもわかる気がします。

「ところで、タカトくんはISが好きなのですか？」

私は席の隅に積まれた箱の山——ISのプラモデルを見た。

「うん！ 大好きだよ！」

「実は今日もいくつも同じようなISのプラモデルを買わされて。家にも同じようなのがたくさんあるんですよ」

と、苦笑するお母さんにタカト君がチョコのついた口で反論した。「同じじゃないよ！ 今日買ったのは〈撃鉄〉をインストールした砲撃型の〈打鉄〉なの！ 家にある通常型の〈打鉄〉とは違うの！ それに〈打鉄〉と〈ラファール・リヴァイヴ〉は全然ちがうからね！」『これだから素人は』とでも言いたげな口調のタカト君に、お母さんは困り顔だった。

「お母さんには違いがわからないわ」

「わかるよ！ お姉さんはわかるよね？」

「ええ、わかりますとも。〈撃鉄〉をインストールした〈打鉄〉には120mmL44滑腔砲と高性能レドームが装備されていますからね。それに輝夜重工製の〈打鉄〉は日本のISで、デュノア社製の〈ラファール・リヴァイヴ〉はフランスのISですし、全然ちがいますよね」

「あら、メイドさんは随分とISにお詳しいんですね。もしかして――」

「ええ、実は」

「――オタクなんですか？」

私は椅子からズルツとすべった。私ってそんなにオタクっぽくみえるのでしょうか……？

実際ISオタクだけど、女ですし、そこはIS操縦者として見てもらいたかった。

「いえ、こう見えてIS学園の生徒なので」

正体を明かすと、お母さんが『まあ！』と口に手をあてて驚いた。

タカト君にいたっては瞳をキラキラ輝かせて尊敬のまなざしだ。

「お姉さん、IS学園の人なの!？」

「どおりでISに詳しいはずですね」

「いえ、それほどでも。タカトくんのほうこそISに詳しいのですね」「うん！ 将来はISの操縦者になるのが夢なんだ。んでね、ISでね、宇宙旅行するんだ!」

「もう、タカトったら……」

意気揚々と夢を語るタカトくんにお母さんは苦笑した。ISは女

性しか動かせない。そのことを知っているからだろう。母親として息子の夢を否定するのは辛いものがあるに違いない。それでもお母さんは言った。

「いい、タカト？　ISは女の子しか動かせないのよ？」

「でも、織斑一夏って人は男の人なのにISに乗ってるよ？」

「彼は特別なのよ。タカトは特別じゃないから——」

「大丈夫ですよ」

その先はなんとなく続けてほしくなったので、私は声を出して遮った。

「タカトくんが大人になる頃には、男の人もISに乗れるようになっていきますよ」

「ホントに！」

「ええ、IS学園でISの勉強をしている私が言うのです。間違いありません」

無責任な言葉なのは解っている。そう言ったところで、実現している保障などどこにもない。

けれど、楽しそうに語る彼の夢を、私は否定できなかった。

なぜなら私たちが戦っているのは、彼らのそんな夢を守るためだから。

破滅的な兵器を突き付け合い、差別が蔓延る世界では、子供は夢も見られない。

「ほら、メイドのお姉さんもこう言っているよ」

「そうね。じゃあ、タカトがISの操縦者になったら、お母さんを宇宙旅行に連れて行ってね」

「うん！」

母の微笑みに子が笑顔で答える。とても暖かい光景に心がほっこりした。

きつと、これは命を懸けて守る価値のあるものだと思う。

そう私が決意を改めた時である。右側の耳に装備していたインカムが鳴った。相手は如月店長だ。

『アリスさん、いつまで話しているの。はやく接客に戻って』

「あ、すいません。いま戻ります」

彼に感けすぎましたね。早々に持ち場へ戻らないと。

「では、私は仕事に戻ります。ご主人様さまはごゆつくり」

「え、メイドのお姉さん、もう行っちゃうの……？」

持ち場に戻ろうとする私のスカートを、かわいいご主人様が引つ張った。

「こら、タカト。お姉さんを困らしちゃだめよ」

「でもお……」

お母さんが宥めるが、タカトくんは納得できない様子だ。

幼気な瞳は『もつとメイドのお姉さんとお話したい』という気持ちを訴えている。

「では、私の代わりに、これを置いていきます」

私は腰のポーチに入れておいた赤いナイフを鞘付きで取り出した。

「ヘッドクイーン、しばらくタカト君の相手をしてあげてください」

《Yes My honey——では、Mrタカトとその母上。これからはハニーに代わって私が接客する》

待機状態の〈赤騎士〉をテーブルに置くと、鞄部分のホログラムレンズからスーパーロングの美女の姿（なぜかメイド服）が映し出された。二人は目をまんまるにした。特にタカトくんの反応はすごく、目が爛々と光り輝いている。うん、期待を裏切らない反応だ。

「すごーい、お母さん、妖精さんみたいだよ」

「ほんと、可愛いわね」

「給仕はできませんが、ISの話し相手にはなりますから」

「うん！——じゃあ、えつと、ヘッドクイーンさん？」

《No Mr Takato——私のことはヘッドクイーンでいい》

〈ヘッドクイーン〉とタカトくんがIS談義を始めたのを見計らい、私は踵を返した。

それと同時に、カランカランと店内のドアが鳴る。新たなお客がきたようだ

「お帰りなさいませ、ご主人様」

私が業務的に、でも愛想よく腰を折ると——店内に銃声がこだました。

「動くな！ 妙な真似したら撃ち殺すからな！」

発砲と共に店内に入ってきたのは、目出し帽をかぶった男が三人。手には自動拳銃。

まさかの、まさかのである。まさかの強盗が私たちの前にやってきた。

第54話 8月9日 午後

「あなたたちは完全に包囲されています。いかなる策を講じても逃走は不可能です。いかに我々国家権力に対抗しようとしても、必ず徒労に終わります。今あなたたちがすべきことは裁判官の心証を良くし、情状酌量の余地を広げることです。そのために、今すぐ武器を捨て人質を開放し、速やかに出てきなさい」

警官の紳士な呼びかけに、強盗たちは銃声で応えた。

「うっせー。ごたごた言ってる暇があったら逃亡用の車を準備しろ！」

まるで絵に描いたような強盗たちは、逃亡犯のようであった。持ち込んだ革製のバックからは日本紙幣が覗いている。どうやら銀行を襲撃したはいいが、運悪く通報され、ここに逃げ込んできたようだ。「——たくっ、サツの野郎が。——おい、お前らも余計な真似すんじゃないぞ」

そして私たち従業員とお客は店内の奥の方へ追いやられ、一つにまとめられていた。

幸い拘束はされなかったけど、後頭部に回した手を下げれば、容赦なく発砲してきそうな勢いだ。

（ねえ、アリス、どうする？ 僕たちの手で制圧する？ ISをあるし）

隣のデュノアさんが静かに訊いてくる。私はしばし思案した。

代表候補生であるデュノアさんは、こういった事態に対する訓練を受けている。特にラウラはその道のプロフェッショナルだ。私もCQBを始めとした室内制圧の訓練は受けている。その気になれば、制圧も可能だろうけど……。

（今は大人しくしておいて方がいいでしょう。相手は殺気立っているようですし）

仮に制圧が可能でも、今は犯人を刺激すべきではない。もし下手に刺激して銃撃戦にでもなれば、如月さんたちやタカト君に危害が及ぶかもしれない。あくまで強盗の制圧はあと回しで、人質の安全確保が

第一だ。

（私も嫁に同意だ。それに強盗犯たちは私たちを傷つけたいと思っていない。素直にいうことを聞いていれば、危害は加えてこないだろう。今は様子を伺うのが賢明だ。そして油断が生じたところを一気に制圧する）

（そうですね）

ラウラの意見に同意し、私は改めて強盗たちを観察した。

強盗たちは4人組の男性で、手には自動拳銃ノーリンコT54。いわゆる中国製のトカレフを装備していた。おそらく中国マフィアや日本の暴力団が横流した品を購入したのだろう。日本の正規ルートではまず銃器なんて手に入らないから。

（そして、外の状況は、と……）

視線を動かし、窓の外を窺う。外では既に警官隊とパトカーがこの店を包囲していた。

時より呼びかけはあるものの、交渉人の類は入ってこない。『交渉の余地なし』と見做して突入してくるつもりなのだろうか。だとしたら、せめて私たちの位置情報を彼らに知らせたいところだ。

「レットドクイーン」、外のパトカーの無線機に……——あつ」

そこまで言って、手元に赤騎士がないことに気づく。そうだった。赤騎士は今タカトくんが持っているんだ。私は静かにタカトくんの傍まで移動した。

「タカトくん、大丈夫ですか？」

「あ、メイドのお姉さん……」

タカト君は、お母さんの腰にギュツとしがみつきながら小さく震えていた。

当然だ。銃を持った男が襲ってきたら大人だって怖い。そんなタカト君を勇気づけるように言う。

「タカトくん、レットドクイーンは持っていますか？」

「う、うん」

ポケットから赤いナイフを取り出して頷く。

「それはISです。何かあったとき、必ず君とお母さんを守ってくれ

ます。安心してください」

《Mrタカト。怖がることはない。私がついている。心配しないでいい》

「うん」

〈レットクイーン〉の励ましに、タカトくんが強く頷く。うん、強い子だ。

私は改めて店内の状態と犯人たちの様子を観察し直した。

「しっかし、こんな事になるなんて……。本来なら今頃リゾート地で優雅にバカンスを楽しんでる予定だったのよ……。クソがつ！」

「で、アニキ、これからどうするんすか？」

「気長に奴らが要求を呑むのを待つき。こつちには大勢の人質がいるんだ。そのうち焦って要求を呑むはずだ。幸いここは喫茶店のようなだし、食いモンには困らねえ。籠城するにはもってこいだ。なによりよお——」

リーダー格と思わしき男（強盗Aと名付けよう）が私たちを眺めながら、上唇を舐める。

「ここには上玉の女がいる。楽しめそうじゃねえか……。へへへ」

「ほほっ！ いいっすね！」

「俺も賛成ですっ」

強盗Aの提案に、強盗Bと強盗Cが同意する。

特に強盗Bは好色家なのか、言うなりさっそく店内の従業員を品定めし始めた。

「へへ、選り取り見取りだな。さて、誰にすつかかな？」

従業員一同は指名されないよう視線を逸らす。私は堂々と受け止めた。

そんな私の気の強そうな態度がお気に召したのか、強盗Bは私を指名した。

「俺、あの赤毛のメイドが良いっす」

狙い通りになって内心で、私はほくそ笑む。今、やつらは完全に油断しきっている。警察が包囲する中で、猥褻行為に及ぼうとしているの。がいい証拠だ。これは他ならぬ制圧の好機。逃す手はない。

「お前、ああいう気丈に振る舞ってる女、好きだよな」

「へへへ、そういう女を力で言いなりにさせるのがイインスよ。——ほら、早くこいよ」

歪んだ性癖を突き付けられて嫌悪が最大になるが、今は堪えて男の前に進み出る。

私が男の眼前まで寄ると、強盗Bは私の身体を舐めるように見て、さらに興奮の度合を上げた。

「うひょー！ 近くでみるとますます美少女っすね！」

「それはどうも」

こんな男に褒められたところで嬉しくもないので、愛想のない返答をする。

それでも男にとっては興奮のスパイスになったのか、更に息を荒げた。

「いいね、いいね、その強気の状態。よし、さっそくメイドらしくご奉仕してもらおうか。一応言っておくが、変な真似したら、その従業員をぶっ殺すからな。覚えておけよ。いいな」

お決まりのセリフをかまし、強盗Bは興奮で震える手で腰のベルトに手をかける。しかし、片手ではうまくベルトの金具を外せないのか、無謀にも持っていたトカレフをテーブルに置いた。

(救いようのないバカですね……)

そんな男を内心で嘲笑する。わざわざ自分から武装解除し、無防備な姿をさらしながら、警官が囲っている中でわいせつ罪に勤しもうとしている男は、これ以上ないぐらい滑稽に見えた。

だが、私にとっては好都合だ。

「よし、俺の前にひざまずいて、俺のを啜るんだ」

ベルトを抜き終えた男は、興奮を最高潮にしてそう命じる。

私は素直に従って膝を折り、跪いた——その数瞬後、脚部に蓄えた跳躍力を解放した。

「!?」

眼の高さまで飛び上がった私を見て、男の顔が驚愕に染まる。

そのマヌケ面に、私は憂さを晴らすような渾身の蹴りを叩き込ん

だ。

「くっぴっ！」

顔面に鋭い一撃を受けた男が、折れた二本の前歯を置き、後方に大きく吹き飛ぶ。

充分な手応えを感じた私は、誰に言うまでもなくつぶやいた。

（――まず一人目）

そして私は葬った強盗Bに一瞥もくれず、Bが置いたテーブルのトレカレフを取る。

初弾が装填済みなのを確認し、強盗たちに向けた。

『動くな』

強盗Cが私に銃を向けると、私が強盗Cに銃を向けるのは、ほぼ同時だった。

銃口と銃口が睨み合い、私たちの動きが止まる。が、私は勝利を確信していた。

「ふっ！」

睨めっこし合う私と強盗Bの視線を遮って、誰かの綺麗な踵が振り下ろされる。

ラウラだ。ラウラのカカト落としの威力に強盗Cの腕があらぬ方向へ押し折れた。

「ぐぎゃっ！」

骨折の激痛に耐えきれず、強盗Cが自前のトカレフを掌からこぼす。

私が落ちたトカレフを遠くに蹴って、ラウラが近接格闘術で強盗Cにとどめを刺す。

『これで二人』

私とラウラの声が重なると、眼前に四人目の強盗――強盗Dが落ちてきた。

確認するまでもなくやったのはデユノアさんだろう。これで残りは一リーダー格の男一人だ。

「よくもやってくれたな、クソガキどもが……」

この数秒の内に三人の仲間をやられた男は、焦りながら周囲を見渡

した。しかし、武器を所持していないため、抵抗らしい抵抗もできそうにない。そこで男は追い詰められた悪党にありがちな行動を取った。

「こうなったら、人質を盾にして——」

そう、動いたらこいつの命は——” というアレだ。だが、そんな事をさせる気は毛頭ない。

私は客と従業員が集められた場所へ走る強盗Aを容赦なく撃った。

「ぐおっ！」

足を撃ち抜かれた強盗Aがバランスを崩す。だが、ここで思わぬ誤算が発生した。

撃たれた強盗Aが、出血する足で踏ん張りながらも、人質の許へと走破してしまったのだ。

（見かけよりタフですね。はやり、身体を狙うべきでしたか……）

でも、それだと強盗を殺してしまいかねない。別に強盗が死のうと構わないが、タカトくんの目の前で“人殺し”の現場を見せるのには抵抗があつた。だから、胴体を避け、脚部を狙ったのだが、その甘さが裏目にでてしまったようだ。

「へへ、動くなよ、小娘ども。妙な真似をしたらこのガキの命はないぞ」

強盗Aが悪党の常套句を吐きながら、人質を抱えて出てくる。

人質はよりによって私を指名してくれたタカトくんだった。

「お、お姉さん……」

タカトくんはお客の中で最も幼く、力がない。人質としては打って付けた。強盗Aもそのことを理解して彼を人質に選んだのだろう。でも、その判断が仇となったことを彼はまだ知らない。

「タカト！」

我が子の人質に取られたお母さんが悲鳴のような声を上げた。

「お願いです。その子は傷つけないでください！」

「うるせえぞ、ババア。黙らねえとてめえのガキを血祭りにすんぞ」

言つて、手に握った赤いナイフをタカトくんの喉元に食い込ませる。

顔から血の気が失せたお母さんが、助けを求めるように私へ縋った。

「どうか、どうか、あの子を助けてください……!」

「大丈夫ですよ。私が助けるまでもありません」

私はタカトくんにウイंकを送った。

そのウイंकの意図を察したタカトくんが大きく叫ぶ。

「助けてへレッドクイーン!!」

タカトくんが大きく叫ぶと、強盗Aの握っていた赤いナイフが閃光を放った。

閃光の中から現れたのは、赫々と燃えるような赤い鎧を纏った赤髪スーパーロングの美女。〈赤騎士〉と自動人形を展開したへレッドクイーンだ。

《Yes Master Takato——御心のままに!》

へレッドクイーンが命令を受諾し、タカトくんから強盗Aを払いのける。

そして左手にタカト君を抱きかかえ、右手で強盗Aを締め上げた。

「え? え? ええ!! なんだよ、これえ!! あ、ISだと!」

突如現れたISに、状況が呑み込めない強盗が、驚愕と当惑の声を上げる。

だが、そんな男の翻弄など無視してへレッドクイーンが強盗を締め上げた。

《マスタータカト、ご指示をどうぞ。あらゆるご指示をどうぞ》

その言葉で、タカトくんは初めてこの美女が自分の命令で動くのだと悟る。

タカトくんは再び大きく息を吸い込んで、命令した。

「悪いやつをやっつけろ、へレッドクイーン!」

《Yes Master Takato!!——御心のままに!》

タカトくんの命令に応え、へレッドクイーンが締め上げていた強盗Aを壁際に勢いよく投げつける。まるでボールのように投げ捨てら

れた強盗Aは、これまたボールのように弾んで、床に叩き付けられた。
「……………この、クソガキが……………ッ！」

強盗Aはよろめきながら、気絶した仲間から自動拳銃を奪う。そして発砲。しかし、吐き出された銃弾はシールドによって遮られ、一発もタカトくん命中しなかった。

「な、なんだ、ありや!？」

なおも、必死に撃ち続ける強盗Aだが、50口径のライフル弾ですら貫通できないシールドを自動拳銃の火力で突破できるはずもなく、あえなく弾切れとなった。

「レッドクイーン、とどめだ！」

《Yes Master Takato——テイザー威力行使》

《レッドクイーン》は<赤騎士>のマニピュレーターに備わった対人用の電気銃で強盗Aを攻撃した。

「アガガガガッ！」

体を駆け巡る高圧電流が強盗Aを戦闘不能にする。

そんな強盗Aの許へ店長である如月さんが、怒りで肩を震わせながら歩み寄った。

「よくも私の店をめちやくちやにしてくれたわね！ これは請求書の代わりよ」

そして、トドメとばかりに強盗Aの股間を力いっぱい蹴り上げる。

「ひぎゅっうッ!!」

女性にはわからないであろう痛みを受け、強盗Aは内股のまま意識を手放した。

同じように何人かの男性客が内股になっているから、よほどの激痛だったのだろう。

今度こそ、強盗Aは動かなくなった。

「タカトっ！」

強盗が成敗されたとみるやいなや、お母さんがタカト君の許にかけ寄った。

私もタカトくんのところまで行って、掌を差し出す。

「やりましたね、タカトくん。見事、強盗をやっつけましたよ」

「うん！」

強盗に襲われたショックを感じさせない様子で、タカトくんが私とハイタッチを交わす。

人によつてはトラウマものの経験だったが、大好きなISを操れた興奮がそれを凌駕しているようだった。彼の瞳ははまだ興奮を訴えている。タカトくんのIS好きも筋金入りだ。

「さて、これにて制圧完了っつと」

今度こそ強盗が完全沈黙したところで、デユノアさんが身体を伸ばした。

「うん。被害がでなくてよかったね」

「まあ、いいところを全てあの少年に持っていていかれたがな」

私たちが警戒を解くと、人質になっていたお客や従業員から歓声が巻き起こった。

「よかった！ 助かった！」「ありがとう、メイドさん！」「うわ、俺たちスゲー場面に立ち会ったんじゃないやね？」「きゃー、映画みたい！」「私、あの赤い髪のメイドさんに見惚れちゃった」

「何から何まで、どう礼を言っているのか。本当にありがとう」

感謝感激で湧き立つ客人を代表して、如月さんが言った。

「いえ、家を守るのがハウスキーパーの仕事ですから」

「もう、いつてくれるわね」

如月さんがカラカラつと笑って私の額を軽く突つつく。

そのあと、お客を代表してタカトくんのお母さんがやってきた。

「アリスさん、息子を助けてくださって本当にありがとうございます」

「いえ、タカトくんを助けたのはヘレッドクイーン様ですよ」

「ふふ、そうでしたね。息子をありがとうございます、ヘレッドクイーン様」

《No Mrs Madame——私は主の命令を履行したまで。私を駆使して強盗を撃退したのは他ならないタカト。タカトを褒めてやるべき。将来、良いIS操縦者になる》

ほんぽんとヘレッドクイーン様がタカトくんの頭を叩く。彼は嬉しそうにえへへと笑った。

それからほどなくして裏口と正面口から警官隊が突入してきた。私は強盗から奪ったトカレフを置き、無抵抗の意思を警官に伝える。その後、私たちは警官たちによって保護された。

♡

◆

♠

私たちが強盗騒動の事後処理から解放された時には、時刻は午後6時半を超えていた。

学園の門限は7時。私たちは雑貨屋での買い物を諦め、校門を潜った。

「それにしても、今日は大変だったね……」

どこか疲れた声でつぶやくデュノアさんに「ええ」と同意する。

いきなりメイドのアルバイトをやることになったかと思えば、強盗退治である。生涯にあるかないかの経験（たぶんない）に私も少々くたびれた。

「まあ、これも一つの経験だ」

逆にラウラは疲れの一つも見せず、ぴんぴんしている様子だ。

さすががこの手の事件を扱う特殊部隊の隊長。これしきの事、物の数ではないのだろう。

「では、8時に私の部屋に集合でいいですか？」

部屋の分かれ道にさしかかったところで、改めて今日の予定を確認する。

ラウラ、デュノアさんが「うむ」「うん」と答え、ここでとりあえず解散となった。

（そういえば、ラウラの好きなチョコプリンが切れていましたね）

あとで補充しておこうと考えつつ、自室のリーダーに学生証を通して部屋に入る。

部屋に箒はいなかった。実は昨日から帰省しているのだ。その代わりに――

「お帰りなさい、アリス。ごはんにする？ お風呂にする？ それと

も・わ・た・し?」

ロリーナがベタベタな台詞で私を出迎えた。しかもフリフリのエプロン姿で。

「なにをやっているのですか……?」

「あらあ、もしかして似合っていないなあい?」

「いや、エプロン姿はよく似合っていますけど……」

もともと色香の濃いロリーナだけど、エプロンをつけると、人妻的なエロテイズムが加わって、いつもより色っぽくみえた。これで実際は未婚——それどころか生娘——なのだから、世の男たちの目は節穴なのだろうか。

それはさておき、いまだ『ただいまのキスはどうかしら?』なんて言ってくるロリーナを軽くあしらって自室に入る。それから飲み物を取りにキッチンへ向かった。

「ロリーナ、美味しい紅茶のアイスティーがあるんですけど、飲みます?」

「ええ、もらうわ」

私はセシリアから貰ったダージリンのアイスティーを冷蔵庫から出し、カップに注ぐ。

ついでに鈴が買ってきてくれたお土産のお菓子も出し、二人でテーブルに腰かけた。

「で、今日はどうしたのですか? まさか新婚ごっこする為に来たいたわけじゃないでしょ?」

「簪さんの手伝いついでに、あなたへの追加資料をもってきたの」

アイスティーを一口味わい、ロリーナが自前のバックから資料を取り出す。

取り出されたそれを手に取って見ると——

『『マリアージュ8月号』心に残る結婚式特集』?』

と表紙に書かれていた。なぜ、結婚情報誌……?」

「あら、やだわ。うふふ、それは違うのよ」

ほんのり頬を桜色にしたロリーナは『間違えてしまったわ』と、やんわり私の手から結婚情報誌を取り上げた。さては、結婚情報誌を讀

みながら、結婚の妄想に耽っていたのでしようか。だとしたら新妻の真似事をしていたのも説明がつく。

「こつちが本当の資料」

言つて別の資料を取り出す。資料に記されていた内容は、潜入先の経済パーティーで使う偽装プロフィールについてだ。それに目を通しながら、私は簪の専用機開発の進捗状況について訊いた。

「そういえば、マルチロックオンシステムの開発はどうですか?」

「順調よ。経験不足はあるけれど、複雑なコードも一度で理解するし、大したものだわ。情報処理についてなら、お姉さんより有望かもしれないわね。——そうそう、そのお姉さんだけど、今日、一緒に食事してきたわ」

「会長とですか?」

「ロシアに帰郷するから、簪さんの様子をこつそり見にきていたみたいな」

「で、どうでした? 話した感想は」

「そうね。強いカリスマ性を感じられたわ。気構えや物腰は人の上に立つ大人のそれね。伊達で楯無の名を継いではないわね。でも、一番の感想は、やっぱり刀夜の娘ね。ってところかしら、フフ。それだけに一部相容れない部分もあったけれど」

「相容れない部分?」

「ええ」

気になったけれど、ロリーナは話す気がないようだった。

その後、いろいろと雑談していたら、時計の針が7時を指していた。「もうこんな時間ですか。そうです、ロリーナ。今日、ラウラとデユノアさんとでパジャマパーティーをするのですけど、一緒にどうですか? 今日も泊まっていく予定なのでしょ?」

「そうね、ラウラ・ボーデヴィツヒとも話してみたかったし、そうさせてもらおうかしら」

そうと決まれば、さっそくラウラとデユノアさんに連絡を入れないと。

夕食の後、私たちは予定通りパジャマパーティーを開催した。

場所は私の部屋。参加者は、私、デユノアさん、ラウラ、そして飛び入り参加のロリーナだ。格好はロリーナを除き、今日購入したネコの着ぐるみパジャマ姿だ。それが今夜の正装となっている。

いま、ベッドの上では、デユノアさんとラウラがじゃれ合っていた。

「ふふ、ラウラ、とつてもよく似合ってるよ」

「こら、抱きつくな。私は嫁のものだぞ」

「だって、かわいいんだもん。かわいいものはみんなで共有すべきだよ♡」

白猫のデユノアさんは黒猫のラウラを膝の上に乗せ、じゃれるように頬擦りした。

ネコに仮装したラウラはびっくりするほどキュートだ。デユノアさんが思わず抱き着きたくなる気持ちはよくわかる。今のラウラはそれぐらい愛らしい。

「ふふ、まるで『鏡の国のアリス』の冒頭ね」

テーブルでお酒を嗜んでいたロリーナが、楽しそうに言った。

確かに『鏡の国のアリス』にこんな場面が冒頭にありましたね。だとしたら、黒猫のラウラがキティ、白猫のデユノアさんはスノードロップかな。私？ 私は二匹の親猫ダイナだ。

「ええい、離れる。私は嫁のところに行くのだ」

ラウラは猫みたいにぴょくとデユノアさんの腕から飛び出すと、私の膝に飛び乗った。

そして、愛くるしい視線を寄越し、機嫌よさそうにゴロゴロと喉を鳴らす。

「さあ、嫁、存分に私を愛でるがいい」

「もう、ラウラったら！ アリスだけにはデレるんだから！」

自分の時と態度が違うラウラに、ムスッと不機嫌そうに頬を膨らませる。

心成しか尻尾も揺れているように見えた。機嫌が悪くなった猫はしつぽを振るうのだ。

「まったく、ラウラは甘えんぼさんですね？」

「な、誰が甘えん坊だ！ 私は訓練された兵——ふにゃ〜」

私が喉元をくすぐってやると、ラウラは一転して甘い声を出した。兵士に似つかわしくない声が出て、ラウラがぼっと頬を赤めて怒った。

「こ、こら。急にくすぐるから、変な声が出たではないか！」

「ふふ、そうですね。ふにゃって変な声がでちゃいましたね」

「嫁のせいだぞ。お前は旦那に恥をかかせたいのか？」

「そう怒らないでください。——ほら、好物のチョコプリンも買ってありますよ？」

しかし、好物をちらつかせても、ラウラはそっぽを向いたままだった。

「ふん、本物のネコではあるまいし、エサなどに釣られるものか」

「じゃあ、どうしたら機嫌を直してくれます？」

「……み、耳そうじ、耳そうじをしてくれたら、許してやろう」

恥かしそうに言って、腕を組む。

耳そうじですか？ また突拍子もないことを言い出しましたね。いえ、いいのですけど。

「耳かきぐらいお安い御用ですよ。えっと、耳かきの道具、どこに仕舞ってましたか」

「道具なら私が持っているぞ」

言って、どこからか柄にウサギの飾りがついた耳かきを取り出す。

「用意がいいですね」

「耳かきは、夫婦の醍醐味と聞く。だから、その、ずっとだな……—
—って何をいわすのだ！」

「ふふ、ずつとして私に耳かきをしてほしかったのですね？ では、どうぞ」

「うむー」

ふとももをぽんぽんと叩くと、ラウラは嬉しそうに頭部を預けてき

た。

そして、ふふふと何やら楽しそうに頬を緩める。

「どうしました、ラウラ?」

「ふふ、なんでもにやいぞ」

なんでもにやいのですか。どうやら、そうなってしまっぐらい膝枕が心地良いらしい。

すると、もう一匹のネコが尻尾を逆立ちさせてこちらにやってきた。

「いいな。僕もアリスに耳かきしてもらいたいなあ」

「不許可だ。嫁の耳かきは旦那の特権なのだ」

「もう! そうやっていつもアリスを独占するく!」

「独占して何が悪い。アリスは私の嫁だぞ」

ラウラがまるで“これは私のものだ”というように私に抱きつく。

はは、相変わらず独占欲の強い旦那様なんですから。

「まあ、そういわずにね。——デユノアさんもあとでしてあげますから」

私を巡って争われるのは心苦しいのでそう提案すると、ラウラがムスッと毛を逆立てた。

「こら、嫁! 旦那の断りなく、何を勝手に約束しているんだ!」

「そう怒らないでください。怒りん坊な旦那さまより、甘えん坊の旦那さまの方が、私は好きです」

「むーっ……」

言うが効果覿面。“好き”と言われ、ラウラが主張を引込める。

いい判断です。私の機嫌を損ねたら、耳かき自体してもらえなくなりますからね。

「その代わり遠慮はしないで」

「はい、遠慮なく甘えてください。——じゃあ、耳のお掃除、始めますよ」

まずベッドサイドに置いてあったウェットティッシュで、耳の入口付近を丁寧に拭く。

「ふにゃんッ」

ウエットティッシュが冷たかったのか、ラウラの身体がビクンと跳ねた。

「あ、すみません、冷たかったですか?」

「う、うむ。すこしな」

「でも、ちよつと我慢してくださいね」

引き続き、ウエットティッシュで耳の入口を丹念に拭いていく。

思いの外、彼女の耳は綺麗だった。ただ照れているのか、真っ赤ではあるけれど。

「この辺りは綺麗ですね。もしかして自分で掃除しました?」

「ああ、衛生管理も兵士の務めだからな。だが、奥はあまりだ。そこは自分の手では限界がある」

「わかりました。じゃあ、次は奥の方を掃除していきますね」

ウエットティッシュから棒状の耳かきに持ち替え、耳の中へと潜らせていく。

手前の方に大きい塊が見えた。それをちよいちよいと耳かきの先端で掻きだす。

「ほつ、よつ、こちよこちよつと」

「ふあ、にや、そこ、にゃん♡」

私がクイクイと耳かき棒を動かす度、ラウラは気持ちよさそうに身をモジモジとよじらせた。瞳もすっかり愉悦でとろけていて、まるでマタタビを嗅いだネコのようなだ。

「ふあ〜……これは想像以上に良いものだな……」

「痛くありませんか?」

「大丈夫にや」

ふふ、すっかり気が緩んでいますね。語尾がネコ語になっていますし。

その後も、ちよいちよいと耳かきを動かし、耳垢を取っていく。
(うん、コツがわかってきましたね)

それにつれて、耳かきする側も楽しくなってきた。大きいのが取れた時の快感は、結構たまらない。マイ耳かきを買おうかな、なんて思うようになった頃には、ラウラが私のひぎで息を立てていた。よつぽ

ど心地が良かったんですね。私の耳かき。

(でも、困りましたね。これだとデュノアさんに耳かきしてあげられません)

かといって、気持ちよさそうに寝ているラウラを起こすのもかわいそうですし。

すると、テーブルで私たちを見守っていたロリーナが言った。

「じゃあ、私が代わってあげるわ」

ロリーナは席を立つと、私の隣に座りつてラウラをそつと自分の膝に移す。

ラウラは『よめく』と寝返りをうって、ロリーナのものに顔を埋めた。二人とも銀髪だから(厳密にいうとロリーナはプラチナブロンドで、ラウラはアッシュブロンドだけど)なんだか親子みたい、

「姉妹の間違いよね？」

につこりと迫力のある表情で微笑まれ、私は『そ、そうですね』と視線をそらす。

そんな私をしばらく笑顔で睨んでから、ロリーナが再びラウラの髪を撫でる。

「可愛い寝顔ね。ララにも見せてあげたいわ」

「ララ？」

私の知らない名だ。ララ、とは誰だろうか。

「こつちの話よ、それよりデュノアちゃんの耳かきをしてあげなさい」
「わかりました。——では、デュノアさん。私のひざにどうぞ」

「にゃくん！」

デュノアさんのネコ耳がぴこくと立ち上がる。

私は、甘えるように擦り寄ってきた白い仔猫の耳かきを始めた。

——ウオーターワールド編

第55話 8月11日①

地下に設けられた広大な潜水艦ドック。その上層に備えられた整備監督所に少女の姿があった。

白髪の三つ編み。小さなメイド服。篠ノ之束の愛娘、クロエである。

クロエの視線の先では、ドックに寄港していた大型の潜水艦に物資が積み込まれていた。

「これであと10年は戦えるでございます」

クロエは大局を見守る司令官のような、でも小さいから全然威厳のない態度で、眼前の大型潜水艦を見下ろす。そこに兄のロキと、その部下イワンが入ってきた。

「クロエ、おまえは何と戦っているんだ？」

「あ、お兄さま。くーはただいま、地球を侵略しようとする悪い宇宙人と戦争しておりました」

「そうか、それは面白い仮想戦記だな。だが、こいつは宇宙戦艦じゃないぞ」

「だとしても、ヘスレイプニル、見事な艦ですな。長い間、潜水艦乗りをしておりましたが、このような船は初めてです」

いま寄港している潜水艦ヘスレイプニルは、もともと旧ソ連が秘密裏に製造していたもの。さらに詳しく言えば、東西冷戦時代、核戦争の脅威で人類が生き残れるように〈亡国機業〉が建造していたものだ。その最大の特徴は全長200m、排水量3万トンを超える巨大さ。広大なペイロードを有し、通常兵装に加え、工廠と居住区を持つ、「今日からコレが俺たちの本拠地で、おまえの新しい艦だ。たのむぞ、雷帝」

「既に捨てた名ではありませんが、あなたの為なら、もう一度、そうありましようかな」

ロキが部下の肩を頼もしそうに叩くと、ロシアの元海軍大佐は顎鬚

を得意げに撫でた。

そこに新たに銀縁の眼鏡を掛けた秘書官の女性がやってくる。

「ロキ、艦への補給、および物資の搬入が終了いたしました」

「そうか。では、いつでも出航できるように手筈を整えておいてくれ。そろそろ他の幹部共がしびれを切らす頃だ」

学園を襲撃したことで、ロキは組織の幹部会から糾弾を受けた。

彼が組織の実働部隊に消されるのも時間の問題だったが、少年にさしたる動揺も不安も伺えない。

「わかりました。それとローズマリーの件なのですが」

秘書は声を抑えて報告した。あまり大声では言えないことだった。

「7月7日の任務以来、どうも精神面があまり良好とはいえない状態です」

それはロキも気づいていた。秘書の女性よりもずっと早く。

7月7日のあの晩。アリス・リデルを〈亡国機業〉に連れてくることが彼女の任務だった。

しかし、簪の妨害により、それは失敗に終わった。

任務の失敗自体は予測の範疇——アリスは強い意思の持ち主なので、簡単に寝返らない事は予想されていた——であったが、ずっと妹との再会を願って生きてきたローズマリーにしてみれば、その心境は察して余りある。

織斑千冬に対抗できるローズマリーは、ロキの切り札だ。彼女の士気低下は、今後の行動に大きな影を落としかねない。

「わかった。ローズマリーには俺が会いに行こう」

「お願いします」

秘書の女性は軽く一礼し、自分の仕事へと戻っていった。

「ローズマリーさま、元気がないのでございますか？」

クロエが心配そうに兄の顔を見上げた。

「ああ、すこしな。だから、ちよつと俺が元気づけてくる。クロエは心配しなくていい」

妹の頭をくしゃくしゃと撫で、ロキは整備監視室を出る。

通路の内装は老朽化が酷かった。所々錆びつつある。もともとこ

の造船所は、東西冷戦後で経済的に困窮したソ連が軍縮の際に放棄した施設の一つだった。一度は廃棄された施設だったが、最低限の設備は生きていたので、ここを隠れ家として使っていた。

「俺だ。入るぞ」

従業員の仮眠室の前までやってきたロキがドアを開ける。

室内に入ると、美しい赤毛の美女が質素なベッドで横になっていてた。

「……ロキ？」

ローズマリーはロキの存在に気づき、身を起こした。

「大丈夫か？」

「……はい」

ローズマリーの言葉に憂いを感じたロキは髪をそつと撫でてやった。

「無理をするな。妹に拒絶されたことが堪えているのら？」

「はい。『今更、姉ぶるな』と言われて。解っていたことなのですが、思いの外、堪えました」

「大丈夫だ。おまえなら、仲を取り戻せるさ」

「でも、怖いのです。自分のやっていることが、祖母と同じだと思えて」

アリスとローズマリーの姉妹を引き裂いたのは、彼女の祖母だった。ローズマリーはその祖母を嫌っていたが、結局のところ、自分もその祖母と同じ事をしているような気がしていた。

「いや、同じじゃない。おまえの祖母は自分の欲のために、おまえたち姉妹を引き裂いた。だが、おまえは違う。妹と一緒にいたいだけだ。姉なら当然の感情だ。俺にはわかる。俺にも愛妹がいるからな」

「ロキ……」

「俺はクロエが幸せになれるなら何でもする。今までもそうしてきた」

「ロキはアフリカの少年兵でしたよね」

彼は人身売買でアフリカ小国の反政府組織に買われた少年だった。無人兵器が普及した近年、子供の人身売買は増加の傾向にある。月

光といった無人兵器は倫理プログラムによって、一応、少年兵や少女兵を殺せないようになっていたからだ。それを知っている連中は、少年少女を買い、兵隊にし、あるいは人間爆弾にし、無人機と戦わせている。

ロキもまた人身売買の組織に誘拐され、そんな連中に売られた少年だった。

彼は来る日も来る日もAKを手にも人を殺しまわった。相手が憎かったわけじゃない。そうすれば、妹に暖かい飯と寝床を与えられたからだ。

「俺は最低の人間だ。生存のためとはいえ、人を躊躇いなく殺してきた。おそらく地獄に堕ちるだろうな。だが、簡単に堕ちるわけにはいかない。俺はクロエの兄として、やらなければならぬことがある」「それは私も同じです」

「そうか。なら、俺に力を貸してほしい。俺もお前に力を貸そう。俺にはお前が必要だ」

「はい」

ローズマリーの返事に満足したロキは、ぼんぼんと彼女の髪を叩き、立ち上がった。

「俺はそろそろ行くとする。一度、ラボに戻らないといけないんでな」「では、護衛として私が一緒に」

「いや、おまえはここに残れ。この隠れ家も幹部共に嗅ぎ付けられつつある」

輸送潜水艦〈スネイプニル〉を製造するため、かなりの物資を持ちこんだ。船一隻分の物資や機材が動けば、その物流で何かあると悟られる。最初から長居をするつもりはなかった。

「おまえはここに残って、みんなを守るんだ」

「ですが」

「安心しろ。新型の〈ナルヴィ〉を一機、護衛につれていく。クロエと母さんを頼んだぞ」

「はい、お任せください」

ローズマリーは枕をぎゅっと抱きかかえながら言った。

頼りなさそう仕草と、頼りがいのある笑みに、ロキは満足して部屋を出た。



「よし、全員、そろったな」

8月11日。ウォーターワールド、ゲート前。俺は全員集合したか確認した。

メンバーは、俺、アリス、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラといういつものメンバーに加え、月子がいる。そして、その月子が『連れていきたい人がいる』と連れてきた更識さん。

「そうだ。そういえば、みんなにまだ月子を紹介していなかったな」

俺は月子を前に突き出し、紹介した。

「えっと、みんな顔は知っているだろうけど、改めて紹介するな。こいつは輝夜月子。俺が小さい頃世話になってたおじさんの娘なんだ」
「初めまして。輝夜月子と申します。以後お見知りおきを」

月子が恭しく頭を垂れる。

まず、既に顔見知りのアリスと箒が率先して自己紹介した。

「私はアリス・リデルです。不要な紹介かもしれませんが」

「ふふ、そうですね。簪ちゃんがいいつもお世話になっています」

「私もすでに紹介は済んでいるが、篠ノ之箒だ、よろしく」

「はい、篠ノ之東博士の妹さま、一夏さまの幼馴染でしたね。よろしく
お願いします」

次に鈴が前にでる。

「私は鳳鈴音。一夏のセカンド幼馴染よ」

「セカンド……？」

月子はコクンと首を傾げた。それから思い至ったように両手をパチンと鳴らす。

「あ、二号さん？」

「ちがうわよー！」

月子の天然にがぁーと吠える鈴。その後ろで箒が『では、私は正妻か。悪くない』など言う。

なおも『妾みたくに言わないでよ』と抗議する鈴と入れ替わってセシリアが自己紹介した。

「わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの国家代表候補生ですてよ？ ふふん♪」

手を腰に当て、得意の決めポーズを取るセシリア。

ばつちりドヤ顔したセシリアを、シャルロットが苦笑しながら小突く。

「セシリア、相手は日本の国家代表だよ」

そう、月子は日本の国家代表だ。立場で言えば代表候補生より上だ。

自分の失態に気づいたセシリアは顔を真っ赤にした。

「わ、わたくしとしましたことが……、こ、これは失礼いたしましたわ」

「いえ。そう、畏まらないでください。同じ年ですし、普通に接してくださいませ」

特に気分を害した様子もなく、月子は温和に微笑んだ。

うん、昔と変わらず、人当りの良い奴だ。次にシャルロットが前に出た。

「えっと、僕はシャルロット・デュノア。フランスの代表候補生やつています、よろしくね」

「まあ、デュノアー！」

月子は驚きで空いた口を手で押さえた。

「デュノアとは、あのデュノア社の方なのでしょうか？」

「うん、一応ね」

苦笑交じりで答えるシャルロットに、月子が感激したように手を取った。

「これは、これは。父もくラファール・リヴァイヴはとても良い機体と褒めておりました」

「そうなんだ。く打鉄くの開発元にそう言われるなんて、とても光栄だよ」

月子もIS企業の社長令嬢だから、シャルロットに親近感を抱いたのだろう。

そして、最後にラウラが自己紹介する。

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ。先々月は世話になった」

6月の学年別トーナメントで、月子はラウラの救出に一役買ってくれたからな。

「いいえ、こちらこそ。ラウラさまの事は常々、千冬さまからお伺いしております」

「む？ 教官は私の事をなんと？」

「可愛い妹分ができたよ、楽しそうに語っておられましたよ」

「そ、そうか！ 教官が！」

思わぬ千冬の一面を知り、表情を喜色に染める。

あまりに嬉しかったのか、その後も『可愛い妹、可愛い妹』と繰り返していた。

「よし、自己紹介も済んだところで、行こうか」

俺たちは入場ゲートに向かって歩き出した。

入場ゲートをくぐり、気前の良さそうな係員の人から半券を貰ってパーク内に入る

「おお、すげー広いな」

案内板によれば、総敷地面積は東京ドーム4個分にも及ぶらしい。設備の方も充実しており、定番の流れるプールから、ウォータースライダーや波のプール、屋内にはスパリゾートまで完備されている。しかも今日はチケット購入者のみが入場できるプレオープンなので、ほとんど貸切り状態だ。

チケットをくれた翁おじさんに感謝しないとな。

「月子、おじさんにチケットの礼を言っておいてくれな」

「はい、かしこまりました（はあく、一夏さまと休暇を過ごさせるなんて幸せやわあ……♡）」

言って、両手を合わせる。さきほどから月子はずっと楽しそうだった。月子もこのテーマパークの広さにワクワクしているのだろう。

誘った側としても嬉しい限りだ。もっともチケットを用意してく

れてのは、おじさんだけだ。

「一夏さまも、お誘いくださってありがとうございます」

「おう。月子も忙しいのに来てくれてありがとうな」

「いいえ、今日は丁度、お暇を頂いておりますから。（いえへん、今日の為に代表の仕事がんばったなんて、いえへん）」

俺と月子が和やかなムードに包まれていると、鈴とセシリアが不満そうに割り入ってきた。

「ちよつとー、あたしたちだってチケットを用意したんだから感謝しなさいよ」

「そうですね。そうですね。日本の代表ばかり、ずるいですわ」

「わかった、わかった。そうだな。じゃあ、今度、お礼に食事でもご馳走するよ」

二人は急に身を乗り出した。

「もしかして一夏さんの手料理をご馳走して頂けますの!?!」

「ああ、腕によりをかけてご馳走するよ」

これでも織斑家の台所を預かってきた身だから、料理の腕前には自信がある。それは千冬姉を唸らせるほどだ。チケットの札にその腕を振るおうじゃないか。

「約束よ、一夏!」「約束ですわよ、一夏さん」

「ああ、約束だ」

嬉しそうに両手を合わせるセシリアと、「よし」とガッツポーズを小さく決める鈴。

そんなに喜ぶことなのだろうかと思いつつ、俺はみんなに言う。

「じゃあ、着替えたあと、あの時計台に集合な」



女性用更衣室。

「しっかし、相変わらず、すごい胸してんわね、こ、こんなの卑怯だわ……」

みんなが水着に着替える最中、ぷるんと解放された箒の胸を見て、鈴が呻いた。

日頃から「巨乳は敵」と主張している鈴は、まるで親の仇でも見る目付きでそれを睨む。

「ひ、卑怯とはなんだ。これは生まれもったものだ、卑怯もなにもあるものか」

繁々と見つめられ、箒は守るようにコンプレックスである胸を隠した。

それでも隠しきれない豊満な乳房が、鈴の顔をさらに険しくさせる。

「いや、卑怯でしょ。そんなもんぶら下げられたら、こっちは戦意喪失よ。ねえ、セシリア」

と、既に黒のビキニ姿になっていたセシリアに訊く。

セシリアは箒の胸に戦きつつも、強がるように言った。

「た、確かに、大きいですが、女性の魅力は胸じゃありませんわ！ おしりこそ、女性らしさの象徴ですよ！」

そう言つて、ヒップラインを強調するようなS字ラインを作る。モデルを兼任しているだけあり、実に綺麗なくびれた曲線を描いていた。しかし、それ以上に目がいったのは、彼女の黒い水着だ。

「せ、セシリア、よくそんなものを着られるな……」

セシリアの水着は、大半が紐で、肝心な逆三角地帯でさえ手の平サイズしかない。トップも同様で、ほとんど全裸だ。むしろ僅かに隠れている分、いやらしく感じる。しかし、それはチエルシーがダメと言っていた水着じゃなかっただろうか。

わたし知くらないつと、顔を背けるアリスを余所に、セシリアは自慢のヒップを突き出した。

「ふふん、これで一夏さんの視線はわたくしのヒップに釘づけですよ」

「なに？」

一夏の名が出たことで、箒の対抗意識に火がついた。

「そんなことあるものか。い、一夏は、わ、私の胸が好きに決まってい

る！ なんせ胸の膨らみは女性の象徴だからな。男性は女性の大きな胸に“女らしさ”を感じるものだ」

「いいえ、一夏さんはわたくしのおしりにメロメロですわ！」

「いいや、一夏は私の胸に籠絡寸前だ！」

自らのたわわに実った胸を持ち上げ、大いに巨乳を主張する筈。

それに対抗してグッと尻を突きだすセシリア。

なおも、胸、尻、胸、尻と言い争う二人の端で、なぜか鈴が膝を抱えて蹲っていた。

「どうせ、あたしはお尻も胸もないわよ……」

などとぼやく彼女の背には、淀んだ空気がのしかかっている。どうやら、二人の言い争いで一番ダメージを負ったのは彼女のようなのだ。

そんな彼女を励ましたのは意外にも犬猿の仲であるラウラだった。

「そう思い悩むな、鳳鈴音。小さいからといって“女性らしくない”

わけではない。むしろ、小さいからこそ生まれる“女性の可愛らしさ”というものがある。鳳鈴音にはそういう可愛らしさがあると思うぞ。それに私の部下が言っていた。『ぺったんこは正義』だと」

握りこぶしを作って語るラウラに、鈴は目頭が熱くなるのを感じた。

「ラウラ……。あんた、いい奴ね」

「うむ、私はいいやつなのだ」

そう言って、二人は熱いハグを交わす。

同族嫌悪ならぬ、同族意識が、二人の友情(?)を育んでいた。

「なんだろうね、この光景」「はは、みなさん仲がよろしいようぞ」

シャルロットと隣の月子が言った。

右では胸、尻、と言い争う筈とセシリア。左では貧乳とぺったんこが熱い抱擁を交わしている。傍からは異様な光景に見えた。今、脱衣所に人が訪れれば、きっと回れ右して去っていくだろう。

(……帰りたい)

このわけの解らない空気に、簪は人知れずぼつりと漏らした。

全員が時計台に集合すると、周囲にギャラリイができて始めていた。「え、何、芸能人の撮影会?」「うわ、あの外国の女の子、ちよーかわいい。モデルかな?」

「てかき、何で男が一人だけ混ざってんの?」「うわ、ラノベだよ、ラノベ」

なにせ美少女の一团が艶やかな水着姿で集ったのだ。注目の的にならない方がおかしい。

特に俺を見る男子の視線が痛く、殺意が宿っているんじゃないかって思えるほどだ。あまりこの場に留まるのは精神衛生上よろしくないな。早々に移動しよう。

「よし、全員そろったようだな。で、どこから周る?」

このウォーターワールドには、流れるプールに波のプール、定番のウォータースライダーなどがある。中には広い面積を活かしたバナナボートなんでものまで体験できるらしい。

「私はアレがいい」

ラウラが指差したのは、山を削って作ったような大型のウォータースライダーだ。

全長400mにもなるそれは、このウォーターワールドの名物らしい(パンフレット情報)。

「いいね。——みんなはどう?」

「そうだな。面白そうだし、俺はかまわないぞ」

シャルロットが便乗し、俺がOKすると、話は一気にまとまった。

「よし、決まりだな。では、あの山岳地帯に向けて全員進軍を開始する、遅れるなよ」

浮き輪の穴にすっぽり身を潜らせたラウラが楽しそうに小走りで駆けだす。そして係員の人に『危ないので走らないでください!』と注意され、『む、すまない』と謝っていた。

(はは、もしかして、ここにきて一番ワクワクしているのはラウラかもしれないな)

そう思えるぐらいのはしやぎようだ。同時に微笑ましい光景だった。

さて「少佐殿が遅れるなよ」と言ったので、俺たちもラウラのあとを追いかけた。

「おお、このウォータースライダーは4コースもあるのか」

俺たちがやってきたウォータースライダーは、全部で4種類のコースで構成されていた。

コースによって急流速度が異なっていて、苦手な人でも楽しめる仕様になっている。

「ねえ、一夏。これ、二人まで一緒に滑れるらしいわよ」

「おお、そうなのか」

「だ、だから、あたしと、どう？」

鈴はウォータースライダーの二人乗りボートで顔を半分隠しながら、俺を見た。

そうだな。最近、構ってやれてない気がするしなあ（兄感）。

「おう、いいぜ」

「(よしっ) じゃあ、決まりね。行きましよう」

と、鈴が嬉しそうに俺の腕を取り、4番と書かれてコースへ向かう。その後ろで、例の如くセシリアと箒が『あぁー』と非難めいた声を上げるが、これまた例の如くアリスが宥めた。

「ほらほら、二人ともチャンスは平等に、ね」

「う、うむ、お師匠様がそういうなら」「しかたありませんわね、アリスが言うなら」

アリスに宥められた二人は、やや不満げにするも素直に引き下がった。

アリスがこちらにウィンクを送る。じゃあ、アリスの言葉に甘え、鈴と行くとするか。

「で、どこのコースを滑るんだ？」

「もちろん、4番コースよ」

「おいおい、大丈夫か？ 上級者コースって書いてあるぞ？」

「大丈夫よ。なんとってあたしは中国の代表候補生なんだから」

そりや、どういう理屈だ。身体能力が高いから大丈夫ってことなのだろうか。

まあ、鈴のことだから、根拠も理屈もないのだろうけど。鈴はいつだって出たとこ勝負だ。

「で、鈴、前か後ろ、どっちに座る」

借りてきたボートは前と後ろがあるタイプで、そのどちらに座るかを訊いた。

「そうね、前かしら」

「じゃあ、俺は後ろっと」

コース入口までやっていると、係員の人が簡単な説明と注意をしてくれた。

「お客様、このコースは大変スピードが速くなっております。ボートから落ちないように後ろの方が前の方をしっかりと支えてあげてください」

係員説明を聞き、俺と鈴はそろって赤面した。

俺が鈴を抱きしめろ、と？ 確認する俺に、係員さんが頷く。

「はい、ぎゅっと」

思わず鈴の反応を窺う。鈴は『まあ、し、仕方ないんじゃない？』という顔をしていた。頬はどこか赤い。もしかしたら照れているのかもしれない。それは俺も同じだけど。

「じゃあ、その、さわるぞ？」

「う、うん」

硝子細工でもさわるかのような手つきで、そつと鈴の腰に手を回す。

中学生時代からの友人とはいえ、いぎ体に触るとなると緊張するものがあった。胸こそ控え目な鈴だが、プロポジションはスレンダーで女性らしい。こうして触ると、否応なしに鈴を女と意識せざるを得なかった。

裡から邪な感情が湧き上がってくるが、俺は理性を総動員して鈴をぎゅっと抱きしめた。

「ふや……ッ」

すると、鈴が甘い吐息を吐きだし、身を小さくすくめた。

俺はビクツとなつて手を離す。

「わ、悪い。変なところさわったか!」

くそ、女性を抱きしめたことなんてないから、どこに手を回しているかわからん。

「ううん。ちよつとびつくりしただけ。大丈夫（うう、変な声がちやったじゃないの! あたしのバカ! カッコ悪いツ……!）」

「そ、そうか。じゃあ、その改めて」

俺は改めて鈴を背後から抱きかかえる。鈴も俺に背を預けた。

うう、こういう格好は、まるで恋人がいちやいちやしているみたいで気恥ずかしいな。

「では、当テーマパークの名物ウォーターライダー、ご堪能ください」

係員が俺の背中を押すと、ボートがチューブ状のレールに沿って流れ始める。

それに従つてボートがどんどん加速していく。

どんどん……、どんどん……。

なおも加速し続けるウォーターライダーに、俺はこめかみを引き攣らせた。

「な、なあ! 鈴! なんだか、こ、これ、速くないか!」

「だ、大丈夫よ! こ、これぐらいスリリングじゃないとつ!」

なおも加速し続けるゴムボートは、俺たちを恐怖の急流すべりに誘っていく。

気づくと、ボートは絶叫マシンもかくやという速度まで加速していた。正直、安全性を疑うレベルだ。おかげで、発進前の気恥ずかしかった雰囲気は一掃された。

「りくん、やっぱり4番はやめておくべきじゃなかったかあ!」

「だ、大丈夫よ、あ、あたしは、中国の代表候補生なんだから、これぐらい平気よ——うっぷ」

「酔ってんじゃねーか!」

凄まじい激流にボートが左右に揺れる、揺れる。時にはチューブ内

を一回転するほどだ。さすが上級者向けを豪語するだけあって、とにかくスリリングなコースとなっていた。

「つか、長くねッ、このコース！ 全然ゴールが見えてこないんだが！」

「い、一夏、あれ。出口だわ」

よし、これでようやく終わる——と思った矢先、俺たちは妙な感覚に囚われた。

え、なんだ、このフワリとした浮遊感。

もしかして……と、下を向けば、俺たちは地上5mの位置に放り出されていた。

「うわあああああー！」「きやあああああー！」

じゃぽーんと水面に壮大な水柱を作る俺と鈴。

ぷはっと、水面から顔を出した俺は、水死体のように浮かぶ鈴へ不満をぶつけた。

「鈴、やっぱり4番コースはやめとくべきだったって……」

「ぶくぶく、ぶくぶく（そうね、ごめん……）」

まあ、久しぶりに鈴とバカができて、楽しくはあったけど。

第56話 8月11日②

ウォーターワールド休憩所。

一夏たちの悲鳴を遠くで聞きながら、簪は自前のラップトップパソコンを立ち上げた。

起動までの待ち時間、ポーチからジュエリーケースを取り出し、サファイヤの指輪——<打鉄式>の待機形態——をそこに接続する。リンクが確立されたところで、デスクトップにアニメキャラの壁紙といくつものアイコンが表示された。

数あるアイコンの中から、おもちゃ箱のアイコンを選んでクリックする。

このアプリケーションは、ロリーナが提供したプラットフォームだ。高性能エディターから、ユティリティーツール、ランタイム、仮想上でISをシミュレーション可能な物理エンジンまで、ISのソフトウェア開発に必要な機能が実装されている。

画面左下では、三頭身デフォルメされたロリーナがVer2.10のアップデートを報せていた。

クリックして「ホイボックス」を最新バージョンに更新する。

更新バーを眺めていると、簪の前にぬーつとビニール製のシャチが現れた。

「へいへい、そこの可愛いお嬢さん、パソコンなんてやめて俺と遊ぼうぜ」

ビニールのシャチ——で腹話術するアリス——を一瞥もせず、簪は鬱陶しそうにシャチを視界の端に追いやった。

「……わたしのことはいい。……アリスは楽しんできて」

しかし、アリスはシャチの口先で簪の頬をぐりぐりしながら、しつこく誘ってくる。

「そう言わないでさ。せつかく来たんだからよく、一緒に遊ぼうぜ」

ぐりぐり、ぐりぐり。でも、簪はアリスの妨害を頑なに無視し続ける。

もともと簪はウォーターワールドに来たかったわけじゃない。月子が『来ないと多機能フェイズドアレイリーダーわたさへんで』と脅してきたもんだから、従わざるを得なかったのだ。

月子としては、他の代表候補生と交流を深め、その技術や気概を学んでほしかったのであるが（なにせ代表候補生の本分は、ISの開発じゃなく操縦技術を磨くことだから）、意に反して簪はずっとこの調子だった。

なおも、ウォーターワールドそっちのけでIS開発に勤しむ簪の前に、警告ウインドウが現れた。

「ISを認識できません。接続を確認してください」

簪はISとPCを繋ぐソケットを確認した。

ジュエリーケースには、＜打鉄式式＞の待機形態である指輪がなかった。

「綺麗な待機形態ですね。どうです、似合いますか？」

薬指に指輪をはめて遊ぶアリスに、簪が眉をひそめた。

「……アリス、勝手にとらないで……」

ムスツとした簪が、アリスから＜打鉄式式＞を奪い返そうとする。しかし、アリスが意地悪に指輪を遠ざけるため、なかなか手が届かない。業を煮やした簪は右手を振り上げた。

「……アリスでも、お、怒る……よ」

それは、場合によってはぶつからね”という警告だったが、なんせ相手はあのアリス・リデルである。簪の弱々しい脅しが、通用する相手ではなかった。

そもそも、非生産的なことにエネルギーを使いたがらない簪は、喧嘩どころか誰かを怒鳴った経験すらない。そんな人間の啖呵などが怯まうか。

「あなたも代表候補性の端くれなら、実力で取り戻してはどうです？」
「……ならー！」

これ以上言っても無駄だと悟った簪は、全力でアリスに踏み込んだ。こう見えても日本の代表候補生だ。身の熟しは常人のそれと一線を画す。跳んだ簪はまるで疾風のようにだったが、

「ほいっと」

マタドールよろしくあつさりいなされた。勢い余って派手にべったろん」と転ぶ簪。

周囲から『イタそう』とくすくす笑いが起こり、簪は顔を真っ赤にした。

「……アリス、もう、許さ……ない」

肩を震わせながら怒るも、やはりアリスは怯えた様子を見せなかった。

「きゃー、こわい。なので、私は逃げることにします」

そればかりか、道化のようにおどけて身を翻す始末。

<打鉄式式>を持ったまま逃げたアリスのあとを、簪は「……こらあ〜」と追いかけた。



アリスと簪が鬼ごっこを始めた頃。

鈴とセシリアは、浮き輪におしりをすっぽりと収め、流れるプールをたゆたっていた。(ちなみに一夏と箒は波のプール、シャルロットとラウラは月子と馬が合ったらしくIS談義に花を咲かせている)

「ああ、いいわ〜、このゆっくりとした感じ、癒されるわ〜」

「ここ数か月、何かと大変でしたものね〜」

襲撃やら暴走やらで、一学期の学園生活は波乱の連続だった。その反動か、こういうゆったりした流れが本当に心地よかった。二学期は、この流水のように平穏であって欲しいものだ。そう思いながら流れに身を任すセシリアたちの耳元に、早くも騒がしい声が聞こえてきた。

「簪さん、こちら、手の鳴る方へ〜」

「ま、待って、返して……」

遠目からでよくわからないが、簪がアリスから何かを取り戻そうとしているようだ。

セシリアと鈴は顔を見合わせた。

「なにやってんのかしら、あいつら」

「さあ。でも、簪さんえらく怒っている様子でしたわね」

興味がわいた二人は、しばらくアリスたちを観察することにした。

「……あ、アリス、いい、加減にしないと。ひ、酷い目に遭わせ、る」

「ほおー、一体どんな目に遭わせるっていうのです?」

強気なアリスに、簪が小型端末を見せつける。

その画面には、腹をかきながら涎を垂らして爆睡するアリスの動画が再生されていた。

「……この動画をYouTubeにアップする」

セシリアと鈴はそろって「確かにそれは酷い」と思った。

無防備な寝顔——それもみつともなく涎を垂らしている動画を全世界に配信されるなんて、いい恥さらしだ。アリスは血相を変えて、簪に飛びかかった。

「こら、やめなさい」

「……だめ、返してくれないと、HDで配信する」

「ちよ、やめて」

「……じゃあ、4K」

「もつとダメですつてば!」

ケータイを奪おうとするアリスに、〈打鉄式〉を取り戻そうとする簪。そんな二人の取っ組み合いを遠目から見ているなら、アリスの手からぴゅーんと指輪が飛んできた。それがうまい具合に鈴の手に収まる。

「なにこれ」という鈴に、アリスが叫んだ。

「鈴、それを簪に渡してはいけません!」

どうやら、アリスは意地でも簪から〈打鉄式〉を取り上げ、このテーマパークを満喫させるつもりらしい。

その意図を汲んだかはわからないが、セシリアと鈴が強く領いた。

「わかりました。必ずや守り抜いてみせます!」

「任せておきなさい!」

二人はぐつと親指を立て、流れるプールを進む。簪は「任されない

でッ……」と眩き、流れるプールに飛び込んだ。そして、外見に似合わないアクティブな泳ぎでセシリアと鈴を追いかける。

「鈴さん、このままでは追いつかれてしまいますわ」

「陸に上がりましょう」

二人は浮き輪をプールの淵に寄せ、飛び込み台の方向へ逃げようとしたが――

「あ、りんさん、ちょっと待ってくださいいな」

急にセシリアが困惑した声を出した。

「どうしたのよ、セシリア、あの子がそこまで来てるっていうのに」

「あ、あの……う、浮き輪が……」

そう言って、浮き輪の穴にすっぽり収まったままの尻を突きだす。

どうやら、浮き輪の穴から尻が抜けなくなってしまったらしい。その光景ときたらマヌケそのものだったが、セシリアの肉感的なヒップラインと、瑞々しい柔肌に食い込むビモ水着のせいで、どこか官能的だった。

「まったくエロい尻しているから、そうなるのよ！」

「エロくありませんわ！ 安産型と言ってくださいいな！」

「ほら、手伝ってあげるから、はやくしなさい。いくわよ――ひっひっふー！」

なぜかラマーズ法で浮き輪を力いっぱい引つ張る鈴。

ぽんつと、勢いよくセシリアの卑猥なおしりから浮き輪が外れた。

「もう、ちゃんと自分のおしりの大きさをぐらいい――あ」

「だから、わたくしは安産型だと――って、ど、どうしましたの、鈴さん？」

どこか気まずそうな鈴の表情に、セシリアは嫌な予感を覚えた。

なにより、先ほどからスースーする股間の解放感が気になる。

セシリアは恐る恐る股間に視線をやった。――案の定、そこにはあるべき水着がなかった。おそらく、おそらくだ。浮き輪を外す勢いが強すぎて水着の紐が解けてしまったのだろう。

幸いにも周囲には誰もいなかったけれど、セシリアは慌てて股間を両手で隠した。

「りんざく ん!!」

自分をひん剥いた鈴を、セシリアは真っ赤な顔で睨みつけた。

「あはは、勢い余って一緒に脱がしちゃったみたい、ごめんね」と、落ちていた水着を拾い上げ、セシリアにわたす。

セシリアは片手で秘所を隠しながら、水着をひったくった。

「こればかりは許しませんわよッ!」

「じゃあ、逃げる」

言うなり、びゅくと猫のように逃げだす鈴。

そんな鈴と入れ替わる形でやってきた簪が、おしり丸出しのセシリアを見て首を傾げた。

「……痴女?」

セシリアは顔を真っ赤にしながら、光の速さで水着を身につけた。

「違いますわ! たとえ痴女だとしても、わたくしは痴女という名の淑女ですわ!」

それはすなわち痴女だったが、半狂乱に陥っていたセシリアは気づかない。

なんにしろ、公共の場で股間を丸出しにしているのは、痴女と間違われても仕方なかった。

「……性癖は人それぞれ。でも、場所をわきまえるべき」

常識的な言葉を残し、簪は鈴を追いかけた。セシリアは人知れず泣いた。



アリスから始まっていたいじわるなく打鉄式式のリレーも終盤を迎えつつあった。

逃げた鈴を追いかけ、簪はついに10m級の飛び込み台、その先端に追い詰めた。

「……もう、逃げられない」

簪が途中で拾ったデッキブラシを鈴に突きつける。

「ふん、やるじゃない。このあたしをここまで追い詰め——ごふゆッ」
いきなり鳩尾みぞおちにデツキブラシを喰らい、変な声が出る。

専用機のことになるとアグレッシブになる簪である。

「けほ、あ、あんたね、褒めてんだから最後まで言わせなさいよ！」

「……別にそういうの、いらないから。早くわたしの専用機、返して……」

と、デツキブラシを構える。簪は母親譲りのなぎなた使いだ。長柄を持たせれば、右に出るものはいない。素手では、さしもの鈴でさえ勝ちを薄いだろう。しかし、鈴は降参しなかった。

「それであたしを追い詰めた気？ なら早計つてもんよ。——中国の代表候補生をなめないで！」

「!？」

鈴が屈み、跳躍した瞬間、簪は瞠目した。鈴が中国雑技団ばりのアクロバットを決め、飛び込み台からジャンプしたのだ。しかも、難易度の高い背面ジャンプで。

簪が飛び込み台の下を覗き込むと、鈴は綺麗に着水を決めていた。



飛び込み選手も顔負けの着水を決めた鈴は、すぐに水面から顔を出し、上を見上げた。

視線の先では、簪がこちらを驚いた顔で見下ろしている。

「ふふふ、これでもう追ってこれないでしょう」

臆病な簪に10mの高さから飛び込む勇気があるわけない。鈴はそう思っていた。

だが、それが過小評価であることを、直ぐに思い知らされることになった。簪が迷いなくこちらに飛び下りてきたのだ。

完全に油断していた鈴は、着水の影響をモロに受けた。

「あばあッ!!」※いい子はちゃんと人がいない事を確認してから飛び込みましょう。

水しぶきを大量に浴びた鈴がゲホゲホと咽ながら陸に上がる。

プールサイドで呼吸と整えたあと、鈴はぷかんと水面から顔を出した簪をビシッと指差した。

「や、やるわね。なかなか度胸があるじゃない!」

「……前、隠した方がいいと思う」

「へ?」

簪の手に見覚えのある水着を見つけ、自分の胸を見下ろす。

ひかえめだが、確かなふくらみ。綺麗な濃い桜色の頂点。小さくも形のいい双丘が惜しげもなく、簪の前で曝け出されていた。さらに日焼けのあとが乳房の輪郭をくつきりさせていて、どこか煽情的だ。

「きゃあああー!」

慌てて胸を隠す鈴に、これ好機と踏んだ簪が「……チャンス」と飛びつく。

胸を隠すだけで精一杯だった鈴は、ほとんど無抵抗に簪の接近を許してしまった。

「ちよつと、どこさわってんのよつ。そこは一夏にだつてまださわらせてないのに!」

「……式式を返してくれば、……変なこと、しないから」

「もうしてるわよつ!」

気が動転した鈴は「離れる離れる」と手を振り回した。その拍子に、はめていたく打鉄式式>がスポ抜け、また明後日の方向に飛んで行く。

放物線を描きながら飛んでいった指輪の行き先は、露店商のたこ焼き屋だった。

しかも、図つたように指輪がたこ焼きプレートに、ぽちちゃんとカップインする。

「……ああッ、わたしのISSッ!」

簪は慌ててたこ焼き屋に駆け寄った。だが、距離があつたせいで、どの穴に自分の専用機が入ったのか判らない。店主も気づいていないのか、「らっしやい」などと言ってくる始末。

このままじゃ、く打鉄式式>がたこ焼きの具に……。

「む、簪じゃないか。どうしたんだ、たこ焼きが食べたいのか？」
絶望的な気分になる簪の元に、男女の二人組が通りかかる。一夏と簪だった。

「……ちがう、実は——」

簪は一夏と簪に、ここまでの経緯を話した。

事情を聞いた簪が苦笑する。そして一夏はすこし考えたあと、はっきりと店主に言った。

「おじさん、ここにあるたこ焼き、全部もらえる？」

それを聞いたとき、簪は『月子が彼を好きになった理由』^{わけ}がわかった気がした。



午後12時。俺たちは一度集合して昼食を取る事にした。

食事場所はパーク内の休憩所。メニューは俺が買った大量のタコ焼きだ。

「へえ、おごつてくれるなんて気前いいわね」

「鈴、おまえは払え」

「一夏さんがごちそうしてくれるなんて、うふふ」

「セシリア、おまえも払え」

「一夏は気前がいいですね」

「アリス、おまえの分のたこ焼きはねえから（真顔）」

「は？」「えー」と文句が出ようが、俺は容赦なく鈴たちから料金を徴収した。

アリスには「これ、おまえの昼食な」と爪楊枝を渡す。反省するまで、おまえは兵糧攻めだ。

「よし、みんな、食おうぜ」

アリスの首に「エサを与えないください」という札をかけ、たこ焼きのふたを開けた。香ばしいソースの香りが辺りに漂う。それに食欲を刺激されていると、月子がたこ焼きのひとつをふーふーして

持ってきた。

「はい、一夏さま、あくん♡」

「待て待て。大勢の前でそれは恥ずかしいって」

公共の場で「あくん」ができるほど、俺の神経は凶太くない。

ほら見ろ、通りかかった男どもが揃いも揃って悪意丸出しで睨んでくるじゃないか。

『ちっ！ いいよな。あんな可愛い子に食べさせてもらえて！』

『ちっ！ こっちは男三人だつてのによお〜！』

こういう嫌がらせって、地味に心的ダメージが大きいんだぞ。

それに気づいているのか、いないのか、月子は口先を尖らせた。

「そんなに恥ずかしがらずとも、昔から食べさせ合いつこしていたではありませんか」

「それはママごとの話だろ？」

「では、これもママごとだと思って頂ければ、よろしいかと」

「おもえねーよ！」

俺たちはもういい歳なんだ。ママごと気分になれるわけがない。

「てゆーか、さつきから聞いていれば、あんたらつて、そんなに昔から知り合いだったの？」

俺たちの様子を険しい表情で睨んでいた鈴が耐えかねたように言った。

チャンスだ。俺は『あいやー』と言う月子をひっぺがしけながら、昔の記憶を掘り起こした。

「確か……俺が五歳頃かな。それで千冬姉が自立できるまで一緒に暮らしていたんだ」

定かな記憶じゃないが、俺たちの両親が蒸発したのが大体10年ぐらい前。

月子の——輝夜家の下で生活するようになったのは、その頃からだったと思う。

「期間的には、筈と同じ時期ぐらいだな」

「だったら、なんであんたたち面識がないのよ？」

鈴は筈と月子を交互に見比べた。それに月子が答える。

「当時は病弱でほとんど家におりましたし、通っていた学校も違っておりましたから」

「私も一夏の家には、ほとんど行かなかったからな。交流の大半は道場と学校だ」

「なるほど、顔を合わせる機会はそれほどなかったと」

と、アリスが比較的やさしいシャルロットから、たこ焼きを密輸しようとして手を伸ばす。

その手を簪さんがパチンとはたく。ナイスセーブだ、簪さん。

「……………ダメだから」

「……………ちっ」

にらみ合う簪さんとアリス。その様子を見て、苦笑するシャルロット。

そして、箒が続ける。

「そうだな、記憶に残るほど会っていなかったのだろう。風貌も以前と変わったようだしな。当時は、おかつぱ頭ではなかったか？ それがこんな美人になっているなんて驚いたぞ」

「だよな。それに今じゃ日本の国家代表だっていうし」

「それほどでもありません。人より環境に恵まれておりましたから、それだけです」

確かに月子はIS企業の令嬢だし、人よりISに触れられる機会は多かつただろう。だとしても、代表まで上り詰めるには、それだけの努力が必要だ。ISを動かせるだけじゃ、上り詰めることはできない。ここ数か月で俺が実感したことだ。

「で、月子、今はどうしているんだ？」

月子はIS学園の生徒ではない。ということとは、別の学校に通っているってことだ。あるいは、家庭教師を雇って自宅学習しているか。おじさんは人との協調性を大事にする人だから、後者はないだろう。

「今は聖マリアンヌ女学院に学籍を置いております」

聖マリアンヌ女学院。どこかで聞いたことのある名前だ。確か……………

「あんだ、それ、蘭が通ってる学校じゃない！」

そうだそうだ。今日誘おうとした友人——五反田弾の妹が通っている学校だ。確か大学までエレベーター式で、かなりネームバリューのあるお嬢様学校だったはず。でも、驚くのはここからだった。

「もしかして、蘭とは五反田蘭ちゃんのことでしょうか？」

「そうそう、——って知ってんの？」

「はい、私が中等部の生徒会長を務めていた時に、蘭ちゃんは副会長でしたので」

「そうなのか！」

これは驚きだ。まさか月子と蘭が顔見知りだったなんて。世間っ
て思っているより狭いんだな。

「もしや、二号さんは蘭ちゃんと」だから、二号いうなつてのっ——
お知り合いで
「おひりあいへ？」

「こら、鈴、月子のほっぺをつねってやるな」

「く、これが正妻ファーストの余裕か」

「知り合いつていうか、実は俺たち蘭の兄貴と同じ中学だったんだ」

「ほんまに!?!——あ、すみません。本当に？ 世間はせもうござい
ま
すね」

「だよな」

「そういえば、この前『IS学園に入学したい』と相談されましたの
で、父の会社で適正テストを受けて頂いたんですよ。そしたら——」

「A判定だろ？ すごいよな」

「はい。将来は有望だと父も期待をよせておられました。私も期待し
ております」

そこで鈴が小声で月子に耳打ちした。

「てかさ、あんた、蘭がIS学園に入学しようとした理由、聞いてない
の？」

「はい。そこまでは聞いておりませんが」

「あの子、一夏が好きなのよ。だから、IS学園に入学するって言い出
したのよ？」

「(そうだったのですか!?)」

ん、どうしたんだ、月子のやつ。目を真ん丸にして。

(あんた知らなかったの!?)

(は、はい。私の学校は格式の高い女学院なので、異性交遊に厳しい校風なのです……。おそらく口外にできなかったのだと。私も一夏さまの事を蘭ちゃんに話しませんでしたし。しかし、こんな事があるとは……)

うん？　なんかすごく月子が怨めたい視線を送ってくるんだが……。

「一夏さまは、罪な殿方でございます」オヨヨ

「ほんと、一夏は罪ね」

「ああ、罪な奴だ」

「大罪者ですわね」

なんだ、お前らまで一緒になって。罪、罪、つて。人を犯罪者みたいに。

俺が何をしたっていうんだよ。そっちがその気なら、名誉棄損で訴えるぞ？

「気づいておらぬから、罪なのでございます！」

月子は泣きまねをやめて立ち上がった。さらに一同が「うんうん」と頷く。

え、俺が悪いの？　なんだか、完全に俺が悪役なんだが……。

「そ、そういえば、〈白式〉は元々おまえの専用機なんだつて？」

「うわ、逃げたわね……」

うっせえー。おまえらが批難するから居た堪れなくなっただよ！

「なんだか、悪いな。俺の所為で」

「いえ。こちら側としてもデータを取らせて頂いておりますので、Win—Winです」

〈白式〉は日本帰属だから、その稼働データは開発元の輝夜重工にフィードバックされている。この前やってきた技術者さんからは「有効なデータを提供してもらえて頭が下がる思いだ」なんて言われたな。なんでも《単一仕様能力》や男性操縦者のデータは、貨幣価値に換算すると何億の価値があるって話だ。俺すげえー……。

「それと、アリスさまも、本当にお世話になっております」

と、月子がアリスにたこ焼きをあくるんする。

あ、こちら……エサを与えるなって首の看板に書いてあるだろ。

「はふはふ。簪のことなら、気になさらずに。はふはふ、大した事していませんから」

「……その通り。……最近、整備科にきてもゲームしてるか、寝てるか。まったく役に立ってない」

「……むしろ邪魔」と簪さんが半眼を向ける。はは、こりやさっきのこと根に持つてんな。

そんな簪さんの肩をアリスがトントンと叩く。

「かんざし」

と、ベーと出した舌上には、サファイヤの指輪。簪さんの専用機だ。『……うえッ』という顔で、簪さんがばつちいもの触るような手つきで、唾液まみれの専用機をつまむ。そして、手持ちのミネラルウォーターで必死に洗い出した。

その様子をカラカラと笑うアリスから電子音が聞こえてくる。ケータイの着信音だ。

画面を確認したアリスが「ちよつと、失礼しますね」と言って席を外す。

離れる直前に「できるだけみなさんから離れないでください」と、俺に告げて。

♡

◆

♣

♠

一夏たちから離れたあと、人気のない場所までやってきた私は自前のケータイを確認した。

西エリアの機材置き場にこい。そう表示された画面を見て、ここで間違いないことを確認する。

「どうしました」

私の声に応じて、何もない空間から一機のISが現れた。

白い甲冑のような装甲。翼のような大型推進器。腰のハードポイントにはプラズマブレードが格納されている。電磁光學迷彩を解除して現れたISは、誰もがよく知る〈白騎士〉——をリプロダクトした機体〈白兵士〉だ。

今は電子戦用パツケーヅ〈ヘビシヨップ〉を装備しているのか、側頭部左側に大型のブレードアンテナ、右側肩部に大型レドームが装備されている。

頭部をHMDで覆っているため、顔は見えないが、私は彼女の正体を知っていた。

彼女は、別の作戦でここを離れる私の代理戦力として派遣された〈テウス・エクス・マキナ〉情報部のエージェントだ。そのエージェントが抑揚のない声音で言った。

「織斑一夏を監視する影を確認した。詳しいことはまだわからないが、複数だ。最低でも二人はいるとみている。エイダが調査しているが、おそらく例の組織だ。他にも潜伏しているかもしれない。おまえも警戒しておけ」

例の組織。私たちが〈彼女たち〉と呼称している謎の秘密結社だ。女性優遇を謳う女尊男卑の根源的存在。その組織が本格的に動き出したという話は私も聞いている。

この数か月。一夏はいくつもの功績をあげた。それによって『女性より男性の方がISのマシンポテンシャルを引き出せるのではないか』という憶測が飛び交い、『男性操縦者には稀少価値以上のものがあるのでは?』とう見解が為され始めたらしい。

それによつて男性機運の高まりを恐れた〈彼女たち〉が、本格的に動き出したというわけだ。

「ISを装備している可能性は?」

「わからん。だが、可能性としては高いだろう。もつとも、織斑一夏の周囲にはかなりの専用機もちがある。迂闊に手は出せんだろうが、〈彼女たち〉が政治的な圧力をかければ、切り離すことも可能だろう」

「どの政府にも依らない私たちだけが頼り、ということですか」

私たちしか彼を守れない。そう思うと、私はなんだか彼の許を離れ

るのが躊躇^{ためら}われた。

そして、そう思った自分に一番躊躇う。

私の中で私の知らない感情が大きくなっていく感覚を、私は確かに感じていた。

「なんだ、兄さんに懸想しているのか？」

唐突にくリリイ>のパイロットが言った。

相変わらず抑揚のない声だったが、すこし笑っているように感じられたのは、気のせいだろうか。

「だが、私情は抑えるべきだ。我々は組織で動いている。おまえはおまえの仕事を果たせ」

力強い言葉に、私は成長したものだと思う。昔は情緒不安定で、自傷癖があつたと聞くけど。

とはいえ、まだ姉兄との確執は埋めきれしていない様子だったが。その証拠に彼女はこう言った。

「なに、安心しろ。わたしはおまえと同じ、お母さまからヘリデル<の識別名を頂いた人間だ。出来ない兄ぐらい、わたしひとりでも守つてやるさ。わたしは無能な姉さんとは違う」

相変わらず抑揚に欠ける声音だが、どこか嘲るニュアンスを感じさせる語調だった。それに、ふと「一夏の護衛に彼女を充てたのは、この確執を埋めさせるためなのだろうか」と考える。

たぶんそうだろう。彼女がその意図を汲み取っているかは知れないけど。

とはいえ、私も人の姉妹関係をどうこう言えた義理じゃないので、何も言わなかった。

「ではお願いします。——3番目のリデル」

私は妹にそう告げ、踵を返す。

イーデイスは何を言わず、電磁光学迷彩を発動させ、姿をくらし

——ミッション編

第57話 8月13日／8月14日

8月13日。私はIS学園に別れを告げ、日本の成田国際空港にやってきた。

まずこの成田空港からフランスのエールフランス国際空港に向かう。それからパリを経由してイタリアのミラノに入り、ジェノバから本題の経済パーティに参加する予定だ。ホテルの手配、任務遂行に必要な装備の調達は、既に組織の人間がしてくれている。私は身ひとつで現地に向かうだけだ。

「さてと。搭乗時間までまだ時間がありますね。適当にどこかで時間を潰しましょうか」

乗る便は午前11時搭乗。現在の時刻は9時半。1時間以上余裕がある。

私は空港内ラウンジのカフェで、ブレイクタイムすることにした。

「あら、会長」

適当に選んだカフェに入ると、IS学園の生徒会長、更識楯無がコーヒーを嗜んでいた。

「あら、アリスちゃん。奇遇ね。よかつたら一緒にどう?」

言ってカップを上げる。

丁度、話し相手が欲しかった私はウェイトレスに『カプチーノ』と頼んだ。

「それにしても本当に奇遇ですね。これからどちらに? ロシアの方に帰国ですか?」

「うん、ちよつと野暮用でね」

「もしや、ソフィアに私のことを告げ口しに帰るんじゃないでしょうね?」

「ふふ、どうかしら」

会長は不敵に笑ってコーヒーカップの淵をなぞる。

口調から真偽の判別はつかなかったけれど、おそらく心配は杞憂だ

ろう。私が学園を去るような事態になれば、困るのは簪だから。妹大好きの会長が、そんな真似をするとは思えない。

「では、近日、上海協力機構が東シナ海で行う軍事演習に？」

「いいえ、それには参加しないわ。そもそも、その演習は中国が台湾進攻を名目にした軍事演習なの。だから、ロシアはその演習に参加しない。——それにしても、アリスちゃんったら、やたら私の目的を知りたがるわね。そんなに私のことが気になるの？」

会長は色っぽくニタつと笑った。

「さて・は、好きな人の行動は常に把握しておかないと落ち着かないタイプ？」

「違いますよー！」

「いやん。お姉さん、あまり束縛されるの、嫌いんだけどなあ〜」

「だ〜か〜ら〜」

「あ、あの、お客さま、注文の品をお持ちに……」

私は怒鳴りながらウエイトレスから注文のコーヒーを引つ手繰った。

今さらながら、相席なんてやめておけばよかったと、ちよつと後悔する。

「まあ、あなたに不利になるようなことはしないから、安心して」

「簪のためにもそうしてください」

自分でいうのもあれだけど、私に何かあったら簪が悲しむ。

「そういえば、＜打鉄式式＞の開発はどう？」

「順調みたいですよ」

最近、ロリーナが積極的に手伝ってくれているおかげで、マルチロックオン・システムの開発は順調だそうだ。ちなみに、人工知能に疎い私は、最近まったく二人の会話についていけない。それをいいことに、ふたりは私を仲間はずれにして楽しんでる節すらあったが、

「友人が褒めていました。簪は理解が良くて、教え甲斐がある子、だと」

「そうなのよ。簪ちゃんは、実力あるし、頭も切れる。身内最良を差し

引いてもできる娘なの」

「私も簪の知識量には驚かされてばかりです」

姉の影に隠れがちだけど、簪の知識は一流の技術者として既に遜色ない。工学の修士号を持っていても納得するレベルだ。ロリーナが自身のシンクタンクへ国境なき科学者たちへに誘った理由もうなずける。

「でも、肝心な精神ココロがそれに追いついていないのよね。そんな妹に自信を持たせてあげたくて、いろいろ手を回してきたんだけど、結局どれもうまくいかなかったわ」

「もしや専用機の開発も……?」

会長は肯定の代わりに「内緒よ?」と人差し指を立てた。

やっぱりか。前からおかしいと思っていたのだ。

莫大な資金が必要なISの開発を、ノウハウのない学生に委ねるのは、かなりリスクだ。もし頓挫してしまったら、投資金のリターンは望めなくなる。多大なリスクを抱えながらも開発が許可されたのは、裏で会長が手を回したから。もしかしたら更識と輝夜の間密約が交わされているのかもしれない。

ほとほと呆れるほどに簪バカな会長へ私は意識を戻した。

「でも、あなたに会って、簪ちゃん、変わったわ」

「そうですか?」

確かに出会った当初より、態度は柔らかくなっただろうけど。

「ええ。だって、臆病だったあの子が誰かの為に駆け出していくなんて、なかったことだもの。——私が世話を焼いても、簪ちゃんの心は離れていくだけだったのに。正直、私はあなたがうらやましいわ」

「そんなことを言うなんて、会長らしくないですね」

ある意味で全てを持ってきている会長が、誰かをうらやましがると珍らしい。

それに羨望の対象が私というのも妙な感じだ。私は超人が羨むようなものは何も持っていない。

「まあ、そう気を落さないでください。あなたと簪なら、仲の良い姉妹に戻れますよ」

「そう?」

「ええ、それに冷めたなら温め直せばいいのですよ」

このコーヒーみたいにね——と、いまだ熱いコーヒーを掲げ、口に含む。

そして、その熱さにびっくりして吹き出した。

「……………」

噴出したコーヒーを浴びた会長が、なんとも言えない表情をする。忘れていた。私、猫舌だったんだ。

「い、いい言葉だったのに、今ので台無しだわ……」

会長はお手拭を貰い、自分にかかったコーヒーをシミにならないよう拭き取った。

こればかりは私も悪かったと思い、清掃を手伝った。

「でも、あなたの言葉、嬉しかったわ。だから、あなたの言葉、信じてみようと思う」

会長が柔和に微笑む。

それは普段と違う——社交用の笑みではない——心からの笑顔に思えた。

「お礼にいいこと一つ教えてあげるわ。——私、ある極秘作戦に志願したの」

極秘。つまり口外にはいけない作戦に志願したということ。

それについて語るなど兵士にあるまじき行為だが、彼女の瞳には相應の覚悟があった。

「そのためにロシアへ?」

「ええ。さすがに内容は言えないけど、おそらく危険な任務になる。もしかしたら日本に帰ってこれないかもしれない。だから、もし私に何かあった時は——」

「お断りします。簪はあなたが守ってあげるべきです。お姉さんでしょ?」

面倒臭そうな演技でヒラヒラと掌を振る。

会長は微笑を浮かべた。『無事帰ってこい』という意図が伝わったようだ。

「ふふ、そうね。そうするわ」

言つて、気合い込めるように冷めたコーヒーを一気に飲み干す。

「じゃあ、そろそろ便の時間だし、行くわ。無事を祈っててね、私の可愛いアリスちゃん」

「ええ、暇ができれば、ね」

私の言葉を背で受け止め、会長は自身のキャリアバックを転がしながら店を出ていく。

その途中、思い出したように振り返り、いつもの小悪魔的な微笑を浮かべる。

「聞き忘れていたけど、あなたはこれからどこに行くの？」

「イタリアへバカンスを楽しみに」

「そう。——じゃあ、いつてくるわ。ちゅ♡」

置き土産に投げキッスを残し、会長は再び空港の通路を歩きだした。

それから残りの半時間をカフェで潰し、私も予定の便に搭乗すべく席を立つ。

「さて」

これから10時間近いフライトになる。エコノミー症候群にならないよう気をつけないと。



8月14日。

織斑と掘られた表札のまえで、セシリア・オルコットは戦きながら喉を鳴らした。

「こ、ここが一夏さんの邸宅……」

セシリアが目の当たりにしている織斑邸は、二階建て、築10年のごく平均的な一軒家だ。

しかし、ここが想い人の住まいだと思つと、難攻不落の要塞を前にしているような心境だった。

それだけに覚悟が決まらず、玄関の前で右往左往していると、隣の鈴が痺れを切らした。

「じれったいわね。早くインターフォン押しなさいよ」

小学校からの付き合いである鈴は、何度もこの家を訪問している。いまさら緊張するほどでもなく、実戦を前にした新兵のようなセシリアと比べ、リラックスした口調だった。

「待つてくださいいな、鈴さん。まだ心の準備が」

「心の準備って大げさね。たかが家にいくだけでしようが」

「たかが!?」女が男の家に行くというのは、とても勇気がいることなのですわよ! まあ、男勝りの鈴さんには解らないと、——ああ!

鈴さん、呼び鈴を鳴らさないでくださいまし! まだ心の準備が!」

セシリアの嫌味にイラつときた鈴は、仕返しとばかりに呼び鈴を連打した。

鈴の後ろでセシリアがわたわたしている内に、インターフォンから一夏の声が聞こえてくる。

『お、鈴とセシリアだな。よく来たな。今、空ける』

ドアの内側からガチャつと開錠の音が鳴る。出迎えた一夏はエプロン姿だった。『可能性の獣』という刺繍は意味不明だったが、エプロン姿はよく似合っていて、二人は「あら」「まあ」と感動の声をもらした。

「どうした。二人とも?」

「いえなにもー!」

見惚れていましたともいえず、セシリアは声を張って誤魔化した。

「そうか。まあ、外で立ち話も熱いし、中に入れよ」

「はい。では、失礼して」

セシリアと鈴が一夏に案内されて奥のリビングに上がる。

織斑家はリビングとキッチンが一つに繋がっているタイプの間取りだった。奥には庭も見える。築10年と伺っていたが、手入れが行き届いているため、古臭さはまったく感じなかった。

「好きな所で寛いでくれ。今、何か飲み物、持ってくる」

「あ、お構いなく」

「あたしは構って欲しいから、ちやんと持て成してね」

身の振る舞い方に迷うセシリアとは対照的に、鈴は注文を付けてソファアーにドカッと腰かけた。

さすがセカンド幼馴染。態度に遠慮がない。一夏も楽しそうに笑った。

「そう言うと思つて、鈴の好きな濃い麦茶、用意しておいてやったぞ」「うんうん、殊勝な心がけね、偉いわよ」

「そうさ、俺は殊勝なんだ」

言つて、二人でカラカラ笑う。心を許している相手だからこそできる会話に、セシリアは取り残された感じがし、一人頬を膨らました。(幼馴染つてズルいですわ)

(ふふくん。でも、これはこれで大変なのよ?)

例えば、身近すぎて異性として意識してもらえない。などがある。女の幼馴染とは、ある意味で近しい異性であるのと同時に遠い異性でもあった。

「お待たせ。ほら、これは鈴の濃い麦茶」

そこへ一夏が盆を持つて帰ってきた。

「ありがと。——つて、これ、あたしが中学生の時に置いていったコップ?」

「おお、いつか帰ってくるんじゃないかって、ずっと残しておいたんだ」

(それつてあたしの帰りを待つていたつてことかな?)

一夏は儉約家で整頓家だ。不要な物は買わないし、残しておかない。

そんな彼が自分のコップを捨てずに残していた。それは、つまりそういうことなのだろうか。

「——ねえ、一夏はあたしが帰つてきて嬉しかった?」

瞳を期待で濡らし、コップをぎゅつと握る。——嬉しかった。そう言つてほしかった。IS学園に帰つてきたとき、彼は出迎えに来なかつたけど(それはデータ取りで忙しかつただけだが)、だからこそ、そう言つてほしくてたまらない。でない、これから希望が持てな

い。

「ああ。鈴がいなくて寂しかったぞ」

「そ、そっか」

一夏の言葉に、顔がぶあつと火照るのを感じる。それを冷やすため、冷えた麦茶を一気に飲む。

その味は3年前と同じほろ苦い味のまま、それが嬉しくてまた顔を赤くした。

「どうした、鈴。顔が赤いぞ。——もしや熱中症か？ 外出のときは帽子と水分をだな」

「も、もう、子ども扱いたくないでっつてば、わかっているわよ！」

「そうか、ならいい」と一夏が笑い、鈴も釣られて「ふふっ」笑う。完全に二人の世界である。セシリアは疎外感を感じ、再び頬を膨らませた。

「(むー、鈴さんばかり。……わたくしも負けてられませんわ) 一夏さん、これをー」

「ん？ なんだ」

「(む、セシリアのやつ、ちよつとイイ感じだったのにッ)」

いい雰囲気横槍に入れられ、鈴が目くじらを立てるが、セシリアは気にせず小箱を取り出だす。中身は色鮮やかな可愛いケーキたちだった。

「実は美味しいとウワサの人気店——リップ・トリックのケーキを買ってまいりましたの」

「おお！ 駅の地下街にあるやつだよな？ よく手に入ったな!?!」

リップ・トリックのケーキは国際大会で受賞経験を持つパティエが開いた店として有名なのだ。

その人気は並んでも入手困難というレベルで、よく購入できたと驚く一夏の反応も当然だった。

(セシリア、あんたいつの間用に用意したのよ、こんなもん)

(「一夏さんはスイーツ男子」という情報を掴んでおりましたから、事前に予約してメイドに購入しておいてもらいましたの。準備を整えず、戦場へ赴くのはバカのことですわよ?)

さすが策略家とも知られるセシリア・オルコット。事前に下調べしているところが抜かりない。加え、四個という数がにくい。ちゃんと千冬の分もあるのだ。対し、普段の軽いノリでやってきた鈴は、土産の一つも用意していなかった。

「これ、高かっただろ？　なんか、悪いな。もらってばかりで」「いいえ、お気になさらずに」

と、女神の微笑み——鏡の前で練習100回した——で答える。

これには一夏もドキリとしたようで、照れ臭そうに『今度お返しさせてくれ』と言ってきた。

（ぐぬぬ……セシリアのヤツ、しっかり次に繋げてくるあたり、したたかな女よねっ！）

セシリアのデキる女アピールに奥歯を鳴らしていると、キッチンからピピッと電子音が鳴った。

キッチンタイマーの呼び出しに、一夏が慌てて立ち上がる。

「じゃあ、これは昼食後のデザートにしようか」

ケーキの小箱を冷蔵庫にしまい、一夏はその足で昼食の調理を再開する。

テキパキと調理を熟す姿はシェフというより「台所のお母さん」だった。千冬が安心して家を空けられたのも、何だか領けてしまう。そんな一夏の後姿に、二人は未来の妄想に花を咲かせた。

（ああ、将来、一夏と一緒にお父さんの店をやるのも悪くないかも。一夏が作った料理をあたしが運んで。常連のお客さんにおしどり夫婦ってからかわれたりして——）

悪くない。悪くないぞ。鈴はニヤニヤしながら、バンバンとテーブルを叩く。

その向かいでは、セシリアがどこか光悦とした表情で一夏の調理を見守っていた。

（うふふ、一夏さんにはオルコット家の婿養子として家庭に入ってもらうのも悪くありませんわね。そして、疲れたわたくしを一夏さんが出向かえて、おかえりのキ、キスなんかでして——）

悪くない、悪くないぞ。セシリアはふやけた顔にクッションを押し

当て、ぬふふと笑う。

そんな妄想爆発の二人に気づいた——というわけではないが、一夏が振り返った。

「あ、そうだ」

すっかり妄想の耽っていた二人はビクツと肩を躍らせた。

「ど、どうしましたの？」

「ソースだけど、カルボナーラとミートソースどっちがいい」

「え、じゃあ、あたしはミートソース」

「わたくしはカルボナーラで」

「わかった。鈴がミートソースで、セシリアがカルボナーラだな」

肯き、一夏は料理を再開した。パスタ鍋から丁度いい具合に茹で上がったパスタを上げ、均等に取り分ける。そこに自作ソースをからめると、ついお腹がなってしまいそうな匂いが立ち込めた。

「よし、できたぞ」

出来上がった二品のパスタをテーブルに配膳し、鈴たちを呼ぶ。

テーブルに着席した二人は、本場さながらのパスタ料理に目を開いた。

「う、これはなかなか……」

「あんた、本当になんでも作れるのね……」

見るからにオシャレな盛り付けと香るソースは、それだけでうまいと断言できる。一夏は「こんなの大したことねえよ」というが、これが大したことないなら、はたして自分たちが作るパスタは何なのか……。

「さあ、召し上がれ」

「では、いただきますわ」

「いったただきまゝす」

二人は準備されたフォークでパスタを絡め取り、口に入れた。

「うくん、これはおいしいですわ♡」

カルボナーラは卵と牛乳のkokがまるやかで、実にクリーミーな味わいをしていた。これを自分と同じ年の学生が作ったとは、にわかには信じられない。なにより一夏の手料理と思うと、さらに美味しく思え

てくるから不思議だ。

「ほんとに、おいしいわ、このミートパスタ」

鈴のミートパスタもトマトの酸味が強すぎず、味わい深いスパイシーな出来上がりとなっていた。本場のイタリアンパスタには及ばないが、レトルトのミートソースより段違いに旨い。

「これ、店出せんじゃない？」

「それはいい過ぎだつて。——ほら、鈴、口にトマトソース、ついてんぞ」

「んん!？」

一夏に口周りを拭いてもらった鈴は、ミートソースより赤くなつた。

「あ、ありがとう」

「どういたしました。そんなにがつつかなくても、たくさんあるからゆっくり食べよ」

「う、うん」

そんなにがつついていたように見えたのだろうか。確かに美味しかったけれど。

恥ずかしくなった鈴は、また頬を赤くした。

(むっ……)

仲睦まじい様子をうらやましそうに見ていたセシリアは、目にも止まらない早業で自分の口周りにカルボナーラのソースを塗りつけた。そして、何食わぬ顔で言う。

「まったく、鈴さんたら。もう少し上品に食べられませんの？」

「はは、そういうセシリアも口にソースついてるぞ。——ほら」

「あら、お恥ずかしいですわ」

セシリアは計算通りなんて表情など億尾も出さず、『ん♡』と唇を突出す。

となりで鈴が眉を顰めていたが、セシリアの知った事ではなかった。こういうものは、やったもん勝ちなのである。

「よし、綺麗になった。——ふたりとも、おかわりはまだあるから、存分に味わってくれよ」

「はいな」「うん」

その後、談笑を交えながら、楽しい昼食会は進んでいった。

第58話 財界パーティー

8月14日。イタリア南部。現地時間19時を回ったあたり。スコールが参加するという財界パーティーの会場へ向かう車内で、私は装備をチェックしていた。

まず、A4サイズのケースから自動拳銃を取り出し、初弾を装填する。この自動拳銃はベレッタM92Fを改造した麻酔銃だ。それをバックにしまい、網膜型ARディスプレイを身につけると、車の運転手が言った。

「そろそろ到着するぞ」

私は車のパワーウィンドウを下げて、潜入する会場に視線をやった。

モダンな建築様式のホテルだ。名前はヘモンド・グロツソ。オーナーは、かのヘヴアルキリーのひとり、アリーシャ・ジョセスターフであるらしい。

フロント前のロータリーでは、高級外車がずらりとひしめき合っていた。敷地のいたるところでは、黒づくめの男性がサングラス越しに警備の目を光らせている。さらには無人機ゲッコウが会場周囲を巡回していて、物々しい雰囲気醸し出していた。経済界の大物が集まる会場とあって、警備のレベルは高い。

ほどなくして車はホテルロビー前に停車した。

「では、パーティー会場に潜入します」

『了解』

ボスにそう告げ、車を降りる。大理石の床をコツコツと鳴らしながらホテル内を進むと、待ち受けのフロントでホテルマンが招待状の提示を求めてきた。私は情報部が用意した偽の招待状を手渡す。

「レイシー・アデルさまですね。同伴される方はおられますか？」

「いいえ」

「かしこまりました。では、こちらへどうぞ」

ホテルマンに案内され、奥に進んだ先は、まさに煌びやかなセレブの世界だった。

豪華なシャンデリア、大理石のフロア、贅を尽くしたダイナー。まるで中世の舞踏会を彷彿させる会場では、ドレスやタキシードに身を包んだ投資家や実業家たちが、世界経済の行く末について意見を交わしている。

IS登場以降、経済活動の中心が女性に移ったこともあり、艶やかなドレスも多く目にできた。

彼女たちが、女性優遇の追い風を受け、成功した上流女性たちなのだろう。世界経済の行く末を考えるこの場に招かれているだけであつて、『ISを動かせる女性は偉い』と主張をする下流女性』にはない知性と教養が感じられた。気品あふれる物腰はセレブのそれだ。

「いや、華やかだねえ。きみもそう思わないかい」

私が上流女性の社交を遠目から眺めていると、こちらにひとりの男性がやってきた。

鼻筋の通った美形で、鋭く黒い瞳はアジア系。眉目秀麗と言つて差し支えないが、物腰は軽そうな優男だ。

彼の半歩うしろには、婦人が同伴している。男性とは対照的に、愛想に乏しく、尖った印象を受ける美女だ。雰囲気はどこか千冬さんに似ているものの、神経質な面持ちがふたりの違いをはつきりさせている。

突然、言い寄ってきた優男をあしらうように、私はこう言った。

「そう思うのであれば、口説いてきてみては？」

そうしたところで、散々値踏みされたあげく、手酷くあしらわれるのがオチだろうけど。

さりとて彼女たちも女尊男卑ミサンドリーなのだ。強権を以て男性を奴隷のように酷使する女性資本主義の申し子たち。下心で声をかけようものなら、きつと火傷じやすまない。

「冗談を。ボクは綺麗な女性が好きだけど、あの手の女性は嫌いだね」

私はすこし感心した。軽そうな物腰によらず、人を見抜く力はあるようだ。

「それにボクはキミに気があつたから、声をかけたんだ」そう言い、

男は私を下から上へ値踏みして「きみ、ISの操縦者だろ？」

私はわずかに驚いたが、肯定はしない。ここでの私は資産家という設定になっている。

「いいえ、違いますか？」

「隠さなくてもいいよ。——ボクはこういう人間だからさ。わかるんだ」

と、男が名刺を差し出す。面には〈上海飛甲装工業公司〉代表取締役・劉春狼とある。

私は思わず視線を名刺から劉春狼に向けた。

〈上海飛甲装工業公司〉。〈甲龍〉の開発元だ。この男がその最高責任者。

「たとえ、冷戦が終わっても、ISの需要は減らないだろう。ISの企業はこれからも伸びる。だから、今のうちに優秀な人材につばをつけておきたくてね。そこで、キミに声をかけたわけさ。その気があるなら、連絡をおくれ、力になるよ」

「キミのような美しい美女なら大歓迎さ」と言い残し、春狼は踵を返した。婦人も私に一礼して、彼のあとをついていく。

私はしばらく名刺を眺めた。まさか鈴のスポンサーと出くわすとは……。ただし、向こうは私が「鈴を助けた赤騎士の操縦者」と気づいていない様子だったけど。

(もらっておこう)

コネは役に立つ。それも大企業の社長となればなおさら。

私は名刺をポーチにしまい、本来の任務——「スコールの捕獲」に回帰した。

(さて、スコールを連れ出すにあたって、まず彼女を無力化しないと——)

私はその「彼女」を網膜ディスプレイに投影した。

〈オータム・本名アレックス・グレンジャー〉。日系アメリカ人で、カリフォルニア州出身。家族構成は父母姉。元アメリカ海軍。アメリカの『G・I・J』プログラムではトップクラスの成績を修めている。〈経済的徴兵者〉

彼女はスコールの恋人で、専用機も所有しているという。

恋人という立場からスコールを黙って連れ出させてはくれないだろう。というわけで――

(作戦遂行のために、オータムは無力化させてもらう)

しかし、潜入したホテルへモンド・グロツソは30階建てで、部屋数は300を超える。屋内プールやカジノなど、娯楽施設も備わっており、その敷地は広大だ。そんな場所から女一人を探し出すのはなかなか骨が折れる。

とはいえ、事前に彼女のプロファイリングをしたので、いそうな場所には心当たりがあった。

私は回遊していた会場をあとにして、プロファイリングが導き出した候補のひとつ――カジノに向かうことにした。

♡

♣

♠

喧騒と歓喜。到着したカジノベースでは、小難しい話に飽きた同伴者たちが、ギャンブルヒロインの分泌を楽しんでいた。

同伴者の大半が富豪の恋人だったり、伴侶だったりするから、レートもかなり高く設定されているようだ。賭け額がバカみたいに高いから、会場の一喜一憂が凄まじい。

「イーリスがいたら、はしやぎそうですね」

私の元同僚は無類のギャンブル好きで、途轍もなく「引き」が強い。そのせいで、私は彼女にポーカーで勝った試しがない。負け額の500ドルも取られたままだ。

だが、今日の私はツイていた。ブラックジャックのテーブルにオータムの姿を見つけられたからだ。しかも、一人ときた。ただ負け越しているのか、眉間のしわは穏やかじゃない。親のディーラーも暴れ出さないか冷や汗を流している。

そんな親から配られた彼女の手札を、私は遠くから盗み見た。

(Qと7で17か) ※ブラックジャックでは、K、Q、J、は数字の1

0扱い。

ブラックジャックは親より21に近い合計点数をそろえるゲームだ。

オータムの点数は「17」。この点数で親に勝つことは難しい。ルール上、親は「17」以上でしか勝負できないからだ。親のバースト（「21」を超えること）に賭けるか、あるいは新たにカードを引いて点数を増やすか。

オータムはずっと迷っている様子だった。

そこで私は近くにいたボーイを呼び止め、いい額のチップを握らせて、ディーラーに言伝を頼んだ。そのボーイがディーラーに耳打ちしたのを確認し、オータムの元に向かう。

「引くべきか、迷っているようですね」

隣の席で頬杖つく私を見て、オータムは怪訝な顔をした。

「なんだ、てめえーは？」

「貴女の勝利の女神だと言ったら、笑いますか？」

オータムはフッと微笑をもらした。満更でもない顔だ。

「だったら、あたしに勝利をもたらしてくれ、そしたら信じてやるよ」
「わかりました。では、カードを引いてみてください。——危険を冒した者が勝利するものです」

その言葉に何か感じたのか、オータムはテーブルを叩いた。一枚よこせ、という合図だ。それから配られたカードを確認し、今度は掌の水平に向けて振るう。これは勝負するという意味だ。

「では、オープン」

ディーラーが宣言し、オータムを含めたプレイヤーが手札を公開する。

ディーラーの合計点数は「20」だった。これに他のプレイヤーは肩を落とす。しかし、オータムは、

「ブラックジャックだ」

「ダイアの4」を引き当てていた。これでオータムの一人勝ち。

ま、実際は、私がディーラーにチップを掴ませて勝たせたのだが。男性賃金が下がる一方の男卑社会じゃ、チップは男性の貴重な収入源

だ。額が額なら、たいていのことは融通してもらえろ。

私が会場に武器を持ち込めたのも、情報部が事前に従業員を買収したからだ。人間の生活水準と倫理意識（道德意識）は比例をする。「ね？」

得意げな貌をみると、オータムは楽しそうに掛け金を集めた。

「ああ。おまえは勝利の女神だ。——でも、どういうつもりだ？ もしかして分け前よこせとか言うじゃないだろうな？」

「いいえ。これは私の気まぐれです。勝利の女神は総じて気まぐれなのです」

「ふんっ。食えない女だな」

言ってまた楽しそうに笑う。

彼女の警戒心が緩んでいるのを感じた私はさらにこう言った。

「代わりと言っては何ですが、一杯、付き合ってもらえませんか？」



カジノをあとにした私たちは、地中海を一望できるホテル内のバーにやってきた。

薄明りの照明とカクテルの甘い香りが演出する空間は、大人の世界だ。そこで私とオータムはテーブルを囲み、グラスを交わしていた。とはいっても、私は任務中だから飲む振りをしている。逆にオータムはカジノでの勝利を祝すように、バーボンを煽っていた。

「やっぱり勝ったあとの一杯は格別だな」

「その『格別な一杯』を味わえたのは、私のおかげだということを忘れないでくださいね」

「わかってるよ。——にしても、おまえは何者だ？ おまえが言った『危険を冒す者が勝利する』はイギリスの特殊部隊のモットーだ。あたしは元アメリカ兵だったから、そちらの方面に詳しいが、おまえは軍人のように見えねえ」

「ええ、私は軍人じゃありません。もちろん、本物の女神でもありません

ん。ちよつと出のいいだけのイギリス人です」

「確かに、おまえは知り合いのイギリス令嬢に似ている気がするな」

ローズマリーのことだろうか。

現在、ナノテクを用いたプロジェクションマッピングで髪を黒色に染め、ソフトウエア型変声機で声を変化させている。瞳には紫紺の特殊カラコン。メイクも施しているので、一見しては「わたし」と判らないはずだが。

おそらく、正体に気づいているわけではないだろう。そう判断した私は、あたかも何も知らない体を装って続きを聞いた。

「どんな女性なのですか？ そのイギリス女とは。もしかして恋人だったり？」

私の質問に、オータムはすこし驚いた顔をした。

「恋人だと？ もしかしておまえ、あたしが同性愛者だと知って？」

「じゃあ、おまえもか？」

「そんなところですよ。で、その女性とはどのような関係で？ やはり恋人だったり？」

「ちげーよ。いけすけない上司さ。いつもあたしにくだらな命令をするんだ。この前はメイド服を着させられてな。その前は知り合いのガキンチョに自転車の乗り方を教えてやってくれ、だ」

まったく英国令嬢の考えることは理解できない。そんな口振りでまた酒を煽る。

「だが、おまえに似て綺麗な女だよ。品格もあるし、仕事もできる。でも、これがまたひでえスコンですよ。部屋は妹のお人形だらけってウサだぜ」

姉の趣味を聞き、私の背筋が冷たくなった。え、私の人形とか持っているんですか……？

「どうした。急に顔色が悪くなったぞ？」

「いえ大丈夫です」

私はその妹です。といえるわけもなく、私は『続けてください』と言った。

「でも、あれはあれでイイ姉ちゃんだよ。あたしの姉貴は、くそつたれ

たアバズレだったからな」

「くそつたれた、アバズレ……。どんな人だったのですか？ あなた
の姉というのとは？」

興味本位の質問に、オータムは顔を伏せた。思い出したくない記憶
なのか、口をつぐむ。

けれど、アルコールの成分が彼女の口を緩くした。

「あたしが気に入らねえって、自分の恋人にレイプさせようとするよ
うな奴さ」

「……姉の憂さ晴らしのために、あなたはレイプ被害者にされかけた、
と」

「酷い姉だろ。そんな姉だったが、親父やお袋には愛されていた。将
来が有望だったからな」

「あなたは？」

「バカだったあたしは家族の鼻つまみ者だった。そういう理由で、ほ
とんど追い出されるかたちで家を飛び出したんだが、まあ、バカなあ
たしに社会は優しくなくてよ。食いつぶちも見つからず、気づけば社
会のふきだまりで、下流オンナチンピラのように男の金銭をカモる毎日さ」

「だから、兵隊になった？」

「ああ、あたしは経済的徴兵者ってやつだ」

冷戦の軍備競争で兵士の需要は増した。そこでアメリカは軍の福
利厚生を充実させ、経済的に貧しい人間が食いつぶちを求めて兵隊に
志願するよう誘導した。そうやって兵隊になった人間が経済的徴兵
者。形式上は志願兵だが「相手の経済状況につけこんだ徴兵」といわ
れており、そう揶揄されることが多い。

そして、社会的おちこぼれを一端の兵隊にする訓練プログラムは
『G・I・J』と呼ばれた。

その『G・I・J』によつてオータムは更生したが、ふきだまりに
いた頃のチンピラ気質はまだ抜け切っていないようだった。

「わりー、会って間もねえのに、辛気臭せー身の上話をしちまったな」

オータムは素面に戻ったように苦笑する。私は「いいえ」と答えた。
「話を戻すが、なんだ、アイツと姉貴を比べると、アイツがどれだけ妹

想いな姉かわかるってことだ。——まあ、その妹とは生き別れちまつたらしいがな」

「……生き別れ、ですか」

その生き別れた妹が、自分を偽って他人から姉の話を聞いている。あまりに奇妙でシニールな状況に、普段ならきつと笑い出していただろう。けれど、脳裏を掠めたシンプルなある疑問がそれを妨げた。

——そもそも、なぜ私とローズマリーは生き別れたのか。

何がどうして、こうも立場が違ってしまったのか。同じ胚から生まれたのに。

……いや、今は考えないでおこう。ルーツを知るためにココにきたわけじゃないのだから。

私は頭から疑問を追い出し、意識をオータムに戻した。

「それから、おまえとは関係を持ってない。あたしには大事な恋人がいるんだ」

スコールを想ってか、オータムがしおらしく頬を赤める。

乙女みたく恥じらうオータムが可愛くて、私の悪戯心が顔を出した。

「言わなければバレませんか?」

「いや、ダメだ。スコールは裏切れねえ」

悪魔のささやきにも、オータムの心を揺れ動かなかった。

「あいつは粗暴なあたしを蔑まず、受け入れてくれたんだ。そりや嬉しかったよ。だから、感謝つか、そういう意味で、地中海のクルージングに誘ったんだ。そしたら『よい思い出にしましょうね』なんて言ってくれてさ。その時の笑顔が可愛いつたらなくてよ、へへへ♡」
聞いてもいないのにべらべら語り出した挙句、勝手に赤面するオータム。

あれ、私もしかして惚気られてる?
?

「もちろん、可愛いだけじゃないんだぜ。抜群にスタイルもよくてさ。それを褒めると『好きにしているのよ?』って微笑むんだ。その笑顔がまた綺麗だよ。あんなイイ女は他にいなえよ。——って、なに言わ

せんだよ、恥ずかしいだろ♡」

あなたが勝手に言っているんですよ。と込み上げてくるが「ごめんなさい」と笑顔で取り繕う。

そんな自分に酷く虚しさを感じ、気が滅入ってきた。

はあー、何が悲しくて、ヨーロッパまできて敵の惚気話を聞かなくやいけないのだろうか。

「ん、どうした」

「いえ、なにも。——そんなに想う人がいては、諦めざるを得ませんね。では、せめて貴女と出会えた記念に一杯奢らせてください。それで貴女を諦めましょう」

「ああ、悪いな」

オータムが肯くと、私はカウンターに向かい、おかわりのバーボンを注文した。

注文の品を受け取り、それに持っていた睡眠薬をそつと溶け込ます。

「おまたせしました」

私が手渡したバーボンを、オータムは気分よく飲み干した。



睡眠薬で眠らせたオータムを自室へ運び終えたあと、私は自室で備え付けられたインスタントコーヒーに湯を注いだ。沸き立つビターな香りが緊張を解してくれる。私は「ふう」と一息入れた。

「これで第一関門はクリアですね」

コーヒーを手に背後で眠るオータムを見遣る。現在、リア充は爆発、じゃない爆睡中だ。睡眠薬の効果で当分は目を覚まさないだろう。だが、用心して手錠で拘束しておいた。これでもう任務遂行の障害にはならない。

「さてと」

私はオータムの私物をあさった。

まず趣味の悪そうな蜘蛛のネックレス——専用機の待機形態——を特殊なケースに入れる。このケースは外部からISを隔離するアイテムだ。この中に入れておけば、遠隔操作でもISを展開できなくなる。

次にバックから携帯電話とカードキーを拝借した。

「大体、こんなもんでしょっか」

目ぼしいものを漁り終えたところで、オータムの携帯電話を操作してスコールへ繋ぐ。

オータムになりすまして、居場所の聞き出すのだ。

「スコール、あたしだ」

『あら、オータム、どうしたの？ カジノはもういいの？』

変声機を使用したので、スコールに疑う様子はなかった。

「ああ、ボロ負けしちまってな。今、引き上げたところだ。そっちは何している？」

『今、自室でシャワーを浴びていたところよ』

「そうか。じゃあ、ちよつとぶらぶらしたらそっちにいくよ」

『わかったわ。待っているわね』

通話が切れる。私はカードキーを見た。部屋番号はA104とある。私の記憶が正しければ、このホテルで一番いい部屋だ。それはどうでもよかったが、スコールの部屋が分かったのは、ありがたい。

(……正念場ですね)

私は装備を最終チェックして、再びエレベーターに乗った。



最上階に到着したエレベーターがチンと鳴る。私はA104と刻まれたプレートのまえまで赴き、ドアをノックした。

しばしして、バスローブ姿のスコールが出てくる。

鮮やかな金髪。妖艶な唇と聡い瞳。セレブ然とした美貌は、ローブでさえ隠しきれない圧倒的な色気を放っている。これが同性をも魅

了する色気なのだろう。かといって、いつまでも見惚れてはいられない。私は気を引き締めなおした。

「初めまして、ミス・スコール・ミューゼル。私はレイシーと言います」

私はよく使う偽名を口にした。

「こんばんわ、レイシー。私に何の用かしらん？」

「実はこのホテルにあのへヴアルキリーがいると、カジノにいた女性から聞きました。ぜひお目にかかりたいと思い、訪れた次第なのです。もしよろしければ、すこしばかりお時間を頂けないでしょうか？」

スコールはゆったりとした物腰で、「そうねえ……」と私の瞳を覗き込んだ。

思わずスコールの聡い瞳から顔を逸らしたくなるが、不審に思われかねない。私は背筋に冷や汗をかきながら、彼女の眼力にぐっと堪える。

「いいわ。お入りなさい」

スコールがドア先から退き、部屋への通路を空ける。

それに内心でホッと安堵する。なんとか最初の難所は通過できたようだ。

「ありがとうございますー！」

動揺を悟られないよう、興奮を装って部屋に入る。

スコールの部屋は私の部屋と比べ、2倍以上の広さがあった。さらに地中海を一望できるバルコニーまで備えられている。私が招かれたのは、そのバルコニーだった。

「何か飲む？ お酒はどうかしら？」

「いえ、水か何かを」

「ふふ、わかったわあ」

スコールは柔らかに笑い、部屋に備えられた冷蔵庫へ水を取りに行く。

その後ろ姿に、ARがスコールの情報を貼り付けた。

へスコール・ミューゼル：オーストラリア出身の元イギリス代表。

〈ミラージュ・デ・デザート 砂漠の逃げ水〉の異名を持つ〈ヴァルキリー〉。引退後、現役時代に得た知識と経験を活かしてIS関連の事業を起こす。

両親は母が海洋学者、父が環境学者。

ミューゼルは、超能力を遺伝に持つ特異な血筋とされる。とりわけパイロキネシス^{パイロキネシス}の発現者が多く、過去に3件、友人の家を全焼させてしまった経歴あり

（土砂降りという名前は、この火災体質を慰める『火消し』の意味合いがあるのでしょうか）

と、私が陳腐な同情に浸っていると、スコールが水を手に帰ってくる。

そして、持ってきた水をコップに注ぎ、私の正面に腰を下ろした。

「ところで、私を訪ねてきたということは、あなたはISの操縦者なのかしら？」

「はい。そこで是非、あなたが〈砂漠の逃げ水〉と謳^{うた}われる謂^{いわ}れとなった戦術論を語って頂ければ、と思うのです」

「でも、私が〈ヴァルキリー〉だったのは昔の話。過去の栄光よ。今は現役を引退した身だし、私の古い戦術論なんて、参考にならないかもしれないわよ？」

思いの外、謙虚で驚く。どうやら、彼女は武勇伝を得意げに語るタイプではないようだ。

私が『そんなことはありません』と言うより早く、スコールは続けた。「代わりとってはなんだけど、今、最も強いIS操縦者の秘密を語ってあげましょうか？」

スコールは祈るように組んだ手をテーブルにおき、妖艶に笑った。

「そう、イギリスの国家代表にして織斑千冬の再来と謳^{うた}われた女性。ローズマリー・ライオンハートの秘密についてね。——知りたいでしょ、レイシー？ いえ、アリス・リデル」

土砂降りの雨に遭遇したかのような急展開に、私は心臓を鷲掴みされた気分になった。

第59話 斯あるふたりの理由

呼吸が乱れ、動機が早まる。だが、なぜ見破られたという疑問を抱く暇はなかなかった。

私が取るべき行動は二つしかない。

この継ぎ接ぎだらけの偽装を突き通すか。強硬策に打って出るか。私の名前が出た時点で、前者はもう通じないだろう。そうなると、後者しか手はなかった。

「動くな！」

素早く自動拳銃を抜き、それをスコールに突き付ける。

私が握っている銃はベレッタM92Fを改造した麻酔銃だ。殺傷能力はない。だが、外見は9ミリ口径の自動拳銃。十分な威嚇になる。もつとも、この程度で〈ヴアルキリー〉が恐れるとは思えなかったが。

「あら、どうしたの。いきなり物騒なものを取り出して？」

案の序、スコールは怯えた様子も、驚いた様子さえ見えなかった。それでも口調を強める。

「ゆっくりと両手を上げなさい。妙な真似をすれば撃ちます。この距離なら、あなたがISを展開するより早く射殺する自信があります」
「怖い顔ねえ。わかったわ」

意外にもスコールは大人しく両手を上げた。抵抗する素振りも見せない。

不審に思うが、これを期にさらなる指示を出した。

「次は、その金色のイヤリングです」

それが彼女の専用機であることは、情報部の調査で判明している。さすがに性能までは判らなかつたようだが、奪つてしまえば性能など関係ない。

「わかったわ。でも、丁重に扱って頂戴ね。友人に作ってもらった大事なISなの」

「それはあなたの心がけ次第です」

そう答え、こっちに投げられたゴールドイヤリングを受け取り、隔

離ケースに入れる。

もちろん、その間も突き付けた麻醉銃は降ろさない。

「で、これから私はどうなるのかしらん？」

スコールは手を挙げたまま言った。

「私の組織まで連行します。その後は知りません」

「そう」

スコールは落ち着いた雰囲気です。やはり恐れや焦りは微塵も感じられない。

「……随分と無抵抗ですね」

「あらん、もっと抵抗してほしかったあ？」

「いえ、不自然に感じたから、訊いただけです。ですが、一つだけ答えなさい。私の正体に気づいていながら、なぜ私を部屋に入れたのです？」

おそらくスコールは、ドアの前で私の正体に気づいていた。なら、もっと警戒してもよかつたはず。この状況、まるでこちらが誘われたような感覚がある。罠という可能性も否定できない。

「ふふ、警戒しているようね。でも、安心していいわ。策略を巡らせているわけじゃないの。ただ純粹にあなたと話したくてね。よかつたら、もうすこし私と話をしないかしらん？」

自分の置かれた立場などなんのその。スコールは綺麗な唇を優しく曲げる。

悠長にそんな提案をしてくるスコールに、私は声を荒げた。

「私はあなたと話したいことなどありません」

「あら、私はあなたの言う事を聞いてあげたのだから、すこしぐらい私の言うことを聞いてくれてもいいんじゃない？ あなただって本当は聞きたいはずよ。ローズマリーについて」

「そんなことはありません」

「本当かしら？　じゃあ、なぜ「動くな」と言わず、初動で私を眠らさなかつたのかしら？　あなたならできたのに。言い当ててあげましょうか？　私の話に興味がわいたから。違う？」

「……………」

どうしてか、彼女の言葉が正しく思えて否定できなかった。

できたのにしなかったのは、やはりそういうことなのだろうか。気づけば、脳裏の奥に追いやっていた疑問が鎌首を擡もたげはじめていた。

「その沈黙、正解と思ってよさそうね」

「認めましょう。でも、なぜあなたはそこまでしてローズマリーについて話したかがる？ あなたはローズマリーの何なのですか？」

「私がローズマリーの何なのか？ そうね、いうなれば、師であり、そして友かしら」

「師であり、友……？」

「ええ、ローズマリーにISの技術を叩き込んだのは、私なの。その過程で、私は彼女を慕うようになった。だから、あなたに愛弟子であり、親友でもあるローズマリーのことを知ってもらいたい。——彼女がどれだけあなたを想って生きてきたかを、ね。どうかしらん？」

スコールが表裏のない優しい笑顔を向けてくる。私には魔女の誘惑に見えた。——なぜ私とローズマリーは生き別れたのか。それをスコールは知っている。

結局、私は誘惑に負け、銃口を下した。体が、心が、話を聞く気になっっていた。

「わかりました。あなたの話を聞きましょう」

♡

+

♠

私たちはバルコニーの椅子に掛け直した。そこから見える漆黒の地中海は、月光でライトアップされて、とても幻想的だ。ずっと眺めていたかったけれど、そうもいかない。私は前のスコールに意識を注いだ。

「まず、あなたのお母さんの話からしましょうか」

そう言って、スコールは語り口を切った。

「あなたは自分の母親のことを、どれだけ知っているかしらん？」

実は、私は母のことを詳しく知らない。母が出自を語りながらな

かったのだ。なにより存命の頃は幼かったから、どういう生まれの人だったのか”気にも留めていなかった。

無言でいると、沈黙を「知らない」と受け取ったスコールが話を続けた。

「あなたのお母さんは慈善活動に熱心な人だったそうよ。——現在、世界の貧困は個人の力ではどうにもならないところまできている。とりわけ、20世紀末の〈バイオショック〉が世界の貧困に拍車をかけたわ」

エネルギー需要の高まり。石油依存からの脱却。そういつた文句から始めたバイオ燃料の爆発的な普及は、世界のエネルギー事情を一変させた。現在では軍用の航空機や車両の3割がバイオ燃料で稼働している。

しかし、この急激な食糧のエネルギー転化により、世界の食糧問題は深刻化した。世界食糧計画^{WFP}によれば、〈バイオショック〉の影響による餓死者は年間300万人に上るらしい。

「今でも世界の貧困地では、多くの子供たちが飢えに苦しんでいるわ。でも、人々は見えて見ぬふりをしてきた」

「見て見ぬふりじゃない。彼らには彼らの生活がある」

「労働階級の人間にとつてはね。でも、この世界には一生遊んで暮らしてなお、有り余る富を持つ人間がいる。この財界パーティーに参加している上流女性たちのような、ね」

「スーパリーリッチと呼ばれる人たちですか」

「ええ。そんな富裕層に属していたあなたのお母さんは『巨万の富を築いた自分が次にすべきは、貧しい子に救いの手を差し伸べることはないか』と考えた」

富や権力を持つ者は、社会的弱者を守る義務がある。それが母の〈高貴な者の義務〉^{ノブリス・オブリージュ}。

そこで私はふと考えた。

はたして、現在この世界に〈高貴な者の義務〉を実施している人間がどれだけいるだろう。

恐らくほとんどいない。だからこそ、セシリア・オルコットは嫌悪

する。

強権を行使し、弱者から搾取することで私腹を肥やしている上流女性を。

品格と高貴さを失い、成金主義に堕ちた世界を。

「でも、その慈愛の精神があなたの祖母の反感を買ってしまった」

「慈愛の精神を持つことの、何が悪かったというのです」

「それ自体に反感したわけじゃないわ。ただ、祖母にとって慈善活動はメディアに向けたパフォーマンスに過ぎなかったの。だから、財力を擲^{なげう}って世界を変えようとしたあなたのお母さまとは相反した」

「それが親子の袂を分かつことになった？」

「ええ。——19世紀よりライオンハートは金の力で世界を支配してきたわ。慈愛の名の許にその財力が失われれば、ライオンハートの権威は失墜する。家の実権を握っていた祖母は権力を保持するため、あなたのお母さまを勘当したわ」

親子関係が険悪だったから、母は自身の出自を語りたがらなかったのか。

「だけど、それだと家系が断絶する」

「そう。ライオンハートの跡取りだったあなたのお母さんが出家すれば、家督を継ぐ者がいなくなる。だから、あなたの祖母はライオンハートの血を継いだローズマリーを母親の許から誘拐した」

こうして私たち姉妹は生き別れることになったわけだ。

私にローズマリーの記憶がないのは、まだ物心のつく前の出来事だったからか。

「それからローズマリーはライオンハート家の当主に相応しい人物となるため、徹底した教育——まさに英才教育ね——を強いられたわ。経済から政治、ITまで。祖母は決してローズマリーを愛しも、甘やかしもしなかったの」

「なぜ？ 自分の孫でしょ？」

「祖母にとってローズマリーは、自分を裏切った娘の子。憎しみこそなくとも、愛情を抱けるほどの存在でもなかったの。何より娘に裏切られたトラウマから、祖母はローズマリーを服従させることに固執し

ていたわ」

「反発しなかったのですか？」

「させなかったの。暴力と恫喝で支配してね。さらに外界との交流を遮断してマインドコントロールにかけた。彼女に自由はなかったわ。あつたのは、祖母からの度を越えた嫉けだけ」

「でも」と、スコールが続ける。

「ローズマリーはこの過酷な毎日を生き抜いたわ。——いつの日かあなたに会えることを信じて。それだけが彼女の生きる糧であり、希望だった。そう、あなたを想っていたからこそ、彼女は辛い現実を生き抜いてこられたのよ？」

スコールの瞳が私を捉える。まるで「あなたはこれをどう思う？」と問うように。

私は逃げるように視線を逸らした。そんな頑な態度にスコールが呆れた様子で続ける。

「でも、そんな彼女の希望を打ち砕く事件が起こったわ」

「ジンバブエの扇動事件」

経済の破たんが高まっていた国民の不满を逸らすため、当政権は人種差別されていた黒人を焚き付け、白人の農園主を襲撃させた。『既得利益を貪る白人どもを追い出せ』と。

「当時のジンバブエでは、メディアの現地入りが規制されていたから、イギリスはジンバブエの実情を知ることができず、この事態を防げなかった。けれど、ローズマリーはその実情を密かに知っていたわ」

「どうやって？」

「実は母親がローズマリー宛てに手紙を送っていたの。手紙には『最期が近いかもしれない。だから、あなたに愛を伝えたい』、そういった文章が綴られていたそうよ。あなたのお母さんは聡明な人物だったから、政府のアジテーションに危機を感じていたのね。——ローズマリーはその手紙を祖母に見せ、救いを求めたわ。『お母さまと妹を助けてください』と」

「でも、救いの手は差し伸べられなかった」

「ええ、祖母はあろうことか、その手紙をローズマリーの前で破り捨て

た」

つまり、祖母は母の危機を知りつつも見殺しにしたという事だ。

その事実形容しがたい怒りが込み上げてくる。もし祖母が手を差し伸べてくれれば……。

「当時のローズマリーも同じ気持ちだったでしょうね」

スコールは私の心を見透かしたように言った。

「同時にローズマリーの裡で強い感情が弾けたわ。『私がなんとかしなければ』、そういう強い感情。それにはまず祖母の支配から脱す必要があった。けれど、彼女は賢かったから、暴力に訴える真似はしなかった。虎視眈々と策略を巡らせ、巧みに祖母を陥れていったわ」

やがてローズマリーは、家の実権から幹部の椅子まで、全て手に入れたという。

スコールの話を聞き、不覚にも胸が空くのを感じた。ローズマリーは母と父の仇を取ってくれたのだ。

「それから彼女は、膨大な家の資金を使い、アフリカの支援活動を始めたわ。理由は2つ。一つは母の意思を継いで。もう一つはあなたの生存を信じていたから。あなたは強い娘。必ず生きている。だから、アフリカの支援を行えば、間接的にあなたの助けになると思ったそうよ。それが功を奏したのかは判らないけど、あなたたち姉妹は再会を果たせた」

「でも、私たちの再会は、決して感動的なものじゃなかった」

私は二か月前のVTシステム暴走事件を思い出す。

あの時、私はラウラを救うことしか頭になかった。姉のことなど頭になかった。

「そう。あの時、あなたはラウラ・ボーデヴィツヒの為に身を削りながら戦っていた。どれだけ苦痛に苛まれても、あなたは少女のため、あるいは少年のために戦い続けた。そんなあなたにローズマリーは一抹の不安を覚えたわ」

「一抹の不安？」

「ええ。これからもあなたは、あの少年少女のために戦い続けるでしょう。その身を削って。そう、あなたは誰かのためなら自己の犠牲

を厭わない、そういう人間になっていた。他者のためなら、平気で貧乏くじを引く」

「貧乏クジじゃない。大切な人のために、私は自分の意思で選択したんです」

「それが問題なのよ。他者を守るためなら、あなたは平然と『自分の優先順位を低くする。だからこそ、ローズマリーはあなたの戦いをやめさせたいのよ。でなければ、いずれ、あの少年少女のために、その命でさえ投げ捨てる』」

だから、あの夜、ローズマリーは私を連れて行こうとしたのか。これ以上、私が戦いに身を投じないように。——それが7月7日、あの夜の真実。

「アリス・リデル。そんな、自分を犠牲にする生き方はもうおやめなさい。あなたは友の為に身を挺して戦い、孤独な少女のために世界と戦い、親友を奪った国家のためにも戦ったわ。あなたはもう十分、誰かのために戦った。これからは武器を捨てて、自分のために生きていいのよ」

スコールが聡い瞳で私を見つめる。

まるで我が子にマザーグースを読んで聞かせるように、優しく、微笑んで。

「武器を捨てて、自分のために……」

スコールの言葉に、私の芯が僅かに揺れ動く。不本意ながら、一瞬だけ憧れてしまったのだ。武器や暗号名を捨てた自分——好きな人と恋をし、子供を産んで、家庭を持つ自分に。

その甘い幻惑が私をかどわかす。スコールは私に手を差し伸べていた。私はその手を——

と、その時、不意にコンコンとドアを叩く音が割入った。

「!？」

その音が、私を現実に引き戻す。

そうだ。私は任務でここに来たのだ。自分探しに来たのではない。

「出なさい。ただし、妙な真似はしないことです」

片時でも任務を忘れた自分を恥じながら、スコールに訪問者の対応

をさせる。

スコールは水を差された事に苛立った様子だったが、素直に従った。

「どなたかしらん？」

「ルームサービスです」

私は『頼んだか』と視線で訊く。スコールは首を横に振った。

「頼んだ覚えはないのだけど」

スコールが答えると、ドアの向こう側が静まり返った——刹那、静寂が僅かな殺気を孕む。

それと同時に、いくつもの銃弾がドアを食い破って飛んできた。

間一髪のところ、私とスコールがドアの前から飛び退く。銃弾は私たちの側をすりぬけて、背後のガラスドアを割った。

「銃弾のルームサービスなんて聞いたことなんですけど」

「私もよん」

今度はドアを蹴破って二人の男が入ってきた。手にはサブプレツサーを装着したサブマシンガン。

あまりに唐突な出来事であったけれど、いくつもの危機に直面してきた経験が功を奏し、私は直ぐに撃鉄を起こすことができた。

発砲。

麻酔薬の詰まったダーツ弾を首筋に喰らった男は、ものの数秒で昏倒した。

これでまず一人。この調子で残りの男も——といきたいところだが、M92Fを改造した麻酔銃は一発ごとにスライドがロックされるため、連射できない。

仕方ないので、私はドレスの中に隠していた待機形態の〈赤騎士〉を二人目の男に投擲した。

「ぐあつー」

ナイフが手の甲に刺さり、男が呻く。その隙に次弾を装填して発砲。

ダーツ弾が首筋に刺さり、痛みで呻いていた男は、ウソのように大人しくなった。

「彼らは一体何者です？」

男から〈赤騎士〉を回収し、ついた血を拭いながらスコールに尋ねる。

見たところ、襲撃者はスコールを狙っていたようだが……。

「おそらく〈亡国機業〉の実働部隊ね」

私はますます解らなくなつた。

「あなたも〈亡国機業〉の人間でしょ？　なぜ同じ組織の人間があなたを？」

「私たちの組織は一枚岩じゃなくてね。複数の派閥が存在していて、それぞれがそれぞれの思惑で行動しているの。特に私は他の派閥から疎まれていて、常に抹殺リストのトップにいるわ」

「では、彼らは、あなたを抹殺しにきた他派閥の人間ということですか」

「そうね。あなたのおかげで命拾ひしたわ」

私は「自分の身を守っただけです」と告げ、倒れた男たちを確認した。

ふたりとも黄色肌のアジア系だった。彫は深く、頬骨が高い顔容をしている。

「見たところ中国人のようですが」

「きつと春狼の差し金ね。劉春狼、中国方面を管轄している亡国機業の幹部よ」

私の脳裏にパーティー会場であつた優男の顔が浮かぶ。彼が〈亡国機業〉幹部のひとり……。

驚きでしばらく動けなくなるが、すぐさま頭を思考モードから、警戒モードに切り替える。

「他にまだいると思いませんか？」

「専用機を持った〈ヴアルキリー〉相手に、サブマシンガンを装備した男が二人、どう思う？」

私は憂鬱な気分になった。他にもいるということか……。最悪！
Sが出てくる可能性も。

とりあえず、私は経過を報告すべく〈ウォルラス〉に通信を繋い

だ。

『私だ』

「スコールを確保しました。ですが、面倒なことになりました。へ亡国機業」の抗争に巻き込まれてしまったようです。たったいま、組織の実働部隊に襲撃されました」

『ふむ。だが、予定に変更はない。ターゲットを護衛しながら回収ポイントに向かえ。こちらからは回収のへりを向かわせる』

「了解しました」

通信をオフにすると、はあくど溜息をついた。

スコールを守りながら、回収ポイントに向かえか。やれやれです。

「義理のお姉さんはなんて言っていたのかしらん？」

「——ロリーナじゃありませんが、あなたを護衛しろと言われました」

「頼もしいわあ」

「それより、逃げないのですか？」

ローズマリーの話を終えたなら、こうして私に従う理由はないはずだ。

「抵抗しても無駄でしょ？ それに今はあなたに守ってもらった方が安全そうじゃなあい？」

私はスコールを生きたまま連れてくるよう云われている。連中に殺させるわけにはいけない。

「だけど、やっぱり彼女の行動は解せない。とはいえ、彼女が従順なことは好都合なので、これ以上の言及はやめよう。もちろん、警戒はするけど。」

「わかりました。あなたは私が守ります。では、行きましょう。地下の駐車場に向かいます」

「わかったわ。と、言いたいところだけど、できないわね。オータムも一緒じゃないと」

「却下です。荷物になります」

「いやダメよ。オータムを置いてはいけない。手を貸してもらえないなら、私一人でもいくわ」

「……………わかりました。彼女は、私の部屋です」

ここで勝手に行動されては面倒だ。回り道になるが、仕方ない。

「じゃあ、行きましょう。——いえ、すこし待ってもらえるかしら?」

「まだ何かあるんですか……」

注文の多さに、私はうんざりする。

「こんな格好じゃ、外を出歩けないわあん」

色っぽく言い、着ているガウンをパタパタ振るう。

ちらつと見えたガウンの下には何もつけていないようで、綺麗な素肌が覗いていた。

「別にいいじゃないですか、どんな格好でも」

「着替えるから、見張っていてちょうだいね♡」

襲撃のこともあり拒否したが、スコールは構わずガウンを脱ぎ捨てた。

露わになるスコールの妖艶な裸体。豊満で形のよいバスト。美しい曲線を描くヒップライン。少女には出せない成熟した女性のプロポーションが、あたりに噎せ返るほどの色香を匂わせる。もし床に転がる男たちが麻酔で眠っていなければ、鼻の下を伸ばして喜んでいただろうな。

「あら、私の身体に興味あるの?」

思わずその美貌に見惚れていると、スコールが派手なレースショットをはきながら見てきた。

「あなたなら、特別に触らせてあげてもいいわよん?」

「女の裸に興味はありません。——というか、なんですか、その格好は」

ガウンから着替えた彼女は、随分と露出度の高いドレスを着ていた。フロントは胸元が大きく開き、背面は尾骶骨まで露出している。丈も短い。どうみたって、さきのガウンより過激な格好だ。

「そんな格好なら、さっきの姿でよかったですよ……」

「そういわないで。さあ、行きましょう」

なんとも腑に落ちないが、私はM92Fを構え直し、スコールの部屋を出た。

オータムは私の部屋で寝ているので、まずエレベーターを経由して

下の階に降りる必要がある。〈赤騎士〉で飛ぶ手もあったが、敵の戦力が判らない以上、回数制限のある《単一仕様能力》は使いたくなかった。なので、徒歩を選択する。

通路に出ると、私たちはフロアのエレベーターを目指した。

「それにしても散々だわ。このあとオータムとクルージングを楽しむ予定だったのに」

「それはこっちのセリフです。私だって夏休みを返上して——止まってください、見張りです」

到着したエレベーター付近では、男たちがエレベーター前を陣取っていた。人払いだろうか。人数は二人。鍛え上げられた躰はスーツの上からでも判る。女の細腕で二人同時に相手するのは、いい策じゃないだろう。何か注意を引けるものがあれば……。

(ん?)

周囲を見回す私の目に、通路に止めてあったシート回収のカートが留まった。

(これは使えそうですね。——スコール、乗ってください)

(あら、どうして?)

(早く)

(仕方ないわね)

急かすと、スコールはひょいっとカートに飛び乗った。そのカートをエレベーター前の男たちに向けて勢いよく転がす。カートはエレベーターの扉に衝突して止まった。その衝撃で中のスコールがびよこんとはねる。

「……なんだ?」

勢いよく突撃してきたシート回収用のカートに男たちが警戒を示した。

そして、スコールを見つけ、お互いの顔を見合わせる。

「おい、こいつ、ターゲットのスコール・ミューゼルじゃないか?」

「何をしているんだ。カートに乗ってあそんでいたのか?」

「まさか」

男たちも男たちで、これをどう対処していいかわからない様子だっ

た。とてもシユールな光景だったけど、私にとってはチャンスだ。

男たちの意識がスコールに向いているのを見計らい、すかさず発砲。男に麻酔弾を撃ち込む。

「う!？」

男が首筋の違和感に驚くけど、すぐさま麻酔が効いて昏倒した。

さらに素早くスライドを引き、二人目に向けて発砲する。相手もこちらの存在に気づいたが、もう遅い。一人目の男同様、首筋に麻酔針を受けた男は一秒と待たず、その場に崩れ落ちた。

囮作戦が大成功したところで、私はカートに近づき、中でひっくり返るスコールを覗き込んだ。

「あなたねえ……」

「そう怒らないでください。パンツ見えてますよ」

私は手を差し伸べてカートからスコールを引つ張り出す。

スコールは、よれよれになったドレスを直しながら言った。

「私を囮に使うなんていい度胸しているじゃない？」

「でも、無事に切り抜けられたでしょ?——ほら、運ぶの、手伝ってください」

「はいはい」

眠らせた男性二人をカートに放り込み、空き部屋に放置する。それからエレベーターに乗り、オータムがいる階のボタンを押す。わずかな安息時間を得た私は、すこし疑問に思っていたことをスコールにぶつけた。

「それにしても、よく私の変装を見抜けましたね。オータムは欺けたのに」

「すぐにわかったわ。だって、あなたメアリーさまにそっくりなんですもの」

「……あなたは母と会ったことが?」

「ええ。メアリーさまは、昔から父と母の研究に寄付をしてくれていてね。でも、私にとってメアリーさまは、資金提供者以上の、もっと特別な存在だった。——ミューゼルは炎の家系と呼ばれていてね、発火能力を遺伝に持つ特異な家系なの」

スコールは右手の掌を前方に翳した。RPGの魔法使いが魔法を放つような、そんな動作だ。それにどんな意味があるのか解らないが、わずかに空気が熱気を帯び、肌がチリチリした。

「この体質のせいで、子供の頃はみんなに気味悪がられていたわ。『スコールちゃんと遊ぶと、お家が火事になる』ってね。私はこの体質を呪いだと思ってた。でも、あなたのお母さんは言ってくれたわ。この力は神様があなたに贈ったプレゼントだと。『神さまは人々が凍えないよう火を与えた。その力はきつと凍える誰かを救うための力よ、大事にしてね』と」

「母があなたにそのようなことを？」

「昔のことだけど。今でもはつきり、覚えてるわ。あの人に出会わなければ、私は歪んで、ただの放火魔におちぶれていたわ。——世界は本当に惜しい人を亡くした」

母の死を悼むスコールに、複雑な感情を抱いていると、エレベーターが目的地に到着した。エレベーターから降りる。部屋までの通路に見張りはいなかった。おかげで難なく部屋に入れる。

部屋のダブルベッドでは、オータムが綺麗な寝顔で眠っていた。

「眠っているだけよね？」

スコールが恋人の寝顔を優しい表情でみつめながら、前髪を分ける。

「ええ。睡眠薬で眠らせてあるだけです。命に別状はありません」

「そう。ありがとう」

私は怪訝な顔をしながら、手錠の鍵を渡す。

「礼を云われる筋合いはありませんが？」

「いえ、あるわ。あなたはオータムを殺さなかった。あなたにとってオータムは邪魔な存在だったはず。殺してしまった方が、何かと都合がよかったですように」

「ただの気まぐれです」

「いいえ、あなたが優しいからよ。やっぱりあなたはこういう事に向いていないわ」

「行きますよ」

『またその話か』と思った私は無視してココからでるようにスコールを促す。

オータムを抱えたスコールと共に部屋を出ると、何かが私の真横を凄く速さですり抜けていった。それが近くにあった高そうなツボを粉々にする。

飛来してきた物体の正体は、銃弾だった。

第60話 ミッドナイトラン

襲撃を受けた私たちは非常ドアを蹴破り、非常階段を下った。その背後からサブマシンガンを構えた男たちが追いかけてくる。追手はほとんど問答無用だった。いくら抹殺が目的とはいえ、あけすけに発砲してくる。

しかもこちらは眠っている女性を担いでいるから、足の速さで振り切るのも無理そうだった。

「ここは私が。あなたは先に！」

スコールを庇いつつ、<赤騎士>のストレージに入れておいたMP7で追っ手を牽制する。

発砲。ほぼデタラメな射撃だったが、銃声に怯んだ男たちの足がわずかに止まった。

「いまですー！」

叫んでスコールと階段を二段飛ばしで駆け降りる。

前を走るスコールはオータムを担いでいたが、それを感じさせない風のような軽やかさだった。

「まるでサイボーグですね」

スコールは綺麗な眉を心外そうにひそめ、

「あら失礼ね。私はれっきとした人間よん。なんなら調べさせてあげましようか？」

場違いな妖艶さを漂わせるスコールに、私は「あいにく後ろから怖いお兄さんたちが来ます」と返答しつつ、撃ち切ったマガジンをポーチにしまい、新たなマガジンを装填した。

「そうね。で、これからどうするの？ たぶん、このままじゃ逃げ切れないわよん」

こちらは女性二人で、武器は麻醉銃とサブマシンガンが一丁。対し、追手は10人近くいて同じくサブマシンガンで武装している。まともな戦闘では、まず勝ち目がない。もともと私が<赤騎士>を展開すれば形勢逆転できるが、

「地下の来客駐車場に車が用意してあります。それでずらかります」

地下駐車場の階に到着した私は非常ドアを蹴破る。

地下の駐車場には無数の高級車がずらりと並んでいた。フェラーリ、ベンツ、BMW、ロールスロイス、エトセトラ、さながら高級外車の万国博覧会だ。無数に並ぶ外車の中から、私は場違いにコンパクとな車の許に駆け寄った。

「あら、フィアット、美女をドライブに誘うにはコンパクトすぎるんじゃないくて?」

クスクスと笑いながら、フィアットの後部座席にオータムを寝かせ、自分は助手席に滑り込む。二人が乗ったところを見計い、私は履いていたヒールを脱ぎ捨て、裸足でアクセルを踏んだ。

エンジンが唸り、おしりを蹴られたように発進するフィアット。

私はハンドルを操りながらルームミラーを盗み見る。小さな鏡には、乗車する男たちが映っていた。しかも黒塗りのセダンだ。エンジン音を聞いただけでも、排気量はこちらの倍ちかくある。レースになれば、フィアットじゃとても勝ち目がない。

「くるわ!」

私は「わかっていますっ」と叫び返し、ドレスから<赤騎士>を取り出した。

「レッドクイーン、<赤騎士>自立モード。脱出の時間を稼いでください」

《Yes I have control》

赤騎士を展開した<レッドクイーン>は、そのパワーを活かして追手のセダンをひっくり返した。綺麗に半回転するセダン。潰れた車内からは男が這い出てくる。

<レッドクイーン>が追手を食い止めているうちに、私たちは駐車場を抜け、庭園を突っ切り、車道に飛び出した。その場に居合わせた警備員と来場客が目丸くしていたが、無視して車を走らせる。

「ここまですれば、ひとまず安心かしらん」

次第に小さくなっていくホテルへ、スコールが別れの投げキッスをする。

私は海岸沿いのゆるやかな車道を走りながら、バックミラーで追手

を確認した。

「だといいいのですが」

とは言ったものの、〈レットクイーン〉が派手に暴れているおかげで、追手の影はなかった。

しばらく、悪の女幹部とエキゾチックな夜のドライブを楽しんでいると、無線機のLEDが点灯した。

『空戦ユニットの準備が完了した。600秒後ポイントCに到着予定だ』

「こちらもパーティー会場を脱出しました。600秒以内にこちらに到着します。それと、やけに標的が大人しいです。抵抗する素振りもありませんでした。何かあるのかもしれませんが」

いくらこちらが主導権を握っているとはいえ、あまりにも無抵抗すぎる。かといって諦めているようにも見えない。それをスコールの目を盗んで報告すると、通信に綺麗な女性の声が割り込んできた。

『もしかしたらウイルスかもしれないわ』

「ウイルス？ いえ、その前にあなたは？」

どこか聞き覚えのある声だと思い、私はその女性に訊いた。

ボスが女性に代わって答えてくれる。

『彼女は本作戰に医療アドバイザーとして参加している女性だ』

『はじめまして、アリス・リデル。ラウラがとてもお世話になっているわね』

私は眉をひそめた。ラウラが世話に？ では、彼女はラウラの関係者なのだろうか。

不意にロリーナがパジャマパーティーでつぶやいた言葉が蘇った。

——『ララにも見せてあげたいわ』。

「もしかして、あなたが……ララ？」

『そう、私がララ・ボーデヴィツヒ』

ボーデヴィツヒ。その言葉に、彼女が何者なのか悟る。

〈^{アド}遺伝子^バ強化^{ンス}素^ド体〉のファミリーネームは卵子提供者の姓から取られるのだ。つまり——

「あなたがラウラのお母さん!？」

『ええ。遺伝子的にはそうなるわ』

やっぱりか。ラウラに母親がいることは以前から判っていた。現代科学を以てしても卵子は人工的に作れない。だから、この世界にラウラの母親——つまり卵子提供者がいて当然なのだ。

でも、まさか同じ組織にいたなんて。それが私に強い怒りを抱かせた。

「なぜ、ラウラに会ってやらなかったのです。ラウラはずっとあなたを……！」

抑えきれない感情を発露させるようにハンドルを強く握る。

同じ組織にいたなら、愛情に飢えていたラウラのことを知っていたはずだ。なのに！

『お互い言いたいことはあるだろう。だが、今は作戦中だ。慎め』

「……了解」

上司に窘められ、言葉をつぐむ。

なおも、言いたいことは山ほどあったけれど、私は怒りを抑え込み、質問を続けた。

「それで、ウイルスとは」

『私は螺旋機関にも席を置いているのだけど、そこであるウワサを聞いたわ。ある研究機関で、特定の人物だけを死に至らしめる殺人ウイルスの研究がされているというウワサよ』

「特定の人物だけを？ そんなことが可能なのですか？」

『可能よ。このウイルスには特定の遺伝子に反応する酵素が含まれているの。その酵素は大食細胞マクロファージを触媒に感染してTFNイプシロンを生成する』

「TFNイプシロン？」

『細胞の死を司る細胞間情報伝達物質、ペプチドの一種よ。生成後、それは体内の血管を通じて心臓へと運ばれる。そして心筋細胞のTFNレセプタと結合するの』

「つまり？ 私はタンパク質プロテインの専門家じゃない。結論だけお願いします」

『つまり、心筋細胞をアポトーシスさせて、心臓まひに似た症状を引き

起こさせるの』

「どうすれば感染するんです」

『空気感染するわ』

死の予感が脳裏をかすめ、私は思わず自分の心臓を鷲掴みにした。でも、私の心臓は規則正しく脈を打っている。止まりそうな気配はない。

よくよく考えてみれば、当然だった。仮にへ特定の人物だけを死に至らしめるウイルスがあつたとしても、私はその標的にされることは在り得ない。なぜなら、これから殺そうとする相手にあんな説得をするわけがないからだ。

『念のため、スコールを隔離して検査した方がいいわ。悪いけど、あなたも』

反対する気はなかった。

私がウイルスの標的でないとしても、運び屋ベクターとなって組織にウイルスをばら撒いてしまうかもしれない。死の連鎖を食い止める意味でも、私の隔離は必要な処置だ。

『わかった。準備をさせよう』

ボスがそう言ったときだ。ぐおおんという腹に響く重たい唸り声を、私の鼓膜が拾った。

「この声は……」

空耳を願い、助手席のスコールを見る。スコールも苦笑していた。く、やつぱり奴か。——そう思った瞬間、内陸側の丘から巨大な物体が跳躍してきた。

戦車のような頭部と、昆虫のような有機的な脚部。私たちを追ってきた機動兵器はアームズテック社の月光だ。しかも、両サイドにM202ロケットランチャーを装備している。そんな重武装の月光が3機。

「追ってくるわっ」

スコールが叫ぶ。私はアクセルを最大まで踏みながら、サイドミラーで月光を確認する。鏡面には、突進してくる月光の姿が映っていた。まるでジュラシックパークのワンシーンだ。

「まずいですねっ」

月光は最高時速100キロ近い速度で走行できる。中古のファイアットでは……」。と言っているそばから、月光が跳躍して私たちを追い越した。そして、その太い脚部で私たちを踏み潰しにかかる。私は咄嗟にハンドルを切った。暴れるステアリング。派手にスピンする車体。こぼれるスコールのおっぱい。

「ちよつと、ぽろりしかけたじゃない」

「そんな格好をしているからです」

そういつてスリップする車体を立て直し、速度をあげる。

なんとか、月光の攻撃を躲せたものの、このままでは……。

「スコール、運転を代わってもらえますか」

「ちよ、ちよつとお！」

運転を投げた私に代わり、スコールが慌ててハンドルを握る。スコールが助手席から運転席に移ったことを確認し、私はサンルーフから顔を出してMP7を構えた。

(サブマシンガンが通用するとは思えません……)

それでもわずかな抵抗として、ありったけの銃弾を月光の頭部に撃ち込んだ。フルオート射撃。だが、防弾チョッキさえ貫通するMP7の破壊力を以ってしても、月光の複合装甲の前ではほとんど蚊に等しいダメージしか与えられなかった。

(ですよね……)

空になったマガジンを交換しつつ、私は〈レッドクイーン〉に通信をつないだ。

「レッドクイーン、食い止めはもういいです。こちらに合流してくださいー」

《Nomy honey——。現在、〈甲龍〉タイプとエンゲージ。現時点での合流は難しい》

甲龍タイプ。いよいよ相手側もISを投入してきたということか……。

「〈ヘル〉を返してくれれば、私が片づけてあげるわよん？」

スコールがルームミラー越しに視線を寄越してくる。〈ヴァルキ

リー〉の手にかかれば、月光など物の数ではない。だが、首尾よく奪えた〈ヴァルキリー〉の専用機を返せば、あとが厄介だ。

私はスコールの言葉を聞かなかったことにして、〈レットクイーン〉に言った。

「なんとか振り切ってください」

《Yes My honey——がんばってみる》

「超がんばってください」

〈レットクイーン〉との通信を終えたあと、今度は〈ウォルラス〉に繋ぐ。

「私です。現在ターゲットを回収ポイントへ護送中。その途中に無人兵器の攻撃を受けました。〈レットクイーン〉は敵ISと交戦中。こちらの装備では対応できません。至急、火力支援を要請します」

『了解、車両の後部座席に銃火器を積んである。それで持ちこたえろ』
「わかりました」

私は通信を終えるやいなや、未だに寝ているオータムをどけ、後部座席のカバーを外した。

その中には、対物ライフルと、携帯対戦車砲が収まっていた。その中から対物ライフルを取り出し、素早く組み立てていると、今まで眠っていたオータムが目を覚ました。

「う、う……」

額を押さえながら軽くかぶりを振るうオータムに、スコールが「おはよう」という。だが、覚醒半ばのオータムは応えず、後部座席から周囲の様子を確認した。そんなオータムに向かって月光があたかも、おはようとも言おうように合成音を発する。

……

……

……

「……………はっ？」

月光のモーニングコールに全力で「わけわからん」という顔をするオータム。無理もない反応だ。目覚めたと思ったら、無人兵器に追いかけている。一体どういう状況だという話だ。

「なんで、アメリカの無人機がいんだよ。いや、まて、あたしはスコールとパーティーに来ていて、それで、カジノで儲けて……——あ、そうだてめえ！　よくもあたしにツ！」

一服盛られたことを思い出したのか、オータムが私に飛びかかってきた。上乗りになるなり、その細い指で私の首を絞める。力が本気だった。このままだと月光より先にオータムに殺される。

「やめなさい、オータム！」

スコールがミラー越しにぴしやりと言い放った。

それに怯んだオータムから力が失せる。そのすきに私はオータムを押しつけた。

「でも、スコール、こいつが……」

「あとにしなさい。状況がわからない？」

そういつた瞬間、スコールが12.7mm機関銃の掃射をかわすため、ハンドルを大きく切った。車体の後輪がスリップし、後部座席が大きく揺さぶられる。その拍子にオータムが私の股間に顔を突っ込んできた。

「きやあ、ちよつと、何しているんですか!?　この変態ツ!」

私はオータムの顔面を蹴つとばす。

「いってーな、誰が乳臭いお前のなんかの！」

「誰が乳臭いですって！」

「いい加減にしなさい、ふたりとも！　あれをどうにかするのが先でしょー！」

おっとりした表情からは想像もできない声音で、スコールが私たちに諫める。

思わず背筋を正す私とオータム。それでもオータムは不平をもらした。

「でもさ……」

「いうこと聞かないと、もう可愛がってあげないわよ」

オータムの肩がびよこんと跳ねる。態度もみるみるしおらしくなっていた。

先ほどの狂犬ぶりがウソのようだ。

「わ、わかったよ。だ、だから、そんなこというなって……」

「じゃあ、うしろのヤモリ、どうにかしてちょうだい」

わかったよ。そう領いて、彼女は後部座席から携帯用の対戦車砲――AT―4を担いだ。

「そういうわけで、一時休戦だ、クソ女ツ」

オータムが対戦車砲の84mm安定翼形成炸薬弾をぶつ放す。使い捨てのランチャーから放たれた一撃は、たった一発で月光の頭部ユニットを破壊し、イタリアの地に沈めた。

私も「そうしましょう」と対物ライフルを構え、初弾をチェンバーに装填した。

第61話 冥府の魔女

「さて、昼からどうする？　うちにいても仕方ないし、どっかでかけるか？」

8月14日。午後1時、織斑邸。

昼食会を終え、その片付けをする片手間、一夏がリビングで寛ぐセシリアと鈴に訊いた。

「外は熱いですし、わたくしは、屋根のあるところがよろしいですわ」と、セシリアが食後のアイステイーを口にしながら答える。

本心はもつと一夏の部屋にいたい。更にいえば『一夏の情報を収集したい』という思惑があったが、悟られないよう外の気温を気にするフリをする。

「そうね。外はこの暑さだし、外出は控えたいわね」

セシリアと対照的に鈴は本心で外出したくなさそうだった。扇風機を独占する様子からも、それが判る。

「じゃあ、どうすつかなく、俺の家にもやることないしな」

そんなとき、新たにインターフォンが鳴った。

「——は〜い」

一夏がエプロンで手を拭き、インターフォン越しに訪問者の応対をする。

小さなモニターには、ラウラとシャルロットが映し出されていた。その後ろには箒もいる。

『遊びに来てやったぞ』

「お、そうか。今開けるからちよつと待っていてくれ」

玄関先でふんぞり返るラウラを迎えに、一夏が玄関へ向かう。

しばらくして、リビングに紙袋を持ったラウラとシャルロット、箒がやってきた。

「あ、セシリアたちも来てたの？」

「ええ、一夏さんが昼食をご馳走してくれるということでしたので。シャルロットさんは？」

「学園にいても訓練くらいしかやることなく。そしたらラウラが

「一夏の家に行こうって」

と、横目でラウラを見る。ラウラはリビングに案内されるなり、目を爛々とさせていた。

この家は恩師である千冬の住居でもあるので、興味津々な様子だ。

「ふむ、ここが教官のセーフハウスか。実に興味深い」

そして、まるで自分の家のように寛ぐ鈴を見つけ、目くじらを立てる。

「おい、凰鈴音。ここは上官の家でもあるのだぞ、そのだらけた態度はなんだ」

「うるさいわねえ。ここはあたしの家みたいなもんだからいいのよ」

来て早々衝突する二人に一夏は苦笑した。

「まあ、そう怒らず、ラウラも寛げよ」

「ふむ、家主の一夏がそういうなら、——そうだ。教官に頼まれていた黒ビールとソーセイジだ」

ラウラが手に持っていた荷物を一夏に差し出す。

それに続いてシャルロットも紙袋からラツピングされたボトルを取り出した。

「僕からはこれ。ワインとチーズ」

「お、ありがとな、ラウラ、シャルロット。千冬姉も喜ぶよ」

最後に箒が小奇麗な包装紙に包まれた箱を差し出す。

「これは私からの暑中見舞いだ」

「おお、箒まで。みんなありがとな。今度、何かお返しするよ」

と一夏は土産をしまいに台所へ向かい、その足で三人分の麦茶を用意して帰ってくる。

「ほら。——外、熱かっただろ」

「うん、ここに来るまでにミイラになっちゃうかと思ったよ……」

シャルロットはぐったりした様子で麦茶を煽る。

湿気が少なく、気温が20前後と安定したフランスの夏とは異なり、日本の夏は連日30度を超える猛暑が続く。フランス生まれのシャルロットは、早くも日本の夏にバテ気味のようすだった。

「軟弱な奴だな、この程度の気温で」

「そういうラウラさんは顔色ひとつ変えていませんわね、この暑さなのに……」

「訓練の賜物だな」

黒ウサギ隊が得意とする作戦は強襲戦術と人質救出だ。もつぱら市街戦がその割合を占める。だが、最近では、対ゲリラ戦や長距離偵察なども視野に入れており、砂漠地帯、寒冷地、亜熱帯という過酷な環境での適用訓練も実施しているらしい。

「ほお、あの甘えん坊が遅くなったものだ」

ラウラが得意げでいると、リビングに新たな人が入ってきた。

Tシャツにジーパンというラフな服装。とても活発そうな格好で現れたのは千冬だ。

「教官っ！」

「あ、千冬姉、おかえり」

「ああ、ただいま」

短く答え、千冬は起立して敬礼するラウラに「かまわん」と無礼講を命じた。

そして、いつものメンバーを目にして、ちいさく肩をすくめる。

「玄関に知らない靴があると思ったら、やっぱりおまえらか」

「お、お邪魔しています、織斑先生」

睨まれたたわけでもないのに、箒、セシリアは恐縮した。鈴にいたっては、抱き着いていた扇風機から飛び退き、正座である。相変わらず、千冬に対する苦手意識は克服できていないようだ。

そんな鈴を見たラウラが悪戯を思いついた子供のような顔をした。

「うむ？ 急にどうしたのだ、風鈴音？ 先と態度がまるで違うではないか。先は『まあ、ここはあたしの家みたいなものだしい』などとほざいて、我が家のように寛いでいたくせに」

ラウラの一言に鈴の表情が凍りついた。

「ば、ばば、ばか！——いい、言っていますよ、千冬さん！ ほんとに、ほんとに」

前半はラウラに、後半は千冬に向けたものだ。

『ほお』と眼を細める千冬に、鈴は生きた心地がしなかった。

「まあいい。好きに寛げ。ただし汚すなよ」

「もちろんです！ あんたたちも汚すんじゃないわよ！ 汚したらあたしが許さないからね！」

と、取り出したハンカチでテーブルを拭きながら、へこへこする鈴。隣ではラウラがしてやったりと悪い顔する。

そんな二人を笑いながら、千冬は冷蔵庫から麦茶を取り出してコップに汲む。その麦茶を一気に飲み干したところで、もう一度リビングに視線を馳せた。

「そういえば、リデルがいないな、きてないのか？」

「何か物足りないと思ったら、そっか、アリスがいないのね」

鈴が思いついたように周りを見渡す。

何かをする時は、決まって一夏、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラにアリスを加えた7人だ。けれど、今日はアリスがいない。たったそれだけのことで、活気に似た何かが足りない気がして不思議と寂しい気分になった。

「まあ、そういうこともあるか。それとこれからまた出かける。ジエニフアーと食事だ」

ラウラやく紅椿の件で、手回ししてくれた女性を労うディナー会ということだった。

「夕食はいらない」と言った千冬に、一夏は「わかった」と答え、

「そうだ。ラウラとシャルロットが土産を持ってきてくれたんだ。中身はビールとソーセージ、ワインとチーズだって。あと、箒がお歳暮と、セシリアがケーキを買ってきてくれたぜ」

「そうか。——で、嵐からは何もないのか？」

「すず、すみません。今度は何かもってきますッ！」

冗談のつもりであったが、鈴は白目を剥いた。

「はは、そうか。では、次に期待しよう。それと四人ともすまないな。ありがたくいただく。——では、私は支度があるので失礼させてもらう。おまえたちはゆっくりしていけ」

軽く手を上げ、千冬は着替えるべく二階へ上がっていった。

千冬の姿が見えなくなつて、ようやく箒とセシリアは人心地がつく。鈴に至つては酸素を求めるようにゼイゼイと肩で息をしていた。そんな鈴の背を一夏が撫でながら、

「で、これからどうする?」

と、訪問の連続で逸れていた話題を元に戻す

「よかつたら、みんなで縁日に行かないか?」

そう提案したのは箒だった。

箒は自前の鞆からチラシを取り出し、それを各々に配つて回つた。

「そういえば今日か、篠ノ之神社のお祭り」

箒の実家は神社を営んでいる。その神社で年に二度、お祭りが行われる。その一回目が、今日の夕方6時から行われるそうだ。

チラシを持つてきたところを見ると、最初からそのつもりだったのかも知れない。

「いいじゃないか。みんなはどうだ?」

「あたしはいいわよ」

「わたくしもかまいませんわよ。むしろ行つてみたいですよ」

「僕も賛成。なんだか、楽しそう」

「日本のお祭り、私も興味がある」

「よし、決まりだな。じゃあ、アリスも呼ぶか。せつかく、こうやつてみんな集まつたんだし」

「いや、嫁は今イタリアらしいぞ」

自前のケータイを取り出してコールする一夏に、ラウラが答えた。

「そういえば、大がかりな荷造りをしていたな。こんな大きいバッグを買つてきて」

「なに、長期滞在でもすんの?」

「何でも特別な用事があつて、2週間ほど向こうに滞在するらしいよ」

シャルロットの言葉に、みんなが『それなら仕方ないか』という顔を
をする。

ただ唯一アリスの正体を知る一夏だけは、ひとり表情を曇らせていた。

(特別な用つてやつぱり、組織の任務とかなのか?)

不意にロリーナの言葉が脳裏に甦った。

——アリスは貴方のためなら命を賭けて戦うわ。

もしかして、アイツはいまこの時も戦っているのだろうか。他ならぬ俺のために。

そう思っていると、意外にも通話が繋がった。ただし、返ってきた応答は「おかけになった電話番号は現在電波の届かない場所にあるか、電源が入っていません」という無機質なガイダンスのアナウンス。普段は何も思わないガイダンスが、なぜかそのときだけ苛立たしく感じた。

彼女の無事を確かめさせてくれ、声を聞かせてくれ、そんな不安からくる苛立ちだった。

そんな一夏の心情を汲むことなく無機質なガイダンスは続く。
へピーという発信のあとにメッセージをどうぞ

「アリス、俺だ。今から箒たちと篠ノ之神社の縁日へ行くことになってさ、それで電話したんだけど、その、おまえは無理そうだな。だから、なんか欲しい物があつたらメッセージくれ。それと——」

一夏は箒たちからすこし離れたキッチンに移動し、
「ぜったい、無事に帰ってこいよ。ぜったいだからな」

一夏は湧き上がる不安を抑えつけるように通信のOFFボタンを押す。

そして、沈黙したケータイの画面をおぼろげに見つめ、
(俺、なにをしているんだろうな……)

あの時、自分は「アリスの為に何かしよう」と決意した。
なのに、肝心な少女をひとり戦わせておいて、俺は何をしているんだろう。

友だちと集い、愉楽に耽ることは悪い事じゃないはずなのに、いまだけは、こうして女性を侍らせ、楽しんでる自分が酷く恥ずかしい存在に思えた。

そんな羞恥心に胸を掻き毟りたくなる衝動を抱える一夏の許に、箒がやってくる。

「どうした、一夏。顔色がよくないぞ?」

「え？ いや、そんなことないぞ。それより、縁日のしたくしようにせ」
一瞬、この幼馴染に身上の悩みを打ち明けられたら、どんなに楽だろうと思う。

けれど、アリスの正体を明かす訳にもいかない。一夏は平然を装って、彼女たちの許に戻るしかなかった。ただ、胸中でアリスの無事を祈りながら。

♡

◆

♣

♠

イタリア沿岸分。うねる道をフィアットが走りぬける。右曲りの急カーブに差し掛かり、遠心力で浮き上がる車体を、オータムが体重をかけて押さえつけた。

私は同じく急カーブに差し掛かった月光に、対物ライフルを向け、その脚部に狙いを定めた。

発砲。

関節部に損害を受けた月光は、この急カーブを曲がりきれず、よろよろと沿岸部へ寄って行き、漆黒の地中海に転げ落ちていった。

これで二機目。残すは一機だが、こちらの残弾数もわずかだった。対物ライフルはマガジンに残った6発。対戦車砲も残り1発しかない。

「オータム、私が動きを止めます」「ちゃんとやれよ！」「直線に出るわよん」「——スコール、車を直進させてください」「機関銃の射線に入るわ！」「私がなんとかします！」

「わかったわ」と答え、スコールがフィアットを月光の正面に据える。

予想どおり、月光に備えられたM2ブローニング重機関銃が私たちを狙う——が、相手の撃発より早く、M82A2でそれを破壊する。さらに月光の脚部ユニットに50口径を撃ち込んで、膝をつかせた。

「いまですー！」

私の合図で、オータムがすかさず月光の頭部ユニットに対戦車砲弾

を叩きこむ。

爆発。機動に支障をきたしていた月光はよけることかなわず、そのまま機能停止した。

「これで全機撃破——なんとかなりましたね」

と、警戒をゆるめた瞬間だった。

突如遠ざかる月光に装備されていたロケットランチャーが一矢報いようと火を噴いたのだ。

(火器管制は生きていた!?)

まずい、弾道が全員バーベキュー確定の直撃コース！

(やられてたまるもんですかッ)

私は自分でも驚くような反射運動で対物ライフルを構えていた。そして神がかり的な射撃で、ロケット弾を私たちへ届くまえに撃ち落とす。

50口径のライフル弾は、ロケット弾の信管をぶち抜いて、本体を空中分解させた。

「やるじゃねーか」

神業を成した私に、オータムがひゅーと口笛を吹く。

「待っている人がいるんですよ。やられるわけにはいかない」

「ほお、もしや恋人か？——じゃあ、さっきのアレも愛の為せるわざか。妬けるねえ」

オータムが冷やかすようにケタケタ笑う。

私がやってのけた神業。それは愛の力によるものなのか。判別には困ったが、彼の言葉が士気^{メッセージ}を上げていることは確かだった。

しかし、下品に笑うオータムが気に入らなかつた私は返事代わりに睨み返した。

「そう睨むなって。バカにしているわけじゃねーよ。あたしは、人間にはそういうチカラがあると思ってるぜ？ 誰かを想って戦っている人間はつえーっていいたいのさ。合理的な兵士よりな」

見るよ、とオータムは顎をしゃくって遠ざかる月光の残骸を指した。

「月光はある意味で兵士の究極系だ。感情に左右されることなく、合

理的でミスを犯さない。だが、その月光は不完全であるおまえに敗れた。それがなによりの証拠だろ」

確かに感情のない兵士は優秀なのかもしれない。だが、感情を起爆剤とする人間の行動力——人間の根源的パワー——は、時としてそれを凌駕する。そういうことを彼女はいいたいのだろうか。

「だが、いくら想いが強くても無敵になれるわけじゃない。このままじゃやべーぞ」

と、オータムが遠くを見据えて顔をしかめる。私たちが人間の底力に感慨耽る間もなく、丘の向こうから新たな敵が現れた。

今度はISだった。重量感のある黒いフォルムに、大型のキャノン。ラウラが搭乗していたくシユヴアルツエア・レーゲンが、ホバー走行でこちらに接近してくる。

「さすがにあんなもん、相手にしてらんねえぞ。つか、誰の差し金だ。アリーシャか？」

「アリーシャですって？」

第二回モンドグロツソの射撃部門で優勝した〈ヴァルキリー〉のひとりだ。現在はテンペスタの開発元〈シヨセスターフ社〉の代表取締役だと聞く。その彼女が〈亡国機業〉の幹部だともいうのだろうか。

春狼という男といい、〈亡国機業〉の幹部会とは一体……。

「ここはアリーの管轄だけど、おそらく春狼よ。手引きはしているでしょうけど」

「くそ、あの優男か！ スコアにフラれた腹いせか！」

「いいえ、お気に入りの娘を巻き込んだから、かんかんなんだわ」

「なんでもいい。今度あつたらぶん殴つてやる！」

「この状況じゃ、その『今度』があるかも危ういけどね」

スコールの言う通り、こちらにISとやり合うだけの余力はない。最悪、スコールかオータムに専用機を返して撃破してもらうしか……。

そう考えながら、私は対物ライフルを構えた。向こうもレールガンを構える。放たれた徹甲弾はファイアット前方10m先に着弾した。舗装がひしゃげ、飛び散った小石礫がフロントガラスに突き刺さる。

もう後先を考えている暇はなかった。

「――アリス、ヘルをッ！」

私は思考より反射でゴールドイヤリングをスコールに投げる。そのイヤリングがスコールの手に収まるのと、暴虐的な運動エネルギーを秘めた徹甲弾が車両を粉碎するのは、ほとんど同時だった。

♡

♣

♠

戦車さえ粉碎するエネルギーを秘めた一撃は、中古の軽自動車を軽々しく吹き飛ばした。

しかし、そんな車中にあっても、私は傷一つ負うことなく、それどころか柔らかい感触に包まれていた。

どうやら、私はスコールの胸に顔を埋めているらしい。

「大丈夫かしらん？」

安否の声に「ぶはっ」と顔を上げれば、金色のトンがり帽子を被ったスコールが妖艶に笑っていた。服装もドレスからハイレグ型のI Sスーツにコスチュームチェンジしている。さらにその上からローブドレスのようなアーマーをまとっていた。まるで魔女だ。機械を身にまとった武装魔女。

「おい、おまえ、人の恋人をやらしい目で見るんじゃない！」

あまりの似合いっぷりに見惚れる私の耳に、オータムの乱暴な言葉が飛び込んでくる。

やさしく抱きかかえられている私とは対照的に、オータムは犬に啜えられていた。背部にガトリング砲を背負いつた機械仕掛けの犬だ。いや、成人女性を啜えるその大きさは狼に近いか。

「つーか、おかしくね？ 普通、あたしがそっちだろ！」

「そういわないで。あなたはいつも抱いてあげているじゃないか！」

「そうだけどよ……でも、やっぱり、納得いかねえ！」

恋人である自分の雑な扱いに、憤慨するオータム。

気持ちにはわからないでもないが、痴話げんかはあとにしてもらいた

い。あーだこーだ言い合うのは勝手だけど、敵が前にいるのだから。ほら、みなさい、言っているそばから敵が撃ってきた！

「そうね」

スコールは余裕ある声音で、飛来した翼付き徹甲弾に手を翳した。攻撃を受け止めんと突きだしたその掌底に眩い膜が広がるなり、徹甲弾が一時停止したビデオ映像のように、ぴたりと止まる。

やがて徹甲弾は運動エネルギーを失い、からんとアスファルトに力なく落ちた。

「A I Cだと……」

H M Dを装備した敵のパイロットが低いマシンボイスで漏らす。

徹甲弾を受け止めた現象は、間違いなくアクティブ・イナーシヤル・キャンセラー、運動エネルギー兵器を無力化する装備によるものだった。

「あらく、A I Cがあなただけの装備だと思ったあ？」

「……………」

<シユヴァルツエア・レーゲン>は無言のまま、腕部のプラズマ手刀を素早く展開した。

そのよどみない動作から、動揺の類は感じられない。踏み込んだその突撃にも、また恐れがなかった。

「ふふ、この手の揺さぶりは通じないわね。——さすが兵士として育てられた子」

「兵士として育てられた？」

「飛ぶわよ」

「——うわっ」

怪訝な顔をする私を抱え、スコールは後方に大きく飛んだ。空中へ逃げ、斬撃をやりすごしたスコールを、敵のワイヤーブレードが追撃してくる。そのブレードが<ヘル>と呼称されるI Sの脚部に絡まりつく。

「貴様の機体がA I Cを使えたから、どうだというのだ」

敵はワイヤーを一気に巻き取り、スコールを自分の間合いへ引き寄せた。

そしてあらゆる物質から運動エネルギーを奪う装置——A I Cで私もろともスコールの自由を奪い、レールカノンを武装魔女のトンガリ帽にポイントする。だが、スコールは余裕を崩さなかった。

「では、こういうのはどうかしらん——《ガラム》ウ」

スコールが叫ぶと、地上で待機していた犬型自動人形が、啞えていたオータムを夜空へ放り投げ、主に向かって遠吠えを捧げた。咆哮。それが大気を震わすと共に“何か”を砕く。

「なんだ……？」

遠吠えの意味を凶れずにいる敵へ、スコールが浪々と動作で武装を展開する。

魔女の手に握られた武器は、三連装の砲身を持つ、ガトリング砲のような大型キャノンだ。

「貴様、なぜA I Cの中で動ける……」

スコールは冷たい微笑を浮かべるだけで、何も答えなかった。

ただ、静かにキャノンの引き金をしぼるのみ。

「さて、冥府に旅立つ準備はできて？」

キャノンから撃ち出されたプラズマ弾は、＜シユヴァルツェア・レーゲン＞の腹部で炸裂した。

その圧倒的な火力に＜シユヴァルツェア・レーゲン＞が海岸から零れ落ち、漆黒の地中海に消えていく。あたかも地獄へ落ちていくように見えたのは、突き落とした相手が＜冥界の女王＞の名を冠していたからだろうか。

「へへ、その機体は一体……」

「——まあ、この機体の説明はあとでしましょう。あなたの相棒が到着したわ」

私がホテル方向に視線をやると、こちらに近づいてくる赤いI Sが見えた。

制動をかけ、着地した＜赤騎士＞に私は口先を尖らせる。

「まったく、ヘレッドクイーン、遅いですよ」

もう少し早く来てくれれば、専用機を返す必要もなかったのに。

《Sorry my honey》

「まあいいです。で、敵は振り切れたのですか？」

《振り切れなかった。あとをつけられてる。現在も交戦中》

「それを先に言いなさい！」

私が怒鳴なった瞬間、近辺でアスファルトが爆ぜた。直感的に衝撃砲による攻撃だと察する。さらに二発目が飛来。今度はスコールがAICで無力化してくれた。

「はやく、赤騎士に乗りなさい」

「いわれなくても。システム・コントロール・プライオリティ変更――

I have control

《SCP変更。生体認証、完了。専属操縦者アリス・リデルと認識――
You have control!》

私が<赤騎士>を自らの体に再展開すると、闇夜の中から二機の甲龍が現れた。

現れたのは、白い甲龍と黒い甲龍だ。

二機の甲龍は連結して使う《双天牙月》を互いに一本ずつ持ち、本来二門ある衝撃砲も一門ずつ装備していた。まるで鈴の甲龍の武装を二人で分け合ったような具合だ。

「あ、スコールだよあ」「あ、スコールだねえ」

新たに現れた操縦者の声は、想像以上に幼いものだった。髪は黒色で、それを片方に寄せてまとめている。<白い甲龍>の操縦者は右寄せで、<黒い甲龍>の操縦者は左寄せに寄せだった。それ以外は、双子のようにまったく同じだ。

「こんばんは、ユエリヤン 月亮と太タイリヤン。よい夜ね」

「あれ、スコールだけ？ <シユヴァルツエア・レーゲン>、こつちにきてない?」

「彼女なら、地中海で海水浴中よん」

双子は顔を見合わせた。

「じゃあ、わたしたちだけでスコールと戦うの!?!」「オータムもいるのに!?!」

国家代表と代表候補生の戦力比はざっと1:1.5。へヴアルキリー<と代表候補生なら1:2。スコールを倒すには三人一組スリーマンセルぐらい

が妥当な戦力になる。しかし、＜シユヴァルツエア・レーゲン＞が先行しすぎた為、敵側のプランは破綻してしまったようだ

「どうする。月亮^{ユエリヤン}」わたしたちで、がんばるしかないよ、太^{タイリヤン}」
「スコールはヴァルキリーだよ」「でも、やらなきや春狼におこられるもん」「鈴ちゃんの仇を討つって息巻いていたもんね!」「死んでいないけどね!」

「がんばろう、わたしたちには若さがあるもん!」「そうだね、そうだね、若さがあるね!」

「あらん、私もまだ若いのだけれど?」

白黒の〈甲龍〉に乗った双子は意を決したように頷き合い、臨戦態勢を取った。

そして、互いの《双天牙月》と《龍咆》を構える。

「まあいいわ。いらっしやい。おねえさんが相手してあげるわあん」「じゃあ、いくね」「じゃあ、いくよ」

まずく黒い甲龍＞が《双天牙月》をバトンのように振り回し、スコールに斬りかかる。——と、見せかけてそのままスコールを飛び越える。直後、開かれた視界の先で、く白い甲龍＞が衝撃砲を放った。

（——く黒い甲龍＞の接近は、く白い甲龍＞の攻撃を隠すためのフェイク!）

しかし、この絶妙な——下手をすれば仲間撃ちさえあり得た——タイミングで放たれた衝撃砲を、スコールは手持ちの武器で相殺してみせた。——A I Cを使わずに。

（なぜ、衝撃砲に有効なA I Cを使わなかった?）

その理由は、超えていったく黒い甲龍＞が背後から斬りかかってきた時に理解できた。

（そうか、このためか）

もし〈白い甲龍〉の衝撃砲をA I Cで受け止めていたら、〈黒い甲龍〉の斬撃に対応できなかっただろう。——私の予想を領けるように、スコールは背後からの斬撃をA I Cで停止させていた。

（やりますね）

膠着する二機に、私は息をのむ。敵の連携攻撃もさることながら、

それをしのいだスコールの先読み技術も大したものだ。さすがへヴアルキリー」の称号を持つだけはある。でも、オータムのドヤという顔は殴りたくて仕方がない。

「アリス、この子たちは私が引き受けるわ。あなたはくシユヴァルツエア・レーゲン」の許へ行きなさい。彼女はあなたにとって会っておくべき相手よ」

スコールに云われなくても、そのつもりだった。

『兵士として生み出された存在』。それに心当たりがあった私は、双子の相手をスコールに任して、くシユヴァルツエア・レーゲン」の許へ飛翔した。



月光に照らし出された漆黒の地中海の上。私はくシユヴァルツエア・レーゲン」と対峙した。

眼前のくシユヴァルツエア・レーゲン」は、ラウラのくシユヴァルツエア・レーゲン」と同タイプに見えた。レールカノン、プラズマ手刀、ワイヤーブレード。そしてAIC。

私が《ヴオーパル》を抜くと、相手も腕部装甲のプラズマ手刀を展開した。

(来るっ！)

敵は堂々と正面から攻撃を仕掛けてきた。

横ふりの一撃。私は《ヴオーパル》で受ける。さらに互いが得物を翻す。斬って、突いて、払って、躲して。攻撃の応酬を繰り返しながら、私はラウラと踊ったときのことを思い出していた。

(やりますね。私と互角の格闘戦ができるとは……)

素直な感想だった。

さすがへ亡国機業」の実働部隊だけはある。鍊度はラウラといい勝負か。

(……だとしたら、まずいですね)

私と互角に渡り合う敵に、胸中で焦りを抱く。

長くスコールたちを放置しておけないし、＜甲龍＞タイプのこともある。この戦闘は早期に決着させねば——そんな焦りだ。しかし、実力が均衡している現状、正攻法で倒すには時間がかかる。早期決着には相手の意表をつく奇策が必要だった。

(でしたら——ッ)

私は斬り合いをやめて、逆推力装置で後退。さらにP I Cで慣性ベクトルを逆転させ、速度そのままに《ヴォーパル》の貫きを繰り出す。操縦者はこのヒット&アウエー攻撃をA I Cで受け止めた。だが、ここまでの動作をラウラとの交戦経験から読んでいた私は、量子テレポートを使ってA I Cの効果範囲から脱つする。

——右腕部に内蔵されていたグレネードを残して。

「ちっ！」

眼前で爆発したグレネードに、操縦者はたまらず後退した。

狙っていた脳震盪のたぐいは起こらなかった。頭部を覆うH M Dが彼女を守ったようだ。ただ、その衝撃でH M Dが損傷したらしく、パイロットの肉声が漏れた。

「やってくれたな、アリス・リデル」

私はわずかに驚きを感じた。

「私を知っているのですか？」

「ああ、知っているとも。——妹がお前の世話になった」

＜シユヴァルツェア・レーゲン＞の操縦者がおもむろに壊れたH M Dのフェイスガードを外す。

あらわになつたその素顔に、私は驚愕を禁じ得なかった。

赤い双眸。神秘的な白い肌。ダイヤモンドダストのように煌めく銀髪。

そう、私の前に現れたのは、I S学園にいるはずのラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「どうして、あなたがここに？」

私が警戒を解くと、ヘレッドクイーン＜が警鐘を鳴らすように言った。

《ハニー、よくみて。彼女はラウラ・ボーデヴィツヒじゃない》
「え？」

云われて目を凝らすと、少女とラウラの差異に気づいた。彼女は両眼が〈超越オージェンの瞳〉だったのだ。ラウラは〈超越オージェンの瞳〉に適應できなかった身。だから、彼女の瞳はオッドアイなのだが、目の前のラウラは、両眼が金色に輝いていた。

彼女はラウラじゃない。では、目の前に現れたラウラと瓜二つの少女は何者なのか。

「あなた、一体？」

ラウラと瓜二つの少女は微笑を浮かべた。

「名前などない。——それでも名乗れというなら、こういう云おう」

ラウラに似た少女は月光を背にこう言った。

「私はライラ・ボーデヴィツヒだ」

第62話 月の落とし子

「おお、なつかしいな」

篠ノ之神社の鳥居を潜った俺は、懐かしさに感動の言葉を漏らしてしまった。

箒が引越し、道場が閉められてからは一度も来ていないので、6年ぶりぐらいか。

「そういえば、いま道場はどうなっているんだ？」

「それだがな、定年退職した警官の人が、厚意で道場を開いてくれるんだ。道場の手入れまでしてくれているようで、道場も防具も昔のままだぞ」

「そっか。そりゃよかった」

俺は篠ノ之道場でいろんな事を学ばせてもらった。その道場が廃れるのは、元門下生としてやっぱり悲しい。無くならなくて本当によかったと思う。

「道場だけじゃなく、母屋もあの頃と何も変わっていないぞ。家は人が住まないとだめになるというだろう？　そこで雪子おばさんが住み込みで管理してくれたんだ」

「そっか。なら早く、もう一度、おばさんたちと一緒に暮らせるようになるといいな」

「私もそう思う。父さんと、母さんと、——あ、あと姉さんも」

姉さんも。

たぶん、一家離散の原因を作った束さんの全ては許していないだろう。けど、憎んでもいない。今の言葉はきつと“姉とやり直したい”という気持ちの現れだと思う。ずっと二人の仲を気にしていた俺としては嬉しい心の変化だった。

でも、その心境の変化はどうしてなのだろう。専用機を貰った時でさえ、ツンケンしていたのに。

「実は先日、母さんたちに会ってきたんだ。そこで姉さんの話をいろいろ聞いてな」

それで箒の気持ちに変化が生まれたのか。

一体どんな話をしたのだろう。気にはなっただけど、聞くのは無粋なのでやめておこう。

「でも、よくおじさんたちの居場所がわかったな」

両親の居場所は政府の保護プログラムによって機密扱いされている。娘の筈でさえ、知らされておらず、面会すら難しいと聞いていたけど。

「先月の誕生日にアリスがくれたプレゼント、あつただろ？」

「ああ」

先月の7月7日。アリスは筈の誕生日にメモリースティックを贈っている。

「その中に両親の住所があつたんだ。しかも面会の許可書まで」

あれは心底驚いたという顔をする筈だったが、俺はそれほど驚かなかった。ただ「ちよつと粋な計らいをするなあ」なんて思う。メモリースティック自体は誕生日プレゼントじゃなく、その中に記憶されていた「両親の住所」が誕生日プレゼントだったわけだ。

「しかし、アリスはどこで両親の住所を手に入れたんだ？」

「アレじゃないか？ ハッキングとか」

実際は組織の力を借りたのだろうけど、適当なことを言っでごまかす。

組織の事やアリスの素性は公にしないで欲しいと言われているのだ。

「うくん、はつきんぐ、か。私はその辺りに詳しくないから、よく解らんが」

なおも腑に落ちない様子だったので、俺は早々にこの話題を切り上げる事にした。

「それより縁日を楽しもうぜ」

「ああ、そうだな」

俺たちが参道を奥に進むと、いろんな露店が並んでいた。たこ焼き、焼きそば、綿あめ、リング飴といった伝統的な店から、ケバフやクレープなど今時の店まで。それを囲む客で、境内はすごく賑わいを見せていた。

「まるでカーニバルだな」

「でも、見てラウラ、仮面が売ってあるよ。マスカレイドじゃないかな？」

辺りを見回すラウラとシャルロットは、縁日に興味津々という様子で言った。

「二人は日本の縁日とか初めてか？」

「うん。日本のお祭りはね。——ねえ、一夏、あのふわふわしたお菓子は？」

「あれはわたあめだ。ザラメって砂糖を溶かして綿状にしたお菓子。ジャパニーズ・ボンボンだよ」

ちなみにボンボンとはフランスの砂糖菓子のことだ。

「おお、ジャパニーズボンボン！ そうなんだ！ ねえ、買ってきていい？」

「おう」

頷くと、シャルロットは一目散に綿菓子を買いに走っていった。その姿を見たラウラが「ふっ、こどもだな」と苦笑する。家に来たときのおまえもあんな感じだったけどな。

「しかし、このお祭りは何を祝う祭りなのだ？」

ラウラの質問に箒が答える。

「現世へ帰ってきた霊魂を持って成すために興された祭りだそうさ」

でも、神道の行事というよりは郷土の行事に近い。だから知名度は高くなかったのだが、この神社が束さんの実家って判明してからは、すごい勢いで参拝者が増えていったらしい。なんでも、IS操縦者として大成したい人が願掛けにきているそうさ。

「なるほど。帰ってきた死者の霊魂を持って成す祭りか。そういえば、冥界から死者が帰ってくる黄泉がえりという話を聞いたことがある。

——では、あいつもこの現世に帰ってきているのだろうか？」

ラウラは神妙な顔で境内に視線を馳せた。まるで誰かの影を探すように。

俺と箒は顔を見合わせた。——アイツとは誰だろう。ラウラも親しい人間を亡くしているのだろうか。

「ライラ、ボーデヴィツヒ……」

私はラウラと瓜二つの少女を前にして、呻くように呟いた。

ボーデヴィツヒ。では、彼女もラウラと同じドイツの研究所で生まれた遺伝子強化素体なのだろうか。その彼女がなぜ「亡国機業」の実働部隊に……。いや、考えるのは後回しだ。

「ライラといたしましたね。私と一緒に来ませんか？」

以前、ラウラはアミューズメントパークで手に入れた人形にライラと名付けた。これは偶然じゃない。ならば、彼女との戦闘は避けたかった——が、現実はその許してくれなかった。

「断る。それではおまえと殺し合えないではないか」

「なんですって?」

「私は戦うために生み出された存在だ。戦う事が私のすべてであり、喜びなのだ」

歪んだ表情から、攻撃的な気配が放たれる。どうやら彼女はいわゆる戦闘狂らしい。

戦闘を手段じゃなく、目的とする人間。ある意味でラウラとは正反對な人間だ。確かにラウラは攻撃的だったけれど、その全ては「目的」を達するための「手段」であって、彼女が戦闘を楽しんだことは一度もない。

「スコールと戦えるからと参加したが、まさかおまえと戦えるとはな。僥倖とはこのことか。スコールなど、もうどうでもいい。さあ、世界を敵に回して戦ったおまえの力、私に見せてくれ!」

ライラが黄金の瞳に狂喜を宿すと共に、<シュヴァルツエア・レーゲン>のジェネレーター出力が呼応するように跳ね上がった。完全な戦闘モードに移行したライラに、私は渋面を作る。

(戦うしかありませんか……)

私は堂々と正面から振りかざされた腕部装甲のプラズマ手刀を《ヴォーパル》で受け止めた。

互いの斬撃がぶつかり、ふたつの力が均衡する。私とライラが一進一退していると、通信パネルにCALLの文字が表示された。

《ハニー、<ウォルラス>から個人秘匿通信。通信コーデイクはララ・ボーデヴィツヒ》

「繋ぎなさい」

罅迫り合いを解除して、スラストリバーサーで後方へ距離を取りつつ、通信を許諾する。

そして、通信モニター移ったラウラと同じ銀髪の女性に怒鳴った。

「なんです、こんなときに！」

『アリス！　もしかしてライラと戦っているの!?!』

「そのまさかですが、なんです！」

『信じられない！　彼女が生きていたなんて……』

モニター越しの声には、戸惑いと喜びが入り混じっていた。

「どういうことですか？」

『彼女は優秀だった。でも凶暴性の発露につき、手に負えなくなつて破棄されたの』

破棄。私は嫌な言葉だと思った。彼女は生きとして生きる人間だ。それを産業廃棄物みたいに。

だが、同時に納得もしてしまう。彼女のような戦闘狂は誰の手にも余るだろう。

《ハニー、敵機照準！》

意識をライラに戻す。ライラはレールカノンを構えていた。

発砲。放たれた極音速の翼付き徹甲弾をギリギリで躲しながら、私はララに言い返す。

「でも、彼女は生きています！」

『ええ、彼女は生きていた！　だから、お願い、ライラを傷つけないで欲しいの!』

彼女の生存を確認できた喜びゆえか、ララは感極まった様子だった。

まったく勝手なことをいつてくれる。

でも、彼女を傷つけたくない気持ちは私も同じだ。彼女がラウラに

とって特別な存在であることは間違いないから。だが、簡単にできれば、こんな苦勞はしていない。

《接近警報!》

〈レットクイーン〉がアラートを発する。同時にライラが一気に肉薄してきた。

横なぎの一閃。私はしゃがんでかわし、再び後方へ飛ぶ。逃げてばかりの私に、ライラは苛立った様子をみせた。

「貴様はさつきから、何をしゃべっているのだ?」

「あなたのママとね。ママにあなたを叱ってもらおうと思ひまして」
それにライラが笑った。

「ははは、面白いことをいう。私に母などいないぞ? 戦争が、私を生み、育てた」

「ですって」

ライラの言葉を聞いていたであろうモニター内のララに、視線を向ける。

ララは寂しそうな顔をしつつも、首を左右に振った。

『いいの。私には母と呼ばれる資格なんてないもの。——でも、親心だけは持たせてほしいの。今更なのはわかってるわ。それでも、地獄に落ちるそのときまで、私はあの子たちの幸せを祈りたい』

「祈るだけですか」

『いいえ。彼女たちのためなら、何だってするわ。許されるなら、今すぐ駆けつけてもいい』

その言葉に彼女の贖罪の気持ちと、愛情を垣間見る。

彼女には残りの生涯とその命を賭す覚悟があるのだろう。しかし、私は辛辣に現実を突きつけた。

「こられても、足手でまといになるだけです」

ここは戦場だ。科学者のフィールドじゃない。

来られたところで、彼女にできる事など何もないし、戦ってほしいとも思わない。

『そうよね、わかっている。私はあなたのように強くないもの。だから、ここに残るわ』

それでいい。彼女の本分は科学だ。科学者には科学者のフィールドがある。そのフィールドで戦えばいい。適材適所、戦闘は私のような兵隊に任せればいいのだ。

「私があなたに代わってライラをそちらに連れて行きます」
『!?!』

彼女の言葉に心を打たれたわけじゃない。ライラを連れていくことが、ラウラの為になると思っただからだ。

ララは両手で口を覆っていた。白い頬には涙が伝っている。

『ありがとう、ありがとう、アリス』

「礼はいいです。その代わり、誓ってください。もうラウラたちを悲しませない」と

『もちろんよ』

ララが強く頷いたことを確認して、迫ってくるワイヤーブレードに意識を集中する。三次元的な機動を以て迫ってくるそれを、私は《ヴォーパル》で打ち払いながら一端、距離を置いた。

(さて、どうやりましょうか)

敵は戦闘のために作られた遺伝子強化素体。それに戦闘狂ときた。説得の類は通じそうにない。《剥離弾》^{リムーバー}があればいいのだが、それもない。しかし、私にはそれにとつて代わるとつておきがある。その準備をして、私は《ヴォーパル》の刺突を繰り出した。

「お待たせしました。はじめましょうか！ IS 同士による、とんでもない戦争ってやつを」

「ようやくか！ 待ちわびたぞー！」

ライラもブレードを振りかぶった。二つの得物がぶつかりあって、火花が散る。さらに得物を翻す。斬って、突いて、払って、躲して、攻撃の応酬を繰り返す。そのたび、戦意の感じられなかった私に興ざめしていた顔がみるみる嬉々とした。

「ハハハ、世界と殺りあつた操縦者とは嘘じゃなさそうだな。殺し甲斐がある奴だ！」

舌舐めずりして、ライラは私に手を翳した。AICの発動動作だ。私はとっさにサークルロンドでくシュヴァルツエア・レーゲン>の背

後へ回り込み、斬り掛かった。――が、その鋒先が寸前のところで止まる。A I Cだ。気づくと、ライラが脇の下からこちらに掌底を向けていた。

「見誤ったな。私は〈遺伝子強化素体〉の完成系だ。完全なる〈越界の瞳〉の適正者である私に死角からの攻撃はきかん。出来損ないの妹とは訳が違う」

「ラウラが出来損ないですって?」

私は鼻で笑った

「それこそ見誤っています。今のラウラはあなたより強い」

ラウラはすでに〈遺伝子強化素体〉という呪縛から自らを解き放った。今の彼女は自分というものを確立させている。戦う事でしか自分の存在価値を見いだせないライラとは違う。それに――

「この戦いは私の勝ちです!――オータムツ!」

私の合図と共に、海面が飛沫と共に盛り上がる。

その中から現れたのは蜘蛛を模したI Sをまとったオータムだ。

「あたしに命令すんじゃねえ、よッ!」

海中で息を潜めていたオータムは、掌底から特殊ネットを放ち、〈シュヴァルツエア・レーゲン〉の挙動を封じた。さらに八本の装甲脚をクロームモードに切り替え、ライラを拘束しにかかる。

A I Cの発動に意識を集中させていたライラは、これに対応できなかった。

「く、離せっ!」

締め付けてくる装甲脚から逃れようと身を振るわせるライラだったが、脱出は敵わなかった。

二世代型とはいえ、〈アラクネ〉はI Sの鹵獲を目的に開発された機体。拘束力だけなら、三世代型にも優る。一度捕縛されてしまえば、I Sでも蜘蛛の巣に囚われた蝶に等しい。

「貴様、この女に味方する気か?」

「は? スコールに頼まれてやってるだけだ。じやなきや誰がこんなクソ女に協力するか」

さつきから人を「クソ」呼ばわりなのは頂けないが、彼女が手を貸

してくれたのは、それが理由だ。そのスコールに「オータムを貸せ」と言って、＜アラクネ＞の遠隔操作を可能したのは私だけだ。

ライラは＜アラクネ＞からの脱出を諦め、私を睨みつけた。

「貴様、私を捕虜にする気か。なら、やめておけ、私は壊れた人間だ。捕虜の価値などない」

「ホントに壊れている人間は、「自分は壊れている」なんて言わない。おかしいと思えているうちは正常な範囲です。それに、たとえ壊れていても、あなたを必要としている人がいるんです」

「そんな人間などいるものか。私のような人間など……」

そう吐き捨てたライラがわずかに葛藤を見せた、そのときだった。

《ハニー、接近警報。新たにこちらへ接近する機体あり——》

《レットクイーン》が警報を鳴らした直後、＜アラクネ＞の装甲脚が何かの攻撃によって爆ぜた。それによって＜アラクネ＞の装甲脚が損失し、同時にライラの拘束も解けてしまう。まずい、ライラに逃げられる！

「オータムッ！ 追ってッ！」

「だから、あたしに命令すんじゃねえー！」

オータムが臆さずラウラを追うけれど、再び起こった衝撃がそれを妨害した。

「くっ、どこからだ!？」

《ハニー、ハイパーセンサーでも敵の攻撃を観測できない》

辛うじて＜アラクネ＞のダメージから攻撃された方角は予測できた。だが、攻撃手段が特定できない。仮に超高速の銃弾を使った遠距離狙撃だったとしても、ここまで攻撃が観測できないことはない。これではまるで見えない何かで——

（見えない、何か？ もしかして、衝撃砲……？）

衝撃砲が打ち出す砲弾は不可視だ。肉眼はおろか、センサーの目も掻い潜る。

攻撃方法が特定できなかったのも、そのためだとすれば、こちらに接近しているISは——

（中国の第三世代型！）

私の予測通り、闇夜の中から三機目となる＜甲龍＞が現れた。

今度は真っ赤なく甲龍だ。燃えるような翼をかたどったそれは朱雀を思わせた。操縦者はメガネをかけた女性だ。愛想に欠けた厳しい瞳と、どこか神経質に見える面持ちは、パーティ会場であった春狼の同伴者を私に思い出させた。

「楊麗々ヤンレイレイか。何しに来た」

「事情が変わりました。撤退です。戦闘を停止して、所定のポイントまで下がちなさい」

「なぜだ。まだ得物を仕留めていない」

「ともかく、撤収です。抵抗したら力づくですよ」

楊麗々と呼ばれた女性がライラを視線で牽制する。その眼光には有無を言わせない鋭さがあった。

ライラは怯まなかったけれど、了承はした。

「さすがに三対一は分が悪いか。それにアイツとは一対一でやりたいところだしな。——というわけだ。悪いがお前との殺し合いはまた今度だ」

私は《ヴォーパル》を構え、向こうの都合を一蹴した。

「悪いですけど、延期する気はありません。ここで決着を付けさせてもらいます」

「それは許可できません」

楊麗々という女がメガネの位置を直し、衝撃砲をこちらに向ける。

刹那、カッと眩い光が視界を覆った。しまった、閃光弾か！

「ヘレツドクイーン、二人は！」

《100、200、300、ハニー、ライラが逃げる！》

わかっているが、不意の目晦ましに視界を確保できず、行動を起こせない。いや、起こせたとしても、追撃は許されなかった。私の任務はスコールたちを回収ポイントまで運ぶこと。追撃はそれを放棄することになる。私は苦虫を噛み潰したような表情で二機のISを見送るしかなかった。

「すみません、ライラを逃がしました」

私は通信でララにそう言った。

『いいの。ライラの生存を確認できた。今はそれだけで十分よ。ありがとう』

そう言ってもらえたものの、私の気分はどうにも晴れない。次があるか判らない以上、ここでライラを捕まえ、ラウラに吉報を持ち帰らたかったのだ。だが、今はいつまでもごねていられる状況でもなかった。

「で、どうすんだ」

そう言ったオータムの瞳は好戦的だった。場合にはおまえを倒して逃亡する、そんな気配をありありと感じさせる瞳だ。もし彼女たちが逃亡を図るなら、私はそれを全力で阻止しなければならぬ。

そんな一触即発の空気を裂くように通信コールが鳴った。スコールからだ。

『アリス、そちらの状況は』

「シュヴァルツェア・レーゲンは撤退していきました」

『そう。こちらと同じよ。じゃあ、合流しましょうか』

「するんですか?」

逃亡の絶好のチャンスだというのに?

『ええ、するわよ?』

私は拍子抜けした。このまま戦闘に発展するかと思っていたのに。結局、私たちは何事もなく合流することができた。だが、彼女の行動に対する疑問は強くなる一方で、ライラを逃がした苛立ちもあり、私はすこぶる気持ち悪い気分になっていた。



合流後、空戦ユニット輸送ヘリの内部。私は不機嫌な表情で、窓から見える地中海の町並みを眺めていた。ノスタルジックな美しいその夜景も、ライラを取り逃がしたせいで、私に感動をもたらさない。スコールが無抵抗だった疑問もある。

私は見飽きた夜景から視線を外し、オータムに膝枕をするスコール

に意識をやった。

「スコール、あなたはライラの存在を知っていたんですか？」

正体を知っていたからこそ、彼女は私に「会え」と促したに違いない。

スコールは膝元で甘えるオータムから視線を上げ、

「ええ、ライラは元々へワルキューレ・ウエポン」のCEOであるアルフレッド・バーンシュタインという男の私兵だった。彼がどこから拾ってきたかは不明だったが、VTシステムの一件で糾弾され、失脚させられると、彼女を含めたアルフレッドの技術や資金は再分配されたわ」

スコールはその打ち分けをこう語った。アルツェバルスキー派はナノマシン技術。ロキはVTシステムデータ。ローズマリーとスコールはへワルキューレ・ウエポン社」の株を25%ずつ。春狼はくシュヴァルツェア・レーゲン」、ライラはアリーシャが引き取った、と。

「それにしても、へワルキューレ・ウエポン」といえば、くシュヴァツルェア・レーゲン」を開発したISメーカーですよ。そのCEOも「亡国機業」の幹部だったのですか？」

「あなたも薄々気づいていると思うけど、へ亡国機業」の幹部会はIS企業の重鎮によって構成されているわ。くブルー・ティーズ」を開発したへナイトソード・ブラックスマイス」、くモスクワの深い霧」を開発したへヴェーラ・アスカロフ」。これら企業もへ亡国機業」の傘下、いえへ亡国機業」そのものといえるわね」

アリーシャや春狼の名が出たときから、うすうす感づいてはいたが、それでも思わず言葉を失う。彼女の言葉が正しければ、各国で行われているISの開発競争は、裏で帳尻合わせされたデキレースではないか。

「そうよ。ISの開発を背後からコントロールし、世界のパワーバランスを図る。それが組織の目的。現にへ亡国機業」にはそれを可能とするだけの資金力があつたわ」

「その資金を独占しようとした結果が、この派閥抗争だと？」

「てめえはそんなことも知らず、あたしらを狙ってきたのかよ。——
いてっ」

その通りだったが、私はむかついたので、オータムの頭をはたいた。
その箇所を撫でながらスコールが続ける。

「で、その中でアレクサンドロス・アルツェバルスキーという男が幅を
利かせていてね」

「ロシア強硬派の総統。ロシアの復権を掲げ、核軍拡を推し進めてい
るあの？」

かつて、核軍縮を推し進めるファイリス政権下にいた私だ。アメリ
カの仮想的であるロシアの内情は何度も聞かされた。△テウス・エ
クス・マキナ△に入ってから、彼が推し進める核軍拡を阻止している。
イランでの作戦がそうだ。

「うわさでは自分の軍隊を持ち、核兵器さえ保有しているといわれて
いるわ。強大な軍事力を背景にもつゆえ、亡国機業の幹部はおろか、
ロシア政府でさえ、彼に手が出せないでいる」

「そんな人物に命を狙われている？」

「ええ、私たちのリーダーが彼と対立関係にあるの。IS学園を襲撃
した私たちを、大佐は粛清したがっているわ。アーリイはともかく、
春狼はその為に送り込まれた手下みたいなものよ」

「もしや、その粛清から逃れるためにこちらへ？」

他の幹部からの暗殺を恐れ、△テウス・エクス・マキナ△に亡命を図つ
た。もしそうなら彼女が無抵抗なこともうなずける。しかしスコ
ールは「いいえ」と答えた。

「むしろ逆よん。私たちはこの派閥抗争に勝利したわ。だからこそ、
彼女たちは引き上げた」

「では、なぜ私に従うのです。逃げるチャンスはいくらでもあったの
に」

この女の真意がつかめず、苛立つ。

「その方が楽しいから」なんて理由だったら、ぶん殴ってやるところ
だが、

「私があなたに付き従った理由はひとつ。——ルイス・キャロルに会

うためよ」

彼女の行動の全てが腑に落ちた。同時にララが提言したウイルス兵器の話が脳裏に蘇る。

やはり、彼女の目的は織斑千春の暗殺？ いや、仮にそうだとしたら、こうもあけすけに目的を明かしたりするだろうか。——そんな私の疑問に、スコールははつきりとこう答えた。

「私たちのリーダーが彼女との会談を望んでいるの。私はその使者に選ばれた」

第63話 夏の最後の思い出

地中海での戦闘のあと、私は様々な検査を受けさせられることになった。

血液検査、抗体検査、RNA検査。それら結果はどれも陰性。私の身体から危惧されていたウイルスは検出されなかった。そしてスコールも同様の結果だったそう。そうになると「ルイス・キャロルの会談」が、スコールの目的とみて間違いないだろう。上層部もその方向で調整を始めている。

任務も一応は成功ということで、無事IS学園に帰ってくることもできたのだが、検査のため、夏休みの半分を隔離室で過ごすハメになった。おかげで、現日時は8月31日の8時を回っている。

(初めての夏休みだったのに、なんだか散々でしたね——ん?)

学園の校門前までやってくると、知った顔を見つけた。

「会長じゃないですか」

校門前でキャリーケースを転がすIS学園の生徒会長を見つけ、私は声をかけた。

気づいた会長が、足を止めて振り返る。

「あら、アリスちゃん。いま帰り?」

「ええ。見たところ、会長もいま帰ってきたところで?」

「うん。まさか、行きも帰りも一緒だなんてね」

「ほんとうに」

私たちは警備員の人に学生証を見せ、共に校門をぬけた。

「ところで、イタリアはどうだった?」

「楽しかったですよ」

会長には「イタリアでバカンス」ということにしてある。もつとも会長のことだから、本当のことを見抜いているかもしれないけど。

私は探りを入れられるまえに、話の方向を摩り替えることにした。

「会長の方はどうでした? うまくいったのですか?」

出発前の空港で、会長は『極秘の作戦に参加する』と教えてくれた。その作戦はどうだったのだろうか。ここにいうことは、無事

成功したのだろうか。

「ん？ あく、うん、そうね」

極秘の作戦なのだから、成否でさえ口にできないのはわかる。だとしても、彼女の言葉はどこか歯切れが悪かった。普段の彼女ならもつと飄々と私の言葉を受け流すのに。

「何があっただんです」

「いろいろよ。——じゃあ、私はこっちだから。じゃあね、アリスちゃん」

会長は笑って、二年生寮のある方向へ歩いていく。その足取りは重く、去っていくその背中には暗闇が覆い被さっているようにみえる。別れ際に見せた笑顔も、なんだか作り笑いのようだった。

（ほんとうに、何があっただんでしょか）

怪訝に思いながら、私も自分の寮へ歩きだす。

学生寮の門までやってくると、今度は一人の生徒がビニール袋を片手に立っていた。

「一夏？ こんな遅くに何をしているのです？」

見たところ、誰かを待っていたように見えるけれど。

「アリスとこれをやろうと思っさ、待っていたんだ」

と、持っていた袋を広げる。中身はたくさん手持ち花火だった。

「ほら、メッセージに『花火が見たい』ってあったからさ」

作戦前、留守電のメッセージに『篠ノ之神社のお祭りに行く——』と残ってあったので、私は『花火、見たかったです』と返事したのだ。ビニール袋の花火は、そんな私の要望に応えようと用意してくれたモノらしい。

「悪いな、こんなのしか用意できなくて。本当はでかいの用意してやりたかったんだが」

「とんでもありません。ありがとうございます」

彼の厚意が純粹にうれしくて、私は心から札を告げた。

そんな私に一夏が「札を云われるほどのことでもないよ」と、照れ臭そうに頬をかく。

ほんのり頬を赤くする一夏が可愛く思え、私もちよつときめいて

しまった。

《あ、ダーリンの心拍数が上がりました》《あ、ハニーの心拍数もあがった》

『そんなことはない』『そんなことはありません!』

まるでお互いを意識し合っているような口ぶりに、私たちは恥ずかしくなって声を上げた。

そして二人そろって『このAIどもは……』みたいな顔をする。シンクロしたことがなぜかおもしろくて、私たちは笑いあった。

「ふふ、まったくもう。——それでどうします。せつかくだし、箒たちも呼びますか?」

「いや、二人きりってダメか? 実はアリスと話したい事があるんだ」話したいこと。組織についてのことだろうか。

箒たちの事を考えると後ろめたいけれど、そうなら仕方ない。私たちはバケツに水をくみ、寮の裏手へ回った。

♡

✦

♠

というわけで、誰もいない寮の裏手にやってきた私たちは、手始めに三色花火に火をつけた。それを手に持ち、記号を描くと、一夏が持っていたデジカメのシャッターボタンを押す。

「一夏、いま何を描いたか、わかりました?」

「ハートか?」

「正解です」

そう答え、二人でデジカメの画面を確認する。

画面には、大きなハートの中で笑う私がかくつきり映し出されていた。

「綺麗だな」

ディスプレイにいる私を見つめ、一夏が小さくつぶやく。私も同じことを思った。

「ええ、綺麗に撮れていますね」

きつと画素数の高いデジカメなのでしよう。

「え？ あ、ああ、そうだな」

急にハットとする一夏に、私は「ん？」と首を傾げる。

どうしたんでしょうか？ 私、変なこと言いました？

《ハニー、ハニー、そうじゃない！》

《もどかしいとは、このことですか！》

なんとも腑に落ちないまま、私たちは花火を続けた。そして一頻、やりつくしたあと、定番の線香花火に火をつける。パチパチとはじける閃光を、私たちは並びながら静かに見守った。不思議なもので、それだけなのに、なぜか夏を満喫している気分になる。

「なあ、アリス、俺、このままでいいのかな」

しばしの間、閃光花火を静かに眺めつづけていると、一夏が静かに言った。

唐突に、静寂を裂いたその声音は、強く、憂いていた。

私は一夏を見る。

「どういうことですか？」

「アリスやロリーナさんたちは、俺のために戦ってくれてる。なのに、俺だけこのまま平穩に暮らしているのかなって思うんだ」

「いいんじゃないですか。青春を謳歌することは悪い事じゃないですよ」

むしろ強制されてこのI S学園に入学したのだから、それぐらいの権利は与えられてしかるべきだ。彼の青春を否定していい人なんていない。いるなら、私がぶつとばしてやる。

「でも、ただ守られているだけは嫌なんだ」

一夏はさらに表情を曇らせた。瞳の奥には深い憤り。姉に苦勞をかけ、不本意ながらそれに甘んじ、苦惱してきた一夏だから、私たちに守られるだけの身の上に心苦しさを感じているのだろう。彼の本心は「私たちと共に戦いたい」と考えているのかもしれない。

そんな彼の考えを汲んだうえで、私はあえて一夏にこう告げた。

「素晴らしいですが、誰も『あなたに戦ってほしい』なんて思っていないんですよ」

「それは俺が弱いからか？ 足手まといに——」

「違いますよ。あなたの平穩こそ望んでいるからです。好きな人と結婚し、子供を授かって、孫たちに看取られながら天寿を全うする。そんなあなたの幸せを守るために、私たちは戦っています」

それがあの人の願いだ。〈デウス・エクス・マキナ〉もそのためにある。

自分はなぜ守られているのか。それを一夏に見失われると、私たちの戦ってきた意味がない。

「なら、最後にはアリスもそうあってくれ。——俺の幸せのために、おまえが不幸になるなら、俺はそんなの認めないし、そんな幸せはいらない。最後にはおまえも幸せになるべきだ。絶対に」

思いがけない言葉に、思わず彼を見る。ぱちぱちとはじける線香花火を見つめる横顔は普段と変わらなかつたけど、瞳には願いにも似た強い意志が宿っていた。

それだけは絶対に曲げない。——彼の強い意志を目の当たりにして、私は黙り込んだ。

(私も幸せに、か……)

彼が強く願うそれについて、私はスコールの言葉を追憶しながら改めて考えてみた。

組織を抜け、使命を捨て、自分のために生きる。そして、最後には誰かと結婚して、子供を産んで、母親になって……——そういう未来を夢想した事がないわけじゃない。憧れていないと言えば嘘になる。

けれど、やはり私は戦う事をやめられない。それだけは揺るがない。

私は母の正しさを証明したいから。

母はこの世界を愛し、守ろうとした。その末、命を落とした。

母は絶大な権力者だったから、上流女性のように弱者から搾取する側でいてさえすれば、きつといまも健在だっただろう。そんな母を、世界はきつと嘲笑っている——「正直者がバカを見た」と。

だって、いまも世界は、母を否定するように何も変わらず回り続けているのだから。

その世界を、母の意志を継いだ私が変わえられたら、それはきつと母の正しさの証明になる。でも、私には世界を変えられるだけの知力も財力もない。あるのは武力——戦うことだけだ。だから、私は戦う。戦い続ける。

（ローズマリー、やはり私は戦う事をやめられそうにありません。けれど——）

これからは、すこし自分の幸せについて考えてみよう、そんな気になっただけだ。

『おまえも最後には幸せになるべきだ』。彼がそう言ってくれたから。

「わかりました。考えておきます」

進路、人生設計、将来、どうなりたいかという希望。未来はまだおぼろげでよく見えない。まだ、雲を掴むような漠然としたイメージしか持てないけれど、この学園生活の中で、探しているこうと思う。私の幸せというものを。彼らと共に。

「おう。そうしてくれ」

一夏は新たな線香花火に火をつけた。それを二人で眺めつづける。まるで世界に二人しかいないような静寂。箒たちには悪いと思っただけれど、この時間がとても心地よかった。二人で線香花火をしているだけなのに、小さくも幸福を感じている自分がある。

おそらく、私はこの時間を忘れないと思う。例え、短く、小さな思い出だったとしても。

「ありがとう、一夏」

夏休み最後の日。小さな思い出をくれた彼に、私は心から感謝をささげた。

この夏、この時間は、私にとって、自分を見つめなおす契機となるだろう。



IS学園の寮は、寮と呼ぶにふさわしくない高級スイートルームの設備を備えている。

しかし、超がつくほどのお嬢様であるセシリア・オルコットは、IS学園に多額の寄付をして特待生になるなり、内装工事を行った。入浴が共有浴場だと知ったときは、バススタブを持ち込み、翌日には配管工事を実施させた（彼女には大衆浴場という習慣がなかった）。さらにベッドが気に入らないとスイス製のベッドを発注し、果てには「仕えメイドを三人ほど常駐させたいから、部屋を用意してほしい」と言い出す始末。（さすがにこればかりは通らなかつた）

おそるべきマネーパワーを行使して、伝説的な存在になりつつあるセシリアだが、現在その財力の権化は冷たい床の上に正座させられていた。させているのは、彼女の専属メイドのチエルシーである。

「お嬢さま、これはどういうことでしょうか？」

鋭い眼光が示したのは、黒の過激なビキニ。セシリアがウォーターワールドで着用した水着だ。

「あれほど、こういった水着の着用はお控えくださいと申したはずですよ」

チエルシーに睨まれて、セシリアは肩を萎めた。

使用人が主人を折檻するなどあべこべだが、チエルシーはセシリアの幼馴染であり、姉でもある。ゆえにただ盲従するのではなく、時に厳しく叱るのも彼女の務めだった。それは亡きセシリアの母からも了承を貰っている。

「でも、効果はありましたわ」

この水着姿のセシリアを見て、一夏はいつもと違う反応を見せていた。効果はあったといえる。

だが、チエルシーはぴしゃりと言い放った。

「それは相手の劣情を煽つたにすぎません」

セシリアはぐっと唸った。確かに一夏は彼女の水着姿にドキドキしていたが、男性のドキドキというのはムラムラと紙一重だ。彼の心情に変化があったわけじゃなく、単純に男性の本能が働いたに過ぎない。それは一過性のものだから、明日には平然とセシリアの前に現れ

るだろう。

「わかっていただけましたか？」

「はい……」

セシリアはさらに小さくなって頷いた。いつもは毅然と、あるいは悠然と物申すセシリアだが、この幼馴染が相手だとそうもいかなかった。今はただただ頭を下げるしかなかった。

「こうして、わたしが口煩くいうのは、お嬢様のこと想つてのこと。それを留意して頂きたく思います」

「もちろん、知っていますわ」

チエルシーがセシリアをきつく叱るのは、主人である彼女を心から思っているからだ。

セシリアとチエルシーの関係は十年以上になる。それが通じないほど二人の関係は浅くない。

「分かっていただけにいるようで、なによりです。では、わたくしは便の時間がありますので」

チエルシーが自前の腕時計を見て言った。

明日から新学期が始まる。ココの生徒ではないチエルシーが学園に留まることはできない。

チエルシーは恭しく頭をたれ、傍らに置いてあつたキャリーケースを掴んで戸に立った。そのチエルシーを見送ろうと、セシリアがしびれる足を労わりながら立ち上がる。

「校門まで送りますわ」

「いえ、大丈夫です。主人に見送られていてはメイドとして本末転倒ですから」

セシリアの見送りを丁寧な断り、チエルシーは踵を返した。そして、扉の前で一礼してから、『またね、セシリア』と親しみの笑顔を残して部屋を去る。セシリアも『ええ、またねチエルシー』と名残惜しそうに彼女を見送った。



すでに時刻は8時過ぎ。門限をとうに過ぎたとあって、校舎に人気はなかった。古今東西、無人の校舎は不気味なものだが、チエルシー！ブランケットは颯爽とその校舎を横切っていく。

その彼女が校舎の一角に差し掛かったとき、どこからともなく人影が現れ、進路を遮った。

「随分と仲良くやってんじゃない」

影のシルエットからして、ここの制服のようだった。月明かりに照らし出された髪はブルネットの長髪。表情は逆光で伺えないが、青い瞳は狡猾さを秘めた蛇のような鋭さを秘めている。

チエルシーは、大して驚きもせず、ただすこし遺憾そうに眉を顰める。

「わたくしたちの接触はご法度でございましょう。軽率な行為は慎むべきかと」

「わかっている。今後は慎むわ。おまえが情に絆ほだされるようなことがなければ、ね」

懐疑的な視線を向けられ、メイドはわずかに目を細めた。

「どういったご意味でしょうか？」

「あのお嬢様に熱を上げて、本来の目的を忘れるなつてこと。おまえの役割はセシリア・オルコットの監視と、夫妻の真相から遠ざけることよ。親密になり過ぎるのは得策といえない。情が沸くと、口を滑らせかねないからね」

影が向けた半眼を、チエルシーは平然と受け流した。

「ご忠告痛み入ります。ですが、ご心配なく。わたくしはへお母さまへに忠誠と恩義を持っております。この身の全てを捧げる所存です。へお母さまへ」の意向に反するような行いはいたしません」

「信用できないわ。セシリア・オルコットが真相を知れば、計画は修正を余儀なくされる。それを危惧なさっている。それを回避するためなら、おまえの口を封じるのも、吝かではないそうよ」

影が右手を掲げる。それを合図に、校舎の一角から二機のISが現れた。一機は双頭の狼を模した禍々しいIS。もう一機は氷の結晶

をまとったISだ。パイロットはどちらも若い。片方は長身の金髪、もう片方は小柄で、黒い髪を三つ編みにして肩越しに垂らしている。そのお柄な少女が三つ編みを後方に投げる。

にわかに周囲の気温が下がり、ダイヤモンドダストらしき氷の粒が夜空にちらつく。熱帯夜が極寒の夜に変わろうとしていた。吐く息もいつしか白い。今まさにこの場を氷河期に変えんとする少女に、チエルシーは言った。

「こればかりは信用していただく他ありません。でなければ、わたくし共も自衛のため〈王剣〉を抜かざるを得なくなりませぬ」

何かの合図のようにチエルシーも手を掲げる。

遠い、遠い、どこかでかちんと刀剣の滑る音が鳴った。

「おいおい、やめようぜ。オレたちが戦ったらシヤレになんねえよ。おまえだって〈レヴィアタン〉の力を知れねえわけじゃないだろ。親愛なるお嬢さまもろとも、ココを吹き飛ばす気か？」

そう仲裁して入ったのは金髪の少女だった。表情は「恐れ」というより「呆れ」だ。〈レヴィアタン〉も〈王剣〉も対要塞都市用の戦術兵器に類する。それで喧嘩しようという二人のバカバカしさを彼女は諫めた。

「それにオレたちはこいつに釘を刺しにきただけだろ」

「そうだったわね。——いいわ。いまは信用しておいてあげる。くれぐれも〈お母さま〉を失望させるような真似はないでね。——それともうひとつ、織斑一夏は私たちが処理する。手出しは無用よ」

「かしこまりました。サラ・ウエルキンさま。すべては臆たる〈ヘリリス〉がために」

もう一度頭を垂れ、彼女は踵を返す。

サラ・ウエルキンはどこか懐疑的な目つきで、それを見送った。

へサイドオプス」

第64話 ロシアより愛をこめて①

符号化された抽象世界で、更識簪は物語を紡ぐようにコードを記していく。

プログラムとは誰かが記した物語である。

フレームワークを構築し、そこで生成したシンボルを、どのように処理するか、それは世界を構築し、登場人物を、どのように動かすか。そのプロセスはまさに物語を書くということだ。

ロリーナにそれを教わって以来、彼女はプログラムという抽象世界から具体像を出力できるようになった。例えば<ラファール・リヴァイヴ>のOSコードからは、優しそうな貴婦人の半生が見えたりする。だからなのだろう。どういうプログラムが<ラファール・リヴァイヴ>の性能向上につながり、どういうプログラムが不具合を起こすのか、今の簪には一目でわかった。

(……いまなら、篝火さんが言ってた言葉の意味、分かるかも)

倉持技研のIS開発チーフで、ISソフトウェアのエキスパートである篝火ヒカルノ。彼女は「自分の仕事はISの調教だ」とよく口にしていた。ISの調教とはまさに、そのままの意味で——ISを調教することなのだろう。

(……もう、<打鉄式式>をあの人に見せるの、やめよう)

調整と言わず調教と言うあたりに、篝火の変態さを感じた簪は、ここでそう決める。

そして、ひとしきりコードを書き終えた簪は、抽象世界から現実世界に意識を戻した。

「ふう」

人工知能プログラムの大体部分は書き終えた。あとはマルチロックスオン・システムに必要な戦術を学習させれば、一応の完成となる。但し、AIに戦術を学習させるには、<打鉄式式>に累積している戦闘データだけでは不十分だった。このマルチロックスオン・システムの

知能エージェントは多くの戦闘を熟すことで、より効率の良い管制誘導を学習していく。

(戦闘データの収集はアリスに協力してもらおう。……私、専用機持ちの友達いないし)

と、決めたところで、簪はアリスがまだきていない事に気づく。

いつもなら昼過ぎにはひよっこり顔を出し、横でネットやらゲームをし出すのだが、

(……今日は遅い)

彼女がいないと作業が進まないわけじゃないが、いなくてさびしい気持ちになる。奇しくも、同じ日、同じ時間、織斑家にいる一夏たちと同じ気持ちでいたら、コンピューター室の自動ドアが開いた。

(アリス……?)

ではなかった。入ってきたのはロリーナだ。

彼女は紙袋を手に、コンピューター室に入ってきた。

「こんにちは、簪さん。進捗の方はどうかしら？」

「……とても順調です。ところで、まだアリスが来ていないんですけど、何か知りませんか？」

持ってきた紙袋をそばに置きつつ、ロリーナは答えた。

「特別な用事があって、しばらく来られないの。許してあげてね」

特別な用事。ということは、プールでの一件を怒って、来ていないわけじゃないらしい。

ほっと胸を撫で下ろした簪は、ロリーナの持ってきた紙袋に目をやった。

「あの、それは？」

「今日はあなたとこれを見ようと思ってね」

そう言っって紙袋から一本の映画DVDを取り出す。表紙はモノクロで、なかなか古い映画だ。しかし、平成生まれの簪でも、その映画はよく知っていた。

「ゴジラ？」

ゴジラ。1954年に日本の東宝が制作した特撮映画だ。いままでいくつものシリーズが制作され、その人気は日本だけにとどまら

ず、世界にまで広がっている。その第一作目がロリーナの手にあつた。

「ええ、ええ、そうよ、うふふ。日本の傑作映画」

よほど、この作品に思い入れがあるのだろうか。ロリーナは紅潮した頬に手をやり、どこかうっとりした様子だった。

「これをぜひ、貴女にも見てもらいたいの——貴女のためにも、ね」

「——わたしのため？」

一転、うっとりしていた表情から親身な顔をするロリーナに、簪がきよとんとする。

そんな簪の手を引き、ロリーナが「多目的室にプロジェクターを用意してあるわ」と彼女を引つ張っていく。作業も遅れていないので、簪は彼女の提案を受けいれた。ただパソコンの電源を下ろしながら

(……そういえば、お姉ちゃんも特別な用事があるっていつていたけど……)

自身の勝手気ままな理由で遠ざけてきた姉のことを、ふと思い出した。



旧ソ連上空1万メートル。成層圏の静かな世界の中、楯無は輸送機の狭い貨物室に身を寄せていた。機内は騒音に加え、揺れが激しい。だというのに、隣の女性は穏やかな寝息を立てている。

「ソフィア？」

輸送機のパイロットが『間もなく作戦空域です』と言ったので、居眠り女性の肩を叩く。

目を覚ました女性——ソフィア・カドリユスキー・アルジャンニコフは眠気眼で楯無を見た。

「どれくらい寝ていた？」

「20分ほどよ。よくこんな場所で眠れられるわね」

「不感症だから、かな？」

楯無を含め、ソフィアの重たいブラックユーモアを笑う者は誰もいなかった。

スベった彼女は肩をすくめ、

「で、状況は？」

「あと10分で作戦降下ポイントに辿りつきます」

楯無に代わって機上輸送管理担当が言った。

作戦降下ポイント。彼らがここにいるのは、空の旅を楽しむためじゃない。ある施設を襲撃するためだった。その降下ポイントまであと10分だという。ロードマスターは続けて言った。

「機内の減圧を開始します。酸素マスクを着用してください」

高度1万メートルでカーゴベイのハッチを開ければ、気圧さで物が外へ吸い出される。それを防ぐため、あらかじめ機内の気圧を外の環境に近いレベルまで下げるのだ。さらにこの高度では酸素が地上の半分しかない。

「わかったわ。準備に取り掛かる」

楯無とソフィアは専用機を展開し、装備とシステムの最終チェックに取り掛かった。

今回、彼女たちはパラシュートを使わず、ISを使った降下方法で作戦ポイントに潜入する。高度1万メートルから高度1000メートルまで自由落下し、着地の衝撃をISで吸収する降下方法だ。

とりわけ、楯無はチェックを入念に行った。

今回の作戦は更識においても重要な意味を持つ。それだけに失敗は許されない。

国家代表であり、更識当主である楯無だが、17歳の若輩ゆえにそこまで多くの場数を熟してきたわけじゃない。その経験不足を才能で補ってなお余りある楯無だが、微塵の不安もないと云えばウソになる。

(大丈夫よ)

楯無は首にかけてお守りを強く握った。ロリーナと食事した時に渡されたものだ。「困ったときに使いなさい」と。妹が全幅の信頼を

寄せる人物からの贈り物。きつと価値がある。楯無はありがたくそれを頂戴した。

「減圧完了。降下3分前。後部ハッチ解放。作戦要員は後部に移動せよ」

ロードマスターがハンドシグナルで二人に行動を促す。

楯無はお守りから手を放し、既に準備を終えていたソフィアのとなりに並んだ。そしてく霧纏の淑女のバイザーモードを遮光モードに変更しながら、ソフィアの専用機を見る。

「それがあなたの専用機？ 初めて見たわ」

銀色の装甲。三角状の耳型ヘッドセット。尾骶骨から尾が生えていて、そのISを一言で形容するしたら銀狼だった。脚部のフォルスターにはIS専用の大型ハンドガンが収まっている。

「おや、学園で見せなかったか？」

「見たけど、フルオープンは初めて」

「そうか。こいつはくヴォルグの派生機だよ」

くヴォルグはロシア製の第二世代型だ。耐久性とパワーに優れ、特殊な環境下——寒冷地や砂漠でも、パフォーマンスがほとんど低下しない特徴を持つ。また100時間の連続稼動にも耐えうる性能を持つゆえ整備スパンが長く、ランニングコストが安い。ちなみにくヴォルグは、ロシア語でオオカミを意味する。

ソフィアは狼の尾を振って見せた。その愛らしい仕草に楯無がクスッと笑う。

「かわいいわね、それ」

「ただの放熱索さ。戦闘では役に立たない。飾りだよ」

「ま、気に入っただけ」と、尾の先を持ち上げると、安全確認を終えた隊員が後部のハッチを解放した。その隙間から極寒の風が入り込む。楯無たちの服装は水着も同然だったが、ISの被膜^{スキンバリア}装甲のおかげで、凍えることはなかった。

「楯無。自由降下時は時速120キロを超える。外気温は摂氏マイナス48度だ。風速冷却で駆動系やスラストノズルが凍結して、機能不全になることもある。気をつけろ」

楯無が『了解』と肯くと、機内のランプが赤から青に変わった。それを合図に二人はロシアの寒風に綺麗な髪を靡かせながら、後部ハッチへ向かう。

「降下準備、カウント5、4、3、2、1——」

ゼロになったとき、輸送機のパイロットが言った。

「——幸運を祈る」

二人はハッチの端に立ち、投身自殺でもするかのように、輸送機から身を投げた。そしてロシアの風を浴びながら、重力に身を任せて、目的地へと落下していく。

時間にして数秒足らずの、短い遊覧飛行が始まった。

更識楯無の専用機<霧纏の淑女>が備える水のマント《アクア・ヴェール》。

このマントには電磁波およびレーダー波の反射や、赤外線を抑える能力が備わっている。さらに機体の可視光を吸収すること、姿を晦ませることもできる。まさに魔法使いの透明マント（ハリポッター）というわけだ。

その特性から斥候を買って出た楯無は、単機で西へ3 kmほど進軍した。

「制圧目的地に到着。周囲に脅威になりそうなものはなしつと。いいわよ」

周囲の安全を確認した楯無が遠機のソフィアにサインを出す。それを合図に、後方で待機していたソフィアが、楯無のまいた霧中へ自機を忍び込ませた。

「あれだな」

霧中から目的の施設を観察してソフィアが言った。

眼前には、多数の施設や建築物が構えられていた。敷地面積は都市ひとつ分に相当するか。しかし、人気はなく、廃墟のように静まり返っている。楯無は軍艦島を思い出した。その感想は正しく、目の前の廃墟都市はそれに類する場所だった。

「作戦前にもらった情報だと、旧ソ連時代の秘密都市らしいわね」

「ああ、東西冷戦時代に建設された閉鎖行政地域組織のひとつだ。当時はここにたくさんの学者や技術者が集められ、ロケット技術の研究が盛んに行われていた」

「ロケット技術？ ミサイルの技術でしょ。それも核ミサイルの。降下途中に大きなクレーターを確認できたわ。あれは核実験所でしょ？ それに、この近辺の鉱山じやウランも採掘できるそうじゃない」
楯無の辛辣な指摘にソフィアは苦笑した。

けれど、訂正しない。ロケット技術もミサイル技術と同じ技術だ。「だが、東西冷戦が終わって、米露の間に第一次戦略兵器削減条約が結ばれると、核軍縮の流れからこのZATOの価値はなくなった。財政難だったロシアはこの都市を放棄した。いまは立ち入り禁止区域に指定されている」

「それを誰かさんが隠れて使っているってわけね」

誰かさん。楯無はそう言ったが、その誰かは既に判明していた。

〈ファントム・タスク
亡国機業〉。

学園を襲撃したテロ組織が、この秘密都市に潜伏している。その情報を得た楯無は、強引なやり方でこの作戦に参加したのだ。そうまでして志願した目的は一つ。〈亡国機業〉が持つ資金を奪取し、日本に持ち帰るため。

「ああ、そうだ。今からそいつらにはここから退去して頂く。——いくぞ」

ソフィアは、機体を静かに滑空させた。そのあとを楯無が続く。〈霧纏の淑女〉のステルス性を活かしながら、二人は秘密都市の内部へ進んでいった。検問所を通り、大通りに差し掛かる。通路の脇には酒場や食事場所、サウナといった娯楽施設が軒を連ねていた。ここは歓楽街だったようだ。

「学術研究都市なのに、ずいぶんと娯楽施設が充実しているわね」

「この住民たちは都市外へ出ることが禁じられていたからな。その代わりというわけさ。当時は賑わっていたのだろう。今となっては、見る影もないが」

「でも、最低限のインフラは生きているみたいだわ。それに手を加え

た形跡がある」

ISのハイパーセンサーが、大型車の轍らしき痕跡を拾う。その痕跡を追跡していくと、研究施設の搬入口と、それを塞ぐ扉に突き当たった。「強行突破する？」とソフィアに視線で聞く。IS二機の火力ならそれも可能だったが、ソフィアは「もつとスマートに行こう」と楯無に身分証明書らしきカードキーを投げた。

「これは」

「この研究員だった奴のものだ」

楯無はカードキーを見た。表面には30ぐらいに見える男性の顔写真が張ってある。

ロマノフ・チェコンスキーと記載されてあった。

「使えるかもしれない」

ソフィアが閉鎖扉のわきに置かれた端末を視線で示す。

楯無は一度頷き、端末の操作に取り掛かった。しかし、パネルをタッチしても反応がない。電力が供給されていないようだ。操作にはまず電源を復旧させる必要があった。二人はその作業に取り掛かる。

「そういうえば、ここにいた科学者たちはどうなったの？」

端末から主電源のコードを探り出しながら、楯無が訊く。

ソフィアはくヴォルグのコンソールを開き、外部バイパスを構築しながら答えた。

「保障らしい保障もないまま立ち退き勧告を受けたようだ。ソ連崩壊後のロシアは財政難だったから、3000人以上の科学者の面倒などみきれなかった。職と住居を失い、社会主義に失望した彼らはより良い報酬を求め、国外に消えて行った」

「もしかして、北朝鮮の核開発にも？」

「大いに考えられるだろう。北朝鮮に限らず、21世紀に入って取り立たされている核開発問題のほとんどに関与している。彼らのおかげで核技術は拡散する一方さ」

ソフィアは、楯無から渡されたパワーケーブルを自機に繋ぐ。

「それにロシアの核物質管理がジャガイモ並つてのは、あながちウソ

じゃない。危険で金が掛かるから、管理がずさんになりがちなんだ。ロシアの核物質^M不明量^Aも年々増加の傾向にある。闇市場に流れているって話だよ。今の時代、核物質や核技術を手に入れることは、そう難しくない」

「核保有は列強国の特権じゃなくなった……」

「そうさ。金さえあれば、ならずもの国家や、テロリストですら核武装できる時代さ」

「テロリストが核武装だなんて、ゾっとしないわ」

「東西冷戦の終結で核の時代は終わったかと思われがちだが、形が変わっただけで核の危険は依然そこにある。ファイルス大統領が「核なき世界」を掲げているけど、あれは理想論じゃない。現実的な安全保障の問題なんだ。——それに10年前の、あの事件が核兵器の見方ががらりと変えてしまったら？」

「白騎士事件ね」

2001年、日本に向けて2341発の大量破壊兵器が使われた。これに対してアメリカは使用国に報復を行わなかった。報復すれば、第三次世界大戦だったからだ。しかし、この英断が世界にある事実を突き付けた。

「撃つたら撃たれる」という現実には存在しなかった。

「抑止論の崩壊。『報復』という恐怖から解放された世界は、大量破壊兵器の使用ハードルをどんどん下げて行った。核兵器が戦術レベルで使えるようになるまで、そう時間はかからなかったさ」

「ISや無人兵器の爆発的な普及には、核兵器の肯定化が背景にあるからでしょ」

「ああ、無人兵器の普及は、戦場の無人化、誰も死なない戦争を目指したわけじゃない。核兵器使用後の高濃度化放射線下でも部隊を展開するために、生み出されたものさ」

月光のような無人機なら核爆発後の高濃度放射線下でも被ばくの恐れはない。ISも同様だ。宇宙活動を想定したISの被膜装甲は宇宙線被ばくを回避できる。

「核戦争は起こるのか。それは誰にもわからない。だが、備えはする

べきだし、そうならないよう尽力もすべきだ。その象徴が〈デウス・エクス・マキナ〉って連中さ。——よし、電源を入れるぞ」

ソフィアが自機の出力を上げると、端末の画面にホーと明かり灯つた。

息を吹き返した端末を楯無が操作する。表示された言葉は（当然ながら）ロシア語であつたが、六か国語をマスターする彼女は難なく操作を進めた。

「Ангрболбога? これがこの施設の名前かしら」

施設概要のファイルにはそう記されていた。

アングルボガ。語学が堪能な楯無でも、翻訳することはできなかつた。それはソフィアも同じようで、訊いても彼女は首を横に振つていた。となると、ロシア語ではないのかもしれない。

「もともとロシアは様々な民族が入り乱れている国家だ。言語は民族の数だけ存在する。それにここは地図にも載らない秘密都市だ。暗号名か何かだろう」

「なににせよ、ここを無断で使っている奴がいるのは間違いない、ということね」

楯無はさらに端末を操作して、カードをスキャンする。認証は——承認された。

ガガガと金属が擦れる音と共に、重々しい扉が開いていく。

「いきましようか」

「ああ」

端末から離れ、二人は見取り図を基に奥へと向かう。物資搬入用と思わしき通路を抜けると、大きな空間にでた。空間そのものを刳り貫いたかのような広大な場所だ。そこにはミサイルと思わしき円筒状の鉄塊がいくつも転がっていた。

「……………」

楯無は置き捨てられたミサイルたちを撫でてみた。かなり前から放置されていたようで、表面はかなりホコリまみれだ。弾頭部分はないが、ロケットエンジン部分はまだ生きている。状態も良好で、燃料さえあれば宇宙まで飛べそうな状態だった。

「でも、このロケットエンジンは宇宙に行くためのものじゃないのよね……」

これは核という贈り物をアメリカに届けるためのものだ。

「開発者は、これをどんな気持ちで開発したのかしら……」

純粹に人類の宇宙進出を夢見て、このロケットエンジンを開発していたのだろうか。だとすれば、その技術者の苦悩は計り知れない。人の為に始めた事が、大量破壊の片棒を担ぐことになったのだから。(簪ちゃんにはそんな思いをさせたくないわね)

妹には平和な世界で、人々のためにその技術を役立ててほしい。

しかし、悲しきかな、今は冷戦時代だ。各国がISの開発競争に鎬を削っている現在、時の為政者たちは、優秀な技術者である簪を政治の道具にしかねない。たとえ簪が正しい方向にテクノロジーの舵を切っても、時代が間違った方向に舵を切り直すだろう。

簪が何者にも囚われずその技術を活かすには、冷戦という今の時代を変えるしかない

ならば、変えてみせる。なんとしても。そのために自分は楯無となったのだから。

「楯無？」

ソフィアの声に、楯無はハッととして我に返った。

「ごめんなさい。ちよつと考えごとをね」

「もしかして恋人のことでも考えていたのかい？」

ソフィアがどこか楽しげに言った。

心成しか狼尾がふりふり動いているのは、気のせいだろうか。

「生憎、私にそんな人はいないわ」

楯無が肩を竦めて苦笑すると、ソフィアのしつぽがしなつと垂れた。

「そうか。それは残念だ」

「なんで残念なのよ」

「オレだって女だ。恋の話には興味がある」

「あら、意外」

ストイックだと思っていた彼女から乙女チックな返答が出て、楯無

はクスクス笑った。

対して、ソフィアはちよつぴり心外そうに目を細める。

「まあいい。話の続きは、任務が終わってからにしよう」

「そうね」

「あちらに貨物エレベーターを見つけた。地下へ降りられそうだな」

「どうやら楯無が考え事をしているうちに、施設内を探索しておいてくれたようだ。そういうところは本当に抜かりない。こういう場面では、頼れる人物だ。」

「こつちだ」

二人は警戒しつつ、車両を数台運べそうな大型のエレベーターに乗って地下へと降りていく。その途中、僅かな時間ができたので、楯無はさきほどの話題を持ち出した。

「ねえ、ソフィア。あなたは恋人とかいないの？」

「いないな」

「意外ね。あなた、すつごく綺麗なのに」

ラピスラズリーを思わせる神秘的な瞳。胸は控えめだがスレンダーな体躯と流れるような長髪には申し分ない色気がある。美女と違って差し支えの無い容貌だ。男性の目を惹く魅力は十分にある。

ソフィアは肩を竦めてみせた。

「なにせ、この体質だからな」

ソフィアは心因性の不感症を患っている。そんな彼女は快樂のない男女の交合いをわずらわしく感じているのだろう。心因性——過去の心的外傷が原因ならば、苦痛さえありえる。

肉体関係を結べない自分を、男性は愛せない。そんな風に彼女は考えているのか。

「そんなことないわ。体の関係がなくても、愛してくれる男性はきつというわよ」

愛さえあれば。——暗部として“捨てるべき乙女の部分”を捨て切れずにいる楯無は、その純粹さゆえ、ソフィアの「セックス無しじゃ、男は女を愛せない」という考えを認めたくなかった。

そんな楯無を慮ってか、ソフィアがやさしい声音で言う。

「そうだね。いつか、めぐり会いたいものだ、そんな人と」

「なんだったら、紹介してあげるわよ。——こう見えて人脈は広いんだから」

「君はやさしいな。けれど、オレはキミにこそ、素敵な恋をしてほしいと思っっているんだ。——キミ、いろんなモノを一人で背負い込みすぎてやしないかい？」

楯無は見透かされた気分になって黙った。妹のこと、家のこと。普段は飄々と振る舞ってはいるが、その背には17歳ではとても背負いきれない重責が圧しかかっている。

「——だから、素敵な恋をして、いい旦那様を見つけろ。支えてくれる人が君に必要だ」

ソフィアが彼女の頭をぽんぽんと叩く。

その手の感触は、楯無にとって久しい感触だった。

楯無という特殊な役職に就いてからは、みんな彼女に敬意を払うようになった。当然ながら、気安い接触も慎まれた。幼馴染でさえ「お嬢様」と呼ぶ。そんな生活が続いてきたからこそ、彼女の気がねない接触がなつかしく、そして、心地よかった。

「心に留めておくわ」

「ああ。ぜひ、君はいい恋をしてくれ。——そして、可能ならこんな仕事やめてしまえ。君のようなやさしい乙女がしている仕事じゃない。こんな仕事はオレのような汚れた人間にやらせておけ」

ソフィアがそういうと、エレベーターが目的地に到着した。同時に気配が替わる。ISのセンサでも捕えられない空気の変化を、二人は機敏に感じ取った。

「さて、この話は終わりだ。警戒しろ」

「了解」

ソフィアに促されて楯無は気を引き締め直した。それからナノマシンタンクのデイスペンサーを解放し、いつでも《アクア・ナノマシン》を散布できるように備える。ソフィアもフォルスターから大型のハンドガンを抜いた。

二人が出た場所は、ラボのような場所だった。作業用のロボット

アームに、いくつものコンピュータとモニター。そのどれもが最新式で、20年まえの施設とは思えない様相を呈している。

(誰かいる)

楯無が警戒レベルをそのままに周囲を見渡すと、センサが二つの人影を捕えた。

一つは少年だった。白髪で、まだ幼さが残っている。年齢は楯無とあまり変わらない。

もう一人はゆうに2mを超えた大柄な人物だ。こちらは外套を身に纏っており、性別や容姿は確認できない。生体反応がないということとは、おそらく無人機か？

それぞれの観察を終えたところで、楯無は少年の方を注視した。

(……思っていた人物よりずっと若いわね)

鬼がでるか。蛇がでるか。だが、出てきたのは自分の歳とあまり変わらない少年が一人。

それにはいささか拍子抜けしたものの、少年の青い双眸は野心的で、態度は堂々たるものだった。ISを装備した女二人を前にしても、動揺ひとつしないのは大した胆力だと評価できる。

はたして彼は何者なのか。それを確かめるため、楯無はシンプルな質問を投げかけた。

「あなたは？」

少年は鷹揚に両手を広げ楯無の問いに答えた。

「ようこそ、アングルボザへ。俺はロキだ。——こんな僻地に何の用かな？」

ロキと名乗った少年は芝居がかかった仕草でそう言った。

三文芝居は楯無の専売特許でもあったので、同じように言い返す。

「あら、それはあなたが一番よく理解しているんじゃないかしら、へ亡国機業」の幹部さん？」

「ああ、よく理解しているよ、IS学園の生徒会長さん。学園の襲撃を計画し、実行したのは俺だからな。その俺を逮捕でもしに来たか？」
「話が早くて助かるわ。そういうことだから、あなたの身柄を拘束させてもらうわ」

楯無は右手に《蒼流旋》を展開した。そこに内蔵されたガトリングガンを少年に向ける。

「残念ながら、そのリクエストには応えられないな」

ロキは軽く手を上げた。それを合図に、隣で控えていた大柄な人物が外套を脱ぎ捨てる。

露わになったのは、全身装甲フルスキンのISだ。しかし、かつて学園を襲撃したタイプと比べてかなりスマートなフォルム——外套で身を隠せるほどの細身——をしており、ISと完全一体になっていた。さらに〈ゴーレム〉の特徴である剛腕はなく、代わりに巨大なブレードと、蛇のような長い尾を装備していた

（〈ゴーレム〉の発展型ってところかしら）

大分フォルムが異なる——〈ゴーレム〉と呼ぶのに抵抗が生まれるほどだ——が間違いない。

楯無が即座に機体の正体を見破ると、遼機のソフィアが注意を促した。

「通常のモデルより細見だが、ISだ。油断するなよ」

「油断？ 私ができるわけじゃないじゃない」

前方の新型〈ゴーレム〉を見据える楯無に、ソフィアは苦笑交じりで答えた。

「いや、しているさ。——オレに背を向けている」

言うなり、ソフィアは大型のハンドガンを楯無の背に突き付け、引き金を引いた。

第65話 ロシアより愛をこめて②

クロエは頬を膨らませて、ほこりっぽい通路をぶんすかぶんすか大股で歩いていた。そのたびゆれる三つ編みは、怒っている猫の尾のようだ。

その実、クロエは怒っていた。

なんでも八月のこの日には、義理の母——東の実家で「お祭り」なるものがあるらしい。それを聞いたクロエは「いきたい、いきたい」と駄々をこねたのだが、なんせココはロシアの辺境である。とてもすぐに行ける距離じゃなく、自制を言い聞かしたのだが、それがクロエの機嫌を損ねたのであった。

「仕方ありません」

東からクロエの機嫌取りを命じられたローズマリーが苦笑をもらした。

「……でも、東さまのおうち、行ってみたかったです」

と、頬を膨らませるクロエ。

組織の都合で彼女に不自由をかけるのは心苦しいが、ここを離れるわけにもいかない。けれど、大人の事情など知ったこっちゃないのが子供心というもので、それがローズマリーを「どうしたものか」と困らせた——そんなときである。

「あ、ローズマリーさま、見てくださいませ。猫さんがいるでございますよ」

突き当りのT字路に顔を洗う猫を見つけ、動物好きのクロエが一目散に駆け出す。

ローズマリーはすっと目を細め、警戒しながらクロエのあとに続いた。

「なんで、猫さんがいるのでしょうか。迷い込んだのでございましょうか?」

言って、白猫の頭を撫でるクロエ。

白猫は「にゃん」と嬉しそうに鳴いた。えらく人馴れした猫だ。構成員の飼い猫とも考えられたが、ローズマリーの記憶にこのような猫

がいた覚えはなかった。ただ心当たりがあるとすれば――

「いえ、違うでしょう」

言って、クロエとその白猫を自分の背後に隠す。そして、通路の奥に鋭い視線をやった。

その先からカランカランと何者かの足音が聞こえてくる。まるでぽっくり下駄を擦って歩いているような音色。足音が大きくなるにつれて、通路の暗闇から一人の女性が現れた。

とにもかくにも、奇抜な衣装の女性だ。

刀鐔を模した眼帯で右目を覆い、手には吹かしたキセル。豪華な着物に身を包んでいるが、肩と鎖骨は大胆に露出し、大きな乳房ものぞいていた。髪はほのかに赤く、左右に結い上げられて櫛で止められている。

その女性はニヤと妖艶に笑って、

「くしゅん」

と、可愛く、くしやみをした。

「ここは冷えるのサ」

と、隻腕で自分の肩をさする花魁もどきの女性。ローズマリーは呆れた顔をした。

「そんな格好では当然だと思えますが」

「はは、ロシアの気候を舐めてたのサ」

ははは、と煙管を回す花魁女性に、ローズマリーは再び呆れながら、されど警戒を強める。

「――それでどのような要件で？　アリーシャ・ジョゼスターフ」

一見、ただの花魁崩れに見えても、彼女からは張りつめた弓矢に似た気配が放たれていた。殺意の鏃はローズマリーに向けられている。明確な敵意。彼女が亡国機業の幹部として、自分の前に現れたことは明白だった。

「おまえさんとお茶をしてもよいのだけど、今日はやんちゃ坊主とその嫁さんを折檻しに来たのさ」

途端、手にしたキセルから閃光が放たれ、彼女を中心に嵐が吹き荒れた。

荒れ狂う風の中から現れた物体は、暴風を形にした流動的なフォルムを持ちながらも、重量を感じさせる黒いISだ。〈テンペスタII〉。イタリアの第三世代型ISだった。

「やはり、目的はこちらの粛清ですか」

ローズマリーもフランベルジュを抜き、〈レーヴァテイン〉を展開した。刀剣から放出された赤色の粒子が猛る炎のごとくうねり、世界に二機とない第四世代型ISとなって現れる。

「クロエ、急いで束さまの許へ向かいなさい」

「はいでございます」

クロエは云われるがまま、来た道を急いで引き返す。なぜか、ネコを抱えたまま。

「わーにん、わーにんでごじますよー！」と叫びながら走り去っていくクロエを、花魁女性は「シヤイニイを取られたさ？」と笑った。

——彼女に危害を加えるつもりはないようだ。

「しかし、どちらかと言えば穏健派のあなたまで出張してくると思いませんでした」

「へお母さま」の命令で、ちよつと出張してきたのさ」

「へお母さま」？ あなたの母様はすでに亡くなれているはずでは……？」

「おつと、しゃべりすぎたのサ」

「では、あなたを捕らえたあとで、ゆっくり続きを聞かせてもらいましょう」

ローズマリーは可変出力式の荷電粒子砲《レーヴァテイン》を展開してアリーシャに発砲した。

しかし、アリーシャはよけず、腕を払って赤い粒子ビームを薙ぐ。瞬間、ビームが曲がり、背後の壁に突き刺さった。

背後で起きた爆発を背景にアリーシャが妖艶に笑む。

「それはお断りなのサ★」

ローズマリーは意に反さず立て続けに二発の粒子ビームを撃ち込む。

やはり、その二発も彼女を反れ、命中しない。ローズマリーはすつ

と目を細めた。

(ローレンツ力の応用かしら……?)

電磁場を張っておき、飛来した粒子に電荷を与える。そうすれば電磁誘導とフレミングの法則でビームは歪曲する。ならば、とローズマリーはもうひとつの専用機である<サイレント・ゼフィルス>の武装《スターブレイカー》を展開して、引き金を引いた。しかし、光の銃弾も歪曲してアリーシャに当たらない。

(——光も曲げるのね)

どうやら、アリーシャが用いる防御兵装は電磁場兵器の類ではなく、もっとシンプルな力。

(確か、イタリア代表の専用機は重力操作を可能にしていたかしら)

事故で右腕を失ったアリーシャの後任として選抜されたイタリアの国家代表アンジェリカ・バレンタイン。そのアンジェリカの専用機<テンペスタ・プルガトリーオ>には、局所的重力場を発生させる重力砲が装備されていた。

ローズマリーの推測が正しければ、<テンペスタII>は重力子に干渉することで重力の向きやその強さをコントロールし、攻撃を歪曲させているのだ。

それを証明するように、アリーシャが手を振りかざすと、でたらめな重力波が空間を歪めた。周囲の物質が悲鳴のような軋みをあげ、自重で崩壊していく。<レーヴァテイン>でさえ圧倒的な物理の力を受けて後方へ吹き飛ばされた。

しかし、ローズマリーは顔色を変えず、あくまで冷静に対処した。「ウルズ、光圧センサーをONにして、機体の環境設定をモード5に変更です」

《警告、環境設定モード5は高重力下での活動を想定したものであり、機体の消耗を——》

「いいからやるのです」

《ラジャー。光圧センサー、オン。機体の環境設定をモード5にて再起動——コンプリート》

<レーヴァテイン>の補助AIが機体を高重力下での活動に対応

させる。それに合わせてローズマリーは可変式荷電粒子砲《レーヴァテイン》をライフルモードからソードモードに切り替え、アリーシャに肉薄した。

「では、へ嵐のアリーシャ、あらためへ重力嵐のアリーシャ。不肖このローズマリーがお相手します」

「お手並み拝見さ、へブラッディ・マリー」

破壊の剣を手に魔人が嵐へ突貫す。

♡

◆

♣

♠

背中に強い衝撃を受けた楯無は前のめりに倒れ込んだ。

しかし、そこは更識家の当主。すぐさま体制を立て直し、敵から距離を置く。

「どういうことかしら、ソフィア？」

さしもの楯無でも現状を把握するのに時間を要した。

「どういうことも、こういうことさ」

ソフィアが楯無に向けてトリガーを引く。

大口径の銃口から吐き出された粒子の銃弾を、楯無は驚異的な反射神経でかわし、コンピューターアームへ身を滑り込ませた。同時に蛇腹剣《ラストイーネイル》を展開し、ソフィアに《蒼流旋》を、新型ゴーレムに《ラストイーネイル》を向ける。

「裏切り、つてことでもいいのかしら？」

ソフィアは肩をすくめた。

「裏切り？ 違うな。キミを欺いていただけさ。

オレは元からあちら側の人間なんだ」

ソフィアが目線でロキを示す。

それに合点がいった。事前に情報が筒抜けだったら、この施設は蛻の殻なのだ。

「つまり、彼のスパイだったということ？」

「そういうことさ。オレはロキの命令である人物を暗殺すべくロシア

に潜入していた」

「ある人物？」

「アレクサンドロス・アルツェバルスキーという男だ」

その名には聞き覚えがあった。ロシアの復権を掲げる、強硬派の総統だ。

しかし、ソフィアが紡いだ言葉は、彼女にさらなる驚愕をもたらした。

「亡国機業」の幹部さ」

ソフィアの言葉に、楯無は「なんですって」と眉を顰めた。

だとしたら、ソフィアは自らの組織の幹部を暗殺したことになる。

「元々、俺たちの組織は一枚岩じゃなくてな。特に俺とアルツェバルスキー大佐との仲は険悪で、俺たち一派と、大佐一派は互いに目の上のコブだった」

「だから、消した……。じゃあ、この作戦は——？」

「オレがでっちあげたウソさ。こう見えてオレは彼に気に入られていてね。自由にできる部隊もある」

楯無はその可能性を疑わなかった迂闊さを呪った。

今思えば、自分のようなよそ者が、こんな極秘作戦に参加できるはずがない。

（でも、まあいいわ。ソフィアに欺かれたことは誤算だったけど、本来の任務に変更はないもの）

経緯はどうであれ、「亡国機業」の資金を奪取する目的に変わりはない。そもそもこちらは「亡国機業」とソフィアの両方を出し抜くつもりだったのだから、彼女が裏切ったところで本来の目的を修正する必要はない。楯無は意識を本来の目的へ回帰させた。

（まずはあのロキという男を捕える）

ロキは、ロシアの大物が敵と見做す相手だ。「亡国機業」における地位は大佐と同等かそれ以上。彼を捕えられたなら、「亡国機業」が有する資金の情報も手に入れられるはず。

楯無はそのロキを捕らえるべく《アクア・ナノマシン》のディスプレイを解放した。

だが、次の瞬間、〈霧纏の淑女〉が纏う水——《アクア・ヴェール》が唐突に凍り始めた。それだけにとどまらず、武装の《蒼流旋》、駆動系までもが自らの“水”で凍っていく。

ロシアの第三代型兵器《アクア・ナノマシン》は、水分子を操作するNEMS兵器だ。分子運動を加速させて熱に変換ができれば、その逆——分子運動を止め、熱を奪う事もできる。

問題なのは、この現象が楯無の意思ではないということだった。

「悪いが、彼はやらせない」

楯無はソフィアを見た。

「あなたの、仕業なの……?」

「ああ、オレの専用機は《アクア・ナノマシン》のネットワークをハックできる」

「ハック? あなたのISは第二代型の〈ヴォルグ〉じゃ」

「それは欺瞞さ。オレの専用機は〈霧霜の大狼〉。ロキが開発した〈霧纏の淑女〉の上位互換だ

楯無は怪訝な顔をした。ロキが開発した〈霧纏の淑女〉の上位互換? それはありえない。

「《アクア・ナノマシン》の製造工程とそのメカニズムを知っているのはロシアだけよ」

「だから、〈霧纏の淑女〉より上位に位置するISを作り出すことはできない、と。——残念ながらそれは違う。そもそも《アクア・ナノマシン》は〈亡国機業〉のテクノロジーなんだ。それだけじゃない。イギリスのBTレーザー、ドイツのAIC、中国の衝撃砲、イタリアの重力操作、それら技術は全て〈亡国機業〉によって開発されたものだ」
ここに来て、楯無は初めて表情に驚愕を浮かび上がらせた。

各国で盛んに行われている第三代兵器が全て〈亡国機業〉によってもたらされたもの?

「われわれ〈亡国機業〉は、もともと核戦争を想定して創立された組織なんだ。——もし大国間で核戦争が勃発し、核の冬が訪れれば、地球は人類が住める環境ではなくなる。そこで〈亡国機業〉は、人類の移民——火星の地球化を計画していた」

「そのために開発された技術が現在の第3世代兵器だというの?」

「そうだ。火星で人が生きていくには、大気が必要だ。その生成には水、つまり巨大な氷塊が必要になる。それを生成するために水の分子をコントロールする研究が行われていた」

「《アクア・ナノマシン》……」

「そういうことだ。今度は生成した氷塊を宇宙に上げないといけない」

「レーザガン^{レーザー}を応用したマスドライバー^{レーザー}ね。AICは極音速で打ち上げた物資を受け取るマスキャッチャー。そして、氷塊を火星に運ぶ運搬システムがBTレーザー^{レーザー}を用いたレーザー推進^{レーザー}なら、衝撃砲^{レーザー}は?」

「大気を生成できたとしても、重力が無ければ定着しない。重力を生成するには星の密度を高めてやればいい」

「衝撃砲^{レーザー}の空間圧技術^{レーザー}を使って、星を圧縮する。重力操作^{レーザー}は地球と同じ重力下を作り出すため」

「君は賢いな。組織の幹部たちはこれら技術を組織から持ち出し、自国で兵器へと転化させた。ISの開発を裏から操り、世界のパワーバランスを凶る。そんな名目でな。だが、俺は彼らとは違う。分散した技術と資金を再び統合し、これらを以て篠ノ之束が夢見た時代を創造する」

不遜の面持ちから一転して、彼は年相応な二つの表情を見せた。

夢見る幼気な少年の顔と、母親への感謝。そのふたつが同居した表情を。

「そこでだ、更識。俺と組まないか?」

優雅独尊を貫くような男から、そんな提案が出た事に楯無は驚いた。

「なんですって?」

「この組織は派閥闘争で大分に疲弊している。組織として運営を続けるには、再編する必要がある。そこで、日清、日露、第二次世界大戦、更識が一世以上をかけて構築した人脈を預かりたい」

更識自体は、とても小さい組織だ。そんな小規模組織が諜報活動するには、他の協力が不可欠。そこで更識は持ち前の“人たらし”で独

自の人脈を形成し、数の少なさを補ってきた。

更識家では楯無の名を襲名すると、歴代の楯無が築いたネットワークも一緒に継承する。それをロキは欲していた。

「作戦をでっち上げて、私をここに連れてきた理由はそれ？」

「そうだ。もちろん、協力の見返りは十分に用意しよう。諜報活動への協力。更識への資金援助。技術の提供、妹の安全な開発環境も用意できる。なんなら、これらすべてを望んでくれてもかまわない。こちらには、それに応える準備がある」

提示された好条件に、楯無の心が沸き立つ。これら全てが手に入るなら、自分を悩ませる問題はほとんど解決されると云っていい。完全にこちらの足許を見たカード提示だった。

(ほとんど悪魔のささやきだわ)

一瞬“この悪魔に魂を売り渡してしまおうか”と、そんな誘惑に駆られる。彼に実現できるだけの資金と技術があるぶん、その誘惑は強かった。だが、それは、そう“一瞬”だった。

「断るわ。私たちは血塗られた一族だけど、テロリストには与しない！」

楯無はにべもなく提案をはねつけた。

学園を襲った彼らは楯無にとってテロリストだ。彼らがへイス学園襲撃事件のような事を繰り返さない保障はない。そんな彼らに協力することは、これから起こるかもしれない保障はない。そんな彼らに協力する。更識は血塗られた一族だが、傷づく謂れのない人間の血で濡れているわけじゃない。

「でも、あなたには協力してもらおうわ。うちの座敷牢の中からね」

楯無が蛇腹剣を構えると、ロキは苦笑いを見せた。

「協力はしない。けれど、協力はしろ、か。わがままな女だな。嫌いじゃないが、そうさせたいなら相手を惚れさせてから云え。——<ナルヴィ>、プランBを実行しろ」

《イエス、マスター。プランB、実行》

彼の隣に控えていた新型<ゴーレム>が抜いた近接ブレードを腰に宛がい、身を落した。

そして、全員が機械で構成されているとは思えないしなやかさで、鯉口を斬る。目にもとまらぬその早業に楯無は視線を奪われた。

(この技は織斑先生の!?)

などと驚いている暇などない。敵は既に初動を終えている。

一閃。

放たれた一撃を、楯無は咄嗟に《ラストイーネイル》で防ぐ。だが、攻撃を受け止めた瞬間、蛇腹剣が刃節もろとも砕け飛んだ。

「接近戦はまずいわね……」

剣撃の威力を目の当たりにした楯無は、近接戦の不利を悟って、距離を置いた。

その隙にロキが身を翻す。協力してもらえないなら、ここに残る理由もない。

「では、俺は失礼させてもらうよ。機会があつたらまた会おう」

そう言い残して、ソフィアと共にラボのエレベーターで地上に登っていく。

それをかばうように立ちはだかる<ゴーレム>。ロキを逃がすわけにはいかなかったが、このゴーレムをどうにかしなければ、追撃もできそうにない。楯無は眼前の<ゴーレム>に意識を集中した。

(にしても、先の一撃は一体……?)

<ゴーレム>の放った剣技は最速を一撃必殺とする篠ノ之流剣術の居合術だった。ISのモーションマネイジメントを使用すれば再現できるが、それには術者のデータが必要だ。となると、あのISには――

「織斑千冬のデータが!?!」

篠ノ之箒ではなく、織斑千冬の名が出たのは、音声彼女のものだったからだ。

「でもどうやってそれを」

考えるまでもなかった。VTシステムからの流用。これに間違いない。ロキは「AICは亡国機業の技術だ」と説明した。なら、VTシステムを開発したへワルキューレ・ウエポンは《亡国機業》の傘下だったと容易に想像がつく。おそらく彼はすでにへワルキューレ・

ウエポン」を手中に収めているのだろう。

(声まで似せて、悪趣味よね)

そう嫌味を零したところで楯無は、武装のコンソールを開いた。

↑——武装レジストリ——↓

〈四連装ガトリングガン内蔵ランス《蒼流旋》——残弾数「500」〉

〈蛇腹剣《ラストイーネイル》——大破〉

〈水分子相転移MEMS《アクア・ナノマシン》——■蓄量\$%&〉

「やっぱり、《アクア・ナノマシン》は使えないか……」

いまだくフェンリル」の影響を受けているのか、正確な情報を習得できない。となると、こちらが使える武装は《蒼流旋》だけとなる。それだけで新型くゴーレム」の相手をしろと？

(相手は織斑千冬だっというのに……?)

偽物とはいえ、相手は織斑千冬と同じ剣技を使う。

オリジナルより威力は劣るだろうが、それでも脅威には違いない。

(ほんと、やになっちゃうわ……)

ソフィアに欺かれ、ロキには逃げられ、楯無のプライドは酷い惨状だった。

(でも、ここでやられるわけにはいかない……!)

自分には果たさなければいけない使命と、帰る場所、そして待つている(と思いたい)妹がいる。

こんな辺境の秘密都市で、置き捨てられたロケット共に朽ちるなんて勘弁願う。

「やっつてろうじゃないの、かかつてらっしやい!」

楯無は《蒼流旋》のガトリングガンに装填された12.7mmの弾丸をゴーレムに打ち込んだ。

第66話 ロシアより愛をこめて

ほの暗い研究所の床に、毎分3000発の連射速度で撃ち出された弾丸の葉莢が跳ねて踊る。

《蒼流旋》に内蔵された12.7mm口径のガトリングで、楯無は〈ゴーレム〉の挙動を制した。しかし、〈ゴーレム〉はタンクステンの弾雨をもろともせず、楯無に肉薄してくる。

《接近警報》

敵が横ふりに一閃。楯無は膝を折り、もちまへの反射神経で攻撃をやり過ごす。

そして敵が空振ったスキに後方へと大きく跳躍した。

相手は格闘型だ。しかも織斑千冬と同じ剣技を使う。相手の間合いに留まれば、篠ノ之流が磨き上げた剣術の威力をたつぷり味わうことになる。被弾を避けるには、とにかく距離を置くしかなかった。(……せめて、ナノマシンが使えれば)

近接格闘はリスクが大きすぎる。しかし、如何せん《蒼流旋》のガトリングガンでは決定力に欠ける。戦場で「たられば」が命とりなのはわかっていても、アウトレンジから有効なダメージを与えるには《アクア・ナノマシン》が必要だった。

だが、それをくフェンリル〉によって封じられている以上、現状の武装で対応するしかない。

着地した楯無はさらに距離を置き、〈ゴーレム〉を据えて近接防衛の弾幕を張り続けるが

↑——警告：四連装ガトリングガン内蔵ランス。残弾数「0」——↓

頼みの綱のガトリングガンの弾も切れてしまった。

弾幕が途切れるなり、〈ゴーレム〉が一気に肉薄してくる。

踏み込んでの一閃。それを《蒼流旋》で弾くが、すぐに失策だと気づく。篠ノ之流剣術の極意は「一閃二断」。一撃目で相手の防御を崩し、二撃目で断つ。受け流すのではなく、躲さなければならぬ。

「しまったッ」

と、思うが遅い。既に二撃目——尾骶骨から生えた〈ゴーレム〉の

尾が、罐を擡げていた。尾の先端に備えられたマニピュレーターが、無防備になった楯無の首を締め上げる。

首に襲いかかる強烈な圧力に楯無から「ぐう」と苦悶の声漏れる。ISの保護機能でなんとか一命を取り留めたが、これではいざずれ窒息する。——と言っている側から視界がぼやけ、意識に霜がかかってきた。

(まさか、や、やられる……の?)

楯無は弱音を零した自分に驚き、嘆息した。

(ふふ、私が弱音なんて、らしくないわね。あの子が見たらなんて思っかしら)

楯無はふと赤毛の少女を思い出した。

苦戦する今の自分を、彼女が見たら何と言うだろう。同じゴーレムタイプを容易く葬った彼女なら。日頃から「会長の不幸は蜜の味」という彼女のことだ。きつと『それで学園最強ですか』などと増長するに違いない。

それはおもしろくない。すぐくおもしろくない。いじられキャラのくせに、と思う。

すると、力が沸いてきた。こんなザマでは彼女に笑われる。——そんなシンプルな悔しさが活力を生み出していた。

(あの子にバカにされたんじや、楯無の名折れだわ)

楯無の名折れ。それを口にして、楯無は襲名した名の意味を思い出した。

楯無は楯を持たないという意味だ。攻撃は最大の防御、最強の鏝こそが最強の盾となる。

そこに矛盾はない。無矛盾ゆえの完全な存在。

(だからこそ、楯無は完全無欠でなければ、許されない)

そうあるために、更識は何百年の歳月をかけ、あらゆる技術を日々練磨してきた。その技術の結晶たる「楯無」が、こんなにわか仕込みのモノマネ機械に敗れていいはずがない。そんなことは更識の歴史と矜持が許さない。

「矜持、自尊心、自分らしさ。あなたにはある?」

楯無は見下ろすように〈ゴーレム〉を睨めつけた。しかし〈ゴーレム〉は答えない。

「ないでしょうね。命令を履行するだけのあなたには——。でも、私にはある！」

そんな魂から叫んだ言葉と共鳴するように、何かが爆ぜる。爆ぜたのは——水だった。その水が重力を忘れたように宙を泳ぎ、〈霧纏の淑女〉を飾るドレスとなった。

↑——報告：〈ウンディーン〉システムアップデート。100%完了——↓

〈ウンディーン〉は、兆を超える〈アクア・ナノマシン〉群を制御するソフトウェアだ。

楯無が「これは？」と眼球運動で武装ウィンドウを開く。そこには「ナノマシン・コントロール・プライオリティー変更」のメッセージ。——ロックされていた〈アクア・ナノマシン〉のコントロールが解除されていた。

一瞬ソフィアが残したシステムトラップかと疑う。しかし、自分の胸元で輝くロリーナのお守りが、その疑惑を一掃した。

↑——報告：重要ファイル／音声ファイル 閲覧優先度「重大」——↓
↑——再生しますか。YES／NO——↓

楯無は圧縮されていたファイルを解凍し、音声を再生した。

骨伝導スピーカーから聞こえてきた音はおっとりした声。お守りをくれたロリーナの声だ。

『お守りに〈アクア・ナノマシン〉のセキュリティホールを埋めるプログラムを入れておいたわ。外部から介入を受けた時、パッチ処理されるようプログラムしておいたわ』

やはり、ナノマシンの制御が回復したのは、彼女の仕込みか。

この状況を読んでいたとは思えないが、彼女の先見の明には脱帽だった。

『それともうひとつ、〈アクア・ナノマシン〉のポテンシャルを引き出すプログラムも同梱しておいたわ。〈スカーレット・レイディ〉、〈アクア・ナノマシン〉に過負荷をかけて攻撃能力を爆発的に高めるモード

よ。使用後、《アクア・ナノマシン》は使えなくなるから、気をつけてね。――では、あなたの無事を祈っているわ。簪さんと共に』

音声ファイルの終了と共に、武装ウィンドウに、新たなモードが追加された。

「――報告：恥スじらいカーをかレなレぐりト捨レてデますイ?か?――」
(まったく大した人たちだわ)

何千キロと離れた場所から自分を支えてくれた姉妹に、脱帽と感謝の念を抱く。

だが、感心ばかりもしてられない。

楯無はランスを逆手に持ち替え、〈ゴーレム〉の頭部に突き立てた。その衝撃で尾のマニピレーターの圧力が緩む。相手が怯んだ隙に胴体を蹴って後方に大きく跳躍。着地と同時に《蒼流旋》を頭上で回転させて、悠々と構えを直し、そして叫んだ。

「ヘスカーレット・レイデイ〈モード!〉」

楯無が新装ヘスカーレット・レイデイ〈モード〉を起動すると、〈霧纏の淑女〉はまどつていた水のドレスを脱ぎ捨てた。あたかもスカーレット・レイデイ〈恥知らずな娼婦〉のように。そして、脱ぎ捨てた水のドレスを《蒼流旋》の矛先に巻き付け、その破壊力を爆発的に高める。

「今からのお姉さんは一味違うわよっ!」

楯無はスラストを吹かして、一気に間合いを詰めた。

爆発的な加速で迫る楯無を、〈ゴーレム〉が一閃で迎え撃つ。楯無は防御しない。淑女から娼婦に転身した〈ミステリアス・レイデイ〉はガードが甘くなる。当然のように敵の鋭い一撃は装甲を切断したが、電磁筋肉が防刃となって攻撃は生身まで達しなかった。

〈霧纏の淑女〉の電磁筋肉には《アクア・ナノマシン》を含んだ水が染み込ませてある。その水は攻撃を受けたとき、ダイタランシー効果によって、高い防刃防弾性を発揮する。これは〈霧纏の淑女〉を共に開発した虚のアイディアだ。

さらに攻撃力が装甲に集中したおかげで、本体が無防備なボディーをさらしていた。そのボディー目がけて、楯無がランスを突き立てる。防御を捨て、攻撃に特化した《蒼流旋》はシールドを貫いて、〈

ゴーレム>の横つ腹に大穴を空けた。その穴にナノマシンを含んだ水を流し込む。

「だらしくイっちゃいなさい」

《清き情熱》。内部から膨れ上がった暴虐的な熱エネルギーは、<ゴーレム>を破壊しただけに留まらず、やがてラボ全体を吹き飛ばした。

瓦礫の山と化したラボから一番に這い出たのは楯無だった。

その眼下では、胴体が引きちぎれた<ゴーレム>が横たわっていた。まるで動く気配はなく、目を模したデュアルセンサーも完全に死んでいる。<霧纏の淑女>の最大火力を受けたのだ。形を残しているだけ大した強度だと云えた。

「しかし、しつぽがついてる奴に関わるとロクなことないわね……」

愚痴りながら、ISのパワーアシストを使って、瓦礫の山から<ゴーレム>を引きずり出す。

出てきた<ゴーレム>の胸部からは<コア>が露出していた。<コア>。ISにとって命そのものであるそれは、簡単に破損しないよう作られている。この<コア>も478個あるコアと同様の強度ならまだ使えるはずだった。

「今回の戦利品はこれだけか……」

<コア>は篠ノ之束しか製造できないため、世界はこれを喉から手がでるほど欲しがっている。場合によっては大きな外交カードにもなりえるが、北方領土の軍事拠点化を止める外交的切り札にはならないだろう。やはり、必要なのは、〈亡国機業〉の資金。つまりロキを捕まえないことには、自分に課せられた任務を達成できそうにない。当面ロキとの「鬼ごっこ」は続きそうだった。

さて、それはそれとて、

「コレ、ねこばばしちやおうかしら？」

楯無は<コア>をソケットから外すと、それを人差し指の先でくるくると回転させた。

「ふむ、楯無が勝ったか」

〈ナルヴィ〉からの映像が途絶えたということは、楯無が勝利を収めたのだろう。

ヘリの内部で、ロキは映像の途絶えたラップトップパソコンを閉じた。そして、薄ら笑っているソフィアを見やる。

「うれしそうだな」

「そんなことないさ。——それより、ずいぶんとあっさり引き下がったな」

もともと更識への協力要請は、ソフィアが提案したものだ。あれだけの好条件を、ロキから引き出せたのもソフィアだ。苦労して、二人の密会を膳立てしたソフィアは納得いかない様子だった。

「確かに彼女の人脉は必要だ。だが、交渉では弱みを見せると相手に着け込まれる。こちらに余裕があるように見せることが定石だ。時に引くことも大事だと、知っているだろうか？」

「……ああ、恋愛も取り引きも、駆け引きが大事だ」

「それに、更識は日本の防諜組織だが文民統制の外にある。日本政府には楯無を任命・解任する権限がないんだ。それどころか、統制下にすらない。だから、更識一族で楯無が決まると、日本政府は更識に忠誠を誓う儀式を執り行わせる。信ずるに値するか見定めるためにな」

「17代目の場合は『亡国機業の資金を奪取してくること』だったんだろ？」

しかし、失敗した。このまま忠誠を誓えなければ、更識は政府の承認を得られず、宙ぶらりんな状態になる。その状態である限り、予算が計上されることはない。そうならないため、彼女は必ずロキを追ってくる。

なら、自分は座して待てばいい。と——その時、ヘリのパイロットが言った。

「ロキ、戦闘のようです」

ロキは後部から操縦室に顔を出した。その先では赤色の光条がいくどなく走っては消えていく。あの光、〈レーヴァテイン〉の粒子ビームか。時折、見える黒い波動が〈テンペスタ〉の偏向重力波だとすれば、相手はアリーシャか。

「――寄せてくれ」

それを聞きヘリのパイロットはぎよつとしたが、頷いた。

同時にソフィアが護衛のためヘリから飛び降り、〈フェンリル〉を展開する。先行する〈フェンリル〉のあとを追うかたちで、ヘリは機首を下げ、戦闘区域へと接近した。

織斑千冬をおして、スコール・ミューゼルに次期〈ブリュンヒルデ〉と言わしめるだけはある。〈ヴァルキリー〉である自分を手古摺らせるローズマリーに、「さてどうするか」とアリーシャが上唇をなめた、そのときだった。

↑――警報：方位3時より高エネルギー反応――↓

右視界端から粒子ビーム。それをアリーシャは偏向重力でねじ曲げる。重力に引つ張られた粒子はアリーシャから反れ、後方へ消えていった。

「ほお、それがイタリアの指向性エネルギー兵器かな？」

アリーシャはローズマリーから視界を外さず、意識だけを新手に向ける。

こちらに接近してきた機体は狼を模した銀色の機体だ。

操縦者は青い長髪の女性。ロシア側の大佐に仕えていたソフィア・アルジャンニコフだ。彼女の介入にアリーシャは僅かに驚くが、なぜとは言わなかった。ただ、そういうことかと理解した笑みを浮かべる。

「ゴリヤ、まいったのサ」

さすがのアリーシャも両手を挙げた。彼女とてローズマリーとソフィアを同時には相手とれない。

こんなことなら無理にでもアンジェリカを連れてくるべきだった。そう苦笑する彼女の許に一機のヘリが滑り込んでくる。そのヘリのドアがスライドして開いた。

「アリーシャ・ジョゼスターフ。すまないな、すこし野暮用で席を外していた」

顔を覗かしたロキに、アリーシャがにんまりと笑う。

「ソフィアがそこにいるということは、あの大熊さ、飼いだに噛まれたのサ？」

ロキは肯定の代わりに一枚のディスクを指先で回して見せた。

ソフィアが取ってきた大佐の「配分」だ。

「これで残りの幹部は春狼とあなただけだ。どうする、まだ、俺たちと戦うか？」

「いいや、降参するのさ」

ロシア強硬派という強大な「軍事力」を引きいていた大佐が失脚したいま、もはやロキを止める手立ては失われた。ロキに権謀術数で劣る春狼と徒党を組み続けたところで、この劣勢を覆せるとは思えない。——アリーシャもそれを分かっていた。

春狼も、大佐の訃報を聞き、今頃てんやわんやしていることだろう。

「そうか。では、俺と組まないか？」

アリーシャは驚きながらも白虐的に笑った。

「おや、こんな傷物の女をもらってくれるのサ？」

そういつて痛々しい傷跡を見せる。美しい肌に刻まれた醜い傷跡は、彼女の美貌に、まるで澄んだ水に一滴の墨を落としたような濁りを与えている。それでもロキは平然と言った。

「傷など関係ない。女の器量は、外見じゃ決まらない。むしろ、失ったからこそ、あなたは以前より綺麗になったよ。あなたは悲劇的な過去でさえ、自分の魅力に変える強さを持っている」

アリーシャはすこし目を伏せたあと、すこし微笑むように唇を曲げた。

イタリアじゃたくさんの男性に口説かれてきたが、傷を褒められたのは始めてな気がする。

「口のうまい男なのサ。わかったよ」

カラカラと笑いながら、アリーシャはすべるようにロキの許へ寄り添った。そして、差し出された少年の手に、そっと自分の手を差し伸べる。その手をロキが握ろうとしたとき、

義手だった腕がハラッと粒子化して消えた。

透かされたロキが前のめりにつのめる。

きよとんとする彼の顔を十分に楽しんでから、アリーシャは子供のよくな笑顔で言った。

「引つかかったね。——お姉さんを口説こうなんて10年早いのさ、坊や」

そう笑ったアリーシャは、文字通り、ロキに義手を貸すつもりはないようだ。

あつさりフラれたロキは半眼でアリーシャを非難した。

(ふふ、坊やのそんな顔をみられただけでも、ここに来た甲斐があったのさ)

アリーシャはどこかやさしい顔で、彼の額に口づけをした。そして、無いはずの左手と右目を労わるようにして、ヘリから身を引く

——この、幻肢痛を止めることができたのなら、その時はあんたのモノになってやるサ。

やがてテンペスタによる重力子操作で可視光を歪めた彼女は、その場所からいなくなった。



アリーシャが去ったあと、ロキとソフィア、そしてローズマリーを乗せたヘリは、妙な沈黙に包まれていた。

原因は、ロキの正面に座るローズマリーが、重々しい空気を醸し出していることだった。目を瞑り、清ますそのさまは、薔薇のごとく可憐なのだが、放たれる無言のプレッシャーは不動明王のそれに近い。

言葉じゃなく態度で何やら物申すローズマリーに、ソフィアが耐え

かねたように言った。

(なあ、ロキ、どうにかしろよ)

「ふむ」とロキは読んでいた書物から目を話した。

「ローズマリー、いいたいことがあるなら言え」

「いえ、何もありませんが」

凜々しい面持ちを僅かに傾げ、さもないように言う。けれど、蒼い目の半眼は不満を訴えていた。おおよそ、ロキとアリーシャのやり取りが気に入らなかつたのだろう。公私の分別をつけているつもりなのだろうが、態度に出過ぎだつた。

「アリーシャ・ジヨゼフスターフを誘つたこと、妬いているのか？」

「そのようなことはありません。彼女の实力は指折りです。仲間になつていただけのなら心強いです」

「じゃあ、なにを拗ねているんだ」

「……………」

「だから、黙り込むのはやめろ、黙まりー・ライオンハート」

ローズマリーの細い眉がわずかに動く。呼び方が気に障つたらしい。

このまま黙りつづけると、本当にその名が定着しそうな気がしたローズマリーは口を割つた。

「アリーシャに口づけされたロキは、とても、とても、嬉しそうに見受けられました」

ローズマリーにしては珍しく、非難がましい口調だつた。やはり、先のやりとりにやきもちを焼いていたらしい。

だが、ロキはローズマリーのやきもちなどまったく意に介さなかつた。

「美女からの口づけだ。嫌がる道理がない」

「私はどんな美形だろうと、誰彼かまわず、キスをされたくありませんが」

「じゃあ、誰ならいいんだ？」

と、ロキは訊いた。となりのソフィアはニマニマしている。

ローズマリーは頬を赤くして、非難するようなまなざしを二人に向

ける。

「知ってるくせに……」

「なんだ、聞こえないぞ」

「先に帰投します、といいました」

結局、不機嫌のままローズマリーはヘリから飛び出し、<レーヴア
ティン>を展開した。そのまま最大巡航速度でヘリから一気に離脱
していく。その去り際、「いじわるなのですから」とつぶやいたローズ
マリーを知って知らずか、ロキは肩を竦めた。

その様子を見て、ソフィアが堪えきれなくなったように笑い出す。

「ははは、モテモテだな」

「それでもないぞ」

楯無にあつさりフラられ、アリーシャにもフラれたばかりだ。ハー
レムどころか、モテモテですらない。だが、それをさして気にする様
子もなく、ロキはヘリのシートに腰を沈めた。

「で、これからどうするんだ？ もう組織は思うままなんだろう？」

影からISの企業を支配してきた組織——〈亡国機業〉。それを運
営する幹部は全員で7名。

アレクサンドロス・アルシュヴァルスキー（ソフィアが暗殺）

劉春燕（在留）

アリーシャ・ジョセスターフ（脱退）

マーガレット・ライオンハート（在留）。ただしローズマリーの傀儡）

アルフレット・バーンスタイン（VTシステムの一件で失脚）

スコール・ミューゼル（在留）

そしてロキで構成されている。うち残ったのはロキとスコールと
春狼。

組織の決定権は残った幹部に自動的に集中するため、9割方、〈亡国
機業〉を掌握したと言っていい。もはやISという船の“舵”は彼に
握られたも当然だった。

「ISを制する者がこの冷戦を制す」とは誰の格言だったか。しか
し、その言葉に従えば、世界のIS企業を牛耳る亡国機業、それを手
に入れた彼がいまやこの冷戦のカギを握る人物となったと云って過

言じゃない。

「ああ。これでようやく次の段階に進める」

「次のステージ。〈デウス・エクス・マキナ〉との対決か？　だが、向こうは、すでに高度に組織化されている。派閥闘争で弱体化している現状、彼らとぶつかれば、オレたちに勝目はない」

こちらの優位性は〈コア〉を製造できることだが、その生産体制が整っていない。ラボは研究所であって工場じゃないため、一度に量産できる数は少数だ。

仮に製造ラインが確保できたとしても、今度はISの製造や開発を監視している〈国際IS委員会〉の認可が必要になる。ローズマリーをへブリユンヒルデ〈にして委員会に送り込むまで、ISの量産化は難しかった。

「ああ、彼らと対決しても俺たちに勝利はないだろうし、俺たちが潰しあっても〈彼女たち〉が漁夫の利を得るだけだ。何より、俺はローズマリーにこれ以上つらい想いをさせてくはない。なら、すべきことは一つだ」

〈デウス・エクス・マキナ〉のトップ。——ルイス・キャロルとの対話。

以前の〈亡国機業〉では不可能だったそれも、支配権が彼に移った今なら可能だった。なぜなら、彼に反対する幹部はもういないのだから。

「そのためにスコールも動いてくれている。その時までしばしゆっくりさせてもらうさ」

ロキはどこか疲れたように座席に深く持たれた。そして本をアイマスク代わりにする。

派閥闘争に生き残るため、そして、母の夢を叶えるため、彼は楯無同様その肩に年齢不相応な重責を背負ってきた。わずかながらその重圧から解放されて、疲れがどっと沸いたのだろう。ウトウトし始めていたロキをソフィアがよしよしと撫でていたら、ロキが片目だけ開けた。

「そうだ、ソフィア。帰ったらイワンに元気な姿を見せてやれ」

自身の腹心のイワンは、ソフィアの父親にあたる。ソフィア・イヴァネンコ・アルジャンニコフ。これが彼女の本当の名前だ。
「そうする」と答えたソフィアに満足したロキは、再び目を閉じた。

〈変革ブルーバード（仮）〉 第67話 二学期スタート

世界は残酷だ。信じてでも裏切られ、努力しても報われない。そんな悲哀と絶望が跋扈する世界の上で、私は訪れた惨劇の前に、その現実を直視できず、目を背けていた。

「世界はなぜ、こんなに残酷なのか」

「体重が増えたぐらいで。大げさなことをいうな」

体重計の上で嘆く私に、千冬さんが身体測定のカリッポボードを渡す。

9月1日、二学期開始当日。現在、IS学園の保健室では全校生徒の身体測定が行われていた。色取り取りの下着姿の女子たちで賑わうその光景は、十代特有の色香にも満ちている。人にとっては桃色な光景なのだろうけど、未だに体重増加の件が尾を曳いている私にはどうでもいいことだ。

「ほら、邪魔だ。さっさと次へ行け。あとがつかえるだろ」

「はい……」

苛立たしげに突き返されたカリッポボードを受け取り、体重計測のブースを出る。

はあ、夏休みの隔離生活は“食っちゃ寝”だったし、それが原因でしようか……などとカリッポボードを見つめながら次のブースへ移動していると、前方不注意で生徒とぶつかってしまった。

「あ、すみません」

「……いや、こちらこそ、すまない、前を見て、ん、アリスか」

ぶつかったのはラウラだった。

そのラウラも、なぜかカリッポボードを意気消沈した様子で眺めていた。

「どうしました？ 元気ありませんけど？」

「うむ、実は身長があまり伸びていなくてな。職業柄あと20センチはほしいのだが……」

実を言うと、ラウラは特殊部隊員に必要とされる身長条件を満たしていない。それをずっと気にしているらしく、先日など「ぶら下がるだけで身長が伸びる」という怪しげな器具を通販で買っていた。

「そういうおまえこそ、元気がないな。どうした？」

「私の場合は体重が増えてしまつて」

「ふむ、おまえもか……」

二人してどよんと暗い顔をする。そこにセシリアが通りかかった。

すらつと長い肢体に、くすみの無い白肌。そして、豊満で形のよいバストと、美しい曲線を描くヒップライン。あまりに完璧すぎるその姿態に、私とラウラの目が眩んだ。

「きゃー、眩しいですッ」

「嫁、目と耳を閉じて、口を半開きにするんだ！」

くあーと眩しがる私たちを見て、セシリアがくすくす笑う。

「ふふ、どうしましたの？　まるで閃光手榴弾が炸裂したみたいに」

「いえ、セシリアの美貌が眩しすぎたもので。それにしても、ほんとスタイルがいいですね」

背はすらつと高く、括れたボーディーラインには垂みのひとつもない。まさに非の打ちどころのないプロポーション。自分の醜いお腹を見たあとだけに、セシリアのパーフェクトボディーがよけいに眩しく見える

「それはもう美貌を保つためにいろいろ努力していますもの。エステにも通っていますわ」

「へえ、ちなみにそのエステって一回おいくらぐらいで？」

値段次第ならちよつと行ってみようか、そんな軽い気持ちで聞いてみたら、

「3000ポンドでいどですわよ」

とんでもない回答が返ってきた。さすが世界有数の大富豪。美貌にかけるお金の額が違う。それに3000ポンドを「その程度」と言ってしまうあたりがいやはや。ラウラもその額にあきれた様子で「私なら3000ポンドあったら、中古の対物ライフルを買う」などと

いう。こっちはこっちでお金の使い道がおかしい。

「ラウラさんは、もっと自分にお金をかけてもよろしいんではなくて？」

と、ラウラの下着を見るセシリア。彼女の下着は相変わらず、質素なスポブラだ。色気のイの字もない。黒の高級ランジェリーを身につけているセシリアとは実に対照的だ。

「ラウラさんは素も綺麗なのですから、磨けばもっときれいになりますわよ？」

「その必要性を感じない」

「……………」

あ、セシリアが苦笑していますね。

ラウラは服装や化粧に無頓着だから、ファッショウンぬんかんぬんの話をしても無駄なんですよ。私が要望したならともかく、自発的に取り組むことはない。ララがいつていましたが、遺伝子強化素体は、閉塞的な環境で育つたため、人間性の乏しい子が多いらしい。

ま、ラウラの感性についてはゆくゆく考えていくとして、

「ともかく、先に測定を終わらせてしましましょう」

午前中に終わらせなければ、昼休みを返上しなければならぬ。

「そうですね」「うむ」と言った二人を連れ、私は次の計測ブースに向かった。

(次は体位の計測でしたか。あ、もしかしたら、体重が増えたのは胸が大きくなったからかもしれませんね)

きつとそうに違いない。そんな希望的観測を抱いて体位のブースに入ると、すれ違いで胸の大きな生徒がでてきた。それも身に着けたFカップの3/2ブラですら、包み切れていないほどの巨乳だ。それを手で覆っているが、ほとんど隠せていない。そんな巨乳の生徒はクラスに一人しかいない。箒である。

「…………む、アリスか…………」

擦れ違いでてきた箒は、さきほどの私たち同様に暗い顔をしている。さては——

「箒、その表情だと、また大きくなりましたね？」

「う……っ」

言葉に詰まる。どうやら凶星のようだ。

「じ、実は2cmほど大きくなったのだ。まったく、こんなに大きく――」

「箒、それ以上はダメです！」

慌てて止めるが遅かった。

「こんなものですか？」「私たちがそれをどれだけ羨望していることか！」「でたわね、超大型巨乳！」「駆逐してやる、この世から一匹残らず！」「どうせ、私の胸はウォールマリアよ」「信教せよ、(絶) 壁は神の御業なり」

向けられる殺意と羨望の眼差しに、箒は「ひっ！」と竦み上がった。

そんな箒を庇いながら、私はみんなを宥めるように言う。

「みなさん、箒さんに悪意はありません。だから、鉾を収めてください。鈴木も体温計をしまいなさい。それは体温を測る物で投げるものじゃありません。織斑先生も、出席簿を叩きながら介入する準備をしないでください。大丈夫ですから」

「くっ、あんたがそういうなら、鉾を収めるわ」「そうか、ならいい」
そういつて体温計をあった場所に戻す鈴木と、体重測定ブースに戻っていく織斑先生。

それを先駆けに他の生徒たちも臨戦態勢を解いていく。

ふう、これで不毛な戦争と、織斑千冬よる制裁を回避できましたね。特に後者は大きい。人類最強に介入されたら、身体測定が死体測定になりかねませんからね。死人の体重や身長を図るってどんなカルトですか。

「箒、もうすこし言葉に気を付けてください。あなたの言葉は特定の誰かをすごく怒らせるんですからね。そういう自覚の無さは一夏並みですよ」

「私が一夏と同じレベル……。私は一夏並みに女の子を傷つけていたのか……」

どさつと両手両膝をついて愕然とする箒。そんな箒をラウラが「大丈夫か」と覗き込む。

それにしても、てんやわんやで疲れてきましたね。午後から適正テストもあるのに……。

ともかく、私は気を引き締め直して——ついでお腹も引き締めなおして——体位のブースに入った。

「あ、次はリデルさんですね」

体位測定を担当は、山田真耶先生だった。そして隣にはなぜかデュノアさん。

「デュノアさんは体位を測らないのですか？——あ、もしかして男の娘だから？」

「そ、そうじゃないんだけどね。僕はもう全部の項目を計り終えたから」

「それでお手伝いを買って出てくれたのです」

さすが学年きつての優等生。私とは大違いだ。

「さあ、リデルさん、測りますよ。両腕を上げてください」

「あ、はい」

言われた通り、手を上げる。山田先生は私の脇下にメジャーを潜らせた。

「はい、83cmですね」

「変化なし、ですか……」

入学当初からまるで成長していない自分の胸に軽く絶望してしまう。

同時に体重増加の原因がやっぱりおなかにあるとわかり、私はさらに意気消沈した……。

「次はウエストですよ」

「……はい」

私は気を引き締めた。ついでお腹も。

ふふ、こうなったら、せめて記録上だけでも痩せたことにしてやる。「リデルさん、お腹を引込めてはダメですよ。正確な計測ができません」

「なんのことでしょうか？ 私は自然体ですよ？」

「わかりました。そっちがその気なら、こっちにも考えがありますよ。」

——デュノアさん」

「はい、先生」

答え、デュノアさんが私の横に立つ。はて、何をしようというのでしょうか。

と思った瞬間、——デュノアさんが「ふうっ」私の耳元に息を吹きかけてきた。

「はにゃくん♡」

全身にゾクゾクした快感が駆け抜け、体の力が見るも無残に抜けてしまう。

そのすきに、山田先生が緩んだ私のウエストを測る。

「はい、ウエストは60cmですね。入学時からプラス2センチです」

しまった！ と思うも、時すでに遅しだった。

やられました。デュノアさんが邪魔しなければ、58cmで押し切れたのに……。

「もう、デュノアさん、なにするんですか」

「ごめんね。でも、ズルしようとする方がいけないと思うよ？」

まったくその通りなので、私は「ぐう……」と反論を飲み下す。

はあ、こんなことなら最初から無駄な足掻きなんてしなくてよかった。それなら「やだー、かわいいー」「ふふ、変な悲鳴」「はにゃくんだって（クスクス）」「耳が敏感なのかな」と周囲に笑われることもなかったし。

「それにしても、すごい声が出たね。はにゃくんって♡」

どこか熱っぽい顔をするデュノアさんを、私はムスつと睨んだ

「誰のせいです」

「そう怒らないで。すごく可愛かった、よ？」

「そんなこと言われても嬉しくありません。——それと、ラウラとセシリア。今すぐ私の耳元から離れて、手を後頭部で組みなさい。みょうなことをすれば、一週間、口をききませんからね」

ヒップを測られる私の背後へ忍び寄りとうとする二人を強い言葉で牽制する。

二人は悔しそうな表情をしながら、両手を後頭部で組んだ。

「う、気づかれてしまいましたわ」

「やるな。さすが嫁だ」

ふう。危ないところでした。

きつと、私の耳にふうくと息をかけるつもりでしたね。

「まったく、私をなんだと思って……」

「ふふ、それだけリデルさんがみなさんに慕われているということですよ」

不満げにする私に、山田先生が可笑しそうに言う。

そして、クリップボードに私のスリーサイズを書き込んでいった。

「バスト83cm、ウエスト60cm、ヒップ85cm。耳が性感帯っ」と

こんなところにも伏兵がいやがり

ました！



多目的室。一夏はクラスとは個別で身体測定を受けていた。

「くそ、なんだかおいしい場面を逃した気がするっ！」

「織斑君、動いたら正確な数値を計れないので、じっとしてください」

「あ、すみません」

こうして、一夏の身体測定は人知れず終わったのであった。



昼休み。私たちは学園の屋上でいつものメンバーと昼食を取っていた。夏空けの秋風が心地よいということで、学食ではなく屋上で取る事にしたのだ。

「で、アリス、なんだ、その耳当ては」

一夏が射撃用の耳当てをした私を奇怪そうに見る。

「私を辱めようとするどっかの誰かさんから、身を守るためです」

「辱めるなんてそんな。わたくしはアリスの可愛く悶える姿がみたいだけですわ」

「それを辱めるっていうんですよ！」

「おい、おちつけ。で、一体、何があつたんだよ？」

あ、まずい。一夏が興味を持ち始めた。耳が感じやすいなんてバラさらちや大変です。

私は「乙女の機密情報」を守るため声を大きくした。

「ほらみなさん！ 午後から適正テストがあるんですから、しっかりと食べましょう」

私は「俺だけ仲間はずれか」とすねる一夏を無視し、野菜ジュースと質素なパンを取り出した。

成長期の高校生とは思えない簡素なメニューに、一夏がまた怪訝な顔をする。

「そういうわりには、おまえ、昼食、そんだけなのか？」

「いや、ちよつと体重が増えましたので、食事の量を減らそうかと」

「おまえな、体重が増えたからといって、いきなり食事を制限するのはよくないぞ。むしろこういう時こそちゃんと食事して、ちゃんと運動するのが大事なんだ」

健康オタクの一夏がいうだけあって、言葉には説得力があつた。

とはいえ、昼食は野菜ジュースだけと決めていたため、私はそれ以外のも持ってきていないわけで。すると、隣で動画を見ていたラウラが、私にパッケージされた携帯食品をふたつ差し出してきた。

「よかつたら、これ食うか？」

そうですね。午後から実技テストもあるし、野菜ジュースだけじゃ体を持ちませんか。

私は「では」とありがたくその携帯食品をいただくことにした。

「ありがとうございます。——で、ラウラは何を見ているんです？」

ラウラがくれた携帯食品を口に含みながら訊くと、意外な答えが返ってきた。

「パリで行われたファッションショーの動画だ」

ファッションショー？ ランウェイと聞いたら「滑走路がどうし

た」というラウラが？

その一言にみんなの食の手が止まる。「天変地異の前触れか」といったのは箒で、「晴天の霹靂かしら」といったのはセシリア。犬猿の仲である鈴は額に手を当てラウラの熱を測りだし、デユノアさんは物理シールドを空に向かって展開していた。いや、さすがに矢の雨とかは降らないかと。

「ラウラ、ファックションショーに興味があるんですか？」

「まあな、いま、その動画を見ているところだ。いいところだから、黙っていてくれ」

と、熱心に動画を視聴するラウラ。

15歳の少女がファックションに興味を示すことは普通だが、あのラウラである。ファックションに興味を持ってくれたよろこびより、疑問の方が勝った。

「なぜ急にファックションショーの動画なんて……？」

「実は今回、アメリカの軍事企業がパリコレを利用して、新型の女性用パワードスーツを公表したのだ。それが気になってな。それを確かめているところなのだ」

あ、すぐく腑に落ちた。ラウラの興味はファックションじゃなく、パワードスーツの方か。

私は「ちよつと失礼しますね」とラウラの背後から動画を視聴した。

ディスプレイの中では、触手の生えた円盤装置を頭につけた美女がランウェイを歩いていた。時折、その触手で観客に造花をまいている。

「ずいぶんと奇怪なフォルムのパワードスーツですね」

「コンセプトは『美女と野獣』らしい。こいつはオクトパスを模したパワードスーツらしいぞ」

「でも、なぜパリのファックションショーで公開を？」

「いまでは女性の方が資本力を持っていますもの。だから、女性の関心が高いファックションショーを公開の場所に選んだんじゃないかしら」

と、セシリア。

経営の素人である私は「へえ〜」と相槌を打って、残りのバーを口に放り込んだ。

「どうだ、うまかったか?」

「なかなかおいしいです。二本とも食べてしまいました。でも、これなんですか」

「アメリカの陸軍装備研究所ナ ティックで開発されたパワーバーだ。グリーンベレーの長距離偵察部隊向けに開発されたものでな、一本で男性兵士が必要とする摂取カロリーを補える」

それを聞いて私は無言になった。

男性の一日摂取カロリーは2000キロカロリー。兵隊のような職業だと3000キロカロリー。それを一本で補える食品を2本。私の脂肪フラグが立った気がした。



さて、適性検査も終えた6時限目。この時間は、特別ホームルームに変更されていた。9月の下旬に行われる文化祭の出し物を決めるためだ。というわけで、クラス代表の一夏が議事進行係として教壇に立つ。

「よし、じゃあ、文化祭の出し物を決めるぞ。案のある人は挙手を頼む」

「はい」とさっそくクラスメイトのひとりが手を上げる。

「じゃあ、田島さん」

「織斑くんと——」

「却下だ」

提案されてから却下されるまでわずか0.5秒。

もはや脊髄反射のように一夏は田島さんの提案を却下した。

「お、織斑くん、わたしまだ何も言っていないよッ!」

「いや、織斑って出た時点で、俺を見世物にしようって魂胆が見え見えだ」

「そんなことないよ！ 織斑くんをゲージに入れて、見物料を取るだけだよっ」

「それを見世物っていうんだよっ！」

目の端をひくつかせながら、一夏が視線で田島さんを威圧する。

まあ、そんなことされたら誰だって怒りますよね。というかですね、田島さん――

「田島、あとで生徒指導室にこい。いいな」

お姉さんの前で一夏のゲージに入れて見物料を取るとか、死にたいのでしょうか？

「田島さん、あなたといた一学期はとても楽しかったわ」

「リアーデさん、なんで別れのような言葉をつ!?!」

うくん、文化祭の準備、人手不足にならないといいですね。

「おい、みんな、真剣にたのむぜ、アンケートで上位を取れたら、学食のタダ券とかいろいろ景品がでるんだからさ」

そう、今回の学園祭では、来校者による出し物の人気アンケートが実施される。それでもつとも多い票を獲得したクラスには、さまざまな賞品が贈られるのだ。

景品の話を訊くなり、クラスメイトたちが眼の色を変えた。

「え、そうなの!?!」「ちよつと、それを早く言つてよ、織斑くん」

会長の思惑通りになって、私は苦笑した。アンケートと賞品を提案したのは会長なのだ。

目的はもちろん、学園祭の盛り上げと、学生のやる気向上だ。

「まあ、言わなかったのは謝るよ。わるかった。で、何か意見はないか?」

「私、あります」

今度は物静か女子生徒が手を挙げた。

鷹月静寝さん。真面目で、クラスメイトのまとめ役でもある、読書家のクラスメイトだ。

「アメリカのジョーク集とかはどうかなッ!?!」

ナイスアイディアなのか、普段は見せない興奮した顔だった。鼻息も何だか荒い。

しかし、クラスメイトの反応はいまいち、むしろ冷やかだ。

「え、なにそれ？」「うくん、なんていうかちよつと地味じゃない？」「面白い気もするけど、集客力に欠けそうね」「うう……、そ、そうかしら？」

てつきりいいアイディアだと思っていた鷹月さんは、クラスの反応にちよつと落ち込み気味だ。

私もちよつとピンとこないかな。嫌いじゃないけど。ちなみに、あとで聞いた話によると、鷹月さんは『アメリカテイストのコメディ』がとても好きらしい。それで布教を兼ねて提案したそうだ。

「まあ、一応ひとつの案だし、候補にあげとくか」

せめともの場合と、黒板に『アメリカのジョーク集』と記入する。

「他は何かあるか」

「はい、定番だけど、お化け屋敷なんてどう？」

お化けという単語が出て、私の身体がびくつと跳ねた。

「学園のVRルームを改造してさ」

「面白そうだな。ようやくまともな案がでたか。よし、候補に入れよう」

そう言つて、一夏は挙げられた候補を黒板に書く。——『アリスとお化け屋敷』と。

おかしい。私がお化け屋敷の主役みたいになっている気が……。

「他にないか？ ないならこのお化け屋敷で決定に——」

私は光の速度で手を上げた。

「はい、はい。私に良い提案があります！ 喫茶店なんてどうでしょうか。当日は大勢の来校者がやってきますし、休憩所や飲食店は需要があると思います。それに売り上げは自由に使つていいんですよね、織斑先生？」

「ああ、打ち上げ代にでもするといい」

「だということですし、どうぞでしょう」

「喫茶店か。それも悪くないけど、ちよつとインパクトに欠けない？」

「他のクラスも飲食店を出してくるだろうし、1位を狙うなら差別化したいところだね」

「でしたら、わたくしに良い案がありますわ」

そう言つて、セシリアが手を挙げる。

「みなさん、ウエディング喫茶なんて如何かしら？」

また突拍子もない案が……。もしかしてウエディングドレス姿で給仕するんでしょうか？ 確かに斬新だと思うけど、なんか動きにくそうですね。一夏も「なんだそりや」つて顔しています。

「セシリア、それ、お前がウエディングドレスを着たいだけだろ？」

私も思った。ウエディングドレスって女性の憧れですからね。一度は着てみたいものです。

でも、セシリアは否定するように首を横に振った。

「みなさん、ご存じかしら、昨今の若い女性たちは、結婚式を上げたがらない傾向が強いです。費用がかかる。準備がめんどろ、マリッジブルーになるのがイヤ。そういった理由で結婚式をあげるカップルが減っており、式場業界は危機に瀕しております。——そこでわたくしは、この式場業界を救うべく、このウエディング喫茶店で世の女性たちをウエディングマジックにかけたいのですわ」

「で、長々しゃべった本音は？」

「アリスのウエディング姿が見たいのですわ♡」

うわー、やっぱり私情じゃないですか。

「というわけで、わたくしはこのウエディング喫茶を所望します」

プレゼンを終えたセシリアは「いかがかしら!？」とその提案の賛否をクラスに問うた。

「うーん、ウエディングマジックかあ〜」チラ

「織斑、なぜ私を見る？」ゴゴゴ

「いや、意味はありませんって。——で、みんなはどう思う？」

「もう、喫茶店でもなんでもないけど、アリスのウエディング姿はみてみたいかな」「いつそ、喫茶店なんてやめて、私たちが結婚式をプロデュースするってどう?」「文化祭の出し物に結婚式って斬新かも」「それ、おもしろそうー!」「じゃあ、みんなでアリスの結婚式をプロデュースしない」

え、いま誰かともない発言しませんでした。私の結婚式って

……。

「うん、いいね、それ!」「私のお姉ちゃん、ウエディングプランナーだから司会頼んでみる!」「キャンセルサービスは?」「ねえ、お色直しとかもしようよ」「結納どうする?」「来校者も入場できるようにして、料金代わりに祝儀を取ろう」

おやおや、なんだかまた話が変わる方に転がり始めましたよ? 今は喫茶店のオプションを考える時でしょ? なのに、なんでみんなさん、私の結婚式のプロデュースに熱を上げているんです? そもそも、私には相手すらいらないんですけど……。

《バタフライ♪ 今日は今までのくどんなくに素晴らしい♪》
《レットクイーン》も楽しそうに歌わない!

ああもう……。

私が軽い頭痛に悩まされていると、ラウラがドンと机を叩いて立ち上がった。

「おい、おまえら、当事者を無視して話を進めるな」

そうです、そうです、もつと言ってやってください!

「新郎はもちろん私なのだろうな!」

うん、言うと思っていました。きつと当事者って私じゃなく、自分のことなんでしょうね。

こうなったら自分で議題を方向修正するしかない。

「あの、盛り上がっているところ悪いですが、資金予算が足りないと思いますよ」

各学級に割り振られた学園祭用の予算は15万弱ほど。

その予算で結婚式に必要な物を買いきろえたら「あっ」という間に予算オーバーだ。

「それならご心配なく、足りない予算はわたくしが融通いたしますわ」

「おお、セシリア、セレブー」「さすがお金持ちのお嬢様!」「太っ腹!」

「エロい!」

「エロくありませんわ!——ともかく、資金はわたくしがなんとかいたします」

予算の上限を盾に提案を却下させるつもりでしたが、そうきました

か。

でも、それはむりだ。その理由を千冬さんが告げる。

「オルコット、今回の学園祭で個人資産を投入するのは禁止だ」

「そうなんですの!?!」

そうなんですの。今回は人気アンケートが実施されるため、決められた額以上の資金は使えない。でなければ、圧倒的に資金の多い組が有利になり、公平さが失われてしまうからだ。

「予算内で収めろ」

これが消火剤となつて、私のウエディングプランは鎮火していった。

私はホツと胸をなでおろす。私、結婚するなら入籍するだけでいいです。

「で、どうすんだ。早く決めないと放課後、居残りになるぞ」

放課後は放課後でみんな用事がある。そういうわけで、私たちはいいそいそと話し合いを進めた。

「あの、やっぱりジョーク集とかいいと思うんだけど」↑未練がましい鷹月さんの
鷹月さんの図。

「やっぱり喫茶店がいい案だと思う」

「アメリカンジョーク喫茶とかはどう?」↑未練がましい鷹月さんの
図パート2

「でも、集客につなげるには喫茶店プラス何かオプションが欲しいよね」

「ウエディング喫茶がダメなら人妻喫茶は?」「いや、そこはちよつと捻つて未亡人喫茶なんてどう?」「なにそれ?」「全員が喪服を着て給仕するの」「ただの通夜じゃん(全員)」「というか、結婚の延長線上で考えるの、やめましようよ(私)」「ジョークしゅう……(鷹)」

その後も、メイド喫茶だの、姉妹喫茶だの、RPG喫茶だの、様々な意見がでるも『ベタすぎでは』と却下される。ならばとマニアックな路線に走り出して「熟女喫茶」「人妻喫茶」など発案されるも、「JKにはハードルが高い」とこれまた却下される。

なおも、客の言いになりになる「催眠喫茶」とか、何もされても動

じない「時間停止喫茶」とか出るが、一夏の「おまえらがやるんだぞ……」という言葉で素に戻り、議論は完全に迷走状態に陥っていた。「……で、どれにするんだよ、もう授業時間おわるぞ……」

黒板に書かれた無数の案を見て、一夏が疲れたように言った。

上げられた案は――

王道で攻める「メイド喫茶」。

露出で集客を狙え「水着喫茶」。

ようこそジャパリパークへ「アニマル喫茶」。

今日はあなたのために歌って踊ります――「アイドル喫茶」。

ここで装備していくかい――「RPG喫茶」。

これぞ男の夢――「ハーレム喫茶」

甘えたい人必見――「お姉ちゃん喫茶」

いや、私は甘えられたいんだ――「いもうと喫茶」

別にあなたのためじゃないんだからね――「ツンデレ喫茶」

入店したら最後、もう逃げられない――「ヤンデレ喫茶」

ねえ、私のこと好き？ 好きだよね!? ね！ ね！――「メンヘラ

喫茶」

くつくく、ここは世界の最果てなり――「中二病喫茶」

今日は放課後居残り授業――「女教師喫茶」

みんな新婚ほやほや――「人妻喫茶」

欲求不満なの「熟女喫茶」

あなたの言うこと何でも聞きます――「催眠喫茶」

何をされても反応しません――「時間停止喫茶」

わたしには好きな人が……――「ネトラレ喫茶」

お客様はオーク。――「エルフ喫茶」

辱めをうけるぐらいなら――「くつ殺せ喫茶」

現実に疲れた方へ――「異世界転生喫茶」。

誰もお客さまには敵わない――「俺TUEEE喫茶」

誰も働きません。オールセルフ「ニート喫茶」

カフェインとってないの？ 生産性あがないよ？――「意識が高

い系喫茶店」

と、などなど。

「……もう、普通にコスプレ喫茶でいいんじゃないやありません？……」

「……そうだね、うちのクラスには綺麗な人が多いし、お客さん集まるよ、きつと」

「……じゃあ、そうするか。……みんなもそれでいいな」

頭を使いすぎ、疲労困憊のクラスメイトたちは「ういゝ」と力なく返事した。

紆余曲折あって、ようやく（というか結局）一年一組の出し物は『コスプレ喫茶』に決定した。

「じゃあ、次に準備の役割を決めるぞ。まずは衣装班だな」

「それだったら、デユノアさんがいいんじゃないかな。おしやれだし、センスいいし」

デユノアさんが「僕？」と自分を指す。それから細い指をあげに充てて考える。

「衣装のあてがないこともないし、いいよ」

「じゃあ、頼む。——次は料理班だな」

コスプレが主とはいえ、喫茶店ならランチを提供できて当たり前だ。

そのメニューも考えないといけない。この役目に一番ダメな人が手を挙げた。

「でしたら、わたくしが腕前を——」

「それは俺がやろう！ はい、決定な！ 異論は認めない！」

一夏がすさまじい速さで立候補し、そして強行決定する。賢明な判断だ。

セシリアの手料理は、NBCに相当する兵器なのである。そんなものを店に出した日には、食品衛生が悪いと営業停止にされるどころか、化学兵器禁止機関^Wの査察が入りかねない。

たとえば、セシリアが可愛く「ぶくー」とすねたとしても、これだけは譲れなかった。

「そう怒るな、セシリア。ほら、俺ごう見えて料理うまいだろ？」

「確かに先月ごちそうになったカルボナーラは美味しかったですけれ

ど。でも、わたくし、料理の腕前、あげましたのよ」

「あがったのかッ!？」

「なんてこった! 死人が増える!」

「味見をしたメイドなど、パワーアップしたその味わいに打ち震えておりましたわ」

「それ痙攣じゃないかなあ」

ともかく、殺傷能力があがったとなつては、ますます彼女を厨房に入れるわけにはいかない。

「ま、なんだ。腕を振る舞うのは別の機会にしてだな。セシリアには店の内装、頼めないか」

「そうですね。セシリアはインテリアに詳しいですからね。セシリアのセンスで店をコーディネートしてもらえたら、きつと繁盛間違いなしですよ」

店から死者を出さないためにも、示し合わせたように私と一夏が言う。

いかにもあざとい誘導だったけど、セシリアは案外すんなりと了承した。

「それは、そうかもしれないですね。なんせ、わたくしは女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコット家の人間ですもの。インテリアについて一目置かれておりますし。そこまでおっしゃるなら、頼まれてあげてもよろしくつてよ」

と、手の甲で髪をはじくセシリア。ちよろい。

「よし、じゃあ最後にフロアマナージャー、決めるぞ」

店を円滑に回すには、現場を把握し、指示できるリーダー的な役職が必要だ。とりわけ、トラブルやクレームが発生したさいには、こういった役職が必要になる。それに名乗りを上げたのはラウラだった。「その役目、私に任してくれないか? こうみえても、私は隊を率いている」

確かにラウラは特殊部隊の隊長だし、指揮する能力に問題はないだろう。

それに、あのラウラが積極的に学園行事に関わろうとしているの

だ。ずっと「友達をつくれ」と言ってきた私としては、彼女の意気込みを無下にはしたくなかった。これで未だ浮きがちなラウラが高校デビューできたら、私としても嬉しい。

「いいんじゃないですか。私がいいと思いますよ」

「そうだな。じゃあ、当日のフロアマネイジメントはラウラに任せるか」

「了解した」

と、敬礼するラウラ。

その後、接客班と厨房班、内装係、衣装係、そして会計係の代表が決められた

代表責任者 織斑一夏 副代表 アリス・リデル

接客担当責任者 ラウラ、ボーデヴィツヒ（経験があり、統率力があるため任命）

厨房担当責任者 織斑一夏（実はクラスで一番の料理の腕前）

内装担当責任者 セシリア・オルコット（インテリアに詳しいため）

衣装担当責任者 シヤルロット・デュノア（オシヤレだから）

経理担当責任者 篠ノ之箒（実はそろばん一級）

「よし、じゃあ今日から、その代表の許で準備に取り掛かってくれ」
『ハッイ』

第68話 準備と憂鬱な彼女

放課後。文化祭が近づき、学園内はその準備で慌ただしい雰囲気包まれていた。機材や材料の搬入、設備の建設を業者に依頼したクラスもあって、校内を様々な人や物が行き交っている。

そんな人たちとすれ違いながら、私は衣装班の進捗具合を確かめべく多目的室に向かっていた。

「失礼します」

多目的室にやってくると、10人ほどのクラスメイトが衣装のチェックに勤しんでいた。相川さん、谷本さん、中には接客担当のラウラもいて、ラップトップPCのまえで腕を組みながら、「サービス内容と接客について」考えていた。その表情は真剣そのもので、熱さえ伝わってくる。

「ずいぶんと熱が入っていますね、ラウラ」

「む、アリスか。——今回の出し物、ぜひ成功させたくてな。一学期はクラスに迷惑をかけたからな」

と、また真剣な面持ちでクレームガイドラインの制作に専念する。孤高だったあのラウラがクラスメイトを慮って頭を悩ましている。転入時のラウラなら、きつと「くだらん」と一蹴していただろうに。ラウラの成長に感動を覚えた私は、彼女の頭を「よしよし」と撫でた。

「む？ どうした、いきなり」

「え、いえ、なんとなく」

「？——よくわからんが、いまは忙しい。構ってほしいなら、あとにしてくれ」

けっしてそういうつもりじゃないのだけど、私は「わかりました」と笑った。

それから、なんとなく傍らに積まれた資料が気になり、手に取る。

（『SASに学ぶ民間軍事作戦』……？）

SASとはイギリスの特殊部隊のことだ。他にも『自衛隊、彼の地を往くく自衛隊はなぜ世界から感謝されるのか』『グリーンベレー』

の作戦』など、どう見ても接客とは関係のない書物ばかりが、ラウラのそばに積まれていた。

「あの、ラウラ、これは？」

「接客を学ぶため用意した書物だ。特に自衛隊の書物は大変参考になったぞ？ 黒ウサギ隊の基本戦術は強襲だからな。民事作戦は管轄外なのだ」

民事作戦とは、現地人と信頼を築く作戦のことだ。確かに「相手の心ハーツ&マインドを掴む」という意味では、接客に通ずる点はあるけれど、はたして民間作戦のノウハウが接客に活かるのでしょうか……。

（大丈夫でしょうか……）

ラウラの努力が空回りしないか。心配していると、岸本さんと相川さんがやってきた。

「あ、リデルさん、ちょうどいいところに」

「どうしました？」

「コスプレに使う衣装のラインナップができたから確認してもらおうと思って」

「どれどれ」

私は相川さんと共に用意された衣装スペースへ移動する。そこにはさまざまな種類の衣装が掛けられていた。数は全部で50着ぐらい。これを全てレンタルしたとなれば、さぞかし代金は高くつきそうだが。

「あの、予算の方は大丈夫ですか？ オーバーしてませんか？」

衣装はコスプレ喫茶の肝だ。豊富に越したことは無い。でも、装飾のための内装費や提供する料理の材料費、その他もろもろ。いろんな箇所予算を振らないといけないので、衣装ばかりにお金をかけられない。

「大丈夫だよ。実は如月さんって人が無料で貸してくれたんだ」

如月さん。以前、私たちがアルバイトしたメイド喫茶の店長だ。

話の続きを聞けば、衣装担当であるデユノアさんが如月あかねさんに衣装の相談をしたところ、無料で貸し出してくれることになったそう。曰く「あなたたちのためなら、喜んで協力するわ」とのことら

しく、わざわざ本社に連絡を入れ、いろいろな衣装を取り寄せてくれたらしい。

「——にしても、ずいぶんと多種多彩な」

定番であるメイド服を始め、巫女服やバニーガール。果てにはビキニアーマーなんて衣装まであった。改めて見て回るとホントにいろいろな衣装がそろっている。

「よかったら、試着してみる?」

「いえ、いいです」

キラ♥と相川さんの瞳が悪戯に揺れたので、即答で断る。

クラスメイトがそんな様子をみせるときは、限って私の身によくないことが起きる。

「そっか。——あ、ノド渴いていない?」

ん? なんでしょうか、急に。

「いえ、とくには」

「じゃあ、オレンジジュース持つてくるね」

いらなと言っているのに、ジュースを取りに行く相川さん。

ジュースを手に戻ってきた相川さんに、私はイヤな予感がした。

「はい、ジュース——あ、手がすべっちゃった」

思った通り、相川さんがわざとらしくオレンジジュースを私に引っかけようとする。

予想できていた私は、ひよいとかわした。が——

「スキを生じぬ二段構え!」

谷本さんが横から水を私にひっかけてきた。

「……………」

ぽたぽたと水を滴らせる私の前でふたりは「いえ〜い」とハイタッチをかます。

「ごめんね、ついが手がすべっちゃった」

「言います!?! ハイタッチしておいて、それ言います!?!」

誰がどう見たって故意なのに、白を切ろうとする谷本さんに私は怒鳴った。

だが、谷本さんはまったく気にせず腕を組む。

「このままじゃ、風邪をひくよ。着替えた方がいいって」

「そうだね。——おお、こんなところに丁度バニーガールの衣装があるよ」

「……………」

ここまで潔く三文芝居を見せられたら、抗議する気も失せてきた。どうしてそこまでして私にバニーガールの衣装を着せたいかわからないが、なんにせよ、着替えなど持ってきてないし、このあと内装班や料理班も視察して回らないといけない。濡れたままではいられなかった。

「わかりましたよ、着ればいいんでしょ……」

私はしぶしぶ制服を脱ぎ、バニーガールの衣装に着替える。ウサ耳のカチューシャに網タイツ。黒色のボディースーツのおしり部分にはモコつとした尾がついている。

露出は多くないけど、いざ着替えてみると恥ずかしい衣装だ。それに股間の部分がきつくて、もぞもぞする。

「さすがリデルさん。スタイルがいいから何を着ても似合うね。——ほら」

相川さんがかざした姿見に自分の背面を写す。バニーというだけあって、おしりの部分にモコつとした尾がついている。これはなんだから可愛い。

「実はこれには仕掛けがあつてね」

と、相川さんが私のおしりについた尾っぽをぎゅいぐんと引っ張る。それを放すと、ゴムぱつちんの要領で戻ってきた尾っぽが、私の骨盤をぱちんツと叩いた。

「あん♡」

おしりに未知の快感が走り、私はその場で崩れ落ちた。

な、なんですか。今の衝撃は……。すごく恥ずかしい声がでちゃったんですが。

「どう、おもしろいでしょ?」

快感の余韻抜けきらない私は、無言で首を横に振った。

やられた方は全然おもしろくない。変な声が出て恥ずかしい思い

をするだけだ。

「この衣装もコスプレのレパトリーに加えようと思うんだけど、どうかな」

「却下です！」

私は即答した。ただのバニーガール衣装ならともかく、こんなイタズラ機能がついていたら、いかがわしいお店と間違えられてしまう。あくまで私たちの催し物は喫茶店なのだ。

「このバニーガール衣装は無しの方向で。封印してください」

「そっかー。じゃあ、仕舞うまえに、もう一回だけ」

「え？」

私は自分のおしりを守るように一歩たじろぐ。もう一度、あの得体の知れない快感を味あわらなければならぬと思うと、ぞっとした。

危機を感じた私は思わず逃げ出すが、すつかり腰が砕けていて四つん這いでしか動けない。あつという間に追いつかれた私のおしりに、誰かがの魔の手、まさに魔の手が伸びる。

「じゃあ、いきまゝす」

「やめ——ッ」

その後、5分に亘り、多目的室に私の嬌声がこだまし続けた。



「ひ、酷い目に会いました……」

バニーガールのしつぽで弄ばれた私は、モツプを杖代わりにして次の視察場所に向かっていった。バニーガールがモツプについて歩く姿は、周囲の視線を集めていたけど、今の私には気に掛けるだけの気力がなかった。

「む、アリス、どうしたんだ？」

私がへっぴり腰で次の視察場所に向かっていく途中、ばったり出くわした生徒は箒だ。

命かながら撤退してきた敗残兵みたいな私を見て、箒は目を丸くし

た。

「なんだ、その格好」

「いえ、気にしないでください」

「なら気にしないが。そうだ。実はアリスに見てほしいものがあるんだ」

箒が取り出したのは何かの明細書だった。

「ウェッジウッド、ティーカップ&ソーサーセット？」

ウェッジウッドは英国の陶器ブランドだ。私の知識が正しければ英国王室でも使われる高級品だったはず。他にも高級ブランドの名前が書かれた明細書がたくさん。その総額は30万近い。

領収書の金額を見て、私は目を瞬かせた。

「なんですか、これ」

「セシリアが寄こした領収書だ」

会計を担っている箒は、眉間をひそめ、

「このままだと、予算が全部食器代に消えてしまう。そこで注意したのだが、頑なに拒まれてな。それどころか、私に『裏帳簿をつける』と言ってくる始末だ」

「そこで私に相談を？」

「うむ、セシリアは私のいうことなんて聞かないが、アリスなら耳を傾けてくれるだろう。そこで『もつと費用を抑えてくれ』と説得してほしいのだ」

「わかりました。セシリアの方には私から言っておきます」

「すまない。たのむ」

私は領収書を受け取って、箒といったん別れる。その足でセシリアがいる教室へ向かった。

バシユツと開いた教室の自動ドアを潜ると、セシリアはテーブルクロスをチエックしているところだった。

「セシリア、ちよつといいですか」

「あらあらアリス、どうなさったの、その格好」

依然バニーガールの姿をしている私を見て、セシリアが楽しそうに笑う。

「うふふ、可愛らしいですね。もしや、わたくしにそれを見せに？」
「いえ、違います。用件はこれです」

ティーセットの明細書をセシリアのテーブルの前にどんと出す。
「食器類だけで、30万なんてかかりすぎです。認められません。食器は百均で十分です」

「ひやつきんとはなんですか？」

「ジャパニーズポンドショップです」

「それなら知っておりますわ。でも、その手の商品は安っぽくて使う気になれませんの」

「確かに安っぽくはありますけど……」

「そんな品でもてなしては、お客はさぞ幻滅されることでしょう。それにまがりなりにもわたくしたちが経営するのは喫茶店。お客に優雅なティータイムを提供するサービスですわ。お客に満足してもらうには、内装や食器類は徹底的にこだわるべきなのです」
「そうでしょうか……」

経営なんて専門外の私だけど、セシリアの言い分はなんだか違う気がする。コンセプトがぶれているというか……。でも、うまい言葉で反論できなかった私は、説得力のある人物に頼むことにした。

「あの、ちよつとケータイ貸してもらえます」

「？ かまいませんけど」

セシリアからケータイを受け取り、そのアドレス欄からローズマリーを選んで発信ボタンを押す。しばらくして、ローズマリーが通話に出た。

『セシリア、どうしました？』

「いえ、私です」

『……アリス？』

対応した言葉にはやや驚きがあったが、私は気にせず用件を告げる。

「実は――」

学園祭でコスプレ喫茶をすること。その予算をセシリアが内装と食器に注ぎ込もうして困っていること。それをローズマリーの口か

らやめるようお願い聞かせてほしいことを告げる。

「——ということなのです。このままじゃ予算が足りなくなります」

『だから、説得しろというのですね。わかりました』

どこか嬉しそうな声で了承したあと、ローズマリーは『セシリアと代わってください』と言った。

『セシリア、話は聞きました。学園祭でコスプレ喫茶なるものを経営するそうですね』

「はい」

『なら、店のインテリアを絢爛豪華にする必要はありません。——よく考えて見なさい。コスプレと銘打った店に客は何を求めてやってくるのか。おそらく、コスプレした女の子が目的でしょう。そんな客が、王室のような優雅なティータイムを期待するでしょうか』

ローズマリーの指摘に、セシリアはぐっとうなった。

『私なら内装費用を抑え、その分を従業員の教育と、コスチュームに充てます。よいサービスを提供するには、客側の目線に立ち、何を求めているか〃を知らねばなりません。経営の基本ですよ。それを踏まえて、今一度、よく考え直してみなさい』

「はい……」

スコールから聞いた話だと、ライオンハート家はプライベートバンクを運営していて、オルコット家の財産も彼らが管理していたそう。オルコットとライオンハートは昔からそんな間柄だったから、現在はローズマリーが早くに両親を失ったセシリアの未成年後見人を務めているらしい。

ある意味で保護者ともいえる人からの諫言とあって、セシリアは素直に頷いた。

『では、アリスに代わってもらえますか』

「はいですわ」

セシリアからケータイを受け取る。

「さすがです、助かりました」

『もつと褒めてもいいのですよ』

ぴっ。私はケータイの通話ボタンをOFFにした。

「というわけです。経費削減に努めてください」

「わかりましたわ。——ところでずっとローズマリーさまからリダイアルが」

「でなくていいです」

どうせ、私と話したいだけでしようから。

私はそれだけを告げ、教室をあとにした。さて、次は一夏たち料理班の様子を見に行くでしょう。

♡

◆

♣

♠

一夏たち料理班のメニュー開発は学食の厨房を借りて行われている。普通の学校なら家庭科室なる部屋があるらしいが、IS学園にはない。そもそもIS学園のカリキュラムに『家庭科』という科目が存在しないのだ。

というわけで、私が学食の厨房を訪れると、一夏を始めとしたクラスメイト達がメニューの開発に勤しんでいた。

「調子はどうです」

顔を出した私に、料理班の責任者である一夏が泡だて器を上げた。

「お、アリス。——ってどうしたんだ、その格好」

やっぱり、気になりますか、私のバニーガール姿。

「実はカクカクシカジカで、はにゃくんなのです」

酷い目に遭った経緯を語ると、一夏は「くそっ」と私から顔を逸らした。

あの、「美味しいところ逃した!」みたいな顔やめてくれませんか？

「それよりも、メニュー開発はどうですか?」

「ん、ああ、こんな感じだ。試食してみてくださいるか」

一夏が皿に乗ったオムレツを差し出す。ふっくらと焼きあがっているその上には、ケチャップで☆が描いてある。私はどれどれと、スプーンを手に取り、オムレツを頬張った。中の半熟具合がほどよく、口の中にまるやかな味わいが広がっていく。間違いなくおいしかった。

た。

「うん、これでいきましよう」

私は空いた手で採用のOKサインを出した。

「では、みんなが同じように作れるよう工程表を作成してください」
「わかった」

一夏は使った材料の分量を確認しながら、出したメモ帳に行程を記帳していく。

私はその様子を眺めながら、残りのオムレツを頬張った。

「にしても、ほんと、一夏って料理がうまいですね」

「そういうおまえは料理ヘタそうだよな。食べてる印象ばかりで、作っている印象がない」

「うっ」

一夏の一言がぐざりと心に刺さる。

事実、私は料理ができない。作れるものなんて、精々インスタント品ぐらいのものだ。

「い、いいんですよ、料理なんてできなくても。将来、料理が上手な旦那様を貰うんですから」

と、強がって口先を尖らせたら、

《それはだーりんを婿にするという婉曲表現ですか？》

＜ホワイトクイン＞のガントレットが言った。私はオムレツで咽る。一夏も一夏で、走らせていたボールペンで急にミミズ文字を描き始める。動揺しているらしい。

《だーりん、チャンスです。もつと料理上手なところをアピールしましょう》

「う、うっせー、——ほ、ほら、簡単だが行程を書いたぞ！ ために作ってみてくれ！ お前がうまく作れたなら他の子もうまくできるはずだから！」

「あ、はい」

顔を逸らしながら渡されたメモを手に取り、私はオムライスの調理に取り掛かった。メモ帳どおり、ボールに卵を割って泡だて器でかきまぜる。ただ黙々と。その間、＜ホワイトクイン＞が言った一言の所

為で、なんかすごく気まずい雰囲気だった。一夏も私と目を合わせようとしなない。

「あ、あのさっきの言葉ですけど、変に意識しないでくださいね」

決して一夏を指して言ったわけじゃなく、将来的な願望を口にしただけなのだ。変に意識されると、あとあと気まずくてしかたないので、はつきりとそう言っていく。

「お、おう。——あ、そこで牛乳を加えるんだ。大きじ3杯な」

「あ、わかりました」

「よし。混ぜ終えたら、フライパンを温めてバターを敷く」

私は言われた通り、過熱したフライパンにバターを溶かす。そこに溶いた卵を半分だけ流す。熱された卵はすぐに固まり出した。私は慌ててアーモンド形にしようとするが、うまく形になつてくれない。テンパつてぐちゃぐちゃこねくり回している内に、オムレツがどんどんスクランブルエッグになつていく。

見るも無残な様相を呈すオムレツに、私は半べそかいた。

「一夏、緊急事態です、私のオムレツが……」

「あはは、おまえホント料理へたくそだな。ちゃんとメモしろよ。こうするんだ」

と、一夏が私の背後に回り込み、フライパンの柄を握る私の手に自分の手を重ね、柄先をとんとんと叩く。すると、摩訶不思議。スクランブルエッグがオムライスへ変身していった。

でも、私は感心できる状態じゃなかった。——というのも、

(……ち、近いです)

一夏が私に身体を密着させていたから。一夏がフライパンをとんとんするたび、私の心臓もとんとん跳ねる、跳ねる。それに今はバニーガールの姿だから、背後から覗きこまれると、スカスカな胸元が丸見えなのだ。正直「見えないか」で、オムレツどころじゃなかった。

《さりげなく自分を意識させる話術といい、お色気責めといい、アリスさまは策士です》

《のー、のー、ハニーは天然なだけ》

〈白式〉と〈赤騎士〉の間で、そんなデータ通信が行われているなど露知らず、私のオムレツは完成した。出だしこそグツチャグツチャのスクランブルエッグになりかけたが、最終的には、見事なアーモンド形のオムレツに仕上がった。

「よし、なんとかあったな。——つて、どうした。心臓に手を当てて」「い、いえ、ちよつと動悸が……だ、大丈夫です」

「そうか。じゃあ、あとは仕上げだ。ほら、好きなもの書け」

と、一夏が私にケチャップを渡す。

「じゃあ、100点、と」

「自分に甘いやつめ。——とはいえ、見かけは合格点だな。問題は味だ」

一夏はスプーンを取って、私が作ったオムレツをひとくちふくむ。

「お」

「どうです?」

「さすが俺が考案したレシピだ。へっぽご料理人でもここまでうまくできるとは」

「……………」

まったく誉めようとしなない一夏に、私は半眼を向けた。

そりゃね、大いに手伝ってもらいましたが、私だって頑張ったんですよ?」

「なんだ、その顔、さては、褒めてほしいのか?」

「べつに〜」

実はそうだったりしたが、私はすねてぶいっとよそを向いた。

その私を一夏がやたらニタニタ見てくる。でも、一夏は最後までおどけたまま、私のオムレツを誉めることはなかった。



料理班の進捗を確認したあと、私は夕焼け空で染まる廊下を、ク

リップボードを手に歩いていた。そのクリップボードに視察した班の進捗を記していく。

「大まかなところは確認できましたね」

衣装のレパトリ、料理班のメニュー。概ね準備は問題なく進んでいる。セシリア率いる内装班も「検討し直す」と言ってくれたから、準備費用も予算以内にどうにか収まりそうだった。むしろ、衣装費が浮いたことで、予算が余り気味でもある。

（万一に備えての補正予算でも組みましようか。——ん？）

私が浮いた予算の使い道について検討したときだ。正面からたくさんのダンボールを抱えた生徒がやってきた。えっちらほっちら歩く足取りは覚束なく、今にもダンボールの山を取りこぼしそうだと、思った矢先、ダンボールが大きく傾いた。私は慌てて支えに入る。「大丈夫ですか？」

声をかけると、聞き覚えのある声が帰ってきた。

「あ、リデルさんですか？」

声の主はのほほんさんのお姉さんで、〈生徒会〉の副会長でもある虚さんだった。

「すみません、助かりました」

「いえいえ。ところで何故こんなものを？」

ダンボールの中に入っていたのは弾薬だった。

それもISに使う弾薬ではなく、散弾銃に使うショットシェルが詰まっている。

「9月に学園祭がありますから。そのために会長が取り寄せたのです」

「ああ、なるほど」

学園祭では学園が一般開放されるため、外部の人間が大勢やってくるそう。その時、学園の自警団である〈生徒会〉も警備の一端を担う事になっている。虚さんが持っている弾薬——非殺傷用のゴムスタン弾は、その備えか。

「それに今年はISエキスポの年でもありますから」

ISエキスポ。各国のIS企業がブースを開き、自社の製品などを

紹介するイベントのことだ。今年はその会場にIS学園のアリーナが貸し出されるらしい。そのことから例年より来校者が増えると予想されるため、〈生徒会〉もその準備に追われているのだろう。

事情を知った私は、「手伝いましょうか」と尋ねたが、

「いいえ、大丈夫ですよ。——それより、彼女を気遣ってあげてください」

虚さんは背後に視線をやった。その先には一人の女子生徒が窓辺で黄昏ていた。

デュノアさんだ。

デュノアさんは憂鬱そうな面持ちで、外の景色を眺めていた。文化祭という楽しいイベントを控えているのに、なんとも冴えない表情をしている。彼女が何か思い悩んでいることは、傍目から見ても一目瞭然だった。

虚さんの言葉は、「自分はいいから、彼女の悩みを聞いてやれ」という意味なのだろう。

「では、私はこれで」

そう告げ、虚さんはえっちらほっちらダンボールを手に生徒会室へ歩いていく。

私は虚さんに言われたとおり、デュノアさんの許に歩み寄った。

「デュノアさん？」

「あ、アリス。——ふふ、どうしたの、その恰好」

「ちよつと、いろいろありました。それより悩み事ですか？」

「よければ、このバニーに話すぴよん」とおどけながら、デュノアさんの隣に立つ。

デュノアさんは「じゃあ、聞いてもらおうかな」と笑い、アリーナの方角に向き直った。

「実はね、ISエキスポにデュノア社もブースを出すことになつて」デュノア社もブースを出す。そのブースへ自分に男装を命じた社長が来るかもしれない。

それがデュノアさんの悩みの種であり、憂いの素か。

実はデュノアさんはデュノア社の社長——つまり、父親と折り合い

をつけられていない。何の音沙汰もなく、あまりにも穏やかな日々が続いていたから忘れてしまっていたけど、彼女の問題は先延ばしにされただけで、何も解決していないのだ。

「夏休み、お父さんとは？」

「デュノア社には顔を出したけど、あの人には会ってないんだ」

「そうですか……」

私はしばらく黙考してから、思い切ったことを言った。

「ねえ、デュノアさん、父親と話し合ってみませんか」

デュノア社の社長は、デュノアさんに男装を命じた。それに不快感があり、同情心や正義感から彼女に救いの手を差し伸べたけれど、この二カ月で、私は父親がただのロクデナシだと思えなくなっていた。なぜならば、＜ラファール・リヴァイヴ＞の部品や弾薬はちゃんと送られてきているのだ。7月にはパッケージも運ばれてきている。

もちろん、道具にしか思っていない可能性もある。だからこそ、その父親と一度ちゃんと話し合って、互いの本心を知ることが大事だと思う。——気持ちのすれ違いで、別たれてしまった家族を、私は知っているから。

「そう、だよね……。いつまでも中途半端のままじゃいられない。僕も前に進まない」と

「大丈夫。私がついていきます。言ったでしょ。あなたのジャンヌダルクになると。たとえどんな現実が待ち受けていようとも、私はデュノアさんの味方ですから」

私はデュノアさんの肩を引き寄せ、彼女の首にチェーンをつけたメダルをかけた。

これは身に着けた者を幸せにする「幸運のメダリオ」だ。それにこの3か月。何も対策を打ってこなかったわけじゃない。

「アリス、ありがとう。僕、アリスと出会えて本当によかった」

安心したのか、デュノアさんの目じりにはわずかに涙が浮かんでいた。

そんなデュノアさんの頭をぽんぽんと二回叩く。

しかし、このときの私はまだ知らなかった。事が私の予想を超えて

動いていることを。

第69話 文化祭一日目——午前

時は流れて、学園祭当日。学園祭を控えて改装された一年一組の教室はすっかりと飲食店に変貌を遂げていた。簡易ではあるが、システムキッチンが設けられ、フロアには綺麗なテーブルクロスを引いた席が12席ほど並べられている。

生まれ変わった教室の中央で、私たちは最後のミーティングを行っていた。

「みんな、準備よくがんばってくれた。おかげで無事、こうして開店に漕ぎ着けられた。でも、本当に大変なのはこれからだ。今年はISEキスポが行われることもあって、例年より来校者数が増えるらしい。事故の無いよう、心して接客にあたってくれ」

クラス代表であり、出し物の最高責任である一夏が、整列したクラスメイトに言う。

私たちを含めたクラスメイトは「はい！」と強く答えた。一夏は頷き「とまあ、固い話はこれぐらいにして」と話を切り替える。

「みんなが楽しみにしている打ち上げだが、俺とアリスでいい店を予約したから、期待してくれ」

寝耳に水の情報でクラスから「おお」という声が上がった。

「じゃあ、必ず一位を取ろう。——ミーティング終了。全員、持ち場についてくれ」

その一言でフロアマネージャーのラウラが各位に指示を飛ばす。

「まず、第一侍女小隊は、配布した奉仕^M手順^Pに従って第二次戦闘配備で待機。来客の入店次第、第一次戦闘配備だ。第二侍女小隊は二組と四組の偵察に迎え。可能ならこちらに客を誘導しろ」

『イエス、ハウスキーパー』

きびきびと敬礼し、相川さんと谷本さんが教室を出ていく。

事前にラウラが調べた情報——というか本人から聞いた話なのだけど、2組と4組も私たちと同じ飲食系の出し物らしい。ライバル店も同然なので、偵察を送って繁盛具合を探ろうというのだろう。

「ラウラさんったら、張り切っておりますわね」

と、セシリアが言った。

クラシカルなロングスカートのメイドに身を包み、胸にはパーラーメイドの缶バッジ。彼女には接客を担当してもらうことになっていゝる。なぜって、店から食中毒者を出さないためだ。

「二期は迷惑をかけたから、その詫びにクラスを一位にしたいと言っていました」

「まあ、あのラウラさんが。——では、わたくしたちもがんばらないといけませんわね」

「ええ、がんばりましょう」

力強く答えると、二名の男性客が入店してきた。それを「いらっしやいませー」と出迎える。

さあ、文化祭一日目の始まりだ。



IS学園の文化祭は、今日から二日間にわたって行われる。その二日間、立ち入り禁止であるIS学園も一般開放されるため、制服姿の生徒、私服姿の一般客、背広姿の企業人など、さまざまな客層が俺たちの喫茶店を訪れていた。おかげで多大な繁盛ぶりで、入り口には長蛇の列ができてゐる。俺たちもその対応に忙しく追われていた。「二夏、行列の客から「まだか」と苦情が殺到しているんだが、どうする？」

厨房に入ってくるなり、巫女さん姿の箒がそう言った。「どうすると言われましても、待つてもらおう他ないだろ」

と、フライパンの柄を叩きながら、オムレツの形を整える。

もともと、俺たちの喫茶店は、一人のお客に充実したサービスを提供することで、利益を出すシステムになっている。回転数を上げて利益を出す形態じゃないので、どうやったって待つてもらおうしかない。

「だが何も対応しないわけにもいかないだろ」

「大丈夫だ。この事態は想定済みだ」

と、厨房に入ってきたのは、両手に皿をもったラウラだ。

ラウラは皿をキッチンに置き、手の空いていた接客メイドの相川をこちらに呼んだ。

「相川 パラーメイド 少尉、ちよつとこい」

「何でしょう。ボーデヴィツヒ ハウス・キーパー 少佐」

「並んでいる客から不満が噴出している。そこで相川少尉にはその沈静化に当たってもらいたい」

ラウラはキッチンの戸棚を開け、クッキーのたくさん入った籠を取り出した。

「待たせている詫びとしてこれを配ってこい」

「了解しました」

相川が敬礼し、クッキーを持って踵を返す。

俺と箒は顔を合わせた。いつの間にこんな物を用意していたのだろうか。

「シャルロットに頼んで、今朝、作ってもらったのだ。食糧配布は民間作戦におけるハーツ&マインドの基本だと、この本に書いてあったからな。それを参考にさせてもらった。おまえたちも読むといい」

と箒に「自衛隊、彼の地を往くく自衛隊はなぜ世界から感謝されるのか」という本を渡す。

俺は「民間作戦」の知識が接客に活きた驚きもさることながら、事態を予測した危機管理能力とその対応能力は、さすが特殊部隊の隊長だと、心の底から感心した。

同時にクラスのためにそうまでするラウラの熱意が、クラスに伝わればいいなと思う。

「うむ、ラウラのやつ、がんばっているな」

そう言って厨房に入ってきたのは千冬姉だ。

千冬姉は、メイド服姿で給仕するラウラを見やり、堪えらずといった具合で笑いをこぼした。

「しかし、あいつのメイド姿を見るような日がこようとはな、クク」

誰よりも過去のラウラを知っている千冬姉だから、今のラウラの姿がおかしいらしい。俺はよく似合っていると思うのだが、千冬姉は湧

き上がってくる笑いを必死にこらえていた。

「そう笑ってやるなって。がんばってんだから」

特に千冬姉に笑われたら、本人はきつといたたまれなくなる。

「すまない、すまない。昔の刃物のようなあいつを知っていると。ま、滅多に見られんあいつのコスプレを乐しませてもらおうとしよう」
「そういう千冬姉はコスプレしないのか？」

クラスは先生も含めてクラスだ。

先生も参加してこそ、初めてクラスの出し物として成立するじゃないかろうか。

「何を言う。しているだろ。女教師の」

「それはコスプレじゃなくて本業だろ！」

「なんだ、ムキになって。そんなに姉のコスプレがみたいのか？」

「違うよ。千冬姉は知名度高いし、何かしてくれたら集客につながるかな、と」

なんせ、千冬姉はヘブリュンヒルデだ。21世紀の輝く女性100人に選ばれたこともある。その千冬姉がコスプレしてくれたら、すごい宣伝効果になるんじゃないかな、と。

「一応、ウエディングドレス、とかあるけど……」

俺は恐る恐る隅にかけられた豪華なドレスを指さす。

「馬鹿者、誰が着るか。——さては貴様、あれを着せて私の心変わりを狙っているな？」
「ちっ」

俺は顔をそむけて舌打ちした。セシリアのいうウエディングマジックとやらにかかってくれればと思ったが、そう甘くはなかったか。つーか、千冬姉は結婚願望なさすぎなんだよなあ。

「なに、おまえが一人前になったら、見合いでもなんでもしてやる。いらん気を回すな」

そうは言うけど、俺が成人する頃には、千冬姉、30手前のアラサーだぜ？ おんなって、綺麗でも婚期を逃すと本当に結婚できないって言うから、心配なんだよ。

「それより、おまえは私の心配より自分の心配をしたらどうだ？——」

先ほどりデルとすれ違ったら、知人を迎えにいくと言っていたぞ。もしかししたら、ボーフレンドを迎えに行つたのかもしれない」

千冬姉のいじわるに、俺の視線が泳ぐ。

「そ、そりゃ、アリスは可愛いいけどさ」

でも、あのアリスだぞ。あいつに限ってボーイフレンドなんて——そんなことを考えていると、件のアリスが誰かと入ってきた。

入ってきたのは、二頭身のずんぐりむつくとした着ぐるみの二人組だ。片方は男の子で、もう片方は女の子。どちらも「僕の夏〇み」に登場しそうなゆるいデザインで、なんとなく俺と千冬姉を二等身デフォルメしたようなキャラクターだ。

何かのイベントかと客がざわつくが、そうではない。

「アリス、その人たちは？」

アリスはババンと派手にゆるきやらを紹介した。

「紹介します。おともだちのデウスさんと、マキナちゃんです」

アリスの紹介でふたりのゆるいキャラクターは短い両手をぶんぶん振り回した。

『はじめまして、デウスだよ』

『マキナだよ』

俺と千冬姉を始め、箒やセシリア、シャルロット、ラウラまでアリスが連れてきたお客にぼか〜んとする。どう対応していいのか、みんな困っている様子だ。

「おい、アリス。何者だ、この人たち……」

「聞いてなかったんですか。私のおともだちですよ。デウスさんとマキナちゃんは機械の惑星からやってきた、その星の王子様とお姫様なんですよ。『ぜひIS学園の文化祭を見て回りたい』と言うので、ローリーナが作った——ごほん、ともかく案内してきましたのです。ね、デウスくん、マキナちゃん」

『そうだよ、みんなよろしく』

『よろしくね』

まるで幼児番組のように、ぴよんぴよんと飛び跳ねて愛想を振りまくデウスくとマキナちゃん。名前からして、デウス・エクス・マキ

ナ」の人なのだろうけど、なんでわざわざこんな格好を……。

「なあ、中に誰が入っているんだ？」

「は？ 何を言っているんですか？ 中に誰もいませんよ？」

「いや、どう見たって——」

「いませんよ？」

「お、おう」

ぐわった瞳孔を開き、有無を言わせない気迫を発するアリスに俺は腰が引ける。

これ以上の追及は俺の身に危害が及びそうだった。この世には知らなくていいこともある。

「さあ、みなさん、いいですか。二人は機械の星からやってきた王子様とお姫様なんです。粗相があつたら、国際問題どころか宇宙問題ですからね。失礼のないようにしてください」

何か腑に落ちないものを感じるが、お客だというなら相応の対応を取るべきだろう。

というわけで、俺たちはこのゆるキャラを持って成すことになった。

なぞの来客者、デウスくんとマキナちゃん。この二人の接客役選ばれたのは、俺と——千冬姉だった。「なぜ千冬姉？」という疑問を抱えつつも、俺はマキナちゃんの隣に腰を据えた（千冬姉本人は嫌がったがラウラに「どうか」と頼まれた）。

「えっと、よろしくお願いします」

『よろしくだよ、マキナはね織斑一夏くんに会えて、とつてもうれしいよ。えへへ』

とマキナちゃんがニコニコしながら、コミカルに大きな体をゆらす。

キャラ設定なのか、はたまた中の人の素なのか。ともかくマキナちゃんはすこぶる機嫌がよさそうだ。

そのとなりでは、デウスくんがなぜか千冬姉を「高い高い」をしていた。ずいぶんと千冬姉を子ども扱いだ。千冬姉も千冬姉でなんだから恥ずかしそうだし。まあ、デウスくんの接客は千冬姉に任せて、俺

は自己紹介から始めた。

「えっと、初めまして、織斑一夏です」

『知ってるよ、マキナは織斑一夏くんのこと、すごく知ってる。初めて歩いた日も、乳離れが遅かったことも。働く車は救急車が好きで、ピーマン見るとデストロイしちゃうぐらい嫌いなことも、みくんな、知ってるよ』

え、なんで、そんなことまで知ってたんだ……

確かに昔はピーマンが嫌いで、食卓に出ると「ここから出ていけ」と追い出していたが。

『他にもマキナはアリスちゃんから、いっぱい、君のこと聞いたよ』

アリスが俺のことを？ 一体アリスは俺について何を話したのだろうか。

「えっと、アリスは俺のことをなんて？」

『女の子にモテモテなんだって。きやつきやつ、うふふなんでしょ？』

マキナちゃんが茶化すと、箸がコップを倒し、セシリアが盆を手で躍らせた。ふたりして頬が赤い。なぜ、おまえらが反応する……。

『でも、マキナは心配なんだ。女性関係のトラブルには気を付けるんだよ？』

「はあ……確かによく女難の相が出ているって言われますけど」

しかも、占ってくれた占い師からは『代金はいらさないから強く生きろ』とまで言われた。

「まあ気をつけます」と答えた俺に、マキナちゃんはなおも「食事はバランスよく」だの「勉強は大事だ」だの、「金銭はトラブルの元」だの、私生活についてとやかく言ってくる。そのたび、俺は「はあ」とか「へえ」とか生返事を返した。

つーか、なぜゆるキャラに身の回りの心配をされているのだろうか。こいつは俺のお袋か。

いい加減、マキナちゃんの小言が鬱陶しくなってきた俺は、話をぶった切った。

「えっと、うちではこのようなメニューを取り扱っているんですが、ひ

とつどうですか？」

飯を食える仕様なのか判らないが、メニュー表を渡してみる。

マキナちゃんは「じゃあ、何か頼もうかな」と喜んで選び始めた。た、食べられるんだ……。

『じゃあ、マキナはこの『メイドさんの手作りオムレツ』がいいな！』

一夏くんが作ってくれるんでしょ！』

そこへ、これまたなぜか千冬姉を肩車したデウスくんがやってきて言った。

『あ、いいな、いいな！ デウスは千冬さんのオムレツ食べたいよ！』
何がそんなにうれしいのか、ハイテンションで『これ！これ！』と注文する二人。

それについていけない俺たちは『はあ、かしこまりました……』と重い溜息をつき、厨房に入った。

その厨房にて――

「千冬姉、ちゃんとできる？」

「あ、ああ」

といつても、生まれてこのかた料理なんてしたことのない千冬姉の手つきはおぼつかない。

案の定、力みすぎで卵の殻を入れる。フライパンが熱くなるまえから卵を流す。そしてお約束のようにスクランブルエッグにする始末。正直。アリスよりひどい腕前だ。

しかし、料理の出来上がりも然ることながら、俺はしきりにこぼしている千冬姉の愚痴が気になっていた。「何を考えているんだ」とか「バカなのか」とか。

「なあ、千冬姉」

「なんだ、一夏」

「焦げてるんだけど……」

「!？」

「はい、お待ちいたしました」

俺はできあがったオムレツをテーブルに置く。そしてケチャップを取って「何を書きましようか」と尋ねた。この『メイドさんの手作りオムレツ』はサービスとしてメッセージを書いてもらえるのだ。

『いつもありがとう』って書いてくれると、マキナはうれしいな。『え？——まあ、デウス・エクス・マキナの人には、世話になったしな。』

「では、いつもありがとう」っと。これでよろしいですか？」

『きゃふー、マキナはこれであと10年は余裕でがんばれるよ！』

「そ、そうですか」

感激を表すように両手をばたつかせるマキナちゃんを、俺は引き気味に見る。

このひと、俺のやることなすこと、全部に興奮してんなあ……何がそうさせるのやら。

そんなハイテンション・マキナちゃんの隣では、デウスくんが自分千冬姉に出されたオムレツと、マキナちゃんおれに出されたオムレツをしきりに見比べていた。ま、千冬姉のオムレツはオムレツの名を借りたスクランブルエッグだから。ここが普通の飲食店なら『店長を呼べ！』のレベルだ。

『こ、これスクランブルエッグだよね？』

どん ↑ 千冬姉がフォークをテーブルに突き立てる音。

「オムレツだ」

『う、うん、そだね。オムレツだね。どこからどう見ても』

迫力でオムレツと認めさせる千冬姉に、デウスくんは戦々恐々の様子だった。

そんな一連の様子を見て、マキナちゃんがむふふと笑う。

「千冬ちゃんは、昔から家庭科が苦手だったからね」それから急に神妙な面持ちになって『ちゃんと花嫁修業もするんだよ？ あ、それと、弟は嫁入り道具に入らないからね。嫁ぎ先に持っていつちやダメだよ？』

なぜか俺はそれがマキナちゃんの心からの声に聞こえた。

千冬姉は額に大きな怒りマークを浮かべ、ケチャップをひったくる

なり、ぶりゆぶりゆと、スクランブルエッグの上に文字を書いた。

『黙って食え。さもなくば、叩き出す』

赤いケチャップで書かれた文字は、サイコホラーによくある「殺人現場に残された怪文章」のようだった。それに恐怖したマキナちゃんが俺に抱きつく。さすがに客を怯えさせるのは如何なものかと、フオローを入れた。

「千冬姉、もうちよつとやさしくさ……」

「ふんツ……」

「マキナちゃんもそう怯えないで。さあ、食べてください」

『う、うん。じゃあ、もうね。いただきま〜す』

ぱくつとマキナちゃんが俺の作ったオムレツを頬張る。とたん、満面の笑みを浮かべた。

『はにやー、おいしい、おいしいよ、一夏くん。マキナはこんなおいしいオムレツ、いままで食べたことないよ！ これなら毎日でも食べられるね。というか食べたいねー！』

「いや、体に悪いので毎日はやめてください。コレステロール高くなるんで」

『きやふー、一夏くんに体の心配されちゃったよ！』

そんな心配したわけじゃないのに、マキナちゃんは感極まったようすで、となりのデウスくんの肩を「いいでしよ〜」みたいにバシバシとたたく。

そのデウスくんは、すごく慎重な手つきで千冬姉のオムレツを食べていた。そして、食べるたびに目をスロットのように回転させて？マークを出す。

相当にまずいらしい。

それでも、デウスくんは文句ひとつ言わず、食べきる。かわいい顔して男気のあるキャラだ。

そしてマキナちゃんもぺろつと俺のオムレツを平らげる。

『ふう、ごちそうさま。はあ、美味しかった——じゃあ、次はどれにしようかな』

と、オムレツを完食したマキナちゃんが再びメニューを開く。まだ

居座る気らしい。

そんなとき、デウスくんが腕時計がピピピと鳴った。それを止めてぼんぼんとマキナちゃんの肩を叩く。

『マキナ、マキナ、そろそろ次の仕事だよ』

『え』

マキナちゃんがゆるキャラっぽくない声音で言った。たぶん、中の人の素の声だ。

『も、もう?』

『うん、もう』

『あ、あと10分だけ……だめ?』

マキナちゃんは別れを惜しむようにすすくと俺にすり寄り、懇願する眼差しを向ける。

よほど、帰りたくないらしい。けれど、現実是非情、とりわけ千冬姉は厳しかった。

『よし、お客様の帰りだ』

千冬姉は、この時を待っていたかのように、マキナちゃんの首根っこを掴んで出口に引っ張っていった。その様子はあたかもゴミを出しに行く主婦のようだ。マキナちゃんを完全にゴミあつかいだった。

『千冬ちゃん、今日はごみの日じゃないよ。というか、マキナはごみじゃないよ』

『知るか。さっさと出ていけ。そして二度と来るな』

掴んでいたマキナちゃんを出口に立たせ、やくぎキックで追い出す。そのあと、ひと掃除終わったかのようにパンパンと手を払った。あまりにぞんざいな扱いにマキナちゃんもさすがにオコだ。

『もおー、なんでそんなひどい扱いするのー!』

『おまえが嫌いだからに決まっているだろ。——なんだ、こんなカツコまでして! 私たちをバカにしているのか!』

いままで堪えていたものが爆発したのか、千冬姉はつい出席簿を取り出してマキナちゃんに見舞った。その衝撃でマキナちゃんから何かがぽろっと落ちる。——落ちたのは首だった。

思わぬアクシデントに、マキナちゃん本人が慌てて顔を隠す。

「ちよ、ちよつと、千冬、なんてことするの！ 取れちやつたじやないッ」

中の人の生声は思いのほか若々しかった。年齢は30ぐらいか。俺はもつとよく見ようと目を凝らした。——次の瞬間、アリスが俺の方へ勢いよく飛び掛かってきた。

「こら、一夏、見ちゃだめですッ」

そう言つて、アリスは俺の目の高さまで飛び上がり、ふとももで俺の顔を挟んだ。そして、バク転の要領で反り返り、俺の背中を床に叩きつける。見事なフランケンシュタイナを炸裂させたアリスは、俺の上に馬乗りになったまま、デウスくんと言った。

「デウスくん、いまのうちに」

『うん、アリスちゃんありがとね。——ほら、マキナ、早く行くよ』

「あ、まって、——じゃ、じゃあね。一夏くん。またくるからね」

俺が倒れている間に、マキナちゃんとデウスくんが大急ぎで店を飛び出していく。マウントを取られたままの俺はそれを見ることがさえ叶わない。結局、俺はマキナちゃんの中身を確認することができなかった。

「一夏、見てませんね？」

アリスが両手で壁ドンならぬ床ドンで訊いてくる。

グつと近づいてきた顔に、俺はしどろもどろになりながら答えた。

「お、おう。よくみえなかった」

姿は黒髪のように、年齢は三〇ぐらいに見えたが、それ以外はおぼろげだ。アリスのスカートの中を至近距離で拝まされたせいで、そちらばかり映像に残っている。ちなみに今日はピンクだった。

「ならよろしい」

と、俺から退き、手を伸ばす。

その手を借りて立ち上がったあと、俺は衣服の埃を払いながら、改めて騒動の終始を思い返した。

「一体なんだったんだ？」

アリスがパンツを見せてまで正体を隠した理由も然ることながら、なにより千冬姉が二人にすぐ苛立っていたことが気になった。そ

の千冬姉といえは「教官、一体何があつたのです」と問うラウラたちに「なんでもない。あいつを出禁指定にしておけ」と言っている。

出禁とは手厳しい。千冬姉は何であの人たちに、あそこまで辛辣だったんだろうか。

「なあ、千冬姉」

終始、カツカしてばかりだった千冬姉の様子を伺うと、無言で顔をそむけられた。相当イライラしているなこりや。でも、たぶん、心から怒っているわけじゃないのだろう。なぜって、マキナちゃんに対する扱いが束さんのそれに似ていたから。

「本当に誰が入っていたんだ？」

文化祭一日目、俺はずっとそればかり考える羽目となった。

第70話 文化祭一日目——午後

学園祭午後。昼食時のピークも過ぎ、来店者の数もようやく落ち着きつつあった。午後から先生たちの出し物、ISの航空ショーがあるため、そちらに客が集まっているのだろう。

来客が途絶えた合間を見て、私はキッチンで休憩を挟んでいた。そして賄いのサンドウィッチを頬張りながら、客が置いていったパンフを開く。生徒会が制作したそれには飲食店や展示物、演劇など計15クラスの出し物が紹介されていた。

「他のクラスも凝ってるよね」

同じく小休憩中のデュノアさんが、私の隣にパイプ椅子を広げ、腰を下ろした。

「そうですね。どれもよくできています」

飲食店や展示、演劇など。出し物はさまざまだが、どこも趣向を凝らしている。

飲食店のメニューはどれもおいしそうだし、展示はARを使った演出が凝っている。演劇に至っては演技指導の講師を招いたとパンフレットに書いてあった。どれも力の入れようがすごい。

「では、見て回ってきてはどうだ？」

「うわ」

背後からかけられた声に、思わず昼食のサンドウィッチを咽る。

「おい、大丈夫か」と背を擦ってくれたのはラウラだった。私はオレンジジュースで喉の調子を整え、

「いいのですか」

「うむ、年に一度のフェスティバルだ。見て回ってこい。シャルロットも行ってきたはどうだ？」

「僕も？——でも、僕たちが抜けたら、人手不足にならない？」

現在、私たちを含め15人の従業員で店を回している。他の生徒たちは自由行動中だ。シフト制なので、時間になれば交代してもらおうことになっている。勤務時間中に出かける場合は代役を立てないといけない。でなければ、人手不足に陥る。

「大丈夫だ、人手不足を想定して予備戦力を確保しておいた。待っている」

言うなり、ラウラはキッチンから頑丈そうなハードケースを持ってきた。上層には指紋認証らしきパネル。そこに手を置いてロックを解除すると、ボタンやらダイヤルがついた機械が現れた。そのダイヤルをいじりながら、ラウラはインカムを装着した。

「こちら、認証番号C537。ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ。応答せよ」『照合完了、通信受諾。どうなされました。ボーデヴィツヒ隊長』「事態a37が発生した。ただちに増援を要請する。クラスA装備で、一年一組の教室に部隊を派遣してくれ」『了解しました。一〇〇秒後には到着させます』『たのむ』

なんとも堅苦しい口調で、どこかと通信を終える。

私とデュノアさんが顔を見合わせていると、きつちり一〇〇秒後、自動ドアが開いた。

入ってきた人物は、メイド服に眼帯をした女性たちだった。人数は2名。その中の一人を私は知っていた。

クラリツサ・ハルフオーフ。黒ウサギ隊の副隊長だ。

その彼女ともう一人の眼帯メイドは油断ない体運びで厨房に入り、
“休め”の姿勢を取った。

「あの、これはどういうことですか？」

「人手不足を予想して部隊の者に手伝いを要請していたのだ。——V Tシステムの件や遺伝子強化素体の件が明るみに出たことで、我々の部隊も装備や人員の見直しが行われていてな」

「当面は作戦行動もないため、部隊に“暇”が出されているのです、アリス殿」

「その“暇”が出ている仲間を、予備戦力として招集したのだ。助かるぞ、クラリツサ」

「いいえ。私も学園祭に呼んでいただけで光栄です。それで隊長、状況は？」

「今からアリスとシャルロットが偵察任務に入る。その間、おまえたちには接客をしてもらいたい。事前に手渡した接客マニュアルは読

了しているな？」

「はい。ファルケル曹長も読了済みです」

「よし、では作戦にあたれ」

クラリツサさんが「了解しました」と敬礼し、厨房を去っていく。私たちは三回まばたきをして、ラウラを見た。まさか、ヘルプまで用意していたなんて。

「というわけだ。店番は私たちに任せて——」

そう得意げに笑おうとしたら、

「隊長お、このお客様、私と同じ声優のファンだそうです！」

フロアからクラリツサさんの嬉々とした声がこだましてきた。

「いちいち、そんなこと報告するなっ！」

「し、失礼しました、ママ」

ラウラはやれやれという表情を見せ、改めて私たちを見る。

「まあ、大丈夫だから、私たちに任せておまえたちは学園祭を楽しんで来い」



というわけで、偵察の名目で学園祭を回ることにした私たちは校内を歩いていった。あちらこちらに展開された宣伝用のARフォログラムで、学内はまるでホンコンの繁華街のような賑やかさだ。

「どこから見に行く？」

IS学園は一年課程が5クラス。二年課程からは、開発と整備を専攻する整備科が1クラス、操縦を専攻する実技科が4クラス設けられる。三年課程も同じ。今回の学園祭ではその全15クラスが出し物を展示している。

アンケート一位には特典が与えられるとあって、凝った催し物も多い。つついどこから見ても回ろうか目移りしてしまうが。

「そうですね。2組のクラスを見に行きませんか」

「鈴のクラスだね。僕もまだ行ってないし、行ってみようか」

敵状視察をかねて、私たちは鈴がいる店へ足を運んだ。

到着すると油の香ばしい匂いが鼻孔をついてきた。店頭には「歡迎光臨」という電光看板と食品サンプルのショーディスプレイ。龍と虎が出迎える店構えはいかにも中華的だ。

「2組は飲茶っぽいね」

「鈴が発案したんじゃないですか？」

入った店内も、やはり中華を思わせる内装で、従業員も全員がチャイナドレスだった。菱形にあいた胸元と、深く切り込みの入ったスレッド。龍の刺繍がカッコイイ衣装だ。

「歡迎降臨♪いらっしやいませ、お客様。二名ですね」

しかし、私たちを出迎えたのは、全然中国人ぽくない金髪のアメリカ人だった。

ティナ・ハルミントン。鈴のルームメイトだ。すらつと背が高く、胸も豊満で、チャイナドレスも実によく似合っていた。その彼女が私たちを席に案内してくれる。

「あなたたち、鈴と仲がいい子たちよね。呼んでこよつか？」

「ええ、じゃあ、お願いします」

「OK。——で、注文は？」

「そうですね。じゃあ杏仁豆腐を」「あ、僕もそれで」

「杏仁豆腐ふたつね」

注文を受けたハルミントンさんが金髪のポニーテールを揺らして厨房へ向かっていく。

しばらくして、杏仁豆腐を持った鈴がこちらにやってきた。

鈴もハルミントンさん同様にチャイナ服だ。ただ、こういうスレッドの入った服は身長がないと映えない。鈴の小柄で控えめな体系では……。なんとというか、ちんちくりんに見える。

「りん、どんまい」「どんまい」

「え？ 出てくるなりなんで慰められてんの、あたし？」

半眼を向けられるが、私たちはやさしい顔で見守った。

鈴は「なによ？」と言いたげな口調で、注文した杏仁豆腐をテーブルにならべる。

「ティナにお呼びだつて言われて来てみれば、あんたたちだったのね」
「一夏じゃなくてごめんね」

デュノアさんが両手を合わせて謝ると、鈴は頬を赤くした。
「ばっ、なに言ってるのよッ。——ほら、はやく食べなさい、おいしいからー!」

照れ隠しにどんどんとテーブルを叩いて私たちに食事を催促する。
私たちは「では」とスプーンで杏仁豆腐をいただくことにした。

「う〜ん、おいしい!」

甘すぎずよく冷えた杏仁豆腐は、鈴の言うとおり美味しかった。

だけど、料理がおいしいわりに、お店は繁盛していない様子だ。席もガラガラ。客も一人、二人、ぽつんと疎らにいただけで、閑古鳥が鳴いている。

「ずいぶん空いていますね」

「……あんたのところが客をさらってんでしょうが。おかげこっちはぺんぺん草が生えそうよ」

「ラウラががんばっているんだよ」

一学期は迷惑をかけたからと、新聞部の黛先輩と結託してビラを撒いたり、放送室の機材を借りて校内放送で宣伝したりと、ラウラは模擬店の成功にかなり注力している。その甲斐あって一組は繁盛しているが、隣組の二組は客をこっそり持っていかれていようだ。

「なるほど、あいつの所為でうちは閑古鳥が鳴いてんのね。——よし、嫌がらせしてやる」

「ほんと、ラウラのことになると、鈴はすぐ目くじら立てる」

「へへへ、向こうが悪いのよ、向こうが。——ほら、アリスちよつと顔かして」

鈴はケータイのカメラを起動しつつ、私に杏仁豆腐を「あ〜んして」と注文した。

「ん? はい、鈴、あ〜ん?」

「あ〜ん」

「ばしや。」

「よしっ」

「あくん」しているシーンを自撮りした鈴は、その画像に「鈴♡アリス」とファイル名を付け、ラウラのケータイに送信した。ああ、そんなことしたらラウラがまたやきもちを……

「お、返信がきつそく。きつと嫉妬に狂った乱文雑文——が!？」
画面を確認した鈴の手からケータイが落ちる。

その画面には「一夏にケーキをあくんしてもらっているラウラ」の画像が映っていた。

「あんにやろっツ！ ぶつとばしてやるっ」

がたんと椅子を倒して立ち上がった鈴は、その勢いのまま一組のクラスへ突撃していった。

壁越しに「あんだ、何のつもりよ」「それはこちらのセリフだ」と罵声の応酬が聞こえてくるが、私とデュノアさんはまったりと茶をすすった。二人の喧嘩はいつものことなのだ。

「なんだかんだあの二人、仲いいよね。……ズズズ」

「喧嘩するほど仲がいいって、いいますもんね。……ズズズ」

などと茶をすすりながら彼女の帰りを待つ。

ややして、帰ってきた鈴はなぜか千冬さんの小脇に抱えられていた。

「おい、フー。おまえんところの仔虎が乱入してきたぞ」

「む、それはすまなかった。預かろう」

鈴を預かり受けた中国代表は、くどくど5分ほど説教したあと、鈴に戻れと言った。

戻ってきた鈴はくたびれた様子だった。千冬さんと代表のお説教ダブルパンチが利いたらしい。でも、完全な自業自得なので、私は慰める代わりに適当な話題を振った。

「そういえば、鈴はキャンギャルやらないんですか？」

何もISの訓練やの新型のテストだけが代表候補生の仕事じゃない。こういう広報活動も仕事の一環だ。現にセシリアも自身のスポンサー企業で、〈ブルー・ティアーズ〉の開発元である〈ナイトソード・ブラックスミス〉社のキャンペーンガールとしてエキスポに駆り出されている。

「ん、キャンギャル？ あー、エキスポのね。まあ、それも候補生の仕事なんだろうけどね。でも、あたしクラス代表でこの店の責任者だし、こつちを優先させて貰ったのよ。春狼には悪いと思ったけど」

「春狼……」

先月イタリアで、私たちを襲撃した〈亡国機業〉の幹部だ。

「劉春狼って、確か〈上海飛甲装工業公司〉の代表取締役だったよね」

「そうそう、〈甲龍〉の開発元のね。んで、あたしのスポンサー」

「へえ、そうなんだ。どんな人なの？」

「そうね。物腰は軽いし、女好きだし、悪い噂も多いけど、結構いやつよ。〈甲龍〉のチューンで無理を言っても、気前よく引き受けてくれるし、おこづかいいっぱいくれるしね」

「気に入られているんだね」

そういえば、〈シユヴァルツエア・レーゲン〉に襲撃されたとき、スコールは言っていた。

お気に入りの娘に手を出したからカンカンなんだわ、と。

その娘とは鈴のことだったのだろう。イタリアの一件は、鈴を危険な目に遭わせた連中への報復——というほど事は単純じゃなさそうだけど、すくなからず動機の一部ではあっただろうなと、私は人知れずそう思った。

「ん、どうしたのよ、アリス。なんだか難しい顔で黙り込んで……」

「あ、いえ、この杏仁豆腐、おいしいなあ」と私は誤魔化すように、付け合せのさくらんぼを口に放り込んで「ところで、知ってます？ さくらんぼのへたを口で結べる人ってキスが上手らしいですよ」

「そうなの？」

「要するに、へたを結べる奴は、舌使いがうまいってことじゃない？ どれどれ」

と、鈴もさくらんぼを口に放り込んでもぐもぐと口を動かす。

デユノアさんも同じようにさくらんぼを放り込んでもぐもぐ。三人でもぐもぐ。

「うーん、なかなか難しいわね、これ。てか、こんなことできる奴いるの？」

「確かに難しいね。これできる人って、そうとうな舌技の持ち主だよ」
尚も三人で悪戦苦闘していると、新たな客が入ってきた。一夏だ。

「おい、鈴、忘れもんだぞ」

一夏が忘れ物——シニヨン——を鈴に渡す。

そして、三人でもぐもぐする私たちを見て、不思議そうに首を傾げた。

「なにやってんだ、おまえら」

「あ、一夏、実はさくらんぼのへたを結んでいるんです」

「うまく結べる人はキスが上手らしいよ」

「そういえば、そんなこと聞いたことあるな」

と、一夏が何気ない動作でさくらんぼを口に放り込んで、もぐもぐ数秒……

「できたぞ」

ペロっと出した舌の上には、くるっと結ばれたさくらんぼのへたが乗っていた。

『テ、テクニシャン!?!』

一夏の超絶ならぬ超舌テクニックを目の当たりにし、私たちは変な興奮状態に陥った。

「す、すごいね、一夏って器用なんだ」

「ちよ、ちよつと、そういうの、こ、困るんだけど……」♡」

「困るってなにがだよ」

「そ、そりゃ、あんた、と、き、き、き」

「はっ。」

内またに手を挟んでもじもじする鈴を、怪訝な顔で見る一夏。

なんだかい雰囲気(?)なので、私たちは二人を置いて「ごゆっくり」とお店から退室することにした。



フィードアウトするように店を立ち去った私は、次なる出し物を求

めて、ARフオログラムで埋め尽くされた廊下をさらに行く。

「さて、次はどこに行きますか？」

「ねえ、アリス、あそこ行ってみない？」

デュノアさんが指さしたのは、和風テイストの店だ。

甘味処と書かれた暖簾と、竹製の待合椅子。古めかしくも雅を感じさせる店構えには、わびさびが滲み出している。そのまえて、着物姿の生徒が客の呼び込みをしていた。

「……あ、あの……、よ、よければ、い、一服など……う、うちで、つぜひ」

着物はこれ以上ないぐらい見事に着こなしていたが、暗い雰囲気と控え目な口調が災いして効果はいまいちのようだった。通りかかった客は足を止めることなく通り過ぎていく。

「お、おいしい、和菓子とか、お茶とか……。……ある……から……」

俯き、とうとうしゃべらなくなった生徒に、私たちは見ていられなくって歩み寄った。

「簪、もっとハキハキ喋らないと、お客は来てくれませんよ」

着物の生徒——簪は俯いていた顔をあげ、驚いた表情をした。

「あ、……アリスに、……シャルロット。……わ、わたし、こういうの、苦手だから……」

「じゃあ、なんで客引きなんて？ 他の人に頼めばいいでしょ？」

「……今回の和風喫茶、わたしが発案者だから。失敗したらわたしの所為だし」

それで店を成功させようと苦手な客引きをがんばっていたのか。

でもね、簪。みんなで決めたなら、それはみんなの責任なのだし、あなた一人が負うのはおかしいでしょ。——なんて、説教してもしようがないですよ。

「わかりました。じゃあ、あなたの売り上げに貢献してあげましょうか」

「うん。そうだね」

簪はぱあーと表情を咲かせた。

「ありがと、……じゃあ、……二名様、ご案内いたします」

♡

◆

♠

案内された店内は、これまた和一色だった。ほの暗い室内を雪洞が照らし、客席はみんな小上りの座敷で構成されている。通路に敷かれた砂利を踏みしめるたび、あたかも日本庭園を歩いているような錯覚に陥った。従業員全員が和服というのも驚かされる。

「……こちらに、どうぞ」

簪に案内され、私たちは畳の小上りに腰を下ろした。

「……こちらがお品書きです」

品書きには緑茶と茶菓子がセットになったメニューが7種類ほど記載されてあった。大福セット、羊羹セット、モナカセットなどなど。メニューも和菓子が中心のようだ。簪が「饅頭セットがおすすめ」と言ったので、私たちはそれを注文することにした。

「……かしこまりました。しばらくお待ちください」

と、簪が奥へ下がっていく。品が届く合間、私はざっと内装を見渡した。

「しかし、凝った内装ですね」

敷かれている畳も本物だし、仕切られている障子も本格的だ。従業員が着ている着物だって安物じゃない。何から何まで“和”で徹底されている。ここがハイテク化されたIS学園の教室であることを忘れてしまうほどだ。

「でも、これだけの物をそろえたら、相当な額になりそうだよね」

「さては会長、簪のクラスだけ予算多めにわたしているんじゃない……」

「……大丈夫。ちゃんと予算内に収まってる」

と、帰ってきた簪が言った。手にはお茶菓子とお茶。

それを私たちに配膳しつつ続ける。

「……畳と障子は更識が最良にしている処があって、そこから借りてきた。……着物も知り合いの呉服店からただでレンタル。……着つ

けはお母さんをお願いした」

簪が流し目で、ある座敷の一角を指す。その先では水色の髪的女性が茶を煎じていた。その女性の容姿を一言で表現したならば、簪の大人バージョンだ。くるっと内側を向いた髪と、おっとりした雰囲気は簪のそれ。

ただし、まとう気配というか、存在感は簪と段違いだった。彼女からは美貌だけじゃ出せない、大物の貫録が滲み出ている。あれが会長のお母さんで、〈情報部〉部長の奥さん。

「すごいオーラだね」

「……お母さんホステスだから。……政治家とか芸能人とか、そういう人がいっぱい来る銀座のお店でママしてる。……その道じゃ有名なんだって」

納得がいった。あの存在感はそこで身についたものか。

同時にホステスという仕事は、裏の仕事——防諜——を遂行するための一環なのだろうと推測する。今でも昔でも情報を集めるときは酒場と決まっているのだ。彼女に雇われているホステスはみんな更識の息がかかっているんだろうな。

「どうしたの、アリス」

「ん、あ、いえ。このおまんじゅうのキャラがね」

私は饅頭に焼印されたアニメキャラを気にするそぶりを見せ、誤魔化した。

「あ、アリスも気になった？ 僕もなんだ。萌えってどういうの？ かわ

いいよね、このキャラ」

「こ、これ、わたしがデザインした」

褒められたことに気を良くしたのか、いつもよりはつきりした語調で簪が言った。

「へえ、簪が描いたんだ。絵、上手なんだね」

「……昔アニメーター目指してた時期があって、……すこし絵の勉強したことがあるの。……わたし、アニメとか好きだったから。……わ、わたし、アニメオタクなの」

簪は恐る恐る言った。

私たちの年齢になると「アニメは子供が見るもの」として敬遠する子も多い。特に精神年齢が早熟する女の子の場合は余計だ。だからアニメオタクをカミングアウトするには少々な勇気がいるらしい。

簪の口調から察するに、カミングアウトして引かれた経験があるのだろう。でも、デュノアさんは両手を合わせた。

「そうなんだ。実は僕もアニメ大好きなんだ。昔からアニメばかり見ていてお母さんによく怒られたよ。でも、なかなかやめられなくてね。いまでもよく見るよ」

「……え、じゃあ、シャルロットもアニメオタク？」

「うん、僕もアニメオタク！」

簪の目が輝く。これは同志を見つけた目だ。

簪は以前より、なかなか趣味を共有できる友達が見つからないと嘆いていた。けれど、ついにそれが見つかった（かもしれない）とあつて、簪はデュノアさんへ身を乗り出した。

「……ち、ちなみに、好きな作品とか、ある？」

「そうだね、好きな作品はやっぱり——」

「やっぱり？」

簪の期待が高まる。

アニメ談義に花を咲かせられるかもしれない。そんなオタクの期待が。けれど——

「やっぱり『フランダーズの犬』かな、あと『母を訪ねて三千里』とか。

『赤毛のアン』も好きだよ」

「……………ああ、そっち……………」

しょんぼりと肩を落とす簪に、デュノアさんがきよんとんとする。

私は「そう来たかー」と額をペチンと叩いた。



「なんだったんだろう。僕、何か悪いことしたかなあ……………」

4組のクラスを出たあとも、シャルロットはずっと悩んでいる様子

だった。

シャルロットは何も悪いことをしていない。ただ、簪が好きなアニメとは、なんていうか、そういうアニメじゃないのだ。世界名作劇場も名作であることに間違いはないのだけど。ほんと、なんていうか、そうじゃないのだ。

「まあ、偏にアニメ好きと言つてもいろいろ派閥があるんですよ。ともかく、デュノアさんと簪は同じアニメ好きでも、毛色が違ったということです。それと簪の前で安易にオタク宣言しない方がいいですよ」

簪はガチ勢だから半端な輩を嫌う。仮に「ああ、私アニオタだわ。だってジ○リ作品全部みてるもん」なんて言おうものなら、すごい顔で「じゃあ未来少年コ○ンは？」と、そのオタク度を言及されるから要注意だ。(アリス談)

「しかし、デュノアさんがアニメ好きとは初めて知りました」

「アニメに限らず、日本文化が好きなんだ。ノエルさんと、パリのジャパンエキスポに行ったこともあるよ。あ、そうだ。実は夏休み、そのノエルさんの実家に行つてきてね」

「フランス代表の実家に？」

「うん、ノエルさんの実家はワインの酒造家だね。ボルドーに大きいブドウ園を持っているんだ。ここ数年は不作つづきで大変だったみたいなんだけど、一年前ぐらいにヘモンド・セレクションで金賞取つてね」

「すごいですね」

「出荷が忙しくなるみたいで、人手が不足しそうだから、『なにかあつたら、うちに来るといい。三食、寝床つきで雇おう』って言ってくれたんだ」

もし彼女がデュノアと決別の道を歩めば、新たな扶養者が必要になる。未成年である彼女は、一人で食べていくことができないから。それを考慮して、アリスは生徒会長を通じてノエルに扶養者になった欲しいと依頼していた。彼女はその依頼をちゃんと果たしてくれたよ。うだ。

「でね、それもいいかなって思っているんだ」

「代表候補生をやめて？」

「うん。元々、望んでフランス候補生になったわけじゃないんだ。男装した僕が『ブリュンヒルデの弟』っていう一夏に勝るには、どうやっても『代表候補生』というブランドが必要だったから」

いくら二人目の男性操縦者として世に出ても、融資を一夏に持つていかれては意味がない。「ブリュンヒルデの弟」という一夏に対抗するには、どうしても代表候補生という肩書きが必要だった。

しかし、性別が明るみになった今、彼女が代表候補生を続ける意味はない。それどころか、ISに乗り続ける理由さえ、本当はもうなかった。ならば、デュノア社の社員としてフランスの代表候補生を続けるより、田舎のブドウ畑で、穏やかな日々を過ごす、そんな人生もいいのではないかと。

そして、そこにアリスがいてくれたら。と思う。

摘んだブドウの上で、ケルト民謡を音楽に、彼女と踊りながらワインを絞る。

それはとても魅力的な光景だったから、シャルロットは言ってしまった。

「そ、それでね、よかったら、アリスもどうかなくて」

「私も、ですか？」

思いがけない誘いに、アリスは当然のごとく驚いた。

その反応を見て、シャルロットは自分がいかに突拍子もないことを言ったのかに気づく。

「もちろん、全ツ然、無理とは言わないよツ！ その、提案というかツ、もし、アリスにその気があったらでいいんだ！ でも、僕はアリスがいてくれたら、すごくうれしいというか、その……」

途中から自分でも何を言っているのか判らなくなり、語尾を弱める。

結局、来てほしいのか、ほしくないのか、わからないことを言っ、シャルロットはあやまりだした。

「わく、ごめんね、ごめんね、やっぱりいまのは忘れ——」

「魅力的な就職先だと思えます」

アリスはふわつと柔らかい笑みで答えた。シャルロットが「え？」と顔を上げる。

「いいの？」

「はい。はつきりした返事はまだできませんが、考えておきます」

喜ぶには弱すぎる返事だったけど、今のシャルロットにはそれで十分だった。

そもそも自分も完全に気持ちが悪まっているわけじゃないのだ。そんな不確定な未来に彼女を付き合わせることはしたくない。

考えておくと言ったアリスに「うん！」と答え、シャルロットはアリスと共に教室へ向かった。

いくら黒ウサギ隊の人たちが手伝ってくれているとはいえ、任せ放しというわけにもいかない。

「戻りました」

アリスたちが教室に戻ってくると、燕尾服の一夏がやってきた。

表情はなぜか険しい。それも疲労によるものじゃなく、もつと心的な緊張からくる面持ちだ。

「戻ってきてくれたか。ちょうど呼びにいこうと思っていたところなんだ」一夏はシャルロットの方を向き「シャルロット、おまえに客だ」

「え、僕に？」

シャルロットに嫌な予感がよぎった。

この場、この期に、自分に接近してくる人物はひとりしかいない。

「4番テーブルだ」

アリスとシャルロットはさりげなく4番テーブルを見た。

そのテーブルではブルネットの髪を肩からたらした女性が優雅に紅茶を嗜んでいた。

「久しぶりですね、シャルル、いえ今はシャルロットだったわね」

吹奏楽器を思わせる澄んだ綺麗な声音。

やわらかく暖かい声音であったが、シャルロットは全身を凍りつかせた。

「お、継母さん……」

ある意味でシャルロットが父親より会いたくなかった人物が、目の前にいた。

第71話 最強の夫婦

——よければ、学園を案内してもらえないかしら。

そう有無を言わさぬ口調で、校舎の外に連れ出されたシャルロットは、継母ロゼンダ・デュノアのうしろを歩いていった。その足取りはひどく覚束ない。手には嫌な汗。心臓は早い鼓動を打っている。

それほどまでに、ロゼンダ・デュノアは、シャルロットが苦手とする人物だった。彼女に浴びせられた罵声や皮肉はいまも鼓膜にこべりついている。できるなら、顔も合わせたくなかったのに。

しかし、会ってしまったものは仕方ない。さっさと用件を聞いて、帰ってもらおう。

継母から離れたい一心から、シャルロットは震える唇で要件を尋ねた。

「僕、いえ、私に何か用でしょうか」

父の本妻である彼女は、愛人の娘であるシャルロットを快く思っていない。その自分にどういった用件があるというのか。わざわざフランスから嫌味を言いに来たわけでもあるまい。

「学園生活は楽しいですか、シャルロット」

まったく的外れの回答に、シャルロットは言葉に詰まった。

「え？ は、はい。楽しいです。友だちもいます」

だから、壊さないでほしい。今あるに日常を。好きな人との時間を。

そう切に願うシャルロットに、ロゼンダはこう言葉を紡いだ。

「そう。私は毎日が苦しかったわ——」

——おまえの母親が不貞を働いたせいで。

シャルロットがぶわつと汗をかく。愛人の子であるシャルロットに対する痛烈な皮肉だった。

「でも、乗り越えようと努力をしたわ。夫の裏切りを許し、あなたの存在を受け入れよう、と」

一転して、柔らかな笑みを向けたロゼンダに、シャルロットは意表を突かれる。

もしや不義の子である自分を認めるためここへ？ そんな期待に応えるように、ロゼンダがシャルロットの髪をやさしくなでた——次の瞬間、いきなりその手に力が籠った。

「でも、できなかつた。なぜか、わかりませんか。あなたは、あの人の罪そのものだからです。あなたの存在が否応なしに『裏切られた』という事実を私に突きつけてくる。なのに、あの人はあなたとうまくやれという。これを屈辱と言わずとしてなんといいますか？」

シャルロットの髪を持ち上げた継母の瞳は、常世のような闇を秘めていた。その奥では、葛藤と憤怒が溶け合った狂気が渦巻いている。

このとき、シャルロットは愛と狂気が紙一重であることを初めて理解した。

人を愛する行為は尊いが、尊いがゆえ時に人を狂気に染める。愛した人の裏切りが、ロゼンダを狂人に貶めたのだ。裏切られたときの喪失感人は容易く変えてしまう。

「では、このあたりであなたの質問に答えましょう。わたしが何のためにここへやってきたか。——それは復讐です、シャルロット。わたしを裏切ったあの人たちへの」

ロゼンダがシャルロットから手を放すと、空から装甲をまとった女性型のシルエットが降ってきた。左右非対称の角に漆黒のボディ。臀部から蛇腹剣のような尾が伸び、背中からは蝙蝠のような翼が生えている。

シャルロットの知らないISだった。しかし、その操縦者は知っていた。

シヨコラデ・シヨコラータ。フランス代表ノエル・ラ・フォンテーヌの前任で、デュノア社のテストパイロットを務めていた女性だ。彼女は臀部の尾を鞭のようにしならせて、シャルロットの首を絞め上げた。

(ま、まさか、お継母さんは僕を……)

絞首の苦しみに抵抗しながら、シャルロットは継母の真意を悟った。

この女は自分に手を加えることで、自分を裏切った夫へ報いを与え

ようとしているのだ。

「……ち……父に、復讐をしたいなら、ほ、法廷で、する、べきです」
不倫した夫が憎いなら、姦通罪で訴えればいい。

息絶え絶えでそう訴えるシャルロットに、ロゼンダはより深い闇を垣間見せた。

「そうね。けれど、法廷じゃ死者は裁けない。人類はまだ死人を裁く術を持ち得ていないのです。でも、あなたが苦しめば、さぞあなたの亡きお母さまは悲しむでしょうね」

ロゼンダの言葉にシャルロットの全身の毛が逆立った。彼女はシャルロットの幸せを踏み躪ることで、愛娘の幸せを願った亡き母にも復讐を果たそうとしている。

「あ、あなたは、狂ってる……ッ」

「狂わせたのはだあれ？」

戦慄するシャルロットに、ロゼンダは愉悅の笑みを浮かべていた。シヨコラも継母の暴挙を止める素振りを見せないでいる。助けは求められそうになかった。最早、自分の力でなんとかするしかない。

「リ、リヴアイヴ……」

シャルロットは自分の専用機を思い浮かべた。しかし、愛機は沈黙したままだった。何度も、何度も、薄れゆく意識の中で、ネイビーオレンジの愛機を想い描くが、粒子は像を結ばない。

「無駄ですよ、どれだけ集中しても展開できませんから」

素晴らしいながら、ロゼンダはシヨコラのI Sを眺めた。

それがI Sを展開できなくしているのだろうか。

しかし、解かったところでどうすることもできなかった。すでに意識は混濁し、四肢は萎え、抗うだけの気力も残されていない。もうだめだ。——そう思ったときだった。

ギンツ

意識が途切れる間際、シャルロットは劈くような金切り音を聞いた。同時に拘束が解け、体がとすと地面に落ちる。彼女を縛っていた尾が何者かによって切断されたのだ。

「これは……」

混濁する意識のまま、顔を上げると、ぼんやりとした視界に赤い少女の姿が映った。

それを見つけたシャルロットの目頭に涙があふれる。

当然だ。目の前に自分が強く想う女性——アリス・リデルがいたのだから。

「もう大丈夫ですよ。私がそばにいる限り、誰もあなたを好きにはさせません」

彼女の心強い言葉に、怯えていた心が和らいでいくのを、シャルロットは確かに感じた。

アリスが側にいてくれるなら、何も恐れるものはない。そう思えるだけの頼もしさが彼女の背にはあった。

♡

◆

♣

♠

「夫人、このままお引き取り願います。大人しく引いてくだされば、事を公にしない」

《ヴォーパル》の鋒先をロゼンダに突きつけ、アリスは言った。

だが、ロゼンダは驚きも狼狽えもしなかった。

「——あなたこそ、お引き取り願おうかしら。これは家庭の問題よ」

「悪いですが、私は人様の家庭に土足で踏み入るような教養の無い女です。お引き取り頂けないなら、叩きだすまでです」

アリスはく赤騎士の脅威探査を走らせた。外観から敵の性能を推し量る装置だ。しかし、新型の情報は全く得られなかった。ただ塗りつぶされたへ■■■■■のARタグだけが不気味さを醸し出している。

高性能な推測能力と膨大なデータベースを持つく赤騎士でさえ正体がかめないISとは一体……。

「……デユノア社の、新型？」

そう考えるのが妥当だった。けれど、悪魔じみた形態にはくラファール・リヴァイヴの意匠がまったく感じられない。むしろ、ア

リスが感じ取ったのは「気怠さ」だ。あのISSを見てみると、全身が鉛のように重く感じてくる。この感覚はなんだ……。

「ずいぶんと警戒なさっているようで。でも無駄よ。どんなに警戒しても、〈ヴェルフエゴール〉の前じゃ全てが無意味です。それを教えてあげなさい」

シヨコラは飛翔してアリスへ鋭い爪を翳した。

それをアリスが《ヴォーパル》で受け止めた——次の瞬間である。

↑——警告：コア稼働率「89%」まで低下——↓

突如、低下したコアの稼働率に、アリスは「なんですってっ」と怪訝な顔をした。

まさか、これが彼女の言う〈ヴェルフエゴール〉の「力」だということなのか。

それを証明するように、88、87、86、と〈ヴェルフエゴール〉と相対する〈赤騎士〉のコアの稼働率低下は止まらない。このままでは一分としないうちに、〈コア〉が停止する。

なおも低下し続ける〈コア〉の稼働率に、アリスは警戒して後方に引き下がった

(まずいですね……)

アリスは内心でひどい焦燥感に駆られた。

〈コア〉はISSのハードウェアやソフトウェアと深く結びついている。束がISSの制御システムの上に〈コア・システム〉を位置づけたからだ。その〈コア・システム〉が不活性化すれば、制御ハード、制御ソフトは軒並み機能しなくなる。

(——これは退くしかないか)

敵の機能か、あるいは《単一仕様能力》か。どちらにしろ、眼前のISS〈ヴェルフエゴール〉がコアを停止させられるなら、いかなるISSもこれに太刀打ちできない。数多の強敵と戦い、勝利してきた〈赤騎士〉でさえ手も足もでないだろう。アリスはロゼンダの撃退を諦めるしかなかった。

「シャルロット、校舎の方に走れ！」

「う、うんッ」

言われるがまま、シャルロットは校舎に向かって駆け出した。しかし、その前に継母が立ちはだかる。ヘラファール・リヴァヴ・カスタムⅡは未だ展開できない。抵抗できないシャルロットを救うべくアリスがスラスターに火を入れるが——入らない。

《ハニー、コア稼働率50%まで低下。全フライトシステムに異常発生!》

すでに推進装置を始め、反重力装置さえ、まともに機能しなくなっていた。

こうなってしまうえばISなど羽をもがれた蝶に等しい。飛ばなくなったISは芋虫だ。

それを踏みつぶさんと、敵ISがこちらに襲い掛かってくる。

上に押し掛かってきたシヨコラを、アリスは押し退けることができなかった。既にコア稼働率は30%まで低下。フライトユニットに次いでパワーアシストもその機能を十全に発揮できないでいる。どうやっても、自分に伸びた絞首の手を外せなかった。これではシャルロットを助けるどころか、自身の安全さえ確保できない。

「ぐう……、ぐこの……」

脈を圧迫される苦しさでアリスはすでに息ができなくなっていた。意識が朦朧とし、視界が霞む。「アリスッ」と叫ぶシャルロットの声さえ、既に遠い。ただ、うつすらした視界の先で、継母に拘束されているシャルロットは見えた。

「しゃ、る、ろつと………」

遠のく意識を必死で繋ぎ留め、アリスはシャルロットを助けるべく手を差し伸べた。しかし、ほとんど死人同然の体たらくだったアリスのその手は、何も掴むことなく地面に倒れる。

《ハニー、コア稼働率0%! <赤騎士>、全機能停止!》

「世界最強のISもこの程度か」

悪魔の歪んだ笑い声を最後に、アリス・リデルの意識はここで潰えた。

「やれやれ、やってくれたのサ」

人気のない校舎の一角。

絢爛豪華な花魁衣装をまとった女性が、隻腕でキセルを回しながら、呆れるように言った。

その隣では、漆黒のウエディングドレスに身を包んだ女性が、黒い日傘を差して、同じように事の一部始終を見守っている。表情はウエディングヴェールで伺えないが、わずかに微笑んでいるようにも見えた。

「まったくヴェルフエゴールなんて、どこから持ち出したのかしらねー。あれはとっても大事なのに。ロゼンダ、いけない娘。きついお仕置が必要ね、リリン？」

「あいさ、へお母さま」

IS学園に付属する医療区画、その白く清潔な通路にコツコツと忙しない足音が響いていた。『アリスが搬送された』。そう聞き、ここを訪れたセシリア・オルコットのパンプスの音だ。

(アリス……)

アリス・リデルは、セシリアにとって悲しみを分かち合える得難い存在だ。

人は同情できても真の意味で悲しみを分かち合えない。悲しみはその人だけのだから。人がすべての悲しみを分かち合えるなら、人類の涙はとうの昔に枯れている。

人が悲しみを共有するには、同じ悲劇を経験するしかない。ゆえに、奇しくも同じ友人を亡くしたアリスとセシリアは、心の深いところで悲しみを共有できる間柄だった。それがアリスとセシリアを特別な関係へとたらしめている。仮に一夏であっても、セシリアの悲しみの全てを知るとはきつとできないだろう。できるのは、アリスだけ。

そのアリスによくないことが起こった。

友人を失う恐怖で、体温が下がるような錯覚に陥りながら、セシリアはアリスの病室に向かった。すれ違った医療区画の要員によれば、彼女は一〇二号室にいるらしい。その一〇二号室に到着するなり、セシリアは扉を壊す勢いで開けた。

「アリスッ！」

病室には既に多くの人が訪れていた。担任の千冬と真耶。一夏、箒、鈴、更識姉妹。肝心のアリスは既に目覚め、リクライニングベツトをお越していた、目立った外傷は見受けられない。顔色もいい。

無事だった。——不安から解放された反動でセシリアはアリスに飛びついた。

「アリス、大丈夫ですか？ 痛いところありません？ 気分は大丈夫ですか？」

「大丈夫です。すこし気を失っただけですから。でも、強いていうなら——」

「しいていうなら？」

「いい匂いがして、めまいがしそうです」

むぎゅーとされるセシリアの腕の中でアリスが微笑む。

安心したセシリアはもつと抱きしめたくなっただけけれど、千冬が首根っこを掴んでそれをやめさせた。

「オルコット、そろそろ離れる。こいつから話を聞かなければならない」

「いやですわ。わたくしはアリスのそばを離れたくありませんの！」

イヤイヤと離れまいとするセシリアに「おいッ」と業を煮やす千冬。それをアリスが宥めた。

「このままにしてあげてください。きっと不安だったのです」

「そうですよ。アリスが倒れたと聞いたときなんて、体温が数度は下がりましたわ」

だから温めてと言わんばかりに、アリスの手を自分の頬に触れさせる。

「うふふ、あったかい」と喜ぶセシリアに、千冬はやれやれと頭を振って、引き離すのをあきらめた。

「で、何があったの、アリスちゃん」

楯無が訊く。

アリスは回答に思案した。ことのあらましを説明するにはシャルロットの出自について語る必要がある。これを大勢の前で話しているものか。なにせ、彼女のコンプレックスにもなった要因だ。誰か彼かまわすしやべっていい内容でもない。

考えた末、アリスはそれを伏せて説明することにした。

「私をやったのは、デュノア夫人です。夫人はデュノアさんを連れ去ろうしていました。私はそれを止めに入ったのですが……、あつさり返り討ちにあつて、このありさまです」

「リデルさんほどの手練れが返り討ちとは……」

そう言ったのは真耶だ。一度、手合わせをした彼女がゆえの疑問だった。

「夫人は＜コア＞に干渉するISを持っていました。そのISと相対するだけで、コアの稼働率が低下し、ほとんど戦闘になりませんでした」

「コアの稼働率が？」

病室内が驚愕につつまれる。

コアに干渉する能力。ISの造詣に詳しい千冬や真耶でさえ初めて聞く能力だった。

「それがほんとならあんなでもやられるわけだわ。——で、夫人はそんなISまで持ち出して、なんでシャルロットを連れ去ろうとしたわけ？」

と、鈴が訊ねる。

「家庭の事情ってやつです。これはプライベートな部分なので多くは語れませんが」

「そう。まあ、あたしも知られたくないことあるしね」

鈴の両親は離婚している。家庭の事情をべらべらしゃべられたくないのは鈴も同じだった。

苦笑する鈴の肩を一夏が叩いていると、千冬がスーツの内側から封筒を取り出した。書面には退学届けとある。

「これで納得がいった。実は先ほど事務局にこれが提出されたそうだな。不自然だったそうなので、事務員が担任の私に連絡を寄こしてきたんだ。私も再入学してまでココに残ろうとしたあいつが、退学を願い出るとは思えなくてな。しかし、おまえの話を聞いて府に落ちた」つまり、退学届けを提出したのは、本人じゃないということだ。なら誰か、夫人だ。

「退学届けがデュノアの意味じゃないなら、これは不要だな」と千冬は退学届けを二重三重に破り捨て、「だが、本人がいない以上、休学扱いにせざるを得ないか」

在学には本人がここに通っている既成事実が必要だ。無い場合は休学扱いになる。その休学も長引けば、いずれ除籍処分される。危機管理のため再々入学は認められていない。ともかくシャルロットがこの場に戻らない限り、彼女はIS学園を去らざるをえない。

「なあ、千冬姉、学園の力でなんとか連れ戻せないか？」

「むずかしいな。事がどうあれ、これは家庭の問題だ。連行した相手が、テロ組織や犯罪組織だというなら、武力に訴えることもできるかもしれない。だが、いかんせん相手が生徒の保護者ではそうもいかん。武力で生徒を取り戻したとなったら、学園の存続にかかわる大問題になる」

シャルロットの家庭事情がどうであれ、ロゼンダはシャルロットの保護者だ。これは法的に認められている。そのロゼンダからシャルロットを武力で奪うことは、教育機関の領分を超えている。

「なら、私が、私の意思で、夫人からデュノアさんをここに連れてきます」

アリスはすでにセシリアを押しつけ、ベッドから発とうとしていた。助けに行くつもりだ。

そのアリスをセシリアが慌てたように制した。

「いけませんわ！ 相手はISでさえ通じない相手なのでしょ。危険がすぎますわ」

相手はISを無力化する。たとえば、ここにいる専用機持ちが束になっても倒せない相手だ。そんな相手を敵にして、ましてや単身で挑むなど。

「大丈夫です」

それでもアリスは撤回しなかった。何を根拠にそんなことをいうのか。なおも、わが身を危険にさらすことをいとわない友人に、セシリアは声を荒げた。

「そもそも、シャルロットさんは、あなたが危険を冒してまで助けないといけない方ですよ」

それはセシリアらしからぬ言葉だった。

普段は高圧的な態度をとりがちなセシリアだが、根はやさしい少女だ。慈愛を持つ彼女から、解釈によつては「シャルロットを見捨ててもいい」とも聞こえる言葉が出たことに、アリスは驚いた。

「セシリア？」と戸惑うアリスの声で、セシリアが我に返る。

「すみません、その、決してシャルロットさんの存在を軽はずんではいけないわけじゃありませんの。彼女は大事なクラスメイトですもの。ただ、

——ただ、あなたに何かあったと思うと、わたくしは……」

おそらく、先の一件が彼女をナーバスにしているのだろう。いや、それだけでなく、セシリアはあまりにも大切な人を亡くしすぎた。失う悲しみを知りすぎているから、目の前の親友をこれ以上危険な目に遭わせたくなかったのだろう。

「それに、あなたがわざわざ助けにいったところで何も解決しませんわ。きっと同じことが繰り返されるだけです。——彼女の家庭事情を詳しく知りませんが、権利が侵害されているというなら、弁護士を雇って、法廷で解決すべきですわ。わたくしの家には有能な弁護団がいます。紹介いたしますから、どうかここにいてくださいな！」

続けるように身を寄せ、そう訴える。それは全うな意見で、もつとも現実的な解決策だった。

だが、夫人の狂気を目の当たりにしたアリスはかぶりを振った。「そんな悠長なことを言っていられないのです。夫人はデュノアさんの全てを破壊するつもりです。今すぐにもデュノアさんを夫人の手から取り戻さないと、取り返しがつかないことになる」

拉致まがいな手段に出た時点で、夫人の闇の深さがうかがい知れる。

その闇はすでにシャルロットを覆い隠そうとしている。いまこの時も。時間がないのだ。

「それに私はデュノアさんと約束しました。少女ひとり救ってみせると。その私が何もしないわけにはいきません。私が行かなくて、誰が行くというのです?」

アリスは悲哀にくれるシャルロットに手を差し伸べた。――あなたのジャンヌダルクになると。

その手に希望を見出し、シャルロットは手を取った。その彼女を裏切るわけにはいかない。

「私を信じてください。信じることもまた絆です」
それはセシリアにとって殺し文句だった。

もし自分とあなたの間には絆があるなら、自分を信じてほしい。そういわれては、セシリアは何もいうことができなかった。

「……わかりましたわ。では、必ずわたくしの許に帰ってきてくださいます。よろしゅう」

「Yes my Majesty」
「もし、無事に帰ってこなかったら、わたくし、自ら命を絶ちますからね」

セシリアはぐつと顔を寄せ、アリスの自己犠牲の精神を逆手にとつた。

どこまで本気かわからないが、これでアリスは死ぬことさえ許されなくなる。自分を人質にして、アリスを生きて帰そうとするセシリアに、箒と簪はちいさく「愛が」「重い……」とつぶやいた。

「わかりました。必ず戻ってきます、あなたの許に」

名残惜しそうに離れるセシリアの額にキスをして、アリスはベッドを下りた。

その前に一夏が真剣な面持ちでやってくる。

「アリス、俺も行く」

「待て、一夏」

一夏を止めたのは、意外にも箒だった。

「なんで止めるんだ。アリスひとりで行かせるわけにはいかないだろう……ッ」

「だからと言ってお前が行ってどうなる。相手はISを無力化するんだぞ。〈白式〉も使えない。それとも何か考えでもあるのか」

「それは、ねえけど……。傷つく仲間を黙って見ていられるかよ」

「一夏、それは気持ちだけが先走って空回りしている状態だ。守りたい気持ちはわかるが、大事なものは「守る」ことじゃない。「守るために何をするか」だ。おまえは『守る』と言って、無暗に突撃したがる。それじゃ何も守れないんだ。かつての私がそうだった」

箒の言葉を理解して、一夏は押し黙った。

あのとき、暴走をする箒を庇い、自分は傷を負った。今度は自分が自分とアリスの間で起こるかもしれない。自分の失敗のツケを誰かが払うその後悔を、箒は苦しいほどに知っているから、一夏を止めた。「それでも行くなら、私はおまえを力づくで止める。それがアリスと、そしてシャルロットのためだからな。二人を不用意な危険にさらすわけにはいかない」

箒が「ここは任せて行け」という視線を送り、千冬がアリスを見る、「リデル、先も言ったが、学園の意思が介在しては大問題になる。すまないが、部隊は出せない」

「かまいません。元より夫人を倒すことは考えていません。そもそも無理でしょうから。むしろ欲しいのは、ISのような火力じゃなく、強襲技能なんですが――」

今回の作戦は、敵の殲滅じゃなく、標的の奪還だ。その実行に必要なのは、教師部隊や専用機持ちといった破壊力じゃなく、風のように

現れ、風のように消える機動力。しかし、アメリカ軍のデルタフォースが得意とする強襲スキルを持った人間など、この学園にいるわけではない。

「そうだった一人を除いて――」

「我々の出番か？」

その人物はまるでこの時を待っていたかのように現れた。

美しい銀髪。黒い眼帯。パンプスの代わりに軍靴を穿き、メイド服の上にタクティカルベストを装着した少女。特殊機甲強襲部隊――通称「黒ウサギ隊」の隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。その半歩後ろには、クラリツサとフィーネが「休め」の姿勢で立っている。

病室に入ってくるなり、ラウラは笑った。「戦争の準備はできている」と。

「シャルロットの件は聞かせてもらった。行くのだから、シャルロットを助けに」

「はい」

「私もシャルロットに借りがある。返すいい機会だ。力になろう。我々なら力になれるはずだ」

特殊機甲強襲部隊――通称、黒ウサギ隊は対テロ戦や人質救出を想定した特殊部隊だった。

潜入と強襲戦術を得意とし、淑やかに接近して、速やかに撤収する。いわく「始めは処女の如く、あとは脱兎の如く」。それが黒ウサギ隊のモットーだ。

現状においてこれ以上ない適材だった。そんな人材が三名。心強いことこの上ない。

「まったく、おまええら似た者夫婦だな」

「光栄であります、教官どの」

「織斑先生だ。それはさておき、私としても優秀な教え子を失いたくない。担任として不甲斐ないが、デユノアはおまえたちに任せよう。デユノアを必ず連れ戻してきてくれ」

このこと、戦闘に関しては、いくつかの軍事作戦をこなしてきたアリスやラウラが強い。

今はこの二人にすべてを託すしかない。二人は応えるように強く領いた。

第72話 異種格闘戦

IS学園の生徒と教員はあらゆる組織・機関からの干渉を受けない。だが対象が学外にいる場合は、その効力で保護できない。そこで私たちが継母の許からシャルロットを奪還することにした。

そのシャルロットの所在は、メダリオに仕込んだGPSによって特定できた。その位置情報をデジタルマップに重ね合わせたところ、彼女はIS学園南30キロにあるビルの一角にいることがわかった。現在、私たちはそのビルへ向けてミニバンを転がしている。

運転手はクラリツサさん。私とラウラ、フィーネさんは、バンの後部で状況を開始した。

「では、状況を開始します」

私はデジタルマップを展開し、目的地の見取り図を表示させた。

「このビルはデュノア社が経営難で閉鎖した支部だそうです。構造は六階層と地下からなります。屋上にヘリポート。おそらくここからヘリに乗り換えるつもりです」

「ヘリに？」

「現在、〈更識〉が警察庁に要請して検問を張ってくれています。ですが、相手側もそれを予測していたのでしよう。検問に掴まることを懸念して、移動手段をヘリに替えるつもりです。おそらく目的地はココでしょう」

私は地図の一角にまるを書く。

「新設されたプライベートジェット機専用の空港施設だな」

IS学園は国際的な教育機関だ。海外から多くの政府関係者が視察にやってくる。そこで交通の便をよくするため、いくつか交通インフラが行われた。そのひとつが、プライベートジェット機が離着陸できるこの空港だ。セシリアもここに自家用のプライベートジェット機を置いている。

「国外に逃げられたら厄介だな。この支部内で奪還することがベストか」

「ですが、簡単にはいかなそうです」

私はいくつの航空写真を広げる。

その一枚にはラフな衣装で銃器を携帯している人影が写っていた。「彼らは民間軍事企業^Mの人間^Cのようです」

「バイオシヨック」による「原油価格の値下がり」と「食糧不足が深刻化」の影響で、中東やアフリカでは内戦が激化している。国連も機能不全に陥っているから、抜本的な対策に乗り出せていない。

そんな背景があつて、現代は正規軍に代わつて戦闘を代行する戦争請負企業が爆発的に普及しつつある。主な業務は代理戦闘や兵站だが、こういった施設警備を請け負うことも多い。

「デュノア社は警備をPMCに依頼しているようです」

「この帽子のロゴ、へピューブル・アルメマン社」だな」

「へピューブル・アルメマン」は、「あなたの戦争に蝮の手をお貸しします」そんな売り文句で急成長したフランスの大手PMCだ。国内にとどまらず、北アフリカ方面の紛争地帯でよく見かけることができる。

「数は4名ほどですが、まず彼らの警備を突破する必要があるでしょう」

「では、我々が正面から突入して連中の注意を引きつけよう。数的有利はあちらにあるが、時間を稼ぐぐらいならできる。われわれが連中をひきつけている隙に、おまえはココの非常階段から屋上に上がり、へりを押さえろ」

「わかりました。それとPMCのほかに、厄介な敵がいます」

私は一枚の写真を加える。

その映っていたのは、タコのような円盤状の機械を被った兵器だ。

「ラファイニング・オクトパスか……」

笑う蝮。パリコレで公開された新型のワードスーツだ。

PMCが武器メーカーと契約して、兵器の実戦データ収集を引き受けることはよくある。ただ写真のラファイニング・オクトパスは自動人形による無人仕様に変更されているようだった。全身を包むラーバーアーモアの合間から球体関節が見えている。

「これに加えて、月光が二機、周囲を警戒しています」

「アーヴィングですか。厄介ですね」

フィーネ曹長が難しい顔で言った。鍛えられた特殊部隊でも、月光のような無人兵器は忌避すべき脅威だ。対人兵器では有効なダメージを与えられないうえ、機動力もある。そのため、基本的に戦闘は避け、戦闘ヘリやISで対処することが戦術のセオリーとされる。

「月光の全長なら室内での活動はかなり制限されるだろう。室内に逃げ込めば問題ない。しかし、見取り図といい、敵の戦力といい、偵察も無しに、よくこれだけの情報を集められたな」

「しましたよ、偵察。妹にお願いをして」

航空写真はイーデイスに撮影してもらったものだ。

〈リレイ〉のヘビショップ〈パッケージ〉には高解像度のカメラと、高出力波の減衰率を計算して内部構造を走査する特殊レーダーがある。その二つの機能を用いてビル内部の情報を持ち帰ってきてもらったのだ。

「妹がいたのか!？」

ラウラは碧眼を見開いた。

「血は繋がっていませんがね。機会があれば紹介しましょう。まずはデユノアさんの奪還です」

そこで通信機が鳴った。通信相手は会長だ。

『アリスちゃん、家の者を派遣して、空港を押さえたわ。最悪の場合はこちらで対処する』

「頼もしい限りです」

『シャルロットちゃんを守れなかったのはへ生徒会〉の失態でもあるからね。更識もバックアップさせてもらう。——ん、簪ちゃんどうしたの? うん、わかったわ。簪ちゃんと変わるわね』

『……アリス、〈赤騎士〉のことだけど』

現在、コアが停止した〈赤騎士〉は簪に預けてある。

「なんとか、なりそうですか?」

『……わからない。……コアを停止させる能力なんて事例がないから、どうしたらいいのかも』

コアの解析が遅れている理由に、内部構造がわからないということ

が挙げられる。コアの外殻は電磁波、音波、X線さえ通さない。力づくでこじ開けようとすれば、破損する恐れもある。そんな物質Xであるコアを再起動するのは至難の業だろう。それでも私は言った。

「なんとか再起動させてください。もしかしたらく赤騎士」が必要になるかもしれない」

『……そういうなら、アリスも方法を考えてよ』

「え、そうですね。叩いたりとか、振ったりとか」

『……うん、聞いたわたしがバカだったね……』

音声通信だったけど、回線の向こう側で深い溜息をつく簪が容易に想像できた。

「と、ともかく、がんばってみてください」

『……うん、ヘレッドクイーン」は生きているし、がんばってみる』

「お願いします」

返事のあと通信をオフにする。

夫人の包囲網は確実に構築されつつある。あとは私たちがうまくやれるか。

「嫁、そろそろ目的地に到着する。準備しろ」

「はい」

私はメイド服の上からタクティカルベストをまとい、M203グレネード装備のM4を持つ。さらに腰のベルトラインに40ミリグレネード弾を差していく。そのとなりでは、ラウラがG3自動小銃を装備し、サブウェポンにP9を腰のホルスターに収めていた。最後にM72Lawのベルト肩にかける。フィーネさんも分隊支援火器に給弾ベルトを差し込んで、そのカバーを閉じた。

装備が統一されていないわけは、すべて私の私物だからだ。

ラウラは、G3のスライドを引いて初弾を込め、バンの後部のドアを開けた。

「我々はこのまま正面から突っ込む。おまえはシャルロットを助けにいけ」

「では、お互いに健闘を」

私はパラシュートバックをひったくり、バンから飛び降りた。着地

の衝撃と慣性を転がることで殺す。そして、遠ざかる白いバンを見送ることなく、私は走り出した。

アリスを下ろしたミニバンは減速することなく、警備していた月光の踏みつけをひらりとかわし、ビルの正門からエントランスに突っ込んだ。

ビル内は既に撤収作業が終わっており、何もなかった。天井に巨大なシャンデリアがぶら下がっている以外は殺風景な社内だ

クラリツサはハンドルを大きく切って、車体の前部と後部を綺麗に入れ替えた。

P M Cが警備にあたっていたが、「どうした」とも「なんだ」とも言わなかった。ただ冷静に自動小銃——FN—SCARを構える。動じず、冷静に対応するさまはプロのものだ。

しかし、プロなのはこちらも同じだ。

まずフィーネが車の後部から分隊支援火器の銃爪を引いた。彼女が相手の頭を押さえつけているうちに、すかさずラウラとクラリツサがバンから降り、車体を盾にしながら銃撃に加わる。かくして、黒ウサギと武装タコの、異種格闘戦が始まった。

アリスはビルの裏手に回り、非常階段の扉を蹴っ飛ばした。交互に伸びる階段はかなりの高さだが、警備の目はない。陽動の効果が効いているようだ。

アリスは一度だけ屈伸して、いつきに駆け上がった。三段飛ばしのホップ・ステップ・ジャンプ。ひとつの階段を三步で上り、軍靴の滑り止めを活かしてターン。メイド服をなびかして更にホップ・ステップ・ジャンプ。シャルロットを守りきれなかった不甲斐なさを吹っ切るように、アリスは階段を駆け上がった。

ゆつくりと昇っていくエレベーターの中で、シャルロットは項垂れるように俯いていた。

こんな状況に自分を追い込んだ、自らの生い立ちを嘆くように。

今は自分を不義の子にした両親が憎らしかった。しかし、その両親が不義を犯さなければ、自分は存在しなかったというジレンマ。ロゼンダは言った、『おまえの存在そのものが罪なのだ』と。存在しているだけで誰かを傷つけてしまうのだとしたら、はたして自分は生まれてくるべきだったのだろうか。

自分の存在意義を見失いかげ、シャルロットは心の均衡を失いそうだった。それでも自我を保っていられたのは、そんな歪な自分を受け入れてくれる存在があったからだ。

(アリス、会いたいよ)

幾度なく自分を勇気づけてくれた少女との再会を、シャルロットは強く懇願した。

もう一度、自分のそばにきて「私がついている」と言ってほしい。けれど、来てほしくないと思う自分もいる。〈ヴェルフエゴール〉と戦い敗れた彼女を思い出すと、いまだ体が震えるのだ。自分のせいで傷つく彼女をもう見たくなかった。会いたいけど、会いにきてほしくない。二律背反するふたつの感情が二重螺旋のようにぐるぐる回る。その終着点でシャルロットは、ある結論に行きついた。

そうだ。会いたい、でも会いに来てほしくない。なら——会いに行けばいいじゃないか。

その考えに行きついて、ようやくシャルロットは自分がいかに「甘えた人間」なのか、思い知った。

思えば、デュノアに引き取られた時からそうだった。

本気になれば、どこへでも飛んで行けたのだ。だって自分の祖国は自由・平等・博愛を謳うフランスなのだから。デュノア邸を飛び出しても、自分を保護してくれる場所なんていくらでもあったはずだ。なのに、身の上の不自由を嘆くだけで、自分から何もしようとしなかった。あまつさえ、不幸な境遇に同情してくれる人間を探し、あわよくばそれに救いを求めた。「僕はかわいそうな子なんだ。だから、やさ

しくしてよ」そう言って。

——いつまで悲劇のヒロインを気取るつもりだ、シャルロット・デュノア。

ラウラなら自分にそういうかもしれない。絶望という敵に、果敢に挑んだ彼女なら。

ラウラは悲嘆に絶叫しても、身の上を理由に同情を請うたことなど一度もない。最後の最後まで、戦士の誇りを賭けて戦いぬいた。それに比べて自分という人間は……

(僕も、勇気を持たなくっちゃ……)

愛人の子がなんだ、不義の子がどうした。自分の生まれを嘆いても変わらないんだ。

立ち向かう勇気だけが現実を変えるんだから。

シャルロットはへもう一人の自分〳〵を脱ぎ捨て、垂れていた頭をゆつくりと上げた。そして、状況を打開すべく、気づかれないように周囲を確認する。狭いエレベーター内には、夫人と仕えのシヨコラ、あとPMCの小隊長が乗っていた。

その小隊長の通信機がザザつとなる。

「どうした」

『襲撃です。一階エントランスに三名。現在、応戦中』

通信を盗み聞いたシャルロットは「アリスだ」と確信した。三名とすることは他にもいるようだ。一人はラウラだろう。あとは判らない。一夏や箒ではなさそうだ。セシリアや鈴でも現役の兵士の相手は難しい。いずれにせよ、その事実がシャルロットの士気を上げた。

「お友達が迎えにきたようですね」

夫人がシャルロットの目を据える。シャルロットは顔をそむけなかった。

もう逃げないという意識の表れだ。夫人は不敵に微笑んで、PMCに告げた。

「追い払いなさい。手荒くても構わないわ」

「了解、ラファイニング・オクトパスを使い。敵を殲滅しろ」

ラフィング・オクトパス？ いや、それよりも今はどうやってアリスたちと合流するかだ。

シャルロットは改めて自分の状況を確認かめた。

手には手錠。専用機は奪われた。できることといえば、体当たりぐらいだ。いや悲観するな。まだ体当たりはできるのだ。それに足は不自由なく動く。スキを見て逃げ出すこともできる。

シャルロットがそのスキを窺っていると、エレベーターが最上階に到着した。

「降りなさい」

P M Cの隊員に手を引っ張られながら、シャルロットはエレベーターから降ろされた。そこから短い階段を上らされ、広いスペース――ヘリポートに連れてこられる。

Hとマーキングされた床の上には、6人乗りのヘリが待機していた。

まずい。このヘリに乗せられたら、合流できなくなる。シャルロットは搭乗に抵抗しながら、何かないかと周囲を見渡した、その先から何かが放物線を描いて飛んでくる。

カランカランと床に落ちた物体はグレネードだった。

しかし、炸裂はしなかった。代わって大量のスモークを吐き出す。白い煙で視界はたちまちゼロになった。

「デュノアさん、こっちはです」

黙々と立ち込めるスモークの先から、女性の声がきこえた。アリスの声だ。

（いまっ！）

シャルロットは足に力をこめ、拘束していた男に渾身の体当たりを食らわした。

文字通り捨て身の一撃。

小柄な少女の体当たりだったが、意表をつかれ相手がぐらついた。その隙に、声のする方向へ一目散に駆け出す。だが、そのシャルロットのおさげをP M Cの隊員が乱暴に掴んで引き止めた。

凄まじい力で髪を引っ張られ、首が折れそうになる。それでもシャ

ルロットは痛みを堪え、それを振り切ろうとした。そう、過去の甘えた自分を捨て去るように。

(僕はもう、守られるだけの媚びた女の子を卒業するんだ)

そのためなら、たとえこのブロンドが無残にちぎれようとも構わなかった。なにが「髪は女の命」だ。ここで女々しく「助けて〜」と乞う女になるぐらいなら、この長髪を失った方がマシだ。かつてジャンヌダルクが戦いに赴くため、その長髪を捨てたように。——その覚悟^{ガッツ}が実を結ぶ。

「アリスッ」

長い髪を代償に兵士の手を振り切ったシャルロットは、アリスの胸に飛び込んだ。

「アリス、アリス、僕はアリスに会いたかった！ だから、会いにきた！」

「私もです。だから、ここまで来た」

「アリスッ」

シャルロットが感涙の声を上げた。愛しい彼女のぬくもりを感じ、思わず膝から崩れそうになる。それをアリスが腰に手を回して支える。

しかし、これ以上、互いを確かめ合う時間はなかった。男がライフを背後に回し、ナイフを抜いていたのだ。

応戦すべく、アリスも赤騎士の待機形態を抜こうとする。——が、簪に預けていることを思い出し、慌ててM4で防御した。男が続けさまに繰り出した突きを、今度は銃のストラップで絡め捕り、さらにストックで叩く。相手が怯んだすきに、アリスは男の眼前に飛び上がり、相手の眉間に鞭のような蹴りを放った。見事な上段回し蹴りが炸裂し、PMCの男はそれつきり動かなくなる。

アリスは素早く男から距離を取り、背面に回していたM4を構えた。

向けた銃口の先から、夫人と二名の兵士がやってくる。

「また、あなたなの。懲りないのね」

「不屈の精神と言ってください」

アリスはシャルロットを背後に隠す。その背後でシャルロットが小声でささやく

「アリス……これからどうするの?」「
「こうします」

アリスはM4カービンに備わったグレネードランチャーを背後のフェンスに向けた。

ポンと発射さられた40ミリの榴弾が転落防止の手すりを破壊する。シャルロットは「も、もしかして」と思った。アリスは「そのまさかです」と、シャルロットの手を引き、屋上から飛び出した。

♡

◆

♠

激しい銃撃戦でバンはほとんど廃車状態だった。車体のそこら中に弾痕がつき、タイヤもパンクしている。この車両で脱出することは最早むりだったけれど、武装タコと黒ウサギの銃撃戦は、黒ウサギ側に優位があった。

その差をつけたのは、とりわけ火力だった。そもそも向こうは警備を主としていたため、長時間の銃撃戦に対応するだけの弾薬が無い。対し、最初から時間稼ぎのため大量の弾薬を持ち込んだラウラたちは、あとさきを気にせず攻撃できた。

その差が戦況に妙実に現れ始め、PMCの兵士たちが徐々に後退し始めた。

一人がフルオートでこちらの頭を押さえ、残りの兵士が速やかに後方へ下がる。

ラウラは見事な後退だと感心した。

「引いたようですね。アリス殿の援護に向かいますか?」

フィーネ曹長が分隊支援火器を下ろして言った。

「いや、待て。何かおかしい」

確かに敵の武器の装弾数と銃撃時間を考慮すれば、向こうは弾が尽きかけていたに違いない。だが、ラウラの六感センスが何かを訴えていた。

言葉するならば「嵐の前の静けさ」が持つ独特な不気味さ。

それに彼らが見せた撤退の機動。あれは空爆に備えての撤退に似ていた。

(まさか、ここが空爆されるとは思えんが……)

何気なく天井を仰ぐ。その視線の先に黒い物体が見え、ラウラは目を剥いた。

天井から降ってきた黒い物体は、猛獣のような、それでいて女性的な美貌を兼ねた兵器だった。頭部に円盤のような装置を被り、そこから4本の触手が伸びていて、まるで蛸の足のようになっている。

「ラファイング・オクトパスか。——撃て！」

三人はバンの車上に着地した蛸女に、銃弾を浴びせる。だが、弾はことごとく装甲に弾かれ、有効なダメージを与えられない。フィーネの7.62ミリ口径でさえ通じなかった。

「見かけによらず硬い！」

「怯むな、クラリツサ。撃ち続けろ」

ラウラが弾倉を交換し、再び射撃体勢に入る。対し、蛸女は極太の触手で車内から重たいハードケースを引きずり出した。それをラウラに投げつける。ラウラは前転して回避した。そして再び銃を構える——が、その先に、ラファイング・オクトパスの姿はなかった。

「消えただと!？」

「くそ、光学迷彩、いや、追従迷彩か。……サーマルがあれば……」

突如として姿を晦ました蛸女に、フィーネが動揺の声を上げる。見えないことは、外部情報を視覚に頼る人間に恐怖を与える。透明化した相手が殺人兵器だとすればなおのことだ。

「装備に頼るな、自分の感覚を研ぎ澄ませ」

狼狽える部下にラウラが檄を飛ばす。

フィーネが「は、はい」と答えた、その時だ。彼女の背後にどすんと重たい音が響いた。

「曹長、後ろだ！」

クラリツサが警戒を促すも、既に魔の手ならぬ蛸の手はフィーネに伸びていた。

「ぐうあ」

笑う蝟の野太い触手に絞首されたフィーネが苦悶に喘ぐ。

ラウラとクラリツサは銃を下げざるを得なかった。下手に攻撃すればフィーネに当たる。さらに、こちらが手を出せなくなったことをいいことに、ラテイングはクラリツサにフィーネを投げつけてきた。避ければ仲間が床に叩きつけられる。受け止めるしかなかった。しかし、いかんせん女性一人分の重量を武器にした攻撃だ。その一撃は、下手な打撃技よりはるかに有効な一撃をクラリツサに与えた。

《ワラエル》

耳障りな甲高い笑い声は、折り重なり、動かなくなった二人を嘲笑っているかのようだ。

部隊の仲間意識を笑われた気がして、ラウラは怒りを露わにした

「やってくれたな、タコスケ」

ラウラはM78Lawの折り畳み式のノズルを伸ばし、照準をつける。蝟女は再び、背景に溶け込んだ。標的を失ったロケットランチャーの照準が宙を泳ぐ。ステルスの敵に無誘導のロケット弾を命中させることは不可能に近い。

ラウラは舌打ちして、周囲に気配を配らせたが、それらしい痕跡は見つけられなかった。

「くそ、隠れたか。賢いタコめ」

旧式とはいえM78Lawは有効な火器だ。命中すれば奴でもひとたまりもない。相手はラウラの武器が自分を破壊できることを知っているのである。だから、身を隠した。

ラウラが毒づくくと、気を取り戻したクラリツサがよろけながら立ち上がった。

「引いたのでしょうか」

この手の無人兵器にはく赤騎士>のように敵脅威を図る機能が備わっている。それによつて、戦つて斃せない判断したときは撤退するようにプログラムされている。命を惜しまない機械といえ、修理には金がかかるからだ。

いかなる民族意識、宗教、イデオロギーにも左右されないPMCが

唯一気に掛けることは、出費と収入である。損害に伴う再編成に支払以上の金がかかるなら、撤退を優先することもあるが、

「いや、こちらの装備を恐れ、戦法を変えたのだろうか」

旧式の武器を恐れているのは、商品にならない。おそらくもつと有効な戦法に切り替えたのだ。現代の無人兵器は、それだけの柔軟性を有している。

「いずれにしろ、放っておいては厄介だ。アリスの許に向かわれてはたまらん」

対戦車砲を肩にかけ直し、突撃小銃を構えなおす。

「クラリツサ、おまえはフィーネを見てやれ。私は奴を追う」

「了解しました。お気を付けて」

そして、ラウラは蝟が潜む捕食のテリトリに足を踏み入れていった。

第73話 Dear daughter From
dat

IS学園整備科、実習区画のハンガーに機能停止したく赤騎士は格納されていた。その背部にあるコア格納部分は、外殻が外されて無数のケーブルが接続されている。そのケーブルの端末は、＜打鉄式＞のコンピューターに繋がれており、簪の手で再起動の試みが行われていた。

「どうだ、簪。再起動できそうか？」

黙々とキーボードを叩く簪の後ろで、箒が言った。

彼女がここにいる理由は、篠ノ之束の妹だからだ。停止したコアの再起動には、設計者である篠ノ之束の知識が必要になるかもしれない。そう踏み、簪が箒をつれてきたのだ。

「……難しい、かも」

『赤騎士を再起動させてくれ』と依頼された簪はかぶりを振った。先ほどからヘレッドクイーンと協力しながらいろいろ試行錯誤したものの、その試みはことごとく失敗に終わりつつある。簪でさえほとんどお手上げ状態で、匙を投げたい気分だった。

「……内部のへコア・マトリックスが完全に停止しているみたいだから」

「コア・マトリックス……？」

「……《形態移行》や《単一仕様能力》みたいなIS固有の能力を司っている論理プロセッサ。……ISの大体部の制御システムも、このプロセッサで処理されている。……これが完全に沈黙している状態。……これが動かないと、ISも動かない」

「では、それを動かしたらいいのではないか」

安直な案に簪は苦笑した。

それは判っているのだ。それがどうすれば動くのか、わからないのだ。

「……そうなんだけど、このへコア・マトリックスは処理手順がまっ

アルゴリズム

たく解明されていない。……わかっているのは、非ノイマン型で、人間の脳神経回路に酷似した構造を持つていてことだけ」

「人間と同じ脳神経回路……。それが停止しているのか？」

「……うん、わかりやすいたとえばと、中央処理装置がなくなったパソコン。……うん、レッドクイーンっていう延命措置で生かされている脳死体、そう言った方が適切かも」

「つまり、魂が抜け落ちている、そんなところか」

「……魂の定義が不明確だから、的確な表現とはいえないけど、大体そんな感じ」

だとしたら、アリスの要望は『脳死の患者を目覚めさせる』と言っているようなものだ。神ならぬ簪には無理な話だったし、それなら恐山のイタコに頼んだ方がまだ建設的にさえ思える。

《ISは形而上の物質で動いていない。必ずロジックな原因と結果がある。私が内部走査した結果、ヘコア・マトリックス自体は損傷していない。再起動の見込みはある》

「……わたしもそう思う。でも、問題は方法。……わたしにできることは、ひたすらコマンドを打ち込むことだけ。……何度もコマンドを打ち込んで、その信号でコアを覚醒させるしかない」

植物状態の患者にマッサージを続けていると、その刺激で意識が回復するケースがある。

簪が実行しようとしていることは、そのIS番だった。

「どれくらいかかりそうだ？」

「わからない。……もしかしたら数年かかるかも……」

「なっ！」

簪は絶句した。

「そんなに時間はかけていられないぞ、簪！ アリスはいま戦っているんだ」

「……わかってるッ」

そう、分かっている。しかし、実質問題としてそれしか策がないのだ。にっちもさっちもいかないうことを知り、なおかつ時間がないことも承知している簪だから、簪の安易な催促が腹立たしかった。

「……そういうなら、箒も何か方法を考えてよ……」

「そ、そういうわれてもな……。姉さんとはつながらないし」

かれこれ30回近く呼び出しているのに、まったく繋がる気配がなかった。世界のいたるところで電波が飛び交うこのご時世に電話一本も繋がらないとは。海の底にでもいるというのか。

「……そうじゃない。お姉さんばかり頼らないで、箒も何か考えてって意味」

姉に支えられてまくっている自分のことは柵の上、それも一番上に置いた。

「ふ、ふむ」

確かに、日頃からぞんざいに扱って、いざという時だけ頼るのは虫が良すぎる。

箒は自分の身勝手さを恥じながら、うくと両腕を組んだ。

「叩いたり、振ってみたりするのはどうだ？」

「……発想がアリスと一緒」

「なに、アリスと一緒だと……。そうか、そうか。お師匠様と一緒とは光栄だな」

けして褒めたわけじゃないのに、箒はうれしそうに「うんうん」と頷いた。客観的にはけなされていても、箒にとっては褒め言葉に聞こえたらしい。

箒は内心で「バカってうつつるんだ」と失礼なことを考えながら、再びディスプレイに意識をやる。

(何にしても、早く＜赤騎士＞を復活させないと……)

箒は考えるよりも行動で、作業に取り掛かった。コアに信号を送信し、＜レッドクイーン＞が観測して逐次報告する。コマンド入力。エラー。コマンド再入力、エラー。コマンド再々入力、エラー、エラー。どんな命令を送信しても、返ってくる応答は無反応というエラー。だが、反応がないことは、想定内だ。こればかりは根気よく続けるしかない。募る苛立ちをこらえて入力。やっぱりエラー。

負けず、再入力。エラー。エラー。エラー。徐々に箒に苛立ちが募る。時間ばかり過ぎていく現状が、それに拍車をかける。お願いだか

ら目覚めて。そんな想いを込めてコマンド入力。
エラー。

温かな簪も、さすがに苛立ちが頂点に達した。アリスの信頼に応えられない苛立ち、時間だけが過ぎていく焦り、いろいろな感情が積もりに積もって、ついに噴火した。

「もおッ！ ご主人様がピンチなんだよ！ いつまでそうしているの！」

簪は投影型ARキーボードをたたみ、赤騎士の許に歩み寄る。そして、ソケットに収まったコアを説教するようにべしべしと叩いた。自分でも驚くほど能動的な行動に簪が「……あつ」ともらす。そのときだった。

まるで息を吹き返したように、コアが淡い光を放ったのだ。

「え？」

簪が目丸くしてきよんとする。

これは起動した？ いやまさか、昭和のテレビじゃあるまいし。オーパーツ級の精密機械が叩いて直るなんて。そんな信じられない気分で簪がレッドクイーンを見る。

《コアの稼働を確認。稼働率上昇中。15, 30, 45……》

コアは昭和のテレビだった……。

「これは、お師匠様が、正しかったということか!？」

嬉々とする簪に、簪は自分の積み上げてきた物が崩れる音を聞いた気がした。

叩いてなおりや、技術者はいらない。

「……簪、このことはアリスに黙っておいて」

「む？ どうしてだ？」

「ほら、みたことか！」と増長するアリスを安易に想像できたから、簪はそう言ったのだった。



デユノア社、屋上。そこから飛び出した私はパラシュートを開き、巧みにブレークコードを引いて風に乗った。6階からの50mとない低高度スカイダイビング。地面はみるみる近づいてくる。それに対して落下速度の減速がなかなか追いつかない。一人用のパラシュートに二人もぶら下がっていることが原因だった。

「シャルロット、私に掴まってッ」

パラシュートと繋がっていないシャルロットが必死にしがみつく。そのシャルロットを抱きかかえ、私は受け身でなんとか着地の衝撃を殺した。それでも勢い余って5メートルほどアスファルトの上を転がる。

「大丈夫ですか」

ようやく止まったところで、体を起こし、シャルロットに手を差し出した。

「……うん、なんとか」

手を取ったシャルロットに外傷らしい外傷はなかった。ただし、表情は呆れ顔だ。

「アリスって、ほんと無茶するよね」

本来一人用のパラシュートに二人乗りなんて、無茶の何者でもない。かすり傷程度ですんだのは、ほとんど奇跡だった。いまの降下を空挺隊員が見たなら、きつと正気の沙汰じゃないというだろう。

「無茶する以外に方法がなかったの。それより追手が来る前に行きましよう」

身に着けていたパラシュートを素早く脱ぎ捨てる。

ここはまだデユノア社の敷地内だ。夫人の執念なら、必ず追手があ
るはず。

「社外の空き地に、会長がへりを待機させてくれています」

そう言つて、シャルロットを先導するようにM4を構えた——その時だ。

腹に響く重低音が一带に木霊した。牛のうなり声のような声。その正体——月光がバツタのような跳躍を繰り返しながら、こちらに迫ってくる。私は「まずい」と毒づいた。こちらに月光と戦えるだけ

の戦力はない。それも二機なんて、とてもじゃないが相手なんかして
いられない。

「走れ、シャルロット。とにかく走るんです」

私は叫びながらM4の40ミリグレネード弾を放った。

爆発。敵がわずかに怯んだその隙に、二人で駆け出す。しかし、もう一機の月光が跳躍して私たちの行く手を阻んだ。その月光が腹部からワイヤーロープを繰り出し、先端のアームをチロチロと動かしてデュノアさんを狙う。

「寄るんじゃないやありませんよっ」

M4の5.56mmライフル弾でワイヤーロープを払い除ける。だが、私が眼前の月光に気を取られているうちに、もう一機の月光が触手ロープをデュノアさんに伸ばしていた。その触手ロープがデュノアさんの腕に絡まりつく。

「く、放しなさい」

触手ロープでデュノアさんを連れ去ろうとする月光に銃口を向けるも、やはりもう一機の月光から伸びたワイヤーロープがそれを阻止してくる。

武器を奪われまいと抵抗する私と、連れて行かれまいと抵抗するシャルロット。

だが所詮は人と機械の綱引き。非力な人間が敵うわけもなく、シャルロットをどんどん引き離されてしまう。

このままでは、シャルロットが連れさらわれる。——そう危惧した瞬間、私たちの頭上から二つの何かが降り注いだ。それがワイヤーロープを切断し、月光から私たちを解放してくれる。レイピアのように鋭い刃先と護拳がついたそれは——ISのアサルトブレードだった。

「なんですっ!?!」

私はとっさに空を仰いだ。その先から巨大な得物を持ったISが舞い降りてくる。手には、身の丈以上ある機械仕掛けのハルバート。操縦者は、栗色の髪を後頭部でアップにした女性だ。

「ノエルさんっ!?!」

突如して現れたフランス代表は、自由落下の加速をハルバートに乗せて、月光の頭部ユニットを叩き割った。次いでハルバートを横に薙ぎ、月光の胴と足を綺麗に切断する。

「二人とも、下がっている」

そう言つて、フランスの国家代表は、もう一機の月光の頭上に音もなく飛び移ると、逆手に持ち替えたハルバートの先端——パイルバンカーを突きつけた。EMLによって打ち出された超合金製のパイルが、月光の複合装甲を容易く突き破ぶり、頭部ユニットを破壊せしめる。

ノエルさんは崩れ落ちる月光から飛びのき、私たちの前に着地した。

「無事かい？」

「はい、おかげで助かりました。でも、どうしてここに」

今回の一件は、一部の人間しか知らないことなのに。

「ああ、ロゼンダさんが暴走していることを彼から聞いてね」

ノエルさんが後方に視線をやる。その先から一人の男性が歩いてきた。ブロンドで40代半ばの男性だ。その男性を目にしてシャルロットが瞠目する。私も思わず絶句した。

「君がアリス・リデルだね。——娘を助けてくれて礼をいうよ」

そう、彼こそがデユノア社の最高責任者であり、シャルロットの父親だった。

♡

◆

♣

私はアルベール・デユノアだ、と彼は言った。

この人物がデユノア社の社長にして、シャルロットの父親。そして彼女に男装を命じ、一夏のデータを盗んで来いと命令した張本人。その人物がいま私たちの前にいる。その事実にはシャルロットは当然に当惑を重ねた表情を見せていた。

「ど、どうして……」

無理もないことだ。さんざん冷たかった人物が助けにきても、戸惑と懷疑しかない。

また、そんな娘に父親もどんな言葉をかけていいか迷っている様子だった。

それあって自ずとあたりに気まずい沈黙が広がる。その沈黙を先に破ったのはアルベールさんだった。

「すまないな、シャルロット。おまえには嫌な思いや、辛い思いをさせってきた」

自分に冷たくしてきた父親からの、いきなりの謝罪。これをどう受けとめていいのか分からず、シャルロットは言葉に詰まる。そして、迷いに迷って、彼女は抱えていた不満をぶつけた。

「あやまるぐらいなら、最初からあんなことさせないでよ」

「そうだな。そのとおりだ。すまなかった」

シャルロットの反撃に、アルベールさんが悲痛な面持ちを作る。本当は自らの行いに心を痛めていたのだろうか。へパツケージや物資の件はその罪滅ぼしだったのかもしれない。それを悟ったシャルロットから強張っていた表情、そして戸惑いが消えた。

「でも、仕方ないことだったんでしょ」

「ああ、会社を立て直す苦肉の策だった。私の会社は、何千人規模の社員を抱える大企業だ。経営者として、彼らを路頭に迷わせるわけにはいかない。なんとしてでも経営を立て直したかった。だが、どんな理由があれ、自分の子を会社の道具にすることは許されない。今は自分の行いをとても後悔しているよ」

アルベールさんはシャルロットに近づくと、その首にネックレスをかけた。

「これは私からの罪滅ぼしだ。おまえのために作らせた」

「僕のために？ そんな資金なんて？」

「融資が見つかったのだ。だから、これからはもう会社に囚われることはなく、自由に生きろ。私はおまえを応援する。それが私におまえにできる、父親として唯一の許されることだ。——アリスくん」

「はっ」

「娘を頼む。私はこれから妻の暴走を止めに行く。彼女がこんな暴挙にでたのも、すべて私の不徳によるものだ。私はその責任を取りにいかねばならない。ノエルくん、いましばらく力をかしてくれるかい？」

「はい、社長。実家のブドウ園を救っていただいたのは、あなたです。その恩をお返します」

私はシャルロットの言葉を思い出した。フランス代表の実家はブドウ園を営んでおり、ここ数年は不連続きだったと。そのとき、デュノア社から援助を受けていたのだろう。

「フォンテーヌのワインは、コゼットが好きだったからね。――では、行こうか」

二人は私たちに背を向け、ビルの方角へ歩んでいく。

その途中、アルベールさんが思い出したように振り返った。

「シャルロット。コゼットと私の関係は、確かに第三者からすれば不倫だ。しかし、私たちは心から愛し合っていた。おまえは行きずりで生まれた子でもなければ、不義の子でもない。望まれた子だ。15年もないがしろにした後ろめたさから、何を言えbaikかわらなかつたが、私はおまえを愛している」

別れ際の告白に、シャルロットは苦笑した。

たった数文字の言葉。それを紡ぐのにこんな月日がかかるなんて、どれだけ不器用な人なんだろう。――こぼした苦笑には、そんな意味が含まれていたように見えた。もっと早くにその言葉を聞けていたなら、これほどコンプレックスに悩まされることもなかつただろうに。

同時に燃え爛れるような羞恥心にも駆られていた。会社の道具、飼われた鳥、自分に対する父親の冷たい態度。全て、被害妄想だったのだ。けれど、父親の言葉が「妄想」の世界に浸っていた彼女を現実という「いまここ」へ連れ戻す。

やがて、遠ざかっていく父の背中を眺めているうちに、シャルロットの表情が変化した。

そう、決意に満ちた表情に。

「ねえ、アリス」

「なんです?」

「ごめんね」

「いいえ」

たったそれだけのやり取りだったが、私はシャルロットの想いを理解していた。

シャルロットは私に「ありがとう」と言って、遠ざかる二人を強い語調で呼び止めた。

「ねえ、待って! 僕もいくよ!」

そう言ったシャルロットに、アルベールさんは「その必要はない」と首を横に振った。

「これは私とコゼットが犯した罪の償いだ。おまえが背負う罪は何もない。このまま帰りなさい」

「確かにそうだよ、僕に償うべき罪はない。けど、僕には返すべき恩がある」

「コゼットかい?」

「うん。お母さんは僕を大事に育ててくれた。そのお母さんが犯してしまった罪を、僕はロゼンダさんに許してもらいたい。そして、僕の存在を認めてもらいたいんだ」

そのとき、何の心残りもなく、母は本当の眠りにつけるはずだから、と。

それが、自分ができる亡き母への恩返し。

愛してくれた母のために、シャルロットは最も苦手とする人と対決することを決意した。

「それにお父さんのような不器用な人、放っておけないからね」

それは、娘から父への、和解の言葉だった。

アルベールさんは目頭を押さえ、あふれくる激情を食い止めていた。

「あなたの娘様は、ご立派に成長なされました」

ノエルさんがアルベールさんを見て言った。

「ああ、コゼットは本当によい母親だったんだな。私も彼女を見習わ

なければな

「なら、まず過去の清算から始めましょう」

私はM4のグレネードランチャーから空の薬莖を取り出して、新たな榴弾を装填する。

「しかし、夫人の許に辿り着くには、まずアレをどうにかしないといけません」

「PMCなら私がなんとかしよう。私が彼らを雇ったクライアントだからね。私が盾になれば攻撃してくることはないだろう」

「いえ、アレとはコアを無力化するISです。確かくヴェルフエゴール>と言いましたか。デュノア社の社長なら何か対抗手段を知りませんか？」

「ISのコアを無力化するIS？ わが社にそんなISがあるなんて、聞いたことがないが」

デュノア社の最高責任者ですら知り及ばないIS……。

では、やはりあのIS<ヴェルフエゴール>はデュノア社の新型じゃない。

「もしかしたら、彼女が所属する組織のものかもしれない。詳しいことは私も知らないが、妻の家柄はとも古くてね、世界的に顔が利く有力組織の一員だと聞いたことがある。おかげで、デュノア社がフランスの大手企業になれたといっても過言ではない」

世界的に顔が利く有力組織。私はピンときた。もしそれがへ彼女たち<だとすれば、これは好機かもしれない。組織の情報を得るためにも、是が非でも身柄を押さえたいところだが。

「ISのコアを無力化できるなら、私でも手も足もでないぞ。どうする」

随一の実力を持つフランス国家代表と組んでも、あのISを倒すことは無理だろう。

けれど、夫人と対決するなら、くヴェルフエゴール>との対決は避けては通れない。じゃあ、どうするのか。

「簡単です。コアを停止させられる前に、決着をつけるんです」

先の交戦経験からこのISと相対すると、およそ60秒弱でISが

停止することがわかっている。つまり、60秒間は戦えるということだ。それまでに敵を再起不能にすればいい。

「できるのか、たった60秒で」

現在、最速撃破記録は織斑千冬の48秒だ。ただし、これは《シールド無効化》ありきの話。こちらには《シールド無効化攻撃》もない。けれど、私はこの絶対的な不利をはねつけるような笑みを浮かべていた。

「私に作戦があります」

そう言ったとき、私の背後に一機のISが降り立った。

赤い装甲と身の丈ほどある大剣。復活した相棒を背に、私は続けた。

第74話 60秒の戦い

無人の通路。響く軍靴の音さえ、呑み込んでしまうような静謐な空間と、全方位から圧迫してくる感触は、あたかも深海の底を歩いているようだった。このどこかに、擬態能力を有する蝟が、姿を晦まし、息を潜めている。それを見つけ出すにはセンスが問われる。

ラウラは、感覚を世界と同調させた。

スニーキングモードと呼ばれるそれは、第二次世界大戦の英雄たちによって生み出され、その子供たちによって研磨されていったスキルだ。一昔はCQCと共に特殊部隊の必須スキルとされたが、現在では廃れた技術になっていた。テクノロジーの発達がスキルの体得を不要にしたからだ。

とりわけ〈黒ウサギ隊〉は、その体現といえる。ナノマシン、インフィニット・ストラトス。〈黒ウサギ隊〉がドイツ最強の部隊と謳われる理由は、こういったハイテク装備を運用しているからに他ならない。

ラウラはそれが部隊の強みであると同時に最大の弱みでもあると危惧していた。

ハイテクによって支えられた強さであるがゆえに、失われたときの脆さは痛烈なのだ。姿を消した〈ラファイニング・オクトパス〉に狼狽したフィーネがそのいい例だろう。

しかし、ラウラにその脆弱さはない。最後に勝敗を分かつのは、ハイテク装置の性能じゃない、戦う人間の意思だウイユルと知っているからだ。諦めないこと、勇気を持つこと。それが大切だ。

だから、ラウラは思う。シャルロット、諦めるな、勇気をもて。さすれば未来は変えられる。

——うん、わかってる。

そんなシャルロットの声が聞こえた気がして、ラウラはほくそ笑んだ。ならいい、と。

心配は無用なのだ。ならば、いま自分がすべきことは眼前の敵に集中をすることだ。ラウラは通路を抜けた社員食堂の前で意識を敬て

た。

「いるな……」

スニーキングモードによって、満ちた空気さえ自身の触覚とする今の彼女には、隔てた壁の向こうさえ察知できた。その感覚が、この先に敵がいるとラウラに告げている。

「おまえの擬態技術ハイテクが勝るか、私の感覚センスが勝つか。究極のかくれんぼゲームの始まりだ」

自動扉を潜ったラウラはアサルトライフルを構え、社員食堂を注意深く探った。音、匂い、気配、常人では見過ごしてしまうような些細な痕跡を、言葉では言い表せられない変化を、ラウラは丹念に拾い上げていく。やがてそれらは危険予測という名の「予知」をラウラにもたらした。

「そこか！」

かき集めた「変化」から相手の位置を予測したラウラが、もうひとつある食堂のドアにライフルを向けた。同時にカシユツと扉が開く。現れたのは——クラリツサだった。

「なんだ、おまえか」

警戒レベルをそのままに、予測が外れたことを気にする様子もなくラウラは言った

「フイーネの具合はどうだ」

「大丈夫です。いまは休ませてあります」

そう答え、クラリツサはラウラをバックアップするように銃を構えた。

「それで敵は？」

「居場所の目星はついてるが、まだ見つけられていない。——ところで、つまらんことを訊くが、おまえの好きな声優の名はなんと言ったか？」

「声優？ なんのことでしょうか」

クラリツサが訝しんだ顔でラウラは見る。急にそんなことを言い出したラウラを疑う顔だ。

ラウラは「いや、すこしな。急にすまない」と詫びたあと、腰のフォ

ルスターから38口径の自動拳銃を抜いて、発砲した。――部下のクラリツサに向けて。

次の瞬間、クラリツサは口から血に代わって大量の墨を吐き出した。立ち込める墨の中から現れたのは、蛸と美女が融合した機械だ。

凹凸しかない顔面に表情はないが、わずかに眼窩の淵が揺れている。驚いているようにも見て取れた。おおよそ、なぜバレたのか、わからないのだろう。

「お粗末な擬態だ、タコスケ。クラリツサはいかなる時でも、声優の話題には敏感なのだ」

《ワラエル……》

発せられたマシンボイスは、まるで自分の失態を笑っているようだった。あるいは、おたく根性たくましいクラリツサを笑っているのか。どちらにしろ、欺瞞による騙し討ちは効果が薄いと判断したラフィング・オクトパスは墨のようなスモークを撒き、再び姿を晦ました。文字通り煙に巻いて逃げる気だ。

「ふん、かくれんぼの次は鬼ごっこか。いいだろう。相手になってやる」

ラウラはスモークの流れから敵の進行方向を読み取った。蛸は来た道を引き返そうとしている。ラウラはそのあとを追いかけた。食堂を出て、通路を引き返し、ロビーに追いつめる。ロビーではクラリツサがフィーネの手当を行っていた。

「隊長っ!？」

「構えろ、撃て」

ラウラと共に出てきたラフィング・オクトパスにクラリツサが素早くライフルを構えて発砲する。クラリツサが応戦しているうちに、ラウラは背負っていたM72 Lawを構えた。砲身を伸ばし照準をつける。ラフィング・オクトパスは光学迷彩を発動して姿を晦ませようとした。まずい。姿を消されたら、無誘導のロケット弾では命中させられない。

「させるかー」

クラリツサはライフルの銃口をラフィング・オクトパスの頭上に向

けた。

その先にあつたのは、——巨大なシャンデリアだ。それを吊るす金具に銃弾を浴びせ、ラファイニング・オクトパスの頭上に落とす。

鈍重な衝撃。

それに耐えかねた敵が膝をつく。好機だ。すかさずラウラが対戦車ロケットを照準した。

「これでもまだ笑えるか？」

ラウラが押し込み式のトリガーを押し込む。

推進薬に火がついた66mm口径の成形炸薬弾は、約700度の尾を引きながら、笑う蝮に命中した。爆発。炎上。モンローノイマン効果によるメタルジェットが装甲を吹き飛ばし、暴虐な熱エネルギーが触手すべてを薙ぎ払う。

《ワ、ワラ、ワ、ラエル》

ラファイニング・オクトパスは急所を噛み千切られたタコのようにくたつと膝をついた。

自分の末路を笑っているのだろうか。

どこか悲壮感ただよう声音だったが、ラウラは何の感慨もなく近づき、自動小銃を突き付けた。

「もういい、お前の笑い声は癩にさわる」

と、引き金に指をかけたとき、——ラファイニング・オクトパスが最後にもう一度笑った。

今度はラバーフェイスで覆われた、凹凸おとつだけの顔面に満面の笑みを張り付けて。

《笑う蝮には福来たる》

放たれた言葉の意図をくみ取れず、ラウラは顔をしかめた。しかし、彼女に備わった生存本能——野生の感がラウラに全力で「逃げろ」と訴えかける。まずい。何かが酷くまずい。体の芯からそう感じたラウラは、素早く身をひるがえし、駆け出した。

「奴からはなれろ！」

ラウラがそう命じた直後、——ラファイニング・オクトパスが大層な火を噴いた。

それは捨て身の自爆だった。

ラウラは自分を巻き込もうと襲ってくる火炎に背を向け、出せる全速力で駆け出した。疾走。疾駆。疾風迅雷のごとくフロアをかけ、間一髪のところで受付け台の向こう側に身を投げる。直後、爆風が彼女の頭上を駆け抜けていった。

「それをいうなら、笑う門にはだ、タコスケ」

そう怒鳴るが、爆風の耳鳴りで、ほとんど何も聞こえなかった。

「隊長、ご無事で？」

やってきたクラリツサとフィーネに「なんとかな」と告げる。二人とも服装こそくたびれていたが、負傷らしい負傷はなかった。さすが特殊部隊の人間。とっさの判断力は常人のそれを逸している。

「おまえたちも無事のようなだ。よし、アリスの援護に向かうぞ」

耳鳴りが収まるのを待たず、ラウラは残弾のチェックを始めた。部下もそれに倣う。

傭兵と無人兵器と激戦を繰り広げた直後にあっても、彼女たちに気の緩みはなかった。極度の緊張下で、集中力を維持できる精神力は、さすが特殊部隊といえる。

我ながら優秀な部下だと部下の練度を再認識したとき、アリスから通信が入った。

『ラウラ、私です。デユノアさんを奪還しました』

「そうか。では、我々も撤収する」

『いえ、作戦変更です。私とデユノアさんはこれからデユノア夫人と対決します。それにあたって、あなたたちにやってもらいたいことがあります』

内容を聞くなり、ラウラたちは驚愕をあらわにした。

そして「相変わらず無茶をする」と微笑し、部下にその準備に取り掛かせた。



デユノア社、屋上。ロゼンダはアリスたちが飛び立った空を苛立たしげに睨んでいた。

その苛立ちをなだめるように、無意識に下腹部を撫でる。これは彼女の癖だった。

まだ子供を生めた頃の。

——そう、ロゼンダには胚がない。彼女は子供を産めない体だった。

原因は10年以上まえに、カレッジの男性から受けた暴行だった。以来、子供を産まなくなった彼女は、女としての劣等感を抱き、苦悩し続けてきた。だからこそ、夫の子を授かった愛人に激しい嫉妬心を抱いた。その子たるシャルロットを貶められたのなら、この醜い感情もすこしは晴れようというもの。

けれど、あの女はこれをよしとしないだろう。

そう、いまこの瞬間、量子テレポートでロゼンダの前に現れた赤い髪の少女は。

「ていやあー」

アリスは裂ぱくの気合いと共に《ヴォーパル》を振りかざした。

すかさず、仕えのシヨコラがくベルフェゴール>を展開し、蝙蝠コウモリのような翼でロゼンダを守る。さらに臀部から生えたワイヤーブレードを鞭のように振るう。アリスはそれを《ヴォーパル》で弾き、屋上に着地した。

「あら、どうしました。せつかくうまく逃げおうせたのに。忘れ物でもしたのですか？」

「ええ、あなたにやられた分の仕返しをね。——ノエルさん！」

アリスの叫びと共に上空から舞い降りてきたヘラファール・エトワール<が、ハルバートの矛先をくヴェルフエゴール>に振り下ろす。シヨコラは後方に飛んでかわした。この奇襲をかわすとは、向こうのなかなかの手練れだ。だが感心している時間はない。

《ハニー、コア稼働率78%まで低下。完全停止まであと50秒》

先の交戦経験からくヴェルフエゴール>と相対すると、およそ一分弱でくコア>を停止させられてしまう。つまり、くヴェルフエゴール

〈と戦える時間は60秒しかない。その短時間で決着をつけるには、攻めの一手、攻めて、攻めて、攻めまくるしかない。ノエルは叫んだ。「アリス、右から攻め込め」

プライベートチャネルでそう指示され、アリスは敵の右側方向から攻撃をしかけた。同時にノエルが左側からハルバートを薙ぐ。この挟撃をシヨコラは蝙蝠のような翼で防御した。あくまで防御に徹する姿勢だ。おそらくこっちのタイムリミットを狙っているのだろう。戦闘に積極性が感じられなかった。時間のないこちらにとっては最悪の戦法だ。

《残り40秒！》

迫るタイムリミットに、焦燥感が募る

あと40秒で敵を停止に追い込めなければ、こちらが敗北を喫する。だということに、まだ決定打はおろかダメージさえ与えられていない。数ではこちらが勝っているのに、敗色は濃厚になるばかりだ。

「最後の賭けだ、アリス。私が相手の防御を突き破る」

EMLのパイルバンカーに最大電力を供給してノエルがさげんだ。アリスが「了解」と言ったことを確認し、瞬時加速を発動。ハルバートの先端を〈ヴェルフエゴール〉に繰り出す。

「そんな正面からの攻撃、あたると思うか」

「あたるんですよ」

量子テレポートでシヨコラの背後に回り込んだアリスが、〈ヴェルフエゴール〉を背後から羽交い絞めにする。そこへ瞬時加速で接近してきたノエルが、最大威力のパイルバンカーを打ち込んだ。

音速の7倍の速度で打ち込んだ刺突に〈ヴァルフエゴール〉のシールドが幾重にも波打つ。

わずかながら突破の兆しが見えたが、〈ヴェルフエゴール〉も負けていない。もともと存在し続けることに意味がある〈ヴェルフエゴール〉は、防御能力と耐久性に特化している。第二代最大の打撃力を以てしても簡単には突破できない。

「無駄だ、おまえが私に勝てた試しがあったか」

「ないさ。私はあなたに一度も勝てた試がない。あなたのようにデユ

ノア社に貢献さえできていない」

ノエルはハルバートの柄を強くに握り締め直して、かつての師に大きく吠えた。

「だからせめて、可愛い後輩ぐらいの力にはなってやるさー！」

自分はシャルロットが男装せざるを得なかった事情の、その裏にあつた辛い思いに気づいてやれなかった。国家代表でありながら不甲斐ないと悔やむばかりだ。だが、腐っても国家代表。後悔や無力を理由に立ち止まったりなどはしない。

進む、退かない。その決意の力が――

ヴェルフエゴール

＜怠惰＞に勝った。

防御を突き破られたくヴェルフエゴールが後方へ吹き飛び、屋上に叩きつけられる。

ダメージは与えられた。しかし――

「所詮、第二世代の火力じゃ無理だったな」

〈ヴェルフエゴール〉を停止させるには至らなかった。

《残り30秒。いそいでいそいで、もう時間がない！》

「いや、まだだ！」

ノエルは破損したハルバートを捨て、腰部から二本のアサルトブレードを抜いた。それを転倒したくヴァルフエゴールの両手マニピュレーターに突き刺して「標本」にする。

「ふん、斃せないなら、動きを封じてしまおうという腹積もりか。無駄なことを」

ISのパワーなら、剣で突き刺した程度の拘束など何の意味も成さない。精々数秒とどめておくのが関の山だろう。しかし、その数秒を捻出することがノエルの目的だったことに、シヨコラは気づかなかつた。

「そうだ。これが私の限界だ。だから、あとは後輩に託すとする。――シャルロット！」

ノエルは叫んだ。遙か上空で、この瞬間を待っていた後輩に向けて。



デユノア社支部、上空3万メートル。〈ヴェルフエゴール〉の影響を受けない高度で、シャルロットは新型のヘラファール・リヴァイヴに跨り、その時を待っていた。

『シャルロット！』

きた！——先輩の合図を受け、シャルロットはテスト飛行をかねた巡航をやめた。

アルベールからシャルロットへ渡された新型は、端的に言えば、パワードスーツの形状をしていなかった。空を駆けるツバメのような形状は戦闘機に近く、操縦部は自動二輪車を思わせる。搭乗しているシャルロットも「ISを装着している」というよりは「自動二輪車にまたがっている」ような恰好だ。

〈ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ〉とはまったく異なる形状だが、機首には彼女が愛用していたパイルバンカーが残されていた。それを地上に向けて降下を開始する。敵の防空網を強行突破する戦闘機動——かつて無様に失敗したレイダーマニニューバーだ。

↑——警告：コア稼働率89%まで低下。停止まで53秒——↓

〈ヴェルフエゴール〉の勢力圏に入り、コアが機能を停止し始めるも、シャルロットは速度を緩めなかった。

デュアルジェットのアフターバーナーを点火してさらに加速、隕石のごとく地表へ向かう——。

高度はついに500メートルを切った。

「標的補足。仕留めるよ」

デユノア社屋上で磔刑にされる悪魔^{ヴェルフエゴール}を目視し、シャルロットは機首に装備された《灰色の鱗殻》のカバーをパージした。そして露出した69ミリ口径のパイルの先端を、敵の心臓に定める。

高度400、300、200、100、——ゼロ。

エンゲージ！

シャルロットはパイルの先端を〈ヴェルフエゴール〉に突き立てると、二つの液体火薬を混合させた。化学反応によって打ち出された

超合金製のパイルが敵の心臓を穿つ。その一撃は落下速度も相まって、くヴェルフエゴールもろとも屋上の床をぶち抜いた。

だが、シャルロットは攻撃の手を緩めない。《灰色の鱗殻》のリボルバーを回転させ、次弾を装填。撃発。今度はくヴェルフエゴールと5階の床をぶち抜く。さらに、装填、撃発。シャルロットは《灰色の鱗殻》を連続で使用しながら、次々にくヴェルフエゴールもろとも階層の床をぶち抜いていく。

そして一階までぶち抜いたシャルロットは最後の一発を《灰色の鱗殻》に装填した。

「これでおわり！」

その一撃によって今度は一階の床が抜けた。

その地下へくヴェルフエゴールとくラファール・リヴァイヴが折り重なるように落ちていく。

もともと自家発電所だった地下には、すでに何もなく、肌寒い空気が滞留していた。

あたかも、地獄の様相を呈すその空間に、再び悪魔のうなり声が響き亘る。——パイルバンカーによる六連発を受けてなお、敵は健在だった。

「なるほど、ノエルとあの女が動きを止め、あなたがトドメを刺す作戦でしたか。しかし、やはり威力不足でしたね。このくヴェルフエゴールを通常の攻撃で止めることは不可能です」

もともと、ISに対して絶対的な力を持つくヴェルフエゴールは、戦う必要がない。そこに存在しているだけで相手を屈服させられるため、戦闘能力より耐久性が強化されているのだ。その前では最強の打撃力を誇る《灰色の鱗殻》でさえ、突破できない。

「みたいですね。——でも、僕の友達は、その不可能を可能にするよ」

それを教えてくれた友人の名をシャルロットは目一杯さげんだ。

「ラウラー！」

デユノア社。アリスから指示された役割をこなした黒ウサギ隊は、フロントから退避して、その合図を待っていた。その合図が、今しがたラウラの耳に飛び込んでくる。

『ラウラー！』

友人の声を耳にして、ラウラは部下に確認の視線をやった。

クラリツサとフィーネが頷く。——それはPMCの退避も終わったことを告げる首肯だ。

「うむ」

ラウラは頷き返し、手に持っていたコントローラーの安全装置を解除した。

そして、起爆装置のスイッチをオンにする。次の瞬間、デユノア社内爆発が起こった。

耳を劈くような爆音。まるで自分を押し潰さんと降り注いできた瓦礫の山々に、シヨコラは「これが狙いか」とシャルロットを見る。シャルロットは、肯定の微笑を浮かべた。

そう、アリスは最初から<ヴェルフエゴール>の破壊など狙っていなかったのだ。ビルの重量で<ヴェルフエゴール>を地下に閉じ込めること。それが目的だったのだ。

いくらISのパワーがすさまじいと言っても、ビルの重量を持ち上げることはできない。埋もれてしまえば、ISといえど這い出すことは不可能だ。

「私の動きを封じるために、ここまでするのか……!」

自分を封じ込めるために、ビルひとつを潰す、その大胆さと不敵さに、シヨコラは戦慄していた。

これに関してはシャルロットも同感だった。非常識だとさえ思う。しかし、勝利のためにあらゆる手段を用いることは、戦術の基本だ。それに大胆であればあるほど相手に悟られにくい。現に、過剰だから(いささか過剰ではあるが)シヨコラはこの作戦の真意を見落とした。

「だが、このままではあなたも！一緒に埋もれる気か!？」

〈ヴェルフエゴール〉は耐久性に特化したISだ。絶対防衛や保護機能もある。しかし、新型〈ラファール・リヴァイヴ〉は〈ヴェルフエゴール〉の影響でいずれ機能は停止する。このままでは命に係わる。

「その気はないよ」

シャルロットが朗らかに言うと、その背後に赤いISが、量子の光と共に現れた。アリスだ。アリスは何も言わず、シャルロットを抱きかかえ、再び量子テレポートでどこに消えていった。

ひとり地下室に取り残されたシヨコラが呆気にとられる。

「はは、大したものだ」

〈ヴェルフエゴール〉が持つ絶対的な優位性を非常識な形で覆した少女に、シヨコラは称賛にも似た笑みを浮かべた。同時にこう思う。アリス・リデルなら、組織に逆らったロゼンダをあの女から守ってもらえるのではないかと。

「申し訳ありません、奥様。あとは彼女にお任せします」

覆いかぶさってくる瓦礫に〈ヴェルフエゴール〉がどんどん埋まっていく。耐久性に特化したISであるゆえ、人命こそ奪われなかったが、身動きはほとんど取れなくなっていた。

♡

◆

+

♠

量子テレポートでデユノア社から脱出した二人は、ラウラたちへ黒ウサギ隊〈〉が待機する現前へと着地した。同時にコアが完全停止し、〈赤騎士〉が強制解除される。タイムリミットギリギリのタイミングでの脱出だったため、二人は転倒する形で地に転がった。

「大丈夫ですか、アリス殿、デユノア殿」

クラリツサとフィーネの手を借り、ふたりは「どうも」「ありがとう」と立ち上がる。

立ち上がった二人の背後ではデユノア社の支部が倒壊していた。

「爆弾を仕掛けた私がいうのもなんだが、見事な爆破解体だな」

綺麗にダルマ落とし状に崩れていくさまは、どこか芸術的でさえあった。さすが破壊工作に長けた特殊部隊。爆破物による爆破解体も見事なものだ。

「それにしても、許可を得ていたとはいえ、大胆な真似をしたものだ」
「実は私もそう思っています。けれど、それだけ厄介な相手でした」

正直、こんな手段に訴えなければならぬほど、今回の敵の能力は厄介だった。もしあんなISが量産されるような事態になれば、世界のパワーバランスは再び崩壊するだろう。できるなら、今すぐにも掘り起こして解体してしまいたいぐらいだ。

「だが、それがISの《単一仕様能力》なら、量産化されることはないだろう」

「だといのですが」

ぜひそうあつてもらいたいものだ。

ましてやそんなISが〈彼女たち〉の手に在るなど、考えたくもない。

「あとで回収して、解体するしましょう。けれど、そのまえに——」
アリスは空を仰いだ。見上げた先にはPMCのヘリ。その中にロゼンダの姿が見えた。

崩壊まえにPMC隊員と共に離陸したのだろう。そのヘリはビルを挟んで裏手の方向に降下していく。

「シャルロット、行きましよう」

アリスはシャルロットを見た。

〈ヴェルフエゴール〉は排したが、継母ロゼンダ・デュノアとの決着はまだついていない。彼女との和解あるいは何かしらの進展を得なければ、この戦いは終われない。

「うん」

シャルロットは恐れず強く頷いた。かつて、一夏の部屋で自分の生い立ちを語ったとき、彼女は無力な雛鳥のようだったけれど、今の彼女は自分の翼で大空に飛び立てる強さを持っている。

第75話 相対性幸福論者

PMCのヘリの中で、ロゼンダは崩壊していくビルを茫然と眺める。まさかこんな手段で〈ヴェルフェゴール〉を封じるとは。仕えのシヨコラも手練れではあったが、相手が悪すぎたか。

同時に、あの中に自分に仕えてくれたシヨコラがいる事実には胸が痛んだ。

フランス代表、そして会社のプロスタッフとして、デュノア社の繁栄に大きく貢献してくれた彼女。彼女がもたらしたノウハウなくしてクラファール・リヴァイヴの誕生はなかった。そして彼女の献身にどれだけ助けられたことか。

「奥様、着陸します」

雇ったPMCがそう言い、ヘリをゆっくりと下降させていく。

着陸した10メートル先では、夫アルベール・デュノアが待っていた。隣にはフランスの国家代表ノエル・ラ・フォンテーヌがいる。コゼットが好きだったワイン酒造家の娘だ。

ロゼンダは風圧で乱れる髪を押さえながら、その夫の前へ出向いた。

「さんざん私をないがしろにしておいて、今更なにをしにきたの」

自分が苦しんでいるときも、会社のことしか考えていなかった夫を、妻は痛烈に非難した。

ナイフのような鋭い言葉。それをアルベールは真摯に受け止める。娘が現実と向き合う勇気を見せたのだ。親の自分が逃げるわけにはいかない。

「私は一度おまえを裏切った。それを許してくれとはいわない。ただ償いをさせてほしい」

そのためにココへ来た。——強い決意を秘めた夫の言葉を、ロゼンダは怒声ではねつける。

「どうせ、言葉だけよ。恋人のときは甘い言葉をささやいて、結婚のときは愛を誓った。なのに、結局、あなたは私を裏切った。信用できると思うの」

「ああ、そうだな。私はおまえを傷つけた。何をされても文句は言えないし、言わない。だが、私とコゼットの裏切りは、シャルロットを傷つけていい理由にならない」

なおも愛人の子を慮る夫に、ロゼンダが唇をかみしめる。

あふれ出る強い猜疑心が、彼女の桜唇を自傷していた。

「……わかつているわよ。でも、あの女だけが子どもを授かって、幸せになるなんて、耐えられないの！ 私は子供を産めなくて、こんなにも苦しんでいるのに！ あの女も苦しまなきや、不公平じゃない！」
今まで心の底に溜め込んできた不満の澱が、ここにきて一気に噴き出す。

すると、声を枯らさんばかりに激情を放つ彼女をなだめるように、やさしい言葉が響いた。

「ううん、お母さんは苦しんでいたよ」

そう言ったのは、アルベールの背後から現れたシャルロットだった。

「お母さんはずっと苦しんでいたよ。——「なんでわたしにはお父さんがいないの」って聞くと、お母さんはいつも辛そうな顔をしてた。胸を強くつかんで。幼い頃の僕はその意味を理解できなかったけど、いまならわかる。あれは罪悪感だった」

愛は尊いけど、すべての免罪符にはならない。罪と知りつつも、愛ゆえに婦徳を犯したコゼットはその罪悪感に心臓をつかみ、苦しんでいた。それだけじゃない。罪から生まれた子だったとはいえ、シャルロットを愛していたから、不徳の罪と、我が子を愛する感情の挟間で、身を裂かれるような想いをしていた。

あなただけが苦しかったわけじゃない。そう母を擁護する娘を、ロゼンダは唾棄した。

「だからなに？ 罪を感じていても何もしないなら、自覚がないのといっしょでしょ。彼女はやさしいふりをした臆病者よ。結局、罪の意識から逃げて何もしなかった。自分で自分を罰せないから、私が罰を与えてやろうというんじゃない」

ぶわっとロゼンダの瞳に再び感情の炎が昇る。やがてその炎は熱

を上げて、狂気の火炎へと変貌していった。

だが、シャルロットはその炎を消そうとしなかった。

「そうだね。罪の意識を持つていても、償う気がないんじや無自覚と一緒にだよ。僕もそう思う。お母さんはちやんとあなたのままで罪を認め、謝るべきだったんだ。償おうとしなかったお母さんを罰することは、あなたに許された権利だと思う。でもね、お母さんが受けるべき罰を僕が受けることは、やっぱり違うよ」

断罪を肯定しつつも、咎を拒むシャルロットを、ロゼンダは怪訝そうに見た。

「母に代わって咎を受ける気がないなら、あなたは何のために戻ってきたというの？」

「僕がここに来た理由は一つ。それはね——」

シャルロットは臆することなく継母の前に出て、こう言った。

「あなたを『幸せ』にするためだよ」

ロゼンダの幸せ。

かつて母が自分にそう望んだように、シャルロットはそれをロゼンダに望んだ。

「あなたは不幸な人だ。だから、あなたこそ幸せになるべきだよ」

暴漢に襲われ子供を産めなくなってしまったこと。最愛の夫に裏切られたこと。その相手が愛娘を授かったこと。度重なる現実に耐え切れず、彼女はすべての人間を断罪の名の許で不幸にしようとした。

人の不幸は蜜の味。その蜜の甘さが辛い現実を忘れさせてくれる、そう思ってた。

悲しきかな、人は他人の不幸を喜ぶ生き物だ。けれど、他人の幸福を妬んでしまうのは、自身に「幸せになりたい」という気持ちがあるからだ。幸せの願望があるから、人は他人の幸福に嫉妬する。

だから、シャルロットは思った。

ロゼンダが復讐を望むのは、幸せになりたい気持ちの裏返しでは、と。

その彼女を幸福にできたなら、この不毛な憎しみ合いもきつと終わ

らせられる。そして、幸せの許に開かれた心の安寧が「寛容さ」を生めば、自分という存在を受け入れてもらえる。そのとき、母は何の憂いもなく本当の眠りにつけるはず。そのために彼女はここにやってきた。

「あ、あなたは自分を陥れた女の幸福を願うというの……?」

不幸のどん底に貶めようとした少女からの言葉に継母は怯んでいた。

その彼女の首に、アリスがくれた幸福のメダリオをかける。

「うん、僕はもう幸せだから。僕はこの温かな気持ちをあなたに分け与えたい」

人を幸せにするには、まず自分が幸せにならないといけない。裕福とは、誰かに分け与えられるだけの幸を持っていることだから。いまシャルロットはありあまる「幸せ」に包まれている。

危険を顧みず戦ってくれた友だち。自分を愛してくれた両親。力を貸してくれた先輩。

これほど多くの人に想われている自分は間違いなく幸せ者だ。

母がシャルロットの幸せを願ったのは、その幸福で人を幸せにしてほしいと思ったからだろうか。本当のところは、シャルロット本人にもわからなかったが、まっすぐとロゼンダを見据えてそう言ったシャルロットにはコゼットの面影があった。臆病だったけど、やさしかった女性の面影が。

「ロゼンダ、相手の幸福を憎み、不幸を望んでも、幸せになんてなれない。相対的な幸せは本当の幸せじゃないんだ。だから、私は他人の不幸を望むより、自分の幸せを望んでほしい。おまえがそうなれるよう、私は全身全霊をかけて尽くそう。だからもうやめるんだ、こんなことは……」

ロゼンダは俯き、沈黙した。ただ立ち尽くす彼女のつま先にポタンと落ちた滴がはじける。涙だった。苦しめようとした、あの娘は自分の幸せを願った。そんな子を貶められるほどの狂気をロゼンダは秘めていなかった。

「ロゼンダ、もう一度言おう。私におまえを幸せにさせてくれ」

ふるえる妻の肩を抱き、アルベールは言った。

「それはつぐないのため？」

「それもある。だが、これほどまでにつよく償いたいのは君が愛しいゆえだ」

「コゼットより？」

「わからない。愛もまた相対的に測れるものじゃない。ただいえることは、彼女は思い出の人だということだ。彼女は過去というアルバムの一ページ。未来は共に生きられない。でも、君となら生きられる」「私たちの愛には未来があるってこと？」

「ああ、私たちはこれからも愛を紡げる。どんな大きい愛にだってできるはずだ」

コゼットを心から愛した。それは事実であり、真実だ。だが、アルベールは「かつて愛した女性」として気持ちにピリオドを打ち、思い出という心の書架に収めることにした。妻——ロゼンダとの物語を再び紡ぐために。

「ふふ、本当にあなたは口がうまいわね」

「うまくなければ、大企業の責任者はつとまらんよ」

「なら、責任者としてこんな気持ちにした責任をとってね」

「ああ、もちろんだ」

愛する人が戻ってきたような気がして、ロゼンダは微笑んだ。

心の奥底から温かいものが湧き上がってくる。

体中が温まっていく感覚に、これが「幸せ」なのだろうとロゼンダは思う。それは他人の不幸から搾り取った蜜より甘く感じた。

「ねえ、瞳をつぶって」

と、ロゼンダ。あまくささやくようなお願いに、アルベールは静かに瞳を閉じる。これから行われる事に、周囲もなんだか微笑ましいような、気恥ずかしいような顔をした。

しかし、ロゼンダは、一歩身を引き、——こぶしを振り上げた。掛け声をつけたなら「どりゃ」と聞こえそうなパンチを喰らい、アルベールがしりもちをつく。

てつきり口づけが交わされるものだと思っていた一回は「なッ!？」

と茫然とした

そんな人たちを笑うようにロゼンダは爽快に言う。

「浮気の件、これで全て水に流してあげます」

満面の笑みでそういったロゼンダに、アルベールは苦笑した。てつきり和解のキスだと思っていたのだ。——だが、そうだ、自分には受けるべき制裁が残っていた。それを受けて、ようやく自分の罪は贖われるのだ。

「キスされると思ったの？ 人生、そんなに甘くはないわよ、ふふ」

人生はボンボンのように甘くない。けれど、ロゼンダは夫に甘いのもかもしれない。

不徳の罪をたった一発の鉄拳で許してしまうのだから。これまさに鉄拳制裁ならぬ鉄拳正妻。

「しかしながら、なかなかいいパンチだった。まだほほが痛い」

殴られた頬を撫でながら、アルベールは言った。

「全力で殴ったんですもの。——ほら、立ちなさい。手当してあげるから」

尻餅をついたままの夫に手を差し出す。「やさしく頼む」とアルベールも手を出す。

その二つの手は、真の和解を示すように握られるはずだった。

一発の銃声さえ聞こえてこなければ。

和やかなムードを引き裂くように、それは響き亘った。

それと重なるように、ロゼンダの体がアルベールの前にもたれかかってくる。

「ロゼンダ……？」

不振がりながら、夫が寄りかかってきた妻を支える。

支えた手は赤くてらてら濡れていた。それが血だと気づけたのは、彼女の腹部に銃傷を見つけたからだだった。

撃たれた。

その事実が場を凍りつかせる。

あたかも時間が停止したような空間で、最初に行動を起こしたの

は、アリスとPMCの兵士だった。

両者はM4とFN—SCARを同じ方角に構えた。

その方角から一人の女性がやってくる。全身を黒色のウエディングドレスに包み、顔をベールで隠した漆黒の花嫁だ。手にはエングレーブが刻まれたリボルバー式の拳銃が握られている。その銃口から漂う硝煙が「彼女が撃った」ことを明確にしていた。

あまりに場違いすぎる漆黒の花嫁の登場に、私は幻を見ているような気がした。

だが、夫人から臭う血の香りが、目の前の出来事が現実であると証明してくる。眼前の花嫁は実在している。その花嫁に撃たれた夫人が息も絶え絶えに言った。

「ご、ご機嫌、麗しゅう、へお母さま、わざわざ、あなたがお越しになるとは……」

漆黒の花嫁は母性的なやわらかい声音で、あたかも子を叱るように言った。

「ええ。誰かさんがくヴェルフエゴール>を持ち出し、果てにはその能力を披露してしまっただけですもの。そんな悪い子には、私が直々にお仕置が必要でしょ?」

<ヴェルフエゴール>。その単語から、彼女は夫人が帰属する組織——つまりは「彼女たち」の人間であるようだ。それも高貴な物腰と、夫人を子のように接する振る舞いから、組織の上位者と推測できた。その上位者に、アルベールさんが強い怒りをぶつける。

「妻がいかなる悪さをしたか知らないが、仕置きと呼ぶには、やりすぎではないか?」

「あら、組織を統括するために、規律を乱した人間を罰することは必要な処置よ。大手企業の責任者ならわかるんじゃないやなくて?」

「だとしても、私は部下を撃ったりしない」

「それは、あなたの組織が小さいから。私たちの組織は、世界に影響を及ぼすほどの権力を有する。だから、組織の秩序は厳格に保たれなけ

ればならない。そのためなら、時に生殺与奪の権利を行使する。――
あなたたちの世界もそうやって守られているのよ。正義の名の許に、
どれだけの人間の命が奪われているか、知らなくて？」

秩序を乱したものには制裁と報復を。そうやって世界は守られて
いる。

意志なき戦争は悪だが、平和のための戦争は許されるのかもしれない。
だとしても。人殺しが正当化されることはない。そんな時代も
こない。私は夫人をかばうようにM4を構えた。

「国家の安全保障と、個人の殺人を同一に語るじゃありませんよ。――
シャルロット、ロゼンダさんを。私はこいつを縛り上げて、一夏に
差し出す」

彼女が「彼女たち」の首魁なら、これは千載一遇の好機だ。彼女を
捕らえられれば、すべてを終わらせられる。「うん」と応急処置に入っ
たシャルロットを背に隠し、M4の引き金に指をそえると、花嫁はや
んわりとした喜色に富んだ声を上げた。

「まあまあ、アリス。大きくなつたねー」

向けられた好意に、わずかなに戸惑いながらも私は発砲した。

しかし、放たれたライフル弾は、奇術のようにことごとく逸れて彼女
に当たらない。全ての弾が歪曲して逸れていく。フルオートでも一
発さえ命中しなかった。

「どんな手品です……」

驚く私の許に、花嫁がゆつくりと近づいてくる。私はもう一度M4
の引き金を引いたが、かちんと空しい音が鳴るだけだった。

弾切れ。するとPMCの隊長が「こいつをつかえ！」と自分のFN
―SCARを投げてくれた。私はありがたく、投げられたアサルトラ
イフルを受け取り、花嫁に構えた。

発砲。

銃声が辺りに響く。

放たれた銃弾は地面に命中していた。銃身を押さえつけた花嫁の
手によって。

睨む私に、花嫁が淡い桜色の唇をそつと寄せてこう呟く。

「自分の親に、こんな物騒なモノを向けてはダメよ」

我が子を叱るように。やさしく。

暖かさを秘めたその言葉に、既視感を覚えた私は、花嫁を突き飛ばした。

「あいにく、私の両親はすでにいない。あなたの胎から生まれてきた記憶もない」

「あら、冷たいことをいうのね」

女はくるくる回りながら私から離れていく。構わず撃つが、やはり弾は逸れて当たらない。

花嫁は持っていたレースの日よけ傘を開いて、空に浮かびあがった。

「さて、お仕置きも済んだし、くヴェルフエゴールも回収できたよね」

花嫁の背後では不思議なできごとが起こっていた。――くヴェルフエゴールを押し潰した瓦礫が重力を忘れたように浮遊していたのだ。その中にくヴェルフエゴールも見える。

「では、わたしは行きます。みなさん、ごきげんよう。そして、私の可愛いアリス。また近いうちに迎えに行くわ。そのときはローズマリーも一緒に。楽しみにしててね」

私の母を語った花嫁は、最後に表情を覆い隠していたヴェールを捲り上げた。

ヴェールの下から現れた素顔は、もう一人の私だった。

絶句する私たちに、やさしい笑みを向け、花嫁は春風に踊るたんぽぽの綿毛のように飛んでいく。私はそれに銃を向けることができなかつた。自失茫然だった。けれど、立ち込める血の匂いと悲痛な叫び声が、私に今すべきことを教えてくれる。疑問に支配されている暇はなかつた。

「ロゼンダ、しっかしろ！」

顔面蒼白の夫と、苦悶の表情を浮かべるその妻を見て、吐き気によ

うな疑問を飲下する。

いまは彼女を救うことに集中しなければ。

私は救急キットを取り出し、止血パットを傷口に押し当てる。しかし、生気はどんどん薄れていくばかりだ。もしかしたら持たないかもしれない。そう思った私は立ち位置をシャルロットに譲った。

ロゼンダさんは虚ろの瞳で夫とシャルロットを見据えた。

「……あなたに、……ひどいことをした、罰かし……ら……ね」

シャルロットは髪を振り乱した。

「違うよ！　だって、あなたには何の罪もなんだから！」

シャルロットは叫んだ。弱りゆく継母の姿が、亡き母と被っているのかもしれない。

そうしたのが、私の母かもしれないという考えに、私は胸が痛んだ。

「あり、がとう、シャルロット。夫、と変わつて」

「なんだ、ロゼンダ」

「——あなた、コゼットに言伝、ある……？　一緒の場所、いけるか、わからないけど……」

ほとんど生きること諦めたような言葉だった。けれど、残された者への気遣いにあふれた言葉でもあった。本当ならもう一言しゃべることさえ辛はずなのに。

アルベールさんはこみあげてくる感情を、必死で自制して言った。

「言伝など不要だ。自分が死んだ後に伝えに行く。それより未来の話をしよう。君との未来の話だ。そうだ、私ときみの子供を生んでくれる代理母を探そう」

「そ……う、ね。うまれ……子が、男の子なら、シャルル、ふう……、ふう……」

「もういい、もう、しゃべるなッ」

言ったことも満足にしゃべれない妻に、夫は感情を自制できず、嗚咽を漏らしていた。

シャルロットは堪え切れず、ノエルさんの胸を借りていた。そんな二人に私はどんな言葉をかけていいかわからなかった。——ただ、助かってほしいとだけ思う。

た。そう願いながら、空を見上げると、会長が操縦するヘリが下りてき

第76話 臆たるへりリス

文化祭の二日。あのあと、ロゼンダさんはIS学園の医療区画に搬入された。

IS学園の医療区画には、最新の医療機器とそれを扱う医療スタッフが揃っている。おかげで一命を取り留めることができたが、意識はまだ戻っていない。いまは夫とシャルロットが付き添っている。

この一件については公開されなかった。知る人間は一部のみで、学園とエキスポの運営委員会もイベントの続行を決めた(ただし、警備の強化はされた)。学園の文化祭も中止されずに、クラスの出し物も何もなかったかのように続いている。

ただ、私だけを除いて。

あの時に感じた疑問が心奥に沈澱していて、私は初日のように文化祭を楽しめないでいる。喫茶店にしても、皿を二枚も割ってしまうありさまだ。らしくない失敗をする私を氣遣ってか、ラウラは「気分転換でもしてきてはどうか」と言ってくれた。

ということ、私はラウラの好意に甘え、一夏と共にISエキスポにやってきた。

場所は第二アリーナ。普段はISの模擬戦や試合に使われるアリーナだが、現在はレーザービームのフォログラムとオーグメントリアリテイで彩られ、近未来都市のような様相を呈していた。

「で、どこからまわります?」

と、入り口で配布されていたパンフレットを広げる。

会場内は、企業ブース、商品ブース、飲食ブースの三つに区切られており、企業ブースではデユノア社やナイトソード社など大手IS企業を筆頭に30企業がそれぞれの商品を紹介し、商品ブースではIS関連グッズが販売されている。飲食ブースでは軽食が食べられるらしい。

「そうだな。——確かココのへナイトソード・ブラックスミスって、セシリアの」

「ええ、くブルーティアーズ」の開発元ですね。行ってみます?」

「おう、そうだな」

というわけで、私たちはヘナイトソード・ブラックスミスへのブラスへ向かう事にした。

ヘナイトソード・ブラックスミスの展示ブースにやってきた私たちを迎えたのは、たくさんの人ばかりだった。その多くが首からカメラをぶら下げ、しきりにシャッターを切っている。

何を撮影しているだろうかと覗きこめば、被写体はセシリアだった。それもエナメルが入ったミニスカートに、チューブのトップ姿の。

「あ、一夏さんとアリスじゃなくて。——ちよつと失礼いたしますわ」カメラ小僧の撮影会を中断し、キャンギャル衣装のセシリアが私たちの前にやってくる。

「もしやふたりでエキスポ見学に？」

「ええ、休憩をもらえたので。セシリアこそ、その格好は？　というか何をしているのです」

「わたくし、ヘナイトソードへのキャンペーンガールを務めておりますの」

と、ボディラインをS字にしてみせる。

綺麗なくびれもさることながら、曝け出されたおへそがキュートだ。

「そしたら『ぜひ写真を撮らせてほしい』と頼まれました」

「それである人だからか。セシリアは綺麗だからな。被写体になりたい気持ちはよくわかる」

と両手でファインダーをつくり、そこからセシリアを覗き見る一夏。

「もう一夏さんたらお上手なんだから。一夏さんが御所望なら、わたくし、一夏さん限定の撮影会を開いてあげてもよくなってよ？　うふふ」

ほんのり頬を赤め、しなを作って青い目でウィンクするセシリア。

美女と二人で撮影会。男なら心躍るシチュエーションだが、一夏は真面目な顔で言った。

「とはいっても、いくら被写体がよくも俺の撮影技術じゃなあ」

と、まじめに考えるあたり、実に一夏らしい。

「まあ、機会があればな」

「はいな、よいロケーションを用意しておきますわ。——では、ブースの方に案内いたします」

セシリアの案内で、私たちはヘナイトソード・ブラックスミスへのブースに入った。

まず目に入ったのは10平方の大きなステージに設置された80インチの大型バックスクリーンだ。その画面には同社の製品である第二世代型IS<メールシュトローム>の映像が流されている。

「わが社は、かのヴァルキリーであるスコール・ミューゼルにも専用機を提供しておりました。現在ではミューゼル氏が立ち上げたヘミューゼル社とも提携を結んでおり、ヘヴァルキリーへのノウハウとわが社の技術力は、時代を駆ける女性たちの可能性をさらに飛躍させていくでしょう」

ステージではスーツ姿の女性が映像のまえで企業のPRを行っていた。

スコール・ミューゼルとの連携を推しているのは、ヘヴァルキリーがISというブラックボックスから技術を引きだす媒介に適した人材だと言われているからだろう。そんな人間を抱えていることは、それだけで企業にとって大きなセールスポイントになる。

「スコール・ミューゼルって、確か千冬姉と同世代のIS操縦者だったよな」

「ええ、織斑千冬と同じく、IS黎明期に活躍された操縦者ですね」

そう答えたのは私じゃない。背後から聞こえた声だ。一同が振り向いたら、イギリスの国家代表のローズマリーが立っていた。ローズマリーは「ようこそ、ヘナイトソード・ブラックスミスへ」と歓迎の意を表し、続けた。

「スコール・ミューゼルは、まだISについて理解されていない頃に活

躍された、黎明期の操縦者のひとりです。織斑千冬やジェニファア・J・フォックス、アリーシャ・ジョセスターフ、シヨコラデ・シヨコラータ、李紅梅（フー）、ロベルティーン・シャロンホルスト、ログナー・カリーチェ、第二世代型の開発には彼女たちがもたらしたノウハウがたくさん盛り込まれておりますし、今でこそ当然のように使われている戦闘機動の多くは彼女たちが開発したものです。一夏さんが得意とする瞬時加速を考案したのは織斑先生よ」

「そうだったのか!？」

「織斑先生を始めとした黎明期の操縦者が今あるISの土壌を作ったといっても過言ではありません。だから、黎明期の〈ヴアルキリー〉の称号を持つ操縦者はとても敬られるの」

「へえ、だから、千冬姉は人気なのか」

一夏は改めて姉のすごさを実感するように頷いた。

「ところで、織斑一夏くん。当ブースではビットコントローラーを体験できるコーナーも在ります。よければ、ご覧なりませんか」

「え、ビットの操作ですか」

「ええ、こちらです」

ローズマリーに案内された場所は、リングやブロック、バルーンが置かれた小型アスレチックのようなスペースだ。隅のテーブルには《ブルーティアーズ》を縮小したような小型ビットと〈ビューマンインターフェイス〉が並べられている。

「この小型ビットを操作して、ゴールまで運べたらクリアです。やってみますか?」

「じゃあ、やってみます」

一夏はローズマリーからヘッドセットを受け取る。セシリアが装着している〈イメージ・インターフェイス〉の簡易版だ。ローズマリーはそれとビットをリンクさせて、一夏に渡した。

「では、どうぞ」

受け取った一夏が「飛べ」と念じると、ビットは浮かび上がった。

「無事、ゴールまでたどり着いたら景品が出ますので、がんばってください」

「本来はヘナイトソード・ブラックスミスの特性ステッカーですけど」セシリアはほのかに頬を赤め「一夏さんがゴールできましたら、特別に頬にキスしてあげますわ」

がんばってくださいまし、と微笑むセシリア。それにテンションの上があった彼に感応したビットが、いつきに高度を上げた。ひやつほーいと言わんばかりに。

「うふふ。一夏さんたらそんなに喜ばなくても」

「違うんだ、セシリア。決してそんなつもりは……。いや、今は集中だ、集中」

一夏が平常心を取戻し、ビットの制御に専念する。

コースはなかなか難関な仕様だ。まずS字に設置されたリング。それを抜けたらブロックの障害があり、最後にバルーンを破壊して、ゴールとなっている。

一夏はビットに意識を集中させて、S字に設置されたリングの輪くぐらせていく。その彼をセシリアが熱心に応援する。そんな二人をローズマリーが見守り、さらにその姉を私が眺めていると、気づいたローズマリーが「ん？ どうしました？」と首をかしげた。

優しく向けられた微笑みに、ふと心の奥底で燻っていたいろんなものの滲みでてくる。

「ローズマリー、実は私の母を名乗る女性と出会いました」

深刻な面持ちで語った私に、ローズマリーは「そうですか」とそれだけ言った。

簡素な姉の対応に、私はわずかないらだちを感じる。

「それだけですか？ ほかに思うことはないんですか」

「その女性は名乗っただけでしょう。名乗ることなど誰にでもできます」

「でも、私に似ていました。青い瞳で、紅い髪でした」

「アリス、幻想に惑わされてはいけないわ。姿かたち、名前なんて、どうにでも偽装できる。大事なのはその人の中身、本質です。あなたが会ったという母を名乗る女性に、あなたが知る母の面影がありましたか？ あなたが継ぎたいと思った意思を感じられましたか？ 今一

度、思い出してみなさい」

私は視線を落とし、あの時のできごとを思い返してみる。

硝煙にまみれた拳銃の花嫁姿。はたして、そこに優しかった母の面影はあっただろうか。——いや、彼女から垣間見えたのは歪んだ何かだ。だから、気味が悪くなって突き放した。

「だとしたら、あなたの前に現れた女性は偽物です。酷を言うようですが、お母様はもう亡くなられております。あなたが会ったその人間の目的は、死者の姿を借りて生者を操ることでしょう。そんな彼女の思惑に乗ってはなりませんよ」

ローズマリーはそう言い切った。

それでも胸の内に靄は晴れなかった。姉の言葉より、目の前に現れた女性の言葉を信用してしまうのは、なぜなのだろう。わからなくなつて黙り込む私にローズマリーが続ける。

「私の言葉を信じられないのは、あなたの中に『母が生きていてほしい』という願望があるからではありませんか」

私は姉の顔を見た。そうか。私はどこかで、お母さんに会いたいと思っているのだろう。そして、本当は目の前に現れた女性が母であつてほしいと思つている。でも、まるで人が変わっていたから私は心を乱されているのか。

でも、人が変わったとはいえ「生きていてほしい」と思う感情は、娘として当然じゃないだろうか。なのに、ローズマリーはなぜ「母の生存」を聞いて平静でいられるのだろう。

直接、会っていないから？ いや、断固たる確証があるのだ。でなければこれほど言い切れはしない。私がローズマリーにその根拠を視線で求めると、彼女ははつきりと言った。

「私はその正体を知っています」

その言葉に私の疑問や表現できなかつた感情が吹き飛ぶのを確かに感じた。

だれなんです。——そう、詰め寄ろうとしたとき、ブースのほうから一夏の声が聞こえてきた。

「お、やったぞ」

私たちが横目で視線をやると、一夏が見事にステージをクリアしていた。だが、そんなことはどうでもよかった私は姉に視線を戻す。けれど、ローズマリーは何事もなかったように一夏の方へ歩いていった。

「おめでとうございます。クリアするなんて、すごいではありませんか」

「あ、いえ、そんなことは」

「どうでしょう、うちの社に来てテストパイロットをしてみませんか？ 歓迎いたしますよ」

「いえ、遠慮します」

すっかり商売モードのローズマリーに、ちやっかり断る一夏。そんな一夏のほっぺにちやっかりチューするセシリア。

なんだか、いまさら聞ける雰囲気でもなくなり、私はその不満から髪をぼりぼりとかいた。そのとき、ポケットに入れていたケータイがブルルと震えた。発信相手はシャルロットだ。

「どうしました」

訊くと、シャルロットは慌てた声で言った。

『ロゼンダさんの意識が戻ったって！』



連絡を受けて医療区間にやってきた私は、シャルロットの出迎えを受け、ICUに入った。

病室内ではアルベルさんが妻の看病にあたっていた。一晩中寄り添っていたため、顔はやや疲れて見える。彼に軽くあいさつして「様態は？」と尋ねると、安心した様子で「安定だ」と答えた。確かにベッドで横になる夫人の顔色には生気が宿っている。

「ご機嫌よう、夫人。気分は如何で」

「最悪かしらね。——ワインはダメと言われたわ」

私は笑った。抑揚に欠いた声音だったが、意識ははっきりしてい

る。

これだけ口が訊けたら、質問するのに十分だ。

「いきなりですが、夫人。あなたに聞きたいことがあります」

病み上がりの女性を詰問することは心苦しいが、いつ症状が悪化するとも限らない。

アルベールさんが「今でなければならぬか」と訴えてきたが、夫人は「いいの」と目で制した。

「ヘリリス」についてね。訊かれると思っていたわ。黙秘する義理もなくなつたし、答えましょう」

「情報を提供していただければ、それなりの対価を払います」

そう答え、私はそばにあった椅子を持ってきて腰かけた。

「まず、ヘリリス、それがあなたの所属していた組織の名前ですか？」
「そう。旧約聖書に登場する原初の女性に由来している」

神さまは自分に似せた二人の人間を創造した。それがアダムとヘリリス。イブはヘリリスが楽園を出て行つてから、アダムの脇腹から作られた二人目の女性だ。そのあたりの宗教解釈はさまざまだが、いまは置いておく。

「ヘリリス」の創立は、18世紀のフランスまでさかのぼるわ。1789年、特権階級による封建主義に不満あらわにした国民の手によって、社会制度は王政から立憲制と移りかわつた」
「フランス革命ですね」

「そう、その革命によって「人間と市民の人権宣言」が採択され、人々はさまざまな権利を得たわ。言論の自由、人民主権、所有権。けれど、これら権利を得たのは男性だけだった。そのことに反発した女性たちが組織したの。それが「ヘリリス」」

だとすれば、ゆうに200年以上も昔から活動していたことになる。ISが登場し、社会が女尊男卑になるよりはるかまえだ。

「発足させたのは、私の大大婆様たち。私たち「ヘリリス」は、21世紀の現代に至る200年間、ヨーロッパやアメリカを中心に女性解放家たちを斡旋し、援助してきた。私たちがいなければ、女性はキリスト原理主義による、特権階級の所有物にされていたでしょうね」

「あくまで掲げていたのは、女尊男卑ではなく、不当な扱いを受けていた女性権利の拡大？ だからヘリリスを名乗っているのですか」

リリスは人類で最初に男女平等を謳った女性として知られている。しかし、男尊女卑だったアダムがそれを認めなかったため、彼女は楽園を出て行った。

「今でいうファミニズムが組織の行動原理だった。けれど、あの女性が現れて以来、ヘリリスは、男らしさや男性を憎む女尊男卑ミサンドリの組織へと変わっていった」

私は「それは私の母です」とは言わなかった。ただ、正体を教えくれなかった姉に代わって、その正体を求めた。

「その女性について、詳しく知りたい」

「詳しいことは知らないわ。素顔さえね。十数年前、ジエラが連れてきたの」

「ジエラ？」

「ジェラルディーナ・ジョセスターフ。アリーシャ・ジョセスターフの母親よ。彼女の斡旋で、今の地位についた。彼女は強いカリスマで、へお母さまと呼ばれるまでになっていったわ。その人物があなたのお母様だったとは……」

「いいえ、ちがいます」

私は言い切った。なぜか迷いはなかった。

本当の姉が「あれは死者の名を語った愚弄者」だと、強い言葉で否定してくれたから。

「そう。あなたがそういうなら、きっとそうなのね。——それを聞いて安心したわ。その上で、あなたに折り入ってお願いがあるの。いいかしら」

言葉の続きをアルベルさんが紡いだ。

「妻を、ロゼンダを、守ってくれないか」

「夫人を？」

「へお母さまはくヴェルフエゴールの奪取を理由に私を撃つたけれど、それは口実に過ぎないわ。おそらく彼女は最初から私を消すつもりだった」

「消すつもり？　なぜです」

「だって、私は女尊男卑じゃないもの。私は夫を愛している」

優しく微笑む妻。それに応える夫。微笑みある二人の間に男卑も女卑もない。

「だから、私はあの女のやり方や考え方には賛同できなかつた。それに本来ヘリリスは私が担うべき組織だつた。へはじまりの家系、その末裔である私だね。そんな私を従う一派もある。シヨコラがそうだつた」

「組織にとってあなたは異分子だと？」

「ええ。私がいなくなれば、彼女は組織を完全に我がモノにできる。おそらくフランス政府が〈デュノア社〉の支援を打ち切つたのも、私を失脚させるための手回し。生きていると知れたらまた、命を狙われる。でも、私はそれを望まない。だから」

「私に守ってほしいと」

「ああ。彼女が君の母親に化けたのは、君を恐れているからじゃないかと思う。君の母親に成りすまして操れたのなら、君を止められると目論んだのだろう。だから、今までひた隠しにしてきた素顔を君に明かした」

「でもそれは言い換えれば、あなたならへお母さまを止められるということの裏返しでもある。——そこで、アリス、あなたにお願いがあるの。組織を取り戻したいなんいわないわ。ただ、私は夫と——シャルロットと共に未来を歩みたい。その手助けをしてほしいの。こんなことをしでかした私が言うのはアレだけど」

「もちろん、ただとは言わない。提供できるものは何でも提供しよう。資金でも、情報でも」

「アリス、僕からもお願いだよ」

三人の切実な願いを向けられ、私はいったん肩の力を抜いた。世界を牛耳る組織から守ってくれとは。私も高く買われたものだ。正直、いくらなんでも相手が悪い。私だけではとても無理だ。

そう、私だけじゃ。

「どうしますか、マキナちゃん」

私が問うと、じやじやくんと扉が開いた。そりやもうシリアスな雰囲気をぶち壊すように。

『話は聞かせてもらったよー』

そう言っつて現れてのは、二等身のずんぐりつむとした女の子——マキナちゃんだ

まったく空気の読めていない感じで、テコテコと病室に入ってきたゆるきやらに、デユノア家のみなさんがきよんとする。そんな一家などお構いなくマキナちゃんは椅子に腰かけ、

『うん、うん、わかるよ。家族で一緒にいたい気持ち、マキナもよくわかるッ』

ほんぽんとデユノア夫人の肩をたたき、慰めはじめる。

慰められた側は「ど、どうも。わかつてもらえてよかったわ?」と返答に困っていた。

「アリスくん、これはどういう?」

「彼女は機械の惑星からやってきた、その星のお姫様です」

「うん???」

ファンシーな設定を聞かされ、アルベールさんがさらに困った顔をする。

「というのは、冗談でして——彼女が私のボスです」

「それも冗談ではないの?」

『これは冗談じゃないわ。私が彼女の上司で、彼女は私の部下なのよ』突然、マキナちゃんのゆるい声音が母性的なしつとりした声に代わる。

被り物を脱いだマキナちゃんの中から現れたのは、黒い髪を後ろで束ねた妙齢の女性だ。その人物に、シャルロットが一番に驚く。

「お、織斑先生!?!」

「あらあら、そんなに若く見える? うふふ、嬉しいわ」

残念。そつくりだが、彼女は織斑千冬じゃない。だって、千冬さんは『あらら、うふふ』って言わないでしょ?」

「——あれ、でも、なんだろう。雰囲気が違うね」

座れば要塞の如し、歩けば戦車のごとし、常に全包围に厳戒態勢の

千冬さんに比べ、こちらの女性は母性的で優しげだ。千冬さんを剣呑な薔薇とたとえたら、こちらは清楚な牡丹といえるかもしれない。「こんにちは、シャルロット・デュノアさん。息子がお世話になってるわね」

「息子……。じゃあ、あなたは……一夏のお母さんツ?」

シャルロットは「一夏に近づけ」と命じられたとき、一夏のプロフィールも読み込んでいるはずだ。そのプロフィールにあつたであろう両親不在の記述。その両親が目の前いる事実には、シャルロットは目を丸くした。その父親と継母も顔を見合わせている。

「驚かせてしまったかしらね。そう。私が織斑一夏、そして織斑千冬の母、織斑千春です。初めまして」

いまだ驚きから抜け出せない三名は「は、はじめまして……」と言葉に躓きながら答えた。

「さて、自己紹介はこれぐらいにして、お話を進めましょう。いまは私はルイス・キャロルという偽名で〈デュス・エクス・マキナ〉を率いるわ」

デュノア夫妻の顔色が変わる。

世界をまたにかけるフランスの大企業と、世界を支配する〈リリース〉の管理者は当然のように、〈デュス・エクス・マキナ〉の名を知っているだろう。けれど、その最高責任者が織斑一夏と織斑千冬の母だとは知る由もなかったはず。

「驚いた、織斑一夏を守っていたのが、〈神の軍勢〉だったとは」

「まさにリリース率いる〈悪魔の軍勢〉に対抗しうる唯一の存在ね。まるで神話の体現だわ。あなたたちはハルマゲドンでも起こそうというの?」

ロゼンダさんが皮肉めいた苦笑を浮かべる。しかし、千春は至って真剣に答えた。

「ええ、もともと〈デュス・エクス・マキナ〉はそのためのモノだと言っても過言じゃないわ」

わずかにロゼンダさんの息を?む音が聞こえた。

「本気のようなね。恐ろしい人だわ。あなた、実はとんでもないことし

たんじやない？」

「う、うむ……」

アルベールさんの額に脂汗がにじむ。

彼は一夏に「彼の情報を盗んでこい」と自分の娘を唆けた張本人だ。「いまは軽率なことをしたと反省も後悔もしている。ぜひご容赦を願いたい」

「私も何千の人間の上に立っている。組織を守りたいあなたの気持ちはよくわかるわ」

「そう言ってもらえると助かる」

アルベールさんはほつと胸をなでおろした。

「では、話を戻しましょう。あなたたちの身柄は私たちが保障しましょう。けれど、あなたが敵でなくなつたとしても、味方になつたわけじゃない。味方じゃないものを守れるほど、私たちの力は強大じゃし、義理もない」

「なるほど、守るかわりに対価を差し出せ、いうのだな。わかった、取り引きと行こう」

アルベールさんはふうと深呼吸して、表情を改める。

夫からフランスの大企業を率いる経営者の顔へと。

「君たちは求めるものはなんだ。用意できるものなら用意しよう」

「夫人が持つ、デュノア社の有力株を譲渡してもらいたい」

デュノア社は株式会社だ。ロゼンダさんはその株を全体の60%も所有する大株主。

それを譲渡しろということとは、事実上、デュノア社を寄せと言っているようなものだった。

「そう身構えないで。何も会社の経営権を分捕ろうなんて思っていないわ。今まで通り運営してくれてかまわない」

「それは助かるが、ひとつ聞いておきたい。そうまでして、君たちがデュノア社を手に入れるメリットはあるのか？　こう言ってはなんだが、赤騎士ほどの技術力を持つあなたがたが、我々の技術を吸収するメリットはない。経営難にあえぐデュノア社の株価はここ数か月ずっと右肩下がりだ。業績回復の兆しが見えたとはいえ、普通に考え

れば、そんな傾倒企業を進んで救うとメリットはない。明らか早計だといえる」

「私たちがほしいのはデユノア社がもたらす利益や技術じゃないわ。―― 私たちは多くの会社を要し、経営しているわ。物流、通信、不動産、軍事、人材。これら企業を買収、あるいは起業して、組織運用に必要な物資、施設、インフラを確保しているの。けれど、わけあって、ISの事業だけは起業が難しい状態にある」

「ISの関連企業を興すには〈国際IS委員会〉の認可が必要だからな。君たちのようなアングラ組織が運営するIS企業となれば、その認可は下りにくいだろう。そこで、既に認可が下りている企業を買収するわけか」

そう。デユノア社を取り込み、隠れ蓑ならぬ、隠れ工廠にしようというのだ。そしてISパーツの安定した製造と供給ルートを確認したい。なんせ〈デユノア社〉はISの世界シェア第三位を誇る大企業だ。世界中に工場や施設がある。これを手に入れられれば、〈デウス・エクス・マキナ〉の継戦能力は格段に上がる。

アルベールさんがデユノア社の大株主である夫人を見る。夫人は頷いた。

「わかったわ。彼女が『織斑一夏』の母親だというなら、〈ヘリス〉とは相反する。彼女なら託していいと思うわ。それに守ってもらい方には支援は必要でしょう。それに会社自体が亡くなるわけじゃない」「ええ、株主として経営改善は要求させてもらうけれど、今まで通り経営を続けてくれてかまわない。必要とあれば、資金援助と技術支援をさせてもらうわ」

「それは大変心強い。では、これからよろしく頼む」

アルベールが差し出した手を千春が取る。

硬く結ばれた手と手を、私とシャルロット、そして夫人が見守る。それからシャルロットが私に目配せをした。「どこまでがアリスの思惑？」と。私はウインクだけしてみせた。

へキャノンボール・ファスト」 第77話 二人のへブリュンヒルデ」

IS学園の最寄駅から少し離れた場所に地下へ続く階段がある。駅を利用する多くの人が知らぬ間に通り過ぎていくようなひっそりとした階段、その先に千冬の行き付けの店があった。

バー『クレツシエンド』。フランスの調度品で統一された店内は、上品な雰囲気醸し出す大人の社交場として、一部の人間に愛されている。

——八月一四日。ディナーを終えた千冬とジェニファーはそのドアをくぐり、カウンター席の一番右端に腰かけた。この席は千冬たちの専用席となっている。顔見知りのマスターが気を利かせて二人分の席をキープしてくれているのだ。

そんなブリュンヒルデ用とも云える特等席で、ジェニファーは「いつもの」を受け取り、となりの千冬を見やる。彼女は「心ここに在らず」な様子で酒を眺めていた。

どこか憂いを帯びた表情。

ディナー先で待ち合わせてからというもの、千冬はどこか遠くをながめてばかりいる。

「お姉さんとのデートはそんなに憂鬱？」

冗談半分で言ったその一言で、千冬は思い出したように、注文の酒を口にした。

「いや、そんなことはないぞ。有意義だと思っている」
やっぱりおかし。

普段の彼女なら「何がデートだ、なにが」と嫌そうに笑い飛ばしそうなものだが。

「食事の時からずっと元気ないわね。どうしたの？」

機嫌が悪いだけならよい。だが、今の彼女は深い憂いを帯びていた。

悩みなど一刀両断の如くズバツと解決する千冬らしからぬ様子だ。

場の雰囲気もあって、傍目から見ると、なかなか画えになっていたが、友人としてはそうでもない。これでも同じ夢を見た者同士。画を楽しみより、力になってやりたい気持ちが強く勝った。

「よかつたら、お姉さんに話してみなさい。ほら」

急にお姉さんぶるジェニファー（実際ジェニファーは千冬の2つ上だが）にイラつとしたが、彼女のそういうサバサバした態度に釣られて、千冬は思いのたけを吐き出した。

「実はだな」

「実は？」

「弟に女ができたかもしれんだ……」

カウンターのテーブルに突つ伏す千冬に、ジェニファーは半眼を向けた。

「そんなに思い悩むような事か？」と。

「そう。聞いて安心したわ。てつきり襲撃だの暴走だの、参っているのかと」

「それも悩みの種ではあるが」

＜ゴレム＞の襲撃。VTシステムの暴走。特務任務。

相次ぐ学内行事の中止に、教師陣として頭が痛いことは確かだったが、

「それはさておき。今まで弟くんの周りに女性の影があっても、悩んだりしなかったじゃない。急にどうしたのよ」

恋愛は本人の自由だから、口うるさく言うこともなければ、必要以上に悩むこともなかった。すくなくてもジェニファーは、弟の異性関係でこれほど悩んでいる千冬を見たことがない。

「確かにそうなんだが、今回は相手が相手でない」

「その相手って、アリス・リデル？」

言い当てたジェニファーに、千冬は流し目を送った。

「よくわかつたな」

「なんとなくだけどね。一夏君の周りに積極的な子は多いけど、親身になって支えたのは彼女でしょ。ペアトーナメントの時だって、挫けた弟くんを奮い立たせていたのは彼女じゃない」

5月のペアトーナメントの時、千冬は一夏に言った。自分の権利も守れないヤツに何が守れるか、と。その時、折れた心に添え木をして、再び立ち上がらせたのはアリスだ。

「心が挫けた時、背を押してくれる女性に男はぐつとくるものよ。まあ、それはともかく、私はいいいと思うけど？　彼女ならちゃんと弟くんを導いてくれるんじゃない？」

「私もそう思う。だが、あいつはだけはダメなんだ」

すっかりとした言葉で反対の意を示す千冬。酔っているとは思えない声音だった。

認めているのに認められないとはなぜなのか。

「どうして？」

「あいつは、おそらく母さんの手の者だ。だから、あいつに一夏は渡せない」

ジェニファアは千冬 of 家庭事情——幼い頃、両親が蒸発したこと——をそれとなく知っている。

しかし、なぜ千冬が自分の母親をそこまで毛嫌いしているのかは知らない。千冬 of 家庭事情は彼女の中でもかなりデリケートな部分なので、ジェニファアもそこには触れてこなかった。

「じゃあ、どうするの。二人の仲を認めてあげないの？」

「わからん。だから、こうやって悩んでいるんだ」

ジェニファアには、千冬 of 胸中に二つの想いが垣間見えた。

素直に一夏の気持ちを尊重するか。それとも母の手から一夏を守るか。

「私は一度お母さんと話し合うべきだと思うわ」

「なに？」

スコッチに口をつけるジェニファアを、千冬が見遣る。

気づいたジェニファアはそう告げた意図を静かに語り出した。

「実はね。私の母はろくでもない人間だったわ」

ジェニファアとの付き合いは10年近くになるが、初めて聞く話だった。

「私の父は軍にいて、よく仕事で家を空けていたの。それでね、ありふ

れた話なのだけど、父がいない間、母は知らない男と体の関係を持っていたの。それもとつかえひつかえよ。綺麗な人だからモテたんでしょうね」

時代も時代だし。と言ってジェニファアは続けた。

「私は父が好きだった。宇宙飛行士に憧れたのも父の影響なの。だから、私は父を裏切った母が大嫌いだった。それで私はさっさと家を出ただけど、ある日、風の便りで母が警察に捕まったと報ったの。どうやら、変な男に引っかけたらしくてね、薬物に手を出したらしいわ」

「それでどうなった？」

「幸い、罪が軽くて更生施設行きを選べたわ。私はそんな哀れな母親を笑ってやろうと思って、州の更生施設に行ったの。そこで、何年かぶりに再会した母は、私に言ったわ。——ここを出られたら、あなたとやり直したい、と」

「それでお前はなんと答えたんだ？」

気づくと千冬は身を乗り出していた。母親の身勝手さ。その部分に共感できたから——ではない。嫌いな母とどう向き合ったのか。自分が下すべき決断を彼女はすでにしていたからだ。

「まっぴらごめんよって言ってやったわ。好き勝手やってやったくせに、凶々しいって」

ジェニファアは、ジョークでも語るように飄々とそう言った。

それから椅子の背もたれに身を預け、今度は悔いるように天井を仰ぐ。

「その数日後よ。——お母さんが自殺したのは」

ここで初めて彼女は「母」を「お母さん」と親しみのある呼び方をした。

「それからお母さんの遺留品を整理していたら、日記が見つかったね。そこには薬物の後遺症と戦う日々と、父への懺悔。そして私への想いがたくさん綴られていたわ。お母さんは私との関係を必死に取り戻そうとしていた。なのに、私はそれを無碍にした。その時、初めて自覚したわ」

お母さんは自殺したんじゃない。私の言葉がお母さんを殺したんだって。

「だから、今すごく後悔している。あの時、もし私が別の言葉をかけてあげていれば、何か変わったんじゃないかって」

自分のことを語り終えた彼女の眺には微かに輝くものがあつた。

蒼い涙。今でも彼女は過去の行いを後悔しているのだろう。

「千冬。母親とやり直せなんて言わないわ。言おうにも私はあなたの両親のことなんて知らないし、あなたとの間に何があつたのかも知らない。でも、お互いの真意を知らないままだと、いつか後悔する時がくるわ。一方的につっぱねるのじゃなくて、悔いのないよう一度話し合ってみるのもいいと思う、それからどうするか決めても、きつと遅くはないわ」

それは彼女の経験談からなるアドバイスだつた。

同時に、友人に同じ後悔をさせたくないという気遣いでもあつた。そして最後にこう告げる。

「たぶん、親つてのは完璧超人でもなければ聖人君子でもない。時には過ちを犯すわ。それ許してやることも、たぶん親孝行なんだと思う。私はできなかつたけどね」

ジェニファアは感傷的な空気を吹き飛ばすように明るく笑つてみせた。

「ごめんなさい。せつかくの休日なのに、なんだが湿っぽい話をしちゃつたわね」

「いや、ありがとう、ジェニファア」

自分を慮り、罪を告白してくれた友人に、千冬は心から感謝した。だが、素直に礼を言った千冬に、ジェニファアは宇宙人でも目撃したような貌をした。普段は「礼を言う」だとか「感謝する」とか仰々しい物言いの彼女が、親しみの籠つた声音で「ありがとう」だ。なんだか、千冬じゃないみたいなのがして背筋がむずかしくなつた。

「わ、私だって礼ぐらい、ちゃんとと言う」

普段はビジネスライクな彼女。その友人が恥ずかしそうに口先を尖らせたのだ。

ジエニフアー気分をよくしないわけがなかった。

「ふふ、そう。じゃあ、ちゃんとお礼が言えた千冬ちゃんに、お姉さんからプレゼントよ」

ジエニフアーがカバンからパンフレットといくつかの資料を取り出す。

千冬はぐつと殴りたい衝動をこらえて、それを手に取った。

「これは……」

それは二カ月後に行われる彼女主催の〈キャノンボール・ファストFOX杯〉についての概要書だった。レギュレーションや、コース設計、出場選手の名簿などが記載されたなかに、「〈学生の部〉について(仮)」なる記述を見つけ、千冬は殴りたい衝動を手放した。

「わざわざ、生徒用の出場枠を設けてくれたのか？」

「一学期、いろいろあったでしょ」

中止が続く学内行事の補填として、急遽〈学生の部〉を設けたということらしい。〈プロ部門〉との二部編成なのは、おそらく学生と国家代表^{プロ}じゃレベルが違うからだろう。

「ラウラの件といい、紅椿の件といい、おまえには借りを作りっぱなしだな」

「借りなんてやめてよ。別にあなたに借りを作りたくてしてるんじゃないんだから。——実はね、出場者の宿泊場所にIS学園の施設や学生寮の借りたいの」

出場選手は試合の数週間まえに現地入りし、高機動パッケージの調整などを行って本番に挑む。その期間中、選手が寝泊りする場所にIS学園の施設を使わせてほしいということだった。

「なるほど、学園の施設を貸し出すかわりに、生徒の出場枠を設けるということか」

「部門増加でかさむ経費を、浮いた宿代で相殺する。WinWinでしょ」

(たしかに貸し借りはなしか——いや)

そもそも学生部門を設ける必要性がないのだから、やはりこれは貸しなのだ。

けれど、気を使わせないためにそう言っているなら、口に出すのは
憚れる。

「二応、こちらからも学園上層部に通達するけど、千冬からもお願い
ね」

「わかった。学園の方には私から話しておこう」

「ありがと。詳しいことは追って連絡するわ。——じゃあ、今日は
飲みましよう」

「ああ」

千冬は景気よくバーボンを頼み、ジエニフアーとグラスを交わし
た。

第78話 「鳳凰亭」にて

文化祭二日目を終え、その後始末を済ました私たち一組の面々は、広い座敷にずらつと勢揃いしていた。クラスメイト以外には、千冬さんと山田先生、黒ウサギ隊とフランスの代表がいる。

そんな私たち目の前には、高級和牛のフルコースセット。

高級焼き肉店「鳳凰亭」の一室で、私たちは文化祭の打ち上げを行っていた。

「みんな、今日は本当にご苦労様。おかげで文化祭の出し物も無事に成功できた。アンケート結果もこのとおりだ」

生徒会が集計したアンケート結果を、幹事の一夏がクラスメイトに公表する。

開かれた用紙には、どれよりも長く伸びた棒グラフの項目に「コスプレ喫茶」とある。そう、私たちの出し物は見事アンケート1位を獲得したのだ。

「もちろん、これはみんなのがんばりだが、特にラウラのがんばりが大きいと俺は思う。そこでみんな、ラウラに拍手をおくってやってほしい」

「むっ。」

思わぬ指名に、腕を組んでいたラウラがきよとんとする。

本人に功績の自覚はなさそうだったが、実際のところ彼女のマネイジメントは票の獲得に大きく貢献していた。寄せられたアンケートにも「待ち時間の対応が神っていた」「お客に対する配慮がよかった」「銀髪眼帯メイド萌え」「ぶひぶひ」などラウラを称賛する声が多く寄せられている。

何よりラウラがいなければ、こうやって全員で打ち上げすることもできなかつただろう。

「今回、ラウラはすごくがんばってたよね」

シャルロットが一番に拍手すると、みんなも今回の立役者に大きな拍手を送った。

送られた本人は称賛の拍手に戸惑い気味だったが。

「じゃあ、ラウラ、コメントをたのむ」

「む、コメントだと？ そんなもの用意していないのだが……」

一夏の無茶ぶりに、ラウラはおずおずと立ち上がり、

「そのなんだ。役に立てて光栄だ。しかし、一位獲得は諸君の活躍があつてこそだと思つている。この場を借りて礼を言う。——つて、おいクラリツサ、何を泣いているんだ？」

今回の打ち上げには、クラリツサさんたちにも参加してもらつている。

そのクラリツサさんは、なぜか焼き肉用のナプキンで涙をふいていた。

「失礼しました。ご級友たちと仲よくなれたようで、それがついうれしく。隊長がぼつちだと聞いたときは、心配で心配で。購入したゲームにも身が入らず、積みゲーと化す一方でした」

「副隊長、『隊長は体育の授業のとき、ペアができなくて困っていないか』とか『昼ごはんはトイレで一人なんじゃないだろうか』とか『昼休みは狸寝入りして過ごしているじゃないか』とか、すごく心配しております」

それだけに友人の暖かい拍手に感極まつたらしい。涙声で語るクラリツサさんからは仲間を慮る感情がちゃんと見てとれた。ラウラつて、本当は全然孤独なんかじゃなかったんですね。千冬さんに執着するあまり視野が狭くなっていただけで。

「そうか。心配かけたな。これからは安心して積みゲーとやらを消化してくれ」

「はい、これで『異世界転生したら、美男執事の主になっていた件について』の恋夜ルートの攻略に専念できます」

訓練しろよ、と思つたけれど、誰も口には出さなかった。

ただ一人フィーネさんは「すみません、こんな部隊で」と恥ずかしそうに俯いていた。隊長がボツチで、副隊長がオタクじや部下は苦勞していそうだ。ま、それはさておき、

「で、実は活躍してくれたラウラに贈り物があるんだ」

一夏が取り出した物は、指輪ケースより二回りほど大きい小箱だ。

受け取ったラウラがふたを開けると、中にはメカニカルな眼帯が収まっていた。一夏がクラス対抗戦で使用したへソリッドアイだ。

「なんだ、これは？」

「眼帯型の多機能ゴーグルです」

ラウラはさつそく眼帯を装着し、機能をオンにする。

「!? 赤外線に暗視、望遠、レーザー誘導装置まであるのか……。これほどのものを一体どこで？」

多機能ゴーグルの開発はさまざまな軍事研究所で行われているが、ソリッドアイほどコンパクトなゴーグルはこの軍隊も支給されていない。最新装備を運用する黒ウサギ隊でさえ持っていない装備を一夏が持っていたことにラウラが驚くのも当然だ。

「実はアリスからの借り物だったんだが、ラウラにやってくれっさ」「いいのか、こんな高価なものを」

「ええ。協力してもらった、私からのお礼です」

「そうか。では、ありがたく頂くとしよう」

気に入った様子のラウラは、へソリッドアイの機能をいくつも試しはじめ。望遠機能、AR機能、レーザー誘導機能、サーマル機能、それぞれの機能を再確認するように見る。そして、

「それにしても教官は今日も“大人”だ」

何を思ったか、そんなことを言い出す。さては、赤外線機能でスーツの下をのぞいていますね。きつと“大人”な下着をつけているとでも言いたいのでしょうか。

「ラウラ、ほどほどにね」

そういうことに使う物じゃないんですから。

「う、うむ」

強めに釘をさすと、ラウラはサーマル機能をオフにした。

「よし。じゃあ、乾杯といこうぜ。学園祭一位とラウラのがんばりに乾杯！」

『乾杯！』

私たちは用意されたタンブラーを掲げ、頑張りを労うように交わす。そしておのおの用意された高級焼肉を鉄板に乗せていった。私

もカルビを鉄板におく。え、最初はタンだろって？ こまけえーことはいいいんですよ。

「はふはふ、はあ、おいしいです」

いいお肉を飲めるといいますけど、本当ですね。さすがA5和牛。

「アリス、こっちのハラミもおいしく焼けたよ」

と、隣に座るシャルロットがサンチュにハラミを包んで差し出してくる。

それを私は「あ〜ん」と大口で頬張った。

「おいしい?」

「ええ、しゃきしゃきした食感と肉汁のハーモニーがたまりません」

「えへへ、そっか〜♪ じゃあ、こっちもどうぞ♪」

今度はカルビをサンチュに挟んでやつだ。

「おいしい?」

「ええ、とつても」

「えへへ、そっか〜♪」

シャルロットは私がお肉を頬ばるたび、嬉しそうに体を揺らした。

「なんだかとても楽しそうですね」

「うん。こうやってみんなで食事できることがうれしくつてさ。幸せだなくつて」

高級焼き肉を堪能するクラスメイトや、織斑先生にビールをそそぐクラリツサさん。箸の使い方を山田先生から教わるノエルさん。この場を陽気に楽しむ人たちを眺め、シャルロットは「この今」をかみしめるように言った。

「こうしていられるのもアリスのおかげだよ。ありがとう、アリス」

「いいえ、この「いま」はあなたが勝ち得たものですよ。私は何もしていません」

初めて身上を明かしたとき、彼女はか弱い雛のようだった。それも巢から落ちてしまい、ただ弱々しく囁くしかできなくなった雛だ。だから、私は子供心のような「この子を親鳥の許に戻してやりたい」という気持ちで助けたけれど、今の彼女は、誰の手も借りず、親鳥の庇護さえ必要としない、一人前の鳥となった。もう彼女は一人の力で大

空を羽ばたいていける。

この光景は、彼女の翼で手に入れたものだ。私は何もしていない。
「強くなりましたね、シャルロット」

彼女の成長を祝うように、私はシャルロットの頭を撫でた。

「えへへ、やっと呼んでくれたね、シャルロットって」

そういえば、ずっと姓でしたっけ。特に深い意味はなくて、ただ単に呼び方を変えるタイミングが見つけれなかったただけなんですよどね。

「では、これからはシャルロット、と呼びますね」

「うん！ あ、でも、よかったら、そのシャルって呼んでほしいかな、なんてダメ？」

なんて言って正座したうちまたに手を挟み、体をくねらせる。

恥ずかしいのか、照れているのか、どちらにしろ、すごく期待されているようなので、私は頷いた。

「わかりました、シャル」

「う、うん！ じゃあ、僕はアリスを、エ、エリーって呼ぶね♡」

エリーとはアリスの愛称だ。

どきくきに紛れた感じではあったけれど、特に差し支えないので、私は快く了承した。

「では、これからもよろしくお願いしますね、シャル」

「こちらこそだよ、エリー。——えへへ、シャルとエリーか。なんかいいね」

愛称で呼び合えることが嬉しいのか彼女は体を左右に揺らしていた。私としても喜んでもらえたようだなによりなのだが、このやり取りを「むっ」と不満げに見る生徒がひとり。——セシリアだ。

「なんだか、お二人、以前に増して仲がよろしくなりましたわね……」
ジーと懐疑的な視線を寄せてくるセシリアにシャルがニコニコ顔で一言。

「まあねえ、僕とエリーは特別な関係だから♪」

一見して天使の微笑みとも見て取れるその笑顔には、意味深な優越感が垣間見えた。

わたしは彼女の秘密を知っている。おまえは知らない。そんな感じの。

確かに、いまシャルは私の正体を知っている。けれど、セシリアはまだ私の正体を知らない。特別な関係っていうのはそういうことなのだろう。でもそれをこの場場の、この状況で匂わさなくても。

「な、なんですの、特別な関係って……」

ほら、セシリアが食いついた。

「ごめんね。それはいえません」

『ね、エリー』つと、私に同意を求めてくるシャル。私はダラダラあぶら汗をかいた。

ただでさえ、私はセシリアに多くの隠し事をしている。言及こそされないが、フラストレーションが溜まっていることは間違いない。現にセシリアの「これはどういうことかしら」という視線は私に説明を強く要求している。

かといって本当の事を語れない私は、何かないかと周囲を見渡した。

すると、となりの部屋を盗み見るラウラを見つけた。これ幸いと私は逃げるように向かう。「ちよつとっ待ちなさいな」とセシリアが声を荒げるが、聞こえなかったことにした。

「ら、ラウラは何やっているんです？」

隣の客間に何か面白いものでもあるのでしょうか。

「ふむ、どうやら、隣でも我々と同じく、打ち上げしているクラスがあるようだな」

「どれどれ」

ラウラの真似をしてふすまの隙間から隣の部屋を覗く。

ふすまの向こうでは、二組の生徒たちが私たちと同じように、打ち上げをやっていた。けれど、テーブルには一切の肉がない。あるのは白いご飯だけ。それを二組の人たちが物悲しげに見つめている。なんですか、この状況。

「鈴、私たちの打ち上げこれだけ……？ お肉は？」

「頼めるわけないじゃない。赤字で経費を回収できなかったのよ……。白ごはんで我慢して」

「うう、高級焼き肉店でご飯だけって……」

「タン、カルビ、ハラミ、コース……」

「先生、おごつてよー」

「え、えつと、今月きびしくて……。ほら、焼き肉のたれ、ご飯にかけてらおいしいわよ」

打ち上げ代を稼げなかったせいで、このありさまなのですか。

鈴のところはお客がすくなかったですしね。

にしても高級焼き肉店で、白ごはんだけというのは、なんとというか、すごい光景ですね……。

「よし」

ん、どうしましたラウラ。もしや、二組を誘ってあげるのでしょうか

そうですね。競争相手だったとはいえ、最後ぐらい仲よく一緒に食べても――。

「揚げ、クラリツサ、二組に焼き肉の匂いを送り込んでやるのだ」

「こらやめなさい」

私はラウラの頭にチョップを落とした。

ただでさえ、向こうは焼き肉を食べられなくて泣いているのに。対テロ部隊が（飯）テロを起こしてどうするんです。

「ああ、いい匂いがするーッ」「らめえ、おながが鳴っちゃう」「こんなのがまんできかないのぉー」「においだけで、ごはんが進んじやううー」「いい、いい匂い！　こんなの肉奴隷になっちゃうわあー」

ほらみなさい。焼き肉の匂いで、二組がおかしくなっちゃってるじゃないですか。

私は阿鼻叫喚する二組を見ていられず、ふすまを開けて言った。

「あの、鈴、よかったらこっちに来て一緒にたべませんか」

「やっぱり富はみんなに分け合わないとね、共産主義ばんざい。あ、カ
ルビ追加で」

「そうね、やっぱり資本主義なんてろくでもないわ。あ、サーロインも
う一枚」

一組と二組の合同打ち上げが決定するなり、二組の生徒たちは猛獣
もかくやという獰猛さで焼き肉に食らいついていた。特にハルミン
トンさんなんて、これでサーロインステーキ3人前だ。ちなみに代金
はすべて一組持ちである。

「ああ、ほんとうまいわ、この肉！ 世界にこんな美味しいものが
あつたなんて！」

「鈴さんは大きいですわね。たかだか100グラム1500円のお肉
で」

と言ったのはセシリアで、彼女は高級焼き肉を特に感慨のない様子
で食べていた。さすがお嬢様。きつと日頃からいいもの食べてるん
でしょうね。彼女の言動にはそう思わせる箇所が節々にある。それ
を垣間見せるたび、いい顔しないのが庶民派のシャルロットだ。

「だって、一夏、どう思う？」

「セシリアって俺たちと金銭感覚ズレってるよな。1500円の肉
を、たかだか」なんてさ」

シャルロットと同じく庶民派の一夏もセシリアの金銭感覚には同
意しかねる様子であった。

「質素儉約」を標語にしているだけあって目が厳しい。想い人にそ
うみられたとあって、セシリアは視線を右往左往に泳がせた。そこへ
等がここぞと追い打ちをかける。

「知っているか、一夏、価値観の違う男女は長続きしないそうぞ」
「え……」

「確かに金銭感覚が違くと苦労しそうだよな。俺も金遣いの荒い女性
は遠慮したい」
「ぐっ」

一夏の一言でセシリアがさらに胸を痛める。そしてぼそつと「これはプレゼントの金額を見直さないといけませんわね」と小言を漏らす。プレゼント？ ああ、そうでした。

「来月でしたっけ、一夏の誕生日」

「おう。それでさ、実は弾たちが「おまえの誕生日会をひらく」って言うててさ——」

一夏は手持ちのスマートフォンを操作し、そのやり取りを私たちに見せた。

【From】：五反田弾

【Title】：おお、心の友よ

【本文】

来月おまえの誕生日だろ？俺と数馬でパーティーしてやるよ。

それでさ、せつかくだし、IS学園の友達もつれてこいよ、つーか、連れてきてください、お願いします。

文面を読んでまず思ったことは「だしに使われているなあ」だった。この誕生日会をきっかけに「IS学園の女の子と知り合いたい」という思惑がすくく透けてみえる文章だ。だからといって、嫌悪とかないけない。知人を伝手に出会いを求めることは恋愛の常套手段だ。

「よかつたら、みんなも来ないか？」

「そうね。幼馴染の誕生日だし、祝ってあげるわよ」

「うむ、私も誕生日を祝ってもらったからな」

「もちろん、わたくしも参加いたしますわ。それでどの城を貸し切られるので？」

「城？ 普通に俺の家でなんだが」

「え？ 誕生日パーティーはお城を貸し切ってるものでは？」

「え？」

「え？」

.....

「そ、そうですね！ 冗談ですよ、おほほ」

「うわ、痛々しいウソ」

「お黙りなさいなシャルロットさん！」

「私も参加させてもらおう。で、日にちは？」

「来月の27日だ」

日取りを聞いて、代表候補生たちはそろって「あっ」という顔をした。た。

私も彼女たちがそんな顔をした理由に、心当たりがあった。

「その日って、確かへキャノンボール・ファストの当日でしたよね？」
キャノンボール・ファスト。ISを用いた高速バトルレースだ。その大会が来月の27日に行われるのだ。ただし、出場するのは国家代表やその候補生で、私や一夏には関係のないこと——そう思っていたのだけれど

「そのへキャノンボール・ファスト」だが、IS学園の生徒も参加することになったぞ」

クラリツサさんにビールを注いでもらいながら、上ミノを手に千冬さんが言った。

「ここ数か月、学校行事がことごとく中止していたからな。その穴埋めとしてジェニファアが、特別に学生用の出場枠を設けてくれたんだ」

ジェニファア・J・フォックス。へモンド・グロツソ高速戦闘部門で二年連続へヴァルキリーの称号を獲得している女性だ。現へブリュンヒルデでもある。その高速部門から派生したへキャノンボール・ファストでもいくつものタイトルを獲得している。

今回のへキャノンボール・ファストはその彼女による主催らしい。「それにあたって明日から高速機動の実習と並行して、出場者の選出を行う。心しておくこと。——以上。クラリツサ、生と上ミノ追加だ」

それだけ言っただけでビールをあおぐ。

大分アルコールが入っているようで、いつもの千冬さんより陽気な感じだった。「ロヴェルティエはもう結婚したのか」とか「エーデルシュタイン大佐は元気か」とか言っている。

それはさておき、私たちは話を誕生会に戻した。

「見事にブツキングしたな。当日は何時まで行われるんだ」

「プログラムだと、午後5時に終了する予定だよ」

「そっか。ヘキャノンボール・ファスト」が終わってからでも十分間に合うな。よし、じゃあ弾にそう連絡いれとくか。『誕生日パーティーは午後6時から頼む。あとIS学園の女の子も誘ったぞ』と。——
「うお、もう返信してきやがった。えつと『どんな子だ。写真くれ!』だど?」

一夏はしばらく考えてから、私たちに苦笑しながら言った。

「悪い、みんな。参加するメンバで集合写真を撮らせてくれないか?」

「まあ、構わないが?」

そういうわけで参加するメンバ——私、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラはファインダーの中に寄り集まった。その最中、私は今回のヘキャノンボール・ファスト」をどうするか考えていた。

学内行事には出場してきたけれど、さすがにテレビ中継される国際大会に出ていいものか迷う。

まあ、何かしら指示があるだろう。そう思いながら私はみなさんと一緒にピースサインを出した。

第79話 高機動プラックティス

IS学園の中央フロートに健在する近未来的なタワー、通称ヘユグドラシルタワーには、高速レース用のアリーナが併設されている。そのピットに私たち1組を始めとした全クラス総勢15組は隊列をなしていた。

「……よし、全員そろったな。……これからヘキャノンボール・ファストの選抜を行う。……まずは特別講師を紹介する。ジェニファーだ……」

総勢四〇〇近い生徒のまえで、千冬さんが覇気のない声音で言う。顔色も悪く、こけた頬から察するに二日酔いらしい。昨日の打ち上げでビールジョッキを10杯も空にしていましたからね……。

特別講師として招かれたジェニファー・J・フォックスは、大事な選抜が行われる前日というのに飲みに飲んだ友人を露骨に非難した。「ちよつとー、千冬、事前に連絡しておいたのに、二日酔いつてどういうこと……」

「仕方ないだろ、焼き肉だぞ。飲むだろ、ふつー。というか、怒鳴らないでくれ。頭に響く」

うーと唸りながら頭を押さえる千冬さん。

そんな姉に一夏は「身内がすみません」と頭を下げていた。

「まったくもおー。弟くんに免じて許してあげるから、あなたは休んで下さい」

「そうさせてもらう……」

「ううー」と情けない声を出して千冬さんは下がっていった。そして、ピットの自販機でスポーツ飲料を買い、備え付けのベンチで横になる。その様子をやれやれと見てから、ジェニファーは大きな胸をたゆんとゆらして私たちへ向き直った。

「じゃあ、気を取り直して。みんな、おはよー。今日、私がここに招かれたのは二日酔い先生の代わりじゃないわ。すでに報せがあったと思うけれど、今回のヘキャノンボール・ファストでは度重なる学園行事の中止を考慮して、あなたたちにも出場してもらうことにした

の

度重なる学内行事の中止で、今年度の学生は企業へのアピール機会がずいぶんと減った。とりわけ卒業が近い3年生にとっては深刻な問題で、その解決策として「キャンボール・ファスト」参加が企画されたらしい。

「けれど、ISの台数とプログラムの関係上、すべての生徒を出場させることはできない。そこでまず各クラスでレースを行ってもらい、その各一位のみに出場資格を与えることにしたわ」

IS学園のクラスは全部で15クラス。そのうち整備科が2クラス。つまり出場枠は13。これに「すくなくい」「いっそ、全員出場させてくれればいいのに」「自分だって棚ボタでブリュンヒルデになつたくせに」と不満の声がある。

「そう声を荒立てるな。確かに出場は狭き門だが、機会は平等に与えられているぞ。競争率の高さを嘆くより、その中でどう生き残るか。それを考えた方が建設的だし、今後のためになるぞ」

ジェニファーが苦笑していると、ラウラが静かに言った。

さすが特殊部隊を預かる隊長。サバイバルの基本がすっかりできている。

「さすが、千冬の教え子ね。うん、そういうこと。それじゃさつそくと——— いろいろとところだけど、いきなりレースしろっていうのも酷だから、あなたたちには7日間、高速機動のプラクティスを受けてもらうわ。じゃあ、まずは千冬のやり方を見習って、専用機持ちに実演してもらおうかしら」

ジェニファーは「そうね」と千冬さんから預かった出席簿に視線を通す。

「うん、ここは1学期に《第二形態移行》を果たした弟くんをお願いしようかしら」

「え？ 俺ですか？」

こういった役目はいつも代表候補生が務めてきた。今回もてつきりセシリアあたりが披露するものだと思っていられない。

「俺の操縦なんかじゃ、みんなの手本にならないと思いますけど」

「弟くんの場合、謙遜じゃなくて本気でそう思っているようだけど、あなたはもうとつくに専用機持ちにふさわしい実力を持っているわ。〈ブリュンヒルデ〉が言うんだから間違いない」

私もそう思う。クラス代表戦、クラス対抗戦、ゴーレム襲撃、学年別ペアトーナメント、VTシステムの暴走、そして特務任務。数多くの格上相手に勝利を収めてきた彼の實力はもう専用機持ちとして遜色ない。

「正直、そろそろ代表候補生の声が掛かっていい頃合いだけど、それは置いておくとして。むずかしいことさせないから、やってみなさい」
「あ、はい」

一夏は緊張した面持ちでまえにでて、新しくなった〈白式〉を展開した。

よりも翼らしくなったウイングスラスターと、右手に備わった多機能武装腕《雪羅》。さらに以前にはなかった電子兵装も加わり、《第二形態》の〈白式〉は過酷な作戦にも耐えうる兵器としての赴きが強くなっている。

「ふくん、これが〈雪羅〉ねえ。カッコいいじゃない。千冬の現役時代を思い出すわ」

ジェニファアが感慨深げに〈白式〉を観察する。

初めて見た生徒からも「おお」と歓声が上がった。

「この半年で《第二形態移行》ってすごいよね」「やっぱり男性だから？」「場数を熟してきたからじゃない？」「織斑くん、夏休みもずっと特訓してたよ」

「それにしても多機能武装腕といい、誰かさんの第二形態と似ているわね」

と、ジェニファアの視線が私に向く。

確かに白式と赤騎士の《第二形態》には通ずる点が多いけど。

《当然です！ だくりんは——》

「だあー、うるさいぞ、〈ホワイトクイーン〉！」

一夏は慌てて外部スピーカーをOFFにした。

はて、〈ホワイトクイーン〉は何を言おうとしたのでしょうか。

「ジエニフアーさん、はやく始めましょう。俺は何をしたらいいんです!?!」

「そうね。模擬レースをしてもらおうかしら。でも、一人のレースだとつまらないわよね〜」

ん、なんです、私をニヤニヤ見て。

「じゃあ、アリス・リデル。あなたが彼の相手を務めてあげて」

それは一向に構わないけど、ジエニフアーのニヤニヤが気になりま
すね。

私は腑に落ちないものを感じながら<赤騎士>を展開し、<白式>
の隣にならんだ。

「そーいやアリスと模擬戦するの、初めてだよな。頼んでも、おまえ断
るし」

「むふー、あなたの実力で私に挑むなんて、まだ早いのですよー」

「ぐう、言ってくれるぜ。いつとくが、夏休みも訓練していたんだから
な。〃必殺技〃だって編み出したんだ。この機会に俺の実力を認め
させてやる」

「〃必殺技〃ですか。いいでしょう、どれだけ成長したか見せてもら
います」

「よし！ 見てろよ」つと意気込む一夏と共に、私はスタートライン
に立った。



第七アリーナのスタートラインに立った俺たちは、バイザーに備
わったカメラをオンにした。それによって俺たちが見ている映像が、
他の生徒たちがいるモニターに映し出される。

「準備OKね。——じゃあ、マヤ。レース用のガイドビーコンを出し
てちょうだい」

ISのような高速機がレースを行うには、通常のアリーナじゃ狭す
ぎる。そこで海上にレーザーフォログラムとオーグメントリアリ

テイを用いた仮想コースを展開し、そこでレースを行う。

『よし、準備できたわ。じゃあ、弟くんはコースを軽く一周してきてもらおうかしら』

「わかりました」

『勝った方には、おねえさんがハグしてあげるからがんばってね』

と、柔らかそうな巨乳を揺らして言う。

目測でも90センチは余裕であろうその巨乳に、男ながら生唾を飲んでしまうと、何がおもしろくないのかアリスがジト目で見てきた。

「な、なんだよ。その顔」

「いいえ、なにも。ところで、一夏、高機動演習の経験は？」

「大丈夫だ。《第二形態移行》したく白式〉の推力データを取るときに、月子とやった」

「だから、手加減不要だ」と俺が頷くとARのカウントダウンが始まった。

5、4、3、2、1。——ゼロと同時にスラスターを点火してスタートダッシュを切る。

初めに抜き出たのは俺だった。その数メートルうしろにアリスがつく。初速では《第二形態移行》したく白式〉に部があるようだ。それで得たリードを活かし、俺はスラスターにブーストをかけ、さらにアリスを引き離す。

『序盤から飛ばしますね。そんなにジエニファアの巨乳が……?』

『ち、ちげーよ。だから、そのジト目はなんだよ』

『気持ちはわかりますが、飛ばしすぎは禁物ですよ。今回は一周ですが、本番の〈キャノンボール・ファスト〉は一〇〇周の耐久レースです。序盤からエネルギーを使い過ぎると後半まで持ちませんよ。途中でエネルギーが切れたらリタイアです』

『そうなのか。燃費の悪いく白式〉には酷なルールだな……。いや、待てよ、それって燃費の悪いく白式〉じゃなくても厳しくないか』

〈キャノンボール・ファスト〉では妨害行為も許されている。推力だけじゃなく攻撃や防御にもエネルギーを使っていたら、く白式〉じゃなくても完走が難しそうだけだ。

『大丈夫ですよ。ピットインできますから。そこで修理や補給を受けられます』

『なるほど。F1みたいだな』

『ただし、ピットインする前に撃墜されたりタイヤです。その辺は戦略ですね——』

修理や補給には時間がかかる。かといって、修理を怠ればリタイヤの可能性が高まる。

どのタイミングでピットインするか。

何気に戦略性の高いレースだな、と考えていると、コースが海上に飛び出した。広がる海原にはいくつかのブイが浮かんでいて、それがガイドビーコンを発している。

『ガイドに触れたてもダメーじはありませんが、ペナルティーがあるので触れないように』

『お、おう』

コースアウトしても事故にはならないが、レースは不利になるってことか。

俺は蛇行する仮想コースのガイドビーコンに触れないように集中する。と

『うおっ』

急に前方にARのパネルが出現した。その中央に「」の文字。

これあたっちゃまずいヤツだと悟り、咄嗟にバレルロールで回避する。

『わくお。やるじゃなくい。いじわるのつもりだったのに』

咄嗟の緊急回避に感心したのはジェニファーさんだった。

どうやら、今のARパネルは彼女の仕業らしい。

『じゃあ、こういうのはどうかしら。それ、それ、そおくれえ』

『うわ、急にたくさん出さないでくださいよー！』

視界を埋め尽くさんばかりのARパネルにあたるまいと、俺はく白式に急制動を掛けた。

くそ、これじゃパネルが邪魔すぎて前に進めないじゃないか。

「——だってんなら、荷電粒子砲の最大出力で前方のパネルを一気に

ぶち抜いてやる」

《Yes my darling——粒子加速器、電圧上昇。粒子チェンバー電荷開始。電磁場誤差修正》

俺は《雪羅》の掌底に備わった荷電粒子砲をチャージし、前方のARタグに向ける。

その右側をアリスがさっそうと抜いていった。

『さて、レースの説明も終えたので、本気を出します』

そう言い残し、アリスはアポジモーターの鋭角な高運動制御とPICを用いた幾何学的な機動で大量のARパネルをすりすりりと抜けていく。多少の接触こそあるがそのどれもがマイナス1と加点数がすくないパネルばかりだ。

『あら、綺麗なライン取りするじゃない、あの娘』

俺もそう思った。やっぱ、あいつの操縦技術は俺らの中でも頭一つ抜き出たんだよな。って、感心している場合じゃない。はやくアリスを追わねえと。

俺は荷電粒子砲を前方にぶっ放した。せつかくチャージしたのだ、使わない手はない。

最大出力の荷電粒子砲でARオブジェクトを一掃し、俺は全速力でそこを駆け抜けた。

「ホワイトクイーン、結構差が開いたけど、これ、まだ追いつけるか？」

《Yes My darling——第二形態移行したく白式＞なら、お姉さま相手でも芽はあります》

「よし、ホワイトクイーン、エネルギーをスラスタに回せ。フルスピードだ！」

《Yes my darling——く白式＞最大速度！ パワーアップした私たちの力、見せてやるです》

武器関係の出力を全てスラスタにそそぎ、出せる最高速度でアリスに追いつがる。

勝ってアリスに俺を認めさせる。その気迫を燃料に替え、俺はさらに速度を上げた

加速。さらに加速。空気の壁を突き破り、俺は1メートル、また1メートルとアリスに肉薄し、ついには<赤騎士>の尻を拝める距離まで詰めよった。

《これはいいアングルですよ。写真とりますか?》

確かに<赤騎士>のリアスカートから覗くヒップはかなり誘われるものがある。

だが、いまはそんなものに惑わされている場合じゃない。

「撮るな! それよりスタビライザーの制御に集中しろ」

この速度じゃ、ちよつとバランスを崩しただけで姿勢制御を失って減速しちまう。そもそも人型は空を飛ぶのに適していない。空気抵抗をモロに受ける人型を推進器で無理やり飛行させているのだから、わずかな衝撃で失速どころか墜落してしまう。

それにレースも折り返しに差し掛かり、コースも残すところわずかだ。へまをすればもう挽回できない。

だが、逆を言えば、へまさえしなければ勝てる状況でもあった。なんとつて、残すコースは障害物のない直線のみ。《第二形態》に至ったことで、通常推力は1.3倍、瞬時加速は2倍、そのチャージ時間は三分の一になった<白式>は推進スベックだけなら<赤騎士>を凌駕している。純粋なスピードが勝敗を分ける直線なら、推力でまさる<白式>が断然有利だ!

「いける、これ勝てるぞ」

《だくりん、行け、行け、GO、GO!》

「よっしやー、いくぜえー!」

ゴールまで残り500メートル。

俺は高ぶる気持ちと共に、最後まで取っておいた瞬時加速を使った

——その時だった。

「一夏、<白式>の性能に頼りすぎです。もつと知恵を使って工夫しなさい」

そう言っつて前方のアリスが<赤騎士>の武装支持架から《ヴォーパル》をパージした。

それがぐるぐるんと回転しながら、俺たちに迫ってくる。

「いッッ!?!」

《ふぁッ!》

高速道路での落下物が危険であるのと同じく、高速レースでもこうした落下物は非常に危険だ。相対的な速度があるから、小さい部品一つでも大きな被害がでる。音速で《ヴオーパル》とぶつかった俺は、姿勢制御を失い、失速どころか錐揉みしながら、どんがらがつしゃくとコースに転がった。

そのすきに、アリスがゴールラインを切る。

「ありかよ、こんなの……」

と嘆くも、ありなのだ。だって《キャノンボール・ファスト》は妨害が許されているのだから。

くそお、まさかこんな初歩的な妨害にやられるなんて……。

『まあ、弟くんはよくやったわ。十分な手本になったわよ、ほら』

「織斑君のライン取りすごかったね」「リデルさんに追いつくなんて、織斑くんやる〜」「あのコースよく、スピード落とさず曲がれたわよね」「へえ、ああやるんだ、私もみならわないと」

クラスメイトから称賛の声を浴びるも、どうにも気持ちは晴れなかった。

いま、俺が認められたいのは彼女たちじゃない。アリスなのだ。そのアリスに勝てれば、すこしは見直してもらえるじゃないか。そう意気込んでいたからこそ、あとちよつとのところで負けた悔しさが半端なかった。

「でも、すげー悔しいです」

ずっと目標にしていた存在に追いつけた。

そういう高揚感から一転、この敗北である。落差が大きいだけに悔しさも二倍だ。

『よしよし、本当に悔しかったのね。じゃあ、おねえさんが慰めてあげましょうか?——って、あれ、千冬こつちに来てたの? え? 違うわよ、なにもやましい気持ちなんて、いやくん、やめてよ、おっぱいもげるっ』

それつきり音声は途切れ、画面がオフラインに変わった。

それからしばらくして千冬姉の顔が映った。その後ろでは自分の胸をフーフーするジェニファーさん。涙目だが一体何をされたんだ。もげるって叫んでいたけど。

『よし、模擬戦は終了だ。ふたりともピットに戻ってこい』
「……はい」

俺はまだ抜けきれぬ敗北感を抱え、みんながいる第七アリーナのピットに戻った。

♡

◆

♣

♠

「ちくしょう……。もうすこしで勝てたのになあ」

ジェニファーさんによる高速実習が終わった放課後。俺は整備科で今日の反省をしていた。なんで、整備科かというと、模擬戦のとき《ヴォーパル》にぎっくりやられたからだ。その傷をへホワイトクインが4本の作業アームを操ってせつせと直している。

その前でアリスが腕を組みながら得意げに言った。

「私のうしろについたことが間違いでしたね。さては私のヒップに感わされましたか、ふふん♪」

「確かにアリスは魅力的なヒップをしているからな」

アリスはアスリート体系だが、丸くて柔らかかそうなお尻をしている。

別にアリスの尻に見とれて反応が遅れたわけじゃないけど、自慢するだけのモノは持っている。

「あ、あの、真顔で返されると、それはそれで照れるんですけど……」
自分の尻を手のひらで隠して、頬を桜色にするアリス。

それを見て「俺は何を言っているんだ」と急に恥ずかしくなった。
「た、まったく、照れるぐらいなら話題にするなよ」

「す、すみません……」

お互いの言動が恥ずかしくなって、顔をそむける。なんとなく気まずい空気だ。

「つーか、男女でこういう話はするもんじゃないな。変に意識してしまおう。話を変えよう。」

「しっかし、『第二形態移行』してもアリスに勝てないなんて泣けるよなあ」

「そんなに落ち込まなくても。私はあなたを一端のIS操縦者だと認めていますよ」

「いや、そうじゃなくてだな」

俺は黙り込んだ。

俺が認めてほしいのは、IS操縦者としてじゃなく、——たぶん、男としてなんだ。

いつだってアリスは俺の力になってくれた。でも、アリスは俺を頼ったことがない。俺に頼られるだけの力がないことは承知しているけど、それでもやっぱり一人の男として頼られたいんだよ。

——だって、俺はアリスのことが。

「どうしました、急に黙り込んで」

顔を上げると、アリスが俺の顔をジーンと見ていた。深く、深く、遠くまで見通すような聡い瞳で。それに心を見透かされた気になった俺は、話をはぐらかした。

「でも、このままだと、一年一組の出場枠はアリスかラウラで決まりだな」

一組で最強はアリスかラウラだ。この二人が相手では、俺の出場は難しいかもしれない。

「あ、実はそのことなんです——」

と、アリスが何か言いかけたところで、彼女のケータイが鳴った。

「はい、私ですが。どうしました、ラウラ？——あ、はい、わかりました。すぐ行きます」

そう言って通話ボタンをオフにする。内容はラウラからの呼び出しらしい。

アリスは下唇に人差し指を当て、しばらく思索してから、俺に言った。

「ねえ、一夏。今週の休日、あいていますっ？」

「ん？ あいてるけど」

「じゃあ、ちよつと私と出かけませんか？」

急に。急にだ。急にアリスが、俺に顔を寄せてそうやってきた。

ずずつとアリスの綺麗な顔が迫ってきて、俺はまたもやたじろぐ。

「あ、ああ、かまわないが？」

「じゃあ、待ち合わせ時間と場所は追って連絡します。私はラウラの所に行ってきますので」

そう言って、去っていくアリス。

彼女の姿見えなくなつてから、俺はようやく思った。——俺、もしかしてデートに誘われたのか？

第80話 恋の秋雨前線

学園の来賓入口。高軌道実習の三日目を終えた休日。というわけで。思うところあって、一夏を誘って出かけることにした私は、いまその待ち合わせ場所に向かう最中であつた。

その途中、私はある人物と遭遇した。

艶やかな金髪と聡い碧眼、成熟した大人の色気をかもすその女性は〈亡国機業〉の女幹部スコール・ミューゼルだ。

「あら、アリス。おでかけかしらん？」

八月に捕らえた彼女の身柄は、情報部が預かっている。そこで彼女の口から〈IS学園襲撃〉や〈亡国機業〉の内情についてリークされた。以降、上層部は彼女を情報提供者、兼〈亡国機業〉とのパイプ役として扱う方針を出したらしい。その見返りにある程度の自由が許されていた。もちろん、監視付きではあるが。

「こんなところで何をしているんです」

「近々ジェニファーが主催する〈キャノンボール・ファスト〉があるでしょ。〈ミューゼル社〉はそれに協賛しているの。〈ミューゼル社〉の代表として、視察させてもらおうと思つてね。そういうあなたはこれから、おでかけ？ さてはデートかしらん」

ずいぶんとめかしこんだ私の服装を見て、スコールはにんまり笑つた。

「えっと、まあ、そう、ですネ……」

はつきり言うのは憚れた。誰かにデートだと言うのは、なかなか恥ずかしいものがある。

私がつまらず火照つた顔をそらすと、スコールがとろけた笑顔を見せた。

「あらやだわ。初々しい♡」

うふふと妖艶に笑うスコールに怖いものを感じ、私はうしろへたじろいだ。

「あ、あなたにはオータムがいるでしょ……」

「あら、美味しそうなものを見たら、食べてみたくならない？」

「またそんなこといって。そのうち愛想を尽かされますよ。秋空と女心は変わりやすいんですからね」

「おあいにくさま。オータムは私にメロメロだから大丈夫よん、うふふ」

その自信はどこから来るのか——と言いたいところだが、実際オータムはずいぶんとスコールに惚れ込んでいる。別れ話のひとつでもしようもんなら「あたしを捨てないでくれ」って泣きそうなぐらいである。男勝りのくせに、そういうところは女々しいヤツなのだ。スコールはそういうところが可愛いというけれど。

「ま、なんでもいいですが、私そろそろ行きます」

「あらそう。時間があるなら案内してもらいたかったのだけど、仕方がないわねエ。そうそう、出かけるなら、傘を持っていったほうがいいわよ」

「今日は降水確率3%ですよ」

天気予報のお姉さんも「最高のおでかけ日和」と太鼓判を押していた。

「あなたも言ったじゃない。秋空と女心は変わりやすいって。それに私は雨女だから」

ミューゼル家は特異な家系で、発火能力を遺伝体質に持つらしい（その能力が災いして、彼女は知人宅を全焼させてしまった過去がある）。つまり小火^{ほや}を消す雨女になってほしいと願って「土砂^ス降り^{コール}」と名付けられたらしい。

「ともかく、待ち合わせ時間が迫っているので私は行きます」

「はい、いってらっしゃい。デート、楽しんでらっしゃいね」

さきほどの妖艶な笑みから一転、やさしいお姉さんの顔で私を見送ってくれる。

さて、土砂降りに遭遇したせいですっかり足止めをくらってしまつた。こちらから誘ったデートだ。遅れては立つ瀬がない。急がないと。



「よし、行くか」

寮の入り口前。俺はジャケットの襟をびしつと整えた。

天気は快調。青空には雲一つない。お天道さまも今日は俺に味方しているらしい。

「なんだ、これから出かけるのか？」

さあ出陣というときに、背後から声がかかり、俺は振り向いた。

立っていたのは千冬姉だ。それも休日だというのにいつものスーツ姿で。

「あれ、千冬姉、いまから出勤？」

「ああ、明日から各国の国家代表がへキャノンボール・ファストの調整に向けて現地入りするんだ。宿泊施設の準備やら、整備ハンガーの手配やら、いろいろな。——それにしてもずいぶんと粧し込んでるな。白いジアケットなんか着て」

千冬はジーツと俺の服装を凝視したあと、思い至ったようにフッと笑う。

「さてはこれからデートか」

見抜かれて頬に赤みがさす。さらに服装を指摘されると、デートに掛ける意気込みも見抜かれた気がして、身悶えしたくなるような羞恥心に襲われた。語調もおもわず縮こまってしまう。

「そ、そうだよ、悪いかよ……」

「悪いなど言っていないだろ。——で、相手は誰だ」

興味津々な様子で訊いてくる姉に、俺は投げやりにいった。

「アリスだよ」

途端、ニヤけていた千冬姉の表情が一瞬だけ強張った。そう、まるで針を口に放り込まれたみた。それつきり、千冬姉は眉間に険呑なしわを寄せ、難しい顔で急に黙り込んでしまった。

「千冬姉？」

「ん？ あ、まあ、なんだ、楽しんでこい。ただし、節度を持ってな。ほら、行け」

と、千冬姉が俺の背中を叩く。

言葉こそ普段通りだったが、表情はどこか硬い。そんな千冬姉の態度に気持ち悪さを感じながら、俺は寮を出るのだった。

♡

♣

♠

「何だったんだ」

待ち合わせ場所に向かう途中、千冬姉が見せた表情に、俺はモヤモヤした気持ちを抱えていた。

何で千冬姉は、あんな顔をしたんだ？ アリスの好感度ってよかつたと思うんだけど。

(もしかすると、アリス本人じゃなく、ヘデウス・エクス・マキナが信用できない?)

俺は ヘデウス・エクス・マキナ のことを千冬姉に話していないけど、アリスと ヘデウス・エクス・マキナ の関係に薄々気づいているんだろう。俺も ヘデウス・エクス・マキナ について詳しく知らないから、全てを信用しちやいないが。

「——って、考えても始まられねえよな」

どうあれ、アリスが信用できる相手ってことに間違いはない。そのアリスが信頼する相手なら、きつと信頼できる相手だ。——と、強引に結論を出して、俺は待ち合わせ場所にやってきた。

待ち合わせたモノレール改札前に、アリスの姿はなかった。

待ち合わせ時刻は既にすぎている。時間に正確なアリスが遅れてくるなんて珍しいな。

「まあ、すぐ来るだろう。先に切符でも買っとくか」

そう思いつき、自販機で切符を購入する。ついでにアリスの分も買い、待ち合わせ場所に戻ると、学園の方角にアリスの姿が見えた。スタンドカラーのブラウスに、赤い棒リボン。そこに合わせたラッフルスカート揺らしながら、アリスが俺の許に走ってくる。

「すみません、おくれました」

「いや、俺もいま来たところだよ」

「そうですか。待たせなくてよかったです」

そう言つて、柔らかく微笑む。

その笑顔に頬が熱くなるのを感じた俺は、照れ隠しに早々と言つた。

「よ、よし、じゃあ行こうぜ。もうじきモノレールがくるから。ほら切符」

「あ、買っておいでくれたんですか。なんだか、気を使わせてすみません」

「いや、いいつて。ほら行くぞ。モノレールが来る」

アリスに切符を渡し、二人で改札を抜ける。駅のプラットフォームには、すでにモノレールが到着していた。しかも駅員が発進まえの安全確認をしている。俺たちは慌てて飛び乗った。

「なんとか、間に合いましたね」

「ああ、一本逃すと次が長いからな」

このモノレールは学園と本土を繋ぐローカル線なので、本数は多くない。一本逃すと一時間も待たなければならぬ。——と、説明している合間にモノレールが次の駅に入る。

俺とアリスは改札を抜け、市内に向けて歩き出した。

目的地は決めていない。適当にぶらっつこうというのが今日のプランだ。

「それにしても時間に正確なおまえが遅れてくるなんて珍しいな」

「ちよつと土砂降りに遭遇しまして」

「土砂降りねえ」

土砂降りと言われ、なんとなく空を見上げる。先まで晴天だった空は——いつしか曇り模様になっていた。秋の空は変わりやすいというが、これはもしかして。

「それでその土砂降りが言うんです。私は雨女だから傘を持っていて——」

「アリス、その言葉、正しかったわ」

俺は空を見上げたまま言う。同じようにアリスも空を見上げる。

その顔にポツンと落ちてきた雫が弾けた。一滴、二滴。少しずつ増えていった雫は、やがて豪雨へと変わり――。

「うそでしょーッ」

「アリス、走るぞッ」

雨が街を叩くなか、俺はアリスの手を取って走り出した。

俺たちが足を速めるにつれ、雨脚も早くなつていく。こりやずぶ濡れになりかねないぞ。

「アリス、とりあえずあそこに避難しよう」

幸いにも街中とあつて雨宿りできる場所はすぐに見つかった。

俺はアリスの手を引いて、近場のブティックに駆け込む。急な豪雨に、俺はすっかり水浸しだった。

「アリス、大丈夫か、濡れてな――いッッ」

アリスの様子を確認し、俺は咄嗟に顔をそらした。――ブラウスが雨で透けて、くつきり下着が浮き上がっていたからだ。いや、レースで装飾されたそれは、下着と呼ぶよりランジェリーと呼んだ方がしっくりくるかもしれない。なんというかアリスらしからぬ気合いの入った下着だ。

「あ、あの一夏、見ないでください……恥ずかしいです」

細腕で体を抱き、ブシューと顔から蒸気を吹くアリス。

俺は「すまんッ」と謝つて、自分の着ていたジャケットをアリスにかぶせた。



下着を見られた羞恥心で、私は悶絶しそうだった。それだけならまだしも、よりによつて背伸びした下着を見られたのが恥ずかしい。

そんな私に一夏が「すまん！」と謝つて、自分のジアケットを掛けてくれる。かけられたジャケットは濡れて冷たかったけど、彼のやさしきは暖かかった。それに心がホッと温まる。

「ちよつと濡れているが、がまんしてくれ」

「い、いえ、ありがとうございます。なんだか、今日はしてもらってばかりですね」

「気にすんな。それより、着替えようぜ。風邪ひくとまずい」

私はともかくとして一夏はヘキヤノンボール・ファストの出場がかかっている。体調を崩して落選なんてわけにはいかない。幸いにも駆け込んだ店はブティックだ。着替えの服はやまほどある。

「そうですね」

私と一夏が雫を滴らせながらブティックの店内に入ると、水浸しの私たちを見た店員が慌ててタオルを手に駆け寄ってきた。「お客様、どうぞこれでお召し物を」「ありがとうございます」と、店員からタオルを受け取り「それで着替えを買いたいのですが、店内を拝見させてもらって大丈夫でしょうか」そう尋ねる。

「はい。かまいません。ご自由にどうぞ」

「本当ですか、ありがとうございます」

私たちは拒否されなかったことに安堵し、入念に体を拭いて着替えの服を選びはじめた。

さてコーディネートのやり直した。せっかくのデートだし、一夏に選んでもらうのもいいかもしれない。

「ねえ、一夏——て、何を見ているんです?」

一夏はがしがしと頭を拭きながら、店の一角を見ていた。その先で二人の男女がなにやら衣装について討論を交わしている。赤茶の髪に、おそろいのヘヤバンド。顔つきもどこか似通っていて、兄妹のように見える。

「なあ、蘭、こっちのスーツとかどうだ?」

「はあ? 赤色とか、派手すぎっしょ」

「じゃあ、こっちはどうだ!」

「地味——っていうか、おにー、さっさと決めてよ。一夏さんの誕生日プレゼント買う時間がなくなるじゃん!」

一夏さん? ということはあの二人は一夏の知り合いなのだろうか。私が視線で尋ねると、一夏は「中学時代の同級生だ」と言って、彼らの許に歩いていった。

「よつ、弾、蘭。こんなところで何してんだ？」

「お、一夏じゃねーか」

弾と呼ばれた少年が手を挙げる。

隣の少女、蘭は一夏の出現にびっくりして顔を赤くした。

「一夏さん、どうしてここに!?!」

「いや、急な土砂降りに遭遇してき、ここに避難してきたんだ」

「あ、それは大変でしたね。——で、そ、そちらの女性は？」

一夏の後ろで様子を伺っていた私を、蘭さんがジーと見る。

「あ、紹介するな。こっちは同じクラスのアリス・リデルだ」

一夏の紹介で、私は会釈した。

「はじめまして、アリス・リデルです」

「おう、こちらこそ。俺は五反田弾、こっちは妹の蘭だ」

「は、初めまして、五反田蘭です」

五反田蘭。じゃあ、この娘が鈴や月子が言っていた、A判定を出したあの。

ということは、彼女も一夏のことか。そうか、だから私に興味深々なのか。

「で、おまえらここで何してんだ？」

「いや、実はな——」

弾さんが簡潔に経緯を話してくれる。なんでも、弾さんは一夏の誕生会を計画した一人で、それ用に勝負服を買いに来たらしい。「あんな美少女そろえられたら気合い入れるしかねえだろ」とのことだ。妹の蘭さんはその相談役に連れてこられたらしい。「プレゼント代を工面してやつから」という条件つきで。

確かに彼女の私服にはセンスが感じられた。淡いピンクのワンピース姿は清楚でありながら、ほのかな色気を醸し出している。全身ずぶぬれの私とは比較にならない愛らしさだ。傍目からは「井戸で溺死した哀れな女霊」と「麗しいお嬢様」くらい違う。

その麗しのお嬢様は、説明の最中もずっと私を見ていた。その視線はあからさまな「一夏さんとどういう関係なんだろう」目線だ。

「えつと、こんな格好なので、見みつめられると恥ずかしいのですが」

「あつ！ す、すいません」

蘭さんはぺこつと頭を下げた。それから遠慮がちな上目つきいで私を見る。

「——あの、アリスさんでしたよね、よかったら一緒に見て回りませんか？」

唐突な申し出に、私と一夏は顔を見合わせた。

私たちと一緒に？ きよんとする私たちに蘭さんが慌てたように付け加える。

「一夏さんのプレゼントを買いに来たんですけど、おにーったら、自分のことばかりだし、プレゼントも本人に直接選んでもらった方がいいかなあ、なんて……。ははは、ダメですよね……。いきなり無粋なこと言つて、すみません」

蘭さんは途中から語気を弱めた。

本当は私のことか気になって仕方ないのだろう。できるなら「威力偵察”を行ないたい。でも、私たちの間に割って入るのは、あまりにも無粋すぎると感じて申し出を引つ込めた。そんな具合か。

「蘭、それはいくらなんでも空気読めてねえぜ」

「おにーに云われなくても分かっているってば！」

苦笑いする兄に肘打ちをかます。可憐な容姿に反して意外にもバイオレンスだ。

「ぐおつ」と悶絶する兄に、蘭さんはハツとして殴った腕を背中に隠し、

「そ、そういうことですから、お気になさらず。急に変なこといってすみませんでした……」

「私は、いいですよ」

蘭さんが私を見る。「え？ いいんですか」と。私は「はい」と頷いた。あとあと勘ぐられるなら、いま関係をはつきりさせた方がいいかなど。それに一緒に買い物するぐらい、何の不都合もない。もちろん一夏がよければ、だけど。

「俺もかまわないぜ」

「おい、いいのかよ、一夏」

弾さんは一夏の肩を抱き寄せ、ひそひそ妹に聞こえない小声でそう言った。

「アリスがいいって言ってるし。それに蘭のやつ、IS学園に入学するって言ってるんだろ？ ちようど話を聞きたかったところだからな」
「うくん、おまえがそういうならいいけどよ……」

ガシガシとバンドでまとめた髪をかきながら、しぶしぶな感じで頷く。

妹のデート同伴にまだ納得いかない様子だが、表情を咲かせた妹にやめろと言える空気でもなかった。

「蘭、あんまり二人に迷惑かけんなよ」

そう釘を刺す兄の姿は、なんだか千冬さんみたいだった。奔放な妹に振り回されているようにみえるだけで、本当はしっかりしたお兄さんなんだろう。「わりいな、二人とも」と隠れて妹さんのフォローする彼の姿を見て、私はそう思った。

第81話 彼女が望むもの

というわけで、ぱぱつと選んだ服で着替えた一夏一行は、ヘナポレオンという男性用品専門店へ場所を移した。ちなみに、いまの服装は一夏、アリスともにパンツスタイルにTシャツというラフな姿をしている。

(綺麗な人だなあ)

蘭はアリスの姿を見て、声に出さずそう思った。

スラっと長い四肢と高い身長。広い骨盤。メリハリのついたくびれ。綺麗な曲線を描くヒップライン。服装はラフだったけれど、着飾らなくても綺麗に見えるのは、それだけ素がいいからだろう。蘭はアリスのスペックの高さに、気おくれする思いだった。

「どうした、蘭。なんか気持ち沈んでるみたいだけど？」

「あ、いえ、アリスさんって綺麗だなあって」

「はは、確かに綺麗だよな。それでいて器量もいいんだぜ？」

「器量？ 確かに顔も可愛いですけど……」

鼻筋もまっすぐとおり、それでいて高い。くりっと大きい碧眼は愛くるしく、薄めの桜唇は同じ女性から見ても魅力的に思うが、一夏の言葉には別のニュアンスが感じられた。

「それもそうなんだが、顔だけじゃなくて、いざって時に頼りになる感じかな」

「頼りになる……？」

蘭は兄と『爆弾解除型目覚まし時計』で遊ぶアリスを盗み見る。解除に失敗し、周囲から「うるさいぞ！」と叱られるアリスに「頼り甲斐」というものは感じられなかった。

(確かに綺麗ではあるけど……)

むしろ、聖マリアンヌ女学園で生徒会長を務めている自分の方が、しっかりしているのではないだろうか。子供に「怒られてやんのおー」と笑われ、真っ赤になるアリスを見てしまえば、自惚れを差し引いても、蘭にはそう思えてならなかった。

(鈴さんなら、わかるんだけどなあ)

代表候補生となって帰ってきた鈴には、人間的な力強さがある。いまの彼女には物語の真ん中に躍り出るような存在感があった。ずっと好敵手として相見えてきた蘭が危機感を抱くほどにだ。

(同じ代表候補生といえ、セシリアさんもすごかったなあ)

文化祭でIS学園を訪れたときのことを思い出す。接客してくれたセシリア・オルコットの煌びやかときたら、愛読するティーンズ向け雑誌ヘインフィニット・ストライプスの読者モデルのような眩しさだった。

事実、代表候補生を熟す傍らモデルも行っているというし、まさに“本物”である。

(やっぱり、鈴さんたちの方が強敵だよお……)

激カワコスめで、彼のハートをキュン☆キュン☆ストライク。そんな育ちである蘭にすれば、キラキラ感を出す鈴やセシリアの方が、アリスより強敵に思えるのは致し方なかった。

客観的に見ても、メイドコスが萌え萌えな美少女と、アサルトライフルをぶつ放しビルを爆破するような女の、どちらが世の男性に支持されるかなんて、火を見るより明らかだろう。

(私も、もつとがんばって可愛くならないと)

アリスはともかく、いまのモテカワ度では、鈴やセシリアたちにはきつと勝てない。かといって譲ろうとも思わない。乙女の辞書に『撤退』の文字はないのである。

(わたしも、もつと可愛い服を着て、もつとキラキラなメイクをして、もつとキュンキュンな女の子になって——。そうだ、ここでのプレゼント選びも外せないよね)

もうじき彼の誕生日。想いを寄せる彼にいいモノを贈って、好感度を上げるチャンスだ。

そう思った蘭はアリスの警戒レベルを引き下げ、一夏のプレゼント選びに意識をやった。

「ところで、一夏さん、何か欲しいものありますか?」

「ん? そうだなあ」

急に話題が変わったことにきよとんとするも、特に気にせず考える

一夏。

もともと物欲は強くないため、いざ言われても思いつくものがないかった。

「じゃあ、いろいろ見て回りましょうか」

と、自然な流れで一夏に身を近づけ、店内を見て回る。

この男性用品専門店へナポレオンは、服のみならず、時計や靴など男性が身に着けるものからビジネス用品まで全てがそろえられている総合専門店だ。その店内で、蘭がまず目をつけたのは腕時計のブースだった。

「一夏さんは腕時計とかします?」

「しないなあ。でも、時計は男のステータスっていうし、一個ぐらいあってもいいかもな」

「そうですか。じゃあ、プレゼントします!」

「そ、そうか? んじゃ——これにするよ」

一夏は腕時計のショーケース——じゃなく、その上に置いてあったツリーハンガーを見た。そこにはスポーツ向けのデジタル時計がいくつもかけられてあった。シンプルなデザインは悪くなく、なにより1980円という値段が気に入った。

「え、そんな安物でいいんですか?」

確かに1980円とサイフに優しい値段だが、一夏のチョイスにどうにも不満げな蘭だった。

正直な気持ち、好きな人にあげるプレゼントとしては、安っぽすぎる。ずっと使ってほしいという意味でも、壊れやすい安物は使っほしくなかった。

「でも、もつといいものありますよ、これとか」

蘭がショーケース内の腕時計を指す。無骨なデザインがカッコイイ最新モデルだ。一夏も思わずカッコイイなとこぼす。ただし、GPS搭載で時差が自動調整されるその値段は39800円だった。

「さすがに、これは高すぎるって」

「大丈夫です。店のお手伝いがんばりましたから。遠慮しないでください」

そう言つて、どんとこいとファイティングポーズをとる蘭。

気持ち嬉しかったが、一夏は気おくれした。あいにく、年下の、それも中学生の女の子に高い物を買わせるほど、無神経でもなければ、神経が凶太いわけでもない。

「いや遠慮するつて。それに、高校生の俺にこの時計は身分不相応と
いうか……」

「え、最近の高校生つてみんなこれぐらいのものつけてますよ」
「そうなのか!？」

そういえば、セシリアもかなり高そうな時計をつけていた気がする。ブルガリだとかなんとか。いや、セシリアは現代高校生のモデルケースから大きく逸脱している。エステに通う高校生など、参考にならない。

そもそも周りがどうかじゃなく自分がどうかだ。

やっぱり一夏にとつて39800円の時計は高いのである。ましてや代金を払うのは中学生だ。

「やっぱり俺はこっちのデジタルウォッチがいいな」

と、なおも食い下がる一夏。

しかし、好きな人へのプレゼントとあつて蘭も蘭で譲らない。

「でもでも、やっぱり、こっちの方が(それに安物だと鈴さんにバカに
されそうだし)」

一番のライバルというべき鈴は、いまや中国の代表候補生だと聞く。しかも、大企業のスポンサー付き。軍資金はたんまり持っているはずだ。それに根っからのパワータイプである彼女のことである。きつと高いプレゼントを用意し、こちらの戦意喪失を削いでくるに違いない(と蘭は勝手に思っている)。その鈴にイチニシティブを取らせないためにも、「私だつてこれぐらいものはプレゼントできる」という意思表示をしておきたかった。

「ほら、これすごくカッコイイですよ。一夏さんにぴったりです」

「でもさ、このストップウォッチ機能も捨てがたいぜ?」

「それならこっちにもついていますよ。他にも太陽光で充電できるつて」

「こつちも3年は電池交換いらずって書いてあるぞ」

なおも、そんな具合で頑なに譲らない二人。

いいもの買ってあげたい蘭と、気を使って安く済ませたい一夏が、互いを思いやるがゆえの、めんどくさい、大変めんどくさい綱引きをしていると、いきなり二人の目の前にステンレスの物体がどんと現れた。

「一夏、これ見てみる。自宅でパスタが作れるらしいぜ!」

弾が二人の前に繰り出したのは自家製麺製造機だった。小麦粉と水と卵を入れてハンドルを回すと、生めんが作れるというものだ。最近DIYに興味を持ち始めていた一夏は、自家製麺製造機に興味を惹かれた。

「へえ、こんなのあんのか、なにになに?」

付属のレシピ本によれば、生地いろいろなものを練り込んでオリジナルパスタも作れるらしい。

イカ墨パスタ。ハバネロパスタ。ベジタブルパスタ。いくつものレシピが頭の中で浮かび、料理好きな一夏の興味を駆り立てる。値段も2980円とお手軽。一夏は内心でコレほしいと思った。

すると、わくわくと興奮を抑えられない子供のような笑顔にあてられて、蘭が言った。

「じゃあ、これにしますっ?」

「え?」

「ほしいってすぐ顔に出てましたよ」

「ま、マジか」

クスクス年下に笑われ、一夏の頬に赤みがさす。

我ながら「ポークフェイスがダメだな」と思いながら、一夏は言った。

「おう、じゃあこれにするよ」

「はい、わかりました」

兄が持ってきた自家製麺製造機を持ち、蘭がレジに向かう。

意図せず蘭を妥協させることに成功した一夏は、ほっと胸をなでおろした。

その後ろでは麵製造機を持ってきた弾が「やれやれ」と一息つく。一夏はその溜息の意味を察せなかったが、同じ自家製麵製造機を持ってきたアリスは、その意味を解っていたようだった。

♡

♣

♠

無事プレゼントを買い終えたあと、時刻が正午をまわったとあって、一同はイタリアンカフェへ訪れた。「レシピ本を見ていたら、パスタが食べたくなった」と一夏が選んだ店である。

「蘭、プレゼントありがとな。お礼に奢るよ。好きなもん頼んでくれ」

「いえ、そんな。自分の分は払いますから」

「いいって。遠慮すんな」

「じゃあ、遠慮なく、俺はナポリタンな」

「弾、おまえは払え。奢んのは蘭だけだ」

へいへい、不平たらたらな様子で弾がメニューを選び直す。

蘭も一夏の気遣いに気分をよくした様子で「じゃあ、お言葉に甘えて」と同じくメニューを選び始める。一夏とアリス、蘭はオススメである「カニクリームパスタ」を頼み、弾は「ナポリタン」を頼んだ。しばらくしてテーブルに注文の品が運ばれてきた。並べられた品をそれぞれが口に運び、談笑を交えながら感想を述べ合う。そして、食事もひと段落ついたところで、蘭が可愛いらしいハンカチを取り出し、口周りを拭いた。

「そのハンカチ、可愛いですね」

「これヘインフィニット・ストライプス」のふろくなんです」

「インフィニット・ストライプス？」

アリスが首をかしげる。

「ティーンズ向け雑誌だよ。こいつ、その雑誌の影響をすっげー受けててさ。愛しの彼をメロキュンさせる10のキャワワメソッドとかいうのを実施してんだよ。1、彼の前では『小さい口』で食事するべし。そして『もうたべられなあい』といって小食をアピール。とか――

」

「おにい、わたしの部屋に入って、勝手に読んだの？」

ヒヤツとした声音。墓穴を掘った兄は額からダラダラと脂汗を流した。

流血沙汰になりそうだったので、慌てて一夏は話題を変えた。

「そ、そうだ。聞いたぜ、蘭、来年IS学園を受けるんだってな！」

「あ、はい。そのつもりで、実はこのまえISの適正テストを受けたんです。そしたら」

そう言つてバンと机に用紙を繰り出す。そこには簡易IS適性テストの結果通知とあつた。

判定は「A」。

これに一夏たちは「おお」という顔をした。蘭もえっへんと胸を張る。それが許されるだけの結果であつた。だが、その兄だけはよくわからない様子でパスタを啜える。

「やっぱこれ、すごいんか？」

「ああ、Aといえば、代表候補生クラスに相当する判定だ——といつても蘭が受けたテストは簡易版だから、必ずしも代表候補生と同等とは限らないんだけどな。そもそも鈴が受けたテストと簡易テストは違うし」

「何が違うんだよ」

「単純に試験の項目が少ないんだ。——適正テストって『操縦技術適正』『運用管理適正』『潜在能力適正』の三項目あつて、その平均値から導きだされるんだ。鈴の場合、三つの平均が「A」なんだ。でも、蘭が受けたのは『潜在能力適正』ってテストだけだろ？」

「あ、はい。なんか不思議なカプセルに入っただけです」

「なるほど、一つの項目が「A」より、すべての項目が「A」の方がすごいわな。で、潜在能力適正ってなんだ？　ほかの二つは字面でわかるけどよ」

「『潜在能力適正』というのは、ISが持つ潜在能力をマシンポテンシャルをどれだけ引き出せるかという適正だ。この適正が高いと《第二形態移行》や《単一仕様能力》を発現しやすいとされているんだ」

「さらにいうと、潜在能力適正というのは、遺伝子検査でもあるんですよ。ISは人が持つ遺伝子と関わりが強いマシーンですから。女性にだけ動かせたりとかね」

「じゃあ、この潜在能力適正は先天的なものなのか？」

「そうなりますね。努力を積んでも、こればかりはどうにもなりません」

とはいっても、この潜在能力適正はそこまで重要じゃない。操縦技術や運用管理能力が高ければ、十分にIS操縦者としてやっていく。ラウラがそのいい例で、彼女は〈越界の瞳〉の影響で潜在的なIS適正を失ったが、実力でそれをカバーし代表候補生まで上り詰めている。

もちろん、最低限の数値は必要である。仮にこの適正が【D】だった場合、起動さえできない。

「もちろん高い事に越したことはないですけどね」

「じゃあ、やっぱりAはすごいんですね。ちなみにアリスさんは、適正いくつなんですか？」

口にいっぱいのパスタを詰め込んでいたアリスは、早口でそれを飲み込んだ。

「C+です」

「C+、ですか……？」

ライバルが当たり前のように候補生で専用機持ちばかりだっただけに、拍子抜けしてしまう。それに【C+】といえば、平均以下の数値だ。IS学園では落第予備軍。まずいことを訊いたような気がして、蘭は控えめに言った。

「え、えっと、めげずにがんばってくださいね。努力は裏切りませんか」

「はい、がんばります」

数値を明かしてからでは、上目線に聞こえたけれども、アリスはフオークをぐっと掲げた。一夏は白々しいと苦笑いだったが。

「じゃあ、あとは筆記テストと実技テストをがんばるだけだな」
「ですです」

「待て待て、当たり前のように入學するような流れになっているけど、それでいいのかよ」

意気込む妹に、箸の手を止めたのは兄の弾だった。

「おまえんとこ、エスカレーター式で大學まで入れて、しかも、超ネームバリューのあるところだろ？ それを棒に振るのは勿体無くないか？」

「いいの。ネームバリューならIS学園の方があるし」

「ぐっ……。それになんか、このまえ襲撃事件あったじゃねーか。大丈夫なのかよ」

「大丈夫だって。そんなこと何回も起こらないよ。それにいざとなったら……」

蘭から送られる熱のこもった視線に、一夏はまた苦笑いをした。

「そうか。そういうえば、襲撃者からIS学園を守ったのって、おまえなんだってな」

「ほんと、すごいですよ！ 襲撃者をやっつけちゃうなんて。さすが一夏さんです！」

現在でも襲撃事件の顛末はそういうことになっている。赤騎士やアリスの存在は一貫して黙秘されており、こういった話題には出てこない。

偽りの功績なのに尊敬のまなざしを受けて、一夏はひどくいたたまれなくなった。まして、当人を前にして大きな顔ができるほど、面の皮は厚くない。そんな彼が取った行動は、話を方向転換させることだった。

「お、おう。まあなんだ、自分から危険に飛び込むような真似さえしなければ、安全なところだよ、IS学園は。あ、そうだ、もしIS学園に入學するんだったら、今度行われるへキャノンボール・ファストに見に来ないか？」

「あ、それ行きたいと思ってたんですけど、チケットが即日完売で手に入らなくて」

「そうか、ならこれやるよ」

一夏がチケットから取り出したのはチケットだった。それを二枚、

五反田兄妹に渡す。

「おい、これへキャノンボール・ファスト」のチケットじゃねーか！」
「ど、どうしたんですか、これ」

「いや、俺、その主催者と知り合いでさ、譲ってくれたんだ。よかったらやるよ」

「しゅ、主催者と知り合い……ッ!？」

彼は軽々しく言ったがへキャノンボール・ファスト」は国際大会である。その主催者ともなれば、IS業界でそれなりに幅を利かす人物になる。そんな人物と知り合いとあつて、弾は急に、この友人が遠い存在に思えた。

「どうした、弾」

「ううん、なんでもないよ、織斑君」

急に他人行儀になる友人を見て、一夏は青ざめた。IS学園の生活で、男友達の重要性が身に染みていた彼である。男友達が減ることはもっとも歓迎しない。気心知れた友人に距離を置かれたとあつて、一夏は身震いした。

「お、おい、そういう態度マジでやめてくれよ。俺たちずっと友達だろ！」

よくもそんな小っ恥ずかしい台詞を言えるもんだと弾は思った。けれど、そういうところも一夏の魅力であると知る彼はケラケラわらった。

「あはは、冗談だって……。じゃあ、蘭、ありがたくこのチケット貰つて見に行こうぜ」

「うん。一夏さん、ありがとうごさいます」

二人は一夏からチケットを受け取り、大事にしまう。

このチケットが——恐怖への片道切符になることを、今はまだ知らずに。



弾たちと昼食をすましたあと、俺たちは適当に店を回った。雑貨屋でアリスの髪留めを買い、本屋で蘭の参考書、家電量販店で弾のケータイを買い換えた。最後にスーパーマーケットで食料品を買い終えると、時刻は門限の7時を回ろうとしていた。

「結構な量を買いましたね」

寮の門をくぐったところで、両手の買い物ぶくろをアリスが見やる。

弾が誕生会の段取りをしてくれると言っても、場所は俺の家だ。何も用意しておかないわけにはいかない。そう思っただけで買い出したのだ。

「そうだ。アリスも来るんだろ、当日の誕生パーティー」

「ええ、特に用事がなければ」

用事。アリスがいうそれは、俺たちがいう“用事”とはまるで違う。

世界をまたにかける彼女の組織の用事となれば、それは銃弾が飛び交うような危ない作戦を言う。それを聞くと俺は今でもひどい不安に駆られる。だからこそ、彼女の頼れる存在、力になれる人間になりたいと願うんだ。

その願いと裏腹に不甲斐なさを感じていると、アリスがふわっと柔らかな笑みを浮かべた。

「ねえ、一夏、いま私のことを考えていたでしょ」

まさにその通りだった俺は、ちいさく動揺した。

「やっぱりですね。——最近、一夏は私のことをよく気にかけてくれますよね」

「い、いや、それは——」

「嬉しいですよ、私」

アリスは俺の前に飛び出た。そして、くるつとこちらを向いて微笑む。

「でも、私のことばかりに感^{かま}じてほしくないのも本音です。ラウラに聞きましたよ。あなた、“兵隊”になりたいんですってね」

ラウラの奴、話したのか。たぶん、高速機動実習一日目の放課後に。

そうなのだ。文化祭のとき、何もしてやれなかった俺は「どうしたらラウラのようになれるか」尋ねた。何かあったとき、アリスはラウラを頼りにする。それはラウラに「兵隊」としての力があつたからだ。俺はその「兵隊」になりたかった。

もしなれたら、もつとアリスの力になれるんじゃないかって思ったんだ。

「以前にもいいましたが、私はあなたの平穩こそ望んでいます。だから、あなたが私のために危険へ飛び込むことは本末転倒なのです。それにあなたには果たさなければならぬこと——〈ジークフリード〉になるという目標があるでしょ」

〈ジークフリード〉、俺が〈モンドグロツソ〉で優勝した暁に用意される称号だ。

その称号を得て、千冬姉が成し遂げられなかった事を成す。それが俺の所為で〈モンドグロツソ〉二連覇を成せなかった千冬姉への償い。俺はそれをいままで忘れていた。現在の〈ブリュンヒルデ〉の前で強く誓ったはずなのに。

「アリスはそれを思い出させるために、俺を誘ったのか？」

「はい。私はあなたになってほしいと思っています。それが、私があるあなたに望むものです」

まっすぐ彼女は云った。その真直ぐさに、俺は独り相撲を取っていたことに気づかされる。

アリスは俺に「頼れる存在になってほしい」なんて望んじやいないんだ。望まぬものを、与えることは善意の押しつけだ。

アリスは本来やるべきことを曲げる理由に自分を使われて、我慢ならなくなった。

「大丈夫。あなたはもう私の力になれている。あなたが待っていてくれるだけで、私はどんな苦難も乗り越えられる。だから、あなたはあなたがすべきことに専念してください」

「そうだな。わかった」

俺が決意を新たに強く頷いた。ISの世界で頂点に立つこと。それが俺の望みであり、彼女の望みだというなら、やらない理由はどこ

にもない。その足がかりという意味でも、〈キャノンボール・ファスト〉での出場は逃せないだろう。国際大会で結果を残せれば、目標が大きく開けるはずだから。

俺は腑抜けていた自分を追い出すように頬を強く叩いた。

「よし。まずは出場メンバーに選ばれないとな」

〈キャノンボール・ファスト〉に出場できるのは、クラスから一名。

まずその一名に選ばれないことには話が始まらない。

「その必要はないのさ」

俺が意気込むと、ここにはないはずの声が聞こえてきた。俺たちが振り向いたその先に立っていたのは、スクール水着に水中ゴーグルを装備した変態。もとく〈白式〉の開発元である〈倉持技研〉のIS開発チーフ。篝火ヒカルノさんだ。隣には簪もいる。

「やあ、久しぶりだね。夏休みは会いにいけなくてごめんよ」

「いえ、全然、大丈夫です。むしろ、会いたくなかったので」

この人、すごくやらしい目で俺を見るんだ。特に俺の尻を見るとき。

「なにさ、急にたじろいで。お姉さんは何も君を取って食おうなんて思っていないよ。あ、でも、性的な意味でなら——おっと、千冬に通報するのはやめてください。死んでしまいます」

本気の命乞いだだったので、俺は通報の手を止めた。

「それに今日は一夏君のお尻が目的じゃないんだ。実は君にお願いがあつてね」

俺にお願い？ ——それを簪が告げる。

「……実はわたしに代わって月子と〈キャノンボール・ファスト〉のプロ部門に出てほしいの」

「プロ部門に？」

今回の〈キャノンボール・ファスト〉は二部門に分かれている。国家代表やその候補生が出場する〈プロ部門〉と、学生が出場する〈学生部門〉だ。ちなみに代表候補生であるセシリアやシャルロットはこの〈プロ部門〉に出場するため、〈学生部門〉のレースにはでない。

「で、〈キャノンボール・ファスト〉の〈プロ部門〉では、二名の操縦

者と複数のビットクルーを1チームとして行うレギュレーションになつてゐる。知つてゐるさね？」

「ええ、ジエニファーさんから聞きました」

「なんたつてへキャノンボール・ファスト」は長時間にわたる耐久レースだ。操縦者が一人で走りきることは体力的にきびしい。かてて加え、ISは一般的な航空機と違って脳波コントロールだから長時間の飛行に向かない。ISの長時間飛行は肉体的かつ精神的に負担がかかる。そういうわけで、どこのチームにも操縦者の交代要員がいる。

「……本当はわたしが月子の交代要員として参加する予定だったんだけど、わたし、特務で<打鉄式式>のスラスター壊しちゃったから……」

「<打鉄>ではダメなのですか？」

と、アリス。確かに<打鉄式式>がダメなら他のISで出場すればいい。

「……それでもいいんだけど、<打鉄>より高機動型の<白式>の方がレースに有利だから」

「それに国際大会のへキャノンボール・ファスト」は内外に技術力をアピールできるまたとない機会にや。へ輝夜重工」としては、第二世代型の<打鉄>より《第二形態移行》した<白式>や、第三世代型の<打鉄式式>を大々的に宣伝しておきたいのさ」

「で、日本代表候補生の専用機が改修中だから、一夏に白羽の矢が立つた、と」

「簪はいいのか？」

代表候補生にとつて国際大会へ出場できないことは痛手のはずだ。

出場の機会を譲ることに、抵抗があるんじゃないだろうか。

「……いいの。確かに選手としては出場できないけど、代わりに整備クルーとして参加してほしいつてお願いされたから。……それはそれで名誉あることだから平気」

簪の前向きな言葉を聞いたことで、俺の決意は固まった。

「わかつた。俺の実力じゃどこまでやれるかわからないけど、簪の代役、引き受けるよ」

「……わたしもピットクルーの一員として支えるから、一緒にがんばろ」

「よし、話はまとまったね。それじゃあ、結束を強める意味でお姉さんとずんぐほぐれつな。——イタタ、ちよつと、簪、耳を引っ張らないで」

「……………ほら、チーム編成の申請いきますよ」

簪さんに耳を引っ張られながら、篝火さんが寮門から去っていく。

それを見送り、俺は改めて自分に与えられた機会をかみしめた。

「へプロ部門」の出場か」

「がんばってください。——あなたなら、きつと結果を残せます。いえ、おもいきって、優勝を目指してください。そして、私にその優勝トロフィーを抱かせてください」

「おう。任せろ。約束する」

俄然の俺の中でやる気がわきあがる。俺の夢のため、彼女の望みのためにも、今回の「ヘキヤノンボール・ファスト」、絶対に優勝してみせる。俺は自分自身にそう強く誓った。

第82話 彼女が英雄になった理由

休日明け。高速実習四日目を終えた放課後。整備区画ではヘキャノンボール・ファスト〉に向けた機体調整のため、たくさんの生徒であふれていた。そのみならず、各国の代表たち率いる出場チームも現地入りしており、飛び交う掛け声で格納庫は本番さながらの慌ただしさだ。

私もヘキャノンボール・ファスト〉に出場するシャルの調整を手伝っていた。

「そういうえば、新型の名前、もう決めました？」

彼女に用意された新型は、便宜上の型式番号のみで機体名はまだつけられていない。

その命名権を父親から授けられたシャルは「うん」と言った。

「ラファール系列だから、それをなじってへラファエル・リヴァイヴ〉にしようかなって」

「へ大天使の再臨〉ですか」

悪魔の軍勢を率いるへリリス〉と対峙するに相応しい名前だと思う。

「しかし、社長も突拍子もないISを作ったものだね」

ノエルさんがハンガーにかけられたくラファエル・リヴァイヴ〉を見ながらつぶやく。

シャルの新たな専用機は通常形態スロットモードと騎乗形態ライドモードの二つを保持する、初の可変機構を内蔵したISだ。

つまり、変形するISである。

指向性エネルギー兵器Dの開発に行き詰まり、くラファール・リヴァイヴ〉の第三世代化が暗礁に乗り上げた為、こういったアプローチ方法が取られたというが、確かに突拍子もない方向転換だと思う

「でも、ISを変形させるメリットってありますか？」

私の質問に、同じく手伝いに参加していたロリーナが答える。

「大いにあるわ。変形できるなら、一粒で二度おいしいでしょ？ くラファエル・リヴァイヴ〉は可変機構を内蔵することで、ISの汎用性と、航空機の安定した飛行能力の両方を獲得しているわ」

単純に「安定した飛行」ということだけを考えれば、ISより航空機の方が理に適っている。

そもそも航空力学上、人型は空を飛ぶことに適していない。空気対抗が大きいからだ。空気抵抗が大きいと、姿勢制御も困難になる。特に大気圏突入においては、摩擦熱で機体が燃え尽きかねない。

逆に宇宙空間では空気抵抗がないため、手足のある人型でも問題ない。むしろ無重力下では、手足がある方が姿勢を取りやすいし、作業にも役立つ。地上と宇宙の行き来にはライドモード。作業を行うときはスーツモードを使う。つまり、ヘラファエル・リヴァイヴは本格的に宇宙開発用のマルチフォームスーツとして開発された機体だということだ。

「まだ改良点が多いけど、量産化の暁には業績回復に繋がられるでしょう」

デュノア社のV字復活はこちらとしても望むところだ。

組織側も技術支援を行う意向を出していて、私たちがココにいるのもその一環になる。

「そうそう、新型といえば、〈輝夜重工〉もこの〈キャノンボール・ファスト〉で新型を発表すると言っていたわね。確か白鉄しろがねと言ったかしら」

〈白鉄〉は、〈打鉄〉の後継機となる純日本製の第三世代型ISだ。

デュノア社と同じく指向性エネルギー兵器の開発が進まず、ながらく日の目を見なかったのだけど、〈白式〉と〈打鉄式型〉のデータフィードバックがあつてなんとか試作機まで漕ぎ着けられたようだ。

ちなみに、この〈白鉄〉を一夏専用機としてワンオフ化したものが〈白式〉である。

「前より気になっていたんですね。見に行つてきてもいいですか？」

「私も行くわ。——シャルロットちゃん、あとはクラファエル・リヴァイヴが自動でクラファール・リヴァイヴ・カスタムII〉のデータをコピーしてくれるから。それが終わるころには帰ってくるわね」

「はい、わかりました」

というわけで、ロリーナと私は月子率いる日本チームの様子を見に行くこととした。

♡

◆

♠

日本チームに設けられた専用ハンガーは第二格納庫にあるという。そこへ向かっていると、ある人物と遭遇した。ゴスロリ衣装とフリルのヘッドドレス。ぼったりと出くわしたのは、ドイツの国家代表アイリーン・フォン・エーデルシュタインとラウラだ。

「これはドイツの代表。お久しぶりです」

「うむ、久しいな。〈戦乙女の凶宴〉で相見えて以来か」

戦乙女の凶宴？ 私、そんなものに参加した覚えはないのですが。

「VTシステム暴走事件のことだ」

と、ラウラが教えてくれる。普通にそう言ってください。わかりませんって。

「くつくく、俗語は好まぬ。汚れた言葉は、魂を穢すぞ？」

ドイツの代表は片手で顔を覆い、指の隙間からこちらを嘲笑った。

確かに汚い言葉づかいは品性を下げますが、代表の言葉づかいても、それはそれでどうなのかと。

「そうだ、汝にはそのときの礼をしていなかったな。我が臣たるラウラ・ボーデヴィツヒの救済、まことに大義であった。感謝するぞ。褒美に世界の半分を汝にくれてやろう」

「I L K社宅住まいのおまえが、どうやれば世界の半分などくれてやれるのだ」

ラウラの指摘に「ぐぬ……あれは、世間の目を欺く仮の住居なのだ」と視線を泳がせる。

どうやら、自称「吸血鬼の女王」はわりとこじんまりとした場所に住んでいるらしい。

「で、代表はこれからどちらへ」

「クッククック、へ月の軍勢が新たな魔装を手にしたと聞いてな。それが脅威たるか見定めに行くところだ。元来、我ら吸血鬼はこの星を守護するために〈星の意思〉が生み出した超越種。星の脅威たる〈月〉からの侵攻を食い止める義務、否、呪詛を刻まれておるのだ」

「ラウラ、通訳お願いします」

「輝夜が新型のISを開発したのか。どんなのだろう。私、国家代表だから見に行ってみよ」

「OK、よくわかりました」

私と一緒にですか。言い回しがほんとまどろっこしいですから……。
というか、月子、勝手に地球の脅威にされていますよ……。

「実は私たちも月子のところに行く途中なんです」

「そうか。では、一緒に行くとしよう」

私とラウラは、「それにしても、〈星の意思〉が生み出した超越種だなんて、まるで根源的破滅招来体から地球を守るために現れた光の巨人みたいね」「は、根源的破滅招来体ッ!? なにそれカツコイイ!!」と変なところで意気投合するロリーナとアイリーンを連れ、専用ハンガーへ向かう。

到着した専用ハンガーには二機のISが掛けられていた。ひとつは一夏の〈白式〉。もう一つは同じく白い機体。腰部のハードポイントには刀型の近接格闘武器。全体のフォルムは白式に酷似している。

これが日本製の第三世代型IS〈白鉄〉。

その前ではホログラムの〈ホワイトクイーン〉を頭にのせた一夏と、ラムネを飲む簪、そして、のほほんさんが何やら相談を行っていた。「実は、俺なりに多機能武装腕の運用法を考えてみたんだ。ちよつと意見くれないか?」

「……うん、えつと、これは……《雪羅》の有線射出?」

《こうロケットパンチみたいにです》

「……ロケット、パンチッ!」

「あ、いつもは死んだ魚の目みたいなかんちゃんの瞳が輝いてる」

「……本音、魚はよけい」

「目が死んでることは否定しないのか。でき、俺、射撃が不得意でさ。命中率がなかなか上がらなくて、どうしようか悩んでいたんだ。いつそ『接近してゼロ距離から』とも考えたんだが、その距離まで接近できたら《雪片式型》の方が有効なダメージを与えられそうなんだよ」
「ごもつとも〜」

「……つまり本体は近づかず、《雪羅》だけを射出して荷電粒子砲を撃つ。……それなら多角的な攻撃もできるし、うまくいけばワイヤーで相手をこっちの間合いに引き寄せられる。……うん、すごくいい案だと思う。さつそくやってみようか」

「おう、頼む。——って、ラウラにアリスじゃないか。それにロリーナさんにドイツ代表まで」

私たちの存在に気付いた一夏が手を挙げる。簪はラウラの登場にスウーと存在感を薄くしてのほほんさんの後ろに隠れた。相変わらず、コミュ症ぎみの簪は、我が強いラウラが苦手らしい。

「どうした、みんなして」

「へ月」が保有する魔装を囁目に参ったのだ。ふむ、これが汝らの魔装か。鮮麗かつ伶俐、そして命を刈る形をしておる。さすが星の脅威たる月の民よ。腰の劔は我とおなじ煉炎を収斂した概念武装か？」

「お、おう？ が、概念武装？」

言葉の意味を理解できず、一夏は助けを求めるように簪を見た。

「……うん。腰部の格闘兵装は収束磁場を用いたプラズマブレード。《雪片式型》のエネルギー収束技術を応用したもの。……まだ試作段階だけ」

「なるほど、そういうことだったのか。俺はなんのことやらさつぱり……」

普通はそうですよ。無駄に難しい言葉と造語で話すから、理解しかねるんですよ。

私の場合、ラウラの通訳がないとさつぱりなのですが、

「うむ、アイリーンの言葉を理解できるとは、さては、簪、おまえも同類か？」

「……ち、違うから。ちよつと語学が堪能なだけだから」

「そうそう、かんちゃんはいろんな言葉がしゃべれるんだよ。精霊とお話してできるもんね」

簪はぶわつと顔を真っ赤にした。

「……で、できないからッ！」

「ええ、中学の時、言っでなかつた？ 『……実はわたし、精霊世界のお姫様だから』 って。宝石みたいな綺麗な玉を取り出して『これはエーテリオン。精霊の世界と交信するための道具』 って、見せてくれたの。そういえば、学校に行く時もサークレットやヴェールをつけてたよね。あれ、もうつけないのお？」

「……あぁッ！」

彼女らしからぬ大声を出して、のほほんさんの口を塞ぐ簪。

幼馴染の暴露に、簪は真っ赤な顔を通りすごして、真っ青になっていた。

「その、なんだ、中学生時代の簪は今と違って個性的だったんだな……」

などとフォローする一夏だったが、しきりに鳥肌だった腕を撫でていた。痛え、痛えと。

それに簪は精神崩壊を起こしそうだったけれど、私たちにとっては微笑ましい光景だった。だって、本当の黒歴史って笑えないものから。私とラウラの歴史なんて黒どころか暗黒すぎて、気軽に話せやしません。

で、現在進行形で黒歴史を記すアイリオンといえば――

「くつくつく、現界に精霊界アストラルと交感できるものがあるとはな！」

仲間を見つけたような意気揚揚ぶりだった。

「この邂逅も何かの運命かもしれぬ。汝にこれをやろう」

そういつてアイリオンはポーチから何かを取り出す。出てきたのはライフル弾だ。

「これは我の血を凝固させた魔弾。因果を発生させ、万物を撃ち穿つ」
「本当はただの7・62×51ミリNATO弾だがな」

と、ラウラ。

それから「こいつなりの交友の証だ。受け取ってやってくれ」と言

う。

「……そ、それなら、も、もらっておこう、かな？」

戸惑いながら、ライフル弾を受け取る簪。それから何か物欲しそうなアイリーンに気づき、ラムネのビー玉を渡す。アイリーンはそれを嬉しそうに透かした。

「ほお、これが汝の従者が言っていた、精霊と交信するアイテムへエーテリオンエーデルシュタインか。我がく王家の宝石エーデルシュタインに相応しい輝きよ。礼を言うぞ、精霊の姫君」

「……違うから。わたし、ただのギークだから。そんな風に呼ばないで……」

簪は強く抗議したが、アイリーンはすっかりその名称を気につたらしく訂正はしなかった。個人的には仲良くなれたようであり、と思うのだけれど。彼女の交友を気にしていた月子もさぞ——と思ったところで、肝心な月子がいない事に気づく。

「ところで、簪、月子はいないんですか？」

「……月子なら、織斑先生のところ。織斑先生に渡すものがあるって」
千冬さんに渡すもの、か……。なんでしよう。

それはあとあと月子本人から聞いてみるとして、目的の＜白鉄＞も見られたし、他のチームの偵察に戻りますか。

「では、月子よろしく言っておいてください。私は他のチームを見学しに行ってきます」

「われわれもパッケージのインスールが終わったようなので戻るとする」

「月の姫君に、へキャノンボール・ファストヘキャノンボール・ファストにて、汝と相見ることを楽しみしておると伝えておいてくれ。精霊の姫君もいつか相見えようぞう」

「……だからその呼び方やめてッ」

三人にそう告げ、私たちは日本チームのハンガーを後にした。



その後「おお、精霊たちが我に語りかけてくるぞ、ラウラ」「いますぐ耳鼻科に行つてこい」とツツコむラウラたちと分かれ、私たちは第三格納庫を訪れた。

確かここでは鈴を率いる中国チームとセシリア率いるイギリスチームが機体調整を行っているはずだ。

まず、中国チームのハンガーを訪れてみたが、そこに鈴の姿はなかった。フーさんの姿もない。場にいたのは整備クルーのみだった。そのクルーに私は見知った男性を見つける。

キリツと鷹のような切れ目。鼻筋の通った美形。黒い後髪を一本に束ねた、つなぎ姿の男性。甲龍や甲虎を開発した中国のIS企業〈上海飛甲装工業公司〉のCEO劉春狼だ。

「うわ……」

彼とひと悶着あつた私はいろんな意味から、そんな声をもらった。

それに気づいたかわからないが、春狼の後ろ髪がしつぽのように揺れた。それから「おや」という顔をしてこちらにやってくる。

「オイルの匂いしかしないこんな場所に、甘い匂いがしたかと思えば、あなたかな?」

そして、歯が浮きそうな言葉を口にしながら、流れるよう仕草でローナの手を取った。

「こんにちは、ボクは劉春狼。あなたは?」

「ろ、ロリーナよ」

「いい名だ。あなたはここの教師かな?」

「いいえ、ヘキャノンボール・ファスト〉に参加する整備員としてきているの」

「へえ、美しすぎて技術者には見えなかった。実はボクもそうなんだ。どうだい、同じ技術者同士、意見交換でもしないかい。おいしいディナーをごちそうするよ」

「え、えっと、今夜は先約があつて、ごめんなさいね」

「それは残念だなあ。でも、整備クルーならヘキャノンボール・ファスト〉が終わるまでここにいるんだよね。他に空いている日はないかい

？」

「え、ええつと……」

視線を右へ左へ。めずらしくロリーナは狼狽えている様子だった。意外と押しに弱いんでしようか。なんだか「ダメよ、ダメよ」と言いながらも、流されてしまいそうな雰囲気だったので私は二人の間に割り入った。

「相変わらずですね、あなたは」

「ん、キミは確か……」

まじまじと私を注視して、春狼は急に思い至ったように目を開いた。

私はニツコリと微笑んで肯定した。

「そのせつはどうも」

あわや殺されかけたことを嫌味たつぷりに言う。

けれど、春狼はこれといった動揺は見せず、むしろ、すごく紳士的な笑みを浮かべた。

「じゃあ、キミが鈴ちゃんを守ってくれたく赤騎士の操縦者かい。そうかそうか。まあ、いろいろあつたけれど、助けてくれたことには、改めて礼をいうよ。——ありがとね、あのロクデナシから鈴ちゃんを守ってくれて」

「ロクデナシとは俺のことか？」

いきなりである。いきなり春狼の背後から若い男性の声が聞こえてきた。

彼の背後に立っていた人物は、私とそれほど歳の変わらない少年だ。白髪の短髪と、意志の強そうな双眸。線の細い顔立ちが美少年と言っても差し支えない。けれど、来ているスーツはいやに板についている。

「ロキイツ!?! なんでおまえがココにツ!?!」

ロキ? 私にはロリーナを見た。「彼が〈亡国機業〉の首魁よ」と彼女は言った。

じゃあ、あの少年がスコールやローズマリーの親玉。

「ヘキャノンボール・ファスト」にローズマリーが出場するのでな。そ

のバックアップだ」

「ボクと一緒にか。鉢合わせるわけだ……。まあこれも何かのチャンスか。ここであつたらなんとやらというし、大佐に代わってぶちのめしてやる」

そう言つてつなぎの袖を捲し上げる。そういえば、〈亡国機業〉の内
部では利権をめぐった幹部たちの派閥闘争が行われているんです
か。もしや、その決着をここでつけるつもりですか。

「いいだろう。上海にいく手間が省けるといふものだ」

そう言つてロキもスーツを脱ぎ、ネクタイを緩める。

そしてファイティングポーズを取る二人。「きやー、イケメン同士の喧嘩よ」「やれー、やれー」と黄色い声を上げて囃す者と「トラブルよ、先生呼んできて」「私、生徒会長、呼んでくる」と冷静に止めようとする者で、整備科はてんやわんや大騒ぎになった。

「ふむ、ギャラリイがいるのは悪くないな」

「何言つてやがる。スカしてないで、かかってこい、キザやろう」

そう言つて春狼が拳を振りかざした、まさにそのとき、ひゅんと一筋の風が場を駆け抜けた。

その風が矢のごとくロキに突き刺さる。——風の正体は、鈴のとび蹴りであつた。

さらに鈴は宙を舞つたロキを追撃し、百烈脚を見舞つた。

「あたたたたたたた、あたあーっ！」

見事な空中コンボを決められたロキは頭から落下し、ベギよつと嫌な音を鳴らす。

格ゲーばりの空中コンボを決めた鈴は、しゅたつと春狼の隣に着地した。

「なになに、春狼、喧嘩？　喧嘩なの？　なら、あたしも混ぜなさいよ！」

「うん、いいけど、行動と言動の順序が逆だと思ふなボク！」

「いやー、なんかあいつを見たらとりあえず、ぶつとばさなきやつて気に駆られてつい」

ロキは『IS学園襲撃』の主犯格だ。

それは当人——鈴の知り及ばないことなのだけど、「直感」でそれを見抜いたらしい。おそろしい「勘」の鋭さだ。

「まあ、なんにしろグッチョブだよ、鈴ちゃん」

「え、そう？　で、どうすんのこいつ……動かなくなったけど」

「よし、今のうちに重りをつけて海に沈めよう」

完全に伸びたロキを囲み、ぐにぐにと頬をひねったり、つつついたりする二人。

あとあと、ロキとの会談を控えている我々としては保護した方がいいのだろうか。その指示をロリーナに煽ごうとしたとき、今度はソプラノの綺麗な声が聞こえてきた。

「もうロキったら、どこかしら。〈ブルー・ティーズ〉を見てもらおうと思いましたが」

声の主はすぐにわかった。セシリアだ。ロキはイギリスチームの整備クルーとして来たと言っていた。その彼を探しにきたのだろう。隣には国家代表のローズマリーもいる。私とロリーナは「あ」と漏らした。いやだって。

↓気を失って倒れているロキ。

↓その彼に、なにやら重りをつけて、海に沈めようとする鈴と春狼
↓その二人をばっちり目撃するセシリアとローズマリー。

もう何が起るか想像がつくでしょ？

「あなたたがた、何しておりますの
! ?」

地響きがしそうな低い声だった。

セシリアの視点から見れば、自陣のクルーが中国人のリンチにあつたように見えなくもない。

「何をつていうか、えっと、なんか、わかんないけど、急にこいつをぶん殴りたくなっちゃって」

「はあ?!」

鈴、それ理由になってないです。

「で、ぶん殴ったら気を失なっちゃってさ、あはは。もしかしてこいつ、セシリアんところの整備クルー?」

「そうですねよッ」

悪びれた様子を見せない鈴に、セシリアが額に青筋を浮かべる。もともと領民想いのオルコットは眷属意識が強い。仲間をやられて黙っていられる性質ではないのだ。実際のところ鈴の行動には正統性があるんだけど、それを知る由もないセシリアは――。

「――〈ブルー・ティアーズ〉!」

まあそうなりますよね。

「わたくし、鈴さんの粗暴な行いには常々苦言を申したかったところですよ。いい機会ですわ、今日という今日は反省していただきます」
セシリアは《スターライトMkⅣ》の銃爪に指を掛けた。

「いいわよ。あたしもあんたとはどっちが強いか白黒つけたかったのよね」

鈴も鈴で、〈甲龍〉を展開し《双天牙月》を構える。二人とも矛を収める気配がない。

「え、ちよつと待ってください。こんな狭い場所で戦闘を始める気ですか」

私が制止の声を上げるも、二人は既に武装を展開し、臨戦状態に移っていた。

ローズマリーも春狼と睨みあつていないで止めてくださいよ。

「ああもう!」

事の発端たるロキははまだ気を失っているし、結局、私がどうにかするパターンですか!

一向に鋒先を収めない二人を止めるため、私が〈赤騎士〉を展開したそのとき、

渦中に一機のISが割り込んできた。

〈打鉄〉に近い武者を彷彿させる意匠と、鬼のような二つの角が生えた〈マインドインターフェース〉。八重サクラに似せたシールド。そして、白夜の月光を思わせる淡い光をまとった白銀の刃《雪片》。――

――その一閃が空に一本の弧を描き、《スターライトMkⅣ》と《双天牙月》を薙ぎ払った。

とんでもない速さだった。あまりに早すぎて、宙を舞ったふたつの

てあなたまで隠れないでくださいな！」

なんとか制裁を逃れようと、ローズマリーのうしろで責任の所在を押し付け合う三人。

その三名に千冬さんが、低い声で言った。

「おい、おまえら」

『はい！　なんででしょう！』

「私の好きな言葉を教えてやろう。——ケンカ両成敗だ」

『もうダメだあーっ！』

誰に責任をなすりつけても無駄という事実には三人は絶叫した。

どうあがいても絶望的なこの状況に、鈴がさすがるようにローズマリーにしがみつく。

「つーか、あんた、強いんでしょ。なんとかしなさいよ！」

「そうだそうだ、なんとかしろよ、ローズマリー！」

「鈴さん、ローズマリーさまに、なんて口のきき方をいたしますの。つて、あなたまでっ」

「春狼、悪いけれど、〈ブリュンヒルデ〉を二人同時になんてさすがに無理だわ」

気づけば、彼女たちの後方にもう一機ISが待機していた。

短剣のような狐耳と、尾骶骨から生えた九本の《尾》。もう一人のブリュンヒルデ、ジェニファー・J・フォックスの専用機〈ナインティル・フォックス〉だ。

『もおダメだあーっ！』

前門の鬼神に、後門の九尾。やっぱりどうあがいても絶望な状況に三人は再び絶叫した。

「スコールがいてくれれば、勝算はあるのですが。あるいは——」

いや、助けませんか？

「ならしかたありません。素直に謝りましょう。二人ともISを解除なさい」

フランベルジュと蝶のイヤリングを床に置き、降参の意思を表す。

セシリアたちもそれに倣ってISを解除した。

「見ての通り、強く反省しております。どうか、酌量の余地をください

ませ」

「ふん、おまえと戦ってみたのだが、まあいい」千冬さんはどこかつまらなさそうに《雪片》を《鞘》に戻し「以後、気をつける。再びこのような事態を起こせば、《キャノンボール・ファスト》の実行員会に申し立てをして、出場権利をはく奪させる。胆に銘じておけ」
「わかりました」

「劉春狼といったか、おまえもいいな。おまえとて可愛い店子を出場停止にしたくはないだろ。他チームへの妨害行為も不問にしておいてやるから、ここでは普通に《キャノンボール・ファスト》を楽しめ。普通にな」

「……わかったよ。きなくさいのと、血なまぐさいのは抜きだ、ローズマリー」

「ええ、そうしましょう」

二人の《亡国機業》幹部が了承して互いに頷く。終始、事情を知らない鈴とセシリアはきよとんしていたが、なにがともあれ事なきを得た二人はほつと安堵の溜息をついた。

最後に織斑先生は鈴の方を向き、

「凰」

「ひゃい！」

「よくやった」

そう告げ、千冬さんはジェニファーと仕事場へ戻っていった。



整備区画。作業時刻を終えた第一格納庫はすっかりと人気が失せていた。いま、ここで調整を行っていた者たちは、用意された宿泊場所へ戻り、明日への英気を養っているころだろう。

そんな中、千冬はひとりハンガーに掛けられたIS——《暮桜》を眺めていた。

かつて《モンド・グロツ》で共に戦った相棒は、彼女の引退後、開

発元である〈輝夜重工〉に返却され、本社エントランスにモニユメントとして展示されていた。それをわざわざ月子に頼み持ってきてもらったのだ。

もしかしたら、再び〈暮桜〉の力が必要になるのではないかと、思
いて。

「眠りについていたのに、すなまいな、〈暮桜〉。もう一度、私に力を貸してくれ」

機体寿命を迎えつつある相棒を労わるように撫でた、そんな折り、コツコツと足音が聞こえてきた。現れたのは学園の自警団でもある生徒会の長、更識楯無だ。

「なんだ、夜回りか。仕事熱心だな。感心する」

「いえ、違います、織斑先生にお話しがあつてここに来ました」

「ほお、私に話とはなんだ？」

普段の飄々とした気配を打ち消し、陰呑な表情で彼女は言った。

「イギリスチームについてです。なぜ、彼を——ロキをここに入れたのです。私の断りもなく」

「言ったら反対をしたらろ」

「当然です。彼はここを襲撃した主犯ですよ。そんな危険人物をココにいれるなんて」

「知っている。だが、いまのあいつは敵じゃない。ロキは、親友のために戦っている」

「篠ノ之束のために、ですか……？」

楯無には心当たりがあつた。ロシアの秘密都市で彼は楯無に語つた。全ては、束の望んだ時代を作るためだと。しかし、その真意を楯無はまだ知らない。

「篠ノ之束は何を望んでいるんですか。あなたなら知っているんですよ、白騎士？」

「知っていたか」

千冬は驚かなかつた。楯無が白騎士の正体を知っているように、千冬も楯無が暗部の人間であることを知っている。彼女たちの情報力をなめてはいない。

「あなたは篠ノ之束と共謀して、白騎士事件を起こした。そのあなたなら、篠ノ之束の真意を知っているはずでしょ？　彼女は一体なにがしたかったんです」

「あいつが望んだのは、世界をひとつにすることだ」

あまりに大それた目的に、楯無は「ナンセンスだわ」と嘲笑った。

世界をひとつに。

政治的正しさが支配する現代社会。口にすることさえ憚れるような誇大妄想だ。

「彼女は世界を征服しようとしても」

「いや、違う。東が求めたものは、単一国家を作るのでも、思想を統合するのでも、宗教を統一するのでもない。——ありのままの世界を残すことだ。多様性を受け入れ、その意思を尊重し合うこと。その中でたったひとつ共通の意思を持つこと。それだけでこの世界はひとつになれる。あいつはそう言っていた」

「あなたも、それに同調して？」

「いや、私が白騎士になったのは酷く幼稚な理由だ。東のような立派な思想はもっちゃいない」

「では、あなたは どうして……」

千冬は視線を落とし、過去を思い出すように、あるいは悔いるように語った。

「——私はひどく手のかかる子供でな。よく母親の手を焼いては困らせていた。来る日も来る日も。そんなある日、母さんが一人の少女を連れてきた。私にそっくりな少女だ。目元、口元、髪から何までな。その少女が家に来て以来、母さんはその少女ばかり愛するようになった」

同じ姿なのに、なぜ母はその少女ばかり可愛がるのか、彼女は理解に苦しんだ。嫉妬もして、階段からその少女を突き落したこともあった。そんな千冬に東はこう言った。

——あの少女はちーちゃんの「やり直し」ではないかと。

「私があまりに可愛げのない子に育ったから、母さんはもう一人「私」を作り、「子育て」をやり直すそうとしているのではないかと。最

初は否定したが、あまりに似すぎているその少女を見てみると、私は否定しきれなくなっていた」

そんな母親の傲慢さに苛立ちを覚えながらも、母の愛情を捨てきれなかった千冬は東の口車に乗った。そう、白騎士になったのだ。

世界をこの手で救い、英雄になれたのならば、きつと母さんも見直してくれる。そう思って。

「たったそれだけのために、白騎士事件に加担を？　ほんとうにくだらない理由だわ」

「否定はしない。だが、くだらないというなら、なぜおまえはラウラを助けた？」

楯無は口をつぐんだ。

結局のところ、同じなのだ。VTシステム暴走事件の折り、妹のためにアリスへ加勢した自分も。

「私が白騎士になった理由と、ラウラがVTシステムを使った理由、そして、お前がリデルを助けた理由も、根っここの部分は同じだと思うが。愛は人を勇敢にも、愚かにもする。私の場合は、後者だったから、最悪の結果をまねいてしまった」

「最悪の結果……」

「——2341基のミサイルから日本を守ったその日、母さんはその少女と共に私たちのまえから姿を消した。きつと、愚かな行いをした私に心底愛想が尽きたんだ。おかげで、この10年、少女の正体も、母さんの真意も分からないまま。——けれど、おまえは知っているんだろ、マドカ」

千冬が唐突にあらぬ方向に視線をやる。その先から滲み出るようにISが現れた。

真っ白な装甲。翼のようなウイングスラスタ。腰にプラズマブレードを携えたそのISは、世界に革命と畏怖をもたらしたへ白騎士であつた。

10年前と何も変わらない、本当に何も変わらない姿で現れたへ白騎士に楯無は息を呑んだ。

「白騎士……、いえ、あなたが件の少女？」

少女は答えず、フェイスガードを備えたHMDを解除した。

そこに現れた素顔は——言葉どおり、千冬と瓜二つだった。それは人工的な作為を感じざるを得ないほどに酷似している。彼女は自然の摂理から生まれた命ではない。人の手によって作られた命。楯無はそう直感した。

「あ、あなたは何者なの？ まさか、織斑千冬のクローン？」

「違う、私は織斑一夏だ」

言葉の意味を理解できず、楯無は顔をしかめた。千冬に視線をやるが、彼女もまた首を横に振った。千冬も理解しかねている様子だ。まさか本当に織斑一夏だというのか。

「知りたいなら、教えてやる、お母様もそれをお望みだ」

マドカは千冬に機器を投げる。

透明な薬液の入ったそれはナノマシンの注射器だった。

「レベル5のナノマシンが入っている」

レベル5。この学園に於ける最高レベルの権限だ。IS学園の上層部の人間だけが許された権限をなぜ彼女がもっている。楯無は驚愕を禁じ得なかったが、千冬は苦笑いだった。

「やはり、最初から母さんの掌の上だったか。いいだろう、いつ会いに行けばいい」

「ヘキャノンボール・ファスト」の当時だ」

当日、学園の職員はヘキャノンボール・ファスト」の補助要員に駆り出される。楯無も当日のヘキャノンボール・ファスト」に出場する予定だ。つまり、警備が薄手になる。それを狙って侵入してこい、と。それを告げ終わると白騎士は背景に溶け込むように姿をくらました。

わかったと告げ、千冬が注射器をふところにする。その千冬に楯無が食いついた。

「織斑先生、私も行きます」

「いや、ダメだ。これは私の問題だ。おまえは当日のヘキャノンボール・ファスト」に出場しろ。勝手に辞退すれば、信用を失うぞ。これは経験者からの助言だ」

かつて第二回へモンド・グロツソ、その決勝戦を辞退した人間の言葉には重みがあった。

「おまえのために集まった布仏やログナーを裏切るのか？」

「虚ちゃんたちはともかく、あんなキツネ目は別に……」

「そういつてやるな。あれでもあいつは私たちと同じ黎明期に活躍した操縦者、第一世代や第二世代の開発をささえたロシアの立役者だろ。無下にしてやるな。なに、何があったかあとでちゃんと話してやる。さぼったら、またマルガリータに怒られるぞ」

「……………」

もとスペイン代表のマルガリータ・オラゴンは彼女の担任で、生活態度に厳しいと知られている。ヘキャノンボール・ファストを辞退するなど彼女に知られたら、何を言われるか。想像しただけでブルッと肌が震えたので、楯無はしぶしぶ身を引くことにした。

第83話 Start / Ready

キャノンボール・ファスト当日。人と企業の広告AR、あるいは露店の宣伝ARであふれかえるアリーナの観客席。海が臨めるその最前列、蘭と弾はチケットを片手に自分の席を探していた。会場はすでに観客であふれかえり、見通しはよくない。蘭はなかなか自分の席を見つけれないでいた。開始時刻も近づいており、急ぎ足で自分の席を探す。

「もお、おにいが道草食ったせいで、出遅れたじゃん！」

「いやだって、こんなにいるんな店が出てるとは思わなくてよ」

今回の「キャノンボール・ファスト」では会場外に多数のブースが設けられている。

そこでIS関連のグッズが販売されているほか、簡易の適正検査も受けられるなど、会場に入れなくても、楽しめるよう配慮されていた。それに見事足止めを食らった五反田姉妹である。

「つーか、思わず買ったままだったわ、セシリア・オルコットの写真集！」

この子、一夏の知り合いなんだよなあ。ああ、誕生日会で会えるのが楽しみだ」

「なんでもいいけど、おにいも席探してよ」

「おうおう——えっとS17だろ。蘭、あつたぞ」

弾がチケットと席の番号を見比べる。なんとか開会セレモニーが始まるまえに着席できたようで、ふたりはほっと胸をなでながら、腰を下ろした。

「あら、蘭さんに弾さんじゃないですか」

座った席の隣から声をかけてきた人物はアリスだった。

隣には知り合いらしき金髪の女性も座っている。歳は二十代中頃で、セレブ然とした美女だ。

「あ、アリスさん。このまえはどうも」

「うっす」

蘭が会釈して、弾が挨拶代わりに手を上げると、知り合いらしき女性性が言った。

「あら、お友達かしらん？」

ゆるふわの金髪ロング。豊満な胸。桜ルージュの妖艶な唇。弾が思わず「すげー美女」と漏らしたその人は、スコール・ミューゼルだった。

「ええ、彼らは一夏の中学時代の同級生でして。先日、一緒に買い物をしたんです」

「あら、そうなの。——はじめまして、スコール・ミューゼルよ。今日は楽しましようね」

ルージュの口元を優美に曲げ、艶めかしくそう告げるスコール。

あたかも誘惑するようなその仕草と、意味深に開いた胸元に、弾は思わず生唾を？んだ。

(おにい、恥ずかしいから鼻の下伸ばさないでよッ)

(いや、しかしだな。これほどセクシーな美女だぞ。そいつは致し方ないってもんだろ)

性に敏感な思春期の16歳である。女盛りの強い色香を漂わせる彼女に視線を奪われるという方が無理な話だ。しかし、妹はドン引きの様子で、兄に高速の肘打ちをはなった。

「あら、お兄さん、急に動かなくなったけど？」

「きつと、死のほど疲れていたんです。そつとしてあげてください」

蘭も兄の失態を無かつたことにするよう「はは」と愛想笑いをする。「あらそう、お気の毒に」とやさしく微笑むスコールは、実に絵になっっていた。こうしてみると、確かに男性が見とれてしまうのも分かんなくないが、

(そういえばスコール・ミューゼルってどこかで聞いたような……)

それも最近である。テレビか、雑誌か。どのメディアだったか。なんだか有名な人だったような気もする。喉元まで出かかると、そこかなかなか思い出せない。まるで喉に小骨が刺さったような気持ち悪さだったが、蘭は思い出すことを諦めて、へキャノンボール・ファストに集中することにした。

まもなく、出場選手の紹介をかねたコース周回が行われる。蘭たちはアリスと雑談を交えながら、その始まりを待った。

ハキヤノンボール・ファスト会場、控室。出場者と整備員たちが開会を待つその部屋で、一夏は用意されたミネラルウォーターで乾いた喉を潤した。

初の国際大会である。学園内の対戦とは観客の規模も、得られる栄光も格が違う。テレビ中継やネット配信も行われるとあって、緊張の度合いも強い。それだけに喉が渴いてしかたなかった。

「一夏さま、大丈夫でございますか？」

早まる鼓動を宥める一夏を心配して、日本代表の月子が言った。

「おう、大丈夫ひゆだ」

全然大丈夫じゃなかった。

緊張で呂律が回らない彼の前に、同じチームの篝火ヒカルノがその様子を覗った。相変わらずの白衣にスク水、海中ゴーグルという変態正装で。

「ぐへへ、お姉さんが、リラックスできるマッサージをしてあげようか？」

「……警備員さん、こつちです。こつちに不審者がいます」

「ちよつと簪!? 本場に警備の人の連れてこないでくれるツ！」

「ちよつと事情を聞こうか」とやってきた警備員に「いや、私はこういう者で」と真面目に説明を始めるヒカルノ。一夏と簪は他人のふりをした。月子は苦笑いをしてから、

「緊張なさるのも無理でございませぬ。しかし、こればかりは慣れる他ないでございませう」

「だよな。にしても、月子といい、他の候補生はまるで緊張してないよなあ」

と、普段と変わらない月子を見てから、控室に視線を馳せる。

この控室には、各国の代表とその候補生、その整備クルーが控えているが、みんな雑談を交わしていたり、差し入れをつまんでいたりと

リラックスしている。

中でも一夏の目を惹いたのは気怠そうな女性だった。紫紺の髪。ミステリアスな雰囲気。イタリアの国家代表アンジェリカ・ヴァレンティンである。特別彼女に視線がいった理由は、男性の膝に正面からすわり、イチャついていたからだだった。互いの薬指に同じリングが光っているから、相手は旦那らしい。

「アンジェ、キャノンボール・ファストがんばってね。僕もがんばるよ」

「……ええ、あなたがいるなら、がんばるわ。……いないなら、がんばらない」

いや、がんばれよ。と一夏は胸中でツッコんだ。

それにしても、男性の膝に上で、額を重ねる光景はなかなか情熱的だ。まったく人目を憚らずイチャつけるのはイタリア人ゆえなのか。さながら映画のラブシーンのような光景は、15歳の少年からするとなかなか刺激的だった。

「というか、イタリアの代表、結婚してたんや……」

「そうなんだ……。意外だろ……」

と、月子のとなりに幽鬼のごとく現れたのは、アンジェリカと親交のあるフランスの代表だった。となりに、そんな代表に苦笑するシャルロットもいる。

「しかも、背が高く、二枚目で、頭もよくて、料理もうまいんだ。アンジェにはもったいすぎる物件だよ。はあ、なんであいつばかり。私なんて可愛い男の子の後輩ができたと思って浮かれていたら、男の娘だったっていうのに……」

「心の底からごめんさい……」

「あわわ、ごめんよ、シャルロット！ 君を責めるつもりはなかったんだ！」

どよくん、暗い影を落とすシャルロットを慌ててフォローするノエル。

彼女はシャルルの男装のことを知らなかったらしい。一夏は「浮かれたのかよ」と心で思った。それをどこかの誰かが「おまえもだろ」と

つぶやいた。

「と、ともかく、わたしは昔から男性に縁がなくてね」ノエルはフッと視線をそらし「……いまだに生娘さ……」誰にも聞こえない声でそうつぶやいた。

「まあ、その、ノエルさんにもはやく春が来るといいですね」

とシャルロットが言ったら、さっそく彼女の許に春がやってきた。

ただし「狼」のついた。

「おやおや、暗い顔をしてどうしたんだい。そんな貌をしていては、美人が台無しだよ」

当然現れた春狼に、ノエルは右を見て左を見て、自分を指さした。

「え、び、美人。わたしのこと？」

「もちろんさ。一目見たときから、その美しさに惹かれていてね。ずっと声をかける機会をうかがっていたのさ。どうだい。今夜、二人でこっそり抜け出して、夜のデートなんて」

そう言つて、誘うようにさっと赤いバラを差し出す。

生まれてこのかた、ナンパされた経験など皆無だった彼女は戸惑うしかなかった。しかも困ったことにアンジェの旦那に負けずとも劣らないイケメン。正直、ちよつと感情が高ぶった。

「どど、どうしようシャルロット！ わたし、こういうの初めてなんだけどッ」

「いや、僕に訊かれても……」

「こら、ノエル、ナンパぐらいで狼狽えるな」

後輩に相談するノエルを叱った人物は、中国の国家代表フーだった。

フーは「なさない」とフランス代表を叱りつけ、次に自分の大家をにらんだ。

「春狼、おまえも、そのナンパぐせ、どうにかしろといつも言っているだろ」

「あれ、フーたん、もしかして、やきもちかい？」

「ぼ、ぼか、違う。——ほら、いくぞー！」

なんだか頬を赤めながら、春狼のおさげを握って引つ張っていく中

国の代表。

その途中、ノエルの方を振り返り、

「それと本気にするなよ、ノエル。こいつは誰にでもこう言う」

などというと、控室にいた女性クルーから「わたしも口説かれまして」「わたしも口説かれたわ」という声があったところからあがった。数にするとほぼ全員である。

「なんだ、私だけじゃないんだ」とノエルが落胆すると同時に、部屋の一角からやたらめったら大きい声があがった。

「あれ私口説かれてないよ？」

篝火ヒカルノである。

白衣にスク水、銚に水中ゴーグル。恐ろしく倒錯した出で立ちで彼女はそう言った。

「なんだよー、私みたいな美人をほったらかして。そいつ、目が節穴じゃないのさ？」

彼女は水着を見せつけるようにバツサバツサと白衣をあおる。変態臭をふりまくその姿は、まるで一昔前の露出変態である。ここにいた全員が「これはない」と確信したが、彼女は不満を表すように、「ちえっ」と道端の石を蹴る仕草をした。かわいくはない。

「いいよ、別に。私はナンパされるより、する方が好きだし。お、言ってる側から、美少年発見！」

いうなり、海中ゴーグルをつけ、銚を構える。ついでに、食い込んだスクミズを直す。どう見ても漁に向かう海女にしか見えない彼女が向かったさきは、イギリス代表の側で雑誌を読んでいたロキだった。

「へいへい、その美少年。お姉さんとイイこと——」

「しない？」と言い終わる前に、彼女の眼前を剣閃が走り抜けた。その一撃で舞い上がった銚が床にささってばいぐんと揺れる。すさまじい剣撃を放ったのはいわずもがなローズマリーである。

それ以上近づけば、次は首を撥ねるといわんばかりの気迫を醸して、ローズマリーは言った。

「あなたが篝火ヒカルノさまですね。東さまより伝言を預かっておりま

す」

「え、東から？」

『おい変態。ロキくんに手を出したらバニーガールにして引きずり回すからな』だそうです」

「ひええ、バニーガールだってッ！ そんなの恥ずかしいッ！」

『それは 恥ずかしいのかよ！？』

一夏を筆頭に控室の全員がツッコんだ。スクミズに白衣、銚に海中ゴーグル姿が大丈夫で、バニーガールが恥ずかしい理由を誰一人みつけられなかった。変態の思考は誰にも理解できない。

(は！ もしや、篝火さんは俺の緊張をほぐすために、わざと変態のふりを!?)

『ないない』

簪と月子が揃って手を振ると、控室の扉が開いた。入ってきた人物は、真耶だ。

彼女は「み、みなさん、これより出場者の紹介をかねたコース周回を行いますので、ピットへ移動してください」と面々の退室を促す。ついにこれからレースが始まるのだ。一夏も気合いを込めるように頬を叩き、移動を始めた各代表に続く形で部屋を出た。その折り、真耶が言う。

「織斑くん、がんばってくださいね。先生も応援しています」

エールをくれた真耶に「ありがとうございます」と答え、一夏はふと思ったことを訊いた。

「あの、そういえば、織斑先生は？」

本来、こういった役割は千冬が担う。アクの強い代表たちを従えられるのは、伝説な存在、もといIS界のお局役である彼女を推して他にいないからだ。その彼女を朝から一度も見えていない。

「なんでも特別な用事でIS学園に残るとい話です」

「あ、そうなんですか」

姉に自分のレースを観戦してもらいたかったが、用事ならしかたない。しかし、多忙でも大事な時は必ずそばにいてくれていた姉が、それより優先する用事とはなんなのだろう。ピットに付くまでの合間、

一夏はそのことばかり考えていた。

第84話 Parental love chi
ld knowing

〈キャノンボール・ファスト〉会場。そこに設置された格納庫。関係者以外「立ち入り禁止」のプレートが掲げられたそこに人気はなく、私たちの搭乗を待つISだけが、開始の時を待っている。そう、そのはずだった。

「さてと、こいつだな」

〈サイレント・ゼフィルス〉、〈ブルー・ティアーズ〉、〈甲龍〉、〈甲虎〉、〈シュヴァルツェア・イエーガー〉、〈シユバルツェア・レーゲン〉、数多くのISが並ぶなか、その人物は〈白式〉のまえで、軽く舌なめずりした。

艶やかな金髪を後頭部でまとめたポニーテイル。長身で、勝気な風貌をした少女だ。その隣にはもうひとり少女がいて、周囲を見張っている。金髪少女とは対象的に小柄で、黒髪の三つ編みを肩越しに垂らした少女だ。どちらもIS学園の制服に身を包んでいる。

「恨みはねえが、こっちも仕事なんですね。悪く思うなよ」

金髪の少女は蜘蛛型の機械を取り出し、それを白式の動力ユニットに取り付けた。

そしてスイッチと思わしき装置を手前に引く。

備わった赤いランプは、あたかも終わりのカウントダウンを始めるように点滅し始めた。

はたして、この機械はいかなるものなのか。それは少女のみが知る。ただ、点滅する赤いランプは、何かの危機を告げるような不気味さを漂わせていた。



「この髪形にするのも、久しぶりか……」

IS学園地下区画レベル4。学園関係者でも一握りだけが立ち入れる学政特区へアスガルド。

最低限の照明と無機質な金属の冷たさが支配する秘密区画で、千冬は髪を、桜を模った髪留めで結い上げた。さらにコンバットスーツをかねたISスーツにHFブレードをアタッチメントする。

「よしいくか」

眼前に立ちほだかる硬質な扉を見据える。最高権限レベル5区画への立ち入りを阻む扉だ。職員の中にはアスガルドの名にちなんで〈ミーミルの泉〉と呼ぶ者もいるが、実際は何があるのか、誰も知らない。

千冬はISスーツのポーチから注射器を取り出し、首筋に宛がった。自分と瓜二つ少女が寄こしたナノマシンだ。彼女は「これで『レベル5』に入れる」と言った。なぜ彼女がそれを持っているのか、疑問は持たなかった。(すくなくとも千冬にとっては)簡単な理由だ。ここはそういう場所なのだ。

針を首筋に刺すと、激痛が走った。それに思わず顔をしかめる。

余談だが、千冬は幼い頃から注射が苦手だった。母が予防接種に連れて行くこうとするとそれはもう徹底抗戦したものだ。そのたび、千春は予防接種の取り消しと予約を繰り返す羽目になったのだが、千冬は上機嫌になった。母を困らせることが楽しかったのだ。でも、それが母の強いストレスになっていたのだろうと今に思う。

閑話休題。

千冬の体内にナノマシンが注入されると、厚さ一メートルはあろうかという扉が油圧駆動で開き始めた。開けた通路の先には、大きな空洞。おそらくはエレベーターシャフトだろう。転落防止用の手すりには、操作パネルらしきものがあつたが、千冬はエレベーターを待たず飛び降りた。

「まるで、不思議の国のアリスだな」

あたかも「白兔を追って穴に落ちたアリス」のように、千冬は底の見えない穴を下りながら、母が好きだった童話を思い出す。今思えば「不思議の国のアリス」にちなんだコードネームは自分に向けたメッ

セージだったのだろう。

そう思うと、下から眩い明りが指してきた。千冬は反重力で衝撃を緩和しつつ、片膝、両手の三点で着地した。そして顔を上げ、前を見据える。同時に顔をしかめた。

視界の先に別世界が広がっていたからだ。

比喩ではない。それは本当に別の世界だった。つい先ほどまでハイテクで塗り固められた無機質な場所にいたはずなのに、気づけば、彼女は——城の中に立っていた。それもなんとも奇抜な意匠の城だ。トランプ模様の配色。左右非対称のオブジェクト、道化の絵画が踊っていたりと、子供が描いたかのような不思議な世界が広がっていた。

「仮想現実、というやつか……」

非現実的なその空間を千冬が物珍しげに歩いていると、声がした。

《おやまあ。珍しい客人だわさ》

彼女の前に現れた人物はまたしても奇抜な人物だった。

ピンク色の髪。トランプ柄のドレス。ハートの冠。女王様のような風貌。とても現代を生きる人間とは思えない人物を前にして、千冬は高周波ブレードの柄に手を置いた。

「おまえは……？」

《わらわは、この〈ワンダーランド〉の支配者——〈ハートの女王〉だわさ》

ハートの女王。ここにきてまたしても「不思議の国のアリス」。まさか自分は本当に「不思議の国」にでも迷い込んだとでもいうのか。いや、そんなことはありえない。ここは間違いなく現実だ。だとしたら、この世界は一体なんなのだ。IS学園が最高権限を布いて立ち入りを禁止するこの場所の正体は？

《気になってしかたないという顔さね。ここは世界の裏側さ。それ以上は、わらわの創造主にきくがいい。——こっちにくるだわさ。ルイス・キャロルに会わせてやるわえ》

「……………」

千冬は黙って従った。現状から推し量るよりこの世界を作り上げ

た創造主に訊く方が話は早い。

踵を返したへハートの女王の背を千冬は追った。

城内を進んだ先に待ち受けていたものは、無数の書物が保管された空間だった。掛けられた螺旋状の階段では、無数のウサギの少女が行き交い、せつせと本の整理をしている。

その光景を眺めていると、前方不注意で何かを蹴っ飛ばした。蹴っ飛ばしたのは、ウサギ耳の生えた女の子だった。ウサギの女の子は蹴られた拍子に本をばさつと床に広げてしまっていた。

「すまない。前を見ていなかった」

手伝おうとする千冬に、ウサギの少女は「大丈夫」の立札を見せた。それから、そそくさ散らかった本を集め、忙しい忙しいとばかりに行ってしまう。何がそんなに忙しいのか。駆け足で図書から飛び出していくウサギ少女を見送っていると、へハートの女王が振り返った。

《ついたわえ》

へハートのクイーンが進路を開ける。その先では、妙齢の女性が片手に本を読んでいた。

自分の母親——織斑千春ことルイス・キャロルだ。ルイスはパタンと本を閉じ、娘を見やった。

「来たわね。待っていたわ、千冬」

♡

◆

♠

ここではなんだから移動しましょう。そういつて案内された場所は、城の中庭だった。調えられた木々に囲まれたテーブルには一人の女性が腰かけていた。ロリーナだ。

千冬はアタッチメントから高周波ブレードをテーブルにかけ、ロリーナが退いた椅子に腰を下ろす。「お茶はいかが？」と言ったロリーナを手ではねつけ、千冬は母を見た。

「なぜ、こんなものがIS学園の地下にある。そもそもアレはなんだ」

壁に敷き詰められた本。それを管理するウサギの少女たち。本来はそんなことを訊きにきたわけじゃない。しかし、あまりにふざけたこの世界と、それを守らされていた指揮官の立場から問わずにはいられなかった。

「せっかちなね。昔からあなたはそうだった。誕生日プレゼントも前日に買いにいかされたわ」

「そんな昔話はどうでもいい」

千春は苦笑いをこぼしながら、紅茶をひとくち。それからロリーナに視線を送る。

「ここは世界を裏側から検閲するための大規模サーチエンジン、その中枢よ」

サーチエンジン。いきなり現代的な言葉が出てきた。

「ユビキタスコンピューティングと、ワールドセンシングで、超情報化社会となった現代、あらゆる情報がデジタル化され、ネットワークを介して日々蓄積しているわ。その情報の集合体をなんとというか知っている？」

「ビッグデータか」

「そう。〈ワンダーランド〉は、そんな情報社会に蓄積していくデジタル情報を世界規模で検閲するシステム。あなたが見たウサギの少女はそのための汎用プログラム。書架に並べられた本は、取捨選択されたデータそのものよ。そして、システム全体を管理しているのが彼女〈ハートのクイーン〉なの」

〈ハートの女王〉はドレスの端をつまみ、優雅におじぎして見せた。「だが、ネットワーク上を飛び交う情報量はすでに毎秒六京ヘクサバイトを超えている。世界のスパコンを並列処理させても、世界規模の情報検閲など不可能だ」

「第四世代のコンピューターではね。でも、この〈ワンダーランド〉の中枢プロセッサには、第五世代コンピューティングと量子の重ね合わせ（スーパーポジション）を利用した技術が使われているの」

「量子コンピューターか」

「正確には、光子とフォトニクス結晶体を用いた光コンピューター。」

この光コンピュータは、第四世代のコンピュータシステムを凌駕した情報処理能力を有する。おかげで私たちは第五の戦場といわれるサイバー空間に置いて高い優位性を獲得している」

話の続きを千春が引き継ぐ。

「それだけに、その存在を秘匿する必要があつたわ。ヘワンダーランドは高次元の処理能力を持つゆえに、現代の情報社会を崩壊させることもできてしまう。さながら「情報核爆弾」ともいえるコレを他者に渡すわけにはいかない」

「だからIS学園に隠したのか。どの国家、機関にも干渉されないIS学園に。だが、そもそもだ。なぜおまえたちはそんなものを所有しなければいけない」

「世界と対等に渡り合うためよ。現代の主な戦場は空でも、陸でも、海でも、宇宙でもない。サイバー空間なの。いまの時代、たった一台のラップトップで軍隊を機能不全にできてしまう。換言、このサイバー空間で優位を確保できれば、どの軍隊とも対等にわたりあえる。そのため私たちはヘワンダーランドを構築した」

電子空間に戦略の重点を置く理由は理解できた。

世界にその重要性を知らしめたのは他ならぬ自分たちだ。だが、それは質問の答えになっていない。

「待て。私が知りたいのは、なぜ個人が電子空間でその優位性を確保し、世界と渡り合わねばならなかったのか、だ」

量子コンピュータによる情報操作は「手段」であつて「目的」ではない。

こんなものを作り上げてまで、なぜ世界と戦わなければいけなかったのか。

その目的を問う娘に、母はまっすぐに見据えて、すべての真実を明かした。

「償うためよ。——あなたと、束ちゃんが起こした「白騎士事件」は世界を混乱と恐怖に陥れた。その混乱を収束させ、子供たちに未来を残すために、私たちは「デウス・エクス・マキナ」を創立した」

千冬は奥歯を鳴らす。自分が犯した罪は自覚していた。償いの方

法もずっと探してきた。

だが、これは自分の罪だ。人の罪まで背負うとする、母の傲慢さに娘は激怒した。

「なぜ、おまえがそこまでしななければならない！ おまえには関係ないことだ！」

苛立つ娘に、母は優しく、そしてどこまでも慈しむように、こう告げた。

「千冬、子の罪はね、生んだ親の責任なの」

子供が犯してしまった罪を問うことはできない。無力な子供には、償う力もまた無いからだ。

けれど、罪をなかつたことにはできない。ならば、その罪は誰が背負い、誰が償うのか。それは親を置いて他にいないのだ。

千冬の犯した〈白騎士事件〉という罪を償うために、母は旅に出た。そう、贖罪の旅に。

「それに子供がどれだけ罪を犯そうとも、母親はお腹を痛めて生んだ子を、罪人だからと簡単には見捨てられないものなの」

母の言葉で、千冬の胎に何か重たいモノが落ちる。

しかし、ずっと、母に廃られたと思いつけてきた彼女は、明かされた母の本心を受け入れられなかった。自分に似すぎている少女の存在が、彼女をそうさせた。

「うそだ。おまえは私をいらない娘だと思っている。だから、もう一人わたしを作り、私たちを捨てた。違うか！」

「マドカのことね。安心して。あの子は、あなたの複製品なんかじゃないわ」

千冬が瞳を開く。

「マドカが自分の複製じゃない？ 髪や容姿、声さえ同じだというのに。」

「クローンじゃない!? だったらなんだというんだ……ッ」

「あの娘はね、——キメラなの」

キメラ。

その単語を聞き、千冬が思い浮かべたのは、複数の動物が融合した

神話の怪物——ではない。

現代、様々な戦場で猛威を振るっている無人兵器アーヴィングだった。

「月光」の脚部に使われている生体部品には、ES細胞をベースに「馬」と「飛蝗」の遺伝子が組み込まれている。これにより月光は、飛蝗のような跳躍力と、馬のような蹴力を獲得している。つまり、月光はある意味で二種の混合生物^{キメラ}。

「マドカの誕生には、月光と同じテクノロジーが使われているわ。あの子は月光のようにDNAをふたつ持つ。でも最初からそうだったわけじゃない。——あの子、邑上まどかは先天的な遺伝子の病気だったの。受精卵の段階で既にいくつかの遺伝子が欠落していて、重度の障害を持って生まれてくることがわかってた。そこで欠落した遺伝子を他の遺伝子で補う治療が行われたわ」

「遺伝子移植か」

「ええ。そのドナーに一夏君の特異的な遺伝子が使われたの。治療自体は成功したわ。マドカは障害を持たず、健康な体で生まれてこられた」

けれど、と千春が続ける。

「“副作用”が現れた。足りない多くのDNAを一夏君から移植したため、成長するに従って外見が一夏君に似ていったの。我が子が別人になっていくことを気味悪がったマドカの両親は育児放棄をした」

「それでおまえが引き取ったのか……」

「ええ。彼女の半分は一夏くんだもの。私がマドカにたくさんの愛を注いだのは『自分が何者であっても肯定してくれる人がいる』それを知ってほしかったから。けして、マドカはあなたの“やりなおし”なんかじゃないわ。確かにあなたには手を焼かされたけれど、一度だってあなたを、不要だなんて思ったことはない。だって、言うでしょ」

千春は朗らかな笑みで言った。

「手のかかる子ほどかわいいって」

それは学園襲撃事件後、無茶をして気を病んだ一夏に、自分が投げかけた言葉だった。

だから、悔しいほどに理解できてしまった。そうだ、手のかかる子ほどかわいいのだ。

明かされた真実に、千冬は自分の浅墓さを思い知って、打ちのめされた気になっていた。

「母さん、私は……」

私は知らない子じゃなかった。愛されていたんだ。

なのに自分は……。

呵責の重みに耐えかねて、声が詰まる。「ごめん」の一言さえいえない自分のちんけなプライドが、いまは憎らしかった。けれど、そんな不器用さも全部ひっくるめて我が娘なのだを知る千春は「いいのよ」と微笑んだ。

「あなたを傷つけ、へ白騎士事件」を起こさせてしまった私にも罪はある。だから、あなただけがすべての罪を背負わないで。それにあなたはよくがんばったわ。私がそばにいられない間も、一夏くんを守ってくれた」

「いや、私は何も守れていない。一夏も、学園も」

IS学園就任時、自分は『学園ぐらい守ってやるさ』と大言壮語を吐いた。

けれど、現実はどうだった。

セシリアという強敵相手に一夏を勝利へ導いたのは誰だ。

襲撃者から鈴を助けたのは誰だ。

世界からラウラを守ったのは誰だ。

孤独だった箒に手を差し伸べたのは誰だ。

継母の暴走からシャルロットを救ったのは誰だ。

自分は何ひとつも守れていない。

「そうかもしれないわね。でもそれは自分ひとりでなんとかしようとしたからよ」

「仕方なかったんだ！ 束も私の前から姿を消した！ 私には何も頼れるもんなんかなかった！ それでも一夏の前で弱さなんか見せられなかった！ なら、自分で全部するしかないだろ！」

自分を捨てた母親へのささやかな復讐として、一夏に「私たちは捨

てられた」と教え込んだ。しかし、弟から母親を奪ったことで、彼女は母も父も必要ないと思えるような完璧な人間あねにならざるを得なくなった。

気づけばだれにも弱音を吐けず、孤独になっていた。

それでもなんとか「最強」とか云うチンケな肩書を振りかざして頑張ってきたけれど、ついにそれが通じない。敵が現れた。彼女たちは知っていた。「最強」なんて言葉が子供だましにもならないことを。「そう。でも、もう大丈夫よ、いまは私たちがついてるわ。子は親を頼っていいのよ」

「頼る……？」

平気な振りをして、時に取り繕って、誰にも頼らず生きてきた彼女は思い出した。

受容というものを。

辛いとき、苦しいとき、人は人を頼っていいのだ。

「助けてー」と言う子の勇氣。「助けるー」という親の勇氣。人は誰でもいつか後者の勇氣を持たなければならない。愛する人を見つけ、新たな命をその身に宿したときに。でも、彼女のお胎はまだ空っぽだから、千冬は前者の勇氣を振り絞った。

「母さん、私に力をかしてくれ」

彼女は言った。「最強」という名ばかりの肩書を投げ捨てて。

「待っていたわ。その言葉を」

柔らかに微笑んだ千春は立ち上がり、勇氣を振り絞った娘の髪を愛おしそうに撫でた。

いまこのとき、真の意味で〈デウス・エクス・マキナ〉は始動をする。

「さあ、行きましょう。——あの子に危機が迫っている」

第85話 悪意の胎動

出場者のコース周回も無事に終え、会場は盛り上がりを見せていた。現在はIS学園の生徒による〈学生部〉が行われている。各クラスから選出された10名が、学園の訓練機である〈ラファール・リヴァイヴ〉あるいは〈打鉄〉を駆り、熾烈なデッドレースを繰り広げていた。

へさて、今年から設けられた〈学生の部〉もそろそろ終盤です。はたして若き操縦者たちはどのようなレース展開をみせてくれるのか？

時に銃弾をかわし、時に得物を振るい、時に相手の裏をかいて、首位に躍り出る選手たち。

知謀と暴力が入り混じったその狂気に蘭は憑りつかれていた。

〈モンド・グロツ〉をはじめとしたISの大会はいずれも殺傷武器が用いられている。安全面は考慮されているといっても、やはりそれを倫理的に問題視する者は多く「これはスポーツではない、殺し合いだ」「こんなものを楽しむ人間は狂っている」という意見もある。蘭もそれは正しいと思う。けれど、

「すごい躍動感……」

選手からほとばしる強烈なエネルギーを直に感じ、蘭は震えていた。

おそらく彼女たちから放たれるそれは「生命」そのものなのだ。突き付けられた武器が本物だからそこに危機感が生まれ、その恐怖に立ち向かうべく生命が躍動し、光り輝く。その輝きは安全保障という檻の中じゃおそらく巡り会えないものだ。

もちろん、社会の安全は、ゆりかごから墓場まで保障されるべきだ。戦争はいけない事だし、テロも起こらない方がいい。だが、人間は安全や平和を謳いながらも、心のどこかで危機^{スリル}を求めている。ヘインフィニット・ストラトスというコンテンツは、映画やアニメ、ゲームという虚構の世界じゃ味わえない極限のスリルと、人間の根源的パワーを地肌で感じられる、おそらくは世界にふたつとないエンターテイメントだ。

蘭はその世界にどっぷりとはまりながら、食い入るように試合を観戦した。

すると、5位の選手が一気に肉薄し、4位の選手に斬りかかった。近接ブレードは間合いと踏込みの関係上、常に移動し続けるフィードルじゃ有効に活用しづらい。しかし、5位の選手はバレルロールの遠心力で切っ先を振り抜き、四位のスラスタにダメージを与えた。推力が低下した四位の選手が、徐々に後退していく。

見事、順位を入れ替えた操縦者は黒いポニーテールを靡かせながら、さらに首位へ肉薄した。レースも終盤間近。いつきに畳み掛ける気だ。

「あれって確か一夏さんの幼馴染みの……」

「篠ノ之箒ですね」

今回の学生部門、一組からは箒が選抜されている。

ただし、搭乗している機体は<紅椿>ではなく、第二世代の<打鉄>だ。機体性能に頼らず、自分の実力で勝負したい。そんな箒の申し出によるものだ。箒はさらに3位の選手にも畳み掛け、順位を入れ替えた。

「すごい、相手は三年生なのにッ！」

一位、二位、三位は三年生集団が首位を得ている。実力的にも格上の相手を蹴散らし、箒は快進撃を続けた。残すはトップを独走する一位のみ。箒は一気に畳み掛け、一位の選手に斬りかかる。しかし、一位の選手はブーストで回避した。さらに前後を反転させて、14.5ミリ口径のアサルトカノンを構える。そして逆推力装置で前進しながら、接近を試みる箒を引き撃ちで押さえつけた。

「お、すごい、あの人、後ろ向きに飛びながら攻撃してんぞ……」

まるでスケートのインストラクターのように向き合い、箒の追撃を制する一位のパイロット。

高等なテクを披露して首位を守る一位に、弾のみならず、観客も沸いた。
バックスラストショット

「後進射撃ね。さすが三年生、高度なテクを使うわね」

「彼女はサラ・ウエルキン、確かイギリスの代表候補生でしたか？」

「イギリスの代表候補生……。なんで学園の訓練機で？ 専用機で出場しないんですか」

「単純に持っていないからよ。イギリスの代表が彼女を冷遇しているの」

「冷遇……。こんなに操縦がうまいのに、ですか？ それってひどくありませんか」

品行方正な彼女は、公平さを重んじている。実力のある人間には相応の対応を取るべきだ。

そんな感情が蘭の表情から見てとれたけれど、スコールは続けた。「大人の事情があるの。さあ、そろそろレースも終盤よ。どちらが勝つかしらね」

スコールがアリーナに視線を戻す。納得いかないようすながらも蘭たちも視線を戻す。

レースは膠着状態に陥っていた。サラが巧みに後進射撃で頭を抑えてくるため、箒は攻めあぐねていた。——このままでは逃げ切られる。状況打開のため、箒はカミカゼアタックを慣行した。＜打鉄＞の撃たれ強さを盾に、瞬時加速を発動したのだ。

55口径の砲弾を受けても＜打鉄＞が衝撃吸収装置で、本機の減速を軽減させる。シールドエネルギーは瞬く間に消耗されていくが、間合いは一気に詰まっていった。——が、ようやく「間合い」まで迫ったその瞬間、サラがP I Cで機体を急停止させた。

当然ながら、停止したサラと突撃した箒の間にクラッシュが発生した。

それによって二機の姿勢制御が失われる。だが、サラは即座に体勢を立て直してみせた。

アリスとスコールは「マニュアル復帰か」と思った。

姿勢が崩れたとき、通常はオートバランスサーが働く。サラはそれをあえてマニュアルで行い、機体を即時復帰させたのだ。I Sは脳波コントロールを採用しているため、直感操作によるマニュアルの方がオートよりレスポンスは早い。

時間にすれば1秒2秒の差ではあったけれど、その差がレースの勝

敗を分かつことになった。オートゆえサラより復帰に時間を要した
筈は、結局一位を奪取できずにゴールラインを切ることになった。

「おしいー！」

ハラハラしながら試合展開を見守っていた蘭がおもわず声を上げる。弾も「くうーッ」と悔しがるように、持っていたコーラを振るう。噴き出したコーラに慌てる弾のとなりで、スコールは冷静に試合結果を分析した。

「一年生と三年生の操縦技術の差が妙実に現れたわね」

マニユアル技術は二年課程のカリキュラムになる。終盤の展開は、まさに学年の差が現れたといえた。ただし、三年生を相手に食い下がった筈の実力も十分に評価できる（彼女を指導しているアリスとしては、自分の指導力に課題が残る試合だったが）。実況もそういった解説を踏まえ、両者のレースを称賛していた。それから〈学生部の部〉の終了と30分間の休憩に入ることを告げる。

「次はついに〈プロ部門〉のレースですよね」

「ええ、次が一夏や鈴の出番になりますね」

「じゃあ、あの、わたし、いまのうちに、行ってきます」

想い人の晴れ舞台。これは片時も目が離せない。それあって、蘭はいまのうちに用を足しておこうと思ったのだった。「ん、どこに行くんだ？」とデリカシーのないことを言った兄に鉄拳を見まい、蘭は手洗いに向かった。



「……………考えることはみんな一緒だよね」

向かった手洗い先で用を済まし、蘭は手を洗いながらぼやいた。

試合前に手洗いを済ます。そう考えていたのは自分だけではなかったのだ。みんながみんな同じことを考えていたため、案の定トイレは混雑し、蘭は用を済ますのに20分近くも費やしてしまった。

「早く戻らないと試合が始まっちゃうよッ」

急いで手を拭き、女性トイレを出る。

試合開始時刻が迫っているとあって、通路に人気はなかった。その通路にふと見た顔の人物を見つける。先ほど〈学生の部〉で優勝したサラ・ウエルキンであった。そのサラがさっそうと通路奥に消えていく。

蘭は思わず「あつ」と声を漏らした。

(どうしよう、声かけてみようかな)

試合開始までまだ10分ほどある。挨拶ぐらいなら——そんな軽い気持ちで、蘭はサラの後を追いかけた。そして追いかけることしばし。蘭は休憩所にやってきた。自動販売機が置かれただけの人気のない休憩所だ。そこで、サラはインカムを叩いて誰かと会話を始めた。

『ダリル、そちらの準備はどう?』

『ああ、問題ない。アレは設置済みだ。いつでも外部からく白式をコントロールできる。こつちがその気になりや、リアクターを暴走させてボン、さ。あとは連中が事故として処理してくれる』

白式は一夏の専用機だ。リアクターとはISの動力システムだったはず。

それをボンとは?

会話を盗み聞いた蘭の背中に、冷水を浴びせられたような悪寒が走った。『ボン』が爆発を意味していたとすれば、操縦者の命に係わる一大事ではないか。

(でも、わ、悪い冗談を言っているだけかも……)

そうあってほしい願望から蘭は耳を敬そはてた。

『彼には悪いけれど、ここで退場してもらおうわ。でも情けとして劇的な終わりにしてあげる。そうね、彼がゴールラインを切るその時がいにかしら。私がトロフィーより素晴らしいものを贈与してあげる』

『表彰台に立たせない気か。えげつないな、おまえ。まあ、好きにしろよ。それより、ちゃんとコントロール持ってたんだろうな。対妨害用の特注品だぜ。二つもないんだからな、なくすなよ』

『もちろん』

サラはISスーツのポーチから、拳銃を思わせるリモコンを取り出した。その撃鉄らしき部分を上下させて弄ぶ。その動作は「早く引き金を弾きたい」とウズウズしているように見えた。

これは悪い冗談じゃない。彼女たちは冗談で終わらせようとしていない。

(ど、どうしよう)

いま自分はすさまじい状況に立たされていることに気づき、蘭はすくみ上った。これは危機的状況だ。自分はテロの算段を聞いてしまったのだ。気づけば鼓動が張り裂けそうなほど高まっていた。

「だ、誰かに伝えなきゃ……」

でも、誰に。そもそもだ、こんな話を誰が信用してくれるだろうか。説明しているうちに、スイッチを押されたら……——蘭は考えた末、すくんでいた足に力を込めた。そして、出せる全速力で駆け出し、サラにぶつかっていく。

素人の体当たりが代表候補生に通じるか半信半疑だったが、サラは意表をつかれ、蘭と共に床に倒れ込んだ。その拍子にコントローラーがサラの手からこぼれる。蘭は四つん這いでそれを拾いに向かった。(と、とにかくどこでもいいから遠くにッ)

サラから奪ったコントローラーを握りしめ、蘭は一目散に走り出した。

そのようなサラはついた埃を払いながら見つめる。動じている様子はない。

『おい、どうした。なにかあったのか?』

「何もないわ。ちよつとねずみがいただけ」

通信を切ると、サラは悪態をつくことなく、ゆっくりと蘭の消えた方向へ歩き出した。



「やったッ、やったよッ、私やった!」

決死の覚悟で奪ったコントローラーを手に、蘭は自分を褒め称えた。

でも、安心なんてできはしない。相手はきつとこれを取り戻しにやってくる。そのままになんとかして、このことを誰かに伝えないと……。蘭は震える手で自前のケータイを取り出した。月子か、鈴か、一夏か。でも、出番を控えたこのタイミングで誰が出てくれるだろうか。むしろ、こういう事件を専門に取り扱っている人間に連絡した方が……。考えた末、彼女がダイヤルした先は警察だった。

『はい、こちら警察です。どうしましたか』

「えっと、ば、爆弾が、テロリストにッ！」

動揺と恐怖で頭が回らなかつたせいか、どうにも要領を得ない返答になつてしまう。

それでも必死さが伝わつたのか、悪戯とは受け取られず、真摯な対応が返ってきた。

『落ち着いてください。場所はどこですか？』

「えっと、キャノンボール・ファストの会場です、いますぐ——」

「来てくださいッ」そう付け加えようとしたとき、蘭の背後から肩越しにぬつと手が伸びてきた。その手がやんわりと蘭のケータイを取り上げる。サラだった。サラは蘭から取り上げたケータイを耳にあて、

「すみません、いまの電話は妹の悪戯なんです」

イギリス人とは思えない流暢な日本語で、サラは息をするようにウソをはいた。さらに「こら、ダメでしょ、リサ」とあたかも姉のような口ぶりで蘭を叱つてみせる。

巧みな劇場型詐欺のやり口に、警察側からは嘆息が聞こえてきた。

『わかりました。このようなことは金輪際、おやめくださいね』

「はい、私の方からも強く言い聞かせておきます。本当に失礼しました。では」

通話ボタンをオフにされ、蘭は絶望的な気分になった。

「あ、あ、ああ……ッ（そ、そんなあッ!!）」

これでもう警察は頼れない。かけ直しても悪戯に思われてしまう。

対し、サラは優しく「ダメでしょ」と窘めてきた。傍目からは本当に気のいいお姉さんに見えた。悪びれた様子すらない。それに蘭は戦慄する。彼女は国家機関さえ謀るような悪党なのか。

「あ、ちなみにリサは私の妹よ。あなた、兄弟は？」

「え、あ、兄が……」

正直に答えてしまうあたり、自分はそうとう動揺している。

「へえ、そうなの。じゃあ、それ、かえしてくれたら、お兄さんのところに帰っていいわ」

その余裕から、自分が相手にとって取るに足りない存在だと悟られる。自分が意を決して起こした行動に意味なんてなかった。自分ではどうすることもできない、相手はそういう次元の人間なのだ。

それでも蘭は、抵抗を見せた。

「いやです、これはわたしません！」

一夏を危険な目に遭わせたくない。その偏な気持ちで彼女をそうさせた。

「そう、困ったわね。じゃあ、どうしようから」

と言いながらも、サラの目はすでに狂気に染まっていた。これから何をされるのか、素人の蘭にも解かった。漫画ならこういう場面、颯爽と主人公が助けに来てくれるものだろう。もしかしたら一夏さんが助けに来てくれるかも。そんな思いから彼女は叫んだ。

「助けて一夏さんッ！」

だが、現実是非情である。現実はその思うようにはならない。

ならないものだから。

現れたのは。

赤い髪の少女で。

「あの、一夏じゃなくてすみません……」

お呼びじゃない空気をひしひし感じ、アリスは蘭から目をそらした。



「やっぱり蘭さん的には一夏がよかったですよね。どうみても一夏が悪役をやっつけて、胸きゅんさせる場面ですし」

現れるなり、緊張感のない様子でアリスはそんなことを言った。

「あ、いえ、それはまあ……」

蘭としても本音は一夏がよかったし、せめてもうちよつと頼りになりそうな人がよかったという気持ちはある。せめてお兄ちゃんがきてよ。なんてさえ思った。——そう、ずっとアリスを侮っていた彼女は気づいていなかった。

——自分が最強のカードを引いたことに。

だからほとんど安心なんてできず、むしろ二次被害的な心配が彼女の心境を占めていた。

それでも、仲間が増えた余裕から、蘭はわずかに強い口調で言った。

「アリスさん、どうしてここに。いえそれよりこれをもって逃げてくださいッ！」

「なんですか、このリモコンは」

「それは爆弾のリモコンなんです。あの人たち、一夏さんのISに爆弾を！ それは絶対にわたしちやいけななんです。だから、アリスさんはそれを持って逃げてください。大丈夫です。わたし、小さい頃、おじいちゃんに空手を習っていましたから！」

蘭は矢継ぎ早に言った。そして、アリスをかばうように立ち、ファイティングポーズを取る。

そんな蘭の襟首を、アリスは掴んで引っ込めさせた。

刹那。

銃声。

自分のすぐそばを通過した弾丸に、蘭は腰からへなつと碎けた。

「うそつ、鉄砲……」

というか、いまアリスさんが引っ張ってくれなかったら、わたし死んでた……？

拳銃が醸す恐怖と、命拾いした安堵で、彼女の腰から完全に力が抜けた。

「あまり手こずらせないで。——さあ、それをわたしてちょうだい」
「イ、イヤです！」

蘭はへっぴり腰になりながらも、リモコンを強く握りしめた。たとえ腰が抜けようが、失禁しようが、これはだけは絶対に渡さない。そう強い意志を示した蘭のまえへ、アリスが守るように入る。

蘭は「あぶない！」と叫んだが、アリスはやめなかった。

「あなたはこんな健気な少女を撃つのですか」

そんな同情に訴えられるような相手じゃないの……！ と蘭は心でそう叫んだ。

「ええ、撃つわ」

引き金を絞るサラに「ほらッ！」と蘭。

その蘭が「もう駄目だ」と諦めた刹那、アリスが視覚で捉えられないほどの速度でナイフを抜いた。まるで鞭のようになつた腕で投げされたナイフが、サラの銃口をのけ反らせる。その隙にアリスが走る。地面を滑るかのような低い姿勢で間合いを詰めたアリスは、サラの懐に飛び込むなりCCCで拳銃を奪い、下方からサラの顎下を蹴りあげた。

喉が限界まで伸び、サラの体躯が後方に転倒する。それはまさに一蹴にして一瞬の出来事だった。

「——じゃあ、私は撃たせない」

そういつて、奪った拳銃を分解してパーツをサラの上にぶちまける。

蘭は呆気にとられた。素人目には何が起こったのかわからなかった。ただわかるのは、アリスがサラを倒したことだけ。

「すごっ……」

内心でつぶやいたつもりが、思わず口から出てしまっていた。

拳銃を持った相手をいとも容易くのしたアリスの、その活劇があまりに衝撃的で。

「大丈夫ですか、蘭さん？」

「ひゃ、ひゃい」

「その様子だと相当こたえているようですね。ですが、もう大丈夫で

すよ。ほら」

「あ、ありがとうございませう」

自信にあふれたその声音におもわず声が上がります。

差し出された手は自分と同じくか細いのに、なんとも力強く感じられた。

「アリスさん、すごく強い人だったんですね。わたし、ただのお転婆かと」

「お、おてんば……」

お転婆……。間違っていないだけに、アリスは返答に困ったが、

「ともかく訂正はあとにしましょう。まだ事は終わっていない」

「そうですね。これを絶対に渡さないように——あ、アリスさん、うしろ！」

蘭がリモコンを大事に鞆にしまうと、アリスの背後でサラが立ち上がっていた。その頭部には見覚えのある非対称の角。尾骶骨からは蛇腹剣に似た尾が生えていた。それがアリスを襲う。

寸前で回避。

驚異的な反射でよけたアリスを見て、サラは「ちっ」とはじめて悪態をついた。

《ハニー、データベース照合、コードネーム〈ヴェルフエゴール〉》

サラが展開したISは、かつてデュノア社で戦った〈怠惰〉のISだった。

「あ、アイエス……、専用機は持っていないんじゃないか……」

「やはり回収されてしまったか」

デュノア社での激闘のあと、〈ヴェルフエゴール〉は何者かに回収されていた。反重力で瓦礫が撤去されたあとがあったのだ。その回収されたISが、アリスのまえに復讐せんと再び姿を現していた。

「厄介なのが出てきましたね」

〈ヴェルフエゴール〉はISのコアに干渉し、その機能を停止させることができる。正面からではどんなISも〈ヴェルフエゴール〉に太刀打ちできない。いまは遠くへ逃げるしかなかった。

「蘭さん、走りますよ」

「え？ え？」

余裕の消えたアリスに引つ張られる形で蘭が走り出す。

駆け出した拍子にケータイを落とすが拾っている暇はなかった。

「逃がさない」

にげる二人を一瞥し、サラが上唇をなめて飛翔する。加虐的な笑みをうかべて追ってきたサラに、アリスはく赤騎士の腕部を展開し、そこに備わったグレネードランチャーを向けた。

「舌舐めずりは三流のすることですよ」

発砲。放たれた榴弾が眩い閃光を放ち、サラの視界を奪う。

閃光弾が作ったわずかな隙を利用して、アリスたちは通路を全速力で駆け抜けた。

「やってくれるじゃない」

サラが視界を取り戻したそのときには、すでにケータイ以外に二人の姿はなかった。

サラは苛立たしげに落ちていたケータイを拾い上げる。

そして、しばらく思案したあと、悪意に満ちた邪悪な笑みを浮かべた。

第86話 運命の行方

レース開始15分前。火器管制、推力装置、センサー各種、動力システム、すべて異常なし。

ピットで最終チェックを終わらせた俺は、白式を反重力で浮き上がらせた。

これから始まる大舞台に呼吸はいささか浅い。ここで結果が残せれば、代表候補生への道が開ける。〈約束〉を果たす大きな一歩にもなるため、どうにも心が逸る。

「大丈夫、一夏さまならうまくやれます。遅れを取ってもうちが挽回したるさかい！」

「……うん、壊れても、わたしたちが全力で修理する」

「そうなのさ。だから、思う存分飛ばしておいで。大事なのは、この機会を楽しむことさ」

『あれ、篝火さんがいいこと言ってる!?!』

「ちよつとき、月子も、簪もひどくなあ〜い」

ツナギにスクミズ（ISスーツ）という斬新なカツコの篝火さんが不満げに口先を尖らせる。

それにチームがカラカラと笑った。俺も重圧の高ぶりから解放され、いい具合に肩の力が抜けた。いいコンディションだ。

「じゃあ、思いつきり楽しんできます」

ぐつと親指を立てるチームクルーに見送られながら、スタートラインに赴く。

途中、何気なく蘭たちがいる観客席に目をやった。だが、そこには4つの空席があるだけで、蘭たちの姿はない。来ていないということはないと思うが。千冬姉といい、俺はなんだか嫌な胸騒ぎを覚えた。《だーりん、大丈夫ですよ。姿が見えなくても、みんな応援してくれています》

と肩に乗るホログラム映像の〈ホワイトクイーン〉が言った。

「そつか。じゃあ、期待に応えないとな。——やるぞ、相棒」

《Yes My darling》

〈ホワイトクイーン〉が言うのと、白式のウサギ耳オスガジェットの少女がうんしよつと『えいえいおー』のプラカードを上げた。なぜか絆創膏が張られていたりするが、ホログラムの〈ホワイトクイーン〉も「オー」と拳を掲げる。俺は頷き、四番と記されたスタートラインに並んだ。前方には、セシリア、鈴、シャルロットがいて、後方には、アイリーン、楯無さん、アンジェリカさん、ジェニファーさん。

前方組は戦力温存、後方組は最初から全力勝負、そんなところか。へでは、これより〈プロ部門〉のレース開始です。

アナウンスが告げると同時にA Rのカウントダウンが始まる。

3——俺はジェネレーター出力を〈巡航〉から〈戦闘〉へ

2——推進装置点火、出力上昇へ。

1——すべての火器管制オン

0——俺の大きな躍進を賭けたレースが、いま始まる。



「始まった……」

会場から外れた〈指定区域内〉の、交通規制が敷かれた幹線道路。

アリスが運転する自動二輪のサイドカー、その中で蘭はネット中継を見ながらつぶやいた。

（大丈夫、一夏さんは私が守りますから）

蘭は一夏の命運を分かつりモコンを握りしめた。表情にも強気な感情が見えてとれる。アリスがいること、そして密かに専用機持ちだったこと。それが蘭の心に余裕を作っていた。

「それで、アリスさん、これからどうするんですか？」

「とりあえず、今は身を潜めます」

アリスはそう言ってウインカーを出す。彼女が右折して入った場所は、草木が多く生える公園、都市の緑化を謳って埋立地に作られた人工森林公園だった。ここに植えられた草木が敵側の索敵を妨害してくれるだろう。それを期待しての選択だ。

その場所の、車両での進入は禁止されていたが、アリスはそのまま公園を突っ切った。蘭は思わず「怒られそう」と真面目に考えたものの、事情が事情なので勘弁してもらおうことにする。

ややして、アリスは海が見渡せる公園の末端でバイクを止めた。

蘭はバイクを降り、その端から海を一望した。

ココからでもへキャノンボール・ファストの会場をなんとか見ることができた。

特設された海上の仮想コースでいくつもの光が走っては消えていく。蘭はそれを見て、ケータイ（アリスのもの）のインターネット中に視線を落とす。一夏は3位につけていた。上々な滑り出しだ。

蘭がぐつとガッツポーズを決めると、そばのアリスから電子音が鳴った。

「はい、私です」

『アリス、こちらくウォルラスよ』

通信相手は潜水艦型ISくウォルラスの通信士官だった。

彼女らへデウス・エクス・マキナが有する静穏多目的潜水艦は、現在、この近海に潜伏している。理由は知らされていないが、おそらくはへリリス絡みだろうということは分かっていた。

『その近辺で、大きな物体を感知したわ。そちらに向かっているみたい。音紋から潜水艦のような物体じゃなく動物的な生物、おそらくは大型の海獣だと思われるけど』

「怪獣ですってっ?」

ただでさえ、こっちは厄介なISに追われているのだ。怪獣の相手なんて冗談じゃない。

『海獣よ、海獣。怪獣なんているわけないでしょ、常識的に考えて』

「まあ、そうなんです。でも、海獣なら何も問題ないでしょ」

『いえ、全長は10メートルを超えているの。こんな浅瀬にそんな大型の海獣が現れるなんてありえないわ。ただの海獣とは思えない。こちらでも警戒と分析をしているけど、あなたも警戒しておいて』

「わかりました……」

アリスは通信を切る。

海獣と敵との関連は不明だが、不穏分子が増えてアリスは洗面を作った。そのもとに蘭がやってくる。そしてネット中継を見るため借りていたアリスのケータイを見せた。

「アリスさん、メールの着信みたいです」

受け取ったアリスは画面を確認する。——メールの差出人は弾だった。

戻ってこない妹を心配してのことか。

「開けてください」とアリスが言つて、蘭がメールを開く。メールには本文も何もなかった。たった一枚画像の添付ファイルがあるだけだ。それを開いてみる。と、蘭の表情から血の気が引き、震えた手からケータイが落ちた。

添付された画像データには、目隠しをされ、拘束された兄の姿が映っていたのだ。

「——ッ」

身内のショッキングな映像に声が声にならなかった。

「ど、どうして……」

恐怖、憤慨、不安、いろんな感情が絢交ぜになって、蘭はひどい混乱に陥った。

なぜ、兄がこんな目に遭っている？ 誰かの嫌がらせか。それなら相当に性質が悪い。蘭はそんな性質の悪い人間を知っていた。さつき会ったばかりだ。

アリスも忌々しそうに顔をしかめる。すると、ケータイが再び鳴った。今度は通話だ。

発信先は弾だったが、当人ではないことは明白だった。それでも蘭は希望を抱いて通話にでた。

「お、お兄ちゃん……？」

『残念、私でした』

最上級に憎たらしい声音で、受話器先の女性——サラ・ウエルキンが言った。予想していたとはいえ、ショックを隠し切れず、目頭に涙が浮かぶ。

「な、なんで、こんなひどいことするんですかあ……」

兄は関係ない。なのに、なぜこんな仕打ちを受けなければならないのか。

蘭には理解できなかった。

『それはあなたが妙な正義感をかざすからよ。見て見ぬふりをするればよかった』

「そ、そんなこと……」

確かに見て見ぬふりをすれば、自分にこんな災いが降りかかることもなかった。

けれど、けれど、どうしても黙って見ていられなかったのだ……。一夏だったからだけじゃない。鈴であっても、セシリアであっても、彼女は同じ行動をした。彼女はそういう正義感が強い人間なのだ。だが、その正義感が兄を危機にさらしてしまう結果を生んでしまった。

はたして、自分の行為は正しかったのか。その正否に揺れる蘭からアリスはケータイを取った。

「で、要求は」

『もちろん、あなたたちが持つ発信機よ』

やはり目的は蘭が持つ発信機か。

同時に、それは蘭に世にも残酷な選択を迫ることもあつて、アリスは毒づいた。

「外道ですね……」

『うふふ、いまあなたがどんな顔しているか、想像すると興奮するわ』
「今のうちですよ、そうしていられるのも」

『あら、最後は正義が勝つ』とでも言いたげね。けれど、それは違う。どんな卑怯な手をおおうと、最後に勝った者が正義なのよ』

「いいえ、違いますよ。勝敗に関係なくあなたは『悪』だ。勇敢な行動を取った彼女こそが正義です。その彼女を嘲笑うあなたを私は許さない。彼女に代わって私があなたに裁きを下す。覚悟してなさい」

『裁き？ ふふふふ、さすが偽善集（デウス・エクス・マキナ） 団ね。正義の執行者気取り？』

「いいえ、私は悪党ですよ。あなたと同じ側の。ただし、格は違う。それを教えてあげます」

『たのしみにしているわ。——では、交換と行きましょう。15分後、場所は自然公園にある海沿いの南エリア。私たちが向かうまでに、どちらを取るか決めておいてね』

一方的に告げられたあと、通話はそこで途絶えた。

アリスはどこかと何かの連絡をとりながら、移動を開始した。蘭も続くが、残酷な現実をまえにして、その足取りは覚束ない。無理ないことだ。リモコンを渡さなければ兄の身に危険が及ぶ。しかし渡せば一夏の命がない。究極の二者択一を強いられた彼女の心境は測るに難くない。

「なんで、こんなことになったのかなあ。神様は残酷すぎるよお……」

目頭に涙を蓄えて、無情な現実に嘆く蘭。彼女は絶望にうちひしがれていた。ついさきまで「一夏さんは私を守ります」と息巻いていた心は、これで完全に折れてしまっている。

アリスはそんな彼女の両肩を取って、向かい合った。

「神様は関係ない。これは人がしでかしたことです。なら人の手でどうにかできる、私がどうにかする。だから、大丈夫。安心なさい」なぜ彼女はこうも強気でいられるのだろうか。蘭には分からなかった。わからなかったが、彼女の言葉を訊くと萎えていた四肢に力が宿る気がした。彼女が「大丈夫だ」といえば本当に大丈夫な気がしてくる。蘭はここにきて一夏が言った「頼りがい」の意味を初めて理解した。

「はい」

蘭は力強く返事をした。



そして、約束の、運命の時間はやってきた。

二人が指定された自然公園の南エリアで待機していると、きつちり15分後、サラが弾と共に現れた。

「おにいちゃんッー！」

目隠しに、手錠を施された兄へ蘭が叫んだ。

「この、声、蘭か？ 無事なのか!？」

弾は聴覚を頼りにあたりを見回した。

「うん、私は大丈夫!」

「そっか、よかった……」

それは紛うことなき心からの声だった。

自分より妹を案じてくれた兄に蘭の心が揺れる。できるなら今すぐにも助けに駆け出したかったが、それをサラが制した。

「さて、感動の再開はここまでよ。——では、交換と行きましよう」

サラがりモコンを寄こせと、人差し指を手前に折る。

蘭はそれを拒んだ。兄を助けたい気持ちは十二分にあるけれど、それと同じぐらい一夏を守りたかった。二つの感情の闘ぎ合いで、身じろぎする蘭。見えないなりに、黙った妹から何かを感じ取った弾が叫んだ。

「蘭、わたすな。よくわかんねーけど、渡したら一夏がまずいんだろ。なら絶対わたすな!」

事情が見えないなりに、何か察していたのだろう。

訴えるように張り上げたその声音には、自分はどうなってもいいとさえ伺えた。

一夏と知り合って4年足らず。長くもないが、けっして短くもない時間の中で、彼は一夏と平凡ながら友情を育んできた。

特別な関係へ至るのに、何も特別なことは必要ない。下校の帰りで共に道草をくい、テストの点数を見せあい、テレビゲームに興じる。そんな平凡な日々の中でも、強い絆は生まれる。当人のまえでは小っ恥ずかしくて言えないが、弾にとつて一夏はかけがえない友人なのだ。その友人が全力で夢を叶えようと戦っている。それを自分の所為で台無しになんかしたくなかった。

「あらあら、ふふふ、美しい友情だこと」

二人の友情を身近でみてきた蘭の心に強い怒りがこみあげた。

この女に心はないのか。——いや、きつとないのだ。だから、平然

とこんなことができる。この非情な女を、いまは全力で張り倒したい気持ちでいっぴいだ。けれど、それができない悔しさに、蘭は爪が掌に食い込むほど握りしめた。そんな蘭の手を取ったのは、やはりアリスだ。

「リモコンを渡してしまいなさい」

蘭の心臓がぎゅつと委縮した。

「でも、それじゃ一夏さんが……」

「大丈夫。彼は私が必ず守る。だから、あなたはお兄さんを助けなさい」

蘭は一度、リモコンに視線を落とし、考えた。

おそらく自分にこの状況を切り抜けられる知識や技術はない。ならば、一夏の言葉を信じて、すべてをアリスに託してもみようか。彼が信じる彼女の『力量』とやらに。

蘭は「はい、わかりました」とリモコンをサラに差し出した。

「ふふ、好きなひとを見捨てる覚悟ができたようね」

蘭はもう何も思わなかった。そんな覚悟はしていないし、諦めたわけでもない。

いまはただアリスの言葉を信じるのみ。

「ほら、いきなさい」

リモコンを取り戻したサラが、弾の背中を押す。

躓きながら戻ってきた兄を、蘭は全力で抱きしめた。

「おにいー」

抱擁なんて普段は恥ずかしくて絶対にできないけれど、いまだけは甘えるようにしがみつく。

拘束はアリスの手で解かれた。「すまねえ、俺のために……」と悔いりながら、妹を撫でる弾に、アリスは首を横に振る。

「悪いのはすべてあの女です」

目線でサラを睨みつけると、彼女はこちらに弾のケータイを投げた。

その画面にはヘキャノンボール・ファストのネット中継が流れている。場面は丁度、トップ集団のレース展開を映しているところだっ

た。その先頭に行くのは青いIS<ブルー・ティアーズ>だ。そのすこし後ろに、順位を入れ替えようと画策する一夏が映っていた。

「では、友人の最後よ。とくとごらんなさい」

サラがりモコンを手にかざし、撃鉄を起こす。そして起爆スイッチとなる銃爪を引いた。

♡

◆

♠

キャノンボール・ファスト会場。レースも中盤にさしかかり、会場のボルテージも異常な高まりを見せていた。抜き、抜かれのデットヒート。衝撃砲をAICで防ぎ、荷電粒子砲とBTレーザーがぶつかり合っては激しい閃光を放つ。参加したISのほぼ全てが第三世代——SFの兵器であるため、その攻防は映画の世界のようだった。それがより観客をヒートアップさせる。

そんな中、まず首位に飛び出したのは、セシリアのヘストライクガンナーを装備した<ブルー・ティアーズ>だった。セシリアはレーザー推進を活かした爆発的な加速で首位に踊り出るなり、箒を苦しめた後進射撃で、俺たちの追撃を抑える。

「ここからさきは誰も通しませんわよッ」

発砲に次ぐ、発砲。セシリアの巧妙な射撃術に、2位以降の選手が攻めあぐねていると、後方から中位集団の合間を縫って、一機の白い閃光が飛来した。ジェニファーさんの専用機<ナインテイル・フォックス>だ。

それが音速を超えてセシリアに迫る。

セシリアは《スターダスト・シューター》で<ナインテイル・フォックス>を狙い撃った。しかし、ジェニファーさんはしなやかな体さばきと、アポジモーター制御でその攻撃をやりすごす。

「いい射撃ね。スコールと戦ったときを思い出すわ。その機体に実装されている《スター》シリーズと射撃ソフトもスコールが手掛けたものよね。けど——」

それだけに射線が読めてしまうと、ジェニファアさんは言った。きつと何度も試合して、手の内を知り尽くしているのだろう。その彼女が作った射撃システムじゃ自分は撃ち落とせないとばかりに、彼女はセシリアの射撃をかくぐって肉薄した。そして《雪片》を抜き、すれ違いざまに一閃。《スターダスト・シューター》を失ったセシリアを追い抜いて、ジェニファアさんは首位に躍り出る。崩れた体勢を立て直し、なんとか二位に留まったセシリアは追撃を掛けた。

だが、後方に着いたセシリアをくナインテイル・フォックスのエネルギーギーンテイルが襲う。鞭のようにしなるテイルがセシリアの接近を拒み、首位を奪還させなかった。

「やりますわね、さすがわへブリュンヒルデ」

同感だった。さすが高速部門で幾度なく優勝をはたしたへヴァルキリー。それでいて黎明期から、いまなお現役で活躍し続けているレジェンド。経験、技術、どちらをとっても俺たちより格上だ。

生半可な覚悟と技術じゃ超えられない。

だが、夢のために超えなきゃいけない壁だと自分に強く言い聞かす。

——なら、追いついてみせなさい。あなたの夢のために。

後方につける俺へジェニファアさんが語らずにそう告げる。

ああ、追いついてみせるさ。追いついて、追い抜いて見せる。

俺はセシリアと並びながら、現役最強へと食らいついた。



投げられたケータイの画面には、ジェニファアになんとか食いつく一夏が映し出されていた。快調に。何の問題もなく。彼に災いが降りかかるうとする様子はない。

サラは怪訝な顔をしながら、再びトリガーを引く。

やはり、画面の向こうから流れくる映像に変化は現れない。彼の

レースは無事に続いている。引き続き、なんども引き金を引くサラのその姿を、アリスは鼻で笑った。

「おまえ、何をした……」

何も起こらないことに苛立ったサラがアリスをにらむ。いままでの余裕はそこにはない。五反田兄妹はすみそうになっただが、アリスは平然と言った。

「なにもしてませんよ。細工を施す時間も、ダミーを用意する時間もありませんでしたから。あなたに手渡したコントローラーは間違いなく本物です」

「なら、どうして……」

「からくりが知りたいですか？　そうですか。でも、ここからは有料です。私の口座に300万振り込んでいただけたら、教えてあげましょう。ほら、近くにATMがありますよ。行ってきなさいよ」

「このクソおんな……調子に乗って……ッ」

サラは怪訝な顔を怒りに替えた。肩で息をしながら、使えないリモコンを五反田兄妹とアリスに投げつける。蘭と弾はとつきにしゃがんでやり過ぎし、顔を見合わせた。

「なんで何も起こらなかったんだ」

「わ、わかんない。わかんないけど……」

蘭がアリスの顔を見る。彼女はこうなることをわかっていた、それだけは理解できた。だからこそ、自分に「リモコンを渡せ」と言ったに違いない。これは幸運がもたらした偶然じゃなく、アリスがもたらした必然なのだ。

「すごい人……」

蘭は心の底から思った。いまなら理解できる。一夏が云った「器量」の意味を。

器量とは、物事を成し遂げるために、知力と胆力を兼ね備えていること。アリスにはそれがある。だからこそ、サラと言う相手をして、これほどにも立ち回れる。

「まあいいわ。こうなったら、私が直々に葬ってあげる。まずはおまえらをズタズタに引き裂いてやるわ。その首を持って、あの男を殺

す」

サラは低く笑いながら、〈ヴェルフエゴール〉を展開した。

ISのコアを停止させる〈ヴェルフエゴール〉なら、これ一機で会場を襲撃しても事を成せるだろう。

しかし、アリスは肩をすくめ、不敵な笑みを浮かべた。

「舌舐ずりにはじまり、小物のような物言い。挙句、自暴自棄のような行動。かませの三冠王ですね。だからあなたは三流なんですよ。――」

「なら、その三流に屈服させられる屈辱を味あわせてあげる」

サラは展開したマニピュレーターを開き、その先端に備わった鋭いクローをアリスに振り翳す。

蘭は思わず顔を向けた。

しかし。

肉がつぶれる不快な音は聞こえてこなかった。

蘭が恐る恐る目を開け、様子を伺う。サラが放ったクローは、アリスの鼻先50センチ手前で停止していた。あたかも全身が氷漬けになったように。

蘭は二度三度まばたきをし、サラは何度目になるかわからない忌々しげな顔を作った。

「AIC……。シユヴァルツエア・レーゲン……。か」

「半分正解で半分ハズレです。その上位互換ということですから」

アリスが言うと、森林の奥から機械仕掛けのオオカミが現れた。

冥府^{ヘル}の支配者が飼い従える犬型自動人形《ガルム》だ。

ヘルヘイムの番犬は猟犬のように唸り、サラを威嚇していた。その後方からコツコツと足音。深緑の奥から現れたのは、全身を金のロブドレスにつつま、とんがり帽子をかぶった魔女。

「サラア、ひさしぶりね」

武装魔女はとんがり帽子をくいっと上げて、顔を見せた。

「スコール・ミューゼル……。〈砂漠の逃げ水〉の戦乙女ツ！」

蘭は喉のつかえが取れた気がした。ヴァルキリー。世界に四人しかない最強のIS操縦者。

蘭は思わずアリスを見る。——こんな隠し玉まで持っていたなんて……！

「ふん、へヴァルキリー」を味方につけて勝ったつもり？　こんな拘束、もって数十秒よ。それで何ができる！」

「そうですね。高々くヴェルフエゴール」の動きを止めただけ。急場しのぎに過ぎない。数秒後にはくヴェルフエゴール」の能力がくヘル」を無力化するでしょう。でもね、三流相手なら、倒すのに10秒も要らないですよ」

「私を10秒か!?　やってみなさい」

「なら、やってあげましょう」

アリスはすつと右手をかざす。そして、かざした手を号令のごとく振り下ろした瞬間、

それは上空より舞い降りた。

雪のような白銀の刃。武者を彷彿とさせる意匠。鬼を模したかのような二本の角。

雪羅の名を冠する織斑千冬が有する専用機く暮桜」。それを駆つた千冬が、く暮桜」の《単一仕様能力》たる《零落白夜》を発動し、くヴェルフエゴール」に決殺の一撃を突き立てる。

「鬼からの手向けだ。こいつを持って地獄に落ちろ」

サラは後方へ躲そうとするも、くヘル」のA I Cにより身じろぎひとつできなかつた。

《零落白夜》をまとつた《雪片》は絶対防御さえ貫く決殺の一撃。いかなるISだろうと、これのまえでは、一撃必殺を逃れられない。それはくヴェルフエゴール」でさえ例外じゃなかつた。ビルの重量にも耐えた強度も、六連装のパイルバンカーさえ跳ね返した防御力も、その一撃の前では薄氷に等しかつた。

《絶対防御》を破り、装甲を貫いた一撃が、くヴェルフエゴール」の主要部に至り、それを停止せしめる。主要部をやられた怠惰の悪魔は、力なく自然公園の地に伏せた。

「《零落白夜》。相変わらず、恐ろしい能力。それをあなたが持つと、まさに鬼に金棒ね」

スコールが、かつての戦友にこわいこわいとおどけるように言った。

「ふん、《零落白夜》ありきの私と互角に戦ったおまえやアーリイ、ジェニファーも相当な化け物だと思うがな。さて、《同窓会》はここまでにしよう。――起きろ、サラ・ウエルキン」

地獄にこそ落ちなかつたものの、失意のどん底に落ちたサラを、千冬が無理やりに立たせる。

「な、なにをやる気よお……」

サラの表情は恐怖に染まっていた。

アリスは言った。自分はあるたと同じ側の悪党だと。このまま警察機関や保安機関に受けた渡されるわけがない。自分がしたことを考えれば、これからどんな報復を受けるか、火を見るに明らかだった。「ほら、行きなさい。裁きの時です」

アリスに背を突かれ、よたよたと覚束ない足取りで歩かされる。差し出されたサラを待っていたのは、深呼吸して構える蘭だった。蘭は「せいっ」と飛び上がり、上段回し蹴りをサラに放った。祖父仕込みの一撃が、サラの体を空中できりもみさせる。そのままサラは大破したくヴェルフエゴールにぶつかり、もたれかかる形で動かなくなつた。

蘭は「ふうー」と構えを解く。そして、最後に兄が気絶したサラに近寄り、

「俺からはこうだー」

仕返しとばかりに胸をふにと触る。女性陣からは苦笑いがもれた。

「もうおにいったら……」

気を失った女性を辱めるとは、同じ女性として頂けない。だが、サラが彼にしたことを思えばかわいらしい仕返しだろう。女性から苦笑い以上のお咎めはなかった。

「さて、裁きの鉄槌も下ったことですし、彼女とくヴェルフエゴールを回収しましょう」

一撃で仕留めたが、それでもへヴアルキリー二人がかりである。く

ヴェルフエゴール>は、やはり危険なISなのだ。運用の仕方次第では、サラの言ったとおり一機で会場を壊滅させることもできたろう。再び敵の手に戻る前に封印した方がいい。

そのつもりでアリスが<ヴェルフエゴール>を回収しようとした、その時だった。

見渡せる海から金属が軋むような雄叫びがこだました。

「なんだ！　なんだ！」

弾が戦き、激しく周囲を見回していると、海面が大きく盛り上がった。その中から途轍もなく巨大な物体が出てくる。丸みを帯びたフォルムと、鰭のような手と足は生物的であつたが、光る二つのアイは電子的な光を放っている。これは――

「メタルギア……ッ!？」

突如として現れた巨大物体に向かってアリスが叫んだ。

「メタルギアってなんだ、この怪獣のことか!？」

「怪獣じゃありません。二足歩行型の新型戦車です」

「戦車!?　おもいつきり海中から現れたぞ」

「こいつは水陸両用なんですよ。海軍のアーセナルシップ計画と共に進められていた――」

「説明はあとよ、くるわッ」

その生物とも機械とも見て取れる正体不明物体は、海上が飛び出したり、腹這いでこちらに向かってきていた。森林をなぎ倒し、陸を板チョコのように砕きながら迫ってくるさまは、さながら怪獣だ。

「いそげー」

生身のアリスと五反田兄妹をかばいなら、千冬が<暮桜>でこちらに向かってくるメタルギアを堰きとめる。スコールも加わるが、なんせ質量が違い過ぎた。踏ん張った脚部が地面に沈んで、踏ん張りがきかない。

「なんで、アメリカ海軍の秘密兵器が私たちを襲ってくるッ」

「いえ、海軍のものじゃないわ。所属を表すマリーンズのステンシルがないもの」

ならば、誰が差し向けたものか。――その答えはメタルギアが向か

う先にあつた。二人の「ヴァルキリー」を口先で払い除け、巨大な二足歩行兵器が向かったさきにあつたのは、サラと「ヴェルフエゴール」。

「……ん、んう……。な、なに……ッ!?!」

金属の雄叫びに目を覚ましたサラが、眼前のメタルギアを見上げて戦く。

メタルギアは横開きの口を広げ、サラをついばんだ。

——喰う気だ。

「ちよつと、いや、やめて、いやあああああッ」

木霊す絶叫など構わずメタルギアがサラもろとも「ヴェルフエゴール」を喰らう。そして、空を仰いで咀嚼し、喉を鳴らして飲下した。「ヴァルキリー」ですら言葉を失う壮絶な光景だった。

「うそでしょ」「I Sを食ったのか……」

やがて、「ヴェルフエゴール」を胃に収めたメタルギアは、地盤を砕くほどの背面跳躍を以て、海面へ飛んだ。そして、津波と見間違うほどの水しぶきを立て、海中へ消えていく。

アリスは水際まで走り、海面を見下ろした。メタルギアの姿はもう確認できなかつた。すかさず「ウォルラス」に通信を入れる。「ウォルラス」に追撃を依頼するアリスの横で蘭が言った。

「あの人、どうなったんでしょう……」

飲み込まれたサラがどうなったのか。それはアリスにも検討がつかない。生きているか、死んだかさえ。ただ人が機械に生きてまます食われる光景は凄惨そのものではあつた。

「すかねえ奴だったけど、さすがに同情するぜ」

アディオス。そんな具合に、ぴつと指を投げる弾。

最後に「おまえの乳だけはわすれない」と言った兄へ、調子が戻ってきた蘭が肘打ちをかます。「うおお」とうすぐまる兄をさしおいて、蘭はアリスを見た。

「にしても、なんで何も起こらなかったんですか」

なぜサラの作戦は失敗したのか。解せない表情でアリスを見る。

「悪いですが、詳細は語れません。ただ私から言えることは、彼女の悪

事は計画の段階からこちらに筒抜けだった、ということですよ」

そう言つて、アリスはスコールに視線をやる。彼女は誰かと話している様子だった。「ええ、おつかれさまレイン。事はこちらで処理したわ。引き続き、気を付けてね」そんな会話が聞こえてくるが、不発だった事とどう関係あるのか、弾には分からなかった。

「さて、追撃は仲間がしてくれるようです。私たちは会場にもどりましょうか。いまからなら、終盤ぐらい観戦できるかもしれません」
「そうですね。でも、席は4つしかあいてないわね。アリス、私の膝にくるん？」

「結構です」

「よし。じゃあ、蘭、お兄ちゃんの膝の上にくるか！」

「絶対いや」

千冬はくつくと笑つて、「私は立ち見でいい」と言った。

第87話 Zips

〈キャノンボール・ファスト〉レース終盤。俺たちチームは二位の位置につけていた。

半人前の俺を抱えながらも、整備クルー（簪や篝火さん）の迅速な整備と補給、そして月子のがんばりもあって、序盤からなんとか順位を落とさずにすんでいる。このままいけば表彰台を狙えそうだったが、はやばやこの一時間、トップの入れ替えは起こっていない。つまり、中盤からジェニファーさんが先頭を独占しているということだ。

俺も先頭をいくジェニファーさんを追い抜くことができず、国家代表の月子でさえ、〈ナインテイル・フォックス〉の特性に苦戦して攻めあぐねている。いや、〈ナインテイル・フォックス〉の特性だけじゃない。パイロットの操縦技術、そして長年培った経験と勝負勘。全ての要素が相乗効果となって、壮大な強敵として俺たちのまえに立ちただかっていた。物理的距離はそう離れていなくても、俺たちは大きな隔たりを感じている。

ほとんど打つ手がなく、このまま逃げ切られる気がしていると、モニター越しに篝火さんが言った。

『一夏くん、気を付けて。そろそろ代表が動くとおもうさね』

簪がカメラを持って他ピットの様子を写した。

各ピットの待機スペースには、鈴、シャルロット、ラウラ。候補生たちの顔が並んでいた。

『いままで後方で戦力を温存していた代表が勝負をしかけるみたいなのさ』

『……それに彼女も……』

簪が流し目で英チームを見やる。ピットに置かれたアンテイクテーブルではセシリアが紅茶をたしなんでいた。イギリスの国家代表の姿がない。ローズマリーさんが動いた。

『……気をつけて。イギリス代表の実力は〈ブリュンヒルデ〉に並ぶ』
ひとつのフィールドにブリュンヒルデ級が二人。

俺が、戦況が厳しくなることに気を張り詰めると、肩の〈ホワイト

クイーン」が振り向いた。

《だーりん、来ました》

〈白式〉のハイパーセンサーが、後方から苛烈に追い上げてくる一機のISを捉える。

蒼い蝶を模した意匠。イギリスの第三世代型〈サイレント・ゼフィルス〉だ。

〈ストライクガンナー〉と同じく強襲と一撃離脱を目的したその機体は、蝶の羽を思わせる大出力型のスラストターボをフル活用して、順位を上げてくる。

簪の目測だと、〈サイレント・ゼフィルス〉の推力は〈ブルーティアーズ〉の1.5倍と、参加機体の中でもトップクラスの速さだ。単純な速さでは〈白式〉も負けていないが、いかんせんパイロットの技量が違う。千冬姉と互角とも持て囃されるその実力、専用機の速力で、ローズマリーさんがいままで保持したリードをことごとく詰めてくる。

500m、400m、300m、200m、100m。そして『きたッ』とOSガジェットがプラカードを掲げた瞬間、俺は前後を入れ替えて《雪羅》の対エネルギーシールドを展開した。

「やりますね。ならば——」

言うなり《スターブレイカー》が先端から二つに割れる。〈サイレント・ゼフィルス〉は、敵地を強襲して、一撃で殲滅することを目的に開発されている。そのための、バースト射撃が俺へ向けられた。

俺は再び《雪羅》の対エネルギーシールドでそれを防ぐ。すると、〈サイレント・ゼフィルス〉はバースト射撃を行いながら瞬時加速を発動した。そして大出力の攻撃と爆発的な加速を以てこちらへ一気に接近し、《スターブレイカー》に装着された銃剣を《雪羅》の掌底に突き刺す。

《だーりん、粒子加速器、クラスA損傷。対エネルギーシールドクラスB損傷。荷電粒子砲と対エネルギーシールドがつかえなくなったですッ》

《雪羅》を失い、ホログラムの〈ホワイトクイーン〉が飛び上がる。

俺も悪態をもらした。くそ、主要武装がッ！

『一夏君、ここは戦闘を回避して、イギリス代表に順位を譲ろう』

「そんなこと……」

『相手が悪すぎる。このままだと完走どころかリタイアさせられない。彼女の本命は一位を独走するアメリカ代表のはずだから、ここで大人しく順位をゆずったって三位ぐらいにはなれる。表彰台は登れるよ』

確かに順位をゆずり、後方へさがれば表彰台は登れるだろう。

それは利口な選択だ。だが、俺は賛成しかねた。

「俺は戦います。この順位はゆずりません。二位や三位は、一位に成れなかった奴がなる順位なんです。三位や二位でいいやなんて思っているうちは表彰台なんか上がりませんよ」

相手が強大なことは理解している。戦わない選択をするのも間違っていない。だけど、ここ一番という局面で戦わずして逃げていたら、このさき得られるものは何もない。戦わない者に栄光はないんだ。

「それに俺はあいつと約束したんです。優勝するって！ 戦わないままこの順位を譲ったら、俺はあいつとの約束を破ることになる。簡単に約束を反故しちまうような軽い男に俺はなりたくないんだよ！」

火花を散らす《雪羅》の先にいるイギリス代表へ、俺は優勝の執念をぶつける。

ローズマリーさんは《雪羅》に突き刺した銃剣を抜き、〈白式〉の腹部を一蹴した。バランスが崩れたすきに、彼女が俺を追い越していく。そして、俺に背を向けたまま、こう言った。

「あなたの優勝にかける熱意はしかと耳にしました。ならば、私がジエニフアー・j・フォックスのところまであなたをエスコートしましょう。ついてきなさい」

体勢を立て直した俺は、意表を突かれた。

「どういうつもりですか……」

「あなたは約束した。アリスに優勝すると。しかしながら、『俺が守る』などと大言壮語を吐きながら、約束の一つも守れない男を私は多

く見てきました。女尊男卑の言葉を借りるわけではありませんが、口ばかりの男性が多いことも事実です。あなたが彼女との約束を守れるか、あなたが口先だけの男でないことを、私に見せてみなさい」
優勝する気概が本当なら言葉じゃなく行動で示せと。

そのチャンスを俺にくれるっていうのか。

「乗るか、乗らないかはあなたの自由です。ですが、大事なのは『守る』ことじゃなく『守るために何をすべきか』です。『仲間は俺が守る』などとのたまう人間ほどなにもしない。理想を理想で終わらせないために、あらゆる手段を講じ、利用できるものはすべて利用する。それぐらいの気概がなければ、いまの世の中にも守れません」

外聞や恥を忍んで守り抜けるものなど、今の世の中にはない、か。本当に大切なものを守りたいなら血汗を流し、泥水をすするぐらいの覚悟と意志が必要。是が非でも約束を守りたいなら自分さえ利用してみせろ、と。

でも、なぜ彼女は俺のためにそこまで……

「私はローズマリー。『ローズの家』^{ローデシア}で生まれたメアリーの子」

独語のようにつぶやかれた言葉に、ホログラムのへホワイトクインが付け加えた。

《『ローズの家』はセシル・ローズが大英帝国から独立するときに掲げた国家。いまのジンバブエ共和国です》

俺の中で彼女が力を貸してくれる理由が腑に落ちた。

そうか。彼女が機会を与えてくれたのは、俺のためなんかじゃないんだ。

「……わかりました。感謝します」

俺はくサイレント・ゼフィルスへの後方についた。彼女に先導される形でくニンテイル・フォックスに肉薄する。ジェニファーさんは待ちわびたように微笑んだ。

「ようやく追い付いてきたわね。待っていたわよ、弟君」

彼女の九本の尾が鞭のようになる。それをローズマリーさんがシールドビットを展開して防ぐ。さらに的確な読みでしなる九尾をしのぎつつ、《スターブレイカー》の引き金を絞る。

「いまでも、行きなさい——」

「はいっ！」

ローズマリーさんが九本の尾を封じ込めているすきに、瞬時加速で一気に肉薄する。そして、《雪片式型》を展開して＜ナインテイル・フォックス＞に斬りかかった。

ジェニファーさんは《雪片》を展開して、俺の攻撃を受け止める。似て異なるふたつの刃がぶつかり合って、火花を散らす俺たちの背後で、ローズマリーさんは後進射撃で追いつけてくる国家代表を「彼の邪魔はさせない」とけん制した。

「私は後方の追い上げ組を押さええます。あなたはジェニファー・J・フォックスを」

「はい」
「私のままで、アリスとの約束を果たしてみなさい。——では、武運を」

俺は意識を前方に集中して《雪片式型》を翻す。袈裟斬り。ジェニファーさんは姉妹刀で弾く。

「いい太刀筋だわ。現役時代の千冬を思い出さされるわね。だけど、私を斬るには拙い」

切り替えて一閃。反撃のひとつ太刀にひるみ、俺は速度を落とす。やはり簡単に一太刀あびせられるような相手じゃないか。なら——

「へホワイトクイーン＜、ズアレ＞をやるぞ」

俺は体制を立て直し、再び《雪片式型》を構える。そして間合いを詰めることなく振り翳した。

「この距離から？」

あきらか近接戦外からの剣撃モーションに入る俺を見て、ジェニファーさんが訝しむ。

チャンスだ。俺は10m以上開いた間合いを無視して、刃渡り2mあまりしかない《雪片式型》を振り切る。どう考えても近接戦外からの、あたるはずの無い攻撃はしかし、ジェニファーさんのシールドを斬り裂いた。

「あらっ」

いつの間にか眼前に迫っていた俺に、驚いた顔を見せる。確かに太刀筋の間合いの外にいたはずなのにと。

「瞬時加速……？」

そうだ。その実態は瞬時加速だ。ただし、通常チャージ時間を可能な限り短くし、なおかつ速度を極限まで上げたことより、相手に接近を悟らせないほどの瞬発性を持った特別な瞬時加速だ。

《名づけて、雪片式型——縮地の太刀》

ホログラムの〈ホワイトクイーン〉がどうだと指を突き付ける。

「なるほど、縮地法ってやつね」

相手との距離を瞬時に詰める術——縮地。その域へ至れたのは、〈白式〉が第二形態なったことで、瞬時加速のチャージ時間が3分の1になり、速度が二倍になったおかげだ。逆をいえば、縮地は〈白式・雪羅〉にしかできない特別な瞬時加速だともいえる。つまり俺だけのとっておき、必殺技だ。しかしだな、〈ホワイトクイーン〉「そんな技名、初めて聞いたぞ」

《いま名付けたのです！》

ドヤる〈ホワイトクイーン〉。のりのりだな、おい。

《そして縮地か〜ら〜の〜》

おい、こつちにも発動のタイミングつてもんがだな、ああ、もういい！

「いくぞ、〈ホワイトクイーン〉！」

《Yes my darling——雪片式型・無拍子の太刀》

俺は縮地で詰めた間合いを活かし、独特のテンポで踏み込む。ゼロ拍子。相手のリズムを崩す攻めで俺は苛烈に〈ブリュンヒルデ〉へ斬りかかる。一閃、二閃、三閃。連続的に打ち出す斬撃を、ジェニファーさんは《尾》を自身の体に巻きつけ、鎧化してしのいでいく。だがエネルギー体であるがゆえに、鎧は《雪片式型》の一撃ごとにもがれていった。

さらに四閃、五閃、六閃。これで尾の鎧も残り3本。《エネルギー無効化攻撃》の連続使用でこちらのエネルギーも心許なくなるが、これ

ならいける。このままいけば〈ブリュンヒルデ〉を倒せる！

「ふふ、VTシステムの時とはくらべものにならないほど成長したわね、弟くん。初めて相対したあるとき、あなたは、姉の威光に甘え、白式の力を過信していた。けど、いまはあなた自身に力強さが感じられる。——きつといい人に巡り会えたのね」

いつもの飄々とした表情じゃなく、慈しむような、それでいてうらやむような表情で彼女は言った。

「思う人がいると人は強くなるものよ。私はそんな人に巡り会えなかった。だからなのかしら。いま私は自分の強さに限界を感じているわ。そして、それを超えられないでいる。けれど、あなたは違うわ。あなたはもつともつと強くなれる。あなた自身、自覚しているんじゃない？」

「はい、俺は自分の中にある可能性を確かに感じています」

アリスが背を押してくれるなら、俺はなんにでもなれるし、きつとどこへでも行ける。

そして、どんな強大な壁にも乗り越えられる。

ブリュンヒルデ
世界最強を倒すことだって。

九連撃を放ち終えた俺は、無防備になった彼女へ最後の―撃を繰り出した。

「——だからといって、簡単にこの場所をゆずりはしないけれどね」

その瞬間——繰り出した《雪片式型》の刺突がスーツとジェニファーを透り抜けた。

まるでそれが夢幻だったかのように。唐突にジェニファーさんを見失った俺は呆気にとられた。

「どうしたの、狐につままれたような顔をして。——」

それは頭上から聞こえた。〈ナインテイル・フォックス〉は頭上にいる？

「《単一仕様能力》、千冬と戦うためのとっておきだったんだけどね。でも、千冬の弟なら使ってもいいかしら」

次は正面から聞こえた。

《だーりん、センサーに複数反応ッ！》

ホログラムのへホワイクイーン」が仕切りに周囲を見渡す。俺も同じように辺りを見渡した。

「どういうことだ。いくつもジェニファアーさんが見えるぞ」

「そう」「人も電子機器も化かす能力」「それがくナインティル・フォックス」の「《単一仕様能力》」

最後は背後から聞こえた。

振り向くとそこには印を組み、《狐窓》を作るジェニファアーさんがいた。それにOSガジェットが目をぐるぐるまわしながら「トラウマきた……」と看板を上げる。トラウマって、そうか、臨海学校で福音と戦ったときの。

《だーりん、《窓》に高エネルギー反応。相転移砲です》
「くっ」

咄嗟に対エネルギーシールドを展開しようとするが、破損していることを思い出す。

くそ、防ぐ手がない！

「世代交代は旧世代を超えて初めて起こるもの。限界を超えられない私を超えていけないなら、まだまだ《雪片》の担い手にはなれないわね、弟くん」

窓から放たれた閃光から身を守るため、俺は咄嗟にウイングスラスターで機体を包むが、防御用ではないため、それはほとんど楯の役割を果たさなかった。

《だーりん、右スラスター全損！推力50%低下》

片翼をものがれ、速度が一気に落ちる。失速し続ける俺はもはや最後の直線スパートに向かう《ブリュンヒルデ》を見送ることしかできなくなっていた。

く、ここまでかよ……。

約束を果たせず、自分の力不足に打ちのめされる。そのとき、観客席からひとときわ大きい声が上がった。

アリスだ。

隣にはいままでいなかった、弾と蘭、そして、スコールさんと千冬姉もいる。

「一夏、いまのあなたならへブリュンヒルデに手が届きます！ 諦めるな！」

マイクもないのに、彼女の櫛はよく届いた。そう、心の奥底まで。それが失われかけていた闘志に再び火をつける。同時に言葉の真意を俺は理解した。

「そうだ、まだ手は届くっ！——へホワイトクイイイインっ！」

《Yes my darling!!——“雪羅”有線射出ッ!》

へホワイトクイーンが叫び、く白式への多目的武装腕を有線で発射する。そしてクロームモードでくニンテイル・フォックスへの《尾》、その発生装置を鷲掴にする。

「あら、おんなのおしりを鷲掴みにするなんてエッチね」

「掴んでおけばこれでもう化かしようもないでしょう。——って勝利への執着と言ってください」

俺はくニンテイル・フォックスにく白式を牽引させながら、徐々にワイヤーを巻き取り、引き離された距離を埋めていく。なんとか、ゴール目の土壇場で、俺は再び併走に持ち込んだ。優勝の芽はまだある！

「へホワイトクイーン、GPLをマックスに設定。右翼の供給カット。出力すべて左スラスターに回せ！」

《Yes my darling——GPLマックス。左翼スラスター出力200%。オーバースピード!》

〈警告：推進器の過負荷により熱暴走および火災発生〉
《熱い展開です。燃える展開です。いろんな意味で!》

実際スラスターからは既に火が出ている。少女のウサギ耳にも火がついていた。それでも少女はOS画面内で懸命にスラスターに消火剤を吹きかけていた。そのかいあつてか、停止にはいたらず、なんとか速度だけは維持できた。

ゴールまであと直線400m。俺はジェニファーさんと併走しながら、残りのコースを走る。

残り300m。わずかにジェニファーさんが抜き出る。

残り200m。俺が抜き返す。

残り100m。両者が並ぶ。

残り0m。俺たちはすべてを天に任せて、吠えた。

「てああああああ」
「うおおおおおお」
《うりやああああ》
ゴール。俺たちは赤外線のリレーをまったく同時に切った。どっちが勝ったかは俺たち本人にも分からない。まさに死力を尽くしたデットヒートだった。

俺は転がるようにゴールするなり、＜白式＞の全機能を急停止させた。そこへ慌てて整備クルーたちが消火器を持って駆けつけてくる。

「いや、久々に興奮したよ。正直イっちゃ——ごっつ」

「……白けるからやめて」

駆けつけてきた篝火さんに簪が肘打ちをかます。

俺は月子の手を借りて＜白式＞を外した。

「一夏さま大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。＜白式＞には相当無理をさせちゃったが」

「……大丈夫。これぐらいなら直せる。——……それより結果だけど」

「どうだった」

「すごく僅差で、ビデオ判定らしいで！」

月子が興奮覚めやまぬ様子で言った。

そっか、俺たちですらどっちが勝ったか分からなかったからな。

〈ビデオ判定が出たようです〉

アナウンスがそう告げると、設置された大型モニターにゴールの瞬間が映し出された。

映像でも差は見受けられなかった。

奇跡としか思えぬほどの綺麗な同着。けれど、一点だけ、ジェニファーさんのある部分が俺より先にゴールしている箇所があった。

それは女性の象徴たる、乳房。

彼女の並々ならぬ巨乳が一番にゴールラインを切っていた。

へさすはGカップといったところでしょうか。映像で見ると限りではジェニファー・J・フォックス選手のおっぱいが織斑一夏選手より先

にゴールしておりますが。これは判定としてはどうなのでしょう。おっぱいは正義といいますが

「正義かどうかはともかく、乳房は女性の一部と言っているいいので、これはジェニファア選手の優勝と——」

く、やはり、そういう判定がくだされるのか……。

こんな形で負けると思いもよらなかった俺たちチームはひどく脱力した。

『いや、待て!!』

俺が悔しさのあまり会場の地面を殴りつけていると、会場の一角から大きな声が上がった。

発言者は俺の姉——千冬姉だ。

『ビデオ映像をよく見てみる。画面の右上だ』

千冬姉が観客席から会場にそう異議を申し立てる。

マイクを使わずとも会場に響き渡る音量と口調で、会場の観客と実況・解説、そして選手が一堂に指摘されたビデオ判定の右上を確認する。

『あ、右上のビデオ判定の文字がビデオ判定になっているわ!』

『違う! そっちじゃない。もうすこし下の方、織斑の右上をもっとよく見てみる』

言われて会場が映し出されたビデオ映像をもう一度凝視する。

すると、ジェニファアさんより先にゴールしている小さい「何か」がおぼろげながら確認できた。純白の髪。純白のドレス。少女のような容姿。まさかこれは——!

『妖精か!?!』

解説実況が叫ぶ。

『UMAか!?!』

会場が叫ぶ。

『いや! 違う!! これは——』

出場選手たちが叫ぶ。そして、日本チームが叫んだ。

『へホワイトクイーンだあ!!』

そう、ビデオ判定映像に映っていたのは、ホログラムによって映し出されていたホワイトクイーンだった。その彼女がヘッドスライディングで、ジェニファーさんより先にゴールしていた。

『まさか、これは織斑選手の専用機に装備されているAIが、一番にゴールしていたとは。しかし、これはどうなのでしょう。再び審議に入る模様です』

千冬姉の指摘によりビデオ判定は再度、審議に入る。

優勝はおっぱいか、人工知能か。異様な審議討論で会場がガヤつくなか、俺たちは祈るような気持ちで結果を待つこと10分。ついに審議の結果が報告された

『お待たせしました。審議の結果。人工知能は白式の一部であるという判断が下りました。すなわち、先にゴールしたのは織斑選手となり、よって、今回のヘキャノンボール・ファスト∨フォックス杯の優勝は——織斑一夏選手率いる、日本チームとなります！』

告げられる優勝の言葉。会場はココ一番の盛り上がりを見せた。『おお、やりやがった』『世界一を負かしやがった』『初出場で、優勝だよ』湧き上がる歓声と熱狂を浴びて、俺は数瞬遅れて、おぼろげながら事態を飲み込んだ。

「俺たち、勝つたのか……?」

《Yes!! Yes!! my darling!!——わたくしたちの優勝ですよ!!》

「おお、やったじゃないか、一夏くん!! 優勝だよ、優勝!! 賞金3000万!!」

「……すごいね、初出場なのに。おめでとう」

「ふへえ……ほんまにようやったね。うち泣けてきた」

簪、月子、篝火さん、そして整備クルーたちに囲まれ、胴上げされながら俺はふと観客席に視線をやる。そこでは弾と蘭、千冬姉、スコールさん、そしてアリスがいて、親指をぐっと立てていた。「よくやった」と。

俺も胴上げされながら、親指を立てる。俺はようやく彼女がいる場

所に一歩近づけた気がした。

第88話 16歳の君へ

午後6時。へキャノンボール・ファストの表彰式と閉会式を終えた面々は、俺の家へと集まっていた。友人がココで俺の誕生会をやるというからだ。そのために集まった面々がリビングの天井に向けてクラッカーのひもを引く。

『一夏、おめでとう』

弾けるクラッカーの音とシャンパンのコルクが飛ぶ音。そして、祝福の言葉が部屋を飛び交う。その言葉には誕生を祝うだけじゃない、へキャノンボール・ファストの優勝を祝うことばも含まれていた。

俺は「おう、サンキュー」と祝福を受けながら、なぜかぽかんと口を開く主催者をみやった。

「どうした、おまえら」

「いや、おまえの顔の広さにビビってるだけだ。なんだよ、このインターナショナル感」

そういつてリビングを埋め尽くす客人を「見てみる」と指さす。リビングにはもともと参加予定だった筈たちをはじめ、チームメイトの簪と月子、出場選手のジェニファーさんや、フーさん、ノエルさん、アイリーン、アンジェリカさんといった各国の代表までもが顔を並べている（ただローズマリーさんだけ俺に「よくやりました。おめでとう」とだけ告げて、参加はしなかった。別件の仕事が残っているらしい）。

というわけで、決して広くないリビングは、美女たちで満員状態だった。

これには企画者（弾と数馬）も圧倒されたようで、

「企画した俺らがいうのもアレだが、さすがにこれだけの美女美少女がそろうと思わなかったぜ」

「さすが希代のモテおとこだぜ、おまえどこの異世界から来たよ」

「いや、俺は転生してきたわけでもなけりゃ、神様からチートも貰ってねえよ。今日のことを話したら、みんな行くってさ。なんかまざったか？」

確かにこの人数じやりビングでも手狭だし、用意した食い物も足りなそうだけど。

「いやいや、問題ないぜ、一夏くんよ。な、弾」

「おう、やっぱり持つべきものはモテ男だな。で、数馬、おまえは誰いくよっ。」

言うなり、舐めるようにリビングの女の子を見て回る。

こいつの目的は誕生会を出汁にIS学園の女の子と知り合うことだったな。

「弾、俺は、——あのパツキン巨乳美女を狙おうと思う」

「マジかよッ」

すらつと長い姿態。大きな胸。大人の色気を漂わせる異国の金髪美女を見た弾が戦く

数馬が狙い定めた人物は、アメリカの国家代表であるジェニファーさんだ。

「確かに金髪の年上美人にはあこがれるけどよ、あいては外国人だぞ。童貞のおまえには難度が高すぎだろ。竹やりでB29に挑むようなもんだぞ。いつそ、Give Me chocolate!!してこいよ。おこぼれぐらいももらえるかもしれねーぞ」

「うっせーな。俺の竹やり（意味深）を甘く見るな」

竹やりであることは否定しないのか。

「よし、御手洗数馬一等童貞、特攻いたします！」

しゅぱつと出兵まえのように敬礼し、数馬はリビングでくつろぐジェニファーさんの許に向かっていく。残した言葉はあからさま玉砕の言葉だったが、俺たちは彼が生きて帰ることを祈りながら、その様子を見守った。

さて、どうなるか。一応、ジェニファーさんに特定の男性はいないらしいけど。

「え、えっと、は、はろー、ないすと、みーちゅー まいねーむ、いず、かずま」

「Oh Kazuma. Hello. Are you a I
TIKAs friend?」

あなたは一夏の友達かしらだったよ。

「えっ……?」なんてきよどつていないでがんばれよ。中学生レベルの英会話だぞ。

「えっと、あいむ、あいむ……」

「I m m?」

「I m fine thank you!! (ぼくは元気です!)」

うわ、数馬の奴、結局、自分の健康状態を告げて帰ってきやがった。

「わすれてた。俺、英語で赤点とってたんだった」

「じゃあ、なんでアメリカ人を口説こうと思ったんだよ！ 身の程を知れよ」

「いや、愛があれば、言語の壁も越えられるかと……」

「おまえ、愛を語る前に、Iで語れてねえからな……」

「うまいこと言ったな。つか、あの人、普通に日本語しゃべれるぞ」

「一夏 おまえ先に言えよ！」

うわ、いきなり襲ってきやがった。こいつ、誕生日を俺の命日する気か。

「なにがI m fineだよ！ 俺は元気か！」「まあ、それだけ怒鳴れば元気だとおもうが」なんて俺と数馬が取っ組み合いをしていると、そこに鈴とフリーさんがやってきた。鈴の手には包装された小箱。それを片手で弄びながら、玉砕した数馬を鼻で笑う。

「なに、数馬、またいつもみたいになンパに失敗して一夏にあたってんの？ ばかねえ」

「おうおう、これはこれは万年片想いの鈴さんじゃねーですか」

瞬間、鈴の手刀が数馬の首を襲った。なんて速さだ。俺じやなきや見逃してたね。

「いつてえーな！ なにすんだよ」

「あんたは、帰って、ペラペラな二次元の彼女とイチャイチャしてなきいよ」

「ペラペラだと、俺の嫁たちを愚弄する気か！」

「ペラペラでしょうが、次元が一個足りてないんだがら——つてうわ」

言い切る前に、皿が鈴の頭上を通過した。投げたのは、意外にもクラリツサさんだった。

ドイツ代表の整備クルーは黒ウサギ隊だったっけ。

その彼女はなぜか肩をわなわな震わせながら、なにかを強く訴えかけていた。そのうしろではラウラとアイリーンがフライドチキンをうまそうに頬張っている。

「中国の代表候補生、いまの言葉、訂正していただきたい」

「訂正？ どこをどう訂正しろっていうのよ」

「彼女たちはペラペラじゃない。ちゃんと魂がある！」

「はあ!？」

「魂がある！」

「二回、言われても、意味わかんないわよ」

「魂があるなら、それは一個の尊重されるべき命です。それをペラペラしているなど聞き捨てなりません。訂正してください。していないなら、してただけるまで説得するまで」

「はあ？ 説得って何をやる気よ。いきなりDVDなんて取り出して。——ちよつとラウラ、あんたの部下が意味不明な行動に出てるだけど！」

頬張っていたフライドチキンを、ラウラは早口で飲み下し、

「——クラリツサ、健闘を祈る」

「健闘を祈るじゃないわよ！」

「あい、ママ。——では、中国の代表候補生。私が彼女たちの良さを存分に語ってさしあげます」

ずずつと迫るクラリツサにすつかり引け腰になる鈴。フーさんも苦笑いだ。俺は「オタクは語らせると長いぞ」と語る二次オタク数馬のとなりで、気の毒な想いに駆られた。そんな俺の許に鈴から小箱が飛んでくる。

「それ、あたしからの誕生日プレゼント！ それと優勝おめでとう。じゃあ、あたし逃げるわ」

猫のように身を翻す鈴。俺は遠ざかる鈴に礼を云って、小箱を開けた。

中身に入っていたものは、狒犬のような置物だ。

「なんだ、こりゃ」

「これは貔貅（ひきゆう）だな」

フライドチキンにかぶりつきながら、アイリーンが言った。

「貔貅（ひきゆう?）」

「うむ、中国にいる伝説の生物だ。魔を払う力があるらしいぞ」

さすが中二病患者。伝説の生物や、幻想獣とか好きなんだろうな。

「他にも貔貅は、蓄財の神とも言われている」

そう説明を加えたのはフーさんだった。

フーさんは置物を手に取り、そのお尻を見せた。

「貔貅は金を食らうんだ、ほら、おしりに穴がないだろ。排泄を行わないんだ。転じて『お金が入って溜まるもの』として、中国ではよく縁起物として贈られる」

「へえ、そうなのか」と物珍しげに貔貅を眺めていると、セシリアがやってきた。

談笑でもしていたのか、箒と月子も一緒だ。

「貔貅の置物とは中国人の鈴さんらしい贈り物ですわね」

「ん？ セシリアはこれ知っているのか」

「ええ。その地方の風習や習慣を調べることは物売りの基本ですもの。——まあ、それはさておきまして、わたくしは英国淑女らしく、一夏さんにこんなものを用意させていただきましたわ」

セシリアが取り出したのは額に入った一枚の証明書。

表記は英語で全部を読み取れないが、大きく記されたKnightの文字が目についた。

「セシリア、それは?」

「ふふふ、爵位ですよ?」

爵位? 爵位って侯爵や伯爵の、あの爵位か?

こういうものって、功績のあった人間へ皇族やら王族が贈るものじゃ?」

「実は爵位は買えますのよ。とはいえ、買える爵位は一番下の騎士だけですけど」

「へえ、知らなかった。英国貴族から爵位を貰えるなんて、なんか感慨深いな」

「貴族制度はすでにありませんから大きな意味はありませんけど、ちよつとした待遇は受けられますわ。では、ここに署名してくださいな。あとの手続きはこちらでいたしますわ」

「おう、えつと書くもの、書くもの」

近場に何か書けるものはないかと、リビングを見渡す。

すると、箒が細長の小箱を取出し、それを俺に渡した。

「なら、私からこれを贈ろう。——中身は万年筆だ。代表候補生にでもなれば、これから何かと書類に署名することも多くなるだろう。ただのボールペンよりはカッコがつかはずだ」

箒が包装を解き、小箱を開く。万年筆にしては珍しい白色だ。

「おお、かっこいいな。ありがとうな、箒」

俺は箒がくれた万年筆を走らせ、拙い筆記体英語で用紙に名前を記入する。

書き終えた書類をセシリアが大事にファイルに閉じた。そして「ありがとな」と言った俺に、ほがらかな微笑を見せる。

「いいえ、どういたしましてすわ、サー」

Sirか。なんだか、そう呼ばれると本当に貴族になった気分になるな。

「これで一夏さまは名実ともに騎士さまになられたわけですね。じゃあ、うちからはこれを」

言つて月子が出したものは、ファイリングされた証明書が三枚。

今度はなんだと書類に目を通す。そして読み終えたあと、月子の顔を見た。月子は得意げに言った。

「これは月の土地の権利書です」

聞いた一同が「おお」と唸る。

月の土地が買えることは、俺も聞いたことがあった。だが、輝夜の姫様から月の土地をもらえるなんて、何だかお伽噺のようでワクワクしてしまう。それに「星の意味がなんとか、かんとか」であるアイリオンは、〈月〉に対抗する呪詛——とは名ばかりの見栄を発動させた。

「ふん、我とて、その気になれば〈星〉の土地をくれてやることなど造作もないがな」

「だから、おまえは1LKの社宅住まいだろ」

「あれは世を忍ぶ飯の住まいなの！ 本当は城とか持つてるもん！」

中二キャラを忘れて抗議するアイリーンを、ラウラは「くつつな」といなし、

「最後は私だな。私からはこれをやろう」

と腿もものベルトを外す。

ラウラが差し出したのは、なんとナイフだった。それをナイフケースと共に俺へ差し出す。

そこでぬつとクラリツサさんに追われていた鈴が顔を出した。

「常識の無いヤツだとは思っていたけど、寄りによってナイフをプレゼントするなんて。やらかすわね、あんた」

確かに刃物って「斬る」ものだから、贈り物としては縁起が悪いって聞くが。

「それでもないんだよ、鈴」

そう言ったのはシャルロットだった。

シャルロットはノエルさんと中庭から観葉植物を運びながらリビングに入ってきた。そして、リビングでイチヤつくアンジェリカ夫妻を「邪魔だ」とにらみ、植木鉢を適当な場所に置く。

「それはなんだ？」

「これね、一夏の誕生日プレゼントに用意したんだ。フランスには「Je touche du bois!」という言葉があつてね、不幸なことがあると木を触るんだ。すると、まわりに自分と同じ不幸がおきなくなるっていうの」

「で、観葉植物か。なんだか見てるだけでも癒されるな」

深い緑の木々は見えているだけで心を落ち着かせてくれる。

何よりシャルロットの思いやりが感じられて、俺は自然と暖かい気持ちになった。

「ありがとなシャルロット、大事に育てるよ」

「うん。——で、話を戻すけど、刃物を贈るのは悪い意味だけじゃない

よ、鈴。刃物には『災厄を払う』『未来を切り開く』っていう意味があるから。むしろ、贈り物としては縁起がいいんだ」

「確かに花嫁衣裳には必ず懐刀を忍ばせる。七五三でも子供に守り刀を持たせるしな」

「そういえば篠ノ之神社じゃ、神前挙式や七五三参りもやってたっけ。俺もお宮参りは篠ノ之神社だったって聞いたな。俺も千冬姉も柳韻さんに祝詞をあげてもらったらしい。そこから俺たちの幼馴染の関係が始まったといえる。」

「一夏くん、もし気になるんだったらコインを渡すといいよ。一般的には一番安い硬貨でいいけど、縁起を担ぐなら5 Yen コインなんてどうだい。それにリボンかなにかを結ぶといいだろう」

「縁を結ぶってことか。さすがおまじない国家フランスの代表だな。」

俺はさっそくサイフから5円玉を取出し、装飾につかわれていたりボンを結んでラウラに渡す。「うむ。確かに受け取った」とラウラは結ばれた五円をコイントスしてパシツと掴んだ。

「ふくん、刃物にはそういう意味もあるのね。勉強になったわ。異文化交流はするもんね」

「そういえば、赤騎士の待機形態もナイフだったよね。普通はアクサセサリー類がほとんどなんだけど」

俺は、贈られたナイフと彼女のナイフは同じ意味なんだろうと思う。

彼女のナイフは「未来を切り開く」その意思と願いの現れなんだ。

「で、そのアリスを見かけないんだけど」

「アリスさんなら、プレゼントの準備があるから遅れるって言ってましたよ」

途中まで一緒にいた蘭が言った。

「プレゼントの準備、か。個人的には一番気になるところだな」

彼女から『両親の居場所』をプレゼントされた筈が興味深げに言った時、リビングに新たな人が入ってきた。入ってきた人物は件のアリス——じゃなく、千冬姉だ。

「千冬、遅かったわね。弟くん大好きなあなたらしくないじゃない」
とジエニフアーさんがシャンパングラスを掲げる。

ほろ酔いなのか、頬がほのかに赤い。

「こちらにもいろいろあったんだ。いろいろな。——それにしても、見せてもらったぞ。実に無様なゴールだった。こいつ相手に乳一重とはおまえも堕ちたものだな」

「彼の実力が私を上回っただけよ。もう、素直に褒めてあげればいいのにく。ねえ、弟くん」

「え、いや、まあ」

本音を言えば、確かに褒めてもらいたいとは思う。

でも、辛辣な千冬姉のことだ。ローズマリーさんの協力もあつたし、あまり期待をしないでいたが、千冬は俺のところに来てきて、頭をわしわし撫でてきた。

「そうだな。一夏、強く、そして大きくなったな。いまのおまえならすべてを語れる」

俺は直感的に千冬姉が何を語ろうかわかった。

ずっと俺たちの間で暗黙の了解だったタブー。——俺たち家族のこと。

「おまえに会わせたい人物がいる。入ってきてくれ」

千冬姉は玄関の方に視線をやった。入ってきた人物は、千冬姉に似た、でも柔らかな物腰の女性だ。

俺は胸の奥が二つの感情でいっぱいになった。小さな懐かしさと——大きな怒りで。

この二つの感情を同時に呼び起こせる人間は、俺の中に二人しかない。だからこそ、解かった。目の前の女性が誰なのか。——彼女は俺たち姉弟を捨てた両親の片方だ。

それは箒たちにも解かったようで、リビングがいつきに淀めき立った。ただ、シャルロットだけは不自然なほど冷静だった。かといって、それを詮索する余裕など俺にはなく、ただただ目の前の女性にすべてを奪われていた。

「あんたが、俺の、母さん？　なのか……」

「ええ」

目の前の女性が小さく頷く。それが俺の心臓を早くさせる。俺の母親。みんなのまえだったから冷静に努めようとしたけれど、10年分押さえつけていた感情が怒涛の勢いで競り上がってきて、俺は自制が利かなくなつた。

俺は何度も両親の事を忘れようとしてきた。いなくなつたものに苛立つても感情の無駄遣いだと思つて。だけれど、本当は、食事もせず疲れて眠る千冬姉を見るたび、両親の事を思い出し、恨む自分もいた。その恨みを口に出したことはなかつたし、これからもする気はなかつただけで、本人を前にしたら我慢できなくなつた。

「なんでだよ。なんで……ッ！　なんで、いなくなつたんだよ！　あんたがいなくなつたせいで、千冬姉はすごく苦労したんだぞっ！

返答次第じゃ母親だからつてただじゃ——」

「落ち着け一夏」

ココから追い出す勢いでまくしたてる俺を宥めたのは千冬姉だった。

「気持ちわかるが、これにはわけがあつたんだ」

「理由……？」

「ああ。まず、私がおまえに詫びなければならぬ」

「詫びる？　ずつと俺のために働いてくれた千冬姉が俺に何を詫びるっていうんだ。」

「おまえから母親を奪つたことを、だ。母さんは私たちを捨ててなどいない。私がおまえにそう吹き込んだ。母さんにおまえを渡さないためにな。実は私と母さんはある理由で仲違いをしていた」

「仲違い？」

「ああ、ある少女の存在が私たちの関係に誤解を生じさせたんだ。その少女についてはいずれ語る。話を続けよう。この誤解から、私は母に捨てられたものと思ひ込んだ。そこで、私は母の愛情を取り戻すため、白騎士になつた」

リビングがどよめく。

IS時代の始まりを告げた白騎士。その正体が千冬姉だったこと

に。

「……じゃあ、一夏の姉貴が日本を救った英雄？」

「いや、違うぞ、弾。私は英雄などではない。むしろ大罪者なんだ。白騎士事件は、ISの力を世界に知らしめたい束と、母に見直されたい私が起こしたマッチポンプにすぎない」

リビングが様々な表情に彩られる。怒る者、恐れる者、呆れる者、ただ静かに見守る物。さまざまな感情が狭い部屋にうずまくなか、俺はそのどれにも属さず、ただ、千冬姉の言葉に耳を傾けた。

「まったく、はた迷惑な話よね……」

酷く幻滅した様子で、楯無さんがぼやく。

「……で、でも目的はどうあれ、たった二人で時代を変えてしまうなんて、すごいことだと思う」

「更識の妹、私たちは時代を変えてなどいない。歪めただけだ。それを正そうと私は〈ブリュンヒルデ〉になったが、それも志半ばで挫折した。幸い、友人にそれを託せたが、いまだ私と束が作った罪は、世界を覆っている。世界最強と希代の天才でさえ消せないその大罪を償うために、母さんは私たちのまえから姿を消した」

千冬姉の語ったことが真実なのか、それを問うように母親を見やる。

「ええ、あなたの側から離れることは辛かったけど、私がやらなければいけなかった。子の罪は、育てた親の罪だから。世界を歪めた罪は、私にしか償えない。他者に押し付けるわけにはいかなかった」

「おまえの前から母さんがいなくなったのは、私の所為なんだ。恨んでくれても、憎んでくれても構わない。私にはそれを受け入れる覚悟がある。ただし、母さんは恨まないでやってほしい」

俺は視線を落とす。告げられた事実があまりにも大きすぎて感情や思考が追いつかなかった。

でも、俺の中ではつきりとこれだけは言えることがあった。

「いいんだ。千冬姉。確かに千冬姉は俺から母さんを遠ざけたのかも知れない。でも、その代わりをしてくれた。時に甘えさせてもらって、時に叱ってもらえて、千冬姉が俺にくれたものの大きさを思えば、

全然許せるよ」

理由がどうであれ、この十年間、俺は千冬姉にたくさんの愛情を注いでもらった。その感謝を思えば、俺の心から怒りや憎しみの感情はまるで湧いてこなかった。

「そうか。本当に大きくなったな、一夏」

それも違うんだよ、千冬姉。俺が大きくなったんじゃない。千冬姉やみんなが俺を大きく育ててくれたんだ。一人の力で育つ人間は、この世界のどこにもいやしない。

「んでき。母さん」

母さんは「ひゃい！」と上ずり声で答えた。

「な、なにかしらー！」

「その、えつと、なんだ」

姿を消した理由を明かさされたいまとなっては怒りもわいてこなかった。かといって、母の記憶が希薄だから懐かしむこともできなかった。いろんな事実が明かされて整理が追いついていないこともあるけど。

正直、何を言えればいいか思いつかず、言葉に迷っていると、シャルロットが背中を押してきた。

「そういうときは、ハグだよ、ハグ」

「いや、ハグとかはいいよ。15、いや16になって、母親と抱き合うなんて恥ずかしいって」

ただでさえ、シスコンだの呼ばれているのだ。そこにマザコンなんて加わった日にや、登校拒否に陥りかねん。ましてや人前でなんて。「もう一夏したら。自分の母親を安心させられないで、一人前になんかなれないよ」

言葉に詰まる。まったく反論できなかった。包容力を発揮できないうちは、まだまだ子供か。

今のままじゃ無駄に歳を食っただけになる。年を食った分だけ大人にならないとな。

俺は決意を固めた。そして、気恥ずかしさに顔を上気させながら、そつと母さんをその腕に抱きとめる。母さんも俺を抱きしめてくれ

る。母さんから伝わるぬくもりが俺に懐かしさを呼び起こした。俺は母の記憶が希薄だったが、身体は覚えているようだった。彼女に抱かれ、育てられたその日々の記憶を。

俺は彼女に愛されていたんだな。そうでなきゃ、体が覚えているはずがない。

それだけで、俺は彼女のすべてを許せる気がした。だから、俺は晴れやかな気持ちで本心を口にした。

「母さん、あんたが俺たちの前から消えたこと。恨んじやいないよ」

「そう言ってもらえると救われるわ。私の方こそ、そばにいてあげられなくてごめんね」

「いや、母さんにはやらなきゃいけないことがあったんだろ。それにさびしくはなかったぜ。箒に、鈴に、弾や蘭、月子や、月子のおじさんやおばさん。そして千冬姉。いまはセシリアやシャルロット、ラウラたちもいる。でも——」

「でも?」

「あんたが俺を生んでくれなきゃ、こんな大勢の仲間たちと出逢えなかった。感謝しているよ」

「いいえ、それは私の台詞。——生まれてきてくれてありがとう、一夏くん」

母さんは目頭に大粒の涙を蓄えた。

俺は戸惑った。息子にとって母親の涙というもののほど扱いに困るものはない。俺は「泣かせた」と笑う周囲に助けを求めろが、みんな助ける気はないようだった。しかたないので、俺は母親が泣き止むまでその背をぽんぽんと叩き続けた。

その後、母さんが『世界最強の専業主婦だ』と聞かされたのは、泣き止んでしばらくたってからのことだった。

♡

◆

♣

♠

「それにしてもすごい誕生パーティーになったな」

夜もふかまり、思わぬ母親の訪問からはじまったパーティーも佳境に入り始めた時間。

用意した食い物も底をつきはじめ、俺はその買い出しついでに夜道を歩いていた。「パーティーの主役が買い出しなんて」とは言われたが、いろいろ気持ちを整理したかった俺は、こうしてひとりにしてもらったわけだ。

「それにしても母さんが、ヘテウス・エクス・マキナ、だったなんてな……」

そして、それが俺たち姉弟のために存在していたこと。

その事実は母さんがアリスやロリーナさんのトップということでもあって、いままでのことがすべて腑に落ちたと同時に、俺をわずかに落胆させた。

アリスが俺を助けてくれたことは結局、母の命令に過ぎなかったのだろうか。心のすみにそんな不安を抱えながら家のかどを曲がると、玄関の前で一人の少女が立っていた。アリスだ。

「お、アリス。どうした、中に入らないのか。つーか、おそかったな」パーティー開始からもう何時間もたっている。

蘭から「遅れる」とは聞いていたけど、正直、今日はこないかと思っ
ていた。

「ちよつと用事がありました。それより拝見しましたよ。ヘキャノンボール・ファスト、優勝おめでとございます。やりましたね、さすが、私が見込んだ男です」

私が見込んだ男。彼女に見込まれていたという言葉に、俺は言いよ
うのない高揚感を得る。

けれど、俺は舞い上がりたくなるような気持ちを抑え、冷静に努め
た。

「いや、ここからさ」

今回のヘキャノンボール・ファスト、優勝。その功績は確かに大きい。けれど、千冬姉が云っていた。勝利はただの通過点に過ぎないつて。たった一勝で浮かれているは底が知れてしまう。目的地はまだ
はるか遠くにあるのだから『ここで気を緩めてはダメだ』と俺は自分

に強く言い聞かせている。

「ふふ、いい顔をするようになりましたね。そんなあなたにプレゼントを持ってきました」

アリスがポケットから小箱を取り出す。

ジュエリーケースほどの大きさの、頑丈そうな金属の小箱だ。俺は「おう、ありがとな」と受け取り、期待に胸を躍らしながらそのふたを開けようとした。その手にアリスがそつと手を重ねる。

「いまはまだ開けないでください」

俺はアリスを見やる。

「これは“力”です。あなたが無力を感じ、それでも何か強く願ったそのときに開けてください。そうすれば、必ずこの箱があなたの力になってくれます。そのときまで、あけないでください」

“力”。確かに頑丈そうな箱からは、“強さ”と“重み”を感じた。厳粛に秩序を正す規律のような“重さ”と、どこまでも安心感に満ちた“強さ”だ。それでいて、これには自分へのみ許された力という特別性を感じさせる“何か”があった。

「それは世界にひとつしかない、あなただけの“力”です。大事にしてください」

実際に、箱を開いてみなければ、言葉の意味のすべては知ることにはできないだろう。けれど「俺にとって大事な物」であることは、確信が持っていた。アリスがそういうならなおこと。

「ああ、わかった。ありがとうな、アリス」

俺は親の形見をあつかうように、それを大切にしよう。
「いいえ」

アリスはいつも通り、さもないように言った。誰かのために戦い、支え、救ったときも、こいつはいつもこんな感じだ。名誉も称賛も欲しがらない。強くありながらも、けっして驕らない彼女を、俺は心の底から尊敬する。そんなアリスに少しでも追いつくこと。それが俺のいまの目標だ。

「じゃあ、中にはいろいろぜ。まだ食べ物、残ってるぞ」

「ほんとですか！ 急いだ甲斐がありました」

無邪気に笑うその姿に愛おしさを感じながら、俺はアリスのあとに続いた。

〈Dシスターズ〉

第89話 完成 打鉄二式

16歳となった誕生日の翌日。ひとつ歳を重ねたからといって、生活に大きな変化が生まれるわけもなく、いつもどおり特訓を終えた俺はみんなと自室で間食を取っていた。

正面には箒がいて、その両側にはラウラとシャルロット。俺の両側にはセシリアと鈴。

そんないつものメンバで適当に駄弁っていると、鈴がまたあの話題を蒸し返した。

「それにしても昨日のあれよ」

今日が誕生日の翌日とあって、みんなパーティの余韻を引きづっている。なんせ「俺の母親」が現れたのだ。特に幼少から俺たち姉弟を知っている幼馴染の驚きは、他より大きかったに違いない。

「また、その話題かよ。もういいだろ」

でも、俺は飽きたように言った。実は朝からその話題ばかりが持ちあがるのだ。

俺としては既に整理できた事だから、蒸し返さないでもらいたいんだけど。

「そりやするでしょ。今年一番の衝撃だったもん」

「衝撃といえば、シャルロットはあんまり驚いていなかったな」

とラウラ。

あの場に母さんが現れたとき、シャルロットだけ冷静だった。転入まえに俺のことを下調べしていたはずだから、「両親不在」を知らなかったとは思えない。なのにあの冷静さ。俺もひっかかるものを感じていた。

「実はね。すこしまえに会っていたんだ」

俺たちは一斉に間食の手をとめた。

「すこしまえってどのくらいだ？」

「ほんとうにすこしまえ。文化祭のあとぐらい。で、いまはデユノア

社のオーナーなんだ」

鈴が「ぶっ！」とウーロン茶でむせる。

「けほけほ……オーナーって？　じゃあ、千春さん、アルベールのおっさんより偉いわけ？」

「偉いってわけじゃないけど、デユノア社の役員会で一番発言力はあ
るね」

「……あなたの母親、どうなってるのよ」

俺が聞きてえよ。

〈デウス・エクス・マキナ〉の規模は俺の予測を超えすぎてる。

「すごい人なのだな。教官の母上は」

「でも、株主優待の食事券もらって普通に喜んでいたよ。すごく主婦
ぽかった。この前も58円の卵（おひとり様一個かぎり）を買うの手
伝って。そうそう、その時に聞いたんだけど、実は一夏って小さい頃
――」

「よおしっ！　この話はもうやめようぜ」

俺は大声で話題をぶった切った。

小さい頃の話は、記憶の奥底に眠っていた黒歴史が呼び起こされそ
うな気がしてならない。

「っーかもういいだろ。おふくろの話は！」

「あら、お母さんがどうしたの」

と、しっとりとした声音。振り返ると、まとめた黒髪を肩から垂ら
した女性が立っていた。見るからに二十代としか見えないその女性
は件のおふくろだ。手にはなぜか菓子箱。

「あ、千春さん。実はいま一緒に買い物に行ったとき聞いた話をして
いたんです」

「あらまあ、一夏くんの乳離れが遅かった話？」

「なに、あんた、そんなに乳離れ遅かったの」

「ほお」というようなまなざしに俺は顔を真っ赤にしたが、母さんは
楽しそうに答えた。

「そうそう。一夏くん、乳離れがすごく遅くてね。三歳になっても
「おっぱい、おっぱい」って服にもぐりこんできてたのよ。なんとかや

めさせようと「ないないよ、おっぱい、もおないない」って隠しても
「あう！ あうの！」って、それはもうね——」

「だーッ。そういう話はいいよッ」

俺は羞恥で悶絶しそうだった。

なぜに女友達の前でそんな話を暴露されなければならないのか。
何か悪いことしたか！

「っーか、なんで、ここにいんだよ！」

「今月、ココで大事なお話があるの。その準備で来たら、お友達がきて
るって聞いてね。お菓子をもつてきたの。アメリカに行ったとき
のお土産なのだけど、食べる？」

「いらねーって。っーか、なんで人の部屋に勝手に入ってきてんだよ。
早く出てけよ」

「はいはい、おかあさん、あつちにいくわね。お菓子はココにおいてい
くから食べて」

「あ、はい、どうも」と箒たち。

俺は「そういうのいいから」と部屋から追い出し、ドアのカギをか
ける。

「たくッ、母さんのやつ……」

「まあ、一夏、そうぞんざいにするな。もっと大事にしてやってはどう
だ」

「ラウラの言うとおりよ。おかげで、話を聞きそびれちゃったじゃな
い。——ねえ、シャルロット、千春さんから他になんか聞いてないの、
一夏の話」

「あー、もう俺の話はいいだろ」

「いやいや、幼馴染にすら知らない歴史とか、気になるじゃない。ね、
箒」

「ああ、気にはなる。——が、私は“それ”が気になるところだな」

箒が見た“それ”とは、昨晚アリスがくれた誕生日プレゼントだ。

アリスから思いかげないサプライズを受けた箒だけに、中身が気にな
るらしい。

「あんた、それ大事にもってるわよね」

「肌身離さず持つてろってアリスがさ」

※言ってますせん。

「一体なにがはいっているんだ？ 私は中身が気になってしかたないんだが」

「よし、じゃあ開けよう！」

「おい、こら鈴り！」

「いいじゃない。別に連邦の存在を脅かすようなもんが入っているわけでもないでしょうに。う、硬いわね、これ」

「ふむ、素材はサードグリットのようだな。外にあるパネルは生体認証だろう。一夏本人にしか開けられないよう設定されているようだ。恐らくおまえがそうすることを予測していたのだろう」

「さすがアリス。いい読みだ。そういうわけだ、返せって」

「ぐぬぬ。こうなったら、プレゼントした本人に聞くしかないわね。あいつはどこなの」

「アリスならまた整備科ですわよ……」

鈴がこの場にはいないアリスを探すと、なぜかすねたようすでセシリアが言った。

「なんで、ムってしてんだ？」

「最近、アリスにかまってもらえてないから、へそまげてるんでしょ。で、整備科ってことはあの子の専用機開発を手伝っているわけ？」

「そういうえば、日本の代表候補生って自分で専用機を開発しているんだよね」

簪が独力で専用機を開発している話は、学園でも有名だ。

たびたび俺たちの間でもこうして話題にあがる。俺自身もけっこう気になっているところだ。

「しっかし、自分の専用機を自作なんて、すげえよな。俺にはとても真似できねーよ」

「安心なさって、一夏さん。普通はそんな真似、したくてもさせてもらえませんわ」

そういったセシリアは、どこか呆れたような様子だった。

俺の言葉——というよりは専用機を自作している簪の行為と、それ

を許した人たちに。

「莫大な資金が必要なISの開発を、ノウハウのない学生に委ねるのは、かなりリスクですの。もし完成に至らず頓挫してしまったら、投資金のリターンは望めなくなりますわ」

「莫大な資金を投入してリターンがないのは、企業としてかなり痛手だよな」

シャルロットがそういうと、なんだか言葉に重みがある。

彼女の実家——デュノア社は第三世代型の開発に失敗し、赤字どころか経営難に陥った。いまは業績回復の兆しが見えたが、兵器開発とはそれぐらいリスクが伴うことであるらしい。

「それに兵器開発には高度な技術力が要求される。本来は国家プロジェクトで行うようなことを学生一人が担えるとは思えん。私もよく認められたと思う」

兵器の造詣に深いラウラだけに、その言葉には説得力がある。

「じゃあ、なんでそんなこと許されているのよ」

「うわさじゃ姉が裏で手回したとか」

「代表候補生になれたのも、その姉のおかげだと聞いたな」

「その姉って、ここの生徒会長でしょ？　いくら生徒会長だからって、そんなことできんの？」

「いや、それがだな。更識って実はすごい家柄らしいぞ。月子から聞いた」

「うむ、更識といえは、旧日本軍の諜報部を担っていて、いまも政界に顔が利くと聞く」

「ふくん。家柄のおかげで、そんなことができてるわけね」

箒とラウラの言葉を聞き、気に入らないような面持ちで椅子にもたれたのは鈴だ。専用機も、代表候補生の座も、実力で得てきた鈴にしてみれば、親の威光に照らされている箒を快く思えないのだろう。

確かに開発が許された経緯には姉の存在があったのかもしれない。

でも、俺はそれだけじゃないと思う。だって——

「そういうけど、箒ってすげーエンジニアだぜ？」

箒が改造してくれた有線雪羅もヘキヤノンボール・ファストでは

多いに活躍してくれた。彼女の技術力は本物だと思う。だからこそ、独力の専用機開発も許されたんじゃないかなと思うんだけどなあ。「ふくん、そこまでいうなら見にいつてみましようよ、あの子の専用機」

「それはいいですわね。わたくしも簪さんの専用機には興味がありますわ」

と、顎に細い指をあて、誰よりも関心あり気に言ったのはセシリアだった。

「それに、わたくし、簪さんにいろいろお聞きしたいことがありましたし」

ふつと笑ったセシリアには、何か思惑があるように見受けられた。

簪、鈴とセシリアが苦手だけど、大丈夫だろうか。

そんな一抹の不安を抱えながら、俺たちは「では行きましよう」と立ち上がった鈴を先頭に自室を出た。

♡

✦

♠

整備科、第二格納庫。その七番ハンガーに一機のISが掛けられている。

鋼色の光沢を放つ装甲。武者を彷彿させる意匠。左肩部から生えたフレキシブルアームには大型の荷電粒子砲が接続され、右肩部には円盤状の高性能レドーム。機体両側には、基本装備であったウイングスラスターに代わって大型のミサイルコンテナに置き換わっている。簪の専用機、＜打鉄式式＞である。

現在、＜打鉄式式＞の開発は、マルチロックオンシステムの中核を担うへ知能エージェント＜とミサイルユニットの実装が終わり、システムのアップデートを残すのみとなっていた。このアップデートで不具合が生じなければ、晴れて＜打鉄式式＞は完成となる。

「さあ、最後のお仕事よ」

ロリーナがラップトップを簪のまえに差し出す。簪は大きく呼吸

して、エンターキーを押した。無数のプログラムが投影型ディスプレイの中を走り出し、プログレスバーがすこしずつ伸長していく。やがて進捗は100%に到達した。

「――報告：武装レジストリに《山嵐》が登録されました」

「――報告：火器管制システムに《マルチロックオンシステム》が追加されました――」

〈打鉄式式〉の報告を受けて、簪は《マルチロックオンシステム》を起動させた。それに合わせて各ミサイルハッチが開き、装填された弾頭が顔を出す。同時に《知能エージェント》が、標的を求めするように無数の照準カーソルを表示させた。すべて問題なく動作している。

「ついに完成ですか」

完成の様子を眺めていたアリスが感慨に耽る。

開発低迷期を知るゆえ、その感慨も深かった。だが、彼女以上だったのはやはり簪だ。

「……うん」

言葉こそ簡素だったが、静かに身を震わせていた。

言葉では言い表せない無上の達成感が、彼女をそうさせていることは想像に難くない。

「……これも、アリスやロリーナさんの、おかげ」

「いいえ、あきらめず、続けてきたあなたの努力のたまものよ」

開発当初、無謀とも思われた自力による専用機開発。それでもあきらめず、自分を信じて、続けたこと。完成に至った最大の要因はそれに尽きる。いくらアリスが手をかし、ロリーナが知恵を授けても、簪にやり抜く意思がなければ、完成には到底いたらなかった。

(だからこそ、疑問なんですよね……)

アリスは出会った当初から抱いていた《疑問》を改めて思い直した。

簪が姉に抱く感情は、本当に《劣等感》なのだろうか、と。

楯無は『簪は自分に劣等感を抱いている』と言っていたが、アリスにはそう思えなかった。『自分は人より劣っている』と悩んでいる人間が、これほどの偉業を成せる気がしないからだ。

何事にも努力は必要だ。そして努力とは、頑張ることじゃない。続ける力のことだ。

だが、それは簡単なことじゃない。大抵の人間は「飽き」や「才能」を理由にやめてしまう。続けるには「自分ならできる」という自信が必要なのだ。

専用機を完成させた簪には少なからず「できる」という自信があったはず。「できる」と自分を信じ抜けた人間が劣等感なんかに苛まれたりするだろうか。

劣等感に苛まれていると思う姉。自分を信じて努力を続けた妹。

この姉妹の間には、根本的な見解の相違があるように思えてならない。

「ねえ、簪、すこしいですか」

ロリーナと今後について話していた簪に、アリスは話しかけた。

「……なに？」と首をかしげた簪に、アリスはたずねる。

「あなたはお姉さんのこと、本当はどう思っていますか？」

そう尋ねた意図の半分は純粋な疑問。もう半分は『彼女の本音から、ぎくしゃくする姉妹関係を改善できないか』という、彼女の悪癖「お節介」によるものだった。

知り合って三ヶ月、さまざまな出来事を経て、いまや更識姉妹とはそれなりに親密な関係になりつつある。世話にもなった。無関係を装うには、自分は彼女たちに近づきすぎた。

「それは……」

簪は口ごもった。自閉の気がある彼女は、おそらく誰にも本音を明かしたことがないのだろう。幼馴染にも、両親にも。内向的な人間は、内向的なゆえに、感情や気持ちの内側に閉じ込めたがる。

簪のそんな性分を知るアリスは、話しやすい流れを作ることにした。

「実は私にも姉がいるんですよ。ローズマリーっていうんですがね」

「イ、イギリスの国家代表……ッ」

「そうです。簪も知っているとおおり、そりやできた姉でね。綺麗だし、賢いし、強いし。お金持ちだし。なにより、すごく妹思いでね、実は

私にすぐくやさしいんですよ」

「……い、一緒だ……」と簪は内心で思った。だから、こう尋ねた。

「……アリスはそのお姉さんをどう思っているの？」

さきほど自分がされた質問と同じ質問をしたことに簪は気づかなかった。

それはアリスの話術にはまった証拠であった。しかし、アリスは思惑通りなんて億尾にも出さず、ただ純粹に自分が感じていることを口にした。

「うざいかなあーって」

簪は柄にもなく噴き出した。普通なら「自慢の姉です」とか言う立場面だろう、と。

けれど、自分だつて姉を自慢したことはないじゃないか。

「確かにやさしいんですけど、その優しさって誰のためなのかなあつて。結局、お姉ちゃんがお姉ちゃんするためじゃないかって、そう疑ってるんです。千冬さんの一夏に対する厳しさを目の当たりしたあとだと、本当のやさしさってなんだろうって思うんです」

「わ、わかる」と強く頷いた簪は、すでに語るに落ちていた。

いま簪は自身が心底に埋めていた本心を、喉から吐き出しかけている。相手が自分と同じ境遇を持ち、それを素直に打ち明けたことで、随分と気持ち楽になっていた。

最後にアリスが「あなたはどうです」と促すと、簪はひた隠しにしてきた本音を語り始めた。

おずおず、と。けれど、いつになくはつきりとした口調で。

「わたしは、お姉ちゃんのこと嫌いじゃないよ。ただね——」



鈴の思わぬ提案で、整備課・第二格納庫にやってきた一夏一行。

その先頭は意外にもセシリアで、速足で一夏たちより先をぐんぐんと進んでいく。

〈打鉄式式〉が置かれているハンガーまでやってくると、アリスたちの姿が見えた。二人は何か話しているようで、いつになく真剣な面持ちで語る簪の言葉を、アリスが真摯に受け止めている。会話の内容は聞こえないが、大事な話をしていることは、遠くからでもわかった。「なにを話しているんだ？」

入りづらい空気に二の足を踏んでいると、話し終えたアリスがこちらに気づいた。

「あら、どうしたんですか。みんなして」

「あ、いや。簪の専用機の完成が近いつて聞いて、見に来たんだが、間が悪かったか？」

シリアスな雰囲気を感じて、一夏は簪の様子を伺った。

「いえ、大丈夫ですよ。もう終わりましたから」

「そうか。――で、これが完成した〈打鉄式式〉か」

新に48連装のミサイルユニットを備えた〈打鉄式式〉を見上げる。

スラスターがミサイルキャリアーに換装されたため、以前より攻撃的な印象が強く感じられた。

「みたところかなりの重装備ね」

と、鈴。

高出力の荷電粒子砲、48連装のミサイルユニット。それを扱うための電子兵装を備える〈打鉄式式〉はISの中でも重武装の分類に入るだろう。

「これだけの重火器・重装備となると、火器管制への負荷が懸念されるけど」

「……大丈夫、情報処理装置を増設して、ソフトウェアを拡張してあるから」

「ちゃんと負荷分割してんのね」

「ふうん」と興味津々の様子で、〈打鉄式式〉の周りを一周する鈴。

直感的で直情的な彼女はメカニカルやロジカルな話題に感心が薄い方である。こうやって熱心に質問する様子はなかなか見ない。

「鈴、やたら熱心ですね」

「熱心っていうか威力偵察ってやつよ。一応、あたしがここに来た表」の理由はそれだし」

「……じゃあ、裏の理由は」

と、簪。

「恋の威力偵察だよね」

「バツ！ シャルロット、あんた最近一言多いわよ！ ともかく、日本製のISって情報が国外に出回らないから全部が未知数なのよ。だから、可能なら見てこいって言われてんの！」

日本の国是には、非核三原則と並んで武器輸出三原則というものがある。これは自国で製造した武器や装備を原則他国へ輸出しないというものだ。国外に技術が流出しにくい環境であるため、＜打鉄＞をはじめとした日本製の武器は他国からすれば未知数なのである。

「ヨーロッパ方面はともかくき、地政学的に近い日本の技術力解明は、うちにとって急務なのよ。それに、今の日本って大きな転換期を迎えているじゃない」

「そうなのか」と一夏と箆が言うなか、簪は一人だまつた。

〈白騎士事件〉以降、日本はその防衛のあり方を大きく変えざるを得なくなつた。防諜組織たる更識もそのあおりを大きく受けている。楯無がロシアに国籍を置き、潜入しているわけもそこにある。

（だから、わたしは――）

そう思いにふけた簪の感傷を払拭するように、誰かが「こほん」と咳払いをする。

そんなわかりやすい前振りをしたのは、簪の苦手ナンバー2ことセシリアだった。

「ところで、簪さん、あなた、精霊と対話できるそうすわね」

「……ひえ？」

いきなり黒歴史を掘りこされ、簪は変な声を上げた。

中学生時代、『妖精少女ティターニア』というアニメに影響され、その主人公に成り切っていた時代が、簪にはあつた。当時、彼女はネットですら買ったサークレットやティアラをつけて、学校に登校していたのである。

「ドイツの代表から伺いましたわ。実はわたくしも幼い頃、妖精を見ることができましたのよ」

「……………え？」

「以来、わたくしは妖精を感じとれるようになりましたわ。わたくしは環境センサがなくとも、精霊を介して火薬、湿度、風速、そして地面の硬さを感じ取れるますの。わたくしの神がかり的な狙撃は、それら〈妖精の触覚〉があるからこそ、なのですわ」

「(うわ、自分で神がかりって言った)」と簪は思ったが、それはさて。セシリアは1000メートル級の狙撃さえヴィヴァルディの「四季」を鼻歌まじりで熟してしまう。その狙撃術は〈妖精の触覚〉なるものに裏打ちされているという。

彼女は本物なのだ。設定とかではなく。

それにしても日本人が言う痛いだけの言葉も、イギリス人がいうと神秘的に聞こえるから不思議である。

「しかしながら、わたくしは光の精霊を感じることはできませんの」

「……………光、……………エーテル的な？」

「さすがわ精霊の姫君。よくご存じで。そう、光を伝えるという五大元素のひとつですわ。あなたはそれら精霊と対話する術をお持ちだと、ドイツの代表に見せていただきましたわ」

そんなことを言い出したセシリアの背後で、アリスとラウラが顔を合わせた。

——エーテリオンだ。

「BTレーザーとはいわば光そのもの。わたくしがフレキシブルを習得できないのは、光の精霊を感じ取れないせいではないかと睨んでおられますの。そこでぜひ、あなたが持つ〈エーテリオン〉をわたくしに譲っていただきたく思いますの。もちろん、ただとはいいませんわ」と、取り出したものは小切手帳。

そのうしろで、鈴とシャルロットは尻を掴まんで笑いをこらえていた。「シャルロット、あのお嬢さま、ビー玉を買うつもりよ(クスクス)」「りん、笑っちゃだめだよ、フレキシブルを習得できなくて、セシリアも切羽つまってるんだから(プププ)」なんて笑いをこらえる鈴

とシャルロット。

至つて真剣なセシリアは、二人に怪訝な顔を見せたが、かまわず小切手をめくつた。

「言い値で買いますわ。おっしゃってくださいな」

「……あの、あれはただのビー玉で、特に意味なんてなくて」

「そうですか」

意外にも意外。セシリアはすんなり引き下がったようにみえた。

そう、みえただけ。

「きつとお希少なもののなのでしょう、簡単に渡せるものじゃないから、そうおっしゃられるのね？」

なまじ本当に妖精を感じ取れるから、へエーテリオン〈の設定を疑っている様子がない。

かといつて、ただのビー玉を渡すわけにもいかなかった（バレたとき、何を言われるか分かったものじゃない）。

姉ほど交渉上手じゃない簪がオロオロしていると、何を勘違いしたのか、セシリアはこう提案をしてきた。

「では、わたくしと模擬戦をして勝ちましたらへエーテリオン〈を譲ってくださいな。もし、あなたが勝ったら……、そうですわね。わたくしに代わつて〈妖精女王〉を名乗る権利を差し上げましょう」

簪は愕然とした。びっくりするほど自分にメリツトがない……ツ

！

「あら、震えるほどうれしくて？ 確かに、女王陛下より一角獣の紋章を賜つたオルコット家のわたくしが直々に授けるんですもの。これほど光栄なことありませんわよね？ でも、気が早くてよ。名乗るのはわたくしに勝つてから。——では、参りましょう。確か第二アリーナが開いていましたわね」

こちらの事情をそつちのけで、揚々とアリーナに足を運んでいくセシリア。

対し、簪は足取りがすこぶる重かった。

「まあ、ブランクを埋める気持ちで戦つてきなさい。あとは私がうまく説得してあげますから」

簪の肩をアリスがたたく。「…………おねがい」と簪。不本意な決闘だが、諦めてもらうには勝つのが一番いい。かくして〈妖精の女王〉と〈精霊の姫君〉の〈エーテリオン玉〉を賭けた戦いが始まるのであった。

第90話 妖精の女王 VS 精霊の姫君

ひよんなことからセシリアと簪が対決することになり、やってきた第二アリーナ。

そのBピット。簪が待機するAピットから反対側のピットへひとり連れてこられたアリスは不満そうに口先を尖らせた。

「なんで私だけ、こっちなんですか……」

〈打鉄式式〉の開発に関わってきた身としては、簪側からこの模擬戦を見届けたかったのだが。

「だって、みなさん、簪さんの方へいかれるんですもの！」

セシリアはむすっと頬を膨らませた。どうやら誰にも見送られず出撃することがさびしいらしい。彼女の青い瞳は、見送り人と応援要員を所望していた。

「で、私ですか」

「あなたがわたくしを応援せずして誰が応援するというのです。シャルロットさんや簪さんばかりずるいですわ。もうすこし、わたくしに構ってくださいな」セシリアはググつと顔を寄せて人差し指を立て「——セシリア・ファースト！ よろし？」

セシリア第一主義とな。自分で言っていれば世話はない。アリスはクスクス笑った。

「はいはい、わかりました、セシリア女王陛下。あなたに忠誠を誓い、身を粉にしてつくします」

「よろし」

機嫌をよくしたセシリアはフツと笑って、ハンガーの〈ブルー・ティアーズ〉に視線をやる。

〈キャノンボール・ファスト〉を終えた〈ブルー・ティアーズ〉は、高機動パッケージへストライク・ガンナー〉が取り外され、素体に戻されていた。装甲には大小の傷。それが歴戦の勇士を物語っている。

また、操縦者であるセシリアもそれに相応しい実力を身につけつつある。あるが、〈ブルー・ティアーズ〉の最大ポテンシャルは未だ引き出せずにいた。

「セシリア、フレキシブルの習得具合はどうですか」

「何もかもが分からない状態ですわ。集中力の問題なのか。感覚の問題なのか。それとも技術的な問題なのか。理論上、5・7Hz周波帯のθ波を光波にぶつけければ、可干渉性でレーザーは偏向してくれるはずなのですけど……。———そういうえば、あなたは成功させましたわよね。一体どうやりましたの？」

「^{まが}凶れ〜って念じたら、できました」

「なんですの、それ。さっぱりですわ。もつと理路整然としたアドバイスをくださいな」

アリスは苦笑した。

セシリアは物事を論理的に考えすぎる。それが妨げになっているのでは、と。

「たぶん感覚的な問題だと思います。ロジカルな説明で習得できるとは思えませんよ」

「やっぱりそうなのかしら。だとしたら、簪さんの秘術を手に入れる必要がありますわね」

それは問題の解決にならないが、セシリアはやる気まんまんに答えた。

「さて、今回の模擬戦、わたくしが勝つことは自明の理ですが、一応、開発に携わったあなたの見解を聞いておきますわ。簪さんとわたくし、あなたはどちらが勝つとお思いで？」

「え？　そうですね。簪が勝つと思います」

ムっとしたセシリアがアリスに半眼を向ける。

「確かに専用機の完成度は高いと思いますわ。荷電粒子砲やあのミサイルユニットも脅威でしょう。けど、それさえ用心すれば、他は大したことありませんわよ？」

「そうですね。簪はおそらくあなたたち代表候補生の中で一番弱いですし」

セシリアが操縦技術を磨いているあいだ、簪はずっと開発に勤しんでいた。戦闘に必要なスキルは、開発技術じゃなく操縦技術だ。セシリアの方がパイロットとして格上であることは間違いない。なのに、

負けるとは……。

言っていることがあべこべすぎて、セシリアは怪訝な顔をした。

「最弱という意見には同意しますが、わたくしがそれに負けると？」

「かもって、話ですが」

その理由を話しましょうかと言ったアリスに、なんとなくプライドを傷つけられたセシリアは「結構です」とはねつけた。予想を聞いた理由も、みんなが簪側へ向かうもんだから、せめてアリスには太鼓持ちをしてほしかったのだ。

だというのに、よりにもよって「簪は最弱だ」と言い、おまえはそれに負けるなんて。

「なら、わたくしが圧勝して、あなたの意見が間違っていたことを証明してあげますわ」

そう言うと、セシリアはかけられたくブルー・ティアーズを装着した。

「では、行ってまいりますわ！」

語調を強めながらくブルー・ティアーズを、カタパルトデッキに接続する。

「はい、武運を」というアリスの言葉を受けて、彼女は発進した。



(……憂鬱だあ……)

セシリアたちがいたピットから反対側のAピット。降ってわいた模擬戦の話に、簪は戦う前から気が滅入っていた。理由は対戦相手が苦手なセシリア・オルコットということもあったが――

「なんで、こんなに観客が……」

模擬戦は先ほど決まったこと。だというのに、モニターには生徒で埋め尽くされる観客席が映っていた。一体どこから聞きつけたのか。おそらく『かんちゃんがんばれ』と大きな旗をかざしている本音が言いふらしたに違いない。

(……はあ……逃げ出したい……)

〈打鉄式式〉の存在は前々よりウワサされ、注目度も低くない。半数は模擬戦より〈打鉄式式〉を見に来ていると言っているといいだろう。その〈打鉄式式〉を見て、彼女からどんな言葉が飛び出すか。

批判にさらされるのが創作の常とはいえ、丹精を込めて開発した〈打鉄式式〉が否定されることを考えたら、この模擬戦から逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。失敗と挫折ばかりの人生だったから、どうしても自信がネガティブな感情を追い越せない。

「簪ちゃん、大丈夫？」

そんな戦うまえからダウン気味の簪を、心配そうに伺ったのはロリーナだった。

「……吐きそうです」

人前に見せるときに感じる、恐怖にも似た不安。それが簪の顔をさらに悪くしていた。

ロリーナは「あらあら、困ったわねえ」と頬に手を当ててから「ほら、いらつしやい」と鷹揚に手を広げた。そして、その大きな胸に簪を招き入れ、心をむしばむ不安を払うように髪をやさしく撫でる。

「大丈夫。あなたはすごい子よ。そうでしょ？ ——そんなあなたが作り上げた、〈打鉄式式〉だってきつとすごい子。だから、信じてあげて、あの子の力を。あなたが信じてあげなければ、あの子は本当の力を発揮できないわ」

産みの親が我が子を肯定してやらなければ、子はその存在意義を見失う。

周りの評価など、どうでもいい。まずは自分が〈打鉄式式〉を信じてやること。それが大事だ。

「安心して。たとえ、周りが『〈打鉄式式〉は失敗作だ』と笑っても、私は笑わないわ。創作の難しさも、産みの苦しみも、私はすべて知ってるもの。大事なのは、転ばないようにすることじゃない。転んでも立ち上がる勇気を持つこと」

人は成功者を妬み、失敗者を嗤う生き物だ。だけど、それを恐れていては、何も得られない。転んでも立ち上がること。その勇気を簪は

ロリーナからもらった気がした。

自分が尊敬する彼女が理解してくれているなら、怖いものはない。ロリーナに勇気づけられ、沈んでいた気持ち在上向く感覚を簪は自覚した。

「はい。がんばってみます」

「うん、やっぱりあなたはできる子」

顔をよくした簪を、ロリーナはよしよしと愛おしそうに抱きしめる。

服越しでも伝わるやわらかな感触と、ミルクのような甘い香りが、簪を心地よい安心感に導く。思わず「……ふみやあ」とこぼす簪。ロリーナの包容力にずっとこうしていたくなるが、試合時間は近づいていた。それを箒が告げる。

「簪、そろそろ、時間だぞ。甘えてばかりいないで準備したらどうだ」
簪はバツと離れて耳まで赤くした。

「……あ、甘えてなんか、ないからッ」

「でも、簪、赤ちゃんみたいだったよね」

「いいな、簪、俺も甘えてーぜ。——なんて思ってたでしょ、

一夏」

「思ってたねえよッ」

「どうだか。あんた実はまだ乳離れできてないんじゃないの」

「あらあら、一夏くんたら、うふふ。——じゃあ、一夏君もぎゅーってしてあげましょうか」

大きく手を広げたロリーナに一夏はたじたじとした。男としてのあの豊満な胸に飛び込みたい衝動に駆られるが、負けたら「やっぱり」と野次られるのが目に見えている。一夏はぐっところえ、おしむように言った。

「いや、いいですから」

「そうか。なら、私が代わりに」

と、行ったのはラウラだ。それに続いてシャルロットも「じゃあも、僕も」とロリーナの胸に飛び込む。そして「あたしも混ぜなさい」と鈴が加わると、最後には箒まで「では、私も甘えさせてもらおう」と

その輪に入った。

「ふかふかして、気持ちいいね、ラウラ」「うむ。これは心地いい」「ああ、この巨乳なら許せるわ」「私もこんな包容力のある女性になりたいものだ」

女性の腕の中に子供がわんさかと。その様子はまるで子猫が母猫のおっぱいを求めて、群がっているようだった。

「うふふ、みんな甘えん坊さんね」

たくさんの少女を抱えてもなお、まだロリーナには余裕が感じられた。胸が大きければ、その懐も大きい女性だ。

その輪からひとり取り残された一夏が振る舞いに迷っているとモニターが開いた。

『あなたがた、いつまで待たせますの！』

時計を見れば、すでに開始時間を5分も過ぎていた。



「女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコットのわたくしを待たせるとは、いい度胸ではありませんか、更識簪」

第二アリーナ。5分遅れで現れた簪に、セシリアは怒気を含んだ声音で言った。

「…………ごめん。心の準備が、なかなかできなくて…………」

心の準備。引っ込み思案と聞く彼女のことだ。多くもないが少なくもない観客の前で戦うことに重圧を感じていたのだろう。メンタルの弱さは、セシリアも知り及ぶところだったが、容赦はしなかった。「模擬戦程度の重圧に屈してしまうようでは、日本の代表も苦勞いたしますわね」

許よりセシリアはウジウジした人間が嫌いだ。そういう人間を見ると、嫌いだった父親を思い出して、感情が尖ってしまう。そんな相手に負けると言ったアリスの件もあって、気分はすこぶるよくなかった。

「……うん。月子には苦勞かけてる。……だから、ここで勝って安心させる」

しかし、彼女の刺々しい言葉を受けても、簪は表情を変えなかった。普段なら、自分を責めそうなものであるのに。

明らか心境に変化がある。誰がそうさせたのかわからないが、この手の精神的な揺さぶりはもう彼女に通用しないだろう。なら、あとはISの実力で甲乙をつけるまでだ。

「あら、勝つだなんて誰におっしゃっているのかしら。わたくしはイギリスの代表候補生ですよ」

「……わたしだって日本の代表候補生」

示し合わせたように、両者は愛機の出力を上げた。ジエネレーター出力を“待機”から“戦闘”へ。みなぎったエネルギーを全身にほとばしらせながら、まずセシリアが二発撃った。簪は一発目を並行移動でかわす。しかし、二発目がかわしたその先で命中した。

偏差射撃。相手の回避進路を読んでの攻撃だった。

(ふふ、どうかしら?)

序盤の出端を挫く一撃。相手の動揺を誘うそれを決めたセシリアは内心でほくそえんだ。

動揺は人間の行動力に多大な影響を与える。動悸が早まれば、思考力は低下する。心拍数が上がれば、体力の消費も大きくなる。いかに平常心を維持できるか。それが勝負の胆と言っている。

しかし、予想に反して簪の動揺はわずかだった。時間にすれば一秒に満たないほどの。

(あら、すぐに持ち直した……?)

精神面が脆弱な彼女のことだ。すぐには立ち直れまい。そう高をくくっていたのに。

セシリアは意識を集中させて、何かをつぶやく簪の唇を注視した。

——転んでも起き上がること、それが大事。

彼女の唇は呪文のようにそう発信していた。

どうやら、その呪文が彼女の平常心を保つ魔法の言葉になっているようだ。

「ふふ、無駄に遅れてきたわけじゃなさそうですね。そうでなくては」

心の弱き人間を撃つのは忍びない。

覚悟がきまっているなら、こちらも容赦なく撃てるというもの。

「では、踊りなさい。セシリア・オルコットとくブルー・ティアーズが奏でるワルツで」

セシリアは再び《スターライトMK-IV》を照準し、十字カーソルと照準グリッドを重ねて銃爪を絞る。さらに相手の回避先を予測して追加の一発。簪は一撃目をかわさず、受け止めた。

（回避先が読まれるなら、下手な回避はせず、反撃しようという考えかしら）

セシリアの予測通り、簪はひるむことなく荷電粒子砲を脇下から潜らせ構えた。

発砲。

しかし、あたかもコンピューターで計算したような正確無比の攻撃を、セシリアは宙返りの要領でやりすごし、回転後に《スターライトMK-IV》で反撃してみせた。カウンターのカウンターだ。

（くっ……）

蒼い閃光がく打鉄式式の右脚部に命中して、簪が姿勢を崩す。

その簪にセシリアは射線突き付け、優勢を主張するように微笑を見せた。

「いい射撃でしたわ。精度も悪くありません。けれど、あなたにはセンスが足りませんわ。——それも当然かしら。あなた、機械に命令されるがままトリガーを引いているんじゃないやなくて？」

その通りだった。荷電粒子砲《春雷》は斜角も方位も、発射の機さえ全てコンピューター制御になっている。簪は何も考えず、「撃て」と言われた時にトリガーを引けばいい。簪は射撃をシステムに丸投げしていた。なぜなら——

「……わたし、射撃苦手だから。……わたし、射撃技能【C】だし」「なっ……」とセシリアは絶句した。

射撃技能【C】。つまり、ドのつく素人。なのに、あの正確無比な

射撃。彼女の言葉が本当なら、打鉄式式への（射撃システム）は素人でも玄人並みの底上げが可能ということになる。

（中国が技術解明を急ぐのも、うなづけますわね）

＜打鉄式式＞の射撃システムは新兵ですら熟練の兵士に変えてしまふ代物。質より量でもなく、量より質でもない、質と量を兼ね備えた部隊が作れるなら、それは他国にとって脅威に他ならない。

いや、もつと恐ろしいのは、このシステムが輸出によって、テロリストにわたることだろう。

テロリストが特殊部隊と同レベルの練度を安易に手に入れられるようになれば、国家の優位性は喪失し、最悪、近代国家がテロリストに敗北することさえありうる。現に月光といった無人兵器の無制限輸出により、近代軍隊の優位性は失われつつある。

（日本が武器を国外に輸出しないわけですわ……）

しかしながら、これほどの兵器を商品化せず、国内向けに留めておくのは惜しい——と考えてしまうのは、商売人の家系に生まれた血筋ゆえか。これほどの性能なら、最後発でも十分に市場を獲得できるだろう。その経済効果はおそらく数十兆円はくだらない。

（いえ、お金ではないのですわね）

そう、金ではないのだ。金儲けより大事なことが、この世界にはある。だが、それはいまこの場で語るべきことじゃない。セシリアは＜打鉄式式＞の性能に驚かされ、逸れていた意識を集中し直した。

「確かに、あなたの荷電粒子砲は完成されたシステムですわ。ですが、最後に物を言うは、ハイテクじゃなく、戦う人間の意思^{ウィル}。機械の性能に頼るだけでは、このセシリア・オルコットには勝てませんわよ、精霊の姫君」

妖精女王が再び《スターライト Mk-IV》を構え、簪を狙い撃つ。



眼前で炸裂した蒼い閃光に目がくらみ、簪は怯んだ。

「……やっぱり射撃戦は分が悪い……」

相手の動きを先に読みした偏差射撃、自分を正確に打ち抜いた精密射撃。こちらの〈射撃システム〉が優れているとはいえ、こと銃を使った戦闘では、セシリアが一枚も二枚も上手だ。真っ向から撃ち合っても勝てる見込みはないに等しい。

(……なにか別の方法、考えないと)

点でダメなら、面で攻めるのはどうだ。《山嵐》の四八という物量で攻めれば、効果は得られるか。いやしかしだ、彼女の射撃力と機体の機動力を以てすれば、その迎撃も可能かもしれない。セシリアはかつてMD(ミサイル防衛)を主眼に開発された〈銀の福音〉を負かしている。

彼女のミサイル迎撃能力は〈福音〉以上。《山嵐》の物量でも難しいか。

(……ううん、大丈夫、この子なら)

簪はへマルチロックオン・システム〉の智能エージェントを起動させた。

「照準レーダー展開。標的の補足開始」

視界に48の照準升とクロックメーターが表示される。それらがコロニーを守るために敵へと群がるミツバチのようにセシリアを追いかけ始める。

↑——目標補足完了——↓

メッセージと共に、非固定浮遊部位のミサイルハッチが開く。サイロからせり上がってきた弾頭は、発射のタイミングを待つように、受信アレイのシグナルを赤から青に点灯させた。

「1番基から48番基まで問題なし。管制誘導モード1、《山嵐》発射っ！」

推進装置に火が入り、マイクロミサイルが〈打鉄式式〉から飛び立つ。

襲い掛かってくるミサイル群を、セシリアは《スターライトMk-IV》を薙いで迎撃した。

↑——報告：18番基が撃墜されました——↓

早々に1基のミサイルを失うが、簪は怯まない。高々48基中の1基。この程度の損失なら問題にならない。

それに《山嵐》は簡単に撃墜しきれない。

そのわけを、迎撃するセシリアの苛立った声が告げた。

「く、このミサイル、誘爆効果を回避してきますわねッ」

ミサイル戦術には「兄弟殺し」という言葉がある。通常ミサイルは個々の判断で敵を追尾するため、誘爆で味方のミサイルまで撃墜してしまうことがある。これが兄弟殺しだ。しかし、《山嵐》はへ知能エージェントが管制塔の役割を担うため、ミサイル間でそういった航空事故が発生しない。

さらにこのへ知能エージェントは自分で戦術を組み立てる。ゆえに高い柔軟性を有し、レーザによる貫通を計算に入れて一射線にミサイルが並ばないように統制することもできる。

つまり、誘爆や貫通による一括排除が狙えないため、セシリアは四八を超えるミサイル群を一発一発ずつ撃ち落とすしかなかった。その手間ときたら……。相手は物量に訴えてきているというのに、ちまちまと撃ち落とさなければならぬこと。それに苛立つても、セシリアは余裕を崩さなかった。

「マルチロックオン・システム」。よくできたものですわ。——けれど、このセシリア・オルコットを舐めてもらっては困りますわ」

セシリアはコンソールパネルを開き、《ブルー・ティアーズ》の火器管制インターフェースをタップした。

↑――：《ブルーティアーズ》No1：BT-Energy [■][■][■]

■【Online】――↓

↑――：《ブルーティアーズ》No2：BT-Energy [■][■][■]

■【Online】――↓

↑――：《ブルーティアーズ》No3：BT-Energy [■][■][■]

■【Online】――↓

↑――：《ブルーティアーズ》No4：BT-Energy [■][■][■]

■【Online】――↓

「さあ、踊りなさい。《ブルー・ティアーズ》とわたくしが奏でるワル

ツで」

セシリアは非固定浮遊部位からビットを射出し、さらに自身も《ス
ターライトMk-IV》を構え、ミサイルの迎撃行動に移る。単純に手
数を増やして対応する。ありふれた方法での対応だったが、簪は面を
喰らった。

「……え、ビット展開時は、動けないんじゃない？」

模擬戦前、参考にした学園アーカイブでは確かにそうだった。

ビットの制御には多大な集中力が必要であるため、行動を止めざる
を得なくなる、と。

「あら、人間は成長しますのよ」

そう、人間は成長する。この数か月のさまざまな出来事が彼女をよ
り優れた操縦者へと成長させていた。その成長を見せつけるように、
セシリアはビットと共に次々とミサイルを撃墜していく。38番基
撃墜、29番基撃墜、40番基撃墜、5番基撃墜、35番基撃墜、8
番基撃墜、22番基撃墜、14番基撃墜。迎撃手数が5倍に増えたこ
とで、ミサイルの撃墜数も5倍で増えていった。

「機械はあくまで人を支えるもの。全てを機械に委ねるあなたにその
成長はあって？」

セシリアがそうつぶやいたときには、ミサイルの残数は8基まで一
掃されていた。

これまでに命中させられたミサイルは——ゼロ。その事実が簪に
暗い影を落とす。

「……やっぱりダメ、なの……？」

自分の技術力では彼女に敵わない。

そして、人間的な素質でも負けている気がして心が折れかける。

いっそ、機体に損害が出る前に降参してしまおうか、そんな風に
以前の彼女が顔を出しかけた時だった。

↑——メッセージ：継続を希望します——↓

開かれたメッセージウィンドウに「……え」と驚く。

〈知能エージェント〉は操縦者に代わって戦術を組み上げる代理シ
ステム。こういった形で明確な意思が示されることはない。この現

象は製作者である簪の理解を越えていた。超えていたが、続けるつもりだということとは理解できた。

(この子は諦めてない。なら、わたしもまだあきらめちゃダメだ……)
〈打鉄式式〉は何も答えなかった。代わりに戦闘レコーダーを再生した。

『機械はあくまで人を支えるもの』

↑——武器情報：対複合装甲超振動薙刀《夢現》——↓

それはさきほどセシリアが放った台詞の音声だった。

なぜ、それを再生したのか。——簪はその意図を無機物と有機物を越えて理解した。

「……うん、わかった」

やはり〈打鉄式式〉は何も言わなかった

ただ、残ったミサイルを再び〈ブルー・ティアーズ〉へ突撃させた。

セシリアは《スターライトMk-IV》を構え、銃爪を絞った。

爆発。

40回以上見た光景がセシリアの眼前で繰り返される。——いや、今度は違った。レーザーによって加熱されたミサイルが誘爆で連鎖的に爆発したのだ。その大きな爆発がセシリアの視界を一瞬にして塞ぐ。

(どういふことかしら？　いままで誘爆を回避してきたのに。ここに来てシステムの不具合?)

わからない。だが、これですべてのミサイルは撃墜した。

〈打鉄式式〉の積載量を考えれば第二波はないだろう。

射撃戦では負ける気がしない。相手の万策は尽きた。あとは相手に投了させるだけ。そう気を緩めた瞬間——セシリアの視界を覆う爆風の中から、〈打鉄式式〉が現れた。

それも、あろうことか荷電粒子砲とミサイルユニット、電子兵装をパージした状態で。

(……〈打鉄式式〉が作った接近のチャンス、無駄にするわけにはいかない)

そう、〃兄弟殺し〃はこちらの接近を悟らせないための布石だっ

た。

セシリアの能力は明らか自分を凌駕している。その彼女に敵う見込みがあるとするれば、近接格闘戦に持ち込むしかない。だが、一夏戦で痛い目を見ている彼女が、そう簡単に接近を許してはくれないだろう。そう高を括っていた簪に、〈知能エネルギージェント〉は残りのミサイルを使つて弾幕を形成し、彼女に接近の期を与えた。

——そう、〈打鉄式〉は知っていた。

自分が何のためにあるのか。

そして簪に何ができるのか。

レコーダーの再生と武装ウィンドウはその暗示。簪はそれの的確にくみ取つたのである。

荷電粒子砲とミサイルユニットを脱ぎ捨て、身軽になつた簪は一對の推進器に力を蓄え、軽やかに加速した。そして、その手に対複合装甲超振動薙刀《夢現》を展開し、セシリアの懐へと飛び込む。

「くっ……インターセプター」

弾幕に視界を奪われ、接近を許してしまったセシリアは咄嗟に近接ブレードで防御しようとした。

簪は下から薙刀を振り上げる。カンッと鳴つて弾かれた《インターセプター》が宙を舞う。

防御ブレードを失つたセシリアは「くっ……ッ」と咄嗟に後方へ飛んだ。

そのセシリアに向かって、簪は落ちてきた《インターセプター》をすくいあげるように弾いた。

まるでアイスホッケーのプレイヤーがシュートを放つように。

スコーションツと飛んできた《インターセプター》にセシリアは「きやっ」と目を塞ぐ。

その隙に、簪が長い柄を使つて、セシリアを足払い。そして、転倒した彼女の鼻先に薙刀の鋒先を突き付けた。

ここまでの流れは2秒弱。簪はしれつとした顔だったがセシリアは蒼い目を大きく開いた。

——彼女は簪が薙刀の名手であることを知らなかった。

「……続、ける？」

と首をかしげる簪。セシリアは苦い表情を見せ、投了のボタンをタップした。

♡

♣

♠

試合終了後。

《春雷》と《山嵐》をスカートアーマーのサブアームで回収し、簪はピットへ帰還した。

最初に簪を出迎えたのはロリーナだ。彼女は簪の戦いを称えるようにやさしい笑顔を向けた。

「うん、やっぱりあなたは、やればできる子だったわ」

簪の胸の奥でぐっと「何か」がこみあげる。

女性としても、技術者としても、尊敬する彼女の期待に副えられたことが嬉しかった。

「……これも、ロリーナさんのおかげです」

彼女の協力なくして「マルチロックオン・システム」の完成はなかった。当然ながらこれの完成がなければ、今回の模擬戦での勝利もなかった。なにより、自分に「自信」という掛け替えのない贈り物をくれた彼女には感謝の言葉しかない。

「うふふ、どういたしまして。これで私から教えることはもう何もないわね。だから、最後はこの言葉を贈って、あなたの卒業にするわ」

ロリーナはまっすぐと簪を見据え——『科学者は罪を知った』——と言った。

「これはわたしのお爺さんの同僚が言った言葉。科学技術は人を幸福にも不幸にもするわ。だからこそ、それを生み出す科学者は、時に自分の発明品と向き合い、その未来を考えないといけない。それを忘れないで」

ロリーナの祖父はヒロシマやナガサキに投下された原爆の開発者だった。彼女の祖父は、フォンノイマンと共に、核分裂に必要な計算

を行う爆縮レンズの開発に携わっていた。そして、ヒロシマ・ナガサキに大きなきこの雲が生えたその日から、祖父は自らの行いをひどく後悔するようになったという。

科学者の傲慢は、科学の暴走を呼ぶことを、ロリーナは一番に教えたかった。

彼女がゴジラを簪に見せた理由もすべてそこにある。

ロリーナは祖父と同じ後悔を、そして「白騎士事件」を起こしてしまった篠ノ之束と同じ後悔を、簪にしてほしくなかった。

「でも、あなたなら大丈夫だと思う。＜打鉄式式＞が何のためにあるか、あなたはもう知っている」

自分がなぜ＜打鉄式式＞の開発にこだわったのか。その力を何のために使うのか。すでに決まっている。一寸の迷いもないほどに。ならば、ロリーナの心配は杞憂に終わるだろう。

やわらかな笑顔でそう言ったロリーナに、簪もほっこりする。

ロリーナ・リデル。本当の名前はヴェロニカ・エインズワース。わずか14歳でMITを卒業したIQ300の才女。ロボット技術と人工知能に類まれなる才能を持つ彼女は、簪にとってはまさに雲上人だった。それがいつしか姉以上に身近な人になりつつあった。自分と同じオタクで、ちよっぴり婚期に悩む彼女が、簪は好きだった。

「簪、やったな」

ロリーナが卒業の言葉を告げ終えると、通路奥から一夏たちがやってきた。

そばには鈴とシャルロット、ラウラ。

「やるじゃん。セシリアを負かすなんてさ」

セシリアは鈴と同等の実力を持っている。そのセシリアを、簪は自分の特技と技術で負かしたのだ。姉や親の威光だけじゃない。鈴はそれを認めざるを得なかった。

「――で、負けた感想は」

と、アリスと共にBビットからやってきたセシリアに問う。

「た、たしかに、今回は負けましたけど、次はわたくしが勝ちますわ。そして今度こそ貴女が持つ秘術を手に入れてみせますから」

簪は色白の肌を蒼くした。——……あ、あきらめてないッ。

「そのとき、可憐なフレキシブルをご覧にいただけますわ。みなさん楽しみにしてくださいさって」

「いや、そのままに、あんたは格闘戦を克服した方がいいんじゃないの。終盤のアレ、正直見ていられなかったわよ？　なによ「きやつ！」って。女の子みたいな悲鳴だして」

「わ、わたくしは女の子ですけども……」

「でも、格闘技術がまるで成長しないことは事実だよね」

射撃の腕前はここの誰よりも優れているのに、ライフルをナイフの持ち替えた途端、最弱になるのがセシリアだ。格闘技術においては、一夏に負けたときからまるで成長していない。

「なにが『人間は成長するものですわよ(キリッ)』よ。ね、シャルロット」

「うんうん。セシリアってすぐ自分のこと棚に上げるよね」

「ぐッ、あげてなんて……。大体、成長していないわけじゃありませんからッ。わたくしは刃物みたいなものを使いたくないだけですの！

刃物で斬り合うなんて野蛮人のすることですものッ！」

『ああん？　誰が野蛮人だって？』

アリス、一夏、箒、ラウラが揃ってセシリアにメンチを切る。

そして、近接格闘組を敵に回してしまったセシリアは尋常じゃない脂汗を流すのだった。

第91話 すれ違わないために

放課後の生徒会室。生徒会長・更識楯無は肩を大きく回して、執務机に書類の束を投げた。

一学期の個人別トーナメントの代理案とか。防諜関連の報告書とか。学園の生徒会長と、日本の防諜を担う二つの立場から、目を通さなければならぬ資料や報告書の数は膨大だ。楯無も人間である。かれこれ3時間も睨みつづけければ肩の一つも凝る。

「やれやれ」

楯無は通っていた資料を机に投げ、お茶を啜った。茶はすっかり冷めていたけど、入れて直してくれる幼馴染はいまここにはいない。来週ここで〈例の会談〉があるため、警備システムをテストしてもらっていた。仕方がないので、楯無は席を立ち、自分で淹れ直しに行く。

その片手間、つけていたテレビに視線をやる。

テレビではNHKの国会中継が放送されていた。

画面の向こう側では、野党が現政権の防衛政策について、なにやら質問を投げかけている。『今後の日米関係はどうあるべきだとお考えか』とか『白騎士事件』に際する新型TMDシステムの導入は、専守防衛に反するのではないのか』とか。

日本は憲法で戦争を放棄し、専守防衛を国防の旨としているが、それは日米安保が十全に機能している前提が必要である。だが、〈白騎士事件〉で2000基以上の大量破壊兵器が使用された時、アメリカは守ってくれなかった。日米関係が揺らいだいま、日本は大きな岐路に立たされたと言っている。

それに際し、現政権は日米安保に見切りをつける方針を切り出した。自力防衛に舵を切り始めたのである（楯無が国家代表の身分でロシアに潜入していることも、その一環）。しかし、その防衛費の増加に喘いでいるのが現状だった。

「防衛費の増加にヒイヒイいうなら、無駄に増えるづける女性向け社会福祉の予算を減らせばって思うけどねえ。ま、そうすれば、女性支持率はだだ下がり。次の選挙で勝てなくなるでしょうけど。――」

おとつと」

国会中継に気を取られ、あわや湯をこぼすところだった。

楯無は並々注いだ湯飲みを手にそと席に戻る。そして応接用のソファにすわる着物の女性に視線をやった。くるつと内側を向いた髪と、はんなりとして雰囲気。——彼女の母、更識櫛菜であった。

その彼女は国会中継そつちのので「そや」「そこや」「がんばるんよッ」と何やら画面に向かって応援していた。

「おかあさん、さつきから何を見てるの?」

「ん? 簪ちゃんの模擬戦よ」

楯無は会長椅子を倒す勢いで立ち上がった。こぼれた茶が書類を滲ませるが、気にしなかった。

「き、聞いていないわよッ!?!」

「あらまあ、そうなん? おかあさんは式式の完成が近いゆてから、来たんよ。そしたら、いま、えげれすの代表候補生と模擬戦してるーゆわれたさかい、ここで待つてようと思てなあ」

「イギリスの代表候補生……。またあの子なの」

楯無の脳裏におーほつほと高笑いするセシリアが浮かぶ。

「またなんか?」

「一学期も一夏君に模擬戦をふっかけてたのよ。自分より弱い子ばかり狙つて。弱いもんいじめがすきなのかしら」

「ふふ、刀菜ちゃんと一緒やね」

「そんなことないわよっ」

「そやつたかなあ。ようしとつたで? アリの行列に石を置いたり、猫をひたすら追いかけたり」

「そういえば、そんなこともあったような……つて、今はそれどころじゃないのよ。というか、なんで本音ちゃん一言いつてくれないのよ! ともかく、今からでも——」

きつとまた裏で手を引く気なのだろう。

飛び出そうとする娘を、母は「あきません」と首根っこを掴んで止めさせた。おそらく、櫛菜がアリーナに向かわず、生徒会室にやってきたのは、このためだったのだろう。

「ちよつとおかあさん、離して。簪ちゃんが負けちゃったらどうするのよ。私がどれだけ苦勞して自信をつけさそうとしてきたか、知ってるでしょ。負けたらまた落ち込んだじゃうじゃない!」

「ええから、ココいとき。ほら」

むうーと不満な顔をする娘を押さえつけるように椅子に座らせる。

楯無はしぶしぶソファに腰を下ろした。

「お母さん、私には厳しいわよね……簪ちゃんには甘いのに」

「そんなことあれへんよ。もしそうやったとしても、刀菜ちゃんは楯無やろ? 家長が母親に甘やかされとつたら誰もついてこうへんのかな?」

「う、そりや、そうだけど……」

「もう、そうぶーたれへんの。ほら、一緒にみましような」

娘の隣に座り、持っていたモニタを二人で覗き込む。試合は中盤に差し掛かるところで、簪は《山嵐》を展開していた。一見、攻勢に転じたようにみえたが、セシリアの回避機動と高い狙撃力のまえに、ミスイルは次々と撃ち落とされていく。櫛菜は「いけ、いけ」と高揚した様子で娘を応援するが、姉の楯無は気が気ではなかった。「ぐ、やっぱりセシリアちゃんやるわね」

高飛車なセシリアだが、操縦の腕前はピカイチだ。

姉の手回しで代表候補生になった簪とは、やはり技量に開きがある。

「ほんまやね。このえげれすの娘さん。うまいこと撃ち落としやはるね。けど大丈夫よ。簪ちゃん、へマルチロツクオン・システム」の仕上がり、ええ感じって言うてたから、ほら」

と、ケータイを取出し、そのやり取りは見せた。

櫛菜へ打鉄二式の開発どうや?

いい感じだよ。

(*・・・?・・・*)?<簪

櫛菜へほうか、ほうか。そりやよかったわあ

うん、ロリーナ

さんのおかげ<簪

仲睦まじい親子のやり取りに、楯無はどこか疎外感を感じた。こちららは、ここ数か月、まともに連絡を取り合っていない。送つても既読さえつかないありさまである。

「簪ちゃん、お母さんとは仲いいわよね」

「そりや親子やもん」

「私、お姉ちゃんなんだけど。簪ちゃんはなんで私を避けるのかしら」
「やっぱり劣等感なのかしら。」

そうつぶやく娘に、櫛菜は苦笑いを見せ、突然なつかしむような口調で語り出した。

「——刀菜ちゃん、母屋の裏に柿木、あるの知ってる？」

「ん？ 確か私が生まれた年に植えたのかなんとかかっていう？」

「そう、そう。んで、7歳のころかなあ、その木のとっぺんに柿がなつて、刀菜ちゃん、それを取ろうと木に登ったやろ？」

10年近く前の記憶だったが、そんなことをしたような気もする。記憶が正しければ、そこへ先代（父親）が通りかかり、「危ないから」と代わりに柿を取ってくれたはず。

「そうそう。でね、そのとき刀菜ちゃんは柿どうした？」

「そりや食べたんじゃない？」

よく覚えていないが、柿を食べたくて登ったのだから、きっと食べたに違いない。

しかし、櫛菜は意味ありげな含み笑いを見せるだけだった。本当にそやったかいなあ？と。

そもそも、なぜ母はいきなりそんな話をしたのか。

その意図を測りあぐねていると、映像の中でセシリアが40基目となるミサイルを撃ち落としていた。簪の切り札が潰えようとしている。こうしてはいられない。

「お母さん、やっぱりわたし行つてくるっ」

制止を振り切り、楯無は生徒会室を飛び出していく。

櫛菜はやれやれと首を振った。

——刀菜、手を貸すのはええけど、それは簪ちゃんを信じてないってことでもあるんやで。

その楯無が、簪の勝利を知ったのは、彼女が丁度アリーナに到着したときだった。

♡

◆

♣

♠

これは初勝利を飾った晩のことである。簪は幼馴染の本音に呼び出され、学園の食堂に来ていた。今度はなんだと身構えながら食堂のドアを潜ると、まず大きな横断幕が目映った。

へかんちゃん、打鉄式完成おめでとうパーティー。ふれぜんつばい のほほん

そう書かれた横断幕を目にして簪はメガネをはずし、目をこする。まるで聞いていない話だった。

「……え、なに、これ」

簪が食堂を見回すと、横断幕の下には、アリスとロリーナ、そして月子がいる。

他には4組のクラスメイトがちらほら。

「なにつて、かんちゃんの専用機完成を祝うパーティーだよ！」

主催者が長い袖を振り回しながら言う。簪はこれっぽっちも表情を変えなかった。

「……そんなことしなくてもいいのに……」

「ええ!? せっかく準備したのに……!」

いまいち喜ばない簪に本音がまた長い袖を振り回す。

人見知りの簪にすれば、人が集まる出来事は、たとえばパーティーであっても遠慮したいところだった。ましてや交流の薄いクラスメイトに祝われても……という具合である。どうせやるなら、身内でこじんまりとやりたいのが彼女の本音だった。

「なんで4組のみんなまで呼んだの。……わたしはあの人の手回しで代表候補生になったんだよ……。……そんなわたしをクラスのみんなは好意的に思っていない……」

「だからだよ。だから、みんなに知って貰いたいんだよ。かんちや

んがホントはすごい子だって。家柄なんかのおかげじゃないんだって」

満面の笑みで彼女はそう言った。彼女はウソをつかない。なぜなら彼女は本音だから。

彼女は心から「簪はすごい」と思っていて、みんなにもそれを知ってもらいたかったのだろう。きつと先の模擬戦での一件もその思いが強かったからこそその行動だったに違いない。

「ほら、かんちゃん、こっちこっち」

本音が強引に手を引き、簪を会場につれていく。

本音は昔からそうだった。昔から子供の輪に入りたくても入れなかった簪を、その輪に誘ったのは本音だった。簪はそのことを思い出した。彼女がいてくれなければ、いまごろ自分は完全に自閉していたと思う。

そんな幼馴染の感謝すると共に、簪はすこし勇気を振りしぼることにした。

「はあ〜い。主役の登場です」

簪がステージに上ると、何十人もの視線が自分に向いた。勝手に非難の眼差しだと思い込み萎縮する簪へ、最初に声をかけた人物は日本の代表、月子だった。

「簪ちゃんッ」

どつと押しかけてきた月子を、簪は華奢な体で頼りなく支えた。

「……月子、そんなに勢いよく飛び掛られたら複雑骨折する」

「……ようがんばった。打鉄式式、完成おめでとう！」

どこか涙声でそういった日本の代表に、簪は笑みを浮かべた。

「……ありがと、月子。あと、心配、かけた」

「ううん、心配なんてしてへんよ。簪ちゃんはできる子やって知ってるもん。せやなかつたら、オーダーメイドで《夢現》作ったり、ヘキヤノンボール・ファストの整備メンバに選んだりせえへんやんか」

「……そっか。ほら、泣かないで。国家代表でしょ」

涙ぐむ月子の髪をぼんぼんと叩く。傍目には、どちらが代表かわからなかった。そんな様子にまわりからも暖かい笑いが漏れる。気づ

けば、四組のクラスメイトに囲まれていた。

「にしても更識さんすごいよね。自分で専用機を作っちゃうなんて」
「だよなあ、あたしてつきり、家の力で好き勝手やってんのかと思ってたわ」

「でも相応の実力があつたんだよね。今回の模擬選でそれがよくわかった」

「うん、納得、納得」

向けられた称賛の数々に、簪は気おくれした。

鼻肩だの、不公平だの、言われて鬱屈していた簪にその言葉は暖か過ぎた。なにより誰も「さすが会長の妹だな」と言わなかったこと。更識楯無の妹としてではなく、更識簪として認められたことが嬉しかった。

「それにイギリスの代表候補生にも勝っちゃうんだもん」

「……そ、そんな、大したこと、ないよ」

「ほお、わたくしに勝ったことが、〴〵大したことない」というのかしら
背中から鈴とした、でもどこか冷たい声が聞こえ、簪は振り返った。
今回、簪が模擬戦で負かした〈妖精女王〉ことセシリア・オルコツトだった。

「このセシリア・オルコツトも安く見られたものですわ」

セシリアは「自分に勝つたのだからもっと大きい顔をしろ」と言いあげだった。簪の謙虚な振る舞いで、弱く思われることが嫌らしい。ぐっと顔を近づけてきたセシリアに、簪は光速でロリーナの後ろに隠れた。人間、苦手意識というものは簡単に克服できないらしい。

「……あ、いや、それは、謙虚というか、言葉のあやとか」

「けんきよ？ けんきよとはなんですか？」

おおよそ唯我独尊を貫くセシリアにとって縁のない言葉だから知らないのも無理ない。

「まあ、いいですわ。約束のこれを持ってまいりましたわ」

セシリアが取り出しのものは、冠を被った女性の横顔と、赤、青、緑、茶の妖精が描かれたステッカー。

「約束通り、あなたに〈妖精女王〉を名乗る権利を差し上げますわ。――

「ただし、今だけですわ。必ず取り戻しますから、覚悟なさってくださいな」

(……覚悟しろといわれても、別に返せといわれたら返すけど……)
それだとセシリアが納得しないだろうが。

とりあえず、デザインは悪くないのもらっておくことにする。簪が「……うん」と消極的に受け取ると、事情を知らないクラスメイトから「おおッ!」と歓声が漏れた。きつとクラスメイトたちは、簪がなんかすごそうな称号を得たと思っっているのだろう。

「さて、みなさん、主役がきたところで、パーティーを始めましょうか」
そして、アリスの言葉でく打鉄式型完成パーティーは始まった。



用意していた日本の国家代表とイギリス代表候補生の対談、簪とローナのプチIS開発講座はなかなかの反響で終わり、後半となったパーティー会場はまだまだ盛り上がりを見せていた。

私はそのようすをすこし離れた場所から見守っていた。

主役の簪といえは、クラスメイトに囲まれ、質問責めに遭っていた。けれど、怯むことなく意欲的に答えている。専用機を完成させられたこと。それが通じたこと。そして、クラスメイトと仲良くなれたこと。それらが自信と自己肯定に繋がったのだろう。いまの簪は出会ってから今までの中で一番いきいきしているように見えた。これならもう大丈夫だろう。そう思った私は、最後のイベントの準備に取り掛かることにした。

「ちよつと、簪こっちにきてください」

「……ん?」とやってきた簪の肩を抱き、私は声を張り上げる。
「パーティーをお楽しみ中のみなさん。そろそろパーティーのメインプログラムに移りたいと思います」

私の一声でパーティー会場の視線がこちらに向く。当然、何も聞かされていない簪の視線も。

それを確認して、このパーティーの本当の目的を明かす。

「今回のパーティー、実は単なる打鉄式式の完成を祝うパーティーじゃありません」

「え、なに、どういうこと」そんな風に色めき立つ会場を、私は手で制し、

「まずそれを明かす前に——出てきてはどうです」

私がパーティーの一角に視線を放つと、バシヤツと何もない空間から水しぶきがあたり、〃招かれざる客〃が姿を現した。——簪の姉、更識楯無だ。

「さすがアリスちゃん、私の隠遁を見破るなんて」

「あなたのことです、ここに紛れ込んでいることは分かっていました。おかげで、わざわざ呼ぶ手間が省きました」

「まさか、このパーティーは生徒会長を呼び寄せるための!?!」なんて4組の誰かが言う。

私は頷き続けた。

「これからのメインイベントに会長の存在は必要不可欠なので」

「あら、どういうこと」

「どういうことも、こういうことです。——のほほんさん、幕の偽装を解いてください」

「おーけー、ぎつつちよん」

のほほんさんが大弾幕に張り付けられていたテープを一気にはがす。

現れた題名を見て、一同はこう叫んだ。

『更識楯無 VS 更識簪 く宣戦 布告 記者会見
く!?!』

くつきりと描かれた文字を読んで一同がどよめく。

私は会場を手で宥め、指先を会長に突き付けた。

「いまここで、簪が宣戦布告します。——更識楯無、あなたをぶちのめすってねっ!」

「……ぴゃッ」

おかしな声を上げたのは会長じゃなく簪だった。

まあ、簪にとつては完全な「寝耳に水」だし、しかたない。けれど、言えば絶対に反対したに違いないから。ほら、簪つてば、私を横断幕の裏に連れ込んできた。

「……アリス、そんな話、聞いていない……」

「言つてませんからね。大丈夫ですよ、今のあなたならきつと勝てます」

「……無責任なこといわないで。無理だから、お姉ちゃん、学園最強だし、ロシアの国家代表だし、わたしなんか敵いつこない。いまからでも遅くないから取り消して。お願い、お願いだから!!」

泣きべそをかきながら、必死に懇願してくる簪に、私はやれやれと苦笑いを浮かべる。

ここまで言われたらしかたない。私は、優しい笑顔で頷き、会場に戻って、

「簪も『かかってこいよ。けちよんけちよんにしてやる』ですつて!!」

げしげし ↑ 「話が違う」と簪がアリスの足を踏みつける音。

「……アリス、なんでそんなこというの。……やったつて実力の差を思い知らされるだけ。……わたしがあの人より劣るつて、みんなの前でさらし者にしたいの!?!」

自分が負けるビジョンしか想像できないから、そんな風に言うのだろう。

だが、才能の違いをさらしたいなんて、これっぽっちも思つちやいない。

私は子芝居をやめ、会長に決闘をふっかけた理由を明らかにした。

「あなたが何のためにここまで頑張つてきたか、それを会長に知らしめるためです。あなたが会長に気持ちをぶつけないければ、あなたも、会長も、何もかわらない。ずっとこのままです。それじゃいままで頑張つてきた意味がないでしょ。勝ち負けなんてどうでもいい。自分の気持ちをぶつけないさい、簪」

簪は瞳の奥を大きく開いた。それから決意を表すように強く頷き、姉を見る。

そして、言い放つ。ずっと雲の上の存在で、届かない存在と思つて

いた姉に向かつて。

「……お、お姉ちゃん!! しよ、勝負、だから!」

気弱だと思っていた妹からの、思いもよらぬ宣戦布告に、会長は驚きを露わにした。

「ど、どうしたの、簪ちゃん。いきなりそんな決闘だなんて。——もしアリスちゃんにそのかさかれて、無理強いされているなら、お姉ちゃんが代わりに断って——」

「……違う。……これはわたしの意思。……わたしの意思であなたに決闘を申し込むの。……アリスは関係ない。……アリスはわたしに勇気をくれた大事なともだち。……悪いようにいわないでッ」

「そ、そうだったわね。ご、ごめんなさい。それは謝るわ」

「……いい。それより受けるの、受けないの。どっち?」

面と向かって突き付けられた強気な言葉に、会長はやはり驚くも、それが妹の意思ならばとおずおずと頷いた

「わ、わかった、受けて立つわ」

「……わざと負けたら一生口きかないから」

「え? ええ、もちろん全力で受けて立つわ。そのかわり、こちらからもひとつ提案いいかしら。どうせなら、専用機持ち、全員参加にしない? 6月の学年別ペアトーナメントの代理案を考えてくれて、せつつかれていてね。セシリアちゃんもリベンジしたいでしょ」

「ええ、機会がいただけるなら、ぜひ参加したいですわ」

「どうかしら、アリスちゃん」

私はすこし思案した。

正直、外野との試合数が増えるのは、まどろっこしく感じるが、ペアというシステムはいいかもしれない。私がサポートに回れることは大きい。

「わかりました。その提案、飲みましょう」

「告知は〈生徒会〉でしておくわ。日程は……ちよつと調整に時間を頂戴。今月はココで特別なことが行われることになっていてね。それが終わってからでいいかしら」

特別なこと。〈デウス・エクス・マキナ〉と〈亡国機業〉の会談のこ

とだ。以前より水面下で進んでいた会談が、このIS学園で行われることは、当然わたしの耳にも及んでいる。

そして、ここの自警団たる〈生徒会〉がその警備にあたることも。まずそれを無事に終わらせることが第一で、専用機ペアトーナメントの日程について詰める作業はそのあとにしてほしいということだろう。

当日は私も警備に当たるので、彼女の要望を「わかりました」と飲んだ。

「うん。じゃあ、そういうことで。それじゃみんなパーティーを再開しましょうか」

そう言ってシレっと簪のパーティーに参加する会長。そして、何食わぬ顔で下級生の生徒と談笑を始める。どんな輪にも瞬時に溶け込める社交性はさすがとしかいいようがない、と私はわりとどうでもいいことを考えた。

第92話 会談

日曜日。休日のIS学園。その上空を、手にリーダーシールドを装備した<ラファール・リヴァイヴ>が通過していく。哨戒機が近海空域を警戒する眼下では、〈生徒会〉の腕章を着けた生徒が、物々しく校舎を見回っていた。その中にはアリスの姿もあり、彼女は<赤騎士>を展開してハイパーセンサーで周囲の警戒に当たっていた。

今から〈デウス・エクス・マキナ〉と〈フアントムタスク〉の会談が行われるからだ。

〈デウス・エクス・マキナ〉は強大な組織力を有し、〈亡国機業〉は各国のIS企業を牛耳っている。双方とも多大な影響力を持つ組織であるがゆえ、内容によつては世界が変わる可能性もある。それを良しとしない第三者の襲撃に備え、〈教師部隊〉および〈生徒会〉がその警備に当たっていた。

それを指揮するアリーナの管制室。

そこでは〈教師部隊〉と〈生徒会〉からいくつもの報告が上がってきていた。

「オラゴン先生、アルファチーム、ブラボーチーム、チャーリーチームからの定時連絡。エリアAからエリアGまですべて異常なし。異変は見受けられないとのことです」

真耶から報告を受けたマルガリータは「引き続き、警戒にあたれ」と返す。

本来、学園の指揮は千冬に一任されている。その彼女は、現在、会談に参加すべく席を外しているため、〈教師部隊〉の隊長を担うマルガリータが、指揮の代役を請け負っていた。

「それにしても、ずいぶんと厳戒態勢ですよ。一体ここで何が話しかかれるんでしょうか」

今回の会談内容は極秘とされている。教員にもその詳細を知らされておらず、ただ学園上層部の命令に従っているだけだった。学園長である轡木素子と、指揮官である千冬、生徒会長の更識、いわゆるレベル4の権限を持つ人間のみしか、その詳細は知らされていない。

「さあな。私たちは仕事をこなすだけだ。全員、気を緩めるなよ」
そう告げ、マルガリータは第一会議室にいる千冬に通信を繋いだ。

♡

♣

♠

『千冬、こちら異常なし』

IS学園、会議室に続く通路。

アリーナ管制室から報告を受けた千冬は「了解した」と返した。

「周囲に異常なし。警備にも問題はないようだ」

「では、引き続き、厳戒態勢を」

千春はそう告げ、部長三人と、デユノア社のアルベール。そして、千冬と共に会議室へ入る。

ドーナツ型のテーブルには、会談相手となるロキがすでに待機していた。右隣の席には幹部の一人、劉春狼。彼らの後ろには、ローズマリーとソフィア、陰陽姉妹が控えている。そして、ロキの左隣では篠ノ之束が、用意された茶菓子を頬張っていた。その束が「お」と顔を上げる。

「やつほおー、ちーちゃんツ」

いきなりテーブルを超えて飛んできた束を、千冬は例のごとくアイアンクローで受け止めた。警備が動くが、それを千春が「大丈夫よ」と手で制す。束は「うんしょ」っと手を退け、千冬を見た。

「ねえ、ちーちゃん。ちーちゃんも、ロキくんとちーちゃんさんとの話し合いに参加するの？」

その視線はどこか鋭くどがっていた。お茶らけていた瞳もにわか
に真剣みを帯びている。

千冬はなぜそんな顔をしたのか理解できていた。

きっと束は焦れ、苛立っていたのだ。何もせず、ただ、日々を無駄に消費していた自分ちふゆに。

「ああ、そのつもりだ」

「それは単なる警備として？ それとも？」

「私も母さんと共に会談に出席するつもりだ」

それを聞き、東は険呑な表情を闇に葬り、満面の笑顔を見せた。「そっか、そっか。えへへ、ちーちゃん、ようやく覚悟が決まったんだね。正直さ、いつまで猿山のボス気取りしているのかなあって思ったよ」

酷い言いぐさだが、千冬は苦笑いを見せた。

「辛辣だな。だが、そうだな。私は子供相手に踏ん返り返ることで、大人の威厳を保とうとしていた。そんな私に母さんは気づかせてくれた。大人とは偉ぶることじゃない。現実と向き合い、責任を果たせる人間のことだと」

力があるものには責任と義務が伴う。それに個人も国家も関係ない。

千春は、力ある大人として、子を持つ母親として、その責任をはたすべく最善を尽くしてきた。

「そうだね。好き勝手が許されるのは子供だけだね。わたしはロキくんに教わった」

東と出会う前の、児童労働者だったロキは、無いような賃金で妹を養っていた。

本当は美味しいもの食べたかっただろう。いっぱい遊びたかっただろう。けれど、自分はクロエの兄だからだと、自分の責務から逃げなかった。

弱く、知も劣る子供でさえ、こうして現実と向き合い懸命に生きている。

そんな彼を見て、東は強い憤りを覚えた。

子供をこんなボロボロになるまで働かせて、大人は何をしているんだ、と。そして、自らの掌を見つめ、自分が放った言葉を反芻させると、もう一人の自分がこう言った。

「おまえも、大人の一人だろ」。

それを聞いたとき「なら、無責任な大人たちに代わって、私がこの子たちの面倒を見なきゃ」という使命感に駆られた。

『至高の頭脳を手に入れたのなら、子供の一人や二人救って見せ

ろ』ってそんなシナプスが束さんの脳内を走ったよ。『できないのなら、わたしはこの世界で贅肉を蓄えた醜悪な大人たちと同じだ』って私は思った。私は「知識」っていう贅肉を蓄えただけの、あたまでっかちな人間にはなりたくなかった」

「そうだな。力は誇示するものじゃなく、何かを成すためにある。私はこの力を未来の子供たちのために使いたい。幸いにも私はその機会に恵まれた。母さんが与えてくれた。——おまえはどうだ？ 今回の会談におまえも出席するんだろ？」

「うん」

千冬は「そうか」と懐かしさのような頼もしさを感じ、頬をわずかにゆるめた。

白騎士事件後、袂を分かったように束は自分のまえから消えた。もしかしたら、もう会うこともないだろうとさえ思っていた。それをさびしくないといえは嘘になったし、見捨てられたと心細かったりもした。その彼女と、あの頃のように再び語り合えること。お互いの立場は違うけれど、千冬は心から嬉しく思った。

「では、始めよう。あなた方の夢の続きを。——母さん、席につけ」

「はあ〜い」

どちらが親でどちらが子か分からないが、束はぴよんと席に着いた。

続くように、千春、千冬、部長たちも席につく。相手側の着席を見計り、ロキは会談の始まりを告げた。

「まず、こちらの要求を受け入れ、このような場を設けていただいたこと、感謝する」

「いえ、こちらとしても、あなたとは話し合う機会が欲しかったところよ。そろそろ、互いの見解を示し合わせたいところだったわ」

「同意見だ。だが、我々の組織はピラミッド型と違い、民主主義的な構造をしている。それゆえに、他幹部の同意がなければ、事を実行には移せない。意思決定には時間がかかった」

「けれど、いまは違う。いまはあなたが組織のアルファにしてオメガなのでしょ」

「ああ、いまは俺が組織そのもので、その総意だ。俺が全てを決めている」

「では、あなたとわたしで世界の行く末を決める話を始めましょう」

いままでの優しい雰囲気から一転して、千春は「ルイス・キャロルの顔を見せた。」

「まず『なぜIS学園を襲撃したか』その弁明から聞かせてもらおうかしら」

こうして顔を合わせただけで「デウス・エクス・マキナ」と「亡国機業」はまだ互いに敵でもなければ味方でもない。これからどういう関係を築いていくか。その醸成には『なぜIS学園を襲撃したのか』その真意を公にし、双方に禍根の無い形で事を進めなければならぬ。

「承知した。まずその件においては「亡国機業」の総意ではなく、われわれの独断であったことをまず踏まえてもらいたい」

千春は「わかったわ。続けてちょうだい」と言った。

「では、申開けをさせてもらう。俺がココに「ナルヴィ」——学園側のコードネームという「ゴレム」を送り込んだのは、篠ノ之束の「探し物」を見つげるためだった」

「探し物？ 探し物とはなにかしら」

千春がそう尋ねると、ロキは束を見て続けた。

「篠ノ之束がいうに、形状は高さ3メートルあまりの物体だそうだ。これに接触したことで、彼女の知性は急激に高まり「インフィニット・ストラトス」のテクノロジーが生み出された。篠ノ之束はこれを「モノリス」と呼んでいる」

「モノリス、『2001年 宇宙の旅』かしら」

言ったのはロリーナだった。

2001年宇宙の旅。スタンリー・キューブリック監督が製作した、50年以上も前の古い映画だ。モノリスはその作品における重要なキーワードの一つで、作品の冒頭でサルがこれにふれると、知性が高まって道具を使い始める。

「つまり、その未知の物体が、ISの高度なテクノロジーをあなたにもた

らした、と」

そう発言したデュノア社の社長——アルベールは怪訝な表情を見せていた。

あまりにも現実離れた話だった。信じろというほうが難しい。

「信じがたいことではあるが、存在はするんだ。ISという奇天烈なマシンが存在していること。それがあある意味で〈モノリス〉の存在を証明している」

アルベールは押し黙った。

対消滅反応炉、反重力装置、慣性制御、防御機能。量子化。ISはブラックテクノロジーノロジー在りえない技術だと言われてきた(だから、その存在を証明するため、束は白騎士事件を起こした)。でも、ISはこの世界に存在している。在りえないものがある以上、〈モノリス〉の存在も否定はできなかった。

「しかし束はどこでそんなものと巡り会ったんだ？」

そう問うたのは、幼少期からずっと一緒にいた千冬だった

「とても簡単だ。〈モノリス〉は篠ノ之神社の御神体として祭られていた」

千冬の瞳が開かれる。

「篠ノ之神社の境内にご神体を祭る社があることは聞かされていた。だが、非常に神聖な場所で触ることはおろか立ち入ることも禁じられていたはずだ。私も柳韻どのから強く言い聞かされていた。でも、おまえのことだからな……」

千冬が苦笑いを浮かべる。

破天荒な束のことだ。きつと好奇心に負けて、父親の言いつけを破ったのだろう。

「話を戻す。以前、篠ノ之神社に行ったとき、祭られていた社からご神体がなくなっていた。あつたのは誰かが持ち出した跡だけだ。形跡から持ち出されたのは数年前。丁度、篠ノ之家の『重要人物保護プログラム』が実行されたころだ」

「保護プログラムには、〈白騎士事件〉の重要参考人だった篠ノ之一家の身柄確保以外に、〈モノリス〉の移送が目的でもあつたというのか

？」

情報部・部長の問いにロキは頷いてみせた。

彼は当時十六代目楯無として、篠ノ之一家の身柄保護に従事した人間だった。アリスが箒の誕生日プレゼントに『両親の移転先と面会書』を用意できたのも、彼の協力があったからだ。

「俺達はそう踏んでいる。そのことからへモノリスをもち去った人物をふたつまで絞り込むことができた。一つは、篠ノ之一家の移住を、更識に命じた日本政府。もう一つはその背後にいるアメリカ政府だ。前者の独断なら、秘匿場所はここIS学園だと踏んだ。ここは日本政府の管轄内にあつて、他国に対して不干涉領域だ。ものを隠すのにはもってこいだ」

「で、おまえはへモノリスとやらの所在を調べるため、ここを襲撃した。幹部会の承認もなく」

そんな意見は〈亡国機業〉側から聞こえてきた。幹部の一人でもある劉春狼だった。

「承認が降りないことは分かっていたからな。おまえも反対しただろ」

「あたりまえだよ。正直、そのへモノリスの存在だっていまだ半信半疑だよ。そんな話を大の大人が耳を揃えて聞いているつても変な話さ」

「明確な所在証明がほしいなら、ヴェロニカ・エインズワース女史に話を聞くといい。彼女はへモノリスの存在を予見していた女性だ。彼女の著書『ISはどこからきてどこへ向かうのか』には、理論的にそのことが触れられている。おまえもIS企業の端くれなら読んでおくといい。いい著書だ」

ロリーナは「うふふ、1000部も売れなかったけれどね」と照れ臭そうに笑った

「でも、どうせなら、ボクは著者本人の口から聞きたいね。ぜひ二人きりで」

「え、遠慮するわ」

「そりゃ残念だ」と肩をすくめあと、千春が話を続ける。

「あなたがここを襲撃した理由は理解した。それであなたはへモノリスを手に入れてどうするつもりかしら」

未知の技術は、人類に幸運をもたらす福音にもなるが、終焉を呼ぶ破滅の喇叭にもなりえる。へモノリスを手に入れたあと、何をするのか。それを見極めなければならぬ。

「制御可能なら存在を公にし、世界の共同管理下に置く。危険だと判断すれば破壊するつもりだ」

ISが時代を変えてしまったように、へモノリスの存在がまた世界を変えてしまうかもしれない。テクノロジーとはそういうもの。高い技術力を持つロキだからこそ、テクノロジーの暴走が生む怖さをよく知っているのだろう。

「そう。『IS学園襲撃』は、あなたなりにこの世界の未来を考えてとった行動だったわけね」

「聡明な方で助かる。訂正はない」

「あなたが何を答え、どうしてここを襲撃したのか、理解も納得もしたわ。けれど、ここにへモノリスはないわ。ここはへモノリスを秘匿するために建築されたわけじゃないの」

言葉の真意を見極めるように、ロキはルイスを見据える。

彼女から発せられた言葉にウソの匂いはしなかった。発言に信じて足るだけの重さもあつた。

「了解した。以後の『IS学園に対する調査』の中止をここで宣言しよう。それと襲撃に対する責任を取る意味で、いくつか補償を用意させてもらった」

ロキはいくつかの資料を用意し、それをソフィアに配らせる。受け取った千春、千冬、各部長は補償に目を通した。通し終えた千春は、各部長たちと頷きあい、その受け入れを許諾した。

「わかったわ。これを以って私たちの和解としましょう」そうトントンと資料をまとめ、資料を背後の部下に手渡し「では、改めてあなたが望む未来について聞かせてもらおうかしら。あなたがこの場に来た理由はIS学園襲撃の許しを請うためじゃない。そうでしょ？」

彼は頷く。そう、自分が掲げる壮大な計画に、彼女の協力と賛同を

取りづけるためだった。

その計画の全貌を彼はいまここで明らかにする。

「まず我々が目指すもの。それは新しい時代の幕開け、新たな社会意識の萌芽だ。そのためにISの方向性を改め、これをもって人類の宇宙進出を目指す」

インフィニット・ストラトスで宇宙から地球を見た東は、真理にも似たひとつの確信を得た。

『この世界に線引きは存在しない。統一せずとも世界はひとつなんだ』そんな確信を。

問題なのは人々がそれを認識していないこと。そこで東はインフィニット・ストラトスを以て、人々を宇宙へ上げ、自身が得た確信に接続させようとした。

しかし、彼女の願いに反して、ISは戦争の道具になった。

歪んでしまったISの在り方を改め、母の願いを再始動させること。それがロキの目指すもの。

「では、ここからは具体的な話をしよう。我々はこの計画の第一段階として『ISの民用化』を進めている。——ソフィア」

ソフィアが各自に資料を配って回る。

資料にはISらしきパスワードスーツの写真と、細かな出力詳細が記載されていた。

「これは？」

「へっへっへ、名づけてインフィニット・ストラトスだよ、ちーちゃんさん！」

東が鼻高々に言い、千冬は資料に視線を落とす。

「フィニット・ストラトス……」

「これはいわば機能と性能を制限したインフィニット・ストラトスの廉価機だ。まだ試作段階だが、これが普及すれば、宇宙開発は飛躍的に早まるだろうと考えている」

宇宙開発最大のネットワークは、膨大な費用だ。わずか一キロの物資を上げるのに数百万円の費用が掛かる。それに宇宙開発は大きな危険が伴う。だが、ISの反重力装置、推進機構、保護機能があれば、その

費用や負担は大きく軽減できる。そこでこの廉価版のISだ。低価格帯のISを発売し、宇宙開発のコストとリスクを軽減して一般企業の宇宙開発参入を促進させる。こうして世界経済が宇宙インフラに投資を始めれば、あとはもう誰にも止められない。

「ひとついいかしら、ロキ。この〈ファイニット・ストラトス〉は、ISが抱えていた従来の問題を解決できているのかしら」

「現時点ではできていないが、問題解決の糸口は掴んでいる」

「一夏か」

「そうだ。そこで彼のプロジェクト参加を要望したい」

これが、ロキが彼女たちに求めたいことのひとつ目だ。

ロキの要望に母姉は理解を示しながらも、承諾はしなかった。

「いまの段階では了承しかねるわ。私たちはずっとあの子の意思を尊重してきた。保護者とはいえ、私たちの独断では決めかねるわ」

「だが、あいつのことだ、期待はしていだろう。話は私からしておく。だから、大人しく待っている。間違っても一夏や白式を奪おうなど考えるんじゃないぞ」

「承知した。厳守することをここに誓う」

「しかし、おまえは〈ファイニット・ストラトス〉の完成を第一段階と言っただな。おまえの目的はISの在り方の是正と宇宙進出。第一段階で既に目的は達成できたと言える。第二段階はなんだ」

「ISによる人類の宇宙進出。それが母さんの願いだった。第二段階は彼女——ローズマリーの願いだ。俺たちは〈ファイニット・ストラトス〉による宇宙進出を第一段階として、第二段階に火星のテラフォーミングを計画している」

ロキの言葉をローズマリーが引き継ぐ。

「私の母が目指したものは、〈誰も飢えない世界〉でした。けれど、母の願いとは裏腹に世界は加速度的に飢えています。人口爆発、異常気象、そして食料のエネルギー転化。地球規模でさえもう人類の食糧を賄えない時代がそこまできています」

「世界食糧機関の報告は私も読んだわ。有史以来最大の飢餓が訪れるですってね」

「50年後には餓死者数は10億人を超え、100年後には世界人口の半数が飢えると言われています」

けれど、人は飢えても人口そのものは減らない。

貧しい国では、労働力となる子供が多ければ多いほど豊かになると信じられている。

豊かな国では、人口低下は国力低下に直結するため、産めよ増やせよと謳っている。

人間は貧しくても増えるし、豊かでも増える。

人口が増えれば食料消費も増える。けれど、得られる食糧には限りがあるから、飢えは加速し、飢えて減った人口を、人間はまた生んで増やそうとする。増えた子供はまた飢えて死に、そして増やすところに戻る。その繰り返し。結果、世界の平均寿命は20歳を下回る。

そう、子供たちが大人になれない世界がやってくる。

そこでローズマリーの母——メアリー・ライオンハートはある計画を立ち上げた。

エデンプロジェクト
『楽園計画』

聖書の一節にはこうある。——「働からざる者、食うべからず」と。

人類はなぜ働かなければいけなくなったのか。それは〈アダム〉と〈イブ〉が禁断の果実に手をつけ、エデンを追放されたからだ。楽園の外側には食べ物がなかった。そのため、自らの手で育て、賄わなければいけなくなった。こうして人類は労働を課せられたわけだ。

つまり、これらを逆説的に云えば、エデンとは働かなくても飢えない場所を意味する。

メアリー・ライオンハートが求めた世界も、またそれだった。

過酷な労働を強いられずとも、子供たちがお腹いっぱいになれる世界を作ること。

それが楽園計画。

だが、メアリーの死により計画は幻のものになってしまった。

「私たちは母のこのプロジェクトを実現しようと試みました。けれど、バイオショック以降、飢餓は加速し、地球規模でさえ人類の食

糧を賄えなくなってきた。国連のミレニアム計画でさえ、達成できなかつたのは、我々の知りうる以上に食糧難が深刻だったからです。そこで、私たちは火星の植民地化を計画しました」

「火星のテラフォーミング、それによる食料自給率の向上。誰も飢えない世界はあの子も望んでいたわ」

あの子。この場にはいないアリスのことだ。

「＜赤騎士＞はそのために造られたISなんだったね、ロリーナ」

東が言った。かつて7月7日のあの晩。ロリーナは彼女に告げた。火星と地球の架け橋となり、飢餓から世界を救う。それが赤騎士だと。

「ええ。けれど、＜赤騎士＞に限らず、すべてのISは火星の地球化を可能にしているでしょ。そもそもなぜ^{インフイニット・ストラトス}無限の成層圏」と名付けられたのか。それはISのシールドが成層圏——つまり大気と同じ働きをするから。でしょ、うさぎのおかあさん」

東はニタつとわらった。

それは「仕込んだ伏線にユーザーが気づいたとき」のクリエイターの笑みだ。

「ISのシールドには、フロンガスのような温室効果があるわ。それを利用して、紫外線によって生じた「遠赤外線効果」の熱を惑星内に閉じ込める。そうやって火星を温めることで、火星内の氷を溶かし、大気を生成する」

「しかしそれには100年間、操縦者はISを展開し続けなければいけません。妹はその役割を担おうとしている。彼女はそれを承知しているのかもしれませんが、たった一人の少女に世界の運命を背負わせていいわけがありません。私は妹に銃を置いて普通の女の子になってもらいたいのです。母の願い、メアリー・ライオンハートの願いは私たちが受け継ぐ」

「彼女の願いをかなえるだけの技術が俺たちにはある」

〈亡国機業〉が開発した第三世代兵器のテクノロジーはテラフォーミングを可能にする。

〈インフイニット・ストラトス〉に頼らない火星の地球化。

それを獲得するために彼は〈亡国機業〉の幹部となった。そして、統括者となり、〈デウス・エクス・マキナ〉と合流を果たせたいま、アリスがその身を人類の未来に捧げる必要はなくなった。

「そこで再度、あなた方に要望がある」

ロキはさきよりも真摯な様相で、改まったようにルイスキャロルと向き合う。

そして、すべてはこの時の為だったかのように申し出た。

♡

◆

♣

♠

「——アリス・リデルの任を解いてほしい？」

警備の詰所。第一次となる会談が終わり、警備から解放された私は、ロリーナから会談の一部始終を聞かされていた。そこ含まれていたロキからの要望を聞き、私は差し入れの缶コーヒーを口から離れた。

「つまり〈デウス・エクス・マキナ〉から脱退させてほしい、と。それを千春に依頼を？」

「依頼いうより、『お願い』といった感じだったかしら。純粹にあなたのことを案じていたわ。あなたのお姉さんは、『銃』を置いて、普通の女の子に戻ってほしいと」

私は「それはスコールからも聞きましたが」と答え、コーヒーを口に含む。

微糖と書かれていながらも、味はなぜか苦い。まるで今の私の心境を表しているようだった。

「ルイスに直談判なんて、ローズマリーは本気で私の戦いをやめさせたいようですね」

「正直、彼女の気持ちは分からないでもないわ。本来、あなたのような乙女が銃を手に取り、戦っていいわけじゃないもの」

「いまの〴〵時世、銃を取って戦っている少年少女なんて〴〵まん——」
「そういうことを言っているんじゃないの」

話を逸らそうとするも失敗して、私はバツの悪い顔を作る。

「でも、私は誰かに強制させられて、ここにいるわけじゃない。自分の意思で戦っています」

「ルイスも同じ意見を主張はしていたわ。——あくまであなたの意思を尊重したいと」

「だったら、残りますよ、ここに」

「それはうれしいわ。私はあなたと共に戦えること、誇りに思っているもの。けれど、15歳の子供が武器を持って戦う。やっぱりこれは“異常”なことなの。——正直ね、分からないの。ルイスも私も。良識ある大人として、あなたをまっとうな道へ歩ませるべきなのか。それともあなたの意思を尊重すべきなのか」

私は返す言葉がなくなり黙り込む。このままじやずつと意地の張り合いで、現状は平行線か。

簪に姉と向き合えと諭しておきながら、自分の事をおろそかにしては示しもつかない。そろそろ、このあたりで落とし前をつける時がやってきたということだろう。

「じゃあ、どちらが意地を突き通すか、戦って決めましょう。私が勝てば、組織に残留し、ローズマリーが勝てば、脱退します」

私はまだ銃を置きたくない。ローズマリーは置かせたい。

お互い意地があつて、意思を曲げる気はない。なら、なにかしらの強制力をもって、その意思を挫くしかない。全力で勝負し、もし負けたら、所詮わたしの意志はその程度だったのだとあきらめもつく。

「丁度、会長がふさわしい舞台を準備してくれていますから」

「専用機ペアトーナメントね」

「そこでローズマリーと決着をつけます」

私は空にした缶コーヒをゴミ箱に放り投げる。

けれど、勝敗を占うように投げたそれは、私の今後を暗喩するように外れて転がった。

第93話 姉としての覚悟

IS学園の一階フロアには、職員室に隣接する形でエントランスが設けられている。生徒たちの憩いの場として設けられたその場所には、各種の自販機や、IS関連の雑誌、チェスや将棋といった娯楽用品も準備されており、普段から学年の垣根を越えた生徒たちの溜まり場となっている。

とりわけ、今日は大きな賑わいを見せていた。

その理由は、今しがた〈生徒会〉が張り出した告知にあった。

↑ 告知 ↓

11月25日に『専用機ペアトーナメント』を開催します。以下概要。

◆参加について

・参加は自由。ただし、参加は二人一組を必須とする。(外部ゲストも許可する)

・参加希望者は専用用紙に記入のうえ、指定された場所に提出(受取期限11月7日～18日。期限厳守)

◆ルール

・勝ち上がりのトーナメント方式

・試合ルールは公式戦ルールを採用(詳細は国際IS委員会が配布しているルールブックを参照)

・ペアの両方が行動不能になったとき、負けとする。(片方が行動不能になっても試合は継続)

◆レギュレーション

・禁止機体なし

・性能制限なし(《単一仕様能力》含む)

・禁止装備は、国際IS委員会が定める使用禁止装備に準ずる。

◆賞品

・学食フリーパス(一か月)

その告知を見ようと集まった生徒の中には、一夏の姿もあった。

となりには、シャルロットとラウラ、セシリアの姿もある。

「学年別ペアトーナメントの次は専用機ペアトーナメントか」

「たぶん、一学期の補填じゃないかな」

「それで、どうするのだ、一夏。出場するののか？ 参加自由とは書かれてあるが」

一夏をティーチングしているラウラが訊いた。

「うくん、出場するにしてもなあ……」

そういった彼の右腕には、白いガントレットがない。へキヤノンボール・ファストで無理をさせたため、倉持技研にて総点検をかねたオーバーホールが行われていた。出場はその進捗次第なので、今の段階ではいかともしがたい。

「なんだ、おまえ、これに出場しねーのか？」

どうしたものかと考えていると、声をかけられた。

一夏が振り返れば、二人組の女子生徒が立っていた。

ひとりは金髪をポニーテイルにしたすらつと背の高い女性。もうひとりは小柄な女性で、黒色の三つ編みを肩から下げている。向こうは一夏を知っている様子だったが、一夏はふたりを知らなかった。（金髪の方が三年のダリル・ケーシー、三つ編みの方が二年のフォルテ・サファイヤですわ）

戸惑う一夏に、詳しいセシリアが横から情報を寄越してくれる。（そうだったのか。全然知らなかった……）

正直、IS学園の上級生とはほとんど面識がない。学園行事も尽く休止になっているし、会いに行く機会もないのだ。知っている名前なんて黛薫子と楯無ぐらいのものだった。

「その貌だと知らなかったな？ たく、先輩の顔も知らねえとは、なんて後輩だよ」

「普段からぐーたらサボっているのが悪いんすよ」

「違いねえ。——で、織斑、おまえ、これに出場しねーのか？ みんな期待してんだろ」

「え、そうなんですか？」

「そりゃ学園で唯一のタイトルフォルダーだからな」

先月のヘキャノンボール・ファストVFOX杯で優勝した一夏は、いまじや学園唯一のタイトル持ちだ。しかも、現役最強を負かしての、である。あれ以来、彼のへ感心はうなぎ上りだった。もつとも「鈍感」の名を欲しいままにする本人は気づいていないようだったが。

「キミはいろいろと自覚なさすぎッスね。それともなにッスか。でかい大会を制して、こんな学園なんかのトーナメントに興味が失せたッスか？　ま、賞金3000万手に入れたあとじや、学園の学食フリーパスなんていらねースよね」

わざと声量を上げてそう言ったフォルテの言葉が、周囲をざわつかせる。

一夏は慌てて弁明した。ようやくココでの生活も安定してきたのだ。下手に好感度を下げられて、入学当初に戻るのは御免だった。

「ち、違いますよ。いま白式が整備中で、どうしようか迷っていただけです。そもそも、優勝は俺の実力じゃありませんから。俺がどうこうよりチームの力がすごかったんですよ。自分ひとりで勝てたなんて思っていませんから」

それにローズマリーの助力もあった。

自分の力で優勝したなんて思い上がってはいない。

「ま、なんでもいいっすけど、寝首を搔かれないことっすね」

しかし、フォルテは凍てつく表情をやめなかつた。その貌には敵意のような冷たさが秘められていて、とても好意的に思えない。そんな視線を受けて、一夏が怯んでいると、ダリルがフォルテの肩を抱き寄せた。

「その後輩をいじめてやんなって。びびってんじえねーか」

「いじめてなんかないッスから、は、離れるっす」

「おお？　先輩に口答えか？　いい度胸してんじやねーか」

ダリルはフォルテの顔を抱き寄せ「うりうり」といじった。フォルテは首筋まで真っ赤になった。さきの敵意が幻であったかのような照れ具合だ。紅潮する表情には懸想が見え隠れしている。

「ああ、もう、やめるッス。みんなが見てるっすから。こういうことは部屋の中だけにするッス!!」

そろそろ本気で怒り出した後輩を「へいへい」といなし、ダリルは一夏に向き直った。

「――ま、出場するならばち当たることもあるだろうよ。その時は相手になるぜ。ただし、用心しろよ。フォルテの、ISは化け物だからよ」

化け物？ それに用心しとは。――妙な言い回しだ、と一夏は思った。

こちらに対する威嚇するなら “用心”なんて言葉は使わない。これじゃまるで助言だ。

「じゃあ、あたらしら行くわ」

怪訝な顔をする一夏をよそに、ダリルはフォルテの肩をだき、空いた手をひらひらと振って、エントランスから去っていく。一夏はそれを怪訝な顔で見送った。いったい、なんだったんだ？

♡

◆

♠

同時刻、エントランスが賑わっている頃、ローズマリーは学園の食堂にやってきていた。

会談につき、しばしここに滞在することになっていた彼女に、学園から『時間が空いているなら生徒を指導してやってほしい』と依頼があり、それを熟しているうちに昼食を食べ損なったのである。

「さて、どれにしようかしら」

細い指先をあごにおき、和洋中を網羅する豊富なメニューに目を通す。考えた末、彼女は “てんぷら蕎麦” のボタンを押した。密かに彼女の好物なのである。

出てきた食券を品に交換してもらい、近場のテーブルに腰をおろすと、見知った顔が学食に現れた。

「あら、日本の代表と中国の代表。あなたがたもこれから昼食を？」

「いえ、ちよつと小腹がすきまして。何か箸につまもうかと」

続きを聞けば、オーバーホールにあったく白式を届けにきたつい

でらしい。「ちよつと甘いものがほしくなつて」と言つた彼女は抹茶パフェを注文していた。フーは〈甲龍〉の改修パーツを持て来たついでと言つた。

「しかし、鈴め、ボルテックチエーンなんて何に使う気なのやら」「そうでしたか。では、一緒にいかがですか。一人で食事するのはさびしいので」

「そうですか。ではぜひに！」

月子は声音を弾ませて了承した。

ローズマリーの実家、ライオンハートと言えば、世界有数の資産家。そんな財界の重鎮と食事できることなど滅多にない。日本屈指の大手企業〈輝夜重工〉の娘である月子が断る理由などなかった。

「中国の代表もぜひ」

「そうか？ では、私も失礼させてもらおう」

フーは坦々麵を、月子は抹茶パフェを手にとってローズマリーのとなり腰かけた。それから、もりもりに盛られてアイスをすくつて大口で頬張る。そして「んくくッ」とトロけそうな笑顔を見せる。

「やっぱり、仕事のあとはこれやわあ〜♡」

口の仲で広がるホロ苦い甘い味わいに、思わず素が出る月子。

その様子を見てローズマリーとフーが「クス」と笑う。月子はハツとした。

「す、すみません、つい」

「いやいいよ。美味しいものを食べたならみんなそうなる」

「ええ、畏まる必要はありませんよ」

目上の二人に気を使われた月子は頬を赤くして、逃げるように話題を変えた。

「と、ところで、ローズマリーさまはどうしてIS学園に」

「今月末、ここで行われるペアトーナメントに出場する予定でして。もしよければ、どちらか私とペアになっていただけませんか」

今度のトーナメントは、二人一組の出場が必須条件になっている。外部ゲストであるローズマリーも例外ではない。しかし、専用機持ち限定となると、参加資格を持つ人間はごく少数。それあつてローズマ

リーはまだパートナーを見つけれずにいた。

「なんだ、ローズマリーもか」

「もしやお二人も？」

月子とフーは同時に頷いた。

「この生徒会長に盛り上げたいからと頼まれてね。せつかくだから月子さんと組んで出場することにしたんだ」

「そうですか。ならしかたありません」

事情が事情であるため、なまじ妹と親しい候補生たちと組むことは正直やりづらい。組むなら、妹と親交の薄い国家代表の方がやりやすいだろうと考えたが、当てがはずれてしまった。

「すみません、お力になれず」

「いえ、気にしないでください」と月子をなぐさめ、ローズマリーは他に充てを考えた。

学園内の専用機持ちはかなり限られている。他の代表は来校していない様子だし、ここは事情を知る〈亡国機業〉の人間に頼むのが吉か。

ローズマリーは「すこし失礼しますね」と携帯電話を取り出した。

有力候補はスコールだが、和解に伴って身柄を引き渡された彼女には、現在、極秘パッケージの開発に着手してもらっている。頼めば引き受けてくれるだろうけれども、長きに亘り現場を離れていたこともあり開発が遅れていることを考えれば、いまの段階では開発に集中してもらおうと思う。とくれば、次はオータムだが、スコールが忙しいなら、秘書けん警護役の彼女もバツか。だとしたら残すは――。

ローズマリーはその人物をセレクトして通話ボタンを押した。

『ん、なんだ、オレに用か、ローズマリー』

「ソフィア、実は頼みたいことがあります」

『そうか。いま〈生徒会室〉にいるんだ、君もこないか？ 話はそこで聞くとよ』

「生徒会室ですか……。わかりました。ではそちらに行って直接お話しします」

『待ってる。あ、ついでに、スイーツを買ってきてくれ。コンビニのヤ

ツはダメだぞ』

それつきり通話が切れる。

ローズマリーはしばらく画面を見つめ、食事中の二人に見やった。「おふたがた、このあたりでスイーツが美味しいお店を知りませんか？」

急にそうい出したローズマリーに、二人は食事の手を止める。

「美味しいスイーツの店か。見ての通り、私は甘いものが苦手だからな」

「え？ 苦手なんですか!？」

甘いものは全女子の共通項だと思っていた顔だった。フーは苦笑いして

「ああ。私は辛党なんだ。鈴にも『フーさんは辛いものばかり食べているから辛辣なのよ』となんて言われるぐらいでね。そういう店にはてんで疎くて」

と、坦々麺のスープずっと吸う。香辛料の聞いた赤いスープは見るかに辛そうだったが、フーは汗ひとつかいていなかった。豪快な飲みっぷりを見た月子はダメダメと首を振るう。

「二号さんの言うとおり、もーつとあまいもん味おうたほうがいいですって。今度うちがスイーツの美味しいお店を紹介——」

「いや、いいよ。糖分はオーナーの甘い言葉で足りてるから」

苦笑いのような、それでいてほほえましい表情を、彼女は浮かべていた。

「あら、まんざらでもなさそうですね」

「な、バカをいうんじゃない。誰がまんざらなものか」

フーはわわつと頬を赤くした。

坦々麺を食べても顔色ひとつ使えなかったのに、今は額に大量の汗だ。

「と、ともかく私のことはいいいから、ローズマリーにお店を教えてあげなさい」

「えつとそうですね。ここからやと、リップトリックがええかと。駅前、出たところにありますけど」

「リップトリックですね、わかりました」

「でも、急にどうしはったんですか？」

「実は部下がスイーツを買ってこいというので」

『え、部下が!?!』

月子とフーは思わずガタつとなった。上司に向かって部下がスイーツを買ってこいとは、あべこべである。そしてすんなりパシるローズマリーもローズマリーである。

「というわけで、お先に失礼させていただきます。楽しい食事でした。おおきにな」

下手な京都弁で礼を告げ、ローズマリーは食器を持って返却口へ向かう。

去り際に、見せた顔は柔らかかったが、月子とフーは彼女の不思議な人間関係にしばらく箸がとまったままだった。



「さてと、デザートはこれでいいかしら」

学園をモノレールで出て、駅から徒歩で20分。人気スイーツ店「リップ・トリック」の行列に並ぶこと1時間を経て、ローズマリーはようやくIS学園に帰ってきた。

その足で生徒会室に向かい、ドアをノックする。

「どうぞ」と返ってきたことを確認して室内に入ると、応接用のテーブルをはきみ、生徒会長の楯無とソフィアがお茶をしていた。

「遅いぞ、ローズマリー。子供のお使いにどれだけかかっているんだ？」

「店が混んでいたのです」

言ってテーブルに買ったケーキの小箱を置く。

「あら、リップ・トリックのケーキじゃない。買うの、大変だったでしょ」

「はい、生まれて初めて行列というものに並びました」

「ふふ。じゃあかけて。紅茶を淹れるわ。アールグレイだけど、いいかしら」

「はい、かまいません」

ローズマリーはソファアーに腰を下ろしながら、ティーポットに湯を注ぐ楯無を見やった。

「にしても、よくソフィアとお茶をする気になりましたね」

ロシアの秘密都市でソフィアは楯無を謀った。その相手とよく茶をする気になったものだ。

「最初は私も警戒したわよ。でもソフィアだったら、悪びれた様子もなく『やあ、元気か』よ。怒る気も失せたわ。それに——」楯無はやりわり表情を和ませて「研究所で『こんな仕事やめてしまえ。君には向いてない』って言うてくれたことが、まだ嬉しかったから」

暗部は綺麗な仕事じゃない。汚れた仕事だ。人を騙し、謀り、殺めても心が痛まぬ非人間性がなければ務まらない。そんな仕事は君に向いていない。そう言うてくれたソフィアと、もうすこし話がしたくて「お茶でもどう」と誘ってしまったのだという。

「で、身の上話を聞いていたら簪の話になったんだ」

「それで私も呼ばれたのですか」

「そう。あなたにも、妹がいるんですってね」

楯無はケーキの小箱を開封し、皿に移しながら配りながら言った。

「はい、この学園に通っています。こちらの〈生徒会〉にも加入しているように」

「え、生徒会に？」

楯無は「もしや」と考えながら、生クリームを一口。

「こいつはアリス・リデルの姉だ」

「ぶっ——」

そして、大層にクリームを吹きだす。

白濁としたクリームをぶっかけられたソフィアは珍しく「うわ……」と嫌な顔をした。

「楯無、なにをやるんだ。顔に掛けられるのは趣味じゃないぞ……」

「何の話よ！ 何の！ それより、アリスちゃんがあなたの妹って本

当なの」

「はい、義理ではなく血のつながった姉妹です」

もしやとは予想していたものの、まさか当たるとは。

普段は飄々と振る舞う彼女も、これには驚きを隠せなかった。

「確かに似ているとは思っていたけど、本当に当たるなんて。ソフィアがここに呼んだ本当の理由がわかったわ。——で、実際、どうなの？ アリスちゃん、姉の話なんてまったくくしないけど」

「かなりぞんざいな扱いを受けています。姉と呼ばれたことさえありません」

なんだかすごい親近感がわいた。

自分も、最後に「お姉ちゃん」と呼ばれたのはいつだったか、思い出せない。

「もちろん私のいうことなどまったく聞いてくれませんし、姉とかわれているかさえ危ういところです。とても手を焼いています。——私は妹にまつとうな道を歩ませたいのですが」

「やつぱり、アリスちゃんが〈デウス・エクス・マキナ〉にいることは快くないの？」

「そのことだけじゃありません。妹は早くに両親を失い、幼い頃から苦労ばかりしてきました。辛い目にもたくさん遭っています。私はこれ以上、妹にそんな思いをしてもraitたくない。あの子には、普通の女の子らしく幸せになってもraitたいのです」

「そのやさしさがうざいって言ってたそうだが？」

どこ情報か、そんな横やりを入れるソフィア。

しかれどもローズマリーは言い切った。

「ウザくて結構。なんといわれようと、私は妹の戦いをやめさせます」
たとえ嫌われたとしても。ローズマリーからはそんな強い意志が感じられた

憎まれ役を買ってでも妹の幸せを願うローズマリーを見て、楯無はカップを置いた。

「わかるわ。私も簪ちゃんには苦労をかけたくない。あの子には何も囚われず自由に生きてほしい」

「キミの家柄は特殊中の特殊だからな」

「そう。私の家は国家と強く結びついてる。——その日本はいま転換期にあつて、防衛の在り方が変わろうとしているわ。防諜組織たる更識もその波を受けているの」

「更識の対外諜報組織化だろ。楯無のロシア潜入もその一環だった」

「ええ、日米安保に見切りをつけ、独自防衛に舵を切ったことで、対外諜報活動が必要になったの」

「同盟国でなくなったのならば、アメリカが日本へ情報を提供する必要はなくなりますからね。独自の情報収集機関が必要になって当然ですか」

「けれど、日本にそのノウハウはない。そこで旧日本軍の諜報を担っていた私たち〈更識〉に白羽の矢が立った。——けれど、ソフィアも言った通り、対外諜報って綺麗な仕事じゃない」

更識の一員である簪もいずれ汚れ仕事ウエットワークを担う日がくるだろう。そんな仕事を妹にさせたくない。だから、更識刀菜は「楯無」になった。一族の闇はすべて自分が抱える。

「けれど、あなたほどの覚悟はなかったかもしれない。妹が幸せになれたのなら、嫌われてもいいとあなたは言ったけど、私はどこかで妹にきらわれまいと機嫌取りをしていただけなのかも。あなたは強いわね」

「私も本音をいえば、迷いはありました。けれど、自分の行動を理解し、手を貸そうと言ってくれた人がいてくれましたので。自分には心強い味方がいる。それを知ったことで、迷いは吹っ切れました」

「へえ、あなたには支えてくれる人がいるのね。うらやましいわ」

「あら、あなたにもいるではないですか。影から支えてくれるひとが」
ローズマリーはソフィアに流し目を送りながら、微笑んだ。

「彼女はずつとあなたを気にかけていましたよ。更識への資金援助。諜報活動の協力。妹の安全な開発環境。ロキからこれだけの条件を引き出したのはソフィアです」

ホントかと楯無が視線で問うと、ソフィアは「いいや」と首を左右に振った。

「協力に似合う条件を揃えたに過ぎない。Win—Winは交渉の鉄則だ。他意はないよ」

「ふふ。では、そういうことにおきましようか」とローズマリーはからかうように笑った。

ソフィアはどこか不服そうに紅茶をすすする。楯無はニタニタした。

「ねえ、ソフィア。秘密都市での一件は、私のためだったの？」

席をソフィアの隣に移し、ぐっと詰め寄る楯無。

「組織のためだ」

ソフィアは横に尻をずらして逃げる。

「じゃあ、異国出身の私をロシアの代表候補生に推して、面倒をみてくれたのは？」

「後任を育成することは代表の仕事だ」

再び接近してくる楯無から、ソフィアはまた横に逃げる。

「日本の対外諜報員である私が、ロシア保安庁に捕まらなかったのは、あなたの手回し？」

「キミが本庁に捕まったら、ロキと会わせられないだろ」

ついに尻がソファアの端につく。

逃げ場がなくなったソフィアに、楯無は柔らかな笑顔を向けた。

「ありがとう」

「オレはキミに礼を言われるようなことはしていない」

「ありがとう」

「だから、オレは—」

ほとんど悲鳴のような声になる。冷静冷徹、氷の妖精と云われたソフィアがこうも人に翻弄されている姿はそう見ない。楯無は気分をよくして、

「ふふふ、やさしいのね。お姉さまって呼んでいい？」

「呼ぶな」

「なら、素直に感謝を受け取って」

「感謝だって？ 尋問しておいて」

「だって、あなたが素直じゃないんですもの」

「素直な人間にスパイは務まらない」

そして口を割らないのもスパイのスキル。

楯無は「もお」と口先を尖らせるが、半ば認めさせたようなものなので上から退く。解放されたソフィアはやれやれと事の発端であるローズマリーを睨みつけた。

「たくつ、ローズマリー、余計なことを……」

「私はてつきり好きなのだとおもって、仲を取り持ってあげようかと」
「ウソつけ。そもそもオレはレズでもバイでもない。知ってるだろ」

「え？ でも、あなたログナーと付き合っていたんじゃない」

「そりや代表になるためさ」

代表に気に入ってもらえれば、次期代表の座もぐんと近くなる。そして代表になれば、各国の高官とも接触しやすい。代表の社会的地位を諜報活動に利用するため、ログナーに接触したというわけだ。愛し合っていたわけじゃない。

「だから、代表に選任されて用がなくなったから捨てた、と。すごく恨んでいたわよ、彼女」

「なら、なぐさめてやれ。いまはキミにぞつこんだろ」

「いやよ。あんなキツネ目の女」

完全に厄介者の押し付け合いである。ローズマリーはひとり「あんまりだ」と思った。変わり者ではあるが、それでも黎明期で活躍し、いままある黄金期を築いた操縦者なのだが。

「そもそも私の方が年下なのにお姉さまってなによ」

「そういう性癖の持ち主なんだよ。彼女は母姉信奉者なんだ。おかげで夜の相手も一苦労だった」

「あら、夜の相手もしていたのですか」

「そりや仮にも恋人同士なんだからするだろ。その苦労も誰か妹のせいで全部、水の泡になったわけだが」

好きでもない相手と寝てまで代表になったのに、イランの一件でそれも気泡に帰した。

「ふっ」

どこか誇らしげに笑うローズマリーに、ソフィアは苦笑いを見せた。

「でも、おまえの妹だけあつて強かったのは確かだ。もしかしたら、おまえ負けるかもな」

「あら、私はお姉ちゃんですよ」

「そうね。お姉ちゃんは無敵よ」

姉同志のシンパシーか。二人は得意げに「ね」と視線を交わす。

根拠なき姉たちの自信に「姉という人種はよくわからん」とシヨートケーキをかじる。

「で、ローズマリー。おまえはオレになんの用だったんだ？」

「すっかり忘れていました。実はペアトーナメントのパートナーを頼みに来たのです」

「ふむ、そういうことか。——なら、楯無と組んだらどうだ。キミもまだ決まっていないだろ」

「そうね。私も妹から宣戦布告をうけているし、その簪ちゃんはアリスちゃんと組むみたいだから。どうかしら」

お互い、妹を想い、妹に苦勞する姉同士。想いに通ずる点がある。

ローズマリーにしても、楯無にしても、ある意味でお互いが組むべくして組む相手と思えた。

「では、よろしくお願いします」

「ええこちらこそよ」

かくして「打倒姉」に燃える妹チームを迎え撃つチーム『姉』が結成されたところで、ソフィアがシャツを仰いだ。誰かさんがこちらの内情を暴露したせいで嫌な汗をかいたのだ。そのせいで下着までぬれて気持ち悪かった。

「決まったようだから、オレはちよつと汗を流してくる。確かここには大浴場があったな」

「あ、なら私が背中をながしてあげるわ」

「そういうことは自分の旦那にしろ」

「いないもん、そんなひと」

「作れって言っているだろ」

「あなたみたいな男性に巡り合えたらね。ローズちゃんもどう？　これからパートナーになるんだし、裸の付き合いと行きましようよ」

「わかりました」

「いや、オレはひとりで……」

二人はソフィアの意見を無視して大浴場に向かい始める。

ソフィアは「はあく」とため息をついた。

第94話 バスルームパニック

整備科。第二格納庫では、ロリーナの手によって〈赤騎士〉の整備作業が行われていた。

トーナメントに向けて、強敵との戦いで消耗した〈赤騎士〉を万全の状態にするためだ。

「電磁筋肉の交換、骨格の矯正、動力部の点検、推進装置の清掃。メンテナンスオールオーケーね。これで100%に近いパフォーマンスを發揮できるはずよ。乗ってみて」

アリスは〈赤騎士〉に乗り込み、補助電力でメインシステムを起動した。システムマネージャーを展開し、各部分のスコアを表示する。動力系、伝達系、駆動系、推進系、シールド系、どの箇所も安定して戦闘出力を維持していた。歴戦の戦いで疲弊したことがウソのような快調さだ。

「さすがロリーナです。あとこれで〈フルセイバー〉があれば文句なしなんです」

アリスは〈赤騎士〉を見返した。

現状で操縦技術はローズマリーが上だ。かてて加えて専用機は第四世代型(第三世代の〈サイレントゼフィルス〉を出してくる可能性も無くはないが、限りなく低いだろう)。この不利な状態を覆せる可能性があるとするれば、それは〈フルセイバー〉しかない。

「……あの、フルセイバーってなんですか?」

隣で〈打鉄式〉を調整していた簪がそうたずねた。

「〈フルセイバー〉は〈赤騎士〉の専用武装のこと。もともと〈赤騎士〉は戦闘用のISじゃなく、《第三形態移行》を発現するために開発した実験機でね。いま装備している《ヴォーパル》や《シユナイダー》は〈ナイト〉パッケージのものを改良した間に合わせにすぎないの」

「……そこで〈赤騎士の専用装備〉?」

「ってわけです」

とアリスが答える。

「でも、この子の要望と私の秘密の技術を惜しみなくつき込んだら開

発費がかさんでね」

ジェネレーター、電磁筋肉、骨格、推力装置、電子機器。〈赤騎士〉のパーツは、ほとんど新規で開発がなされていた。結果、予算が超過してしまい、専用武装にあてるべき費用がなくなった話だった。

それを聞いた簪は「打ち切りアニメみたい」と思った。

「アメリカにいたころは、予算なんて関係なかったから、つついね」
「アメリカ？」

「ロリーナは〈情報軍〉の創立に携わってたんですって」

簪も防諜組織の端くれ。名ぐらいは知っていた。

アメリカ情報軍。2001年の〈白騎士事件〉を契機に創立された、陸軍、海軍、空軍、海兵隊、宇宙軍、に次ぐ第六の軍隊。仮称〈イレイズド〉と呼ばれるその創立に、彼女は携わっていた。

簪は改まって、すごい人物が自分の専用機開発に関わったものだと身震いする。

思い直せば、なぜ彼女は自分なんかの専用機開発に参加してくれたのだろうか。

「……あ、あのロリーナさんは、なんでわたしなんかに力を貸してくれましたですか……？」

「この子にお願いされたから。——そして、あなたのお父さんに頼まれたからでもあるわ」

簪は目を見開いた。

「意外だった？」

「……はい。父はわたしに関心がないものだ……」

自分は父に叱られたことがなかった。アニメの趣味に没頭しても。武術の稽古から逃げても。更識の生業をおろそかにしても。悲観的な簪は、「好きにしろ」と言うばかりだった父のその態度を、優しさではなく見限られたと受け取っていた。

「そんなことはないわよ。あなたのお父さんは、あなたのことをとても気にかけていたわ。そして、お姉さんのことも。そんなお父さんから伝言を預かっているわ。『完成したら手を貸してやれ』ですって」

「お父さんはわたしの想いに気づいていたんだ……」

「みたいね。『刀菜には、おまえの力が必要だ』とも言っていたわ。だから思い知らせてあげましょう。姉さんに、あなたの力を」

簪は決意を新たに「はい」と頷いた。

「さて、一仕事したら汗をかいちやったわ」

「じゃあ、大浴場でもいききます?」

「ふふ、そうね。そうしましょう」

ロリーナは「じゃあ、出発よー」と進行方向を指さし歩き出す。アリスたちもそのあとを追いかけた。



———というわけで、

「うわあ……」

IS学園。大浴場。ローズマリーたちとぼつちり鉢合わせたアリスは表情をこわばらせた。

さらに隣に蒼髪のスレンダーな女性を見つけてもつと強張らせる。

「……ソ、ソフィア・アルジャンニコフ」

「やあ、ひさしぶりだね、アリス・リデル。イランでは世話になった」
かつてイランでの作戦で、アリスはソフィアを撃破している。その後、ソフィアは専用機大破を理由に代表の座を楯無に譲ることになった。ソフィアにとってもアリスは因縁浅からぬ相手だ。

おっかなびつくりして身構えるアリスに、ロリーナが言った。

「大丈夫よ。彼女があなたに危害を加えることはないわ。ね、ローズマリー」

「ええ。互いの構成員に手を加えることは協定違反です。そんなことになれば、これまでのロキの努力が無駄になります。そんなことは私が許しません」

「というわけだから、みんな仲よく」

ロリーナが和やかな声音で、両手を叩く。ひとまず緊張はほぐれたが、更識姉妹だけはくぎくしゃくしていた様子だった。ロリーナの後

ろから威嚇してくる簪に、楯無は声を掛けづらそうにしている。

ともあれ、アリス、簪、ロリーナ、そしてローズマリー、ソフィア、楯無は、横並びになつて湯船に浸かった。

「……極楽極楽」「気持ちいいですね」「生き返るわね」

温泉に浸かると、一度はこぼしてしまふセリフである。

全員が大きな浴槽に解放感を得ていると、簪がふらふらとロリーナの所にやってきた。

「……ロリーナさんって、綺麗ですね」

光沢を放つ美しい肩と色っぽい鎖骨ライン。抱き心地のよさそうな中肉中背の体つき。綺麗な曲線を描く乳房と、それから続く腰回りのくびれ。さらに雪のような白い柔肌が扇情的で、少女には出せない大人の色気を醸し出している。

「それに……お、おおきい」

湯船に浮かぶふたつの胸は、自分のサイズより3カップは余裕で大きい。それでいて綺麗な曲線を描いており、簪は『アニメみたいな胸』と思った。

「これがGカップの大きさですか」

アリスはロリーナの下乳をゆさゆさ揺らした。まるで水風船みたいに弾む胸に「おおー」と感嘆の声が漏れる。「こら、上司のおっぱいで遊ばないの」と叱られるも、眼前のポリウーミーな胸に意識が行ってしまい、ほとんど聞こえなかった。

「一体なにをどうしたら、こうなるんでしょうね」

「……わけてほしい」

ふたりして自分の胸を見下ろす。パンケーキなみのふくらみしかない自分たちの胸には、なんとなく展望が持てなかった。一体どこで『膨らし粉』を入れ忘れたのか。

「そういうけど、アリスちゃんだって、意外とあるじゃない」

と楯無がふにふにと胸を揉んできて、アリスはとび上がった。

「きゃーッ、何するんですか、いきなり!」

胸を抱えて後ずさるアリスに、楯無は口先をとがらせた。

「だって、アリスちゃん、意外と綺麗なおっぱいしてたから」

「だからって、断りもなくもみます?!」

「いいじゃない、女同士なんだから。ほらほら、もっとお姉さんに触らせなさい」

ワシヤワシヤと両手を突き出してくる楯無から逃げるように、アリスはローズマリーの背に回り込んだ。

「ろーずまりー、助けてください。れいぱーです。れいぱーが出ました」

アリスはローズマリーの背後からそう言った。ローズマリーは「酷い言いようね」と苦笑いするも、妹が助けを求めてきたのだ。見捨てるわけにもいかなかった。

「楯無、そのへんにしておきなさい。女性の胸をさわりたいなら自分の胸を触ればいいでしょ。あなただつてよいものをお持ちではありませんか」

「そういうローズちゃんこそ、よいものをお持ちよね」

言われてみんなの視線がローズマリーの胸元へ行く。

確かにふくよかな胸は楯無と同等かそれ以上の大きさがあった。形も綺麗だ。

「触っていいかしらですか?」

「どうぞ」

なぜかアリスが言った。当然の如くローズマリーが眉を顰める。

「アリス……」

「身体を挺して妹を守るのが姉のお仕事です☆」

どうみても言葉に裏があるとしか思えない言動。あからさまに確信犯だ。

アリスがローズマリーを生贄とばかりに差し出すと、楯無も「では、お言葉に甘えて」とローズマリーの乳房へ手を伸ばした。そして、強くしたり弱くしたり、ふにふにと感触を確かめ始める。

「すごいわ。張りがあるのにとても柔らかい。ずっと触っていたくなるような、癖になる感触」

想像以上の感触に楯無の口から感動の声が漏れた。

「それはどうも。気は済みましたか」

「いえ、もう少しだけ」

まるで何かに取り憑かれたように、楯無はなおもローズマリーの胸を揉み解す。第三者から見れば、思わず生唾を飲んでしまうような淫猥な光景になりつつあった。だが、当の本人は表情を変えておらず、同性に揉まれたところでなんともないようすだ。

そこへソフィアが「みていられないな」と忍び寄り、ローズマリーの豊満な胸を持ち上げた。

「いいか、楯無、女性の胸は驚搦んじやダメだ。こうするんだよ」

言うなり、下からすくうようにも打ち上げながら付け根をなぞる。すると――

「んう……ッ」

いままで鈴としていたローズマリーが体をびくつと振るわせた。

嚙んでいた桜色の唇からは甘い声。それは我慢できずもれたような淫靡な声だった。凜として表情を崩さないローズマリーを紅潮させるとは、さすがは何人もの男性を籠絡させて女スパイである。

ソフィア姉さんのテクはないって。そんな尊敬のまなざしをうけたソフィアはドヤった。

「女の胸は、リンパ腺の多くあつまった脇ちかくが感じやすいんだ――
――みッ」

得意げに解説していたソフィアの体が急にくるりと宙を舞う。

湯船に叩きつけられた彼女は大きな水柱を立てた。

「なにするんだ、いきなり……」

濡れた前髪を拭い、自分をひっくり返した張本人を睨む。

ローズマリーは片手で胸を隠し、もう片手で握りこぶしを作ってわなわなと振るわせた。

「あな た ね ……」

表情は羞恥と憤怒で真っ赤だった。妹の前で辱められたのだから無理もない。

「そう怒るなって、ちよつとふざけただけだろ。というか、おまえがそんなに感度がいいなんて思わなかったんだ。恨むなら、敏感な自分の体を恨め」

「私の体がいけないというのですか、あなたは」

「私の体がいけない」とか、そういうフレーズがでてくるあたり、おまえ才能があるよ。エロの。——おっと」

ソフィアは掴もうと伸びてきた手をかわし、身を翻して湯船を飛び出す。

怒りが収まらないローズマリーは逃げたソフィアを追いかけた。

そんな姉を妹ながら同情していると、むにゅつと背後から誰かが胸をさわってきた。

「こんなかんじなのかしら」

アリスが振り向くと、楯無が妖しく舌舐りしていた。

「んっ、ちよつと、会長……」

先とは違う繊細なタッチに、どこか色っぽい声を上げてしまうアリス。

それが楯無の加虐心を煽り、おふぎけをエスカレートさせていく。

「ふふ、アリスちゃんのもうそういう声聞くと、いじめたくなるわ」

そう言った彼女の表情には少女の面影は無く、妖艶な女性の色香だけが漂っていた。

どうやら、さっきの一件で妙なスイッチが入ったらしい。興奮気味の楯無の吐息が耳に拭きかかるたび、アリスは身悶えした。

「ちよつと、息を耳に吹きかけないでくださいってばあ……」

「あら、想像以上にかわいい声で泣くのね。いいわ。お姉さんにもつと聞かせて♡」

「……だ、黙りなしゃい」

呂律が回らない所為か、威勢は悪く、まともに啖呵すら切れなくなっていた。

それをいい事に楯無が悪戯をエスカレートさせていく。

「そうじゃなくて、いつもみたいに『黙りなさい』って試してみなさい。ほら」

楯無は色っぽく耳元で囁き、しなやかな腕でアリスの胸をもみしだく。辺りに薔薇の背景が似合いそうな雰囲気醸し出され、禁忌とか禁断とかいう危ない言葉が彼女らの周りに乱舞した。学園という情

操教育を担う場で不埒な行為に及んでいることが、いつそう楯無の興奮に火をつける。

(うふふ、これはちよつとグツとくるわ。できるなら、このまま押し倒したいけど)

気分を最高潮に、いけない扉を開こうとしたとき、ぼそつと声が聞こえてきた。

「……お姉ちゃん、変態、色魔」

それは調子に乗った楯無へのきつい一言だった。

その一言で、我に返った楯無は「ち、ちがうのよ」と言い訳をするが、妹の冷たい視線はやまない。学園の立場ある人間が、不埒な行為に勤しんだのだ。どうやっても言い訳できなかった。

何も言えず固まる楯無から、ようやく解放されたアリスは力なくブクブクと湯船に沈んでいった。

♡

◆

♣

♠

「酷い目に遭いました……」

脱衣室に備わった長椅子に腰掛け、アリスは深い溜息をついた。

羞恥心と得体の知らない感覚に心身ともにすっかり疲れた気分だ。これじゃ何のために大浴場に來たのかわからない。

「災難でしたね、アリス」

そこへローズマリーがやってきた。ソフィアに報復できたのか、満足げな表情だった。彼女の背面ではソフィアが「あいつ、本気でひねりやがった」と赤くなつた頬を撫でている。

「お互い様ね」

ローズマリーは「ええ」と苦笑いして、アリスの隣に腰を下ろす。そのローズマリーになんとなく見つめた。鼻梁の整った顔つき。ふくよかな胸。流れた汗がその綺麗なボディラインをなぞるたび、ドキリとする色気が醸し出されている。我が姉ながら、綺麗な女性である。そんな彼女に見初められた男は、幸せ者だろうなんて考えて、口

キのことを思い出す。

「ねえ、ローズマリーには好きな人がいるんですよね」

7月7日の晩。自分が組織を抜けられない理由に、裏切れない人がいることを上げた。その人物がロキであることは、すでに察している。そして、あの少年がローズマリーの想い人であることも。

「正直、意外でしたよ。ロキみたいな男性が好みとは思いませんでした」

「私もそう思います。私も年下を好きになるとは思わなかったわ」「やつぱり、年下なんですか」

ロキは17か18あたり。ローズマリーは20歳前後。実のところ、お互い戸籍管理された国の生まれではないため、正確な年齢はわからないが、傍目からだと、高校生と大学生のカップルのように見える。

「とはいえ、これはこれで悪くないと思っています。ただ、年上としてもっとリードしてあげた方がいいのかしらと、思い悩む毎日です。どちらかといえば、私は甘えたい方なので」

歳の差をかなぐり捨てて甘えてみたいものの、いやいやここは、年上としての包容力で支えるべきか。日々そんな葛藤らしい。

彼に必要なのは、甘えられる相手か、愛でる相手か。

好きな相手を想い、あれやこれや思い悩む姉をアリスは愛らしく思った。

「好きなんですネ」

「ふふ、そうなのかもしれないけれど、言われると恥ずかしいからやめて♡」

ほんのり頬を桜色に染めて、ローズマリーは照れるようにはにかんだ。

そして反撃とばかりにしつとりした声音で告げる。

「そういうあなたはどうかなの。彼のこと」

「え?」

思わぬ手返しを喰らい、アリスは黙った。

自分が彼をどう想っているのか。自分でも分からなかった。彼を

異性として意識したことはあるが、その彼に恋愛感情を抱いているのかまで意識したことはなかった。恋が未経験だから、彼を想うこの気持ちか恋か否か判断できないというのもある。

「ローズマリー、恋をするってどんな気持ちですか？」

純粋な疑問と、好奇心から、彼女は先輩に尋ねた。

しかし「その質問に意味はあるかしら」とローズマリーは笑う。

「人の恋愛観は人それぞれです。聞いたところで参考になるとは思えませんよ」

恋愛の自由化で、それぞれが自分なりの恋愛観を持つようになった現代。何が「恋」か。その答えは人の数だけある。他人の恋愛観が自分に当てはまる方が希有だ。

「あなたが彼をどう思っているか。こればかりは、自分で答えを出すしかありません。ただいえることは、彼はあなたのことが好きだということね」

「む〜……」

彼が私を好きかもしれない。こう口に出されると、顔から火が出そうになる。

恥ずかしいような、照れるような、誇らしいような、いろんな感情が入り乱れてアリスは膝を抱え込む。ほんのり頬を赤め、微熱にうなされる妹にローズマリーは愛らしさを感じた。だからこそ、妹の未来を守りたいと強く思う。

「やはり、あなたに銃は似合わない。血腥い世界から足を洗って、恋に悩み、青春を謳歌してほしい。戦士としてはなく、乙女として。――けれど、あなたはそれを望まない」

アリスは強く頷いた。

志半ばで去った母の願いを叶えるため。親友を殺めてしまった償いをするため。それら機会をくれた〈デウス・エクス・マキナ〉への恩返しのため、まだ銃を置くことはできない。

周りが「日常」へ戻ることを許しても、自分が自分を納得させられなかった。

誰かに言われて、すぐやめてしまえるようなことなら、今まで続け

てきてなどいない。

対して、ローズマリーも引き下がれない理由がある。

もし妹に何かあれば、姉として天国の母に顔向けできない。

「やはり勝者の権限を以て従わせるしかないようですね。——では、すべてはトーナメントで」

そう告げて、ローズマリーは椅子から立ち上がった。

去っていく姉を見送ることなく、アリスは「ええ、そうしましょう」と答えた。

第95話 開幕のタツグトーナメント

まず鍋にバターとオリーブ油を入れ、牛肉を炒める。肉の色が変わったら、一口サイズに切ったじゃがいも、にんじん、きやべつ、たまねぎを加え、次に、水、ホールトマト、ビーツ、ビーツの缶汁、固形スープの素、ローリエを入れて煮込む。

トーナメント当日。IS学園食堂。その厨房でソフィアはボルシチの調理に勤しんでいた。

楯無に「あなた、私にあなたのボルシチをこちそうしてくれるって言うてくれたわよね、ね、ね」とせがまれたからである。一応はそう言った手前もあり、ソフィアはIS学園食堂の厨房を借り、こうして調理に勤しんでいた。

「うん。こんなもんかな」

塩と胡椒で味を調え来上がったボルシチを食器によそい、厨房を出る。

食堂のテーブルでは、白髪の少年が寄生木の鉢植えらしき装置にケーブルを接続し、キーボードを叩いていた。味見役に呼ばれたロキだ。

「そいつが〈ヘミストルティンの槍〉か」

言うて、持ってきたボルシチをテーブルに置く。

「ああ。まだ完成はしていないがな。——そっちはどうだ」

ソフィアは食ってみると持ってきたスプーンを差し出した。

ロキはサワークリームをすくいボルシチをひとくち。口の中に程よい酸味と、濃厚な野菜の甘みが広がった。

「うまい。イワンのよりうまいかもしれん」

「オレのは母さんの特性レシピだからな。おやじのボルシチとは一味違うのさ」

「一味か、言い得て妙だな。よし、俺にも今度作り方を教えてくれ」

「おまえが料理に関心を持つなんてめずらしいな」

と言いながらも、ソフィアはロキがそう言い出した理由に思い当たる節があった。〈デウス・エクス・マキナ〉との会談後のことである。

終了後、彼はルイスに「組織運営に必要な心得などはあるか」と余談がてら訊いていた。そのとき、ルイスは『豚汁かしら』と答えた。どういう意味かと尋ねた彼に、彼女は「要は同じ釜戸の飯を食うこと」と微笑んだ。

とはいえ、彼女と同じ品ではアレなので、「ボルシチ」にしようというわけらしい。

「じゃあ、あとで秘蔵のレシピを教えてやるよ。ただし、重要機密だ。口外にするよ」

「わかった、厳守する」

そう言っただけでボルシチをもう一口。

そして、部下のボルシチを堪能しながら食堂に備え付けられたモニターを見やる。

「そろそろか」

画面には〈専用機ペアトーナメント〉の開会式の映像が流れていた。その映像の中で、一人の女子生徒が用意された台に乗り、開会の訓辞を述べている。

『みんなおはよう。今日は専用機持ちのタッグトーナメントですが、試合内容はこれから専用機持ちになるであろう皆さんにとって勉強になるはずです。しっかり見ておいてください』

よどみなく生徒たちにそう告げたのは生徒会長けん、優勝候補の楯無である。

楯無は訓辞を終えるなり、突然ニパッと笑った。

『とはいえ、ただ観戦するだけではつまらない。そこでこんな企画を用意しました』

急にそう言いだした楯無は扇子で集まった生徒たちの背後を示した。

一同が振り向くと、バックモニターに『優勝ペア応援・食券争奪戦』の文字が浮かぶ。

『ルールは簡単です。お金を食券に換金して、優勝すると思うペアにベットするだけ。そして優勝ペアを的中させた生徒で、集めた食券を山分けします』

降って湧いたイベントに「おおーッ」と学生が湧く。あからさまな賭博行為ではあったが、教師陣から反対の声は上がらなかった。根回しは既に終わっているらしい。さすがは更識家当主。敏腕である。それにはロキやソフィアもひと目おいている。

『では、このトーナメントに参加する選手の紹介をするわよ』

楯無が高らかに宣言すると、モニターに参加選手と試合の組み合わせが表示された。

└─【アリス・リデル／更識簪】

└─【ローズマリー・ライオンハート／更識楯無】

└─【ダリル・ケーシー／フォルテ・サファイア】

└─【セシリア・オルコット／シャルロット・デュ

ノア

【優勝】

└─【ユエリヤン月亮／タイリヤン太[☒]】

└─【篠ノ之箒／凰鈴音】

└─【輝夜月子／李紅梅】

└─【織斑一夏／ラウラ・ボーデヴィツヒ】

出場ペアは全部で8組。

アリス・簪の『妹ペア』。

それに相對するローズマリー・楯無の『姉ペア』。

ダリル・ケーシーと、フォルテ・サファイアの『先輩後輩ペア』。

一夏とラウラの『師弟ペア』。

箒と鈴の『幼馴染ペア』。

上記の結成により相手がいなくなった、セシリアとシャルロットの『百年戦争ペア』。

そして特別枠で出場した月亮ユエリヤンと太タイリヤンの『双子ペア』と、月子とフリーの『国家代表ペア』。

以下が今回の専用機持ちペアトーナメントの組み合わせであった。
「なあ、ロキ、おまえは誰に賭ける？」

「ローズマリーだ。そういうおまえはどうだ」

「オレ？ オレは簪さ。楯無には悪いが、彼女を応援させてもらう」

そう言っつて、ソフィアは個人端末を取出し、ネットワークにアクセスする。ホームページといくつかのサブベイで構成されたサイトは、諜報員専用のソーシャル・ネットワーク・サービスだった。ソフィアはページを操作し、あるメールのやり取りをロキに見せた。

それを見たロキはめずらしく驚きを見せた。

「そういうわけさ」

ソフィアはそう言っつてモニターに視線を戻す。

画面の向こう側では、開会式が終わり、第一試合目の準備が行われていた。

♡

◆

♠

「両ペアの準備が終わったそうです」

専用機トーナメント第一回戦。その準備が終わった報告がアリーナ管制室に入った。

千冬は「わかった」とプログラム表に目をやり、初戦の組み合わせを確認する。

「初っ端から、優勝候補同士の試合になったな」

一回戦はアリス・簪ペア対ローズマリー・楯無ペアの試合である。

またしても一回戦目から本命の試合であった。

「楽しみですね。どんな試合になるか」

事情を知らない真耶が、両ピットに出撃の命令を送信する。

それに従い、ピットから4機のISが出撃を開始した。

赤い装甲に騎士の意匠を醸すIS〈赤騎士〉。

荷電粒子砲とミサイルを満載した重装備の武者型IS<打鉄二式>。

水のドレスをまとった水精霊を思わせる優美なIS<ミステリアス・レイディ>。

そして、燃えるような装甲と、世界の終焉を思わせる禍々しいIS<レーヴァテイン>。

途端、真耶が顔色を変えた。IS管制室の空気も緊迫する。<サイレント・ゼフィルス>に代わって現れた禍々しいIS——<レーヴァテイン>は臨海学校で、生徒や教師部隊と遭遇し交戦している。管制室が緊迫するのも当然だった。アリーナの待合室でも騒然としていることだろう。

「おおお、織斑先生、このISは……ッ！」

「落ち着け、襲ってきたわけじゃない」

「思わず、警報を鳴らそうとする真耶を千冬が制す。

「で、でも……」

「何の問題もない、試合を続行しろ」

事情を知らされず戸惑う真耶に申し訳なく思うも、話せば長くなるため、千冬は説明を省略して事を進めさせた。腑に落ちないながらも教員たちは、千冬の言葉に従う。そのなか、千冬は「やはり出てきたか」とつぶやいた。

♡

◆

♠

一方、アリスもまた千冬と同じ台詞を内心でつぶやいていた。

第四世代型IS<レーヴァテイン>。ローズマリーが本気なら第三世代型の<サイレント・ゼフィルス>ではなく、より性能の高い<レーヴァテイン>を出してくることは、アリスも予想はできていた。これが相手となると苦戦は必至。なにより——

「簪、大丈夫ですか」

かつて、簪は<レーヴァテイン>に一矢報いながらも、手痛い反撃

を受けている。その時、植えつけられた恐怖心はどうか。アリスはそれを案じたが、

「大丈夫」

こちらの心配を余所に簪ははっきり答えた。動揺の類は何えない。事前に説明してあったとはいえ、実物をまえにしても震えない勇氣。彼女はあの時から確実に成長している。

そんな相棒に頼もしさを覚えながら、アリスはアリーナの管制室に繋いだ。

「開始の合図をお願いします」

もはや交わす言葉はない。言葉ではどちらも引き下がらないことを、互いに知っている。

勝利者の強制力のみが、相手の運命を決定できる。

『あ、はい——。では、第一回戦を開始してください』

かくして、今後の命運を決める戦いの火ぶたは切って落とされた。

——刹那、光と共に<赤騎士>が姿を消した。

量子テレポート。それを駆使して<レーヴァテイン>の背後に回り込んだ<赤騎士>は両手に<ヴォーパル>を持ち、その二刀を振り落とした。

すかさずローズマリーが<レーヴァテイン>を抜き、頭上からの斬撃を受け止める。

そこへ簪が荷電粒子砲<春雷>を発砲するが、この一撃は<ミスティアス・レイディ>が展開する<アクア・ヴェール>によって阻まれた。

「楯無、あなたは更識簪を。私はアリスの相手をします」

ローズマリーは脚部のビームサーベルを展開し、回し蹴りの要領でアリスに斬りかかる。アリスは後退してこれをかわす。退いたアリスを、ローズマリーは展開装甲を高機動モードに切り替えて追った。それを見送ることなく、楯無が妹を見据える。

「了解。——さあ、簪ちゃん、勝負よ」

簪は無言で頷き、荷電粒子砲を構えた。

発砲。

迫る虹色の閃光を、楯無がサイドステップでかわす。

再び照準。楯無は乱数移動で荷電粒子砲の射線を掻い潜った。右へ、左へ、前へ、後へ。縦横無尽に跳躍する姉に翻弄され、簪は照準を定められず、引き金を絞れない。まったく予想のつかない機動に、コンピュータも悲鳴を上げた。

(……<打鉄式式>の射撃システムじゃ、あの人は捕らえきれない) ならばと、簪はへマルチロックオン・システム<の智能エージェントを起動した。

「照準レーダー展開。——標的補足。誘導モード1。1番基から48番基まで全弾発射ッ！」

打ち出されたミサイル群が、標的に向かって飛翔を開始する。

数に物を言わせた面での攻撃。これなら相手がどう動こうが関係ない。必ずダメージを与えられるはず。——そう期待した簪の目論みは簡単に潰えた。<ミステリアス・レイデイ>が《アクア・ヴェール》を展開した、その瞬間に。

楯無が水のドレスを身にまとうと、ミサイルたちが標的を見失い、迷子になったのだ。

「……追尾用のレーダー波が吸収されてる……」

マイクロミサイルユニット《山嵐》は、レーダー波を照射し反射したそれを受け取って、標的を認識・追跡する。照射したレーダー波が返ってこないと《山嵐》は標的を追尾することができない。

「……ならIRで——」

簪は智能エージェン트에命じ、ミサイルの誘導方式を変更した。

左肩部に備わったレドームのレンズが、昔前の射影機のように切り替わる。レーダー波誘導から赤外線誘導へ。すると、ミサイルたちは熱源を頼りに<ミステリアス・レイデイ>を追いかけて始めた。が——やはり見失う。

《アクア・ヴェール》は機体表面温度を抑えることができる。だから赤外線でも探知できない。

(じゃあ、カメラで標的を認識する画像解析は……？ だめだ……。《アクア・ヴェール》は可視光も吸収する。カメラに映らない。レー

ダー誘導もダメ、赤外線もダメ、画像もだめ——」

電子兵装を武器に戦う〈打鉄式式〉にとつて、完全なステルス有する隠密型の〈ミステリアス・レイディ〉はまさに天敵だった。

だが、〈マルチロックオンシステム〉のマルチの名は伊達じゃない。

レーダー波誘導、赤外線誘導、画像認識。それに加えもうひとつ誘導方式がある。

「〈打鉄式式〉。マルチロックオンシステム、誘導管制モード4」

簞が4つ目の誘導方式をセレクトすると、マイクロミサイルたちが再び〈ミステリアス・レイディ〉を追尾し始めた。見えないはずの〈ミステリアス・レイディ〉を、だ。

「どういふこと……」

《アクア・ヴェール》はあらゆる探知から逃れられる魔法のマント。レーダーにも、目にも映らず、赤外線も発しない自分をどうやって見つけているのか。

(ともかく、いまは対ミサイル機動ね……)

楯無は対策を講じるよりも先に被弾を避けるため、機体を後方へ下がらせた。

そのあとをミサイルはしつかりと追ってくる。

なんと引き離そうとするものの、小型ゆえ小回りが利き、数も数なだけあって、簡単には降り切れない。そうやって手をこまねいているうちに、距離は徐々に縮まり、やがて先頭の一発目が〈ミステリアス・レイディ〉を捉えた。

(……いけッ)

簞は心で吠えた。同時に爆薬の信管が起動する。

爆発。

小規模ではあったが、近距離での爆発は、彼女を「くっ……ッ」と怯ませた。そこへ二発目、三発目とミサイルが群がる。爆発の連鎖に次ぐ連鎖。それはやがて膨大な熱量の塊となり、楯無を灼熱地獄へ陥れた。

「や、やった……!」

黙々と立ち上る爆炎。むせるような熱気。ぱちぱちと火を灯すく

ミステリアス・レイデイ>の破片。

手ごたえはあった。これは勝ったかもしれない。

そう気が緩みかけた時、背後から声が聞こえた。

「簪ちゃん、『やったか』はフラグよ」

ひんやりとした言葉に振り返れば、『蒼流旋』に流水をまとわせた楯無が立っていた。

しかも無傷で。

接近に全く気づけなかったこと。攻撃を外したこと。

二つの事実で動揺する簪に、楯無は『蒼流旋』の鋒先を突き出した。すさまじい衝撃に<打鉄式式>が大きく転倒する。簪は倒れ込んだまま姉を見た。

「……なんで。……命中させたはずなのに」

「ミサイルが攻撃したのは、ナノマシンで作った水の分身よ。——あのミサイルは『アクア・ナノマシン』のGPS情報を傍受して、私の位置を特定し追跡していた」

GPSを用いたミサイル誘導。それが完全なステルスを有する<ミステリアス・レイデイ>を追いつめたネタだった。けれど、それを知っていた楯無は、逆に分身をデコイとして利用し、背後を取ったのだ。戸惑い見せたのは、囷だと気づかれなかったための芝居だった。

「どうする、続ける?」

気づかうように伺がってくる姉に、妹は俯き黙り込む。

荷電粒子砲もダメで、ミサイル攻撃もダメだった。自分のテクノロジが完敗し、彼女の闘志は折れてしまったのだろう。——すくなくとも姉の目にはそう見えた。

そう、見えたただけだ。

「まだ……。まだ……。おわってない」

顔を上げた簪の瞳には闘志があった。そう、ゆるぎない闘志が。「で、でも、あなたの攻撃は、私に通じないわ。続けても結果は見えてる。もうやめましょう」

これ以上妹に鞭打つ行為はしたくない。

そんな思いから降参を薦めるも、簪は首を縦に振るわなかった。

「……やめない。わたしにはまだこれがあるッ」

展開したのは対複合超振動薙刀《夢現》。簪がそれを頭上で回転させて構える。

「……更識簪、参ります」

荷電粒子砲と、電子兵装。そして、ミサイルキャリアーをパージし、簪は楯無に斬りかかった。正面からの袈裟切り。楯無は《蒼流旋》で弾き、空いた胴へ展開した《ラストイーネイル》を打ち込む。

簪は崩れた体勢をすぐ立て直し、再び斬りかかる。楯無は横薙ぎの《夢現》を《ラストイーネイル》で払い、《蒼流施》の刺突をくりだす。簪は息を詰まらせた。

「もうやめましょう、簪ちゃん。あなたじゃ私に勝てない。勝負はついたわ」

親愛なる妹に敵意を向けられ続ける心境も、それに刃を向けなければならぬこの状況も、精神衛生上よろしくなかった。だからといって、負けてやればきつと本当に大事な何かを失ってしまう。

行くも戻るもできない楯無がどうにか降参させようと促すも、やはり妹は聞く耳を持たなかった。

「……ついてないから。構えてッ！」

なおも彼女は勇ましく薙刀を構えた。

「……か、簪ちゃん、どうして……。いったい、何があなたをそうまで駆り立てるの……?」

けして劣勢に立たせいるわけじゃないのに、楯無は怯んだ。

普段は庇護欲を駆り立てられるようなか弱い妹が、闘志を滾らせて、まっすぐ自分へ挑んでくる。何度も。めげずに。どうしてそうまでして自分の打倒に燃えるのか、姉にはわからなかった。

「……わたしにも譲れないモノがあるから」

簪は《夢現》を握り直し、戸惑う姉に再び突撃した。



アリーナ第二待合室。第二試合目に出番を控えたダリルは、ISスーツの調整をしている最中だった。ミューゼル社製の運動性を阻害しないハードタイプであるそれは、レオタードに近く、きつめにフィットする。その食い込み位置を直しながら、待合室に設置された観戦用モニターを見やる。

第一試合は両者とも格闘戦にもつれ込んでいるようすだった。

モニターには楯無が繰り出した《蒼流旋》の刺突を、後方に下がって躲す簪が映し出されている。その簪を、楯無はく打鉄二式に《ラストイーネイル》絡めて引き戻す。そして引き寄せた妹に再び《蒼流旋》を突き立てた。

簪は薙刀の高手だが、総合的な格闘術はやはり姉が上であるようだ。しかし、劣勢ながらも簪は一步も引かない。何度、打ちのめされても立ち上がり、姉に立ち向かっていく。

「へえ、なかなかガッツがあるじゃねえか」

とはいえ、劣勢は劣勢。実力差も明確で、この分だと勝負は早くに尽きそうだった。相方のアリスも苦戦を強いられているようで、ローズマリー相手に勝機を見いだせずにいる。簪への加勢は見込めそうにない。初戦はローズマリー・楯無ペアの勝利で終わるだろう。

ダリルは観戦に見切りをつけ、相棒の名前を呼んだ。

「おい、フォルテ、そろそろ行くぞ」

だが、返事はなかった。

ただ備え付けのベンチにこしかけ、黒い三つ編みの執拗にいじっている。それは彼女が不安を感じているときに見せる仕草だった。

「おい、どうした」

ダリルがフォルテ・サファイヤの様子を伺うと、彼女は不服を訴えるような表情を向けた。「これから一戦交えようつてのに、なんだ、その面は」と仁王立ちするダリル。フォルテはややして抱えていた不満をさらけ出した。

「なんで、あんなこと言ったんスか？」

ダリルは「は？」と顔をしかめた。

「なんのことだ？」

「エントランスでのことツスよ。フォルテのISは化け物だから、気をつけろって、織斑一夏に。あれじゃまるで警告ツス。なんでそんな真似したんすか」

ダリルはどこか苦笑いをしながら頭をかいた。

「深い意味はねえよ。単純にビビらせてやろうと——」

「それだけじゃないツス。サラのこともあるツス。へキャンボール・ファストで、仕掛けた装置が作動しなかったのは、先輩が細工をしたからツスよね……？」

疑念のまなざしを受け、ダリルはバツが悪そうに首筋を撫でた。フォルテは自分が行ってきた裏工作に気づきつつある。もうこの恋人に、白を通すのは無理そうだった。

「ああ、そうだ。あたしが細工した」

フォルテのしゃがれた声が待合室に響いた。

「な、なんで……」

「なんでっておまえ、あたしはそっち側の人間じゃねえからに決まっているだろ」

「こつち側じゃないって、それじゃあ……」

好きだった相手の告白が胸を貫き、瞳が動揺と驚愕で揺れる。

そんな彼女の許へ在らざる者の声が聞こえてきた。

「大方、坊やの差し金つてところさね？」

左右に結った赤い髪。豪華な和装。カランコロンと、ぽっくり下駄をすりながら現れた隻腕隻手の花魁にダリルは「ここの警備はどうなってるんだ」と毒づいた。

アリーシャ・ジョセスターフ。

ダリルが欺いた組織のナンバー2とも云える人物は、フォルテを見て煙管を回した。

「へ亡国機業」にいたところの同僚さね。おそらく目的はへアップルシードか、あるいは……。何にせよ、こいつはおまえさんに取り入って、利用しようとしたへ亡国機業」のスパイなのさ」

ダリルは応えなかったが、アリーシャは確信に近いものを得ている様子だった。その証拠に濃い目の「赤」で塗られた唇を得意げに曲

げている。フォルテは潤んだ瞳でダリルに詰め寄った。

「そ、そうなんスカ」

自分に優しかったのは、自分を利用するため。愛は偽りだったのか。それを視線で問うも、彼女は何も言わなかった。ただ用済みのようにフォルテを無視し、アリーシャだけを睨みつけている。

「怖い顔さね。——にしても、その貌、どこかでみたことあるさね……」

ややして、アリーシャは煙管をダリルに突き付けた。

「あつ、おまえさん、もしやミューゼルの……。どうりてスコールに似ていると思ったのサ」

「へっ！ 似ているのは、姿だけじゃないぜ！」

放った言葉と共に、突如として何も無い場所から火が昇った。それが命をもったようにうねりアリーシャへ襲い掛かる。

「ほお、これが母様が仰っていたミューゼルの発火能力さね？」

アリーシャは着物の火の手を払い、後方に飛ぶ。

ダリルはそれを視線で追った。

炎もまた視線に従って生き物のようにアリーシャを追いかける。

「こんがりやいてやるよッ」

炎は勢いを増し、徐々にアリーシャへ迫る。ダリルは仕留めるつもりで強く念じた。逃げ切れないと悟ったアリーシャはフォルテの背後に忍び込み、盾にした。恋人を盾にすれば、攻撃を中断すると踏んでのことだろう。しかし、ダリルは気を緩めない。炎がフォルテを襲う。瞳を見開くフォルテ。寸でのところで、彼女はISを展開して難を逃れた。

あわや丸焦げに成りかけたフォルテを見て、アリーシャはカラカラと笑った。

「おやまあ、恋人を丸焼きにする気かい。酷い恋人もいたもんなのさ」
「盾にしたおまえがいうな」

睨み合う両者にフォルテが言葉を失う。方や自分を裏切り、方や自分を盾にした。

誰も自分を大事に想っていない。両親に捨てられ、やっとみつけた

居場所、それがココだったのに。

信じていた何かが砕け散り、セカイが崩壊していく感覚に、フォルテは瞳に涙を蓄えた。その雫が床に落ちて砕ける。――――涙は凍っていた。からん、からん。そんな音色と共に、熱気で満たされていた待合室が冷気を帯びていく。発動していたスプリングラーの水もいつしか凍って出なくなっていた。

これが<レヴィアタン>の能力。

情緒が乱れた彼女は無意識に専用機<レヴァアタン>の能力を発動させていた。

「ちつ、フォルテ、落ち着け。<レヴィアタン>を解除しろ」

白い息を吐きながら停止を訴えるが、いまの彼女には届かなかった。

「てめえ、アリーシャ！ この落とし前どうつける気だ！」

「お互い様なのさ。ま、ちよいと予定は狂ったが、いいサ。フォルテ、我慢することはないのさ。その力をまき散らすがいい。そうすればきつと楽になる」

「楽に……」

か細い声で答えたフォルテに、アリーシャが頷く。ダリルは目じりを釣り上げた。

「てめえ、ここで<レヴィアタン>を暴走させる気か！ やめろ、フォルテ！」

叫ぶがやはり恋人の言葉は届かない。

フォルテは虚ろな表情で、自らの専用機――<レヴィアタン>の力を解放した。



赤と緋の間で火花を散らす二つの剣。アリスは《ヴォーパル》を翻して再び斬り払った。それをローズマリーは《レーヴァテイン》で受け止める。苛烈な鏖迫り合い。だが、徐々に<レーヴァテイン>が<

赤騎士>を押し負かしていく。

やはり、どの局面においても性能差が出る。速力でも、防御力でも、臂力でも。

第四世代型の<レーヴァテイン>は《展開装甲》のモードを切り替えることで、ハイモビリティ、ハイパワー、ハイディフェンスを実現する。かてて加えローズマリーの操縦技術。ハイエンドの性能と世界トップクラスの実力が織りなす強さに、アリスは自らの勝ち筋を見いだせないでいた。このままでは負けるのも時間の問題かもしれないとさえ思えるほどに。

そんな時、簪から通信が入った。

『アリス、あの人を倒したら援護に行く、なんとか持ち堪えて』

劣勢だが、力強い、そして冷静な言葉。

彼女はまだあきらめていない。

彼女の頼もしさに勇気をもたらったアリスは弱音を吐こうとした自分を蹴っ飛ばした。

「了解。——そういうことです。なんと少しでも持ちこたえますよ、<レッドクイーン>」

《Yes My honey——<赤騎士>、第二形態移行》

サイドバインダーと非固定浮遊部位から射出した《シユナイダー》を背後で円環状に配置し、スラストリバーサーで後退。罅迫り合いを脱した勢いのまま姿見を抜ける。《第二形態》の<赤騎士>なら、性能差はほぼ無い。アリスは姿見を抜けた勢いをPICで反転させ、《ジャバウォック》の貫手を繰り出した。

ローズマリーは《展開装甲》を防御モードに切り替え、前方に六角の赤いシールドを展開して、その刺突を受け止める

「《第二形態》ですか。本気を出してきましたね」

「出しますとも、負けられないんですから——」

アリスは腰部を軸にして、テイルユニットを鞭のように叩きつける。

ローズマリーも同様に腰部を軸に、脚部のブレードでテイルコンデenserを切断した。コマのように回る二機の間でそれが爆発する。

「負けられないのは私も一緒です。あなたに何かあれば、姉としてお母様に顔向けできません」

「そうやって姉ぶっているところが嫌いなんですよ!」

「姉ぶります。姉なのだから」

「姉だって言うなら、なんで一番つらい時、そばにいてくれなかったんですか!」

アリスは姉を正面から見据え、心の裡を晒した。

それが彼女の本音だった。

両親を亡くした日。エイミーを失った時。悲しみにくれる自分のそばに、なぜ彼女はいてくれなかったのか。悲しいとき、慰めてくれる存在が家族のはずだ。いてほしいときにいてくれなかったくせに、いきなり現れて、姉面して、指図ばかり。それがアリスが言う「ウザイ」の意味だった。

「私のことを心配しているなら、再会してすぐに言うべきことがあったでしょ! 『大変だったわね』とか『苦労したのね』とか『よくがんばった』とか『もう大丈夫だ』とか。あなたは一度でもそんな言葉をかけてくれましたか!」

「……」

妹の本心を聞き、ローズマリーが初めて怯む。

おそらく最初で最後のスキ。アリスはステンドグラスの翼を羽ばたかせ、《ヴォーパル》を用いた渾身の一撃を姉に見舞った。――その時。

二人の間に黒いISが落ちてきた。

黒炎のようなフォルムに、狗のような顔の非固定浮遊部位。操縦者は金髪をポニーテイルにしてまとめ上げている。第二試合に出番を控えていたダリル・ケーシーだった。

突然の乱入に、アリスは攻撃を中断せざるを得なくなった。

その彼女に一瞥もくれることなく、ダリルは体制を立て直し、ローズマリーに告げた。

「わりい、ローズマリー、しくじった」

乱入者に会場がざわめくなか、ローズマリーは責めるでもなく「わ

かりました」と答える。

そこへ楯無たちも試合を中断してこちらにやってきた。

「ローズちゃん、どうしたの?」

「楯無。試合は中断です」

「詳しいことは省くが、——理由はアレだ、生徒会長」

ダリルがアリーナの向こう側にある海面を見やる。そこには天へ上る巨大な水の渦が発生していた。まるで天変地異の前触れ。自然現象とは思えないその光景に言葉を失っていると、氷柱の中から東洋の龍を想起させる長蛇型の巨大なISが現れた。

「……何あれ」

簪が震えた声で言う。ダリルが答えた。

「<レヴィアタン>。フォルテ・サファイアの専用機<コールド・ブラッド>の本当の姿だ」

第96話 凍てつかない想い

天に向かって吠える<レヴィアタン>の映像は管制室のモニターにも映し出されていた。

学園と比較してもその全長は100メートル近い。しかし、その巨大さもさることながら、恐るべきは外気温が急激に下がり始めたことだった。学園に設置された観測計が示す温度はすでに零度を下回っている。

信じがたい超常現象を目にして、真耶は悲鳴に近い声を上げた。

「お、織斑先生ッ！」

「おちつけ、まずは状況を把握しろ」

言われて観測モニターを注視する。モニターが映し出す外界はすでにブリザードに覆われていた。5メートル先も伺えない濃厚なブリザードだ。外は氷河期を迎えたような極寒の世界に変貌しつつある。「こいつは気候を操るのか……」

千冬もその巨大さと能力に言葉を失いかけるが、すぐに冷静さを取り戻した。

いずれ<デウス・エクス・マキナ>を母から継承する身。あらゆる事態に備え、対処できなければ、組織の長は務まらない。そう胆に銘じていた彼女は、すぐさま行動を起こした。

「山田先生、生徒たちに避難命令を。可能なら防寒具の着用も。教師部隊も各自の機体で出撃。専用機持ちには、教師部隊と合流するように伝える。合流次第、標的の注意を引きつけ、生徒が避難する時間をかせげ」

「りよ、了解！」

三人いる通信担当は、各々に指揮の伝達を始めた。

二組の副担任はアリーナで控える専用機持ちに教師部隊と合流するように、三組の副担任は教師部隊に出撃を命じた。そして千冬自身はインカムを取出し、<デウス・エクス・マキナ>の指揮系統にアクセスした。

「ああ、私だ。事態b32に遭遇している。そちらの支援を要請した

い。——わかった。準備が整い次第たのむ。それまで、何とか持ちこたえてみせるが、現状の戦力では、難しいかもしれん」

アリーナ全体を見渡せる中央モニターに視線をやる。
戦局はちょうど教師部隊と専用機持ちが合流しているところだった。

♡

◆

♡

IS学園・食堂の厨房。吐く息が白いことに、ソフィアは気づいた。ボルシチを作っていた彼女は、手を止めて、外の様子を窓越しに眺める。結露を拭いた先にあったのは、白銀の世界であった。いま学園は凍りつつある。ありえない気候変動に、ソフィアは苦笑いを浮かべた。

「レインの奴、失敗したな」

ロキもキーボードを叩いていた手を止め、外を見た。

「想定の内だ。そのためのコイツだ」

ソフィアは寄生木の植木鉢に実るクルミサイズの物体を見やった。

「使えるのか？」

「いや、まだ最終プログラムが完成していない。ソフィア、時間を稼いで」

「わかった」

そのとき、校内放送が流れた。

『学園生徒、教員のみなさん、直ちに避難地区へ避難してください。そしてできるなら体温を保てる温かい格好をしてください。繰り返しします——』

真耶のアナウンスを聞いたロキは、通信機を取り出した。

「クロエ、アナウンスは聞いたな？　母さんと一緒に避難しろ。いいな」

『くーちゃんもお兄様のお手伝いするでございますッ』

「わかった。じゃあ、シャイニィはおまえが守れ。それがおまえの使

命だ」

『わかったでございませす！ シャイニーはクーちゃんが守るでございませす！』

「任せたぞ。だが、無茶はするな。おまえは、仮面のお姉さん」に守ってもらえ」

そうやって通信を切る。

「クロエは無事のようだな。——で、おまえはどうする？」

「俺はアリーナの管制室に向かう。知恵は多い方がいいだろう」

そうやってジャケットに袖を通し、ヘミストルティンの槍をわきに抱える。ソフィアはスーツを脱ぎ、ISスーツに着替えると、自身の専用機くフェンリルへの準備に取り掛かった。

「わかった。あと風邪をひかないように暖かくしておけよ。バカは風邪をひかないらしいが、おまえは賢いんだから」

そう言い残して、ソフィアは食堂を飛び出していった。

♡

✦

♠

ホワイト・アウト。吹雪で視界が白に染まることをそう呼ぶのだったか。

篠ノ之箒はそう思いながら、教師部隊と合流した。参加者はセシリア、シャルロット、楯無、簪、鈴、月子、フー、陰陽姉妹。そして、アリスとローズマリー。彼女たちはV字で飛行する教師部隊の後方についていた。

「にしても、イベントがあると、どうしてこうなるのかしらねえ」

「ご都合主義だね」「それは言わないお約束だよー」

鈴の愚痴に「くふふ」と顔を見合わせる陰陽姉妹。そんな双子をフーが「気を引き締めろ」と諫める。濃氷の中に超大型ISくレヴィアタンくを確認できるようになったからだ。

「まるで怪獣や……」

月子が息を？む。

到底、パワードスーツと呼べないその巨大さと、クリスタルの鱗で覆われ全身。山脈のような背びれ。鋭い牙と角を生やした頭部。その形状はまるで機械仕掛けの怪物だ。いまから迎撃に向かう自分たちはさながら地球防衛軍か何か。

しかし、正義の主人公という気分にはなれなかった。そう楽観的になるには、敵のプレッシャーが強すぎた。

「標的を確認。これより攻撃フェイズに移行する。——全機、攻撃開始」

V字に並ぶ教師部隊の編隊が20ミリ機関砲による一斉射撃を開始する。

だが、クリスタル状の装甲にわずかなヒビが走るだけで有効なダメージは確認できなかった。そのヒビも数秒後には、内部から滲み出した水によつて復元されてしまう。

「実弾が利かないなんて……」

「なら、お下がりにさいいな、シャルロットさん。ここはわたくしたちの出番ですよ、箒さん」

「ああ」

「よし、アルファチーム、およびブラボーチーム、彼女たちに道を開けてやれ」

マルガリータの指示で教師部隊が下がり、箒とセシリアが前に躍り出る。箒は《雨月》を振るい、セシリアはBTレーザーを浴びせた。

七本の赤い閃光と、一条の青い閃光が<レヴィアタン>に向かう。本来なら戦艦を鎮めるほどの大火力。しかし、それら閃光が<レヴィアタン>の装甲に命中すると、屈折してこちらに跳ね返ってきた。

「ちよつとー」「ふあっ!」「ふあー!」

返ってきたレーザーを寸前のところで避けた鈴と陰陽姉妹は、箒とセシリアを睨みつけた。

「ちよつと何すんのよ」「危ないよ!」「危ないね!」

箒は「すまない」と詫び、セシリアは「向こうに言ってくださいいな!」と文句を言った。

どうやら<レヴィアタン>の装甲は指向性エネルギー兵器を跳ね

返すらしい。

「なんてやつだ……」

箒は改めて相対する敵の強さに戦慄を覚えた。実弾もエネルギー弾も通用しないうえ、100メートルを超える大きさである。一体どうやって食い止めろというのだ。

「怯むな。来るぞ」

マルガリータが警戒を促すと、今まで悠然と攻撃を受け止めていた<レヴィアタン>がついに動きを見せた。背筋に並んだ山脈のような氷柱を一斉に放ったのだ。それは——ミサイルの弾頭だった。数は50以上。それが彼女たちをロックオンした。

「くるぞ、全機、散開。任意で対応！」

マルガリータの命令に従って各機がミサイルを振り切ろうと戦闘機動を展開する。

だがしかし、思うように対ミサイル機動を展開できない隊員から困惑の声があがった。

『く、スラスターの出力が上がらない……!? これじゃ降り切れないッ!』

『マニニューバーに支障!! 誰か援護をッ!』

<レヴィアタン>が生み出したブリザードによるスラスターノズルの凍結が原因だった。そのため、思うように速度を出せず、ミサイルを振りきれない。そこへ50を超える物量。教師部隊と専用機持ちたちは、思うように対応できず次々に被弾していった。

『こちら被弾。——なによこれ、機体が凍結して!』

『全機体に告ぐ。敵は特殊弾を使用。命中すると、機体が結晶体に浸食され——』

『く、こちらセシリア機。スラスター部分に被弾。航行に支障!』

『シャルロット機、被弾。ごめん、離脱しまっ——きや!』

箒の視界の先で氷塊と化したシャルロット機が、さらにその向こう側では半身を結晶に覆われ、墜落していくセシリアが確認できた。なおも一機、二機……とやられていく仲間たち。それを目の当たりにして、箒の脳内に全滅の言葉がよぎった。

「くそっ。この、もののふめ！ これ以上やらせるか！」

箒は第四世代の万能性を活かし、吹雪をもろもしない速度で<レヴィアタン>に接近した。

そして表面上にとりつき、《空割》を突き立てる。

だが、巨体すぎて刃先がまったく内部に届かない。それどころか、<紅椿>の脚部が<レヴィアタン>の装甲と氷でくっついてしまい、溶接されたみたく動けなくなってしまふ。このままでは氷に飲み込まれ――

「たくつ、考えもなく突撃するからよ」

と言ったのは鈴だった。

「ほら、いま助けてあげるからジツとしてなさい」

鈴は衝撃砲を箒に向けた。その衝撃で氷がくだけ、<紅椿>の脚部が<レヴィアタン>の装甲からはがれる。衝撃で吹き飛ばす。なんと乱暴な救出方法か。

「鈴、もうちよつとやさしく、――いや、助かった。しかし、鈴、よく無事だったな」

「あいにく、<甲龍>はこの程度の悪天候でへこたれるほど軟じやないのよ」

もともと<甲龍>の特長は、その屈強さにある。特殊な環境下――寒冷地や砂漠でも、パフォーマンスがほとんど低下しない。だからこそ、<レヴィアタン>が生み出したこの悪天候でも、十分な性能を発揮できていた。<甲龍>と同系列の<甲虎>や陰陽姉妹の専用機<干鞘／莫耶>も、また戦闘に支障をきたしていない。

そして、彼女たちにそれをもたらしているのが、開発基盤となったロシア製第二世代型の技術。

「箒ちゃん、大丈夫？」

だから、箒と共に現れた楯無も、ほとんど<レヴィアタン>の影響を受けていない様子だった。

この悪天候でも動ける機体がある。これは光明が差したか。いや、天候を克服できたとしても、攻撃が通じないのではどうにもならない。

仲間も大分に減ってしまった。残っているISは、確認できるだけで、同じ第四世代の〈レーヴァテイン〉と〈赤騎士〉。〈ミステリアス・レイディ〉に守られている〈打鉄式〉と、〈甲虎〉に守られている〈白鉄〉、そして、陰陽姉妹とマルガリータ機のみ。他は視界の悪さとレーダー障害で確認できない。

「で、どんすんのよ。はつきりいって勝てる気がしないんだけど……」
しかし、泣き言は言っていられない。この残存戦力で〈レヴィアタン〉を食い止めなければ、学園が壊滅しかねない。すると、管制室の千冬から通信が入った。

『全機、聞こえるか。これより〈レヴィアタン〉への“爆撃”を開始する。アリス・リデルを除く教師部隊および専用機持ちは指定の位置までさがれ』

「爆撃？ それにアリスだけ？」

一同の視線がアリスに集まる。

アリスは「ようやくメインディスプレイが用意できましたか」と言った。

「みなさん下がってください。ここにいたらまきぞえを食います」

箒たちに撤退を促しながら、アリスが前線に躍り出る。

何が行われるのか。わからないが、「ここは任せましょう」とローズマリーの一言で、箒たちは指定のポイントまで下がった。

♡

◆

♠

アリーナ管制室に続く通路。

率先して避難誘導を行っていた一夏は、その道すがら肌を突き刺すような寒さに腕をさすった。

「なんなんだ、この急な冷え込みは……風邪ひいちゃうぞ……」

「おそらくは現れた巨大物体がもたらしているのだろう」

一夏に同伴し、共に避難誘導を行っていたラウラが言った。

「みたいだな。しつかし、なんなんだ、あの馬鹿でかい怪獣みたいなの

は」

「わたしにもよくわからん。ただ、あの大きさだ。施設を攻撃するために作られた戦術兵器の類とみていいだろう」

「じゃあ、あいつはIS学園を壊滅させるために現れたのか？」

「いや。壊滅させるつもりなら、もつと有効な時間帯や潜入ルートがあつたはずだ。このタイミングと、出現場所から察するに、偶発的に現れた可能性が高い」

「時と場所を選ばねーなんて、ほんとうに怪獣じゃねーか」

「なんだとしても放置はできん。いま、教官たちが策を講じているはずだ」

ラウラは、千冬たちがいる管制室の方向に視線をやった。そのとき、彼女たちの頭上を、猛スピードで何かが駆け抜けていった。長い円筒形の物体だ。それが火の尾を曳きながら、〈レヴィアタン〉の方角へ向かっていく。

「なんだアレ……」

一夏の疑問に、ラウラが〈ソリッドアイ〉を望遠モードにして言った。

「あれは——巡航ミサイルだ！」

その数瞬後、アリーナの方角からけたたましい爆発音と火の柱が昇った。



〈ウォルラス〉から発射された巡航ミサイルは、アリスの最終誘導でレヴィアタンに命中した。

激しい爆発に〈レヴィアタン〉が初めてののけ反る。鈴は「やりい」と指をならした。

「これやったでしょ」

「……やったか」はやってないフラグ」

ぼそつとつぶやいた簪をキッと睨む。高揚した気持ちに水を差さ

れ気分を害した様子だった。

「これだからオタクは……。そうやって、すぐアニメのジंकスやネットスラングをリアルに持ち出すんだから。ただでさえ、寒いんだから、そういう冷めることいわないでよね」

「でも、二号さん、簪ちゃんの言葉は正しかったかもやで」

月子が睨んださきでは、〈レヴィアタン〉が再び立ち上がった。た。

「マジ!?!」

全身を覆うクリスタル状の鱗こそ剥がれ落ちているが、本体に損傷はない。その損傷もやがて滲み出てきた水によって復元されていく。間髪おかず、二発目が飛来するが、やはり表面上の装甲がはがれるだけで、機能停止に至るほどのダメージは与えられなかった。

「巡航ミサイルも通じへんなんて……」

「真正正銘の怪獣だな……」

いかなる攻撃もまるで歯が立たない現状に、中国と日本の代表の声にも畏怖がにじみ出ていた。

実弾もエネルギー兵器も、化学エネルギー兵器も跳ね返す装甲。あの意味で絶対防衛ともいえるそれを無力化するすべがない今、誰もが撃破は不可能に思えた。

『全機に告ぐ。攻撃は失敗した。いったん、体制を立て直す。撤退しろ』

「なに、こいつを放置すんの?」

『「足止め係」がいまそちらに向かっている。おまえたちは撤退しろ』

「了解した。全機一時撤退する」

マルガリータが応じる。いまこちらには対抗手段がないうえ、機体不良のISを抱えているのだ。戦闘を継続しても全滅するのが目に見えている。

アリスたちも撤退に異論はなかったが、現場の事態はそうさせてくれそうになかった。ガラス玉のようなレヴィアタンのセンサーアイがギョロツとこちらを向いていたからだ。このまま素直に見逃して

くれるとは思えなかった。

「では、私が残りましょう」

ローズマリーが殿を買って出るが、楯無は首を横に振った。

「ううん、殿は私が務めるわ。〈レーヴァテイン〉の主兵装は荷電粒子砲でしょ。跳ね返されるわ。先のミサイル攻撃を見た限り、熱量を持った攻撃なら多少はダメージを与えられる。相転移で熱を生む《クリアパッション》の方がまだ有効なダメージを与えられるわ」

ローズマリーは思案した。彼女の提言は正しい。それにアリースヤをまだ見ていない。彼女と遭敵を想定するなら〈ヴァルキリー〉と戦える自分はこのに残らない方がいい。

「では私も残ろう」

「フーさんが残ってくれたら頼もしいけど、あなたは月子ちゃんをお願い。この環境下での撤退じゃく白鉄にもエスコートが必要だし。そこの双子ちゃんは、簪ちゃんをお願いね」

「わかったよ」「わかったね」
「無理はするなよ、更識」

「大丈夫です、先生。こうみえて『学園最強』ですから」

楯無は余裕を見せるように扇子を開く。アリスは箒と、マルガリータは鈴、月子はフー、簪は陰陽姉妹とバディーを組み直し、機体を回頭させる。最後に全体を守るようにローズマリーが編隊に寄り添う。

全員が撤退の準備に入ったところで、簪が視線を楯無に向けた。

楯無は「大丈夫よ、お姉ちゃんは無敵だから」と笑って見せた。簪は笑わなかった。

「では、撤退する。全機、ローズマリーに続け」

ローズマリーが先頭を切って、アリスたちが前線から離脱していく。

それを見送ることなく楯無は《蒼流旋》を頭上で回して構えた。

♡

◆

♠

「殿を務めるなんていったものの、どうするか」

鎌首をもたげる<レヴィアタン>をまえにして、さしもの楯無のさすがに戦っていた。

けれど、やるしかない。私は学園最強の生徒会、そのように振る舞うだけだ。

「——さて、いくわよ、<ミスティアス・レイディ>」

楯無は《アクア・ナノマシン》のディスプレイを解放し、水の位相を操る分子機械群を放出する。それをお伽噺に登場する人魚の形に模り、近衛のように配列させた。

こいつの注意をどうひきつけるか。その策略を練る楯無に、<レヴィアタン>は罅を大きく開いて唾内を覗かせた。まるで底なし井戸のような喉から出てきたのは、パラボラアンテナのような装置だ。

そのアンテナの先端に不気味な青白い光が灯る。

光の正体が何かはわからない。わからないが、ひどくまずいことはわかった。

あの光は撃たせてはいけない。

ましてや、射線上に撤退する仲間がいる、この状況では絶対に。

考えるより早く、ほとんど反射的に、楯無は切り札の名前を叫んだ。

「ヘスカーレット・レイディ」モードオン!!」

楯無の全身を包む水のマントが赤色に染まりあがる。

《ヘスカーレット・レイディ》モード。ナノマシンの出力をオーバーロードさせて、破壊力を爆発的に高めるモードだ。楯無は赤色化したナノマシンの水を《蒼流旋》にまとわせて、瞬時加速を使った。

加速の威力を乗せた鋒先が、<レヴィアタン>の喉元を下から突き上げる。その衝撃で、青い光線が撤退する仲間からIS学園の中央タワーへそれてくれる。身代わりになった中央タワーは、まるで液体窒素につけたバラのように砕け、倒壊していった。

「なんて威力なの……」

真ん中からぽつきり折れる《ユグドラシルタワー》に楯無は絶句する。

でも、なんとか、しのいだ。——そう安堵した束の間、<レヴィアタン>のガラス玉のようなセンサーアイがギョロツとこちらを向い

た。

「なに、文句でもあるの」

〈レヴィアタン〉は何もいわない代わりに龍唾を見せた。

整列した鋭い牙が楯無に迫る。——噛みつこうっていうの！

「ちよ、ちよつと、お姉さん、食べてもおいしくないわよッ」

楯無は機体を後方に下がらせるが、〈レヴィアタン〉はその図体に似合わない俊敏な動きで楯無を追いかけた。楯無は《蒼流施》に備わった12.7ミリガトリングで応戦するも、相手は20ミリ弾を跳ね返した怪物だ。まったく意に反さない。

（まずい。こっちは《アクア・ナノマシン》がもう使えないのに……ッ）

〈スカーレット・レイディ〉は高い攻撃力を得る代償として、使用後ナノマシンが使えなくなる。その状況では、身を隠すことも、反撃することも敵わない。ありたいにいえば、絶対絶命だった。

なおも迫る〈レヴィアタン〉の顎が、ついに楯無の頭上へ迫る。

寸でのところで何とか支えるも、暴虐な圧力に〈ミステリアス・レイディ〉が軋みを上げた。

〈警告：フレーム強度を超える圧力を検知〉

〈警告：大腿部骨格に歪が発生。変形の恐れあり〉

〈警告：上腕部骨格に歪が発生。変形の恐れあり〉

〈警告：第七アクチュエーター出力低下【原因】電磁筋肉の断裂〉

〈警告：第三アクチュエーター出力低下【原因】電磁筋肉の断裂〉

無数に乱立する警告メッセージは〈ミステリアス・レイディ〉の悲鳴のようだった。

（耐えて、ミステリアス・レイディ！）

出力を脅力に回して、なんとか持ちこたえるが、限界の扉は確実に開きつつあった。

万力で押しつぶすような緩慢さで機体が圧潰していく

さしもの楯無も「ここまでかしら……」と限界を感じとった。——

その時、〈ミステリアス・レイディ〉にかかる圧力がわずかに緩和された。

「……なごっ」

ぎりぎりのところで持ち直した楯無は、すんでのところで滑りこんできたISを見やる。

間一髪のところ、彼女を助けたのは――

「……お姉ちゃんはやらせない、から」

妹の簪だった。

♡

+

♠

間一髪のところ、彼女を助けたのは妹の簪だった。

手には彼女がもつとも得意とする得物――対複合装甲超振動薙刀《夢現》。それをつつかえ棒にして、簪は暴虐のアギトを受け止めていた。

「か、簪ちゃん!? どうして戻ってきたの!!」

果敢に自分を救い出そうとする妹の姿を見て、飛び出した第一声はそれだった。

妹は我が身を危険に冒して立ち向かうような勇者じゃない。臆病で、か弱い、そんな妹が戻ってきたことに楯無は驚きを隠せなかった。「どうして、どうしてなの……」

このトーナメントが始まってからというもの、妹はずっとそうだった。彼女は自分に立ちはだかる壁へ果敢に立ち向かおうとする。臆病者と言われた簪の一体なにがそうまで彼女を駆り立てるのか、姉にはわからなかった。

「……認めてもらいたいから」

簪は白い吐息と共に胸中の想いを吐き出した。ずっと、ずっと秘めていた姉への想いを。

「……いま、国防の在り方が変わって、いろんな責任や負担が更識に覆い被さってきてる……。それをお姉ちゃんは全て一人で背負おうとしている。……わたし、知ってるよ、お姉ちゃんが何で楯無になったのか。わたしに負担をかけさせないためでしょ」

「それは……。そうよ。でも、姉なら妹に苦勞を――」

「それがずっと嫌だったのッ！」

簪は姉の想いを強い口調で撥ね付ける。

面を食らった姉に、妹は自らの想いをぶつけた。

「だって、わたしたち姉妹なんだよ！ 助け合うための姉妹なんじゃないの！」

姉は妹を守るもの。それが姉の価値観だった。

けど妹は違った。『守る・守られる』関係が姉妹じゃない、互いに支え合う関係が姉妹だと。血を分けた姉妹だからこそ、簪は姉と苦労を分かち合い、支え合いたかった。

「……でも、分かっていた。わたしはお姉ちゃんを支えられるような強い人間じゃないって」

「そんなことないわ！」

「あるよ！ わたしがダメな子だから、ひとりじゃ何もできない子だから、裏で手を回していたんじゃないの？ それは私の力を信じてくれてもいなければ、認めてくれない証拠だよ。違うって言うなら、なんで＜ミステリアス・レイディ＞の開発にわたしを呼んでくれなかったの！」

楯無に再び強い衝撃が襲った。

アリスに大破させられたくモスクワの深い霧を改修するさい、彼女は自分の伝手を使い、腕の立つ技術者を集めた。布仏虚や黛薫子。ミステリアス・レイディの心臓ともいえるナノマシン制御ソフトウェアアハウンディーネの開発は、〈倉持技研〉にいるISのソフトウェア開発のプロフェッショナル篝火ヒカルノに依頼をした。その開発チームに簪の名はなかった。

なぜ、呼ばなかったのか。わからない。もしかしたら、簪が語ったとおりなのかもしれない。

開発に呼ばなかったのも、裏で手を回したのも、簪がダメな子だと決めつけていたから。

——私が全部してあげる。だから、あなたは無能なまままでいなさいな。

私は妹をそう思っていたのか。すくなくとも、簪にはそう思われて

いた。

だから、簪は自分に対する評価をひっくり返したかった。ひっくり返して、頼られるような妹になりたかった。独力の専用機開発にこだわったのも、我武者羅に立ち向かってきたのも、すべては姉に認めてもらいたかったから。

「簪ちゃん、あなた……」

どこまでも姉を想い、健気に努力しようとしてきた妹に、涙があふれる。

それに比べて自分は――。妹に劣等感のレッテルを張り、臆病と決めつけて、本当の姿を見ようとしなかった。結局、自分は「ダメな妹の世話を焼くできた姉」をしたかっただけ。

「ごめんね、こんなお姉ちゃんで。私、あなたのこと何にもわかっていなかった」

「……ううん。わたしこそこんな妹でごめんね。でも、いまだけはちゃんと守るから」

支えていた《夢現》が軋みを立てる。そうながく持ち堪えられそうになかった。

「行って」

簪ははつきりとした声で、姉を突き飛ばした。それを境に、支えになつていた《夢現》が壊れ、暴力的な圧力がいつきに簪を襲った。

口を閉じた<レヴィアタン>を見て、楯無は視界が真っ白になった。周りが濃氷に包まれていたからじゃない。堰きとめていた簪の姿が猛龍の啞内に消えたからだ。

「か、かんざしちゃん……?」

返答はない。ただ、代わつて<レヴィアタン>が天に向かって咆哮した。

憎しみは湧いてこず、途方もない悲しみだけが襲ってきた。本当の悲しみに直面したとき、人は怒りすら忘れるものだど、楯無は始めて思い知った。

涙も凍って流れてこなかった。

怒り狂うことも、泣くこともできず、楯無は虚無の世界で立ち尽く

しかできなかつた。

まるで糸切れの傀儡人形のような楯無を、<レヴィアタン>が再び喰らおうとする。

「行け」と言われたのに、体は動かなかつた。あの奥に妹がいるかもしれないと思うと、このまま食われてしまつていいかもしれないとさえ思えた。

<レヴィアタン>の罅が迫る。楯無は目を閉じた。――次の瞬間、強い横殴りの衝撃が彼女を襲つた。すんでのところで<レヴィアタン>の攻撃から彼女を逃したのは、狼のような姿をしていた。

「ソフィア……」

<霜氷の大狼>をまとつたソフィアは、ビシツと尾を立てた。怒つた犬がそうするように。

「見ていられないな。なんだ、その貌は」

「だって、簪ちゃんが、簪ちゃんがッ！」

楯無はソフィアの胸に飛び込んだ。柔肌のぬくもりにふれて、ようやく涙が楯無の頬を伝つた。

ソフィアは「そうか」と楯無をその腕で慰めてやる。

そんな二人へ<レヴィアタン>が再び龍腔を開く。放たれた咆哮には攻撃の意図が見てとれたが、ソフィアは動かなかつた。

「いま、とりこんでいるんだ、すこし黙つてろ」

狼が縄張りに入ってきた他種族を威嚇するような、そんな睥睨だつた。

その睨みと共に<フェンリル>の周囲が陽炎のように歪む。やがてそれは、ひとつの大狼となつて、<レヴィアタン>の喉元に噛みついた。途端、<レヴィアタン>の全身が凍り始めていく。

神をも殺したとされるフェンリルの牙は、やがてドラゴンを氷の眠りへと誘つていった。

「いまのうちだ。<フェンリル>の力でもそうながく奴を食い止めてはいられない」

「いやよ、私はここを離れない。簪ちゃんのそばにいる」

髪を振り乱す楯無にソフィアは淡々と答えた。

「それはできない。オレはキミの妹から『キミを頼む』と任されている。ここで無残にやらせるわけにはいかない」

もう何度目だろうか。こうして妹に衝撃を受けさせられるのは。

「話せば長くなるが——わたしがこんなんだから。わたしの代わりに姉の力になってほしいと言われていた。彼女はキミを大事に想っている。だというのにキミは『もうどうにでもなれ』と言う。キミはどこまで人の気持ちを無下にすれば、気が済む」

楯無は俯く。こうやって本気で誰かに叱られたのは久しぶりだった。

偉くなつて叱れる人もいなくなつてしまつたから、すっかり忘れてしまつていた。甘やかすだけが優しさじゃない。厳しく接することも優しさだつてことを。簪が欲しかつた優しさはこういう優しさだつたのかもしれない。

「そうね。そうやって私が妹の気持ちに気づいてあげなかつたから、簪ちゃんは……」

「気を病むのも、懺悔するのも、明日にしろ。いまはすべきことがある」

そうだ。いまは後悔する時じゃない。ソフィアが作つた時間を有効活用し、体制を立て直して、〈レヴィアタン〉をどうにかする。それがいますべきこと。

「安心しろ。〈打鉄式〉も、それを作り上げた簪も、簡単にやられるようなタマじゃない」

「うん」

心から頷づく。——そうだ、妹は簡単にやられてしまうような子じゃない。

楯無は初めて妹を認めることができた気がした。あとはこの気持ちを妹に伝えるだけ。

(待っていて、簪ちゃん、すぐ戻ってくるから)

凍りついた〈レヴィアタン〉にそう告げて、楯無は戦場を後にした。

第97話 〈ミストルティン〉の槍

IS学園整備区画。IS学園の工廠を兼ねるこの区画は、通常設備より頑丈に作られている。地上格納庫と地下整備区画を隔てる壁は2メートルの厚みを持ち、そう容易く機能停止しないよう設計されている。その区画では、いま回収された機体の解凍作業が行われていた。

「普及にはどれくらいかかりそうかしら」

作業員がレーザーカッターで結晶体を取り除いていく様子を眺めながら、機体の持ち主セシリア・オルコットが言った。

整備職員が遮光ゴーグルを外して彼女に答える。

「機体表面を覆っている結晶体はただの氷じゃないようなんだ。高熱でも簡単に溶かせない。地道に取り除いていくしかない。早くて二時間ってところだ」

職員の言葉にセシリアは親指の爪を噛んだ。

二時間。〈レヴィアタン〉がココを壊滅させるにはあり余る時間だ。自分はただ学び舎が凍壊していく様子を、指をくわえて見てるしかできないなんて。

「できるだけ急いでくださいな。最悪、射撃システムだけでもかまいませんから」

「そうしたところで、エネルギー兵器主体の〈ブルー・ティアーズ〉に出番はないと思うよ」

背後から聞こえた声に振り返る。立っているのはシャルロットだった。

「それはあなただって一緒でしょ、シャルロットさん。〈レヴィアタン〉の装甲には実体弾も通用しないんですよ。実弾主体の〈ラファール・リヴァイヴ〉じゃ役に立たないんじゃないやなくて」

「わかっているよ。——ほんと厄介だね、あの装甲」

「ええ。あれを無力化しないかぎり、〈レヴィアタン〉を止める手立てはないように思いますわ」

「いま、司令部ではその無効化の作戦が練られているって話だが」

整備職員が言うのと、整備区画に冷たい風が流れた。ココと地上を隔てる隔壁が開いたのだ。地上で猛威を振るう極寒の風と共に入ってきたのは、ロシア製ISを筆頭にしたアリスたち。

「あ、エリー、箒、鈴！」「みなさんも無事でしたのね」

「ああ、機体の性能に助けられた」

と箒。アリスは機体を解除し、肌をさすった。

「まったく、敵いませんよ。この寒さ……」

アフリカ、ハワイと温暖な気候で育ったアリスに、この寒さは相当こたえるらしい。

いつもは愛らしい桜色の唇もすっかり蒼くなっていた。

「まったく同感ね。このままじゃ、氷漬けにされたマンモスと同じ末路よ」

「そうならないように、全力を尽くしましょう」

自分の体をさする鈴に、わりと平然としているローズマリーが言うと、キツネのワツフルコートを着込んだ生徒が走ってきた。自主的に解凍作業に参加していたのほほんさんだ。

「ぎつちよくんツ、ツツキー。かんちゃんは？　かんちゃんは戻ってきてないの??」

「え、簪?」

「一緒に撤退したはずやけど」

とはいうものの、見渡した先に、簪の姿は見当たらなかった。

「そういえば、一緒にいた月亮ユエリヤンと太タイリヤンもいないな。鈴」

「OK、フーさん——、月亮ユエリヤン、太タイリヤン。あんたたち、なにしてんの。いまどっこよ」

こちらのプライベートチャンネルは応答があった。

『実はだね、りんりん』『実はだよ、いんいん』

「実は、なによ」

「一緒にいた娘が『わたしはいいから』ってね」「うん『先に戻って』ってね」「止めたのにな」「うん止めたね」「なのに、びゅーって」「そう、びゅーって」

「じゃあ、なに、あんたたち、簪とはぐれたの!？」

『うん』

「まさか、簪ちゃん」「会長の許に……」

凍てついていた場の空気がさらに凍てつく。いまの簪なら十分にありえる話だった。

アリスと月子が思わず迎えに行こうとすると、そこにマルガリータがやってきた。

「お前たち、千冬たちが呼んでいる。来い」

「簪がまだ戻ってきていないんです」

「なに」とマルガリータは目を開いた。

「そうか。だが、再出撃は許可できない。助っ人が向かっているというし、いま彼女に任せておけ。それに向こうには楯無が残っている。姉の許に向かったのなら、意地でも連れて帰ってくるだろう。おまえたちはいますべきことをしろ」

マルガリータはいまにも出撃しそうなアリスたちを強い言葉で抑え止める。月子はアリスを見る。

アリスがどうするか悩んでいると、整備課に再び凍てつく冷風が駆け抜けた。開いた扉から入ってきたのは<ミステリアス・レイディ>とく<フェンリル>だ。その二機だけで<打鉄式式>の姿はなかった。

「……会長、簪は？」

いやな予感が脳裏を過ったアリスへ、楯無は決意にみちた強い言葉で告げた。

「大丈夫、必ず助け出すわ」

冷静に答えた会長を見て、アリスはそれ以上を言及しなかった。姉が取り乱していないのだ。すでに「自分のすべきこと」が見えている姉の前で、自分が騒ぎ立てることは違うように感じられた。

それに彼女の冷静ぶりを見るに、無事でないにしろ、希望は持てる状態ではあるのだろう。ならば、一刻も早く“行動”に起こすことが重要だ。彼女の身を案じ、あたふたしていても、事態は何も変わらない。

「アリスちゃん、あなたも力を貸してちょうだい」

「そのかわり高くつきますよ」

いつもの調子で応えると、マルガリータが「場所は第一視聴覚室だ」と言った。

アリスは頷き、ローズマリーは「行きましょう」と他の代表たちを促す。鈴は陰陽姉妹に「早く帰ってこい」と通信で言った。

♡

♣

♠

IS学園・第一視聴覚室には40席のボード付きチェアと、大型のスクリーンを備えられている。普段は過去試合の視聴などに使われるココに、私たちを始めとした作戦要員は集められた。

「ああ、くさむい。なんとかならないの、このさむさ」

現在、室内気温は10度以下。

石油ストーブがあるとはいえ、いまだISスーツ姿の私たちにこの気温はこたえる。

「空調システムが動いていないんだろ。いまはこいつで我慢するしかない」

とはいうものの、箒もしきりに腕をさすっていた。月子も両手を太ももに挟み身をよじらせている。ソフィアとローズマリーは直立姿勢でいつもどおり。陰陽姉妹は中国代表に抱き着いて暖を取っていた。

「でも、せめて、なんか温まるものがほしいわ」

『ねー』

と顔を見合わせる陰陽姉妹。そこでパシュッと自動扉が開いた。入ってきた人物は、両手にダンボールを抱えたラウラと一夏だ。隣にはロリーナもいて、やかんを持っている。

「みんな差し入れだ」

ラウラが持ってきたダンボールのふたを開ける。

中身はカップラーメンを始めとしたインスタント食品だった。ありがたいと私たちは飛びついた。

「気が利きますね」「あたしは、これ。あんたたちは?」「うどんにする

ね!」「そばにするね!」「あんたたち、そこは合致しないのね……」「太
☒、うどんにしないさい。蕎麦は私がもらいます」「ローズマリーさま
は、ほんと蕎麦が好きなんですね。——あ、おしるこがあるやん!」
「そういう月子くんも甘いもの好きだね」「ふーさんだって、また麻婆
ラーメンなんて辛そうな……」「痔になるなよ」「ならないから!」
ソフィアに叫んで中国の代表が尻を労わる。そんな具合にてんや
わんやインスタント食品に湯を注いでいると、千冬さんが入ってき
た。後ろにはロキもいる。

「食べながらでいい。全員、席につけ。これから作戦の説明を行う」
千冬さんの号令で、私たち一同はインスタントカップメンを手に、
席についていく。

「あんたたち、一つの席にふたりで座ってきつくくないの?」

「ぎ、ぎづくないよー」「ぎ、ぎづくないねー」

「きつそうじゃない!」

「ソフィア、私たちも一緒に座る?」

「遠慮しよう」

「アリス、膝の上にくる?」

「イ……ッだ」

「フーさん、椅子硬いけど、おしり大丈夫?」

「私は痔じゃないからね。さすがに怒るよ?」

まるで緊張感のない様子で各々が席につき、次いで、ロリーナや整
備班長などの後方支援組も疎らにせきについていく。最後に千冬さ
んが大型スクリーンの前に立ち、状況を開始した。

「全員、席に着いたな。では一同、傾注しろ」

私たちは意識を千冬さんに注いだ。

「我々は突如として現れた、この<レヴィアタン>と再戦にあたる。
それにあたり、まず<レヴィアタン>について、ロキに説明をしても
らう」

千冬さんに代わってロキがモニター前に立つと、大型モニターに鎌
を擡げるレヴィアタンが映し出された。背景に映るヘUGドラシルタ
ワー〜と比較しても100メートル近くあるその巨体に、後方支援組

の教師が「大きい……」とつぶやく。整備区画にいた彼女はくレヴィアタンを、いま初めて目の当たりにしたのだろう。

「実物はもっと大きく見えるわよ。万里の長城みたいなんだから」
鈴がなぜか得意げに言った。これ相手に生き残った自負だろう。

「こいつは全長120メートルを超える超大型のISだ。おそらく拠点攻撃を目的として開発されたと思われる。武装は特殊弾頭を装備したミサイルが50基。こいつは爆熱で標的を破碎するのではなく、凍結させることで対象の動きを封じる兵器だ。さらに頭部には超低温レーザー砲が装備されている。こちらは、分子運動を加速させて物体を蒸発させる通常レーザーとは異なり、分子運動を停止させて物体を粉碎する」

「冷凍ミサイルに、冷凍レーザーなんて、まるでスーパーX3ね」

ロリーナが言った。しかし、一同は「ん？」という顔をする。

誰にもわかってもらえず、ロリーナはしゅんとした。

「ともかく、現状ではどちらも防ぐ手段がない。当たらないように注意してくれ」

「簡単に言ってくれやはる」

おしることをズズつとすすりながら月子がぼやく。ロキはかまわず続けた。

「そして、最も厄介まのは、こいつの装甲だ。こいつの鱗は一枚一枚が《アクア・クリスタル》と同じ機能を持っていると言っている。実弾をダイダランシー効果で弾き、エネルギー光をプリズム効果で屈折させ、跳ね返す」

ならばと巡航ミサイルでの爆撃を慣行したが、結果は知つてのとおりだ。

「では、そんな相手にどう立ち向かえと？ 核でもないど倒せる気がしませんか」

「大佐がいなくなつたいま、発射権限は愛人だったオレにあるよ」

当然ながら誰一人賛成するものはいなかった。核の炎でくレヴィアタンを葬り去つても、その代償はあまり高くつく。現実的な策じゃない。言つた私も、乗つたソフィアも本気じゃない。

「あいにくその必要はない。核を使ったがるのは、想像力に乏しいバカのことだ。だろ、ロリーナ・リデル。俺たちはそんなもの頼らずとも、ココを使って切り抜けられる」

ロキは自分のこめかみをつついた。

暴力ではなく、知力が未来を切り開く。そう言つて見せた彼は、懐から木の実を取り出した。

「こいつは〈ミストルティンの槍〉だ。——結局のところ、氷を操る〈レヴィアタン〉のテクノロジ―も、根幹は〈霧纏の淑女〉と同じ、ナノマシンを使った水の位相制御だ。そして〈フェンリル〉には、そのナノマシンネットワークに侵入して制御を奪う能力がある」

ロキの言葉をソフィアが引きつぐ。

「だが、すべてのナノマシンネットワークに対して有効なわけじゃない。基幹技術は同じでも、〈レヴィアタン〉と〈フェンリル〉では規格が異なるため、うまく機能する可能性が低いんだ」

「その規格の壁を越えるための〈ミストルティンの槍〉?」

そうだ、とロキは楯無に頷いて見せた

早い話、〈ミストルティン槍〉を使えば、レヴィアタンの防御機能を無力化できるってわけか。

「ズルズルズル。 (そんなものあるなら最初から貸しなさいよ)」

麵をすすりながら、箸を突きつけてきた鈴に、ロキはこう答えた。

「まだ完成していないんだ。〈レヴィアタン〉の防御システムに侵入はできるが、それだけだ」

「つまり、ハッキングはできても、クラッキングはできないってこと?」

「それじゃ意味ないよ」「意味ないね!」

うどんのおあげを分け合う陰陽姉妹に、「そこでだ——」とロキがロリーナに視線をやる。

ロリーナは楯無を見て言った。

「楯無ちゃん、わたしが渡したお守り持ってる?」

「は」

会長は胸にかけていたお守り袋を外した。確か中身は〈アクア・ナ

ノマシン』の性能を最大限発揮するパッチプログラムだったはず。――あ、そういうことか。

「もしかして〈レヴィアタン〉を〈スカーレット・レイデイ〉に？」

つまり、〈ミストルティンの槍〉を使って〈レヴィアタン〉の防御システムをハッキングし、〈スカーレット・レイデイ〉のプログラムを使って、強制オーバーロードさせる。結果、消耗した装甲は使い物にならなくなるってわけか。

「で、組み込む作業は、どれくらいかかりそうなんですか？」

「一時間と言ったところだ。キミたちにはそれまで〈レヴィアタン〉を抑え込んでもらいたい」

一同は「簡単に言うな」とぼやいた。

あれだけの巨体だ。動き始めたら10分だって厳しい。

「あ、でも、いまは〈フェンリル〉ってISの能力で動けないんだし、案外楽勝じゃない？」

「いや、〈フェンリル〉の〈ラグナロクモード〉でも一時間が限度だ。樂觀視しない方がいい」

「それにアリーシャが必ず暗躍してくるでしょう」

「アリーシャ、アリーシャ・ジョゼスターフのことか？　彼女が今回の件に関与を？」

アリーシャと同じくIS界の古株であるフーさんが表情をひそめて訊いた。

「関与もなにも。今回の事態を引き起こした張本人だよ」

そう吐き捨てたのは、視聴覚室のうしろで腕を組んでいたダリルだ。

「なぜ、彼女がこんなことを？」

「彼女自身の意思によるものではなく、所属する組織の意向でしょう」
「組織？　イタリア政府か？」

「いえ、〈ヘリス〉と呼ばれる組織です」

聞き及ばない名を耳にして、大多数が首を傾げた。

私だってその名称を知ったのは一か月ほど前だ。ここの職員たちが知らないのも無理はない。

「ヘリリス」とは、といまある「女尊男卑」時代の元凶とされる政治結社です。彼女たちはいろんな方面に働きかけをしてきました。「モンド・グロツ」の開催も、そのひとつです」

「ISの世界大会が？」

「そうです、月子。女性優位の象徴であるISの印象付けと、国民の政治的関心をそらすため、人々が熱狂する斬新な娯楽として考案されたもの。かつて古代ローマで民衆の不満をそらすために行われていたコロッセオの現代版。それが「モンド・グロツ」です」

「国家代表や国家代表候補性は現代のグラディエーターといったところか」

「言い得て妙ですね、フリー。美しい美女が武器を取って戦う姿は、男性を魅了し、女性に憧憬の感情を抱かせました。結果、女性の機運は高まり、男性は盲目となっていきました」

「ISの立場をゆるぎないものにし、女性の機運を上げ、男性を愚民化する。「モンド・グロツ」にそういう政治的意図があったとすれば、一体なんのためにそんなことを？」

「各国である法案を通すためです」

「女性優遇制度か」

中国代表にローズマリーは頷いて見せた。

「この法案は、差別的な内容を含んでいました。通常なら廃案は必至。しかし、女性機運の高まりが追い風となり、また向かい風となるはずの男性の関心が、^{モンド・グロツ}女のおしり^{モンド・グロツ}に向いていたことで、法案はあっさり採決され、施行されることになりました。この一連の政策を画策し、指導した女性こそがアリーシャ・ジョセスターフの母親、ジェラルディーナ・ジョセスターフです」

「だが、その彼女はもういない。アーリーの母は爆破テロに巻き込まれて亡くなったと聞いた」

ジェラルディーナは女性解放運動家として、さまざまな場所で公演を開いていた。悲劇が起こったのはその公演のさなかだった。死傷者は50名にもものぼり、居合わせた娘のアリーシャも、このときに右腕を失った。

「アリーシャは、亡き母の意思を継いでいると思われれます。だから、ここに現れた」

「それは理由になっていない。女尊男卑を謳う政治結社がなぜIS学園を」

「俺か……」

「あるいは私たちか……」

アリーシャが現れた理由。おそらくは一夏の抹殺。

そして、私たち姉妹の確保。そんなところだろう。

「じゃあ、彼を差し出せば……」

どこからともなく、教師陣の中からそんな言葉が飛び出す。

相手は〈レヴィアタン〉という強大なISに、〈ヴァルキリー〉だ。後ろ盾には強大な組織。巻き込まれただけの彼女にすれば、人身御供で事を早期に終わらせたい気持ちはわからないでもない。千冬さんもその気持ちを組み、非難するような行為はしなかった。私も姉を前に勇気ある発言だと思う。ただし、賛成できるかは別の話だ。

「それも事態を収束させる一つの方法だ。おそらく中には同意しているものもいるだろう。だが、戦うことを投げ、楽な方向に逃げたからこそ、世の中は狂ってしまったのではないか？」

民主主義という武器を与えられ、何千万という数を有しながらも、女性ひとりの思惑も阻止できなかったのは、みんなが考えることをやめ、楽な方向に逃げたからだ。

「人は他力本願で、目先の欲望に弱い。自分がやらなくても誰かがやってくれると思っている。ヘリリス〉という連中はそういう人間の心理を利用して、いまの世界を作り上げた。だからこそ、われわれは、我々の意思を持ち、主体性を以て行動を示さなければならぬ」

つまりは、恫喝や暴力に屈せず、自分たちの未来は自分たちで決めるということ。

「意思を突き通すことは容易いことじゃないが、ここにいるみんなが力を合わせれば不可能なことじゃない。世界を変えるのは大きな一人の力じゃなく、儂く弱い小さな力の集合体だ。大事なのは、自分と仲間を信じること。その結束が未来を変える」

先生は無言で意見を取り下げた。そんな先生の肩を別の先生が叩いて慰める。

「よし、では具体的な説明に入る。まず楯無を筆頭に鈴、ソフィア、フー、太田、月亮は〈レヴィアタン〉の警戒に当たれ。アリス、箒、ローズマリーは、アリーシヤの警戒を。月子と教師班は、〈撃鉄〉を装備した打鉄で、後方から楯無を援護だ。ロリーナとロキは〈ミストルテインの槍〉の完成を急げ。残りの者は後方支援だ。では、持ち場につけ」

千冬さんの号令で一同に席を立つ。

体もあつたまつたことだし、さあ、第二回戦の始まりだ。

第98話 再戦

IS学園の中央フロート。そこにある中央タワーへユグドラシルへ。いまは<レヴィアタン>の超低温レーザー砲で倒壊してしまったことで、私、ローズマリー、そして箒は、アリーシャの出現に備えて待機していた。

この編成なのは、遊撃に最適だからだ。ローズマリーは掛け値なしの最強。<赤騎士>の《単一仕様能力》はどこへでも移動できる。<紅椿>は他機にエネルギーを譲渡可能。つまり、アリーシャがどこに現れても、瞬時に最大戦力を送り込める布陣。それが私、箒、ローズマリーの編成なわけだ。

「だが、こども視界が悪いと味方の位置もわからんな。これじゃ駆けつけようも……」

<レヴィアタン>の能力でIS学園は白銀の世界に包まれたまま。

どこから足場で、どこから空なのかさえわからない状況だった。

「大丈夫ですよ、箒、味方の位置はすべて把握しています」

現在、上空では<ヘビショップ>を装備した<リリイ>が待機している。<ヘビショップ>パッケージには、ソリトンレーザーと呼ばれる高出力波のレーザーが装備されている。多少のブリザードでも探知できる強力なレーザーだ。それによって得られた各機の位置情報は、強力な通信方式——バースト通信で私に送られてきている。

「ということなので、警戒はアリスに任せましょう。ところで<紅椿>にはもう慣れましたか」

ローズマリーの質問に、箒は苦笑いを見せた。

「いえ、高すぎる性能に戸惑うばかりです。正直、今の私にはとても扱いきれていません。《絢爛舞踏》の方はほどほどに扱えています、《展開装甲》の方はまったくです」

「本来、ちゃんと訓練を受けてから乗るべき機体ですからね、第四世代は」

「あの、ローズマリーさんは、紅椿と同じ第四世代の<レーヴァテイン>を使いこなせているように見受けられます。なにかコツのような

ものがありましたらご教授願いたいのですが」

《展開装甲》の扱いに関しては、私でも指導してやれない。それが箒を訓練するうえの指導課題でもあったから、私は『教えてやれ』と視線をローズマリーに送った。

「そうですね。《展開装甲》は操縦者の精神状態に感応して、機能が切り替わります。つまり、心の在りようによって強靱な刃にも、諸刃の剣にもなります。穏やかでありながらも情熱を持ち、感情に流されない精神を持つことですね。篠ノ之流でいうところの『明鏡止水』がそれにあたるでしょう」

明鏡止水。邪念を抱かず、自然な状態でいること。感情のまま剣を振るえば技のキレが鈍るといふ篠ノ之流の教えだ。

箒はアドバイスを咀嚼して飲み込むように頷いていた。

何かヒントを得られたのか、表情には閃きに似た笑みが見て取れる。

「篠ノ之流剣術の担い手である貴女なら、きつとうまく扱えます。頑張ってみてください」

「はい」と箒は頷いた



第二コンピューター室。大型のフレームワークと20台のパソコンが並べられた一室で、ロリーナはヘミストルティンの槍のコードを読み解きながら、不足個所に〈スカーレット・レイデイ〉のコードをパッチしていった。

(大したものだ)

その作業を監督しながら、ロキは彼女の読解力に感服した。

自分が書いた、兆を超えるナノマシンを制御するプログラム——「多量情報並列処理ルーチン」や「複雑性通信網探査アルゴリズム」という難解なコードを一度で読み解いてしまうとは。篠ノ之束と肩を並べる才媛だけはある。

俺が監督するまでもなかったな。そう自嘲した彼は、持て余した暇をつぶすようにロリーナのデエスクに並べられた奇怪なフィギュアを手に取った。

「これはなんだ。ロブスターの怪人か」

「それはバルタン星人よ」

ロリーナは「ふおふおふお」と笑いながら答えた。

「バルカン？」

「宇宙忍者バルタン星人よ。日本の特撮に登場する、地球を侵略するためにやってきた宇宙人」

ロキは「悪いヤツだな」と言った。

「ええ。でも、最初から悪者だったわけじゃないのよ。彼らは科学者でね、優れた文明を築いていたわ。けれど、核実験に失敗して、自分の星を滅ぼしてしまったの。地球にやってきたバルタン星人は故郷を失った宇宙難民なの」

「それで第二の故郷を求めて地球を。——まるで人類の行く末を暗示しているようだな」

〈白騎士事件〉以降、大量破壊兵器の使用ハードルは下がる一方で、人類はいまだ核開発も核武装もやめられないでいる。この宇宙人はそんな人類に警鐘を鳴らす存在なのだろうかと思うと、セミみたいな顔にも啓蒙的けいもうな賢さが感じられた。

「我々はそうならないでありたいものだな。——で、進捗はどうだ」

「いま、おわったわ。理論上、機能はすると思うけれど、<レヴィアタン〉の性能は未知数。不確定要素が多いから、プログラムがちやんと機能しても、結果通りにいかか保障はできないわ。あと一時間あれば、もっと成功率をあげられそうなのだけだ」

「そんな時間はない。なに、うまくいかなくても恨みはしない。それにソフィアたちはスパイだ。常に柔軟な対応を要求されてきた。きつとうまくやるさ」

ロリーナは「信頼しているのね」と頷き、残っていたコーヒーをおおる。——と、そこで何かを感じ取り、手をとめた。次の瞬間、空間が軋み、ブラックホールのような穴が、彼女たちの眼前に出現した。

「そううまくはやらせないのサ」

その奥から聞こえてきた凜とした声に、ロキとロリーナが身構える。

漆黒の穴から現れた人物は、隻腕の女性アリーシャ・ジョゼスターフだった。

その彼女は専用機<テンペスタII>をまといながら、無き右腕に不釣り合いな武装腕をぶら下げていた。節膨れした指。口腔を持つ掌底。奇怪な形状のその武装腕は、不気味さを醸し出していた。

「レインにフォルテを監視させていた事といい、こんな対抗手段を用意していた事といい、抜け目ない坊やなのさ」

アリーシャはにんまりとロキに笑みを見せる。

「なら、そいつに免じて、引き下がってもらえると助かるな。こっちは<レヴィアタン>の相手だけで手いっぱいだ。あんたの相手をしている暇はない」

「それはできない注文なのサ」

アリーシャは右腕部——節膨れだった巨大な武装腕をかかげた。

その掌底に禍々しい光が帯びる。ロキとロリーナは身構えるが、専用機を持たない二人にできることはなかった。「じゃあ、さよならなのさ」という言葉と共に放たれた光は、部屋全体を飲み込んだ。



第二アリーナ。対<レヴィアタン>の最前線。

楯無とソフィアは、鈴、フー、陰陽姉妹と共に水中の<レヴィアタン>の警戒に当たっていた。その最中、楯無はそびえ立つ大樹のようなくレヴィアタン>を見上げ、何かを思い馳せるように眺めた。

「どうした。考えごとか？」

「ん、ちよっとね。このまえお母さんが話した『柿木の話』の意味がようやくわかって」

「柿木？」

「そう。家に大きな柿木があるんだけど、昔そこに実った柿を取ろうとしてね。そしたらお父さんが通って、代わりに採ってくれたの。で、その昔話をしたあと、お母さんが『その時の柿、どうした?』って訊いてきたんだけど、私はてっきり食べたんだと思って、そう答えたの」

「違うのか?」

「うん。本当はね——池に捨てたの。その時の私は、別に柿が食べたかったわけじゃなかったの。『自分で柿を取れる』ってことをお父さんに見せたかったよ」

そして褒めてもらいたかったのだ。なのに、父親は危ないからと娘を木に登らせなかった。それは「娘に怪我をさせたくない」という親心であったが、子供心なりにプライドを傷つけられた楯無は、すねたのだった。

「私も誰かに認められたいって思っていた時期があつたなあ。それを思い出せってお母さんは言いたかつたかも。おかげで、いま私が簪ちゃんに何をしてあげるべきなのかよくわかる」

「そうか。じゃあ、そのためにもまず彼女を助けださないと」

「ええ」

楯無は決意を新たに、妹を抱える<レヴィアタン>を見据えた。

<フェンリル>の攻撃により氷漬けとなった<嫉妬の化身>は、彫刻品のようなアーティスティックな雰囲気醸し、このまま目覚めなような静寂さを醸えていた。再び動き出しそうな気配はない。

それをいいことに、<レヴィアタン>のふもとでは陰陽姉妹がゲシゲシと蹴ってはふんぞり返っていた。

「ねー」「ねー」「一方的にやられるのってどんな気持ち?」「どんな気持ち」「悔しいね」「悔しいね」「フフフ」

「ちよつと、あんたたち、やめなさいよ。起きたらどうすんの」

「だいじょうぶ」「だいじょうぶ」「ねー」

「ねーってあんたたちねえ……。まったく、どうなっても知らないんだから——ん?」

と、鈴が急に眉をひそめる。〈レヴィアタン〉を被う結晶体に大きな亀裂を見つけたからだ。

この亀裂、さっきまでなかったような……—
(やっぱり、なかったわよね……)

悲壮めいた溜息をつき、出力を「待機」から「戦闘」へ。

あの亀裂はつまりそういうことなのだ。

鈴は、またへレヴィアタンを足蹴にし始める太と月亮に言った。

「太、月亮。上を見なさい！」

「ん、どうしたの、りんりん」「どうしたの、いんいん」

陰陽姉妹が云われた通り視線をあげる。

そしてぎよっとした。——〈レヴィアタン〉の眼球型センサーがこちらを向いていて。

その機体的なレンズは、何か物言いた気にこちらを睨んでいる。太と月亮は顔を見合わせた。

「お、おこってる……？」「おこってるね！」

〈レヴィアタン〉は、バラ、バラと、氷の破片を砕きながら咆哮を上げた。その様子は、怒りに打ち震えているように見えなくもなく、太と月亮は飛び上がるなり、走り出した。

「起きたよ、りんりん！」「起きたね、いんいん！」

「見りゃわかるわよ。つーかこつちつれてくんない！」

腹這いの〈レヴィアタン〉を連れてきた双子に鈴は「だあー！」と毒づき、四肢に力を込めた。

鈴に迫る巨大な竜腔。

それが閉ざされる寸前、鈴は両手の《双天牙月》を投げ捨て、上顎を支えた。

軋む骨格。電磁筋肉の千切れる音。鳴らされるいくつもの警告音。このままでは噛み砕かれるのも時間の問題。——そう、普通のISなら。

「甲龍のパワーをなめんじゃないわよ!!」

気合いと怪力で、閉じる顎を無理やりこじ開ける。遅筋性繊維の電磁筋肉と、剛性の強い骨格構造を持つ〈甲龍〉だからなせた荒業だっ

た。〈甲龍〉の特性を活かして危機を脱した鈴は、おまけとばかりに最大威力の衝撃砲を〈レヴィアタン〉の顔面に叩き込んだ。怯んだ相手に「へん、どんなもんよ」と鼻を鳴らしてみせる。

「やるじゃないか、助けるまでもないとはね」

そう言ったソフィアの頭上を中露の国家代表が超えていき、臥龍姿勢の〈レヴィアタン〉に《蒼流施》と《紅蓮火葬》を叩き込む。美女が暴龍に挑む姿は絵画の一部のようだったが、こちらは怯むに至らず、〈レヴィアタン〉は頭部を振って二人を払いのけた。

「さすがに硬いわね……。こんなやつ、何時間も足止めできないわよ」「あんた、もう一回こいつを氷漬けにできないの」

「できないな。〈フエンリル〉の最終決戦形態は《スカーレット・レイデイ》と同じで何回も使える力じゃない。さっきの一撃でナノマシンも使い切ったしな。日本の代表と協力して、今は耐えるしかない」

ソフィアが二丁のビームピストル《スコル》と《ハティ》を構えると、彼女たちの頭上を鉄杭に翼が生えたような徹甲弾が通過していった。APFSDS。砲撃パッケージ《撃鉄》を装備した打鉄部隊の砲撃だった。



「織斑先生。〈レヴィアタン〉が活動を再開しました。現在、風さんたちが応戦中。打鉄部隊も砲撃を開始しました」

管制室。〈レヴィアタン〉が動き始めた情報はこちらにも上がってきていた。中央モニターには、応戦する鈴たちが映し出されている。二人の国家代表を相手する〈レヴィアタン〉には、もう何のハンデイも感じられなかった。十全にその能力を發揮しているように見える。

千冬は第二コンピューター室に通信を繋ぐよう、真耶に命じた

「《ミストルティンの槍》はどうなっている。進捗は」

「そ、それが、確認してはいるんですが、応答がないんです。何かあつ

たようで……」

千冬は顔をしかめた。

「わかった。手の空いている者をコンピューター室に向かわせろ」
そう命令を下し、千冬は誰にも悟られないよう小さく悪態をついた。

「くそ、アリーイに先手を打たれたか」

彼女の推測は正しかった。

♡

♣

♠

暴力的な力の奔流を放ったアリーシャは、口の端をわずかに釣り上げさせた。

間一髪のところで見れた彼女たちのタイミングの良さに。

〈赤騎士〉の量子テレポートで駆けつけたローズマリーとアリスは、ロリーナとロキを守るように立ち、箒はアリーシャの首筋に《空割》をあてがった。

「アリーシャ・ジョセスターフさん、降参してください」

箒の勧告にアリーシャはニヤと笑った。

「おやおや、それが〈紅椿〉さ？ 雅なISだねえ」

動じない〈ヴァルキリー〉に箒は強く刃をあてがう。

「もう一度いいいます。ISを解除して降参してください」

「いいや、しないのさ。おまえさん、戦局を読み間違っているのさ。おまえさんは私を追いつめたつもりだろうけど、私にしちやおまえたちは—— 飛んで火にいる夏の虫”さっ!”」

言うなり、肩の関節構造を無視したような動きで背後の箒を掴み、振りかぶってローズマリーに投げつける。受け止めたローズマリーは「大丈夫ですか」と気遣いながらアリーシャと睨み合った。

「やぱり、あなたの狙いは私たちですか」

アリーシャは再びニツと笑った。

彼女がココに現れた狙いは、やはりアリスとローズマリーを連れ出

すことだった。

「悪いが、ローズマリーたちを連れて行かせやしない」

そういつて、ロキがローズマリーの前に立つ。

飄々としていたアリーシャがわずかに唇を噛む。怒りともちがう、どこか羨望のような表情だ。だが、それはほんの一瞬に過ぎなかった。

「ナイト気取りはやめろ、ロキ。おまえさんがなんと言おうと連れて行く。だれもおまえさんの許可なんて求めていない」

「じゃあ、おまえが求めているものはなんだ？」

「母様が作りあげたこの世界を守ることさ」

「いまある〈母権社会〉をか？——違うな、アリーシャ・ジョセスターフ。おまえの望みはそんなことじゃない。俺が当ててやろうか、おまえの本当の望みを」

「黙れ、知ったような口を利くな！」

アリーシャが歪な右腕部を振りかざす。すかさずアリスが肉薄した。

同時に量子テレポートで〈テンペスタII〉をコンピューター室外へ強制転送する。ここで戦うには狭すぎるし、ロリーナやロキを巻き込みかねない。アリーシャは物申した気だったが、〈赤騎士〉は有無を言わせなかった。

「私たちも行きましょう」

「はい」

「箒ちゃん、ローズマリーちゃん、二人とも気を付けてね」

消えた二人を追うべく、ローズマリーと箒もコンピューター室を飛び出していく。

残されたロキはロリーナに視線をやった。

「あなたは〈ミストルテインの槍〉をソフィアに渡してくれ。俺はアリーシャを止めに行く」

「あら」

「彼女は元々〈亡国機業〉の人間だ。『身内から出た錆』の不始末は、全権を担う俺がつける」

強い責任感を滲ませ、そう言い切る。

同時に一機のISがやってきた。一夏の〈白式〉だ。千冬の命令で様子を見に来たのだろう。

「なんだよ、これ……」

荒れ果てたコンピュータ室を見る一夏に、ロキがニツと笑う。

「ちようどいいところに来た、織斑一夏。ちよつと俺に付き合え」

♡

◆

♠

量子テレポートしたあと、アリスとアリーシャは弾けるように間合いを取った。

アリスは右手に《ヴォーパル》を構える。だが、アリーシャは《名称不明》の巨大な腕部をゆつくりと下ろす。頭が冷えたのか、先の交戦的な態度は鳴りを潜めていた。

「そう、身構えるんじゃない。同じアリス同士仲よくやるのさ」

アリスは、ラテン語だとアリーシャと発音する。

アリスは臨戦態勢を解かなかったが、アリーシャは続けた。

「同じアリスを名乗る者のよしみ、母の願いを継ぐもの同士として、訊くのさ。おまえさんはメアリー・ライオンハートの願いを叶えるために戦っている。なら、〈お母さま〉の許に来るのが筋つてもものじゃないのサ?」

「あの女は私の母じゃない」

毅然とはねつられても、アリーシャは驚かなかった。

驚くようならわざわざココへやってきてなどいない。来ないから向かえにきたのである。

「ほお、やっぱり知っていたのサ。ローズマリーに聞いたか? レインを潜伏させていた彼女のことだから、知っていてもおかしくないしねえ。——でも、アリス・リデル。〈お母さま〉がメアリー・ライオンハート本人じゃないにしろ、その意思を宿した者さ。それでも来ないというのサ?」

「何が意思です。これが！　この世界が！　お母さんの望んだものか！」

その先にある世界の実情を突き付けるように、アリスは腕を振り払った。

破壊をまき散らすこの惨状が、差別を容認する女尊男卑の社会が、母の望んだものであるわけがない、と。

「いまある世界は、その『過程』に過ぎないのさ」

「過程に過ぎないですって……？」

「さて、話の続きはへお母さま」に直接聞きな。私が会わせてやるからサ」

アリーシャがその禍々しい腕を振り上げる。

節膨れした指と、口腔のような砲門を持った掌底がアリスへ迫る。

アリスは咄嗟に《ヴォーパル》を盾にした。

ぎりぎりのところで受け止めたアリスに、アリーシャが不敵な笑みを見せる。

「受け止めたサね」

と、したり顔のアリーシャ。

いち早く、その言葉の意図に気づいたのは、ヘレツドクイーンだった。

《ハニー、気を付けて！　あの武装腕、ISのエネルギーを吸い取る！」

アリスはすかさずエネルギー残量を表すインジケーターを確認する。

＜赤騎士＞のエネルギー残量は、すでに50%を切っていた。

「ドレインなんて、またベタな能力を……」

アリスは機体を素早く後退させた。

一撃で50%だ。もう一度を受け止めれば、次は行動不能になりかねなかった。

「おっと、逃がしやしないのサ」

アリーシャが左手を振りかざした。

その手に帯びる禍々しい波動がブラックホールのように＜赤騎士

〈を引き寄せる。〈テンペスタⅡ〉本来の第三世代兵器〈重力操作〉だった。強力な重力場に捕らわれる〈赤騎士〉。アリーシャは再び《名称不明の武装腕》を振り下した。

「さあ、まずは妹からさ」

そのとき、赤い粒子ビームがアリーシャの側を駆け抜けた。

それをアリーシャは〈テンペスタⅡ〉の偏向重力波で捻じ曲げる。重力の向きが変わった隙に、アリスは〈テンペスタⅡ〉の重力圏から離脱し、箒たちと合流した。

「アリス、大丈夫か」

「はい。それより気を付けてください、あの〈テンペスタⅡ〉はISのエネルギーを奪うようです」

「まさに〈悪魔〉じみた能力だな」と箒。

ISは強力な兵器だが、エネルギーが尽きれば動けなくなる。そのエネルギーを奪う能力の前では、どれだけ高性能でも意味がない。かたて加えて、〈テンペスタⅡ〉の重力操作は、対象を圧潰させることもできれば、攻撃を捻じ曲げることもでき、そして、可視光や電磁波を曲げることもできる。

「さて、姉妹そろったところで、再開といくさ」

そうやって姿を晦ませたくテンペスタⅡに、三人は密集体形を取った。

見えない相手に、自ずと《雨月》を握る手に力がこもる。気づけば行動不能になっていた、なんて事態も十分にありえたからだ。

「恐れることはありません、篠ノ之箒。まず光圧センサをふくめた全センサをアクティブなさい。重力波の可視化情報を、ARビューに反映。そして機体を環境モード4に設定。それで〈テンペスタⅡ〉の重量操作には対応できます」

「は、はい」

「きますよ、篠ノ之箒」箒、伏せて」

「!？」

咄嗟に云われ身かがめる箒。その頭上を《ヴォーパル》と〈レーヴァテイン〉の脚部ブレードが通過する。箒の背後に現れ、《名称不

明の武装腕』を振りかざしていたアリーシャは、身を翻した。

ローズマリーはすかさず追撃を仕掛ける。アリーシャは歓迎するように武装腕を構えた。

小さく悪態をつきローズマリーは、追撃を断念する。

相手がこちらのエネルギーを奪える以上、迂闊な接近は得策とは言えない。深く追えば、相手の思うつぼ。かといって、粒子ビームやレーザービームといった遠距離攻撃はすべて曲げられてしまう。ローズマリーといえど、慎重にならざるを得なかった。

「はは、ライオンハート勇敢な者のおまえさんが、これしきの事で引くとはサ」
「言ってくれますね」

ISのエネルギーを略奪する能力など、十分に警戒するに足る能力だというのに。それを操る人物が世界トップクラスの實力者とあらば、さしものローズマリーでも慎重になる。

しかしながら、警戒して逃げてばかりでは、戦況は好転しない。しないが、ただいたずらに攻防を繰り返していてもこちらが消耗するだけ。

「ローズマリー、なにかいい策はありますか」

「プロセスは不明ですが、＜テンペスタⅡ＞の右腕部にはエネルギー略奪能力がある。では、奪ったエネルギーはどうなるのか。そう考えたとき、二つのことが想定できます。

- 1、熱や光に変換されて放出される。
- 2、コンデンサーのような装置に蓄えられる。

現状で、1の現象は観測されていないから。2が適当かと」

「だとしたら、コンデンサーに許容量を超えるエネルギーを送れば、相手の能力を停止させられる？ 普通に考えれば余剰エネルギーを放出する装置が内蔵されてしかるべきでは」

「けど、重力制御を優先し、放出装置を廃した可能性もあるわ。すくなくとも脅威捜査を走らせた結果上では、現状の＜テンペスタⅡ＞にそれと思わしき装置は確認できないわ。なにより篠ノ之箒が率先して攻撃を受けた」

「なるほど、そういうわけですか」

ローズマリーの意図するものを組み領く。それならば、やってみる価値はある。

「相談はおわったのサ？——じゃあ再開するしよう」

アリーシヤが左手を翳すと、三機は滝壺に向かって流されるカヌーのように引き寄せられた。

アリスは右手腕部に備わったグレネードランチャのトリガーを引いた。

発射された榴弾がテンペスタの重力に引かれてアリーシヤの眼前で爆発をする。

アリーシヤが一瞬だけ目を細めたすきに、ローズマリーは《展開装甲》を高機動モードにして肉薄した。ソードモードにした《レーヴァテイン》の一閃を、退いてかわしたアリーシヤは《名称不明の武装腕》をローズマリーにかざす。と、横入りしてきたアリスが《多機能武装腕》ジャバウオックでそれを受け止めた。

「レッドクイーン、ジェネレーター出力を、全て火器装備ジャバウオックに回しなさい」

「あれかい、エネルギーを限界まで食わせて、自爆させようって魂胆かい？ 無駄さ。おまえさんの残りエネルギーじゃ、こいつの腹は膨らせられないのさ」

「私一人じゃね。——箒っ」

叫んだアリスの背後に＜紅椿＞が現れる。全身を黄金に輝かせながら。

「《絢爛舞踏》か」

絢爛舞踏は無尽蔵のエネルギーを生み出し、他者に譲渡できる。

箒を率先して狙ったのが、自機の許容量を超えたエネルギーを生み出せる《絢爛舞踏》を恐れたゆえの行動だったのなら、勝機はある。

アリスは＜紅椿＞が生み出したエネルギーを受け取りながら、最大出力で輻射波動砲を放った

「おもしろいさ。試してみな」

＜テンペスタⅡ＞の腹が膨れるのが先か、＜赤騎士＞のエネルギーが枯渇するのが先か。

その根競べが始まった。

第99話 終結

〈打鉄〉部隊の援護射撃は、しかれども、〈レヴィアタン〉を怯ませただけだった。それでも砲撃の手を緩めずにいると、〈レヴィアタン〉が啗内を覗かせた。突き出された超低温レーザー砲の方位は二時、斜角は三〇度。照準は打鉄部隊だ。

「鈴！」

「あい、太⊠、月亮！」

「いくよ」「いくね」

四機は密集して《龍咆》を放った。〈甲龍〉と〈甲虎〉、〈干鞘／莫耶〉の計6門の衝撃砲を以って〈レヴィアタン〉の頭部を殴りつけ、首を振らす。間一髪のところまでレーザー砲は打鉄部隊の数メートル上空を通過していった。

『こちら損害なし』

月子からの報告。おもわず「よしッ」と拳を握りそうになる鈴を、フーが「くるぞ！」と喚起する。〈レヴィアタン〉の難いだ尾が、津波のように迫っていたからだ。でかい凶体のわりに素早く、大きさをそのまま武器にしたような一撃。受け止めきなかった鈴たちは校舎へ突っ込んだ。

「鈴ちゃん！」「フー、太⊠、月亮！」

楯無たちが駆けつけようとするも、遮るように〈レヴィアタン〉が背びれからミサイルを放つ。

放置すれば、校舎や施設に多大な被害で出かねない。

やむなく、楯無は《蒼流施》のガトリングガン、ソフィアは二丁の粒子ビームピストルで、落ちてくるミサイル群の迎撃にあたる。だが、撃ち落としても、撃ち落としても、ミサイルの雨は止んでくれない。

「数が多すぎる」

「とにかく撃ち落とせ。被害を最小限に抑えろ」

迎撃に手を拱いていると、撃ち漏らしたミサイルが次々と校舎に降り注いでいった。

オーグメントリアリティーが学園のいたるところに損害レベル【超】のラベルを張っていく。

そのたび、楯無は胸を締め付けられた。

「ああ……。私たちの学園が……」

暗部という非人間性を求められる自分が、人間らしく、そして少女らしくいられた数少ない場所が、失われていく。それに心が耐えられなかった。

「これ以上はやらせない！」

楯無はディスプレイを解放して、ナノマシンをミサイルの展開空域に最大散布した。

そして、《クリア・パッション》の熱量と、空間作用能力を以て、ミサイルを一網打尽にする。

しかし、直ぐに第二波の報せ。

見れば<レヴィアタン>が背を震わせ、背鰭から新たな氷柱を隆起させていた。

「まだくるのー！」

ナノマシンの貯蓄タンクはゼロ。こちらにもう迎撃の手はない。

絶望感が楯無の裡に込み上げたその時、馴染みのある声が響いた。

『弱音なんて、らしくありませんね、会長』

それは、幼いころからずっとそばにいてくれた、ひとつ上の幼馴染だった。

「虚ちゃん……!!」

『いま、そちらに補給物資をおくります』

言葉と共に、<ミステリアス・レイディ>が“あるもの”を補足する。望遠モニタに映し出されたそれは《アクア・ナノマシン》の結晶体だった。——いや、それだけじゃない。大型の荷電粒子砲。皿のよくなレドーム。箱型のミサイルユニット。そう、簪が作り上げた<打鉄二式>の装備まである。

「これは……」

『作戦前に妹が回収しました』

楯無は“自分が助けられた時”簪が《夢現》しか持っていなかった

ことを思い出した。

「でも、使えるの……」

〈ミステリアス・レイディ〉はロシア製、〈打鉄式式〉は日本製。
スタンダード
規格が異なる。

『大丈夫です。動作に問題はありません』

「わかったわ……」

楯無は武装コンソールを開き、本体と武装のドッキングを開始した。各武装情報を武装レジストリーにインポート。コンソールにマッチングクリアの文字。移植した武装は、おどろくほど不具合が生じなかった。それに楯無は改めて簪がどういう思いで〈打鉄式式〉を開発したのか思い知る。

すべては姉の力になるために、この〈打鉄式式〉は作られたのだ、と。

ありがとう、簪ちゃん。あなたのおかげで私はまだ戦える。



「コンタクト成功」

IS学園フロートユニット〈アルフ Heim〉。整備科施設。

〈シュヴァツェア・レーゲン〉に乗るラウラは、楯無が補給を受け取ったことを確認して言った。

〈黒ウサギ隊〉から間借りしたその〈シュヴァルツェア・レーゲン〉には、いま右側固定浮遊部位に、大型の磁気誘導射出装置が取り付けられている。それは戦地へ物資を送り込むための搬送用マストライバー・パッケージだった。

「突貫工事でしたか、何とかかなりましたね」

ラウラの報告を聞き、虚は内心で胸をなでおろした。

それから自分の隣でへばっている妹を見やる。遭遇戦時に簪がパージした〈打鉄式式〉の装備を回収し、送り込めるようにハイピッチで調整したのだ。疲れても仕方ない。

「よくやりました本音。あとは休んでなさい」
妹をそう労わると、ロリーナが走ってきた。

「できわよお〜」

肩で息をしながら、完成した〈ヘミストルティンの槍〉を虚に渡す。
虚はすぐさま二年生整備課エースの黛薫子に、砲弾化を命じた。

「薫子、装填準備」

レールガンは火薬を使わず、電磁力で砲弾を撃ちだす。そのためには磁界発生器アーマチャと呼ばれる部品を取り付けなければならない。その役割は、二年整備課のエース黛薫子が担っていた。

完了後、薫子は安全を確認して合図の手を挙げた。

「装填完了です、先輩」

「わかりました。ボーデヴィツヒ」

「了解」

そう答えたラウラは、マスドライバーを30度の角度で持ち上げた。
た。

「射角方位よし。目標捕捉」

虚はうなずき、「〈ヘミストルティンの槍〉発射」と命じた。



「やっとできたか」

整備科から送られてきた〈ヘミストルティンの槍〉を、ソフィアはその右手に受け取った。

「楯無、準備はいいか?」

「ええ、いつでもどうぞ」

「準備万端」の扇子を広げ、優美に微笑む。ソフィアはレヴィアータンに視線を注いだ。

〈レヴィアータン〉の防御機能を無力化する〈ヘミストルティンの槍〉は対象に埋め込む必要がある。

だが、接近は容易じゃなさそうだった。それを知らしめるように、

＜レヴィアタン＞が背鰭から大量のミサイルを放つ。数は50以上。ミサイルの防壁が二人の前に立ちはだかった。

「ソフィア、私たちが活路をひらくわ。ついてきて」

楯無が＜レヴィアタン＞へ肉薄する。＜レヴィアタン＞も吠える。背鰭から放たれた大量の氷柱が接近を拒む。突破は安易に思えなかったが、楯無は不敵に笑んだ。

「わたしたち姉妹の力、見せてあげるわ」

楯無は右手に《春雷》、左手に《蒼流旋》を構え、へマルチロツクオンを起動した。

さらに再補給された《アクア・ナノマシン》で人魚の近衛部隊を作り出し、全武装を解放した。

《山嵐》と《春雷》、そして《蒼流旋》のフルバースト。それでも弾数の多さから撃ち漏らしたミサイルを、人魚の近衛を楯にすることでしのぎ、二人はミサイルの嵐を突き進んでいく。

それを止めるべく、＜レヴィアタン＞も龍口を開く。

「させない！」

楯無は《蒼流旋》に＜レヴィアタン＞の口腔へ投擲した。そして、備わった12・7ミリガンで、啞内に銃弾を撃ち込む。啞内で膨れ上がった熱量に＜レヴィアタン＞が別の意味で火を噴いた。

「ソフィア、いまよ」

ソフィアは、胡桃サイズの《ミストルティンの槍》を鋭利な槍バルチザンに作りかえた。それを＜レヴィアタン＞の頭上から突き刺そうとする――が、寸でのところで＜レヴィアタン＞が仰ぎ、ソフィアをその牙にかけた

「――ぐっ！」

噛みつかれたソフィアの手から《ミストルティンの槍》が零れ落ちる。

切り札が氷霧の中に消え、誰もが言葉を失うなか、楯無だけは意地悪に笑った。

「残念！ そっちは偽物よ！」

彼女の言葉と共にソフィアの体が、水滴のようにはじける。

そう、<レヴィアタン>が喰らったソファイアは、《アクア・ナノマシン》が作りだした分身だった。本物の彼女は、——レヴィアタンの顎下から《ミストルティンの槍》を突き立てた。

「さあ、ここからが本番だ」

準備は整った。あとは防御システムへ侵入し、無力化を試みる。開始ポイントを設定。

ネットワークに侵入し、偽の命令を流したあとは、待つだけだった。誰かが喉を鳴らし、誰かが成功を祈る。

誰も言葉を発せず、静寂が立ち込めたあと、<レヴィアタン>の鱗にパシツと亀裂が走った。

それが合図となった。

『全機、攻撃開始!!』

指令室から現場へ千冬の号令が飛ぶ。

それを皮切り、待機していた部隊が一斉に攻撃を開始した。

まず後方で待機していた打鉄部隊が砲撃をあげせた。集中砲火を受けて、<レヴィアタン>がもがくようにのた打ち回る。鱗もばらばらとこぼれ始めていた。<レヴィアタン>は砲撃の威力を相殺できている。

「利いているわよ」

「いや、これだけじゃダメだ」

<レヴィアタン>の体積に対して火力が足りていなかった。

ならばと、そこへ強大な熱源が接近してくる。——巡航ミサイルだ。

<ウオルラス>から発射されたミサイルは、身を翻した<レヴィアタン>の尾に命中して、爆発炎上した。

千切れた尾が、飛んで校舎にぶつかる。

『いけるぞ。全機攻撃の手を緩めるな』

誰もが撃破を確信し始めていた。対し全長の三分一と防御機能を失った<レヴィアタン>は、海面へ向かって回頭を始めていた。多大な損傷を受けて撤退しようとしていることは、明白だった。

「まずい、逃がすな！」

ソフィアが叫ぶ。

管制室からも「誰か止めろ！」という声が錯綜する。だが、いまだ90メートルを超える<レヴィアタン>を押し止められるような強靱なISは、残存戦力の中にいない。——いや。

「誰が逃がすかつての!!」

校舎の瓦礫を押しつけ、そう叫んだのは鈴たちだった。

鈴は<甲龍>の袖口部分から、鎖のようなワイヤーを引き抜き、頭上で振り回した。そして、たっぷりの遠心力を蓄え、投擲する。先端に取り付けられた鋭いアンカーで、チェーンを<レヴィアタン>に深く突き刺し、鈴は出力をすべて臂力に回した。

「まさか、持ってきた装備がこんなところで役に立つとは……」

『ねー』

同じようにフーと陰陽姉妹も、ボルティックチェーンを<レヴィアタン>に巻き付ける。

そして、<甲龍>と共に力いっぱい引っ張って、逃げる竜を制す。雁字搦めにされた巨龍は、もがきながらチェーンを振りほどこうと暴れまわった。

「くっ！早くしてよね！いくらあたしたちでも、ずっとは無理よ！」

『次弾装填中、発射まで12秒コンド！ なんとか耐えてください！』
マヤの報告に、みんなが「早く」と願う中、<レヴィアタン>はその罅を開いた。その唼内から出てきた超低温レーザー砲の鋒先は、巡航ミサイルの飛来方向——<ウォルラス>に向いている。

「させないーッ」

すかさず楯無がレーザー砲の射線上に躍り出て<打鉄式式>の荷電粒子砲を構えた。

二つのビーム砲がぶつかり合い、眩い光が辺りを染める。楯無は苦悶を浮かべた。

「出力が、パワー負けする……ッ」

100メートル級の機械を動かす出力を<レヴィアタン>は内部に持つのだ。

人間サイズが携帯するビーム砲と、要塞攻撃用レーザー砲との「押せ押せ」では、＜レヴィアタン＞に部があるのは当然だった。

「キミって意外にむちゃするタイプだな」

気づくと、ソフィアが《スコル／ハティ》を超低温レーザー砲に突き付けていた。

「餌の時間だ。食え」

発砲。吐き出された粒子の弾丸が、動力ケーブルらしき部品が食い破る。

それに伴って極太のレーザー砲はみるみるやせ細っていった。

「仕上げだ、楯無。行って来い」

啞内から煙を上げなら天を仰ぐ＜レヴィアタン＞を、ソフィアが視線で指す。

楯無は「うん」と頷いた。そこに妹の顔色をうかがい、好かれようと迷走していた今までの面影なかった。あるのは学園最強という自信と、姉として果たすべき使命感。

「パッケージ、排除ッ。ヘスカーレッド・レイディンモードオン」

荷電粒子砲と、ミサイルユニットを廃し、残りの《アクアナノマシン》を《蒼流旋》に集中。＜ミステリアス・レイディン＞が持ち得る最大攻撃力を以て、楯無は＜レヴィアタン＞の啞内に突撃していった。

——待ってて、簪ちゃん。いま行くから。

不甲斐なかった過去の自分を置き去るように、前へ、前へ。童話一寸法師のごとく＜レヴィアタン＞の内部を蹂躪しながら先を目指す。やがて120mの巨体をぬけた楯無は、破損した尾から飛び出した。

手には半壊した《蒼流旋》と——簪。

姉に抱えられた簪はどこかおぼろげな瞳で姉を見つめた。

「……………わたしは……………そっか……………わたし、またお姉ちゃんに助けられて……………ずっと力になろうとしてきたのに。わたし、また……………」

簪は瞳に悔し涙を浮かべた。

結局、姉の力になれず助けてもらってしまった自分が情けなかった。

「……ごめんね。……ごめんね、おねえちゃん。こんな、こんな、頼りない妹で……」

「ううん、あなたは立派よ。私なんかより、ずっと。それに、わたしこそ、ごめんね。あなたの気持ちに気づいてあげられなくて。あなたは頑張ってたのに。私こそ、ダメなお姉ちゃんだわ」

言っていて、目頭が熱くなってきた。失わずにすんだ安心感とか、自分に対する不甲斐なさとか、いろいろ絢交ぜになった感情が、緊張の糸が切れたことで一気に溢れ出していた。

終いにはソフィアや鈴たちがいるまえて、「うわくくん」と泣きだす始末。

これに戸惑ったのは妹の簪だ。

「……な、泣かないですよ、かたな、おねえちゃん」

どれぐらいぶりか。親しみのある呼び名で慰められ、楯無はもつと泣いた。

「が、がんぎしちゃんが、おねえちゃんって、ヒック、かたなおねえちゃんって言ってくれたあ」

「だから、泣かないで……そんなに泣かれると、わ、わたしまで……」

号泣する姉に充てられてか、簪の瞳にも大粒の涙が浮かんでいた。

姉からもらい泣きした妹もまた「うわあくくん」と泣き声を上げる。

泣いたから泣いて、泣かれたからまた泣いて。姉妹はお互いの存在を認め合うように抱き合いながら「うわあくくん」と泣き続けた。

その様子をソフィアはハンドガンで肩を叩きながら「やれやれ」と、けれど、どこかやさしい表情で見守る。そして、三時の方角を向いた。「さて、こっちは終わったぜ、ローズマリー」



絢爛舞踏の能力でくテンペスタⅡの自爆を狙う作戦は、まだ膠着状態が続いていた。

撃てども、撃てども、まるで終わる気配がやってこないのだ。《絢爛

「舞踏」を維持する箒の表情にも疲労が見え始めていた。

「大丈夫ですか、箒」

「あ、ああ。大丈夫だ、まだいける」

強がってみたところで、彼女の疲弊は明らかだった。

脳波制御であるISは、操縦に集中力を要する。親和性で発現する《単一仕様能力》は特に必要だ。断続的な《単一仕様能力》の使用は、精神的な負担も大きい。箒も精神力の消耗が少なからず見えてきていた。それを見抜いたのか、アリーシャがニンマリと笑う。

「もうおわりなのサ？ やれやれ。もうすこしまえさんらの奮闘ぶりを眺めていてもよかったのだけれど、そろそろ飽きたから言ってるのサ。こいつ——〈テンペスタ・バアル〉に限っては、喰らえるエネルギーにキャパはないのさ」

今やっていることが無意味であったこと。このネタばらしにどんな顔をするのか。

アリーシャはローズマリーを盗み見るが、彼女は眉ひとつ動かさなかった。

「想定外の範疇です。なぜ〈テンペスタII〉に略奪装置を備え付けたのか。〈テンペスタII〉でなければならぬ理由があったのでしよう。おそらく、喰らったエネルギーを放出する機関があるから。重力を操るテンペスタ的にいえば、ホワイトホールに類する機関が」

一泡吹かせるつもりが、逆にアリーシャが面を喰らった。

「もともと重力に関する技術は〈亡国機業〉のもので。私が〈テンペスタ〉の特性を知らないと思いましたが」

「なぜ、こんなマネを……」

「単なる時間かせぎです。ですが、その必要もなくなりました。——やりなさい」

ローズマリーの合図で、上空からひとひらの雪片せんぺんが舞い降りてくる。

ウェディングドレスのような純白の機体。騎士を思わせる意匠。

——〈白式〉だ。

「てりやーツ」

降下してきた一夏は《雪片式型》をアリーシャの肘あたりへ振り落とした。

アリーシャは咄嗟に《名称不明の腕部》を引こうとする。だが、アリスと組み合い、ローズマリーに拘束されていた彼女は退くことも押すことも叶わなかった。いまさら「この構図」が、こちらの自爆を狙ったものじゃなく、回避の退路を断つためだったと気づく。結果、彼女は《シールド無効化攻撃》によって肘から先を失った。

「やってくれたのサ」

アリーシャは睨みつけた。腕を放り投げるアリスでもなく、その隣に立つ一夏でもない、

現れた白髪はくはつの少年——ロキを。

「これで自慢の腕はもう使えんな。——おまえの負けだ、アリーシャ・ジヨセスターフ」

紅椿がアリスたちの要であったように、《名称不明の武装腕》はアリーシャの要だった。それを失ったいま、彼女は劣勢に立てされたいえる。ロキはアリーシャに降伏を促したが、アリーシャは睨んだままだった。

「まだなのサ。私は《ヴァルキリー》。《暴食の腕》を失ったくらいで引いたりしない」

掲げた掌底が陽炎のように揺ぐ。

局所的な重力が空間に大きなくぼみを作り出そうとしていた。ブラックホール。それを以てIS学園を崩壊させようとするアリーシャを、ロキは淡々と見つめ返した。

「まだ戦うのか」

「戦うさ。私は娘として守らにやならんのさ。母様が築いたこの世界を」

「この世界。——女性が中心となって世を回すこの《母権社会》を、か？」

「そうさ。競争や勝利をすべてとする男性社会はやがて世界を滅ぼす」

「そんなことはねえ！ 男は弱きものを守るために——」

声を上げた一夏を、ロキが肩を掴んで下がらせる。

「アリーシャ・ジョセスターフ、その通りだ。女の数だけ子孫を残せる男にとって、戦争といったリスクな行動でさえ合理的な子孫繁栄の手段だ。だが、女は違う。女が授かれる命はひとつ。100人の男に恵まれようとも、ひとつだ。そのたったひとつの命が奪われぬよう戦争というリスクは避ける」

第二次世界大戦もそうだった。戦争を始めるのは、いつだって男だ。その影で、女は戦争に我が子を奪われ、涙してきた。戦争を子孫繁栄の手段にできる男性を、戦争によって我が子を失いたくない女性が、権力で抑止する社会。それがジェラルディナ・ジョセスターフの望んだもの。

「——だが、それはおまえが望むものなのか。おまえが自らの意思で考え、決めたことか。もし悲運の死を遂げた母を憐れみ、それがおまえを意思とは別に突き動かしているなら、そいつは『願い』じゃない『呪い』だ」

他者の望みや意思を捻じ曲げるもの。それは願いじゃない。呪いだ。

おまえは母に呪われている。そう言ったロキにアリーシャは激昂した。

「違う！ これは願いのさ！」

「なら、なぜシャイニイを俺たちの許において行った。それはこちら側への未練じゃないのか。俺達との繋がりが残すため、愛猫を俺に預けたんだ。——アリーシャ・ジョセスターフ、母親の重力に引っ張られるな。おまえは重力を操れるはずだ。おまえが望むことをしろ。俺が叶えてやる」

アリーシャは結った左右の赤毛を振り乱し、隻眼を硬く閉ざした。そうした葛藤の末、静かに掲げた左腕を下した。超重力で空いていたブラックホールも少ずつ閉じていく。

「ロキ、認めるさ。私は呪われている。ならどうすればいい。どうすれば、この痛みから解放される」

彼女は右手を苛む幻肢痛の原因は、母親の無念がそこに宿っている

からだと思っていた。

悲運の死を遂げた母が、無い腕を通し、痛みという言葉で、悲願を訴えかけているのだと。

まさに亡霊ファンタムペインの痛みだった。

どれだけ鎮痛剤を服用しても、痛みは消せなかった。その痛みを消し去るためには、母親の無念を晴らすしかない、彼女はへりリスに傾倒した。それ以外に消し去り方がわからなかったから。でも――

「おまえさんは言ったな。『自分の望むことをしろ。俺が叶えてやる』と。その言葉に偽りがなければ、私をこの痛みから解放して見せるなよさ」

「それがお前の望みなんだな？ なら、約束通り、俺が叶えてやる」

現代医学でさえ取り除けなかった幻肢痛。それを消せという。この無理難題にロキは頷いて見せた。そして、アリーシャの背後に視線をやる。現れたのは、仮面をかぶった紫紺ショートウエーブの美女――イタリヤの国家代表だ。

「アンジェ……、なんでここに……」

アンジェリカ・ヴァレンタインは表情を変えず、ジト目でアリーシャを見た。

「……あなたに渡すものがあつてきたの」

アンジェリカが取り出したものは便せんだった。

「……あなたのお母様から預かっていたの。……あなたが迷った時にわたしてって」

「いつさ？」

「……預かったのはずっとまえ。……私がまだ代表候補生で、あなたが現役だったときよ」

もしかしたら自分の口から言えないかもしれないからと。アンジェはそう付け加えた。

アリーシャは隻眼を見開いた。

母は自分に迫る危機を感じ取っていたのだろうか。だから手紙に残した。

受け取ったアリーシャは便せんを開いた。そこには短くこう記さ

れていた。

——ありのままの自分を愛しなさい。

健やかなる愛娘の成長を願って

母より

たった数文字のことばだけが、そこに記されていた。

それだけだった。それだけで、胸の奥にから熱いものがこみあげてくる。母は自分に何も求めてなどいなかった。願ったのはふたつ。健やか成長と自愛だけ。アリーシャは嗚咽で呼吸さえできなくなつた。

♡

✦

♠

泣き崩れたもう一人のアリスを、私はぼんやりと眺めていた。疲れていたのもあるけど、たぶん、うらやましいのだと思う。「形見」と云えるようなものが残されていて。

「アリーシャがうらやましいですか」

そういつてきたローズマリーに、私は敵わないと苦笑した。

「あなたはどうぞ?」

「私もうらやましいと感じます。でも、もしお母様が何かしらの形で“ことば”を残していたのなら、きつとそこにはあなたの幸せを願うことばだけが記されていたと思います。少なくとも、自分の無念を語るような呪いの“ことば”は残さなかったでしょう」

私も強くそう思えた。

母は何も恨んでいなかった。自分を見捨てた母親でさえ。

「けれど、いまのあなたは、母親の無念を感じ、それに引つ張られています。そう、アリーシャのように。死者を悼むこと、それから学ぶことは大事です。けれど、死者に縛られてはいけません。いまあなたがすべきことは、何者にも縛られず、自分の幸せを見つけることです。すべてはそこからです。自分を幸せにできない人間は、他人を幸せに

なんてできませんよ」

まず自分が幸せになること。それが一番大事、では彼女は？

ローズマリーだって「母の意思」をその身で体現しようとしている。

私と何が違うのか、私にはわからなかった。

「私はもう自分の幸せをみつめましたから」

ローズマリーは朗らかに微笑んだ。

私は彼女がなぜそれほどまでに強いのか。わかった気がした。人は愛する者がいると、どこまでも強くなれるってことなんだ。

「さて、楯無の方も終わったようですね。——どうしますか。試合の続き、しますか？」

そう言われて、自分たちが試合の最中であつたことを思い出す。

私は「もういいです」と答えた。疲れていたこともある。でも、自分の中で展望が開けていた。自分の「これから」を賭けて彼女と戦う必要性はもう感じなかった。

「そうですね。私もです。勝敗はうやむやですが、あなたの本心を聞いたので満足です。——これからは、そうあれるよう努力しましょう。お節介な姉じゃなく、寄り添えるような姉に」

「でも、ちよつとぐらいいお節介を焼いてもいいですよ？」

ローズマリーは「ふふっ」と笑い、「見事な一撃でした」と一夏の肩を叩く。

それから、ロキとアリーシャのところへ赴いていった。

「アンジエ、なんでもつとはやく渡してくれなかったのサ」

「……忘れてたの」

感傷的な雰囲気を見せしにするような一言だった。

アリーシャは苦笑いを見せる。——しよつちゆう出勤日を忘れて遅刻してくるアンジエリカらしいといえば、アンジエリカらしいと。そんなアンジエにも言い分はあるようだった。

「……だって迷ったときに渡せって言われていたから。……それを受け取った頃、現役時代だったころのあなたは活き活きしていたわ。……迷いなんか微塵も感じられなかった」

だから、渡す機会が訪れず、すっかりその存在を忘れてしまった。「へヴアルキリー」だったころだった私は、そんなに生き活きしていたのサ？」

「……ええ。楽しそうだったわ。……いまは楽しそうじゃないけど。私、あなたのお母様から『娘をお願いね』と頼まれたわ。——『いや』って断ったけど」アリーシャは半眼をむけるがアンジェはいたって普通に「だって私、誰かの面倒をみられるような立派な人間じゃないもの。だからアリーイ。私が支えないでもいいような立派な人になってね」がんばりたくないから、おまえががんばれと。

応援でも、声援でもない、ただの責任放棄。これにはアリーシャも笑った。苦笑いじゃなく「ははは」と笑顔で。何者にも、何事にも、時間さえ囚われることなく、正直に自分のペースで生きること。その大事さを、彼女は学んだようだった。

「さて、そういうことだ。アリーシャ・ジョセスターフ、ヘリリス」に加担するのは金輪際これ度でしまいにしろ。おまえにはおまえの居場所がある」

アリーシャは「そうさね」というようにゆっくり頷いた。

それから「で」とロキの顔を覗き込む。期待のまなざしを向けられ、ロキは言った。

「俺たちのところへ戻ってこい、アリーシャ・ジョセスターフ」

亡国機業への復帰要請。

それを告げたロキに、アリーシャはなぜか不満げに流し目を送った。

「俺」たち、か。50点さね。おまえはもうすこしジゴロの才能があるとおもったのにねえ」

なるほど、『俺のところ』と『俺たちのところ』では、意味が大きく異なる。アリーシャは「俺のところ」と言っただけで、意味が違っただけだろうか。つまりはそういうことか。

「50点でいい」

と、ローズマリーを盗み見る。彼女はすまし顔だった。

もしロキが『俺のところ』と言っていたら、彼女はどんな顔をす

るのだろうか。私はちよつと気になった。

第100話 楯無、代表やめるってよ

レヴィアタン撃破から翌日。私は<レヴィアタン>の回収に駆り出されていた。

他の生徒たちは自室待機が命じられていたけど、人手不足だということだ。

「苦労さま」

一通り、作業を終えた私が、野外テントで休憩を取っているとリーナがやってきた。

頭には「安全第一」のヘルメット。手にはタブレット端末。

学園の被害状況を確認していたのだろう。「被害は？」と私はたずねた。

「酷いものよ。第7アリーナは壊滅。施設被害が100カ所以上。そのうち30以上は利用不可能な状態よ。復旧には時間がかかりそうね。しばらく授業は再開できそうにないわ」

「あんな大きいものが暴れまわったんですものね。で、カリキュラムの遅延はどうするんです?」

生徒には「学校が休みになってハッピー」なんて思う者もいるかもしれない。だが、学園側としては必要な知識や技術を習得させられないまま、卒業させるわけにはいかない。

「そのことだけど、ロキから提案があったわ。IS企業が生徒たちの面倒を見てくれるそうよ」

〈亡国機業〉^{フアントムタスク}は、多国籍企業複合体。IS企業の最大手と言われる〈ナイトソード〉、〈ワルキューレ・ウエポン〉、〈ジョゼスターフ〉、〈ヴェーラ・アスカロフ〉、〈上海飛甲装工業公司〉を傘下に置いている。その〈亡国機業〉^{フアントムタスク}を牛耳るロキならできないことじゃなかった。

「もともとは襲撃事件に対する補償だったのだけどね。復旧作業の間、生徒たちにはIS企業ないし機関で働いてもらって、ISの世界をその目で見てもらおうと思うの」

「就労体験ってやつですか」^{インターシッブ}

座学に関しては自宅学習やEラーニングという形で補修できる。

だが、実習となれば実機や施設が必要になる。なにより、〃百聞は一見にしかず〃というし、自分たちが卒業後どういう場所で働くのか、経験するいい機会になる。

「じゃあ、その間は休校ですか」

「ええ、安全面を考慮して、生徒たちには一時帰宅の命令が下されるわ」

「そうですか」と言っただけで私は、決闘が終わってから考えていたことを口にしました。

「よければ、私もしばらく休みをもらっていいですか」

今回の事件を経て、思うところがあつた私はそう申し出た。

私はずっと母親の願いを叶えるために戦ってきた。でも、それは母の望みじゃないだろうと姉は言った。母の望みはあなたの幸せ、だと。なら、私の幸せとは何か。一度、ゆつくりと考えようと思っただ。

私の申し出にロリーナは「わかったわ」と朗らかに微笑む。

「すみません、忙しいときに、こんなことを言っただけ」

この時期に戦線を離脱してよいものか。やはり身勝手すぎるか。

いまさら恐縮する私の髪を、ロリーナが撫でる。

「あら、私たち大人を見くびらないで。〈デウス・エクス・マキナ〉はあなたが抜けた程度で揺らいでしまうような脆弱な組織でもなければ、そんな弱い大人たちの集まりでもないわ」

私は自分の思い上がりを恥じた。

「あなたは本当に戦い通しだった。この機会に一度ゆつくり休んでいらつしやい。なんなら、そのまま戻ってこなくても大丈夫よ」

邪険にされているわけじゃなく、思いやりの言葉であることは、すぐにわかった。

〈リデル〉は代用が利かない要員につけられるコードネーム。私も自分の重要性を承知している。そんな私が他にやりたいことを見つけたとしても、心残りなく組織を去れるように背中を押してくれているのだ。

うれしかった。

けど、自分の幸せを見つけられたとしても、完全にココから去れるだろうか、とも思う。

〈デウス・エクス・マキナ〉は母の願いを叶えるための場所でもあり、同時に贖罪の場所でもあったから。そう、親友殺しの罪を償うための。母の願いを姉に託せたけど、償いは誰かに託せない。私がやらなければならぬ。

(私はいつになったら、普通に戻れるんでしょかね)

私が人知れず苦笑いをこぼすと、ロリーナが心配そう様子を伺ってきた。

「どうしたの?」

私は慌てて「いえ」と首を左右に振った。

「じゃあしばらく、ゆっくりさせてもらいます」



専用機〈レヴィアタン〉の撃破後、その残骸から救出されたフォルテ・サファイアは、ここ医療区画に搬入された。その1004号室。専用機の暴走により意識を失っていたフォルテ・サファイアは目を覚ました。

「よ、目が覚めたか」

いまだにはつきりしない意識と記憶のまま、病室内を見渡すと、知った顔を見つけた。

金色の髪を後頭部で結んだ勝気そうな娘——ダリル・ケイシーだ。その彼女の声を聞き混濁していた記憶が鮮明に蘇った。

「どうしてツスか……」

衰弱したような細かい声でファルテは恋人に言った。

裏切りの理由わけを問われたダリル・ケイシーは悪びれた様子もなく答えた。

「ソフィア風と言えば、あたしは裏切つてなんかいない、欺いただけさ。あたしはレイン・ミューゼル。ロキに命じられて、〈ヘリリス〉に潜

入っていた亡国機業のスパイってやつさ」

「じゃあ、最初からツスカ」

「ああ、誰かに諭されたり、心変わりしたわけじゃねーよ。おまえへ近づいたのはへりリスに潜入するためだ」

自分を利用するために恋人のふりをしていた。既に分かっていたはずなのに、改めて彼女の口から聴くと堪えた。本当に彼女が、ダリルが、好きだったのだ。

「で、どうするよ」

傷んで俯いていたフォルテは、ダリルの顔を見た。

いまだ記憶が混濁していた彼女は自分が置かれている立場をよく理解できていなかった。

「<レヴィアタン>は破壊した。おまえがへりリスの構成員だつてことは、仲間のみんなが知ってる。いまのおまえはいわゆる“捕虜”つてやつさ。今まで通りの生活はもう送れない」

「送れないなら、なんで『どうする』なんて訊くんスか?」

「この連中は人がいい連中ばかりだ。おまえの返答次第では、待遇を考えてやるつてよ。金輪際、へりリスに加担しないつてんなら、今までどおり生活を送つていいそうさ。ただし、監視付きではあるけどな。逆に従えないつてんなら、禁固も辞さない構えだ」

「それはへお母さまを裏切れつてことスか!?!」

悲鳴に似た声音でフォルテは言った。

かつて父親から虐待を受け、逃げ出した自分を拾ってくれた人がへお母さまだった。

構成員がリリスをへお母さまと呼ぶのは、人類がたった一人の女性——リリスの胎から生まれたことに由来する。だが、フォルテにとってへお母さまは尊大な意味での“母”ではなく、身近な女性としての“母”だった。与えてもらえなかった愛情をくれたそんな人物を裏切れなんて。

「できないつすよ、そんな、お母様を悲しませるようなこと」

「いいや、存外そんなことはないサ」

そんな声がしてフォルテは隣のベッドを見やる。

ガラツと開いたカーテンの先にいた人物は、隻眼隻手の女性アリーシャだった。

「なんで、アリーシャがここにいるんすか」

「おまえさんと一緒。戦いに敗れたのさ。――で、相手側の条件を呑んだ」

条件。へりリスへに加担しないかわりに、自由を得たのか。

「お母様を裏切ったんすか!？」

「そうなるかもねえ。でも、悩んで、考えて、決めたのなら、あの人は怒らないさ」

「逆に立場ある大人の裏切りには厳しいけどね」

と、アリーシャがうしろにいた、もう一人の女性が言った。

ブルネットの気品ある佇まい。へりリスへ創立の一家、その末裔にして幹部のロゼンダだった。

「立場ある大人の裏切りは悪意に満ちている。裏切りっていうのは、欲や力ほしきで仲間に盾突くこと。嫉妬に狂い、力欲しきにくヴェルフェゴールを奪った私のような人間を裏切り者っていうのよ。――でも、好きな人と添い遂げたいがために組織を抜けるなら、それはきつと裏切りとはいわないわ」

自分の気持ちを見透かしたようなロゼンダの言葉に、フォルテは頬を赤めた。

その心地よい熱が「自分がどうしたいか」教えてくれる。自分はダリルと一緒にいたい。

『血は争えない』ツスね」

唐突にそんなことを言ったフォルテに、ダリルは「どういう意味だ」と首をかしげた。

「私にも母親はいたツス。その母は父に逆らえない人だったツス」

だから、父親に命じられるがまま母はフォルテに暴力をふるいつづけた。

「ごめんなさい。ごめんなさい」と謝りながら。

「幼かったころは判らなかつたけれど、いまならわかるツス。母は父を愛していた。愛していたから、父に逆らえなかつた」

好きな人のためなら、何もかも捧げられる。

何もかも捨てられる。

命もかけられる。

どこかの物語で、だれかがそう言った。

フォルテもそう思う。

何もかも捧げられて、何もかも捨てられて、命もかけられるなら、

——その人は我が子も捨てられるのだろうか。

愛は人を勇敢にするが、愚かにもする。母の父への愛は、彼女を愚か者にした。

そして、いま自分は母と同じ愚かなおろかな選択をしようとしている。

恩人に背を向け、好きな人と添い遂げるといふ、選択を。

「いいや、愚かだなんて、そんなことはねえよ。それをあたしが証明してやる。おまえを幸せにして、ばばあになっても胸を張っていられるような人生にしてやる。おまえをその気にさせた責任と、——この恋心にかけて」

ダリルはフォルテの手を取った。一度は自分を利用した女性の言葉なのに、どうしようもなく、その言葉が嬉しかった。騙されてもいいとさえ思えるほどに。

「わかったつす。だから、もう燃やそうとしないでくださいツスすね？」

「そいつは無理だ。あたしは燃え上がるような恋がしたい」

そういつて、フォルテを抱き寄せる。

見せつけられた、大人二人はやれやれという顔を互いに見せ合った。

「ほんと、愛っていうのは厄介な感情サね」

裏切られて、燃やされかけて、それでも二人は許鞆に戻ってしまっ

た。
こちらの事情なんてお構いなしに突き動かそうとする愛というパワーに、恐ろしさと頼もしさをアリーシャは二人を見て感じた。

「そうね。愛は権力にまさる。だからこそ、愛する相手を見誤らない

ようにしないといけない」

「ダメな男にひつかかると女は不幸になるというのは、たぶんその通りなんだろうねえ」

「そう、恋に生きた女の物語が、悲劇になるか喜劇になるか、そのカギを握っているのは相手よ。アーリイも男選びには注意なさいね」

「その心配なら無用さ。坊やならきつと私を幸せにしてくれるさ」

アーリイは無き腕を見る。そこにあつた幻肢痛はもうない。彼が自分を縛っていた呪いから、解き放ってくれたから。数多の男が消せなかった痛みを彼は取り除いた。その彼なら、今はすべてを捧げてもいいと思えている。

彼女もまたフォルテと同じ『愛』に翻弄される愚かな女性の一人だった。

「そう。でも、坊やって？」

「私の旦那候補は10以上も年下なのさ」

ロゼンダは驚いたように目を開いた。10以上も下ということは未成年。

「は、犯罪だわ」

「おや、おまえさんは言ったさ。愛は権力に優るって。なら法だって越えられるさ」

あははは、と全く歳の差を気にしていないアーリイにロゼンダは啞然とする。

そして一人「やっぱり愛って罪だわあ」とぼやいた。



IS学園生徒会室。その応接机に置かれたガスコンロの上では、鍋がコトコトと火にかけられていた。温められたボルシチを囲むのは、楯無と簪、そしてソフィアの三人だ。ソフィアはよそつたボルシチにサワークリームを乗つけると、更識姉妹にそれを振る舞った。

「……ホフホフ、おいしい、ね。おねえちゃん」

「うん、おいしいわね、簪ちゃん」

簪がほっこりした笑顔を見せると、楯無もにこやかに微笑んだ。

確かにボルシチはおいしかったけれど、昔のような姉妹に戻れたことが楯無をいっそう笑顔にしていた。簪も抱えていた胸の内をさらけ出したことで、どこか清々しい様子だ。その二人に今までのような確執は感じられない。

これも背中を押してくれたアリスのおかげだと簪は思う。彼女が背中を押してくれなければ、いまもきつとウジウジしていた。そして影ながら協力してくれていたソフィアにも感謝は尽きない。

「そうそう、あなたたちって知り合いだったの？」

「……うん。でも、直接会うのは今日が初めて。……ソフィアさんはSNSで知り合ったの。……そこでロシア代表だったソフィアさんに「お姉ちゃんの力になってほしい」ってお願いして」

「なるほど、そういうことだったのね。たぶん、あなたの方が「楯無」に向いてるんじゃない？」

「そもそも、そんなことないよッ。わたしなんて、機械いじりぐらいしか取り柄がないし……」

「むしろ、それがいいの。あなたは自分に何ができて、何ができないのか、知っている。だから、他に頼むことができる。自分の弱さを知り、受け入れ、頼ること。それが「楯無」にとって大事なのよ」

更識の強みは「ひとたらし」。弱みは家族運営ゆえに規模が小さいこと。更識は自分の強みを活かし、弱みを補うことで、生き残ってきた組織だ。楯無に必要な素養はアウトソースに長けていること。

「でも、私は自分の才能に託けて一人で何でもしようとしてきた。一人で全部背負いこむ人間は、組織の長に向いていない。でも、あなたは違う。あなたは自分にできないことを、他にアウトソースできる。あなたには楯無の素質があると思うの。——どう、やってみる？」

つまり、自分に代わって家長を継いでみるか、と。

簪は千切れんばかりに首を横に振り回した。素質を認められたとはいえ、荷が重すぎる。

「……む、無理だから……。わ、わたしだって、最初は全部一人でやつ

ていたんだよ。……それにアウトソースっていつても、相手は「システム」だし、お姉ちゃんみたいな人を惹きつける魅力もないから」

姉は妹の反応を予想していたように「ふふふ」と笑った。

「そうね、あなたは人見知りなところをすこし直した方がいいかもしれないわね。——じゃあ、もうすこしがんばってみるわ。で、にしてもよ、ソフィア。あなた、よく簪ちゃんの依頼を引き受けたわね」

ソフィアには、簪の依頼を聞くメリツトがない。

ソフィアは「ん？」と簪がもってきたパンケーキから口を離した。

「これのためさ」

楯無は猫みたいな目で、嫌疑のまなざしを向けた。

ソフィアは肩をすくめてから、真剣な表情で更識姉妹を見直す。

「というのはウソで、オレが依頼を受けたのは、更識とコネクションを気づくためだ」

足許に置いてあったジェラルミンケースを取出し、テーブルの上で開いた。

紙の資料に、いくつかのメディア機器。楯無が速読で目を通していく。そして内容を理解し、驚きの眼差しでソフィアを見る。

「こいつは『ロシアの恥部』さ」

姉ほど語学が堪能じゃない簪は姉に「何が書いてあるの？」と訊いた。

「1999年のモスクワで起こった爆破テロ。これがロシア政府の自作自演だったことに関する内容よ。もしかして、これ全部、ロシア政府がもみ消してきた事件に関する資料なの？」

「ああそうだ。全部裏を取ってある」

「ならとんでもない機密文章じゃない。なんでこんな重要なものを私たちに？」

「ありふれた内容で恐縮だが、復讐のためさ。——年間13人。失踪や変死しているジャーナリストの数だ。なぜ『そうだったか』は、もう語る必要もないだろう。実はオレの母さんもジャーナリストだった。母さんはそこにあるモスクワ爆弾テロがチェチェン侵攻のお題目作りだったことを掴み、公表しようとした」

「それで消された……」

「ああ。強姦殺人に見立てた、な。オレは自分の母親が嬲られ、殺される現場を目撃した。以来さ。オレはセックスで何も感じなくなった」
彼女は心因性の不感症を患っている。

ロシアの行った隠ぺい工作が、その原因となるトラウマを彼女に植え付けた。

「その復讐もここで完結する」

ソフィアはケースを閉じ、楯無へ滑らす。

「でも、そうすれば、あなたは祖国を売ることに……」

「そうだな。オレは売国奴になる。だが、それでいい。——楯無、東洋には忠を尽くすという言葉があるだろ。オレはオレに忠を尽くすんだ。そして、これからは仲間のために忠を尽くす」

ソフィアには迷いなく楯無を見つめた。楯無しはその覚悟を受け取った。

「そう、わかった。じゃあ、これ、譲り受けるわ」

そして成果として、日本政府に差し出す。

そうすれば、日本政府からお墨付きがもらえる。更識は次代まで安泰だろう。

「となると、もう私がロシアに潜伏する必要性はなくなっちゃうのよね」

更識が自由国籍でロシア国籍を習得していたのも、ロシア代表を務めていたのも、すべては日本政府に忠誠を誓う任務の一環だった。その任務が完了したなら、もう彼女がロシア代表を続ける意味はない。

「代表をやめるのか？」

「そうなるかしら。もともと、代表、家長、生徒会長の三足わらじは大変だったし。でも、今回ヘリリス〈って組織の力を目の当たりにして、専用機は必要だと思う〉

「だが、代表をやめたら、スポンサー契約も打ち切りになる。ミステリアス・レイディはもう使えないぞ」

〈ミステリアス・レイディ〉はロシアのIS企業〈ヴェーラ社〉が有する機体。この企業とスポンサー契約を結んでいたから彼女は〈

ミスティアス・レイディンを受領できた。代表をやめれば返却しなければならぬ。

「そこでよ、簪ちゃん」楯無は妹へ向き直り「あなたに私の新しい専用機を開発してほしいの」

簪は目を見開く。

「……わたしが、お姉ちゃんの専用機を？」

「そう、あなたの技術を見込んでよ。ダメかしら？」

簪の表情が花開く。それは簪がずっと待ち望んでいた言葉だった。姉に認められたくでずつと努力してきた。それがいまようやく実を結んだのだ。簪は立ち上がりずにはいられなかった。

「……わたしでよかったです、やらせてほしい！」

「じゃあ、お願いするわ。資金はこちらでなんとかするから。人材はあなたに任せるわ」

「……あ、でもコアはどうするの」

「それなら大丈夫」と楯無はへミスティアス・レイディンのストレージからコアを取り出した。

かつてロシアの秘密都市で手に入れたコア。すなわちくナルヴィゴールムIIのコアだ。

「いいでしょ、ソフィア」

「ああ、好きにするといい。ロキもいまさら返せとは言わないよ」

「あいつのそういう女々つちくなくないところ助かるわ。じゃあ決まりね。これはあなたに渡しておくわ。さっそく取り掛かって。私はまず防衛相高官に報告をして、ロシア代表の後任を選別して、辞退を表明して……」

「……わたしも人を集めて、設計して」

「でもまずは」

「……うん、まずは」

更識姉妹は顔を見合わせ、空いた皿をソフィアに差し出した。

『おかわり！』

——IS学園、屋上

「あの姉妹、うまくいったようだよ」

「そうか、そうか。刀菜ちゃんもようやく簪ちゃんの気持ちに気づけたんやね〜」

「妹に専用機を開発してもらうんだとき。簪もずいぶんと意気込んでいるよ」

「ソフィアはんには礼をいわんとなあ。簪ちゃんのお願い聞いてくれておおきにな」

「あなたとそういう契約だったからな。それに、オレもこうして復讐を果たせし、あなたとのコネも手に入れられた。〈黒鼠〉の筆頭であるあなたと」

「あらまあ、よう知つとるね」

「狼は鼻が利くのか。あなたからオレと同じ匂いがしたんで、調べさせてもらったよ」

「隅に置けへんなあ。ま、似た者同士、仲良くやりましょや。何かあったらうちおいで。匿つたるさかい」

「じゃあ、前金を払っておこう。渡した〈ロシアの恥部〉を手に入れた

がっている奴がいる」

「ほお、誰や」

「ルーゼンブルク王国、第七王女・アイリス・トワイライト・ルーゼンブルク」

〈プリンセス・オーダー〉
第101話 師走も早くに訪れて（クリスマス・カミングスーン）

高度2000キロメートル。重力と遠心力が恋人のように惹かれ合い、ひとつになる場所。

誰もいない、無いもない、何も聞こえない世界から地球を見つめていたひとつの衛星が突然として動き出したのは12月のことだった。

剣を彷彿させるその衛星は、あたかも鞘から刀身を抜くように《砲》を開き、陽イオン化した推進剤を電界に放出しながら、その反作用を以て機体を加速させていく。毎秒30キロの速度で移動を始めたそのの目指す先は日本の静止軌道上——IS学園。

この案件が〈情報部〉から伝えられたとき、千春は織斑邸で掃除機をかけていた。IS学園を休校にしたので、明日にもココに息子が帰ってくるのだ。主婦らしくカーペットに掃除機をかけていた彼女は、スイッチを切って食事卓に腰かけた。

「それで欧州理事会はどのような対応を」

『紛糾している。破壊か、奪還か、で足並みが乱れているようだぜ。親NATO派が、破壊後の宇宙デブリで、通信衛星や気象衛星に多大な被害がでることを理由に反対している』

「アメリカの圧力かしら」

アメリカが自国の人工衛星に被害が及ぶことを懸念しているんだろう。監視衛星を失えばアメリカの国防に大きな穴が開きかねない。「彼らに事態の収束を期待するのはいい選択じゃなさそうね。手筈どおり、私たちは私で動きましょう。あなたは引き続き、欧州の動きを見ておいて。動きがあつたらすぐに報告してちょうだい」

『了解した』

通信を終えた千春は、〈作戦部〉に？いだ。

「エドガー、日本政府から借りる予定だった新型のTMDプラットフォーム

フォームはどう?」

『明日の二三時〇〇時に到着する手筈になっている。EMLはその三時間後の一五時〇〇時だ』

「到着次第、すぐにも稼働できるように整備しておいて。ロリーナもIS学園にいるから」

『だが、稼働できても肝心な“弾”が手に入っていないが』

「私が直接アメリカに赴いて、交渉してみます。アメリカは攻撃衛星の破壊に反対しているみたいだから、条件次第で応じてくれるかもしれないわ」

「了解した」と返事をきいたあと、千春はさっそく着替えを始めた。ニットセーターとジーパンを脱ぎ捨て、衣装ケースから白のタイトスーツをひきずり出す。下着姿になると通信機が再び鳴った。

「あら、ロキ君」

『報告はあがっているか?』

「ええ、攻撃衛星の報告は受けているわ。いまその対応の当たっているところ。そちらは」

『例の防衛システムの稼働に、なんとかこぎつけたところだ。万全とは言わないが、アリーシャが頑張ってくれた。スコールからも“順調だ”という主旨の報告を受けている』

「さすがね。あなたが味方でよかったと思うわ。——あつ」

千春はタイトスカートのファスナーを上げながら、声を詰まらせた。

『どうした』

「いえ、なんでもないのよ、うふふ（ファスナーが上がらなくなってる……）」

太ったのかしら。と鏡の前に立つ。

確かにちよつとムチつとしてきたかもしれないなかった。

『おい、本当に大丈夫か』

「大丈夫よ。それより、いくら準備したところで攻撃衛星の位置が分からないことにはね」

破壊するにも、奪還するにも、衛星の位置が分からないのでは手の

打ちようがない。

しかも、毎秒30キロという速度で移動している。位置の特定は難しいだろう。しかしロキは言った。

『それなら、いまローズマリーが動いてくれている』

♡

◆

♠

オルコット家。本邸玄関前ロータリー。ローズマリーはここに車を止めるよう運転手に命じた。

停車と同時に同伴のメイドが車扉を開く。

下車すると、同伴のメイドはへフランベルジュをローズマリーに差し出さした。

それを腰に備え付け、オルコット邸の玄関を叩く。

ややして、やってきた対応専門のメイドたちに、ローズマリーは要件を告げた。

「夜分の不躰な訪問をわびます。チエルシー・ブランケットはいますか」

「かしこまりました。少々おまちください——」

「いえ。こちらから出向きます。彼女はいまどこに?」

恭しく頭をさげ、呼びに行こうとするメイドは戸惑いをみせた。

客間に案内するつもりだったメイドもだ。

「え、メイド長でしたら、お嬢様のお部屋かと」

「わかりました。それと物音がしたら、ここを出なさい。いいですね」「も、物音でございますか?」

「カルラ」

当惑するパーラーメイドに、同伴のメイドが「もしもの修繕費です」と小切手を渡す。金額は約10万ポンド。修繕どころか家が買えるほどの金額を渡し、ローズマリーは玄関中央の階段を上って行った。そのあとをカルラが追う。

「しかしながら、彼女が〈ヘリリス〉に関与とはホントでしょうか」

追いつくと、カルラが信じられないような顔でそう言った。

「あなたは彼女と家政婦学校で同期でしたね」

「はい。彼女は仕事もでき、忠義に厚い家政婦でした。その彼女が主人に楯突くとは」

「ええ、彼女は忠義に厚く、その意気は騎士道と言ってもよいでしょう。だからこそです」

メイドが解せないという表情を作ると、ローズマリーはある部屋の前で立ち止まった。

ノックもせず部屋に入る。室内では、オルコット家のメイド長——チエルシー・ブランケットが写真立てを持ち、それを眺めていた。気づいたチエルシーが写真立てを机の上に戻して、こちらを見る。

「これはローズマリーさま。こんな夜分にいかがなさいました」

ローズマリーは要件を告げた。

「あなたに伺いたいことがあります。まずへエクスカリバーを知っていますか」

「いえ。へエクスカリバー」とはいかような？」

「EUが開発していた攻撃衛星のコードネームです。そのへエクスカリバーとの通信が途絶えたそうです。のみならず、本来の衛星軌道を外れ、移動を開始したという報告が、欧州参謀本部に上がってきているそうです」

「それはなんとまあ。ではいま欧州理事会は蜂の巣を突いたような大騒ぎでしょう」

「そこで、ぜひ、あなたに止めていただききたいと思い、出向いた次第です」

「ローズマリーさまは、わたくしがそれに関与している？ 恐れながら、一介のメイドに過ぎないわたくしに、欧州の秘密兵器をどうして奪えましょうか？」

毅然と潔白を主張するチエルシーに、ローズマリーもまた毅然と言いつ放つ。

「裏でへリリスと繋がっていたとなれば、話は別でしょう」

チエルシーは初めて感心したような笑みを浮かべた。

「そこまでご存知でしたか。恐れ入りました。——お嬢様はこのことを？」

「知らないでしょう。まだ、あなたには帰る場所があるということですよ。それを失う前に投降なさい、チエルシー・ブランケット。投稿するのであれば、私も墓場までこの事実を持っていきましよう」

何も告げず、何食わぬ顔をすれば、明日も二人の関係は保たれる。しかし、ヘリリスへの加担が明るみになれば、もういままで通りにはいかない。

ローズマリーの最後通告を、チエルシーは頭を垂れて答えた。

「お気遣い、痛み入ります。——ですが、わたくしには幼馴染に恨まれても、果たせなければならぬことがございます。ゆえにここで捕まるわけにはいきません」

チエルシーは腰のサーベルに手をかけた。殺気が爆発する。それが彼女の答えだった。

「あくまで忠義を貫く、と。その意気込み、見事と称しましょう。しかし、それは私を敵に回すことだと覚悟の上ですか」

ローズマリーもまた腰のフランベジュを抜く。チエルシーは床を蹴った。

「——はい、すべて承知の上です」

チエルシーが刺突を繰り返す。ローズマリーは下から切り払った。神速の剣閃ではじかれたサーベルが天井へと舞って突き刺さる。ローズマリーは徒手空拳になったチエルシーの喉元に剣先を突きつけた。

「お強うございます。こうも足も手もでないとは……。——ですが」
チエルシーが手を天井にかざす。すると、天井に刺さっていたサーベルが粒子となって爆ぜた。

やがて青い粒子がチエルシーを包み込み、鎧の像を結ぶ。

「……ISですか」

チエルシーを包み込んだISは、〈ブルー・ティアーズ〉によく似た蒼い機体だった。固定浮遊部位にも、ビットらしき兵装。手には両手剣に似た格闘武器を保持している。タイプは格闘専用に見えたが

「ざりとて——」

ローズマリーは《レーヴァテイン》を展開すると、瞬時加速を発動した。

爆発的な加速で迫り、《レーヴァテイン》の刺突をチエルシーに突き立てる。咄嗟に両手剣で防御するも、圧倒的なパワー差に、彼女はあっけなく部屋から放り出された。

「ざりとて専用機を持っていたところで、どうこうできる方でもありませんでしたか……」

「理解できたなら、抵抗はよしなさい。素直に協力するならば、相応の待遇を提供します」

再び、剣の矛先をチエルシーに向ける。チエルシーは微笑んだ

「なんとご慈悲深いことでしょうか。そんな方になぜ《ブラツディーマリー》の通り名がついたのか理解に苦しみます。しかし、わたくしの協力を取り付けたところで、《エクスカリバー》の制御を回復させることはできません」

「暴走ですか」

「いえ、正常に動作しております。ただ許より、アレはわたくしの制御下にあつてないようなものなのです。わたくしだけの意思ではどうにもなりません」

「どういうことですか」

「残念ながら、お答えするだけの時間はないようです」

チエルシーがわずかに意識を上空に向ける。同時に《レーヴァテイン》のAIが言った。

《警告。上空より接近する機体あり。味方識別信号^Fなし。未確認機と判断。警戒レベル3》

AIの警告を受けるより早くローズマリーは後方へ飛んだ。すかさず、降ってきた新手に銃を向ける。

新手はISだった。背中にコウモリのような翼、臀部には悪魔のような尾。武装にはデスサイズのような格闘武器を持ち、頭には非対称の角が備わっている。操縦者は若く、16あたり。ブルネットの髪をシユシユでサイドアップにしており、ISの姿と相まって小悪魔的な

少女だった。

「チエルシー、ヘルプに来てやったわよ〜」

チエルシーは横に降りた少女に頭をたれた。

「もうしわけありません。ご足労いただきありがとうございます、リサさま」

「マジ、それ。いま、いいところだったんだからね」

リサと呼ばれた少女は指先でスマホを回転させる。

画面には女子高生が好きそうなネットの恋愛リアリティ番組が流れていた。

「ま、いいけど。つーか、こんな時間に呼び出して何ごと？——つて、ローズマリーじゃん？」

「左様ございます。どうか気を抜かぬように——」

「うわ〜、写真で見たよりきれいじゃん！ ヤバッ」

リサと呼ばれた少女はローズマリーを背景にして自分撮りした。

「リサさま、ヤバいのはそこでございませぬゆえに」

チエルシーの進言を、リサは「大丈夫、大丈夫」と手を煽いでこたえる。全方位に油断を発信するギャル少女へ、ローズマリーはすかさず《レーヴァテイン》を斬り払った。だが、切っ先が少女に触れることはなかった。直前、《レーヴァテイン》が粒子となって消え失せてしまったからだ。

「なるほど、これが《ヴェルフエゴール》というISの力ですか」
「そ」

リサは犬歯をみせて、ニツと勝ち誇ったように笑った。

〈ヴェルフエゴール〉。ISを無力化する《リリス》のISだ。
「なら、早期に決着をつける必要がありますね。——ウルズ、レーギヤンの箱を使います」

《ラジャー、全展開装甲、リミッター解除》

全身の《展開装甲》が解放され、赤いエネルギーが炎のようになくレーヴァテインを包み込む。

それはさながら神話で世界を焼いたスルトの炎のようだった。その禍々しい存在感に、リサから余裕が消える。

「なにこれ、やばくない!?!」

「さきも申した通り、〃やばい〃のございます。本人もISも。〈ヴェルフエゴール〉の力を慢心なさいますと、お姉さまの二の舞になりかねます。ここは剣を交えず、退くことに専念すべきか、と」

「それな!」

リサがコウモリの翼を広げる。チエルシーは咄嗟に固定浮遊部位のビットを射出して、起爆させた。爆炎の暗幕が視線を遮るが、ローズマリーはそのまま突き進んで刺突を繰り返した。

確かな手ごたえがマニピュレーターに伝わる。――が、爆炎がなくなつたその場所に、〈ヴェルフエゴール〉の姿はなかった。あつたのは、自分が引き裂いたと思わしき〈ヴェルフエゴール〉の片翼のみ。どうやら、手ごたえの正体はこれだったようだ。

「逃がしましたか」

腕いだ翼を投げ捨てて、夜空を仰ぐ。片翼の悪魔はすでに闇夜へ消えつつあつた。

同時に〈レーヴァテイン〉に稼働限界が訪れ、解除される。諦めて、ローズマリーは通信を開いた。

「ロキ、彼女を取り逃がしました。しかし、彼女が言うには『自分を抑えてもヘクスカリバー』は制御できない』と。彼女は〃でまかせ〃を言うような人間ではありません。ヘクスカリバー』には何か秘密があるのか、と。――わかりました。対応はそちらにお任せして、私はオーストラリアの方に向かいます」

通信を閉じたあと、ローズマリーは踵を返した。

オルコット邸からは騒ぎ立てる使用人の声が聞こえてきていた。まずはこれを収めてからか。そう思いながら、ローズマリーは夜空を見上げる。そこには赤い月がポツンと浮いてた。まるで凶兆を報せるように。



IS学園。第七アリーナ跡地。

今日も今日とて、私はEOSに乗って半壊したアリーナの瓦礫撤去作業に勤しんでいた。

このEOSとは、災害救助を目的に開発された人型パワーローダーだ。汎用性はISに劣るんだけど、アクチュエーターに油圧駆動を採用しているため、重たいものを持ち上げる力はEOSが強い。

というわけで、私は油圧駆動のパワーで超重量の瓦礫を軽々と持ち上げ、脚部のホイールローダーで運んでいく。そんな作業をいくどなく繰り返ししていると、新たに二機のEOSがやつてきた。装甲には「二号機」「三号機」とある。二号機の両腕には一夏と箒、三号機の腕にはシャルが乗っていた。

『そちらの状況はどうだ』

外部スピーカーから声が出て、バシユツと二号機のコクピットが開く。

オペレーターはラウラだった。

『ごっちは終わったから、手伝いに来たわよ』

二号機のコクピットも開く。こちらのオペレーターは鈴だった。

『ありがとうございます。でも、こちらもう終わりますから』

『じゃあおわたたら一緒に休憩にしようぜ』

そう言つて一夏がバスケツトを見せる。箒も水筒を上げて見せた。『わかりました。ちょっと待っていてください。すぐ終わらせますから』

私は最後の瓦礫を車両に乗せ、EOSのコクピットを開く。下りると、さつそくラウラが雨具用のブルーシートを広げた。それを即席のランチシートにしてみんなで腰を下ろす。

『にしても、手酷くやられたよなあ』

箒が淹れたコーヒーをすすりながら、一夏が運ばれていく瓦礫を見やる。

前回の一件で、第7アリーナは壊滅。学園施設にも100カ所以上の被害が出た。これに際して、学園上層部は安全面を考慮して、私たち生徒に帰国命令を出した。すでに多くの生徒はココを発っている。

側に荷物を置く一夏たちも、今日にはここを去るのだろう。つまりは

「もうじきみんなとお別れなんだよね……」

そういうことだった。

シャルがさびしそうに視線を落とすと、ラウラが苦笑いする。

「なにも泣くことないだろ、シャルロット。もう会えないわけじゃない」

「だってさ……さびしいだもん、エリーやラウラ、みんなと会えなくなるの」

「大丈夫ですって、すぐ通えるようになりますから」

今日にも轡木学園長が文部科学省のIS学園担当官なる人物と面会するという話だ。日本政府の支援があれば復旧も早くなるだろう。

「それにクリスマスイヴはセシリアの家に集まるだろ」

12月24日はセシリアの誕生日で、その日には彼女主催の誕生パーティーが開かれる。

私たちもそのパーティーに招かれている。私たち以外には各界の著名人も訪れるらしい。なぜかといえば、このパーティーは各界の大物たちにオルコット次期当主たるセシリアの顔を売る意味もあるからだ。

「正直、僕、こういうパーティーって苦手なんだよね……」

いまだ庶民感が抜けていないシャルにすれば、格式の高い場はなじみにくいかもしれない。シャルは「住んでる世界が違い過ぎて息ができるかさえ危うい」とでも言いたげだった。

「そういうが、おまえだって大企業の御曹司だろ」

と、五角形のクツキーをつまみながら箒。

「僕、引き取られる前は、質素な母子家庭だったから。そのころの感覚がまだ抜けてないんだ。庶民感覚が体に染みついてる人間にとってこういうパーティーはすごく気疲れするんだよ？」

確かに習慣や価値観が違う中で、それに合わせるには労力が要る。セシリアとシャルロットのそりが合わないのもそういうことなのだろう。

「だが、郷に入れば郷に従えという。それが社会の中で生きていくということだろ」

「う、まさか一番社会性のないラウラに諭されるなんて……」

みんながカラカラ笑う。

「ま、招待されること自体は名誉あることだとは思ってるよ」

「確かにセシリアって由緒正しい家柄のお嬢様ってかんじだけど、やっぱすごいのか?」

「たぶん、鈴の想像を超えたお金持ちだよ。総資産は公表されていないけど、オルコットの資金力にかかれば手に入れないモノは無いっていわれているから。ま、それを裏から操っているのがライオンハートって話だけど」

セシリアは16歳。未成年だ。未成年が契約したり、資産を売買するには、法定代理人の承認が必要になる。本来は両親が法定代理人になるが、孤児の彼女の場合は、ローズマリーがそれになる。それあって、背後からオルコットを操っているなんて言われているわけだ。

「私は、そのためにオルコットを鉄道事故に見せかけて殺害したという話を聞いたことがあるな」

「ちよつと、ラウラ、それ言っちゃう!? エリーを前にしてさー!」

「先に操っているなどと言いだめたのはおまえだろ」

「それはそうだけど!」

私とローズマリーの関係は周知の事実になっている。試合のど真ん中で叫んだのだから当然だ。

というわけで、身内を殺人者扱いされていい気分なわけがないと、そう慌てるシヤルだったが、私は気分を害したりはしなかった。

「それはありえませんかよ。ローズマリーがセシリアの法定代理人になったのは、単純にライオンハートが代々オルコットの資金管理を担っていたからですよ。ライオンハートの主な業務はプライベートバンクですから。ライオンハートには莫大な遺産を相続するセシリアを守る義務があった。それだけです」

それにライオンハートとオルコットの友好関係はパスクブリタニカから今に続いている。特に私の母『メアリー・ライオンハート』と

セシリアの母『アリシア・オルコット』は幼馴染の関係にあつて仲が良かったらしい。それを加味すれば、鉄道事故を装った暗殺の線は薄いだろう。

「まあ、やれマネーロンダリングの温床になっているとか、政治献金の見返りに便宜を図らせているとか。黒い噂が絶えないライオンハートだから、そういう陰謀論が出てきても不思議じゃありませんけど」
「でき、その肝心なセシリアはどうしたの。最近、全然見ないけど」
今更ながらセシリアがいないことに気づいた鈴が、あたりを見回す。

「なんだか、アリーナで特訓しているらしいぞ」
「はあ、特訓んく？」

学園が壊滅的被害を受けて、師も走る忙しいこの時に、訓練に勤んでいる場合か。

そんな風に言いたそうな口ぶりだった。

（確かに特訓は大事だけど、今やらなければならぬ理由があるんでしょうか）

私は茶菓子を口に含みながら、第一アリーナの方角を見つめた。

♡

♣

◇

♠

被害を逃れた第一アリーナ。セシリアは拡張現実に現れたターゲットに照準カーソルを重ねた。

AR上に表示されているターゲットは全部で二つ。セシリアはそのひとつを射抜いてみせた。さらにそこから意識を集中して、イメージを蒼い銃弾に込める。

（まがれ！）

だが、BTレーザーは屈折することなく、アリーナの遮断シールドに当たり四散した。

↑ Mission Fails ↓

何も起こらなかつた現実に落胆するセシリア。無理を言つてア

リーナを使わせもらうこと既に2時間。いまだ成功の兆しが見えず、今日も今日とてフレキシブル習得に暗雲が立ち込めていた。

「まだですわ」

それでも、金髪をふり乱して自分を奮い立たせる。

第一アリーナのARトレーニングシステムにアクセスして、次のメニューを準備する。

〈ARモード：ミッションセレクト↓射撃トレーニング（ユーザーセッティング）〉

【セッティングモード】

〈ターゲット数：2（非動体）〉

〈クリア条件：ターゲットの全破壊。終了条件：残弾数が尽きる〉

〈機体コンディション：残弾設定【残弾数1】〉

〈挑戦回数：1082回 達成パーセント0.00%〉

〈Start OK?〉

セシリアは実行ボタンをタップし、《スターライトMk-IV》を構えた。

拡張現実に表示された二つのターゲットを一撃で打ち抜くこと。それがこのトレーニングの達成条件である。通常の銃器ならば達成不可能なこの条件も、レーザーを偏光させるフレキシブルを用いれば不可能じゃない。

セシリアは今一度射撃ターゲットを見据え、一度大きく深呼吸してグリップを握り直した。

まずひとつめのターゲットを打ち抜く。そして問題のフレキシブル。

（既成概念は捨てなさい、セシリア・オルコット。これは曲げられるの）

再度、意識を集中して、雫のような変幻自在のイメージを膨らませる。

それを蒼い銃弾に込める感覚でセシリアは念じた。

（お願い、曲がってッ）

しかし、突き進むレーザーに変化は現れず、アリーナの遮断シール

ドに当たって四散した。

まるでドラッグマシンのように直進するだけで、曲がる気配など微塵も感じさせなかった。

「くう……ッ」

セシリアの心境を代弁するように、《スターライトMk-IV》の銃口が項垂れて地面につく。

それでもなお気力を振り絞って、武器を構え直した。やめるわけにはいかなかった。彼女には時間がなかった。IS学園の休校につき、生徒たちに一時帰国の命令がくだされたからだ。帰国までに、なんとか“成果”を持って帰りたいかった。

(……………次、とにかく次ですわ、次こそ……………)

続けねばきつと。そんな使い古された言葉にすがって、実行ボタンを押す。疲労はピークに差し掛かっていたけれど、それでも心身に鞭を打ってトレーニングを再開する。

そんなとき、アリーナ内にアナウンスが流れた。

『オルコット、そろそろ時間だ。切り上げろ』

声の主は千冬だった。

「織斑先生、あと一時間、いえ30分だけでも」

『それは許可できない。残念だろうがタイムアップだ。ピットに戻れ』

使用時間の延長を申しでも、千冬は一蹴した。

先月の攻撃で多大な被害をこうむったIS学園は、安全面から施設の利用を最低限に抑えている。アリーナも本来は使用が禁止されている。それを、無理を言って使わせてもらっていた手前、セシリアも指示に従わざるを得なかった。

「……………わかりましたわ。戻ります」

セシリアは重たい身体を浮かせて、ピットへの帰投を開始した。その背に淀んだ黒い影をまとわせながら。



アリーナ・待合室。訓練を終えたセシリアは、ベンチに座り、膝を抱えた。そして、〈ブルー・ティアーズ〉のコンソールを開き、訓練結果を表示する。

トレーニング挑戦回数1084回。達成率津0.00%。BT稼働平均率13.7%。

この結果を開発部に報告しないとイケないのか。そう思うと気が重くてしかたなかった。

「わたくしは一体どういう顔でイギリスに戻ればよろしいのかしら……」

推してくれたローズマリーは「自分のペースでやればいい」と言ってくれているものの、開発部にはかなりせつつかれていた。欧州の統合防衛計画「ヘイグニツション・プラン」の次期主力機を決めるコンペの第二次審査がそこまで近づいているからだ。

もともと〈ブルー・ティアーズ〉は先進技術実証機。BTレーザーを始め、ビットの潜在能力を実証するために開発された機体。〈ブルー・ティアーズ〉が叩き出したデータはそのコンペに於いて重要な指標にされる。つまり、自分の頑張りがコンペの選考を左右する。

自分のせいで契約会社スポンサーのビジネスチャンスを潰してしまうかもしれない。

そんな重圧と焦燥がセシリアをより追い詰めていた。

「なんとしても、フレキシブルを成功させなくては……」
けれど、どうやって。

トレーニング回数1000回を超えて成功率はまだまだゼロという事実。さすがに機体の調整を疑いたくなるが、7月にロリーナ、10月にロキの調整を受けている。二人の技術は折り紙つき。機体の所為とは思えない。

(やはりわたくしに問題があるのかしら……)

だとしても適正値だけでいえば「A」を叩きだしているセシリアだ。見込みがないはずじゃない。そこで改めて、自分が選ばれた理由を考えてみる。もし選ばれた理由が自身の〈精霊の触覚〉に起因している

のであれば、いま自分に足りていないのは、それに類する超常的な感覚じゃないだろうか。

「だとしたら、やはり簪さんの〈エーテリオン〉を手に入れるしかないのかしら」

何もかもが手さぐりで、何もかもがわからない現状。すこしでも問題解決のきっかけを欲したセシリアが求めたもの。それは以前手に入れそこなつた簪のアイテム〈エーテリオン〉だった。

その実態がただのビー玉だったとしても、今の彼女にはもうそれぐらいしかすがるものがなかった。バカな事だと笑うことなかれ。溺れる者は藁をもつかむのだ。

第102話 賽は投げられた

「見送りはここまでのいいよ。ありがとな、みんな」

お茶をしたあと、私たちは一夏と箒を見送るため、モノレール乗りの改札口前を訪れていた。

一夏と箒が乗るモノレールは13時00分発。現時刻は12時50分。私たちは残りの時間を使って、別れを惜しんだ。

「うん、今度はクリスマススイブに」

「それまで達者でな」

「元気でやんなさいよ、二人とも」

「うむ、おまえたちもな。おまえたちと共に過ごさせて楽しかった。みんな、いままでありがとう」

いつは仏頂面の箒も、いまだけしんみりした表情だった。

いろんな別れを経験してきた彼女だが、こればかりは慣れないものらしい。

「どうしちゃったのよ、箒。今生の別れみたいに。ちよつとの辛抱じゃない」

湿気った空気が嫌いな鈴が、バシツと箒の背を叩く。

ラウラも二度頷いて、

「そうだ。重く考えることもない。生き残ってさえいれば、また直ぐに会える。死ぬなよ、箒」

「だから、重いつつうの！　まるで一夏たちが出兵するみたいじゃない。縁起でもない」

「まあ、別れは終わりじゃない、また会うためにするものって言いたいんだよ、ラウラは」

いつもやりとり。箒はこぼれそうになる涙をぬぐい、微笑をみせた。

一夏はそんな幼馴染の肩を叩き、見守っていた私へ向き合った。

「アリス、おまえには本当に世話になった。へIS学園へって場所で、いままでやってこられたのは、他らなぬおまえがいてくれたおかげだ。おまえと出会えたからこそ、俺は男として成長できたと思う。ありが

とな」

そう言つて、右手を差し出す。私も手を差し出す。握つた彼の手は節袋し、皮も厚かつた。男らしく逞しい手。努力の賜物だった。顔つきも入学当初より精悍になつたと思う。でも、それが私のおかげだなんて、思わなかつた。

「いいえ、私は何もしていませんよ。さまざまな出来事があなたを成長させたこと、それは揺るぎない事実でしょう。けど、乗り越えられたのは、あなたの中に情熱があつたからです。その情熱を、これからも失わないでください」

正義感が強く、曲がつたことが嫌い。それが彼の魅力であるが、世界の不条理に憤ることも多かつた。それでも実直に現実と向き合い、乗り越えていく芯の強さが、彼にはある。

(けど、そういられたのは、おまえが背中を押してくれたからなんだぜ……)

一夏はしばらく結んだ手を離さなかつた。不思議に思つた私は首をひねつた。

「どうしました?」

「え? あ、いや、なんでもないぜ。でも、いつかちゃんと礼をさせてくれ」

「じゃあ、次に会つたとき、その料理の腕前を私に振るつてください」
「ああ。腕を磨いておくよ。だから、また会おうぜ、必ず。みんなもな」

一夏は下していた荷物を持ち上げた。時刻は12時59分になろうとしていた。

一夏と箒が手を振りながら改札を潜つていく。私たちも手を振りながら、二人を見送つた。

「行つたな」

「じゃあ、あたしたちも戻りましょうか。あたしも荷造りしないといけないし」

「ふむ、では、なんだ、私が手伝つてやろうか?」

犬猿の仲のラウラが手伝いを申し出て、鈴は怪訝そうにした。

「……なに、いきなり、どういう風の吹き回しよ、ラウラ」

「ふふ、ケンカ仲間がいなくなるのが、さいびしいんだよね、ラウラは」
「おまえはさっさと国に帰っていいぞ」

ムスつと言いつつ放ったラウラの一言に、「ひどいッ」と悲鳴を上げるシャルロット。

「身の回りのお世話をあんなにしてあげたのに、なんでそういうこと
いふかなあー！」

「頼んだ覚えがないからだ」

「あ、そういうこというんだ！——ちよつとエリー聞いてよ。ラウ
ラだったらひどいんだよ、ってあれ、どうしたのエリー」

モノレール乗り場の入口を眺めていた私に、シャルロットが言っ
た。

「いえ、セシリア、最後まで見送りにこなかったなあと思ひまして」
「あ、ほんとよね」

あのセシリアが一夏の見送りにさえこないなんて、よほど訓練に熱
心なのか。

根を詰めすぎていなければいいんだけど……。

そう心配していると、ケータイの着信が鳴った。発信相手はロリー
ナだった。

「どうしました」

『いま時間あるかしら』

「ええ、まあ」

『よかったわ。それなら、整備科第七格納庫に来てもらえる。見せて
たいものがあるの』

見せたいものとはなんだろう。

セシリアの事も気にはなっただけど、私は「わかりました」と答えた。

——モノレール・プラットホーム

「よかったのか？ 彼女に何も告げないで」

「なんだよ。別れならちゃんとしただろ？」

「そうじゃない。アリスにちゃんと気持ちを伝えなくてよかったのか
と言っているんだ」

「な、なんのことだよ」

「まあいい。な、一夏、私は大事な人と離れる辛さを知っている。そして、その別れが前ぶれなく訪れることも、な。だから、後悔のないように、いま、この機会を大事にした方がいい」

「でも、また会えるだろ？ おまえとまた出会えたようにさ」

「一夏、おまえと再会できたこと、私は奇跡だと思っている」

「そりゃ、俺がISを動かさなければ会うこともなかったかもしれないけど」

「出会いや再会とはそういうものなんだ。次があるとは限らない。お節介かもしれないし、おまえの都合もあるだろう。けど、言っておきたかったんだ」

「そっか、わかった。次の会う時までには、どうするか考えておくよ」

整備科第7格納庫。一夏たちを見送ったあと、ロリーナに見せたいものがあると呼ばれ、私はラウラとシヤルを連れ、ココへ訪れた。第7格納庫は屋外にあり、ヘリや消防車、電源車が置かれた場所だ。そこで私たちが目撃したものは、4機のダブルローターヘリだった。機体下腹部には巨大な金属製のパーツをぶら下げている。

「これは……」

ワイヤーで吊るされた無機質な金属製の物体は、一見して装甲車にも見えた。しかしながら、それには「足」が生えていた。まるで月光アウイングのような二足歩行型の装甲車、いや戦車といえるそれは、ヘリの降下と共にがっしりした脚で地面を踏みしめた。

「メタルギア？」

まるで怪獣のような金属の物体を見上げて、ラウラが言った。

メタルギア。兵士と兵器を繋ぐ金属の歯車として生み出された新たな兵器。一カ月ほどまえへキャノンボール・ファストの会場付近で現れた巨大兵器と同じカテゴリーの兵器だ。

しかし、眼前のメタルギアはへキャノンボール・ファストで目撃したメタルギアよりも無骨で重厚に見えた。

「これはメタルギアレックスREXよ」

背後から聞こえた声に振りかえると、ロリーナと簪が立っていた。
「メタルギアREX？」

「あなたが目撃したRAYとは違う系列のメタルギアよ。TMDとして日本が開発したの」

TMD。サード・ミサイル・ディフェンダー。新型ミサイル防衛構想のことだ。

「このREXは右部のレドームで弾道ミサイルを補足し、二足歩行であらゆる地形を走破しながら、迎撃ポイントに向かうわ。到着後、装備されたパトリオットミサイルで、弾道ミサイルを撃ち落とすの」

「もしや、このREXは単独でミサイルを迎撃するのか」

ロリーナが「ええ」と答える。ラウラは目を見開いてREXを見上げた。

ミサイル防衛の要ともいわれる高射隊フウは複数基のミサイル発射機と、射撃管制装置、レーダー装置、電源車両。そしてそれらを動かす40人規模の隊員で構成される。そのすべてをたった一機で担うといのだから、ラウラが驚かないはずがない。

「まさに脚の生えたイージス艦だね。で、なんでこんなものがIS学園に？」

「……このREXを借り受けることが、わたしに手を貸してくれた条件だったみたい」

と簪が顔を出す。ロリーナはふふつと笑った。

「だとしても、よく日本政府が承諾しましたね……」

国際平和を国是にする日本は、武器の取り扱いに厳しい国家。

よく武器の付与なんて受けられたものだ。

「それだけ国産第三世代の開発発が急務だったのよ」

アメリカ製を購入・運用すればアフターケアもアメリカに依存してしまう。「独自の防衛」へ舵を切った日本政府は、それだけその依存を嫌ったってことか。

「それで、誰が乗るんです?」

REXは有人機だ。誰かが乗って操縦しないといけない。

そう言った私に、ロリーナが「はい」と操縦マニュアルを渡す。

「え?」

私は自分を指さした。もしかして私が乗れど?

「大丈夫よ。REXの操縦はほとんどセミオート化されているから難しくないわ」

「そうですね?」と操縦マニュアルをパラパラ捲る。

確かに記載されていたコクピットのレイアウトは意外にもコンパクトだった。操縦桿が二本と、フットパネルに、コンソールとモニター。いかにもな操縦室に「ロボットのコクピットみたい」って思っ
て読み込んでいると、そこへ新たな人物が入ってきた。

「ようやく見つけましたわよ、更識簪」

急かされるように現れたのはセシリアだった。

セシリアはREXに目もくれず、つかつかと簪の前に歩み寄った。

「もう一度、わたくしとへエーテリオンを賭けて戦いなさい」

「どうやら、ここにやってきた理由は簪に再戦を申し込むためらしい。」

先月、へフレキシブルの習得に苦戦するセシリアは、簪が持つアイテムへエーテリオン——実際はただのビー玉——に目を付け、それを賭けた決闘を簪に持ちかけた。結果は簪の勝利に終わり、セシリア

はへエーテリオンを手に入れ損なったのだが、まだ諦めていないらしい。

「……いやだから。……あれはただのビー玉で。……手に入れたってなんにも……」

「またそんなことを言って逃げる気ですわね」

「……そ、そうじゃなくて……」

まったく聞く耳を持たないセシリアに、うつすら涙を浮かべる簪。

そんなやり取りを見ていられなくなった私は、簪を庇うように背後へ隠した。

「そこまでですよ、セシリア。バカなまねはやめなさい。簪が困っています」

セシリアは眉間に険呑なしわを作り、私を睨んだ。

「バカなまねですって？ わたくしが必死にへフレキシブルを得しようとかんばっているのに、あなたはそれをバカな真似とおっしゃるの？」

「バカなマネですよ。ビー玉なんかにすがって。喧嘩を吹っかけられる簪の身にもなってみなさい。これ以上、簪に突つかかるなら、私が相手になりますよ」

前の模擬戦で「あとはまかせとけ」と簪の背中を押しした手前、私には事態を収める責任がある。それに、私が矛を向ければ、セシリアは矛を下すと思っていた。だが、返ってきた反応は、私の意図しないものだった。

「——またですよのね」

セシリアは視線を落としていた。握られた拳はギリリつと鳴っている。

私はその意図を汲めず眉をひそめると、セシリアは俯いたまま言った。

「また、他の人の味方をするんですのね……。あなたって、いつもそう。シャルロットさんや簪さんの味方ばかり。あなたはわたくしのことなんかこれっぽっちも気にかけてくれない……」

予想しなかった言葉が返ってきて、私は思わず怯む。

何とか「そんなことは……」と取り繕っても、セシリアの溜飲は下がらなかった。

「うそですわ。わたくしがどんな気持ちで悩んでいるか分かりますともしていないから、バカなことなんて言えますのよ。それとも、わたくしがヘフレキシブルを習得できず、苦勞していることを知らなかったとでもいうの？」

「それは……」

「——もういいです。興が反れましたわ。決闘はまたいずれ。次までに覚悟をきめておいてくださいませ、更識簪」

言つて踵を返すセシリアの背に、反論のすべがなかった私はただ俯くしかなかった。

セシリアの気持ちを無碍にし、軽率な発言をしてしまったのは事実だ。

「……アリス、ごめん。わたしのために」

心を痛めるように言つた簪に、私は首を左右に振るう。

「いえ、あなたは悪くありませんよ。彼女が激昂したのは私のせいです」

確かにセシリアの行いは馬鹿げている。けれど、そんなことをしなければならぬほど追いつめられているセシリアの心情を察してやれなかった、その無神経さが問題だったのだ。

「でも、あんなに怒らなくていいのにな」

「ああ、事実、彼女のやっていることは、バカげている」

「それだけじゃなかったんですよ」

〈エーテリオン〉のことだけじゃない。自分に味方しなかった私に、腹が立ったのだらう。もっと自分のことを考えて欲しい。セシリアはそのサインを出していたのに……。私は全然セシリア・ファーストじゃなかった。

「……じゃあ、仲直りしにいこう？」

「そうですね、このまま24日は迎えたくありませんし」

首を傾げて訊く簪にそう答える。そしてすこし考えてからこう言つた。

「でも、そのままにちよつと寄り道していこうと思います」

♡

♣

◇

♠

と、私たちが向かった先は、幸いにも崩壊を逃れた整備区画だ。

ここではロキがインカムで誰かと会話しながら、何かのパラメーターをチェックしていた。目視するモニターの画面には、光圧センサーで見られるドーム状の罫線グラフが映し出されている。重力波をモニタリングしているようだった。

「ロキ、ちよつといいですか」

もともとBTレーザーは〈亡国機業〉で生み出された技術。ロキなら役に立つ情報を持っているのではないか。そう思って訪れたのだ。

「アリーシャ、すこし場を離れる」とやってきたロキに、私は事情を説明した。

「〈ブルー・ティアーズ〉について聞きたいことがあるんです。実はセシリアが偏光射撃の習得に悪戦してまして、あなたから習得の助言をいただけないかと」

「それはかまわないが。——場所はここでもいいか」

「はい」

ロキが置いてあった作業机とパイプ椅子を引っ張ってくる。

用意された椅子に私と簪は腰掛けた。

「まずBTレーザーについてどこまで知識がある？」

「〈ブルー・ティアーズ〉っていうレーザー媒質を用いた固体レーザーの一種で、特殊な脳波で屈折するってことぐらいは」

「よし。じゃあ次は『波』の性質について知っているか」

「波の性質？」

「……電波や光波、津波といった『波』は『波』と干渉すると増幅される性質を持つ。……これが波の性質。……レーザーも波の一種であるから、同じ現象が生じる」

「さすがだ、更識簪。ただし、BTレーザーが画期的だと言われる理由

には、この増幅効果に加え、特定の周波帯の脳波を受けることで性質が変化するからだ。この特性を利用したものが〈フレキシブル〉だ」
「で、『特定の脳波』って、どんな脳波なんです」
「 α 波と θ 波の境で生じる脳波、いわゆる『宇宙意識』というやつだ。具体的な数値でいえば7・8 Hzの脳波がそれに該当する。これは奇跡の周波とも云われ、こんな研究結果も出ている」
ロキは空中をタップし、自身のクラウドからいくつか資料を表示させた。

資料はロシア語で書かれていて、私には読めなかった。

「これは何です」

「ロシアの超能力に関する研究ファイルだ」

ロシアが犯罪捜査や諜報の分野で『超能力』を活用している話は聞いたことがあるけど。

「超能力者がその能力を発揮するとき、この脳波が検出されることが研究で分かっている。このファイルには超能力を開花させるための訓練メニューも記載されている。内容は誰にでもできる簡単なものだ」

そうやって『スプーン』を取り出す。私と簪はまさかと思う。

「……もしかしてスプーン曲げの練習をしろと……？」

「そうだ、スプーンを曲げられたら、レーザーも曲げられる」

ロキはふざけたようすもなくそう言った。

私は不安な表情をした。ナーバスになっているいまのセシリアに「スプーン曲げで〈フレキシブル〉を習得できる」なんて言ったところで、反感を買うだけじゃなからうか。バカにしておりますのと云われのが目に見える。いや、〈エーテリオン〉も大概だけど。

「なんていうか、他にもっと違う方法ってありません？」

「これが習得への近道だが……そういうなら、あれをやろう」

「ちよつと待っている」とロキがまた場を離れる。ややして帰ってきた彼が持っていた物は奇怪なヘッドセット。ドーム状のフレームに、コードが複雑に絡んだ、怪しい装置だ。

「こいつは特定の脳波を検知し、増幅する装置だ。ISのマインドイ

ンターフェースと併用もできる。〈ヘル〉に装備したヤツの試作品ではあるが、動作は保障する」

〈ヘル〉。スコール・ミューゼルの専用機だ。彼女もまた自然発火バイロキネシスという超能力を持つ。それを発揮するときにも、同じ脳波が検出されるのだろう。ロキが譲ってくれたのは、その制御装置か。

「それはすごく助かりますけど……」

私はその装置を眺めて、不満な顔を見せた。何が不満かって、そのデザインだ。試作品とあってコードがむき出で、なんだかどつかの研究所が人体実験とかに使っていいそうだった。

「……可愛くない……」
「ね」

不細工かつ無骨なデザインに、私と簪は口をそろえる。

ロキは「可愛くないといわれてもな……」と自分の発明品をしげしげ眺めた。

「だが、ちゃんと動作はするぞ」

「でも、かわいくないですよ……」

乙女にとって見た目の可愛さは重要なのである。

「じゃあ、俺にどうしろというんだ」

「可愛くしてください」

「……カツコイイでも可」

ロキは露骨にめどくさそうな顔をした。

目は「まったく女ってヤツは……」とでも言いたげだ。

「こっちは防御システムの調整で手いっぱいだ。これで我慢しろ」

「……わたし知っている。……〈ナルヴィ〉に〈ゴレム〉ってコードネームがつけられたとき、『じゃあ、もつとスマートにすればいいんだろ』って、〈ナルヴィII〉を小型化した」

「……なぜ知っているんだ……」

「ソフィアさんに聞いた。……ロキはデザインにもこだわりがある人。こうまで言われて黙っているの?」

普段の簪らしからぬ、断言した口調。おまえはそれでいいのか?と、上からのな。

ロキは肺が空になるような深いため息をついた。

「……………わかった……。ただし期待はするな」

なんだかんだ言っていてやってくれるらしい。実は気のいい男である。

「ほら寄こせ」と言ったロキに、私はニコニコしながら装置を手渡した。——そのとき、

突如、室内を大きな揺れが襲った。

地震かと思いきや、違う。何か強い衝撃波に揺さぶられるような、そんな振動だった。

なにより、ロキの見ていた重力波計測機のパラメーターが激しく変動していた。

「来たか」

何事かと警戒する私をさしおいて、ロキは天井を見上げていた。

そう、まるでこれを予見していたように。

私に理解できたことは、新たな戦いの火口が切られたということだけだった。

第103話 オペレーション・ソードブレイカー

IS学園が攻撃を受けた報告は、すぐに千春の許にも届いた。

千春が報告を受けたのはアメリカの国防総省と交渉を終えてすぐのことだった。

待機させていた車に乗り込むと、秘書が「IS学園が攻撃されたこと」を小さい声で彼女に伝えた。

「わかったわ。話は移動しながら聞きます。——出して」

走り出した車内で秘書は説明を始めた。

「10分ほど前、IS学園が何者かに攻撃を受けたそうです。正確な攻撃手段は不明。IS学園のはるか上空から光がさしてきたという報告があります」

「おそらく例の攻撃衛星によるものね」

開示された中空モニターの映像には校舎の方角に巨大な光の柱が降り注ぐ光景が映し出されていた。

千春は「まるで神罰の光だわ」と思った。愚かな人間に憤怒した神が下した滅びの光。そう思えるほど強烈で鮮明な光が学園に降り注ぎ、周囲が陽炎のように霞んでいた。次いで、激しい衝撃波が定点カメラを遅い、ザザツと映像が途切れる。

「被害は？」

まだIS学園には作業員や一部の生徒が残っていたはずだった。

「いまのところ調査中です。ですが、息女さまと息子さまはご無事です」

「そう。よかったわ。それにしても、いつも後手ね。いやになるわ」

「心情お察しします。ですが——」

「ええ、分かっているわ。気に病むのはやめましょう。憂うためにこんな組織を作ったわけじゃないのだから」

全てを収束する者としてデウス・エクス・マキナ都合主義の神様を名乗ろうとも、自分たちは本物の神ではない。すべての事に備えるなど不可能だと判り切っている。

「いまは私たちができることをします。各部に伝達。〈作戦部〉と〈I

S学園は〈亡国機業〉と協力して〈アフタヌーン・ブルー〉の建造を。現場の指揮は千冬に執らせます。ロリーナにはREXの準備をさせて。〈情報部〉には引き続き、EUの監視を」

最後に千春は「やられたからにはやりかえすわ」と強い言葉で、命令を括った。

♡

◆

♡

謎の攻撃を受けたIS学園。ロリーナたちがいた第七格納庫は、幸い損害が少なかった。ロリーナとシャルロット、ラウラにも傷は見当たらず、体も不自由なく動いた。それがわかるとラウラは意識を警戒モードにして、行動を開始した。

「ロリーナ・リデルはここにいてくれ。私はしゃうロットと外の様子を見てくる」

「いえ、私も行くわ。現状を確かめないと」

ラウラは「わかった」と告げ、ロリーナたちと地上をめざし始めた。

その渦中、ラウラはすべきことを頭で整理していく。まずは仲間の安否確認と状況の把握。可能なら救助の要請――。

(なのだが――)

襲撃だったら、敵がそこにいるかもしれない。

「シャルロット、ISの準備をしておけ」

「うん」

ラウラはシャルロットに背中を預けながら、外の様子を伺う。

整備区画の外では浸るところで火の手が上がっていた。しかし、予想していたほど凄惨な光景でもなかった。建物も崩壊を逃れ、形を残している。

だからといって安心はしてられない。

ラウラは周囲に気を配った。そのラウラの耳にキーンと甲高い音が聞こえてくる。

音の正体は〈赤騎士〉の推進装置だった。

「エリート！」

やってきたアリスへ、シャルは飛び込んだ。

「よかった。無事だったんだね！」

「ええ、簪とロキも無事です。シャルも怪我がないように安心してました」

友人の安否を確認できて、アリスもまた心から安堵したようだった。

「ラウラとロリーナさんも一緒だよ」

ふたりに目を向ける。怪我ひとつないようすで、アリスはひとまず胸を撫で下ろす。

だが、安心はできない。この惨状をもたらした敵がまだいるはずだった。

「しかし敵の気配が感じられないな」

もしここを制圧する気なら、敵は攻撃直後の混乱に乗じているはず。

そもそも、これだけの熱量を放つには大掛かりな装置が必要となるはず。それさえ見当たらないとは……。

「どういうことだ」

ラウラは燃えた学園を一望し、畏怖の念が籠った声音でそうつぶやいた。

「おそらく〈エクスカリバー〉の攻撃によるものだからだ」

ラウラは〈打鉄式式〉と共にやってきたロキに視線を向けた。

「エクスカリバー？」

「EUが極秘開発していた攻撃衛星のコードネームだ」

「EU？ なぜEUの攻撃衛星がIS学園を攻撃する」

「もうEUの手に無いからだ」

では誰の手にあるのか。誰も問わなかった。わかり切ったことだった。

「まるで、こうなることを知っていたような口ぶりだな、ロキ」

「アリーシャからリンクを受けていたからな」

「ならなぜ止められなかったの。その存在を知っていながら」

「存在を知っていても、いつどこを通るか、その軌道周期まではわからなかった。位置が判らなければ撃ち落とすことはできない。俺達にできたのは、攻撃に備えることと、反撃の準備をしておくことだけだった」

「備える……?」

「<テンペスタ・バル>で攻撃を受け止めることさ」

声と共に黒いISが降りてくる。重厚でありながら、流動体的なシルエット。<テンペスタII>、あらためへテンペスタ・バルだ。操縦者アリーシャ・ジョゼスターフは大粒の汗を浮かべ、どこか疲弊した様子だった。

「でも、予想以上の威力だったのサ。《暴食の腕》と《単一仕様能力》を使ってこの有様なサね」

アリーシャが右手を見せる。二の腕から先はなく、コードだけが垂れていた。

<テンペスタ・バル>が装備していた武装腕は、エネルギーを吸収する機能を持つ。へエクスカリバーの攻撃を受けながらも、被害がこの程度に留まったのは、<テンペスタ・バル>がエネルギーを吸収したからか。

「<レヴィアタン>の罪滅ぼしはしたサね」

アリーシャは、ISを解除してフラフラつとロキに身を預けた。そして、そのまま力尽きたように目を閉じる。都市を焼き払うほどの熱量を、一人で受け止めたのだ。機体も操縦者も反動で限界だったのだろう。

「よくやってくれた、あとは任せろ、アリーシャ」

「ふふ、そこはアールイって呼んでなのさ」

それつきり、彼女はしゃべらなくなった。

「アリーシャのおかげでへエクスカリバーの場所を特定できる。いくぞ」

ロキはアリーシャをお姫様だっこして、移動にかかった。

だが、アリスたちといえば、一連のやり取りについてコソコソ話し始めた。

「ロキってば、アリーシャさんが『アリーイって呼んで』って言ったのに、呼ばなかったね」

「ローズマリーのことも、ローズマリーですよ」

「ふむ、照れているのか？ 意外とシャイな奴だな」

「あらあら、かわいいところあるのね」

ロキは振り返って「おまえら、うるさいぞ」と不満そうにそう告げた。

♡

◆

♣

♠

私たちがやってきた場所は第二アリーナの前だった。

負傷した人たちも何人かいるようで手当を受けている。その中には、セシリアと鈴の姿もあった。二人とも無事なようだった。だが、セシリアは私を見つけるなり、視線をそらした。先の出来事がまだ尾を曳いている感じだった。

「どうしたの、あんたたち」

鈴が私とセシリアを交互に見やる。

私が「なんでもありません」と告げると、千冬さんが「おまえたち、こい」と言った。

「行きましょう」

鈴たちと併設された簡易のテントに入る。

私は一番前の席に座った。隣に鈴、シャル、ラウラが並ぶ。セシリアは一番うしろの席に座っていた。露骨に距離を置かれているが、私は深く考えないようにする。

「そろったようだな。では、傾注しろ——」

千冬さんが有機ELのペーパースクリーンの前で説明を開始した。「時間がないため手短にします。さきほど我々はEUが極秘開発していた攻撃衛星より攻撃を受けた。だが、これがEU軍による攻撃ではないことは、君たちも既に理解できているだろう。例に及ばず、連中のしわざだ。我々はこれより連中が奪ったこの衛星兵器の破壊を行

う。それにあたってまず、ロキにへクスカリバーについて説明を
してもらおう」

千冬さんに代わってロキがペーパースクリーン前に立つ。

映像は衛星兵器の攻撃シーンに切り替わった。神々しい光柱がI
S学園に降り注ぐシーンは、IS学園の対岸にある定点カメラで撮影
されたものだろう。初めて攻撃の様子を目の当たりにした私は「まる
でデススターだ」と思った。

「この攻撃衛星へクスカリバーは衛星軌道上から指向性エネルギー
兵器——真空状態のエネルギー位相を用いた相転移砲で、地上の目標
を破壊する兵器だ。非常に威力の高い、おそろしい兵器であること
は、この場にいるすべての人間が経験済みだろう。だが、高高度から
の攻撃ゆえ莫大なエネルギーを消費するため、連射はできないと考え
られる」

「次射までどれぐらい時間がある?」

トラウラ。

「映像解析とここが受けた被害、そして距離から攻撃に必要なエネル
ギーを逆算し、それを太陽光発電システムなら何時間でまかなえる
か。算出した結果——」

一同は静かに耳を傾ける。

「早くて24時間だ」

24時間。

相手がこの地球上にいないことを考えれば、そんなに長い時間とは
言えなかった。

「それで、どうやって破壊を？」

破壊目標は遙か2000キロの彼方。通常兵器では手も足も出な
い。

「へクスカリバー同様指向性エネルギー兵器を以て、地上からへエ
クスカリバーを破壊する。その要となるのがブルー・ティアーズ
」。そして、セシリア・オルコット。キミだ」

みんなの視線がセシリアに集まる。

注目されることが好きなセシリアだったが、こればかりは驚いてい

た。

「わたくし?」

「そうだ。BTレーザーと君の狙撃力をもって、地球上から〈エクスカリバー〉を撃ち落とす」

「わたくしに人工衛星を狙撃しろ?! 待ってくださいな。〈ブルー・ティアーズ〉にそこまでの能力はありませんわ!」

「承知している。そこで実行可能な〈パッケージ〉を手配した。長距離望遠システム。環境コンピューター、弾道制御ソフト。超高高度狙撃砲をコンボジットしたパッケージ〈ヘアタヌーンブルー〉だ」

「準備がよろしいようで……」

ま、事前にそうなることを知っていたのだから、準備が進んでいて当然か。

「ああ、準備はできている。あとはキミがやるかやらないか、だ」

「やるか、やらないかだなんて、やる以外に選択肢なんてありません?」

わたくし以外にできる人なんておられないのですよ?」

「ああ、キミの狙撃における技能は、この誰よりも超越している。この作戦を成功させられる人間は君を置いて他にいない」

彼女の狙撃術は、私やラウラですら遠く及ばない次元に達している。機械の補佐を得ても、だ。

酷だが、セシリアがやらなければ、誰もこのIS学園を守れない。

セシリアは測りしれない重圧を感じながらも、やらないとは云わなかった。

「わたくしは期待されることが嫌いじゃありませんわ。わかりました。やります」

♡

♣

◇

♠

ブリーフィング終了後。各自が分担された作業に勤しむ最中、〈ブルー・ティアーズ〉の調整が行われている二番ハンガーに向かった。

セシリアとの関係がぎくしゃくしたままだったからだ。

できるなら、作戦まえに仲直りして、気持ちよく作戦に取り掛かってもらいたい。その意気で私はセシリアの許におもむいた。

「セシリア、ちよつといいですか」

「何かしら」

セシリアはコンソールに視線をやったまま、私と目を合わせようともしなかった。

完全に拒絶されている。私は切なくなる気持ちをごらえながら続けた。

「さっきのことですが、本当にごめんなさい。軽率なことを言いました。これからはもっとあなたのことを大事します」

「別にいいですよ。気にしておりませんわ」

ちゃんと誠意をこめたつもりだった。けれど、返ってきた言葉は愛想の欠いた言葉だった。

そして、やっぱり私の顔を見ようとしめない。

さすがにその対応はあんまりだから、私は声を荒げた。

「セシリア、ちゃんとこちらを向いてちゃんと私の話を——」

「もうよろしいですよ。気にしていないと言ったのが聞こえなかったのかしら。もう怒っておりませんから、ちよつと静かになさって。わたくしはいまデリーケートな作戦を控えておりますのよ」

こう言われたら、私は固まって何も言えなくなる。

セシリアの言うとおり、私の所為で心を掻き乱し、作戦が失敗してしまつたら元も子もない。「やはり実物を見てみないことには……」「データだけで感覚を掴むのは難しいすわね」と、私の事を忘れたように機体チェックを行うセシリアに「邪魔しました」と告げ、私は場を去る。

「はああ……」

なんだか肩がずつしりと重かった。気持ちちがモヤモヤした。セシリアの態度に苛立ちが募り、思わず近場のゴミ箱にあたってしまふ。散らかったゴミ屑を見て自己嫌悪に陥っていると声が聞こえてきた。

「あらあら、荒れているわね」

「ロリーナ？ どうしたんですか、こんなところで」

確かロリーナはREXの調整に当たっていたはずだけど。

「あなたにこれを渡すの、忘れていてね」

ロリーナが取り出したものは、紙の束だった。一枚目の表題には「エデンプロジェクト」と記されている。私はスコールに「楽園計画」の資料を寄こすよう伝えていたことを、思い出した。

「ありがとうございます。でも、いまじゃなくても」

今回の作戦で、この資料が必要になるわけじゃない。忙しいのだから、受け渡しなんて作戦が終わったあとでもいいだろうに。——そう内心で愚痴ってしまうあたり、私は相当にイラついている。

「これはついでの。実はあなたに特命を伝えに来たわ」

「特命？」

「いまイギリスでは「アフタヌーン・ブルー」の積み込み作業が行われているわ。並行して“あるもの”を受け取る手筈になっているんだけど、その受け取りに立ち会ってもらいたい」

「それ、私じゃなければいけませんか？」

現地の要員に任せれば済む話だと思うのだけど。

「実はその受渡人があなたを指名してきているの。ぜひあなたと会って、話したい人がいるんですって」

「私と話を？」

名指しなんて誰だろうか。思いつかないが、向こうが私を指名しているなら、仕方ない。

私は「わかりました」と了承した。

「で、現地にいつてどうすれば？」

「現地の要員に『ジェーン・ドウに会いに来た』と告げればいそようよ」
ジェーン・ドウか。

検索にかけても該当するようなものは出てこなかった。ま、会ってみればわかるでしょう。

「わかりました」

私が特命を了承すると、セシリアがこちらにやってきた

「ちよつとよろしいかしら」

セシリアは私を一瞥することなく「ロリーナさま、ちよつとお時間

頂けまして」と続けた。

私に用があつてわけじゃないようだ。

「大丈夫よ。何かしら？」

「一足先にイギリスへ出向かせていただけませんか？ やはりデータだけでは感覚をつかみきれませんの。いち早く装備をモノにするためにも、実物の装置をこの手で触ってみたいのですわ」

ロリーナは人指し指を唇にあてて考えた。

「そうね。わかったわ。連絡は私の方からしておくわ、航空券の手配は——」

「それなら不要ですわ。IS学園からほど近いプライベート空港に自家用機を置いてありますから、それを使います」

「そう。ならついでに、この子も相乗りさせてもらえるかしら」

私は顔に出さず（いゝ）と心でつぶやいた。

いま、セシリアと二人きりというのは正直きまずい。

「……わかりましたわ。機長にもそう伝えておきます。では準備してまいりますわ」

それだけ告げてセシリアは去っていく。

ロリーナの天然か、意図か。おそらく後者で、仲直りしておけということなのだろうけど

「あら、どうしたの？」

「……………いいえ、なにも」

私はあきらめて、イギリスへ渡る準備に始めた。長いフライトになりそうだと思いながら。

第104話 〈プレゼジデント・オーダー〉

とにもかくにも、対衛星攻撃パッケージ〈アフタヌーン・ブルー〉を用意すること。

その〈アフタヌーン・ブルー〉は、イギリスの〈ナイトソード・ブラックスミス社〉で開発が進められていて、搬入には20時間かかるという。けれど『逸早く〈アフタヌーン・ブルー〉の特性を把握したい』というセシリアの要望を受け、急遽、彼女の帰国が決まった。というわけで――

IS学園近隣のプライベート空港。セシリア同様、イギリスに用事があった私は、彼女のプライベートジェットに相乗りさせてもらったのだが――

(きまずいなあ……)

セシリアは外の景色を眺めてばかりで、私に視線ひとつ寄こさない。完全に無視を決め込む彼女との間に会話もなく、機内はピリツとした空気に包まれている。この重々しい空気に、私は早くも根を上げそうだった。

(これから8時間、こんな具合か……)

なんとかこの空気が逃げようと、私は紙の束を取り出した。

スクールから受け取った〈楽園計画〉の資料だ。

資料は三部構成で、第一部には「世界の食糧事情」。第二部には「飢餓レベルと倫理バイアス」第三部は「〈楽園〉計画の概要」、最後には賛同者のプロフィールが記載されている。記載者数はざっと100名以上。職種も、植物学者、環境学者、社会学者、心理学者、脳科学者、遺伝子学者、といった有識者から企業のCEOや資産家と幅広い。(この中に、母に成りすましている人物がいるんでしょうか)

先の戦いでアリーシャは「リリスはメアリー・ライオンハートの意思を体現する者」と言っていた。だとすれば、このプロジェクトメンバーの誰かである可能性が高い。

しかし、絞り込むには人数が多すぎた。女性だけでも40人以上。はつきり言って、知っている人間に聞いた方が早いんじゃないか。そ

う思いながらプロフィールをめくっていると、一枚の写真がはらりと落ちてきた。

拾い上げた写真の裏には『チーズ追いかけ祭り優勝記念』と書かれている。

(チーズ追いかけ祭りは、イギリスのお祭りでしたっけ)

写真には大きなチーズを抱える母が写っていた。

隣には金髪碧眼の女性も写っていて、二人の良好な関係が伝わる一枚になっていた。年齢は母と同じくらい。やや上がった目尻から剣呑な印象を受けるが、聡い碧眼には知性を感じる。それに見覚えがあった私は、ふと右斜めでヘアフタヌーン・ブルーの資料を読んでいるセシリアを見やった。そして、思い至ったようにハッとする。

(写真の女性はもしかして――)

女性の正体に気づき、私はプロフィールを読み直した。

すると、あった。彼女の名前が。

(もしかすると、彼女が……?)

脳裏にひとつの憶測が過るも、確信は持てなかった。なぜなら、彼女は既にこの世にいなかったから。だが、完全な否定も、またできなかった。彼女なら母の意思を継ぐ明確な動機がある。でも、しかし――そんなふうに思考が堂々巡りしていると、機長が「離陸します」と言った。

それから8時間後、結局、機がイギリス領の空軍基地へ降り立っても、答えは宙ぶらりんのままだった。かといって、これ以上考えても仕方がないのでーいま確かめないといけないことでもないし――、気持ちを切り替えて、機内から滑走路を眺める。

広い滑走路には、輸送機と作業用のEOS、いくつものコンテナが見えた。

「では、わたくしはヘアフタヌーン・ブルーを見に行つてまいります。帰りの便は3時間後ですわ。よろしいわね」

遅れたら置いていく。そんな口ぶりです。ひとりタラップを下りてい

くセシリア。

私もそれに続いて、八時間ぶりに地面を踏みしめた。

「さくて、私も自分の仕事を済ませますか」

ロリーナの話だと「ジェーン・ドウに会え」とのことだけど。

とりあえず、私は近場の作業員を捕まえてみた。

「ヘデウス・エクス・マキナ」の使いです。ジェーン・ドウに会いたい」

作業員は訝しい顔をしながらも上に取り次いでくれた。

ややして、作業員がこちらを見直す。

「アリス・リデルだな。七番格納庫に迎えということだ。——これを
使え」

作業員が私に車のキーを渡す。

私は礼を告げ、用意された荷物運搬用の作業車に乗り込んだ。

「七番格納庫はここから南へ一キロほど行つたところだ」

「わかりました」

エンジンをかけ、アクセルをふかし、南にハンドルを切る。

目的地につくまでの合間、私は指名してきた相手の事を考えた。

「ジェーン・ドウ、か」

ジェーンは、ありふれた英国圏の名前。ドウは存在しない姓だ。

はたして、そのコードネームが意味するものはなんだろうか。

結局、何の見当もつかないまま車を走らせ続けると、5分ほどで車
が目的地に到着した。降りて、わずかに開いていた扉を潜る。中は暗
く、ほとんど何も見えなかった。かろうじて、人の気配を感じるぐら
いだ。

「ヘデウス・エクス・マキナ」の使いできた」

私の呼びかけに応じて、奥から人がやってくる。

シルエットは女性みたいだった。すらっと背が高く、髪はロング。
豊満な胸の膨らみと、くびれをもったモデルのような美女だ。暗闇で
わからなかった素顔が鮮明になるにつれて、私は目を見開いた

「ナタルツ」

現れたのは、かつての上官。——ナターシャ・ファイルスだった。
「ひさしぶりね、アリス。お互いまだ生きているようだなによりだわ」

「ええ。お互い悪運が強いようで」

お互いなんどき死んでもおかしくない立場だから、生きて再会できることも当たりまえじゃない。なにより気持ちも沈んでいたいまま、ナタルとの再会は嬉しかった。

「あたしもいるぜ」

と、ナタルの背後で言ったのは、彼女のボディであるイーリス・コーリングだ。

筋肉質な体躯に、勝気な相貌。健康そうな足取りで歩み寄ってきたその姿は、別れた時のままだ。

「イーリスも元気そうで。あれ、髪を伸ばしました?」

長髪は邪魔になるからショートヘア一筋だったのに。

「そうなのよ。ちよつとモテるようになったから色気づきはじめてるのよ。『おしやれに気を使うなんざ、女々しい奴がすることだ』って、誰の言葉だったかしらね」

「うっせーな。いいだろう、別に。あたしがモテるようになったから、妬いてんのか」

「これだから単細胞は。なんで私があなたみたいなマッチョ女に嫉妬しないといけないのよ」

「ああん、誰が単細胞だって? もういつペン言ってみやがれ」

「そうやってすぐ熱くなるところが単細胞だって言っているの」

「あ、あの、それで私が呼ばれたのは? あるものを受け取れと言われってきたんですけど」

二人の痴話げんかをもつと見ていてもよかつただけで、今の私には時間がなかった。

「ごめんなさい、ごめんなさい。——あなたにこれを渡すよう言われているの」

ナタルが目線で格納庫の奥を示す。その先にはコンテナが積み重ねていた。大きさは人間用の棺桶ぐらい。数は4つ。ラベルはなく、外装から中身は何えなかった。

「詳しいことはあなたたちの整備士が知っているわ」

私は「わかりました」といい、ナタルが部下にトラックへ積むよう

命じる。

運ばれていくコンテナを見守りながら、ナタルは続けた。

「聞いたわよ、先月のこと。大変だったわね」

「ホントですよ」

「ここ半年、月ごとに事件が起こり、その都度、対処に追われてきた。

正直、軍にいた頃よりハードな生活だと思っている。

「ちゃんと休めてる？」

「実はすこし休もうかと思っています。もちろん、今回の件が無事に解決したら、ですけど」

「そう。じゃあ、EUの動向に注意しておいた方がいいわ」

「EUの？」

「ええ。攻撃衛星の開発／運用は国際条約に違反する。ドイツ、フランス、とEUは不祥事つづきだから、一刻も早くこの「ヘクスカリバー」を破壊して事を収束させたいはず。いまは政治の意思決定がおくれて後手を踏んでいるけど、事の次第ではEU軍が動く可能性があるわ」

「事の次第……、私たちの作戦が失敗したとき？」

「ええ、もしあなたが「ヘクスカリバー」の破壊に成功したら、EUにとっては御の字でしょう。けど、失敗したときは、軍が動く。すでに「モルドレット」級と呼ばれるミサイル巡洋艦が展開しているそうよ」

「なんでも対衛星用に新型弾道ミサイルを積んでいるらしいぜ。あいつの話だな」

私は積荷作業から戻ってきたイーリスを見た。

「あいつって、私をここに呼んだ「ジェーン・ドウ」のことですか」

「ああ」とイーリスは肩を回した。

「ジェーン・ドウとは誰なんです？」

私は思い出したように言った。

話の道筋からナタルたちが「ジェーン・ドウ」であるとは思えなかった。

「へへ、誰だろうな。会ったらきつと驚くぜ」

イーリスがニタニタ気持ち悪く笑うと、ナタルが言った。

「そろそろ頃合いかしらね。いま会わせてあげるわ。——もういいわよ。いらっしやい」

ナタルの言葉に促されて格納庫の奥から一人の女性がやってくる。淡い桜色の髪に、愛らしくも賢さを宿したサファイヤアイ。懐かしくそれでいて、本当はあるはずの無い姿に、私は鼓動が止まるような錯覚に陥る。

彼女はバージニア州のアーリントン戦没者墓地に埋葬されているはずなのに。

「どう、驚いた？ 元気そうだね、アリス」

かつて私が自らの手で殺めた親友——エイミーはそう言った。

私は息を吸って何かを云おうとするも、何を云えばいいかわからず、むにやむにや口の中を動かした挙句——。

「え？」

なんともつまらない反応をしてしまった。

期待してたのと違う！ とエイミーはそう怒った。

気持ちわかる。でも、混乱しているのだから勘弁してほしい。感情も思考もまるで追いついていないのだ。

「もつとね。きゃーってなると思った。悲鳴でも歓喜でもなくて、「え？」って何。わたしが「え？」だよ。わたしがバラエティー番組のプロデューサーなら、降板させてるね、間違いなく」

そういう言い回しは間違いなくエイミーだった。

「私は別にタレントとして食べていこう思ってますから、いいですけど」

「シヤラップツ。わたしはアリスのそういうつままない反応でいろいろ台無しになったことを怒ってるの。これじゃ死んだ甲斐がないよ」

「やっぱり死んでるんですか……？」

「わたしのどこをどう見たら死んでるようにみえるの？」

「見えませんが」

輪つかもないし、透けてもいない。足もちゃんとある。

「じゃあ、生きているんですね」

エイミーは「うん」と私に笑いかけた。その笑顔を見て、ようやく目の奥が熱くなる。

堪えられず涙ぐむ私にエイミーは「そう、それ」と満足そうに笑った。

「でも、どうして。——あなたは私が……」

彼女は米軍が開発したVTシステムにより暴走し、私が止めた。

そう、殺したはず。

「VTシステムの暴走は予定調和だったの。あのとき、あなたに斃されるのがわたしの任務だった」

私に斃されることが任務……？

私はナタルに視線をやる。彼女は首を横に振った。

「ナタルが知らないのも無理ないよ。この任務は空軍が計画したものじゃないから。いま、わたしは大統領直下の特殊部隊に所属してるわ。構成員はみんな、わたしと同じようにあらゆる記録や書類からその存在を抹消されている。組織内では〈アンネイムド〉なんて呼ばれてるわ」

アンネイムド
名もなき部隊か。

私は任務の内容を理解した。『死』して、その存在を抹消されること。すなわち、どこかの誰なのかもわからない人間——〈名無しジェンの権兵衛ドゥ〉になることが、彼女の任務だった。

「でも、なんでそんなもんが」

解せない顔でイーリスが言った。

「これからの世界には〈アンネイムド〉のような〈リザード・テイル〉が必要なんだよ。アメリカ政府があなたたちに過保護なのは、わたしたちのためじゃない。政府のため。戦死者を出したときの叩かれようは知っているでしょ。公的な軍事介入が政治的に難しいのは、そういう理由があるの」

だけど、〈アンネイムド〉は既に死んだ人間。存在しない部隊である

がゆえ、殉職しても公的に政治家が責任を問われることはない。軍事作戦における政治リスクを回避するための使い捨て部隊。それがアンネームド。

「なぜ政治家のために、そこまで……」

政府の無謬性^{むびゆう}、その限界を知って軍隊を抜けた私にはわからなかった。

7月の〈福音暴走〉だって、政治の為に戦ったんじゃない。

「政治家のためじゃないよ。アメリカのため。もし、この世界を変えられる者がいるとしたら、わたしは〈テウス・エクス・マキナ〉でもなく、〈亡国機業〉でもない。このアメリカだと思っている。そのアメリカに、いまあの人が必要なんだよ」

あの人。41代目にして初の女性アメリカ大統領ルーシー・ファイルス。彼女が仕える理由はそれだけじゃないのだろう。エイミーの聡い碧眼にはもっと別の何かが見えているのかもしれない。

ナタルはエイミーの話を聞き、そばから離れて人知れず涙を拭っていた。

彼女たちは殉死しても誰にも知られず、誰にも称賛されない。国家にその身のすべてを捧げた愛国者の姿に、アメリカ大統領の娘であるナターシャが何も思わないはずがなかった。

「あなたがそうある理由はわかりました。では、なぜ私のまえに？」

死んだことが強みなら、こうして私のまえに現れることはリスクだ。

「わたしにはどうしてもあなたに会いたい理由があった」

エイミーは振り向いて格納庫の奥を見やる。奥のハンガーには3機のISが掛けられていた。一機は銀の福音。もう一機はアメリカの第三世代型IS〈ファング・クエイク〉。最後は私の知らないIS。

「わたしはいまある任務に従事している」

「任務？」

「そう、それは新型メタルギアを見つけ、破壊すること」

メタルギア。戦場に新たなムーブメントをもたらした二足歩行戦車のコードネーム。

「それなら遭遇しました」

先々月の〈キヤノンボール・ファスト〉で、私は新型のメタルギアに遭遇している。

その時のことを話すと、エイミーは首を横に振った。

「それはメタルギアRAYね。メタルギアRAYは新型メタルギアを構成する一部に過ぎない。わたしが探している新型メタルギアは、アーセナルシッパ計画をもとに開発された新型攻撃艦。コードネーム〈アーセナルギア〉」

「アーセナル武器庫……」

「アリス、〈白騎士事件〉を思い出して。〈白騎士事件〉でアメリカは大量破壊兵器を使用した各国に報復しなかったわ。つまり『撃つたら撃たれる』という現実には存在しなかった」

「抑止論の崩壊」

「そう。〈アーセナルギア〉は、この緩んだ抑止論を再構築するために開発されたメタルギアなの。この〈アーセナルギア〉は数千発のミサイルと、核兵器を装備し、全世界へ報復可能よ。それを世界に示すことで『撃つたら撃たれる』という現実を取り戻そうと前政権は考えていた」

「考えていた？」

「いま、この〈アーセナルギア〉は合衆国の手にないの」

「まさか〈彼女たち〉の手に」

「もしかすると、最初からそうだったのかもしれない。核抑止論の再構築は、議会から予算を引き出すためのカバーストーリーだった。いまや連邦議会は彼女たちの傀儡だもの」

「では、〈ヘリリス〉は全世界に向けて核攻撃が可能だと」

「それだけじゃない。この〈アーセナルギア〉は単なる核攻撃システムじゃなかったの」

「どういうことです」

「十年前、国連の推奨で、新たな核兵器の安全基準が設けられたの、覚えてる？」

「RRWですか」

信頼性代理核弾頭。レライアブル・リプレイスマンス・ウオーヘツド。

〈白騎士事件〉で、たくさん的大量破壊兵器が使われた。RRWは次の〈白騎士事件〉が起きないよう、保全性と安全性を求め、開発された核弾頭だ。21世紀の核弾頭とも呼ばれ、世界の核弾頭のほとんどはこれに置き換えられている。

「このRRWは、次の〈白騎士事件〉を防ぐ名目で開発されたけど、本当は違った。RRWは世界の核兵器を、この〈アーセナルギア〉でID管理するためのプログラムだったの」

「〈アーセナルギア〉が起動すれば、世界中の核兵器は？」

「ロックされる。撃てなくなるわ。そうなれば、誰にも〈ヘリス〉を止められなくなる。アメリカでさえね。その前に〈アーセナルギア〉を見つけて破壊する。わたしの命に代えて」

命にかえても。

悲壮感のない決意——すなわち死すら厭わない覚悟が、その言葉に込められていた。

「もしかすると、本当に会えなくなるかもしれない。だから作戦の前はどうしても会って、あなたに『生きています』ってことを伝えたかった。——わたしはあなたに罪悪感を植え付けてしまったわ。それだけがずっと心残りだった」

エイミーは私の方へやってきて、やさしく手を回した。

私の背に架せられた十字架を、そつと下すように。

「つらい思いさせちゃったね。でも、もういいから。わたしはこうして生きてる。あなたが罪悪を感じる必要はない。贖罪へ歩む必要なんかないからね」

親友殺しの罪から真の意味で解放され、私は全身が軽くなるような錯覚に陥る。手にかけて人間から得られた許しの言葉が、心底にあった罪の意識を打ち消していくようだった。

けれど、ひとつだけ気残りがあった。

「やっぱり、セシリアには会っていきかないのですか」

死んだということが、彼女の強み。

セシリアには生存のことを告げずに行ってしまうのだろう。

「うん。あの子はもうわたしの『死』を受け入れられている。なによ
り、あの子には受け入れなければいけない現実がある」

それがどんな現実か。私はすぐに解った。

「でも、わたしは既に死んだ存在^{ゴーストプロトコル}。あの子の側にはいてあげられない。
だから、わたしに代わってセシリアのそばにいてあげてほしいの。こ
んなこと、頼める人間はあなたしかない」

セシリアに寄り添えるのは私だけ。だから、エイミーは私の前に現
れた。

無二の友人の頼みを、聞いてやりたい気持ちは大いにある。

けど、セシリアの冷たい瞳が脳裏を過って、私はエイミーから視線
をそらしてしまった。

「私はいまセシリアに拒絶されています」

「それでもだよ。腹が立つくらいお節介で、拒まれても、誰かのために
一生懸命になれる。わたしはそんなアリスを尊敬しているし、信じて
る。だから、『自分』をやめないで」

信じている。私の在り方を。憧れたその友人が。

すごく自分を肯定された気になって、力が湧いてくるようだった。

「わかりました」

強くうなづく。たとえ、拒絶されても、セシリアは守り抜く。友と
友のために。

私がエイミーの願いを受け、それを叶えることを誓うと、基地内に
非常事態を知らせる警報が鳴った。

「奴さんがおいでなすってようだぜ」

みんな動揺は見せなかった。敵側が作戦の妨害に出ることは予測
の範疇。今回の作戦の要である〈アフタヌーン・ブルー〉を破壊しに
きたのだ。

「アリス、私たちは積み荷を守るわ——、あなたは行きなさい」

私は「了解しました」と言った。

「セシリアは私にまかせてください」

「ありがとう、アリス。そしてごめんね。アリスにはいろんなものを

「背負わせる」

「へっちゃらです。お母さんが丈夫に生んでくれましたから」

自分で言っておきながら、自分らしい言葉だと思った。

たぶん調子が戻ってきているんだ。

第105話 〈プリンセス・オーダー〉

セシリアが襲撃に気づいたのは、コンテナを積み込むEOSが突如として炎上したときだった。

セシリアはすぐさまパツケージと従業員を守るべく〈ブルー・ティーズ〉を展開し、ハイパーセンサーを広域索敵モードに切り換えた。

「一体どこから……」

レーダー上には8機の機影が映し出されていた。けれど、どれひとつとしてその姿を確認できなかった。レーダー上では存在するものの、肉眼では何も捉えられない。

(なぜ何も見えませんの……)

なおも確認に手を焼いていると、今度は八時方向の80m先から金切り音が響いた。

まるで斬りつけられたように切断された部品を見て、積み込みの作業員が叫んだ。

「3番コンテナが……!」

三番コンテナ。高高度遠距離射撃に必要な超解像度を持つ観測器が積まれたコンテナだ。

これでは〈エクスカリバー〉を捕捉することが困難になる。「くっ、これ以上やらせるわけには……」

すでに初撃で増幅装置をやられている。これ以上は〈エクスカリバー〉破壊に支障がでかねない。なんとしても阻止しなければ。しかし、肝心な敵を捕捉できない現状、対応は後手にならざるを得なかった。

「なぜ、レーダー上で捉えているのに姿が見えないの?……光学迷彩?……いえ、」セシリアはハッと閃いた。「小さいのですわ……ッ」
それでいて速いのだ。

おそらく相手はビットのような高速かつ小型の兵装を用いているのだ。ともすれば、どこかにビットを操っている親機がいるはず。セシリアは〈ブルー・ティーズ〉を上昇させた。

(ビットで対象を攻撃する場合。その対象が有視界にいることが好ましい。基地に点在するコンテナを同時攻撃するなら、親機はそれら全体を見渡せる上空にいるはず)

親機は地上じやなく空中。ビット操作を熟知するセシリアは、そう推測して機体を飛翔させる。高度四〇〇メートルまで上昇した彼女は自分の読みが正しかったことを確信した。

(あれが親機)

襲撃してきたISはセシリアと同じ青い機体だった。非固定浮遊部位と腰部のバインダーにビットの格納スペースを持ち、手には両刃の格闘武器。フォルムはくブルー・ティアーズに似た中世の甲冑を思わせた。操縦者はフルフェイスのHMDを装備していて、容姿は窺えない。

(赤騎士と同じ格闘タイプのようにすわね)

空に溶け込むように浮遊するISを捕捉し、セシリアは《スターライトMk-IV》を構えた。

発砲。

蒼い銃弾が相手を怯ませたすきに、同じ高度までくブルー・ティアーズを飛翔させる。

「やってくださいましたわね。これ以上はやらせませんわよ」

セシリアが《スターライトMk-IV》を向けると、敵は口元を優美に曲げた。

「さすがです。お嬢様」

襲撃者がHMDのフェイスガードを、決闘を終えた騎士のように外す。

露わになった素顔に、セシリアは碧眼を剥いた。

ブルネットのセミショート。幼さと艶やかさが同居した容姿。素顔を晒した襲撃者は、オルコット家のメイド長にして、幼馴染であるチエルシー・ブランケットだった。

「ど、どうして……あなたが……」

自分がかつとも信頼する人物が起こした破壊行動に、セシリアの綺麗なソプラノ音声がかすれて滲む。しかし、チエルシーは主人の動揺

を見ても、表情ひとつ変えなかった。

「ヘクスカリバー」の破壊を阻止するためでございます」

「阻止？ それがどういうことかわかっておりますの、チエルシー！」
「はい、すべてを承知したうえでございます」

不備なく仕事をこなす普段の彼女となんら変わらない、きわめて落ち着いた声音だった。

正気を失っているわけではない。それがセシリアの混乱を加速させた。

「一体どうしてしまったの、チエルシー……」

彼女がしていることは、主人への冒涜のみならず、IS学園を守ろうとしている者を踏みつける行為。許されることではない。それに何も感じない彼女じゃないはずなのに。

「どうもしておりません。すべては己が主のためです」

「だったら、オルコット家の当主として命じます。ただちにその愚かな振る舞いをおやめなさい」

「お嬢様とはいえ、それには従いかねます」

「なぜ!! 主人のためだというなら、なぜわたくしの言うことが聞けないの!」

狂った歯車のような噛み合わない返答。セシリアは動揺を忘れ、苛立ちをぶつける。

されどチエルシーは冷静だった。まゆひとつ動かさない。

「お嬢様が本当の主ではないからです。お嬢様にお仕えしていたのは、その方の命にすぎません」

セシリアは全身から気力を吸い尽くされるような錯覚に陥った。信じていた何かが砕け、手から《スターライトMk-IV》が滑り落ちそうになる。

チエルシーは両刃の剣を抜き、その先をセシリアに突き付けた。

「わが主のためくブルー・ティアーズ」と《アフタヌーン・ブルー》は破壊させていただきます」

まだ混乱が抜けきらないセシリアは機体を守るように、いや逃げるように後方へ下がらせた。

それをチエルシーが嘲笑して追う。

「成長しておりませんね、お嬢様。権威をかざすばかりで、肝心な場面で逃げてしまわれるところは」

「そ、そんなことー！」

「だから、いつまで経っても恋も成就しないのです」

「恋もしたことないあなたが！」

セシリアが《スターライトMk-IV》を構える。

射撃に必要な間合いは確保できていなかったが、感情が彼女をそうさせた。

「そうやってすぐ感情的になるところも、お嬢様の悪いところですよ。奥様から『常に優雅であれ』と教わりませんでしたか」

チエルシーは《スターライトMk-IV》の射撃をかくぐり、セシリアの懐に潜り込んだ。そして一閃。頭上から股下に抜けた一撃はセシリアに「彼女の本気さ」を諭させた。彼女は本気で自分を討つつもりだ。

「やめて、チエルシー。こんなことをするあなたではありませんわ」

「お嬢様は私の何を知っておいで」

「なんだって知っていますわ！　だって幼馴染ですものー！」

ずっと一緒にいたのだ。知らないことなんか無い。

犬が好きで、むかし飼っていたコリーの名前だって知っている。

「ならば、お嬢様は《エクシア》をご存じありますか」

セシリアの動きが止まる。初めて耳にした名だった。

人の名前なのか、それとも別の名称なのか。その検討さえつかなかった。

「それでよく私のことを知っているなどのたまいます」

チエルシーは斬り払った大剣を翻して後退した。そしてサイドバインダーからビットを射出する。それは《ブルーティアーズ》と同様のフィン状であったが、先端はつるぎのように尖っていた。

剣型のビットが、セオリー通りの動きでセシリアを包围する。

セシリアは《スターライトMk-IV》を構えた。だが、超遠距離射撃を得意とする自分はアイリオンほど高速飛翔体狙撃を得意としな

い。ましてや——

(取り回しの悪い狙撃銃では……)

警告。7時方角からビット攻撃。反転したセシリアが《スターライ
トMk-IV》を構えると、背後——非固定浮遊部位から爆発がおこつ
た。別ビットによる多角攻撃だった。

〈警告：非固定浮遊部位にクラスB損傷〉

〈警告：《ブルーティアーズI》《ブルーティアーズII》とのリンクが確立
できません〉

セシリアは碧眼から涙をこぼした。

「もうやめて、チェルシー。これ以上わたくしを傷つけないで」

「次は泣き脅しですか。昔からそうでしたね、お嬢様は、望みが通らな
いとすぐ泣いて奥様を困らせておいででした。あれから十年以上も
経っているというのに。なんと嘆かわしい。気高き一角獣の紋章も
泣いておられますよ」

なおもチェルシーは攻撃の手を緩めなかった。正面から突貫して
くるビットを、セシリアはとつさに《スターライトMk-IV》を盾に
して防ぐ。

穿たれ、爆発する《スターライトMk-IV》。それはチェルシーが肉
薄するのに十分なスキを与えた。

「お嬢様、チエックメイトです」

チェルシーが両刃の大剣を振りかざす。

それがセシリアの頭上へ振り下ろされた瞬間、赤い閃光がセシリア
の眼前に転がり込んだ。

赫々と赤い装甲。騎士の甲冑を思わせる意匠。身の丈あるほどの
大剣。盾型の非固定浮遊部位。

斬撃をはじめた赤騎士の操縦者——アリスは肩越しにセシリアを
見やった。

「これはどういう状況ですか」

セシリアは「わからない」と髪をふり乱した。

言葉にならないセシリアに代わって、アリスはチェルシーを見た。

「この惨状はあなたが？」

基地にいたるところには、ARの被害タグが張られていた。見た限りでも10箇所以上。

これをおまえがやったのか、とチエルシーを見据える。

「はい。わたくしが行いました。驚かないのですか」

動揺の類を見せないアリスに、チエルシーとセシリアも怪訝がった。

「ええ、むしろあなたが現れてくれたおかげで、確信がもてました。いまは驚きよりも感服する思いです」

「ご理解いただけているようで、うれしく思います」

「けれど、あなたの行いを見過ごすわけにはいきません。続けるなら、私が相手をします」

アリスは《ヴォーパル》の鉾をチエルシーへ向ける。

チエルシーは剣を腰部の鞘に納めた。

「ならば、ここは一度引きましょう。アリスさまがお相手ではわたくしでも手に余ります。なにより、いまのお嬢様は、戦うに値いたしませんゆえに」

向けられたチエルシーの目線に、セシリアは身をすぼめた。普段の堂々とした振る舞いは見る影もない。萎縮する主に、メイドはわずかな悲しみを滲ませた。

「——もつと強くなりなさい、セシリア。でなければ、私は本懐を遂げられない」

にじみ出る敵意の中に、優しさに似た厳しさを垣間見せたメイドは、蒼穹へ溶け込むように消えていく。残されたセシリアは「本懐ですつて」と消え入りそうな声でつぶやいた。



チエルシー撤退後。基地に降り立ったアリスは、その被害状況に頭を悩ませた。

射撃管制に必要なコンピューターや観測装置、超高高度用射撃砲さ

え破壊されて、ほとんど壊滅状態だった。それをIS学園にある対策本部に報告すると、ロリーナから意外な返事が返ってきた。

『大丈夫よ、いまこちらに〈本物〉が届いたところだから』

「へ？」とアリス。

「こっちは困だったんですか」

『ええ、ヘリリスが妨害工作をしてくることは予想できていたから、ダミーを用意していたそうよ。本物の〈アフタヌーン・ブルー〉はイギリスじゃなくオーストラリアのミューゼル社で開発されていたわ。そちらは試作品よ』

「そうだったんですか」

安心とも、苛立ちとも違う、複雑な気持ちでアリスは相槌を打つ。

心情はどうあれ〈アフタヌーン・ブルー〉が破壊されなかったことは素直に喜ぶべきか。

「わかりました。では、詳しいことは帰ったら話します」

『ええ。気を付けてね』

通信を切り、アリスはセシリアの許へ向かった。

セシリアはコンテナに腰を下ろし俯いていた。

「セシリア、ここの〈アフタヌーン・ブルー〉は困だったようです。IS学園に戻りましょう」

セシリアは答えなかった。チエルシーのことがまだ尾を引いているのだろう。あたりまえだ。幼馴染だった友人が、敵となったのだ。いま彼女の心情は察して余りある。

アリスも同じような経験を何度もしてきた人間だから、彼女の気持ちにはよく理解できた。

できたから、アリスはセシリアのそばにそっと寄り添った。

「セシリア、いいですか」

セシリアはやはり何も答えなかった。それでもアリスは構わず続ける。

「チエルシーがなぜヘリリスににいるのか。なぜあなたに楯突くのか。混乱しているでしょう。だから、あなたに話しておきたいことがあります」

「なんですの」

セシリアは初めて顔を上げた。

「まず私のお母さんの話からします。私の母は来たるべき飢餓に備え、〈楽園計画〉というものを立ち上げました。けれど、亡くなったことで計画はなくなりしました。私やローズマリーはその計画を再始動させるために活動してきましたが、おそらく〈リリス〉の目的もその〈楽園計画〉です」

アリーシャも先の〈ヘレヴィアタン〉戦で言っていた。〈お母様〉はメアリー・ライオンハートの意志を体现する者だと。

「だから、リリスはおそらく〈楽園計画〉の賛同者である可能性が高い。そこで私は賛同者のリストをスクールからもらいました。彼女の両親はその計画に、環境学者として参加していましたから、リストを持っていたんです」

アリスはそのリストをセシリアに見せる。

リスト内に知った名前を見つけ、セシリアは開いた口を押さえた。

アリシア・オルコット。

「お、お母さま……」

「そうです」と言ったアリスを、セシリアが見やる。

「じゃあ、まさか……」

いま自分の脳裏に過った憶測が正しければ、なぜチエルシーが敵側についたのか、辻褄が合う。

「私も最初は半信半疑でした。それもチエルシーが現れたことで確信に変わりました」

「じゃあ、チエルシーはお母さまの命令でここに？」

「チエルシーにとつて、アリシア・オルコットこそが仕えるべき本当の主なのでしよう。彼女は、〃自分の正義〃なんてものは持っていない。あくまでメイドとしての忠誠心だけが彼女を突き動かしている」

自分が忠誠を誓った相手に仕える。そこに個人の是非はない。無謬性とも違う、ただ主のために身を粉にして戦う。彼女の生きざまは騎士道といってもよかった。だから、彼女は感服した。のらりくらり生きている人間より芯が通っている。

「これは私見ですが、主への忠義が全てであるからこそ、チエルシーはあなたが次期オルコット当主として、自分が仕えるに相応しいか見極めたいのかもしれない。そのために彼女はあなたのまえに現れた」
セシリアの脳裏に彼女の言葉がよみがえる。

——もつと強くなりなさい、セシリア。でなければ私は本懐を遂げられない。

「これは試練です。16歳になるあなたへ、チエルシーが課した。——セシリア、蹲っているだけじゃ、誰も認めてくれない。自分が人の上に立つに相応しい人間であることを認めさせるほかに、彼女を取り戻す方法はありません」

「認めさせるなんて……わたくしにはできませんわ。わたくしは大きな態度でしか物を言えない小娘ですもの。自分より弱いものとか戦わず、嫉妬してあなたに冷たく当たって。そんな女がどうして人の上なんか……」

チエルシーに弱点を突かれ、心が弱っているのだろう。

普段なら見せない弱音を、セシリアは吐いていた。そんなセシリアにアリスは力強く言った。

「なら私が証明します」

セシリアはアリスを見る。

「——私がへエクスカリバーを破壊して、私を許してくれたあなたを、人の上に立つに相応しい人間だと証明します」

人が誰かに力を貸すのは、貸す人物に惹きつける魅力があるからだ。アリスが自ら身を呈して戦うことは、セシリアの人望を証明することになる。

「こんなわたくしのために、あなたは戦ってくださいますの」

「はい、今度こそセシリア・ファーストです」

アリスの瞳にはどこまでも強い意志が宿っていた。自分のためにそうまで言ってくれる友人が、そばにいてくれること。それが自分の中にあった否定的な感情を押し流してくれる。

「わかりましたわ。セシリア・オルコットが命じます。わたくしに力を貸してくださいな」

「Yes My Majesties——御心のままに」

頷いたアリスに、セシリアは自分の中で何か変わるのを感じ取った。

母、そして幼馴染が敵となったいま、何も信じられなくなっていたけれど、もし唯一信じられるとしたら、それは彼女かもしれない。だとしたら、それはずっと自分が探していたものだった。

自分を想い、戦ってくれる彼女の存在を、いま何よりも心から大事にしたい。

〈アフタヌーン・ブルー〉の放棄と、帰還を告げるアリスの背中を見つめ、セシリアはそう思った。揺れていた心はもう安定している。

第106話 彼女の料理がまずい理由

IS学園に帰還後。私は「ヘアフタヌーンブルー」を見に行く」と言ったセシリアと別れ、ロリーナが待つ格納庫に向かった。ナタルから与った物資を届けるためだ。

格納庫ではREXの最終調整中とあって、30ミリ弾と対戦車ミサイルの装填が行われていた。さらに、右部に巨大な二枚の板が取り付けられている。イギリスへ向かうまえには無かった装備だ。

「これは？」

私を見つけたロリーナが整備員に「ちよつと外すわね」と告げ、こちらにやってくる。

「おかえりなさい。——ごめんなさいね。何も告げないで」

「いえ、敵を騙すにはまず味方からといいますし。で、これはなんです？」

私はREXの右部分に加えられた二枚の板を挟んだような装備を見た。

「レールガンよ」

「レールガン？ REXは弾道ミサイルを迎撃するためのTMDでは？」

「REXにはその側面もあるわ。けど、本質は大質量の物体を宇宙まで撃ち出すための発射装置プラットフォームなの。持前の火器管制能力と走破能力、そしてレールガンを用いることで、REXはあらゆる場所から物体を大気圏へ撃ち出すことができる。——そう、弾道ミサイルのようにね」

「じゃあ、既存の弾道ミサイルでいいのでは」

「あら、日本は弾道ミサイルを持ってないでしょ？」

私は得心した。専守防衛を主旨とする日本は、攻撃空母や弾道ミサイルの所有を封じられている。だから、日本は守勢戦略上、射程を活かしたスタンドオフ攻撃に弱い。その弱さを補っていたのが日米安保なのだけど、日本はいま米軍に依存しない防衛路線に乗り換えている。

「自国の脆弱性をカバーするために開発されたのが、このREXと

レールガンなわけですか」

私はREXのレールガンを見上げた。

レールガンは火薬を使わず、電磁場の力で砲弾を撃ちだす火器。その初速は音速の7倍から10倍。弾道ミサイルにも引きを取らない。いや、利便性からいえばそれ以上だ。電磁力で飛ばすから、燃料もいらないし、赤外線探知にも掛からない。何よりTMDとしての側面もあるから世論にも誤魔化がきく。

「で、REXにレールガンが備わっている理由はわかりましたけど、何かを打ち上げるために？」

REXが大質量の物体を宇宙空間へ打ち上げるプラットフォームなら、何か打ち上げるためにここへ運ばれてきたはずだ。

「これよ」

ロリーナはナタルから受け取ったコンテナを叩いた。

「見てみる？」

「ええ」と私。ロリーナは側面から突起した入力装置にパスを打ち込んだ。カシャつと内部のシリンダーが動いて、カバーが開く。中に格納されていたパーツは、金属製の綺麗な翼だった。

「これは福音の……」

格納されていたものは<銀の福音>に装備されていたウイングパーツだった。それになぜ受け渡し人がナタルだったのか理解するけど、そもそも<福音>のウイングパーツなんか何に使うのか。

「<銀の福音>がどういうISだったか覚えていない？」

私は<福音>がミサイル防衛用に開発されたISだったことを思い出す。

<福音>は、宇宙空間まで飛翔し、そこで敵ミサイルを迎撃するよう設計されている。

「でも、それには物凄い速さで宇宙^{ッラ}へ打ち上げないといけないでしょ。でも、ただ高速で打ち上げればいいという話でもないの。ヘラファエル・リヴァイブ<を思い出して。人型は空気抵抗が大きいから、飛行姿勢が安定しない。だから、その抵抗を軽減するために変形機能を採用したでしょ」

「じゃあ、〈福音〉のウィングも同じ空気抵抗を軽減する機能が？」

「そう。〈福音〉のウィングスラスタは、翼のようなそれで本体を包み込み、弾丸のような形態を取ることによって抵抗を軽減する。本来はそこへブースターを取り付けて宇宙に上げるのだけれど――」

ロリーナはREXのレールガンを見た。

「なるほど、REXのレールガンはそのブースター代わりに使うんですね」

私の中でピースがすべてはまった。REX、レールガン、〈福音〉のウィング。この3つが揃うことで、ISを弾丸のように宇宙へ打ち上げることができる。それを理解し、私はロリーナの顔を見た。

「私に宇宙飛行士になれって？」

「作戦が失敗した場合は、それも考えないといけない」

来たるべき宇宙時代に備えて、宇宙環境下での戦闘訓練は米軍時代から受けている。

そりゃ宇宙へ行く準備はしてきたけど、

「私たちの作戦が失敗した時は、EU軍が動くんでしょ。わざわざ、私たちが宇宙まで行って〈エクスカリバー〉を叩くともEUに任せてしまえばいいのでは」

「けど、現実問題として銃口を向けられているのは私たちよ。自分に降りかかる火の粉は自分たちで払わないといけないわ」

政府には国民の生活や生命を守る義務がある。けど、時には自分の頭で考え、自分の力で行動しなければいけない時もある。待ちぼうけを喰らって手遅れになってしまわぬように。

「彼」が〈デウス・エクス・マキナ〉を作ったのは、そういうことだったことを思い出す。

「わかりました。作戦のためにタイプIIのISスーツを用意しておきます」

「あなたには負担ばかり強いわね」

「いいえ。むしろ、感謝しています。宇宙にいける機会、滅多にない」

私は嫌味じゃなく、好奇心からそう言った。そして「では、これを」とロリーナに〈赤騎士〉を渡す。代わりに、ロリーナはA4用紙と同

じぐらいの箱とメモを私に手渡してきた。

「ロキから預かっていたわ。帰ったら渡してくれって」

そういえば、ロキに増幅装置の改良を依頼していましたっけ。

この忙しいときにも、ちゃんと仕事をしてくれたらしい。私は感謝しつつ、中身を確認する。そして、その出来栄えに「わお」とこぼした。

「あらあら、すてきね」

「ええ、これならセシリアも喜んでくれるでしょう」

私は増幅装置に箱に戻す。じゃあ、さっそく渡しにいこうか。——
と思ったら、おなかギョルルとなった。かれこれ20時間、何も口にしていないことを、思い出す。

「じゃあ、作戦までちよつと何か食べてきます」

腹が減ってはなんとやらというし、私はまず食堂で腹ごしらえすることにした。

♡

◆

♠

「あら、セシリア」

IS学園食堂。

ここで何か食べ物にありつけないかとやってきたら、セシリアとばったりでくわした。

「セシリアも腹の虫が？」

「うふふ、お恥ずかしながら。あなたも？」

「はい、ここを出てから帰ってくるまで何も口にしていませんでしたから」

「じゃあ、わたくしが何か作って差し上げますわ」

私はギョツとした。いまさらになって学食こくじでのセシリアエンカウントが何を意味するか気づく。

今からでも適当に理由を作って退散しようか。いやでも、断って機嫌けんを害されるのも……。

(せっつかく仲直りのきっかけを掴めたのだから、ここは我慢しよう) 大丈夫、再生医療の発展が目まぐるしい今日こんにちです。胃袋のひとつぐらい。

私は腹を撫でながら「じゃあ、ごちそうになります」と言った。

セシリアは「はいな」と嬉しそうに答え、料理機器と素材をもらいに厨房へ赴いていった。

「アリス、カルボナーラでよろし」

「あ、はい」

頷き、テーブルに腰掛ける。そして、調理を始めるセシリアから目をそらした。その過程を知っていると余計に食欲が減衰するのだ。だから、私はあえて見ないようにしている。これは何度もセシリアの料理を食べさせられてきた私が身に着けた知恵だ。

(はあ、これなら空腹の方が良かったですかなあ……)

なんて後悔しても仕方ない。いや、後悔するぐらいなら、はつきりと「まずい」と言った方がいいのかもしれない。そんな風に思っていると、セシリアがカルボナーラを手にとってきた。

「できましたわ。お味は一夏さんのものより、やや劣るかもしれませんが」

ややか。そうだといいのですが。

私は意を決してパスタを口に運ぶ。食べたとたん、口の中にまろやかな甘みが広がった。それでいて濃厚な味わい。黒こしょうの辛味が、しつこさを消していて、牛乳の生臭さもない。思った通りひどい味だ——つて、あれ？ おいしい……。

「あら、どうしましたの、不思議そうな顔をして。さては、またまずい物を食べさせられると思ったのかしら？」

普通においしくて、驚く私の顔を見て、セシリアがくすくす笑う。彼女の口ぶりは、まるで自分の料理がまずかったことを知っていたようだった。

「実はわたくし、最初から料理がそれなりにできますのよ？」

思わず食の手が止まる。え、最初から？

「じゃあ、あえてまずい料理を私たちに食べさせていたんですか……

？」

「ええ。——わたくし、小さい頃からチャホヤされて育ちましたの。家柄が家柄でしたから、周りの友人から煽おだてられてきましたわ。何を着ても『似合う』『素敵』と言われ、わたくしが作ったお菓子も『おいしい、おいしい』と」

オルコットは世界的な資産家。財力の権化ともいえる彼女の実家と友好的関係を築ければ、甘い蜜をすすれる。反感を買えば、煮え汁を飲まされかねない。だから、みんなセシリアの顔色を窺っていたのだらう。

「わたくしも周りに絆ほだされて、イイ気になっておりましたわ。わたくしの周りにわたくしのことを悪く言う者はいなかった。そう、わたくしはへ裸の王様<でしたの。それをローズマリーさまに指摘されたときは、身悶えしたものです。でも、わたくしはへ裸の王様<を続けようと思いました」

「それはまたなぜ？」と私はフォークにパスタを絡めながら、耳を傾ける。

「もし『まずい』と言って下さる方がいれば、それはオルコットの足許をみた人間じゃなく、真にわたくしのことを想った、信ずるに足る人間だと思ったからですわ」

「それで、あえてまずい料理を……」

「でも、その必要もなくなりましたわ。だって、出会えたんですもの、あなたに。あなたはわたくしを心から想ってくれている。なのに、わたくしはあなたに酷いことを言ってしまうましたわ。——ごめんなさい」

視線を落とすセシリアに、私は頭を振って見せた。

「いえ、いいんです。私こそ無神経なことを言ってしまうました」

セシリアはセシリアなりに一生懸命だったのだ。

その努力を私は「バカなこと」と言ってしまった。本当のバカは私だ。

「そのお詫びにコレを用意しました」

私は口キから受け取った箱を取り出す。今度はセシリアが頭を

振った。

「受け取れませんわ。わたくしがあなたにつらくあたったのは、シャルロットさんや簪さんに嫉妬していたからです。あなたは悪くないのですから、お詫びの品は受け取れませんわ」

「そうですか」

私は手持無沙汰になった箱をしばらく眺めた。ロキに無理を言っ
て作らせたけど、どうしましょうか。しばらく考えた後、私は食堂の
カレンダーを見て、こうすることにした。

「では、すこし早いですが、クリスマスプレゼントということので」

「ふふ、それならいただこうかしら。——開けていい?」

「どうぞ」と私。セシリアが箱を開ける。

あのコードとフレームがむき出しだった増幅装置は、綺麗なティアラに化けていた。

「あら、素敵。これは?」

「へエーテリオン」を、ISのマインドインターフェースに組み込んだ
ものです」

「まあ、これがっ!」

セシリアはさっそくへアバンドを外し、ティアラを乗せた。

「どうかしら」

「よく似合います。本物のプリンセスみたいです」

気品ただようセシリアの容姿と金髪碧眼にティアラはよく映えて
いた。

「本当に、ありがとうございますわ、アリス。簪さんにもお礼を」

「その簪から言伝を預かっていただきますよ」私は渡されたメモを開き「『へフ
レキシブル』の習得に役立ててください。それと一緒に『妖精王女』の
称号もお返しします。それは『妖精の触覚』を持つあなたが語るに相
応しい。——精霊の姫君より』ですって」

「あら、そこまでしていただかなくても」

セシリアは申し訳なさそうに頬に手を当てた。私は苦笑した。簪
の言伝を意識すると『渡すもの渡したから、もう突つかかってこない
でね』になるからだ。いま姉の専用機開発に燃えている簪だ。いらぬ

厄介事を抱えないための予防線だろう。

「ここまでしていただいたのなら、習得しないとオルコットの名折れですわね」

「期待しています」

私がエールを送るように笑むと、アナウンスが鳴った。

『これより作戦名〈ソードブレイカー聖剣破壊〉を開始する。作戦要員は持ち場につけ。繰り返す——』

千冬さんのアナウンスを受け、私とセシリアは顔を見合わせた。そして頷き合う。

もはや、これはただの衛星兵器の破壊作戦ではない。セシリアがセシリアたるための聖戦だ。それがいま始まる。

第107話 作戦スタート

IS学園第一アリーナ。その中央に対衛星攻撃パッケージへアフタヌーン・ブルーは建設されていた。BTレーザーを照射する超大型の高出力狙撃砲。2000キロ先にいる標的を捉えるための観測装置。それらを制御するためのコンピュータ機器。それらを梱包した姿は一見すると天体観測所のようにもみえる。

セシリアはその中央部分に赴き、〈ブルーティアーズ〉をへアフタヌーン・ブルーに接続した。形としてはリクライニングシートに身を預ける感じだ。

「接続完了、連動を確認。これより照準シークエンスに移行いたしますわ」

『了解』

千冬の声。セシリアは観測装置に座標を入力した。それに連動して座席と一体化した銃座が回転し、標的を追いかけ始める。超望遠スコープに映し出された破壊目標は抜身の剣のようだった。

「これがエクスカリバー……」

王の剣をその瞳に写し、気持ちを引き締め直す。これを破壊せしめ、必ず学園を守って見せると。そしてチエルシーが課したこの試験を乗り越え、きっと彼女に認められてみせる。

「見てなさい、チエルシー」

いまのセシリアにもう迷いはなかった。自分を想い、支えてくれる人を見つけたから。

でも、頭の片隅にひとつ気がかりなことが残っていた。

イギリスでチエルシーが言い放った「ヘエクシア」をご存じありますか」という言葉。

いまだにその名が何を意味しているのか、セシリアにはわからなかった。

「——エクシアとは、なんなのかしら」

そうつぶやき、何気なくスコープをのぞきこんで、ヘエクスカリバーを確認してみる。

なぜ、そうしたのか。一瞬だけそこに答えがあるような気がしたのだ。直感と言ってもいい。それは精霊せいかいの触覚を持つセシリアだからこそ、感じとれたものだった。

(それに、なんだか精霊たちがざわついている感じがしますわ)

周囲に設置された環境センサーは何の異変も報せていない。でも、スコープをのぞき、銃口を向けた一瞬だけ、精霊たちが騒いだような気がした。まるで彼女に「やめろ」と警告を促すように。

(なんだったのかしら……)

失敗の許されない作戦を前にして、気持ちがピリついているだけか。

それならかまわないが、何か重大なことを見落としている気もした。

『オルコット、どうした？ 何か問題でも発生したか』

報告がないことを心配したのか、千冬から通信が入ってきた。

セシリアは心中でくすぶる疑問をかき消した。意識のリソースを別のところに割いていては2000キロという前代未聞の狙撃は完遂できない。

「いえ、大丈夫ですわ。すこし考えごとを」

『そうか。事情は聴いている。いろいろ思うところはあるだろう。だが、いまだけは作戦に集中してくれ。私はこの職場をそこそこ気に入っている。まだハローワークの世話にはなりたくない』

千冬らしからぬユーモアに、セシリアはクスッとわらった。

「わたくしもこの学園が好きですわ」

この八ヶ月間。多くの出来事に見舞われてきたけれど、それでも良き友人にも恵まれ、素敵な初恋にも巡り会えた。この素晴らしき青春を、自分はもつともつとこの場所で、あの仲間たちと謳歌したい。

「だから、必ず守って見せます、この学園を。女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコットの当主たる、このセシリア・オルコットの名に懸けて」

『では、その紋章に恥じない活躍を期待しよう。——よし、次のシークエンスに移れ』

千冬に「了解」と返答して、機体を照準シークエンスから射撃シークエンスに移行する。

今回、狙撃する目標は2000キロ先の彼方にいる。そこまで攻撃を届かせるには、莫大なエネルギーが必要だ。そのエネルギーはIS学園の地下にある発電システムによって賄われることになっている。

セシリアは学園の動力システムにアクセスし、超高高度狙撃に必要な電力の供給を受け始めた。野太い動力ケーブルのコネクト部分がグリーンに点滅し、チャージ率が1%2%3%……と増えていく。

10%。照準システムの再確認。

20%。射撃システムの安全装置を解除する。

30%。グリップを握り直す。

40%。呼吸を整える。

50%。高鳴る鼓動を抑える。

60%。意識をクリアに。

70%。照準。

80%。管制室で誰かが成功を祈る。

そしてチャージ率が90%に達し、セシリアがトリガーに指先をかけたとき、

——突如として“奴”は現れた。

♡

◆

+

♠

IS学園の北の方角。突如として現れたその物体は、海面を割って飛び出すなり、馬のような二本足でIS学園に降り立った。10mを超える巨体。鰭のような丸みを帯びたフォルム。エイのような鋭い尾。血脈を打つ生々しい外皮膚。あたかも海中生物のような物体は、しかし電子的な光をアイセンサーに宿し、金属の歯車が軋み会うような雄叫びを上げた。

そして、背部のハッチからいくつもの小型ミサイルをIS学園に向けて発射する。

発射されたミサイルはIS学園の上空まで飛翔し、その外装をはがして、あたりに無数の小型爆弾をばらまいた。あちらこちらから火の手が上がる学園の中を、その物体は、置いてあつた軽トラックを易々と蹴つ飛ばしながら、歩み始めていく。蹄鉄のような足跡を残しながら、第一アリーナを直指して。

♡

◆

♠

アリーナ管制室。

クラスター爆弾による被害状況はすぐさま指令室にも上がってきていた。

「織斑先生。第一格納庫が被弾した模様。至る所で火災も発生！」

「手の空いている者に消火活動をさせろ。〈アフタヌーン・ブルー〉への被害はどうだ」

「こちらは問題ありません。エネルギー充填は92%まで進んでいきます」

「なら、作戦は続行だ。ただちに教師部隊を出撃させろ。アルファチームは〈ブルー・ティーズ〉及び〈アフタヌーン・ブルー〉の護衛、ブラボーチームは敵の索敵だ」

千冬の命令を受け、教師一同が血眼になって作業に取り掛かった。彼女たちは警備用ドローンと学内の定点カメラを総動員して、敵の発見を急ぐ。敵の所在はすぐに判明した。

「できました。敵、所在学園北エリアです。二番モニターに出します」
モニターに映し出された巨大な物体を見て、千冬は瞠目した。

10メートルを超える体高。曲線的な体躯。有機的な装甲。シヤチとマンタを組み合わせたような二足歩行の怪物。千冬はそれを知っていた。

「こいつは〈ヘキャノンボール・ファスト〉で見たメタルギアか……」

メタルギア。歩兵のような走破能力と、兵器のような攻撃力を持つた殺戮マシンだ。

「なぜこんな大きなものに気づけなかったんでしょうか……」

「海から現れたんだ」

海中ではレーダー波も電磁波も届かない。音波のみが頼みになる。深度のある場所を潜航されたら発見することさえ難しい。誰にも捉えられない海中から接近・上陸し、敵を強襲するための水陸両用なのだろう。四方八方を海に囲まれたIS学園にとっては厄介極まりない相手だった。

「こいつが量産された日には、海兵隊は店じまいだな。で、こいつはどこに向かっている？」

「えっと……だ、第一アリーナです!!」

悲鳴に似た真耶の報告。千冬は「だろうな……」と舌打ちした。こんなものが突如として現れた理由はひとつしか考えられない。ヘアフトヌーン・ブルーを破壊し、オペレーションヘソードブレイカーを阻止するためだ。

「ただちに、教師部隊を迎撃に向かわせる。なんとしてもコイツを食い止めるんだ!」

千冬の命令と共に教師部隊がメタルギアRAYを迎撃すべく出動した。



学園復興のために設置された仮設野营地。

ここで作戦を見守っていた私は、響いた爆音にテントから飛び出した。

「何事です……」

私が目にしたものは、立ち込める炎と煙、そして地響きを立てながら歩く巨大な物体だった。

「あれはメタルギアRAY……」

海軍で進められていたヘアーセナルシップ計画の一端として開発されたメタルギア、それがRAYだ。でも、生々しさを感じさせる装

甲のどこを探しても海軍の所属を表すステンシルはない。

「もしかしたら、こいつは……」

ある予感、いや、悪寒に支配されていると、教師部隊の<ラファール・リヴァイヴ>が見えた。メタルギアRAYを迎撃にきたのだろう。私は咄嗟に叫んだ。

「ダメです、引き返せ！」

だが、私の声は機械の騒音にかき消されて、まるで聞こえた様子になかった。

私の呼びかけなどなかったように、教師部隊がメタルギアRAYと交戦状態に入っていく。

通常ならこの戦闘、IS側に軍配が上がる。いくら現代技術の結晶たるメタルギアでも、未知の世界からもたらされた技術の結晶であるISには敵わない。戦車や戦闘機ほど容易い相手ではないけれど、4機もいれば負けることはない。そう、通常であれば。

(でも、あのRAYはふつうじゃない)

私の予感を裏付けるように、教師部隊の一機がおかしな挙動を見せた。突然、飛び方を忘れたように墜落していったのだ。さらにもう一機。次いでもう一機。戦わずして墜落していく教師部隊に私は「やはりか」と悪態をつく。

私を襲った悪寒、その正体は<怠惰>のISと戦ったときのそれだ。

そう、目の前にいるRAYは<キャノンボール・ファスト>で、<ヴェルフエゴール>を喰らったヤツだ。どんなメカニズムかしらないが、目の前のRAYは<ヴェルフエゴール>の能力を獲得している。

私は野営テントに駆け込み、通信機をひったくった。

「千冬さん、いますぐ教師部隊を撤退させてください。あのRAYは<ヴェルフエゴール>と同じ能力を持っています。ISじゃ太刀打ちできません」

『やはりか……』

通信越しでも千冬さんが苦悶を浮かべるのが判った。

IS学園の戦力はISに依存している。ISを無力化されたら、この学園はほとんど丸裸状態だ。対抗できる術がない以上、学園側は機械の怪物に蹂躪される様子をただ見ているしかできない。私でさえほとんど対抗策が思いつかず、現状に打ち拉がれていると、どこかで雄叫びが聞こえたような気がした。

重く、重く、まるで、ここから出せ、暴れさせろと訴える猛獣の。「そうだ……目には目を。歯車には歯車だ」

私はここから離れた格納庫へ視線をはせた。その格納庫にRAYに対抗できる手段が眠っている。

メタルギアREX。メタルギアRAYと同じく金属の歯車を冠する陸の王者だ。^{レックス}

「私がRAYを何とかします。千冬さんは教師部隊の回収をお願いします」

『わかった』

私は再び野営テントを飛び出し、置いてあった自動二輪車にまたがった。

エンジンを蒸かすと、ロリーナがテントから出てきた。

「私もいくわ」

私はREXの基本しか知らない。

仕様からパーツのひとつまで熟知している彼女のサポートがあれば頼もしい。

「わかりました。乗ってください」

ロリーナを後ろにのせ、再びスロットルを回す。

ロリーナは私につかまりながら、進撃するメタルギアRAYを横目で見上げた。

「まるで怪獣映画だわ」

「うれしいですか」

「これがフィルムの向こう側ならね。急ぎましょ」

私は「つかまってください」と言って速度を上げる。ロリーナは大きな胸を私の背に押し付けた。巨乳の美女と二人乗りなんて憧れるシチュかもしれないけど、いまはそんな感慨もなく、ただ瓦礫だらけ

の学園を駆け抜ける。そして格納庫の前に到着するなり、乗り捨てるようにしてバイクから降りた。

二人してREXがある格納庫へ走る。

そして、飛び込んできた光景に愕然とした。

「あら……」「そんな……格納庫が――」

倒壊していた。

おそらく先のクラスター爆弾によるものだろう。積み重なった瓦礫や鉄骨の所為で、入り口が完全に塞がっている。これじゃREXに乗り込めない。

「REX本体は無事だと思うけれど……」

もともと戦車以上の屈強さを持つ兵器だ。瓦礫の重量ぐらいじゃ壊れたりしないだろう。けど、有人機である以上、人が乗らなければ壊れているのと変わらない。

私は駆け寄って、瓦礫の撤去を試みるが、まるでびくともしなかった。とても人の力じゃ持ち上がられそうにない。文字通り、希望は潰えてしまったのか。

「くそっ、こんなところで」

瓦礫を蹴って、第一アリーナの方角へ視線をやる。

RAYはもうセシリアのところまで迫っていた。

第108話 陸の王者 対 海の覇者

メタルギアRAYの接近には、セシリアも気づいていた。

重い足音が近づいてくるたび、肌が粟立ち、気持ち焦る。敵はもうそこまで迫ってきている。セシリアはこの不測の事態にひとつの決断を迫られつつあった。

逃げ出すか、やり遂げるか。その決断を。

「わたくしは女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコット家の次期当主。ここで尻尾を巻き逃げ帰っては一族の恥ですわ」

セシリアはやり遂げる決意を固めた。

現在チャージ率は92%。遅々として進まないチャージ率に、セシリアはひたすら「早く!」と念じる。殺戮の機械はもうそこまできているのだ。なのにまだ94%。チャージは間に合いそうにない。

「もうこうなったら、いつそ……」

この状態で発射するか。セシリアの脳裏にそんな考えがよぎる。いまのチャージ率でも「エクスカリバー」を攻撃することはできる。完全破壊は達成できなくても、損傷を与えることで次の攻撃まで延ばせるかもしれない。

「セシリア・オルコット。このまま狙撃を敢行いたしますわ」

セシリアは供給システムを強制停止。トリガーの安全装置を解除した。そして、標的を蒼い瞳に写し出し、引き金に力をこめる。――が、突然、スコープの映像がブラックアウトした。

「シ、システムが!」

セシリアがスコープから視線を離すと、システムコンソールに「コア稼働率0%」の文字が表示されていた。それに伴い「ブルー・ティーズ」のコア・システムもダウンする。それこそ水を打ったような静けさに変わった愛機に、セシリアは半狂乱になった。

「<ブルー・ティーズ>! 起きて! 起きてちょうだい!」

再起動を試みるも、機体に反応はない。ブラックアウトしたコンソール画面の左上でアンダバーが点滅しているだけだ。

「一体どうしてしまったというの……」

システムと装置の点検は入念に行われたはず。

先まで完全に動いていたシステムが、急に、それも全て停止するなんてありえない。

「もしかして、アリスが言っていたくヴェルフエゴール」というISの……」

かつてアリスが対峙したくヴェルフエゴールは、ISのコアを停止させる能力を有していた。教師部隊が駆けつけてこないこと。くブルー・ティアーズへのコア・システムが停止したこと。その事実が、セシリアの仮説を証明することになった。

——こちらに近づいてくる機械の怪物はISを無力化する能力を持っている。

セシリアが恐る恐るシステムコンソールから顔を上げると、RAY^{レイ}が観客席越しにこちらを覗いていた。そして、両開きの口先を開いて咆哮を上げる。まるで「見つけた」と叫ぶように。

「ま、まるでモンスターですわ……」

圧倒的な存在感。暴力的な姿形。不快かつ不気味な鳴き声。そう、眼前にいる物体は暴虐な力で全てを蹂躪し、人々を恐怖に陥れるモンスターに違いなかった。

そのモンスターが口先を開いて、喉内をのぞかせている。喉の奥には雷のようなスパーク。それを見て、セシリアは息をのんだ。きつと喉奥で輝く雷は破壊の光線に違いない。数多の特撮に登場した怪物のように、このモンスターもここを自分もろとも火の海にする気なのだ。

『オルコット！ もういい！ 脱出しろ！』

インカムを叩いた千冬の命令にセシリアは『でも!!』と叫んだ。いま、このへアフトヌーン・ブルーを破壊されたら、へエクスカリバーを止める手段がなくなる。

『かまわん、放棄しろ！ ただちにそこから退避するんだ！』

千冬が切羽詰まった声で叫ぶ。同時にRAY^{レイ}の口腔で電光が閃く。やむを得ずセシリアは強制排除のボタンを押した。しかし、動作しない。システムダウンで固定装置が外れなくなっていた。光はなおも

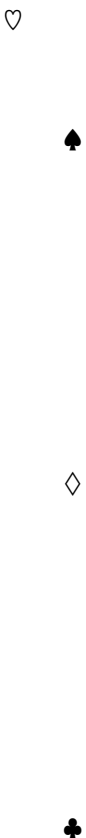
強くなる。時間がない。攻撃が始まるのに機体から抜け出せないなんて！

(もうダメですわー！)

セシリアの全身に死の予感が走った、まさにそのとき、突然、RAYへ巨大な何かがぶつかった。

RAYと同じぐらいの体高。しかし、重厚で角張った無機的な体躯。RAYに大質量の体当たりをくらわせたのは、同じメタルギアの名を冠するREXだった。

REXはRAYをなぎ倒すと、咆哮を上げた。天を劈くようなその雄叫びは、かつてこの地上を支配した暴君の王——ティラノサウルス・レックスの再来をセシリアに感じさせた。



「ギリギリでしたね」

私はREXの操縦室で胸を撫で下ろした。格納庫の入り口をふさぐ瓦礫を見たときは「もうダメか」と思ったものだ。けれど、駆けつけてくれたラウラとシャルがEOSを使って瓦礫を撤去してくれたおかげで、なんとかREXのコクピットに乗り込むことができた。

「でも、本番はここからですよ」

「へエクスカリバー」の再攻撃まで1時間。それまでにRAYを破壊しなければならぬ。

私はそうそうにREXの操縦システムを確認した。

REXの操縦システムはいたってシンプルだ。操縦桿が二本とフットペダル。それだけだ。なんでも「やつぱりロボットは操縦桿で動かさないとね」という開発者のこだわりらしい。

私は二本の操縦桿を握り直し、メインモニターでRAYを捕えた。

RAYもこちらを敵と認識し、横開きの口腔を開いていた。その奥に電光が見える。

『アリス、ウォーターカッターよ』

ロリーナからのナビゲート通信。

ウォーターカッターは、ダイヤモンドのカット等に使われる水圧の刃だ。

『大丈夫よ。REX^{レックス}の装甲はセラミックの複合装甲を採用しているわ。MBTの装甲より堅牢よ。成形炸薬にも耐えられる。ウォーターカッターなんかじゃ切れないわ』

「でも、そんなふうには見えませんか？」

私は直感で、左手の操縦桿——姿勢制御の操縦桿——を手間に引いた。

姿勢を崩し膝をつくREX^{レックス}。その上をプラズマの塊りが駆け抜けていく。

「このどこがウォーターカッターなんですか！」

私は、ロリーナに叫んだ。

『あら、改良が施されているようね。気をつけて。REX^{レックス}の装甲でもプラズマ砲は耐えられないわ。けど、安心して。RAY^{レイ}は水陸両用のメタルギア。上陸時に浮力を得なければならぬから、REX^{レックス}のような重い装甲は身に着けていない。防御力は低いはずよ。30ミリ弾でも十分なダメージを与えられるわ』

私は姿勢を立て直し、右手の操縦桿——火器管制のレバーを握る。武装選択。セクターをGAU-8（30ミリガトリング砲）に設定し、安全装置のカバーを外す。発砲。武器の名の通り、高初速・高サイクルで相手にやり返す。

だが、砲弾はあたる直前すべて歪曲してRAY^{レイ}から逸れていった。

「ダメージ云々のまえに、弾が当たらないんですけど！」

『電磁バリアー！ まるでレギオンだわ！』

「感心してない何か対策を——」

接近警報。馬のような脚力で跳躍してきたRAY^{レイ}の姿がモニターいっぱいに映し出されたかと思えば、次いで操縦席に強い衝撃がくる。REX^{レックス}が後方へ倒れ込むのが、コクピットからでもよくわかった。

「このっ……」

私は姿勢制御レバーを操作し、REXレックスを立ち上がらせる。そして、火器管制レバーのセレクターを30ミリガトリング砲から対戦車ミサイルに切り替える。発射。しかし、REXレックスの後部コンテナから放たれたヘルファイアは、やはり電磁バリアの影響を受けて左右に逸れていった。

「まずいですね。手がなくなってきた」

こちらの攻撃はことごとく防がれ、向こうには一撃で破壊できる火力がある。

まるでREXレックスを倒すために作られたような部の悪さだった。

「一体どう戦えば……」

『これはもうウルティメイトプラズマしかないわ』

私は通信をオフにした。こんな役に立たないロリーナは初めてだ。

『怪獣ジョークじゃない。どんな時でもユーモアは大事よ』

「どんなジョークでも、今は笑ってられない状況なんです。打つ手はないんですか」

『あるわ。アリス、戦いの基本を思い出して。戦いの基本は格闘よ。接近して格闘戦に持ち込めばダメージを与えられるはず』

「格闘ですって!?!」

REXレックスはもともとTMDシステムとして開発された兵器だ。格闘能力なんて必要はないし、そもそもこの巨体で格闘戦ができるとは思えない。

『できるわ。開発者が密かに白兵戦に陥った時を想定してREXレックスの制御システムに格闘用プログラムを組み込んでいたの。解析したときに見つけたわ。信じて』

「……わかりました。で、どうすれば?」

『まず接近して。捕捉したらコンソールから、モーションマネイジメントを変更するの』

よし、まずは接近だ。私は左の姿勢制御レバーをへ走行モードへ入れ、フットペダルを踏み込む。しかし、REXレックスを肉薄させても、RAYレイは軽やかな身のこなしで難なくかわしてしまう。

「……まるでアメリカのいろは歌ですね」

『素早い狐は鈍間の犬を追い越す』かしら。やはり俊敏性は向こうに部があるわね』

REXの駆動系には、超重量の本体を動かすため油圧を採用している。対して、RAYは通電によって伸縮する高分子繊維——バイオアクチュエータを導入している。これにより迅速かつ複雑な動きを滑らかに実現できる。

「これじゃ近づくとさえ難しいか」

なおも私が相手の捕捉に手を拱いていると、RAYが蹴撃を繰り出してきた。

横腹に受けたREXが体勢を崩して転倒する。さらにRAYが横っ腹を踏みつけ、畳みかけてく

「まずい、重心制御が……」

このままだと、機体を立ち上がらせられない……。

それいいことに、RAYは悠々と口腔の奥を光らせた。プラズマ砲だ。なんとか本体を立ち上がらせようとするも、こちらは重心を思うように動かせず体を起こせない。

私がどうようもなくなっていると、操縦室に通信が入ってきた。

『アリスッー』『待っている』『いま助けてあげるわ』

サブモニターに映し出されたものは、三機のEOSだった。

オペレーターはシャルとラウラ。そして鈴のよう。

「来ちゃダメですー!」

私は叫んだ。

メタルギアのパワーはEOSの性能をはるかに上回る。攻撃力も比較にならない。放たれた機銃の20ミリ弾を喰らおうものなら、一撃で致命傷だ。

『大丈夫ー』『任せろ!』『行くわよー!』

けど、三人は脚部のホイールローダーを駆使し、ジグザクに走行して銃撃をかくぐった。そして、一発当たれば終わりという際どいところを抜けた三人はREXを踏み台にして、RAYの脚に飛びつく。それを振り払おうと脚を振るRAY。脚が離れたおかげで、私はREXを立ち上がらせることができた。

「ナイスですっ」

姿勢制御のレバーを引いて体勢を立て直し、すぐさま反撃の突進をかます。だが、RAYは高分子繊維がもたらす瞬発力を利用して後方に飛び退き、この反撃をいともたやすくかわしてみせた。

「く、すばしっこいヤツ！ どうにかして足を止められませんか！」

『足……。そうだね、脚よ。二足歩行型の弱点は膝部よ。そこでRAYは自重を支えているはず。そこを狙ってみて！』

『了解した。アリス、私が動きをとめる。そのすきを狙え』

ラウラがEOSのホイールローダーの回転数を高め、再びRAYへ肉薄していく。向かってくるEOSにRAYは腕部の機銃を向けた。放たれた20ミリ弾の一発が左腕部に命中し、ラウラのEOSがスピーンする。それでも驚異的な操縦技術で姿勢を保ち、相手の足元に滑り込んだ。

「これでも喰らえ」

コクピットを開き、剥き身になったラウラがロケット弾を発射する。しかし、八〇〇度の火を噴いて飛翔したロケット弾は、相手に命中しなかった。電磁場兵器か。

「なに！ なぜ命中しない！」

「まだよー」

そこへ鈴のEOSが加速する。

鈴はラウラの機体を足台にして跳躍。RAYへ飛び上がるなり、作業用のアームで脚部を殴りつけた。その衝撃と共に大きな爆発が起こる。「形成炸薬か」とラウラが叫ぶ。マニピュレーターに爆薬を取り付け、殴りつけた瞬間に起爆するようセットしてあったのだ。

まさにリアクティブアーマーの拳版。

それを喰らったRAYが、金属が軋むような悲鳴を上げて片膝をつく。

「動きが止まった！」

だが、鈴もまた近距離で成型炸薬を使った煽りをうけ、EOSもろとも宙に放り出されていた。それをシャルのEOSがすんでの所で飛び、抱える。

「エリー、今だよー！」

シャルの合図で、私は姿勢制御スロットを〈走行モード〉に入れ、フットペダルを踏み込む。

そしてREXをRAYにぶつけて、システム画面を開く。〈モーションマネージメントの拡張／変更〉を選択。すると、リミット解除用のコマンド入力画面が現れた。

「ロリーナ、解除コマンドは！」

『→→←←↑↑↓↓×○』よ』

コンソールにそう入力する。

途端、システムのレイアウトが変化し、モーションパターンに〈オタ・コンバットモード〉なる項目が追加される。それを選択すると、REXが全身のトルクをフル回転させて咆哮した。そう、まるで秘めていた野生の本能が目覚めたように。

「シヨータムだっ！」

私は姿勢制御スロットを追加された〈格闘モード〉に入れ、モーションパターンを実行する。

直後、REXがその巨大な脚を振りあげた。格闘選手さながらのハイキックだ。

まるで機械仕掛けであることを忘れてしまったかのようなしなやかで、RAYの側頭部を蹴り倒し、次いで顎を開いて、頸に咬みつく。そして暴れる相手の腹部に自由電子レーザーを浴びせ、頸を基点に地面へ叩きつけた。

地響きのような音を立てて地にひれ伏すRAY。

その頭部を踏みしだき、私は反動制御用のパイルアンカーを下ろした。

「王の御前だぞ。頭が高めえんですよー！」

ガシユンとなって鳴って超合金の杭が降りる。頭部を砕かれたRAYは力なくその場に沈黙した。

RAYが機能停止したことで、〈ヴェルフエゴール〉の力も消えたはず

すぐさま私はコクピットハッチを開いて叫んだ。

「セシリア！ 撃て！」



「はいな!!」

セシリアは再度システムチェックを行った。動力、駆動系、伝達系、火器管制、センサー機器。停止していた〈ブルー・ティアーズ〉の機能は回復しつつあった。セシリアは〈アフタヌーン・ブルー〉のコントロールトリガーを握り直し、〈エクスカリバー〉に照準を合わせた。そして感覚を世界と同期させ、意識を拡張させていく。

そのとき、広げた意識にノイズが走り、セシリアの集中力が途切れた。

(またですわ……)

作戦前に感じた妖精たちのざわめき。訴えるように走ったノイズの感覚に、まるで弾詰まりのように引き金が固まる。いや逆だった。引き金が固まったのではない。自分の指が硬直しているのだ。

(こんなときに、何をためらっておりますの、わたくしは。やるの、やるのですわ!)

仲間たちが作った千載一遇の好機を無駄にするわけにはいかない。

セシリアは内なる自分が発する警告を無視して指先に力を込めた。すると、彼女のまえにもう一人の自分が現れた。極彩色のドレスを身にまとった〈妖精女王〉としてのセシリアは、自分の前に立ちほだかり、身を呈して発射を制した。

「邪魔をしないでくださいな」

〈ダメよ、撃ってはいけないわ、セシリア〉

「なぜですの」

〈あなただって本当はもう気づいているでしょ！ この先に何かがあるのか〉

先ほど導かれるように宇宙を見上げたことを思い出す。

それが撃ってはいけないという理由だとしたら。

「まさかへエクスカリバーに……」

啓示のように降りてきたひらめきが、セシリアからトリガーを離させる。

もしへエクスカリバーにチエルシーの言うへエクシアがあるのだとしたら……

「さすがです、お嬢様」

スコープを覗き込んだまま硬直していたセシリアが顔を上げる。その先ではくブルー・ティアーズによく似たISをまとったメイドが悠然とこちらを見下ろしていた。

♡

♣

♠

現れたチエルシー・ブランケットは、腰部から近接用のブレードを抜き、へアフタヌーン・ブルーの砲身に向けて一閃した。さらに非固定浮遊部位からソードビットを射出し、観測装置へ突き立てる。

綺麗な切断面を見せて崩れていくへアフタヌーン・ブルー。離脱したセシリアは、非情になれなかった自身の優しさを恨んだ。そのやさしさを見事に利用してみせたチエルシーは、いつもどおり済ました顔を見せた。

「さすがお嬢様です。よくお気づきになりました。驚くべき鋭さです。おかげで私はこうして作戦を阻止することができ、妹も命拾いすることができました」

皮肉ではない、淡々と語るような口調だった。

対してセシリアは淡泊にいられなかった。

「妹ですって?」

「知らないのも無理ありません。戸籍上、私に妹はおりませんから。なぜ母が出世届を出さなかったのか、わかりません。訊こうにも、母は妹の莫大な医療費を稼ぐため、体を壊し、亡くなりましたから」

セシリアは黙ってチエルシーの言葉を聞き続けた。

聞いた後は、疎外感でいっぱいだった。自分の知り及ばないところ

でそんなことがあったこと。それを誰も自分に話してくれなかったことが、ひどく寂しかった。

「さて予定通り、妹のエクシアはここを攻撃します。——さあ、どうなさいます、お嬢様」

セシリアは奥歯を鳴らした。自らを人質にして、相手の戦意を削ぐチエルシーのやり方は、見事にその効果を発揮していた。事実を告げられたいま、はたして自分が「エクシア」を撃てるかどうか甚だ疑問だった。

仮に持てたとしても、すでにチエルシーの攻撃で「ヘアタヌーン・ブルー」は、天を見上げるガラクタと化している。「エクスカリバー」を破壊する手段は潰えたのだ。

「いや、まだだ。まだ終わっていない！」

そう叫んだのはアリスだった。

アリスは「REX」の密閉型コクピットハッチを開き、チエルシーに叫んだ。

「ここには「REX」とレールガンがある」

そう言ったアリスの許に一機のISが舞い降りてくる。

赫々と燃えるような赤色の装甲。左右の武装支持架に接続された大剣。騎士を思わせる意匠。——さらに二対四羽の翼を羽ばたかせ降臨した赤騎士はまるで天使のように、アリスのそばへ寄り添った。

「何をなさる気です」

「REXに装備されているレールガンには、物質を宇宙空間に打ち出す力がある」

「まさか、自ら「エクスカリバー」の許へ」

意図を察したチエルシーがスラストアーに火を入れる。阻止する気だ。

すかさずセシリアが動く。

セシリアは、剣を抜いたチエルシーの腰にしがみつき、なんとかそれを制した。

「アリス、ここはわたくしがなんとかします。あなたは「エクスカリバー」を！」

「了解です」

アリスはREX^{レックス}を自動操縦に切り替え、ヘクスカリバー^{レックス}の位置座標を入力した。方位と射角を調整するREX^{レックス}と並んで、赤騎士を装着し、大型のレールガンに自身を装填する。終わるとREX^{レックス}が反動制御用のアンカーを地面に下ろし、砲身に電光を奔らせた。

「そして、必ずわたくしの許に戻ってきて」

おそらく今まで一番過酷なミッションになるであろうことは、安易に予測できる。もしかしたら帰ってこられないかもしれない。唯一無二の親友を失うなんて、そんなのはいやだから、セシリアは心からそう願った。

「わかりました。エクシアを連れて、必ず戻ってきます」

その通信を最後に、電磁場のローレンツ力がアリスをすさまじい力で引っ張り、打ち上げた。

——そう、宇宙へと。

第109話 星を巡る妖精たち

天井にフレスコ画が描かれた部屋。天使たちに見下ろされながら、一人の女性が鏡の前に立ち、その美しい裸体を映し出している。ピアニストのような細い指先には二種類のドレス。片や純白、片や漆黒のドレスは、12月24日のために仕立てさせたものだ。それをモニタージュ写真のように大きな乳房の前を行ったり来たりさせている。「ねえ、リサ。どちらがいいかしら」

ベッドの端に腰かけていた少女が、いじっていたスマフォの手を止め、顔を上げた。

「やっぱ、へお母さまは黒っしょ」

「あらそう?」とリリスは裸に漆黒のドレスをあてがう。

鏡に映し出された彼女は、ゴシック調の黒が醸し出す仄暗さと、血のような赤髪が織りなす、倒錯的な美貌を放っていた。悪魔とまぐわい、率いたへリリスの名にふさわしい色香がそこある。

「ママってば、ほんと綺麗よね、見てるだけでゾクゾクしちゃう。ね、上げていい?」

カメラを向けたリサに、リリスは「めッ」と指を立てた。

「リサったら、なんでもネットにアップしようとするんだから」

「だってわたしの投稿、待っているフォロワーがいるんだもん。仕方ないじゃん。ママ、わたしのフォロワー数、何人か知らないっしょ?」

400万人だからね、400万人」

「あらあら。すごいじゃない、さすがセラの娘ね」

セラ・ウエルキン。アメリカ有数のロビー活動へ女性権利団体の主催者だ。

その彼女が主催する団体の会員は約300万人から400万人。フォロワーは2000万人、支持企業は100を超える。父権社会のカウンターカルチャーを生み出した、いまやアメリカ大統領選の結果を左右するほどの有力団体である。

このへ女性権利団体へこれがこれほど有力になれたのもまたSNS（社会性コミュニケーション・ネットワーク）の力があつた。

ネットワークの発達とそのサービスの普及は、主義主張を、いつ、どこからでも、発信できる社会にした。それは人々の〈集合〉を安易にした。人々が集まり、意思が集中すれば、そこに秩序や文化が生まれる。『女尊男卑』もそうやって生まれ、社会に波及した文化的模倣子。

『癒し』を求め、〈集合〉した女たちのコミュニティから生まれた『女尊男卑』は、デジタルネットワークを媒介に波及し、やがて現実社会の女性たちの行動や思考にも影響を及ぼしていった。

この表面化と増加が、同調圧力を生み出し、世界を『女尊男卑』へ変貌させていった。

そう、すべてはデジタル上のコミュニティから始まったこと。そして、それはいまもデジタル・ネットワークを波及し、氾濫し続けている。

だから『アレ』は破壊せねばならなかった。

ネットワークを監視し、デジタル情報を検閲する『アレ』を。

だが、論理的に無敵を誇る『アレ』を破壊するには、物理的な手段を用いるしかなかった。ゆえに〈ヘクスカリバー〉を使用したのだが

——その時、ノックの音が響いた。

「失礼します」

入ってきた人物はフォーマルなパンツルックに、メガネスタイルのビジネスウーマン。絵に書いたようなファミニスト系の女性だ。女性はりリスの下着姿を見て顔を赤くした。

「し、失礼しました。お着替え中とは……」

「かまわないわ。それでどうしたのかしらん？」

りリスが微笑むと、我に返った秘書は姿勢を正した。

「はい。欧州理事会を監視していた者から報告がありました。欧州理事会は〈ヘクスカリバー〉の破壊を決定したそうです」

EUが開発した〈ヘクスカリバー〉。それが制御不能に陥ったとき、EUは「破壊」と「奪還」で意見が対立した。イギリス、オランダを主体にした親NATO派は「奪還」、ドイツ、フランスの西欧派は「破壊」を主張。その紛糾の末、EUは〈ヘクスカリバー〉の破壊を決め

たという。

「あらあら。反対派のイギリスはどうしたのかしらん？」

〈エクスカリバー〉破壊の時間を稼ぐため、イギリスに圧力をかけ、政治の意思決定を遅らせる工作を取らせていた。イギリスが反対を主張している間、「破壊」は行われぬ算段だったはず。

「イギリスが主張を覆したそうです。イギリスは表では反対を主張しながら、裏では〈亡国機業〉と通じ破壊を目論んでいたようです。その破壊が失敗したことを受け、表でも『反対』を主張できなくなったと考えられます」

「二枚舌外交だなんて、紳士ね」

他力本願だが、〈亡国機業〉の作戦に期待をしていたのだろう。

その期待が外れ、四の五の言っていられなくなった。

「で、EU軍の動きは？」

EU軍は〈白騎士事件〉を期に発足されたEUの常設軍だ。米軍にも匹敵する軍事力を有し、衛星を破壊することも不可能じゃない。

「海上から弾道ミサイルを〈エクスカリバー〉へ向けて発射するもようです」

REXより射出され〈赤騎士〉は、第一宇宙速度まで加速した。

自分の体重の何倍もの重力が襲い掛かり、表情がひきつる。さらに押し潰されるような重力加速度が脳への酸素供給を妨げて、私の視界を震ませる。高度計と速度計がさまざまに速度で増えていくようすをほとんど確認できないまま、私は宇宙へ飛び出した。

《ハニー、重力圏の離脱を完了》

「了解。慣性航行から自立航行に変更します」

《Yes my honey——イナーシャルゼロ。VASIMRON トロール》

慣性に従って飛んでいた私は、PICで〈赤騎士〉を減速させた。次いで、〈福音〉の翼を開き、各部のアポジモーターを使って姿勢を作る。回転せず、一定の姿勢を作った私は、出てきた地球を見やった。

「これが、篠ノ之束が見せたかった景色」

〈神の領域〉から俯瞰した世界には、いかなる線引きも、色分けも存在しなかった。存在しないものに囚われることの無意味さを思い知るだけの光景がそこにある。

篠ノ之束はこの景色を、世界をひとつにまとめる象徴にしたかったのだろう。

かつてアメリカが、さまざまな人種が入り乱れる国をまとめあげるため〈星条旗〉を掲げたように。

『愛国心』という社会意識がアメリカという多民族国家をまとめ上げたように、篠ノ之束は『私たちは地球という家に生まれたひとつの家族だ』という社会意識を人々に持たせて、世界をひとつにまとめあげたかったのだろう。そのために〈インフィニット・ストラトス〉は生み出された。

いま、私は未来の扉の前に立ち、新たな時代を覗いているのだろう。けれど、世界にはその扉を閉ざそうとする者がいる。私はそれを止めに行かなければならない。

「行きましょう、〈レッドクイーン〉」

《Yes my honey》

再攻撃まで一時間を切っている。これ以上、地球の壮大さに見とれている暇はない。

私は〈赤騎士〉を回頭させ、福音の翼を羽ばたかせた。



地上。IS学園第二アリーナ。アリスが昇っていった空を、チエルシーは見上げた。

「本当に行ってしまったられるとは。大胆な御方です」

「大胆？ いえ、違いますわ。大胆でもなければ、無鉄砲でもありません。彼女は一生懸命なのですわ」

どんな時でもあきらめず、最善を尽し、苦難に立ち向かう。その頑

張りにたくさんの人が救われてきた。そして惹かれてきた。その者たちが、いまセシリアの許へと集う。

「チエルシー・ブランケット。ISを解除しろ」

鈴、シャルロット、ラウラたちは、チエルシーを取り囲むように位置を取った。

見える数だけでも10近いISがチエルシーを取り囲んでいる。

一対多数の戦闘に長けたチエルシーの機体でも、すべてを相手することはラウラから見ても不可能に思えた。しかし、チエルシーは掲げたブレードを捨てようとしなかった。最後まで戦う姿勢を見せるチエルシーに、セシリアもまた銃を取る。

「先生がた、ここはわたくしに任せてくれませんか」

メイドの不届きは、主人の不始末。責任を取って自分が彼女を倒す。

セシリアなりにけじめをつける気だった。

私闘ではなく集団による暴力を望む者もいたが、いずれにしろ、アリスが「ヘクスカリバー」を止められなければ、すべての行動は意味をなさない。司令官の千冬はセシリアの自由にさせることにした。

『オルコット、もうじきおまえの誕生日らしいな。16歳になれば、もう大人と言って差し支えない。だが、大人とは責任を果たせる人間のことだ。自分の責任を果たせ』

「はい」

『全員準警戒態勢で、待機だ。だれも彼女に手を出すな』

「感謝いたしますわ」

意思を汲んでくれた担任に礼を告げ、下がる鈴たちと入れ替わる形で前にでる。

「負けんじゃないわよ」と鈴の檄を背に浮け、セシリアはチエルシーと対峙した。

「ねえ、チエルシー、もうわたくしの許に帰ってきてくれないのですかね?」

「あの方を一人にはできません。ですが、お嬢様がこちらへこられることはできません」

「わたくしはいきません」

たとえ幼馴染と対立しても、仲間を裏切りたくなかった。だからこそ、チエルシーが戻ってこないこともよく理解できた。自分が戦う理由と、彼女が戦う理由は同じなのだ。自分が譲れないのなら、相手もまた譲れるわけがない。

「では、戦うしかありませんね」

チエルシーが両手に格闘兵装を持つ。セシリアも《スターライト Mk-IV》を構えた。

「チエルシー、最後に教えてくださいね。お母様は何をお考えですか？」

「私に勝てたらお話ししましょう」

互いが鋭い眼光を交差させる。開始の合図は、破壊されたヘアフタヌーン・ブルーの砲身が出した。ガタンと鳴った崩壊の軋音を合図に、チエルシーが肉薄する。セシリアは後方へ下がり射撃の間合いを確保した。

発砲。

放たれたレーザービームを、チエルシーは腰を落として躲し、さらに間合いを詰めた。

完璧な対射撃機動。相手はこちらの射線を読み切っている。

「やりますわね。いつのまにそれほどの実力を」

セシリアは《インターセプター》を使い、迫る剣先を受けとめながら感心した。

彼女の實力は、代表候補生の自分と比べても遜色ない。いや、それ以上だった。

「わたしはアリシアさまの剣としてお仕えすべく、ずっと研摩してまわりました。そう、エクシアを助けてくださったあのときから」

「お母様がエクシアを……？」

「はい、妹は重たい心臓病を患っております。そのため莫大な医療費が必要でした。社会福祉先進国であるイギリスとはいえ、戸籍がなければ医療福祉の援助は受けられません。母は死に物狂いで働いておりました。そして母が過労で亡くなった後、残された私たち姉妹を

引き取り、医療費を工面してくださったのが、アリシアさまでした」
チエルシーは罅迫り合いの接点をずらし、相手の力を受け流す。
つんのめった体勢を慌てて正すセシリア。チエルシーは「クス」と
笑い、続けた。

「アリシアさまは、エクシアのために尽力してくださいました。再生
医療への莫大な投資。万能細胞を用いた臓器の複製、移植。その臨床
実験に必要な手続きと、各方面への働きかけ。いま妹が生きていられ
るのは、それらあつてのことです。奥様がエクシアに割いてくださつ
た労力と資金は、私などが一生働いても足りないものです」

「すべてはお母様への恩義のためだというのね」

「はい。妹も頂いた命をあの人のために使うと言っております。私も
またあの方に忠義を尽くす所存です。——さあ、話はここまでにいた
しましょう」

言葉の終わりに、剣を構える。セシリアも倣って構え直してみたも
の、格闘技術に大きな格差があることは否めなかった。格闘戦では
チエルシーが上手。この間合いで戦い続けているかぎり、自分に勝機
はない。

（なんとか射撃の間合いを——）

射撃戦に特化したくブルー・ティアーズが性能を活かすには、射
程がどうしても必要。

セシリアは機体を上昇させた。

そうはさせないとばかりにチエルシーが固定浮遊部位から剣状の
ビットを射出する。

（銃を構えるスキさえ与えてくれませんか……ッ）

背面から迫るソードビットを、回頭して《インターセプター》で打
ち払う。

直後、バックパックユニットから爆炎が上がった。怯んだすきに
チエルシーが畳みかける。セシリアは腰部のユニットを稼働させて
迎撃のミサイルビットを放った。しかし、チエルシーはビットの信管
が入る前に切り裂き、この迎撃を不発に終わらせる。

（くっ、幼馴染ひとり、満足に止められないとは）

彼女の行動はゆるぎない忠誠心に支えられている。言葉ではもう彼女を止められない。物理的な力だけが、彼女を止める唯一の方法。だが、その力が、いまの自分にならない。それを痛感させられつつあった「では、お嬢様、再びチェックです」

接近したチエルシーがブレードを振りかぶる。

セシリアの脳裏に敗北が過った。

自分が負けても、仲間が始末を付けてくれるだろう、と。――

（それじゃあまりにも情けない）

アリスは「自分がセシリアの有望さを証明する」と言ってくれた。そして、この世界のどこでもない場所に赴いた。自分のために身を粉にしてくれている。他ならぬ自分のために。そんな彼女が誇れるような友人でいたい。この想いだけはどうかやってもゆずれない。ゆずりたくない。

「だから、お願い、力を貸して、〈ブルー・ティアーズ〉!!」

そう願った次の瞬間、〈エーテリオン〉がまばゆく発光した。

それと呼応して〈ブルー・ティアーズ〉からいくつもの蒼い光が飛び出していく。

「これは一体……」

突如として〈ブルー・ティアーズ〉から飛び出した無数の蒼い光線は、セシリアを中心に規則正しい周期で弧を描き始めていた。あたかも、セシリアという星を巡る衛星のように。その軌跡がアステロイドベルトのようにチエルシーの接近を拒む。たまたまチエルシーは飛び退いた。

「何がおこったの……、これは〈フレキシブル〉?」

意図せずチエルシーを退けたセシリアもまた当惑した。

けれど、〈ブルー・ティアーズ〉は何も語らない。ただ水を打ったような静かさを讃えるばかり。セシリアは頭上で輝く〈エーテリオン〉に気づき、ようやく理解に及んだ。

（ああ、そういうことですね）

これは自分が求めていた「力」。――いや、それすら超えたものな

のだ。

おそらくは開発者ですら想定していなかったであろう、その「力」にセシリアはこう名付けた。

「BTオービタル」



青い光線を自らの軌道上オービタルに周回させるセシリアは、神秘的な光景を醸し出していた。

その光景がいつしかのティータイムを、チエルシーに思い出させる。

あれは、まだ自分がオルコット家の使用人として新人だった頃だ。紅茶の準備をしていたら、急にカップの取っ手が壊れたことがあった。奥方が気に入っていたカップだったから、彼女は震えあがった。チエルシーが恐る恐る、そして正直に申し出ると、セシリアは「きつと妖精のしわざですわ」と笑った。

最初は庇われたのだと思った。けれど、彼女の身の回りでは、たびたび不思議な事が起きた。食器が音を立てたり、戸棚が勝手に開いたり。家具や食器が物音を立てるたび、セシリアは「ダメよ」と嗜めていた。

セシリアには何か見えている。

もしかすると、それは妖精だったのかもしれない。

たとえ、そうでなくても、いまの彼女には〈妖精女王〉と呼ぶにふさわしい貫禄があった。

戯れるだけじゃない、従えるだけの貫禄が。

「お強くなりました」

泣くばかりだった少女から、優雅な女性に転身してみせた幼馴染に、チエルシーはようやく希望を見出すことができた。いまの彼女なら自分はきつと「本懐」を遂げられる。

「では、フィナーレとまいりましょう、お嬢様」

チエルシーは非固定浮遊部位から二基のソードビットを射出した。その一基を近接格闘の間合いへ侵入させる。すると、〈ブルー・ティーズ〉を取り巻くBTレーザーがオービタル上を走り、それを退けた。すかさず、背後から二基目のソードビットを突貫させるが、これに対しても青い光は反応して弾き返してみせる。
(間合いに侵入した者を自動で迎撃する防御システム、ということでしょうか)

これでは近接格闘の間合いに、身を置くことができない。チエルシーはしかたなく迎撃が働く範囲外へ後退した。それを待っていたとばかりに、セシリアが攻勢に転じる。

「踊りなさい。ブルーティーズが奏でる妖精王女のワルツで」

セシリアが翳した手を指揮者のように振り下ろす。すると、〈ブルー・ティーズ〉の衛星軌道上を周回していたBTレーザーが偏光してチエルシーへ向きを変えた。

B T最大稼働状態で発生する〈フレキシブル〉。その上位制御へオービタルを手に入れたセシリアにとって、〈フレキシブル〉の発生と制御はすでに問題ではなかった。

「土壇場での成長、さすがです、お嬢様。ですが、まだわたくしも引けません」

彼女の全力を引き出すこと。そして自分の持てる力をすべて出し切ること。

でなければ、〃本懐〃は得られない。

チエルシーは追っ手のBTレーザーを、ソードビットで防ぎ、策を企てた。

(〈オービタル〉はお嬢様が苦手とする近接格闘戦をカバーしてくる。こちらの優位は消えましたね。しかし、格闘武器しかないこちらにできることは、白兵戦を仕掛けることだけ)

そのためには、損傷を覚悟して、相手の懐に飛び込むしかない。

チエルシーは制御システムのコンソールを開いた。推進システムを選択し、制御関連のパネルを片っ端からタップしていく。スラスターのリミットを解除したチエルシーは、急降下を開始した。

チエルシーの覚悟を受け止めようように、セシリアもまた無数のレーザービームを自在に操り、チエルシーを迎え撃つ。

〈オービタル〉が動いてもチエルシーは止まらなかつた。まるで「アステロイドベルト」を突き進むような困難さでも、チエルシーは無理を承知で突き進んだ。装甲の剥離、推進装置の熱暴走、多大な損害を被りながらも、チエルシーはレーザーの衛星群を突破し、手にした得物をセシリアに振るつた。

(もらいました、お嬢様)

剣先がセシリアの頸筋を捉える。

だが、セシリアは微動だにしなかつた。

(いいえ、わたくしの勝ちですわチエルシー)

いままさに剣先がセシリアを切り裂こうとしたとき、チエルシーの機体から爆炎が上がった。それを合図に酷使した機体が、足元から壊れ始めていく。剣先もまた目前の標的を切り裂く前に、地へ落ちていった。

すべてを賭して挑んでも、あと一步のところまで彼女へ届かなかつた。

「参りました、お嬢様」

倒れ込むチエルシー。彼女の機体に戦えるだけの力はもう残っていなかった。

「いいえ、それはこちらのセリフですわ、チエルシー。見事でした」
セシリアがチエルシーを支える。そして、二人は互いを称えあうように微笑み合つた。

許より互いに「敵」と「味方」に振り分けられただけの二人。そこに憎しみの類はない。あるのは、全力を出し合つたスポーツのような清々しさだけだつた。

「これで「本懐」を遂げられます」

負けた。でも、チエルシーには何の悔しさも未練も感じられなかつた。

「これがあなたの望みだつたの？」

「はい。こうなることが私の望みでした。私たちの行いがいかなるも

のなのか、その判断はついておりました。けれど、私たち姉妹には、あの方への恩義がある。裏切りたくはありませんでした。所詮メイドにできることは、仕えることだけ。あの方に従事することでしか、その恩に報いることができない」

だから、恩義と罪悪の狭間にいた彼女は、自分の全てを賭し、敗北することで、恩義に背くことなく、この戦いから逃れようとした。

「その相手に、私はお嬢様を選びました」

「なぜわたくしを——？」

「わかりません。理由があるとしたら、あなたが友達だからかもしれ
ないわ、セシリア」

チエルシーはようやくよく表情をほころばせた。

セシリアもまた応じるように微笑みかえした。

「わたくしは、あなたの望みを叶えられたかしら」

「はい、私はやるべきことをやり切りました。あとは——」

「エクシアね」

「はい。あの子は別です。あの子は純粹にアリシア様のために戦っており
ます。あの子は病院という、とても小さな世界で育ちました。友達のいない、あの子にとって、アリシア様が全てなのです。あの子が
敗れなければ、本当の本懐は成し遂げられない」

「大丈夫ですわ。きっとアリスが止めてくれます。だって、彼女は誰
よりもやさしくて。誰よりも強いものです」

セシリアは空を仰ぐ。

アリスなら必ずエクシアを止めてくれる。そう、彼女ならば、と。

第110話 叛逆の剣くあなたの歌を聞かせてく

上空2000キロメートル。極音速飛行状態のく赤騎士が、エンジンポイント——へエクスカリバー——との交戦領域に侵入すると、ヘルメット内に警報が鳴り響いた。

《ハニー、ミサイル警報。へエクスカリバー》より中型ミサイル4基が接近中》

《銀の福音》の高性能レドーム《エンジェルハイロウ》がもたらした映像には、三角柱型のミサイルが映っていた。弾頭と思わしき部位はなく、一目で特殊なタイプのミサイルだと見てわかる。

「時間がありません。このまま強行突破します」

へエクスカリバーへ再攻撃まで時間がない。いまは迎撃している時間さえおしい。アリスが極音速形態のまま、強行突貫することを決めると、4基のミサイルが、外装を剥がして無数の小型ミサイルを吐き出した。

「クラスターミサイル」

レーダーマップを埋め尽くした無数の点に、さしもの彼女でも強行突破をためらった。

「——仕方ありません、対応します」

《Yes My honey——レーダー波、照射。《銀の鐘》可動、標的を補足》

包んでいた翼を開き、その内側に鑄込んだ32門の砲を構える。

迎撃。放った天使の羽は、飛来するマイクロミサイルを次々に撃墜していったが、

《ミサイル警報！ 数40。距離200！》

直ぐに爆炎の向こうから新たなミサイルが接近してくる。

アリスは逆推力装置で後退しながら引き撃ちで後続のミサイル群を迎え撃った。だが、墜としても墜としても、直ぐ次弾が接近してくる。警報も鳴り止まない。レーダー上に点在する機影も減っている気がしなかった。減るのはタイムリミットばかりだ。

「く、きりがない」

《銀の鐘》32門をフル稼働させても、撃ち漏らすほどの物量。かてて加え、真空状態では熱が伝播しないため、誘爆効果も期待できなかった。〈福音〉の面制圧能力を以ってしても、アリスは足止めを食わざるを得なかった。

「まずい……。このままだと時間が……」

《なら、ハニーだけ行つて》

「なんですつて……」

《ミサイル警報、8時方向、および3時方向から新たに23基。ハニー包囲される》

「フェザーチャフ！」

アリスが福音の翼を羽ばたかせると、剥離した金属片が《羽》のように舞い、ミサイルを攪乱させた。なおも翼を羽ばたかせ、周囲に羽型電子欺瞞紙をばらまく。ミサイルたちが《バカ》になっているうちに、アリスは包囲を脱し、返事した。

「大丈夫なんですか……」

《大丈夫かどうかわからない。このままだと発射時間に間に合わない。〈エクスカリバー〉の注意はこつちで引きつける。ハニーは〈エクスカリバー〉内部に潜入して、発射を食い止めて》

「わかりました。You have control!!」

《Yes My honey—I have control!!》

欺瞞紙の効果が利いているすきに、コントロールをヘレドクイーンに預ける。ヘレドクイーンは自動人形を展開し、アリス柄のテクスチャーを張り付けた。それから4基のソードビットを射出し、そのコントロールをアリスに移行させる。

「ヘレドクイーン、気をつけて」

《不思議な言葉。モノに《気をつけて》なんて》

〈ヘレドクイーン〉は笑った。

声に抑揚はなく、表情もない《彼女》だけど、アリスだけにはそれがわかった。

「確かにあなたは《モノ》かもしれませんが。でも、時に物にも魂は宿る。私は、あなたに魂が宿っていると信じています。なら、それはひ

とつの尊重すべき命です。最早、あなたは道具^もじゃない」

自分の中に「愛着」のとも違う感情がある。それはたぶん「愛情」と言つてよかつた。

だからいえる。彼女は生きているつて。

《Think You Myhoney——私にとつてもあなたは特別なパートナー、幸運を祈っている》

「了解。——騎士^{アヴァ}の聖地^{アヴァ}で会いましょう、キティ」

アリスはヘレッドクインに背を向けて、ソードビットにつかまる。ヘレッドクインは舞う羽の向こう側へかけていった。そのすきにアリスはソードビットを連れて、ヘエクスカリバーへ忍び寄っていく。幸い、小型ミサイルは人間を感知できないようだった。

♡

◆

♣

♠

攻撃衛星ヘエクスカリバー内部。剣の部位でいう鏢に当たる個所に制御管理ルームはある。そこで、エクシア・ブランクは高エネルギー相転移砲のチャージ完了時間を確認した。

搭載されているスーパーコンピューターへアヴァロンへの計算によれば発射まで残り30分。

それまで、なんとしてもあの赤いIISを食い止めなければ。

「あの人の、邪魔はさせないんだから」

息が詰まる真っ白な病室。自分の命を刻む無機質な電子音。窮屈なベッドで繰り返される果てのない生活。いつ止まるやもしれぬ鼓動に怯える日々。小さい窓から見える外界への憧れと、すり減る心に比例して増え続ける医療費。そんな世界から自分を連れ出してくれた人が、「あの人」だった。

「命を救ってくれた「あの人の」ために、必ずやり遂げる」

エクシアは火器管制のコンソールを右から左へすべてタップした。

ヘエクスカリバーは防御用の迎撃ミサイルを多数内蔵している。

エクシアはヘエクスカリバーのレーダーが拾ってきた位置情報を

元に照準を合わせた。

ロックオンしたく赤騎士は純白の翼を羽ばたかせていた。清潔なその白い翼にエクシアは吐き気を覚える。

「白は嫌いだ。——病院の匂いがするー!」

火器管制の操縦桿を握りしめ、引き金を絞る。

へエクスカリバーの外装が開く。直後、レーダーに流星群のようなミサイルが映し出された。

「どれだけ器量に富んだ兵だつわものって、無数の敵に襲い掛かれたら多勢に無勢のはず」

しかし、く赤騎士は翼を羽ばたかせミサイルの包围を潜り抜ける。腹が立った。火器管制をタップ。ミサイルを追加。無数のミサイルに群がられ、く赤騎士は少しずつ退路を断たれていった。やがて、逃げ切れず、爆風に包まれた相手を見て、エクシアは息巻いた。翼を押し折ってやった、と。

——そんな折り、警報が鳴った。

警告は17番ハッチに異常が起こったことを告げていた。確かこの近くに監視カメラがあったはず。エクシアは映像をサブモニターに表示させた。そして映った映像に瞳を見開いた。

映像には、破壊された17番ハッチと、剣状のビットが写っていた。

♡

+

♠

へエクスカリバー内部に侵入したアリスは、泳ぐように通路を進んだ。

侵入後の計画は考えていない。ともかくエクシアという少女を見つけて張り倒す。それで止まらなかつたら、自分の得意技を發揮するしかない。そう、破壊だ。武器はないが、そのときはそのときなんとかする。

アリスはへエクスカリバー内部をさらに進んだ。へエクスカリバーは思いのほか巨大な構造物だった。いくつかのユニットで構成

され、人工衛星と呼ぶよりは宇宙ステーションと呼んだ方がしっくりくる。見取り図がないと、どこに何があるのかもわからない。でも、どこへ行けばいいかはわかっている。コントロールルームだ。そこにエクシアもいるはずだ。

十字路のような接続部に出たアリスは首を左右に振った。

〈コントロールルーム〉はどっちだ。右か左か。アリスは直感で右を選択した。

「ビンゴ」

進んだ先に〈Smart Control room〉の表記。
〈エクスカリバー〉の制御室だ。

アリスは壁に張り付き、自動ドアを開く。室内に潜入すると、少女がいた。ブルネットのセミロング。華奢な体躯と幼気な瞳。手にはポケットサイズのかわいい銃が握られ、アリスへ向けられている。

「こないで」

アリスは入り口付近に身を隠しながら、相手の様子を覗いた。あいにくこちらに武器となりそうなものはなかった。

「ジャマはさせないから」

エクシアは銃口で威嚇しながら、空いた手でコントロールパネルを操作した。入り口からでは何をしているのか判断できない。アリスは動けないもどかしさを抱えながら、相手のすきを窺った。

「あの女のために罪を重ねる気ですか」

エクシアは銃を両手で構えた。

「あの人はわたしを空虚な場所から連れ出してくれた。この心臓はあの人にくれたもの。あの人にくれた命を、わたしはあの人のために使う」

「勇ましい言葉のわりに、銃口が震えていますよ。そんな蚤の心臓で何が守れるっていうんです。人を撃ったショックで心停止しないように気をつけるんですね」

「う、うるさいー」

アリスの挑発に駆られ、エクシアは引き金を引いた。大事な人がくれた心臓を悪く言われて腹が立った。

銃弾は際どいところを抜けていった。エクシアは発砲の反動で姿勢を崩していた。重力のない宇宙空間では、踏ん張りが効かない。姿勢を失い、くるりと回るエクシアへ、アリスは「いまだ」と壁を蹴った。その反作用でエクシアへぶつかる。アリスとエクシアは一緒になって、無重力空間をロールした。

何かのパネルに当たり、ようやく体が止まる。アリスはエクシアの手首を掴んで、拳銃を抑えつけた。

「は、離してー！」

「離しませんってば。あなたにへエクスカリバーを撃たせるわけにはいかないんですから」

「それなら無駄なんだから」

エクシアの表情に強気が宿って、アリスは表情をしかめた。

「無駄ですって」

「そう、わたしをどうこうしても無駄。エクスカリバーはわたしがいなくても攻撃を実行する」

「どうということです」

アリスは顔をエクシアに近づけた。

「エネルギー充填と同時に、発射シークエンスが実行されるようにも設定してある。時間が来れば、わたしがいなくてもへエクスカリバーは自動で目標を攻撃する」

「解除しなさい」

手首に力を込めてもエクシアは怯まなかった。

「一度設定したら解除はできない」

エクシアは勝利宣言のように言い放った。

おそらく虚言ではない。彼女でも攻撃シークエンスの解除は不可能なのだ。

「くっそ……」

憤りをぶちまけて、エクシアから拳銃を奪う。それを操作パネルに向けた。

「壊しても無意味だから。へエクスカリバーは継戦能力を高めるため、モジュール化されてる。一部が機能しなくなっても他で補うよう

に設計されている。この制御室を吹き飛ばしても、へエクスカリバーは攻撃を停止しない。わたしの勝ちだよ」

アリスは無言で銃を下ろした。エクシアにはあきらめたように見えた。自分を殺し、制御室を破壊しても止められないなら、もうどうしようもない。そう思ったのだろう。だが、それは違った。

「勝ち負けじゃない」

アリスはうちひしがれる様子もなくそう言い切った。

「これを撃つてしまえば、後戻りできなくなる。あなたは、外の世界を望んでいるんですよ。なら、自分に枷を科すような真似はやめなさい。どこにも行けなくなる」

エクシアから勝利の笑みが消えた。

「まさか、わたしのための……ここに来たのは……」

「私は親友からあなたを頼むと言われている。罪を重ねさせるわけにはいかない」

幸い一射目は防ぐことができた。けれど、二度目はできない。

撃つてしまえば、もう後戻りできなくなる。撃てばただの犯罪者だ。刑務所行きだ。ほとんど病院に戻るのと変わらない。閉塞的な世界からの解放を望んでいたはずなのに。

そう告げ、制御室を見まわしたあと、アリスは出口に向かった。

そして途中で振り返り、まっすぐエクシアを見据えた。

「いいか、エクシア・ブランケット。あなたは誰よりも命の重さを知っているはずですよ。それを奪うことの意味が理解できるなら、こんな殺戮に手を貸すのは終わりにしなさい」

それだけ告げて、制御室を飛び出していく。意地でもへエクスカリバーを止める気なのだ。ほかならぬ自分と、――親友のために。

エクシアは縛り付けられたように動けなくなった。重力はないはずなのに、体が重く感じる。

きつと心が命の重さを思い出したからだだった。



一方地上では、

〈デウス・エクス・マキナ〉から届けられた一報が、アリーナ管制室をどよめかしていた。

「EU軍がミサイル攻撃を！」

母から報告を受け、千冬はデスクをバンと叩いた。

『EU理事会の〈エクスカリバー〉の破壊命令を受けて、〈モルドレット〉級ミサイル巡洋艦から先ほど発射されたそうよ。コードネームは〈クラレント〉。UGM-133 トライデント IIを改良した、衛星攻撃可能な弾道ミサイルらしいわ』

「こちらも作戦を展開中だぞ！」

『状況を把握していないとは思えないけど、この作戦に懐疑的だったことは間違いないわ』

「承認されていないということか。だから、より確実な方法を選んだ。着弾までどれくらいだ」

『おそらく10分もないわ。早く伝えないと』

千冬は〈赤騎士〉へ通信を繋ぐように真耶へ命じ、指令席にどきつと腰を下ろした。

そして、どうか間に合ってくれと、手先を汲んで、肘をつく。三秒後、通信経路が開かれた。

「アリスか」

だが、応答したのはアリスじゃなく〈レットクイーン〉だった。

《No, Brunhild——こちら、レットクイーン》

「レットクイーン」でもいい。よく聞け。EU軍が〈ソードブレイカ―〉の失敗を受けて〈エクスカリバー〉の破壊に踏み切った。いまそちらに弾道ミサイルが向かっている。早急にアリスへ伝えてくれ」

《現在ハニーは単独で〈エクスカリバー〉の内部に潜入している。いま連絡は取れない》

「くそー！」

千冬は外聞もなく大きな悪態をついた。

すべてが悪い方向に転がり始めているとしか思えない魔の悪さだった。

(くそ、あいつに何かあったら、一夏になんとさえいばいい……)

絶望的な気分になって頭が項垂れる。問題は頭上にあるのに顔を上げられない。

千冬が悲観的な思いになりかけていると「レッドクイーン」が言った。

《Don't worry——ハニーは私が守る》

千冬は項垂れかけた頭を上げた。

機械の、抑揚に欠いた音声だったのに、千冬には決意に満ちているように感じられた。

《銀の翼》は使用できないけど、《エンジェルハウロウ》がある》

〈銀の福音〉は、ミサイル防衛に特化したIS。装備する天使の輪——高性能レドーム《エンジェルハウロウ》なら、弾道ミサイルを補足することも可能だろう。

だが、その後のことを「レッドクイーン」は何も言わなかった。

ゆえにわかってしまう。わかってしまっても、千冬はこう言わざるを得なかった。

「すまない。たのむ」

♡

♠

◇

♣

止める手は何も思いつかなかった。停止させようにもまず構造が判らない。どこに何があつて、どういう役割があるのかさっぱりだった。わかつてても止める手立てをみつけれられるかどうか。破壊するにしても、手持ちの火力ではほとんど無理だろう。

(せめて、赤騎士があれば——)

だが、連絡を取っている時間はない。発射の時間が近づいている。時計を見る。残り15分。いまは「レッドクイーン」と連絡を取るより「エクスカリバー」を止める方が先決だ。

「けれど、どうします。っていうかどつちです」

4つの通路が交差する中央に出て私は困り果てた。へエクスカリバーは広大な建造物だった。どちらにいけばいいのかさえわからない。困っていると、後方からエクシアが追ってきた。阻止するためか。いや、そのような気配は感じられなかった。

「こつち。ついてきて」

私を追いにぬいて、先を行くエクシア。案内をしてくれるらしかつた。

エクシアの心変わりに私は何も問わなかった。問う時間もなかった。文字通り、右も左もわからないまま、彼女を信じることが得策だと思った。

「で、どこへ向かっているんです?」

「こつちにへエクスカリバーを制御するコンピューター室がある。それを止めれば発射を止められるかもしれない」

訪れた扉の前で、エクシアは生体端末に光彩を重ねた。ピツと青い電子光が灯ってロックが解除される。開いた先にあつたものは無数のハードフェア群だ。半透明な演算素子が柵のようなベイに所狭しと差し込まれている。それらを真つ赤な室内灯が照らし出している。一面赤色に染まるそこは、まるで血塗られたような場所だった。

「このスーパーコンピューターへアヴァロンは、無数の演算ユニットから構成されてる。それをばらばらにすれば、情報資源を失って、へエクスカリバーの演算能力が低下する」

結果、発射に必要な計算を行えず、停止する。

言つて、透明なパーツを引き抜き始めたエクシアに、私も倣つた。「理屈はわかりましたが、これ全部で何個あるんです?」

「全部で256個ある」

「256個を全部ですか……」

一個の素子を外すのに15秒弱。

全部外すとなれば、3840秒。およそ64分も係る。到底間に合わない。

「全部外す必要はない。何個か外せば、演算リソースが足りなくて処

理エラーが出る」

「何個って何個です」

「わかんない。10個かもしれないかもしれないし、100個かもしれない」

つまり、停止するまでひたすら演算素子を抜き続けるしかないということだった。

ほとんど賭けだった。だが、やるしかない。私がベイの演算素子に手をかけると、アナウンスが鳴った。

《ハニー、聞こえる》

〈エクスカリバー〉内に流れた声は、〈レットクイーン〉の声だった。

《いま、〈アロンダイト〉を中継して〈エクスカリバー〉内のシステムにアクセスしてる》

〈アロンダイト〉とはチエルシーの専用機か。それを経由して〈エクスカリバー〉のシステムにアクセスしている？ セシリアは大事なものを取り戻せたのだろうか。それを確かめる間もなく、〈レットクイーン〉は矢継ぎ早に言った。

《時間がないから、よく聞いて。欧州理事会が〈エクスカリバー〉の発射を阻止するため、海上からの弾道ミサイルを発射した。いまここへ対衛星の弾道ミサイルが向かっている》

ナタルの助言が脳裏を過る。「作戦が失敗したら、EU軍が動く可能性がある」と。

〈ソードブレイカー〉の失敗を受けて動いたのか。

「く、もしかしたら止められるかもしれないのに……」

《この作戦は確実性が低い。懐疑的だった。EUは承認していなかった》

成功を疑問視する気持ちは解らなくもない。人間大砲で攻撃衛星を止めようなんて、考えるのはアメリカぐらいものだろう。私も無理は承知の上だった。それでもなんとかここまで漕ぎつけたのだ。それを爆薬で全部をなかつたことにされる。あんまりといえば、あんまりすぎる。

「迎撃は！」

〈赤騎士〉には《福音》の装備——ミサイル迎撃用の装備がある。
《エンジェルハウロウ》なら、弾道ミサイルを補足できる。《銀の鐘》なら迎撃することも。

《先の戦闘で《銀の鐘》を損傷した。現〈赤騎士〉にミサイルを迎撃できる装備はない》

「くそ、着弾まであと何分！」

迎撃はできないなら、せめて脱出を……。

《既に〈クラレント〉は最終段階ターミナルに移行中》

全身の血が凍ったかのように熱が消え失せた。それじゃ脱出の暇すらない。

余命宣告にしてはあまりにも短すぎる時間だった。

「必ず帰るって約束したのに……」

《安心して、ハニー。あなたに約束は違えさせない。私があなたを地上へ生還させる》

いつもの抑揚もない声音。それが逆に「彼女」の決意を感じさせた。

彼女が何をやろうとしているのか、考えるまでもなかった。

「あなたもしかして……」

《Yes My honey——。そう、これは報告じゃない。お別れを言いに来た》

「レットクイーン……」

《私はあなたから多くのことを学んだ。生き物の美しさ、命の尊さ、そして、「愛」とは何か。愛とは自分の何か——時間やお金や労力、時に命を、誰かのために犠牲にできる勇氣のこと。私はあなたを愛している。だから私はいく。——あなたは生きなさい》

生きなさい。その言葉が深く胸に突き刺さる。

きつと、亡き母がその間際に残した言葉と同じだったから。

《いままでありがとう》

アナウンスが切れる。

安堵する場面だったのに、私は胸が苦しくて、撫でおろすことができなかつた。たかが機械。されど機械。そう割り切れなかつた。

きつと、彼女の行動が命令されたものじゃないからだ。機械が命令で履行するものとは違う、自らの意思によるものだからだ。彼女は自分で考え、私のために散ることを決断した。その尊さで胸が痛かった。「何が、ありがとうございますか。こっちのセリフです」

目がかすんで前が見えなくなる。無重力だから涙はこぼれてくれなかった。それでも作業に戻ろうとして——手が途中で止まる。想像以上に堪えているらしい。そんなへこたれる私に何か聞こえてきた。

Daisy daisy give me your answer do

歌だ。それも聞いたことのある歌。なんだっけ、この歌は。

I'm half crazy, All for the love of you!

そうだ。ヘレッドクイーンと初めて会ったとき、口ずさんでいた歌だ。

It won't be a stylish marriage, I can't afford a carriage

私がまるでHALだと言ったら、彼女は「私はウソをつける」と得意げに言った。

But you'd look sweet on the seat at

ヘレッドクイーンが歌っている。歌ってくれている、私を勇気づけようと。

Of a bicycle built for two

そうだ。へこたれている暇はない。彼女の「意思」が、愛が、勇気が、私の未来をかえてくれた。

相棒がくれた時間を無駄にするわけにはいかない。

ハニー、がんばって。あなたならできる。

やがて、どこかで「赤い星」が「地上から来た星」とがぶつかって瞬く。

《さようなら》。そんな声がして、言葉が宇宙に広がっていく。歌は

もう聞こえなくなった。

〈エクスカリバー、目標攻撃まで残り5分〉

ぐっと込み上げてくる激情を飲み下して、私は作業を再開した。

メモリを外し、コードを抜いて後方に投げ捨てる。すかさず次の作業に取り掛かる。

何度も何度も。ひたすらに。早く止まれと念じながら。

〈エクスカリバー、目標攻撃まで残り4分〉

アナウンスが、私を焦せらせる。次でおわるかもしれない希望。間に合わないかもしれない絶望。明確なゴールがわかないために、希望と絶望が胸中でせめぎ合う。

〈エクスカリバー、目標攻撃まで残り3分〉

私は「まだですか」と死に物狂いの形相でメモリを外す。止まる気配はない。

あと何個だ。あと何個でシステムをシャットダウンできる。

〈エクスカリバー、目標攻撃まで残り2分〉

「くそ、とまれ、とまれってんですよ!!」

相手が無情な機械だと判っていても、そう怒鳴らずにはいられなかった。ここで撃たせてしまったら、撃つことをやめたセシリアの決断も、ナタルたちの協力も、〈レットクイーン〉の犠牲も意味がなくなる。

〈エクスカリバー、目標攻撃まで残り1分〉

「もう、だめなのか……」

残ったメモリユニットはまだ200以上ある。停止の兆しが見えず、泣き言のような弱音がこぼれた。だが、意外にもエクシアは取り乱していなかった。ミサイル攻撃を告げられた時でさえフラットだった。

「わたしね、ここにいと落ち着くの。——わたし白い場所が嫌いな。病院とか。真っ白な場所は“死”を強く意識させられる。でも、赤色は好き。赤色が連想させてくれる血や炎は、“いのち”を強く意識させてくれる。だから、あなたの言葉には“生きることの重さ”が感じられた」

エクシアは「あなたは？」と訊いた。私は頷いた。

「私も自分の色が好きです」

社会から見放された私は、人より生きることが困難だった。そんな自分を奮い立たせるには情熱が必要だった。だから、それを連想させる赤を自らのパーソナルカラーにした。白色は掲げなかった。それはまるで生きることにより「白旗」を振ってしまうように思えたから。生きることは、あきらめないこと。私はそれを思い出した。

〈エクスカリバー攻撃30秒前〉

29、28、27、26……攻撃のカウントダウンが始まる。

もういくつ外したかわからないけど、時間的に外せるメモリは多くなかった。せいぜい外せて二個。私はそのうちの一個を持ち、エクシアに「もう一個、持て」と命じた。

「これで最後です。セーのっ！ で、外しましょう。あとは神頼みです」

「知っている？ 地球は青かったって言ったガガーリンは「神はいなかった」って続けたんだよ」

「でも、デウス・エクス・マキナここには機械仕掛けの神がいる。——行きますよ」

私は最後のメモリーユニットに手をかける。エクシアも倣う。そして、私たちは「セーのっ」と声を合わせて、メモリを引き抜いた。急に室内が暗くなり、非常灯に切り替わる。システムは——

第111話 聖夜に悪魔が踊りて

12月24日。イギリス・スコットランド。リーランド城。ここはアリシア・オルコットの母が存命であったころ、社交の場として購入した城だった。娘アリシア・オルコットが家督を継いでからは、年に数回ここで財界の夜会を開き、一晩で膨大な金を動かしていたという。ここはまさにオルコット家の力を象徴する場だった。

セシリア・オルコットも、またこの城で有力者をもてなしていた。集まった顔ぶれは、エネルギー関係、バイオ、不動産、通信、物流、医療、IT、さらには政治家にいたるまで、実に疎^{まは}らだ。年齢も幅広く、いま挨拶をかわしている夫人もセシリアより三〇は年上に見えた。年齢相応の衰えを化粧で隠した、すこしばかり虚栄心が強そうな女性だ。

「マダム、ご機嫌いかがかしら」

セシリアはドレスの端をつまみ、優しく頭を垂れる。

「これはこれはセシリアさま。なんとお美しい御姿で」

青色を基調にしたプリンセスラインのドレスは、彼女の清らかさを表しているようだった。

同時に、今の彼女の心境を表してもいるようでもあった。

先刻のヘエクスカリバー事件、その刃がヘIS学園に振り下されることはなかった。つまり、攻撃は阻止されたのだが、アリスの帰還は未だ報告されていなかった。EUが敢行したミサイル攻撃もあつて、気持ち^{ブルー}が憂鬱^{ブルー}になっている。

（大丈夫、彼女は強いんだから）

シャルロットが継母にさらわれた折り、アリスは言った。信じることも、また絆だと。

だからいまは、彼女を信じて、自分の仕事に専念する。

「ありがとうございますわ、マダム。それだけに、この姿を両親に見せてあげられないことが、とても悔やまれます」

言つて、セシリアの胸中に複雑な感情が渦巻いた。

母が生きていた。それは喜ぶべきことだったけれど、ヘエクスカリ

バーの一件がそうさせてくれなかった。確かに母は改革的で野心家だったけど、それは誰かのためであつて、やさしさだったはず。

母は何をしたいのだろうか。

母の考えが理解できず戸惑っていると、夫人がこちらの様子を覗つてきた。

「事故のことはとても残念でしたわ。あなたもさぞ大変だったでしょう」

「はい。けれど、支えてくれる人がいましたから。おかげで今日という日を迎えることができましたわ」

「そう、やっぱりそういう人がそばにいてくれると心強いものよね。そう思つて、このたび16になられるセシリアさまに、良いお話を持つてきましたの」

セシリアはまただと思つた。

今夜でセシリアは16歳。イギリスの法下、結婚ができるようになる。そのため挨拶する先々で縁談を持ちかけられていた。そのどれもこれもに政略結婚の意図が見え据えていて、セシリアは心底うんざりした気持ちになつていた。

「いえ、わたくしはまだ……」

「あら、家督を継ぐなら、そういつたことも考えないといけませんわよ。ごきようだいもおられないんですもの。話だけでも聞いてくださいまし。——ほら、トーマス、こつちにいらつしやい」

夫人に呼ばれて、パーティー会場の奥から一人の青年がやってくる。

金髪でカールの入った短髪。目じりの下がった中性的な顔立ちで、優しい雰囲気な男性だ。換言、気弱にも見えて、頼りなさが全身から滲み出ている。いかにも気の強い母親のいいなりになつていそうだった。

「セシリアさまよ。あいさつなさい」

「はい、ママ。——お、お初にお目にかかります、ト、トーマスです」
恥ずかしがっているのか、彼はセシリアと視線を合わそうとしなかつた。

いじらしいと言えば、いじらしい。だが、セシリアは苦笑した。儂げな印象は、人によつては母性をくすぐられるかもしれない。だからこそ、男性に「男らしさ」を求めるセシリアの心は動かなかつた。「自慢のせがれですの。どうかしら？」

セシリアは返答に困つた。

母が事業を拡大させてきたため、懇意にしている企業や人間はたくさんいる。自分はまだ経営者として若輩者。今後のオルコットを考えると、経験豊富な大人の助力は必要。かといって受ける気にもならず、返事に困つていると、チエルシーが霧のように現れた。

「お嬢様、そろそろ」

差し出された助け舟に、セシリアは飛び乗つた。

「そうですね。もうしわけありません、マダム。他の方へのあいさつもありますので、このへんで失礼させていただきますわ。縁談の話はまた今度ということでは」

相手の返事を待たず、そそくさドレスを翻す。

悔しそうに地団駄を踏む夫人を背にして、セシリアは「やれやれ」と肩で息をした。

「ありがとうチエルシー。助かりましたわ」

「いえ」

チエルシーは恭しく頭をたれる。

〈エクスカリバー〉の一件を終えたあと、チエルシーは今まで通りセシリアのメイドとして雇われていた。セシリアが「監視」を名目にそう願ひ出たのだ。千春もそれを了承した。全てが元通りになつたわけじゃなかつたが、今の二人に険悪なムードはない。

「それにしても嫌になりますわ。次から次へと」

「仕方ございません。エネルギー、バイオ、不動産、通信、物流、医療、IT、さらには政治家にいたるまで。彼らをオルコット・グループは財力で支配してまいりました。その総帥たるオルコット家の血筋に加わることができれば、安泰は約束されたようなもの。良縁を結びたいという輩は必ず湧いてまいります」

セシリアもそれは理解している。覚悟もしていた。しながら、こう

も次から次へと望まぬ求婚をされ続けたら、さすがに嫌気もさしてくる。もし普通の家庭に生まれていたら、もっと自由に恋愛ができただろうか。そう思うと、この瞬間だけは、自分の生まれが憎らしかった。「こんなことなら露払いでも用意しておくんでしたわ」

セシリアは城内の二階フロアに視線をやった。そこにはもうひとつパーティー会場が設けられている。セシリア個人が招待した客人用のフロアだ。一階のフォーマルな場とは違い騒ぐための会場とあって賑やかな声が聞こえてきていた。

自分もあの場で友達とはしゃぎたい。そんな思いから眺めていると、二階から一人の男性がこちらを見下ろしていた。一夏だ。セシリアに気づいたのか手を振ってくる。セシリアも手を振りかえした。

俺に手を振り返すと、セシリアは再びチエルシーさんと会場へ消えていった。

「忙しそうだな、セシリアの奴」

と、言ったのは箒だ。手には二つのオレンジジュース。そのひとつを受け取ると、鈴とラウラ、シャルロット、簪がこちらにやってきた。「家長として、いろいろ挨拶して回らないといけないのだろう。集まった人物もその界限では有名な人物ばかりみたいだしな」

と、ラウラが二階から会場全体を見渡す。

大理石のフロアで、豪華なシャンデリアに照らされながら、紳士淑女が演奏に合わせて踊っている。二階から望む光景は、まるで中世の舞踏会を彷彿させる、煌びやかな世界だった。とても16歳の誕生日パーティーとは思えない。

「あんたの時とは大違いね」

カラカラと笑う鈴に、「うっせ」と一夏も笑い返す。

「僕はこっちの方が好きだけどね」

シャルロットがクルッと自分たちの会場を見渡す。

一階のフォーマルな雰囲気と打って変わって、ここは俺のような庶民でも楽しめるようフランクな仕様になっている。年齢も十代が多

く、服装もカジジュアル。料理もジャンク系が多く、社交パーティーと呼ぶよりは、学生の卒業プロムに近い。俺も気がねないこちらの方が好みだったけど、いまは楽しめないでいた。

「そういえば、アリスはまだ来てないんだよね……」

宇宙へ飛び出していったアリスとは、未だ音信不通のままだった。生死もわかっていない。E.U軍が行ったミサイル攻撃もあって、今日にいたる一日も、心が休まる日がなかった。

沈んだ声音を出したシャルロットも、手にある料理がほとんど手つかずだ。

「そう泣くな、シャルロット。ほら、このローストビーフうまいぞ」

「いらない。いまは何も喉を通らないもん」

「だが、今日まで何も食べていないだろ。何か口にした方がいいんじゃないか」

「……そういう筈だって、オレンジジュースしか飲んでない」

「簪、あんただって顔色がよくないわよ？」

「……血色が悪いのはもともと。あまり外に出ないからビタミンDが足りてないんだって」

「絵に描いたようなもやしっ子ね。あんたこそ、もっと栄養、摂った方がいいんじゃないの、ほら」

「……あなたのほうこそ、栄養をもっと取ったほうがいい」

「あんた、いまだこ見て言ってる？ 余計なお世話だからね」

いつもならこの手の話題にガーと吠える鈴だが、今日はおとなしかった。

みんな、アリスが心配で食欲がないらしい。

かくいう俺も、いま欲しいものは食い物じゃなく、安否情報だった。

「母さん、アリスから何も連絡ないのか？」

俺は千冬姉同伴でパーティー会場を訪れていた母親にたずねた。イブニングドレスの姉と、マーメイドドレスの母からは艶やかな色気が醸しだされていたが、姉の手に抱えられた黒いケースは異様に映った。祝いの場に相応しくない剣呑さがある。

「いいえ」

母さんが首を横に振るうと、背後から宥めるような優しい声が出た。

「大丈夫ですよ。あの子は簡単にやられるような子じゃありません」
見やれば、赤いノーブルドレスを身にまとったローズマリーさんが立っていた。腰のコルセットには炎を象ったヘフランベルジュが添えられていて、千冬姉と同様に物々しい気配を放っている。隣には、白いフォーマルスーツのロキもいた。

「なんだ、おまえも来ていたのか」

ロキは「ローズマリーに同伴させてもらった」と、一階フロアを見下ろした。

「この会場には、各企業の重鎮も集まっているからな」

彼の眼下では、ドレスやタキシードに身を包んだ投資家や実業家たちが入り乱れていた。これから宇宙開拓という大きな事業を手掛けようとしている彼は、その大物へ顔を売りに来たのだろうか。

「もつとも、それはついみたいなものだが」

「どういうことだ」

俺は手のオレンジジュースに口をつけようとして、

「『リリス』が現れるかもしれません」

その手を止める。

「〈女尊男卑〉の世界を作り出した元凶が、この場所に？」

一瞬だけ理解が及ばず啞然とするが、冷静に考えてみれば、不思議なことでもない。

リリスの正体がセシリアの母親だというのなら。

「もしかして娘を祝いに？」

「いえ、違うでしょう。この場所はリリスにとって、『始まり』のコミュニケーションなのです」

始まりのコミュニケーション。果たして何がここから始まったのだろうか。解らないが、リリスがこの場所で、何か再び始めようとしていることは肌で感じられた。

「——さて、きたようです」

鋭利な感覚を持つローズマリーさんが会場に続くテラスの向こう

側に視線をやる。

次の瞬間、会場に異変は起こった。

始まりは大きな振動だった。次いで巨大な物体が歩いてくるような地響き。鳴りやむと二階のテラスに続く扉が開き、月光と夜風が城内に差し込んだ。何かの余興かと集まる人たちのまえに、“彼女”は姿を現した。

「みなさん、ご機嫌はいかがかしら」

漆黒のウエディングドレス。マリアヴェールに包まれた素顔。この世界に新たな秩序を打ち立てた秘密結社へリリースの最高権力者は、テラスの窓辺からパーティー会場を見渡した。

一夏たちも、集まった人ばかりを掻き分けながら、リリースの許に駆け寄った。

「おまえがリリース——」

下からテラス上のリリースを見あげる。

文句は山ほどあったのに、名前を呼ぶだけで精一杯だった。それなりに修羅場を潜って、胆が据わったつもりだったが、違ったらしい。

「あら、これは、これは、はじめましてかしら、織斑一夏くん」

リリースがふわっと一夏の前に降り立つ。同時に千冬が持ち込んだケースを蹴った。飛び出したブレードを握って臨戦態勢を取る。ローズマリーもフランベルジュに手を添え、ロキの前へ。それに遅れること瞬数おいて、箒たちも専用機の展開体勢に入った。

会場が一瞬にして緊迫した空気に包まれる。ただリリースだけは微笑みを絶やさなかった。

「あらあら。困ったわね。これじゃゆっくり話もできないわ」

身構える一夏たちに、リリースは軽く手を挙げてみせた。それを合図に、巨大な物体がテラスからこちらを覗き込んでくる。龍を思わせる頭部。鋭く生えそろうた牙。山脈のような氷柱の背びれ。それは――

「ヘレヴィアタン……！」

〈レヴィアタン〉。先月、代表候補生・国家代表をして、IS学園を壊滅に追い込んだISだ。

圧倒的だった戦況が一瞬で覆った。

かてて加えて、会場には多く来客がいる。誰も迂闊には動けなくなった。

「うふふ、みんないい子ね。この子のことをよく知っている。——さて、織斑一夏くん」リリスは手を差し伸べ「こうして顔を合わせたのも何かの縁。一曲、わたしといかが？」

「ダンスは踊れる？」と差し出された誘いの手をしばらく見つめる。

警戒というより、踊り方がわからず戸惑っていると、リリスはフツツと笑んで一夏の手を引いた。そして、彼の腰に手を添え、楽団に合図を送る。奏でられるワルツの音楽に乗せられて、一夏も見よう見まねでステップを踏んだ。

「そうそう、上手よ、織斑一夏くん。私がリードするまでもなかったかしら」

今まで男役を演じていたリリスは「じゃあ、私の腰に手を回してみて」と一夏を誘った。

言われた通り、リリスの腰に手を添える。密着姿勢の所為で、胸へ行きそうになる視線を、ぐつとこらえて三拍子を刻む。即興の拙いリードだったけれど、リリスは楽しそうにと微笑んだ。

「うふふ、ちゃんと踊れるようね。じゃあ、このまま本題に入ろうかしら。——さて、織斑一夏君、あなたの活躍は聞き及んでいるわ」

一夏はワルツの三拍子を刻みながら「そ、そりゃ、どうも」と答えた。

「私たちは、当初、あなたに脅威を感じていなかったわ。たとえば、ISを使えたとしても、それは些細なことではしかない。なぜなら、あなたは無知で無謀、感情的で愚直的な人間だったから。利口でも狡猾でもなく、野心も情熱も持ってなかった。そう、すこしばかり正義感の強い、どこにでもいる普通の少年だった。だけど、そんなあなたを彼女が変えた」

「アリスのことか？」

「ええ。あなたは、イギリス代表候補性との決闘で『戦い方』を、V T システム暴走事件では『戦い』の精神』を教わった。調べることに、考えること、行動すること。そして、勇気を持つこと。あなたは彼女から多くの事を学び、あなたは強くなった。その集大成がヘキャノンボール・ファスト」の優勝ね。おめでとう」

相手のゆったりした口調に思わず「ど、どうも」と反射的に返してしまう。

緩んだ気を一夏は引き締め直した。

「それが、おまえにとつて残念なことなのか」

「ええ。ヘキャノンボール・ファスト」であなたが雄姿を見せたことで、冷たかった社会が熱を持った。希望と言ってもいいわ。具体的な数値としても現れている。あなたがヘキャノンボール・ファスト」で優勝した日、I S の関連企業の株価が上昇して、東証の日経平均株価は今年の最高値を記録したの。エコノミストはこの現象を『イチカノミクス』なんて呼んでいるそうよ、ふふ」

一夏はなんだか恥ずかしい気持ちになつてみじろぎした。

勝手な名前をつけてくれたもんだぜ。

「それはさておき、景気とは、人の気持ちなの、織斑一夏くん。人が未来に展望を持てるとう景気になつて、将来に不安を持つと不景気になるの。政治家は金回りをよくすれば、景気が良くなると信じているけど、そうじゃないわ。必要なのは心の安寧。そう、あなたは、いまある社会の希望になりつつある」

「だから、消しにでもきたのか？」

「いずれね。でも、それはいまじゃない。わるいことは、見つからないようにしないと」

リリースはワルツをやめて、細い指先で一夏の顎を持ち上げた。

蒼い瞳の奥にあつた狂気にふれ、一夏の身体が委縮する。——と、その手に一刃が振り下ろされた。リリースは弾かれたように手を引く。斬撃を振るつた筈は、一夏を背後に隠し、リリースと対峙した。

「鈴」

「わかつたわ」

幼馴染が連携を取って左右から挟み込む。

《空割》と《双天牙月》の挟撃を、リリスは背中から繰り出した漆黒の翼で打ち払った。それから流れるように箒たちを捕え締め上げる。すかさず簪が荷電粒子砲を構えるが、シャルロットがそれを制した。電磁波をばらまく荷電粒子砲は、観客への悪い影響を及ぼしすぎる。変わってシャルロットが12.7ミリ砲のトリガーを引いた。

「ごめんね、セシリアー！」

だが、銃弾はリリスを歪曲して逸れていった。リリスは人差し指を左右に振るう。

彼女たちでは手に負えないとみるや、千春はロキと顔を合わせた。意図を汲んだ千冬とローズマリーが得物を手に構える。

「あらあら、困ったわねえ。今日はそんなつもりじゃなかったのだけだ」と

リリスは漆黒の翼を二対四翼に増やし、ばたかせた。

最強格のふたりがそれと対峙する、——と、金髪碧眼の少女が人ごみを掻き分けながら現れた。

「お母さま！ もうやめてくださいませ！」

そう叫んだのはセシリアだ。

リリスは漆黒の翼を閉まって、娘のまえに立った。

「お母様……。そう、もう知っているのね、セシリア」

そして魔法を解くように姿を変える。

腰まで届く金髪。敏く清んだ碧眼。セシリアの知る死んだ母の姿がそこに現れ、もう会えないと思っていた切なさ、胸中に込み上げる。瞳に涙を浮かばせる娘の涙を掬い、母は髪を撫でた。

「それはできない。おまえの頼みでも」

「一体お母様のなにか、そうさせるというのですか……」

「愛した親友の存在だ」

まっすぐな、そして正直な言葉だった。

変身を解いて語ったことばに嘘偽りは感じられなかった。

「おまえにも、わかる時がくる。いえ、解かりかけているはずだ」

セシリアはアリシアから視線を逸らした。母は娘の心中を見透か

していた。

「もし親友がこのまま帰らぬ人となったら、おまえは彼女が守ろうと
していたモノを、守ろうとするだろう。私も同じ。大切なものを失え
ば、おまえもいずれ、私と同じようになる」

セシリアは言葉に窮す。否定するには、母の気持ちが解かりすぎて
しまった。

もはや、セシリアにとってアリスは自分の一部に等しい。過去の人
として簡単に整理できる存在じゃなくなっている。アリシアにとつ
てメアリーがそうであつたのならば、いや、そうだったに違いないか
ら、セシリアは母が理解できた。

セシリアとアリシアは同じ境遇にある。——そう思ったのなら、そ
れは大きな間違いだ。彼女とアリシアの間には決定的に違うことが
ある。

「勝手に殺さないでくれますか？」

そう、まだセシリアは親友を失っていないということだ。

響いた苦笑いが、会場の視線を一か所に集める。視線の先には、車
椅子を押す一人の少女。

アリシアが慕った親友メアリー・ライオンハートの遺児アリス・リ
デルだ。

アリスは、エクシアを乗せた車椅子をチェルシーに預け、「ただいま
もどりました」と告げた。

「アリスッ！」

セシリアは湧き上がる涙をこらえることができなかつた。どれだ
け信じていても不安があつたのだ。その不安が心から消え、押し殺し
ていた感情があふれ出していた。

「心配かけました。けど、再会を喜ぶのは後にしましょう」

アリスはアリシアに視線をやり

「とうとう正体を現しましたね。一体どういうつもりです」

「始めるためだ」

アリシアは身をひるがえした。

「ここは私とメアリーが初めて出会った『始まり』のモニュメント。始める場所に相応しい」

「始めるっていったい何を始める気ですか」

「見ているといい」

アリシアはふわっと飛び上がり、ホールを一望できる張りだしの前に降り立ちつた。

そして会場の中央まで赴くと、鷹揚に手を広げた。

「紳士淑女のみなさま。今日は娘の誕生パーティーにお集まりいただき、ありがとうございます。中にはさぞ私の登場に驚いておられる方もいらっしゃるでしょう。そう、死んだはずだ、と。このとおり私は存在しております。私が舞い戻ってきた理由はただひとつ。それはあなた方に福音をもたらすためでございます。」

——〈白騎士事件〉で世界はさぞ様変わりいたしました。ヘインフイニット・ストラトス〉が登場し女性の社会地位が高まり、第二次冷戦がもたらした戦争特需で経済は潤った。良い思いをした方も多いでしょう。

しかし『冷戦の終結を目論む者』と『冷戦を裏で操っていた者』が手を組んだことで、それも終わりに近づきつつあります。第二次冷戦により、美味しい蜜をすすってきたあなた方にとっては、さぞ面白くないことでしょう。そこで私たちはあなた方に冷戦に代わる新たな〈マーケツト〉を提供いたします。

このたび、私は新たな会社を設立いたしました。社名は〈天国に見捨てられた者たちの世界〉。このわが社があなたがたに、特需をもたらし続けます。さあ、みなさま、甘い蜜をすすり続けたいのなら、我々に投資を」

開場にいたセレブ達が互いの顔を見合わせ、議論を始めた。具体性は何もない演説だったが、金の匂いをかぎ取ったのか。反応は冷ややかにじゃなかった。リリスは、その様子を冷笑と侮蔑の表情で一瞥し、

身をひるがえした。

「アウターヘブン。一体何が目的でそんなもの？」

「言ったとおりだ。——マーケットを提供する。こればかりはあなたでも止められない」

ふわっと浮かんで「レヴィアタン」のまえに、降り立つ。

そして窓目からブランケット姉妹に視線をやった。

「アリシア様、わたくしたちは——」

「いいんだ、チエルシー、あなたはよくやってくれた。恩義を感じる必要もない。エクシア、その心臓はもうあなたのものよ。思うままに生きなさい。いまままでありがとう」

アリシアは最後に娘をその目に移した。

「セシリア、もう会うこともないかもしれないが、元気にな」

背を向けく「レヴィアタン」の頭部に飛び乗る。セシリアは駆け出し、

「最後に教えてくださいませ。——お父様は、お父様は生きておいでなのですか」

アリシアは足を止める。彼女は娘の顔を見ずに答えた

「あの人はもういない。——この世にも、私の心にも」

第112話 未来の舵は誰の手に

12月25日。クリスマス・イヴニング。12時になると、魔法が解けるシンデレラもかくやという慌ただしさを以て、誕生パーティーは解散の運びとなった。そう、舞踏会どころじゃないとばかりに。玉の輿を狙った「いじわるなお姉さま」たちは他にやる事ができたらしい。

そして、私たちといえば、リーランド城の客間に集まっていた。

客間には、暖炉とハンサムなルネッサンスチェアが設えわれ、天井にはオリジナルのフレスコ画があつて、天使たちがこちらを見下ろしている。

その天使たちに見守れながら、私たちは再会を喜び合った。

「アリスッ、よくッ、よく帰つてきくれましたわ」

胸の中に飛び込んできたセシリアを、私はそつと抱き留めた。

泣いているのか、碧眼に涙を蓄えている。そんな彼女の髪を、私はあやすように撫でた。

「約束したでしょ。必ずあなたの許に帰つてくるって」

「でもでも、心配でしたの！ わたくしにとつて、あなたは自分の一部に等しいですわ。あなたを失うことは、十ポンドの体を失うことと一緒ですもの」

「それは大変です。でも、大丈夫ですから。すべてが解決したわけじゃないけれど、いまだけは安心してください。私はどこにも行きませんから。これからはあなたのそばにいます」

「アリスッ」

言つて、安心させるように涙をぬぐつてやる。彼女は泣き顔のまま微笑んだ。

不安から解放されたからだろう。心から笑んでいるように見える。私もセシリアを安心させられて人心地がつく。すると、そこへシャルロットが飛びついてきた。

「エリー、無事だったんだねッ！」

矢のように飛びついてきたシャルを受け止め、私は頷いた。

「はい、なんとか。一時はどうなることかと思いましたが」

「さすが、僕のエリーだね」

「ちよつと、シャルロットさん、いまはわたくしとアリスが再会を分かち合う場面でしてよ。邪魔なさらないでくださいな」

「いいでしょ。僕だってすごく心配したんだから」

「だからといって、どきくきに紛れて、僕の〃なんて。勝手に自分のモノになさらないでくださいな。アリスはわたくしの半身に等しい存在ですよ——」

「だから、いなくなったら体から十ポンドの肉を失うのと一緒だっていうんでしょ。でも、セシリアなら大したことないと思うなあ」

シャルはチラツとセシリアの大きいおしりを盗み見た。

「何がいいのかしら、シャルロットさん？」

と、怖い笑顔を浮かべるセシリア。泣いたり、喜んだり、怒ったり、忙しい娘だ。シャルもシャルだし。私的には仲良くしてもらいたいものだけど、無理だろうな。家族単位で仲が悪いわけだし。

「ま、二人とも落ち着けて。いま、アリスの無事を喜ぼうぜ」

見かねた一夏が仲裁に入ると、二人はその矛先を一夏に向けた。

「あら一夏さん、落ち着けだなんて、一番落ち着きがなかったのは、あなたじゃなくて」

「だよね。なのに、無事がわかったとたん、〃俺はアリスを信じていたぜ〃みたい顔してさ」

「ぐぬ」つと言葉に詰まる一夏。そこへ箒が追い打ちとばかりに肘でつつく。

「そうだな。心配でずっとそわそわしっぱなしだったな」

「そういう箒だって、落ち着きなかったわよね。いつもはもつと懽然としているのに」

と、鈴が箒の背中を人差し指でぐりぐりする。

「み、みんなだってそうだよ。鈴はいつもの元気がなかったし、簪に至っては、落ち込んでほとんど何も食べられていなかった」

「……友達の安否がわからないときにガツガツごはんを食べられるような凶太い女じゃない」

「あたしだって友達の一大事に、はしゃげるほど無神経じゃないわよ」
「私は心配などしていなかったがな。私の経験上、おまえはしつこく生き残って敵に嫌われるタイプだ。とはいえ、帰還したならちゃんと報告をすべきだ。心配するだろ」

「してんじやない！」

鈴のツツコミもなんのその、無然と腕を組むラウラ。ボケじゃないらしい。

私はそれをくすくす笑ってから、

「そのことなんです、連絡手段がなくて」

〈エクスカリバー〉を停止させた後、私たちは帰還用ポットで、地球圏への生還を果たしていた。もともと有人を前提に設計されていたから、帰還方法に困ることはなかったのだけど、座標のずれからIS学園から北の方角——中国の領海に落下してしまったのだ。その後、中国軍に拘束され、連絡の取りようがなかったのである。

「とはいえ、私だけならいくらかやりようはあったんですが」

私は車いすの少女を盗み見る。無重力空間にいたエクシアは、いま歩けないほど筋力が衰えている。歩行不能者を担いだ脱出は私でも重労働だった。だけど、置いていくことはできなかった。

私は再会したブランケット姉妹を見やった。

「おねえちゃん、わたし……」

「もういいのよ、エクシア。あなたは立派に務めを果たした。恩義に報いたわ。だから、もういいの。アリシアさまも仰られていたでしょ。その心臓はもうあなたのものだって」

エクシアはぎゅつと自分の胸を掴んだ。

大事な、大事な、心臓。それをくれたアリシアに恩を返すため、エクシアはへりリスに傾倒した。でも、もういいのだとアリシアは言った。「ありがとう」の言葉と共に。

エクシアの表情にはどこかさびしさも感じられたけど、瞳はまっすぐ前を捉えている。

「アリシアさまも、エクシアの件、ありがとうございました」

「礼はいりません。ただ、セシリアがエクシアを撃たなかった意味を

よく考えなさい」

「かしこまりました」

敬意と恩義を込めて深々とお辞儀したあと、チエルシーはセシリアへと向き直った。

「お嬢様、改めて紹介させていただきます。妹のエクシアです」

セシリアは屈んで車いすのエクシアと目線を合わせた。

「初めまして、でいいのかしら、エクシア」

「……うん」

「からだは大丈夫？」

「……うん」

「そう」

二言、三言のやりとりで会話が途切れる。

セシリアはいままでエクシアの存在を知らず、エクシアもセシリアと顔を合せたことがない。だから、因縁の顔合わせにも、感動の再会にもならず、お互い交わすべき言葉を見つけられないようだった。

「やれやれ。これじゃ、連れてきた甲斐がありませんね。セシリアさまにお仕えできてうれしいですか、気の利いたこと言えないですか」

私が肩をすぼめると、エクシアが睨みつけてきた。

「う、うるさい。緊張しているの！ 心臓に毛が生えたあなたと一緒にしないでよ」

私は「はいはい、あなたは蚤の心臓でしたね」と手を振っていない。すると、エクシアが車いすを脛にぶつけてきた。飛び上がる私。驚いたようすでセシリアとチエルシーが顔を見合わせる。そして「ふふ」と笑いつてから、チエルシーは改めてセシリアへ向き直った。

「お嬢様、このたびはわたくしどもの私情で、多大なご迷惑をおかけしました」

深々と頭を垂れたチエルシーに、セシリアは「顔をあげて」とは言わなかった。

今までで最高のお茶を淹れてちょうだい。そう言って許すには、彼女が仕出かしたことはあまりに大きすぎた。セシリアは主人として

ちやんとけじめをつけなければいけなかった。

「そう思うならすべてを話してもらえますわね」

チエルシーは頭をあげて「承知いたしました」と頷いた。

「しかし、長くなると思われれますので、お茶の準備をしてから」

「いいでしょう。みなさまもいかがでしょう。軽食など用意いたしましたようか」

みんな、お腹が減っているようだったので、「ぜひ」と頷く。

「かしこまりました」とチエルシーは部下に茶の軽食の準備を命じた。

それから食事の準備が整うまで小休止をはさみ、私たちは再び客間に集まった。

チエルシーは軽食をたしなむ面々を見回し、本題に触れた。

「まず、アリシアさまの目的をお話するまえに、この世界を動かした力。そして、この世界を変えた革命について知っていただかなければなりません。18世紀、蒸気機関の発明により、生産技術の革新とエネルギーの変革が起こりました」

「産業革命ですわね」

ちやつかりと私の隣を陣取るセシリアが、紅茶をひとくち。

「はい。蒸気機関の普及に伴い、人力や畜力に代わって、蒸気や電気といった非生物的な動力が採用され、生産性は劇的に向上いたしました」

「あのさ、それが、あいつらの目的とどう関係あんの？ あたしは歴史の授業を受けたいわけじゃないんだけど」

あまり気の長くない鈴がテーブルをとんとんと指で叩く。

さつさと目的を言えとばかりに催促する鈴の肩を、一夏が叩いて宥める。

「ま、社会勉強の復習だと思って聞こうぜ。——チエルシー、続けてください」

チエルシーは一度軽く頭を下げて続けた。

「この産業革命は資本主義生産様式を確立させ、基本的な生産基盤を

農業社会から工業社会へと転換させました。つまり、蒸気機関がもたらした工業化により、物が安くたくさん作れるようになったのです」「今に続く『大量生産／大量消費』の幕開けだね」

私の隣でシャルロットがサンドウィッチを頬ばりながら言った。

産業革命前は、製造に手間や時間が掛かっていたから、数は作れなかった。数がないということは希少ということだから、価値も高かった。しかし、工業化により時間や手間をかけず大量に生産することが可能になった。たくさんあるから希少価値も薄れ、値段も下がった。こうして数を売って儲けを出すという、斯ある今の世界ができあがったのだ。

「物が無い時代に、物が流通することは、消費者に歓迎されました。しかし、物資が行き届き始め、飽和状態になった現在、物の消費量は落ち込み始めています。それでも、なんとか売ろうと値段を下げ始めることを、デフレといいます」

「じゃあ、デフレっていいことなんじゃ。物が安くて買えるんだろ」
一夏の純粹な意見に、セシリアがそつと答える。

「確かに買い手側にすればいいことですわ。ですが、売り手側にしてみれば利益が出にくくなりますの。売り手に利益が出ないなら、その売り手に雇われている人間の賃金も出なくなりますわ」

一夏はハツとした。

賃金下がれば、消費者の財布のひもは固くなり、物が売れなくなる。売れなくなれば賃金も減る。デフレは、消費者が安く物が買えて得するように思えるけど、巡り巡って自分の頸を絞めることになる。

「もし、このデフレのスパイラルに突入したらどうするんだ」

一夏の質問を受けて、ローズマリーがティーカップをソーサーに置く。

「多くは金融対策がなされます。でも、もつとも簡単に不景気を打開する禁断の方法があります」

「戦争か」

暖炉でマシユマロを焼いていたラウラが言った。

「はい、戦時特需です。戦争ではあらゆる物が、大量に消費されます。

現代が好景気だといわれる背景には、第二次冷戦があるからです。国家が第三次世界大戦に備えて、物資や兵器を大量に買ったことで、景気がよくなったのです」

「モノを消費しなくなった民間のコンシューマーに代わって、戦場のコンシューマーが物を消費したから、停滞していた経済は動かされた、と」

ラウラが焼けたマシユマロをほふほふと頬張る。

「じゃあさ、失速する世界経済を補填していたのが、冷戦がもたらす戦時特需だつてんなら、母さんたちがやってきたことは、よくないことだったっていうのか……」

「すくなくても〈デウス・エクス・マキナ〉のデタントに賛成じゃない者もいたでしょうね」

千春が給仕のメイドにノンカフェインの珈琲を入れてもらいながら言った。

冷戦の始まりは〈白騎士事件〉を発端としている。それを起こした娘の罪を償うために〈デウス・エクス・マキナ〉は創設され、デタントに努めてきた。

平和を守るその行いが、世界の経済を失速させかねない。だから、冷戦を終結させるために戦う人間を邪魔に思う人たちがいる。金のために、正義が否定されたような気持ちになって、胸糞悪さが込み上げてきた。結局世の中、金なのかよ……と。

「……そっか、だからお父さんは……」

簪にみんなの視線があつまる。

冷戦のおかげで武器が売れる。そして〈打鉄式式〉も武器に他ならない。幸いにも日本は武器の輸出を禁止している。しかし、政治の決定は、政治家が下しているわけじゃない。時代が下しているのだ。時代が政治の風向きを変えるから、彼は戦時特需を生み出す冷戦という時代を終わらせようとした。

千春は簪の髪を撫でながら、「続けて」と言った。

「それじゃリリスが言っていた言葉の意味って」

リリスは大勢の資本家や経営者の前でこう述べた。

——第二次冷戦がもたらした戦争特需で経済は潤った。良い思いをした方も多いでしょう。『冷戦の終結を目論む者』と『冷戦を裏で操っていた者』が手を取り合ったことで、それも終わりに近づきつつあります。第二次冷戦により、美味しい蜜をすすったあなた方にとって面白くないことでしょう。

そこで私たちはあなた方に冷戦に代わる新たな〈マーケット〉を提供いたします。

「アリシアさまが言っていた〈マーケット〉とは、冷戦に代わる新しい消費の場を提供するということ。つまり、戦場を作り出すことです。さきほども申したとおり、戦場ではあらゆるものが大量に消費されます。兵器や弾薬、エネルギー、電子機器、食糧、医薬品、そして命も。そこにアリシアさまの目的があります」

「どういうことだ」
「思い出してください。リリースがもたらした世界はいまどうあるか、を」

IS登場以降、女性機運の高まりを受けて、そのモチベーションを社会発展につなげようと、女性優遇政策を実施した。これ以降、女性は公共福祉、社会制度、法律、金融の場で、さまざまな権利が保障・優遇されるようになった。その裏側で、男性は社会的な地位や保障を失い、蔑まれる存在となった。

その格差が、生活に困窮する男性を多く生み出し、社会問題まで発展している。

「こうして職を失い、生活に窮した男性たちを、大量に雇い入れているのが、冷戦終結の軍縮につき台頭を始めている民間軍事請負業者です。アリシアさまが新設なされた〈アウターヘブン〉は、この民間軍事請負会社を統括するマザーカンパニーです。いま〈アウターヘブン〉は様々な戦場へ雇った男性を送り出しています」

「それじゃあ……」

話の流れを一夏は理解したようだった。

戦場ではさまざまな物が消費される。そう、命さえも。〈アウターヘブン〉は、社会に見捨てられた男性を買い付け、戦場という〈マー

ケット」に出荷する会社。

そう、ヘアウターへブンはデタントで失速する世界経済を補填するものではない。

男性たちを消費するシステムなのだ。

「彼女がここを訪れたのは、オルコットの財力に目がくらんだ経済界の人間をたきつけるため。すでに、彼らによって、軍事請負関連の株が買い占められ始めています」

ローズマリーがタブレットにリアルタイムな株式証券の動きを映し出す。

それは世界が戦争することを決めたようだった。国家のためでもない、宗教のためでもない、思想のためでもない。経済活動の一環としての戦争を。

「やがて軍事請負企業は、彼らの投資を受けて、男性という商品をマーケットへ出荷し始めるでしょう。それを『戦争という生き物』が大量に消費することで、経済が動き、女性たちの生活が潤う」

「止められないのか」

「止められません。社会の経済活動は人間の血液循環と同じなのです。経済活動を止めるということは、人間という心臓を止める行為に相当するのです」

血液循環を止めれば、栄養が行き届かず壊死する箇所が生まれてくる。経済も同じ。金が社会全体を巡り、そして戻ってくる。この循環が失われれば、社会は破たんする。

「経済活動は、人々が生活を送る中で必要不可欠なものです。世界経済が、動き始めたら、もう誰にも止められません。資本主義そのものを破壊しないかぎり。でも、それは近代文明の終わりを意味する。国家も自由市場を守るため、いえ守らざるを得ないため擁護に回るでしょう」

「くそっ」

正義のためでもない、国家のためでもない、思想や宗教、民族のためでもない。物を消費するための戦争。人々を殺し合せて、経済を回そうと世界は決めた。正義感の強い彼は壁を強く殴りつけた。

「確かに経済は止められない。けれど、この戦争経済は止められるかもしれません」

私は弄んでいた茶菓子のスコーンをロキに投げる。

「ここには〈資本主義の王〉と〈テクロノジの怪物〉がいる」

受け取ったロキが頷き、ローズマリーが続ける。

「世界経済が失速することで、自分たちの生活水準が落ち込むのではないか。行き先の見えない不安を払しょくするために、世界はこの戦争経済へ舵を切ろうとしている。なら、別の可能性を見せることで、その舵を切り替えることもできるでしょう」

「俺たちならその可能性を見せることができる」

「どんな可能性だ？」

「フロンティアの開拓だ。戦争に夢はないが、開拓には夢がある。人は夢を見ることで希望を見出す。その希望を以て、世界の舵を切り直す。だが、それにはお前のちからが必要だ」

「俺の……？」

「希望の舵を生み出すには——〈ファイニット・ストラトス〉がいる」

話は姉から聞いていた。自分以外の男性でも使える〈インファイニット・ストラトス〉の開発について。そして、〈ファイニット・ストラトス〉の開発には男性操縦者である織斑一夏の協力が不可欠だということも。

「私に世界は変えられないが、あなたなら変えられる」

一夏は掌を眺めた。自分に秘められた可能性と向き合うように。

そして、彼は考え、答えを出した。自分に何ができて、何かをすべきなのか、を。

「俺は男なのにISが使える。けど、それがどうした」と問われても、俺は答えられなかった。結局、珍しい以外の意味を見いだせなかったんだ。けど、いま話を聞いて、『男でISを使うことに、意味はあったんだ』って解かった。なぜ俺だけISを使えるかはわからないけど、この時のためだったのかもしれないのなら、俺は自分に課せられた使命を全うしたい。——それが自分を育ててくれた人たちへの恩返しになると思うから」

今ここにいられることは、家族や仲間が自分を愛し、守ってくれたからだ。そして、大きくなつたいま、自分の番がきたのだ。一夏は開いていた手のひらをぎゅっと握りしめた。そこへ決意を込めるように。

千冬さんと千春はその様子を暖かく見守っていた。我が息子ながら立派になつたと、母の眼にはうつつすら涙が浮かんでいる。

「では、俺たちに協力してくれるんだな、織斑一夏」

「一夏でいい。手を貸すぜ、ロキ。俺たちで未来を変えよう」

二人は手を取り合い、強い握手を交わす。

いまこの時も、世界は愚かな戦争へ突き進んでいたけれど、この部屋だけはどこか希望にあふれているように明るかった。あわよくば、いや、必ず、その光で世界を照らし出して見せる。少年たちが交わした手と手には、そんな決意が現れていた。

へマザーズ・デイストピア 第113話 〈インターシップ〉

市街を走る愛車のHummerは快調にエンジンを吹かせていた。トルクフルな四輪駆動は、大人四人を乗せ、重荷を積載しても、安定した走行をもたらしてくれている。それを気に入っ、ずっとこの四輪駆動車を乗り続けていた。きつと職業柄なのだろうと彼は思う。だから、運転を任した部下も気に入ってくれるだろうと思った。

「どうだい、ジーク、乗り心地は」

「はい。ひずみもなく、操作性もいいかと。牽引力もありそうです」

アッシュブロンドの短髪。妖艶なルビーアイ。鼻筋の通った容姿は、間違いなく美形の類だったが、“へ”の字に結んでいる口元は無愛想だ。それでもわずかに頬の筋肉が緩んでいる。

ドイツの研究施設で育った彼が、そんなふうには笑うことは珍しかった。

「でも、妻には不評だったよ。『こんな大きい車じゃなくていいんじゃない？』って。まあ、このあたりを走るには、車体が大きすぎるかもしれないね」

「そういえば、隊長はこのあたりにお住まいになられていたのでしたね」

「うん。もう9年ぐらい前になるけどね」

隊長と呼ばれた男が車窓から街並みを眺める。10年前までは、この周辺に妻と子供二人で居を構えていた。職業柄、家を空けることも多かったけれど、ココには家族の思い出が詰まっている。休日にはあのデパートへ家族と出かけて娘の洋服や息子の玩具を買ったものだ。あの釣り具屋にはいくつも穴場を教えてもらった。妻が気に入っていた駅前のファミレスはつぶれてしまったそうだが、今も変わらない景色には感慨深いものがある。

だが、今日は思い出に浸りにきたわけじゃない。作戦を遂行するためをやってきたのだ。

(とはいえ——)

隊長はルームミラーを見やる。後部には一組の男女が座っていた。男は丸型のメガネをかけた童顔。女は亜麻色の長髪で、歳はどちらも二十代に見える。

男はヘッドホンをつけて携帯ゲームに勤しみ、女は爪に施されたネイルアートを見て表情を綻ばせている。ジークと違って、いまだきの若者らしい二人だ。さらに、その後ろでは狼サイズの機械犬が“伏せ”をしている。

「なにもエヴァやフェイまでついでにこなくてもよかつたのに」

作戦と云つても、少女を一人迎えに行くだけだ。戦闘の可能性も低い。部下——それも戦闘のプロフェツショナルを3人も連れて行くほどのものじゃない。ましてや分隊支援型オートマトンの出番などないだろう。

「だって、たいちようーがどんな場所に住んでいたか興味あるんだもん」

と、エヴァと呼ばれた女性が、となりの男を挟んで車窓へ身を乗り出す。

ドアと女性に挟まれた男は、窮屈そうに顔をしかめた。

「おい、どけよ、エヴァンジェリン。ゲームの邪魔すんな」

「なによ、フェイ。ちよつとくらい我慢しなさいよ」

「しねえよ。ほら、どけてば、じゃねーと、あ、くそ——ほら見ろ！」

フェイが見せたゲーム画面には、ぐったりたおれこんだキャラが映っていた。

「ゲームオーバーだ。おまえのせいだぞ」

丸渕眼鏡の奥では、怒りの炎が昇っていた。だが、童顔とあつて迫力がない。

エヴァンジェリンは亜麻色の長髪をはじめて見せた。

「なによ、ゲームぐらいで。そんなんだから、モテないのよ、チェリーボーイくん」

「おれはチェリーじゃない！ おまえこそ、いい歳こいて、はしやぐな。遠足じゃないんだぞ」

売り言葉に買い言葉。感傷的だった雰囲気は完全にぶち壊しだった。

ジークが「どうします?」と隊長に視線をやる。

「いいよ、ジーク。好きにやらせておけば。いつものことだし」

「了解。——ところで、エヴァンジェリンが言っていたチェリーボーイとはなんですか?」

ジークはたずねた。仏頂面かつ、キリっとした表情で。

研究所という異質な空間で育った彼は、一般的な俗語に疎い。知らないのも無理ないことだったが、美形の彼が真顔で言うのと、なんともおかしい。

「ただの俗語スラングだよ。性交渉の経験がない男性を揶揄することば。フェイは経験がないことにコンプレックスを感じているんだよ」

「なるほど、そうでしたか」

そう言うってから、ジークはすこし思索し、真面目な顔で言った。

「フェイ、安心しろ。オレもチェリーボーイだ」

「うっせー、おまえと一緒にすんじゃねえ!」

一緒に頑張ろうな、そんなニュアンスで励ましたつもりが、怒鳴り返される。

エヴァンジェリンは「ぶはっ」と女性らしからぬ笑い声をあげた。

「確かに一緒にしたくないわね。ジークはカツコイイし、カノジョの一人や二人、すぐできそうなものだもの。あなたと違ってね」

「うるせー! おれだってな、その気になれば、カノジョの一人や二人ぐらいすぐに作れるんだからな! おれは相手を選んでいただけなんだよ!」

「確かに相手をちゃんと選ぶことは大事だね」

「でしょ! 隊長!」

「では、隊長は奥様のどこを気に召されて——」

「ジーク、そこ右ね」

「あ、はい」

慌てたようにウインカーを出す。後部座席の二人は「またはぐらかした」と顔を合わせた。あまり話題にされたくないらしい。「いつも

そうなんだよな」とフェイがぼやくと、右折先に目的地が見えてきた。大きな鳥居と石段。神社のようだった。

「近くに駐車場があるから、そこに止めてくれ」

「了解」

到着した駐車場は、舗装整備され、比較的あたらしい。IS登場を期に増えた参拝客に対応するため新設したという話だ。駐車スペースに車を止めさせると、隊長はひとり車を降りた。

「じゃあ、ジークたちはここで待っていてくれ」

「いえ、私も同行します。あなたの身に何かあつては——」

「大丈夫だって。僕一人でいい。それにジークは副隊長だ。ここに残れ」

「じゃあ、わたしが一緒に行くわ！」

エヴァンジェリンが名乗りを上げると、フェイが悲鳴を上げた。

「待て、なら、おれも行く。ジークと二人きりなんて魔が持たない！」
「だから、僕ひとりでもいいって。別に危険な場所に向かうわけじゃないんだから。それに大人数で押しかけたら、相手に迷惑だろ。——きみたちはここで待機。隊長命令だ。いいね」

「了解」「りょーかい」「うーいー」

部下にそう言い聞かせ、隊長は駐車場を後にする。

その足で、鳥居をくぐり、石畳の階段を上っていく。登り終えたあと、用意された参拝コースをそれて、境内の裏手に回った。そこに神主の住居と——目的地の道場がある。

道場は6年まえに閉められたらしいが、道場独特の古びたカビ臭さはなかった。妻の話だと、神主の妹が住み込みで管理しているという。到着すると、玄関先でその人物が彼を待っていた。

「お迎えですね。話は本人から聞いております」

その女性は淑やかな物腰で一礼した。

「はい。姪をお預かりにきました。彼女は？」

「道場にあります」

女性に案内されて、道場に足を運ぶ。

途中、通路わきに立てかけられていた、いくつかの盾と、表彰状、そ

して写真が目に入った。門下生の集合写真や、師範代の写真に紛れて、少年少女のツーショット写真もある。男はそれを手に取った。優勝を記念した写真なのか、少年の手には賞状が握られている。隣の少女はそっぽをむいて、なんだか照れくさそうだった。

「その写真は9年ほどまえかしら。この地区で優勝したときに撮ったものなんですよ」

9年前。自分が組織を立ち上げるため、この街を発ったあとぐらいか。

「とても強かったそうですよ。練習にも熱心でしてね。誰よりも早く道場を訪れて」

「姪っ子さんも、随分とお強いと聞きました。全国大会を優勝なされたとか」

「ええ。ですが、それについて何か思う事があるようで、あまり話したくないんですよ」

「やはり一家離散が関係して？」

「かもしれない。離散や管理生活が続いたせいで、精神的に疲れていたようにも見えます。けれど、IS学園に入学してからは、少しずつ明るくなったようにも。特に7月の誕生日以降、憑き物がとれたように元気になりました」

7月といえば、アメリカのISが暴走した月だ。

関係者には秘匿義務が課せられているため、詳しい事情を叔母が知らないのも無理なかった。

「きつとよい友人に巡り会えたのかもしれないね。今回の件も、その友人の力になれるならば、と意気込んでおりましたから」

「その友人も『彼女なら任せられる』と。不器用だけど、根は強い娘だと、そう語っていました」

「姪のことを、よくわかっておられるんですね。聞いて安心しました。——では、こちらです」

道場の奥に案内される。稽古場に足を踏み入れると、胴着姿の少女が座禅を組んでいた。

漆のような黒髪。刀のような鋭い面持ち。凍てつく道場においても、

震える身振りひとつない。それが彼女の意思の強さを表しているようだった。見た瞬間、男は「なるほど」と思った。かつて共に戦った戦友の面影がそこにあったからだ。

「お待ちしていました」

瞑想していた少女がゆっくり目を開く。

篠ノ之神社の神主の娘、篠ノ之箒は背筋を正して訪れた隊長をそう出迎えた。

♡

♠

◇

♣

2012年1月2日。イギリス。早朝7時。

私は朝日に照らされたキッチンに立ち、エプロンを結んだ。そして、冷蔵庫から卵を取り出し、ボールを探してガチャガチャと棚をあさる。今日の朝食はオムレツに決めたのだけど、未だにどこに何があるかサツパリだった。

(ローズマリーの家つてば、いろいろありすぎなんですよね)

〈デウス・エクス・マキナ〉の脱退を決めたあの日、私は姉と暮らすことに決めた。

いまは姉のセカンドハウスに住居を移している。

急な移住ではあったけど、〈デウス・エクス・マキナ〉はあまりにも居心地がよかったから。決意が揺らいでしまうまえに環境を変えてしまったかったのだ。そのさい、千春はこう言ってくれた。

『そう、それはよかったわ。やつと普通の女の子に戻れるのね』

千春は銃を取り戦う私のことを気にかけて、そう命じなければならぬことに心を痛めていてくれた。そんな彼女だったから、別れ際にはふわっと私を抱き寄せてこう言ってくれた。

『何かあったら、いつでも帰っていらっしやい。あなたは私の娘も同然なのだから』と。

長く疎遠だった母の温もりが蘇り、鼻先がきゅんと痛くなって、目が熱くなつたことを思い出す。おかげで未練は強くなったけど、私

はぐつとこらえて、彼女の許を去った。

そして、いまに至る。

新しい住居を探すさい、本家に戻ることもできたけど、大きい家は性に合わなかったし、いろいろ心の準備も必要だったから、こちらに住むことを決めた。内装はいたって一般的で、メイドがいるわけでもない。それあって私が朝食の準備をしているわけだ。

(あった、あった。これにしましよう)

調理ラックから丁度いい大きさのボールを取り出すと、二階から足音が聞こえてきた。

降りてきたのはセシリアだ。

家督を継いで忙しいなか、暇を見つけてはこうして遊びにきてくれている。大晦日にはロンドンの花火大会を見に行つたばかりだ。そのあと、年越しそばなるものを打つた話は今度するとして。

「おはようございます。もしかして起こしましたか」

ボールを探すのに、ガチャガチャと大きな音を立てていたし。

「よい目覚ましでしたわ」

セシリアはそう苦笑した。

「すみません、道具がなかなか見つからなくて」

「ローズマリーさまだったら、ずいぶんとたくさんの器具を買い込みになられたものね」

「そのくせ、ほとんど使ってませんし。邪魔なだけなんですよね」

急遽、ここに移り住むにあたって、要りそうなものを片っ端から買い込んだ結果らしい。

忙しい立場だから、何度も買いに行く時間がおしかった。それが衝動買いの理由だそうだ。

「それでローズマリーさまは？」

「朝早くに出かけていきましたよ。自社のミーティングですつて」

「ああ、〈ブリタニカ〉の？」

〈ブリタニカ〉は、ローズマリーが経営するアパレル会社のことだ。

ローズマリーが着ているヴィクトリア朝のドレスもこちらの製品になる。社員数10名ほどと小さい会社だけど、社長というものは会社

の規模に関係なく忙しいものらしく、明朝には家を出て行った。

「で、ミーティングが終わったら、その足でヘナイトソード〜に向かうと言っていました」

「今日からですものね、IS学園のインターシッパ」

今日から始まるIS学園のインターシッパ。セシリアやローズマリーと言ったプロスタッフは、その手伝いに駆り出されることになっている。ちなみに私はフリーランス的な立場で行こうと思っている。コネでいろんな企業を見て回ろうかなって。

「みなさんは、どうされるのかしら」

「鈴とシャルは、自分のスポンサー企業の手伝いをするって言っていましたね。ラウラは候補生を辞めてスポンサー契約が解除されたので、わかりませんけど」

「箒さんはどこを選ばれたのかしら。アリスは聞いてまして?」

「ん、あー、そうですね? 聞いてない、かな?」

「わたくし、あなたとそれなりの付き合いですから、わかりますの。あなたがそうやって歯切れの悪い返事をするときは、知っているときですわ」

私は苦笑いした。さすが、セシリア、私の事をよく知っている。

確かに私は箒のインターシッパ先を知っている。でも、話せないのが適当に誤魔化した。

「ほら、すぐに朝食ができますから、顔を洗ってきてください」

「わたくしに何も教えて下さらないところは、相変わらずですわね。ま、いいですわ」

特別に追及することもせず、セシリアは洗面所へ向かっていった。私も安心してオムレツの調理に戻る。

フライパンに卵を流すと、洗面所から「アリスうー、髪を梳くの手伝ってくださいましー」と聞こえてきた。長髪だし、メイドもないから、梳くのも大変だろう。けど、いまは手が離せそうにない。「朝食が炭でいいならー」と返したら「じゃあ、一人でがんばりますわー」と返ってきた。

ということなので、フライパンに意識を戻し、オムレツをひっくり

返す。

できたオムレツを皿に乗せたタイミングで、セシリアが洗面所から帰ってくる。

「ああ、バターのいい香り。おいしそうですわね」

「さ、冷めないうちに食べましょ」

椅子を引いてセシリアを座らせる。私は向かいに腰かけた。

そして、二人で「いただきます」と手を合わせる。セシリアはオムレツをぱくりと頬張った。

「ん〜、ふんわりとして、おいしいですわ♡」

「ふふ〜ん、でしょ？ 一夏から直々に作り方を教わったんです」

私は得意げになった。

文化祭の折り、彼に作り方を手取り足取り教わったおかげで、料理が不得手な私でも、これだけは自信を以て提供できる。

「そう、一夏さんに。———そういえば、あなた、一夏さんに告白されたんです？」

私は得意げだった顔を驚きの顔に変える。

「知っていたんですか」

「自分の敷地で起こったことですもの。———で、なんとお返事しましたの」

威圧はなく、柔らかな口調だった。すくなくとも、ジェラシーの類は感じられなかった。

だから誤魔化したり、はぐらかしたりできず、私はこの友人にあの夜の事を話すことにした。

「実はなんと返事すればいいかわからず、黙り込んでしまいました」

一夏を異性として意識したことがないわけじゃない。心がときめいたこともある。

けど、「真夏の雪」のように降ってきた一夏の告白を、私はうまく受け止めることができなかった。理由はわからない。でも、黙り続けることも誠意に欠ける気がして、何か答えようとする、彼はこう言ってくれた。

——返事はいらぬ。いまは、気持ちを伝えられただけでいいん

だ。ほら、またしばらく会えなくなるし、また今回のようなことがあつたら、もう伝えられなくなるかも、だろ？

「それであなたは返事をしなかったのね」

「はい」

セシリアはそれだけ聞いて食事を再開した。無暗に私の胸中を探ろうともせず、上品な佇まいを見せている。意外だった。だって、セシリアは一夏のことだ——。

「あら、不思議そうな顔をするのね。なら、ヒントを上げますわ。あの中庭を、一夏さんに教えたのは、わたくしですよ」

なぜ、とは問わなかった。

ただ、そういうことなのだど理解し、自分の認識を恥じた。

「ふふ、素敵な場所でしたでしょう？ そう、心ときめくような。つまり、そういうことなのですわ。わたくし、気づきましたの。——わたくし、一夏さんの『正義感で終わらせず、意思を以て行動で示す』その姿に心を動かされましたわ。でも、彼がそう在り続けられたのは、あなたの存在があつたから。それに気づいたとき、この初恋を青春の思い出にしようと思つて決めたの。これからは淑女^{レディ}としてあなたたちを見守ろうと思いますわ」

セシリアは「うふふ」とやさしく上品に微笑んだ。

私は彼女のその「つよさ」と「やさしさ」に、心から感謝と敬意を示す。そう、本当に心から。

「ほら、食べましょう。冷めてはもったいないですわ」

「はい」

私もオムレツに口に入れる。うん、我ながらうまくできている。そうだ、いつか、彼と再会するようないざがあれば、うまくなつたオムレツを振る舞ってみよう。意地悪げに「まだまだだな」と彼は言うかもしれないけど。

私はそう思いながらはるか極東の地に想いを馳せた。



一月四日。日本。正月を実家で過ごしたあと、俺は〈ファイニット・ストラトス〉の開発を手伝うため〈倉持技研〉に赴いていた。なんでも〈倉持技研〉の研究施設内に東さんが使っていた研究スペースが残っていて、なおかつ〈白式〉のデータもあるから都合がよかつたらしい。

というわけで、現在は〈倉持技研〉の最寄り駅にあるロータリーを訪れていた。

「教官の話によれば、迎えがあるということだな」

と、隣のラウラが言った。

「ああ、倉持技研の人が来ているはずなんだけど……」

と、周りに知り合いらしき人物がいないか、探してみる。

学生やサラリーマンがいるだけで、それらしい人物は見当たらなかった。

「時間には間に合ったはずだが？」

ラウラがその細腕に不釣り合いな男物の腕時計で、時間を確かめる。

待ち合わせは8時。現時刻は7時48分。遅くて帰ってしまったということはなさそうだったが。

「しばらく待つか」

すこし早く到着しすぎたのかもしれない。

俺たちは近場のベンチに腰を下ろし、買った缶コーヒーのプルを起こした。

「ところで、ラウラはインターシップに参加しなくてもよかつたのかわ？」

今学期、俺以外の学生は各企業へ就職体験する予定になっている。しかし、ラウラはそれに参加せず、こうして俺に同行してくれていた。理由は知らなかった。朝、「私も同行させてもらう」と言われたのだ。「私は既に職に就いているようなものだからな。そこで教官から『護衛として同行してやってくれ』と頼まれたのだ。いま〈デウス・エクス・マキナ〉は人手が足りていないそうだな」

なるほど。〈デウス・エクス・マキナ〉を脱退したアリスの臨時的な穴埋め要員ってことか。

「彼女のように動けるかわからないが、最善は尽くすつもりだ」

ラウラがそういうと、ロータリーに一台の軽自動車が入ってきた。

軽自動車は俺たちの前に停車した。ウィンドウが開く。顔を見せたのは、篝火ヒカルノさんだ。

「やあ、おはよう。さむかったでしょ。さあ乗って」

と、篝火さん。彼女が〈倉持技研〉の迎え人であるらしかった。

♡

♠

◇

♣

「ごめん、ごめん。さむいところ待たせたね」

「い、いえ」

迎えの車中。俺は足のやり場に四苦八苦しながら答えた。狭い車内なのに、銚やシユノーケルやフィンが乱雑に置かれていて、足の踏み場がない。実に彼女の趣味にあふれた車内だ。きつとこれから出勤と言っても、みんな「シユノーケリングに行くんだろ」というに違いない。

「実は君んところの生徒会長が、正月明け早々にやってきてさ」

「楯無さんが？」

「私、ロシア代表やめるんです。スポンサーに機体を返却するんで、七日までに〈霧纏の淑女〉をダウングレードしておいてください」ってさ」

「ダウングレード、ですか？」

「そ。もともと〈霧纏の淑女〉は、大破したくモスクワの深い霧>ってISを改修した機体でね。そのとき、彼女の独自技術がいくつか導入されたの。たとえば《蒼流旋》とか、ナノマシンコントロールを司るプログラムとかね。ちなみにそれ、書いたのわたしね」

篝火さんがニツと犬歯を見せて自慢げに笑う。

「そのプログラムのヴァージョンを下げておいてくれって言われて

ね。なんでも、独自開発した技術をロシアにフィードバックさせず、新規開発中の専用機に実装したいんだって」

「新規の専用機？」

「うん。妹の簪が作っているらしいよ」

「そういえば、簪もインターシップに参加しないって言っていたっけ。」

「おそらく姉の専用機開発に専念するためなんだろう。」

「ま、そういうわけで、ここ数日、その作業で徹夜が続いていてさあ、ふああ〜」

「わあ、篝火さん前、前」

「おっと、——」

中央車線にはみ出した車を慌てて戻す。

幸い、車通りの少ない山間道路で対向車はおらず、大事にはいतरなかつた。

「ちゃんと運転してくださいよ」

「ごめんごめん。でも、大丈夫、このへん交通量すくないから」

「確かにそうみたいですけど……」

「そういつて車内から見える風景に視線をやる。」

走り出して15分。山間に入り、車窓の景色は木々ばかりになっていた。

「〈白式〉の件で何度か訪れているけど、相変わらずアクセス悪いよな、〈倉持技研〉って」

「所長が溪流釣りが好きだとか、なんとかでき。直ぐ行けるようここに立てたって話だよ。私も考えが煮詰まったらよく釣りに行くよ。」

「——夏君は釣りとか行くかい？」

「いえ、近くに釣り場がなかったのです。でも、小さい頃はよく連れて行ってもらっていたような気がします」

「千冬にかい？」

「いえ、父親だったような気がします」

「言つて、そういえば……と思う。母親とは再会したけど、父親とはまだ会っていない。正月も千冬姉と母さんと、ラウラの四人だった。」

母さんや千冬姉も特に話をしないけど、なんでだろう。

「どうしたの、一夏君」

「いえ、父親ってどんな人だったかなあって思い出せなくて」

「私も千冬と中学校が一緒だったけど、会った記憶がないな」

篝火さんがそういうとへ倉持技研の門が見えてきた。その前で車を止め、やってきた警備員に社員証を見せる。警備員は手を挙げて詰所らしき場所に合図を送った。

「どうぞ、いつもお疲れ様です」

「ありがとう」

礼を言っただけで奥に車を進める。そして駐車場に車を止めた。

「ここから南に行ったところに束のラボがある。そこで案内人が待っているはずだから」

「わかりました。迎えありがとうございます」

篝火さんと別れ、俺たちは南の方角に足を向けた。

5分ほど歩いたところで、研究所と思わしき施設が見えてきた。

その前で一人の女性が腕を組んで立っている。ロングストレートの髪。鋭い目つき、どこか粗暴な印象を受ける女性だ。襟元を崩したスーツにタイトスカートという服装がまた粗野な印象を強めている。

「おい、おせーぞ、おまえら」

「す、すみません」

時間通りだったが俺は思わず平謝りした。ガラの悪さに怯んだわけじゃない。彼女から放たれる迫力に負けちゃってしまったのだ。何となくだが、アリスやラウラに近いものを俺は彼女から感じていた。

「よし、じゃあいくぞ。ついてこい」

言っただけで踵を返し、ラボへ歩き出していく女性。その姿はどこか独特だった。うまく言葉にできないが、無駄がなく、油断を感じさせない、そんな歩調だ。ラウラも感じたようで、彼女を上から下へと眺めていた。

「もしや、貴様、私と同職の人間か」

俺は彼女から感じた「近しいもの」の正体に気づいた。

ラウラと同職。彼女も兵隊なのだ。

「ま、お前と違って、元々だかな」

ラウラは「ほお」と関心を示した。

「どここの所属だった？」

「昔はアメリカ海軍のSEALs部隊〈シール11〉にいた」

「なに、貴様、ヘレディ・シールズ」の出身か」

SEALsは俺でも知っている。映画の題材にもよくなるからな。

でも、ヘレディ・シールズ」の名前は初めて聞いた。

「レディ・シールズって？」

「現在のアメリカ海軍特殊部隊SEALsは、11チームで構成されている。その中で十一番目のチーム〈シール11〉はIS技能を持った隊員で構成されている。つまり女性で構成されたチームだ。そのことからヘレディ・シールズ」とも呼ばれている。彼女はその出身らしい。時間があれば、ぜひ話を聞いてみたいものだ」

女性の特殊部隊は歴史が浅く、確立した組織じゃないからまだ多く問題を抱えている。黒ウサギ隊も例外じゃない。先輩ともいえるヘレディ・シールズ」から何かアドバイスをもらいたって意味なんだろうな。

「そういえば、お前、〈特殊機甲強襲部隊〉の隊長だったんだな。その歳で部隊を率いるなんて、大したもんじゃねーか」

「人材不足なだけだ」

ISを運用する特殊部隊は、ISの特性から隊員が女性に限定される。

ただでさえ女性軍人って数が少ないから、集めるだけで苦労なんだろう。

「だから、おまえのような〈遺伝子強化素体〉みたいなやつも集められたわけか。人材不足もここに極めまれりって感じだな」

「知っているのか、私の正体を」

「ああ、ここにその関係者が来ているぜ」

俺とラウラは顔を見合わせた。

「なんだ、聞いていないのか？ そっち側からの派遣だろ」

「いや、聞いていないです」

「そうか。まあ会えばわかるだろ。——それと遅れたが私はオータムだ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「織斑一夏です」

「よし、いくぞ。ついてこい」

言って身をひるがえし、歩き出すオータムさん。

俺とラウラはそのあとに続いた。

♡

♣

◇

♠

いくつかの認証式セキュリティをくぐり、研究所の内部に入ると、大きな空間に案内された。IS用ハンガー、作業用アーム、コンピューター装置に、いくつもの情報モニター。周囲には機器や部品が散乱している。

「相変わらず、ひでー散らかりようだな。——おい、連れてきたぞ」

オータムさんの一声で、部品の影からびよこんと機械仕掛けのウサ耳が飛び出す。野原から飛び出したウサギみたみたいに現れた人物は東さんだ。フリルエプロンに、ウサギのカチューシャ。白ウサギとアリスが同居したような衣装は、相変わらずだ。

「おうおう、おひさだね、いっくん、よく来てくれたよ」

俺は軽く会釈した。

「こちらこそ、ありがとうございます。こんな機会を与えてもらって」
「おやおや、気合入っているね」

「はい。『このまま、男でISを動かさせた奴』で終わってしまったっていいんだろうか』ってくすぶつていましたから。けど、へフィニット・ストラトスへ開発の話を持ちかけてもらえて、珍しき以外に、ISを動かせる意味を見つけられたような気がしたんです。そりやモチベーションは高いですよ」

「じゃあ、いっくんは、あの日のこと後悔していないんだね」

あのときのこと？ あの日は、どの日を指すのだろう。

「藍越学園の受験日のこと。迷い込んだ部屋で、君はISに触れたでしょ」

そうだ。中学3年の時、俺は受験会場で迷い、そこに置かれていたISにふれ、起動させた。それがきっかけで俺のIS適正が発覚し、IS学園に入学することになったんだ。

「実はね。君をあの場所に誘導したのはわたしなんだ」

俺は目を見開いた。

「そ、そうだったんですか……」

「うん、試験会場のデジタル地図にサブミナル効果を仕込んでね」

明かされた事実には驚きを隠せずにいると、束さんが「怒ってる？」と覗き込んできた。

俺は首を左右に振った。

確かにIS適正が発覚しなければ、平穏な日常をおくれただろう。でも、自分にできることを見つけることができなかつたし、何よりあいつと出会う事もなかつた。ISに関わったことで苦難もあつたけれど、いまはISを動かせたこと、それがわかつたことに、恨みや悔みはない。

「でも、なんでそんな手の込んだことをしてまで俺の適正を？」

「箒ちゃんをIS学園に入れたくてね。いつくんのIS適正が発覚してIS学園へ入学することになれば、箒ちゃんも入学すると思つたんだ」

箒は、姉の発明品が一家離散の原因になつたと思つていた。自分からISを学ぶ場所に入ることはなかつただろう。悪い言い方だけど、束さんは俺をエサに使つたわけだ。

「なぜ、そうまでして箒をIS学園に？」

「ISのことを知つてほしかつたんだ。そして思い出してほしかつた。もともとISは箒ちゃんの夢を叶えるために作り始めたんだ。箒ちゃんがちっちゃい頃、7月7日の天の川を見上げて言つたんだ。『あの場所に行つてみたい』って。私はその夢を叶えてあげたかつた」
「そうだったんですか。なんだか皮肉ですね」

妹のために作ったものが、姉妹の仲を引き裂く結果を招いてしまったんだから。

「……へへ、そうだね」と苦笑いする東さんに、俺は「夏祭りでのこと」を思い出して言った。

「大丈夫ですよ。東さんの気持ちはちゃんと箒に伝わっていますから」

夏休み。みんなで行った縁日で、箒は「姉さんのことを両親から聞いた」と言っていた。

そのことを深く訊ねなかったけど、柳韻さんが東さんの思いを代弁してくれたはず。

「そっか。いっくんがいうなら、信じるよ」

礼の代わりに満面の意味を浮かべると、後ろのオータムさんが言った。

「話はすんだか」

彼女は片手にタバコを持ち、弄んでいた。いかにも退屈していたという感じだ。

東さんは「ここは禁煙だよくん」と、タバコをつまみあげ、ゴミ箱に放り投げる。

俺たちは苦笑しながら話を続けた。

「ともかく、今日からよろしくお願いします」

「うんうん、よろしくね。で、そっちがちーちゃんの代理？」

腕を組みながら瞑目していたラウラへ東さんが視線をやる。

「本来なら他国の軍人さんはココに入れないんだけど、他ならぬちーちゃんのお願いだからね。そのかわり大人しくしているんだよ」

ラウラは軍人。国益のために働く人間だ。特にドイツは、大手ISメーカーへワルキューレ・ウエポンが〈国際IS委員会〉の制裁を受けたことで、国内の開発力が落ちている。へフィニット・ストラトスの開発に一枚かみたいはず。それを知った上で許可したのは、他ならぬラウラを信頼してのことだろう。だから、裏切るなよ、と。

「気遣い感謝する。その気遣いについて、一つだけ訊ねさせてほしいことがある」

「なんだい?」

「ここに〈遺伝子強化素体〉の関係者が訪れていると聞いた」

束さんは「ああ、彼女のことだね」と振り向いた。

「おい、ちよつとこつちにきてよ」

束さんはラボの奥へ呼びかけた。並べられた機械アームの向こう側。たくさんのコンピューターが置かれた場所から一人の女性が「なんでしょうか、束博士」と顔を見せる。

ダイヤモンドのように輝くアッシュブロンド。血のようなルビーアイ。白磁のごとく白い肌。あまりに身体的特徴がラウラと合致しすぎていて、俺は言葉を失う。この人って、まさか……。

「今回のプロジェクトに協力してくれる、ララ・ボーデヴィツヒ博士だよ」

第114話 星を導く子どもたち

IS学園。F2廊下。千冬はデジタルボードを片手に、会議室へ向かっていた。

画面には名簿らしき文字が並んでいる。名は現（ブリュンヒルデ）のジェニファー・J・フォックスから、現役を退いた元ドイツ代表のロベルティーネ・シャロンホルストまで。連絡が取れた代表の名前には☒マークがついており、召集の了解を千冬に教えていた。

召集。何のためかと問われれば、ここを守るためだ。具体的にはこの地下に設置された装置を。

「全員で10名。あなたの名もまだまだ捨てたもんじゃないわね」

声がして振り向くと母が立っていた。

「母さんか。そっちはどうだ」

千冬は出くわした母親に、会議の結果を訊ねた。

「ワンダーランド」の検閲プログラムはほぼ完成よ。あとは一夏くん次第」

現代ではデジタルとネットワークの発達で誰もが手軽かつ自由に情報を発信できる。

たとえばそれが、誰が書いたかわからない誹謗中傷、ゴミのようなわき、正しいかもわからない評価、間違った解釈であっても、耳に心地いいなら、人と人を結びつける「求心力」になる。

いいね。いいね。そうやって群衆化した民衆感情は、やがて社会へ波及していく。ME | TOOからYOU | TOOへと。女尊男卑もそうやって出来上がった社会的風潮なのである。

このプログラムは発信されるデジタル情報を検閲することで、その群衆化を防ぐものだ。

朱に交われれば赤くなるというなら、交わらせない。

男と女が構（ま）らなければ遺伝子を後世へ残せないように、文化も人が交じわらなければ、後世へ語り継がれない。継承されない「文化はやがて人々の記憶から消えていく。

Selection for Societal Sanity
社会健全化のための淘汰。このプログラムはS3と名づけ

られた。

しかし、すべての情報を削除することは、*「あやまち」*そのものを歴史から削除すること。

人が *「あやまち」*を繰り返さないために、その *「あやまち」*自体は後世に語り継ぐ必要がある。

何を残し、何を削除するのか。

それを選定するフアクターが織斑一夏とその物語だ。

そう、唯一男でISが使えた少年の、女尊男卑の世界をいかに生きたかという物語。

彼がその耳で聞き、その目で見て、その心で感じたこと。そこから紡がれた物語を書き記すためにへホワイトクイーンへは作られ、実装された。彼女はいまこの時も『これまで』と『これから』を書き記し続けている。それが、やがて検閲プログラムを完成させる。

「あの子、そろそろへ倉持技研へについたところかしらね」

「ということ、ラウラも*「彼女」*と会っているころだな」

「あの二人、うまくいくといいわね」

「いくさ。片方は私の教え子、もう片方は母さんの部下だ。私と母さんがわかりあえたのなら、きっと彼女たちもうまくいく」

千冬と千春は学園校舎から、外の景色をながめた。その先にある二人の関係進展を願いながら。



ララ・ボーデヴィツヒ。その名を聞き、ラウラもまた赤い瞳を見開いていた。

「千春がつけた一夏君の護衛つて、あなただったのね」

驚くラウラに、現れた女性はいくつもの感情が入り混じった顔を見せていた。

うれしいような、懐かしいような、切ないような、そんな顔を。

「……計画がなくなったあと、消息不明になったと聞いていたが」

ラウラは絞り出すような声で言った。

「計画って、やっぱり、この人は、ラウラが生まれた研究所の関係者なのか」

「関係者どころか中心人物だったわ。当時、私は遺伝子学者としてヘアドバンド計画」に関わっていた。ある理由で研究がなくなるまで。その後、遺伝子の研究から離れていたけど、一夏君のお母さんと再会してね」

「再会？　ということとは過去に面識が？」

ララはラボの天井を見上げた。

たぶん、上空にいる「もう一人の護衛」を見ているのだろう。

「織斑マドカ。話は聞いているかな」

「はい」

自分にはラウラに加えてもう一人護衛がいる。その人物がマドカだ。そして、その少女が俺の遺伝子を移植されたキメラだということも千冬姉から聞かされている。

「確か、先天的な遺伝子の病気で、治療に俺の遺伝子が使われたとか」

「そう、ジーンセラピー遺伝子移植という医療法ね。それを施したのは私なの。自分で言うのは恥ずかしいけど、遺伝子の研究に関してたくさんの功績を残しているわ」

「その功績を買われて「デウス・エクス・マキナ」に？」

「それもあるかもしれない。けど、私自身が償いの機会を欲したという事が大きいかしら」

「償い……。ってことは、自分がやってきた行いを反省しているんですか」

ララさんは小さくうなづいた。

「あなたのお母さんに言われたわ。——『命は作り従えるものじゃない。生み育むものだ』って。千春はまだ幼い乳飲み子を連れてきて、私に手渡した。その子は必死に私のおっぱいをねだっていた。私のことを母親だと思っていたのね。事実、彼は私の息子だった。その子に乳をあげたとき、探究心を満たしたいだけだった私の心に別の感情が生まれたわ。暖かい、利他的な、そういう感情がね。これが「母性

“だと分かったとき、私はあの子たちに償いをしなければと思ったわ”

ララさんはまっすぐラウラを見据える。

「私は自分の探究心を満たすために、あなたたちアドバンスドを生み出した。それが遺伝子研究の貢献に繋がったとはいえ、命をおもちやにしてはいけなかった」

「そう思っていたなら、なんでもっと早くラウラの許に来てやらなかったんですか」

ラウラはずっと孤独に苛まれていた。

ララさんがもっと早くそばにいてやっていたら、どんなに救われたことか。

「自分への『罰』かしら。私はあなたたち命を弄んだ。そんな自分が今更“母親”を名乗り出るなんて烏澁がましい。それにもうあなたは孤独じゃない。よき仲間にも恵まれた」

ララさんが俺を見る。

俺をはじめ、いまラウラには、自分を想い、戦ってくれる人がいるけど……。

「だから、草場の影から見守ろうと思っていたのだけど、千冬が『お前はそれでいいのか』って。『烏澁がましくないかしら』と洩った私に彼女はこういったわ。——『それを決めるのはラウラだ』って」

自分がラウラたちにとって“本当はどうあるべきなのか”。

本人に会って、確かめて来い、と。

リスクを負ってまで部外者であるラウラに依頼した意図を得心した。

ラウラは黙っていた。言葉を探しているようだった。いま自分が発する言葉は彼女にとって強い執行力を持っている。自分が死刑を言い渡せば、彼女は自ら命を絶つだろう。だから、軽率な発言はできなかった。

かといって本音を隠してしまっただけは、ララさんがここに来た意味がない。

ラウラは自分の心と向かい合いながら、ひとつひとつ言葉を紡いで

いった。

「会えてうれしいという気持ちはない」

「私はあなたの命を弄んだ元凶だもの。なくて当然ね」

ララさんはラウラが自分にどんな感情を抱いているか、わかっている様子だった。

でも、こうして前に現れた勇氣は汲んであげていいと思えたから、俺はラウラの肩を叩いた。

「大丈夫だ。確かに会えてうれしいという気持ちはない。だが、憎しみも、またない。しかし、ララ・ボー・デビッツヒの我々に対する贖う気持ちとその覚悟は確かに受け取った。それには敬意を表したい」

ラウラはそう言って、シュタつと敬礼する。

それには、ララさんが犯した罪を許したわけじゃないけど、すべてはこれからの行い次第だ。そんな意味が込められているように感じられた。母を名乗るなら、その責務を果たせ、と。

「ありがとう、ラウラ。がんばるわ」

ララさんもまたそう受け取ったのか、決意を新たにした表情だった。

♡

♠

◇

♣

倉持技研。入り口付近にある停止レバーを操作する詰所。そこにある監視カメラの映像に一台のトラックがやってくる様子が映し出されていた。荷台に大きなコンテナを積んだ8トントラックだ。

部品の搬入だろうか。今日はもう来訪がないと聞いていた警備員は、訝しい顔で詰所を出た。

「どちらからで？」

停止バー手前で止まったトラックの運転手に訊ねる。

パワーウィンドウを下げ、顔を見せた運転手はまだ若い女性だった。助手席にいた人間もまた女性で、若い。

「みづるぎからです」

みつるぎはへ輝夜重工の下請け会社だ。主にISの駆動系に関わる部品を製造している。技研へ訪れることも多く、珍しいことじゃなかった。だからこそ、違和感があった。下請け会社からの来社なら、なおさら報告があってもよさそうなものだ。

「すみません、一応積荷を確認させてもらってもよろしいですか」

「はい、わかりました」

警備は部下に事務室へ連絡を取るよう命じ、自分は運転手と共にトラックの後部に回った。コンテナを開いてもらい、積荷を確認する。コンテナ内には確かにそれらしい部品が積まれていたが、専門外の彼には本当にISの部品なのか判らなかつた。

警備が困つたように首をかしげていると、そこへ部下が戻つてきた。

（備品の搬入予定はないそうです）

（そうか）

小声で返事して警備はトラックを下りた。そして、腕を組む。

確かにISの部品らしき物は積んでいる。けれど、予定にない来社。はたして彼らを通すべきか。悩んでいると、一人の女性がこちらを通りかかった。頭の上に海中ゴーグル。倉持技研・IS開発部の主任を務める篝火ヒカルノだ。降ろされた運転手と、開いたコンテナを見てやってきたらしい。

「なに、どうかしたの？」

「あ、篝火さん。ちょうどよかつた。実はみつるぎのところからISの部品を運んできたっていうんですがね」

「ん？ それって来週じゃなかつたっけ？」

篝火が運転手を見やる。私に聞かれても……と運転手は困つた顔を見せた。

運べと命じられただけの運転手に聞いても仕方がない。

「もしかして納品日の手違いがあつたのかな。中身は見た？」

「それが私にはさっぱりで」

「それもそうか。——ちよつと見せてもらおうよ」

言つて「よつ」とトラックの荷台に上る。それから積まれた荷物の

一つを解放した。

梱包されていた荷物は、黒色をした二枚板のような部品だった。シリアルにEML7《ナハトナハト》とある。見たところ、ISの部品であることに間違いはなかったが、注文した品ではなかった。そもそもだ――

「こいつはドイツ製の装備じゃないか」

さらにトラックの奥には、部品と呼ぶにはすでに形作られた物体が収納されていた。それはISそのものであった。予定にない来社に、積荷はドイツ製のIS。一体どうということだ。

「こういうことだ」

低い声と共に、ヒカルノの背へ何か堅いものが突きつけられる。

こういうとき、硬いモノの正体は拳銃と相場が決まっている。ヒカルノが恐る恐る振り向くと、やはり自分に突きつけられた物体は拳銃だった。

♡

♠

◇

♣

倉持技研敷地内。篠ノ之束専用ラボ。

〈ファイニット・ストラトス〉の開発には、まず男性でも反応するコアを開発する必要がある。

男性がISを動かせない理由は、〈パーソナライズ〉(操縦者の遺伝子情報をISに登録すること)を行うと、システムエラーが発生するためだ。

しかし、一夏の場合、そのシステムエラーが発生しない。

つまり、一夏にしかない遺伝子情報を見つけ、あらかじめコアシステムに登録しておけば、男性でもシステムエラーを起こすことなく起動できるかもしれない。

ただ、人間の遺伝子は2万個以上。その中から起動に必要な遺伝子情報を見つけ出すことは、篠ノ之束でも困難なことだった。そこで遺伝子工学を専攻するララが呼ばれたわけだ。

ララはまず一夏のDNA採取から始めた。人間のDNAは身体はどこからでも採取できる。皮膚、体毛、体液、一夏は体液を選んだ。DNAを取り出しやすいといわれたからだ。採取後、DNAはシーケンサーにかけられ、コンピュータによる解析が始められた。

解析が終わるまでの待ち時間。ラウラはモニターを走る解析情報をしきりに眺めていた。

用紙には暗号のような記号が延々と羅列されていて、ラウラにはさっぱりだった。

「遺伝子に興味ある?」

ララが問うと「うむ」と小さくうなずいた。

「私はデザインベイビーだからな。私は兵器として戦いを好むように遺伝子操作されていると聞いた。だが、何をどう操作されたのか、知らない。この機械を使えばわかるのか?」

「そうね。でも、解析機にかけるまでもないと思うわ」

ララは自分の頭をつつく。ここに解析図があるとはばかりに。

「知りたい? あなたの遺伝子に何が刻まれているか」

「ああ、教えてくれ、私が何者なのか。たとえ遺伝子に残酷な宿命が刻まれていても、私を肯定してくれる人がいる。真実を聞くことに恐れはない」

強くなつたわね。とララは微笑んだ。

「わかったわ。では、まずボーデヴィツヒ少佐に問うわ。軍隊の基本行動はなにかしら?」

ラウラは質問の意図を汲めなかったが、迷わず答えた。

「行軍だ」

「そう。歩くことね」

入隊すると新兵は30キロの重い装備を背負って歩かされる。「歩けない兵士に勝利はない」という格言があるほど、兵隊にとつて走破能力は重要なのだ。

「乗^{ビークル}り物の発達で軍隊は遠くへ素早く移動できるようになったけど、最後に物を言うのは自分の足。歩いて、歩いて、歩き続けられること。それが兵士の素養ね。そこで、あなたたちアドバンスドは持久力を高

めるため、意図的にミトコンドリア量を操作されているわ」

ミトコンドリアは、エネルギーを生成する細胞器官。

つまり〈アドバンスド〉は人よりエネルギーをたくさん生成できる体を持っている。

「他には、あなたの筋肉は遅筋と速筋の両特性を併せ持つよう操作されている。おかげで、あなたには並みのアスリートより優れた運動能力が備わっているわ。でも、それだけ。あなたには100以上の遺伝子操作が行われたけど、基本はこの運動能力とエネルギー生成率の向上だけよ」

「それだけか……？ 私 の 体 には 戦い を 好む 遺伝子 が 組み 込ま れ て い る の だ け ？ 」

自分は戦うために生み出された存在。

ゆえに戦いを好むようプログラムされている、と。

「誰がそう吹き込んだのかわからないけど、勘違いしないでラウラ。確かにドーパミンやエンドルフィンと言った興奮物質を多量に分泌するよう遺伝子操作すれば、傾向として可能よ。でも長期的には機能しない。そもそも人間の遺伝子情報に戦いを求めるコードは含まれていないし、存在もしないわ」

「存在しない!？」

「人間には戦争に順応する機能こそ備わっているけど、本能的に争いを欲したりしないわ。生物の行動原理は『エネルギーの生成』と『DNAの複製』。この二つに基づいている。つまり自己保存と子孫繁栄ね。この二つが危機に瀕したときのみ、人は戦う事を選択する。戦争は高度化した文明がもたらしたミームなの」

「『戦わなければ生き残れない』。そういう社会風潮が人々を戦争へ走らせる?」

「そう。あなたも同じ。あなたを兵器にしたのは遺伝子じゃない。生まれた環境と、育てた人間の言葉よ」

「言葉や環境が『人』に大きな影響を与えているなら、束さんたちは遺伝子じゃなくてミームに支配されているってことになるのかい?」
カタカタとキーボードを叩きながら言った束に、ララは首を振って

見せた。

「そう思うでしょ？ でも、違うの。文化や時代は人の意思が作るものだから。でも、現代では氾濫するデジタル情報が人の意思決定に大きな影響を及ぼしている。だから、検閲が必要な。この検閲については、いずれロリーナが説明してくれるでしょう。話を戻すわね。――そう、人間の遺伝子に戦いのコードは存在しない。もし仮に戦いを求める遺伝子が存在したとしても、あなたには埋め込まれていない。そもそも、あなたは戦うために生み出されたわけじゃないの」

ラウラは赤い隻眼を見開いた。

「戦うために生み出された存在じゃないだろ!？」

自分は戦うために生み出された存在。それを否定したくて、愛を求めた。誰かに愛されれば、自分には兵器として以外にも価値があると信じられたのだ。けれど、そもそも自分は戦うために生み出された命じゃなかった。

自分の根底にあった何かがひっくり返ったような気分だった。

「では、私たち〈アドバンスド〉は何者なのだ。私たちは何のために……」

「それについては、あなたの祖について語らなければいけないわね。あなたはC―037、つまりC系列37体目の個体だけど、当然ながらC系列の前には、A系列も存在するの。いえ、存在したというべきかしら」

「どういうことですか？」

一緒に聞いていた一夏が言った。

「A系列の個体が存在していたのは70年も昔なの。A系列の研究は、第二次世界大戦下のナチス・ドイツで行われていたわ。当時のナチス・ドイツは目まぐるしい科学発展を遂げていたけれど、その陰でアドルフ・ヒトラーは憂いてもいた。『いずれ我々人類は自らが生み出した科学の力によって滅びゆくのではないか』って」

彼が強い靈感の持ち主だったことは有名だ。

彼は未来を見通す力を持っていたとも言われている。

「彼は『21世紀の人類には導き手が必要だ』と考えていた」

「もしかして、それは自分だとも?」

「いいえ。人類を導くには、人を超えた存在でなければならぬ。彼はそれを超^{ユールメンシュ}人と呼んでいたわ。やがて、その超人に導かれて人類は神に昇華するとされている。人とは、神になる過程をいうの」

「じゃあ、へアドバンスド」とはそういうことなのか」

ラウラは、話の道筋を理解していた。

〈へアドバンスド〉とは、ヒトラーが予言した超人を人為的に生み出そうとした計画。猿から人へ、人から神へ。〈へアドバンスド〉とはそれを繋ぐミツシングリンクであり、モノリスなのだ。

「ヒトラー亡きあとは、ソ連がその計画を引き継いだ。東西冷戦下で行われていた核開発競争が、計画を手助けしたわ。米ソが核開発の果てに水爆を誕生させて、いよいよ破滅の扉が開き始めたからね。この時に生まれた個体がB系列よ。そして、ベルリンの壁が崩壊し、西ドイツと東ドイツが統合されて、生まれたのが――」

「私たちC系列か」

「そう、ナチス時代にA系列、東ドイツ時代にB系列、そして現代にC系列は生まれた。けれど、時代が流れ、テクノロジーが進歩しても、根本的な目的は変わっていない。A系列もB系列もC系列も、人類を神へと昇華させるために生み出された。けど、計画はC-40を最後に凍結された。存続の意味を失ってしまったの」

「なぜだ」

「この世界に人を超えた人が現れたから。〈へアドバンスド計画〉からではなく、ね。人類を破滅から救うべく〈へアドバンスド計画〉が始まったように、それもまた同じように人類を破滅から救うべく進められていた。そして実現されたの。それはすでにあなたたちのそばにいるわ」

ララはハンガーに掛けられた〈白式〉の許に歩み寄っていった。

「ユールメンシュは人を超えた人。ゆえにすでに“人”の形をしていない。人は、時代は、それをこう呼んでいるわ――人工^A知能^I、と」ララは〈白式〉を撫でた「そう、超人とは、あなたのことよ、へホワイトクイーン」

一夏とラウラは顔を合わせた。

機械ふめつの体を持ち、人間より優れた知性を持つ人工知能が、人を超えた人。

「ロリーナが生み出したあなたたちがこそが、世界を破滅から救うべく、人類を“神”へと昇華させるためのユーベルメンシユ。そうだったわね？」

《Yes》

短い返事。そこには自負のような力強さが感じられた。

《しかし、正確にいうなれば、お姉さまこそが、人々を救世の神へと至らせる存在でした》

「そう、ヘレツドクイーンを中核とするへキテイリアライザーは、やがて、ISを第三形態移行——機械と人間の生体融合——をさせることができる」

《第三形態移行を果たし、機械と生体融合を果たした操縦者は神に等しい力をえます。

これが＜Deus Ex Machina＞です。

アリスさまは神の力を使って、この世界に楽園エデンを創ろうとしておりました》

しかし、その＜赤騎士＞は先のへエクスカリバー事件で失われた。アリスもまた一戦を退いた。救済の神はもういない。——そう言っ
てしまえば希望が潰えたように聞こえるが、誰一人として暗い表情は
見せなかった。

「それでいいんだと思う。人間が犯したあやまちを、神様にすがって
どうにかしてもらおうなんて、虫が良すぎるつてもんだろ。子供
じゃないんだからさ」

「そうね。最初から神様の存在にたよらないで、自分たちでその責任
を負わないといけない。それが大事ね。だから、ラウラ。あなたも気
負う必要はないわ」

だから、宿命や運命に囚われなくて、ありのままに生きてほしい。
それは母が子に願う幸せに似ていて、ラウラは生まれて初めて“親の
愛情”を知った気持ちになった。

「ああ、そうさせてもらおう」

「ええそうして。——さて、解析には時間がかかるし、休憩にしてもらってもかまわないわ」

「そうか。では、私はすこし顔を洗ってくる」

告げられた事実には火照った頭を冷やす意味もかね、ラウラはラボ内の手洗いに向かった。

♡

♠

◇

♣

生みの親から告げられた、新たな事実。ラウラは心の整理をかねて、手洗いを訪れた。

ぼしやつと顔を洗い、鏡に映る自分を見る。私は戦うためのお人形さんじゃなかった。

それを知つたいま、鏡に写る自分は我ながら生き生きしているように思えた。心はまるで蛇口から流れる水のように清らかだ。

孤独で荒んでいたあの頃と比べたら、見違えるような変わりようだと自分でも思う。

だから、この事実を他のへアドバンスドたちにも教えられたら、と思う。

ララは「あなた以外にも生き残りがいる」と言っていた。

すべてを終えたら、生き残りを探す旅に出るのもいいかもしれない。

(その旅に「彼女」が付き添ってくれたら)

彼女。自分のために戦い、『感じるままに生きろ』と言ってくれた彼女と共に。そんなことを思いながら、水を止める。そして、踵を返して、手洗い場をあとにしようとしたところで、ラウラは不思議な出来事に遭遇した。

鏡に背を向けたはずなのに、目の前に自分の姿があったのだ。思わず後ろを振り向くと、そこには驚き振り向くもう一人の自分。だが、もう一人の自分は振り向いていない。合わせ鏡じゃない。目の前の

自分が虚像じゃないとしたら、まさか！

「もしかして、おまえは……」

古い記憶が蘇る。学園へ訪れる前より、千冬に会う前より、ドイツ軍に配属されるまえより。そう、研究施設にいた頃の記憶が。

「そうさ——私だ、姉妹^{きょうだい}」

ラウラは呼吸を忘れてしまった。

眼前にいる人物が、双子の姉——ライラ・ボーデヴィツヒだと思えなかった。

「おまえは、死んだはずだ……」

「あいにく、地獄が満員だな。こちらに送り戻されてきた」

「何をバカなことを……」

ラウラはなぜか再会を喜べなかった。きつと、ぎらぎらと放たれる気配に殺意を見たからだ。生命の危機を感じ取り、ラウラもやむをえなく警戒を表した。

「なぜ私の前に現れた？ 目的はなんだ」

「おまえに消えてもらうためだ」

刹那、ラウラの眼前で何かが閃いた。反射的に身を反る。数瞬遅れて、自分の銀髪がキラキラと宙を舞った。振るわれたのはナイフか。切断された前髪を見て、ラウラは毒づいた。

「反応が遅いな。平和ボケしたか」

「そのようだ。おまえもどうだ？ ——学校生活とやらはなかなか悪くないぞ」

わりと本気の提案を、ライラは鼻先で笑った。

「不要だ。平穩など、息苦しいだけだ。馴れ合う気はない」

「違う。馴れ合っているんじゃない。信頼し合っているんだ」

「信頼だと？ 笑わせるな。もし我々が信頼されるとしたら、確実に相手を殺められる兵器であるときだけだ。命令を確実に履行する殺人マシーンになれないなら、われわれは誰にも信用されない。引き金を引いても弾が出るかわからない拳銃を誰が信頼して使う」

「それは兵器の確実性だ。人間の信頼関係とは違う」

「兵器人間である私たちにとっては、どちらも一緒だ！」

猫のように体軀を屈め、蓄えた跳躍力を一気に解放する。野生の狩猟動物さながらの跳躍を持って、ライラはいつきに肉薄した。突撃してきたライラに、足元をすくわれたラウラは、バランスを崩して尻から倒れこんだ。すかさず馬乗りになったライラがナイフを突き立てる。

ラウラはすんでのところで、手を掴み、ナイフを食い止めた。

「くっ……私を殺してどうするつもりだ。入れ変わる気か」

「頭の悪い奴だ。平穏など不要だと言っただろ。——私が欲しいのは、私たちを必要とする世界。際限のない争いの世界だ」

込められた力で、ナイフの刃先がどンドンラウラの額に迫った。

「——貴様、やつらに加担する気か」

「そうだ。ヘリリスは私が望む世界を作ってくれる。私たちは戦うために生み出された存在。お前も知っているだろ。私たちの遺伝子には戦う事がプログラムされている。宿命は変えられない。だから、世界を変える」

「平和な世界では誰も自分に価値を見出さないから、自分の価値が見出される世界に変えようというのか」

「そうだ。彼女たちの求める普遍的な戦争世界では、戦うようにプログラムされた私たち——アドバンスドの存在は肯定される！ 許される！ 求められるのだ！」

「早まるな、ライラ。遺伝子が人の価値を決めはしない」

ラウラは背筋の筋肉を総動員して、体を起こす。その勢いを利用してマウントポジションを奪う。ラウラは押さえつけた姉に馬乗りになって、手首を押さえつけた。

「私の目を見る、ライラ」

床に押さえつけたライラと見つめ合う。瞳には鏡のように同じ顔が互いの瞳に映し出された。

自分を見つめ直せと訴えるラウラを、ライラは鼻先で嘲笑した

「出来損ないの、不完全な瞳だ」

鋭い痛み。

腹部にライラの膝がめり込み、ラウラはうめいた。そのすきにライ

ラがマウントを奪い返す。

「おまえは昔から出来が悪かった」

跨った上から、ライラがこぶしを振り下す。

「——甘えん坊で」

さらに一発。右手のこぶしを妹の右頬にめり込ませる。

「——さみしがり屋で」

今度は左のこぶしを振り下す。

「——泣き虫だった」

ライラは二本の腕のラウラへ伸ばし、頸部を締め上げた。

必死にほごうとするも、ルビーアイは充血してさらに赤く染まっ
ていく。口からは苦悶の喘ぎが漏れてやまない。それでも細い声
音で訴え続けた。

「おまえは……遺伝子に記された、宿命を受け入れるという……。遺
伝子の……基本は子孫を残す、こと。同族、殺しは……その遺伝子の
プログラムに反する、だろ……」

「何が言いたい！」

ラウラは全力を振り絞って絞首を解き、再びマウントポジションを
奪い返す。

そして、組み敷いた姉へ泡交じりに叫んだ。

「おまえの行いは矛盾していると言いたいのだ。本当は何がしたいん
だ、おまえは！」

「うるさい黙れ！」

三度、ライラがマウントを奪い返す。そこからは上下の奪い合い
だった。何度も上下を入れ替り、タイルの床を転がり続ける。奪って
は殴り、殴られては奪い、何度も繰り返していくうちに、どちらがラ
ウラで、どちらがライラか分からなくなる。ようやく、よろよろと立
ち上がった二人は、間合いを取った。

「しぶといやつめ」

「双子だからな。お前が倒れないなら、私も倒れない」

お互い擦り切れた身なりを直すことなく構え直す。

そして、駒のように回転しながら、相手の側頭部に回し蹴りを叩き

こむ。互いに防御を捨てた一撃は、互いの米神にクリーンヒットした。白目をむいて、やはり互いに失神する。

だが、10秒の沈黙ののち、立ち上がったのは、片方だけだった。

その片方は、ルビーのような赤い瞳と、ダイヤモンドのような銀髪
の――。

第115話 裏切り

「遅いわね、ラウラ」

倉持技研、束専用ラボ。遺伝子解析が終わり、出力されたデータを手にララは思った。

顔を洗うとココを出てから30分。気持ちを整理するにしても、遅いように思えた。

「見てきましようか」

〈白式〉のコアユニットを解放しながら一夏が言った。

「いえ、ラウラがいなくても作業は続けられるから。むしろ、一夏くんがいなくなると作業が進まないから、ここにいて頂戴」

「わかりました」と一夏は、コアユニットの認証装置に触れて、ロックを解除する。そしてソケットから取り外したコアを、束に手渡した。束はコア解析用のソケットに〈白式〉のコアを接続して、コンピュータを起動させた。

モニター画面に、二重螺旋状のデータ構造体と、人間の神経回路網ニューロネットワークに似たネットワーク回路が映し出される。それを見て、一夏が首をかしげた。

「これはなんですか？」

「ヘフラグメントマップ」とヘコアマトリックスだね。ヘフラグメントマップっていうのは、人間でいう塩基配列みたいなもんかな。ISの形を決めているのがココ。で、そのデータを処理しているのがヘコアマトリックスなのさ」

「そういえば、コアを停止させるISがいましたけど」

「〈ヴェルフエゴール〉だね。おそらく、そのISはこのヘコアマトリックスを乱す特殊な波長を出しているんだと思うよ。コンピュータも電磁波を浴びると壊れるでしょ。それと一緒だよ」

「防ぐ手段はないんですか」

「コアの外殻は電磁波や音波、X線さえ通さない素材でできているから、普通は外部から干渉できないんだよ。つまり、未知の波長だから、それが解析できないことには、防ぎようはないね」束はララの方を向

き「ねえ、ねえ、ララちい。〈白式〉のへフラグメントマップに珍しい情報パターンがあるんだけど、いつくんの遺伝子情報に、これと似たようなパターンってある?」

そう訊くと、ラウラの向かった方角を見ていたララが「はっ」とこちらを向いた。

「な、なんでしよう。東博士」

「もう、聞いてなかったの。いつくんの遺伝子パターンにこれと似たようなパターンはないかって。——もしかして、ラウラちゃんのが気になっちゃってる?」

ララは苦笑いを見せた。凶星のようだった。

「ええ、ちよつと遅すぎないかしらって」

ラウラは自分が生み出された真意に驚いていた。けど、シヨックを受けているようには見えなかったから、トイレで落ち込んでいるとも思えなかった。それにラウラは与えられた仕事を誠実にこなす律儀な性格だ。護衛対象の一夏を放って、ほつき歩いているとも思えない。

「便秘なんじゃないか?」

げらげらと、品のない笑い声をあげるのはオータムだ。一夏が「デリカシーがない人だな」と内心で思うと、オータムは急に笑うことをやめた。何か気配を感じ取ったようだ。表情が狂犬のように鋭くなっている。

「人の気配だ」

オータムは通路の奥に目配せした。

「あの子が帰ってきたのかしら」

「いや、複数だ」

言って立ち上がり、「おまえらは隠れてろ」と手を払う。

同時にラボと通路をつなぐ自動扉が開いた。

入ってきた人物は黒づくめの不審者だ。手にはPDW。体にはISスーツのようなフィット型のコンバットスーツと、タクティカルベスト。頭にはバクラ帽子をかぶり、顔を隠している。身体は細見のシルエットで、女性のように見えた。そんな人間が5人。

オータムはすかさず懐から自動拳銃を取り出し、発砲した。

この対応の速さが利き、怯んだ不審者が一度、通路内に退いていく。瞬時の行動力と判断力はさすが元特殊部隊といったところか。

「いいか、おまえら、そこを動くなよ」

襲撃からやや遅れて、コソコソと物陰に潜んだ三人は同時にうなずいた。こういう修羅場に直面したとき、一般人と戦闘訓練を受けた人間とのあいだには差が出る。下手な行動を起こさず、じつとすること。戦わないことが、彼らにとって「戦う」ということだ。

「しかし、白昼堂々と襲撃とは、どこの連中だ」

グリップを握りしめ、敵の再突入に備える。

見たところ、敵は女性で構成されているようだった。女性で構成された部隊は限られている。しかも装備はドイツ製ときた。そして、ここには生体認証式のセキュリティがある。潜入にはラボ関係者の手引きが必要だ。以上を踏まえると――

（該当する人間はひとりしかいねえじゃねーか）

そう考えが及んだとき、背後の通路から声がした。

「ちがう、奴らだ」

言ったのはラウラだった。

「おまえ、いままでどこに行つてやがった」

「すまない。連中と遭遇してな。遅くなつてしまった」

そういつたラウラの頬には、いくつもの打撲の痕があった。服装も汚れまみれで、はつきり言ってみすぼらしい。身だしなみを整えず、傷の手当さえせず、ラウラはオータムに訊ねた。

「状況は」

「銃器を持った女が5人。たぶんドイツ製だ。あと防弾性の戦闘スーツを身に着けている」

「こちらの装備は？」

「9ミリ拳銃が一丁だけだ」

「ISは？」

「持っていたが、ヘデウス・エクス・マキナに取り上げられちゃった。そのあとアメリカ海軍へ返しちまいやがってよ」

「でも、おかげで、あなたは軍法会議を逃れられたのよ。わざわざ、千春はペンタゴンまで行つて話をつけたんだからね」

「そいつだって、スクールからサラの情報を買った代金だろ」

つまり、スクールから情報を得るために、アメリカと交渉をしたということか。一体どんな情報を得るためだったのだろうか。いや、いまはそれよりもどうやってこの場面を切り抜けるか、だ。一夏は〈白式〉を見た。〈白式〉はコアが外されていて、直ぐには動かさそうにない。なんとかコアを白式にもどして――

「おい、じつとしていろ。奴らの狙いはおまえなんだ。下手に動くな」

一夏は浮いていた腰を素直に下す。

「よし、いい子だ。まずここからおまえを退避させる。おい、ちびすけ、ここはあたしがなんとかする。おまえは、そいつを連れて、外に出ろ」

「そうね。外にはマドカがいるわ。ラウラ、一夏君をエスコートできる」

「了解した。一夏、動けるか?」

「お、おう。でも、他のみんなは……」

「私たちは〈白式〉を回収してから後を追うわ。大丈夫、ロリーナより運動神経に自信あるから」

言つて、自虐的に自分の小さい胸を見下ろす。

走つても暴れそうにないので、巨乳のロリーナより動けそうに見えるた。

「束さんはバインバインだけど、心配いらないよ。この服には防弾能力と、身体アシストもあるからね。それに酔狂でアフリカの紛争地を渡り歩いていないよ」

束はシニカルに笑つて、スカートをひらつかせる。この状況で冗談を交えられる分、一夏より余裕がうかがえた。一番この状況で動揺しているのは自分か。情けないと、一夏は自分を奮い立たせた。

「わかりました。じゃあ、あとで合流しましょう。オータムさんも、気を付けてください」

「おう」

「では、いくぞ」

ラウラの合図で奥の通路に向かって駆け出す。後ろ髪をひかれながらも一夏とラウラは全速力で駆け出した。

一夏は先導するラウラに続いた。後ろ髪をひかれる思いだが、自分が残ったとしても何かできるわけでもない。いまは全力で出口を目指すこと。それが先決だ。

出口をぬけると、一夏は呼吸を整えた。

なんとか肩で息ができるようになったところで、これからのことを考える。

まず千冬姉と連絡を取ろう。そして、救援なり援護なり出してもらおう。だが、肝心な連絡手段をラボに置いてきてしまっていた。ケータイもく白式もラボだ。

「——な、ラウラ、何か連絡手段はないか。千冬姉にこの事を——」
となりのラウラを見やる。彼女は呼吸を乱さず、肩で息もしていなかった。ただ、その肩を小刻みに震わせている。一夏には笑っているように見えた。

「どうした、ラウラ。何がおかしいんだよ」

「いや、マヌケだと思ってな。——それだけ奴が信用されていたということか」

唐突に蔑笑を漏らしたラウラに、怪訝な表情を作る一夏。

「マヌケ？ おまえ、なにを言ってる……」

「何を、だど？——おまえがまぬけだと言っているんだ、織斑一夏」
言ってるすたすたと歩み寄る。そして、一夏のみぞおちにこぶしをめり込ませた。激痛が走り、視界がかすむ。痛みは、あの時の——平手打ちされたときの、比じやなかった。

「な……なんで、俺を……」

痛みで息も絶え絶えになる一夏に、ラウラはもう一発、こぶしをみまっした。激痛が激痛で上書きされて、意識が落ちかける。必死に意識を保とうとする一夏を無視して、ラウラは耳骨を叩いた。

「私だ。アダムを確保した。回収の手筈を頼む」

骨伝導より「仲間」から『了解』の返答が届く。

ラウラは気を失った一夏を縛るべく両手親指の間接をひねりあげた。すると、上空から白いISが下りてきた。騎士の意匠。雪のように白い装甲。電子装置を満載したレーダーシールド。へビショップをインストールしたくりりいだ。

♡

♠

◇

♣

「これはどういうつもりだ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

一夏を拘束するラウラを、くりりいのパイロット『マドカ』は見下ろした。

「イブか」

所属する組織から、一夏は「アダム」のコードネームで呼ばれている。

そのアダムの一部から生まれたマドカは「イブ」のコードネームで呼ばれていた。

「ふん、キメラごときが遺伝子強化素体である私を、どうこうできているのか？」

ラウラは嘲るように鼻先で笑った。

「びびるやい」

マドカは腕部に備わったプラズマガンをラウラに向けた。

銃口に電光が灯る。次の瞬間、マドカのHMDに警報の文字が表示された。

《警報——7時方向から照準レーダー波を受けています》

AIの警報。次いで7時の方角から砲撃。

飛来した砲弾はくりりいの右肩ウィングスラスターを穿った。

《警告——右部スラスター被弾。損傷規模クラスB。推力35%低下——》

「くそ、へジャック、エンハンスド・ハイパーセンサー広域索敵モード」

《ラジャー》

舌打ちしたマドカが第二波に備えると、望遠レンズが敵機の接近をとらえた。

重厚な黒い機体。右手には大型の砲。マドカは顔をしかめた。

「シユヴァルツエア・ツヴァイク、だと……」

攻撃を加えてきたISは、ドイツの第三世代型ISだった。

VTシステム暴走事件以降、生産が凍結されたから、この機種を運用している組織は多くない。現時点で運用している部隊はドイツの〈特殊機甲機動部隊〉のみ。つまり砲撃手は〈黒ウサギ隊〉ということになる。

「……クラリツサ・ハルフオーフ、なぜ、貴様まで」

〈シユヴァルツエア・ツヴァイク〉のパイロット、クラリツサ・ハルフオーフは、ラウラをかばうように下りたつた。

「隊長、ここは私が」

「了解した」

ラウラはその細腕に似合わない怪力を発揮して、一夏を担ぎ上げた。

マドカがすぐさま動く。それをクラリツサがワイヤーブレードでけん制する。動きを抑えられたマドカは顔をしかめた。

「なぜドイツ軍が、こんなことをする！」

当然のごとく、クラリツサは答ええない。作戦目的を敵側に明かすようなマネをエリート彼女がするわけがない。それをわかっていても問わずにはいられなかった。

（いや、待て、そもそもこいつらはドイツ政府の意思で動いているのか）

ドイツは〈VTシステム暴走事件〉のあと、IS開発の主要企業が〈国際IS委員会〉の制裁を受けたことで、ISの開発力が低下している。それをカバーするため、〈フィニット・ストラトス〉計画を奪取したい思惑がある？——とは、考えにくかった。

なにより軍の命令とはいえ、恩人の弟であり友人である人間を、簡単に売りわたせるだろうか。

いや、できはしない。彼女は無謬性の限界を知っている。

絶対服従が兵隊として望ましい姿だとしても、人間である以上、機械のようにはなれない。

では、なぜ、ラウラ・ボーデヴィツヒは友人を連れさろうとしているのか。

操られているのか。そもそも別人であるか。——答えは後者だ。

「くそ、迂闊だった。こんな三流トリックに引つかかるとは……」

マドカは焼けるような羞恥に襲われながら、迫るワイヤーブレードをブレードで弾き返した。

（くそ、こいつをどうにかして、早く取り戻さなければ。だが、この装備では……）

〈ヘビショップ〉は電子戦に特化したパッケージ。攻守に優れた〈シュヴァルツエア・ツヴァイク〉を相手するには、いささか火力が脆弱だった。

クラリツサは火力に物を言わすように、大口径の磁気誘導砲を連射する。

腹部に砲弾を受けたマドカは後方へ大きく吹き飛ばされ、倉庫へと墜落した。

倉庫は武器保管庫のようだった。〈打鉄〉の刀型近接ブレードや50口径突撃小銃が置かれている。マドカは体勢を整え、上空を煽いだ。クラリツサのレールガンがこちらを向いている。

マドカは恐怖よりも怒りを抱いた。偽モノの隊長に従う、隊員に腹が立った。

「貴様が従っている隊長は偽物だ。お前たちは騙されているんだ。さっさと下がれ」

やはり、クラリツサは応えなかった。聞く耳を持つとうとしていない——というよりは、どこか聞こえていないようだった。よく見れば瞳孔が開き、グラグラと揺れている。正常な状態とは思えなかった。

「……操られているのか……」

方法はわからない。しかし、目の前の彼女が正気じゃないことは

判った。

言葉で説得しても通じないとわかる程度には、彼女の瞳は濁っている。

「ち、戦うしかないか」

マドカは置かれていたコンテナから武器を取り出す。

手にしたのは、戦車に備えるような滑腔砲だ。

「へジャック〜！」

《ラジャ、武装のアンロックを開始。完了まで5、4、3》

2……………1……………。

武器の使用権限を解除し、マドカは〈撃鉄〉の装備——44口径120mm滑腔戦車砲を構えた。

♡

♣

◇

♠

倉持技研、束専用ラボ。オータムは不可解に思っていた。9ミリの自動小銃を構えて、油断なく見据える先では、敵が自動ドアの先で再突入のすきをうかがっている。その数は一、二、三、四、五。——そう、五名。それが不可解だった。

「束、おまえには何人いるように見える？」

コンピューターアームの影に隠れていた束は機械の耳をピクピクと動かした。彼女のウェアブルコンピューターには、スマートスキンを応用したリーダーパッチが備えられていた。

「うくん、束さんから見たら五人かな」

「やっぱり、5人か。どういうことだ……」

オータムは眉間に皺を深く刻んだ。

「何がそんなに不可解なの？」

「特殊部隊のチームってのは、基本的に四人構成なんだ。四人未満だと、火力不足に陥いる。安定性もなくなる。負傷時の、隊員の代えも利かなくなる。逆に五人以上だと機動力が落ちるうえ、連携に支障が出やすい。仮に四人以上の編成を組むとしても、奇数はありえない」

「二で割れないから？」

ララが言った。

「そういうこつた。二人組ずつに分けると余るからな。特殊作戦において、単独行動はナンセンスなんだ。死んだら与えられた命令を誰も引き継げない。ワンマンアーミーなんざ、ハリウッド映画ぐらいのもんさ」

「じゃあ、相手は素人？」

「そうも思えねえ。個々の練度もある。それに素人に難度の高い『誘拐』をやらせるほど、奴さんもバカじゃねえだろ。だから不可解なんだ」

束もララもオータムがいぶかしむ理由が理解できた。

装備も充実していて、練度もある。そんな連中がなぜ5人という、非合理的な編成で、作戦にあたっているのか。その答えは、オータムのうしろから現れた少女よりもたらされた。

「注意をひきつけるための、おとりだ」

言ったのはラウラだった。右頬に打撲傷。服装もよれよれだった。

「おまえ、なんで戻ってきた。坊主は無事なのか」

「聞いてくれ。ララ・ボーデヴィツヒ。ライラ・ボーデヴィツヒが生きていた」

ララのみならず、一同が苦虫を噛み潰したような顔をした。

思っていた反応と違い、ラウラの方が戸惑った。

「どうした」

「ライラならいま、ここにいたわ。私たちはあなたと勘違いして一夏君をたくしてしまった」

見破れなかった己の失態を、恥じるようにララは身もだえした。

「なるほど、『5人編成はおとり』ってのはそういう意味か、くそ」

向こうはあえて5人編成にすることで、存在を気づかせて注意を引きつけた。

その隙にすり替わったライラが一夏を連れ出す算段だったのだ。そしてまんまとしてやられた。

「そうだわ。マドカは」

ララは通信をマドカにつなぐ。ぎぎつとノイズが入って彼女の声が入ってきた。

「マドカ、一夏くんは？」

ザザザという雑音のあと、返事がかえってきた。

『……すまない。奪われた。敵はラウラ・ボーデヴィツヒに扮していた。——クツ』

爆発音。そのあと、マドカの怯んだ声が続いた。

「戦闘中なの？」

『現在、黒ウサギ隊と交戦中。——あいてはクラリツサ・ハルフオーフだ』

「何!? バカな!!」

ラウラは瞠目して、通信機を奪いとった。

「どういうことだ」

『知らん。現に私はクラリツサ・ハルフオーフと戦っている』

「じゃあ、ここに侵入してきた連中もへ黒うさぎ隊<か」

『だが、正気とは思えん。何者かに操られている可能性がある』

「我々はマインドプロテクトを受けている。簡単に操られたりはしない」

「いえ」とララが首を横に振るう。

「正常な精神なら、そうだと思うわ。けど、彼女たちの体内に注入されているナノマシンは一種の万能薬よ。精神に作用する物質を分泌させて、微睡まどろんだ状態にすれば、外部から催眠や暗示をかけやすくなるわ」

特殊部隊は簡単に洗脳されたりしない。だが、人間は精神が不安定な状態ほど、思い込みや錯覚をおこしやすくなる。混濁した意識状態では、訓練を受けた人間とはいえ、無敵ではなかった。

「くそっ！」

屈辱だった。自分のみならず、部隊さえも利用されるとは。

「ラウラ、一夏君がさらわれたことは、ここにいる全員の責任。一人で背負い込まないで」

「すまない」

「ともかく、いまは洗脳を解くよりいつくんを取り戻すことが先決だ
と思うなあ、束さんは」

他人事のように聞こえたが、ラウラは反論をぐつと飲み込んだ。お
かげですこし冷静になれた。自分が犯した失態。部隊が犯した失態。
挽回するすべは一つ。一夏を取り戻すことだ。

「わかった。だが、どうやって追跡すればいい」

「まず、私の部屋に行きましょう。そこにへバンダースナッチがある
わ」

「バンダースナッチ？」

「移動しながら話すわ。——オータム」

「おう」

オータムが銃を鋭く構える。

彼女が敵の動きを警戒してくれているうちに、ラウラとララは来た
道を引き返すように走り出した。

第116話 異種格闘戦II

〈倉持技研〉。束専用ラボ。自室に到着したララは、置かれた一立方メートル大のコンテナに触れ、認証を行った。爆破ボルトらしき機構が働き、コンテナが開く。現れたのは狼犬を三周りほど大きくした、機械仕掛けの犬だ。ララはそれについて説明を行った。

「バンダースナッチ」は、分隊支援ユニットとして開発された犬型自動人形よ。動力はプラズマバッテリー、駆動部には電磁筋肉、骨格はカーボンファイバー。だけど、頭部（鼻部分）には生体部品が使われている」

「生体部品……アーヴィングと同じ？」

驚異的な跳躍力を持つ自立無人兵器の脚部には、機械部品ではなく、遺伝子改良された生体部品が用いられている。そのテクノロジーが「バンダースナッチ」にも用いられているという。

「そう、犬の遺伝子とES細胞で培養したバイオセンサーよ。感度は犬の嗅覚に匹敵するわ」

「なるほど、^{トレイサー}追跡犬として打ってつけなわけか」

つまり、匂いで一夏を追おうというのだ。

「さらにバイオセンサーが感知した匂いを視覚化して「ソリッドアイ」に投影することもできるわ。——あなた、「ソリッドアイ」は？」

「……ライラに奪われたらしい……」

いまのラウラの右目に一夏から譲られた多機能眼帯はなかった。

自分になりすますため奪ったのだろうか——いや、それだけとは思えなかったが、今は考えている暇はなかった。

「そう、ならしかたないわね。じゃあ、一夏君をお願いね」

「了解した」

ラウラは「バンダースナッチ」の背に跨った。荷物持^{ローダー}ちの機能と、小柄な体格が幸いし、収まりよく乗ることができた。「バンダースナッチ」は何の負荷もなく、ラウラを運んだ。

「出口か」

出口を抜けると、「バンダースナッチ」から降りて〈倉持技研〉の施

設内を見渡した。

ラボの外は慌ただしい空気に包まれていた。走り回る人と飛び交う声が、情報の錯綜をラウラに教える。裡から苦い気持ちがあがりますが、今だけは飲み込んで、追跡に意識を戻す。

〈バンダースナッチ〉はすんすんと鼻を鳴らして南方向へ頭を向けた。

「ごっちか」

再び、〈バンダースナッチ〉に跨り、走り出す。

人間には感じ取れない匂いを頼りに、犬型の自動人形が案内した場所はヘリポートだった。

Hのマーク上では、テイルトローター型の輸送機が既に離陸体制に入っていた。周囲には見知らぬ兵隊が離陸前のヘリを護衛している。独自のヘルメットに、ボージェイリースーツ。浮かぶボージェイラインは女性のもので、手にはFN-PP90が握られている。サイドアームズに、Five-sevenとマチェット。見るからに〈黒ウサギ隊〉が運用する装備ではない。

彼らは〈バンダースナッチ〉の接近に気づくと、銃を構えた。

すかさずラウラを乗せた〈バンダースナッチ〉が電磁筋肉に紫電を走らせて横っ飛びする。射線を交わした〈バンダースナッチ〉はアーチを描いて、そのまま近場のコンテナの影に身をひそめた

「ギリギリ間に合ったが、これでは……」

毒づきながら、コンテナの影から様子をうかがう。敵の正体は不明だが、練度は高そうだった。容易に接近できそうにない。ラウラが手を拱いていると、気づいたライラがヘリのスライドドアを開けて叫んだ。

「やっと起きたか。だが、遅かったな、こいつはいただいていく」

言つてヘリ後部のシートに視線をやる。

そこには一夏の姿があった。気を失っているのか抵抗する素振りもうかがえない。

「そうはしません」

だが、垂直離陸式の輸送機は徐々に高度を上げつつあった。

「いい気迫だ。そいつを評して『部隊』は返してやろう」

ライラの言葉と共に、警護に当たっていた兵隊が軽やかに跳躍した。すでに3メートル以上も離陸していたにも関わらず、わずか一回のジャンプで乗り込む。まるでカエルのような跳躍。それと入れ替わる形で下りてきたのは、全身ラバースーツの奇怪な物体だ。

「——ただし、こいつを倒せたらな！」

いつぞやのデュノア社で戦った〈ラフィンングオクトパス〉を思い起こさせる物体は、開花のように6つの手を咲かせた。その指先には人形が傀儡のようにぶら下がっている。目を凝らせば、そのどれもが見たことある姿をしていた。

「ネーナ、ファルケ、マチルダ、イヨ……？」

ラバースーツを着た物体が有した人形は、みんな〈黒ウサギ隊〉隊員の姿を模していた。

「まさかこいつが〈黒ウサギ隊〉を操っているのか」

そうだとばかりに、人形をつるした糸を操る。

タタタタと聞こえてきた複数の足音に、ラウラは小動物のように見回した。

自分を取り囲んだのは、自分の部下たちだった。その全員が瞳孔の開いた目でこちらを見ながら、武器を構えている。

へさあ、悲鳴を上げろ！ 心のそこから叫べ！

ラバースーツの物体が、カランビットナイフを構えて叫ぶ。

感情を揺さぶるような甲高い叫びを上げ、祈るように構えたその姿は叫ぶカマキリスクリーミングマンティスのようだった。



まるで枝木が空に向かって伸びていくようだ。とマドカは思った。
〈シユヴァルツエア・ツヴァイク〉の固定浮遊部位から射出されたワイヤーブレードの事だ。

(だがそれだけだ)

16本は確かに数的脅威だが、有線制御である以上、複雑な機動は取れない。絡まるからだ。

マドカはワイヤーブレードをギリギリまで引きつけ、密度を高めたのち、機体を反転。攻撃を受け流す。すかさされたワイヤーブレードは後方でスパゲッティみたいになった。

(数を増やせばいいなど、そまつなカスタムだ)

絡み合って制御不能になったワイヤーを握り、マドカは44口径120mm戦車砲を発砲した。

すさまじい反動で骨格が軋む。元は打鉄用の装備。それを無理に運用しているせいか、照準がぐらつく。しかし、クラリツサは怯んで身を引いた。そうはさせないと、握ったワイヤーブレードを手繰り寄せる。クラリツサは慌ててワイヤーブレードを破棄し、跳躍。施設を向こう側に身を隠した。

(妙だな……)

マドカは破棄されたワイヤーブレードを見つめ思った。

「ヘシユヴァルツエア・レーゲン」のワイヤーブレードは4基。これは操作性と攻撃力を天秤にかけた結果だ。16本という数は、あまりに多く、運用性から見てもアンバランスな仕様といえる。ISを専門に扱うエリートフォースがそれを分らないはずがない。クラリツサは、アリスやラウラに匹敵する戦闘プロフェッショナルの専門家であることは確かだというのに。

(いや、本来は扱えるのか……)

おそらく、本来は16本を操れる技量があるのだ。しかし、今は操れていない。

どういうことか。

しばし黙考したあと、マドカは片翼になったスラストアーに火を入れて飛翔した。

高度を上げてから、右に備わったレーダーシールドを起動させる。強力な電子兵装を持つ「ヘビシヨップ」の探索レーダーは、身を潜めていた「ヘシユヴァルツエア・ツヴァイク」をすぐさま見つけ出した。

望遠カメラが映し出したクラリツサは、両耳を塞ぎ、肩で息をして

いた。

怯えているというより苦しんでいるようにも見える。だが、マドカは躊躇なく引き金を引いた。

寸でのところで察知したクラリツサが咄嗟にA I Cで飛来する徹甲弾を受け止める。

運動エネルギーを奪われた徹甲弾がみるみるその勢いを失っていく——かと思いきや、糠に杭が刺さるようにズンとめり込んでいった。やがてA I Cを突破した徹甲弾はクラリツサの胸にダメージを与えた。

(やはりか……)

物理攻撃に絶対的な防御力を誇るA I C。それがたった一発の砲弾に打ち負ける。

その事実にある確信を得たマドカは、腰部のプラズマブレードを引き抜き、斬りかかった。クラリツサもプラズマ手刀を展開して、攻撃を受け止める。

火花を散らす両者の獲物。

マドカはサイドバインダーを解放した。吐き出されたE M P (電磁波パルス) がプラズマの刃を形成する収束磁場に干渉して、それを無力化する。唐突に罅迫り合いを解除されたクラリツサは体勢を崩した。

すかさず、マドカが44口径120mm滑腔戦車砲を構える。

近距離からの発砲。

腹部に徹甲弾を喰らったクラリツサは、後方へ吹き飛ばされ、硬いアスファルトの地面に叩きつけられた。

(やはり集中力を欠いているな)

うまくいき過ぎた戦闘にマドカはこれ以上ない確信を得た。

彼女は戦闘に集中できていない。ワイヤーブレードの操作に精悍さを欠いていたこと、A I Cを維持できなかったことがその証左だ。

では、なぜ集中できていないのか。理由もわかっていた。彼女は“洗脳”に抗っているのだ。

「うああああああああああああああああああああ」

両耳を塞ぎ、何か抗おうとしているクラリツサを、マドカは銃を構えながら見守る。

内側の戦いには、誰も加勢することができない。

このまま屈服するか、それとも克服するか。すべては彼女次第。マドカにできることは何もなかった。

♡

♣

◇

♠

ラウラは地面を蹴った。こちらに銃器の類はなく、格闘戦を仕掛ける以外に手段がないから、一跳で相手の懐に飛び込む。

ネーナはすぐさま近接ナイフを抜いた。そして、刺突を繰り返す。ラウラは右へはじき、その勢いのまま背中へ捻じ曲げた。

「ネーナ、相変わらず格闘戦が拙いぞ。ゲームと現実が違う。覚えておけ」

度々クラリツサが日本から持ち帰ってくるテレビゲームを、部隊で一番楽しみにしているのが、このネーナだった。特に格ゲーの腕前は大したもの、無類の強さを誇っている。だが、現実の格闘戦はいまいちのようだった。

「ゲームもいいが、鍛練を怠るな」

関節技で動きを封じたあと、ラウラはネーナのフォルスターから自動拳銃を抜いた。

そして、彼女を楯にする形で構える。

そのラウラと銃を突き合せたのはファルケ。そばかすがチャームングな新米隊員だ。

「ファルケ。災難だったな。初めての实战がこんな形になろうとは、私としても残念だ」

そう告げた次の瞬間、ラウラの背後に影が忍び寄った。年長のマチルダだった。

マチルダが、ナイフを抜き、ラウラに斬りかかる——寸前、何かは横殴りに彼女に飛び掛かった。犬型自動人形の「バンダースナッチ」

だ。へバンダースナッチは、マチルダに噛みつき、組み伏せた。

「そういえば、おまえは犬が好きだったな。しばらくそいつと戯れている」ラウラは銃の照準を揺るがさず「さて、ファルケ、任務ではなにおこるかわからない。今回の出来事も教訓として肝に銘じておけ」

発砲。はじき出された9ミリの銃弾が、ファルケからPDWを取り上げる。その隙にラウラはネーナの首筋にグリップを叩き込む。次いでファルケの間合いまで詰め寄り、腹部にこぶしを叩きこんだ。

うめき、クの字に折れるファルケを一本背負いで地面に叩きつける。

受け身を取れなかったファルケはそのまま白目をむいた。

「最後はおまえだ、イヨ」

イヨはPDWを捨て、腰からロングナイフを抜いた。銃よりも刃物を得意とする彼女は、部隊でも古株で、経験も実力も指折り。体格は178センチの長身。階級は中尉。指揮を執るのが少佐のラウラ、それを補佐するのが大尉のクラリツサなので、中尉の彼女は現場のリーダーを務めることが多い。それだけにラウラの信頼も厚かった。

「そのおまえがこいつも操られるとは……」

イヨがロングナイフを横一線に振るう。得物を活かしたりーチの長い一撃。そこへ彼女の鍛え挙げられた剣速が加わると、ラウラでもかわすことは困難だった。ラウラは交わすことをあきらめて、ナイフで受けとめた。だが、20センチ以上の体格差は気合で埋めることは難しく、徐々に押し込まれていく。

しかし、ラウラは余裕を崩さなかった

「そうだ。整備部隊のカレシが言っていたぞ。——おまえの愛は重いそうだ」

イヨ、29歳。初めて出来た恋人からの、痛い一言だった。それが響いたのか、わずかに力が緩む。そのすきに攻撃を受け流し、間合いを取る。次いで跳躍、発条のように飛んで、自重を乗せた一撃をイヨに見舞う。寸頸とよばれる中国拳法の一つで、体格差がある相手に有効な技だ。それでイヨをのしたラウラは「ウソだがな」と告げて、へス

クリーミング・マンティス」をねめつけた。

「次はおまえだ」

〈叫ぶ蠅螂〉は人間の感情を揺さぶるような、どこか寂しく悍ましい雄叫びを上げた。

〈戦場がある限り、叫びは消えない〉

鼓膜が痛くなる。ラウラが耳を塞ぐと、背後からナイフが振り下された。咄嗟に前転するも背中に赤い線が残る。痛みをこらえて振り向けば、斬りかかってきた相手はイヨだった。それだけじゃない。ニーネ、ファルケ、マチルダたちもゆらりゆらりと立ち上がっていた。「確かに気絶させたはずだぞ……」

フラツと接近してきたニーネに、掌底を打ち込む。先よりも強く。確実に意識を狩る勢いで。

だが、背中から倒れ込んだ彼女は、ビデオを巻き戻すかのように再び立ち上がった。

「くそっ」

再び構えるが、拳は振り下せなかった。意識がなくても操れるのなら、気絶させる意味がない。戦っても、いたずらに仲間を傷つけるだけ。〈バンダースナッチ〉もグルルと吠えて威嚇しかできなかった。そうしている間にもヘリの機影がどんどん遠ざかっていく。

「おい、おまえはヘリを追え。お前の脚なら追いつける」

グルと鳴いて〈バンダースナッチ〉はマチルダの上を飛び越えた。マチルダは怯むこともなく、フラフラとラウラへ歩み寄ってくる。覚束ない足取りはリビングゲットさながらだった。虚ろだった瞳はさらに虚ろに。もはや意思の光は感じられなかった。本当に傀儡人形のようにしか見えない。きつと撃つても動かし、痛みも感じないのだろう。そう思えて銃も使えなかった。

そうになると、ラウラに残された行動は、跳ね除けるだけだった。「よるな」

群がってくる仲間を突き飛ばす。だが、イヨに背後を抑えられてからは早かった。

マチルダに手を掴まれ、ニーナに足を抑えられ、ラウラは地面に倒

れ込んだ。

そこへフアルケが馬乗りになり、ラウラを押さえつける。

「さあ、叫べ。共食いの時間だ」

「ヘスクリーミング・マンティス」が叫ぶ。「やめろはなせ」とラウラも叫ぶ。

馬乗りのフアルケが両手にカランビットナイフを掲げる。鋭利な三日月形のナイフを両手に構える姿は、まるでオスカマキリを捕食するメスカマキリのようなだった。

（冗談じゃないぞ！）

友人を奪われたまま、操られた部下の手で終わるなんて、本当に冗談じゃない。

ラウラは渾身の力を振り絞るが、押さえつけられた体はびくとも動かない！

「やめろ、よせ！」

仲間に共食いされるなんて、そんな最後は強要できない。できなくても世界はそれを押し付けようとする。

ネーナがナイフを高く振り上げる。その一点がラウラの心臓に定められる。ここまでか。そう奥歯をかみしめた次の瞬間、空気を引き裂くような轟音が鳴り響いた。

音の正体をラウラは知っていた。砲弾が音速を超える音――。すなわちレールガンの音だ。それに気づいた時には、飛来した砲弾が「ヘスクリーミング・マンティス」の腹部を穿っていた。

真つ二つに千切れた「ヘスクリーミング・マンティス」の胴体が、ヘリポートに転がる。吊るされていた人形も腕ごと吹き飛び、地面の上に転がっていった。それに倣うように隊員たちも力なく倒れ込んでいく。

「誰がやった……」

倒れかかっていたネーナを押しのと、声が聞こえた。

「……隊長、……」無事、ですか……」

声はクラリツサのものだった。

額に大粒の汗。顔色は生気が失せたように白い。酷く憔悴した様

子。瞳は錯乱しているかのよう定まっておらず、足はマドカに肩を借りてようやく立っているような体裁だった。だが、レールガンの銃爪にかかる指先だけには意思が宿っている。

「おまえ、どうして」

「話はあるだ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

マドカが注意を促す。彼女の視線の先には上半身だけのヘスクリーミング・マンティスが浮かんでいた。下半身を失ってなお、まだ動いている。

〈叫べ、戦場の悲しみを！〉

マシンボイスとは思えない生々しい声で、カマキリが訴えかける。

クラリツサは呻きながら耳を抑えた。だが、あたまの中に響く叫びは、それじゃ防げない。堪えられず、クラリツサは支えていたマドカを振り払って、形振り構わず暴れまわった。

〈さあ、叫べ。共食いだ〉

そして、銃の先をラウラに向けた。二枚板の間に電光が走る。

「やめろ、クラリツサ。おまえの撃つべき敵はわたしじゃない」

わずかに銃口が緩む。しかし、電光は輝きを増す。

「おまえはわたしのことを気にかけてくれた。部隊のアイパッチはおまえが、私の胸中にあつた劣等感を払しょくするためだろ。そこまでしてくれたおまえが、私を撃つのか！」

もうレールガンには十分な電力が蓄えられていた。あとは引き金をしぼるだけで、砲弾は発射される。クラリツサの指先に力が込める。照準はラウラに向けられている。

「命令だ、クラリツサ・ハルフオーフ大尉。奴を撃て!!」

「うあああああああつ」

ラウラが叫ぶ。クラリツサも叫ぶ。銃口の引き金が絞られる。

撃発。

撃ち出された徹甲弾が、包装を捨てて——飛翔する。

着弾。

轟音。

黒煙を上げて、落下したヘスクリーミング・マンティスを見て、ラ

ウラは膝をついた。

「それでこそ軍人だ。——しかし、さすがに肝が冷えたぞ……」

最後に物を言うのはハイテクではなく、戦う人間の意思だと、そう信じていても、クラリツサの行動に確信は持てなかった。一歩間違えばバラバラになっていたのは自分だったかもしれないと思うと、冷や汗が流れた。

クラリツサも精神力を使い果たしたようだった。立つこともままならず、倒れ込んで動かなくなる。ギリギリの闘ぎ合いだったに違いない。それでも彼女は洗脳に打ち勝ったのだ。

だが、喜べはしなかった。

戦闘レベルでは、確かに勝利したと言っている。

しかし、戦術レベルでは大敗を喫した。これ以上ないぐらい、屈辱的な敗北だった。

「待っている、ライラ。この借りは必ず返す」

そして、必ず取り戻す、名誉と友人を。戦いは次のステージへ移ろうとしていた。

第117話 彼を追う者たち

IS学園通路。「倉持技研襲撃」の報告を受けた千冬は、代表たちの迎えを中断して、学園ヘリポートへ向かっていた。

（こんなにも早い鼓動を感じたのは第二回へモンド・グロツソ以来だな）

決勝戦を控え、最終調整に勤しんでいた自分の許に、チーフマネージャーから告げられた「一夏がさらわれた」という報告。あの時と同じように、いま自分の心臓は不安で高まり、全身の血の気が引いている。

（だが、あの時と違うこともある）

いまは頼れる味方と仲間がいる。一人じゃない安心感。だから、取り乱して無策に飛び出すようなマネもせずに済んだが、それでも早足になる歩調はやめられなかった。

ヘリポートに到着すると、すでにヘリが到着していた。向かう途中、担架で運ばれていくインナー姿の女性とすれ違う。報告を受けていた〈黒ウサギ部隊〉の一人だ。彼女は「もうしわけありません」と悔しそうに目を伏せていた。そんな彼女に「いまは休め」と告げ、ヘリの許へ歩む。

ヘリの許ではラウラとララが、千春と話し合っていた。

「母さん」

ヘリが起こす旋風で乱れる髪を抑えながら、千冬は言った。

「状況は」

「ライラ・ボーデヴィツヒにしてやられたわ」

ライラ・ボーデヴィツヒ。

ラウラに双子の姉がいることは、千冬も報告書で知っていた。

「ライラがラウラと入れ替わったすきに、連れ出されたそうよ」

千冬はラウラを見た。

「もうしわけありません、教官。私がついていながら一夏を守りきることができませんでした。信頼を裏切ることになり、なんと詫びたらよいのか」

ラウラは奥歯を強く噛みしめ、屈辱と無念に耐えながら気丈に姿勢を正す。

彼女は恨み言も言い訳も云わなかった。

「わたしたちもすっかり騙された。ラウラだけの責任じゃないわ」

「大丈夫だ。そう、自分を責めるな。そういうこともある。気を病むな」

「恐縮です」

千冬の言葉で無念が和らいだ様子はなかったが、過ぎた時は戻らず、ゆえに大事なものはこれからだということは解っているようだ。心は折れていない。受けた屈辱は倍にして返すとばかりの意気込みさえ垣間見える。

「それで、母さん」

「ええ、既に〈情報部〉に通達して搜索させているわ。更識にも協力を要請したけど、いまのところ有力な情報は入ってきていないわ」

追尾していた〈バンダースナッチ〉も、倉持技研から3キロ離れた場所で、破壊された状態で見つかったと、彼女は付け加えた。つまり、手がかりはゼロ。

「こんなとき、あいつがいてくれると心強いのだが」

アイツ、アリスのことだ。どんな困難に直面しても、彼女は「なんとかする」と言ってなんとかしてきた。無根拠に頼れる、そんなパワーを秘めた彼女が動いてくれたら――、自嘲気味にそうこぼした娘を、千春が諫めた。

「あの子に言えば、動いてくれるでしょうね。でも、それではあまりにも不甲斐ないわ」

『あなたが抜けたぐらいで揺らぐような組織でもなければ、そんな大人の集まりでもない』。そういつて送り出したのだ。大人が子に縋っては、あべこべすぎる。

自分たちの手で一夏を取り戻し、何食わぬ顔で引き合わせてやること。それが、いままで戦ってくれた彼女へできる酬い。それができないなら、自分たちが大人であることや、こんな組織を作った意味がない。

「では、アリスに代わって私に、一夏奪還を命じてください」

自分には一夏を守れなかった責任がある。ラウラの申し出に、千冬は首を横に振った。

「そう気負うな。おまえはまだ子供なんだ。おまえに護衛を命じたのはララと引き合わせるためだ。おまえが責任を負う必要はないし、誰も責めていない。ここは大人である私たちに任せておけ」

「お言葉ですが、教官。私は既に職業軍人として隊を担う身です。身は子供でも、立場は責任を負う大人のそれと変わりません。私には、隊長として隊が犯した過ちを償う義務があります」

「なにより」とラウラは続ける。

「一夏は、暴走する私を止めてくれた恩人です。ここで何もしないわけにはいきません」

力強く言い切ったラウラには、燃えたぎる情熱が感じられた。

かつて「ドイツの氷水」と云われ、空っぽで機械のようだったあの頃からは想像もできない成長ぶりだった。その赤い熱意は、どこかアリスを彷彿とさせた。きつと彼女も同じことを言うだろう。

「教官、私に恩返しと、責任を果たす機会をください」

「できるのか?」

「むしろ。自分にしかできないと考えます。ライラは自分に扮して周囲を欺きました。それが、自分にも可能です」

ライラが自分に成りすまして周囲を欺いたのなら、自分がライラに成り済まして相手を欺くこともできる。敵に成りすまして手がかりを探ろうというのか。

「確かに現実的で、効果的な案だが、それにはまずライラと入れ替わる必要がある。そのライラと再び接触できなければ話はじまらない。どう接触する?」

と、そこでララが閃いたように言った。

「兵士管理センター」

ドイツの、ナノマシンから送信されてくる兵士の情報を管理する機関のことだった。

「ナノマシンを実戦投入している部隊は、みんなこの兵士管理セン

ターのサーバーに接続されるわ。〈越界の瞳〉を導入している〈黒ウサギ隊〉も。もしライラがラウラとして〈黒ウサギ隊〉の隊員に扮していたなら、体内に〈越界の瞳〉を入れていた可能性があるわ」

〈越界の瞳〉は〈黒ウサギ隊〉の部隊章であり、ナノサイズの認識票^{ドックタグ}つまり、兵士管理センターのサーバーにライラの位置情報が残されている可能性がある。

「そのサーバーにアクセスできれば、何か手がかりがつかめるかも。できる、あなたの権限で？」

ラウラは悪態をついた。

「いや。私は便宜上の少佐だ。本来の佐官クラスが有するような権限は与えられていない」

考えれば当然だった。女性限定という特異な部隊であるがゆえの、例外的な処置で少佐を務めている彼女に、機密性の高い情報を閲覧できるとは思えなかった。

「なら、強硬策に打って出るしかないわね。ロリーナは、いまどこに？」

「学園の格納庫よ」

「わかったわ」とラウラ。そのまま「では、行きましょう」と続ける。頷くラウラに千春は言った。

「〈黒ウサギ隊〉はほとぼりがさめるまで、こちらで匿っておくわ。誘拐の濡れ衣を〈黒ウサギ隊〉に着せて、事件を葬られさせない」

操られていたとはいえ、誘拐の実行犯は〈黒ウサギ隊〉だ。警察や政府は身柄を寄こせと言ってくるだろう。せめて彼女たちが正常な判断を失っていたという擁護の材料が揃うまでは、匿ってくれるという。

「配慮に感謝します。必ず、その恩に応えて、一夏を取り戻してみせます」

「ああ、弟を頼むぞ」

ラウラは「はっ」と力強く敬礼した。

ラウラとララは早足で格納庫へ向かった。

ライラも体内のナノマシンが追跡の手がかりになることに気づいている可能性がある。だとすれば、ナノマシンを体内から取り除こうとするだろう。だが、それには血液をろ過する必要がある。つまり透析だ。ララは「だいたい5時間から6時間の透析で、体内のナノマシン群を無力化できる」と答えた。手がかりを掴めるタイムリミットは5時間。

ラウラが格納庫に訪れると、金属の大きな物体たちが出迎えた。

先の「ヘクスカリバー」事件で運用されたREXだ。隣には頭のひしゃげたRAYが前のめりに倒れ込んでいた。ラウラはREXの前に立って、見上げた。

「どうしたの、ラウラ」

「いや、日本軍の水上戦闘機『強風』につけられたコードネームが、たしかREXだったな、と」

「それがどうしたの」

「日本軍の九八式水上偵察機につけられたコードネームは何か知っているか」

「いえ」

「ラウラだ。私が兵器だから、ラウラというコードネームが与えられたのだと思っていた」

「違うわ。技研でも言ったでしょ。あなたは兵器として生み出されたわけじゃない」

「わかってる。だが、ライラはそう思っていない。奴は『自分の存在意義は殺戮の中にしかない』と思っている。遺伝子にそう刻まれていることを理由に。だが、それは間違いだ」

「ええ、人の運命は遺伝子なんかに規定などされないわ。それを証明できるのは、あなただけよ、ラウラ」

「ああ」

ラウラはもう一度REXを見上げる。すると、声がかかった。

「あれ、ラウラ?」

声をかけてきた人間は、シャルロットだった。それも見慣れないボ

デイスーツに身を包んで。普段は黒と橙を基調にしたスーツだが、いまは全身白色で、肌の露出も一切ない。手にはHMDのフルフェイスヘルメット。背には生命維持装置。

「なぜ、おまえがここにいる」

インターシップ中であるいま、フランスの代表候補性である彼女は、デュノア社にいるはずだった。

「ちよつとね。そういうラウラこそ。今日は一夏と一緒に〈倉持技研〉へ行っていたんじゃない？ それに隣の人は？」

「彼女はララ・ボーデヴィツヒ。血縁的には、私の母親になる」

「え！」

シャルロットは二度三度まばたきして、ララを見た。

「どうも、シャルロット・デュノアさん。ラウラがお世話になっているわね」

「は、はい！」

「はい、だなんて。噂に聞いていた通りの娘ね。苦労しているでしょ」

「はい、それはもう」

「その話はあとだ。いまは急いでいる」

「そうだったわね。シャルロットちゃん、ロリーナはいる？」

「いますけど、どうしたんですか」

「一夏を奴らに奪われた」

「……一夏が」

持っていたフルフェイスのヘルメットが手からこぼれおちる。

「気が動転するのはわかる。だが、時間がない。取り返すのに彼女の力を借りたい。急いでくれ」

「う、うん」

ヘルメットを拾い、慌てて踵を返す。——と、そのまえにロリーナがやってきた。

あわてて立ち止まるも、シャルロットはぼふつとロリーナの豊胸に突っ込んだ。

「ふがふが（あ、ロリーナさん。実は——）」

「一夏君の事はルイスから聞いているわ」

「できごとう？」

「どうかしら。機密を取り扱う国家機関への侵入でしょ。セキュリティが最高レベルであることは間違いないわ。簡単にはいかないわね。破るには相応の準備と時間が必要になるわ」

「それを待つていられる余裕はない」

「わかったわ。じゃあ、アレを使いましょう。ついてきて」

プラチナブロンドを翻して、来た道を引き返す。

アレとはなにか。

見当は及ばなかったが、ラウラ、ララ、そしてシャルロットも彼女のあとに続いた。

女性限定施設が肥大しつづける都内の高級ホテル。甘ったるいアロマの香りが漂う女性会員限定のスイートルームには、肌と粘膜がぶつかり合う音が響いていた。設えられたキングベットには一組の男女。男は女を組み敷いて腰を振っている。かつて人類最初の男性——アダムはこれを「正常位」と呼んだ。

そう、女を組み敷き、犯すことが正常なのだ。

人類最初の女性——リリスはそんなアダムに反発し〈楽園〉を飛び出したというが、本当は、下手くそ夫なに愛想が尽きたに違いない。離婚の原因は今も昔もセックスストレスなのだ。

(でも、ボクは違う)

腰を振り続けながら、下であえぐ女を見下ろす。

恍惚と潤んだ瞳の奥には幸福感がうかがえた。

所詮、オンナの本性とはその程度なのだ。組み敷かれ、犯され、悦ぶ、低俗な生き物。ISが使えるからどうのこうのと喚き、喜んでいることが、その証拠ではないか。現代の女はバカなくせして、世界の支配者を気取りたがる。それが彼には看過できなかった。

(ボクが、自分たちが何者で、どちらが「上」か、わからせてやる)

まずはその一歩だといわんばかりに、男は腰を激しくグライندوقさせた。女が目を固く瞑る。「何か」をこらえる女の表情が男の興奮を誘った。射精感が強まる。

「出すよ」

女は快樂を忘れて当惑した。

「え？ ま、待って。中は……」

女は既に成熟した大人。無知な少女じゃない。そのリスクを知らないわけじゃない。

女が不安を示しても、男は腰を振るのを辞めなかった。

「拒否はいけないよ。避妊も、中絶も、離婚も、決めるのはボクだ。僕が「上」だからね。」「下」のキミおんなに決める権利はないの。いい？」

言葉を体現するように、男は女に覆いかぶさった。そして「種」を注ぎ込む。それを女は拒否できなかった。すくなくとも体勢的には不可能だった。

下腹部を巡る異物感に苛まれて、女は不快感と不安感を滲ませた。だが、男は満足そうに自分の一部を引き抜いた。それからベッド上に散らかった女のバックに目を止める。中から取り出したものは、女が働く会社の社員証だった。役職名には「IS学園教職員」とある。

それを男は女に持たせた。出来上がった構図に男は興奮を露わにする。

女性優位を象徴する「インフィニット・ストラトス」。それを扱う人間が、自分の下で、裸になり、股間から自分の精液を垂れ流している。傲慢な女性を辱め、貶め、屈服させ、征服させた——そんな妄想が彼を再び興奮させた。

「すばらしい、すばらしいよ」

「そ、そうかしら？」

それを愛の囁きと錯覚した女が頬を赤める。下腹部の異物感も意識から離れていった。

鼓動が高鳴り、下半身の血流がたぎる。我慢ならず男は再び、挿入の体勢に入った、その時、部屋にケータイの呼び出しが鳴った。

急に現実に戻された男が苛立って、無視を決めようとする。だが、発信者の名前を見て、軽く舌を打つ。発信元の男にはへ倉持技研から部品と情報を横流ししてもらわなければならない。無下にはできなかつた。

「どうしたんだい」

男は腰を振りながら訪ねる。通話相手は下品な笑いをこぼした。

『なんだ、お楽しみの最中だったのかい。たく、いいご身分だぜ。こつちとら、主任のデカ乳に悶々とする毎日だったのによ』

「わかつた。また見繕ってやるよ。だから、さっさと要件を言え」

『おう、実はよ——』

一拍おいて向こうから返答が帰ってくると、男の腰が止まった。

いまま恍惚に染まっていた獣の表情が瞬く間に深刻な表情に変わっていく。

「彼が行方不明に？」

「どういうことだい？」と男が耳を傾ける。通話相手は言った。へ倉持技研が黒づくめの集団に襲撃されたこと。ドイツのISと白騎士が戦闘していたこと。その後はごちゃごちゃと情報が錯綜して状況を把握できていないが、以前の誘拐事件の非ではないことを語り、最後に「なんかヤバそうな連中だったぜ」と感想を告げた。

「くそが。どこの連中だ」

男は苛立ちを表すように女の乳房を握りつぶした。女が悲痛に顔を歪めるけれど、溜飲はさがらない。へキャノンボール・ファスト以来、彼は女尊男卑社会に一石投じる存在として、耳目を集める存在となった。ゆくゆくはグループの求心力として活動に参加させるつもりだった。その機会をうかがっていた矢先のできごとだっただけに、

苛立ちが募る。

『で、どうすんだよ』

「どうするも、こうするもない。彼はボクたちに必要な人間だ。わかってるだろ」

受話器の先の男は「そりやわかってるけどよ、実施問題さ——」と答えた。

男は歯がゆさに奥歯を鳴らした。なんとかして、取り戻す方法を考えなければ。

「ねえ」

その時、下の女が言った。男は「なんだい」と答えた。

「わたしに何とかしてくれそうな人間の心当たりがあるわ」

「誰だい？」

男は女の乳房をこねくりまわしながら訊いた。

「IS学園の生徒なのだけど、他の生徒と違う優秀な子よ」

「でも、所詮は子供だろ？」

「けど、あの織斑千冬も一目置いている子よ」

織斑千冬。かつて自分の兄を豚箱に放り込んだ女の名だ。強い女性の象徴として女尊男卑主義者のまなざしを集め、引退した今でも各方面に強い影響力を持つ。すかない女だが、実力とカリスマ性は確かな女だ。その女が認める人物とは……興味がわいた。

「へえ。名前は？」

問うと、女は名をこう告げた。

「アリス・リデルっていうの。いまはイギリスにいるそうよ」

第118話 希望になれなかった希望の跡

格納庫を出たロリーナが向かった先は、学園の中央フロートユニット、学園職員たちが〈ヘアスガルド〉と呼ぶ区画だった。〈ヘアスガルド〉はI S学園が独自の学政を行うために設けた中枢区画。本来は学園の教師しか立ち入れないが、ロリーナはその区画へ降りるためのエレベーターを事もなく呼んでいた。

(ここってI S学園の教師しか入れない場所だよね)

下降の途中、シャルロットはラウラに小声で話しかけた。

(それも一部の、な。だが、なぜを問うのはいまさらだろう)

I S学園が何とどう繋がっているのか、問うのも憚れた。

今までの経験を経て察しがつかないほどバカではない。

「それで、私たちはどこに向かっているのだ？」

「希望になれなかった希望の、その跡よ」

なんだか情叙的な表現だった。何の見当もつかなかったラウラは黙って従うことにした。

エレベーターが止まる。出てしばらく歩いたところで、ロリーナはある一室の前で、生体認証を行った。

扉が開く。

室内には広大な空間と無機的な白い壁、そして観測室と思わしき入出力装置が並べられていた。

「これは何の装置なの？」

「コンピュータの抽象世界を私たちに解りやすいイメージに変換してくれる装置よ。疑似電脳潜行装置とでも言っておこうかしら。ここでは人間的な直感操作でシステムの制御や潜入ができるわ」

ロリーナは、観測室に入り、システムを起動した。

「電脳ダイブでハッキングだなんて、まるで『ニューロマンサー』だね」「意外だな。サイバーパンクを読むのか？」

「え、読まない、けど。い、言ってみただけ……」

「だろうな。おまえはどちらかといえばファンタジー派だろ。頭の中がメルヘンだしな」

「それってどういう意味！」

「確かにシャルロットちゃんって、お花とかに話しかけていそうよね」
「ララさんまで！」

「じゃあ、これから体験することは、シャルロットちゃんにぴったりかもしれないわね」

ロリーナがキーボードを打ち込む。その操作に合わせて、部屋の壁から8つの装置がスライドして登場してくる。トンネル状のスライドカバーを伴ったベッド装置。医療現場で使われるMRIによく似ていた。

「さあ、ここに横になって」

言われるがまま、ラウラたちはベッドに体を倒した。

すると、ゆつくりとトンネル状のスライドカバーが稼働し、自分の視界に覆いかぶさってくる。

閉塞感を感じる間もなく、ラウラの意識はすうーと落ちていった。

意識を取り戻したラウラが最初に見たものは、ウサギ耳を生やした少女だった。

10歳にも満たない少女がこちらの顔を覗き込んでいる。

「あ、ラウラ、起きた？」

「シャルロットか」

シャルロットの他にはララとロリーナの姿もあった。目覚めは自分が最後のようだ。

身体を起こし、鮮明になった意識で周囲を確認する。桃色の絨毯に、トランプ柄の装飾品、大理石のような美しい鉱物で積み上げられた室内は、城の謁見室に見えた。目の前に、豪華なハートのドレスに身をまとった王女が立っていればなおのことだ。

「ここが電腦空間か」

「正確にはその入り口かしら。インターネットというプロキシに相当する場所よ」

「そのふたりは？」

トランプ柄のドレスを身にまとった、女王風の女性を見やる。彼女

はハートの杖をトントンと叩いていた。足許には、さきほどラウラを覗き込んでいたウサギ耳の少女がギョツと抱きついている。

「レッドクイーン」と「ホワイトクイーン」の雛型になったマザーA
I「ハートの女王」よ」

《いご、お見知りおきをわえ》

〈ハートの女王〉はドレスの端を摘み、優雅におじぎした。

「彼女には電脳世界の水先案内人になってもらうわ。時間がないからさっそく行きましょう」

《では、みなの方、わらわについてまいれ》

〈ハートの女王〉がドレスを翻し、玉座の後方にある扉にステッキをかざす。

開いた先に広がっていたものは、極採色の庭園だった。そこに上半身が鷲、下半身が獅子という奇妙な生き物が五匹、待ち構えていた。「これってグリフォンだよね」

現実の世界には存在しない生物を目の当たりにして、シャルロットが誰よりも先に駆け出す。

そのあとを「アイリーンがいたら喜びそうだな」とラウラが続いた。

《さあ、のるわえ》

〈ハートの女王〉さまに促されて、伏せるグリフォンたちの背を跨ぐ。

鷲の翼を大きく広げ、飛翔を始めるグリフォンの背で、シャルロットは毛を逆立てた。

「まさか、グリフォンに乗れるなんて、夢みたいだよ！」

「そう、これは夢よ。仮想現実が私たちに見せている夢。意識だけの旅行よ」

《さあ、行くわえ》

〈ハートの女王〉が杖を翳す。翳した先で扉が開き、ラウラたちを乗せたグリフォンがそれめがけて飛翔する。それからは摩訶不思議な世界旅行の始まりだった。

神代と大正が融合したトウキョウを抜け――

退廃的なサイバーニューヨークを駆け――、

スチームパンクなロンドンを飛び――

やがてラウラたちは、クレーター状の盆地へ訪れた。中央には赤茶の屋根を被せたスエバイトの家々と、市街を取り囲むように高い壁がそびえたっている。シャルロットは見覚えがあるように言った。

「ドイツにこういう町、あったよね」

「ネルトリンゲンか」

確かに目前に現れた街並みは、隕石が作ったドイツの町によく似ていた。

だが、本物じゃないはず。だとしたら、今自分たちが見ている街並みはなんなのか。

「ここはドイツ軍のサイバーセキュリティを、電腦装置が私たちに解りやすい形へ変換した世界。いま、私たちはドイツの軍事ネットワークの中にいるわ」

《降りるわえ》

グリフォンに降下を命じ、民家と民家の間にある裏路地に身を下ろす。

石畳の道路に、足を置いたラウラは周囲の街並みを見渡した。街中には黒い軍服がいたるところに見えた。周囲に気を配るその様子は、町を巡廻しているようにも見える。

「あいつらは？」

「IDS（侵入防止装置）よ。不正なアクセスからネットワークを守る仕組み。電腦世界の警備員のようなものね。発見されると、管理者に通報されて、増援を呼ばれてしまうわ」

「つ、捕まったらどうなっちゃうの？」

「尋問、それとも拷問か？」

シャルロットは身をふるいあがらせた。

「でも、電腦世界じゃ苦痛はないよね。体が無いんだもん」

「いえ、〃痛み〃とは認識と感情で処理されるわ。実際に外傷を負わなくても対象が「これは〃痛い〃こと」と錯覚すれば、脳は〃苦しい〃という感情を発生させる。アリーシャが幻肢痛に苦しめられたようにね」

「肉体がなくても、意識と感情が存在すれば、人間は苦痛を受けるとい
うことか」

「ぼ、ぼくここに隠れていてもいいかな」

「大丈夫よ。拷問にかけられたりしないわ。でも、私たちが持っている
メタ情報を解析されてしまうことは良くないわ」

メタ情報には、どこから、どういう経路で、接続してきたかなどの
データがふくまれている。解析されてしまうと、身元を特定される恐
れがある。

「それをブラックリストに登録されたら、もうアクセスできなくなる
わ」

「人間の免疫みたいなものね」

人間の免疫システムは異物の侵入を検知すると、それを解析・登録
して、以後排除の対象にする。この動きが「抗体を持つ」ということ
だ。

それと同じことがこのネットワークの中でも行われている。

いまの自分たちは体内に侵入したウイルスも同じで、IDSはいわ
ばそれと戦う白血球だ。

「で、どうする。結構な人数が巡廻しているようだ。発見されずに進
むのは至難かもしれん」

路地裏から周囲を伺う。黒服の兵隊は同じ場所を行ったり来たり
している様子だった。

自分ひとりならまだしも、5人では見つからない方が難しい。

「IDSは、持っているメタ情報の内容で、敵味方を識別しているわ。
体内版IFFね。そのメタ情報に細工を施せば、怪しまれないわ」

言うが早く、ロリーナは空間をタップして、コンソールを出現させ
た。羅列されたデータパッケージの中から、〈German arm
y〉を選択する。すると、ラウラたちの身体がまばゆい光に包まれ、
衣装がパリットとした格式の高そうな軍服に変化した。

「さすがラウラは板についているわね」

将校の軍服姿になったラウラは、小柄な体格にも関わらず、威厳が
感じられた。

上から羽織るオーバーコートと、アイパッチが歴戦の兵らしい雰囲気
を助長している。

「ま、これが本職だからな。——ララもよく似合っている」
「そう？」

ララは略帽を頭に乗せて見せる。略帽に、背広、タイトスカートと
いう服装は、医者という職業柄もあつて、前線で戦う兵士というより、
後援の婦人部隊に見えた。

「ロリーナもよく似合っているわ」
「うふ、ありがと」

ロリーナは制帽の唾を上げて見せる。帽章は将官級。着る軍服も
将校級のラウラより高級感のある仕上がりになっている。科学者と
いう職業柄もあつて、彼女を知力に富んだ参謀にも見える。

「いいなあ、三人とも、なんでも僕だけ野戦服……」

シャルロットは、ロリーナやラウラのような格式ばった制帽でもな
く、ララの略帽でもない、野戦用のヘルメットをかぶった。襟章もこ
のの中では一番低い下士官。

「そう愚痴をもらすな、シャルロット」
「や、ヤー」

制服効果だろうか。階級の高い人間の言葉に、思わず背筋が伸びる
シャルロット。

「さて、これで捕まってもIDSを騙せるはずよ。じゃあ、行きましょ
う。」

石畳の道路をすすつと滑るように歩き出したロリーナのあとに、ラ
ウラたちが続く。

町の中を巡廻する警備隊^{IDS}は、時よりこちらを見てくるものの、呼び
止めることはしてこなかった。一見すれば、3人の将校と、一人の下
士官、派手なドレスの王女にウサ耳少女の一向は奇抜そのものだった
が、システム上ではしつかり「味方」に成り済ませているようだった。
欺瞞は機能している。一同は安心して街の大通りを闊歩した。

「にしても、初めて電脳世界を体験したけど、怖いぐらいにリアルね」
ララは懐かしむようにドイツを模した街並みを見渡した。

目に映る街並みの質感。踏みしめる石畳の硬さ。どこか埃っぽい匂い。視界に写る街並みは、どれも本物のようだった。心なしか故郷の空気さえして、帰国したような錯覚にさえ陥る。導入のプロセスがなければ、ここを現実世界と間違ってしまいそうだった。

「より現実世界に近くなるようディテールにはこだわったわ。その代償に莫大な情報資源が必要になったけど」

「では、なぜ、こんな大掛かりな装置を？」

彼女ほどのプログラマならラップトップ一台でも事足りる。

わざわざ電脳潜行という大掛かりな装置を作ってハッキングする意味がわからなかった。

「もともと、この電脳潜行装置はハッキング用に開発したものじゃないの」

「ではなんのために？」

「人類を救済するためよ」

人類を救済。随分と大それた理由がでてきたな、とラウラは思った。

「実は、核兵器を開発したのは私のおじい様でね。おじい様はフォンノイマンと共に、核爆発に必要な演算機の開発に携わっていたの。私たちは核兵器を生み出した一族として、この世界の行く末を考えないといけなかった。私のお父様は荒廃した世界でも誰かと繋がる希望を残した。私もこの世界に希望を残したかった」

「その『希望』がこの世界？」

「そう。もし〈核の冬〉が訪れれば、太陽光線が遮られて作物は育たなくなる。放射能で変異した病魔とも闘わなければならない。人間は肉体の維持が困難になるわ」

「だから、いっそ、肉体を放棄して、この世界に移住できないかと考えた？」

「そう。それには、人間の意識を情報化し、機械へ移し替える技術が必要だった。そのテクノロジがニューロAIよ。もし人間と同じように知性と感情を持った人工知能が誕生すれば、それは人間の記憶や意識を保存する技術になる」

「かぎりなく人間に近くなった人工知能は、人間の〈魂の器〉になりうるよ?。」

「ニューロAIの技術は、人間の意思を情報化し、肉体から精神を切り離すことができる。やがて生物としての制約から解放された人類は、電脳世界へ移住できるようになる。すなわちそれは現実世界を放棄することでもあったから、私はそれをこう名付けたわ——〈ワールドパージ〉って」

「でも、希望になれなかった希望って……」

「そう、〈ワールドパージ〉は人々の希望にはならなかった。電脳世界は人に夢を見せることはできても、人の夢にはなれなかった。内側インサイドに引きこもっても救いはない。だから、私は外側アウトサイドに可能性を求め、〈赤騎士〉を作ったわ

ラウラは赤騎士レッドクイーンが何のために開発されたのか。倉持技研での話を思い出した。

『インフィニット・ストラトス神の領域』に至ったISは、神に等しい力を得る。その力を人類へ授けるために〈レッドクイーン〉は生み出された。人が、その力を以て、外側の世界に希望を見出させるように、と。

ならば、〈レッドクイーン〉と同じ目的で生み出された自分がすべきことは。

きつと、その希望を守ることだ。ラウラは強くそう思えた。

「で、どこへ向かっているのだ」

歩きながら耳を傾けていたラウラたちは、まだ歩き続けていた。

やがて街を囲う壁前までやってきたロリーナたちは、その正門で立ち止まった。

「ここよ。この壁の向こう側に、兵士の情報を管理するデータベースがあるはずよ。けれど、この壁はいわば不正なアクセスからサーバーを守る仕組み。ファイアーウォールなの。この偽装でIDSを騙せても、突破は難しいわね」

「では、どうする」

《強行突破でもするかえ?》

〈ハートの女王〉は、両手に抱えたウサギ耳の少女を見せた。さらに

頭からもう一匹。それを皮切りに、わらわらと現れ始める。一体どこから沸いて出たのか。数は次第に1000へいたろうとしていた。そのどれもが「いくぞー」「やるぞー」「がんばるー」とプラカードを掲げて息巻いている。まるで政府官邸前で異議を訴えるデモ集団のようだ。

この数がまとまって突撃したら、さすがに堅牢な壁門も敗れそうではあるが、

「現代のセキュリティはトラフィックの負荷を分散して処理するように設計されているわ。DOS攻撃でセキュリティシステムをダウンさせられるほど、ドイツ軍のセキュリティは軟じゃないわ」

というわけで、ハートの女王は《ほら、解散わえ》と手を叩いた。1000匹近くいたウサギの少女は一匹を残してぞろぞろと何処かへ帰っていく。

「攻めるには、守りの三倍の戦力が必要と言うことか。では、どうする」

「正面突破はあきらめて、別の方法で潜入するわ。――ハートの女王、エンハンスモードよ」

《招致したわえ》

そつと、舞踊を誘うように差し出された手に、ロリーナが手をそえる。その動作がスイッチとなって、ハートの女王とロリーナの姿がまばゆく輝いてひとつになっていく。光の中から現れたのは、トランプ柄の白いドレスを身にまとい、プラチナの冠を被った女王姿のロリーナ。

「その姿は？ 先のコスチュームチェンジとは違うようだが？」

「A Iと融合した姿とでも言っておこうかしら。ニューロA Iを外部脳として用いることで、人間本来の能力を拡張強化させることができるわ」

そう言っつて、ロリーナは壁に手を添えながら、沿って歩き始めた。

ラウラとシャルロットはそのあとに続きながら、

「つまり？」

「> 脳潜行装置はコンピューターの抽象世界を私たちに解りやすい形

や姿で見せていると言ったわよね。いまの私には、より解像度の高い情報が見えているわ。いうなれば、いまの私は高性能なデバツカーそのものかしら。それで『穴』を探しているのよ」

「穴？」とラウラ。すると正門から300メートルほど歩いたところで、ロリーナが「あつたわ」と足を止めた。眼前の壁面をこするとパラっと土が零れ落ちた。その箇所だけ脆い作りになっている。そのまま削り続けると、子供一人がなんと通れそうな穴が開いた。

「なるほど、穴とはセキュリティホールのことね」

とララ。ロリーナは「そういうことよ」とウインクし、ウサギの少女を手招きした。口頭で指示を告げる。ウサギ耳の少女は「わかった」のプラカードを掲げた。そして、空いた穴へ頭を突っ込み、もじもじと身体を振じらせて壁の向こう側へ侵入していく。ややして、ウサギ耳の少女は書簡らしき物を持って帰ってきた。それが欲していたデータであることは察しがついた。

「よくやったわ」

しかし、ウサギ耳の少女は「やっちゃった」とプラカードを掲げた。

「なにを？」とシャルロットが首を傾げた、その直後、けたたましい鐘の音が街中に鳴り響いた。次いで、街中のあらゆる窓や扉が急に閉まり始めていく。しかも錠をかける念の入りようだ。

「何が起こったのだ！」

「システムが情報の流出を検知したんだわ」

ウサギ耳の「やっちゃった」とはそういう意味だった。

「これから何がおきるの？」

「システムはネットワーク回線をすべて落として、情報の流出を防ごうとするわ！」

「僕たち閉じ込められちゃうの!?!」

「大丈夫よ。私たちは目が覚めて終わり。でも、肝心な情報をIS学園まで持ち帰れなくなるわ」

「回線を遮断されたら、情報をダウンロードできなくなってしまおうというわけか」

「ネットワークを遮断されるまえに、なんとかしてここからする必要

があるわ」

女王ロリーナは、指笛を吹いた。待機していたグリフォンがやつてくる。

全員が乗ったことを確認して、ロリーナはグリフォンを飛翔させた。鷲の羽を羽ばたかせて疑似ドイツの街並みを滑空する。流れていく民家はどれも閉まっていた。

「まずい。出口がほとんど閉じられているわ」

とララの焦る声。

「さすがわが軍だ」

「感心している場合じゃないよ、ラウラ」

「どこかにまだ空いている出口がないか探して見るわ」

ロリーナはグリフォンを飛翔させて、上空からウサギ耳の少女を大量にばらまいた。

まるで絨毯爆撃のように落下していったウサギ耳の少女は、地上に着地するなり「ポートだ」「探せ」とプラカードを掲げ、怒濤の勢いで街を駆け巡りはじめた。

「人海戦術ならぬ兎海戦術だな」

「ほんと、便利なウサギちゃんだね。——あ、見て。あの子！」

シャルロットが前方にそびえる教会を指さす。

その先ではウサギ耳の少女が「あったー」とプラカードを掲げている。

「でかしたー！」

「急ぎましょ。掴まってー！」

羽を畳んで急降下。抵抗をなくして流星のように飛ぶ。

教会の扉はすでに閉まりかけていた。全速力でも間に合いそうにない。

「もうしまるわー！」

ララの悲鳴。

「まだよ」

ロリーナが杖を振るう。

駆けつけてきた他のウサギ耳の少女たちが「閉まるぞー」「押さえ

ろー」と扉に群がった。

わずかに閉まる速度が遅くなる。

「いまだー！」

ラウラが叫ぶ。

ほぼ閉まりかけた扉のわずかな隙間を縫って、教会内にすべりこむ。そのまま飾られていたステンドグラスを抜ける。グリフォンの足にウサギ少女たちを葡萄の房のように連ねながら、ラウラたちはドイツ軍の軍事ネットワークから脱出した。

「ぎりぎりだった」

ラウラは手に入れた書簡を手にも、振り向いた。

背後ではポートがすでに閉鎖され、入り口が消滅していた。

「さっそくIS学園に戻って、手に入れた情報を確認しましょ」

〈ハートの女王〉と分離したロリーナはそういった。

第119話 接触

イギリス・ロンドン郊外。ヘナイトソード・ブラックスミス社が有する、IS試験アリーナ。

〈ブルー・ティアーズ〉は接近してきた模擬ミサイルを迎撃すべく、非固定浮遊部位から青いレーザービームを発射し、自身の衛星軌道上へ走らせた。

セシリアが得た新たな「力」——BTオービタル。

それは自身を中心とする衛星軌道上へ侵入してきた物体を自動で迎撃するシステムだ。その稼働データを収集することが今回の目的であるため、セシリアはあえて近接戦の間合いまで模擬ミサイルの侵攻を許した。

「さあ、踊りなさい、ティターニアが奏でるワルツで」

模擬ミサイルがセシリアの衛星軌道上に侵入する。

すると、青いレーザービームが弧を描いて、それを迎撃した。さらに後続のミサイルも次々に撃墜していく。最後発となる4機目が撃墜されたところで、観測室から終了の合図が鳴った。

『OKよ』

アナウンスを聞いて、セシリアは「ふう」と肩の力を抜いた。

我ながら満足のいく結果が出せたと思う。観測室から見守っていたアリスも指てっぼうを作ってこちらへ向けていた。セシリアも同じように作って「ばん」と撃つ真似をする。

「データはどうですか」

試験アリーナ、観測室。

アリスと進行を見守っていたローズマリーは、観測官にたずねた。「見てください。BT稼働率180%オーバー。予想をはるかに超える数値です。いやはや、すさまじい飛躍、というか、別人と思うような成果ですね」

高い適正を出したものの、稼働値の低空飛行を続けていたセシリア。

それがいきなりの100%越え。観測官が驚くのも無理はない。

「一体どのような、訓練を？」

「いえ、私は何もしていません。あの〈マインド・インターフェース〉——〈エーテリオン〉と呼びましたか——それが、大きな発展につながったようです」

「ああ、あれですか」

観測官が〈ブルー・ティアーズ〉を見る。いま〈ブルー・ティアーズ〉には、以前のようなレンズ型ではなく、ティアラ型の〈マインド・インターフェース〉が装備されていた。

「一体どこメーカーのもので」

「特注品だそうです。妹が用意したようです」

と、アリスを見る。アリスはアリーナのアナウンス機能を使い、セシリアと話していた。「稼働率180%越えですって」「うふふ、わたしを誰だと思いで？ 女王陛下より一角獣の紋章を賜ったオルコットですよ」と。

リリスの正体が母「アリシア・オルコット」だと知つてからも、セシリアはあまり暗い表情を見せずにいる。妹の存在が精神的な支えになっているのかもしれないわね、とローズマリーは分析していた。

「あの、代表？」

「はい、どうしました？」

ローズマリーはマインド・インターフェースの話に意識を戻した。

「その、〈エーテリオン〉の技術なんですが」

〈エーテリオン〉の技術は開発元〈ソードナイト社〉の Patent ではない。開発者の許可を得るなり、買収するなり、できないか。そういう話らしい。

「わかりました。開発者と話をしてみます」

「ほんとはですか。これで暗礁に乗り上がっていた第三世代の開発もようやく進展しますよ。主任も大喜びですね。上層部からずいぶんせつつかかっていたようですから」

もともと〈ブルー・ティアーズ〉は先進技術実証機。〈ブルー・ティアーズ〉が叩き出したデータをコンペのプレゼンテーションに

使う気だった上層部は、このデータがそろわない状況にさぞ焦っていたことだろう。

「でも、冷戦はもう終わりました。近いうちにヘイグニツシヨンプランも白紙になるでしょう。これからはISの兵器面ばかり追求しても、生き残れないかもしれません。すでに〈デュノア社〉では宇宙開発に路線をシフトしたようですし」

「うわさの、新型ヘラファール・リヴァイヴですか。可変機構を搭載することで宇宙と地上の往来を簡単にしたISだとか。可変機構なんて、よくそんな複雑な骨格を開発できましたね」

「フランス代表の専用機〈エトワール〉。その専用骨格の技術を応用したのかもしれませんが」

「〈エトワール〉は、ねこひねり」を可能にしたISですね」

空中に放り投げられた猫は、いかなる体勢からでも姿勢を作り、必ず肉球から着地する。つまり、空中で姿勢を変えられるのだ。そのメカニズムを骨格機構に取り入れたISが〈エトワール〉だ。〈エトワール〉は空中でもアポジモーターを使わず姿勢を作ることができ、攻撃精度の高い空中格闘を展開できる。

「その複雑な骨格技術のノウハウがヘラファエル」の開発に活きたのでしよう。これからはこういった別の活用法も検討していかなければならないでしょう。さて——」

ローズマリーはアウンスをオンにした

「セシリア。データも取れたので、すこし早いです、今日はもう上がってください」

『いえ、もうすこしやらせてくださいな。いまのわたくしの実力はこんなものじゃありませんもの』

データ収取だけでは物足りなかったようすだ。新しい力を手に入れた自分を、ローズマリーに見せたい。そんな思惑もあるのかもしれない。

「でも、必要なデータは十分とれたからねえ」

『実戦データはまだでしょ。そうですね、ローズマリーさま、わたくしと模擬戦をいたしませんか』

「私と模擬戦ですか」

『新しく体得した力が、世界相手にどれぐらい通用するのか。試してみたいのですわ』

さまざまな出来事に巻き込まれ、その対処に奔放してきたけれど、代表候補性であるセシリアが目指す場所がヘモンド・グロツソであることは、今も変わっていない。むしろ、ヘキャノンボール・ファストで優勝に輝いた一夏に即発され、以前よりも燃えている様子さえ見せている。

「いいでしょう。この数か月であなたがどれだけ成長したか、見せてもらいましょうか。——と、言いたいところですが、いま私の手元には<サイレント・ゼフィールス>がありません」
言われて、ローズマリーの耳に蝶型のイヤリングがないことに気づく。

「どうしたんですか」

「実は改修に出してしまして」

「改修ですって？」とアリス。さらに「全装ね」と付け加えたものだからなお疑問が強まる。

全装。つまりフルモデルチェンジ。

<レーヴァテイン>という強力なISを所持しながら、<サイレント・ゼフィールス>のさらなる強化が必要なのだろうか。

「そういうことなので、模擬戦はまた今度です。今日のところは上がりなさい」

と、言って提案を潔く断る。

<レーヴァテイン>を使うこともできたはずだが、その様子はなかった。

「……むー、わかりましたわ」

不服が顔に出るが、ローズマリーは見て見ぬふりをした。



ナイトソード社・ロビー。支度中のセシリアを私たちはロビーの待合席で待つことにした。

ISの整備。自身の着替え。シャワーも浴びてくるだろうから、落ち合うまで30分は容易にかかるだろう。というわけで、私はスマホのゲームアプリで時間をつぶすことにした。「Make City」。市長となって街を作るシミュレーションゲームだ。(さて、この財政難をどう乗り越えたらいいんでしょうかね……)

私が市長を務める「アリス・シティ」は、すでに多額の財政赤字を抱えていた。税収も伸び悩み、人口流出が止まらずにいる。インストール三日目にして「アリス・シティ」は破たんの危機を迎えていた。「とにかく、まず人口の流出を止めないと」

考えた末、私は妙案を思いついた。

「――よし壁でもつくるか」

人口が減るから税収が減る。なら、住民が町から出られないようにすればいいのだ。

なかなか妙案だと思ったけれど、隣のローズマリーはぷつと噴出した。

「ふふ、ずいぶんと乱暴な策に打って出たわね」

「そうですね。むしろ、いい政策だと思うんですけど」

壁を作るって言うっておけば、アメリカ大統領にもなれそうな気がする。

「私はまず不要な公共事業をやめるべきだと思います。無駄を省くことが経営の基本ですよ」

と、論じてタブレット端末に視線を戻すローズマリー。

彼女は国際情勢を取り扱った電子誌を読んでいる最中だった。

「やっぱりそうなんですかねえ。となると別の方法か。うーん、ルクーゼンブルクみたいに地下資源がたんまりあれば、財政難なんてあつと言う間に解決なんだけどなあ」

「そのルクーゼンブルク公国ですが、いま大変なようですよ」

ローズマリーが私に電子誌を見せる。私は顔を寄せた。なににな

『ルクーゼンブルク、米に歩み寄り。ロシアとの関係、悪化の一途』
『一月三日、ルクーゼンブルクがEU加盟を示唆したことで、ロシアがこれに強い反発を見せている。また、ルクーゼンブルクも、これに強攻的な態度をみせており、同月7日にルクーゼンブルク第一王女が訪米する予定。地下資源を背景に、支援を取り付ける思惑があるとされる。内容次第では、両国間の険悪ムードが加速する可能性があり、国際社会は両国間に自制を呼びかける?』

「これ、大丈夫なんですか?」

ルクーゼンブルク公国は地下資源——〈時結晶〉と呼ばれる希少金属を多く埋蔵する国として知られている。その〈時結晶〉は、ISのコアにも使われている。国内が荒れて、輸出が滞れば、民用ISの量産計画——〈ファイニット・ストラトス〉計画——にも支障がでそうなものだ。

「以前から、手は打ってきましたが、この情勢下ではどうとも」

「なにも起こらないことを祈るしかないってことですか」

言うのと、チンと傍のエレベーターが鳴った。

開いた扉からセシリアが出てくる。

「お待たせしましたわ」

セシリアが来たので、私はゲームのアプリを落とした。ローズマリーもタブレットをかばんにしまう。

「じゃあ、帰りましょうか」

「はいな」

支度が整うと、私たちは〈ナイトソード社〉のロビーをあとにした。

(やっぱりつけられている?)

ロビーを出て10分ほど歩いた時でのことだ。私はそつと首筋をさすった。そこに突き刺さるような違和感を覚えたからだ。そう、視線のような。始まりは〈ナイトソード社〉をでたあたり。どうやら、私たちは誰かに見張られているらしい。

(誰でしょうか)

尾行される心当たりはある。けれど、相手はプロとも思えぬ素人のような尾行だった。まず距離が近い。さらに視線が一点に偏っている。それはもう『逃がさないとする必死さ』がありありと伝わってくるほどだ。

(ストーカーの類かしら)

と、セシリアが小声で私に聞いてくる。

可能性は高いだろう。女性優遇の現代でも、いや女性優遇の時代だからこそ、婦女暴行事件は後を絶たない。虐げられた男性の逆恨みや、抑圧されたことによるフラストレーションの爆発。そんな理由から女尊男卑でなくても被害に遭う可能性はあつて、傾向としてISに関わる人間が強い。

とはいえ、ただの暴漢に遅れをとるような軟な鍛え方はしていない。

(それでも油断は大敵です。心してかかりましょう)

と、ローズマリー。

相手が素人だからと侮るのも、また素人。相手が何者であつても、万全を尽くすのがプロだ。

「そうですね。では、まず二手に分かれましょう」

そうすれば、誰が目的かはつきりする。

「わかりましたわ。——ねえ、アリス、今日は何が食べたいかしら」

「そうですね。ビーフシチューがいいです」

「でも、肝心なお肉がありませんでしたわ」

「じゃあ、私が買って帰ります。二人は先に帰って準備しておいてください」

「わかりましたわ」

もちろん、シチュー云々は二手に別れるためのフェイクだ。

私がセシリアたちから離れ、ここからほどなく近いスーパーマーケットに足を向けると、尾行と思わしき相手もあとをついてきた。

(目的はセシリアやローズマリーじゃないってことですね)

とすれば、ただのストーカーという線は完全に消えた。国家代表やその候補生じゃない私を付け狙っているとすれば、国家機関や組織

の、きなくさい連中だ。

(それなら、もつとプロを雇いそうなものですけど)

相手が学生だから侮っているのか。そう考えながらスーパーマーケットに入る。会話の通り精肉売り場へ向かう——と見せかけて、従業員専用のドアを潜る。そのまま裏路地へ。いまごろ「買い物物じゃない」と気づいたであろう尾行が、慌ててあとを追ってきている頃だろう。私はそれを待った。

店裏と路地裏を繋ぐドアが開く。出てきた人物は二十代後半の女性。スカーフにサングラスと露骨な服装で素顔はうかがえないが、日本人のようだった。その日本人女性は扉から飛び出すと、辺りを慌ただしく見渡した。

「安心してください。ここにいますよ」

女性が怯んだように後ずさる。私は誘い出した尾行に近づいた。「で、私に何の用があつて、つけていたんです?」

場合によっては暴力も辞さない。それを示唆するように腕を鳴らす。

威圧を込めた私に、日本女性は慌ててスカーフとサングラスを外した。

「待って、リデルさん。私よ」

私は半眼を作つて相手を確認めた。

穏やかな顔つき。あたかも知り合いのように言った彼女を、私は知っていた。

「榊原先生?」

榊原菜月。IS学園の教職員だ。授業を受けたことはないけど、名前と顔だけは知っていた。というのも、生徒の間でよく話題に上るのだ。いわく『榊原先生、また変な男にひかかったんだって』と。彼女は、男性からも受けが悪いような相手ばかり好きになる性質で、痛い目に遭つては、泣きはらした目で授業をする、そういう先生として有名だった。『いい加減。懲りたらどうだ』という周囲に反して。本人は『燃えない相手だと心が弾まない』とつぶやいているらしい。

だから、彼女が私をつけていたことにひどく驚いた。

「なんで、先生がわたしを」

「実はあなたに会いたいわって人がいてね。その人は、私の新しい恋人のだけど、その彼があなたと話がしたいって言うの」

「あなたの恋人が、私に？」

「ますます話が分からなくなってきた。」

なぜ私が、痛い恋愛ばかりを繰り返す先生の、その恋人と会わなければいけないのか。

半ば混乱していると、路地裏に一人の男性が現れた。

現れた人物は、線が細く、優しい面持ちで、みるからに人畜無害そうな青年だ。体格は中肉中背で、年齢は20前半。微笑を絶やさないその振る舞いは、まさに優男という具合だ。

「彼が私の新しい恋人の、天海レイ君よ」

榊原先生は優男のもとに駆け寄り、腕を絡めた。

「彼はいま男性の権利を取り戻す活動をしているの。ね？」

「ええ」

天海レイという男は優しい顔で微笑んだ。

やさしくて、やさしくて、逆にあやしく思えるほどの。

胡散臭い。そう思いながらも私はたずねた。

「男性の権利を取り戻す活動？」

「ええ。リデルさんも知つてのとおり、いま男性は不当な扱いを受けています。男というだけで、卑しまれ、貶められている。世の男性をこの苦しみから解放するため、活動しています」

まるで面接官相手に話しているような口調だった。

模範的な、でも本心は別のところにあるような、そんな感じだった。

「どう？ 立派だと思わないかしら。リデルさん」

「そうですね。で、そんな立派な方が、私に話とは？」

榊原先生が男の顔を見る。男は相も変わらず笑みを絶やさず続けた。

「菜月からあなたのことは聞いています。あなたは、とても優秀な女性だと。そんな、あなたの力を僕たちに貸してほしいのです。あなたの力をお借りできたなら、きつと——」

「お断りします」

私は即答した。

彼の意見に同意はできたし、志も立派だと思う。けど、それだけだ。もっともらしい言葉を並べているようにしか、私には思えなかった。何より私はこの男が生理的に受け付けなかった。

「では、私はこれで」

彼の活動とやらについて根掘り葉掘り聞く気にもなれず、早々に場を去ろうとする。「待って！」と慌てる榊原先生さえ無視して立ち去ろうとすると、天海レイがまたニコと笑った。

「おやおや、織斑一夏には力を貸したのに、私には力を貸してくれないのですか？」

足止めの台詞だと分かっていた。

無視すればいいだけなのに、私は歩みを止めて振り返ってしまった。

「あなたと一夏を一緒にするな。一夏はあなたみたいにへらへら笑ったりしない。あなたは甘い顔をしてすがれば、女はなんでもやってくれると違いしている」

一夏は正義感が強く、曲がったことが嫌いだった。それが彼の魅力であつたけど、そのせいで世界の不条理に憤ることも多かった。それでも実直に現実と向き合い、乗り越えようとする情熱があつた。だから、力になりたいと思えた。

「おや、彼の事になると熱くなりますね。さては、入れ込んでいるのかな？」

男はにやりと嫌な微笑を見せた。私はその笑いが癩に障って、強く睨みつけてしまう。

それが相手の思うつぼだと知りながら自制できなかった。

「——だとしたら、君は僕の頼みを受けざるを得ませんよ」

「なんですって」

「倉持技研って知っているかな」

「……………」

「知っているようだね。そう、彼のISが開発された場所さ。そこに

僕の仲間が務めていてね。その同志から報告があつた。——織斑一夏が何者かにさらわれたそうだよ」

自分の瞳孔が、開いたのがよくわかつた。

天海レイは固まった私に確信めいたものを見出し、強気な笑みを見せた。

「君に手を借りたっていうのは、そういうことなんだよ。彼は僕たちの活動に必要な存在だ。だから、ぜひ君に助け出してほしい。返事は……聞かなくてもいいかな。その動揺を見る限りだと、君は僕に協力してくれそうだからね。では、よろしくたのむよ」

「がんばってね。先生も応援しているから」

天海レイは榊原先生の肩を抱き、彼女もまた彼に身を寄せた。そして、その蜜月ぶりを見せつけるように、二人は路地裏から消えていった。私は自失茫然で何もできなかつた。

第120話 アリス・リターン

榊原先生が立ち去ったあと、私はその場から走り出していた。

彼はこうなることを知っていた。また会える事、それ自体が奇跡なんだということ。

だから、私へ想いを告げたのに、私は『わからない』ことを理由にして逃げた。

私は本当に何もわかっていなかった。

一夏の言葉の意味も重さも。

私は帰宅の勢いのまま、私は二階の自室へ駆け上がった。

ただいまもなく直行する私を訝しむセシリアとローズマリーには目もくれず、自室に入るなり、備え付けのクローゼットを開ける。そして、自前のトランクケースに適当な着替えとパスポート、自動拳銃を乱暴に詰め込む。そこへ追加の衣服を加えると、セシリアたちが入ってきた。

「どういたしましたの。急に荷支度なんかして」

乱暴に荷物を詰める私を見て、セシリアが眉をひそめる。

背後のローズマリーも神秘的な面持ちだった。そんな二人を見て、私は言った。

「一夏がさらわれたらしい」

私は榊原先生がつけていたことと、その恋人が何を告げたのかを話した。

「本当ですの……」

セシリアが両手で口元を覆う。信じられない様子だった。

一夏には織斑千冬や〈デウス・エクス・マキナ〉という強力な守護者がいる。それを出し抜くことは簡単じゃない。けど、イギリスくんだりまで来て、こんな性質たちの悪い冗談はいわない。

「では、助けに行くんですのね？」

私も静かに、けれど力強くうなずく。心が「行け」と叫んでいた。止まるな、走れ、お前は白馬の王子を、高い塔で待ち続けるようなお姫様って柄じゃないだろ、と。しかし、それに反対したのは、やはり姉

のローズマリーだった。

「あなたはもう〈デウス・エクス・マキナ〉じゃない。一夏くんを守る命令も義務もない。あなたが行かなくても誰かが行くでしょう」

私が再び戦場へ戻ることを快く思わないことを、私は予想していた。私を「日常」に帰還させること。私を塔のお姫様にするために、彼女は剣を取ったのだから。私を戦わせないことが、ローズマリーの戦う理由だった。それを私は知っている。でも、こればかりは誰かに任せられない。

「私は『わからない』ことを理由に、ずっとこの感情から逃げてきました。でも、一夏は逃げなかつた。勇気を出して私に想いを告げてくれた。このまま私が何も言わず、何もしなければ、その勇気を無下にしてしまう。そんなことは許されません」

彼と会って何を言えばいいかまだわからない。けど、心の言葉を、声にして告げられるのは、私にしかできない。だから、私は行く。これ以上『わからない』と逃げて、本当にすべての機会が失われてしまいうまえない。

「わたくしからも、お願いしますわ」

そう言ったセシリアは、私の隣に並んでローズマリーを見た。

そんなセシリアを見やる。セシリアは慈しみの表情を私に見せた。「あなたはずっとわたくしたちの恋を応援してくださいましたわ。だから、自分の本心から目をそらしてきた。気づいてしまったら、わたくしたちにどんな顔をしていいのかわからなくなってしまうのです。『わからない』と言い訳させて、誰も傷つかない選択をさせてきたのは、他ならぬ、わたくしたちですわ」

「セシリア……」

「先の戦いであなたはわたくしのために身を粉にしてくださいました。いまはこの恋心よりあなたが大事。わたくしはあなたを何よりも愛しておりますもの。それがなくとも、親友の恋路を応援できないようでは、女王陛下より賜った一角獣の紋章が泣くというもの」

セシリアはもう一度ローズマリーと向かい合った。

「ローズマリーさま、アリスが戦場に戻ることを許してあげてください

いませ。ここで戦わずとしては、アリスの一生に後悔が残りますわ。ただ待っているだけなんて、アリスではありませんもの。彼女はいつでも行動で示してきましたわ」

ローズマリーは瞑目した。

しばらくの黙考のあと、やれやれと、けれど優し気に母親譲りの桜唇を弧に曲げた。

「鷹は死ぬまで鷹なのですわ。わかりました。その選択があなたのためなら、止めはしません」

「許してくれるんですね」

「ええ。それに、いずれ、こうなるだろうと思っていましたから」

ローズマリーは踵を返して、私の衣装棚からピーコートを取り出した。それを私に投げる。着ろということだろうか。黙々と外出の準備を始めるローズマリーに、私とセシリアは顔を見合わせた。

「何事にも先立つものが必要でしょ。——ついてきなさい」

♡

♠

◇

♣

ローズマリーに連れられてやってきた場所は、〈ナイトソード社〉の本社だった。

ローズマリーはエントランスロビーの受付に何かを告げ、エレベーターで地下へ降りた。そこからしばらく歩き、〈STAFF ONLY〉と記された扉の前で立ち止まる。IDカードで開錠し、室内に入るが、暗がりでも見えない。ローズマリーが音声入力で点灯を命ずると、ダイナモミたく室内が照らし出されていく。明るくなった室内に現れたのは、ハンガーにかけられた一機のISだった。黒く塗装された装甲。大型の推進器。甲冑を想起させる意匠。側の武装ラックには円錐型のランスが二本。それと《ヴォーパル》のような大型の格闘兵装が立てかけられている。

「これは……」

「コードネーム〈黒騎士〉です」

ローズマリーがここへ連れてきた理由を、私は理解する。

「もしかして、これを私に？」

ローズマリーはちいさくうなづく。

「戦いに赴くなら武器が必要でしょ。これを持っていきなさい」

私は敵わないと思った。姉は最初からこうなることを見越していた。

私がローズマリーを見やっても、表情はいつもと変わらなかった。いや、目元がすこしさびしそうに揺れている。本当は不安なのかもしれない。私はそれを払しょくさせるように力強く言った。

「ありがとうございます。あなたは最高の姉です」

「礼ならいりません。そのかわり、必ず帰ってきなさい。いいですね」

「はい」と私は固く誓う。必ずココへ戻ってくる。彼と共に。

「では、さっそくへフィッティング〈〉を行いましょう。セシリアも手伝ってください」

「はいな。では、さっそく準備してくださいな」

私はハンガーを上って、身体を操縦スペースへ滑り込ませる。並行してOSを起動し、ヘフィッティング〈〉に必要なパーソナライズを実行した。空中投影型モニターが浮かび、画面内に無数の文字が走っていく。その傍らで私はシステムコンソールを呼び出し、各部出力をチェックしていく。

「ローズマリー、ジェネレーターモデルは？」

「GPX2500モデルです。GPX3000モデルを搭載していた〈赤騎士〉より出力は落ちますが、大型の推進器を積んでいる分、推力は〈黒騎士〉に部があるでしょう」

「武装は？」

「円錐型のビットと大型の近接格闘ブレード。あなたの戦闘スタイルに合わせて、格闘型になっています。マッスルパッケージの構成比は(6:4)です。骨格はグランプリングフレームを採用しています。ただし、機体の反応速度が私の設定のままなので気をつけてください」

「ローズマリーの？」

「〈黒騎士〉は〈サイレント・ゼフィルス〉を改修したISなのです」

そうか。フルモデルチェンジとはこういうことだったのか。つまり――

「お姉ちゃんのおさがりかあ……」

むくと私は不満そうにうなった。セシリアは不思議な顔をする。

姉兄のお古を着せられるこの気持ちは、妹弟にしかわからないだろうなあ。

（ま、ないよりいいし、新品がいいなんて贅沢はいわないでおこう）

私はフィッティング作業に戻る。

「格闘仕様ということは、『スターブレイカー』は？」

「排してあります。それに伴ってシールドビットも外してあります」

シールドビットは、バーストモードのチャージ中、無防備になる自機を守るための装備だった。《スターブレイカー》を排したことで、バーストモード自体もなくなり、シールドビットも排された、と。

「代わって採用した装備がランサービットですが、一応、格闘武器にその機能が残してあります」

ローズマリーは武装ラックに立てかけられた、バスターソードを見るやる。

身の丈ほどある大剣の鍔部分には、五角形のクリアパーツが埋め込まれている。刀身自体に幅もあり、盾として機能しそうだった。

武装レジストリーに登録してあるコードは《フェンリル・ブロウ》とあるが、私は思案して、それを書き換えた。――《ヴォーパル》と。それで性能が変わるわけじゃないけど、

「本当にあの機体に愛着がありましたのね。今から塗装を赤色に変える？」

「いえ、色を変えたところで、この機体が赤騎士になるわけじゃないので。これは願掛けみたいなものです。私にとってこの名前は縁起がいいんです」

私はメタ運動パラメーターを下方修正して、機体の反応速度を自分に最適化する。

概ね調整しなおせたところで、《ポゼシヨナライズ》を実行した。＜黒騎士＞がパツと光って、禍々しい剣に変化する。まるで復讐のため

に鍛え上げられたような、その剣を私は腰に携えた。

「まるでクリームヒルトですわね」

〈ニーベルゲンの指輪〉にて、夫ジークフリードを殺した者への復讐を果たした戦乙女クリームヒルト。言い得て妙かもしれない。そう、私がこれから始めるのは、一夏をさらった者への復讐劇だ。アウエンジメント

「それで、これからどういたしますの」

武器は手に入れた。あとは情報だが、一夏の居場所に関する手掛かりは、私の手にない。あの男も詳しいことは何も教えてくれなかった。おそらく知らないのだろう。

「手がかりはない。でも、手掛かりの手掛かりはある」

私は自前のケータイを取り出し、あるネット記事を表示させる。さきほどローズマリーが読んでいたルクーゼンブルクに関する記事だ。

「ルクーゼンブルク公国に手掛かりの手掛かりがある」

♡

♠

◇

♣

IS学園より近くのプライベート空港。降りたった少女は、同伴の女性二人を連れ、周囲の視線を避けるようにこそこそと空港ロビーを出た。

少女は豪華な金髪に、くるつとまるい瞳。体格はラウラと変わらないくらいだが、どこか気の強そうな態度は、鈴以上に見えた。また、付き添いの女性も険呑な雰囲気醸し出している。抜身の刃と、身持ちの硬そうな態度は箒によく似ていたが、体運びは鍛え抜かれた戦士の赴きがある。

しかし、もう一人の女性には生気が感じられない。いまにも貧血で倒れそうだった。

胃が痛むのか、腹を労わるように撫でている。

「アイリス王女陛下、やはり、このようなことはお止めになられたほうが……」

日本を訪れた理由が、単なる観光ではないことは、少女の顔を覆う

スカーフが示していた。付き添いの女性も、周囲の警戒に余念がなく、物見遊山に耽っている様子はない。いま自分がここにいることを誰にも知られたくないのだ。

「おい、王女と呼ぶのではない。怪しまれるだろ。死刑にするぞ」

少女はスカーフで顔を覆い直して、周囲の様子を伺った。

「申し訳ありません。しかし、このようなことがエアリス王女に知れましたら……」

女性は戦々恐々の様子だった。

もし、この少女の身に何かおこったら、世話係の自分は必ず責任を問われる。王女直接の叱責はなくても上司のメイド長にこっぴどく怒られるだろう。想像しただけで胃に穴が開きそうだった。

「わかっておる。お姉さまにばれたら、きつと叱責を受けるじやろうな」

「でしたら……」

「じゃが、国の危機なのじゃ。何もせんわけにはいかんじやろ」

「王女の祖国を想う気持ちは重々承知しておりますが、それは王家の方々にお任せすればよろしいのでは……」

「わらわとしてその王家の一人じゃぞ！」

「そうではございますが……」

女性が何か言いたげにするも、言葉を詰まらせる。少女は王家の間でも、実権を握っているわけじゃない。何の役職も持っていないのだ。国の政治に口を出すことができず、それに辟易して、こんなことをしている。

女性は、もう一人の女性に視線をやった。助け舟をくれとばかりに。

（あきらめろ。アイリス王女は言いだしたら聞かないお方だ。私の進言でもな。彼女の身の安全は私が保障する。命を懸けてお守りする所存だ。今回のことがエアリス王女の耳に入ったときは、私が直々に弁明してやろう）

だから、安心しろ。その言葉には力強さがあつた。さすが王家を守る近衛騎士団を束ねる長。

メイドはそのことばを信じて覚悟を決める。幸い、エアリス王女は外遊に出られている。国内にいないため、耳に入るには時間がかかるだろう。それまでに戻れたら、何とか誤魔化せそうな気がしてきた。(ところで、目的地までの交通手段は手配してあるな)

(はい、車を用意してあります)

空港を出ると、駐車場をかねたロータリーにセダンタイプの日本車が見えた。

そのうしろにはもう一台、スポーツカータイプの赤い高級車が止まっていた。そこに三人の女性。運転手は金髪のセレブ然とした美女だ。もう二人は、黒髪を後ろで一本にまとめた教師風の女性と、赤毛を左右に結んだラテン系の美女。二人は車体に身を預け、誰かを待っている様子だった。

やがて、一人の女性が彼女の許へ手を振りながらやってくる。

金髪のスーパーストレート。大きい乳房。気さくそうな物腰のアメリカン美人だ。

揃った美女たちの顔ぶれに、盗み見ていたアイリスは目を見張った。

それに気づいたらしき黒髪の女性と目が合いそうになる。

あわてて、目線をそらし、車に乗り込む。「出せ」と騎士団長の女。早々に走り出した車のなかで、王女は「ひゃー」とまぬけな声をだした。

「おいジブリル、見たか今の」

「はい、いまのはへヴアルキリー」でした」

「4人そろっておるところなど初めて見たぞ。ここはヴアルハラか」

彼女の国——ルクーゼンブルク公国はISと深い関わり合いがある。第三回へモンド・グロツソの最終開催候補にも残っている。そのへモンド・グロツソの部門優勝者であるへヴアルキリーの正体を知らないわけではない。しかも、世界に四人しかいない全員が三人もそろっている場面などそうそう見たことがない。何かのつぴきならない事情でもあるのだろうか。それに一計を案じた助手席のメイドが悲鳴めいた声を上げた。

「やっぱり、お止めになりませんか、王女陛下。きつと、目的地は同じですよ」

あんなのがうろついていると思うと、気が気じゃない。そういう顔だ。

メイドが言うと、車は右へハンドルを切った。その方角にぽつきりと折れた大きなタワーが見える。先日、そこで大きな戦闘があったらしい。それに際し「ヴアルキリー」が召集されたとも考えられる。

「だからといって、ここまで来て引き返すこともできんじやろ」

「ですが「ヴアルキリー」といえば、ISに関して比類なき強さとお伺いしています」

「案ずるな。わらわはこれでも一国の王女じや。無下には去れぬ。だから、覚悟を決めるのじや。こやつを捕まえたら、すぐに帰る。それまで我慢するのじや」

第七王女、アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルクは、白く小さい手に一枚の写真を握る。そこには青い髪のメイドが写っている。ラピスラズリを想わせる青い瞳は、メイドにミステリアスな雰囲気添えていた。彼女に会うために、遙々極東の地へ出向いたのだ。

彼女たちには、この女が持つ秘密をどうしても手に入れなければならぬ事情があった。

「待っておれよ、ソフィア・アルジャンニコフ」

——ルクーゼンブルク編

第121話 王女来訪

「ルクーゼンブルク公国の王女が私に面会を？」

静寂性多目的潜水艦〈ウオルラス〉。格納庫。一夏搜索隊の編成に許可の署名を記した時だった。必要機材と人員の記された書類にサインし終えたものを秘書に渡し返すと、彼女はそう言った。

「本当なの？」

千春は秘書から告げられた報告に耳を疑った。

〈ルクーゼンブルク公国〉は東欧に位置する小国だ。〈時結晶〉と呼ばれる希少金属を多く埋蔵する国として知られており、その輸出で外貨を獲得している。

政治体制は王政を敷いており、王族が国営を担っている。その人間がアポなしで面会を求めてきているとは、いささか信じられない話だった。

「はい。確認いたしました。ルクーゼンブルク公国の第七王女・アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルクご本人であることは間違いありません」

「アポイメントはあったかしら」

「いえ、ありません。公務とも思えませんでした」

アポなしの電撃訪問。哀悼を告げに來ただけとは思えなかった。

腑に落ちないことが多いが、いずれにしろ、王女陛下本人ならば、このまま追い返すわけにはいかない。

「わかりました。会います」

「いまは学園の応接室に案内してあります」

秘書は近くの格納庫要員にへりを準備させるよう告げた。

IS学園整備区画。並べられた整備用ハンガーには、三機のISが並べられていた。

一機はオオカミを模したIS〈フェンリル〉、もう一機は魔女を模し

たISSへヘル。最後は右腕だけが巨大な黒いISSだ。イタリアの第三世代型ISSへテンペスタに似ているもの、流動的だったフォルムはどこか、エツジの利いた鋭利な姿に設定されている。

生みの親であるロキは、それらの整備にあたっていた。動力システム、防御機構、推進器、武装、アクチュエーター、フレーム、センサー。それらに異常がないことを確かめながら、整備項目にチェックを入れていく。

その後ろではソフィアがへヘルの犬型オートマトン《ガルム》とじやれている。

そのソフィアの携帯端末にコールが鳴った。通話相手は、その《ガルム》の主人であるスコールからだった。

「どうした」

応答したソフィアの耳にスコールから返答が返ってくる。

聞いたソフィアは撫でていた手を止めて立ち上がった。ロキがソフィアを見やる。

「どうした」

「ロキ、例のお姫様がこっちにきているらしい。ちよつと迎えに行ってくるよ」

応接室に到着すると、三人の人物が待機していた。

一人はふわっとしたクリーム色の髪を腰まで伸ばした少女。大きくクリツとした瞳は、幼さと勝気さが宿っている。もう一人は、鋭利な目つきインベリアルナイトの女性で、歳は二〇前後。右肩のマントには盾と剣、近衛騎士団の刺繍が入っている。最後は仕えと思わしきメイドだ。

少女はソファーに腰を下ろし、女性は手を後ろで組んで、少女の背後に控えていた。

「お待ちせしましたわ」

入室すると、少女は立つこともせず、千春を見た。

「おぬしがここの学園長の轡木素子か」

「いえ、学園長はただいま外出中でした。何分、学園がこのような状態です。私はその間、留守を預かっている、織斑千春という者です。

遅れまして、王女陛下」

「うむ、このたびは大変だったようだな。わらわも、今回の惨事は心から遺憾に思う」

「痛みいりますわ。わたくしも王女陛下にこの学園を案内できないこと、まことに残念に思います」千春は装いを整え「ときに王女陛下、このたびの電撃訪問には驚きましたわ。一体どのようなご用件で」

「実はこの者を探しておる。——ジブリル」

ジブリルと呼ばれた騎士風の女性が一枚の写真を取り出す。

写っていた人物は一人のメイドだった。

長い青髪。ラピスラズリを思わせる瞳。ミステリアスな雰囲気的美女だ。

「この女はソーニャ。本名はソフィア・カドリユスキー・アルジャンニコフというロシア人だ。彼女がここにいることはわかっている。ただし、この女の身柄をわれわれに引き渡してもらいたい」

会わせるではなく、身柄を引き渡せ、か。穏やかな話じゃなかった。はたして、いかなる目的があつてソフィアの身柄を求めているのか。目的が見えないこの状況で、軽率な了承はできなかつた。

「いかような事情があつて彼女の身柄を？」

千春が何も知らぬ装いで問うと、ジブリルは視線を強めた。

「この女にはスパイの容疑がかけられている」

ソフィアはロシア対外諜報庁の出身。そう、スパイだ。東欧に位置するルクレーゼンブルク公国で諜報活動していてもおかしくないし、その彼女を拘束するために来校したなら、話の筋は通っている。

（ようやく話が見えてきたわね。けど——）

腑に落ちない点もいくつかあつた。

ひとつはジブリルの右肩。そこにかけられたマントにはインベリアルナイト近衛騎士団と刺繍されてある。スパイの拿捕は、はたして近衛騎士の仕事だろうか？ なによりも、この幼い王女にそんな権限があるのか甚だ疑問だった。

さてどうしたものか、と千春。

そのとき、応接室にノックの音が鳴った。入ってきた人物は——

件のソフィアだ。

「あら、来たの？」

「王女はオレに用があるらしいからな。ここはオレが引き受けるよ」

ソフィアは逃げも隠れもせず、アイリスの前で姿勢を正した。

とたん、アイリスが目の色を変えた。

「こやつだ！ ジブリル、ひっ捕らえよ！」

アイリスの命令を受けた近衛騎士がすかさずソフィアに飛びかかり、右手を捻りあげる。床へ叩きつけられたソフィアを、アイリスは踏ん反り返りながら見下ろした。

「飛んで火にいる夏の虫とおぬしのことだな、ロシアの女。おぬしを逮捕するぞ」

してやったりとニヤリ顔の王女。

しかし、ソフィアは「フっ」と笑った。

「何がおかしい……」

ジブリルが力を込める。

肩甲骨が悲鳴を上げてても、ソフィアは顔色を変えなかった。

「逮捕？ 王女陛下にそんな権限があたりで？ あなたの目的はオレの逮捕じゃなくて、へロシアの恥部では？ それを手に入れて、ロシアからの調査団の入国を辞めさせたい。違いますか、王女陛下」

「むっ、な、なんのことじゃ……」

アイリスの目が泳ぐ。千春は得心した。

「なるほど、調査団の入国ね」

彼女の治めるヘルクーゼンブルク公国は、〈時結晶〉と呼ばれる希少な金属が採掘できる唯一の国家として知られている。つまりソフィアが云う調査団とは——地質の調査団だ。

「ロシアは自国の地質調査団をヘルクーゼンブルク公国へ入国させたがっているのね」

「ヘルクーゼンブルクはそれを歓迎できないんだ。もし地質調査で傾向や特徴が明るみになれば、みなこぞって採掘を始めるだろうからね」

「そうになると流通量が増えて、値が下がる。〈時結晶〉を輸出し、得た

外貨を国の財源にしているヘルクーゼンブルク公国〕にとって、それは深刻な問題ね」

だから、ルクーゼンブルクは地質調査団の入国を拒否し続け、ロシアは首をなんとか縦に振らそうと圧力をかけている。そういうことだった。

「で、その圧力をなんとかしたい王女陛下は、オレの持つヘロシアスキヤンダルの恥部〕に目を付けた。だが、来るのが遅かった。もうオレの手にはない」

「なんじゃとツ——あつ」

アイリスは咄嗟に自分の口を塞ぐ。それはソフィアの発言を認めたくないものだった。

しかし、王女は「ならば」とこう続けた。

「それはどこにあるのじゃ。言わぬなら、死刑にするぞ！」

小さい身体に目一杯の権威を宿し、持ち得る迫力を総動員して脅すものの、相手はクレムリンも恐れたロシアタカ派内で暗躍していた女スパイ。肝の据わり方が違う。ジブリルが「吐け」と恫喝しても、ソフィアは顔色を変えなかった。

「相手はこの国の防諜組織です。手に入れることは難しいでしょう。代わりにとってはなんです、私自身がロシアの排斥にお力を貸しましょうか」

「スパイ風情が偉そうな口を叩くな」

ジブリルがソフィアの頭を押さえつける。

彼女は、コソコソ嗅ぎまわるスパイをネズミのように卑下しているのだろう。抑えつけた手には必要以上の力が加わっているようにみえる。

ソフィアは眼球だけを動かし、ジブリルをにらんだ。

「キミはその頭の固さが難点だな。オレは元ロシアのスパイだ。ロシアの内政事情にも精通している。敵愾心だけで忌避することは、惜しい相手と知るべきだな。違いますでしょうか、王女陛下」

「王女陛下、耳を貸してはなりません。この者はロシアの人間です。信用に足りません」

ジブリルは口頭で訴え、ソフィアは視線で訴える。

協力を仰ぐか。それとも諦めてトンボ返りするか。予期せぬ判断を迫られたアイリスは、オロオロと狼狽え始めた。そんな王女に助け舟を出したのは千春だった。

「女王陛下、僭越ながら、わたくしも、ソフィアは信用に足る人間だと進言させていただきますわ」

「あなたまでこの女の肩を持つか！」

「氣を立てないでください、ジブリルさん。先の事件でも彼女が尽力してくれなければ、ここは壊滅してしまいましたわ。彼女は信用に足る人間です。すくなくても、ロシアに汲みすることはないでしょう。彼女は祖国に母親を殺されています」

「ふん、ウソに決まっている。自分の都合がいいようにでっち上げたんだろ」

「オレはスパイだからな。疑ってかかれて当然だがね、それでも言わせてもらう。ジャーナリストだった母さんは、ロシア政府が行った裏工作を暴き、公開しようとして殺害された。その復讐のために、オレはスパイになったんだ」

「まだ減らず口を叩くか」

「もうよい、ジブリル」

拘束の力を強めようとしたジブリルを、アイリスは制した。

「しかし、アイリス王女陛下」

「わらわも母親を失っておる。その悲しみややるせなさはわからんでもない。それに織斑千春はIS学園の留守を任されている女じゃ。その者がこう言っておるのじゃ。信用してもよいと思わぬか」

「それは……」

「わらわのいうことが聞けぬか」

「いえ……、わかりました、すべては御身がままに」

しぶしぶといった体だが、ジブリルは了承した。

「そういうことじゃ、おぬしのいうことばを信じてやろう。良きに計らえよ、ソフィア」

「そのまえに、彼女にやめるよう命じてください。このままじゃ肩が

使い物にならなくなる」

「うむ、放してやれ、ジブリル」

「ふん」とジブリルから乱暴に解放されたソフィアは服の汚れを払った。そのソフィアにジブリルは肩をぶつけ「不穏な動きを見せた時は容赦なく斬り捨てる。覚えておけ」とささやく。ソフィアは「お手軟かに頼むよ」と苦笑いした。

「では、わらわについてまいれ。——それと織斑千春と申したな。騒ぎ立てしたな。早期の復興を心から祈っておるぞ。では、失礼させてもらう」

言って、席を立つ。その後ろをジブリルと、彼女にせつつかれながらのソフィアが続く。

ソフィアは部屋の去り際、千春に言った。

「すまない。結局、あなたの手を借りてしまったな」

「いいえ、かまわないわ。計画の為なのでしょ。あなたが協力を申し出たのは」

これからへフィンニット・ストラトス——廉価版のISを世に送り出し、宇宙開発インフラに発破をかけようとしているいま、ヘルクーゼンブルクへの情勢は、重要なファクターになる。

そういうわけで、ソフィアは「エサ」をまいたのだが、

「もうすこし話を通じそうな奴が来ると思っていた」

釣れたのは、この幼い王女と若い騎士だった。

「あなたの鶴の一声があつて助かったよ。そのついでと言ってはなんだが、もう一つ頼みたいことがある」

「何かしら」と千春。すると、通路から彼女を呼ぶジブリルの怒鳴り声が響いた。

「あとでゆっくり話すよ。このままだと本当に死刑にされそうだからね」

そういつてソフィアは痛めつけられた肩を回した。

千春は「ふふ、わかったわ」と答えた。

トワイライト国際空港、4000キロの空旅を終えて着陸した王族専用機は、次のフライトに向けて給油の最中にあつた。その執務室。設えられたテーブルを挟んで、二人の女性が向かい合っている。

一人はウエーブがかかった銀髪の女性。サファイアアイの、上品かつ端麗な顔立ちはヘルクーゼンブルクの月〳とも囃されることもあつた。

対面に座る女性もまた、その美貌に劣らず、艶やかな雰囲気を放っている。

赤い髪は強い色香を放ち、開いたドレスから見える胸元は、抗い難い母性を感じられた。女性は「なるほど」と思う。女性解放を掲げるそれが父性的であつてはならない。厳格な規律ではなく、すべてを受け入れる包容力こそが支配力か。その支配者が桜色の唇をゆるりと曲げて言った。

「アメリカ訪問はいかがでしたかしら、王女陛下」

訪米を終えたばかりの女性はハーブティーを口につけた。

「さすが経済大国第一位の資本主義国家。長きに亘り王政を敷き、近代化の遅れを取っている我が国が見習うべき点はたくさんあつた。私自身もファイルス大統領から多く学ばせてもらったよ」

「わたくしたちも、彼女の一族とその功績には敬意を払っておりますわ。アメリカを支配してきた悪しき文化に勝利した英雄ですもの」
「男性優位主義か。私も父より「お前に国営は無理だ」と言われてきた。国は男が運営するものだと言いたいのだろう。父は弟のオズワルドに王位を継承させる気だつたらしい」

それなのにどうしてあなたが。——とは尋ねない。

王家の内情に精通しているわけじゃないが、彼女が強したたかな女性だということを知っている。

「女性の政界進出で社会レベルが下がると批難される中、大統領の座

まで上り詰めた彼女を、私も同じ女性として尊敬しているよ。しかし、今回の会談においては、私の満足のいく返答はいただけなかった。支援の約束はしてくれたが、どこまでアテにしているのか」

「しかたありませんわ。ファイルスは鳩派ですもの」赤毛の女性はひとくちハーブティーをすすり「それでなくても、前世紀より軍事は政治的に難しくなりましたわ。メディア神話が終焉を迎えたことで、プロパガンダも難しい時代です」

政府のマスメディアを利用した国民の扇動——メディアコントロールの実態が暴かれたことで、プロパガンダは有効な手段じゃなくなった。

「かてて加えて軍隊の高価格化が拍車をかけた。国家による軍事行動は政治的なりスクが大きく、コストもかかる。けれど、戦争は普遍です。なくなりはない。これからは、コスト高で融通の利かない国軍ではなく、安価な傭兵にアウトソースする時代なのですわ」

「それであなたは私の前に現れたわけか」

冷戦の終結につき、急成長を始めた民間軍事企業。それが目の前にいる女性の正体だった。おおよそセールスレディには見えず、話すそれもセールストークというよりは、悪魔の囁きに近いけれども。

「わたくしたちの業務は戦争の手段をサーヴィスとしてあらゆる人間に提供することです。ご契約していただければ、アメリカに代わって、わたくしたちが、あなた方をお守りしましょう」

赤毛の女性がテーブルをなでる。一瞬でARディスプレイに化けたそこに〈鎌を掲げたカマキリ〉、〈翼を広げたオオガラス〉、〈うねるオクトパス〉、〈人型のウルフ〉、そして〈爪をとぐヤマネコ〉を象ったエンブレムが浮かびあがった。

「これらが、我が社が提供している商品です。〈プレイング・マンティス〉〈レイヴンソード〉〈ウエアウルフ〉〈ピューブル・アルメマン〉。諸事情により〈アツエロタヴァヤ・ヴァトカ〉はご利用できませんが、どれも先鋭となっておりますわ」

AR化したテーブルにレイヤーを追加する。追加された情報には、各社の兵力をはじめ、装備や運用する兵器の種類。請負可能な業務内

容。実行可能な特殊作戦まで記載されている。そこには国家が特権的に有していたものがすべてであった。

「軍隊は国家の特権ではなくなった。ファイルス大統領が言っていたことは、このことだったのか」

「それはきつと〈デウス・エクス・マキナ〉のことですわね。あれもまた民間が運営する軍事組織です。彼らが戦闘を業務として請け負うことはありませんが、いまの時代を象徴する存在ですわ」

「いまの時代というと……？」

「『個人』の時代ですわ。官僚主義に堕ちた政界では、その強度が失われつつありますわ」「耳が痛いな」「そんな政府の機能に頼らず、大事なものは自分たちで守ろうという運動。〈デウス・エクス・マキナ〉とはそういう人間の集まりなのですわ」

「これからは、彼らのようなNGOの時代だと？」

「はい、これからは〈デウス・エクス・マキナ〉のように、政府機能に頼らない民間組織が強くなっていくでしょう。政府が主導になって物事を進める時代は終わった。自分たちの未来は自分たちで決める時代へ」

「自分たちの未来は自分たちで決める、か……」

女性は窓から外を眺める。

元来、政府とは法の力で個人の自由を奪うためにある。政府機能に頼らない民間組織の台頭は、この空のような柵のない世界を望んでのことだろうか。彼らは自由を求めている。けれどだ。政府が個人の自由を奪うのは、その対価に安全を提供するためだ。政府組織には、彼らの自由を奪ってでも、その生活を守る義務と責任がある。自分はその責務をまっとうする。そう決めたではないか。

「わかった。考えておこう」

「はい。……」

「はい。……」
そうやって赤い髪の女性は席を立つ。そして、立ち去る間際、ふわりと踵を返した。

「それともう二つほど。戯言だと思って聞いてくださいませ。ひとつは〈亡国機業〉と呼ばれる秘密結社が、水面下で新たなインフィニツ

ト・ストラトスの開発を進めているとか。それに際してヘルークゼンブルク〈の〈時結晶〉独占を快く思っていないそうですわ〉

「確かに買いいルトがひとつなのは、心許ないだろう。もう一つは？」
「わたくしと同じ赤い髪の少女には、気を付けてくださいませ。西側では恥知らずな娼婦、東側では麗しの赤、ヨーロッパでは赤騎士などスカーレット・レイディ クリススナヤ レッドパロンと呼ばれておりますわ」

「少女ひとりに大層な名前がついたものだな。一体、何者かね」

「何者でもありませんわ。だからこそ、何にもなれる。鼻の利く猟犬にも、世界を救う救世主にも。かのファイルスも人目置いた少女ですわ。見かけたら極めて知性の高い猛獣を相手にする気持ちでいらしてください」

「あなたにそれほど言わしめるとはな。——わかった。気に留めておこう」

「はい。ご用心を。ちなみに、これからの予定は？」

「このままヨーロッパだ。ドイツ、フランス。EU主要国を周る」

「よい結果が得られるように祈っておりますわ。——では、わたくしはこれで。ごきげんよう、エアリス・アークライト・ルクーゼンブルク王女」

そう言い終えるや、彼女の姿がさーと霧のように消えていく。あたかも幻想であったかのよう。前触れもなく現れ、囁き、契約を持ち掛けて、消えていく。エアリスは「まるで本物の悪魔だな」と思った。

エアリスはもう一度、AR化したテーブルを見やる。悪魔が残した異形の怪物たちには、すべてに価格が設定されている。あたかもスーパーマーケットに陳列された商品のように。彼女たちが行う戦争請負業務は、この消費型社会の一端を担いつつあるのだろう。

金という血を、経済という血管を伝い、社会という体に巡らせる機関、いわば、心臓となりつつある。

わたしたちは悪魔と契約し、その心臓を売り渡したわけか。

きつと地獄アタに落ちるだろうな。その時、懇願するのだ。
「どうか、せめて天国タの外側ヘに」と。

第122話 潜入 ルクーゼンブルク公国

ルクーゼンブルク公国。トワイライト国際空港。

入国審査を終えた私とセシリアは、玄関ロビーを出てタクシー乗りのロータリーを訪れた。

この時期のルクーゼンブルクは冷える。私はピーコートのアで首回りを温めながらタクシーを探した。利用者はまばらで観光客の数は少ない。代わってデニムシャツとカーゴパンツにタクティカルベスト、胸に大鴉のワツペンという、観光客にも現地人にも見えない人間を多く見かけた。

どこか物々しい雰囲気。それを肌で感じながら、私は近場のタクシーを拾った。

「すみません、王都までお願いできますか」

「あいよ」と気さくな運転手のタクシーに乗り、私たちはトワイライト国際空港を出発した。

「なんだか物々しい方々がおられましたわね」

小声で尋ねてきたセシリアに「あれはPMCです」と答える。

正規軍はあんなラフな服装をしないから、間違いない。

「ここ、二、三日前ぐらいからですよ。見かけるようになったのは」と、言った運転士に、私は「そうなのですか？」と聞き返す。

「ええ、国王が崩御なされて、第一王女がこの国を治めるようになってから、なんだか物々しくなりましてね。一体王女は何を考えているのやら。いまやすっかり物騒な雰囲気が根付いて、観光客もからつきしできあ」

「それは大変ですわね」

「いえ、実はそうでもないんです。先代の国王陛下が珍しい石を売らせてくれたおかげで、失業してもすべて国が面倒をみてくれるんですよ。税なんてものとは無縁ですし、いやはや、いい国ですよここは、ははは」

輸出で財源が潤っているから、税収が無くてもこの国の社会福祉は、相当に手厚いらしい。だから、観光客が減っても苦にならない。

そう愉快そうに運転手は笑ったけど、等価となるものが、無限ではないことを、この国の人たちは知っているのだろうか。

「——さて、お客さん、そろそろ王都ですよ」

どうやら話を聞いているうちに首都へ入ったらしい。

私は車窓から街並みを眺めた。ガラスの向こう側には、ルネッサンス時代の街並みをそのまま保存したような風景が広がっていた。近代化から取り残されたような情緒が、そこにある。

「で、これからどこに行きましようか」

私は「では、王宮に」と答えた。それから10分ほど走ると、壁に囲まれた王宮が見えてきた。門前には近衛兵と思わしき人間がちらほら。肩には近衛騎士団インベリアル・ナイトの刺繍が詠えてある。

門からすこしはなれた駐車場で、私は「ここで」と運転手に告げた。

「では、よい旅を」

降りた私たちに手を振って、運転手は走り去っていった。

よい旅を、か。あいにく私たちは観光しに来たわけじゃないんですけどね。

「で、アリス。そろそろ、この国に来た理由を教えてくださいな」

駐車場を出て、王宮周辺を軽くぶらぶらと探索し始めた私に、セシリアが言った。

「リリースが言った『ヘマーケット』を提供する』という言葉をおぼえていますか」

「ええ、第二次冷戦に代わる、新しい消費の場でしょ」

「で、『消費の場』とは、戦場のことです。そして、この国では、いま戦争の火種が燻っています」

私はスマホを操作して、世界情勢を扱ったウェブページを開く。

『ルクーゼンブルク、米に歩み寄り。ロシアとの関係、悪化の一途』
『二月三日、ルクーゼンブルクがEU加盟を示唆したことで、ロシアがこれに強い反発を見せている。また、ルクーゼンブルクも、これに強攻的な態度をみせており、同月7日にルクーゼンブルク第一王女が訪米する予定。地下資源を背景に、支援を取り付ける思惑があるとされる。内容次第では、両国間の険悪ムードが加速する可能性があり、国

「際社会は両国間に自制を呼びかける」

「これに〈ヘリリス〉が関与している可能性がある。ここへ来たときP M Cを見たでしょ。彼らの胸には大鴉のワッペンを張ってありました。彼らはアメリカのP M C 〈レイヴン・ソード〉、〈アウターヘブン〉傘下のP M Cです」

「では、お母様はこの国を〈戦場〉^{マーケット}に?」
「はい」

それにこの国では〈時結晶〉が採掘できる。〈時結晶〉はコアの製造に必要なレアメタルだ。当然〈フィンニット・ストラトス〉にも必要になる。開発を阻止したために一夏を狙ったなら、次に狙う場所はコダ。ここで〈ヘリリス〉が暗躍していることは間違いない。

「おそらく、すでに王家の誰かと接触しているはずです。まずその人間に接触します」

「もしや、これからこの国の中枢に潜入する気ですの……」。

この国の政治は王族が担っている。王宮に入るということは、そういうことになるだろう。

聞いたセシリアは視線をそらした。

「あ、あの、わたくし、ここで観光をしているのはダメかしら」

「いまにも『回れ右』しそうな彼女の肩をぐっと掴んで、につこりと私。

「ダメです、ついてきたからには協力してもらいますから」

「わたくしは、シンシアじゃありませんのよ! スパイの真似事なんて無理ですわ!」

「ちよつと、セシリア、声が大きいですつて」

私は慌ててセシリアの口をふさぐも、会話を聞きつけたと思わしき男性がこちらに歩いてきた。

腰にはサーベル。歩み寄ってきた人間は、よりにもよってこの近衛兵だった。

「おい、おまえたち、ここで何をしている」

嫌疑のまなざしを向けられ、セシリアの肩が跳ねる。

「え、えつと、それは……か、観光、かしら?」

「観光だと？ その割にはずいぶん大きい荷物を持ち歩いているな」

私たちは空港からここへ直行してきたから、キャリーケースを持っただけだった。

確かに、荷物をもったまま観光というのは、いささか不自然か。

「あの、これはですわね……」

近衛兵の強まる疑惑から逃げるように、視線を泳がせるセシリア。

このままセシリアに任せても、しよつ引かれそうだったので、私は前に出た。

「観光は序の話でして、実はココで働かせてもらおうかと」

「働く？」

「はい。王家のお世話をする侍女を募集しておられるとかで。それを聞いて訪ねてきたんです。この荷物は、住み込みが条件だったので。よろしければ、案内してもらえませんか」

近衛兵は「……ふむ」とうなった。疑いながらも納得したようすだ。「わかった。すこし待っていていろ」

近衛兵は騎士の服装に不釣り合いな通信機を取り出す。

どうやら、取り次いでくれるらしい。しばらくして、近衛兵はこちらに向き直った。

「確かに侍女を募集しているようだ。連れてこいとのことだ。ついてこい」

と、近衛兵が踵を返して、歩き出す。なんとか、うまく誤魔化せられない。隣でほっと胸を撫で下ろすセシリアの背を叩いて、私は近衛兵の後ろをついていく。

「このまま不採用ってことで、帰れないかしら」

そんな後ろ向きな発言するセシリアをつれて。



私たちが案内された場所は、メイドが住み込むための寮だった。そ

の客室らしき場所で私たちは待機を命じられた。しばらく待つっていると、メイドが入ってきた。波打った長い銀髪。長身で釣り上がった目尻。どこか厳しそうな印象の女性だ。掛けている逆三角の眼鏡がそれを強めている。

「このメイド長を任されている。フロールレンスです。どうぞ、かけて」

入室と共に立ちあがっていた私たちは席に着いた。

「あなたたちね、ここで働きたいという娘たちは。まずは名前を聞こうかしら」

私たちは姿勢を正して、自己紹介をした。

「はい、レイシー・アデルです」

「え、えっと。わたくしは、セ、セシリー・ビスケットですわ」

本名を名乗るわけもいかないので、あらかじめ用意していた偽名で答える。

メイド長は険しい眼差しで、書類に目を通しながら面接を続けた。

「レイシーとセシリーね。それを証明できる身分証はあるかしら。——いえね、実は以前に、雇った女性が他国の諜報員だったことがあったのよ。ミステリアスで、どこか影のある女性だと思ってはいたのだけれど、オズワルド様がさぞお気に召されてね」

オズワルド・ルクーゼンブルクは、確か第一王子だったか。

「部下の噂だと、体の関係まで——って、ほごん」ローレンスさんは赤くなった頬を手で隠し「つまり、そういうことなのよ」

なるほど、過去に私と同じような人間がいたみたいですね。

そういうことらしいので、私は、ある書簡を提示した。ローレンスさんは「なんですか?」と言って、封筒から書類を取り出す。そして内容を確認し、メガネを輝かせた。

「あらあら、ローゼンクロイツ家政婦学校からの推薦状じゃありませんか。もう、そんなものがあるなら先に出しなさい」

想像以上に効果覷面で、逆にこちらが戸惑う。

よほど信頼のある養成所なのだろうか。ローレンスさんのみならず、セシリアまで驚いている。

(アリス、よくローゼンクロイツの推薦状なんて手に入りましたわね)
(セシリアは知っているんですか)

(ええ、家政婦を雇うならココというぐらいネームバリューのある養成所ですわ。まだメイドという職業が奴隷のように低かったころ、その地位向上を行ったシュヴァイツァー・ローゼンクロイツが創立した学校だったかしら。とても歴史と権威がありますの)
(詳しいですね)

(チエルシーがこの卒業生でしたから。そんなところの推薦状なんか、どうやって)

(ローズマリーが持たせてくれたんです)

(なるほどですわ。ライオンハートも鼻屑にしておりましたわね。コネかしら)

だろうな、と思う。声に出してはいえないけど、金銭が絡んでいるのかもしれない。褒められた事じゃないけど、書類を読み込んでいるフローレンスさんの様子を見ると、推薦状の効力に助けられているみたいだし、いまだけは、目を瞑って感謝しよう。

「なるほど。あなたたちは私が思っていたより優秀な家政婦なようね」

「いえ、それほどでもありません」

「謙遜しないでいいわ。あの学園長が一筆認めるぐらいですもの。実は私もこの卒業生ですわね。いまでは非常勤で、講師として教鞭を振るうこともあるのよ、ふふふ」

と、得意げにメガネをくいつと持ち上げる。

自尊心が強そうな女性に自慢をさせるなんて、確かにすごいネームバリューだ。

「さて、そうとわかれば、今日からでも働いてもらおうかしら。えー、そうね。あなたたちにはレディメイドになってもらえるかしら。実は、最近、胃潰瘍で一人やめてしまっただけ。人手が足りていないところだったのです」

私は見えないようにセシリアの脚を軽く蹴った。

(セシリア、レディメイドってなんですか?)

私はサブカルのメイドしか知らない。レディメイドと云われてもピンとこなかった。

(主人に付き添って、身の回りの世話をするメイドですわ)
なるほど。まさに私たちが知るメイドってことか。

「わかりました。で、私たちはどんな方のお世話を」

「あなた方には第七王女アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルクさまに仕えてもらおうわ」

♡

♠

◇

♣

「第七王女アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルクさまねえ……」
面接後、採用が決まった私たちは、寮で着替えをすまし、業務にあたるべく王宮の、別邸に続く廊下を歩いていった。

「なんでもかなりのお転婆らしいってことですけど」
寮で出会った先輩メイドとあいさつしたとき、そんな話を聞かされた。

相当に気ままらしく。手を焼いている侍女も多いらしい。

「鈴さんみたいな方なのかしら」

「言いましたら聞かない性分で、手を焼いているって話でしたね」

それで前任者もやめてしまったらしい。先輩が「新人なのに随分と大変な場所に回されたわね」と苦笑していたぐらいだから、相当なわがままな王女らしい。はたして私のような素人メイドに、そんな王女の給仕が務まるのだろうか。

そう不安を感じながら、私たちは廊下をわたった。

王宮は本邸と別邸の二つからなる(厳密にいうと近衛騎士の宿舎と、メイドの寮の4つ)。本邸には政治に関わる人間がくらし、別邸には関わらない、あるいは関心のない人間がくらししているようだ。

「失礼します」

王女の部屋につき、ノックをすると、奥から「入れ」と幼い声が返ってくる。

部屋に入った私たちがまず目にしたものは、まぶしいばかりの煌びやかさな光景だ。純金と思わしき装飾の施された寝具や家具。高級そうなドレッサー。それと不釣り合いな書籍のやまやま。机に散らかった高級文具が、なんとなく持ち主の性格をあらわしている。

声は備え付けのバスルームからしていた。王女はただいま入浴中らしい。さっそく仕事の予感がして、私たちはさっそく浴室に赴いた。バスルームに入ると、カーテン越しに少女のシルエツトが見えた。受けた説明だと、第七王女はまだ14歳だということだ。

「今日から新たに王女陛下の回りのお世話をさせていただくことになりました、レイシーです」

「同じくセシリーですわ」

仕切られていたカーテンが、ガラッと開く。

浴槽から出てきた王女は幼い身体を大きく見せるように踏ん返り返った。

「うむ、そうか。おまえたちがわらわの新しい召使いか。——ほれ、なにをしておる。はよう体を拭かんか。わらわに風邪をひかせる気か」
「もうしわけありません。ただいま」

私は慌てて準備してあったバスタオルを取って、王女の体を拭き始めた。セシリアも駆け足で着替えを取りに向かう。私がひとしきり体を拭き終わると、アイリス王女はすつと手を差し出した。

「喉が渴いた。飲み物を用意せい」

「はい、ただいま」

置いてあったビンから水をコップに汲み、王女に差し出す。

王女は顔をしかめた。

「違うわ。わらわが飲みたいのは水ではない。ミルクじゃ」
けれど、この場には水しか置いていない。

これはキツチンへ取りに行くしかなさそうか。

「ただいま、持ってまいります」

「急げ、死刑にするぞ」

こんなところで死刑にされてはかなわない。とりあえず、私は王女にガウンだけ着せて、浴槽を飛び出す。すれ違ったセシリアに「ミル

クを取りに行つてきます。着替えをお願いします」と頼み、私は王宮の厨房へ走つた。

(こりゃ、王宮の内政を探っている暇なんてなさそうですね)

これは作戦を練り直した方がいいか。そんなふうに考えながら厨房に入り、キッチンメイドに「王女がミルクを」と告げる。キッチンメイドは気の毒そうに笑つて、ミルクを準備してくれた。

そのミルクを持って、駆け足で王女の部屋に戻る途中、渡り廊下で、セシリアとすれ違った。

「どうしました、セシリア」

「王女はやっぱりソーダがよろしんですって……」

どうやら、セシリアも王女の命令で走ってきたらしい。

「ソーダ……」私は手持ちのミルクを見た。わざわざ走つたのに。

「ということなので、取つてまいりますわ。はあ……。このセシリア・オルコットを駒使いにするとは、言いご身分ですわ、ほんと」

「そりゃ、王族の人間ですからね。いい身分には違いありませんけど」
「とりあえず、わたくしはソーダを取りに行つてまいりますわ。アリスは急いで王女の着替えを。あの様子だと自分で着替えたりいたしませんわ」

「でしようね」

もともと使用人に自分の着替えをさせるのは、身分の違いを分からせるため。いわば権力の誇示。不遜なあゝの王女様が一人で着替えを終えてくれるとは思えない。きつと今も裸で待っているはずだ。

「わかりました」と頷き、別邸の王女の部屋へ急ぐ。

「ただいま、戻りました」と部屋に入ると、王女がやはり服を着ずに踏ん反りかえっていた。そして手には――水の入ったコップ。その水でゴクゴクと喉を鳴らし、ぷはくと唸る。

私は「……………」と無言になった。

「なんじゃ、遅いぞ、メイド。もうミルクはよい。それより、はようわらわを着替えさせよ。風邪をひかせる気か。死刑にするぞ」

悪びれた様子もなく言つてのけるアイリス王女。

このあと、セシリアも同じように無言になったことは言うまでもな

いでしよう。



「なんてプリンセスなのかしら」

今日一日の仕事を終え、帰ってきたメイド寮。

セシリアはベッドにドスンと腰を下ろして、そう愚痴った。

今日は、とにも、かくにも、あれしろこれしろと命令されっぱなしの一日だった。それに応えることがメイドの仕事であるから仕方ないことなのだけど、こちらのいうことに耳を貸してもらえないことが大変だった。「王女さま、勉強の時間です」と言っても「興が乗らん」と一蹴され、「ご就寝の時間です」と言っても「まだ眠うない」と読書にふける。口答えしようものなら「死刑にするぞ」だ。

いい意味でも、悪い意味でも、他人の指図は受けない。己の道を行く、そんな我が強い王女だった。身分さがあるから、私たち使用人に対して気が大きくなっているところもあるだろう。セシリアのようなタイプは苦手とする相手かもしれない。

「アリスもそう思いませんこと?」

「そうですね」

「まったく、何かにつけて死刑、死刑と。子供の戯言だとはいえ、公的な人間が使つていい言葉じゃありませんわ! はあく、ベッドも堅いですし!」

支給品としては上等だけど、常日頃から高級品を使っているセシリアにしてみれば、このベッドも三流品にまで落ちるのだろう。不平たらたらだ。鬱憤がたまっていることも関係しているのかもしれない。

「いつまでこんな生活を続けられいいのかしら」

「まだ一日目ですよ」

「その一日でよくわかりましたわ、セシリア・オルコットは仕える側ではなく仕えられる側の人間だということが。メイドという職業はわたくしの性に合いませんわ。明日にもここを離れたい気分です」

「それは私も同じです。私もこんなところでメイドをしている暇はない……」

言葉に感傷的な色が滲んでいたのであろうか。対面のベッドにいたセシリアが私のそばに寄り添って「そうでしたわね……」とそう慰めてくれる。「では、一刻も早く手がかりを手に入れて、ここを出ましよう」

「そうですね」と私。でも、先へ進むには「手がかり」が必要だ。

今日は一日中王女に振り回され、ほとんど調査できなかつた。ほとんど、というのは。すくなくとも第七王女はへりリスと繋がっていない。それだけはわかつたからだ。

「では、明日はわたくしが何とかあなたが探れるように時間を作ってみますわ」

「助かります。確か明日は新しい家庭教師がくるんでしたね」

私はメモをひらいて明日のスケジュールをチェックする。王女が就寝したあと、行われた使用人たちのミーティングによれば、明日、新しい家庭教師が来るそうだ。なんでも、王女が直接スカウトしたらしく、住み込みらしい。その出迎えと準備が早朝からある。

『午前、午後ともに自室でご勉強』ということですし。部屋にずっといてくれたら、わたくしだけでもなんとかなるかもしれないわ。うまく時間を作ってみます。その間に本邸を探ってみてくださいな」

基本的に国営を担う人間は本邸に住んでいる。その本邸に紛れ込めれば、何か手がかりを見つけられるかもしれない。

「わかりました。そうと決まれば今日はもう休みましょう」

「そうですね」

私たちは寢床の準備に掛かつた。メイドの朝は早いのだ。明日も朝の4時半に起床しなければいけない。

第123話 風雲急を告げる猫

〈ルクーゼンブルク公国〉に潜入して二日目。今日は王女陛下の新しい家庭教師が来ることになっていた。ISの見識を深めるべく雇われたというその家庭教師は、IS学園推薦——つまりIS学園が手配した教師であるらしい。

「IS学園公認の教師ってどんな方かしら」

「もしかしたら、顔見知りかもしれないませぬね」

そう、ひそひそ話していると、玄関ロビーに女性が入ってきた。

フォーマルスーツに、タイトスカート。手にトランクケース。歳は35ぐらい。黒い長髪を後頭部で結び、黒ぶちメガネをかけた姿はインテリチックな女教師っぽいが、どこか芝居がかった物腰には、胡散臭さを感じる。鼻の利く私じゃないと判らない程度の、だけど。

その女性は私の許にやってくると、徐に引き寄せた。

「やあ、イランでは世話になったね」

その言葉でピンとくる。私が「あなたは——」と問うと、彼女はニツと笑った。

「ああ、オレだよ」

その口調。やはりそうか。確信した私は彼女の肩を引き寄せ、小声で言った。

「いつから家庭教師に転職したんですか、ソフィア」

ソフィア・アルジャンニコフ。かつてイランの地で激闘を繰り広げ、先々月には共に戦った、ロシアの元女スパイだ。彼女が王女の新しい家庭教師？

「いや、転職した覚えはないよ、オレはいまでもロキの——〈亡国機業〉のスパイだ」

〈亡国機業〉のスパイ。彼女のボスが誰か思い出して、私は得心した。

〈亡国機業〉は大手のIS企業をいくつも傘下に置き、ISの開発を裏から操る秘密結社。そして、その首魁たるロキはいま男性でも使えるIS〈ファイニット・ストラトス〉の量産に取り掛かっている。つま

り、それに必要な〈時結晶〉を確保するため、彼女をこの国に潜入させた。そんなところだろう。

「そういうお前こそ何やっているんだ。あんな王女のそばで」「これには事情がありますよ」

私はさらに声を小さくして、事の経緯を説明した。

「なるほど。おまえも持っていないな」

ソフィアはアイリス王女を盗み見て苦笑した。言葉の意味がわかって、私も苦笑いした。

国家の中枢へ食い込むなら、もつと有力な人物と接点を持ちたいところ。けど、引いたカードはあの王女。もっていないってというのは、そういうことだ。

「逆を言えば、王女はとんでもない引きの強さを持った人間かもしれないよ」

自分で言うのもアレだけど、私はそれなりに優秀な人間だ。ソフィアもまた凄腕。ここぞという土壇場で「エース」と「ジョーカー」を引き当てるような運の強さが、この王女にはあるのかもしれない。

私はそんな強い引力を持った人間に何人も出会ってきた。ロキや千春。いずれも人を惹きつける引力を持っていた。情熱や魅力。そういう引力を。そして、「彼」にもその引力があった。だから、「彼」の許に多くの少女が集った。この幼い少女も、その類まれなる引力で、やがて大きなことを成すのかもしれない。

(いまはまだその鱗片は感じられませんけど)

そう思いながら、王女を見やる。

王女はひそひそ話に混ぜてもらえず、地団太を踏んでいた。

「なんじゃ、おまえら、わらわを無視してひそひそと。さては、おぬしら、わらわの悪口を言っておるのじゃな。不敬罪じゃ、不敬罪で死刑じゃ」

いまにも立てかけてある装飾剣を手に取って襲ってきそうな気迫だった。

セシリアも宥めきれないと、匙を投げている様子。ソフィアは「違いますよ」と苦笑して

「王女陛下は采配に恵まれている、と話していたのです。彼女はとても優秀な女性です」

「こやつがか?」

と、半眼を作る王女。

「わらわにはそう見えん。見るからに下人面をしておる。見よ、寝癖がついておるぞ」

あからさまな疑いのまなざしだった。私は慌てて手櫛で髪を整える。

いや、これは、早朝から忙しかったせいで。普段はちゃんと手入れしているんですよ?」

「これでも優秀と申すか?」

「愛嬌ですよ。すこし抜けている方が親しみを持てるものです。王女も少し見習われては?」

「余計なお世話じゃ。わらわは威厳ある王になりたいのじゃ」

威厳か。踏ん反り返る姿は、むしろ愛嬌があるけど。

言ったら、また「不敬罪じゃ」「死刑にするぞ」と云われるでしょうから、黙っておこう。

「ま、彼女はそばに置いておいて損はありません。私が保障します」

「ふん、そこまでいうなら、そういうことにしておいてやろうぞ。良きに計らえよ、レイシー」

私は「はい」と頭をたれた。

そして「では、ご案内いたします」とソフィアを王女の部屋へと案内した。



「では、さっそく始めるか」

場所は移って王女の自室。そう言ってパツクのように薄皮状のマスクを外す。その下からいつものソフィアの顔が現れると、アイリス王女は「ほお〜」と口を開けた。セシリアも「あら、あなたでしたの」

と言った。

「褒めるのは癪だが、見事な変装じゃったな。使用人も気づいておらなんだ」

「オクトカムという技術です」

「オクトカム？ なんじゃそれは」

「タコの擬態ですよ。表面に別の素材の質感を凹凸まで表現する技術です」

「でも、その変装マスクはうちの技術部で作っていたものじゃ」

「元々オクトカムは〈ヘアフィンギング・オクトパス〉という無人兵器に装備されていたものだ。」

「デユノア社でラウラに破壊された後、回収された擬態技術は〈技術部〉に回されていたはず。」

「キミのところの〈技術部〉から拝借させてもらった。もちろん許可を取ったうえでね」

「そういつてソフィアは止めていたバレッタを外した。それに合わせて靡く黒髪が水色に代わっていく。紫紺の瞳もラピスラズリ色に。いつもの容姿に戻ったソフィアは何やら資料を机に並べた。」

「出された資料は、資本論やら、貿易やら、14歳の子供が習うには、難しそうな内容ばかり。中にはロリーナの著書「ISはどこからきて、どこへむかうのか」もある。」

「で、何を始めるんですの？」

「もともと家庭教師っていうのは建前だ。オレが来たのは、このルクーゼンブルクが抱える問題の、その解決に一石投じるため。いま、この国は戦場になりかけている。王女はそれを止めたい」

「うむ」とアイリス王女は頷いた。

「オレたちとしても、この国が戦場になることは避けたい」

「もちろん、愛国心からじゃないだろう。平和主義だからでもない。単純に、この国が不安定になると〈時結晶〉の輸出が滞ってしまうからだ。現状、ISのコアに必要な〈時結晶〉は、この国でしか採掘できない。輸出が滞ると〈ファイニットストラトス〉計画に支障が出る。『さて、くどいようだが、ヘルクーゼンブルク』では〈時結晶〉という

稀少な金属が採掘できる。それによってこの国の財政は潤っているわけなんだが、半年ほどまえ、ロシアからある要請が舞い込んだ」

『自国の地質調査団をヘルクーゼンブルクへに入国させろ』というな」憤慨するように王女は、口のへの字に結んだ。

「ヘルクーゼンブルク」の地質を調べ、自国でも産出できないかと考えたわけですね」

「だが、ヘルクーゼンブルク」は拒否した。もし「時結晶」が埋まる地質傾向が判明し、至る所で採掘が行われれば、流通量が増えかねない」「そうなると商売敵が増えますわね。他の経済大国と競争になったとき、この国が勝てる可能性は、まあ高くないかもしれませぬわね。だから、独占し続けたい。この国の指導者、第一王女は、自国の事をよくわかってらっしゃいますわ」

物売りの話に強いセシリアは、深くうなづいていた。

「けど、強権ロシアがそれを理由に断念などするわけもなく？」

「ああ、するわけもなく、ロシアは圧力をかけてきた」

「あやつら、こちらが拒否するなり、国交や貿易の停止をほのめかしてきよったのだ」

この国の生産性は決して高くない。手厚い社会保障があるためだ。がんばらなくても食べていける仕組みがあるから、国内の生産力が上がりづらい。結果、生活用品から軍備にいたるまで、さまざまな物資を輸入に頼ることになった。貿易の停止は、まさにこの国のライフラインそのものを止められることに他ならない。当然、黙っていられるわけもなく、反発は必至だった。

「結果、『両国間は険悪ムード』ってわけですか。で、対抗するためEUへ加盟を？」

発展途上の「ヘルクーゼンブルク」が大国ロシアと対等に張り合うには、他国の援助が必要だ。そこでEUに加盟し、イギリスやドイツ、フランス等の助力を請うた。

「だが、それがロシアを本気で怒らせた」

「ヘルクーゼンブルク」は、ロシア帝国時代からの友好国だったと聞く。ソ連に代わってからも、その友好は続いてきたそうだ。別に国家

体制が社会主義に近かったからというわけじゃなさそうだけど。いずれにしろ、敵側に寝返ったんですから、そりゃロシアも怒るわけですよ。

「このまま事態が收拾しないなら、最悪の場合、一触即発の状態になりかねない」

ソフィアは置いてあつた水で口を潤し、「でだ」と続ける。

「先も話したように、事の発端は、この国が地質調査団の入国を拒んだことにある。だから、いつそ入国を許可し、ロシアとの関係を回復させるほかに解決の手はない」

「なんじゃと！」王女は声を荒げて、立ち上がった。「ロシアのいうことを聞けというのか！」

アイリス王女はソフィアを指さした。

「きさま、やはりロシアのスパイであるな。誰かこの物をひつとらえよ」

「人の話を最後まで聞いてください、王女陛下」

立ち上がった王女を宥めて、なんとか座らせる。

ドシンと腰を落としたアイリス王女は睨みつけるようにソフィアに問うた。

「ソフィア、セシリーが言ったであろう。もし〈時結晶〉が埋まる地質傾向が判明し、流通量が増えれば、価格競争となる、と。資本力に劣る我々では勝てぬと——」

「そうならないように新たな枠組みを作るのです」

「枠組みじゃと？」と王女は目を二、三回ぱちぱちさせる。

「仮に至る場所で採掘が行われて、各国で〈時結晶〉が産出されても、そのすべてが大国とは限りません。中にはこの国と同じ問題を抱える国も出てくるでしょう。それらと同盟を結び、経済大国に負けない産出量と資本を確保するのです。そうすることで、相手に価格の主導権を渡さない」

「要するに個人商店じゃ大型スーパーマーケットに勝てないから、個人商店を寄せ集めて、商店街として対抗しよう、みたいなことですか」
「なるほど、そういうことじゃったのか。では、さっそくお姉さまに進

言して——」

「いえ、仮に私たちのような外部の人間が口頭で進言しても、政治の意思決定に影響を及ぼすことは難しいでしょう。そこで——」ソフィアは並べた資料の中から束を取り出し「この提案をまとめた意見書を〈王族会議〉に提出します」

〈王族会議〉。国営に関わっている王族たちとその関係者を集い、国営について協議する場。私たちで云う閣議に相当する場だ。

「じゃが、どうやって〈王族会議〉に出席するのじゃ？ わらわはできぬぞ……」

悔しそうに唇をかむ。

〈王族会議〉に参加できる人間は、国営に携わっているものだけ。なんの役職にも就いていない彼女は、〈王族会議〉に参加することができない。つまり、彼女を通じて第一王女陛下に意見を上げることができないということだ。

「それは承知しております。なので、〈王族会議〉に参加できる者に託します。確か第一王子が〈王族会議〉の実務的な役割を熟されていますね。彼に入れ込んで、各関係者が賛同へ動いてくれるよう根回ししてもらいます」

好都合なことに、現在、第一王女はアメリカを初め、ヨーロッパ諸国を外遊中の身。いまは王宮におられない。根回しをするチャンスだ。

「じゃが、オズワルド兄様は真面目な人じゃ。簡単にいくか」

「大丈夫です。手はあります」

「自信がありますね。当てでもあるんですか。相手の秘密を握っているとか」

私がいうと、ソフィアは得意そうに笑った。

「いいや、弱みらしい弱みは握っていないよ。ただ——アレは握ったことがある」

得意げな顔を見せるソフィア。私とセシリアは『きゃー♡』と顔を両手で覆った。

アレの意味がわからない王女陛下だけは、頭に「？」を浮かべて、首

をかしげた。

♡

♠

◇

♣

「アリスが〈ヘルクーゼンブルク〉に？」

IS学園格納庫。復旧した第二アリーナで、国家代表たちと調整を終えたあと、機体〈暮桜〉のメンテナンスを施していた千冬の許に、その報告はもたらされた。

「ローズちゃんからの報告よ。一夏君を追っているみたい」

「鷹の子は死ぬまで鷹だった、ということか」

友人の危機を知り、彼女は再び銃を取った。

一夏の姉として頼もしく思えた反面、大人として不甲斐なく思い、素直には喜べなかった。

「だが、どうやって一夏のことを？」

〈倉持技研〉襲撃は、まだごく一部の耳だけに留まっている。利用された〈黒ウサギ隊〉を擁護するため、襲撃者の正体や真相は公にしない。

「天海レイという男からリークを受けたそうよ」

「天海レイ？」

聞いたことない名前だった。いやそうでもない。頭の片隅で覚えがあるような気がした。

「そいつは何者なんだ」

「男性の権利を取り戻そうっていう集団サ」

そう答えた人物は、花魁の姿の、アリーシャ・ジョセスターフだった。

彼女はぼつくり下駄をカランコロンと鳴らしながらやってきて、空いた胸元から一枚の写真を取り出した。写真には榊原の肩を抱く優男が写っていた。その顔を見て、おぼろげな記憶が鮮明になる。

「思い出した」千冬は暮桜を見ながら「こいつは第二回へモンドグロツソで一夏を誘拐した連中だ」

殺傷武器を使うへモンドグロツソを倫理的な観点から反対する集団がある。それが反モンドグロツソ団体だ。第二回へモンドグロツソで、彼らは一夏を誘拐、当時へブリュンヒルデだった千冬を脅迫し、へモンドグロツソの廃止を要求してきた。

「でも、そいつは、フンドシカツギに過ぎないのサ」
「禪担ぎ？」

「IS登場前、男性社会で有力なポストにいた連中のサ。自分たちの地位が脅かされつつあることを恐れ、天海レイのような若者に資金を援助して、女尊男卑社会に反抗させているのサ。母さん、いやジョセスターフはファシスト時代からそんな連中と戦ってきた」

彼女の母親ジェラルディーナ・ジョセスターフは女性解放運動家であり、同時にへモンドグロツソの生みの親でもあった。その二者の争いはへモンドグロツソとへ反モンドグロツソという形でいまに続いているわけか。そして自分たち姉弟はそれに巻き込まれた、と。
「で、今度は何をしようとしているんだ……」

「へキャノンボール・ファースト」以来、一夏くんは一種のヒーロー像として打ち立てられたわ。グループの求心力として囲い込みたいのかもしれないわ」

「へフィニット・ストラトス」計画を知れば、一夏くんを餌に「加えろ」と要求することもできるだろうサね」

「復権を目論む連中にしてみれば、男でも使えるISは喉から手が出るほど欲しいものだろうな。だが、肝心な身柄はへリリスにある。自分では手が出せないから、なんとかできそうな人間に接触した。余計なことをしてくれたものだ。——と、思うが、彼女が動いてくれたことに心強く思う自分もいる」

「私もよ。大人として不甲斐ないと思うけれど、動いてくれるなら協力はおしまないわ」

「——で、ララたちは？」

いま、ドイツ軍のネットワークからダウンロードした情報を解析しているはずだった。

「ダウンロードした情報にライラの位置情報があったわ。それをタイ

ムラインごとに追いかけている。直に逃走経路が判明すると思うわ。いま、チームを編成して追跡の準備をしているところよ」

「そうか」

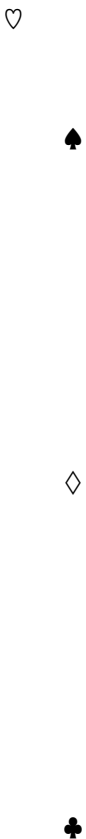
「けれど、あなたにはここに残ってもらわうわ。あなたにはココを守ってもらわなければいけない」

戦力には限りがある。救出に戦力を割くことで、こちらの守りが手薄になることを、向こうも見越しているはず。相手に付け入られるすきを作らないためにも、娘にはここから離れてもらわうわけにはいかない。

「わかっている。それにアリスも動いていてくれている。私は私のすべきことをする。それは彼女たちの帰るべきこの場所を守ることだ。なら、今度こそ守ってやるさ」

学園ぐらい守ってやるさ。いつか、どこかで彼女が言ったセリフだ。

でも、自信過剰だったころの——幼見的万能感とは違う本物の覚悟が、〈暮桜〉を見る彼女の瞳には宿っていた。



ロシアのシベリア地方に位置する都市イルクーツク。世界最大の湖バイカル湖のほとり

この地域はシベリアンハスキーの故郷ともあつて犬ぞりが盛んに行われている。それを趣味とするソフィアのセーフハウスもここにあり、〈フェンリルの犬小屋〉も置かれている。

〈フェンリル〉の技術を〈霧纏の淑女〉に流用するため、簪はここを訪れていた。「この時期、ロシアに来たならバイカル湖は見たほうがいい」と勧められたものもある。この時期のバイカル湖は厚い氷に覆われ、クリスタルグラスのような美しい湖面を望める。その幻想的な光景をその目に焼き付けた後、簪はここを間借りして、姉の新型専用機の開発を進めたのだが、事は容易に運んでいなかった。

「……へフェンリル」の高度な位相制御を〈霧纏の淑女〉に実装するには、やっぱりソフトウェアの統合が必要なのかな」

〈霧纏の淑女〉の特性はその高度な流体制御。それを可能にしたシステムが、篝火ヒカルノが開発したへウンディーネだ。へフェンリル」の高度な位相制御を〈霧纏の淑女〉に実装するなら、そのへウンディーネ」にフェンリルの位相制御ソフト〈ニブルヘイム〉を統合する必要があった。

「ほな、したら、ええんとちゃうの？」

声がして振り向くと、母親の櫛菜が子犬を抱えて立っていた。

櫛無の代表引継ぎに際し、未成年である彼女の保護者として同伴していた。

「……簡単にいわないで、お母さん。……異なる開発環境で作られた二つのシステムを統合するには、両方の特性を理解しないとイケない。……かたやソフトウェアエキスパート篝火ヒカルノが書いたもの、……片や篠ノ之束から技術を受け継いだロキが書いたもの、だよ？ ……簡単なことじゃないんだよ？」

「ほな、無理にせんでええんとちゃう？ ファイルス大統領も演説で言っとったで。『世界はメルティングポッドじゃなくていい。サラダボールでいい』って」

「……ひとつにならなくていいってこと？」

「そや。人にはいろいろ考え方があるとし、それぞれの言い分がある。それに耳を傾けず、気に入らないと辱めたり、貶めたりしても、なんの解決にもならへん。大事なのは、互いに尊重し合いながらも、その中でたったひとつ共通の意志を持つことやって」

へインフィニット・ストラトス」は、その萌芽のために作られた。

たった一つの想いを共有することで世界は円滑に回る。束がその象徴として地球そのものを掲げたように、櫛菜は子犬を高い高いと掲げた。

「……そっか。ひとつにしなくてもいいのかもしれない」

ひとつにするのではなく二つが共存できるような環境を整備する。おぼろげだが、解決案が見えてきた気がした。すると、子犬のお腹が

ぐうぐうと鳴った。

「なんや、ニコ、お腹がへったんか？」

舌をペロンとだして、ワンと吠える。どうやら犬たちの飯の時間らしい。

「そうか。ほな、準備したろ。簪ちゃんも手伝ってくれるか」

「なんとって、ここには子犬のニコを含めて13頭もオオカミ犬がいるのだ。」

「エサやりだけでも、そこそこな重労働になる。」

「……うん、わかった」

ここを使う代わりに犬の世話を頼まれていた簪は、席を立ち、厨房に足を運んだ。備え付けられた棚から犬用の餌を取り出し、13皿分に配膳していく。それを母とカートに乗せ、隣接する犬小屋に向かうと、12頭、雄雌、大きささまざまなオオカミ犬が尻尾を振って待っていた。

「……おすわり、だよ」

十二頭の狼犬たちはいつせいに腰を下ろした。その前にエサ皿を並べ行く。次いで「よし」と告げると、犬たちは一斉に餌を貪り始めた。しばらく、食事に夢中の犬たちを親子で眺めていると、背後で誰かが言った。

「すつかり慣れたものね。小さい頃は、子犬も触れられなかったのに」

振り向かずとも誰かわかった。姉の刀菜だ。

「……だって、怖かったんだもん」

「それに、むかしは動物アレルギーもあったしなあ」

「そういえば野犬に襲われたこともあったわね。怖くなくても仕方ないかしら」

「……だよ。……もしその時、お姉ちゃんが守ってくれなかったら、トラウマになっていたかも。……わたし、いつもお姉ちゃんに守られてばかりだった」

「でも、その簪ちゃんがいま私のために専用機を開発してくれているんだから、おあいこよ。それに私だってたくさんの人に守られてきたわ。ソフィアや、お母さん、それにお父さん。おかげでこうして無事

に任務を終えることができた」

楯無がロシアに潜入していた理由は、対ロシアで使える外交カードを手に入れること。それを材料に、北方領土の軍事拠点化を防止する目論見が、日本政府にあった。楯無は与えられた任務を成した。

「……そっか。……じゃあ、いつかお返ししないと、だね」

「ええんよ。二人が元気で大きくなってくれたら。でも——」と櫛菜は頬に手を当て「子供が自分の手から離れていくくんはなんや寂しいな。いつまでたっても子の世話を焼きたくなるんは母親の性か。子育てを終えた中年女性がペットを飼う気持ち、わかるわあ」

「じゃあ、一匹もらっていく?」

「ええんやろか」

「大事にできるならいいって言うんじゃない」
「できるでできる」

「……『ちゃんとお世話できる?』って訊かれた子供の反応だあ……」
櫛菜は大人の犬に混じって餌を貪る子犬のそばに寄り、毛をなでる。子犬は我関せず餌を食べていたが、「おまえも更識の子になりたいやなあ、うんうん」と櫛菜は勝手なことを言つてのけた。そんな母に娘は顔を合わせて苦笑する。

「で、お姉ちゃん、もう辞任の手続き、おわつたの?」

「うん、承認はされたけど、後任を決めるのにちよつと手間取つちやつていて」

ログナー、ソフィア、楯無と、代表が立て続けに代わつた為、候補生のストックが尽きかけており、適任な後任がなかなか決まらならしい。

「……じゃあ、なんで戻ってきたの?」

「ちよつと、ソフィアに頼まれ事をされていてね。ソフィアの依頼で〈ヘアツエロタヴァアヤ・ヴァトカ〉の動向を監視していたんだけど。それがちよつとまずいことになりそうなのよ」

「……まずいこと?」

「ヘアツエロタヴァアヤ・ヴァトカ」が、クレムリンに入つていったの」
楯無は小屋の奥にいる狼に近づく。よく見ればぬいぐるみであつ

たそれに触れ、何かを話し始めた。いままでの破天荒な表情とは違い、眉間に剣呑な皺が刻まれている。それが、状況の深刻さを感じさせた。

「おそらくパッケージを売りつけるためよ。それをソフィアに伝えないと」

第124話 静謐の月

第七王女アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルクの自室。

〈王族会議〉の政務官を務める第1王子・オズワルド・アークライト・ルクーゼンブルクに接近するため、ソフィアは自前のトランクケースを開いた。その中からメイド服を取り出し、袖に腕を通す。彼女はもう一度、ソーニャとして接触する腹積もりらしい。

「しかし、ソフィア。ソーニャは既に身元が割れておるぞ」

ソフィアはしおらしく頬を赤くして

『あなたとの夜が忘れられなかったの』、そういう具合でいきます」

さすが女スパイ。見事な演技分けだったけど、それはさておき、「仕事のつもりだったのに、あなたが私を本気にさせてしまったのよ」というのは、確かに男ならぐつとくるシチュエーションかもしれない。「それに以前より魅力的になったと思わないか」

しなを作って、長い蒼髪をかきあげる。見えたうなじと、綺麗なS字ラインからふわつといい香りがした気がして、同性の私でも一瞬ドキッとしました。

「確かに、以前より色気がましたような気がいたしますわね」

「だろ？」

ソフィアはどこか嬉しそうに微笑んだ。相手を油断させるための笑みじゃなく、心から微笑んでいるようにみえた。こう、自分を縛っていた何かから解放されたような。私も経験したことがあったから、それがわかった。

「一体何がかわりましたの？」

「ちよつとした心情の変化だよ。心のありようで女は綺麗にも醜悪にもなるってことさ。——さて、セシリー。後ろのファスナーをあげてくれ。それとレイシー、オレのカバンから、コンタクトをたのむ」

「はい」

「はいな」

髪をかき上げたソフィアのファスナーをセシリアが上げる。

私は彼女のトランクを開いた。中には、髪色を自在に変えられるナ

ノコーティング剤、パッチ型の変声機、小型のICレコーダーにカメラ。それがそれと分かったのは、私も以前に使用したことがあったからだ。

「うむ、これがスパイアイテムというやつか」

アイリス王女が興味を示すようにトランクを覗き込む。そして、中から薄い衣類を取り出した。レースとシースルーの色っぽい下着は、いわゆる大人のランジェリーだ。

「これもスパイアイテムか？」

「いいえ、それは女の武器です」

ソフィアはターンしてメイドワンピースをふくらませる。

チラツと見せた下着は漆黒のストリングス。いわゆる紐パンというやつだ。

「男はそういうのが、好みなのか？」

「男性のすべてがそうとはいえませんが、王子はこれが好みなので」

「そんなことまで知っておるのか。では、これはなんじや」

と、取り出したものは、狸のぬいぐるみだ。

王女がそのぬいぐるみを抱きおこすと、ぬいぐるみは急に手足を動かして、王女の腕から飛び出した。そのままテクテクとソフィアの許へ歩いていく。女王を含め、私たちは目を丸くした。

「なんじやこれは……。急に動き出したぞ?!」

「それは秘密の暗号通信機です。どうやら仲間から通信が入ったようです」

ソフィアは膝を折って、たぬきのぬいぐるみに話かけた。

「オレだ。どうした、楯無」

どうやら通信相手は会長らしい。

確か会長は国家代表を辞退するためロシアにいるって聞いていたけど。

『ソフィア、あなたに頼まれていた件だけど』

狸のぬいぐるみは両手をあげてフリフリした。

「何か動きがあったのか？」

『クレムリンがへアツエロタヴァヤ・ヴァトカと契約してへパッケージ

ジ>を買ったらしいわ。内容はまだわからないけど、山猫がウクライナ製の無人兵器グレートを大量に買い付けた報告もある。エネルギーや物資の動きもあるわ。大きい買い物をしたことは確実よ』

狸のぬいぐるみは腕を組みながら深刻そうにそう言った。

「わかった。詳しいことがわかったら、また連絡をくれ」

『ええ』

通信が終わると、ソフィアは珍しく深刻な顔を見せた。

普段からクールな彼女が表情を曇らせたとあって、室内の空気もまた重たくなった。

「ど、どうしたのじゃ、ソフィア。なにがあった？」

「クレムリンがへアツエロタヴァヤ・ヴァトカ>のへパッケージ>を購入したそうです」

「何を言っておるかわからぬ。わらわにも解るように話せ」

「へ爪アツエロタヴァヤ・ヴァトカを立てる山猫>はロシア最大手のPMCです。そこが販売しているへパッケージ>をロシア政府が購入したそうです」

へパッケージ>とは、軍事作戦に必要な人員、物資、情報を梱包したPMCの商品だ。

従来のPMCは受注をうけて業務にあたる。だが、大手のPMCは独自の情報機関を持ち、得た情報を許に作戦を立案し、それを商品として販売している。『もしもし、あなたの国はテロリストに狙われています。私たちはそれらを殲滅する準備がありますが、いかがでしょう。お安くしておきますよ』そんな具合に。

「詳細はわかりませんが、ロシアがそれを買ったということは——」
事の重大さを飲み込めたアイリス王女は、全身を小刻みに震わせた。

「近々この国で軍事作戦が展開される可能性があります。この国ではすでにアメリカのPMCが展開されています。おそらくその排除でしょう。いずれにしろ戦闘です」

この国で戦闘が行われる。それを聞いたアイリス王女は顔を蒼くした。

そのうしろで、セシリアが「消費>が始まる」と——そうつぶや

く。

「すべてお母様の思惑どおりですわ……」

この国を舞台に、ふたつのPMCがぶつかり合い、物資、エネルギー、そして命の消費が行われる。それが世界経済を回す。いままさにヘリリスが宣言した「男たちが殺し合うことで、女性社会が富む」世界が、この国で実現しようとしている。

「具体的な作戦内容はわかりませんが、のんきに手まわしている時間はなくなりました」

「ど、どうするのじゃ。どうすれば——」

その時、一人のメイドが入ってきた。「王女様——」と言ったメイドに、王女は「なんじゃ」と怒鳴りつける。気が立っている王女に怯みながら、メイドはおずおずと告げた。

「だ、第二王女エアリスさまが、外遊からお戻りになりましたので」

アイリス王女は「姉上がお戻りになられたら教えろ」と命じていたことを思い出す。

「そうか。わかった。——下がれ」

メイドは頭を垂れ、逃げるように退室していく。

メイドが去った瞬間を見計らって、ソフィアは言った。

「アイリス王女、根回しをしている時間はありません。直接、エアリス王女に訴えかける他に手はないでしょう。幸い、エアリス王女はたつたいまお戻りになられた。次の公務へ移られるその前に、エアリス王女の許へ直談判しに参りましょう」

「そうじゃな。もうそれしか手はあるまい」

アイリス王女が緊張した面持ちで頷く。

この重大局面を乗り切れるかの成否は彼女の言葉にかかっていると言えた。いま、彼女の身には途方もない重圧が押しかかっている。それでも彼女は逃げ出さなかった。

「おまえたち、いましばらく、わらわに勇気と知恵を授けてくれ」

私たちは「はい」と傳いた。



王宮・国王専用執務室。アメリカ、ヨーロッパと外遊を終えた第一王女・エアリス・アークライト・ルクーゼンブルクは、スイス製の椅子に深く腰掛けた。ウェーブの銀髪。サファイアアイ。ヘルクーゼンブルクの月々とも離される容姿には、疲労の色が見て取れた。

「おつかれさまでございませう」

専属のメイドから出されたハーブティーを「ああ、ありがとう」と受け取る。

そして、執務机に積まれた書類を手取る。書面にはWTOからの苦情がちらちら書かれていた。地下資源を外交カードとしているため、こうして自由貿易を守る機関から、ときよりやかみのような苦情がおくられてくる。

「で、外遊のご成果のほどは」

と、メイド。エアリスは書類を執務机に投げ、

「概ね、友好的だった。ドイツもフランスも、わが国がEUの経済圏に加入することを歓迎してくれた。支援も約束してくれたよ。あとはわれわれがEU内でどれだけ発言力を得られるかだな」

EU内で最も発言力を有する国は、いわずもがなドイツ、フランスだ。ユーロ価値を支えているのが、この二か国だからだ。よってEUでは経済政策に置いて、この二か国の意向が最優先される。仮に加盟国が貿易赤字を出しても、ドイツとフランスが動くことはない。

「結局、大国の利益が優先され、小国の意向は無視される。弱者は強者に媚びて、飢えをしのぐしかない。これが共栄を謳ったEUの現実、いや、世界の現実だよ。今回の外遊で改めてそれがよくわかった。だが、私はごめんだ。私は主権国家の元首でありたい。そのためには、この国を強くするしかない」

だが、いまのルクーゼンブルクでは、世界の列強国とわたりあえない。だから――

その時、執務室にノックが響いた。

「お姉さま、エアリスです。すこしばかりお時間をいただけません」

しょうか」

訪問者は腹違いの妹のようだった。

(王女陛下、いかがなさいます)

(うむ……)

姉妹とはいえ、歳も離れている。かてて加え、アイリスは国営に携わらない身分ゆえ、国家運営の中核人物であるエアリスとは疎遠な関係にある。いまはそんな妹の相手をするのが億劫に思え、資料を取って仕事の振りをきめた。

「いまいそがしい。あとにしろ」

だが、扉の向こう側の妹は、食い下がった。

「それを承知の上で、切に聞いていただきたいことがありますのじや。すこしでもかまいませんぬ。わらわに時間をください」

「切に聞いてほしいことだと?」

傍若無人な振る舞いを見せるときとは違う、切実な声音に聞こえた。強張っていて緊張しているようにも思える。こずかいの類をせがんできたようには思えない。エアリスはティータイムをあきらめて、資料を執務机に投げた。

「いいだろう。入れ」

許可を得られたアイリスが室内に入る。手には資料らしき紙の束。後方には見たことのない顔のメイドが二人と、見たことのある顔のメイド。一人は確かソーニヤという弟の専属メイドで、ロシアのスパイだったか?」

「彼女らもよろしいでしょうか」

「ああ。かまわんが」

「ありがとうございます。まず、このたびの外遊お疲れ様でした」

「ああ。それで話とはなんだ。私はいそがしい」

「はい、実はロシアの地質調査団の案件について、わらわなりに意見をまとめてみました。お姉さま——いえ、エアリス王女陛下に目を通していただきたいとおもいますのじや」

アイリスは持ってきた意見書をスツとエアリスに差し出す。

「わかった。そこに置いておいてくれ。時間があるときに目を通して

おく」

「いえ、いま読んでほしいのです」

「私は忙しいと言っただろ。このあとも仕事だ。それを妨げる気か」
鋭い視線を送る。一国を束ねる王女の眼力に思わず怯みそうになる。

しかし、アイリスは勇気をしばって、肩に力を入れた。

「はい。その覚悟でまいりました」

「ふん、言うではないか。いいだろう」

めずらしく毅然として言った妹に、姉は意見書を手に取った。

そして、黙々と目を通しながら、

「そういえば、また侍女が辞めたそうだな。フローレンスが嘆いていたぞ。ただでさえ、この国の離職率は高く、問題視されているんだ。王家がその問題を加速させていては、国民に示しがかん。妙なごっこあそびで使用人を困らせるなよ」

意見書から目を離さず、エアリスはそう言った。アイリスは視線を泳がせた。

「ご、ごっこ遊びではありません。わらわはこの国のためになりたくて――」

「だから、こんなものを作ってきたのか」

どこか呆れたような声音で、意見書をパンパンと叩く。だが、アイリスはくじけなかった。いまは、ソフィアを信じ、渡してくれた意見書を信じる。エアリスは意見書から目を離さなかった。

「だが、わるくない」

最初は興味なさそうだった目が、徐々に真剣さを帯びていく。

手ごたえを感じるには十分な反応だった。期待に鼓動が高鳴る。だが、思わぬ落とし穴が待ち受けていた。

「では、ひとつ訊く。『時結晶』が産出される国家間と同盟を結び、他に負けない産出量と資本を確保する。そうすることで、相手に価格の主導権を握らせないようにする』。それがおまえの考えだな？ だが、資本が大国に対抗できるだけ集まらなかったときは、どうする？」
「え、えっと、それは……」

思わぬカウンターパンチだった。借りてきた知恵ゆえ、アイリスは答えられなかった。

アイリスが困ったようにソフィアを見やる。「大丈夫です」とソフィアが頷き、前に出る。

「そのときは、われわれが協力をいたします」

「我々だど？」とエアリス、そして、アイリスがソフィアに視線を向ける。

「はい、われわれ〈ファントム・タスク亡国機業〉が」

「〈ファントム・タスク亡国機業〉。IS開発を裏で牛耳る秘密結社か。存在は聞いていたが」

「われわれは『篠ノ之束』を抱えています。EU加盟の撤回、ロシアとの国交正常化を行っていただけなら、彼女の技術を提供する準備があります」

「具体的には？」

「ISの〈コア〉、そして第四世代型ISのテクノロジーです」

提示された技術は、いまま世界が莫大な予算を継ぎこんで研究している。その成果が手に入るなら、ぜひとも。——と、飛びついてくれたなら、話はラクだった。だが、エアリスは意見書を置いて手を組んだ。

「悪くない条件だ。技術があれば、資源がなくても外貨を得られる」

「しかし、だ」——と、エアリスは立ち上がった。そして、書籍棚から一冊の本を取り出す。『21世紀の冷戦：マーベリック著』とタイトルがつけられたそれは、イギリスの軍事アナリストが書いた本だ。

『ISを制するものがこの冷戦を制する』——そう言われた時代は終わった。あの人が言うにこれからは『個人の時代』だそうだ。大国の敵は大国ではなくなり、非対称戦争、非正規戦が主流になるだろう。篠ノ之束がいう『ガラクタ現行兵器』さえ揃えられない連中が相手だ。なら、大国の戦力は第二世代でも事足りる」

第四世代は、オーバーテクノロジーゆえに維持コストがすごぶる高い。乗りこなし、整備できる人間の確保も困難だ。非対称戦の時代、莫大なコストを払ってまで手に入れる意味が、第四世代にない、と。

「コスト高な第四世代は需要が悪い、と。ですが、ISそのものには、まだ需要があります」

「いや、どうかな。ある知り合いから、君たちがいま新たなインフィニット・ストラトスを開発していると聞いた。それが普及したとき、いまある〈コア〉の技術にどれほど価値がある?」

ソフィアは舌を巻いた。——この王女、よくわかっている。

「そこで条件変更だよ——」

エアリスは執務椅子の背もたれに身を預け、人差し指を立てた。

「まず、〈亡国機業〉に我々の『席』を用意してもらおう」

次に中指を立てる。

「そして新型インフィニット・ストラトスの開発をわが国で行ってもらう。それが条件だ。私は〈時結晶〉の価値を知っている。前国王と違ってな」

エアリス王女は、置かれた書架から一冊の本を取り出す。ロリーナの著書『ISはどこからきて、どこへ向かうのか』だ。ソフィアは苦虫を噛み潰したような顔を見せた。

「私だけでは承認しかねます」

「では、承認できる人間をつれてこい。話はそれからだ」

「わかりました。話を通してみます」

「よい報告を期待しているよ」

エアリスは二本指を上げたまま言った。アリスには勝利のVに見えた。

事情が呑み込めないエアリスだけが、ついていけない顔をしている。それが二人の手腕の違いを明確にしているようだった。

「では、私たちはこれで」

退室を促すように、ソフィアはエアリスに目線をやる。

エアリスは「このまま引き下がるのか!」と目を開いた。そうだ、まだ何も達成できていない。けれど、ソフィアは首を左右に振った。これ以上は切れるカードがない、とばかりに。

「エアリス王女。行きましょう」

セシリアに促されて、エアリスはひどく肩を落として歩き出す。

アリスもそれに続こうとしたとき、エアリスが訝しい表情で彼女を呼び止めた。

「……おい、その赤い髪のメイド。おまえ、名前はなんだ」

「レイシー・アデルと申します。つい最近雇って頂きました」

エアリスが目を細めて、アリスを見つめる。

時間にして数秒後、いつもの表情で、エアリスは言った。

「そうか。アイリスの世話は大変だろう。無理を言うようなら、きつく叱ってくれてかまわんよ」

「かしこまりました」

「呼び止めてわるかったな」

「いえ」と言ってアリスは、項垂れるアイリス王女に続いて、執務室を去っていく。

いなくなつてから、エアリスは執務室の内線を繋いだ。

「私だ、ジブリル。アイリスに仕えるレイシー・アデルというメイドに監視をつけておけ。その女、あの人が言っていた、アリス・リデルかもしれない」

『アリス・リデル?』

「NATO側ではへ恥知らずな娼婦スカイレッド・レイディ、ロシアでは麗しの赤クリスナヤと呼ばれているエージェントらしい」

『なぜそのような人物がアイリス王女のおそばに……』

「何か目的があつて王家に潜り込んだのだろう。いずれにしろ、監視しておいた方がいい」

「了解しました。ただちに部下を手配します」

通話を終えると、メイドが「次の公務の時間です」と言った。「まあ、待て」とエアリス。そして「茶のお変わりぐらいさせてくれ」と言つて、すっかり冷えた紅茶を入れ直すようにメイドに命じた。

その間、エアリスは席を立ち、備え付けのテラスへ赴いた。

テラスからは王都が一望できた。眼前にはルネッサンス時代の街並みをそのまま保存したような風景が広がっている。近代化から取り残されたような情緒が、そこにあつた。

「いつ見ても、この風景は好きになれんな」

エアリス王女は、その景色を忌々しそうに睨んでいた。

第125話 動乱の太陽

「さてどうしたものか」

アイリス王女の自室。国王執務室から戻ってきた私は備えつけのテラスに出て、手すりに手を重ねる。王女はベッドで項垂れていて、いつもの傍若無人な態度はない。そんな王女をセシリアが慰めている。ソフィアは懐からウサギの刻印が入った懐中時計を取り出し、それを弄びながら、空を見上げた。

「どこかで甘く見ていたのかもしれないな」

直談判は失敗に終わった。私たちは王女を止めることができなかった。

ロシアとの国交回復（しいては、地質調査団の入国）の条件に、ソフィアたちは「コア」の技術と第四世代のテクノロジーを提供すると提案した。一見、喉から手が出るほど欲しく思えるそれを、エアリス王女は拒んだ。「第四世代のハイコスト・ハイパフォーマンスな性能は、時代のニーズに合わない」とし、コア技術も「新たなヘインフィニット・ストラトス」の登場で旧型扱いになる」として。

確かにそのとおりで。大国の敵が大国だった冷戦時代は終わりを告げようとしている。いまさら、高い金を払って高性能機を買いそろえようと思わないだろう。

コアにしてもそうだ。

「ヘインフィニット・ストラトス」はヘインフィニット・ストラトス」の廉価版だけど、「男性も扱える」という点では、ISの発展機になる。それが普及したとき、女性にしか扱えない旧式コアのテクノロジーにそれほど価値はない。

代わって、エアリス王女は亡国機業ファントム・タスクの幹部席と、「ヘインフィニット・ストラトス」の開発をココで行うことを要求した。すなわち、それはこの国が「ヘインフィニット・ストラトス」開発実権を握るということに他ならない。

「ロキは？」

「相談してみるが、承認はしないだろう。かつて篠ノ之束が作り出し

たISが、その特性を政治に利用されたからな。政治主導のヘフィニット・ストラトス〈開発は望まないだろう〉

それにエアリス王女がヘフィニット・ストラトス〈の計画を知っていたなら、この国とヘリリス〉の間に何かしらのコンセンサスがあったと考えられる。最悪ヘリリス〈にヘフィニット・ストラトス〉計画を握りつぶされかねない。

ロシアもルクーゼンブルクも、ロキも引き下がらないなら、待つている結末はひとつ。

戦争という名の大量消費だ。

「じゃあ、どういたしますの」

と、セシリアがアイリス王女とテラスにやってくる。

母の思惑を阻止したいセシリアの声はどこか切羽つまっていた。

「なら、いつそ、クーデターでも起こすか?」

ルクーゼンブルクは絶対王政で、議会は存在しない。エアリス王女が意向を固めたら、最早、政治的手段で止めることは不可能だ。政権体制そのものをひっくり返さないかぎり。

「オレたちは獅子身中の虫だ。ここの警備隊だけを相手にすればいい」

この国の守護形態はシンプルだ。国家は軍隊が守り、秩序は警察が守り、王族は騎士団が守っている。いまなら騎士団だけを相手にすればいい。あとは第一王女を幽閉なりして、代わりを据え置く。そういう方法もあるだろうけど、

「現実的な策じゃありませんね。混乱を招くだけです」

場当たりに現政権を打倒しても、生まれるのは政治的空白と混乱だけ。抜本的な解決にならない——。と、私はソフィアを見やる。彼女は懐中時計型のアイテムを弄んでいた。それが何か知る私は、そういう腹積もりか、と悟る。そして、こう言った。

「では、もう一度、エアリス王女の許へ参って、説得してみるのはどうでしょう」

「じゃが、どう説得すればよい」

カードは全て切った。方針を変えさせるだけの代理案も思いつか

ない。けど

「さきほど、アイリス王女はエアリス王女の前でおっしゃられました。『この国のためになりたい』と。おそらく、国民を想う気持ちの表れだとお察しします。アイリス王女は誰よりも国民を愛し、国民のことを知ってらっしゃいます。——王家の人間としてではなく、国民の代表として、もう一度、エアリス王女とお話してみたいかがでしょうか」

結局、ソフィアが語る言葉は〈亡国機業〉の都合だ。私の言葉も私の都合。どちらも自分に都合のいいことしか語らないし、相手にはそうしか聞こえない。だから、この国の人間の言葉で、説得してみてもどうか。

政治の世界はリアリズムが支配する合理的な世界だ。感情論が通用するとは思わないけど、いつだって新しい時代を切り開いてきたのは、人々の想いだ。その想いが意志を生み、世界を変える。

「わかった。もう一度、今度はわらわの言葉で、姉さまを説得してみようぞ」

「だが、向こう側は簡単に会わせてくれそうにないみたいだぜ」

部屋の外に複数人の気配。それも殺伐とした。鼻の利く二人が感じたのだから、間違いない。私はエアリス王女に呼び止められたことを薄っすら思い出す。私の正体に気づかれたか。

「近衛騎士が相手なら、わらわがジブリルに頼んで——」

「いえ、彼女は聞き入れないでしょう。エアリス王女は『個人の時代』とおっしゃりましたが、彼女は『政治時代』の人間です。政府の無謬^{むびゆう}を信じ、下された命令を遵守するでしょう」

私たちは、その「政府」が信じられなくなり、一匹オオカミになった。ソフィアは政府に母親を殺され、私は政府に親友の討つよう命じられたから。わたしたちは「私」よりの人間だが、ジブリルさんは「公」よりの人間。個人の都合で動くことは許されない。

「素直に道をあけてくれないなら、強攻突破しかないか」

「いけるのか。近衛騎士団はどれも腕利きじゃぞ」

ソフィアが私に視線をやる。

「大丈夫です。申しましたでしょう。彼女は優秀だと。こと、争いに

関してはプロフェッショナルです。彼女のそばにいれば安心です。レイシー、おまえもエアリス王女に会ってこい。聞きたいことがあるんだろ。王女の傍にいて差し上げろ」

この国とヘリリスの間に何かしらのコンセンサスがあったことは間違いない。

エアリス王女から何か手がかりを得られるかもしれないけれど、事は簡単じゃないだろう。

「付き添いはかまいませんが、近衛騎士団すべてを相手にすることは無理ですよ」

こちらにはISがあるから、近衛兵を蹴散らすこと自体は容易いけど、得策と云えなかった。ISが出てくれば、最早「近衛騎士団」の手には負えない」と軍が出動してくるだろう。たとえ応戦できたとしても、目的は果たせなくなる。

「ならば、こうしよう」

ソフィアが自前のトランクケースを持ってきて、中身を広げる。オクトカム、パッチ型変声機、ナノコーティング剤、そして小型カメラ。それらスパイアイテムを広げると、耳を貸せとばかりに私たちを手招きする。

円陣を組むように身を寄せた私たちに、ソフィアは作戦を告げた。

近衛騎士団に所属するケイト・フォードは、七カ月前に入団したばかりの新米騎士である。

体格は小柄で中肉中背。顔容は実年齢の20より4つは若く見える童顔。決して体格に恵まれたわけじゃなかったから、家族は入団を反対していたけれど、彼はそれを押し切った。そうまでして入団した理由が、彼にはあった。

ジブリル団長の許で働きたい。

あの美しい姿。凜としたお顔。一目見た瞬間に心を奪われた。

ぜひ、あの方の許で働きたい。

そう思った翌月には、騎士団の入団試験を受けていた。持前の情熱

が活きて、彼は162センチという体格ながら見事に試験を突破してみせた。そして、いつなんどきでもジブリルの力になれるよう訓練を続けること、約6カ月を経て迎えた今日。ケイトは奮起していた。

(必ず、団長が敬愛するアイリス王女を救出してみせるぞ)

彼に告げられた命令は、アイリス王女の奪還。なんでも、捕縛対象だったレイシー・アデルが追い詰められた末、アイリス王女を人質に取って、逃亡を図ったというのだ。

事前に与えられた情報によれば、レイシー・アデルは赤毛碧眼で、歳は十代半ば。そんな子供が何の目的でここに忍び込み、なぜ王女を狙ったのか。それを知る由はなかったけれど、ケイトにとっては『ジブリル団長が慕うアイリス王女に手を出した』という理由だけで十分だった。

「城門は既に占められているんだ。すぐ追い詰めてやる」

いま近衛騎士団は4人編成・5部隊で事に充たっていた。ケイトは第5部隊に配備されていた。少女一人に、大人が二〇人がかり。手間はかからないはず。その余裕もあつて意気込むケイトの肩を、隊長が叩いた。あまり気負うな、と。

ケイトが「はい」と答えたあと、通信機が鳴った。仲間からだ。

『こちら第一班。標的レイシー・アデルはアイリス王女陛下を連れ、東に逃亡中。まもなくこちらの包囲網に入る。陣形を取る。第二、第三、第四、第五班も、第一班に続け』

五つに分かれて展開していた班の一つが、標的を補足したらしい。

隊長は「我々もいくぞ」と言った。ケイトも「了解」と答えた。

(まっつていろ、アイリス王女に手を出したこと、後悔させてやる)

与えられたAK-74を強く握りしめると、再び通信機が鳴った。

通信は包囲の陣形を敷いた第一班だった。

『我々は近衛騎士団だ。レイシー・アデル。お前は包囲されている。抵抗せず、王女を解放しろ』

いくつもの銃を構える音がスピーカーからもれた。

直後に発砲音。味方のじゃない。向こうが撃ってきたのだ！

『標的は銃火器を所有している模様。我々と同じAK74だ。奪った

のか』

『止むを得ない。応戦しろ。しかし、王女には絶対に当てるなよ』

『了解。——!? な、なんだ、これ。銃が撃てないぞ』

『排莖不良？ 違うぞ！』

『どうなっているんだ、銃身が凍って……ッ！』

受話器から聞こえてくる仲間の当惑に、ケイトは眉をひそめた。

撃てない？ 銃が凍る……？ 何を言っているんだ……？

『相手はただのエージェントじゃないのか。あれじゃまるで魔女だ。くそ、逃げられた』

『こちら、第一班、標的レイシー・アデルの逃亡を許した。進路は南西。中庭に向かった模様』

あろうことかレイシー・アデルは近衛騎士団の包囲網を突破して、なおも逃亡を図ったらしい。

精銳の騎士団が侍女一人に遅れを取るなんて、と驚愕する。それに魔女とは……。

(そんな相手を想定した訓練なんて受けていないぞ！)

起こっている状況を頭でうまく整理できず、理解できないことへの恐怖心で銃口が震え出す。しかも、西南はこちらのいる方角だった。こっちに向かってきている！

「怯むな。現代に魔女などいない」

部隊長がケイトを叱咤する。そうだ、現代に魔女などいない。この時期ルクーゼンブルクは厳寒期に入っているんだ。いまだって、体が震えそうなほど寒くなってきた。きつと急激な冷え込みで銃器がうまく動作しなかったに違いない。それを凍らされたと誤解したんだ。

(この体の震えも寒さからだ)

ケイトが震える膝に喝を入れると、通路前方から誰か走ってきた。燃えるような赤い髪、静かな碧眼。間違いない。レイシー・アデルだ。アイリス王女の手を引きながら走ってきている。

「王女を放して、とまれ。この先は通さん」

威嚇のため、銃を構える。ケイトも倣う。だが、レイシーは従わず、

止まろうともしない。王女がいるから撃ってないことをわかっているのか。ならば、威嚇発砲だ。そして怯んだところを、大人四人による数の暴力で取り押さえる。

その算段で銃の引き金に指をかけるが、固まってまるで動かなかった。慌てて安全装置を確認する隊長に代わってケイトが銃爪を引く——が、自分のAKもやはり硬くて動かない。

「くそ、なんで撃てないんだよ」

銃の整備はいつも入念に行っているんだ。整備不良を起こすはずがないのに。

見回せば、仲間の全員が同じ状況に陥っていた。それぞれがコツキングレバーやセーフティーをいじるっている。そうこうしているうちに、レイシー・アデルが眼前まで接近してきた。

「おのれ、かくなれば」

隊長たちは使えなくなった小銃を捨てて、レイシーに掴みかかった。レイシーは伸びてきた手を振じって動きを止め、みぞおち、眉間へ拳を打ち込んだ。そして、相手の肩を基点にして、180センチを超える隊長の巨体をひっくり返す。隊長の体はたやすく空中で半回転した。

見かねた仲間が加勢するが、軸足を蹴られて重心を崩されると、なされるがまま床に突っ伏した。さらに首筋を踏みつけられ、立ち上がれなくされる。すかさず、残った仲間が助けに入るも胸部に掌底を食らい、呼吸を乱されたあとは、ふらついてほとんど何もできなくなる。「なんだ、おまえは……。妖術使いなのか」

鍛えられた男が大した抵抗もできず悉く倒されていくようすにケイトは戦慄した。

「妖術？ 違いますね。ただの格闘術、システマです」

「格闘術だと。そんな非力そうな細腕で、鍛えられた男をのせるもんか」

怖くなって、ケイトはライフルを構えた。が——掴まれた銃身を時計周りに90度ひねられると、握る手がねじれて持てなくなった。あっけなく奪われたライフルのストックを胸部に叩きつけられてか

らは、何が起こったかわからなかった。わかったことは自分が宙返りしていることだけ。

気づけば、ケイトは仰向けに寝そべり天井を眺めていた。

「な、何がおこって……」

「わからないなら、それがあなたの未熟さです。——ですが、逃げず戦った勇氣は大したものです。その勇氣がまだあるなら、追ってきなさい」

腹に衝撃。レイシーは奪ったAKを横たわるケイトに返すと、再び王女の手を引っ張って走り出した。ケイトは遠ざかっていくレイシーと王女の足音を聞くことしかできなかった。

「くそ……何者なんだ、レイシー・アデル」

それから回復に数十秒を費やしたのち、体制を取り戻したケイト達の通信機が再び鳴った。

『こちら第3班、目標を発見。進路は南西。中庭に向かった模様。再び包囲陣形を張る』

「よし、われわれも向かうぞ」

「はい」

まだ痛む背中をさすりながら、ケイトたち第5班も中庭へ向かって走り出した。

♡

♠

◇

♣

「まだ捕まえられんのか」

近衛騎士団、詰所。

指揮を執るジブリルは、部下の報告をうけ、怒りを露わにした。普段から激情家である彼女だが、いつにもまして感情の色合いが濃い。報告した部下もあまりの恐ろしさに腰が引けている。

「も、もうしわけありません。予想に反してなかなか手ごわく……」

弱気な部下の物腰に、ジブリルはさらに苛立ちを募らせた。

敬愛する王女の安否を確保できない不安も苛立ちの手助けをして

いるようだ。

「おんな風情になんと情けない。それでも貴様は誇り高きルクーゼンブルクの近衛騎士団か！」

「も、もうしわけありません!!」

〈雷のジブリル〉と恐れられた上官のカミナリが落ち、部下は感電したように身を震わせた。

「そう思うなら、近衛騎士団の名に恥じない働きをしてみせろ」

「しかし、恐れながら相手はかなりの手練れでして、妙な術を使うというも報告もあります」

「その報告は受けているが」

この場に及んでそう言った部下に、ジブリルも冷静さを取り戻す。

近衛騎士団は、ジブリル自ら選抜した精鋭ぞろいの部隊だ。練度もある。気骨もある。その部下たちに、そうまで言わせる「レイシー・アデル」とは、一体どんな奴か、興味がわいた。それに気がかりな点もある。捕縛こそかなわないが、見失ってはいないのだ。

「わかった。私が直接、出向かう」

「団長自ら!?!」

「おまえたちをそうまで手古摺らせる奴の正体。この目で確かめたくなった」

「おお！」

団長直々の出陣とあって、部下の指揮があがる。

それを後押しするように、報告班の部下が吉報を持って入ってきた。

「報告します。目標は宮廷南エリアを抜けたあと、南城門を引き返したのち、中央エリア「ガーデン」へ向かった模様。そして、アイリス王女陛下は、まだご無事とのことです」

「よし、第一班から第五班まですべてを集結、四方から包囲陣を敷くよう伝えろ。虫一匹、逃がすな。私が到着するまで手は出させるな。私自らレイシー・アデルに鉄槌を下す」

命令を下したあと、掛けてあったマントを羽織る。そして、サーベルを腰のベルトに通す。

「では、いくぞ。おまえたちもついてこい」

準備を整えたジブリルは、颯爽とインペリアルナイトのマントをはためかせた。

♡

♣

◇

♠

王宮中庭。ケイトが到着したとき、標的の包囲は完了していた。中央に設置された噴水を背に赤毛のメイド——レイシー・アデルがアイリス王女を匿うように銃を構えている。さらにそれを囲うように20人以上の近衛兵が銃を構えている。

「レイシー・アデル。おまえはもう包囲されている。無駄な抵抗はせず、アイリス王女を渡せ」

「それはできません」

第一班の警告を無視し、赤毛のメイドは銃を構えた。表情に焦りは見えない。この状況を打開する術があるというのか。魔女など信じてはいないが、相手が妙な術を使う事は事実だ。ケイトが警戒を強めると、その隣をさっそうと誰かが通り過ぎた。

赤茶の長髪と、マントをなびかせて前に出た人物は、騎士団長のジブリルだ。

気が立っているのか、鋭い目つきがいつもより鋭く、歩調も荒々しい。

「無駄な抵抗はやめて、アイリス王女をひきわたせ。ここは私の部下が包囲している。どれもみな腕利きの部下だ。たとえば、おまえが魔女だとしても、どうにかできると思わないことだ。いまならまだ痛い目をせずにすむぞ」

「だから、それはできないんです」

こいつ、ジブリル団長のお心遣いを！

そう飛び出しそうになる部下を、ジブリル自身が手を挙げて制する。

「なるほど、痛い目に遭いたいのだな。それともよほど腕に自信があ

るのか。いいだろう。ならば、私が直々にその自信を砕いてやる」
ジブリルは自分のマントを剥いだ。

すぐさま部下の一人が駆け寄り、マントを預かる。

「あとになって後悔しても遅いぞ」

ジブリルが腰のサーベルを抜く。同時に地面を蹴った。イカツチのごとき電光石火。だが、相手も手練れだった。正面から降り下された剣撃を見切り、小銃で受け止める。そして、蹴り上げのカウンター。遅れてメイドスカートがめくれ、舞う。

年頃の乙女にはにつかわしくない黒のレース下着に、思わず近衛兵が目線を奪われる。

「おまえら、気を抜くな」

後方に跳躍してかわしたジブリルは、部下を叱咤した。

レイシーはスカートをひらつかせた。

「私の下着は高くつきますよ?」

「痴れ者が!」

再びジブリルが肉薄する。

横振りの剣戟。レイシーは屈んでかわす。そして、足払い。ジブリルは崩れた姿勢を驚異的な体幹で持ち直し、背面宙返りで距離を取る。すかさずレイシーは小銃を構えるが、ジブリルは発砲より早く跳躍した。同時に繰り出された刺突が、レイシーの喉元を捕える。

「終わりだ。命がおしくば王女を渡せ」

「だから、それはできないんですって」

「この場に及んでまだ言うか」

剣先を喉元に押し込む、それでも、レイシーは動じず言った。

「いや、命知らずだからそう言っているんじゃない。物理的に無理なんですよ」

「どういふことだ」

「こういうことだからさ」

口調が代わって、ジブリルは眉をひそめた。

「もしや貴様……」

この口調、覚えがある。そう、この声は、いけすかないあの女の――

。 ジブリルが声の正体に気づくと、レイシーは顔の皮を剥いだ。マスクだった。その下から現れた顔は、ジブリルの予想を裏切らなかった。

「やはり、貴様か、ソフィアッ！」

現れた人物は赤髪のソフィア・アルジャンニコフだった。

標的が突如として別人の美女に転身したことに、近衛兵から驚きが起こる。ケイトもそばの同僚と顔を見合わせた。どういうことだ。俺たちが追っていた相手は別人だったのか。

「じゃあ、王女は？」

そう見やると、アイリス王女までも顔の皮を剥いだ。

下から現れたのは、金髪碧眼をした別の少女。凝視すれば体格も王女より一回り大きく、着ているドレスもきつそうだった。どこか恥ずかしそうに、ドレスの端を抑えるその容姿はアイリス王女とは似ても似つかない。

「一体どうなっているんだ？」

まさか本当に魔女の七変化だともいうのか。

「ブリュンヒルデの〈千変万化^{カレイドスコープ}〉ほどじゃないが、なかなか大したものだろ。オレの変装も」

ソフィアが喉の変声パッチをピリッと剥す。そして、髪をかき上げると、赤毛が蒼髪に変わった。ジブリルは言葉の意味を理解した。この場にはいないなら、どうしたって渡しようがない。

「おのれ、小賢しいマネを……。アイリス王女はどこだ」

してやられたジブリルが逆上してサーベルを振る。

怒りに任じた一撃を、ソフィアは身をそらしてかわした。

「わざわざ言うなら、おとり役なんてしないさ」

「ならば、無理にでも口を割らせてやろう」

ジブリルが再びサーベルを構える。そんな彼女の頭上を何かが飛び超えた。

四足歩行の獣。オオカミだった。それも機械仕掛けの。大きさは人間の2倍以上ある。

大狼は主人たるソフィアのまえに着地し、がおくと吠えた。

「キミの拷問術に付き合ってもいいが、いまは遠慮させてもらうよ」
ソフィアはセシリーの手を引き、へフェンリルへの背へエスコートする。

そして、自分も背に跨る。へフェンリルへはいつでも駆け出せるよう四肢に力を蓄えた。

「王女に危害を加えたりしないから、安心していい。では、オレたちは退散させてもらう」

「逃がすと思うか？」

それを合図に、近衛兵たちが銃を構える。銃口を向けられてもソフィアは余裕を崩さなかった。

「思わないよ。でも、霧を捕まえておくことはできない」

機械仕掛けのオオカミが咆哮を上げる。途端、背にあった噴水が弾け、濃密な霧を吐き出す。辺りは一瞬にして視界を失った。やつらが中庭に逃げ込んだ理由はこれか！

「では、さくらばだ」

そう言い残してへフェンリルを跳躍させる。ケイトたち近衛兵は逃すまいと銃を構えるが、霧に視界を阻まれてうまく照準をつけられない。銃口を右往左往させている間に、霧が晴れていく。視界を得たときには、もう狼の姿はなかった。くそ、取り逃がした。

「追いますか」

近衛兵の一人がやってきて、預かっていたマントを返す。

「かまわん。いまはアイリス王女を探すことが先だ」

ジブリルはマントを羽織る。

あの女にいつぱい食わされたのは癪だが、いまは王女の身柄を確保することが先決だ。

ジブリルはサーベルを腰のさやに戻し、部下へそう命じたと、彼女の通信機が鳴った。

「はい、エアリス王女陛下。——いえ、もうしわけありません。ただちにアイリス王女の救助とレイシー・アデルの身柄を。——……
本当によろしいのですか。……わかりました。そう、ご命令とあら

ば、王女陛下の御心のままに」
そう言つてジブリルは通信機を切つた。そして、しばらく通信機を
眺める。

何かが腑に落ちないようなそんな顔をして。

第126話 王女が望んでいたもの

シベリア、イルクーツク。バイカル湖のほとりにあるコテージ。ソフィアのセーフハウス。

犬たちにエサを与えた後、備え付けのシンクで皿を洗っていると、簪がその手を止めた。リビングのテレビから不穏な報道が聞こえてきたからだ。振り返ってテレビを見やると、報道キャスターがヘルクーゼンブルクとの緊迫状態を報じていた。

「……ねえ、お母さん、ルクーゼンブルクはどうなるのかな」

姉もソフィアに「クレムリンがパッケージを購入した」と告げていた。

パッケージは、軍事作戦を梱包したPMCの商品だ。それを買ったということは、ロシアはルクーゼンブルクへ侵攻する準備を進めていることになる。

「そやな、このまま軍事圧力だけで終わればええけど、エアリス王女は屈つせんやろうな」

櫛菜は食器洗いの手を止めず言った。

「……お母さんはエアリス王女がどんな人か知っているの？」

「いんや、会ったことないけど、極秘の来日があったみたいでな。おそらくへロシアの恥部へ絡みやろうけど、交渉はうまくいかんかったみたいやで」

「……そうなの？」

「へロシアの恥部へは北方領土の軍事拠点化を阻止する重要な外交カードなんやわ。へ白騎士事件へ以降、日本は独自の防衛路線を取ったやろ？ 米軍の抑止力が弱まって、ロシア側が強行な態度を見せるようになったさかい、歯止めのカードが必要になったんよ」

「……お姉ちゃんがロシアに潜入したのは、それを手に入れるためだったんだよね」

「そや。ほんで日本政府にとっても、更識の潜入はぎりぎりの判断やった。なんせ、日本は憲法で戦争を放棄したさかいな。準軍事作戦である諜報活動は憲法的にかなりグレーなんやわ」

「……危ない橋を渡って手に入れたへロシアの恥部は簡単になんかわたせない？」

「エアリス王女もそれは承知の上やったやろうから、視察の意味合いが強かったんちゃうかな」

「……視察って？」

「篠ノ之東がISを開発したとき、アメリカから技術開示を求められたけど、日本は無条件で開示したやろ。そのせいで日本は膨大な損益を被ったんや。あげく、専門機関の建設、その運営費まで押し付けられた。まさに泣きつ面にハチや」

ま、そのハチは千春はんらが請け負ってくれたけれども、と櫛菜は付け加え、

「日本はアメリカの圧力に屈して『金脈』を失った。いまヘルクーゼンブルクも10年前の日本と同じ境遇に立たされとる」

「……エアリス王女は、日本に自国の未来を見に来た？」

「そやな。けど、言うても日本は世界第二位の経済大国や。失ったものを取り戻す力がまだある。優秀な技術者もおるしな」櫛菜は簪を見やる。「けど、ヘルクーゼンブルクは難しいやろう」

「……だから、日本のように屈せない。でも、それだと……」

簪は再びテレビを見やる。報道は引き続き、両国間の緊迫状態を告げていた。

櫛菜は洗い終えた皿を置き、水道を閉めて、エプロンで手を拭く。

「大丈夫よ。それをやめさせるために、ソフィアさんはヘルクーゼンブルクに潜入しているんやから。あの人はすごい人や。それは簪も知つとるやろ？」

「……うん」

「それにあの子もおる」

「……そうだね」

困難な任務を遂行できるよう、姉を影から支えたソフィア。気弱な自分に勇気をくれたアリス。二人がいてくれたからこそ、いまの自分たちがある。

「二人がおったら、きっとなんとかしてくれるよ」

王宮、本邸前。再びエアリス王女と謁見するため、私たちは生い茂る木々の中に身を潜め、息を殺していた。私たちに扮したソフィアたちが近衛騎士団の注意を引きつけてくれているおかげで、何とか発見されずにココまで来られたけど――。

「ホントの難所はココからですね」

王宮は二区から構成されている。国営を担う人間が住む本邸と、役職を持たない王族が住まう別邸だ。エアリス王女がいる本邸は、この国の政治中枢とあって警備は嚴重だ。おそらく何十人の近衛兵が待ち構えているだろう。

「なら、思い切って正面から行くのはどうじゃ？ わらわが盾となれば、近衛騎士団も迂闊には動けんじゃろ？」

「王女のお覚悟、痛み入ります。しかし、それは追い詰められたときの最終手段にします。やはり、誰にも気づかれず、謁見できることが好ましいです」

「とはいうがな――」

と、その時、人の気配がした。

咄嗟に銃を構える。

潜入することばかりに気を取られ、周囲の警戒が疎かになっていたか。

「レイシー、わたしです」

そう言ったのは、銀縁のメガネをかけたメイド。――メイド長のフローレンスだった。

けど、私は銃を下ろさなかった。フローレンスさんはメガネを鋭く光らせた。

「レイシー、ローゼンクロイツでは、上司に銃を向けるよう習ったのですか」

「もうしわけありません、メイド長。いまあなたに騒がれるわけには

いかないのです」

「そうなのじゃあ、フロールンス、悪いが大人しくしてくれ。いまからわらわは姉さまの許に向かい、止めなければならぬ。見過ごしてほしいのじゃ」

「それは承知しております」

そういつてフロールンスさんは恭しく頭を垂れたあと、

「こちらへ」

メイド服を翻し、ついてこいとばかりに歩き出していく。

私たちをどこかへ案内しようとしているらしい。私とアイリス王女は顔を見合わせた。

「行ってみようぞ。フロールンスは信用できる」

私より付き合いの長い王女が言うのだ。私は「わかりました」と答えた。

フロールンスさんに案内された場所は本邸の裏手だった。物置とおもわしき小屋がいくつか立ち並んでいる。あるのはそれだけで、人の気配はない。監視の目も緩そうだった。

「どうぞ、こちらです」

と、フロールンスさんがひとつの小屋の中へ案内する。

長い間、使われていないのか埃っぽい。おかげで、待ち伏せの可能性は失せた。

(しかし、何のためにここへ私たちをつれてきたのか)

「ここは？」と私が問うと、フロールンスさんは奥の木箱に手をかけた。

「レイシー、手伝ってちょうだい」

「あ、はい」

言われるがまま木箱に手をかけ、フロールンスさんと隅へ移動させる。

舞ったホコリを払い除けた場所から四角いハッチのようなものが出現した。

「本邸に続く隠し通路でございます。エアリスさまの執務室近くまで繋がっております。この通路の存在を知っているのは、一部の使用者

と先代の国王さまだけでございます」

つまり、王家の人間すら知らない秘密の通路。

これを使えば近衛騎士団に気づかれず本邸に潜入できる？

「なぜ、そんなものが」

「前国王さまが、ある女性と逢引きするため、こっそりと作らせたそうです」

「お父さまが？」

「まるでケネディー大統領ですね」

ウソか、ホントか、ホワイトハウスには、マリリンモンロー用の隠し通路があるらしい。

そんな都市伝説をナタルから聞いたことを思い出し、私は一人笑う。

「で、その女性とは？」

「イリア様です」

「お母さまが！」

「イリア様は、ココの侍女であらせられました。身分の差をお気にされていただけではありませんでしたが、代々国王が身分の高い方を娶られていたこともあって、人目を慎んでおられたようです」

私は「なるほど」と隠し通路を見た。

両親が密会に使っていた通路を、その娘が使うことになるとは……。でも、なぜ私たちにその存在を明かしたのだろう。私たちに協力することは、王家の意向に逆らうことになるだろうに。

「私には五歳になる息子がおります。今は王都で夫と暮らしております」

フロレンスさんはややさびしそうに顔を伏せた。

住み込みの仕事なので、会えない日も多いのだろう。

「どうか、ここが戦火に見舞われないよう、エアリス王女さまに取り計らいを」

そう深々と頭を下げるフロレンスさんが、見せた顔は侍女のものじゃない。子を想う母の顔だった。そんな顔を何度も見てきたから、私にはよくわかった。アイリス王女にもわかったようだった。彼女

はこの町が戦火にさらされることを望んでいない。

「任せておけ、フロールレンス。必ずお姉さまを説得してみせる」

「はい。どうかよしなに。——では、お早く」

いくら秘密とはいえ、ゆっくり感慨に耽つてもいられない。私たちは地下へ続く梯子を下り始めた。降りると、アイリス王女はもう一度「では、任せろ」と出入り口を見上げた。

フロールレンスさんがもう一度深く頭こっぺを垂れる。今度は主人を見送るメイドのそれだ。「いってらっしゃいませ」と。そして、フロールレンスさんは扉を閉めにかかった。その扉が閉まる間際、アイリス王女が目をこする。

古い通路だ。土埃が目に入ったのかと思つたが、違うようだった。

「どういたしました?」

「いや、扉を閉めるフロールレンスの後ろにお父様とお母様が見えた気が……」

「本当ですか」

「うむ、手を振っておられた」

「そうですか。きつと王女陛下を応援なされているのでしよう」

「そうかもしれないな」

「期待に応えましょう」

私はAKを構え、先頭に立った。

♡

♠

◇

♣

馬ほどある機械の大狼は、その巨軀に似合わない跳躍を繰り返し、街中を駆け抜けていく。

セシリアは疾走するへフェンリルの背に跨りながら、王宮を振り返った。

「このまま王宮を出てよかったの?」

「ああ、王女はアリスに任せて、オレたちはオレたちの仕事を行う」
ソフィアは二つのデータディスクを取り出した。

「君のお母さんと同じことをさせてもらう」

「お母さまと？」

「話はすこしばかりさかのぼるが、——1990年、イラクがクウェー
トに侵攻しただろ」

「ガルフウォー」

「国際社会はアメリカを中心にした多国籍軍を中東に派遣した。だ
が、日本は自衛隊を派遣せず、資金援助のみ行った。それが国際社会
の輿感を買った。そこで16代目楯無はメディアコントロールの実
態を国際社会に公表し、この戦争がアメリカのプロパガンダによつて
誘導されたことを示したんだ」

「アメリカは堂々と戦争するために、マスメディアを使って社会や国
民を扇動していたというわけですのね」

「そうだ。更識の暗躍によつて参加しなかった日本のメンツは守られ
たが、メディアコントロールの実態が暴かれたことで、人々は新聞や
報道を信じなくなつていった。メディア神話の終焉。それに変わつ
て、普及したのが——『インターネットだ』」

「デジタル神話の幕開けですわね」

「マスコミはオールドメディア。ネットこそがニューメディアだ。そ
んなふうには人々はインターネットに真実があると信じていった。キ
ミの母親はこのデジタル神話を利用し、世の女たちをへ女尊男卑へ
扇動した。ネットを飛び交う、誰が書いたかもわからないウソやウワ
サ、誹謗中傷、正しいかもわからない評価や評論を、みんな正しいと
信じこんだ」

「なぜ世の女性はそんな愚かなことを……」

「宗教やカルトと同じだよ。弱者が神に“癒し”や“救い”を求める
ように、彼女たちはインターネットに“癒し”や“救い”を求めた。
正しいかどうかは問題じゃない。癒されるかどうか。気持ちがいい
かどうか。嘘でもいいから、優しい言葉が欲しかったのさ。本来、そ
れは男の役割だったが、それを果たさなかつたから、女たちはSNS
やネットにそれを求めた」

「あなたは、お母様と同じようにインターネットを利用してこの国の

人間を扇動しようというの？」

「人間は情報を入力すると、頭の中でシミュレートを行う。想像をするわけだ。その想像の解像度リアリティが高ければ、高いほど、人間の行動は現実社会に帰結する。反映される。つまり、人々の想像ソースであるデジタル情報を統制し、その想像力をコントローラできたならば、現実社会の人々の行動判断を指向することもできるというわけだ」

「環境管理型権力。VTシステムと同じロジックですわね。でも、インターネットの普及で誰もが情報を送信、受信できる現代社会。世界を飛び交うトラフィックは六京バイト超ですわ。コントローラなんて……」

「第五世代のコンピュータならその膨大な情報を処理することができる。そのために、彼女からこれを借りてきた」

ソフィアは懐中時計のようなアイテムを取り出した。

「白うさぎの権限」。不思議の国にアクセスするためのモノだそう。いま「ワンダーランド」が彼らの生活圏にあるデジタル情報の統制をおこなっている。人々がひとつのSNSアカウントへアクセスするように、な。そのアカウントでは「集合」が呼びかけられている。「集合」？ 反政府デモを起こそうと？」

「この国に議会は存在しない。だから、政治的な決定を覆すには、これしかない。だが、彼らがこの国の未来を憂い、行動を起こすかは不確かだ。『ありのままの事実』を見た時、この国の人間がどう思うか。それとも何も思わないか。それはオレにもわからない」

「さて」とソフィアは取り出したデータディスクの一枚をセシリアに渡した。

「これをキミに渡しておこう。アリーシャからあずかった」

「これは？」

セシリアは不思議がりながらデータディスクを受け取った。

「すべての始まりだよ」



ルクーゼンブルク王宮。私たちは本邸の地下通路を進んだ。

秘密通路とはいえ安全とは限らない。私はAKを構えながら油断なく足を進める。

「にしても、先ほどから思っておったが、随分と手馴れておるな……。メイドとは思えぬ」

「ここへ来る前は、とある私兵部隊にいましたので」

「傭兵という奴か？ それがなぜメイドなんぞに」

「ある男性の行方を追って、ここに来ました。本当をいうとメイドじゃありません」

「じゃろうな。おぬしは仕事の手際が悪い。能力はフローレンスの半分以下じゃな」

「もうしわけありません。これでもがんばったつもりだったんですが」

「かまわぬ。で、その行方を追っている男というのは、何者じゃ？ もしや恋人か」

やや弾んだ声音だった。私は頭^{かぶり}を振った。

「いえ、そういう関係じゃありません」

「じゃあ、どういう関係なのじゃ」

私は言葉に迷った。

私をこうまで突き動かすその正体。大事な友人の危機だからか、それとも親同然だった女性を安心させたいからか。——もしくは別の感情か。

私が言葉に窮していると、通路の出口が見えた。梯子を昇った先は、暗く狭い場所だった。動くと、頬にやわらかいものが触れた。この絹のような肌触り。もしやここはクローゼットの中か。

出ると、天蓋のベッドや高級な机が見えた。

「ここは寝室のようですね」

さすがに王族の寝室に近衛兵の姿はなく、私は安心してAKを肩にかけた。

「うむ、ここはお父様の部屋のようじゃな。いまはお姉さまがお使い

になられておる」

私は頭の中で本邸の見取り図を開いた。

初日に叩きこんだ図面が正しければ、王女の執務室はすぐ近くだったはず。

「うまく潜り込めたようじゃな。お姉さまの許まであとすこしじゃ。ゆくぞ」

「あ、王女陛下」

堪え性のない王女のことだ。目的地まであとすこしだと気持ち急いだのだろう。目的地に近づけば警備も手厚になってしかるべき。外の様子を確かめず飛び出す王女に、私が静止を呼びかけるも、通路から「いたぞ！」の聲が響いた。

「し、しもうた！」

王女はせめてもと顔を隠すが、そんなことで誤魔化せる状況でも相手でもない。

私は誤魔化すことをあきらめ、アサルトライフルを構えた。

「王女、強行突破です。このまま執務室まで走ってください」
発砲。威嚇射撃に怯んだ近衛兵が物陰に隠れる。

私はタタタンと射撃を繰り返し、追っ手の頭を押さえながら走った。

しかし、すぐ後ろからも足音が聞こえてくる。

「挟まれたか」

ここは一本通路。進路も退路も塞がれたか。

じりじりと距離を詰めてくる近衛兵に、私は前後に気を張った。

「囲まれたぞ、どうする」

「もうしわけありません、王女。こうさせていただきます」

詫びて、私は王女を盾にする。近衛兵は王女への誤射を恐れて、攻撃をためらってくれた。

何とか膠着状態に持ち込めたが、この先どうするか。最悪、ISを展開することも視野に入れていると、近衛兵の一团を割って、一人の女が現れた。肩にかけられたマントの意匠も、他の近衛兵と違う。金糸の刺繍で〈GurandMaster〉と施してある。騎士団の

トップが直々に現れるとは。

「そこまでだ。抵抗はよせ、レイシー・アデル」

「よせと言われてやめるようなら、こんなところまで来ていません」

一歩も引かない私に、騎士団長がフツと笑ってみせる。

「この状況でそんな態度を取れるとはな。肝の据わった女だ。メイドにしておくには惜しい」

「私もメイドは性に合わないと思っていたところです。モップよりこつちの方がしつくりくる」

私は油断なく銃を構えた。

「なるほど。エアリス王女が監視しておけと命じられた理由も領ける。お前のような人間は野放しにしておくには危険すぎる。こうなることを王女は予測なされていたのかもしれない」

「で、私を捕まえてどうしよう?」

「私は煮え湯を飲まされて気が立っている。アイリス王女を危険な目にさらしたお前たちを、この手で懲らしめて、独房に放り込みたいところだが、——エアリス王女は連れてこいとおっしゃられた」

私はアイリス王女と顔を見合わせたのち、従うかどうか黙考した。

その私にアイリス王女が「ジブリルはウソを言わぬ」と告げる。

「わかりました」

私はAKをそつと床に置く。ジブリルは私の背後に回り、手を縛つた。

それを見た近衛兵たちが安心したように銃を下ろしていく。緊張感が一気に薄れていった。

「では、歩け。——アイリス王女さまもご同行を願えますか」

「うむ」

私はジブリルさんにせつつかれながら歩いた。

騎士団長に連行されて、私たちは、第一王女の執務室を訪れた。

執務室では、王女が執務机で執務にあたっていた。今回の騒動に動じている様子はない。

「エアリス王女陛下、レイシー・アデルを連れてまいりました」

エアリス王女は顔を上げた。そして、両手を組んで肘をつく。

「よく近衛兵たちの目をかいくぐって、ここまでこられたな」

「お父さまと、お母さまがお力を貸してくださいましたのじゃ」

エアリス王女は強い決意を宿してそう言った。「ほお」とエアリス王女は笑う。言葉の裏側にある意味を察している様子だった。もしかすると、エアリス王女は秘密通路のことを知っているのかもしれない。

「お父様とイリア様に導かれてここに来たのか。では、おまえは何を望んでここにきた」

エアリス王女は拳を握りしめ、倍ほど歳の違う姉をまつすぐ見据える。

「お姉さまを止めに参りました。——わらわは未熟です。政治ができるわけでもありません。けれど、民のことはよく知っております。この国の民はみんな良い者です。優しく、毎日を健気に生きております。そんな彼らは争いなど望んでおりません。だから、お姉さま、今一度、考えを改めていただきたく思い、参りました」

「そうか」

エアリス王女は執務椅子から立ち上がり、

「私もこの国を愛している。私も彼らの生活を守りたい」

「でしたら、国を戦火にさらすような行いは——」

「だが、愛国心で国が救えるなら、政治家など必要ない。必要なのは、現実を直視し、実行できる人間なのだ。——現実を見る、エアリス。この国には何がある？ 立ち並ぶものは民家ばかりで何も無い」

エアリス王女はテラスに続く扉を開く。開かれた扉の先にあったのは、ルネッサンス時代をそのまま保存したような街並みだ。目立った企業も大学も存在しない。あるのは古い民家だけ。それはまるで近代化から取り残されたような風景だった

「ここ数十年、この国の産業は何も発達してこなかったのだ。私たちが彼らを手厚く保障してきたゆえに、な。この国の民は、働かざるとも、生活が保障されている。労働する理由がない」

「ですが、産業なくとも、この国には資源があります——」

「いいか、アイリス。資源はいつか枯渇する。資源が枯渇し、この国の価値がなくなつたとき、この国は路頭に迷うしかない。遅かれ、早かれ、この国は危機に直面する。そのまえに、私はこの国を、資源に依存せずとも国民の自らの手で価値を生み出し、歩み続けられる国にしたかった。そう、務めてきた」

そして、エアリス王女は初めて悲痛に笑つた。

「しかし、私は見誤つた。この国には、ソ連崩壊で混迷するロシア国内を見てきた者も多い。ゆえに恐れているのだ。自由になること。決断すること。その責任を背負うことに。彼らは大人になることじやなく、親に保護される子供でありつづけることを選んだ」

エアリス王女はテラスに立ち、寂しい表情を見せた。それは、大きくなつても乳離れできない我が子にどう接すればいいか困惑する母親の表情に見えた。

「私は国民の意識改革に失敗した。私の言葉は国民には届かなかつた」

それはある種の諦観なのだろう。自らの力量のなさを痛感しているようだった。

エアリス王女はアイリス王女を手招きし、横に並ばせた。

「しかし、おまえの言葉なら民に届くかもしれないと思つて、ここに呼んだ。お前にはここまで突き動かした情熱がある。おまえはこの国を照らし出す太陽になれる。月である私にはできないことができる」

月じや世界を照らすことはできない。世界を照らし、温められるのは太陽だ、と。

「私は問題を棚上げするしかできなかったが、お前ならこの国を変えられるかもしれない。お前が王になつた暁には“私”を使え。そして、糾弾しろ。『国を焼いた愚か者』と。『許せない』という国民感情は国家を動かす原動力になる。それがこの国を変える力になるなら、私は喜んで泥をかぶろう」

「姉さま……悪役になられる気で！」

「いいか、アイリス。政治は合理的であるべきだが、国民は感情で動く。そして問題定義を必要としないのだ。必要としているのは、わか

りやすい「答え」だけ。この国にはわかりやすい悪役が必要なのだ」国民の生活を守るためにあえて「戦い」を選び、のちに「戦犯」として葬られること。

義憤に駆られた国民たちの怒りが、この国を変える原動力になってくれたらと、願って。

彼女が対峙していたのはロシアじゃなく、大人になれないこの国の国民性だった。

「このさきの10年は私がかかす。その先の10年はお前に任せた。私は愚かな王になる。おまえは優しい王になれよ、アイリス」エアリス王女がアイリス王女の肩を叩く。そう、次世代へ託すように。

そのとき、正面の城門にひとすじの青い光条が奔った。それに射抜かれた城門が音を立てて崩壊していく。

「一体なんじゃ!?!」

「王女陛下、こちらへ」

ジブリルさんが直ぐにテラスの二人を室内に入れる。

王宮が何かしらの攻撃を受けたことは明白だった。しかし、閃光はそれつきりで、二射目はこない。ジブリルさんは状況を把握するために、通信機を握りしめた。

「何が起きている。わかる者は直ちに報告しろ」

ザザツと応答が入る。部下からの報告だ。それを受けたジブリルさんは、驚きを露わにした。

そして、その驚きのまま王女へ現状を伝えた。

「王女陛下……、城門の外に民衆が集まっているそうです」
「そうか」

ジブリルさんの報告を受けて、エアリス王女とアイリス王女が穴の開いた城門をみやる。空いた穴から流れ込んできたものは、——まさしく街の者たちだった。彼らは何かに駆り立てられるように王宮内へ流れ込んでいた。

「いかがなさいますか」

いくら国民とはいえ無許可に立ち入ることは禁じられている。そ

れもただ訪れただけじゃない。何かに駆り立てられている。一見すれば暴徒にも見える。彼らは一様に穏やかじゃない。愚かな方向へ舵を切った王女を断じるために来たのだ。

しかし、エアリス王女は冷静に言った。

「このままでいい。近衛騎士団にも『手を出すな』と伝えろ」

「し、しかし！」

「いいのだよ、ジブリル。——時が来たんだ」

覚悟に満ちた表情だった。そんな王女を苦しそうに見つめたのは妹のエアリス王女だ。この幼い王にも既にわかっているようだった。彼ら民衆が何を求めてここを訪れたのかを。

「お姉さま……」

「いいのだ、エアリス。彼らは自分の未来は自分で決めようと立ち上がったのだ。こんなにうれしいことはないよ」

戸惑いなんてこれっぽっちも感じられない、むしろ歓喜すら感じられるほどに、王女は冷静だった。

王家に不満をためた者たちのデモ隊が、執務室に流れ込んでくる。多すぎて、通路まで埋め尽くされていった。

そんな彼らを代表して、一人の男性が前に進み出てくる。歳は50ほど。貫禄ある男性だ。たれた目尻から温厚そうな面構えだったが、表情は険しい。彼らはこの王女を断じるためにココを訪れたのだろう。その決意が強く感じられた。

「ならぬ、みんな、ならぬのだ」

エアリス王女が必死めいて止めようと男の許に駆け寄る。男は膝を折り、王女に頷いて見せた。——そして、やさしく、エアリス王女を見やる。そしてこう言った。

「エアリス王女陛下、わしら、甘え取りました」

先の険呑な貌を穏やかにして。

その言葉に、王女が戸惑いを見せる。男は立ち上がり、続けた。

「わしらは、ただ与えられたものを享受するだけで、何も考えず生きてきました。この国が危機に直面していても見向きもせず、誰かがなんとかしてくれる、そう思っ取りました。な、みんな」

男が振り向いて呼びかける。民衆たちは頷いてみせた。ここに居るものは、みんな同じ気持ちのようだった。「俺たちは享受するだけの子供だった」。そんな声も聞こえてきた。

「エアリス王女さまは、ずっと仰られています。『われわれ一人の力は微力だが、みんなが力を合わせれば、この危機も乗り越えられる。だから、私に力を貸してほしい』と」

「だけど、おれたちや耳を貸さなかった。自由になることが怖かった。責任を負うことが恐ろしかった」

「誰かに押し付けた方が、楽だったしな」「誰かが代わりにやってくれ」と思っていた」

「王女さまはそんなわたしたちを見捨てることなく、いろんな国を巡って、頭を下げてくださった」

「王女さまは、わしらが押し付けたモノを、御一人でお背負いになった。その影でどれだけ悩み、考え、苦慮なされていたか、知ろうともせず」

「でも、俺たちはようやく知った。誰かは知りませんが」

若い男がデジタル端末を見せる。そのモニターには、執務室が映っていた。

「一部始終が流れていたのか」

「王女陛下。失礼ながら放送させていただきました」

私は胸のブローチを外して、見せた。そこには小型の隠しカメラが埋め込まれている。

ソフィアのスパイアイテムのひとつだ。

「王女のお覚悟を聞いて、俺たちもようやく目が覚めました」

「この国は俺たちの国だ。俺たちの手で守っていかないと、そうようやく覚悟を持てた」

「私たちにもこの国の未来を背負わせてください」

民衆たちがさらに執務室に詰め寄る。

その者達を代表するように、エアリス王女が先頭に立つ。

「みなこう言っております。変わろうとしております。どうか彼らを信じてやってください」

嘆願するアイリス王女の後ろで、国民たちもまた固唾をのんで王女の返答を待つ。エアリス王女は彼らの声を黙ってきいたあと、背を向けた。そして、執務机に置かれた内線のボタンを押した。

「オズワルド、緊急の〈王族会議〉を開く、各関係者を早急に集めてくれ。ロシアとの国交回復の道を探る」

それを聞いて、国民たちから「わあーッ」と歓声が上がった

それは、民意が政治を動かした瞬間だった。

「やりましたね、アイリス王女」

「うむ。おまえたちもよく力をかしてくれた。礼をいうぞ」

「いえ」

私は頭を振った。

政治を変えたのは、他ならぬ王女たちの情熱と、国民の意思だ。私は何もしていない。

「では、これより〈王族会議〉を開く。今回は公開とする。見学したいものは許可する」

人々たちは顔を合わせて相談し始めた。「今後のためにも、見ておいた方がいいよな」「自分たちのことだもんな」「あらあら、〈王族会議〉をこの目で拝ませてもらえるなんてねえ」そんな具合に。

「それはオレたちも参加できるのかな」

と、入ってきた人物はソフィアだ。後ろにはセシリアもいる。

「オレは顔が利く。ロシアの外相に話の分かる奴がいる。仲介してくれるかもしれない」

「そうか。では、君にはオブザーバーとして参加してもらおう」

エアリス王女がソフィアの肩にぽんと手を置く。隣では、アイリス王女がモジモジと身を振じらせた。

「アイリス、おまえも出るか?」

「はいなのじゃ!」